

暗殺教室 不良児は認められたい

ZWAARD

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

乃咲圭一は気力、情熱を失いつつあった。

父に認められたい。そんな希望を抱いて努力した日々は父親とのすれ違いで泡の様に消えてしまった。

やる気を無くしてしまった彼は時間が経つほどに墮落し、気が付けば『エンドのE組』へ転落してしまう。

そんなある時だった。月の大部分が蒸発する大事件で世界が混乱する中、劣悪な隔離校舎の中で後に人生の師と仰ぐことになる2人と出会うことになる。

「君達にこの怪物を殺して欲しい！」

政府から中学生への暗殺依頼。

陰鬱とした日常は、その一言で想像すらしていなかった非日常へ姿を変えてしまう。

圭一は、そんな新たな日常の中で再び歩み出す。

「この人たちは俺を見てくれるかもしれない」

そんな淡い期待と願望を満たす為に。

目次

なんかあった倉橋さん

EX なんかあった倉橋さん 1

EX なんかあった倉橋さん 2 20

本編

プロローグ 34

1話 暗殺の時間 40

2話 圭一の時間 I 52

3話 野球部の時間 60

4話 サービスの時間 77

5話 基礎の時間 89

6話 カルマの時間 103

7話 圭一の日常 116

8話 毒の時間 127

9話 ビッチの時間 138

10話 プロの時間 151

11話 圭一が企てる時間 161

12話 圭一による暗殺の時間 172

13話 集会の時間 183

14話 支配者の時間 195

15話 第二の刃の時間 その1 207

16話 第二の刃の時間 その2 218

17話 旅行の時間 その1 229

18話 旅行の時間 その2 240

19話 旅行の時間 その3 252

20話	転校生の時間	267
21話	暗殺と対話の時間	278
22話	対話の時間	289
23話	反抗期と和解の時間	300
24話	湿気的时间	311
25話	L Rと克服の時間	322
番外編	乃咲と磯貝 追憶の時間	333
26話	転校生の時間 2時間目	346
27話	触手の時間	356
28話	球技大会の時間 前半	369
29話	球技大会の時間 後半	379
30話	アイディアの時間	386
31話	親愛の時間	397
32話	指名の時間	408
33話	指名の裏の時間	417
34話	寺坂の時間	427
35話	ビジョンの時間	435
36話	テスト前の時間	448
37話	5教科と終業の時間	459
38話	動揺の時間	471
39話	生き物の時間	482
40話	連れ回される時間	496
41話	策謀の時間	507
42話	島の時間	516
43話	決行の時間	526

44話	伏魔の時間	538
45話	潜入の時間	547
46話	カルマの時間	557
47話	女子と潜入の時間	570
48話	突破の時間	582
49話	チャンスの時間	592
50話	銃撃戦の時間	603
51話	反撃の時間	613
52話	疑惑の時間	625
53話	黒幕の時間	636
54話	作戦会議の時間	648
55話	鷹岡の時間	661
56話	抵抗の時間	675
57話	逆転の時間	684
58話	終息の時間	699
59話	安息の時間	712
60話	知らない時間	727
61話	胆力試しの時間	740
62話	胆力試しの時間	750
63話	殺しの時間	764
64話	離別の時間	777
65話	衝撃の時間	789
66話	裏切りの時間	802
67話	呪いの時間	812
68話	竹林の時間	822
	2時間目	

69話	竹林の時間	その2	834
70話	支配者の時間	2時間目	850
71話	心配の時間		861
72話	転倒の時間		871
73話	吐露の時間		884
74話	吐露の時間	2時間目	896
75話	父親の時間		907
76話	親子の時間		927
77話	理由の時間		939
78話	選択と願いの時間		954
79話	本音の時間		966
80話	病院の時間		981
番外編	クリスマスの時間		992
81話	病院の時間	2時間目	1019
82話	病院の時間	3時間目	1033
83話	漏洩の時間		1044
84話	漏洩の時間	2時間目	1058
85話	茅野の時間		1069
86話	散歩の時間		1087
87話	相談の時間		1091
88話	圭一の時間	II	1201
89話	帰還の時間		1145
90話	鬼ごっこの時間		1157
91話	捕食者(プレデター)の時間		1170
92話	極限の時間		1181

9 7 話	反撃の時間	2 時間目	1250
9 6 話	執着の時間		1238
9 5 話	駒の時間		1228
9 4 話	限界の時間		1213
9 3 話	泥棒の時間		1199

なんかあつた倉橋さん

EX なんかあつた倉橋さん

逃がさないと言わんばかりに、俺の頬を左右から挟み込む彼女の華奢な手に驚くほどの膂力がこもる。

よく逆レイプ物の小説で主人公を押し倒すヒロインの目付きを”獲物を狙う猛禽類の如き眼力”などと称するが、現実はそうでもないらしい。彼女の瞳は何処か不安で揺れていて、自身への戸惑いの色も見えるのに、絶対に逃がさないといい強い意思だけは確固たるモノであることを感じた。

自然界の捕食者たる猛禽類とは似ても似つかない。理性と本能と意識のせめぎ合い。それは人間特有のものだろう。

「……………圭ちゃんが悪いんだからね」

矛先はこちらに向いた。責任を擦りつけるような、それでいて何となく投げやりな言葉に思わず思考を巡らせる。

俺は一体、いつ、どこで選択を間違えたのだろうか？ いや、そもそも間違つたのかすら定かではない。

頭の中を支配していた冷徹さが急速に失われて行く。透徹した思考も、A組に行く為に整えた覚悟も、波に押し流されるように土台ごと形を失ってしまった。

折ろうとしたポツキー、拒絶しようとしたポツキーゲームの着地点。それら全てが倉橋さんの予想外の妨害で水泡に消える。ビツチ先生である程度は慣れたつもりだったのに、相手が変わるとこんなにも感触が違ってくるものなんだろうか？

「ん……………」

唇が触れ合った。逃げられず、突き飛ばすこともできず、半ば迎合するように触れ合った。

柔らかく、湿っている肉が触れ合い、潰れ合い、体温が伝わり合い、次第に彼女との境目が分からなくなる。

気恥ずかしくて、呼吸を止めてしまったのが良くなかった。少しだけ顔を離して息を吸おうとしたのが悪手だった。

僅かに口を開けたそのタイミングで滑りを帯びた柔肉が口内に侵入してくる。思わずくぐもった声が漏れるが、揺れる瞳に反して明確な意志を持って俺を抑えている彼女が逃してくれるわけもなく、頬を挟むように抑えていた手はいつの間にか後頭部に回され、後ろから押し付ける様にホールド。

逃げ場がない、何が何だか分からない、彼女が何を思っているのか見当がつかない。知らないという感覚は俺を焦らせ、冷静な思考力も強みであった筈の洞察力を奪って行く。頭の中を侵食するように視界が白く染まってゆく。

蹂躪される口内と舌。息継ぎが上手くできない焦り。海底洞窟内に響く艶かしいリップ音。この音、他のペアに聞こえちゃいないだろうか？後ろから次のペアは迫ってないだろうか？こんなところを見られたら言い訳が出来ない。誤魔化しようがない。

俺の心配を他所に倉橋さんは攻撃の手を緩めない。必死に、ただ顔だけが近かった筈なのに身体までもが密着し、ほぼ抱き合う様な体勢で俺は責められ続けていた。

舌を絡められる度に背中にゾクゾクとした感覚が走る。ある種の悪寒に似た感覚ではあるが、しかし不快ではない。

点滅する視界、後頭部に走るチリチリと思考回路を焦がす様な感覚。ビッチ先生の時とは比較にならない波が襲い来る。

危機感を覚えた頃にはもう、遅かった。最後に残った冷静な思考も合理的な考えも、防波堤を粉碎してまで到来する波には勝てずに理性ごと地平線の彼方へと押し流されてしまう。

その瞬間、身体が跳ねた。ビクツと意図せず、それでいて驚くほどに大きく。決して驚きから来る身体条件反射的なものでは無い得ないの知れない震えがやってくると同時に一瞬だけ思考が白く染まり、キーンと耳鳴りが頭の中を満たす。

「ん、ぷあ……。ん、はあ……。圭ちゃん。反省……。してくれたかな……。？」

「はあい、すみましえん」

「何が、すみません、なのかな？」

「みんなに黙ってA組に行こうとしてすみましえんでしたあ」

「これからはっきり相談してくれる？」

「はあい……。しましゆ」

「もうA組に行こうとしない？」

「それとこれとは話が違つ……。んむっ!？」

飛躍する彼女の言葉に反論を返そうとするが、それを許さないと言わんばかりに再び口を塞がれた。

そして繰り返される蹂躪劇。ビッチ先生仕込みのテクは恐るべしと言うべきか、意識がまたぶっ飛ぶ。

「E組に残つてくれる？」

「ふあい……。のこりましゆ……」

かつてないほどに強引な倉橋さん。そのテクニクに一方的に蹂躪されて打ち負かされた俺は真っ白になった思考、頭の奥に響く耳鳴りの様な音に正常な思考を奪われ、呂律の回らない口調で拙く返事を返す。状況を飲み込めないままに。

一体、なぜ、こんなことになってしまったのか。遠ざかる意識の中でそれを考察しながら視界が暗転した。

??

??

??

私たちの学年で乃咲圭一の名前を知らない者はいなかった。

2人いる学年主席の片割れ、目立つ銀髪、有名な乃咲博士の子供、成績優秀、スポーツ万能。1年の入学したての頃の圭ちゃんはそんな噂で有名だった。

一年のトップの浅野くんと圭ちゃん。彼らはよくお互いに勉強を教え合ってたらしい。2人で勉強しているところに当時のクラスメイト達が分からないところを聞きに行つて、それに彼らが答えて、そういうしてる間に勉強会を開いた方が早くない？って話になり、毎日勉強会が開かれる様になった話も結構有名。

実を言うと私が乃咲圭一くんと言う男の子と初めて話したのはその勉強会だったりする。まあ、E組に来てから話した印象だと本人は覚えてないみたいだったけど。

その勉強会は学年主席の2人を囲うようにA組のメンバーとメンバーの仲のいい友達が誘われて参加するって内容だった。

私はA組じゃなかったけど、当時仲の良かった友達に誘われてその勉強会に参加させて貰ったんだっけ。

図書室の一面を借り切って開かれる勉強会。それは当時のA組のレベルの高さとトップ2人の知識量を物語る様に壮絶で効率的。学校の先生なんか目じゃないくらい2人の教え方は上手で、追従しようとする頑張りメンバーという構図は良い刺激だった。

かく言う私、倉橋陽菜乃が乃咲圭一に「ああ、良いなあ」ってフワツとした憧れを抱いたのはこの頃。

その勉強会で彼は私の隣にいた。まあ、隣と言っても通路を挟んで隣りだったんだけど……。まあ、そんなことはいい。今、彼の隣に居るんだからそれで満足しよう。

当時の私は分からない所があつて、(通路を挟んで)隣りにいた圭ちゃんに聞きたくて席を立ち、たまたま数学の復習をしている彼のノートを覗き込んでしまった。

今思い返してみても、その勉強方法は壮絶の一言に尽きる。ノートの左上から見開き次のページの右下まで数字を変えただけの関数の問題がびっしりと隙間なく並んでいた。

その異様な様相のノートに引かなかつたと言えば嘘になるけど、私の中の印象は良いものだった。ちょうど私が聞いたかつた所。教科書と睨めっこしても分からなかつた部分を彼は自分自身が理解できるまで不器用に永遠と繰り返して覚えようとする。その姿勢は周りの男子には無いモノだったから。

そして、教え方も上手かつた。自分が理解するまで繰り返しているから、解き方のコツとか要点を絞って教えてくれる。

噂で聞いた勉強も運動も出来る学年主席はよっぽど完璧で非の打ちどころの無い天才なんだろうと言う私の色眼鏡はその姿勢によつ

て外された。彼が一位になるのは努力をしているからなんだと、その不器用な努力を見て、本当にふんわりとだけ理解した時。「ああ、良いなあ」って漠然と感じた。彼が好きとかそんなんじゃないやなくて、ある種の憧れに近い感情だったけど。

彼はその後も忙しく他の生徒に呼ばれて席を離れて教えに行っちゃったので「ありがとう」の一つも言えなかったのは今の私にとっても心残りかな。

それからしばらくして、学校は違う噂で持ちきりだった。曰く、乃咲圭一がテスト前日に倒れ、病院に運ばれた。

クラスの違う私のところまで来たその噂は真実だった様で、翌日、彼が登校した時のA組の騒ぎは尋常ではなかった。

当時のA組の生徒たちによる彼を心配する声は廊下中に響いた。テスト当日だと言うのに、誰もが彼の無事を喜んだ。

当時の圭ちゃんには沢山の友達がいた。勉強会の時も、廊下ですれ違う時も、体育で一緒になった時も彼が1人で見るところを見たことはなかったくらいに。彼の周りには人が沢山いた。

でも、その日からそんな景色にヒビが入ることになる。病み上がりで受けたテスト。廊下に張り出された順位表の頂点に彼の名前は無く、圭ちゃんは500点中の498点で総合2位だった。

それでも充分だと思う。倒れるくらいに頑張つて、病み上がりだと言うのにたった2点。問題で言えば1問外したかどうか。3年生になった今でも体調が悪い時に当時のテストを受けて彼と同じ成績を残せるか？と聞かれたらやれる自信はない。

でも、たったそれだけのたった1問の間違いが圭ちゃんをドン底に突き落とすきっかけになった。

勉強会は変わらず行われた。もちろん、そこには彼の姿もあつたけど……。そのペンはあまり進んでいなかった。

机に向かい、教科書を広げ、ペンを握りしめて、ノートを穴が開きそうなくらいに睨み付けて、それでも手は進まない。

そんな光景に最初はみんなが声を掛けた。頑張れ、お前なら出来るよ。圭ちゃんも圭ちゃん努力を続けた。しかし、結果は残酷。彼は

次のテストで大きく順位を落としてしまった。

その後も彼の転落は続いた。テストのたびに大きく順位を落としていく圭ちゃん。そんな彼に愛想を尽かした様に、手のひらを返す様に彼の周りにいた友達の様に見えていた人たちは離れていった。いつの間にか勉強会にも姿を見せなくなり、圭ちゃんに話しかけるのは浅野くんくらい。

気が付けば、圭ちゃんの周りからは誰もいなくなっていた。私もその1人。勉強会に彼が来なくなつて、もともとクラスも違うから関わる事がなくなり、完全に接点を失ってしまった私は彼を遠巻きに眺める1人になつてしまった。

話してみたくて、せめて一番最初、勉強を教えてくれたことにお礼を言いたくて。でも勇気が出なくて。

時間が経つ程に彼は孤立し、いつの間にか浅野くんすら寄せ付けなくなり、遂には学年最下位。その頃には不良のレッテルを貼られて、彼がE組に落ちる決定的な事件が起こつた。

乃咲が教師を殴つた。

そのたつた一言で終わってしまう噂は学年学級問わずにあつという間に広がつた。そこに至るまでの経緯、圭ちゃんがどうしてそうしたのか、誰もその部分を語ることなく、暴力を振るつた悪者としての噂だけがどんどん広まつていった。

教師を殴つて停学。停学を開けたらE組行き。私たちの学年で発生した初めてのE組への脱落者。

大体の人が口を揃えて言った。「あの乃咲がE組行きか」と他人事の様子。事実、他人事なのだからそんな素っ気ない言い種になるのは仕方ないと思う。でも、その後の彼への扱いは悲惨そのものだった。気分が悪くなる程に。

E組は差別と嘲笑の対象。そして圭ちゃんはその時点ではまだ、たつた1人のE組内定者で。私たちの学年の矛先は他のE組行きの生徒が出るまで彼1人に向くことになった。

登校すれば後ろ指を指され、クラスに着けば向けられるのは好奇と蔑み、嘲笑の視線と声。ヒソヒソと聞こえるか、聞こえないかくらい

の音量で聞こえてくる囁い声。

でも誰も、直接的なことはしない。モノを隠すとか、奪うとか無茶振りするとか、イジメの定番みたいなイタズラはない。でも、代わりに行われたのは明らかに仲間外れや、聞こえる様に悪口をヒソヒソと繰り返す様な陰湿なもの。

その頃の彼と一度だけ廊下ですれ違った事がある。かつてのA組の中心人物の片割れとして友達に囲まれて肩で風を切って歩いてた彼の面影は欠片もない。すれ違う人、影からヒソヒソ話す人を感情を感じさせない目で睨みつけ、正面から歩いて来る寺坂くんに目力だけで道を空けさせた。他人に興味も関心もない。ただ障害物としか認識していなさそうな目。

その時、私は彼に話しかけることができなかった。あの目を向けられるのが怖かったから。

でも、納得もした。そりゃあ、あんな目つきにもなるだろう。友達だと思っていた相手は手のひら返す様に自分を見限って、これまで何度も勉強を教えた相手に馬鹿にされて、後ろ指指されて、学年全体から差別されるハメになって。

話しかける機会を棒に振ってしばらく。圭ちゃんへのE組行き宣告を皮切りに次のE組を構成するメンバーを選別する様に成績不振、素行不良の生徒は次々にE組行きを言い渡されて、迎えた2年生の3月。先代のE組が卒業すると同時に今の私達のE組は一足早く新しい生活をスタートした。

私はこの頃、E組に落とされた。成績不振。私達の間ではありふれた理由。そこに関しては言い訳のしようもない。

けれどある意味で納得はしていた。周囲から差別される圭ちゃんを見ていて何もしなかった。イジメを見て見ぬふりをするのはイジメに加担しているのと同じ、なんて言葉がある。その言葉通りなら、私も彼を差別していた側であったと言うことだろう。

そんな私がE組に落ちた。差別される側に回ったのはある種の自業自得……と言うのは大袈裟かも知れないけど、何かしなないと思いつながら何もしなかったバチが当たったんだと思えた。

ただ、代わりと言ってはなんだけど、ほんの少しだけ希望の様なものもあった。だって、彼と同じクラスになれたんだから。あの時に言えなかった「ありがとう」を伝えるチャンスだって。

でも、これまで思うだけで行動に移せなかったのが同じクラスになったから、環境が変わったからと言って劇的に変わるわけもなく。やっぱり私に出来たのは遠巻きに彼を眺めることだけ。

いつもE組の中ですら敬遠されていた彼を遠くから眺めて悶々とする日々。話しかけようにも、何を話せば良いのか。声を掛けて「誰だお前？」とか言われたら流石に泣く。

何より、2年間抱え続けた弱虫根性を覆せるほど肝がすわってれば、今、こんな風に悩んだりもしないだろう。

悶々とする中で、圭ちゃんに話しかける人物が現れた。学級委員の2人である。磯貝くんの方はやたらフランクに「圭ー！」と声を掛け、メグちゃんの方は持ち前の面倒見の良さから孤立している彼にちよいちよい水をかける。

磯貝くんと圭ちゃんが話しているのを見て、磯貝くんの幼馴染らしい前ちゃんも会話に混ざる様になり、いつの間にか彼はクラスの中で孤立はしなくなっていた。

2人やメグちゃんと話している時の圭ちゃんの言動は決して愛想が良いとか、特別友好的とかそんなことは無かったけど、噂になっっている様な粗暴さはちっともない。その様子に気付いたクラスメイトたちは彼に対する警戒を少し緩める事ができた。

でもまあ、無愛想、仏頂面、寡黙。話しかけにくい要素が三拍子揃っている彼に自分から話しかけに行こうとする子は殆どいなかったのも事実なんだけどね。

そうして時間は流れる。彼は相変わらず最下位で、努力を無駄なことに評して憚らない生活を送り続けて迎えた4月。私達の運命を変える出来事が、人生を変える出会いがあった。

「はじめまして。私が月を爆^ヤった犯人です。来年には地球も爆^ヤる予定です。キミたちの担任になりましたので、どうぞよろしく」

「防衛省の烏間という者だ。まずは、ここからの話は国家機密だと言

うことを理解して貰いたい」

ようやく慣れ始めた新しい担任と入れ替わるようにやって来た2人。私達を非日常に連れ込んだ張本人。殺せんせーと烏間先生との出会い。この時は思いもしなかった。圭ちゃんと私達があんなにも前向きに変わることになるなんて。

??

??

??

圭ちゃんは変わった。驚くほどに、見違える様になったと言っても過言じゃない。恐らく半年前の私が見たら、目の前の人物が本当に乃咲圭一なのか疑うレベルだろう。

まず、彼を変えたのは烏間先生だった。放課後、日直の仕事を終えて少しだけ帰る時間が遅くなったその日、私はたまたま職員室の前で聞いた。いつになく熱心な声を。

「烏間先生、俺に訓練を付けてください」

「……………どうした、藪から棒に」

「暗殺の技術と言うか、貴方の技術が欲しくなっただけです」

「暗殺に必要な技術であれば言われるまでもなく、これからの授業で教えていくつもりだが……………それでは不足か？」

「はい。今のままではあの人がよくぼどのトンチンカンを働かない限り、天地がひっくり返っても暗殺なんて成功しません」

聞こえて来たのは真剣で熱心な声。努力は無駄とか、普段は明らかにやる気を見せない彼らしからぬ言葉。

冷静で合理的な分析が聞こえて来る。私はこの時初めて、乃咲圭一の合理性を求める思考に触れた。

「烏間先生なら技量と経験で喰らいつくことはできるかも知れませんが、今の俺にはそんなのありません。でも、その貴方も俺たちほど殺せんせーに迫れる訳じゃない。一般人と変わらない俺たち生徒と国から派遣された精鋭の作業員。警戒のレベルは当然ながら段違いでしょう」

「……………確かに。どれだけ技術があろうとも、ガチガチに警戒してい

る奴に肉薄するのは不可能と云つていい程に困難だ」

「はい。その通りです。しかし、その点に関してのみ、俺たち生徒は違う。あの人が教師である以上は俺たちと同じ空間に居ないわけにはいかないし、近寄らない訳にもいかない。貴方たち防衛省が最も苦勞しているだろう殺せんせーとの肉薄という最大の難所を俺たちは無条件にクリアできます」

「そうだ。それが我々が君たちにあの超生物の暗殺を依頼した最大の理由だと言える」

「そう。ここで考えてみて下さい。烏間先生は授業で言いましたよね。一人一人が自分に攻撃を当てられるようになれば成功の確率は格段に上がると」

「確かに言つたな」

「じゃあ、貴方と同じだけの技量を持った人物が常に殺せんせーに肉薄出来る位置に居られるとしたら、確率はどうなりますか。みんなが貴方に攻撃を当てられるだけの力を身に付けた上で、その中に貴方と同等の技量を持った奴が攻撃に加わるんです」

「成功の確率は……飛躍的に上がるだろう。だが、本気か？そのやる気は嬉しい限りだが、俺は何年も訓練を積んでこの力を身に付けた。それと同等の実力を身に付けるとなると文字通り地獄の様な訓練になるぞ」

「構いません。一応、殺せんせーの触手を壊したって実績もあります。それに、覚えてますか？貴方が言つたんですよ？思った以上に望みはあるのかも知れないって」

「……………分かった。その申し出を断る理由はない。確かに触手を破壊した実績を考えれば、あの教室で一番可能性があるのはキミと赤羽くんだろう。では、放課後で良いか？」

「はい。先生の都合がつくのであればいつでも大丈夫です」

たまたま聞いた圭ちゃんのやる気。最下位に落ちて、差別を受けて、E組に来てから初めて目の当たりにしたやる気。

彼はその日から暗殺に必要な技術を身に付ける手間を惜しむことなく、ただ、がむしやらに訓練に打ち込んだ。

訓練には誰よりも真面目に参加した。烏間先生の動きから何か一つでも技術を盗もうとする様にその一挙手一投足を観察し、放課後は磯貝くん達の遊びの誘いを断ってまで追加の訓練。

烏間先生の追加訓練は授業に比べて厳しかった。彼が先生レベルを指すと言ったから、それに必要な技術や体力を1年と言う短期間で詰め込む為の訓練。投げ飛ばされたり、ナイフを腕ごと叩き落とされたり、転ばされたり。

でも、圭ちゃんはひたすらに喰らい付いた。投げられても、叩き落とされても、転ばされても。彼はめげることなく何度も何度も烏間先生に向かつて行った。

最初は気になって「ああ、今日もやってるなあ」って流し見るだけだったのに、いつの間にか放課後の訓練を校舎から眺めるのが授業が終わった後の日課になって。

いつかのお礼を言いたくてタイミングを見ていただけだったのに、気が付けば圭ちゃんを目で追うようになっていた。

この頃からだと思う。かつて誰もが秀才と認めていた彼に抱いていた「ああ、良いなあ」って憧れが再び姿を現したのは。

??

??

??

「……なあ、お前らさ、それでいい訳?」

そうそう。彼の変化を語るのであれば、絶対に忘れちゃいけない事件がある。またクラスの中で孤立しそうになった事件。

「この前さ、ビッチ先生を追い出そうとした時にさ。お前らが言っただんじやん。勉強の邪魔だから出て行けって。なのにその勉強の成果を見せろって言われて尻込みするわけ?」

「おう、学年最下位だ。んじや、寺坂。お前よりいい順位取ってやるよ。磯貝、片岡。お前ら2人よりもだ。ここに居る奴ら全員よりいい点取ってやる」

出来なかつたら土下座。186人中186位の生徒が言い放った

宣戦布告。明らかな挑発、余りにも役者不足な発破。

しかし、これまでの周りに関わらず、自分は自分だと言わんばかりに孤立一步手前の立場に甘んじていた彼らしくない、周りの尻を叩いて進ませようとする言動。それは間違いなく大きな彼の変化の一つ。それをその時も遠巻きに見ていた。

そして、圭ちゃんは結果を出した。そのテストにおいて彼は186人中51位。順位だけでも一気に上位に食い込んでみせた。カルマくんには届かなかったけど、それでもE組の中では2位の成績。理事長のテスト直前にテスト範囲を変える、そしてその伝達をしないという妨害が無ければ彼は間違いなく50位どころかトップ10に入れたかも知れない。

思えば、みんなの圭ちゃんを見る目が変わり始めたのはこの頃。テストの少し前にあつた圭ちゃん主催の合同暗殺で誰よりも殺せんせーを追い詰めて、日々、烏間先生と血の滲むような訓練を重ねて、今回、テストで妨害を受けたにも関わらず130人も追い越して成績上位に返り咲いた。

彼は認められつつあつた。勉強でも暗殺でも、頼りになる。遂にはとうとう烏間先生に一撃クリーンヒットさせられるようになって。律が転校して来た時も周りのことを考えずに暗殺をする律と対話したり、前ちゃんが本校舎の生徒に酷いことされた時はみんなを指揮してやり返したり。

イトナくんが転校してきて、暴走した時は私を庇って守ってくれた。菅やんのアイディアを起点に暗殺を仕掛けたり。気が付けば磯貝くんや前ちゃんだけじゃない。彼の周りには色んなクラスメイトが集まる様になった。

??

?? ??

暗殺も勉強も順調。周りの中学生に比べたら、だいぶ特殊な環境ではあるけど色々順風満帆。彼に対する憧れは大きくなり、これまでは無自覚だった目で彼を追う動作はいつの間にか自覚的なものに変

わって行つて。そんな中で私の圭ちゃんへの想いが決定的に変わる出来事が起こる。

2度目になるシロとイトナくんの襲来。その前段階として彼らに都合よく操られてしまった寺坂くんが起こしてしまったプール爆破事件。あの日がきつと私にとってのターニングポイント。

あの日、寺坂くんからの指示に文句も冷やかさも言わずに従った圭ちゃんはプールの端に陣取っていた。

ポケーっと口を半開きにして寺坂くんの指示を右から左に聞き流しているのを見て、何気なく近寄って話しかける。

「乃咲くん、今回の作戦上手く行くと思う?」

「無理だろ。陸地で殺せんせーを数人がかりで追い詰めて水に落とすつてのすら現実的じゃないのに、それを寺坂単独でやれる訳がない。しかもあんなエアガン一丁だけで。殺せんせーに水を吸わせたのなら教室にホース引き入れて水浸しにした方がよっぽど効果的で現実的だと思うな。少なくとも俺はね」

まあ、教室の掃除が面倒だから提案しないけど。と続けて王様のように指示を続ける寺坂くんを眺める。

確かにその通りだ。ただ否定するのではなく、その後には彼なりの私達が納得できる作戦を示してくれるから分かりやすい。

「しかも指示が雑すぎる。細かければ良いわけじゃないけど、アイツからの指示は『その辺に適当に散らばって、タコが落ちたら攻撃しろ』つてだけ。殺せんせーを落とすまでの指示は一切ない。本当に一人でやれる気でのいるのか?あるいは俺たちに言つてないだけで何か確実に落とせるような秘策でもあるのか……」

考え込む圭ちゃん。こんな風に考え込んだ彼は声を掛けても反応が鈍い。前々から思っていたけど、彼の集中力は凄い。勉強のコツもひたすら集中つて言つてたし、彼の本当の強みは身体能力でも、洞察力でも、考察力でもない。集中力なのかも。

考え込む彼の横顔を眺めて時間を潰していると、寺坂くんに動きがあった。ついに作戦を始めるらしく、持っていた銃を殺せんせーに向けて、啖呵を切った。

その頃には彼も戻ってきたようで、視線は2人に向けられている。寺坂くん以待たされていた武器を握り締めていると、とうとう殺せんせーに向けられていた銃の引き金が引かれた。

直後に鼓膜を叩いたのはエアガンの微かな発砲音でもなく、殺せんせーのどこかが壊れる音でもない。シンブルな轟音。

轟音と共に殺せんせーの作ったプールに流れが出来る。小さな沢を堰き止められて作られたこのプールは自然の中にある。もともとこの水が流れてく筈だった先にあるのは切り立った崖。

この流れ出ていく水に流されて崖から落ちたらまず無事じゃ済まない。そんなことはわかっていた。理解も出来た。でも、私は波に抗って泳ぐ力を持ってなかったから、簡単に流される。

レジャー施設の流れるプールなんて目じゃない程の水流に押し流された瞬間、頭の中が真っ白になった。

一瞬、何も考えられなくなって、少し遅れて現実を理解して。本能的にもうダメだと思った。

けれど、そんな押し流される感覚は長くは続かなかった。少し流された所で背中に硬いものがあつたと思うと、それは私のお腹まで回って激しい水流の中で身体ごと私を引き寄せる。

顔を上げた。激しい波の中で目を開けた。引き寄せた彼の手が私を呼吸できる位置で抱いていてくれたから声を出せし、息をすることもできた。口を開けると水が多少入って来るけど、それでも助けてくれた人物の名前を呼んだ。

「乃咲くん……！」

「悪いな、倉橋さん！この非常時だ。抱き寄せてるし、身体も密着してるけどセクハラ扱いしないでくれると助かる……っ！割と現状維持が精一杯なんだ……！」

笑いながら言う彼の声は表情とは裏腹に荒れている。お腹に回された歳の割に逞しい腕は震えるくらいに力を込め、流されないように陸地を掴む手もまた同じく震えている。

よく見ると彼の掴む陸が、少しずつ砂埃を落としながら削れ、その度に彼の手がピクピクと跳ねる様に小さく震える。

流されてる。必死に2人分の体重をこの激流の中で腕一本で支えるのには限度があつて。流れの勢いを殺しきれずに少しずつジワリジワリと流されている。

結果として陸を掴んで抵抗する彼の指は自身の皮と肉と一緒に大地を削っているのだろう。

必死に顔を上げて見つめた彼は大地を掴む指先から赤が広がっているのが見えてしまった。

痛いのに、自分一人掴まるのが精一杯だろうに、圭ちゃんは必死に私を離さないように抱き止める力を更に込める。

私を不安にさせないように、軽口のような言葉を選んでるのはすぐに分かった。痛みを耐えているのが分かった。

こんな状況なのに、お腹の奥が、胸の奥が、身体の芯が熱くなるような感覚が私を満たした。

だから、叫んだ。助けてくれるのは嬉しかった。でも、その代償で圭ちゃんが傷付くのは嫌だったから。

「乃咲くん。きつと直ぐに殺せんせーが助けてくれるよ！だから離して！血が出てるよ……っ!!」

「確かにそうかもなっ。でも、もしも殺せんせーが助けてくれるまでに流されて勢い付いたまま地面に擦れたり、沈んで飛び出ている石にぶつかったりしたら？この程度の怪我じゃ済まないかもしれないだぞ?!俺は嫌だっ!」

ズリズリと指先が大地を抉り、皮と肉が削られる。徐々に徐々に流される。表情はいつになく必死で、痛みを耐えるように、余力を振り絞るように顔を歪ませる。絶対に離さないと主張するように私を抱き寄せる力が苦しい程に強くなる。

少しだけ苦しい。でも、それは嫌な苦しきじゃなくて。そんな状況じゃない。そんな場合じゃないのは分かっているのに、彼の言葉と態度が嬉しくて。思わずその顔を見つめた。

「倉橋さんっ、俺に掴まって！流石に波が強すぎる……!」

「——うんっ!」

彼の言葉に頷いて、抱き付く。身体全部でしがみつく様に。

圭ちゃんは絶対に離してくれないと分かったから、離れたくないって思ったから。私に回している力を掴まる手に回せる様に、離れない範囲で少しでも負荷を減らせる様に。

殺せんせーは、それから数秒後に私たちを助けた。

「ナイスガッツです、2人とも！」

そんな言葉と共に殺せんせーは私たちを陸にあげると飛び去って他のみんなの救助を続ける。

抱き合った姿勢のまま掬い上げられた私達は水の浮力を失った影響で更に身体が密着していた。

「大丈夫か、倉橋さん。怪我とかないか!？」

助かって直ぐに彼の口から出たのはそんな言葉。あれだけ痛そうな顔をしたのに、あれだけ必死に足掻いていたのに、彼の口から出たのは助かった安堵ではなく、私を心配する声。

この時だったと思う。私の中の「ああ、良いなあ」が努力する人に向けられた憧れと尊敬ではなく、恋慕に変わったのは。

彼は合理的な人間だった。理事長とか本校舎の生徒と言いつつは相手が黙るしかない言葉選びをするし、AI、言ってしまうえば機械だった律に合理性を説いて言い負かしてしまうくらい。

彼なら分かっている筈だ。別にあの局面で私を離しても、あるいは捕まえなくても、数秒後には殺せんせーが助けてくれた。指に怪我を負ってまで私を助ける必要はなかったし、その方が怪我とかなしないで済んだ。痛い思いをしないで済んだことくらい。

それでも彼は助けてくれた。別にする必要はない、という合理性ではなく、助けたいという感情をとって私を助けた。

それが言葉にできないくらいに嬉しかった。後にも先にも私はこの時の思いを言語化することはできないだろう。

でも、言いたい、言わなきゃいけない言葉が増えた。今日まで言えなかった、あの日のありがとう、今日のありがとう。そして、まだ伝えるには恥ずかしい言葉。

せめて、一つでも伝えたい。今、伝えないとまたタイミングをずると流してしまう気がしたから。

意を決して、瞬きを挟んだ後に彼を見つめる。

目と鼻の先に彼の顔がある。真剣で、焦って、心配している顔の彼。さつきまでの姿勢そのまま助けられたから、外から見たら私が彼を押し倒している様に見えてしまうだろう姿勢。

色んなところが当たっていて、潰れていて、お互いに生々しい恥ずかしい感触が伝わり合う姿勢に思わず悲鳴を上げて飛び上がり、距離を取りそうになる本能を抑える。

ああ、やばい。これ思い出してしばらく悶々とするヤツ……。

けれど、やつぱり。今逃げたらまた伝えたいのに伝えられずにモヤモヤする事になるのは明白で。この数秒の間でも既に2回目になる覚悟を決めると私は開き直った。

身体が密着していると言うのはそれだけ距離感を詰めたと言うこと。こうして押し倒したような体勢ということは、圭ちゃんは私から逃げられないと言うこと。

彼は逃げない。そう思うと少しだけ焦る気持ちが楽になった気がした。ゆつくりと呼吸をしながら、笑いかける。

まだ何も言わない私を心配するように険しい顔をする彼を安心させられるように。泣き顔とか不安な顔とかじゃない。彼にも良いなって思っただけ貫えるような顔を見せることを僅かに意識して。

「うん。ありがとう。私は大丈夫だよ——圭ちゃん」

「そうかよかつ………？け、圭ちゃん？」

安心した顔から一気にキョトン顔に変わる百面相が面白くて。今しがた彼に少しでも良く見せようと作った笑みではなく、自分でも驚くくらいにごく自然に笑いが溢れた。

「圭ちゃん。あの時、勉強教えてくれてありがとう。今回も助けてくれてありがとう」

「——どういたしまして？」

後半以外は心当たりがないと言いたげに更にキョトンとする彼の顔が印象的で、思わずまた笑ってしまった。

?? ??

??

そしてまたほんの少しだけ時間が経って今に至る。

あの日の怪我也すっかり完治して、あの事件をきっかけに寺坂くんたちもE組に馴染むようになって。相変わらず殺せんせーの首を狙い続ける日々を過ごしている。

彼の努力は止まらない。訓練では烏間先生に認められるようになり、暗殺ではみんなの中心にいて、勉強ではとうとう学年総合1位に上り詰めた。がむしやらかな努力の結果。

でも、私は気付いた。夏休みに入った直後。彼が何かに悩んでいることに。誰にも頼らず、頼れず、独りで。

仲良くなれたつもりだった。近くにいたつもりだったのに、彼は何も言うおうとしてくれなかった。

相談もない、頼つてもくれない。それが寂しくて、悲しくて。それに気付いたら彼を目で追う頻度も、LINEでした何気ない短いやりとりを見返す回数も増えて。いつの間にか四六時中ずうーっと圭ちゃんのことばかり考えるようになって。

目が合う度に、声を聞く度に、どんどん我慢が出来なくなっていく。あれだけ周りに頼られて、中心にいて、助けてくれて、南の島の暗殺の後はみんなの為に無茶をして、倒れた癖に、どうして私たちを、私を頼つてくれないの？何も言ってくれないの？そんな気持ち膨らんでいく。

頼ってくれるならなんでもした。話してくれたのなら一緒に悩んであげたかった。泣きそうなら一緒に泣いて。辛いなら励ましてあげたかった。なのに、圭ちゃんはそのどれもしないでE組を出て行くうとしていると知った時。プツンと頭の中で何かが切れた。我慢が出来なくなつた。

悩み続ける圭ちゃんの目には私達は映ってなかった。いや、目的の為に、合理性を自分に持たせる為に必死に目を逸らそうとしているのが分かってしまった。それが嫌だった。

殺せんせーが海底洞窟で仕掛けたポッキーゲームの途中。彼の目が不意に冷めた。久しぶりに見た周りに興味がない……いや、興味が

持たないようにしている時の冷徹すぎる虚無の瞳。

今、ここで引き止めないと圭ちゃん遠くに行つてしまふような気がして、これまで我慢してきたものが限界を迎えて爆発するように、気が付けば彼が逃げられないように両頬を挟み、貪るように圭ちゃんの意外とカサついた唇にキスをしていた。

「……………圭ちゃんが悪いんだからね」

我慢できなくなったことを彼の所為にして続ける。殺せんせーが見てるとか、後ろのペアが追いついて来るとか関係ない。責任を押し付けて、言い訳をするように唇を重ねる。

——私は絶対に彼を離さない。

一通り満足して唇を離れた頃。圭ちゃんは子供のよくな口調で謝り、私と約束をすると眠るように気を失った。

EX なんかがあった倉橋さん 2

これは、夏休みとその直後のゴタゴタが片付いた後の話。
圭一と陽菜乃の何気ないデート中の雑談である。

?? ?? ??

「ひえ……乃咲っ……!?!」

夏休みが終わってしばらく。それでも季節は夏であることに変わりなく、割とあちこちで祭りが開かれてる。そしてどこぞのパリピは俺を夏祭りに誘うべく、柵ヶ丘を彷徨ってるらしい。

たまたま街中で浅野に出会ったという前原たちが奴が俺を探しているという情報を流してくれた。

正直、付き合ってられない。アイツも支配者を気取るなら、俺以外の奴と過ごせる様に調整すりやあ良いのに。

などと思いつながら俺と陽菜乃は、隣街の夏祭りに来ていた。

「……なに、いまの人？」

「……………なんか俺見て怯えてたな。もしかすると不良時代の全盛期にカチあつた連中の1人かも？」

俺を見るなり尻餅をついて慌ただしく走り去った、チャラそうな男。その後ろ姿をみた彼女が不思議そうに小首を傾げて問いかけて来たので、とりあえずあり得そうな線を出しておく。

「自信なさそうだね」

「ぶっちゃけ、相手の顔とか覚えてないんだよなあ……。不良になるきつかけというか、不良認定されるきつかけになった喧嘩。あの時の相手の顔は覚えてるんだけど、それ以外は後から沸いてきた有象無象だったし」

そう。正直な話、初めの数人以外の顔は覚えてない。俺が心底から気に食わなくて自分から潰しに行ったのは初めて絡んできた奴らだけ。それ以外は降りかかる火の粉でしかなかったので雑に払い除け

て終わってた。

それでも、こうして顔を見られただけで怯えられてしまうのは、自分にとっては取るに足らないことであっても、相手にとってはそうではなかったということの現れなのだろう。

在りし日の自分に幾つかの反省点を見出しながら、綿飴をパクつく。別に綿飴が好きというわけではないけれど、不思議だよな。こんな口に入れたら溶ける繊維の塊にしっかりと甘みを感じるのだから。科学の力ってスゲー。

「ふうーん……。ね、そう言えば圭ちゃんはどうして喧嘩なんてしてたの？今のイメージだとそんな喧嘩っ早い印象とかあんまりないからちよつと気になるかも」

「ん〜……。それ、言わなきゃダメ？」

「別に無理して聞きたいわけじゃないけどね」

「……………恋人に暴れん坊だった過去を知られるのってなんか複雑というか、恥ずかしいんだけど？」

「恋人だからだよ。良い面も、悪い面も、圭ちゃんのことなら知りたいな。彼女だけが知ってる、彼氏の一面！みたいなの？」

何気なく出会ったチャラ男からまさかこんな会話に発展するとはね。人間関係ってのは奥深いもんだな。

「そこまで言うなら……。まあ、お前になら」

チャラ男の走り去った方を眺めて思い出す様に思考を巡らせる。当時の荒れていた不良時代。

我ながらそれなりにヤンチャだったと思う。ぶっちゃけ悪自慢をして得意になれる時期は過ぎてしまったので自分語りとか勘弁して欲しいのだが、恋人である陽菜乃に俺のことを知って欲しいと言う気持ちに偽りは無い。

「前もって断っておくと面白い話じゃないぞ？普通にドン引きする様なこともしてるからな？」

「だいじょーぶ！絶対に嫌いになったりしないし、そもそもそれくらいで嫌いになるなら、多分、圭ちゃんに話しかけたり、好きになったりしなかったよ」

「…………んじゃ、昔話と洒落込みますか」

わー!と小さく拍手をしながら無邪気に笑う陽菜乃に苦笑しながら語り出す。成績が完全に降下し始めて、荒み、喧嘩に明け暮れていた頃。ちようどカルマと出会った頃の話だ。

??

??

??

「てめえ、なにガンつけてくれたんだコラあ！」

今から少しだけ昔の話。 柗ヶ丘中学校に落ちぶれた少年が居ました。成績優秀、スポーツ万能、質実剛健を体现したかの様な少年……まあ、ぶっちゃけ俺なんですが。

【確かにみんなから見ても当時はそんな感じだったよね】

【……少しは否定してくれなきや恥ずかしいんだけど】

【圭ちゃんは今も昔もかっこいいよ?】

【……………ごほん】

幼気な乃咲少年は悩んでいました。成績は伸びるどころか急降下中、家族とも上手くいかず、友人はどんどん居なくなっていく。色々と思い詰めていたのです。

何をしてもし上手くいかない虚しさから、彼は次第に荒み、他者に当たり散らす様なマネはしなかったものの、それは確実に態度や目つきとなって表面化していました。

「なんなのコイツ、無視してくれちゃって」

「その制服、柗ヶ丘だろ。エリートぶった坊ちゃんがいい気になってくれちゃってまあ」

その表面化していた部分はお世辞にも他人に良い印象を与えることはできず、コンビニの前に陣取って馬鹿騒ぎしているヤンキーたちを邪魔だなあと思いつながり眺めていたら、睨み付けていると勘違いされて喧嘩を売られる程でした。

「…………ごめん。そんなつもりはなかったんだ。ちよつと退いて欲しかっただけで喧嘩売るとかそう言うつもりじゃなかった」

『喧嘩売るともりじゃなかったんでちゆよお』ってか?」

正直、耳腐ってんのかと思った。でも、当時はまだ喧嘩はおろか、人を殴ったことすらない優等生精神が捨てられていなかった時期である。ヤンキーに絡まれたのは結構怖くて言い返せなかった。早く飽きてくれないかなって祈ってた。

「しかも一丁前に俺たちのこと邪魔者扱いしやがって」

「本当に勘弁してください。たまたま目があったただけなんです」

けれどそんな祈りは通じず、むしろ何も言い返さない俺に良い気になったのか、胸をど突かれた。

こっちは何もしてない。精々視線を向けただけ。なのになんでこんな目に遭うのかって少しムツとしたよね。

まあ、ここで思うだけなら良かったんだけど、それも態度に出ちゃってみたいで、ヤンキーたちはキレた。

「なんなの、その目つき。調子乗ってんじゃない」

「坊ちゃんの癖に生意気に睨みやがって」

そんな感じで気付けば路地裏というか、人気のあんまりない細道に連れ込まれて、殴る蹴るの暴行を受けたんだ。

【その人たち、沸点低過ぎない?】

【まあ、そう言うのがカツコいって思ってたんだろ。ガキなんてのはそんなもんだし、気持ちは分からなくない。気に食わない奴を殴って黙らせるつてのをカツコいいと思わなかったけど、でも、それが出来たらなあって思ったことは何度もあるから】

しかし、内心でどれだけ強がっていても、体に来るダメージは痛みという明確なストレスをか弱い乃咲少年に与え続けた。

殴られるというか、そもそも暴力という行為自体を初めて受けたから。怖いわ痛いわで割と一杯一杯だった。

——そんな時である。

バキッ、ベキッ!と明らかにやばい音を発しながら殴り倒される不良の背後にアイツが現れた。

「あれ?乃咲くんじゃん、こんなトコで何してんの?」

誰だろう、我らの赤い悪魔ごと赤羽カルマである。

「えつと……確か赤羽くん……?」

「同じ学校なんだし、カルマでいいよ。みんなそう呼ぶし」

ベキヨリとヤバさムンムンな音を立てながら不良たちを畳みながら涼しげにそんな名乗りをするアイツはかなり異質だった。

その登場の仕方は俺がノンケじゃなかったら惚れていたかもしれない。そのくらいにインパクトがあった。

「……………ふーん」

「……………今は陽菜乃一筋だぞ」

「ならばよし！」

けど、一番印象的だったのはカルマと周りのヤンキーたちの実力差だった。カルマはスイスイと不良の攻撃を躲し、カウンターを入れ、相手の攻撃を自分の攻撃でねじ伏せていた。

役者が違うというか、素人の俺でもカルマの強さを理解させられた。それと同時に凝った言い方をするなら魅せられていた。『ああ、こんな方法もあるのか』って。

単純な話、仮に喧嘩になったとしてもカルマと同じ動きをすれば無傷で済むのかって目から鱗が落ちた気分だった。

「やれやれ、しょーもないことする連中って多いね。大丈夫だった？ 乃咲くん。怪我とかは……………」

「見ての通りボコボコよ」

「あはは……………もつと早く出れば良かったね……………」

ヤンキーたちは悲鳴を上げながら居なくなっていた。その後ろ姿を眺めながら声を掛けてきたカルマと軽口を交わす。

これがカルマとのファーストコンタクトだった。

それからというもの、カルマと遭遇することが多くなった。コンビ二で見かけたから声をかけて、本屋で向こうから声をかけられて。案外気が合うということであっさり仲良くなった。

「にしても、よく罰喰らわないよな、お前。助けられた俺が言うのもなんだけどさ」

「先生がさ、言ってくれんだ。『お前は喧嘩っ早いのが短所だけど間違ったことはしてない』って。だから、これでいいんだよ。それにいじめられてる人助けて何が悪いの？」

「……まあ、その考え方は間違いじゃないと思うよ」

「あはは。まあ、また絡まれたら呼んでよ。連絡先も交換したし、流石にトモダチが一方的に殴れるのは気分良くないからね。ああ言う連中はボコった後に生徒手帳とか身分証の写真とかを押さえとくと後が楽なのよ」

「お前のはヤクザの手法のそれなのよ……」

思えば、カルマと会わなかったら。俺はいじめられっ子だったかも。喧嘩とかどうしたら良いのか分からなくて、一方的に殴られ続けるだけだった可能性も結構あると思う。

「ん。でもさ、この時もまだ喧嘩はしてないんだよね？どっちかって言うと一方的に殴られただけって言うか……。ここからどうして”銀の死神”なんて呼ばれる様になっちゃうの？」

「なんで陽菜乃がその呼び方知ってる!？」

「カルマくんが教えてくれたよ？」

「あの中3病患者め……ッ！」

ただ、俺が弱気な元優等生である時間はそんなに長くなかった。元優等生でも、いじめられっ子でもない。世間一般から不良と呼ばれる括りにまとめられる様になったのはこの数日後。

「今日は赤羽いないみたいじゃん？」

「あ、ホントだ。ラッキー！実は俺らイライラしててよお？ちよつと付き合ってくんない？」

「ケータイは予め没収な、アイツ呼ばれると面倒だし」

普通に学校から帰っている時にあの時の連中に絡まれた。

抵抗したけど、まあ、向こうは5人で俺は1人。まして自分は浅野に勉強で負けて、そのまま転落を続けている、勉強すら取り柄でなくなった、喧嘩もしたことがない凡人。

勝てるわけがないと、その場は諦めてアイツらに腕やら髪やらを引っ張られて、例の如く人気のない場所に連れ込まれた。

鞆もケータイも奪われて、武器になりそうなものは何もない。逃げ道になりそうな場所は塞がれて。ナヨナヨと立ってる俺を正面に捉えたヤンキーが得意気にニヤニヤ笑ってたっけ。

構図的には1対1。周りの連中は俺が反撃するなんて思ってもない。実際に、その時の俺は反撃しようなんてカケラも思っただけだったんだ。

カルマの動きは確かに凄かったし、そんな方法もあるのか、と目から鱗だった。でも実際にその動きが出来るかどうかは別問題。そこんところは理解していたから。

「んじゃ、1発いきますかー！」

……けど、実際にカルマの動きを思い返してみると気付いた。コイツらってカルマよりは凄くないんだよなって。

カルマの動きに比べたら、コイツら大したことないじゃんって。相手が拳を振りかぶった瞬間に理解できた。

そしたら、目の前の相手が別に怖いとも思えなくなつて。ヤンキーたちを正面から見据えられる様になった。

そんで、そこで第二の気付きがあった。コイツ、めっちゃくちゃ鈍いじゃん。攻撃躲すの簡単じゃね？って。

【覚醒したの？もしかしてゾーンの片鱗？】

【今にして思うと……そうなるかな】

半歩体を後ろに逸らして避けて。そしたら向こうがバランス崩したみたいだったからさ、そのまま背中を軽く押してやったら面白いくらい簡単に顔から転んじやって。

「……あれ、もしかしてお前ら弱い……？」

ケツを突き出した状態で転んでるヤンキーに対してそんな言葉が思わず漏れてしまった。

【うわっ、急に調子に乗ってる……】

【あの時は慢心する孫悟飯の気持ちがあったわ。そのあと殴りかかって来た奴の拳を受け止めた時に”勝てんぜ、お前は……”とか危うく言いそうになったもの】

調子に乗りやがって！と襲ってくるヤンキーたち。数日前まで、あるいはカルマと出会わなければこの時点でチビって土下座するコースだったのだろうが、カルマの動きで強さの基準が高くなり、目の前の相手が大したことないと知ってしまった以上、なんとというか、色々

と頭にきた。

こんな奴ら相手にヘコヘコしていたのか、と。
キレのカケラもない拳を避けて言い放つ。

「ウスノロ……」

【言ってる、言ってるから。言い訳しようがないくらい孫悟飯してるよ、圭ちゃん！】

【あの頃は俺も若かったんだ】

言いながらカルマの動きを参考に拳を振り抜くと、ギョベツ！とやばい音を立てて相手の鼻がひしゃげた。

その1発で連中もだいぶビビっていたらしい。かなり及び腰になり、明らかな逃げの姿勢を取る者もいた。

大食い系の番組見ると『自分もいけるんじゃないやね?』ってなることがあると思うんだが、カルマの動きを見た俺はまさにそれだった。そんなことあるわけがないって理性が勝って見たばかりの頃は試さなかっただけ。

自分もいけるんじゃないやね? ってなる奴らと俺との明確な違いは、『試したらいけちゃった』ってところ。

あの日は勝った理性も、今回は負け、目の前の相手に試してみたら、案外出来た。思った以上に簡単だった。

叩きつけた拳と鼓膜を叩く肉が潰れる音。それらが脳内麻薬でも作ってみたみに、暴力を振るった直後、妙に清々しい気分になることが出来たんだ。

【まあ、早い話が八つ当たりだよ。他人に当たったら、スッキリしたってだけのこと。な? 他人に八つ当たりしてスッキリした話なんて好きな子に聞かせたい話ではないだろ?】

【……まあね。でも、圭ちゃんはその人たち以外には自分から進んで手は出さなかったんでしょ?】

【一応ね】

【なに……これ】

我に帰ったのはそんな眩きが聞こえたタイミングだった。

カルマの困惑した声も当然だった。何せ、彼が見たのは数日前に不

良から助けて仲良くなった友人が逆に不良を狩っている瞬間だったのだから。

鼻血を垂らして倒れてる奴、失禁してる奴、馬乗りにされてタコ殴りされてる奴。側から見たら地獄絵図だろう。

「ふーん。家と学校近いんだ？なら、今度遊びに行くね」

一通り暴れて満足した俺は、カルマに教わった様に相手の学生証を抜き取り、そんな言葉を掛けていた。

より一層、恐怖に顔を歪めた不良たちを眺めて悦に浸る。なんと言うか、楽しい。そんな風に思ってしまった。

学校では友達だった奴らは居なくなり、腫れ物を扱うように距離を置かれ、出来た距離の向こう側から笑い声が聞こえた。そして、外出先ではこうしてわけもなく不良に絡まれる。

それは紛れもなくストレスだった。上手くいかない理由を手探りで探して、蹴いているのに目が合ったと言うだけで殴ってくる連中はストレス源以外の何者でもなかったから。

殴って、笑って、スツキリした。

「これ、乃咲くんがやったの？」

「そうだよ。流石に何もしてないのに絡まれると頭に来るじゃん？我慢できずにやり返しちやっただけ……拍子抜け。殴り返すって経験は生まれて初めてだったから割とドキドキしてる」

「……………の、割にみんなボコボコじゃん？」

「お前の動きを参考に立ち回ってみただけど、思った以上に上手くいってさ？それに数がいても連携なんてしてこなかったし、よく見たらこいつら遅かったから」

「ば、ばけもんが……………！」

「うっせえよ」

足元から聞こえて来た声に短く返して踵で腰骨をぐりぐりと踏み付ける。痛そうに呻く声を無視して声をかけた。

「これから毎日、お前らの通学路に行くわ。見つけ次第にぶん殴ってやる。お前らの理屈だと目があったらガン飛ばした、殴って良いってなるんだろ？その上、今日は別に目があったわけでもないのに殴って

来た。やり返されて当然だよな?」

「……………こいつらの通学路なんて知ってるの?」

「お前の教えてくれた通り、こいつらの学生証を写メったんだ。学校と家の位置が分かれば通学路なんて簡単に割り出せるしね。でも、こいつら5人に対して俺は1人だからなあ……。うん、決めた。毎日ランダムで1人ずつ襲撃する。誰が襲われるかわからない状況ってスリルあるだろ?」

「か、勘弁してくれっ……………」

「やだよ?お前らが始めたんじゃない?俺が飽きるまでやるよ。お前らも今日、俺が反撃しなかったらそうするつもりだったんだろ?自業自得じゃん。人にやられて嫌なことを自分からした罰ってことで。まあ、諦めろよ」

「……………はは、怖いなあ。乃咲くん」

「それからは毎日そいつらを襲撃し続けた。顔を合わせては挙動をつぶさに観察して行動パターンを把握して、日によって違う奴を狙ったり、同じ奴を連日で襲ったり。そうしてると襲う奴にもムラが出現してき。連続で痛い目に遭ってる連中からしたらなんで俺ばかりつてなるだろ?そうやって意図的に緩急をつけてアイツらの人間関係を壊した」

「え、えげつないね……………」

「だから言っただろ?ドン引きする様なことしたって。だからあんまり話したくなかったんだ」

「……………でも、話してくれたんだ?」

「……………陽菜乃になら話してもいいって思ったのと……………そうだな。知って欲しかったのかも。それが悪自慢なのか、俺なりにも動機があったって言い訳なのは自分でも分らないけど。兎に角、お前に聞いて欲しいって話しながら思ったんだよ」

【そっか……………】

それから1ヶ月くらい同じことを繰り返して、アイツらの人間関係が完全に壊れた頃。失礼なことに俺の顔を見るだけで泣いて逃げるようになったので、俺はそいつらの襲撃を止めた。

まあ、『また調子に乗ってたら殺す』って脅し付きでだけど。ひとまず乃咲くん不良デビュー事件はこれで終わり。

?? ??

??

恋人に頼まれ、自分も乗り気になったとは言え、慣れないことをするもんじゃないな。少し肩が凝った。

「うーん。でも、死神なんて呼ばれるようになったの？どっちかって言うとサークルクラッシュヤーとか、ストーカーとかの方が定着しただけど」

「いやな、そいつらが通ってたのが結構ヤンキーが多い学校だったらしくて。目をつけられて。何故か俺が柵ヶ丘の番張ってることになり、カルマと遊んでたら馬鹿どもに襲われたんで返り討ちにして。したら馬鹿がたむろして周辺ヤンキーの連合が出来て、『血の109抗争』が始まったんだよ」

「血の109抗争ってなに!!？」

「忘れもしない、11月10日……あ、いや、12だったかな。今話したヤンキー連合とそいつらの結託が面白くなかった別のチームが同盟を組んでぶつかり合うことになった凄惨な事件だよ」

「すっかり忘れてるよ!?!しかも109って名前の割に10月9日とか1月9日じゃないんだ!?!もしかして109の前で起こった事件とかそういう意味なの……?」

「いや、すっかり郊外の人気のない倉庫だったぞ。109ってのはその事件で解散したチームの数らしいよ。なんか各チームのリーダー格がたった1人に手も足も出なくて心が折れたとかで」

「うそお………。この辺って結構ヤバイ人いるんだね……。て言うか、なんでそんなことになったの?」

「いや、なんか話を聞くとな?リーダー格をボコった奴ってのが抗争現場を見て爆笑してたらしくてさ。それが気に食わないとかで喧嘩を売ったら流れるように一撃で沈められたんだと」

「うーん……。まあ、周りが真剣になってる時に笑ってたらそりや恨

みも買うよね……。カムランの丘で爆笑してるようなもんでしょ、それ。圭ちゃんは何してたの？」

「ん？カルマとポテチと綾鷹を片手に現場で優雅なティータイム決め込んでたぞ。抗争って結構見応えあつてな。雑談の肴にするには丁度いいんだよ。応援できる時はすごく真剣に応援できるのに、笑える時は爆笑しちゃうような場面もあつてさ」

「……………ちなみに、その時、誰かに絡まれた？」

「絡まれたなあ……。笑ってるのが気に食わないって突っかかってきたわ。ちよつと鳩尾小突いたらすぐダウンしたから末端だったんだろうな……。気に食わねえならリーダー連れて来いって言ったらみんな泣きながらどっか行っちゃうの。こつちが悪いことしたみたいになるからやめて欲しいよな」

「……………そうだね」

「おかげさまでそのやべー奴の戦いを見損ねるし。後でそんなヤベエ奴いたって知った時は愕然としたね。そんなスペシャルマッチ見逃したのかつて。なんか、映画のクライマックスだけ見逃した気分だったよ」

「ね、圭ちゃん。背中には気をつけてね？」

「ほえ？」

陽菜乃の心配そうな声。まあ、確かに恨みはたくさん買ってるだろうし、気をつけるに越したことはないか。

「にしても、なんか別の世界のお話みたい」

「まあ、実際別の世界と言えばそうだろうな。んで、俺が死神なんて呼ばれるようになったのはその抗争中に片手間で不良を掃除したのが発端なんだってさ。この前、その辺のヤンキーが熱烈に教えてくれたんだ」

殺せんせーが来て間もない頃に銀の死神なんて噂されているのを聞いてから気になっていたのでこの前、それでも俺に話しかけてくる物好きなヤンキーに聞いてみた。そしたらどう言う経緯でそんなことになったのかを興奮気味に教えてくれた。

小っ恥ずかしいあだ名であることに変わりはないが、この銀髪をみ

て勝手にビビって喧嘩売られることが無くなったのは素直に喜ばしいことだ。

「はあく。なんか、色々とびつくりだよ。そう思うと付き合った今でも私はあなたのこと、ちよつとしか知らないんだね」

「引いたか？」

「引いたってより、驚いたかな。でも、やっぱり嫌いにはなれないよ。まだまだ知らない圭ちゃんの知りたくないな」

「俺だって陽菜乃のこと、全部知ってるわけじゃないからお互い様だろ。これから知っていけばいいんじゃないか？」

「お？圭ちゃんが珍しく積極的だね。いいよ、何が知りたい？今ならお姉さんがなんでも答えてあげちゃうよ」

「…………お姉さん？」

「圭ちゃんより誕生日早いもん。圭ちゃんが3月12日で、私は10月23日！つまり、お姉さんだよ！」

まあ、確かに俺は生まれるのが少し遅かったら一つ下の学年だったか。彼女と同じ学年に産んでくれた母さんに感謝だな。そうならなかったら、恋人はいなかったし、俺が変わることはなかっただろう。

しかし、こうやってお姉さんマウントを取られるのも面白くないのは事実だ。少し困らせてやろう。

「んじや、陽菜乃お姉ちゃんに質問です」

「お姉ちゃん…………よし、ばっちこい！」

「いくつまでオネシヨしてましたか」

「小学…………って！何聞いてんの!？」

「答えてくれるんだろ？」

「言えるわけじゃないじゃん！」

「大丈夫だよ、オムツ外れてからはオネシヨなんてしたことがない俺のお姉さんを名乗る陽菜乃だもんな」

「うう…………ごめんなさい。お姉さんは取り消します…………」

「弱いよ、お姉ちゃん」

顔を真っ赤にし、消えるようにそんな言葉を紡ぐ。

恥ずかしそうな様子にちよつと興奮。調子にのつた。

「んで、結局いくつまでしてたんだい？」

「まだ続けるの、この話!？」

「続けるよ。さっきまで話してたじゃないか。」これからもっとお互いのことを知っていかう”って!」

「そう言う意味じゃないよね!!？」

「うう……。俺はすっかりオネシヨ遍歴教えたのに」

「したことがないって遍歴をね!？」

その後、しばらくこの話題を続け、耳まで真っ赤にした陽菜乃がすっかり白状した。引き換えに拗ねてしまったが。

「そう拗ねるなって。かき氷奢ってやるから」

「……イチゴがいい」

「はいはい」

バリバリとマジックテープを剥がして財布を開ける。

お互いの過去を赤裸々に話す。言葉にするとたった一言で済むが、互いを知ると言うのは意外に難しい。しかし、これを理由に足を止めるつもりはない。大切な人との相互理解。その大切さを誰よりも知ってるのだから――。

本編 プロローグ

今でも覚えてる。あまりにも理不尽で、非現実で、非日常的な新しい日常が始まったあの日のことを。俺たちの人生を変えてくれた恩師との出会いを。

今でも覚えてる……いや、いつまで経っても彼と出会った日のことも、彼と過ごした日々のも事も忘れることはないだろう。きっと死ぬまでは。

あれから7年。俺たちが殺せんせーを殺した日から、ちようど7回目の春に深く息を吸って、肺の中の空気と一緒に気分を入れ替えるように息を吐いた。

俺たちの象徴だった全体の7割を失った三日月はもう、見上げた空には浮かんでいない。そこにあるのは自らの重さで潰れて崩れた月があるだけ。

時々、夢に見る。先生と出会った日のこと、みんなと過ごした日々、先生を殺した日のことも。

数年前までは殺せんせーのことを思い出して辛い思いをしたことだってあったけど、それでも俺は思い出を糧に前を向いて歩けるようになった。

だから今日はあの日々の話をしよう。

俺を変えてくれた恩師との出会い、仲間たちとの交流、人生の先生達からの助言を受けた日、そして彼らとの別れまでの日々を。

?? ?? ??

「はじめまして。私が月を爆^ヤった犯人です。来年には地球も爆^ヤる予定です。キミたちの担任になりましたので、どうぞよろしく」

突然として我ら落ちこぼれの3年E組に現れた未確認生物。タコ

のような身体に黄色い体色、三日月を横にしたような口とまん丸い小さな目。地球に飛来した宇宙人と説明されたら納得してしまいそうな生き物。

「防衛省の烏間という者だ。まずは、ここからの話は国家機密だと言うことを理解して貰いたい」

そして数人の部下を引き連れて現れた防衛省所属だと自称する強面のがっしりした男性。

彼らがやって来た日に俺たちの日常は殺意蠢く非日常へと姿を変えた。烏間さんの一言によって。

「単刀直入に言う。君達にこの怪物を殺して欲しい！」

それは唐突な殺害依頼。防衛省なんて、むしろ殺人事件を始めとした暴力沙汰なんかを抑制してそんな場所にある人間から齎された非日常への片道切符。

誰が予想できただろう？ 月が爆発して全体の7割が蒸発するか、その犯人だとか言う怪物が担任になるとか、防衛省からソイツの殺害を依頼されるとか。

「……えっと、何スか。そいつ、攻めて来た宇宙人か何かスか？」

「失礼な！ 生まれも育ちも君達と同じ地球ですよ！」

「(嘘つけ……)」

「詳しいことを話せないのは申し訳ないが、そいつの言っていることは全て事実だ。月を破壊した、この生物は来年の3月、地球をも破壊する」

「まじかよ」

「この事を知っているのは各国首脳だけ。世界がパニックになる前に、秘密裏にコイツを殺す努力をしている。つまり——暗殺だ」

締め言葉と共に目にも止まらない速さで胸元から引き抜いたナイフを超生物めがけて振るう烏間さん。しかし、その攻撃は躲されたようで、二気そうにピンピンしてる怪物。間を空けることなく追撃を放つがそれも全て躲されてしまったらしい。

1秒に何度ナイフを振っているのだろうか？ 烏間さんの攻撃の予備動作から後は目で追えない。躲されたのだと理解できるのは、彼の

追撃を試みる予備動作を見てからのこと。

既に目の前で人並外れた攻防が繰り広げられていて、自分達の様な素人なんかよりもよっぽど鍛えているであろう、屈強な人物が赤子のようにあしらわれ、攻撃を躲されてから、追撃するまでの僅かな間に眉毛の手入れを施されてしまっている。

そんな彼らを見ていて思う。こんな奴、本当に殺せるのだろうか？と。

「コイツはとにかく速い！ 殺すどころか、こうやって攻撃しても避けられ、眉毛の手入れをされる始末だ！ 丁寧にな！」

額に青筋を浮かべる烏間さんと彼をおちよくる様にますます速度を上げて手入れに力を入れる超生物。

今、こうして見ているこの光景が現実のものなのか、疑わしくなってきた。

「満月を三日月に変えるパワーを持つこの生物が全力を出した時の速度は実にマッハ20！ つまり、コイツが本気で逃げれば我々は地球滅亡のその時まで手出しすらできない！」

ありきたりな怪獣映画の設定みたいだが、現在進行形で残像を作りながら烏間さんの攻撃を避け続けているのを見る限り、彼の言っていることは大袈裟でも拡大解釈でもないだろうことが伝ってしまう。

だが、同時に奇妙だとも思う。だって、それならどうして態々、こんな落ちこぼれの掃き溜めに担任としてやって来たのか。

「あの、なんでそんな怪物が態々うちの担任になるんですか？ なんと地球が壊れるのが来年なのかも分からないけど、仮に地球を壊す為のパワーを貯めてるとかなら、逃げれば良いじゃないですか、マッハ20なんですよ？ ここに留まるメリットあるんですか？」

「ムルッフフ、良い質問です」

なんとなく挙手して聞いてみた質問に返って来たのはやけに癖の強い笑い方と賞賛の声。

俺の問い掛けに待ってました、と言わんばかりにE組の生徒を一度だけ見回すと烏間さんの眉毛を整えていた一連の道具を片付けて答えた。

「マツハ20で逃げ続けるのでは、あまりにも面白くない。そこで私から国に提案したのです。殺されるのはゴメンですが、柵ヶ丘中学校3年E組の担任ならやってもいいと」

鳥間さんの肩に手……というか、触手を馴れ馴れしく乗せると新たな疑問を残す答えを提示した、超生物。きつと、俺以外のクラスメイ卜たちも心の中でツッコミを入れただろう。『何で!?!』と。

というか、よくもまあ、国もそんな提案を了承したもんだ、防衛省所属を名乗る人物たちに何気なく目を向けると、目が合った。

「コイツの狙いはわからん。だが、政府はこの提案をやむなく承諾した。理由としては2つ。担任をやっている間はコイツの動きをこの学校の中に限定して監視できること。そして何より、2つ、30名近い人間がコイツを至近距離から殺すチャンスを得られること」

こちらの言いたいことを察してくれたのか、意外と詳しく説明してくれた。

「コイツが教師をやる条件として君達生徒に危害を加えないことを約束させているし、万一にでも君達に危険が及ぶような事態には我々がさせない」

「まあ、地球が無くなってしまえば安全もクソもないですがねえ」

「……不安を煽るような事を言うな。ひとまず、コイツが君達に危害を加えることはないと思っただけだ。信頼できないかもしれないが、国が君達の安全を全力で確保する」

胡散臭い超展開と現実離れというか、もはや乖離と言っても差し支えない話だ。

マツハ20の怪物から国がどうやって俺達を守ってくれるのか、と問い詰めたいが、鳥間さんは力強く、正面から一人一人に目を合わせる様に言ってくれた。

ただ、目を合わせて言ってくれただけなのに、何故だか、彼の言葉は自分の父やこの学校の教師達の物よりも真摯で、信じてみても良いと思わせてくる。

「そして、これは暗殺依頼。つまりは仕事として君達に頼むのだから無論、報酬も出る。成功報酬は100億円！ コイツを殺すことがで

きた者にはそれだけの金額が支払われることになっている」

「ひゃ、ひやく……!?!」

「当然の額だ。コイツを殺すことは冗談抜きで地球を救う事なのだから」

提示された金額に誰が驚いた声を出すか、烏間さんの説明を聞いて納得する。確かにこの怪物が来年に地球を破壊するのであれば、それを殺すことは80億の人類どころか、地球に生きるあらゆる生物、そして星そのものを救うことになる。

漫画やアニメ、ゲームの中でしか聞くことはないと思っていた、世界を救うなんてワードがまさか現実のものになるとは。

けれど、そう考えるとむしろ100億は安いくらいじゃないか？

人類だけで考えても成功報酬100億ってのは、人口1人につき約1円ってことだろ？ 少数点以下を切り捨てて考えると。

つい、なんとなくこんな事を考えるのは俺が荒んでいるからなんだろうか？

「幸いなことに、コイツは君達をナメ切っている。みろ、しましまになっっている時はナメている顔だ」

「どんな皮膚してんだ!?!」

黄色いタコの顔に緑色の横ラインが数本走り、口元はニヤニヤと分かりやすいニヤケ面。うん、顔色見るまでもなく確かにナメられている。

「当然でしょう？ 国が殺れない私を君達が殺せるわけがない。この前、最新鋭の戦闘機に襲われた時も……逆に空中でワックスをかけてやりましたよ」

「だからなぜ手入れする……!?!」

ツツコミ所の絶えない超生物だこと。つか、高速巡航してる戦闘機にワックスって大丈夫か？ 空気中のゴミとかが乾いてないワックスに付着して手入れ前より返って汚くならないだろうか。

「この様に、コイツは君達をとにかくナメ切っている。そのスキをあわよくば、君達に突いて欲しい。人間には無害だが、コイツにのみ殺傷能力を発揮するナイフと専用のBB弾とエアガンを支給する」

彼の言葉が終わると同時にその部下らしい人たちがキャスターの付いた台車を運んでくる。

台車に乗って運ばれて来たのは、緑の柄のナイフとピンクに着色された大量のB B弾が詰まった容器とハンドガン型のエアガン。

「このことは君達の友人や家族には絶対に秘密だ。ここまでの情報は全て国家機密だからな。とにかく、時間がない。来年までにコイツを殺さなければ地球が消える。そうやってしまえば逃げる場所など、どこにもない。仮に宇宙に逃げても無駄だ」

鳥間さんの額に汗が浮かんでいる。きつと、ここまでのことは全て本当の事なんだろう。何となくだが、言葉の端々から焦りを感じる。「そういうことです。それでは皆さん、残された一年を有意義に過ごしましょう！」

挑発する様に声高らかに宣言する超怪物を前にクラス全員が呆然と支給されたナイフとエアガンを見比べる。まるで思考が追いついていない。

けれど、時間は待つてはくれない。結局、何が何だが、どっちが右で、どっちが左かすら分からないままに、この日、支給された装備を受け取り、俺たち柵ヶ丘中学校3年E組の生徒は暗殺者になった。

1話 暗殺の時間

生徒は暗殺者。ターゲットは先生。

そんな歪な関係が始まったのは数日前。あれから何人かが暗殺と称した正面攻撃を試みたが、誰一人として、この超生物にダメージを負わせた者はいない。

俺も何度か挑んでみたが、やはり手も足も出なかった。マツハ20とか言っているけど、コイツはそんなスピードを出していない。

単純に、俺たちでは実力不足と言うことなんだろう。分かってはいたが、多少悔しい部分はある。

つか、このタコ。本当に殺せるんだろうか？ 朝のホームルームの点呼時にクラス全員で一斉射撃して弾幕張っても全て避けられるし、原始的な方向だが、男子で組み着いて拘束を試みたが失敗。

その他にもクラスメイト達があの手この手を試してみてるらしいが、手応えすらないらしい。

現に今も……。

「中村さん。暗殺は勉強の妨げにならない時と言った筈です！ 罰として後ろで立って受講しなさい！」

「あはは……すいませーん。そんなに顔を真っ赤にして怒らなくても」

怒る先生と悪びれもしない様子で教室の後ろ側に移動する中村。超生物は彼女の撃った弾丸を焦りすら見せずにチヨークで掴んで止めた。

とんでもない早業だ。冗談もお世辞も抜きにアレを殺せるビジョンが浮かんで来ない。

それでも、暗殺に積極的な面々は諦めることなく机の中にナイフを忍ばせ、いつでも打てる様にハンドガンのグリップを握り、ライフルを手の伸ばせる位置に立てかけて、チャンスを虎視眈々と窺っている。

正直、彼らのその熱意には頭が下がる思いだ。

周囲の涙ぐましい努力に他人事みたいな感想を抱いているとチャイムが鳴る。

「おっと、昼休みになりましたね。先生、ちよつと中国行つて麻婆豆腐食べて来ます。もし暗殺希望者がいれば、携帯で呼んでください」

ちよつとコンビニ行つてくる感覚で中国に行くと言言すると超生物は俺たちのやった小テストを抱えて窓から目にも止まらない速度で飛び立った。

「えつと、マツハ20だから……麻婆豆腐の本場、四川州まで10分くらい？」

「確かにあんなのミサイルでも落とせないわ」

「しかも音速飛行中にテストの採点までしてるんだぜ？ この前、イラスト付きで褒められた。タコ二重丸つてさ」

「それと何気にアイツ、教えるの上手くない？」

「あ、それ分かる。私、放課後に暗殺行つた時に数学教わつてさ。次のテスト良かったもん」

なにやら先生の超生物ぶりに呆れてる様子。

「ま、でもさあ。政府公認の暗殺者とか言つても……所詮、俺たちは『エンドのE組』だもん」

「頑張つても仕方ないけど」

楽しげに話していたクラスメイト達が途端に暗い表情を浮かべる。自虐気に言い放たれた『エンドのE組』という単語は俺たちへの蔑称だ。

ここE組は櫛ヶ丘中学校の問題児が集められる特別強化学級である。成績不振や素行不良を主な原因としてそれらを矯正する為に設けられた隔離教室。

我々の学舎は外から見ると名門校であり、名だたる高校へ生徒を送り出し続けている屈指の進学校。E組はそんな名門校の闇。

働きアリの法則を知っているだろうか？ 全体の2割が働き者、6割が普通、残る2割が怠け者とかいうアレだ。この学校のヒエラルキーはそれが基になっており、成績が良い順でAとEとクラス分けされている。A組は働き者、E組は怠け者といった具合に。

怠け者のE組は学校内ではエグイ差別を受ける。校舎は本校舎から約1km離れた山の上にある旧校舎、全校集会は他のクラスよりも早く来て整列しないとペナルティーがあり、そこで配布されるべきプリントは貰えないし、教師陣もそれを良しとしている。

そんな扱いを受けたくないからこの学校の生徒の大半は努力する。あんな風になりたくない。あんな扱いは嫌だと。そして、なまじそんな努力をしているからこそ、E組に落ちた奴は成績をキープしてる奴らに馬鹿にされる。怠けたからだ。

そして、落ちた者の大半は自己肯定感が薄れてゆく。努力したのに駄目だった、あんなに頑張ったのに出来なかった、と。努力し足掻いたのに周りの連中に劣ると評価された事実やE組に来てしまった劣等感、情け無さが心を脆弱にして、本校舎の連中から受ける差別を迎合することになる。

一応、救済処置もあるのが彼ら劣等感を引き立てるのだろう。学年で50位以内に入り、尚且つ元々所属していたクラスの担任が復帰を許可した場合、E組から抜け出せるシステムがある。

この差別を受ける者達からすれば垂らされた蜘蛛の糸そのものだが、それすら掴めない事実が更に彼らの劣等感を強くするのだろう。中には成績優秀だが、素行不良でE組に落とされた者もいる。しかし、そんな奴も元のクラスに戻れてないところを見るに、順位が足りないのか、そもそも50位以内に入っても元のクラスの担任が復帰を許す気がないかのどちらかだ。

落ちたら最後、戻つて来れない。設備も劣悪で真夏の登校は苦行そのもの。校内での待遇も下の下、教師生徒問わず差別と嘲笑を受け続ける生き地獄。それが櫛ヶ丘中学校3年E組だ。

彼らが自分を卑下するのも無理はない。
ちなみに俺は素行不良と成績不振のダブルパンチを食らってE組に來た、真正正銘の不良品である。

「おい、暗殺の計画進めようぜ？・渚くうーん」

なにやら気色の悪い猫撫で声が聞こえたので視線を向けると、クラスのマスコット兼抱いても良いと思える男子ランキング1位の潮田

渚きゅんがジャイアン系男子に絡まれていた。

暗殺の計画と言っているくらいだから共謀して何か企んでるんだろうけど、ジャイアン改め寺坂と取り巻きの吉田、村松のニヤけズラを見るに彼ら3人が首謀なんだろう。渚は大人しくて絡みやすいから巻き込まれたってところか。

ドンマイ、渚。

教室から連れ出される渚を合掌して見送りつつ俺はコンビニのサンドイッチをパクついた。

?? ?? ??

「お題にそって短歌を作ってみましょう。ラスト七文字を『触手なりけり』で締めてください」

また微妙に面倒な課題が来たもんだ。触手なりけりってなんぞ？

この人俺たちに何を求めているの？

「例文はこうです。『花さそふ、嵐の庭の、雪ならで、はえゆくものは、触手なりけり』……書いた人は先生の所に持って来なさい。文法の正しさと触手を美しく表現できたかをチェックします。できた者から今日は帰ってよし！」

「鮮やかに映え、力強く生えてゆく生命とは、庭の桜を散らす花吹雪などではなく、触手だったのだなあ……って、どんな状況？」

磯貝に同意。どんな状況だよ。庭から触手が生えてるとかホラーだよ。つか触手に美しさを感じるのはい部のマニアックな性癖の持ち主だけでは？

「先生しつもんーん！」

「……ん？ どうかしましたか、茅野さん」

「今更だけどさあ、先生の名前なんて言うの？ 名前分らないと他の先生と区別するのに不便だよ」

「名前ですか……。改めて名乗るような名前はありませんねえ。なんなら皆さんでつけてください。でも、今は課題に集中ですよ」

「はあーい」

ただでさえ短歌どころか俳句すら作ったことないのに、ニツチすぎる要求のせいで難易度爆上がりしてるんだが。帰す気あるのか、このタコ。

どんな風に作るのが正解なのか分からねえ……！

《left》咲き誇る、桜舞い散る、旧校舎、《left》

教鞭振うは、触手なりけり。

乃咲圭一

なんでだろう、割と真剣に取り組んでるはずなのに恥ずかしくなつて来たぞ。……まあ、いいや。完成したのは事実だし。さつさとタコに見せに行こう。

案外、直ぐに帰れるかもしれない。

ささつと思ひ浮かんだ歌を書いて立ち上がると、渚も同時に立ち上がった。コイツももう終わったのかと見てみると、手にはナイフが握られていた。

まじか、こんな堂々と正面から行くのか。

「……おや、もう書き終わったのですか？ 渚くん、乃咲くん」

「まあ、触手を美しく表現なんて言われても想像し辛いもんで、結構投げやりの感じになりましたがね。とりあえず出してみても感覚でも掴めれば、と」

「うんうん。何事もまずはやってみる姿勢は大事です。それでどちらから見ましようか？」

「渚、お前の方が近いから先どうぞ」

「うん。ありがとう」

薄いピンク色に染まった顔で笑う先生。ひとまずは暗殺しようとしてる渚に順番を譲る。一応、隙が追撃出来る様に銃に手を伸ばしておく。

一言礼を言つて先生の前まで歩み寄る彼の後ろに立ち、順番待ち兼隙窺い。

「それでは渚くん。見せてみなさい」

「……っ！」

先生の要求に応えるように繰り出されたナイフ。有無を言わさず

に突き立てられたナイフは触手に掴まれて腕ごと止められた。

「……渚くん。言ったでしょう？ 暗殺は勉強の妨げに——!?」

そんな結果は見え透いていたので銃を取り出し、援護しようとした刹那。予想もしていなかった渚の動きによって俺は動きを止めてしまう。

渚が、ふわりと質量を感じさせない軽やかで、滑らかな動きで殺気すら感じさせず、先生の首に手を回してゆったりと抱き着く。

あまりにもごく自然な動きに思わず目を奪われ、援護の手は止まり、何が起こったのかすら理解が追いつかない。頭の中が真っ白に染まっている。

「——」

意を決したように鋭く息を呑んだ音が聞こえた。

誰が発生源なのかは分からない。別に特定しようだなんても考えていない。ただ、人の息遣いなんかとは比べ物にならない爆裂音が直後、激しい閃光を伴って前方から俺を襲った。

渚が何かしたのだろうか？ 無策にあの超生物に抱き着いた訳ではないだろう。もしかすると、息を呑んだ何者かと共謀していたのか？

昼休みのうちに渚を連れ出した奴がいた。暗殺の計画を進めると宣っていた奴がいた。

となると、これは寺坂か村松、吉田。この3人の内の誰かが仕組んだのだろう。

そこまで考え至るものの、閃光と爆発は渚の真後ろに居た俺を飲み込んでしまった。

??

??

??

「渚！ 乃咲!？」

爆裂は大量のBB弾を凄まじい勢いで吹き飛ばす。

渚と圭一の立っていた場所には焦げ臭さと大量の火薬による爆発で齎された白い煙が立ち込める。

「しやああああ——っ!!!」

誰もが呆気に取られる中で状況を正しく把握し、喜び勇み、勝利の雄叫びを上げて立ち上がる男がいた。

「寺坂っ！」

「ちよつと！ 渚に何持たせたのよっ!!!」

何が起こったのかは理解できずとも、この状況を作り出した人物は教室の誰もが理解した。

そして、当の本人は向けられる非難の視線をものともせず少女の問い掛けに悪びれもしないで答えた。

「手榴弾だよ、オモチャのな。中に入れたBB弾が勢い良く弾け飛ぶように火薬を使って威力を上げたヤツ。あの距離で爆発させりやあ避けようがねえだろ」

「お前っ！ そんなもの使ったのかよ?! 渚も圭一も巻き込まれたんだぞ?! 火傷じゃすまないだろ!!!」

「うっせえな。そんなもんどうとでもなる。人が死ぬような威力もねえだろうしな。渚もついでに巻き込まれた乃咲の奴の治療費くらい出してやラア。俺の100億円からな」

非難の視線や抗議を鬱陶しそうにのらりくらりしながら寺坂が爆心地に歩み近づく。

一步、一步と近づく度に薄くなつてゆく煙の中に見える黒焦げの物体に彼はニヤける頬を抑えることができなかつた。今すぐ駆け寄つて超生物の死骸を検めなくなる気持ちを押し殺しながら余裕を装つて歩く。

「……なんだこれ」

しかし、そんなニヤけと心からの歓喜は煙が完全に晴れると同時に霧散した。

煙が晴れた先、落ちていたのは黒焦げの物体となにか薄く透明感のある膜のようなものに覆われた渚と圭一の2人。彼らは怪我ひとつなく膜に覆われたまま床に伏していた。

「無傷……?」

そんな馬鹿なと黒焦げの超生物の死体を持ち上げ首を傾げる。確

かに人が死ぬような威力ではないが、300発にも及ぶBB弾とそれを爆散させる為に使用した火薬の量は決して人が巻き込まれれば怪我だけで済む量ではない。現に、超生物の死骸は黒焦げだ。

首を傾げると同時に寺坂は気付く。超生物の死骸は倒れてる2人を覆う膜に繋がっていたのだ。

現状に何一つと理解が追いついていない寺坂の頭の中に様々な疑問が顔を出す中で、彼の頭上から声が聞こえた。静かな、それでいて――。

「実は先生、月に一度だけ脱皮します」

尋常ではない程の怒気を孕んだ声が。

「脱いだ皮は凡ゆる衝撃に耐える強度があり、それを爆弾に被せて威力を殺しました。つまりは月イチで使える奥の手です」

「いてて、大丈夫か？ 渚」

「うん……。乃咲は？」

「こっちはへーきだけど……。俺たち以外は只事じやなさそうだな」

抜け殻を重たい掛け布団のように捲ると圭一はのっそりと起き上がった。天井に張り付く超生物を見上げて苦笑を浮かべた。

渚も同様に見上げるとそこにあったのは普段の鮮やかなまでの黄色から掛け離れた黒。顔には血管らしきものが浮き上がり、目は鋭く主犯格たちを睨みつけている超生物の顔があった。

――怒っている。

誰もがもはや顔を見るまでもなく察した。

そんな空気すら歪ませそうな怒気を直に当てられた寺坂は腰を抜かした様にその場に尻餅を着き、ガタガタと震え出す。

「寺坂、吉田、村松。首謀者は君たち3人だな」

「ち、ちがつ……！ 渚が勝手に」

「いや、流石にそれは通じないだろ」

怒る超生物、怯える3人、呆れ顔でそれを眺める圭一。圭一が喋り終わると同時に超生物は姿を消す。凄まじい風圧を置き去りに古びた校舎を飛び出した超生物は己の残した風圧の残る教室に舞い戻る。

腕の中に無数の表札を抱えて。

うち、3枚が零れ落ちる。意図せずか、意図してか、落ちた3枚の表札に刻まれているのは奇しくも寺坂、吉田、村松。3人の苗字だった。

「政府との約束ですから先生は決して、君達には危害を加えない。ただし、もしも次に同じ方法で暗殺に来たら……君達以外には何をするかわかりませんよ。家族や友人……いや、いつそ君達以外を地球ごと爆発してしまいますかねえ」

それは明らかかな脅し。禍々しい程に黒く染まった顔を見た誰もが思ったことだろう。例え、地球の裏側に行っただとしても逃げきれないだろうと。

「な、なんなんだよ、テメエ！ 迷惑なんだよお……！ いきなり来て地球爆破とか暗殺しろとか！ 迷惑な奴に迷惑な殺し方をして何が悪いんだよ!?!」

「渚に自爆特攻させることだろうが」

「さつきからうるせえんだよ、お前もよお！ 分かってんのか、俺たち脅されてるんだぞ、家族を盾に!?!」

「……いや、だからってそもそも、渚に爆弾括り付けて特攻させるのは人としてどうなんだって話だろ。100億から治療費出すとか言っても完全に治るとは限らないし、後遺症とか残るかもしれない。このタコがキレてる理由はそこなんだからさ。それに次に同じ方法で来たらって言ってたべ？ 2度と同じことをやらなきゃコイツは何もしないだろうさ」

圭一は、尻餅を着いている寺坂を見下ろしながら言いたいことを一通り言い終わると、超生物に向かって視線を投げる。何も間違ったこととは言っていないよな？ と確認する様な目にそれは力強く頷いた。

「乃咲くんの言ってる通りです。寺坂くん達は渚くんを、渚くんは自分自身を大事にしなかった。そんな生徒には暗殺者たる資格はありません」

言い切る言葉に渚は落ち込んだ様に頷く。が、その顔は直ぐに喜びの色で明るく彩られることになる。

「ですが、寺坂くん達のアイディア自体は素晴らしかった。先生は君達の暗殺を迷惑だなんて考えてません。自分と周りへの危害が無い範疇での暗殺ならいつでも大歓迎です。また新しい作戦を思いついたら試しにいらっしやい」

顔に大きく浮かんだ朱色の丸を見せて優しく微笑む、その生物に彼らの目は奪われた。真っ直ぐに自分たちと向き合おうとするその目に。

「特に渚くん。キミの肉薄までの自然な体運びは百点です。先生は見事に隙を突かれてしまいました」

「……案外、手榴弾とか使わずに肉薄したままナイフ使った方が簡単に殺せたかもな」

「ヌルフッフ、さてどうでしょうねえ？ 先生はそう簡単に殺されてあげるつもりはないですよ。それはそうと乃咲くん。短歌の方は良くできています。短歌は俳句と違って必ずしも季語を入れる必要はありませんが、キミはしっかりと桜という季語を入れている。ただ花が咲くと表現するのではなく、咲き誇るとい言い回しを使っているところ、先生は好きですねえ。字余りしている部分も語感が良くて違和感がない。あの短い時間でよく作れましたね」

「……マジかよ」

いつの間にか持ち去られ、評価までされて、いつの間にかタコ二重丸を付けられて帰ってきた自分の短冊に呆気に取られる圭一。

「皆さん、人に笑顔で誇れる暗殺をしましょう。君達全員がそれができるだけの力を秘めた有能な暗殺者だ。暗殺対象である、先生からのアドバイスです」

触手をうねらせながらのアドバイス。受け取り方は三者三様。キラキラとした目で見つめる渚、怯えた顔の寺坂、どうでも良さ気な圭一。

そんな彼らを見ながら暗殺対象は暗殺者に問いかける。

「先生はこの一年、皆さんとの生活をエンジョイしたら地球爆破して逃げるつもりです。無論、殺されるつもりなど微塵もない。さて、問題です、渚くん。それが嫌なら君達はどうしますか？」

「……その前に、先生を殺します」

ニヤリと口元を綻ばせて、はつきりと答えた渚に満足そうに頷くと超生物は顔に緑のしましまを浮かばせて彼に倣うようにニヤリと笑う。

「ならば殺^ヤつてみなさい。今日は先生を殺せた者から帰ってよし！」

「それができれば苦労しないっつもの」

ボソツと入れた圭一のツツコミにクラス全員が頷くと同時に茅野が何かを思いついたら様に恐る恐ると言った様子で手を上げた。

「あの、先生の名前なだけどさ。殺せない先生で『殺せんせー』つて言うのはどうかな？」

「殺せない先生で『殺せんせー』ですか……。うん、良いですね、気に入りました。素敵な名前をありがとうございます、茅野さん。それでは皆さん、今日から先生を呼ぶときは殺せんせーと呼んでください！」

「はい、殺せんせー質問〜」

「早速ですねえ、どうしましたか？」

「俺、短歌終わったんだけど帰っていいかな？ 終わったら帰ってよして言ってたよね？ 殺れた奴からって条件になる前に出されてた課題終わったんだし、問題ないよね？」

「ニユヤア!? そんな冷めたこと言わずにいもつと先生と戯れましょうよ！ クラスメイトたちとも親睦を深めるチャンスですよ！」

「んじや帰りまーす。また明日ね、殺せんせー」

圭一は言いたいことだけ言い終えるとそそくさと帰る用意をして教室を出て行ってしまった。

「……………先生、もしかして嫌われています？」

「気にしないでいいですよ、殺せんせー。アイツは昔からあんな感じだから」

震える触手で自分を指しながら冷や汗たつぷりな顔で訊ねる殺せんせーに、圭一と付き合いのある磯貝は苦笑を隠そうともせずに応えた。

「本当に殺せるのかな、あのタコ」

下校しながら呟く圭一の背中は校舎からどんどん遠ざかって行く。
暗殺対象と暗殺者が織りなす異様な雰囲気のある教室にはきつと、明日
も始業のベルが鳴るのだろう。少年は深いため息を吐いた。

2話 圭一の時間 I

朝、旧校舎に続く山道を、道行く野良猫と戯れながら辿って通学するのが俺の日課である。

しかし、どうしたことだろう。日課には無い出来事が降って沸いた。学校に着くとタコ型超破壊生物……もとい、殺せんせーがトロピカルジュースと英字新聞を片手に通勤してきた所に出会したのだ。

なんかもう、何処から突っ込めばいいのか分からない。通勤途中にコンビニ感覚でハワイに行くなよ、とでも言えればいいのだろうが、言うのも面倒なのでツツコミは控えることにしよう。

朝から無駄な体力を使うのは燃費に響く。昼休みまでに無駄なカロリーを消費して空腹に耐えるひもじい思いをするのは勘弁だ。

「おはようございます、乃咲くん」

「おはよう、殺せんせー」

「……………」

「……………」

本来なら生徒からするべきなんだろうが、先に挨拶されたので素直に挨拶を返す。

が、会話はそこで終わった。ある意味当然である。まだ生徒との距離感を掴み切れず、趣味とかを把握しているわけでもないのですもその話のネタが思い浮かばない殺せんせーと、そもそも別に話すこともないので口を開く気もない俺。会話にならないのは当然だ。

「……………」

「……………じゃ、俺はこれで」

数秒の気不味い沈黙が流れ、なんとなく空気が鬱陶しくなった俺はその場を去ることにした。

手短に言葉を切って踵を返すと右腕に黄色い触手が絡み付いて来た。

「乃咲くん、乃咲くん！ トロピカルジュースなんていかがですか!? 先生とモーニングテイーと洒落込もうじゃありませんか!」

「お構いなく。自分はお茶会で飲むのは綾鷹と決めてるんで」

「え!? 最近の子はお茶会なんてするんです!?」

「しません。ボツチなので」

「そんな寂しいカミングアウトしないで! あ、そうだ! これからは先生とお茶会しましょう!」

「そんなボツチが体育の準備体操でペア組む相手が居ないから、先生とペア組むみたいなノリで茶会しても嬉しくくないです。つか、お茶会自体興味ないんで」

「例え方が妙に具体的……!? もしや経験談です!」

ツツコミが激し過ぎて、もはや五月蠅いレベルだな、殺せんせー。個人的には生徒とのコミュニケーションを第一に考えるその姿勢に対しては素直に感心するが、必要以上の関与を嫌がる奴もいることを教えた方が良いだろうか? 寺坂とかその筆頭だろう。

「偶には英字新聞なんて読んでみるのはどうです? 案外面白い発見があるかもしれませんよ?」

「どうせアンタが殺った月の話題しかないでしょ」

「ギクっ! よもや乃咲くんも英字新聞を愛読して?」

「いや、月が爆発したとか世界を揺るがす大事件だろ。『あ、月壊れてる。ま、いいや、興味ないし』みたいな奴は居ないだろ、普通」

「それは確かに」

駄目だ、会話を切ろうとしても相槌返されて何故か会話が続いてしまう。これはある種の才能だろ。

会話をぶった切って逃げようにも、ここまで食い下がられた感じを見るに走って逃げても追ってくるだろうし、マツハ20から逃げ切る訳がない。

「……ヌルフフフ」

「……はあ……。分かった、付き合うからその『ようやく観念しましたね』みたいな顔をやめてくれ」

「わかりました。いやー、生徒と朝から触れ合うプチ目標が遂に達成できましたよ」

「マツハ20の怪物が抱くにしては随分とちっぽけな夢なこと」

「大事な生徒との触れ合いにマツハ20だとかは関係ないですよ」

良く言うよ、来年には地球を爆破するんだろ？ 俺たちごと地球を消し去ろうとしてる奴が生徒が大事だとかよくもまあ、抜かしたもんだ。

「そんなに俺たちが大事なら地球爆破とかやめてくれない？ 俺たちも死んじやうんだけど」

「おやおや、もしや乃咲くんは先生を殺す自信がないのですか？」

「アンタを殺せば心配ないんだろうけど、それ以前に殺す殺さない関係なく、生徒が大切とか言ってる割に俺たちには殺害予告してるじゃん？ 来年には地球爆破しますって殺害予告兼余命宣告だろ。生徒を大事にとか言ってるのに言動が矛盾してる」

なんとなく、これまでクラスの誰も彼に投げかけなかった質問をあえて聞く。この人の言動は矛盾してる。矛盾してるけど星の滅亡という事態の大きさに目を取られ過ぎて殆どの奴らがそこを気にしていない。

もしくは『星が滅ぶ』自分達も死ぬ』と受け入れているのか。いや、漠然と理解しても受け入れられてはいないのだろう。その証拠にクラスメイトたちが仕掛ける暗殺は何処か楽し気だ。

俺にはそれが理解出来ない。なんでコイツが政府との約束を律儀に守ること前提なのか。

仮に俺たちの誰かがコイツの怒りを買ったとして、殴り殺されたとして、政府との約束を反故にしてもこの超生物には何の痛手もない。だって、巡航ミサイルですら撃ち落とせないマツハ20の怪物だ。何があっても余裕で逃げ切れるだろう。

その気になれば俺たちを皆殺しにして世界政府からですらも逃げ切れる化け物がたかが紙切れ一枚、桐ヶ丘中学校3年E組の生徒に危害を加えない、なんて約束を本気で守ると思えるのか。

「……鋭い疑問ですね。それを私に問いかけて来たのはキミが初めてだ」

「報酬の100億円とか、地球滅亡とか、世界政府とか、国家機密だとかのスケールのデカさに隠れて気付いてないのかもね。まあ、誰かは

気づいてるかもだけど。もしくは地球滅亡Ⅱ死んで受け入れてるのかもしれないけどさ?」

「恐らくは前者が多いでしょうね。あるいは気付いていても現実感が薄くて漠然としか考えられていないか。キミほど深く考えている者はいないかもしれない、というのが答えとしては妥当でしょうか」

「んで? 結局のところどうなのさ? アンタが本当にこの一年で俺たちに危害を加えないかがどうかがまず信じられないし、一年過ぎたら地球共々皆殺しにするって宣言されてる訳だから、そもそもアンタ自体を信じられないんだけど」

「……まさか、赴任して数日で、こんな形で問いただされるとは思いもしませんでしたよ。キミは先生の予想を超えていた」

「そいつはどうも。んで? 答えは?」

別に追い詰めるつもりはなかったけれど丁度いいから問い詰める。何気なく振った話がこんな方向に発展するとは思わなかった。

思わなかったけれど、少しだけ優越感がある。俺は、今、E組の誰よりも月爆破と地球滅亡を実行しようとしている化け物に近づけているのだから。

「ふむ……。先生としてはそれに答えるのもやぶさかではありません。ですが一つだけ約束して貰いたいことがあります。それを守れるのであればキミの質問に答えましょう。敬意を込めて、ね」

「ああ、ご安心下さい。別にアンタが侵略して来た火星人間だろうが、人体実験で化け物に変えられた元人間だろうが、将棋星人だろうが、他人に公言するつもりはありません。凶らずとも手に入れた他人の弱みをそう簡単に手放そうとは思いませんので」

「そうですか? ではお答えしましょう」

超生物の口から語られる。一年の地球に訪れるだろう災難、その原因となる怪物からその真意が。

「先生は来年には自然死します。その際に地球を巻き込んでしまう可能性がある、それだけの話です」

案外、あっさりとした答えだった。

「その言い方だと巻き込まない可能性もある様に聞こえますが?」

「ええ。その可能性もあります。ですが、巻き込んでしまう可能性の方が高い。だから世界政府は躍起になって先生を殺そうとするのです。対先生用BB弾はこの触手を形成する細胞を溶かし殺せる。これで先生の頭や心臓を破壊すればこの細胞の成長を停止させ、無力化することができますので」

あつさりとした答えだったが、俺は知ってはいけないことまで知ったのではないだろうか？

一年後も生きていたいという願望があるのなら、この人を殺す必要性は理解出来た。

支給されたナイフとBB弾が想像以上に重要なアイテムだったのも分かった。

それに、殺せんせーの口からは何度か細胞という言葉が出て来た。殺せんせーを殺すことで細胞を無力化できる、なんて聞くともまるで殺せんせーではなく、彼を構成する細胞が地球滅亡の原因であるかのような印象も受けた。

だが、それを理解するのと新たな疑問が産まれるのは全くの同時だった。

『殺せんせー』と茅野によって名付けられた、この超生物は何者なんだろう？

なぜ、世界政府という奴らは来年には地球が滅亡するだとかそんなことを知っているのだろうか？ 殺せんせーが暴露したから？

いや、そもそもなんで殺せんせーの細胞に有効な武器を開発出来た？ 殺せんせーから細胞の提供でも受けたのか？ いや、仮にそうだととしても開発にどれだけの時間がかかった？

暗殺依頼をして来た当時の烏間さんからの事情説明を思い出す限りでは、月を爆発させてから殺せんせーは地球爆破宣言をしたことになる。

……いや、そもそもとして、月を爆^ヤつたのは本当に殺せんせーなのか？

殺せんせーの同種みたいなのが既に月面で発見・研究されていて、そいつが死んだ。その死と同時に細胞とか心臓やらが暴走した結果、

月があんな風になったんじゃないのか？

凄いSFチックな妄想にはなるが、この妄想もとい、仮説が正しいのなら、世界政府が地球滅亡の可能性を考えているのも、対先生用にBB弾やらナイフがすぐに開発されたのにも説明がつくのでは？

「……………」

「…………どうやら、本当に先生の想像以上みたいですね。少し早まってしまいましたか」

殺せんせーと目が合う。

いつもと変わらぬ黄色い体色、しかし、口元は苦笑しているように見えた。

その笑みで俺がどこまで想像したのか、見透かされた気分になったので、念のために自分に釘を刺すつもりで口を動かす。

「いえ、約束通り誰かに話すつもりはないですし、仮に俺が考えた仮説まで話しても妄想乙で流されるかもしれません」

「そうしてください。先生が勝手に死ぬと分かって、みなさんが本気で殺りにしてくれないと先生、退屈で死んでしまいますから」

こっちの意図に気付いたらしく、戯ける殺せんせーに乗っかって会話を続ける。

朝っぱらから考えるには少々重たすぎる内容だったのでリフレッシュを兼ねて今日ばかりは殺せんせーの日課に付き合うことにした。

?? ?? ??

初めて彼を見た時、目を疑った。

似ていた、生写しと言つていい程に。

その銀色の髪の色も顔立ちも。

私が見ようとしなかつたあの子に。

「これが英字新聞……。うん、読めん」

私の隣で英字新聞に目を通しては難しそうに顔を顰める教え子に横目で見ながらジュースを飲み下す。

さして難しい表現もなければ、まだ習ってない単語もそうないだろ

うが、彼は割と真剣に首を傾げては所々単語を口に出して読もうと挑戦し、上手く発音できずに舌を噛んだみたいに唐突に口を閉じる。

まだ生徒たちのことを完璧に把握できているわけではないが、今年度に至るまでの成績だけは一通り把握し、苦手分野を掴めた。

しかし、私が把握した中でも奇妙というか、異質な成績を修める者がいた。それが今、まさに英字新聞と格闘している乃咲圭一である。

一年の前期までは学年トップの成績を出していたが、後期に入った辺りから成績を落とし始め、最終的に学年最下位まで落ちた少年。

ふと、先ほどまでの会話が頭の中に蘇る。

気付こうと思えば誰でも気付く疑問、しようと思えば誰でも出来た問い掛け。けれど誰も疑問を持たず、誰も質問してこなかった問いを何気なく投げかけて来た、私の新たな教え子。

あの会話を思い出すとなんとなく彼のことが見えて来る。話し方や抱いた疑問を鑑みるに地頭が悪い訳ではない。むしろ、あの僅かなやり取りで見せた反応から察するに洞察力はかなり高い部類だろう。

彼に限った話ではないが、まだこのクラスの子供たちは才能の底が見えない。勉強が出来ないから頭が悪いと思われがちなのだろうが、やはり一つの分野だけでその人間の実力を推し量るのは難しい。

「ヌルフッフ」

「……どうしたんすか、1人で笑って」

「いえ別に。君たち一人一人とどう向き合い、どう育てていこうかと考えていたらつい笑いがね」

「はあ……？ まあ、そうですね」

思わず溢れてしまった笑いに少々気味悪そうに反応した乃咲くんは私の答えに興味なさそうに返事すると英字新聞に視線を戻す。

これまでのように首を捻るのではなく、発音を試みるのでもなく、食い入るように、視線で穴が空くのではないかと思えるほどの面持ちで睨み付けるように文面を見下ろす。その姿から集中して解読にあたったのだと察することが出来た。

「読みとか意味がわからない単語があればいつでも言ってくださいね」

「……………」

掛けた言葉に対する返事はない。

「乃咲くん？」

念の為、もう一度呼びかけてみたがやはり無言。人というのは自分の名前が聞こえると無意識に反応してしまうものだ。だということに一切の反応がないあたり、無視ではなく、単純に気付いていないのだろう。

その集中力には思わず舌を巻く。人並外れた凄まじい集中力だと思ふ。

「これは将来が楽しみですねぇ」

私は頷きながら、木陰にいる杉野くんと渚くんの存在を認知する。

さて、今日も一日張り切って行きますか。

始業のベルは今日も鳴った。

3話 野球部の時間

殺せんせーがハワイから買って来た英字新聞と朝っぱらから格闘している、唐突に読んでいた新聞が吹き飛ばされるのではないかという突風が2度吹いた。

風の通り過ぎる音が止んだと同時にポスッと乾いた音が鼓膜を叩く。音のした方へ顔を向けるといつの間にもやらグローブを触手に着けた殺せんせーが何かを受け止めた所だった。

「おはようございます、杉野くん、渚くん」

「……………え!? え、え!?!」

「2人とも、さ、挨拶は大きな声で!」

「お、おはようございます、殺せんせー」

哀れ杉野、どうやら彼の魂の込められた渾身の一投はこの超生物には届かなかつたらしい。

「ボールに先生の弱点、対先生用BB弾を埋め込むアイディアは素晴らしいかった。これならエアガンと違って発砲音もない。けれど、ボールが先生に届くまであまりに暇だったし、直に触ると先生の細胞が溶けてしまうので…………ちよつと用具室までグローブを取りに行つて来ました」

あつけらかんと言う殺せんせーに絶句する。

杉野、元野球部でそれなりに自信あつただろうに、この超生物にへし折られただろう。いや、マツハ20に野球のボールを投げて当てることは結構無謀感あるけど、流石に泣いていいと思う。

つか、ずっと隣に居たのに殺せんせーの動きが全く分からなかった。精々、強い風が2回吹いたくらいしか感じなかったぞ。

「殺せるといいですねえ、卒業までに」

「……………」

杉野、完全に落ち込んでるわ。

「さ。3人とも朝のホームルームの時間ですよ」

何事もなかった見たいに受け止めたボールをグローブで器用に弄

びつつ、殺せんせーは歩き去って行く。

ところでこの新聞、まだ俺が持っていていいのだろうか？ いや、どうせ読めないんだけどさ。

完全に気落ちした杉野と彼をフォローするみたいに励ましの言葉を掛ける渚。2人の後ろを歩きながら渚に倣って一応杉野を励ましておく。

しかし、杉野の元気は結局、今日は戻らなかった。

??

??

??

「ねえ、乃咲。そう言えば今朝はどうして殺せんせーと一緒にいたの？」

「登校した時にちようど、殺せんせーがいてさ。挨拶だけしてさっさと教室に入ろうとしたら絡まれて」

放課後、帰り支度をしていると渚が声をかけて来た。どうやら朝、俺と殺せんせーが一緒にいた目新しさに興味を惹かれたらしい。

しかし、一応はあの時話したことは他言しないと約束したのでざっくり一緒に英字新聞を読むことにした経緯だけを話す。

「あー、なるほど。結構簡単に想像できるかも」

「だろ？」

渚の中でも殺せんせーは生徒に絡みたがる性分で覚えられてるらしい。俺の言葉に苦笑する彼に適当に相槌を打っておく。

「……」

「……………」

そして、訪れる無言タイム。本日2度目。

別に話す話題がない者同士、話題に一時的にでも区切りがつけば互いに無言になるのは必定。

「んじゃ、俺はこれで」

「え、あ、う、うん」

気不味くなつたので会話を切り上げる。

今朝の殺せんせーとは違い、今回は上手くいった。ここに彼が居れ

ばもつと生徒同士で交流しましょうよ、なんてダル絡みしてくるんだろうが、今は生憎とニューヨークに行ってるので不在だ。

渚からも返事が来たことだし、さっさと帰ろうと鞆を手にした刹那、今度は正面から磯貝が来た。ため息つきそうな、苦笑を浮かべて。「圭一、気不味くなったら直ぐに逃げる癖、直したほうがいいぞ」

何やら急に失敬なことを言われた。

「逃げじゃない。戦略的撤退でもない。話題がないから会話を切っただけ。ごく自然な行為だろ」

「自然じゃない、ぜんぜん自然じゃないからな。話題なら殺せんせーって特ダネがある訳だし、今度暗殺の計画と一緒に進めないか、とか会話のタネならそこら中にあるだろ」

「……渚、今日は良い天気だな」

「え、う、うん」

「天気の話ってお前……話題に困ったお見合いじゃないんだから。なんつーか、日を追うごとにコミュ力が低くなってないか、お前」

「そうか？」

「ああ、少なくとも一年の頃は友達も多かったろ。今より明るかったし、なんなら自分からアレコレ話振ってたじゃんか」

「まあ、その多かったとか言う友達とやらも俺がE組に落ちた途端に大体の奴らが掌返して、差別する側に回ったけどな」

「……………確かにそりゃあ暗くもなるか」

磯貝のポジティブな方向に導こうとする言葉をネガティブなオーラで反転させていると渚が会話に入ってこれないのか、あるいは入ってこないのか、少し意外そうに俺たちを見ていた。

「んだよ、渚。黙っちゃまって」

一応、声をかける。

「うん、なんか意外だなんて。割と話してるの見るけど、乃咲と磯貝くん仲良いんだ？」

「良くはないぞ」

「お前はまーたそんなことを言う……。ちよつとした腐れ縁といふのかな。コイツに言わせれば仲は良くないってことだけど、別に悪くも

ないぞ」

「そうなのか？」

「そうなんだよ」

「じゃあ、そういうことにしておく」

「そうしろ」

「やっぱり仲いいんだね」

否定するのも面倒なので渚の言葉は聞かなかつた事にする。磯貝が一番話してて楽なのは事実だし。

「それより2人とも。杉野の奴どうしたんだ？　なんか異様に元気ないけど」

「すごいな磯貝。よく気付くな」

「みてれば気付くだろう、普通。友達だし、クラスメイトなんだからさ」
「そういうもんか」

磯貝、良い奴だ。クラスメイト⇨仲間、仲間⇨友達みたいな考え方は素直に賞賛に値するだろう。

少なくとも俺にはない価値観だ。

「実は今朝、暗殺に失敗したんだ。それからアイツ、ずっと元気なくてね」

「だからって落ち込み過ぎだとは思うけどな。そもそも簡単に殺せれば俺たちみたいな中坊に暗殺依頼なんて来ないだろうし、誰一人として未だに触手の一本も破壊出来てないんだからさ」

「あー、そういうことか。確か杉野は元野球部だったな。確かに落ち込むというか、自信失くすよな」

磯貝も納得したらしい。一方で、話してるうちに杉野は帰り支度を済ませて帰ってしまった。

仮に居たとしてもそつとしてやったほうがいいだろう。自分の得意というか好きな分野であつさりと返り討ちにあつたんだからアイデンティティ崩壊寸前なのかもしれないし。

杉野が出て行ったであろう教室の出入り口を何気なく見ていると、見覚えのある黒スーツのガタイの良い男が部下を連れて入って来た。

「鳥間さん、こんにちは」

学級委員兼優等生筆頭の磯貝が目敏く気付いて会釈すると彼もそれに倣って会釈を返す。

ああ、なんか烏間さんってカッコいいよな。落ち着いてる雰囲気とか歩いてるだけなのに隙が見当たらない強者感とか、暗殺を依頼した相手とは言え、中坊相手でもしつかり礼を返してるところとか。

「どうだ、奴を殺す糸口は見つかりそうか？」

「無理ですよ……烏間さん。アイツ、早すぎます」

磯貝が愚痴るように烏間さんに伝えると渚もコクコクと頷いていた。確かにあのタコは早すぎる。

思えば、磯貝も渚もこのクラスの中では暗殺に積極的に挑んでいる側だ。俺みたいな暗殺に不真面目な奴よりも殺せんせーの速さを実感しているのだろう。

「烏間さん、アイツの放課後の予定知ってる？ ニューヨークまでスポーツ観戦だぜ？ マツハ20で飛んでくヤツなんて殺せねっすよ」

このクラスのイケメン2トップ、磯貝と双壁を成す、前原がくたびれた様子で投げやりに言う。

彼もまた暗殺に積極的な生徒の1人だ。

「その通り。どんな軍隊にもアイツを撃ち落とすことは不可能だ。だが、君達……正確に言えば櫛ヶ丘中学校3年E組の生徒にだけはチャンスがある。何故かヤツは君達の教師だけは欠かさないのだ」

俺たち一人一人の目を見て断言する。チャンスが俺たちにはあるのだと。

烏間さんは真摯だ。このクラスに落ちて自信喪失している連中は彼の力強く真摯な視線にやる気を出すだろう。なんなら、女子の2、3人は落ちてそうだ。

「放っておけば来年の3月には奴は必ず地球を滅ぼす。削り取られた月を見れば分かるだろう、人類は1人たりとも助からない」

—— 来年の3月。

烏間さんと殺せんせーの話を合わせて考えると、俺たちのターゲットは来年の3月が寿命。その時、地球を巻き込んで死ぬかもしれないということ。

「奴は生かしておくには危険すぎる！ 現状、この教室が奴を殺せる唯一の場所なのだ！」

額に汗を浮かべ、初対面の時と同じように殺せんせーの危険性を説く烏間さん。

そりやあ地球滅亡まで実質1年もないのだから慌てるのも当然だろう。しかもよりにもよってそのモンスターがいるのは日本ときた。もはや一国の防衛省が担うには責任が重すぎる。

烏間さん、苦労人なんだろうなあ……。

俺たちのような落ちこぼれが地球を救うヒーローになるチャンスを得た。そのチャンスを自分の好きな事でモノにしようと挑み、失敗した。

そう考えると杉野の落ち込み具合も何となくだが理解してやれるような気がした。

?? ?? ??

翌日の昼下がり、当番だったので花壇に水やりをしていると、なにやらまだ昨日の暗殺を引き摺ってるらしい杉野と遭遇した。

校庭に繋がる石階段に腰掛けて俯き、ため息を吐いているその姿は哀愁を誘う。

「……」

別に放っておいても良いのだが、一応は同じクラスのよしみだし、愚痴くらいは聞いてやるか。

「………となり、いいか」

「乃咲……？ 勝手に座れよ」

ジヨウ口を階段の下に置き、杉野の隣に座る。

「……」

「………」

まさかの無言タイム突入。

おつかしいな、漫画とかだと愚痴を聞いて欲しそうな奴の隣に座ると聞きもしないのに勝手に語り始める展開が多いのに。

これはアレか？ 俺からアクション起こした方がいいか？ でもどうやって？ なんて話しかければいいのん？ 自慢じゃないが俺はコミュニケーションぞ？

「……はあ」

ため息を吐く杉野。このため息はどっちだ？ 俺との無言の時間が気不味いのか、それとも暗殺失敗の件なのか。どちらにしてもなにか言った方がいいよな？

しかし、なにか言ってみようとしても口からは何も言葉が出てこない。

諦めて、立ち去ろうと思ったその時、救いの手ならぬ、救いの触手が差し出された。

「ボール、磨いておきましたよ。杉野くん」

殺せんせーが俺と杉野の間からハンカチで包んだ、昨日の対先生弾が埋め込まれたボールを差し出す。

そのタイミングの良さに思わず感心すると同時にバキッ！ ゴシヤア！ と脆い木原の床を踏み抜くような破壊音が背後から聞こえた。

「殺せんせー、何食ってんの、それ」

一足早く振り向いていた杉野が聞く。

「昨日ハワイに行った時に買っておいたヤシの身です。食べますか？」

「……ヤシの実は普通飲むだろ」

「気が合うな、乃咲に同意」

思わず呟くと杉野が同意して来た。

あれ？ 思えば杉野と二言以上言葉を交わすまともな会話したのって今日が初じゃね？

「昨日の暗殺は良い球でしたねえ」

俺と挟むようにして杉野の隣に殺せんせーも腰を下ろす。

腰を下ろしたのは良いが、徐に開かれた口から飛び出して来たのは、必殺の一球が届かずに落ち込んでる奴からすると皮肉とも取れる一言だった。

「よく言うぜ。掠りもしなかった癖に。でも、まあ、考えてみりやあ、俺の球速でマツハ20に当てられる訳なかったわ」

「君は野球部に？」

「前はね」

「前は？」

あ、会話続いている。

もしかして俺の心配しすぎ？ 取り越し苦労なの？ 実はそこま
で気を使う必要ってないのかな？

此方の心配をよそに会話を続ける杉野とせんせー。杉野も話出したことだし、ここは一旦、2人の聞き手に回って空気に徹しよう。

「E組は部活禁止なんだ。成績悪くて特別強化クラスに落とされたんだから、とにかく勉強に集中しろってさ」

「それはまた、随分な差別ですね」

「……でも、別にいいんだ。理屈としては先生たちの言ってることのが正しいし、昨日、見たろ？ 俺の球は遅いんだ」

「……………」

杉野の球、ねえ。そんなに遅いのかな？ 昨日の投球を見てなかったからさっぱり分からないけど。

「遅いからバカスカ打たれまくってさ。対戦相手にも、身内にも。そんでレギュラー降ろされて、それから勉強にもやる気なくして、気が付けばエンドのE組さ」

自虐気味に言って自重する様な笑みを浮かべる杉野。

また落ち込み始めたぞ、と思っていると殺せんせーと目が合った。

「乃咲くん」

「はい？」

「今の杉野くんの話を聞いて、何か思ったことはありませんか？」

聞く相手間違ってるぞ。クラスメイトの名前すら全員分を覚えてないのに、そんな他人の話を聞いてアドバイスをするなんて神業出来るわけ訳ないだろう？

そもそも、杉野が野球してるところすら俺は見ることがないのだから、『お前ならやれるって、諦めんなよ』なんて台詞も吐く気にはなら

ないし、一つのことには挫折してやる気を失くす気持ちなんてのは痛いほど理解できる。

けどまあ、話を聞いて思ったことは……。

「杉野の持ち球ってストリート?」

「え? ああ。ストリートでメジャーに行った選手が居てさ。その人に憧れてんだ、俺」

「ふーん? まあ、そもそも俺は野球自体詳しくないから、別にメジャーどころには興味ないけど、ストリートが遅いってだけなら別の球種使えば良いんじゃないの? カーブとか、フォークとか変化球があるんだろ? 野球に変化球は試合に何球まで、みたいな回数制限があるなら話は別だけど」

「いや、そんなルールはないけどさ」

「なら別にストリートに拘る必要もないんじゃないの? 野球が好き、野球が好きだからメジャーに行った選手に憧れた。その選手に憧れて始めたならまだしも、ただ野球が好きだから強くなりたかったら変化球とかに手を出せば良いのになって、話を聞いてて思ったかな」

野球のルールを知らない俺に呆れたような顔をする杉野に今の話を聞いた感想を語る。

仮に杉野が『俺はストリートしか投げねえ!』とかそんなプライドを持っていてのなら俺の言葉は少々、性急か言葉足らずだったかもしれない。

「ヌルフッフ、良い着眼点です。乃咲くん」

しかし、殺せんせーは満足そうに笑っていた。何故だか、やたらと触手をヌルヌル動かしながら。

「杉野くん。先生から一つ、アドバイスをあげましょう」

「……え?」

次の瞬間、俺は出来れば女の子で見たかった光景を見るハメになっ

た。?? ??

??

課題提出の為に殺せんせーを探して校舎の中を右往左往していると、窓の外に異様な光景を見た。

杉野と殺せんせーが校庭に繋がる石階段に座っていた。別にそれだけなら異様でも何でもない。単純に昨日の暗殺について絡まれているのだと想像が出来るから。不思議なのはそこにもう1人、このクラスの問題児がいること。

乃咲圭一。素行不良と成績不振でE組へ落ちたと公言して憚らない男子。僕らの学年でE組に落ちた最初の同級生。テストの順位もずっと最下位だとか。

成績不振が続き、何が原因かは聞いていないが、前のクラスの担任を殴ったことが最後の1押しになってE組に来たと言う話は有名だ。その所為か、彼は一部の少数を除いて男女問わずにあからさまではないけれど避けられている。

そんな彼がどうしてあの2人と？

乃咲は特別親しい誰かがいる訳ではない。磯貝くんとかとは仲が良さそうだし、実際一緒にいる印象はあるけれど、好き好んで誰かと一緒にいるような印象はこれっぽっちもなかった。

殺せんせーが杉野に絡んでいるのと、乃咲がいたことが気になって靴を履き替えて3人の元に向かうと、窓から覗き見た光景よりも更に異様な事になっていた。

「んんんううう——！んん——！！」

「ヌルフッフ……」

「女子で見たかったなあ、これ」

空高く突き上げられた触手、その触手に絡まれ、蹂躪されて言葉にならない悲鳴を上げる杉野、普段の周りに興味無さそうな姿からは想像できないアブノーマルな趣向の片鱗を見せている乃咲。

「なに、この状況……」

困惑の余りにつぶやくと乃咲が僕に気付く。

「……渚もありだな」

「何の話っ!!？」

乃咲の視線に身の危険を感じた僕は彼から逃れる様に殺せんせーに声をかける。

「何やってんだよ、殺せんせー!? 生徒に危害を加えるのは禁止なんじゃないの!?!」

「危害? とんでもない」

「いや、一部始終見てた俺からしても危害にしか見えないぞ。杉野の過去話聞いてたら急に杉野の受けて触手プレイが始まって俺は混乱しています」

「乃咲くん? 中学生のうちからそんなアブノーマルなプレイを望むのはよろしくないですよ。マンネリを招きます」

「いや、マンネリ以前に相手もいないというか、そもそもする気もないし、というか現在進行形で触手プレイしてる奴に言われたかないわ!」

あ、乃咲が声を上げてツツコミ入れた。

なんかレアな光景。

「さてと、杉野くん。アドバイスに戻りましょうか。昨日のピッチングで見せたあの独特なフォームはメジャーに行つた有田投手をマネていますね?」

「っ!?!」

殺せんせーの指摘に触手を噛みちぎろうと試みていた杉野の目が一杯に開かれる。

凶星だつたんだろう。彼の身体から触手に対抗しようとしていた力が抜けるのが分かった。

「でもね、触手は正直です。彼の肩の筋肉と比べて君の筋肉は配列が悪い。マネをしても彼のような豪速球は投げられないでしょう」

「……………」

「随分とバツサリ言うね、せんせー」

「ええ。事実ですから」

淡々と話す殺せんせーと乃咲。そしてはつきりと断言されてしまったことでショックを隠し切れていない杉野。

腹が立った。友達が傷付けられたから? それもあるかも知れな

いけど、なによりも殺せんせーから出た決め付けの言葉が頭に来た僕は反射的に怒鳴っていた。

「なんで先生にそんな断言が出来るんだよ!? 僕らがE組だから!」
「……………」

E組と言う言葉に俯く杉野。

僕らにとつてE組という肩書きは疎ましいものだった。劣等生の象徴で、レベルが低い事の証明。柵ヶ丘中学校という世界における絶対的な弱者の称号。

先生からの言葉にE組なんて単語は入っていなかったけれど、言葉の裏に思わず見ようとしてしまった。どうせ、この先生も僕らを落ちこぼれとしてしか見ていないんだ、と。

「先生が断言できる理由…………それはね、渚くん」

勿体ぶるように触手で服の中を弄ると愛読している英字新聞を僕らに見せつけながら殺せんせーは言った。

「昨日、本人に確かめて来ましたから」

(（確かめたんならしようがない!!))

僕と杉野、そして乃咲の心の声が今までに無いくらいピツタリと重なった気がする。

「ついでにサインも貰いましたあ……………」

新聞の後ろから出て来た色紙には震えて筆跡の安定しない文字で一言、『ふざけんな触手!!』と書き殴られていた。

「その状態でサイン頼んだのか!」

「そりゃあ怒るよ!」

殺せんせーへの怒りは何処へやら。更に落ち込んでツツコミどころじゃなくなった杉野に代わってツツコミ入れてる乃咲と連携する。

乃咲って接してみると思った以上に悪い奴では無いのかもしれない。

「そっか、やっぱり才能が違うんだな…………」

諦めたように呟く杉野。そんな彼の手首を触手が優しく包んだ。

「ええ。確かにキミと有田投手の才能には違いがあるし、差もあります。ですがね、人には向き不向きがあるものです。キミの肩の筋肉は

彼に劣る。ですが、肘や手首の柔らかさはキミの方が素晴らしい。鍛えれば彼を大きく上回れるでしょう」

「……肘や手首は俺の方が……」

「才能の種類は一つじゃない。君たちはそれぞれが自分だけの異なる才能を持っています。それは美的感覚だったり、筋肉のしなやかさ、筋肉の質、継続する努力、並外れた集中力、広い視野や観察力だったりします。キミ達の才能に合った暗殺を探して下さい」

殺せんせーは僕達一人一人と目を合わせると杉野の背中を押すように肩を触手でポンと軽く叩くとそのまま教室の方へと歩き出した。「俺の才能か……」

杉野の顔はさっきまでとは比較できないくらいに明るくなっていた。

しかし、一方で去ろうとする殺せんせーの背中に乃咲が言葉を投げる。

「なあ、殺せんせー。俺たちに合った才能で殺しに来てって言ったけど、アンタにとって最も才能ある殺し屋ってどんな奴？」

乃咲の問いは僕らにとって興味深いものだった。

もつとも才能のある殺し屋がどんな人物なのか、それは僕らにとっても他人事では無い。目の前のターゲットの賞金は100億円。予想しなかった優秀な殺し屋が雇われて、チャンスを掠め取られる可能性だってゼロじゃない。

殺せんせーは振り返り、顎のあたりを触手でなぞると思案顔で口を開く。

「ふむ、そうですね。この問いに対する答えは複数存在します。自分の長所を正しく理解し一つの得意分野を極めた殺し屋は厄介です。そういう手合いは得意分野に置いて比肩する相手がない程にレベルが高い」

「つまりは今、俺たちに言った『才能に合った暗殺』を極めた奴って何か」

「その通り。ですがね、先生はこうも考えています。優れた殺し屋は万に通ずと」

「なんでも出来る奴が結局が一番凄いのか」

「そこは難しいところですよ。中途半端に全てを極めようとする器用貧乏になってしまう。一つに特化した殺し屋と能力比べをしたら劣る部分はあるでしょう。ですが、万に通じた殺し屋の武器はその選択肢の多さにある。それは何故だと思いますか？」

殺せんせーからの問いかけは質問した乃咲だけでなく、僕らにも向けられているのが分かった。

一瞬、答えようとしたが、答えがまとまらない。けれどこのクラスの問題児の1人はパツと答えてみせた。

「暗殺に失敗したとき、切れるカードが多いからだ。素手での暗殺しか極めてない奴と色んな殺し方を知ってる奴が同じ条件で失敗した時。例えば首を絞めて殺そうとした場合、失敗して、なおかつターゲットの走力が自分よりも高ければ前者だとそのまま逃げられてしまう」

「ほうほう」

「けど、手広く技能を習得してる殺し屋なら咄嗟に取れる行動が増えるし、付け焼き刃でないから成功率も高い。銃を持っているなら射撃、石が落ちてるなら投石。事前準備可能なら、コミユ力が優れてる場合だと考えられるターゲットの逃走経路に仲間を配置したりとか、人の流れをコントロールしたりとか」

僕らが解答に困った問いかけを何でもない見たいにすらすらと答えて見せた乃咲に驚く。

殺せんせーも満足そうに頷いて顔を朱色に染めると二重丸を顔に浮かべて触手を使って大きな丸を体でやや大袈裟に描いた。

「その通り！ 慧眼ですね、乃咲くん」

「だいぶ考えましたけどね」

謙遜だと思った。事実、彼は問われてからほぼノータイムで答えている。けれど殺せんせーは彼の態度を気に留めず、口を続けて開く。「先生としては皆さんには是非、その領域を目指して欲しい。一番自信のある武器が通用しなかった時に咄嗟に使える第二の刃をね」

先生は一言、『期待していますよ』と残すと今度こそ去って行った。

僕は乃咲と杉野を残して彼を追う。言いたい事と、そもそも課題を提出する為に探していたのだから。

「殺せんせー!」

呼び止めるとゆっくりと振り返る。

いつもの三日月の様な口と黄色い身体が視界に移る。これまではこの顔が何を思っているのか分からなかった。何を考えてるのかも。ただ、杉野へのアドバイスを聞いて思った。この人は本校舎の先生たちとは違うんじゃないかって。期待が胸の中で大きくなっていることに気付いた。

「もしかして杉野にアドバイスを上げる為にニューヨークに?」

「ええ、当然です。先生ですから」

大したことでも無さそうに肯定される。

「なんでそこまでしてくれるの? 普通、そこまでしてくれる先生なんていないよ。ましてこれから地球を消滅させる殺せんせーが」

こつちの問い掛けに殺せんせーは少しだけ遠い目をする。そのまま数拍子空けてポツリと彼が教師になった理由を短く溢した。

「先生はね、渚くん。ある人との約束を果たす為に先生になりました」

ある人? と気になりはしたが、今は答えてくれないだろう。僕は黙って言葉の続きに耳を傾ける。

「確かに私は地球を破壊しますが、その前にキミたちの先生です。キミたち生徒と真剣に向き合うことは……地球の終わりよりも重要なのです」

言葉を終わると同時にいつの間にか採点が終わった課題のノートが殺せんせーの触手に握られていた。

差し出されたそのノートを受け取り、何となく開いてみると、そこには変な問題が書き出されていた。

恐らくは水面であろう場所から生えたタコかイカの触手。その先に飾られた一つのリボン。『この触手がいまいち萌えない理由を英語で述べよ』

「殺せんせー。採点速度を誇示するのは分かるけど変な問題を書き足すのやめてくんない?」

「にゅやあつ!? ボーナズ感あつて喜ぶかと思つて……!」

「むしろペナルティーだよ」

僕の一言に分かりやすく肩を落とすと一瞬で気を取り直し、持っていたボールペンを触手で器用に回すと、そのままペンを口に運んでバリバリと齧り出した。

「ゴホン、そんな訳で。キミたちも生徒と暗殺を真剣に楽しんで下さい。まあ……暗殺の方は無理と決まっていますがねえ」

ペンを噛み砕いてムシヤムシヤと食べながら不敵な笑いを浮かべる殺せんせー。

彼を見て僕は思った。超スピードと万能な触手を備えているこの先生を正直殺せる気がしない。

殺せる気はしないけど、この人は僕らを真つ直ぐに見てくれて、殺意すらも受け止めてくれそうだと。

?? ?? ??

殺せんせーと杉野の触手プレイを見た翌日。俺は何故だか杉野に野球の練習に誘われ、バットを握り締めて校庭に立つていた。

「行くぞ、乃咲いー!」

砂を蹴り払って書いたピッチャーマウンドの上で元気よく叫ぶ杉野。俺の後ろでしやがみ、グローブを手にはめて『いつでも良いよ!』と声を出す渚。

「せえいー!」

気合いの入った声と共に振られる杉野の腕。そこから放たれたボールは真つ直ぐに飛んで来た。

真つ直ぐに飛んで来たボールは急激にコースを変え、構えていたバットの下を通り抜けようとする。

けれど、軌道は見えていたのでバットを振り抜いて球を打ち返す。

「す、凄いや2人とも……!」 杉野の球は消えるみたいに変化したし、乃咲もよく反応できたね!」

「へへ、ストレートが遅くても変化球と混ぜれば球速も誤魔化せるだ

ろうしな。肘と手首を活かした球を習得中よ！ まあ、アイツにとつちや欠伸が出るような球だろうし、人間に打ち返される様じやまだまだなんだろうけどさ」

あつけらかんと笑う杉野。

「凄いなお前、あんなに落ち込んでたのに」

思わず感想を溢す。

一昨日、昨日と見てられないレベルで落ち込んでいた癖に先生のアドバイス一つでこの元気とやる気。正直、何が彼をこんな風に立ち直らせたのか。

「ま、俺は野球が好きで野球バカだからな。落ち込んでるくらいなら練習して上手くなれる様に頑張った方がらしいって思ったのよー」

拾い上げたボールを手に握ったグローブに軽く投げつつ、爽やかに笑った杉野が眩しく見えたのは、似たような挫折をした時に俺が立ち直れなかったからだろうか。

「乃咲もありがとな。昨日は愚痴聞いてくれようとしてたんだろ？」

「え、あ、うん」

「意外といい奴だよな、お前。また練習に付き合ってくれよ、野球知らないんだろ？ 教えてやつからさー！」

どうやら昨日の俺なりの気遣いは受け止められていたらしい。そうならば柄でもないことをした甲斐があつたのかも。

「殺せんせー！ 殺したいんだけど来てくんない？」

「ヌルフッフッフ、凝りませんねえ」

自分の中の何かが殺せんせーに期待を抱いていることに気付いた。

4話 サービスの時間

「乃咲く、ちよつと殺せんせー殺しに行こうと思うんだけどさ、お前も付き合えよ」

「な、うまい棒買ってやるから」

「……別に構わんぞ」

ちよつと殺しに行くとか言うとんでもないパワーワードにも慣れ始めた今日この頃、磯貝と前原に誘われて3時のおやつにしようとか校舎裏でかき氷を作っていた我らが担任の元へ向かった。

「あ、乃咲もやるの?」

「へえ、珍しい」

殺せんせー手前の林には他のクラスメイトが息を殺して潜んでいた。

磯貝、前原、渚、杉野、菅谷、木村、岡島、茅野、片岡、岡野、矢田、倉橋。この暗殺教室でも特に暗殺に積極的なメンツが揃っていた。

「コイツ、身体能力はめっちゃめっちゃ高いからさ。居てくれた方が成功率高いだろうから連れて来た」

「前原がうまい棒買ってくれて言うって言うから」

「うまい棒で買収されんのかよ!?!」

「美味いだろ、チーズと明太子」

「まあ、確かに」

会話、事務的な会話。俺たちの間に友情なんてもものはない。あるのは暗殺仲間として一応のコミュニケーションを交わそうと言う意志だけ。

相手を理解しようだなんて気概は一切ない。ただ必要だから言葉を交わしているだけだ。

自分に言い聞かせながら話が脱線する前に本題に移る。

「ターゲットは?」

「殺せんせーならあそこ。北極の氷でかき氷だとさ」

「コンビニ感覚で北極行くなよ、あのタコ……」

「そもそも、北極の氷って食えるのか？ 北極由来の細菌だとか、氷漬けになってる未知のウイルスとか居そう」

「まあ雑談はここまでにして……行くぞ。100億はみんな山分けだ！」

「おう！」

磯貝の音頭に頷いた面々が茂みから飛び出したので、俺も彼らに続いて飛び出す。

そういえば俺、作戦とか聞かされてないんだけど。どんな風に動けばいいの？

「殺せんせー！ 俺らにもかき氷食わせてよー！」

「殺せんせー！」

「あははははは！」

マジか、そう行くか。めっちゃくちゃ人懐っこそうな声と表情でナイフ片手に突撃する面々にドン引き。

流石に怖い。懐いてるフリして懐に入ったらナイフズドンとかやっぱり世の中で一番恐ろしいのは幽霊とかUMAでもなく生きる人間なんだろう。

「おお！ 生徒達がようやく心を開いてくれた……！ あんなにも笑顔で……こんなにも殺気立って!?!」

哀れ、殺せんせー。嬉しそうな声色が一変し、半ば悲鳴の様な物に変わると同時に逃げ出した。

正面だけでなく、数名が殺せんせーの背後に回り込んでいたので、彼の逃げる先は上空だとあたりを付けてナイフを投げてみる。

「どひゃあつ!?! ちょっと乃咲くん、人に物投げたら危ないでしょう!?! 親からどんな教育受けてるんですかあ!?!」

「生憎と親から教育を受けた覚えなんてないもんでね！」

案の定、躲されたのでエアガンを構える。

殺せんせーの動きをまだ追おうとするが、流石に音速を出せるモニターは見切れない。

「ヌルフッフ、甘い、甘いですよ、乃咲くん。投擲までは良かったので

すが、銃を構えてから撃つまでに迷いが多すぎる」

背後からした声と手の中にある違和感。手の中に目を向けるとそこにはエアガンの姿はなく、代わりに春先に校舎の花壇に植えたチューリップが握らされていた。

「皆さんも。笑顔が不自然すぎます。ここは、こんなに危ない先生ナイフは置いておいて、まずは花でも愛でて良い笑顔を学んで下さい」
殺せんせーの触手から落とされる、白いハンカチに包まれた皆んなの対先生ナイフ。

「はい、乃咲くん」

「あ、ども」

手渡される俺のエアガン。これは落としたりすると破損してしまうかもしれないという殺せんせーの配慮なんだろうか？

自分を殺すかもしれない武器を相手に返すかね、普通。俺だったら返さないし、そもそもエアガンだからって素手では持たない。これに对先生物質とか塗られてたらどうするんだか。

だなんて思っていると磯貝と双璧を成す、我らのクラス委員の片岡が手に持っていたチューリップの正体に気付いたらしい。

「……………ん？ ちょっと殺せんせー！ これ、花壇に植えて、クラスの皆んなで育ててたチューリップじゃないですか!？」

「にゅやあ!?! そ、そうなんですかあ!?!」

ブチ切れる片岡と狼狽する殺せんせー。そんな彼に追い打ちをかける様に女子達が嘘泣きを始めた。

「酷い……………、殺せんせー。皆んなで大切に育ててやっと咲いたのに……………」

矢田の渾身の泣き真似。俺がこんな嘘泣きされたら多分メンタルボロボロになるし、その場で土下座しちゃうかもしれない。

うん、女子は信用できないと俺は今、新たに学んだ。なんだかんだ、本気で泣いてるのか、嘘泣きなのかは判断に困るところである。

「すみません!? い、いま新しい球根を……………買って来ましたあ!」

しかし、流石の殺せんせー。ナイسفオローというか、自分で掘った穴を自分で埋めてるだけと言うか、矢田たちの嘘泣きを見ると同時

に謝罪しながら新しい球根を触手いっぱい買って来た。

けれどここで最も驚くべきなのはマツハで球根を仕入れて来た殺せんせーではなく、殺せんせーの対応をしたであろう花屋の店員である。殺せんせーが消えて戻って来るまで3秒と経ってない。

つい数秒前、この日本の何処かでとんでもない神業的接客をしたであろう花屋の店員に俺は内心で生まれて初めて心からの賞賛を送った。

「マツハで植えちゃダメだかんね！」

「承知しましたあっ！」

「ほら！ もっと一個一個労って！」

「かしこまりましたあっ！」

「……なあ、アイツ。地球壊すモンスターなんだよな」

「ああ。その割にチューリップ植えてるけど」

片岡と岡野が殺せんせーを叱りつけながらチューリップの球根を植えさせ、そんな景色に磯貝と前原が呆れるように呟き、寺坂と村松に吉田と狭間のグループは舌打ちしながら去って行く。

俺もここについても別に何が出来なくてもないだろうと思い、寺坂たちに倣ってこの場を離れようとするが、ふと、熱心にメモを取っている渚に気付いた。

なんとなく気になったので彼の元に行くと、途中で俺と同じことが気になったらしい茅野と杉野も合流した。

「渚、なにメモってるの？」

「あ、茅野と乃咲。うん。殺せんせーの弱点をメモってたんだ。いつか、暗殺の役に立つと思って」

そう言いながらメモ帳を差し出して来たので受け取り、3人で覗き込む。

「えっと、身長は背伸びしたら3mくらい。特技は超音速巡航……」

「弱点①、カッコつけるとボロが出る」

「……ねえ、渚。このメモ役に立つのかな」

「……………たぶん」

渚の自信なきげな声が哀愁を誘った。

?? ?? ??

柵ヶ丘中学校3―Eは恐らくは史上かつてない程に活気で溢れていた。

「おい、早くしないとボーナスタイム終わっちゃうぞ!」

「はいはい、わあつてるよ。茅野、持ってやるから半分こっちによこせ」

「うん、ごめん、お願い!」

俺は先頭を走る岡島とその少し後ろで持ち辛そうに長めの棒を抱えている茅野と並走しながら旧校舎を目指していた。

実は殺せんせーがチューリップを勝手に刈ってしまったお詫びにハンデイキヤップ暗殺大会なるイベントが開かれているからである。「急げ!」

ひたすらに急ぐ岡島。その後ろを走っていると普段、俺らや殺せんせーしか使わない筈の旧校舎正門から黒スーツを来た屈強な漢が歩いて来た。言わずもがな、烏間さんである。

「あ、烏間さん。こんにちは」

「お久しぶりです」

「ああ、2人とも。こんにちは」

この堂々とした佇まい。かっこいいよなあ。こんな大人になりたもんだが……無理か、地球滅亡なんて馬鹿げたイベントが一年以内にあるわけだし。

「明日から俺も教師として君達を手伝うことになった。これからよろしく頼む」

「マジスカ。よろしくお願いします」

「そっか、じゃあこれからは烏間先生だ!」

おお、防衛省所属の人が直々に教師をやってくれるとかとんでもないレアケースに当たったな。

「時にどうだ? 奴の暗殺については。姿が見えないが……」

「あー……それがさ、殺せんせー、クラスの花壇を荒らしちゃって。そ

のお詫びとしてね……」

茅野は校舎の脇に一本だけ植えられている柵を指差した。正確に
いえば柵の木の結構太い枝にロープで巻かれて吊るされた殺せん
せーを。

「ハンディキャップ暗殺大会を開催してるの」

茅野の苦笑が向けられる先ではロープで吊るされてるとは思えな
い程に過敏かつ力強く動き回るミノムシ……もとい、殺せんせーが元
気よく教え子達を煽っていた。

煽られてる方もなんだかんだ楽しそうにエアガンを撃つたり、長棒
の先にナイフを括り付けた簡易的な槍で突いたりと、攻撃を仕掛けて
いる。

「これはもはや暗殺と呼べるのか……!」

拳を握り締めてプルプルと震えている烏間先生の言葉に心の底か
ら同意する。

暗殺の定義がこの教室では歪みつつあるし。

「どう? 渚」

「う、うん……完全にナメられてる」

殺せんせーのしましま模様の顔を見て呟く渚。

しかし、俺はここでさつき何気なく見た渚の弱点メモの存在を思い
出した。

「渚、たしか殺せんせーはカツコつけるとボロが出るんだったよな」

「うん……」

メモを見ながら頷く渚から視線を外し、殺せんせーを見る。なにか
ボロが出る前兆のようなものは無いかと注意深く彼の周りを見ると、
木の枝に亀裂が入り始めているのに気が付いた。

「ヌルフッフフ、無駄ですねえ。E組の諸君。このハンデを物ともし
ないスピードの差! 君たちが私を殺すなど夢のまた——」

全部言い合える前に枝がミシミシ言い出した。

そろそろ枝が限界を迎えたのだと察した俺は何となく、ダメもとで
ハンドガンを構え、落下軌道を読み、1発だけ撃ってみる。

「あつ……」

撃つよりもほんの少しだけ早く枝が折れた。

枝が折れると同時に放たれた弾丸は風に煽られて軌道を変えることなく真つ直ぐに飛んで行き……………。

「……………にやあ!?!」

殺せんせーの触手の一本に命中。パンっ! と触手の弾ける音が俺たちの耳に入るのは彼がボトッと地面に落下するのとはほぼ同時だった。

「嘘……………」

「殺せんせーにダメージを与えられた?」

クラスメイトたちの視線がこつちに向く。

殺せんせーは殺せんせーで分かりやすく冷や汗をかいて何とかこの場から逃げようと躡いているのが俺から見えたので少し悩んだ後、呆気にとられるみんなの尻を叩くように殺せんせーを指差して叫ぶ。

「今だ殺れええ!」

「け、圭一に続けえええ!」

磯貝が俺の声にハツとすると、皆に指示を出して地面に落ちた黄色いタコ相手に攻撃を加え出した。

「にゅやあっ!?! しまったあっ!?!」

「死ねゴラあああ!」

「ひいひいひいっ! お助けええ!!」

少し先でぎやーぎやーと騒ぎ出したみんなを遠巻きに眺めながらポカンとしてる渚の肩を叩く。

「弱点メモ、役に立つかもな」

「う、うん! 見つけたらどんどん書いてこう!」

こうして殺せんせーの弱点メモは日々追加されて行くことが決まり、今日、この瞬間、新たに弱点メモ②『テンパるのが意外と早い』が追記された。

「と、まあ。暗殺はこんな感じです。烏間先生」

もはや暗殺と呼べるのか分からない作戦と、定期的にやらかす殺せんせーのドジ。俺たちの穴だらけの作戦に殺せんせーが勝手にドジ踏んで勝手にピンチになったりするのが現状だと烏間先生に伝える。

「……思った以上に望みはあるのかもしれないな。まさか最低限の訓練しか受けていないと言うのに奴の触手を破壊するとは……」

「あ、それ。私も思った。殺せんせーの触手が壊れたのって来たばかりの頃に対先生BB弾の効果を証明する時以来じゃない？」

「うん。殺せんせーが明確にダメージを受けたのは今回が初めて」
「もしかして俺ってば結構凄い事した？」

どさくさに紛れたらたまたま殺せんせーの触手を破壊出来ただけなのに、烏間先生たちに持ち上げられたので少し調子に乗ってみる。

「ああ。どんな特殊部隊でも奴に指一本触れることすら叶わなかったことを考えると、今のはとんでもない快挙と言える」

まじか。烏間先生が真顔で肯定して来るもんだからもっと調子に乗っちゃうぞ、俺。

まあ、確かに、今やったことを文章化するなら『地球破壊を企む、最高速度マッハ20を誇るタコ型超生物の触手をただの中学生が破壊した』となる。

字面だけ見るとなんだか本当に凄いことをしている気分になるものだ。

「これまで奴の触手一本すら破壊出来た者はいない。希望は見えて来た」

……なんだろう、烏間先生の言葉が引つかかる。

触手の一本すら破壊した者はいないって、どういう意味なんだろう？

そういえば以前に考えた事がある。対先生用のナイフやBB弾はどうやって開発したのだろう？ と。

殺せんせーに有効だと判断されたからこれらの物資が支給された訳だが、そもそもどうやって、何をもって有効であるとしたのか。

彼の細胞を殺せるか実験したのか？ その細胞は殺せんせーから提供された？ いや、実験段階で殺せんせー本人を使って確認した可能性もあるが、可能性は低いだろうし……。

「……ふむむ」

殺せんせー達がドタバタしてる少し横、切り離されてピクリとも動

かなくなつた触手を見ると、それはどんどん収縮してゆき、最後には蒸発したかのように跡形もなく消えてしまった。

つまり、殺せんせーから切り離された、あるいは死んでしまった細胞は形を保てないのだろう。

仮に殺せんせーから細胞の提供があつたとしても、初見の化け物の細胞を対抗兵器の完成と実験が出来るまで保存してられるものか？

俺は難しい、もしくは出来ないと思うのだが……。

いかんせん、確認の手段がない。烏間先生に聞いてみるのも手だが、これも国家機密だったり、あるいは知ってはいけない類の情報だったりした時、後が怖い。

殺せんせーも答えてくれるかはわからない。

うん、今回の想像は胸の内になってしまうとおこう。

とりあえず今のところは、殺せんせーの触手を暗殺の中で破壊した者は俺が初。そんな解釈に留めておいた方が精神衛生上は良さそうだ。

「ええい！ 少年ジャアアアンプウウウ！」

「あ、逃げた!？」

「くそっ！ あと少しだったのに！」

縄と触手が絡まって脱出に手こずっていた殺せんせーは何とか難を脱したようで、いつの間にか再生した触手を揺らしながら、ヤケクソ気味に校舎の上で叫んでいた。

「ここまででは来れないでしょう!? 君達とは基本性能が違うんですよっ！ バーカ、バーカ！ ノールフフフフ！」

「煽り方大人気がねえ！」

うん。前原の言う通り、大人気ないな。

屋根の上でひとしきり俺たちを煽り倒して満足したのか息をぜーハーぜーハー言いながら整える大人気ない大人は呼吸も落ち着くと額に流れる汗を拭いながら言い捨てた。

「ふう……。明日出す宿題の量を2倍、乃咲くんは3倍にします」

「器が小せえ!!!」

「つか、私怨入ってるし」

「それではまた明日っ！」

「あ、逃げた」

最後まで大人気ない大人は尻尾を巻いて逃げてしまった。流石に空中、それもマツハ20で逃げる奴を追う手段も攻撃する術もないので、ハンディキャップ暗殺大会は幕を閉じた。

「逃げられたけど、これまでで一番手応えあったよな?！」

「ああ! この調子ならいつか絶対に殺すチャンス来るぜ!!」

「やーん、殺せたら100億円何に使おう!」

結果的に失敗したけど、皆んな、手応えを感じられたらしく、それぞれが今後の作戦や成功した時に叶えたい夢なんかを語っている。

そんな彼らを遠巻きに見ていた烏間先生がなにか複雑そうな顔をしていた。

「どうかしましたか」

「……いや、この校舎の生徒達は活き活きしてるな、と思ったただけだ。さつきまで本校舎の理事長の所に赴任の挨拶に行っていたのだが、道中ですれ違う生徒達はどうにも必死が過ぎている印象が強かった」

「んー、まあ、本校舎の連中とかこのE組内でも一部の連中を除けば隔離校舎は地獄そのものだろうし、地獄に落ちたくないから必死こいて努力する。烏間先生が見たのはその一端だと思いますよ」

「一部の、というと。この教室の方が居心地がいいと思う者も中にはいるのか?」

「努力しても無駄とか悟ってる奴はここの方が居心地いいでしょう。大体の奴は挫折してる訳ですからね。例えば、差別受けるのは嫌だけど、結果を出す必要がないのが楽って奴。寺坂なんかは居心地の良さを感じてたんじゃないですか」

事実、この校舎の方が居心地が良いと思う奴はいる。寺坂以外にも。

E組にいる大体の奴がここに来ると同時に挫折してるし、立ち直れてない奴は多い。

そして、そんな挫折してる連中は周りからのプレッシャーが大きい

かったりする。重過ぎる期待に応えられずにE組に落ちて来たのだから挫折は当然だ。

けれど、心のどこかで思っているだろう。『自分はE組なんだから、他人に劣ってしかたない』と。

そうでなければ『だって俺はエンドのE組だし』なんてセリフが出て来るはずがないのだ。この隔離校舎から一刻も早く脱出したいなら、自嘲してる暇なんてないのだから。

エンドなんだと言いながら、なんだかんだで殆どの奴が笑っているのが、E組から抜け出すのを諦めている証拠と言える。

「キミは……」

「乃咲です。乃咲圭一」

そう言えば鳥間先生に直接名乗った事がなかったのでこの場を借りて名乗っておく。

すると顎に手を当てながら、なにかピンと来たのかゆっくりと口を開いた。

「乃咲というと、あの乃咲新一博士の？」

「ええ、息子です」

「そうか、キミが」

「なんかありそうな反応ですね。俺って防衛省にマークでもされてるんですか？」

「いや、そんなことはない。ただ、暗殺を依頼する前にここ3年E組の生徒本人と周辺人物について調べていた。その中にキミの親御さんとして遺伝子工学の権威としても特に名高い乃咲博士の名前があったので印象深かったんだ」

その印象深いつてのは、あの傑物の息子がこんな落ちこぼれなのか、と落胆したって意味ですか？ と口から出かけた言葉を飲み込む。

鳥間先生はそこまで言っただけでいい。言っただけでいいけど、つい突っかかってしまいそうになる。俺にとって父はそう言う存在だったから。

昔から事あるごとに優秀な父と比較される。

『あの乃咲先生のゴ子息ならこれくらいはできて当たり前』『お父さんみたいに立派な人になろうねえ』『あの優秀な父親と違ってお前は——』などなど散々言われて来たから。

俺にとつて父は目の上のたんこぶでしかない。

その父も優劣に関わらず俺に無関心だし。

「キミはどうなんだ？ 隔離校舎は」

「居心地いいですよ。ここにいる奴は誰にも見られない。ただ等しく劣等生としてしか扱われない。必要以上の期待を受けることもないし、居心地が良かった。厳密に言えば、居心地が良いと言うより、楽つてのがニュアンスとしては近いかも」

「……そうか」

烏間先生はまたもや複雑そうな顔を見せる。

地球の危機を前にしてもモチベーションが低い生徒がいるのが心配なんだろう。

暗殺を依頼して来たのは国、世界の首脳達だが、直接話を持って来たのは彼だ。

俺たちにとつては依頼者も同然。そう思うとやる気のない奴がいるのは好ましくないのは納得できた。

「ただまあ、暗殺の方はそれなりに頑張ってみるつもりですよ。100億円あれば適当に生きていけるしね」

「ああ。そうしてくれ。明日から体育は俺の受け持ちになる。君たちには期待している」

烏間先生が体育を見てくれるのは嬉しいけど、やっぱり今一つやる気というか興味が出ない。仮に力をつけたとしても、誰が俺を認めてくれるのだろうか？何かを殺す力。この一年しか使う機会がないだろう言わば使い捨ての能力なんて伸ばして何になるのだろうか？ただまあ、暗殺の授業という単語には多少の興味をそそられるが。

それでも、挫折した奴の関心を焚きつけるのは難しい。

そんなことを思いながら、俺とは対照的にもしも殺せたらしく嬉々として暗殺を語る皆んなを遠巻きに眺めて密かにため息を吐いた。

5話 基礎の時間

昨日、烏間さんが我々の体育担当の教師に任命されたことを知らされなかった生徒達のために朝のホームルームで改めて、烏間さん改め、烏間先生の自己紹介が行われた。

一応教員免許を持つているらしく、俺たちの保護者などの外面に対しても教師をやるのだとか。

例えば三者面談や全校集会など、担任が必須の行事においては殺せんせーは参加出来ない。まあ、国家機密だし同然だ。そんな状況に対応する為、柵ヶ丘中学校内での烏間先生の立ち位置は3年E組の担任ということになるらしい。

「という訳でこれから1年間、よろしく頼む」

拍手と共に終わった烏間先生のホームルーム。

その後の話題は5限目の体育がどんな感じになるのか、という話題で持ちきりだった。

「圭一はどうなると思うよ?」

「え、あ、悪い。聞いてなかった。何の話?」

「5限目というか、今後の体育だよ。烏間先生が担当って言うからさ」
磯貝と前原がどうやら俺に意見を求めてたらしい。全く聞いてなかったと言うか、なんなら話しかけられてることにすら気付かなかった。

多少申し訳ないと思ったので真面目に答える。

「暗殺の訓練じゃね? 一応殺せんせーがナイフの振り方とかエアガンの撃ち方は教えてくれたけど、やっぱりターゲットから教わった技術だしな。何より、モンスターと人間じゃあ身体の性能が違い過ぎて参考にならないことも多々あったから。それと結局は俺たちって暗殺者なんだとか言っても今の所はナイフ振り回して、エアガン乱射してるだけの中学生だからな」

「そっかあ、言われてみれば何となくナイフ振って、なんとなくこの辺って所を撃ってるだけだもんなあ」

「あとは体力作りとかもじやね?」

「あー、うん。それもあるだろうな。元運動部以外体力はてんでダメって奴が多いもんな」

「結論なんだと思うよ?」

「体力作りとナイフ捌きに射撃訓練を一言でまとめると………基礎練習?」

「圭一に一票」

「同じく」

暗殺の基礎練習。字面の物珍しさが凄い印象的なワードだな。しかし、なんだかんだで烏間先生の授業を楽しみに思っている自分がいる。

昨日の放課後まではやる気だなんて無かったのに、暗殺の基礎練習だなんて聞き慣れないワードに惹かれたからか?

久しぶりだ。授業が楽しみとか、学ぶという行為自体に興味とやる気が出て来たのは。

?? ?? ??

そして、待ちに待った5限目。

不思議とやる気に満ち溢れている俺は授業開始前に指示されていた校庭のトラックを3周を珍しく昼休み中に軽く終わらせて、身体を解しながら授業が始まるのを待っていた。

「珍しいね、乃咲がやる気なの」

声のした方には、トラック3周を終えて息を切らした渚と、その後ろには茅野の姿があった。

なんか、この2人はいつも一緒にいるよな。

とか思いつつ、紳士の気遣いが出る俺はあえて2人の関係性には突っ込まない。

……だってどうでもいいし。

「そうか? 3-Eの乃咲くんはやる気と元気と朗らかさで有名じゃないか」

「あはは、乃咲の中ではそうなのかもね」

小粋な冗談を披露すると茅野から割と辛辣な愛想笑いが飛んできた。

今の『あはは』は女子語で『何言ってるのこイツ』の意だろう。十中八九そうに違いない。

「いや、実際にお前がやる気なのって相当レアじゃね？ やる気ある所見るの1年の頃以来かも」

「あ、磯貝くんって乃咲と同じクラスだったの？」

「そうなんだよ。まあ、友達って程でもなかったけどな。クラスメイトだけど友達じゃないって感じだったしな、こイツ」

走り終えた磯貝が合流して会話に混ざる。

そう言えば、隔離校舎に来てから元のクラスについて話したりはしたことがなかったな。

E組生徒にとって元のクラス云々の話は人によっては触れてはいけない地雷ネタだったりするので好き好んで話題にすることを避けている節があるんだけどさ。

「しつかり名前は覚えてただろ？ それに当時は余裕がなかったただけだ」

「まあ、確かに必死だったよな、お前。見てて少し痛々しいくらいにはさ」

磯貝と片岡は一年の頃に同じクラスだった。なので、E組の中ではこの学校に入学してからE組に落ちるまでの一部始終を知っている数少ない同級生である。

「ふーん、ねえ。私はここに來てから日が浅いから色々よく分かってない事が多いんだけどさ？ 乃咲って元々は何組だったの？」

「A」

「嘘っ!？」

「嘘じゃないだよ、これが」

「だな。片岡に聞いてみるよ。アイツも同じクラスだったし。つか、茅野以外には周知の事実だよな？」

「いやいや!?! だって乃咲がよく言ってるじゃん。『成績不振で落ち

た』って」

「成績不振と素行不良な」

「でも、当時は凄かったよな？ あの浅野とバッチバチにやり合って互角だったんだからさ」

「うん。結構有名だったよな。学年主席の2人」

「しかも主席？ 乃咲に何があったのさ!?! この前も岡島くんに順位聞かれた時に『学年最下位ですが』とか言ってたよな?」

「……やる気が無くなった」

「簡潔すぎない!?!」

賑やかな茅野のツツコミを聞き流しながら、当時を思い出す。まだまだ真面目で教科書の虫だった頃。

父に褒めてもらいたくて必死だった頃。1位であり続けなければいつか褒めて貰えるんじゃないかと期待して、その分だけ勉強にやる気を出して頑張っていた誰もが認める優等生だった時代。

そうか、俺が学ぶという行為に興味を持ったのはあの頃以来だ。だから軽く2年ぶりくらいにやる気が出たと言う事になる。

「なんかすつごい気になるんだけど」

「別に隠す程の事でもないけど、俺がひたすらに情けないだけの話だし、聞いてて面白い話でもないよ」

「そこまで言われるとかえって気になる」

「ま、気が向いたら話すよ。昼飯食って腹一杯になってる時に話すよ。うな事でもない。気が向いたらね」

「あ、気が向いたらって2回言った」

「大事な事なんだね……」

駄弁っているとクラスメイトたちも揃い始め、本日のメインディッシュ……もとい、烏間先生がE組に生息している音速黄色タコに絡まれて額の血管をピクピクさせながらやって来た。

恐らくは『烏間先生！ 私の人気盗るつもりでしょう!?! 生徒達が折角心を開き始めてくれたと言うのに!』とか殺せんせーが絡んでるんだろう。

「烏間先生！ 私の人気盗るつもりでしょう!?! 生徒達が折角心を開

き始めてくれたと言うのに！」

「一言一句想像通り……」

不憫なり、烏間先生。過去数回会った時点でなんとなく確信していたが、やはり、彼は苦労人気質なんだろう。自分から面倒事に首を突っ込むんじゃない、苦労の方が勝手にやってくるタイプの。

なんと言うか、同情する。

そんな俺の心中など知らない烏間先生は半ばキレ気味に殺せんせーを退かすと気持ちを切り替えたのか、校庭に響き渡る声で集合をかけた。

集合に合わせて全員が駆け寄り、整列する。

「昨日と今朝に話した通り、今後一年間は俺が君達の体育の担当をさせて貰う。内容としては暗殺に必要な技術の習得と基礎練習を予定している。中には気を抜けば怪我に繋がる内容の訓練もあるだろう。だが、俺は加減はしない。君達とはプロ同士として接するつもりだ。みんなの頑張りに期待している！」

「はいっー！」

「まずは各自走り込んで体は温まっているだろうから、まずはストレッチだ。2人1組を組め！」

さて、出たぞ。俺みたいな友達いない奴が言われて困る言葉ランキング1位。『2人1組を組め』

よく話す相手という意味では磯貝や前原なんかは友達枠として考えて良いのかもしれないが、生憎と2人は遠いし、なんならアイツらで組んだらしい。

最近話すようになった奴とかだと渚と杉野だが、コイツらも組んでるし……女子は論外。

自分の人間関係の狭さに思わず頭を抱え掛けると俺と同じくコンビを組むのに出遅れた奴と目が合った。名前は確か竹林孝太郎。

基本的にガリ勉というか、勉強は量をこなせば身につくを信じてる典型というか、休み時間であろうとなんだろうとひとまずは教科書と参考書を広げてるイメージのある奴。元ガリ勉仲間としては好感が持てる。

「よろしくな、竹林」

「(ちん)そ」

社交辞令として挨拶。うん、ファーストコンタクト成功。何気に竹林との初会話である。

さて、話題がなくなつたぞ、困つたな。

ここは俺の十八番である、天気の話でも。

「乃咲。キミは元A組だったね」

「ん？ そうだけど」

意外なことに彼から話を振つて来た。

けれど今日だけでこの話題が出たのは2度目。ここ最近はあるまじりというか、ほとんど触れられないネタだったのに。

あれか？ 今更になつてA組死すべし、みたいな劣等感が噴き出してくる予兆的なやつ？

「キミはどうして成績を落としてしまったんだ？ 学年主席の片割れが今となつては学年最下位。意図的に手を抜いているとしか思えない」

「……まず一つ、成績が落ちたのはやる気がなくなつたからだ。俺は努力しないでトップに立てるような器じゃないし、モチベーションなしに努力出来るほど大人じゃない。意義を見出せなけりやあやる気も失せるだろ。それから、別に手を抜いてはいないぞ」

「やる気、モチベーション、意義、か……。乃咲、キミのお父さんは遺伝子工学の権威だったね」

「……………それとこれ、なんか関係あんのか」

竹林からの歯に絹着せない言い方と父の話題が出たことで思わずムツとする。

思わず言い返しそうになった。お前だつて代々病院を経営している家の息子だろ、と。

喉元までそんな単語が出かけたが、竹林が俺の言い掛けたことを先んじて口にした為に未遂に終わる。

「別に。ただ、勝手に親近感を感じてたつてだけの話。僕の家も代々病院を経営してるし、兄2人は東大医学部に属している。僕とは違つ

て優秀な家族たち。彼らに認められる為に努力しているけど報われない。もしかしたらキミもなんじや、と思ったんだよ」

竹林は思いの外に饒舌だった。そんな彼に当てられてか、あるいは確かに似た境遇のコイツに絆されたのか、俺も言葉を続けていた。

「二年の前期まで、俺は努力して1位であり続けた。そういう意味では努力は報われてはいる。その点で言えば、努力しても報われないと言ってるお前と俺は違うよ、竹林」

「ま、確かにね」

「けど、優秀な家族に認められなくて努力したって意味では確かに俺たちは境遇が似てるな。家族の人数に差はあれど」

「キミの家は？」

「母は俺が幼い頃に死んだ。兄弟は居ない。俺には父しかなかったよ」

「……そうか。すまないことを聞いた」

「別に。磯貝も知ってることだしな」

そう、俺には父しかなかった。

優秀な父。幼い頃から誰もが彼を褒め称えた。テストで満点を取った俺ではなく、優秀な父を。状況的に自分が褒められてるはずなのに、必ずと言っていい程に『乃咲の子』というブランドが枕詞のようについて回る所為で褒められてる気がしなかった。

そして、その肝心の父といえは俺に興味を持っていない。あの人は俺が何をしようが見向きもしなかった。満点取ろうと、徒競走で1位を取っても、学校に主席で受かろうが、変わらない。

ちよつと前に親子喧嘩……というか、俺が一方的にこれまでの人生で積もらせて来た不満を拳に乗せてぶち撒けた事で見事に母の実家に厄介払いされ、今の俺にとって家族と言えるのは母方の祖父母だけである。

「少し嬉しいよ。今まで1人で勝手に親近感を持っていたから。こうして話す機会が出来て」

「別に教室で話しかけてくれれば良いのに」

「教室でのキミは何というか、話しかけ辛いオーラが出てるといいうか」

「まあ、教師殴って喧嘩三昧して浮きまくってる奴に平然と話しかけられる方が珍しいか」

「まあね」

「お前も苦労してるんだな、竹林」

「ああ。何度も兄から不良品扱いされ、父には失望され、出来損ない扱いされて来た。僕は……叶うのなら、さっさとE組から出たいよ」

話せて嬉しいと言われるのは予想外だった。確かにガリ勉仲間として好感を持っていたが、てつきり、竹林からしたら俺はただの不良としか見られてないと思ってた。なんなら、真面目に勉強できない奴と馬鹿にされてるとばかり……。

何を隠そう、真面目ガリ勉だった頃の俺が勉強できないというか、しない奴を少し離れた所で見下してる節があつたから尚更、彼もそんなのかもしれないと偏見があつたのだ。

ガリ勉は見かけによらないらしい。

でも、まあ。俺とお前は違うよ、竹林。

俺は父に失望すらされなかつた。不良品扱いすらされなかつた。きつと小さな頃は沢山の期待を掛けられ、答えられなかつた時でもなにかしらの言葉を貰つたお前とは違う。

「俺はここから出たいとは思わないな」

「何故だい？」

「出ても出なくても変わらない。俺も父に認められるかどうか全てってところがある」

「だったら尚更出たいだろう？ この特別強化学級から抜け出せれば……」

「なあ、竹林。お前さ、親に罵倒されたことあるか？」

ここまで殆ど竹林の独白に付き合つた形だったので俺も少しだけ心情を吐露しようと思う。

別にコイツの事情を一方的に知っていることに申し訳なさを感じたとかではない。そもそも勝手に語り出したのは竹林だ。

ただ、シンプルに吐き出してみたくなつた、他人に話して楽になるのかどうかを試したくなつた。

「そりやあ、ここに来る前や点数が下がる度に」

「羨ましいな」

「……どこが」

「俺は罵倒すらされなかった。父の口から聞いた事のある言葉は二つだけ。『ああ』と『そうか』この二つの単語だけ」

そう、あの人は昔からそうだった。

仕事で忙しいから、なかなか家に帰って来ないから、せめてたまに帰って来た時に褒めて欲しい。その為に、その為だけに努力した。

テストで満点を取った、徒競走で1位になった、成績表は全部最高評価だった。

良い結果を出して、父がたまに帰ってくる度に喜び勇んで報告する俺。けど、あの人は一度たりとも褒めてくれたことはなくて、返ってくる言葉は2パターン。『ああ』と『そうか』だけ。

「あの人は俺に興味がない。あの人は俺を見ない。あの人は俺を知らない。だから、俺は認められることは今後一切ないだろう。だから、俺は特別頑張ろうとは思えない」

「……………」

「だせえこと言ってるのは分かってるけど、何を差し置いても家族からの評価が欲しい。その気持ちはお前なら分かるだろ」

「まあ……ね」

「どこに居ても同じ。居なくても同じ。結果が変わらない、報われないと知ってるのに努力するのは虚しいだけだ」

一度溢れ出した言葉は止まる事を知らず、次々に口から垂れ流される。

なるほど、思っていた事を口に出すのは心地がいい。スッキリする。自分に言い聞かせるように頭の中でぶつぶつ考えるよりも実際に口に出した方が考えも上手く纏まった。

父親へのコンプレックス。良くも悪くもそれが乃咲圭一という1人の人間の行動指針であり、人格の基礎になっているのだろう。

「悪いな、つい愚痴ってしまった」

「いや、僕から始めたことだ。そろそろ真面目にストレッチしよう」

「ああ」

愚痴も切り上げ、ストレッチを始める。

これ以上、駄弁ついても意味はないだろうから。

「……………成る程、そういう事ですか」

ちなみに、今から数ヶ月後の夏休みのあと。

今日この時の愚痴を殺せんせーに聞かれていたことが一つの騒動を起こすのだが、今の俺たちはそんなことを予測できる筈がなかった。

?? ?? ??

「「「いっち、にく、さくん、しく、ぐく」」」

晴れ渡る空、吹き抜ける穏やかな風、春のまだ冷たい風が上気した頬を撫でる昼下がりに。

「晴れた午後の運動場に響く掛け声、平和ですねえ……。生徒達の手^{エモノ}に武器がなければの話ですが」

「八方向から正しくナイフを振れるように!! どんな体勢でもバランスは崩さない!!」

間の抜けた声と指導のために櫓を飛ばす気迫のある声を聞きながらナイフを振る。

八方向から正しく、どんな体勢から振ってもバランスを崩すことのないように。

うむ、この素振りを始める前に烏間先生が手本を見せてくれたが、今している動きは彼の精度と比べると冗談抜きで天と地ほどの差がある様に思う。

どれだけ地道に素振りを繰り返したらあんな無駄の無いしなやかに鋭い斬撃が繰り出せるんだろう？

記憶した烏間先生の動きを脳内で再生し、動きをトレースする様に心がけてつつ素振りを続ける。

「この時間はどっか行つてると言っただろう。体育の時間は今日から俺の受け持ちだ。追い払っても無駄だろうからな、せいぜいその砂

場で遊んでろ」

「シクシク……。酷いですよ烏間先生。私の体育は生徒達の評判よかったのに」

「嘘吐けよ、殺せんせー」

皆の素振りの手が止まったので釣られて止める。

うんざりした様子の菅谷が気怠そうにナイフを肩に担ぐ様に持ちながらため息混じりに言う。

「身体能力が違いすぎんだよ、この前もさあ……」

菅谷の言いたいことは分かった。

実は数日前に殺せんせーが体育で俺たちにとんでもない無茶振りをして来たのである。

『反復横跳びをやってみましょう。まずは先生がお手本を見せます』
などと言いながら反復横跳び用に引かれた線の上を分身を作りながら往復した。

『まずは基本の視覚分身から。慣れて来たらあやとりも混ぜましょう』
『できるかあ!!』

まずは基本の視覚分身とか言ってるけど、その基本をクリア出来るものが居ない。地上の何処を探してもこのタコ以外には。

しかも慣れて来たらあやとりとか、さり気にとんでもない要求だ。激しく左右にステップしながらとか東京タワーとか神業だろ。

「異次元すぎてできねえよ」

「体育は人間の先生に教わりたいわ」

中村さんと杉野の一言がトドメになったのか、『ガーン!』と何ともありきたりな効果音を口で出し、どんよりオーラを纏って殺せんせーは泣きながら砂場に行った。

しくしくと泣きながら砂で山を作る殺せんせーを尻目に烏間先生はようやく一息つけたらしい。

「ようやくターゲットを追っ払えた。授業を続けるぞ」

可哀想な殺せんせー。烏間先生の中では言い訳しようもないほど完全に邪魔者扱いである。

鳥間先生がようやく授業の続きをしようとしたところで、前原が一歩前に出た。

「でも鳥間先生。こんな訓練に意味あんすか？ しかも当のターゲットが居る前でさ？ そりゃあ、正しくバランス崩さず攻撃できるのはメリットかもしれないけど、いくら訓練してもマツハ20に当てられると思えねえっていうかさ」

「確かに難しいだろう。だが、暗殺も勉強も同じだ。基礎は身につけるほど役に立つ」

鳥間先生は言い切った。勉強も暗殺も同じだと。

けれど俺には分からなかった。マツハ20の化け物相手に振るうナイフの扱いに基礎もクソもあるのか、と。だって、どんなに正しく振っても速く繰り出しても、このタコにはさして差はないのだから。

鳥間先生の言葉がピンと来てないのは俺だけではなかった。クラスの大半が理解できていない。

それを悟ったらしい鳥間先生が少し考えた後、磯貝と前原の2人に手招きする。

「例えば……そうだな。磯貝くん、前原くん。そのナイフを俺に当ててみる」

我らの体育教師、屈強な漢から繰り出されたのは思いもよらない言葉。予想もしなかった言葉に2人は呆気に取られ、真意を問う様におずおずと訊ねる。

「え……いいんですか？」

「しかも2人がかりで？」

「ああ。問題ない。対先生そのナイフなら俺たち人間に怪我はない。もし、擦りでもしたら今日の授業は終わりでいい」

シャツの首のボタンを一つだけ外すと余裕そうに、特に身構えることすらなく2人を見据えた。

けど、いくら防衛省の人間で俺たちの教官になると言っても流石に舐めすぎじゃないだろうか？

磯貝も前原も運動神経はかなり良いし、体力もあるし、男子の中でも身長が高い方だからリーチもある。

数の差を考えれば烏間先生の不利だし。

なんか、少し残念だ。烏間先生は俺たち一人一人の目を見て接してくれる大人だと思っていたのに。

こうして子供だからと舐めて掛かり、挑発紛いのことまでかます人だとは思わなかった。

烏間先生に抱いた勝手な希望は勝手に失望し、そして、俺はまた手のひらを返すことになる。

「えつと……。そ、そんなじゃあつー！」

磯貝が躊躇いながら繰り出した突き。それを顔色変えず、一切の動揺も焦りもなく、烏間先生は無駄な動きの一切を省いた動きで躲す。

「やあ」

再度の挑発。躲された磯貝とそのやり取りを間近で見っていた前原の顔から躊躇いが消える。

そこから先の展開はまさに圧巻だった。

躊躇いなく迫るナイフを余裕の笑みで躲し、いなし、それでもその場から殆ど動いていない烏間先生は真つ直ぐに2人を見据えている。

その時、俺は自分の間違いに気付いた。

烏間先生は俺たちを舐めてたわけではなく、ただ、純然たる事実を語っただけだった。

ハンデを課すだけの実力差があり、その差を正しく知り、何よりも自分の技術に対する自信があったのだ。

ただ長く生きてるだけの無能の癖に偉そうな事を吐く本校舎の教師連中とは違う。

自らの能力で実行出来ることを宣言し、結果で雄弁に語る。現に今、俺たちに示した。人一人に攻撃を当てる技術の必要性を圧倒的な技量で。

「……かっけ」

気付いた時には呟いていた。

誰かを心の底からカッコいいと思ったのはいつぶりだろうか？ 心の底からこんな風になりたいと思ったのは初めてかもしれない。

そう思うと、胸に熱いモノが込み上げて来た。ここ2年ほど、長ら

く忘れていた感覚。尊敬と憧れ、そして本気のやる気。

鳥間先生は攻撃が当たらず熱くなつた2人の腕を掴み、流れる様に脚を蹴り払い、汗一つ流さず無力化すると悠然と語る。

「この様に、多少の心得があれば素人2人くらいの攻撃なら俺でも捌ける。俺に当たらない様ではマツハ20の奴に当たる確率の低さが分かるだろう。だが、クラス全員が俺に当てられるようになれば暗殺の成功率は格段に上がる」

もう、何もかもがカツコよく写つた。

鳥間先生を前にした時、道端で出来もしない癖に『殺すぞ』と怒鳴り散らしている不良たちの滑稽さが俺の中で決定的なモノになった。そして、その滑稽さは自分自身にも向けられた。喧嘩する時、大声で殺すとか怒鳴り散らして、殴り合いの準備と覚悟を胸の中でしている俺がやたらと小さく感じてしまった。

口に出すのは実行する時だけでいい。

きつとそれがカツコいい生き方なんだろう、だなんて今、俺は柄にもなく本気で考えてしまった。

「前原くんが言っていた通り、確かにマツハ20に当てるのは至難の業だが、挑戦する以前に相応に必要な技術がなければ暗殺という土俵に立つ事すら出来ないだろう。ナイフや狙撃、奴を殺すのに必要な技術の基礎を俺から教えさせて貰う」

「……はいー」

目が合ったので返事を返す。いや、多分、目が合わなくても今の俺は返事を返しただろう。

今日この日、彼から感じ取った心構えはこれからの俺の生涯における基礎になったのだから。

6話 カルマの時間

「すみませーん。タコくださいーい」

「あいよっ！ いいの上がってるけど、どれにする？」

「そっちの色ツヤ良い方で」

「坊ちゃん見る目あるね！ まいどー！」

こんな所で何してんだろ、俺。そんなことを考えながら魚屋に向き、わざわざタコの目利きをしている喧嘩友達を眺める。

ちなみに、ここで買ったタコは殺せんせーへの嫌がらせで使うのだから。

正直、ふつーに勿体ないと思うし、嫌がらせならこんな新鮮なのじゃなくて腐りかけのヤツを置いたほうがダメージデカくないか？

「いやー、買った買った。結構良い感じの入ってて悩んじゃったよ〜」
「……そうか」

「どした、乃咲クン？ お腹でも減った？」

「どっかの誰かに電話で叩き起こされた挙句、朝市に付き合わされてるからな」

「そかそか、タコでも食べる？ 生だけど」

「タコは苦手だ」

「ぎーんねん」

「何でタコ？ しかもわざわざこんな所まで来て」

「へ？ 嫌がらせの為に決まってるじゃん。手間暇惜しまないってのが嫌がらせの極意だよ〜」

「あ、そう」

マイペースな友人に呆れる。

今、俺の隣を歩く赤髪の男子は赤羽業。ちなみに、業と書いてカルマと読む。基本的に自他共に認めるボツチの俺が友人と言いつても数少ない同級生である。

まあ、出会い方はロクでもなかったけど。

なんでコイツと朝市なんかに来てるのか。それは昨日の5時間目終了直後、停学明けで遅刻登校して来たコイツと殺せんせーの初対面時まで遡る。

?? ?? ??

「烏間先生、ちょっと怖いけどカッコいいよねー」

「ねー！ ナイフ当てたらよしよししてくんないかな〜！」

烏間先生に対して結構好意的な反応を示すクラスの女子たちに何となく口には出さずに同意しながら歩く教室への道。

俺たちの後ろでまたまた殺せんせーに絡まれてる烏間先生を尻目に歩いてみると、いつだったか杉野が座り込んでいた足階段を登った先に見知った赤い髪と好戦的な笑顔が印象深い男が立っていた。

「カルマくん……帰って来たんだ」

いち早く気付いた渚が驚いた様に呟く。

「よー、渚くん。久しぶり〜」

親しげに笑うカルマに驚く。コイツら知り合いだったのか。いや、同じ学校なんだし、不思議ではないんだが、少し意外だ。

何処か小動物じみた渚と肉食獣そのものなカルマ。2人の特徴を側から見るとあんまり相性は良さそうには思えないけど。

「乃咲くんじゃん。おひさー」

「ああ、久しぶり」

顔見知りなので適当に返す。

それにしてもそうか、カルマの停学明けは今日だったのか。完全に失念してたわ。

「わ、アレが例の殺せんせー？ すっげ、本トにタコみたいじゃん」

新しいおもちゃを与えられた子供の様な顔で殺せんせーを見ると、俺たちから興味を無くしたカルマが先生に気さくな雰囲気で見付く。

それを見送っていると渚、茅野、杉野、磯貝に前原、片岡、岡野が近づいて来た。

「カルマ……。停学昨日までだったんだ？」

「あの問題児がなあ」

「問題児？　ねえ、渚。知り合い見たいみたいだけど、彼ってどんな人なの？　私、E組来てから日が浅いから分からなくて……」

「うん。カルマくんとは1年と2年が同じクラスだったんだ。E組うちに来た理由は素行不良。2年の時に続けざまに暴力沙汰で停学食らったんだ。そういう人もE組には来るんだよ」

「えっと、乃咲みたいな感じってこと？」

「まあ、そうなる。もつとも、俺よりアイツの方が断然成績がいいけど」

茅野は引き合いに俺を出したが、事実、カルマがここに落ちた理由の半分は俺と丸っ切り同じだ。

アイツは教師を殴った。

もともと喧嘩っ早い性格をしていたが、彼の中にあつた彼なりの価値観に基づいて考えた結果、担任が無価値になってしまったとか。

まあ、俺が知ってることはそんなくらいだけ。

「乃咲は？　カルマとはどんな知り合いなの？」

「喧嘩仲間っていうか、喧嘩の師匠というか……」

「け、喧嘩の師匠？」

「2年の夏だったかな。買い物してたら他校の生徒に絡まれて喧嘩になつてな。ボッコボコにされてる時に助けてくれたのがカルマだ。その時は特に何もなくて、助けてくれてありがとうって終わったんだけど」

「ヤンキー漫画の序盤にありそうな展開だな」

「しかもボッコボコってそれも意外な」

「もともとそれなりの優等生だったからな。喧嘩なんてしたことなかったし」

「て言うか、そこからどう喧嘩の師匠になるのよ」

「また絡まれてる所にカルマが来たんだわ」

「お前、絡まれすぎじゃねえ？」

確かに当時はめちやくちや絡まれた。不良たち曰く、俺の目付きが気に食わなかったとか。

ただ、殴り合いとか嫌だったし、最初はヘラヘラして誤魔化してただけけど、それが返ってアイツらを刺激したらしく、一方的に殴られるハメに。

んで、殴られて蹲ってる所に割って入ってくれたのが当時のカルマだった。

「まあ、不良たちにも色々あるんだろう。知らんけど。んでまあ、流石に一方的に絡まれてると嫌気も差すし、頭にも来る。殴られたら殴り返して……とかやってたら周りからも不良認定される様になったと」「嘘……。あたし等、今まで乃咲が一方的に殴ってるんだとばかり思ってた」

「それもあながち間違いじゃないんだけどな。不良扱いされる様になつてからは、手を出される前に恐喝して、それで退かなかつたらやられる前にやるって先手を取って殴る様になったから」

そう言えば最近は何中を歩いていても絡まれることは無くなった。コンビ二前の不良の溜まり場を通りかかったり、道を塞いでズカズカ歩いてる連中の前を通ると道を開けてくれる様になったし。

不思議に思つて声をかけるとこれまでのことに対してなのか、急にペコペコと頭を下げてくる始末。

お陰様でしばらくは平和に過ごせてる。

「んで、そんな感じで喧嘩していると偶にカルマと遭遇する訳よ。『お前、赤羽の仲間か?』とか『コイツ赤羽と同中だぜえ』とかそんな連中に絡まれるから必然的に。んでんで、話してみると意外と気が合つたんで、友達になつたと」

「珍しいな、お前が友達って言い切るの」

「ま、絡まれてる時に助けてくれたことに関しては素直に感謝してるからな」

「そっか」

ちなみに、カルマが喧嘩の師匠つてのはアイツ公認ではない。あくまで初めて殴り返した時に参考にしたのがカルマの動きだったってだけ。

だから、実際にカルマを師匠呼びしようもんなら『はあ? なにそ

れ、乃咲クン。厨二?』とか言われて擲掬われるのだろう。

友人との出会いを振り返っていると、カルマと殺せんせーはファーストコンタクトを終えたらしい。

「へえ。本トに速いし、本トに効くんだ? このナイフ。おもちゃみたいだから疑ってたんだけど」

殺せんせーの触手が一本、破壊された。

その光景に皆が絶句している。

「……カルマくんは、この今、この場だと誰よりも優等生かもしれない」

「渚、どういうこと?」

「凶器とか、騙し討ちの『基礎』なら多分、カルマくんは群を抜いてると思うから」

「そりやそうだ。足元にガラス瓶が落ちてたら叩き割って武器にするし、相手が材木持つてれば奪い取って殴るし。喧嘩とか殺し合いだとか、あと嫌がらせならカルマの右に出る奴は居ないだろ」

触手を失い、思わず後退した殺せんせーと、その反応を見て舐めた態度でおちよくりまくるカルマ。

暗殺を積極的に狙っていく生徒や彼らをサポートする側に回りがちな他の連中にとってカルマは心強い味方になるだろう。だって、カルマは教師^{先生}つて生き物が根本的に嫌いだから。

その日は、6時間目が歴史の小テストだったのだが、そのテスト中にもカルマは嫌がらせというか、当てつけの様というか、殺せんせーに攻撃を仕掛けては執拗におちよくり、解答用紙を一足先に埋めると俺たちよりも一足早く颯爽と下校して行った。

?? ?? ??

そんなこんなあり、カルマの復学と殺せんせーとの邂逅があった翌日の朝、つまりは今朝なのだが、朝の5時半にカルマからの鬼電で俺の安眠は妨害され、人生で最も幸福感を覚える時間を奪われた。

『タコ買いに朝市行くんだけど、乃咲クン暇だよな? 一緒に行か

ねえ?』

『暇じゃない。眠い』

『んじや、駅前で待つてるねえ』

そんなやり取りの後、ぶつ切りされた電話片手に何度欠伸を噛み殺しつつ登校の準備をしたことか。

お陰様で朝食抜きである。

「乃咲クンはさあ。殺せんせーに暗殺したの?」

「烏間先生と変わる前の体育の時間で何回か。基本的に座学中の暗殺は勉強を妨げるって理由でNGだけど、体育は身体を動かしてななぼつてんで身体を使う暗殺ならOKだったんだ」

「へえ。ヤれそう?」

「無理だな。掠りもしない」

「マジ? 乃咲クンに無理なら俺も無理かなあ」

「正面から触手破壊した奴が何言ってたんだか」

「キミも触手だけなら一本やったんでしょ? 渚くんから聞いてるよ」

「アレは殆ど偶然みたいなものだけどな。渚が作ってる殺せんせーの弱点メモのお陰だ」

「そんなんあるんだ? 今度見せて貰おつと」

市場で買ったタコを片手に登る本校舎の裏山。

本校舎から約1km離れた隔離校舎に着いた頃には始業時間ギリギリだった。

恐るべし、朝市。軽く足を運んだだけでこんなに時間が経つとは。

「あ、カルマくん乃咲。一緒に来たんだ?」

「うん。ちよつと殺せんせーについて聞きたくてね。皆んな、おはよー」

教室に入ると我らE組のマスコットの片割れ、渚が出迎えてくれた。十中八九、不良2人の組み合わせに対する心配だろう。

そんな彼やクラスの連中に爽やかな挨拶をするとカルマは流れる様に殺せんせーの教卓まで歩き、買ってきたタコを置くと、タコの眉間に何処からか取り出したナイフを突き刺した。

流れ作業の様な嫌がらせ。プロだな。

しかも、雑にタコを刺した様に見せかけて、眉間を1発で貫き、貫かれたタコの体色が白く染まっていくところを見るに、ちやつかり締めてやがる。

無駄に手慣れてるな、オイ。

「あれ？ 皆んな座んないの？」

呆気にとられる俺たちを軽く小馬鹿にしたような態度でヘラヘラと眺めるカルマ。

「……座るぞ、渚。カルマの嫌がらせにいちいち反応してたら身が保たないし、時間の無駄だ」

「う、うん……」

にしても、タコ。意外と生臭いな。

「皆さん。おはようございませ……す」

クラスの全員がタコにギョツとしつつ、席に着いた頃にやって来た殺せんせーはカルマからの嫌がらせに眉を顰めると、時間経過と共に身体が満遍なく白く染まったタコを抱える。

どれだけ精度の高い締め方したんだ、カルマ。

普通、タコ締めるなら眉間だけじゃなく、触手とかも何度か刺すだろう普通。

「ごつめーん。せんせーと間違つて殺しちゃった。捨てとくからこつち持つてきてよ」

「……………ふむ」

タコを持った先生は一瞬だけ姿を眩ますと次の瞬間には触手の先をギャルルルと音を立てて回転させるドリルに変え、職員室に飾っていた小型ミサイルと一緒に抱え、戻ってきた。

予想斜め上の荷物の登場に驚いているとミサイルの尻から火が噴き出したので再度驚かされる。

このミサイル、まだ生きてるのか。ちよつと衝撃を与えたら直ぐにドカンといきそうだな。

「カルマくん。先生は暗殺者を無事では帰しません。キミに見せてあげよう、このドリル触手の威力と自衛隊から奪つておいたミサイルの

火力を」

凄まじい勢いで殺せんせーのドリル触手がミサイルの火の上を行き来する。目で追えないほどの速度の触手を動かすこと数秒。カルマが唐突に何かに対して熱がりだした直後、ポカンと開けていた俺の口の中にも何か熱い塊が放り込まれた。

熱い、だが、口の中から香ばしい匂いがする。朝食を抜いたから尚更そう感じる。

「た、たこ焼き?」

「正解です、乃咲くん。キミもカルマくんも今朝は顔色が良くない。朝食を食べていないのでは?」

「まあ。カルマに誘われて朝市に行ってたから」

「ほうほう。となると、このタコは実際に選んだんですね。ちなみにどちらが?」

「カルマです」

「なるほど、いい目を持ってますねえ」

感心した様に頷くとタコ焼きを六個入れたパックを渡される。ひとまず口の中にぶち込まれたのを食っておくが、驚く程に美味かった。

見た目と小さい頃に食べた印象で苦手意識を持っていたが、時間が経つてみると結構普通に食えるもんだな。殺せんせーの腕の問題か?」

腹が減っていたので貰ったタコ焼きをぱくついているとカルマが殺せんせーに挑発されているところだった。

「先生は暗殺者を無事では帰しません。手入れするのです。錆びて鈍った暗殺者の刃をね。今日一日、本気で殺しに来るがいい。その度に先生はキミを手入れする」

殺せんせーの言葉にカルマが悔しそうに音を立てて歯軋りした。随分と濺んだ殺意を込めて。

「放課後までにキミの心と身体をピカピカに磨いてあげよう」

宣言した殺せんせー。

その笑み、その声、その立ち姿から分かった。容易に感じ取るこ

とが出来た。

ああ、今日のカルマは弄ばれるな、と。

?? ?? ??

カルマは今日一日でさまざまな暗殺を試みた。

だが、それらは一つとして殺せんせーにダメージを与えることは叶わず、アイツは失敗する度に尽く徹底的に手入れされた。

銃撃すれば銃を抜く前にネイルアート。

家庭科の調理実習ではファンシーなエプロンやバンダナを頭に巻かれて。

仕込みナイフで仕掛けようとしたら、触手一本で身動きを封じられた拳句に髪を七三分けにワックスで固められた。

そんな光景を眺めてるうちに一日が終わる。

結局、カルマは何も出来なかった。

当然だ。相手はマツハ20のモンスターで、素人とは言っても26人をこれまで相手取って余裕をかましていた超生物なんだから、協調なく単独で闇雲に仕掛けてるカルマが勝てる訳がない。

「……………」

負け続けていじけたのか、爪を齧りつつ隔離校舎裏の崖から本校舎を見下ろすカルマ。

その姿を渚と一緒に眺めていた。

「カルマくん。皆んなでヤろうよ。本気で警戒してる殺せんせーに一人で勝てるわけがないよ」

「やだね。俺がやりたいんだ。変なところで勝手に死なれる方が一番ムカつくもん」

「お前の教師嫌いは筋金入りだな。そんなに教師を殺したいのか？」

「…………教師ってのは、勝手に死ぬもんだろ」

カルマはやさぐれていた。

まあ、気持ちは分からないでもない。カルマはどちらかと言えば教

師嫌いではなかった。むしろ担任には懐いていた節すらある。

だが、まあ、それなりに嫌うにはそれなりの理由があるわけで。きつと、カルマの中で元担任が無価値になってしまった理由ってのが今の『教師は勝手に死ぬ』ってことなのかも知れないな。

「さて……カルマくん。今日は沢山手入れされましたねえ」

顔を緑のしましまにした殺せんせーがこちらに近づいて来る。これは見慣れたナメてる時の顔だ。

「まだまだ殺しに来てても良いですよ？　先生がもつとピカピカに磨いてあげます」

「一つ確認したいんだけど……殺せんせーって先生なんだよね？」

「……？　はい」

「じゃあさあ、先生ってさあ。命をかけて生徒を守ってくれる人？」

「もちろん。先生ですから」

カルマが何か良くないことを考えてるのは理解した。何をしようとしているのかは想像出来なかった。

奴は徐にエアガンを抜くと殺せんせーに向けながら笑った。今日の爽やかな笑顔だった。

「そっか。安心した。だったら……殺せるよ」

次の瞬間、カルマが飛んだ。俺たちとは逆方向。崖の方へ向かって、タン、と軽やかに。

躊躇いなく飛んだカルマ。銃を構えたままに飛び降りたというよりは、倒れる様に落ちていったカルマの動きがスローモーションに見える。

「カルマ!？」

奴が崖から落ちたと脳が理解した瞬間。ドクンと心臓が一度、大きく跳ねた。

カルマはゆっくり、ゆっくりと落ちる。俺の視界ではまだ、カルマは崖からは完全には落ちてない。いま、俺たちの立っている地面と奴の踵が水平に並んだところで、嘘みたいにゆっくり落ちる。

走って手を伸ばせば追いつける。まだ間に合う。

思考と現実の速度感が狂い出す。

見える、間に合う、助けられる。
だと言うのに、身体が酷く重い。

スローモーションの視界に反して普段通りに巡る思考。そんな思考に反して思い通りに動かない身体。身体が本当に重い。

液体の中で動いている様な、まるで硬い粘液の中で動こうとしている様な感覚。

いや、正確に言えば動けない。動けていない。

――

声すら出せない。必死に声帯を震わせ、落ちゆくカルマに駆け寄ろうと身体中の筋肉を酷使した結果、踏み出せたのはたったの一步と、絞り出せた一音。

「カ――！」

何が起きている？ どうなっている？

遅い。自分の思考以外の全てが遅い。

これまで生きて来た中で一度たりとも感じたことのない感覚に戸惑っていると、ふと、俺たちの頭上を何かが通過した。

「こ――」

殺せんせー。彼だけがこの時間が止まってしまった見たいな世界で動いていた。

動いていたのだが、なんだか、妙に遅い。一步だけ踏み出すのに精一杯な俺と比べたら月とスッポンレベルで彼の方が速いのは確かだが、妙なことにその動きを目で追えた。

だが、その動きがカルマの落下する速度よりも遙かに速く、落ちて行くアイツを確実に助けられるスピードであると理解できた。

理解した途端、急激な目眩を伴って緊張の糸が切れたみたいに身体が崩れ落ちた。

「カルマくん、乃咲!？」

渚が駆け寄ってくる。倒れる寸前に彼が支えてくれたお陰で膝を着く程度で済んだ。

「か、カルマは?」

俺が聞くと崖を見下ろせる位置まで行くと渚は大丈夫だとジェス

チャーした。

胸を撫で下ろす。地球滅亡なんて世紀の大事事件が目の前にあるにも関わらず、友人の死という事件の方が心臓に悪かった。

そこで冷静になった思考が気付く。

世界が元に戻ってる。あのスローモーションの焦った世界ではなく、いつも通りに身体が動き、話したいことが話せる世界に。

さっきの景色を見た後だと、今見えている光景は普段通りの筈なのに、世界の全てが少しせつかつち過ぎる様に思える。

目眩が落ち着いた頃にやつと立ち上がった。

「大丈夫？」

「……たぶん。ぶめん、驚かせた」

念の為、数回瞬きし、強く目蓋を閉じて、開けて、現実を見る。うん。大丈夫そうだ。

なんだったんだろう、今のは。

「乃咲って貧血持ちだった？」

「いや、別に。友達が崖から落ちたりしたら誰でもそれなりにショック受けるだろ」

「……それもそっか」

適当に誤魔化すと崖の下からカルマが殺せんせーに抱えられて戻って来る。

彼の顔を見て驚いた。なんだか、さっきまでの澱んだ殺意が形を潜めているのだから。

毒気を抜かれた様な表情つてのが今のカルマの様子を表すのに最も適した表現かも。

「うわあ……。改めて見るとすっごい高いい……。カルマくん、平然と無茶したね」

少し落ち着いてから渚とカルマが飛び降りた崖の下を覗き込むが、はつきり言つて興味本位で覗き込んだことを後悔した。

めちやくちや高い。立って覗き込むだけで股間の辺りが縮み込む様な感じがする。

「別にい……。今のが考えてた中で一番殺せる策だったんだけど

なあ、これはしばらく大人しくして計画の練り直しかな」

「できれば投身自殺みたいな手法はもう勘弁な、見てて心臓に悪いから」

「それはね、流石に懲りたからやららないよ。俺がどんな手で殺しかかってても教師としてのこの人は殺せないって分かったし」

すっげえ。あのカルマが丸くなってる。

さつきまで爽やかなのは挨拶するだけの尖ったナイフみたいな奴だったのに今のコイツは素直に負けを認める潔さ見たいなのを身につけている。

心境に余程の変化があったのだろう。もしくは投身をした時の恐怖で一時的に自分を見失ってるとか。一応、病院に連行しとくか？

「おやおや、もうネタ切れですか？ キミを手入れする為の道具ならまだまだあるのですがねえ」

「……殺意が湧く」

ナメてる時のしましま顔で最後まで惜しみなくカルマを煽る殺せんせー。そんな彼にムツとした顔で青筋を立てるものの、やはり、纏う雰囲気飛び降りる前とは明らかに違っていた。

殺意が湧くだなんて物騒なことを言っているカルマ。飛び降りる前なら胡散臭い笑みを浮かべて揶揄うように吐き捨てたんだろうけど、今のカルマは素直に感情を顔に出している。

「殺すよ、明日にでも」

首を親指で掻き切る仕草で言い放つカルマの顔は明るい。本当にさつきまでの彼とは違う様だ。

どうやら、殺せんせーの勝ちらしい。一人の不良への手入れが終わったと言うことなんだろう。満足そうに顔に朱色の丸を描いて微笑んでいた。

7話 圭一の日常

朝、布団の中で惰眠を貪っている所に6時半を知らせるアラームで騒音を撒き散らす目覚まし時計を殴り飛ばす事で乃咲圭一の一日は始まる。

別に早くもなく、遅くもない時間帯に目を覚ました俺は自分の体温で程よく暖かくなった布団と格闘し、5分の死闘の末にようやく寝床からノソノソと起き出して着替える。

布団のやつめ、最近また腕を上げた。例え目覚ましで起きれたとしても、気を抜いたら二度寝してしまいそうになる。温い布団が俺のことを掴んで離そうとしないのだ。この分だとそのうち本気で二度寝の為に学校をサボるかもしれん。

……まあ、たまには良いんじゃないだろうか。だって俺、一応不良のカテゴリーな訳だし。

ただ目付きが悪い、髪が白いつて理由で因縁つけられて、絡まれて、見知らぬ誰かに気が付けば不良扱いされるくらいならいっそのこと自分から不良らしいことをした方が精神衛生的にいいと思う。

「おはよーございませう、乃咲くん」

いや、無駄か。学校サボろうもんなら殺せんせーがこんな具合で家庭訪問してくるに違いない。

学校サボろうなんて考えた所為か、殺せんせーの音が聞こえた。いかな。

空耳が聞こえた場合の対処法ってなんだろう？ やっぱ耳鼻科行くべき？ もしてかしてワンチャン普通に休める？ 病院行きますって休めるくね？

「のーぎーきーくーん」

おかしい、窓を外から叩かれる様な音と共に最近ようやく聴き慣れた声が俺を読んでいる気がする。

トントん、トントん。カーテンの奥の窓の外でノックされ続けている。妙だ。この時間なら、あの音速タコはハワイとかをウロウロして

る筈なのに。

ピリリリ、と部屋の中に電子音が響く。

スマホに着信。表示されている名前は『殺せんせー』。あの人の赴任初日に半ば強制的に交換させられた電話番号からの着信だった。

「もしもし」

『もしもし、おはようございます。乃咲くん。外は爽やかな朝ですよ、早速ですがこの窓を空けて、先生と朝食でもどうですか？』

ああ、やっぱり幻聴ではなかった。

殺せんせーの声とノック音が聞こえてから意図的に見ない様にしていた窓際を見て、絶句した。

『ヌルフッフッフ……』

そこには見る人が見たら卒倒しそうな恐怖心煽りまくりの絵図があった。

想像できるだろうか？ 朝起きたら、窓の外から自分の名前を呼ぶ声が聞こえ、窓を外から叩く声がある。この部屋は2階にあるにも関わらず、だ。挙句に電話に着信。電話に出てみると窓を開けると要求して来る不信な声。たまらず恐る恐る窓際を見ると締め切ったカーテンにくつきりと浮かぶ窓の外に張り付いた巨大タコの黒いシルエツトが……。

怖い、普通に恐怖だ。

しかも、触手が蠢いてるのが影と粘液のズルズル音で分かるのが更に恐怖心を煽る。やばい、下手なB級ホラー並みに怖いぞ、コレ。

つか、白昼堂々と生徒の家に張り付くなよ、国家機密だろうが、あのタコ。

ため息を吐きつつ、窓を開ける。

万が一にでも祖父母がコレに気付いたら大事だ。腰を抜かして動けなくなるか、腰を抜かしてギックリ腰やるか、最悪シヨック死しかねんぞ。

「殺せんせー。なにしてんの」

「昨日は朝食を抜いた様ですので、今日もやらかしてないかと心配になり、作って来た次第です。ちなみにカルマくんからは好評でした」

カルマの所にも行ったのか、コイツ。

「折角のところ有難いけど、朝食は普段は食べてるから心配いらないうすよ」

「にゅ、そうですか。でしたらお昼ご飯にでも食べて下さい。いつもコンビニ弁当では体に良くない。それに自信作ですの」

弁当箱を置くと殺せんせーはバビュン！と学校とは別方向に飛び立った。おそらく、これから英字新聞でも買って来るのだろう。

飛び去った風圧で部屋の中が散らからないあたり、絶妙な力加減してるよな、あのタコ。

ともあれ、弁当は普通に有難いのでいただこう。

「圭一、少し騒がしいが、なにかあったか？」

「……別に。朝から友達が電話してきただけ」

祖父が部屋に入って来るので誤魔化す。

まさか担任が物理的に飛んで来ました、なんて言えないから。それに、アレでも一応は国家機密だし。

今日は金曜だし、頑張ろう。

こうして予定外の訪問者がありはしたが、その後は特に何事もなく、朝食を食べて登校。

祖父母の家に越して来て最近漸く慣れた通学路を歩いていると、正面にはリーゼントな不良が1人とその取り巻きが数名、たむろしていた。

正直、邪魔だなあーとか思っていると、彼らは怯えた様に道を開けてくれた。

最近、こんな事が多い。ちよつと前まで『何見てんだ？ 白髪頭ゴラァ！』って感じにちよつと目が合っただけで絡まれてたのに。

少し不思議に思いつつ、なんとなく会釈して彼らの前を通過。そして直後にヒソヒソ話が聞こえて来た。

「おい、あれが柵ヶ丘の？」

「ああ、乃咲だ。あの銀髪は間違いないねえ」

「あれが赤い悪魔と並ぶ銀の死神かよ」

ちよつとまで、文脈的にあれだよな？ 彼らの言ってた『銀の死

神』って小つ恥ずかしい渾名は間違いなく、完璧に俺を指してたよね??

カルマが他校の不良から赤い悪魔とか呼ばれてるから間違い無いよね!? アイツと並んで喧嘩するの俺くらいだしねえ!?

「なんでも、10人がかりでも返り討ちにされるらしい。しかも、通り過ぎる様に1発当てて喧嘩相手を気絶させるするってとんでもねえレベル。アイツが通り過ぎただけで喧嘩相手が急に死んだみたいに倒れるからってついたのが『死神』、あの銀髪がシンボルだから『銀の死神』なんだとき」

聞いても無いのに解説ありがとう!?

なに、俺ってそんな大層な名前と呼ばれてるの!? しかもめっちゃくちゃ盛られてるし。

流石に10人も相手にできるわけがないだろう。一人一人、確実に処理してるだけだから。

烏間先生が磯貝たちにやった2対1とは違って、コンビネーションもクソも無い烏合の衆が相手。一人殴りかかって来たら別の奴が殴って来るだなんて単調な動きなら喧嘩慣れしてれば誰でも対応できる。

「まじかよ、やべー奴なんだな」

やめてくれ、勘弁してくれ、許してくれ。

めっちゃくちゃ顔が熱い。そんな大層なもんじゃないんだ。だからそんな話を周りに広げないでくれ。

顔が真っ赤になった通学路での一幕である。

それから少し経った後、E組校舎への道を歩いていると、獣道から猫が出て来て、擦り寄って来る。

猫は良いよな、妙な噂とか立たなくて済むから。

「よーっよーっ」

にゃんごろーん、と鳴き声を上げる野良猫を撫でる。首を撫で、耳の裏を搔く様に撫でると腹を見せて寝転んだのでわっしわっしと撫でる。ごろごろ、と喉を鳴らしているということは満足させられたんだろう。

少し名残惜しいが、そろそろ足を動かそう。猫を撫でる手を止めて、立ち上がる。

「あれ、乃咲くん？」

「……………えっと、倉橋さん」

猫を離すと後ろから声がかけられたので振り返る。振り返った先にいたのは1人の女子。茶髪と言うには赤いが、赤というには薄い。橙色の髪をしたゆるふわ髪型の女子。

名前は確か、倉橋陽菜乃さん。暗殺に積極的な生徒の1人。まあ、接点は殆どないので名前を知ってる程度だけだね。

「どうしたの？ その子」

撫でていた猫を見ながら首を傾げる。

もしかして、虐待してたとか思われてんのかな。いくら不良扱いされてるんだとしてもそれは嫌だなあ。

男女問わず、不良である俺は多少敬遠されているから、こう言う一挙手一投足に気をつけなきゃいけないのは面倒だな。

「野良猫。登校中によく会うんだわ」

「へー？ 随分と懐かれてるね」

「そうか？」

よかった、あらぬ疑いはかけられてないらしい。

心底安心した。ただでさえ、『銀の死神』だとかそんな渾名を付けられて困惑してるのに『動物虐待者』だなんて余計なこと渾名が付けられるのは勘弁願いたいからな。

「そうだよ。動物がお腹見せるのって信頼の現れなんだってさ。お腹は無防備な場所だからね」

「ほえ〜」

そう言われると何気なく撫でていた野良猫が途端に可愛らしく思えてくるのは何故だろう？

まあ、もともと顔立ちは整ってる子だけだ。

「ちなみに、服従の証明でもあったり〜」

「ええ…………」

それは少しショック。可愛がってたつもりが猫にとっては力の差

を叩き込まれてる屈辱的な絵面だったんだろうか？

そう思うと今し方感じた感動は180度違う方向に変わってしまったのだけだ。

「冗談だよ。その猫ちゃん見た感じだと普通に懐いてるだけだつて」

「驚かさなくてくれ、倉橋さん」

「あはは、ごめんごめん。珍しい組み合わせだったからさ。にしてはほんとに懐いてるね。もしかして飼ってるの？」

「いや、毎朝戯れてたらこうなった。あ、いや……………割と出会う野生動物はこんな感じだ」

言い合える前に考えてみて、言い直す。

そう言えば、出会う野生動物は大体こんな感じだと思う。野良猫や飼い猫、散歩中のワンちゃんにハト、カラスを始めとした鳥類など。

うちの祖父母曰く、亡くなった俺の母が動物に好かれやすい体質だったらしく、多分、俺もそれを継いだのかも。よく婆ちゃんが母さんに似てるって言うし。

「へえ、羨ましいいな。私も動物好きだからさ」

「ほーん、そうなのか」

しばらく猫を2人で可愛がってから学校に向かい直す。途中まで野良猫も付いてきたのだが、旧校舎が見えてくると森の中に姿を消した。

猫が居なくなり、校舎まで数十メートル。倉橋さんと2人きり。何だか気不味い状況になってしまう。

ここは俺の十八番、明日の天気の話でもしようか。そんな風に考えた時、彼女の方は意外とフレンドリーに話しかけてくる。

「さっきのミケ猫可愛かったね」

「だな、ミケもいいけど白もいいぞ？」

「最近、放課後に烏間先生と何してるの？」

「烏間先生が教師になった日に放課後の訓練頼んだんだよ。どうせならあんな大人になりたいよな」

「だよね！ 烏間先生、カッコいいよね！」

こんな具合で倉橋さんが話題を振ってくれるから気不味いことにはならなかった。案外、気不味さを感じてたのは俺一人なのかもしれない。

そして、何事もなく校舎に着き、授業開始。

いつも通り、教師に向けられた殺意と教師の熱意が渦巻く異様な教室の中で今日も生徒と教師の笑い声と銃声と共に始業のベルが鳴った。

殺せんせーのくれた弁当はマジで美味かった。

食レポ下手で申し訳ないが、特に唐揚げが絶品だった。カラツとジューシーとはああいう食感を言うのだろう。思わず某食戟アニメの様なりアクションをとって不破さんに絡まれた。

んで、迎えた放課後。

「乃咲くん。今日はナイフを使った対人術を教える。だが、いつも言ってる様に間違った使い方はしない様に」

「はいっ！」

俺は旧校舎の荒れている校庭で烏間先生に追加訓練を付けてもらっていた。

彼の生き方に憧れたあの日、俺は放課後に烏間先生に彼の時間が許すのならばと言う条件で放課後の追加訓練をお願いしたのだ。

「まずはいつも通り、俺に向かってナイフを振ってみろ」

「分かりました。いきますー！」

言われた通りにナイフを振るが、何処から攻撃が来るのかを理解している様に烏間先生の腕に塞がれ続ける。

「いいか、俺は君たちに正しい角度でどんな体勢でもナイフを振れと言ってきたな？ だが、それだけでは標的を殺せない。何故だ？」

烏間先生の問いに対する答えを考える。

だが、答えはすぐに出た。

「俺たちの標的がマツハ20のモンスターだからです」

「そうだ。だが、こうして人間の俺にすら攻撃を潰されている。それは何故だ？」

2度目の問いかけへの答えを考える。

コレも答えが分かる。

「俺が先生よりも遅く、先生から教わったナイフ術しか使えていないから。セオリーから抜け出せていないからです！」

言いながら脚を使ってみる。

烏間先生は別に驚いた様な表情は見せなかったが、ニヤリと笑って俺の蹴りを防いで見せた。

「そうだ。君たち生徒……赤羽くんを除いた全員に言えることだが、教わったことを素直に受け止め過ぎる。ナイフ術しか教えていないから当然だが、君達はまだ、ナイフを持つてる手だけを警戒していれば問題なく防げるレベルと言うことだ」

烏間先生との攻防が一度止まる。

どうやら一旦、講義が入るらしい。

「いいか。武器を持っている相手は確かに脅威だ。いかに正しい角度、崩れない体勢でナイフを振っても、ナイフを持つてる腕が一本だけなら攻撃の始点と支点は決まっている。だから、体を使え」

そう言っただけで烏間先生が対先生ナイフを取り出すと攻守を入れ替えることになった。つまり、俺がナイフを受ける側になり、烏間先生がナイフを振る側に回ったってこと。

「いくぞ」

「はー」

烏間先生がコレまで教えてくれたテクニクを使って攻撃してくる。それを授業中、今日までの個人レッスンで見ている自分なりに見て盗んだ防御テクニクで耐える。

「そう、よく耐えている。だが……」

烏間先生が一際鋭い突きを放つ。

それを辛うじて防いだのだが、続く予想外の攻撃に俺は呆気なく一本を取られてしまう。

突きを受け止めた直後、烏間先生の勢い付いた膝が俺の頬の数センチ先で寸止めされていた。

「さつき君がやったように、予想外の攻撃を加えることで攻撃に無数

のバリエーションと隙を生める。ナイフで攻撃すれば相手はひとまずナイフを警戒する。その隙を付いて蹴りや拳を振る。それがキミの次のステップだ」

「分かりました！」

今日の訓練も為になった。

多分、今日の烏間先生の教えには終わりはないのだろう。相手がナイフを持つてるならナイフを警戒する。ナイフに注意を向けながらそれ以外の挙動も警戒する。果てはきつと周りの状況も確認することも求められるのだろう。

「それはそうと、さっきのは俺が使ってる防御技術だな。よく出来ていた。その調子で頑張ってくれ」

「っ、はい！。ありがとうございました！」

烏間先生は放課後の訓練では実用的なテクニクと、対人技術も教えてくれる。

殺せんせー相手なら対人技術なんて要らないように思えるが、相手の警戒するべきポイントを教えてもらえることで、俺たちに狙われる殺せんせーの立場や警戒してであろうポイントも教えて貰える。

本当に為になる訓練だ。それに、こうして俺のことを見て、褒めてくれる。それが嬉しい。

こうして1時間ほど訓練して、烏間先生と別れる。

別れた後は自主練だ。

今日、烏間先生に教わったことを活かす為にまずは両手での攻撃方法を身に付けるべく、両手でナイフの素振りをしてみる。ただ、ナイフを2本も持っていないので、片方は適当な木の枝だけだ。

「おお、今日もやっていますねえ」

「殺せんせー。弁当ありがとう。美味しかったです」

「いえいえ。よろこんで貰えて何よりです。それよりも今日は変わったことをしてますねえ？ 二刀流ですか？」

「はい、烏間先生からの追加訓練で課題が見えたんで練習してたんです。相手の隙を確実に突くためのナイフ術を考えてたんです。ひとまず二刀を使うことにしたのでその時の動きのバリエーションなん

ですが……」

くるくると両手でナイフを回して頑張ってるアピールをしてみると、殺せんせーは絶句していた。目を見開き、唾然と口を開けていた。

「あの、殺せんせー?」

何故か急に呆然と立ち尽くしてしまった殺せんせーに問い掛けると、彼は軽く咳払いして、アドバイスをくれた。

「素晴らしい着眼点です。ですが、キミはまだ両手を同時に使える程に身体が出来上がっていない。まずは左手を右手と同じ位に使える様になりましょう!」

触手で頭を撫でたあと、殺せんせーは目の前から風を起こして消え去り、数秒後に一冊のノートを持って戻って来た。

「どうぞ。目指せ両利き! 訓練ノートです」

「あ、えっと、どうも」

渡されたノートを見てみると、無数の訓練方法がまとめられていた。

右手を左右に動かしながら左手は上下に動かすとか、ノートを左手で取ってみるとか、左手でペン回してみるとか。

「さて、乃咲くん? もう17時です。そろそろ帰りましょう。いくら慣れてるとは言っても暗い山を下るのは危ないですからねえ」

言われてスマホを見ると17時15分。本校舎で部活してる連中も早ければそろそろ帰る時間だ。

今日はもう帰ろう。

「じゃあ、殺せんせー。また月曜」

「はい、さようなら。良い週末を」

荷物を纏めて家に帰る。

帰りも不良たちに妙に避けられながら真っ直ぐ家に帰ると、普段は車なんて無いはずの駐車場に車が止まっている。

祖父母は免許を返納してる。だから、車は持ってないし、この車とナンバーには見覚えがある。

「……金曜だもんな」

希望もしない客人の来訪にゲンナリする。

「ただいま」

「お帰り、圭一。……お父さんが来てるよ」

「……わかってるよ」

金曜日は嫌いだ。

父が来る。

実家を追い出された俺。父は俺を祖父母の家に預ける条件として週に一度、金曜日に俺と面会することを条件付けられたらしい。

「……………」

「……………圭一」

「……………」

ただ。話すことはない。

父と俺の関係はとつくに修復出来ないレベルで終わっている。だから、祖父母には悪いけど、面会も話し合いも無意味だ。

俺に興味のない親父。

もう親父に期待してない俺。

どちらもなにも話すことなく時間が過ぎる。

決まって1時間が過ぎる頃には俺が痺れを切らして部屋に閉じ籠る。こんなことに時間を使うくらいなら、鳥間先生に認められるように自主練してる方がよっぽど有意義だ。

「話すこと、ないから」

「……………そうか」

これだ。引き留めるでも、話題を出すでもない。ただ無言で時間を過ごして俺が逃げようとする。「そうか」と溢して終わり。

こんなことなら庭の砂でも数えてる方が楽しげもあるってもんだ。時間の無駄だ。

15年、続いた関係が変わるわけない。

俺はとつくに諦めた。

俺は部屋に戻り、スマホにイヤホンを挿して耳に突っ込み、音楽を掛けて、晩飯も食わずに不貞寝する。

これが、乃咲圭一の日常だ。

8話 毒の時間

「殺せんせー、毒です！ 真心込めて作りました。飲んでくださいー！」
「……………まじかよ」

理科の実験が終わった後の理科室に失笑と苦笑がクラスメイト達の間を走る。

そらそうだろう。俺も驚いた。だって、彼女、奥田愛美のしていることは殺人教唆ならぬ自殺教唆。「このヤク飲んでトんでみいひいんか？」と任侠ものの悪役が言いそうなことを暗殺のターゲットに面と向かって言ってるんだから。

お菓子から着色料を取り出す実験をした後の甘い匂いの漂う理科室の中で彼女が何処からか取り出した、毒々しい色の液体の入ったフラスコ。

奥田さん。まずは二、三箇所突っ込みたい。毒なんてどうやって調合したのか、とか、そのフラスコどこから持って来たの？ とか。

それから、そんな馬鹿正直な無茶振りは最早、暗殺とすら言えないのではないんじゃないかい？ とか。

気付かれない様に口の中にぶち込んでいたヒモQを吹き出しそうになるのを必死に堪える。白米を食べたり、牛乳飲んだりした時に笑ったり、くしゃみしたりすると鼻から出ると同じ要領でヒモQが鼻から出るところだった。

「お、奥田さん。随分と素直で大胆な暗殺ですな」

「あ、あの、わたしは皆さんみたいに不意打ちとか上手く出来ませんので…………。けどっ！ 化学なら得意なので！ 真心込めて作りました！」

「なあ、原さんや。真心と毒ってイコールで直結するもんなのか？」
「さ、流石にしない…………と思う。いや、一生懸命作ってたって意味ならするのかな…………」

俺の感性がおかしいのか、近くにいた原さんに聞いてみるが、やはり彼女も判断に困るらしい。

そら困るよな。料理に真心込めたとかとはまるで意味合いが違ってくる訳だしね。

「それはそれは……。それではいただきます」

「飲むのかよ!？」

前原が全力でツツコミ入れた。

ツツコミ入れられると同時に渡された3本のうち、1本を缶ジュースでも飲むみたいな感覚で呷り飲む殺せんせーに悲鳴混じりなドヨメキが理科室を支配する。

なんだかんだで心配混じりな視線が向けられる中で殺せんせーは苦しそうな声を漏らすと同時に彼に異変が起こる。

「二ユ」

後頭部から何か、突起というか角が生えたぞ。

いや、本当に何が何だか分からない身体してるな、このタコ。この前、スマホ操作してるの見た時は『ああ、あの触手にも静電気とかあるんだあ』とかつい頷いてしまったり。

「この味は水酸化ナトリウムですね。人間が飲めば有害ですが、先生には効きませんよ」

「……そうですか」

いや、なんで味なんて知ってたんだよ、このタコ。

あれか？ 飲んだんか？ やべえよ、人間離れしすぎだろ。この前から頭の中は疑惑として浮かんでる殺せんせー元人間説みたいなのが否定されそうなレベルの衝撃的な事実だよ。

「あと2本あるんですねえ……」

「は、はい」

「それでは……! うっ、ぐううう、がはあっ」

少しばかり苦しそうな反応を見せると、今度は顔に翼が生えた。あれだ、ドラクエのドラゴスライム見たいな感じになった。つか、どんな仕組みで顔の形変わってるの？ あの顔ってか触手って実はかなり変幻自在な組織で出来てる？ 顔の色も緑のしましまになったりするくらいだし。

「今度は翼が生えた……」

「無駄に豪華な顔になって来たぞ」

「ふむ、これは酢酸タリウムの味ですね」

だからなんで味知ってんだよ、このタコ。

酸だぞ？ 一応触ったら溶ける系の危険物だよ？ 普通飲まない

よね、俺の感覚がおかしいのか。

「それでは最後の一本……！」

「どうなる!?!」

「さ、最後はどんな顔になるんだ!?!」

クラスメイトたちも気になるのだろう。皆の視線を独り占めする殺せんせーは俺たちにも聞こえるほど大きな心臓の鼓動を響かせる
と最期の変化を遂げた。

「……………」

まさかの無表情。

「殺せんせーの真顔薄っすう……」

「顔文字みてえだな」

『(☒|☒)』これだな。殺せんせーの今の顔を顔文字で表すなら
絶対にこれだ。

「圭一がLINEでよく使う顔文字に似てるな」

「磯貝、余計なこと言わんでいい」

「王水ですね」

「だからなんで味なんて知ってんだよ!?!」

寺坂がたまらず突っ込んだ。

アイツ、不良ぶってるけどイジってみたら絶対愉快的奴だろう。
ジャイアンみたいな声してるが、絶対に慣れて来たら弄られキャラ
だ。

けど、ナイスツツコミだ。寺坂がやらなきや俺がツツコミ入れてた
と思うし。

「奥田さんの毒はどれも人間には有毒ですが、先生にとっては顔色を
変える程度の威力です」

「……は、はあ……」

「先生の事は嫌いでも、暗殺のことは嫌いにならないで下さい」

「急にどうした!？」

突拍子のないことを言い出す殺せんせー。

もしかして、あれか？ 意外と効果あった？ 病気になった時に気が弱くなる見たいな現象だったりするのか、アレ？ だとしたら案外、毒攻めもアリじゃないかな。

「奥田さん？ キミの作る毒は素晴らしかったのですが、生徒が1人でそんな危険物を使うことを先生は教師として許容出来ません。今日は先生が付き添いますので、一緒に私に効く毒を使ってみましょう」

「は、はいっ！」

「た、ターゲットと一緒に作る、毒薬……」

「あとで色々聞いてみよう……」

今日の授業はこうして終わった。

だが、奥田さんの様な毒殺というアイデアは俺にはなかったのだから参考になったと思う。

殺せんせーを殺したら烏間先生は褒めてくれるだろうか？ そう思うとやる気が湧いてくる。

ただ、差し当たって一番の問題点は殺せんせーに効く毒とはなにか、だな。

普通に考えれば対先生BB弾なんだけど……殺せんせーって甘党らしいし、いちごケーキとかに混入させて誤飲して暗殺とかは……難しいそうだな。ケーキ切り分けてる時とかに見つかったら元も子もない。

うーむ……毒殺ねえ。

毒殺といえ、やっぱりシンプルに飲んだら死ぬ液体を酒とかに盛って飲ませるってのが思い浮かぶけど、生憎と殺せんせーを殺せる液体って……？

あ、れ？ 待てよ？

対先生BB弾の他にも、対先生ナイフなんて物もある。アレに関しては材質はゴムじゃなかったか？

ゴムってことは樹脂、つまりは油、つまりは原料は液体じゃねえの

？ 普通に殺せんせーを暗殺する毒殺する武器として普通に使えるんじゃない？

そう思った俺はスマホを使って色々調べた。

すると、BB弾もプラスチック。プラスチックと樹脂は基本的に同じものであることが確認できた。

案外近くに殺せんせーを殺せる毒があったものである。

殺せんせーが俺たちから回収したオヤツを寝ぐらに運んでる隙に鳥間先生に確認してみる。

「成る程、ゴムナイフやBB弾の原料を奴を殺す毒に、か。確かに有効かもしれない」

と、鳥間先生も頷いてくれた。

「だが、流石に原油を預けるわけにはいかないな。シンプルに危ない。目に入ったとか、誰かの口に入ったとかあった時に責任が取れん。まあ、誤飲の危険性は低いと思うがな」

むう、そう来たか。まあ、一応は油。可燃性物質だもんな。そう言われてしまうと食いがれない。

しかし、折角思いついたアイデア。他にも可能性を見つけられないかを考えてみる。

「あ、じゃあ、対生物物質で日用品をコーティングとか出来ませんか？」

「ほう」

「例えば縄跳びです。対先生ナイフとかの原料でコーティングしてやれば簡易的なムチとしても使えると思うんです。例えば縄跳びの手本を見せてくれと、殺せんせーにお願いして縄跳びを手渡せば、どさくさに紛れて触手を破壊できるかも」

「……なるほど、それは確かに効果的かもしれないな」

良かった。俺の考えた作戦は有効かもしれない。

「あと、原油は無理でも、ワックスに混ぜたりとか」

「ワックスか。夏休みと冬休みの長期休み前、床に塗布する事で登校日初日に奴の足を全て破壊する？」

「はい、全てもうまくいくとは思えませんけど」

「いや、謙遜する必要はない。キミの様な柔軟な発想は必要だ。今後ともよろしく頼む。期待しているぞ」

——期待。

その二文字に胸が躍った。

「はいっー」

自分の立てたいいくつかのプランに烏間先生は期待してくれているらしい。そう思うと本気でやる気が出た。

ひとまず、烏間先生には俺のハンドガンと縄跳びを預けてコーティングを依頼して置いた。今後、この作戦の有効性が立証出来れば他の生徒も希望する者には実施することになった。

まあ、しばらくは殺せんせーの暗殺にはナイフで参加だな。2と3日で完成するらしいし、秘密兵器の到着を楽しみにしよう。

?? ?? ??

翌日、奥田さんは殺せんせーと放課後に作ったとか言ってる毒薬をしつかり持って来た。

なんでも、殺せんせーの作った『正しい毒の保管方法』みたいな漫画をみて保管、管理、完成まで漕ぎ着けて来たらしい。

すごいな、奥田さんもだが、殺せんせー。彼女の安全のためにもここまでするか。わざわざ分かりやすい漫画って形にしてまで。

まあ、教師ってのは聖職者の一種らしいし、そう思うと殺せんせーも一応は聖人の部類なんだろうか？

「私は国語が苦手です。言葉遊びだとか、正解のない文脈が嫌いでも、理科は得意でした。正解は一つだけですからね」

「奥田さん……」

きっと、昨日のバカ正直な暗殺はそれが原因なんだろう。正解のないことが嫌いという気持ちは分かるが……。

「殺せんせーはきっと、私の才能を伸ばしてくれようとしてるんです。強みを伸ばせば後は必要ないって」

「……奥田——」

奥田さんの歪んだ解釈に、少し前、殺せんせーに正しい才能の伸ばし方を教わった杉野が一言、物申そうとするが、その前に殺せんせーが通勤して来た。

「殺せんせー！」

杉野が言い合える前に奥田さんが殺せんせーに駆け寄り、杉野が肩を落とすが、渚が肩を叩いて励ます。

一方で奥田さんは嬉しそうに、楽しそうに、薬を作ること、薬を作るまでにあつたことを語り、殺せんせーは満足そうに頷く。

「じゃあ、先生！ 飲んでみてください！」

「はいはい。それではいただきます」

殺せんせーは嬉しそうな奥田さんから薬を受け取ると昨日よりもやや大袈裟に薬をぐびぐびと飲んだ。

昨日と同様にプルプルと震え、ドクン、ドクンと激しく跳ねる心臓の音が俺たちの耳に届く。

「ヌルフッフッフ……ありがとうございます。奥田さん。キミのおかげで先生はまた一つ。素晴らしい力を手に入れました」

次に俺たちの鼓膜を叩いたのは不穏な言葉。

殺せんせーの口から飛び出したのは奥田さんを騙したとも取れる単語の羅列。

嫌な予感が反射的に俺たちの頭の中を突き抜けるが、そんな予感に俺たちがなす術などあるはずがなく、殺せんせーに視線を向けた時には時すでに遅し。

「ヌルフッフッフ……！ ヌルフッフッフッフ！！」

殺せんせーは第二形態を隠していた魔王の如く不敵な笑い声を上げながらシューシューと白い煙に包まれてゆき、教室の中がホワイトアウトする。

煙が明けた頃、俺たちは目を疑った。

「ふう……」

銀色の体。普段とは全く違う、黄色いタコの様な体ではなく、先日彼の変身をドラクエで例えたので、今の状態もドラクエで例えるのなら、今の殺せんせーは、はぐれメタルだ。

「溶けた!!?」

「奥田さん。キミに作って貰ったのはね、先生の細胞を活性化させて流動性を増す薬なのです」

「え……………」

告げられた残酷な事実にも動揺する奥田さんを置き去りに、俺たちを物理的にも置き去りにするスピードで殺せんせーは超移動し、片岡の机の中に潜り込んだ。

「液状故にどんな隙間にも入り込むことが可能に」

「…………どこ入ってるのよ」

今度は呆れ気味な声をこぼす片岡を置き去りに殺せんせーは加速、俺たちの教室を縦横無尽に飛び回る。

「さあ！ 先生を殺してみなさい！」

「ちよつ、無理無理!! 床とか天井の隙間に入り込まれたら狙いようがないってば!」

殺せんせーの挑発にショックを受けている奥田さん以外の皆が一斉に銃を構えるが、誰一人として狙いをつけることが出来ずに視線と行き場のない銃口が虚しくあちこちを向くばかり。

「騙したんですか!? 殺せんせー!!」

奥田さんの悲痛な叫びが教室に木霊する。

その言葉に殺せんせーは教室の右上隅で停止するとニヤリとはぐれメタル状の体の口に当たる部分を歪ませた。

「奥田さん。暗殺には人を騙す国語力も必要ですよ」

「えつ……………」

「どんなに優れた毒を作っても、作れたとしても、前回と今回の様に馬鹿正直に渡したのでは、ターゲットに利用されて終わりです。今の様にね? 例えば…………渚くん。キミが先生に毒を盛るならどうしますか?」

「え? えつと……………」

突然矛先の向いた渚は一瞬だけキョトンとすると首を傾げながら彼なりの答えを捻り出す。

「うーん…………。先生の好きな甘いジュースで毒を割って特製ジュース

とか言つて渡すとか、かな？」

「そう。人を騙し、動かすなら、他人の気持ちを知り、言葉を工夫する必要がある。上手な毒の盛り方、それに必要なのが国語力です」

渚の解答と殺せんせーの言葉にはつとずる奥田さんは殺せんせーを真っ直ぐ見据えた。

「キミの理科の才能は将来みんなの助けになるでしょう。そのチカラを分かりやすく皆に伝えるために毒を渡す国語力も鍛えて下さい？」

「は、はいっ!!」

服を着て、いつも通りの姿に戻った殺せんせーに元気よく返事する奥田さん。やる気に満ちた返事に殺せんせーはやはり満足そうに頷く。

彼の言葉はまた、1人の生徒の心を動かした。

「あつはは。やっぱり暗殺以前の問題だねえ」

揶揄う様に笑うカルマに全員が苦笑を浮かべる。

どんなに強力な毒を持った生徒も今のままでは殺せんせーにとってはただの生徒になってしまうのだろう。

俺たちの殺意を教師として受け止め、教師として諭し、殺意を否定するのではなく、正しい才能へと研ぎ澄ましてくれる殺せんせー。

彼は、本当に他の教師連中とは違うんじゃないか、俺を見て、俺の親父を褒めてくる様な大人とは違うんじゃないのか。

1人、また1人と手入れされて行くクラスメイトたちを見て俺の期待は少しずつ確かな形になり、徐々に大きくなりつつあった。

?? ?? ??

放課後、烏間先生に訓練を付けて貰う。

「シツ……………」

「……………」

殺せんせーから貰った『目指せ両利き訓練ノート』のお陰でかなり両手でのナイフ捌きが上手くなってきたのではないかと、思う様になったが、まだ烏間先生に見せるには幼稚すぎると判断した為に右

手でナイフを振り、左手で殴り掛かると言った攻撃方法をとって見てみているが彼は少し驚いた顔を見せるものの、何事もなかった様に対処してくる。

そんな先生の反応を見て俺は二つ思うことがあった。単純に、烏間先生を驚かすことが出来たことへの満足感とそれでも何事も無い様に対処されることへの悔しさ。

ああ、悔しさなんて感じるのはいつぶりだろう？

まだやる気に溢れ、認められる為に頑張っていた頃。一年生の頃の2回目のテストで浅野に負けた時以来かもしれない。

「まだっ！」

躲された攻撃の勢いを利用して裏拳を放つがそれも躲され、烏間先生は無防備になった俺の腕を掴み、組み伏せてくる。

組み伏せられる直前、視界がモノクロに染まる。世界がスローモーションになり、思考が世界を突き放した様に感じられる感覚が俺を襲った。

……まただ。

カルマが崖から落ちたのを見た時から、ヤバいと思った時、ふとするとこの感覚に襲われる。

世界がスローモーションに見える中で自分は身動きが取れない。いや、動いてる感覚はあるのに、硬い粘液の中を動いてる様な動き辛さを覚えていつも通りに動くことが出来ない。

ただ、そんな中で頭の中を空っぽにする様に目を瞑ると世界は元通りになる。俺は組み伏せられて空を見上げている。

「……負けました」

「ふっ……。まだ素人には負けなさい」

手を借りて立たせてもらい、ジャージに着いた土埃を落としていると、烏間先生に電話が来たらしい。

「……はい、はい……。そうですか、配属が決まりましたか」

立ち聞きしちゃ悪いと思ったので、ダウンを始めていると烏間先生がため息を吐きながら近づいて来た。

「どうしましたか？」

「乃咲くん。一つ、言っておかねばならないことが出来た」

鳥間先生の神妙な面持ちに思わず身構える。

次に来る言葉を待っていると予想斜め上の言葉が飛んできた。

「明日から1人、暗殺者が派遣されることになった」

「……まじかよ」

9話 ビッチの時間

「イリーナ・イエラビッチと申します、皆さんよろしく!!」
どえらい美人がそこにいた。

陽光を反射する様な見事なウェーブの掛かった金髪と透き通る様な白い肌、大きな瞳と高い鼻で強調された整った顔立ちの美女。

イリーナ・イエラビッチを名乗る女教師が今日、俺たちの教室に赴任してきたのだ。

……なぜか、殺せんせーにベタ惚れした状態で。

いや、ほんと、この美人とあのタコとの間に何が起きたと言うのか？ 不思議な光景だ。

けれど、この女の正体は昨日のうちから烏間先生から聞いている。実際に彼から聞いていない者たちも薄らとは気付いてる事だろう。

あの女は殺し屋だ。

俺たちには興味なんて無いだろう。

一応、英語を担当するALTを名乗って俺たちを見ているが、あくまで俺たちの”方”を見ているだけ。

俺たちと目を合わせようとすらしらない。

直感的には分かった。分かってしまった。

俺はこの人が嫌いだと。

「本格的な外国語に触れさせたいという学校からの要望だ。今日から英語の授業の半分は彼女が受け持つことになる」

「……そう言う事なら仕方ありませんねえ」

一応の建前を烏間先生が話しているが、聞けば聞くほどにきな臭い話だ。

だって、ここは本校舎から見捨てられた生徒の集う特別強化学級だ。そんなところに態々、ALTを派遣するなんて普段のE組への扱いを考えればあり得ないとすぐに分かる。

それに、あんな動きづらそうな服を着てる癖にこの校舎までの決して平坦ではない道のりを汗一つかかずに登り切れるものか？

汗は拭いた可能性はあるが、あの格好から察するに外履はヒールだろう。ヒールであるの山道を踏破する奴が只者である筈がない。

……いや。まあ、殺せんせーが運んだ可能性は否定できないけど。などと考えている間も殺せんせーと殺し屋女教師なんてとんでもない属性を持った女がイチャコラしてる。

そういえば殺せんせーに色仕掛けって効くのかな？ とか思ったりしたけど、見た感じ、バツチリ通じてるらしい。

タコの癖に人間相手に欲情すんのかい。いつだったかに考えた渚との触手プレイも現実味を帯びて来たぞ。

「ああ、見れば見るほどに素敵……！ その正露丸みたいになつづらな瞳、曖昧な関節……！ 私、もう虜になってしまっそう〜！」

「いやあ、照れますねえ」

（（騙されないで、殺せんせー。そこがツボな女なんて絶対にいないから!!））

なんだろう。女子たちの心の叫びが聞こえた気がした。

?? ?? ??

昼休み、俺は烏間先生に絡みに行こうと思ったのだが、なにやられただならない雰囲気 of 烏間先生とイリーナ先生が校庭で暗殺に興じる皆んなを見て話し合っていた。

「あの、烏間先生。今いいでしょうか？」

念のため、一声かけると2人がこっちを向く。

朝から昼休みまでの計4時間、俺は何度か職員室に行ったのだが、その間、このイリーナ・イエラビッチという教師とは一度たりとも目が合うことはなかった。

その女が、今、初めて俺に興味を向けたらしい。

「アンタが乃咲？」

「そうだ。乃咲圭一くん。この教室で初めて奴の触手を破壊した人物だ」

「ふうん。貰った資料には目を通したけど、アンタ。あの乃咲新一の

子供なんだって?」

「だったらなんだよ」

やっとこつちを見たと思つたら、余計な情報が飛び出して来たので思わず低い声を出してしまふ。

教師相手に不味いとは思つたが、ここは不良のレツテルに甘えるでしょう。そもそも、この人は殺し屋。言つてしまえば殺人鬼。気を許せる筈がない。

それに、さつき殺せんせーに見せていた態度と今の態度が違い過ぎる。確実にこつちの素っ気ないというか、冷たい側面が素だろう。

もつとも、女つてのは惚れた相手とその他大勢に対しては態度が変わるつて言うし。この女が殺せんせーにガチ惚れしてるつてんなら話は変わつてくるけれど。

「アンタ、純粋な日本人じゃないわね?」

「母方の祖母が西洋系でして。自分はクォーターつて奴なもんで。この髪は母方の遺伝です」

「そ。将来が楽しみね。そんで、話は変わるけど、あのタコの触手を破壊した時、なにか特別に気をつけていたことつてあるのかしら?」

本当に急に話が変わつた。

関係のない話から、触手破壊した時の話への転換は流れる様に行われた。これがコミュニケーション能力つて奴なんだろうか?

「いえ、別に。ただ、潮田渚つて奴が殺せんせー……あのタコの弱点をまとめたメモを作つてます。俺はその弱点メモと現場の状況を当てはめただけですよ」

「ふーん、潮田……潮田……ああ、あの男か女か判り辛い奴のことね。オツケー、一応礼を言つてあげるわ」

ガチもんの殺し屋とあまり関わり合いになりたくなかつたので聞かれたことを全て話すと、イリーナ先生は以外にと素直にお礼を言つた。

お礼を言つてくれたのだが、その後の行動が完全に、対処不能なほどに予想外だつた。

「ん……」

「んむうぐう!？」

お礼を言った後、早速、渚に絡みに行こうとしたのかと思つて歩き出したイリーナ先生を見送ろうとしたのだから、彼女は何故だか、俺の方に近づいて来て、何が何だか判断できないうちにキスされた。

もう一度言う。キスされた。

何を言ってるかわからないと思うが俺も何が起こっているのか分からない。

しかもだ。なにか柔らかい物が唇に触れたなーって思った瞬間、唇の間を何かヌメツと熱くて柔らかい物がこじ開けて、口内に入つて来た。

口内に溜まった唾液を舐め取る様に口の中をイリーナ先生の舌が蹂躪してくる中、なす術なく呆然としてしていると、頭の中が白く染まつて来た。

「んむふうあ……」

意識が遠のくと同時に唇が離される。

グープなキスの所為でまともに酸素が吸えなかった肺が悲鳴を上げているのが分かる。

「あら、最近の若い子はこの程度でへばるのね。てっきりもっと進んでるもんだとばかり思つてたわ」

そんな捨て台詞が鼓膜を叩くと同時に俺の意識はもう、どうしようもないほどに真っ白に染まっていた。

「乃咲くん!? 大丈夫か、乃咲くん!」

鳥間先生、もう少し早く助けて欲しかった……。

?? ?? ??

「殺せんせー!」

みんなで暗殺していると、聞きなれない声が聞こえて来た。誰だろう? そんな問いは必要ない。

だって、この教室で一番の新参者。明らかに堅気ではない女性教師。イリーナ・イエラビツチ先生その人だったから。

「烏間先生と乃咲くんから聞きましたわ！ とつても足が速いですつてね！」

「……乃咲？ もうこの人と接触してたの？」

「いやあ、それほどでもないです」

「お願いがあるの！ 実は私、一度でいいから本場ベトナムのコーヒーを飲んでみたくなってえ。私が英語を教えている間に買って来て貰えないですか？」

「お安い御用です！ ベトナムに良い店を知ってますから！」

バビュン！ と凄まじい音と風圧を残して飛び去る殺せんせー。呆氣にとられる僕ら。残された僕らに始業を知らせるチャイムが鳴る。

「あ、あの。イリーナ先生？ 教室に戻りませんか？ チャイム鳴ったし」

「……はあ」

チャイムが鳴っても動く素振りのない先生に学級委員らしく磯貝くんが口を開くと今度はわざとらしい溜息を吐く。

「面倒だから自習でもしてなさいな」

「……え？」

「それと、気安くファーストネームで呼ばないでくれる？ イエラビッチお姉様とでも呼びなさい」

クラスメイトたちが絶句する。殺せんせーの前でのキャラと余りにも違いすぎているから。けど、そんな中でも平然と普段通りの口調を崩さない問題児がここに1人……。

「んで、どーするのビッチ姉さん」

「略すな!!」

流石だ、カルマくん。この場でこんな返しができるのは彼か乃咲くらいなもんだらう。

「というか、その乃咲は何処に行ったの？」

「俺ら全員でも殺せないタコをアンター1人で殺せるわけ？」

「……ふん。ガキねえ。大人には大人の殺し方ってのがあるのよ。あのタコには色仕掛けが通じるみたいだし、私の本分だわ」

吐き捨てる様にいうビッチ姉さんが不意に視線を僕に向ける。なんだか、獲物を見つけた猛禽類の様な目に思わず身震い。

「アンタが潮田渚でしょう？ さつき乃咲から聞いたわよ。あのタコの弱点メモってるんだって？」

「えっ……んむあ!?!」

「うそっ!?!」

「……へえ」

急にキスされた。それもただのキスではない。口の中に舌まで入れるディープな奴。

思わず突き飛ばそうとかそんなのすら考えられずになすがままキスされていると意識が飛びそうになった。

「あら？ 乃咲はこれで意識が飛んでたのに。辛抱強いのね」

「羨ましいぞ乃咲い!」

岡島くんが発狂する。

僕は初めてのキスがだいたい衝撃展開だったので惚けてしまっていると、ビッチ姉さんは高らかに宣言する。

「いい？ 私の暗殺に協力するって奴には相応の報酬をあげるわ。男にはこんな風に良い思いをさせてあげるし、女子には男を貸してあげる。まあ、強制的に喋らせる方法なんて、いくらでもあるけどね」

そんな声と共に裏山の方から3人の男が歩いて来た。

屈強で、明らかに堅気ではない人たち。

「技術も人脈もあるのがプロの殺し屋よ。協力する気のないガキどもは外で拜んでなさい。邪魔するなら……殺すわよ」

男の1人から小さいリボルバーを受け取ると僕らに殺すと宣言したビッチ姉さん。

僕らは本物の殺し屋の「殺す」って言葉の重みを感じると同時に思った。『この先生は嫌いだ』と。

ただ、その後に僕らが何か出来るはずもなく、一応は教室に戻った僕らと、教卓の椅子に座って仕事のプランを見直してるらしい。

戻る途中で職員室に呼び出されて弱点メモの中身を吐かされた僕には疑問があった。職員室に烏間先生がいなかったことと、授業が始

まっても乃咲が戻って来てなかったこと。

そんな僕の疑問に気付くわけもなく、なにか一人でクスクス笑つてるビッチ姉さんに岡野さんが口を開く。

「ねえビッチ姉さん授業してよ」

「そうだよビッチ姉さん」

みんながビッチビッチ言うもんだからキレたらしいビッチ姉さんが言葉を荒げる。

「づああああー！ ビッチビッチうるさいわねえ！」

「でも一応はここじゃあ先生なんだろ、ビッチ姉さん」

「うるさいわねえ！ そもそもアンタら日本人の発音がおかしいのよ！ VとBの発音の違いもわからないのね!? もういい。正しいVの発音を教えてあげるわ、ほら、下唇を軽く噛んで」

ようやく授業らしいことが始まったので、言われた通りにすると予想外のその後の対応に僕らはイラついた。

「そうそう。そうしておけば静かでもいいわ」

（（なんなんだ、この授業……!!））

とかなんとかしていると教室の扉が開き、ふらふらした乃咲が戻って来た。

「あら、乃咲。アンタ遅刻よ」

（（授業らしい授業してない癖に！））

「はあい、すみましてえーん」

「乃咲!？」

変わり果てた乃咲の姿に全員が思わず叫んだ。

教室の外には何やら心配そうに乃咲を見て頭を抱える鳥間先生の姿がある。

「の、乃咲い！ ビッチ姉さんとティープなのしたんだって!? どうだったんだよ！」

岡島くんのダル絡みにも何処かほわっとした乃咲は気にも留めることなく、ただ一言。

「……真っ白になった」

「羨ましいぞこのヤロー!!」

「止めろよ〜」

「べぶっ!？」

「岡島あああ!!？」

その後、岡島くんがガツクンガツクンと揺らされまくった乃咲が彼を反射的に投げ飛ばしたり、それで元に戻ったかと思えば椅子に座る時に体制崩してひっくり返った乃咲に磯貝くんが駆け寄ったりと5時間目の英語は一切、授業が進まなかった。

そして迎えた6時間目の体育の時間。

「烏間先生。私たち、あの人嫌いです」

片岡さんが容赦ない一言を烏間先生に言い放つ。

「んあ〜、なんか意識がぼーっとする。主にビッチさんにキスされたあとくらいから」

「の、乃咲くん。大丈夫？」

「え、うん」

乃咲はようやく元に戻ったらしい。

射撃訓練に元気よく参加している。

「お、おい見ろよ！ ビッチ姉さんが！」

「殺せんせーを体育倉庫に連れ込んでる!？」

「……なんか幻滅。殺せんせーあんな人に騙されちゃう人なんだ」

「烏間先生、どうにかありませんか？ 俺たち今年受験なのに、このままじゃ勉強できないですよ」

磯貝くんも苦言を呈するが、烏間先生は申し訳なさそうに頭を下げ

「すまない。殺しに関してはプロである彼女に一任しろと国からの指示が来ていてな。勉強環境に関しては最大限、改善を試みるがイリーナは上からの指示がない限りは余程のことがない限り、解任はできない」

「……なあ、あの人ってそんな酷い人なの？」

昼休み、5時間目と居なかった乃咲が聞いて来たので昼休みまでの出来事をすべて話して聞かせる。

「……烏間先生。渚たちは銃を持ってるビッチに『殺す』って脅された

らしいんですけど。これって余程なことではないんですか？ 本物の殺し屋が銃を持って中学生を脅してる訳ですが」

話し終えると乃咲のリアクションは早かった。

的確に起こったことを烏間先生に躊躇いなく問い掛ける。さつきまで惚けていたのにこの切り替えと思考の速さ。本当に乃咲は地頭がいい。

これで『100点ですけど？ 5教科の合計で』とか言ってるんだから本気で言ってるのが疑わしいところだ。

「それは把握していなかった。すまない。そこに関しては全力で改善しよう。キミらの安全を守るのはまず第一の優先事項だ」

「お願いします」

烏間先生と乃咲の言葉のやり取りに呆気に取られていると体育倉庫からけたたましい銃声と煙が上がった。

まさか実弾を使ったのか？ 疑問に思うと同時に今度は酷く下品な音が聞こえて来た。ヌルヌルヌルヌルヌルヌルと激しい粘液の音が響いた。

「な、なにが起きてるんだ!？」

「行ってみようぜ!」

岡島くんと前原くん。エロい話が好きな2人が率先して駆け寄るので、その後ろ姿を僕らも追うと、体育倉庫からブルマと運動着、鉢巻き姿にされたビッチ姉さんが出て来た。

「まさかかうねる触手と粘液で小顔効果のあるマッサージされて、リンパを刺激されて……あんなことや、こんなことまで……」

不安な一言を残して倒れたビッチ姉さん。

遅れて体育倉庫から出て来た殺せんせーの顔の色は薄いピンク色。エロいことを考えてる時の顔だ。

「何したの、殺せんせー」

「……さあね。大人には大人の手入れがありますから」

「悪い大人の顔だ!」

「……まじか、実写触手プレイ。見てみたかった」

「乃咲のそのちよいちよい出てくるアブノーマルな趣味はなんなの

!？」

乃咲のアブノーマルな趣向もそこそこに、その後、倒れたビッチ先生を放置して僕らは教室に戻ることにした。

?? ?? ??

「どうやらビッチ姉さんというのはカルマの命名だったらしい。ちなみに、その当のビッチ姉さんと言えば……。」

「ブツブツ……。」

昨日の暗殺失敗が尾を引いてるらしい。爪を噛みながらブツブツと言っていた。

「ははは、必死だねえ。ビッチ姉さん」

カルマが煽るが反応はしない。

このままでは埒が開かない。

今は英語の授業中なのだが、昨日も今日も英語の授業が進んでいない所為でクラスのみんながピリついてる。

ちなみに俺はピリついてはいない。だって学年最下位だし、今更まじめに授業受けても体育以外は追いつかないだろうから。

しかし、周りは違う。

「あの、先生。授業してくれませんか？ してくれないならせめて殺せんとせーと変わってくれませんか？ 俺たち、一応今年は受験なので」
磯貝が先頭を切って頼むんでみるが、それがビッチ姉さんの中の琴線に触れたようで、彼女はヒートアップした。

「はっ？ 授業？ アンタらお子様はお気楽で良いわねえ」

「……え？」

お気楽呼ばわりされて惚けた反応する面々。

そんなみんなの反応を気にしてないのか、気付いていないのか、ビッチ姉さんは言葉を続けた。

「分かってるの？ あの破壊生物は来年には地球を滅ぼすのよ？ そ

れでもアイツに教わりたい訳？ ガキは平和で良いわよねえ」

「何が言いたいのか？」

「地球滅亡と受験を比べられるアンタらが羨ましいなと思ったのよ。だってそうでしょ？ 私も烏間も、他にもいろんな奴らがアイツを殺すのに躍起になってるのに、アンタらは勉強勉強って」

「それは……」

このビッチ、痛いところを突く。

言ってることはその通りだ。俺たちは殺し屋といっても彼女にとってはおアマチュア。実績のない自称暗殺者に過ぎないだろう。

彼女の言ってる通り、烏間先生もその他の俺たちに見えないところにいる連中もきつと、殺せんせーを殺すのに躍起になってるのだろう。

恐らくは、この仕事を受ける過程でそう言った人らを見てるのかもしれない。もしくはそんな事態で殺せんせーを殺すと言う大任を任された自分の仕事への自負もあるのだろうか。

烏間先生がプロ同士として俺たちに向き合ってくれていても、彼女にとっては俺たちはアマチュア。心持ちが全然違うことの現れでもあるのかもしれない。

事実、俺たちの暗殺には笑顔が付きものだし、失敗を活かせる”次回”がこの一年の間に何度もある。プロたちにはない、次の機会が何度もある。

地球を破壊するモンスターをどうこう以前に殺すという行為への覚悟の足らなさを全面的に責めているのであれば、ビッチ姉さんの言葉はそういう意味での確だった。

だがしかし、その後の言葉は余計だった。

「それにアンタらE組ってこの学校の落ちこぼれなんですよ？ だって勉強なんかよりも暗殺に力を入れた方が有意義じゃない？」

「アンタら全員私に協力なさいよ。そうだわ、1人につき500万円あげる。アンタらがこの先一生目にするののない大金よ？ 無駄な勉強するよりよっぽど有益——」

言い終える前に、ビッチ姉さんの言葉を遮るかの如く一つの消しゴムが彼女の耳一つ程横に飛んでゆき、黒板に当たって床に落ちる。

そう、彼女の言葉は正論だ。大人気なくはあるが、極論ではあるが、正論だ。正論だからこそ、人は反感を抱く。まして精神的に未熟な中学生がそんな言葉に素直に頷けるはずがない。

「出てけよ」

怒りを感じさせる眩きが教室に木霊する。

「そうだ！ 出てけえ！」

「そうだそうだ！ 巨乳なんていらぬ！」

「茅野だけ言ってることおかしいよ!?!」

「俺と渚のファーストキスを返せえ！」

「贅沢言つてんなよ、乃咲い！」

こうして無事に学級崩壊したわけだが、俺はと言うと、正直に言つてビッチ姉さんの技術には興味があった。

最近、鳥間先生との訓練で度々発生する、世界が遅れるような感覚が昨日、ビッチ姉さんに接近されてからキスされるまで起こらなかったこと。それが少し不可解だった。

あの現象が発生する条件は今のところ、“ヤバい”と俺が極限まで緊張することなんだと思う。

初めて発生したのはカルマの投身自殺紛いの暗殺時、2回目以降は鳥間先生との訓練中に“ヤバい負ける”と思った時。

これは俺の警戒心が極限まで高まつてる時に起こっているのだろう。恐らくは、だけど。

「……………」

つまり、それが発生しなかった昨日のキスまでの一連の流れは俺がビッチ姉さんを警戒しきれなかったことが原因なんだろう。

しかし妙だ。昨日も思った通り、あの人はプロの殺し屋、殺し屋といえど格好いいが本質は殺人鬼。俺もそんなことは理解してたし、警戒してたはずなのに、その警戒を正面からすり抜けて来た。

あの人の警戒心をすり抜ける技術は近接での暗殺をするのにこの上なく役に立つスキルだろう。

しかし、どうするよ。あの人にどうやって近づくよ？ みんな揃つて学級崩壊させた訳だし、それ以前に邪魔したら殺す宣言されてるら

しいし、なにが邪魔扱いされるか分からないもんな。
俺は思考放棄してみんなと素直に学級崩壊した。

10話 プロの時間

「もう！ なんなのよあのガキども！」

「当然の結果だろうが」

「そもそも私は殺し屋なのよ!? 教師なんて専門外なのよ！ 仕事にだけ集中させてよ!!!」

イリーナ・イエラビッチは荒れていた。

整った顔は怒りで歪み、控えめな化粧はほんの少しだけ崩れている。そんな彼女、イリーナは「女」を武器にした殺し屋である。

そんな彼女がメイクの崩れにすら気付かない程に今の彼女の怒りは凄まじいものだったと言える。

「……………はあ」

しかし、イリーナの怒りをぶつけられている当の本人はと言えば深々とため息を吐くばかりでまるで彼女を相手にしていない。『何を言い出すかと思えば、なんだ、そんなことか』とでも言いたがな息遣いに殺し屋の怒りは更に沸騰する。

鳥間はそんなイリーナの態度に再度ため息を溢すと職員室に設けられた自分の席を立つと右手の親指で雑に職員室のドアを指さす。

「視察に行くぞ」

「はあ？ 何言ってるのよ、この期に及んで」

「いいから。お前にプロの仕事を見せてやる」

「……………この私にそんな大口を叩いて…………」

「気に食わないのであれば殺せば良い。この俺を殺れるのであればな。だが、まずは来い」

有無も合わせない鳥間の言葉。

ムツとしたイリーナは内心でボヤク「この場にプロなどいるはずがない」と決め付けてしたり顔をする。

鳥間はいい男だ。自分を納得させるだけの材料を提示できなければ、味見するのもいいだろう。殺すまではせずとも強請ってあのターゲットや国の方針など有る事無い事話せるのも悪くはない。

そう思ったイリーナは歩き出した鳥間の背中を追う。

昇降口で靴を履き替え、外に出た鳥間は迷う事なくE組で使っている校舎の裏を歩き、裏山に通じる獣道を歩く。

ヒールを履いたイリーナにとっては歩きづらい道なりだったが、一応は我慢して歩く。そして、辿り着いたらしい。鳥間が何の前触れもなく止まると、彼女の動きを手で制する。

「そこから覗いてみる」

「なんなのよ……」

言われるがままに覗くとそこにはターゲット。

生徒達から殺せんせーと呼ばれ、慕われている来年には地球を爆破すると宣言している破壊生物がビーチベッドに横になりながら何かを書いている。

バインダーに挟まれている紙に向かってとんでもないスピードでペンや定規、分度器などが往復している。

「なにしてんのよ、アイツ」

「テスト問題を作ってる。どうやら水曜日6時間目の恒例らしい。あの校舎にはコピー機がないからな。奴が一枚一枚、手書きしているんだ」

鳥間の答えに「へー」と気の無い返事をするがイリーナは一つの違和感に気付く。ただ問題を書き写すには時間がかかり過ぎていると。

「時間かかり過ぎじゃない？ マツハ20ならもっと早く終わるでしょ」

「ああ。本来ならな。だが、奴は時間かかる。あのテスト、一枚一枚問題が違うんだ」

「……どういう事よ？」

「生徒たちに見せた貫つたのだが、彼ら一人一人の得意分野や苦手分野に合わせて問題を別々に作っている。クラス全員分な」

「なっ……!?!」

「高度な知能と多種多様な用途に用いられる万能の触手、そして卓越したスピードを兼ね備えた地球を破壊する超生物。そんな奴の教師

としての仕事は完璧に近い」

イリーナには反論出来なかった。

何故ならこうして殺せんせーを見ている2人の他にも気配があった。殺気があった。この瞬間も誰かが彼を狙っている。

暗殺対象として周囲を警戒しながら生徒一人一人にあつたレベルの教育を施すその手腕を否定できるだけの材料を彼女は持ち合わせていなかった。

「次は生徒達を見てみる」

「……………」

黙って烏間について行くイリーナは度々校庭やら教室でさまざまな事に興じている生徒達を見た。

ただ談笑しているように見える者たちも居たが、中には射撃の自主練やナイフ術の訓練をしている生徒たちもいた事をイリーナは見過ごさなかつたいや、見落とさなかつた。

「あれを見ろ」

「…………いや、あれこそただ遊んでるだけじゃない？」

「もつとよく見ろ」

烏間が指差したのは校庭に白線で描かれたコートに集まっている生徒たちがボール遊びをしている光景だ。

流石に遊んでいるだけ。そう見えたイリーナだが、烏間は違うと言いつ切るようにもつと観察する事を命じてくる。

癪だが、何にも気づかないと思われることも気に食わない。そう思つて目を凝らすと生徒たちの手になにか、武器エモンが握られていることに気付く。

「俺が教えた暗殺バドミントンだ。ナイフを標的に向かつて正しく振る斬撃、標的を真つ直ぐに刺し貫く刺突の訓練になる遊びだ」

「…………結局は遊びでしょ」

「そうだな。だが、そもそも彼らはただの中学生だ。勉学が本業であることに変わりはない。だが、ああやって暗殺に必要な技能を身につけてくれようとしている。無論、報酬の為ではあるがな」

「……………」

彼女が武器に気付いた頃を見計らって少年少女たちの遊びの真意を伝えるとイリーナは言葉を失った。

今、まさに少し前に自分が職員室で言い放った言葉が自分の胸に突き刺さるような感覚に陥る。

「あ、いた。ビッチ姉さん」

そこにやって来たのは銀髪の少年。

昨日、キスしただけで気を失ったガキ。

「……あんま舐めた口聞くと殺すわよ」

口を付いた脅しには覇気がない。

不思議そうに首を傾げて烏間を見る圭一になんでもない、と言うようにイリーナを顎で刺して話の続きを流す。

「すみません。イエラビッチ先生。実はご教授願いたいことがあります」

「ご教授……？ なにを」

「標的に警戒されずに近づく技術というか、コツを」

思ってもみなかったら言葉が圭一の口から飛び出し、イリーナは思わず口をぱくぱくと動かし、烏間を伺う様に見ると彼は腕を組んで彼女の目を真っ直ぐに見据えて言った。

「この生徒はこうして勉強の間にも熱心に技術を磨いている。奴は暗殺対象と教師として、彼らは殺し屋と生徒としてそれぞれの役割を果たそうと最善を尽くしてる」

「……？」

圭一は話に置いて行かれて首を傾げるが、そんな彼を置き去りに烏間が言い放った一言はイリーナにトドメを刺した。

「あの怪物のせいで生み出されたこの異様な空間で自分に求められる役割を果たせないというのなら。お前はプロである事を強調するが、もし、教師と暗殺者の立場を両立できないのであれば、ここではプロとして最も劣るという事だ」

そこまで言うとう間は圭一とイリーナを残して去って行く。

「ここで奴を狙うなら生徒たちを見下すな。殺すだけのプロなら代わりはいくらでもいるんだ。それができないなら、素直に順番待ちの一

番後ろに並び直して貰うぞ。イリーナ」

そんな言葉を残して。

(……俺ってば修羅場に巻き込まれた?)

圭一は密かに思った。

もはや、今のイリーナには先ほどまで持っていたプロの殺し屋としての自負が定かではなくなりかけていた。

『仕事にだけ集中させて』

『この場に自分以上のプロがいるはずがない』

少し前に自分の口から出た言葉と胸中でのつぶやきが今になってイリーナの胸を抉った。

「……乃咲」

「はい」

「自分を演じなさい。無数の自分を演じるのよ」

そう言い残すとイリーナも歩き出す。

イリーナにとって、これが教えるということへの第一歩だった。

??

??

??

「自分を演じるとは?」

イエラビッチ先生への苦手意識を払拭するべく頑張って話しかけてみた昨日。しかし、話しかけたのは良いが、なにやらお取り込み中だったらしく、ビッチ姉さん、難しそうな顔してたなあ。

しかも、なんとか話しかけたのは良いけど帰って来たのは「自分を演じろ」なんて簡単なのか難しいのか分からない言葉だったし。

標的に警戒されずに接近する方法に関しては習得は諦めた方がいいのかなあ。

んでも、一番最初、寺坂が渚に自爆特攻させた時に見せた渚のあの自然な動きは凄かったし、ビッチ姉さんにキスされるまで警戒出来なかったこととかを考えると、案外、警戒出来ないことが一番怖いのかもなあ。

「乃咲くん」

「はい？」

そんな事を考えてると烏間先生に呼び止められる。

呼ばれて、立ち止まり、振り返ると烏間先生手には俺が預けていた縄跳びとハンドガンが握られていた。

「出来たんですか？」

「ああ。問題ない」

……問題ない、か。果たして何が何処まで問題ないのか。いや考えるだけ無駄かな。

烏間先生にお礼を言つて武器を受け取る。

さて、俺は俺でそろそろ本気で殺す方法を考えますかねえ。

「つと、すみません。殺せんせーにも用があるんです」

「いや、こちらこそ呼び止めてしまつてすまない」

断りを入れて職員室に向かう。

「殺せんせー。テストの直し持つて来ました」

「おお、早いですね」

殺せんせーの机まで持つて行き、テストを手渡すと、彼はそれを丁寧に受け取ると引き出しを開けて、他のみんなのテストが入ってる金箱を取り出してその中にしまう。

つと、そこで俺は金箱の下敷きになっている半透明な膜に気づき、思わず彼に問い掛ける。

「殺せんせー、なんですか？ その引き出しの底の膜みたいな奴」

「ん？ ああ、先生の抜け殻です」

「保管してるんですか」

「いやあ、実はこれなにゴミに出せば良いのかわからなくてですなえ」

「……生き物から出たゴミだから生ゴミでは？」

「ですかねえ」

「いいですよ、俺が捨てときます」

「おや、気が利きますねえ。それではお願いしましょうか」

殺せんせーの抜け殻を受け取り、一礼して、職員室を出るとビッチ姉さんがちょうど通勤して来た所だった。

「おはようございます、先生」

「……………おはよ」

あら、意外。ビッチ姉さんったら挨拶してくれたわ。

そのまま廊下ですれ違い、教室へ直行すると、入室一番、磯貝の奴が俺が持つてる殺せんせーの抜け殻に目ざとく気付いたらしい。

「おはよう、圭一。なんだ？ それ」

「殺せんせーが出した生ゴミ」

「生ゴミって……………もしかしてあん時の抜け殻か!？」

「そう」

ビラツと抜け殻を広げると結構でかい。人を2人くらい被えるくらいには大きい。

でも、思えば寺坂の改造手榴弾の爆発やら飛び出して来たBB弾を防げるくらいには防御力あるんだよな、この抜け殻。

「暗殺に使えねえかな」

「……………ふむ」

磯貝の呟きに顎に手を当てて考える。

殺せんせーの暗殺で防御力が求められる作戦ってどんなのだろうか？ パツと思いつくのは殺せんせーを狙う射線上にいた時にこの膜を纏って防御して『オラゴと貫けえ』くらいしか思い至らないな。

いいや、一旦、この抜け殻は捨てないでおこう。

抜け殻を畳んで机の中に入れる。

そのあとは談笑だ。

磯貝は最近、いろんな奴と話す機会が増えたなあ。

ちなみに話す内容は修学旅行について。ちなみに話してるうちに前原や岡野、片岡や木村、矢田さんに倉橋さんが混ざり、会話の流れからそのまま班を組むことになった。

と、そこまで話しているとビッチ姉さんがガラガラと勢いよく扉を開け放ち、ツカツカと無駄に足音を鳴らして教室に入って来た。

「you are incredible in bed!」

教室に入るや否や、黒板にそんな何処の言葉とかも知れない言葉を書き連ねると『言^{リヒート}って』と言って来たので、寺坂たちを除くクラスメイトたちが座ると彼女の言葉を復唱する。

「「ユーアー、インクレディブル、イン、ベッド」」

「『ベットでのキミは凄いいよ……♡』って意味」

おおう、思春期の中学生になんて単語読ませるんだ？ このビッチ。

などと思っているとビッチ姉さんは捲し立てる様に口を開いた。

「アメリカでとあるVIPを暗殺した時、まずはそいつのボディガードに色仕掛けで近付いたわ。その時に彼が私に言った言葉よ」

「体験談かよ!?!」

ナイスツツコミ、前原。

「外国語を短時間で習得するのに一番効率的だつて言われている方法をアンタらは知ってる？ 正解はその国の恋人を作ること。相手の言ってる事を理解したくて必死になって勉強するつてことね」

ビッチ姉さんがただの猥談ではないことを補足する様に今度はゆっくりと、昨日、一昨日とは違って俺たち一人一人と目を合わせる様に見据える。

……ああ、一昨日はこの人嫌いかもとか思ったけど今のこの人は好きかもしれない。

あと、ついでに補足すると、外国語を覚える際にその国の恋人を作ることが効果的とされるのは、相手の気持ちを知りたいと言うのもあるが、脳は印象的な大きな出来事に紐付いて様々なことを記憶するメカニズムがあるからだったりする。

より効果的なのは「恋人⇨好きな人」と一緒に勉強することだけで勉強を好きな人との時間、と頭に印象付けることだな。

「……ここで普通の教師をできるほど、私は器用じゃない。私に教えてあげられるのは外国人の口説き方だけ。だけど、事実、私はこの方法で必要な言語を習得して来たわ」

「殺し屋が実践する、外国語の学び方、か」

「そう。プロの殺し屋直伝の仲良くなる会話のコツ。身に付けければ実際に外国人にあった時に必ず役に立つわ。テストだとか、試験だとかの勉強はあのタコから教わんなさい。私が教えられるのはあくまで実践的な会話術だけ……」

プロの殺し屋が教える、仲良くなる会話のコツ。

これは思った以上に有益なスキルだろう。

イエラビッチ先生は言うまでもなく女を武器にしたハニートラップ使い。そんな彼女が教えてくれる会話のコツってのは外国語だけでなく、日常会話でも使えるだろう。

例えばみんなの気になっている受験。場合によっては面接がある奴もいるだろう。そう言う時、面接官に気に入られる会話ができるってことだ。

ただ勉強するだけでは身につかない技術。間違いなく生きる術という意味では必要不可欠なチカラだ。

皆んな、それを理解したのか、それとも何処となくしおらしい態度と俺たち全員と目を合わせようとする視線に何か感じるがあったのか、昨日の様な学級崩壊はしなかった。

「それでアンタ達が私のこと、先生って思えないなら大人しく出て行くわよ……。暗殺も諦めて出ていくわ……」

この時点でクラスメイトたちは笑いを堪えるのに必死だった。そりゃあ気持ちも分かる。だって、昨日あんなに高飛車な態度だった癖に今日はこんなに大人しいんだから。

「そ、それで文句ないでしょ……？ それと、昨日は悪かったわよ」

最後の部分は小声だった。

小声だったからこそ、皆んな笑いを堪えきれなかったらしい。何かに怯える様なイエラビッチ先生が可笑しかったんだろう。

「「ぶっ……あはははは……」」

吹き出した皆んなと状況について行けてないイエラビッチ先生がキョトンとしている。

「なんでえ、昨日なんてぶっ殺すみたいなこと言ってた癖に今度はビクビクって怯えてやんの！」

「だよねえー。なんか普通の先生になっちゃたな」

「これじゃあビッチ姉さんなんて呼べないよね」

「だね、呼び方変えないと」

「そうだね、考えてみれば年上というか、先生に対して失礼な呼び方

だったよね」

「あ、アンタ達……!」

ビッチ姉さんが感涙した。

手で口元を抑え、プルプル震えていると、カルマの奴が余計な鶴の一声をふっかけた。

「んじゃあ、ビッチ先生で」

「ビッチ……!?!」

感涙してるビッチ先生に鞭打つ言葉だったと思うと鶴の一声というより、蔓の一声というべきか。蔓のムチなんて技があるゲームもあるくらいだし。

「ね、ねえ。キミたち？ 折角だからビッチから離れてみない？」

「えー？ そうは言っても先生のこと頭の中でビッチで固定されちゃってるし」

「俺や渚のファーストキス……」

「あれは衝撃的だったね」

「初対面の相手にディーブなのかます人をビッチ以外の目で見るのは少し難しいよなあ」

「ね、でも折角だからね！ ほら、気安くファーストネームでイリーナ先生って呼んでくれても……」

「うーん、でもやっぱりビッチ先生の方がしっくりくる」

「やっぱビッチ先生で決定でしょ」

「そんなわけでよろしく！ ビッチ先生！」

「授業してよ、ビッチ先生！」

あはははは！ と笑い声の響く教室に悔しげなビッチ先生の金切り声が頭一つ飛び抜けて響く。

ビッチ先生はこのままクラスに馴染んで行くのだろう。人付き合いが苦手な俺でもそれくらいは分かった。

目的達成のためになりふり構わないのもまたプロなんだろう。ビッチ先生を見てそんな事を思った。

11話 圭一が企てる時間

「そろそろ俺から仕掛けてみるか。」

ビッチ先生がクラスに馴染みだした頃、放課後の帰り支度中に本当に何気なく俺はふと思った。

今日まで俺はクラスメイトたちの暗殺のサポートに回り続けるだけで、自分から暗殺を仕掛けたのは殺せんせーが体育を教えていた頃の数回だけ。

今日まで得た情報と鳥間先生から貰った武器の性能などの信憑性や有効性を確認・証明するのに良い機会だろうしね。

「渚あゝ」

「乃咲？ どうしたの？」

「ちよつと暗殺してみようと思ってさ。良ければ弱点メモ見せてくれない？」

「そういうこと？ うん。勿論良いよ」

「サンキュー」

昼休み、捕まえた渚に事情を説明すると快くメモを見せてくれたので使えそうなモノからそうでもなさそうな情報全てを頭に叩き込む。

メモ帳と睨めっこしていると渚と雑談しに来た茅野と杉野が、俺が自分から絡みに行ったことに珍しさを感じたという儀貝と前原が、面白そうなことしているとカルマがやって来た。

「なにになに？ 乃咲が暗殺するって？」

「うん。だから弱点メモみたいってさ」

「へえー。乃咲クン。なんか手伝おうか？」

「あの圭一が真面目に暗殺ねえ」

なにやら賑やかになりつつある。

1人、また1人と人が人を呼び、しまいには話を聞きつけたらしいビッチ先生まで会話に乱入している始末。

けど、その辺の会話に俺が気づいたのは暗殺のプランを考え終えた数分後のことだった。

渚の弱点メモにあるのはまだ数項目。

- 1、カッコつけるとボロが出る
- 2、テンパるのが意外と早い
- 3、器が小さい
- 4、パンチがヤワイ
- 5、おっぱい
これだけ。

だけど、4と5以外はかなり使えそうだ。

あとは普段の殺せんせーの癖を考えよう。

殺せんせーの癖と言えば朝の英字新聞購読やら水曜日の恒例テストとか、そんなもんだが……それ以外だとなんだろう？ 暗殺者は必ず手入れするみたいなの？

あ、いや、まてよ？ そう言えば殺せんせーって暗殺止める時はまず、武器を奪うよな。中村さんが授業中に暗殺した時はハンドガンを奪われた。ハンディキャップ暗殺大会の前は皆んなからナイフを、俺からはハンドガンを奪っていたな。

それに、思えば殺せんせーが余りにも警戒心なく武器を奪うのでハンドガンとかに対先生コーティングしてたらどうなるんだ？ とか考えた事もあった。

てことは、殺せんせーを上手く煽って俺の縄跳びとかハンドガンを奪わせれば確実にあのタコの触手を破壊できるのではないかな？

そこに関しては恐らく上手くいく。授業に暗殺を仕掛けた中村さんは奪われてたわけだし、弱点メモ3『器が小さい』だし。ひたすらに殺せんせーを煽り倒してやればここはまず上手くいくだろう。もしくは『カッコつけるとボロが出る』んだから、上手く行動を誘導してやれば良い。

んで、殺せんせーは基本的に俺たちを舐めてる。暗殺する気があるとかアピールする奴には大抵の場合、緑のしましまの顔を見せるのがその証拠だ。

だけど、あの人は予想外のことに弱い。だから、顔が緑のしましまの時に触手を破壊してやればテンパる筈だ。『テンパるのが意外と早

い』んだからな。

問題はその後だ。

触手破壊まではなんとかなるだろうけど、問題はその後。多分、追撃するだけでは俺一人の火力手数では足りないだろう。確実に。となると、応援が必要だ。

そもそも暗殺を仕掛けるのはいつにする？

殺せんせーが武器を奪って来そうなのは授業中の暗殺だが、そうになるとクラスメイトたちに迷惑が掛かる。

……いや、道徳や学活、総合学習なんかの時間なら受験にはあまり関係ないから迷惑はそんなにかけないだろう。

なんなら、手伝ってくれた奴に報酬山分けするだけでも言うっておけば乗り気で手伝ってくれそうな気さえする。

あとは殺せんせーをどう殺すか、だ。

殺せんせーはマツハ20だけど、教室の中ではそんな速度は出さないだろう。出していたらソニックブームで教室中がしっちゃかめっちゃかどころか俺たちが爆発四散してる可能性あるし。

けど、分身作れるレベルの速度で動くモンスターを追い込むにはどうすれば良いのか？

毎朝、点呼中の一斉射撃すら1発も着弾しないんだ。

攻撃を当てられるヴィジョンすらない。

いっそのこと、殺せんせーを迫る壁か何かで圧死させられれば手っ取り早いんだろうけど、あの人に面の攻撃を仕掛けるのは……。

いや、まて。弾幕はあくまで点の攻撃に過ぎないが、もつと、濃密な弾幕を張らないだろうか？

例えば、コップ一杯に入れたBB弾をぶっかける様に殺せんせーに投げつけるとか。これなら面の攻撃にならないだろうか？

面の攻撃で仕留めるまではいかなくても、殺せんせーの退路を塞ぐくらいならできるはずだ。

あとは止めをどうするかだが……そうだ。あえて退路を一つだけ残しておくのはどうだろうか？

例えば教卓を暗殺のフィールドにして、クラスのみんなど窓、教室

の真ん中への退路を塞ぐ。そうすると残るのは教室のドアしか退路はなくなる。教室の外に烏間先生やビツチ先生に待機してもらって、退路を塞いだら、仕上げに扉を開ける、それと同時に対先生弾を発射。……それなりに上手くいきそうじゃないか？

「圭——！」

「……？ あ、あ。悪いな、磯貝。自分の世界に入ってたわ。今何時？」

「は？ いや、まだ1分も経ってないけど」

まじか。感覚的には結構長い時間考えてた筈なのに、まだそんならいしか考えてなかったのか。

まあ、いい。都合がいい。幾つかプランを練りながら皆んなに協力を仰いでみよう。

「んで、どうするんだ？ 暗殺するなら力貸すぞ」

「うん。触手を初めて破壊した人の暗殺だもん。期待しちゃうよね？」

磯貝と意外な事に倉橋さんが口添えしてくれた。

ここに来て初めて気づいたのだが、クラスの半数以上というか、寺坂グループ以外が集まって来ていた。

「んじゃあ、皆んなにお願いがあるんだけどさ——」

俺は一つ一つ作戦を伝えた。

「……いや、触手破壊を作戦開始の合図にするってマジ？」

第一段階は【触手破壊】

俺が授業中、教卓まで出て窓際に陣取り、殺センサーに攻撃、触手を破壊する。ただし、他のみんなにはできるだけ自然体でいて欲しいから詳しい方法は伝えない。ここで触手が破壊できなければ作戦は失敗とする。

「そこに関しては俺が絶対になんとかする」

口にするのは実行する時だけ。

烏間から学んだことを実践する。

「んで弾幕を張るのか？」

第二段階に【弾幕形成】

触手破壊されてパニックってる殺せんせーを弾幕で包囲する。そしてこの際、部隊を二つ作る。一つは殺せんせーを狙う部隊でもう一つは殺せんせーの退路を塞ぐ部隊。自分を狙う弾だけでなく退路を塞ぐ様に張られた弾幕にまで注意を向けさせて殺せんせーを更にパニックにする作戦。

「ああ。でも、ここで寺坂の力を借りたい」

「あいつ帰ったぞ?」

「追いかけるさ。でも、あいつら説得するのに報酬の分前少しだけ操作するけどいいか?」

「別にいいでしょ。私たちも分前貰えるんだし、発案者は乃咲なんだからさ」

「ありがと、岡野」

第三段階が【面での攻撃】

殺せんせーを狙っていた部隊に予めBB弾の入った大きめの器を持たせておいて、弾幕形成で殺せんせーに混乱が見えたら俺の指示で器の中のBB弾を横薙ぎに振りかぶって中身をぶちまけて貰い、空中でBB弾の壁を作る。

「面での攻撃って……」

「わかりやすく言うと……あれだ。ボウルとか洗面器に溜めた水って思いつきり横から振りかぶってぶちまけると水の壁みたいなのが作れるだろ? アレを意識して貰いたい」

「あー、ガキの頃風呂でよくやったわ。んで? これは誰がやるんだよ?」

「教室の席の並びで各列の最前列にいる奴らに頼みたい。だから……片岡、前原、岡野、磯貝、倉橋さん、木村だな」

「分かった、任せとけ」

「うん。乃咲の指示に従ってぶちまければいいのよね?」

「あはは、掃除大変そう」

「掃除は発案者が責任持ってやるからそこは気にすんな」

第四段階は【トドメ】

面での攻撃をする際の俺の指示を聞いた別働隊が指示から一拍子

開けて教卓側の扉を開け放ち、殺せんせーに銃弾を浴びせる。逃げ場のない殺せんせーは撃ち抜かれるって寸法だ。

「んで、トドメと」

「別働隊って？」

「ビッチ先生と烏間先生だ」

「あら？ 私も参加するの？」

「上手くいくかは時の運次第なところありますけど、分前が欲しくな
いなら不参加でも構いませんよ」

「ほんつと、生意気ね。このクラスのカギは。んで？ 烏間は？」

「烏間先生も一応は教師としてここにいますが、それ以前にあの人の
目的は殺せんせーの殺害です。要請すれば答えてくれますよ」

あらかたの作戦説明は終わった。

が、ここで磯貝が疑問を投げってくる。

「なあ、圭。お前は第一段階のあとどうするんだよ？ ずっと最前
列の前の窓際にいるのか？ 危なくないか？」

磯貝の危惧は最もだ。第四段階のトドメでの銃撃は即ち俺の方の
銃撃と同じ。だが、そこに関しても対策済みだ。

「大丈夫だ。ほら」

そこで俺はこの前、殺せんせーからチョロまかした彼の抜け殻を見
せびらかす。

「……あぁっ！ 確かにそれならBB弾くらいへっちらだよね」

この抜け殻の効力を身をもって知ってる渚が合点のあったらしい
柏手を打つとその場の空気は作戦は決行するという雰囲気になった。

「んじゃあ、作戦決行は明日の5時間目の学活な」

「殺せんせーには不意打ちじゃ無くて前もって伝えておこう。磯貝、
口貸してくれ」

「なんだよ口貸すって……。まあいいけどさ」

「んじゃあ、ひとまず頑張るぞー」

「「おうー」」

前原の音頭にこの場にいる生徒ほぼ全員が共鳴した。

??

?? ??

「寺坂、吉田、村松、狭間さん。明日、5時間目の学活で殺せんせーに暗殺仕掛けるから手伝ってくれ」

「やだね」

「断る」

「メリットねえし」

「皆んなでとか馴れ合いゴメンだわ」

うーん。この団結力の無さ。

いや、彼らのグループの中では団結力あるのか。

頭を下げて頼んでみたが、案の定断られた。一応はE組の不良グループ気取ってる連中なので狭間さん以外は”分かせてやる”のもやぶさかではないが、出来るだけ平和に行きたいので拳は引っ込める。

「正直、お前が頭下げるのは意外だったけどよ。村松の言う通り、俺たちにメリットがねえだろ」

「報酬の山分けじゃ足りないか?」

「足らねえな。俺はお前のこと嫌いだからよ」

うっわあ。なんでこんなに嫌われてるんだろ。

寺坂から正面切って嫌い発言が飛び出して俺ってば少しだけ傷付いたぞ。

「法に触れない程度になら『言うこと何でも聞いてあげる券』やるから

さ」

「ガキか!?!」

ちっ、乗らないか。

だったら奥の手だ。

「じゃあ、3億だ」

「あ?」

「成功したらお前ら1人ずつに3億円、山分け分にプラスして払う」

「……まじかよ」

……これに関しては問題ない。

皆んなに作戦説明する時に分前に関しては俺の方で多少コントロールすることは宣言してあるしな。

流石にここまで啖呵を切ると俺の作戦が気になってくるのか、村松が口を開く。

「つか、勝算はあんのかよ」

「ある」

「どんくらい？」

「五分五分あとは時の運次第だ。別に参加したくないなら明日の5時間目をサボってくればいい。ただ、人数が多い方が勝算は多少上がるだろうし、助かるなつてのが声を掛けた理由だ」

「……俺はやらねえぞ」

問題児、寺坂が率先して反発してくるので、寺坂にとって一番のメリットを提示してやる事にする。

「寺坂、俺が居心地の良いE組に戻してやるって言ってるんだ」

「……なんだと？」

「いつだったかな。思ったんだよ。お前は俺と同じだ。誰にも期待されない出来損ないが集まるあのクラスが居心地良かったと思ってる筈だつてな」

「テメエ」

「事実、殺せんせーが来るまでは居心地良かったんだろ？」

「……………ちっ」

たしか、ハンディキャップ暗殺大会の時、烏間先生がうちの教師になると知らされた時に俺は寺坂を今言った様に評価した。

一応、俺なりに彼の人となりを理解して下した評価だったが、間違つてなかったらしい。

俺に内心を言い当てられた寺坂は居心地悪そうに頭を掻きむしると頷いた。

「わあつたよ、乗ってやる。ただし、上手くいったら今言った報酬全部よこせよ」

「ああ、分かった。ついでに頼みがある」

「頼みダア？」

「そ、前に渚に持たせた手榴弾。あれの威力をほぼ無くした奴を明日までに作って欲しい。必要経費は出すから」

「おまつ、サラツと要求えげつないぞ!？」

「ああ。明日、俺が指示した時に投げてくれれば良いから」

「人の話聞いてねえのか!？」

とまあ、こんな具合にリーダーの寺坂が折れたら他の面子も折れてくれたので一通りの作戦を説明した。

正直、寺坂達に来てくれるのはありがたい。戦力的にというより、明日、殺せんせーの説得をするのにかなり有効なカードになる。

?? ?? ??

「と言うわけで、烏間先生も協力願います」

「分かった。イリーナからある程度、作戦の概要は聞いている。クラスメイトたちを巻き込んだ大規模な暗殺作戦。俺にとっても君達をどの程度育成出来たのかを確認する良い機会だ。参加させてもらおう」

寺坂たちを説得して学校に戻って来た俺は今度はE組校舎の職員室で烏間先生の説得をしていた。ビッチ先生があらかじめ説明してくれてたらしく、話自体はスムーズに出来た。

あとは明日の学活を暗殺に使うって良いかどうかを殺せんせーに交渉するだけだが、ここが一番ネックだ。もし失敗したら作戦を強行するしかないかな？

「おや、乃咲くんに磯貝くんじゃありませんか。どうしましたか？」

「殺せんせー。ちょうど良いところに」

ちょうど良いところに殺せんせーが来た。

折角なのでこのまま説得に移る。

「殺せんせー。実はお願いがありました」

「ほう？。乃咲くんがですか」

物珍しそうに俺を見る殺せんせー。

だが、気にすることなく会話を進める。

「はい。実は明日の学活の時間、俺の考えたプランで殺せんせーの暗殺に使わせて貰いたいんです」

「……なるほど、それで磯貝くんがいるんですね?」

俺の用事なのに磯貝がいた事に合点がいった様で、殺せんせーが領きながら磯貝を見ると、今度は磯貝が口を開いた。

「そうです。殺せんせー。圭一が暗殺するってさっき話しが出たんだけど、結構な人数が必要そうなプランで。一応ここに来る前にクラスメイト全員で明日の学活にでも実施出来ないかなって話になって」

「全員となると、寺坂くんたちもですね?」

「はい、寺坂、吉田、村松、狭間さんにも話してきて、4人とも協力してくれることになってます」

「そうですかそうですか。そうになると、朝の点呼以外では初めてとなるクラス一丸となった暗殺になるわけですね?」

「そうなります」

寺坂たちも説得して来たことを伝えると感心したように頷き、俺たちが説得材料として用意して来たクラス一丸となった暗殺と言う単語を出された。

恐らくは殺せんせーに会話を誘導されているのだろう。もしくは俺たちがどんな風に会話を締めようとしているのかを確かめているのか。

どちらかは分からないけれど、俺なりの回答をする。

「この学級が始まって1ヶ月が経とうとしていますし、修学旅行も控えています。ここらでクラスメイトたちの親睦を深める為にも全員で何かをしたいんです。例えば、地球を滅ぼす超生物の暗殺、とかね」

「なるほどなるほど。確かにクラス一丸となるには十分な目標です」

そこまで言うと言と殺せんせーは顔を緑のしましまに染めた。

舐められてる。けど、この声色で分かった。

「ヌルフッフ、やれるもんならやっつてご覧なさい! というわけで、良いでしょう。明日の学活は楽しみにしていますよ」

殺せんせーが了承してくれたと、一足早く。

ほんの少し、教師を説得するという仕事に緊張していた俺を労う様

に磯貝がポンと肩を叩いてくれた。

12話 圭一による暗殺の時間

迎えた暗殺決行日。

思った以上に緊張しているのか、心臓がバクバク言ってる。まあ、仕方ないだろう。今日の暗殺はある意味で俺の思考力などを問われる。烏間先生に自分の有用性を見せるチャンスでもあるわけだし。

……烏間先生に有用性、か。俺、あの人に依存してるのかな。親父も誰も認めてくれなかったけど、あの人は褒めてくれるからかな。いかな、これはダメだ。

そうはいつでも、やはり人は褒めもしない人よりも褒めてくれる人の方が印象がいいのは当たり前だし。

俺の中で烏間先生は教師ではなく、初めて俺を褒めて、見てくれた大人という認識なんだろうな。

……いや、思考を切り替えよう。

今は暗殺について考えよう。

……いや、中学生が暗殺に関して真面目に考えるのも可笑しな話なんだけどさ。

さて、その可笑しな話に陥ってる可笑しな中学生が本気で暗殺を仕掛けてやるとしよう。我らの担任に。

殺せんせーを今日、殺す。

彼が何なのか、気にならない訳ではない。

彼が何者なのか、知らないわけでも無い。

殺せんせーは担任だ。

それと同時に地球を滅ぼすモンスターだ。

そのほかにも色んな顔を持っているのだろう。もしかしたら本当に、地球に攻めて来た宇宙人なのかもしれないし、月を爆破したのは彼の同種なのかもしれない、案外、本当に非人道的な実験であんな姿になった元人間なのかもしれない。

けど、殺せんせーを殺さないで、地球が来年には滅ぶ。彼曰く、殺せんせーの寿命による死亡で地球を巻き込むかどうかと言う可能性

があるってだけって話だけど。やっぱり、どこまで本当なのか信じられない。信じられないというか、理解が及ばないんだ。

及ばないことを考えても意味はない。時間の無駄。唯一分かっているのは来年には地球が滅ぶかもしれないってことだけ。今はそれだけがいい。

殺せんせーの正体は殺せんせーを殺した後でも烏間先生を問いただせば答えてくれるかもしれない。

「乃咲、ほれ、手榴弾」

「まじかよ、本当に寺坂引き入れたのか」

「ああ。寺坂組に12億と『言うこと何でも聞いてあげる券』で手を打った」

「いや、それはいらねえ」

「まじ!? 12億いらねえの?」

「ちげえわ!」

「知ってるよ。その手抜き手榴弾は俺が合図した時に投げてくれ」

「チツ」

ナイフを持ち、ポケットには銃を仕込み、縄跳びはカーテンの内側に、殺せんせーの抜け殻はブレザーの胸ポケットに仕込んだ。

これで暗殺する準備は出来た。

あとは時間を待つだけだ。

「圭一、準備は出来てるのか?」

「ああ。出来てるさ」

??

??

??

「ヌルフッフフ、乃咲くん。5時間目になりましたねえ」

教卓に2人の人影が並ぶ。

その様子を一部をのぞいた生徒は固唾を飲んで見守っていた。その理由は幾つかある。

一つは彼らの担任、殺せんせーをターゲットにした暗殺であること。

二つにクラスメイトたちと息を合わせた暗殺。練られた作戦を使った暗殺であるから。

三つ、その作戦を練った同級生が目の前で殺せんせーと向き合っている乃咲圭一だからだろう。

乃咲圭一に対する周りの生徒たちの印象は少しずつ変わりつつあった。彼がE組に落ちたのは成績不振と教師を殴った事による素行不良、他校の生徒と殴り合い。恐喝までしたという噂もある。

だが、ここ最近の圭一を見ていた者にとって噂は俄には信じがたい内容になりつつあった。

渚や杉野と並んでツツコミを入れてる姿、野良猫と戯れてる姿や殺せんせーの弁当に舌鼓を打っている姿。放課後に鳥間に個別指導を受ける姿を見ていた者にとっては圭一はどこかズレた性癖はあれど自分たちと同じ生徒の1人だと言う認識になりつつある。

そんな彼が人知れずに立てていた暗殺の作戦。研がれていた刃の鋭さに興味があるのはクラスメイトは然り、担任である、殺せんせーも、個別指導を受けもっていた鳥間も、たまたま話を聞いていたイリーナもまた然りである。

このクラスの関係者全員の注目を受けた暗殺が今、始まろうとしていた。

「んじゃあ、始めます。殺せんせー」

「ええ。いつでも来なさい」

殺せんせーにそう言うとき圭一は真正面からナイフを抜き、鋭い刺突を放つ。教卓を揺らすほどの鋭く重い踏み込みにクラスメイト達は固唾を飲むがそれは呆気なく白いハンカチに包まれて受け止められてしまった。

「ヌルフッフ。鋭く思い切りのいい刺突ですが、先生には届きませんよ」

「ははは、でしょうね」

談笑すると殺せんせーに背中を向けると圭一は窓際まで下がり、ポケットからハンドガンを取り出し、ニヤリと口元を緩めて挑発する様に口を開く。

もう、ナイフに興味が向いていないと悟った殺せんせーは白いハンカチごとナイフを教卓に置き、圭一の言葉を待った。

「ねえ、殺せんせー。実は俺、西部劇カッコいいなって思ってたんです」

「ほほう？ どう言うところがです？」

「あの『抜きな、どっちが速いか勝負だぜ』ってシーンですね。あれで眉間撃ち抜くの良くないですか？ 俺はあのシーン好きなんですよ」
そういうと銃をポケットにしまい、笑った。

「皆んなでの暗殺の前に勝負しましょうよ。内容は俺のポケットのハンドガンをどっちが早く抜けるか」

「ほう？ スピード自慢の先生にそんな勝負を仕掛けるとは余程の自信ですねえ？ いいでしょう」

「負けた方が相手の言うことを聞く。俺が勝ったら触手一本下さい」

圭一の一言にクラスメイトたちがざわついた。

まさか、マツハ20の殺せんせーに勝つつもりなのか？ と寺坂ですら固唾を飲む。

そんな中で圭一はブレザーの袖のボタンを一個取ると、人差し指と親指の上に乗せて言う。

「このボタンが落ちたらスタートってことで」

「わかりました」

緑のしましまの顔をした殺せんせーの同意を得ると圭一は徐にボタンを親指で真上に弾いた。その瞬間を誰もが見守る。これだけで今日で固唾を飲むのは何度目になるだろうか。

コツン、床に落ちるボタンの音。

この場にいる全員がその音を認識した刹那、パシャ！ と殺せんせーの触手が弾けるのは全く同時だった。

「今だっ！ 全員で撃て！」

「ニュヤア！」

触手を破壊したら作戦開始。辛うじて頭の中にあっただんな単語が思考の追いつかない生徒達の体を無理やり突き動かす。

彼らの頭の中は半信半疑。本当に触手を破壊したという驚きと衝

撃が頭の中を白く染まる中で身体だけはしっかりと動いていた。

「まじか！ 圭一、本当にやりやがった！」

「なんでも良いから撃て！」

驚愕の声を漏らす磯貝と指示を飛ばす圭一。そんな圭一はと言うとカーテンの後ろに手を突っ込み、鋭い目付きを教室の廊下側の一番後ろの席に着く大柄な同級生に叫ぶ。

「寺坂！ 投げろ！」

「報酬寄越せよな！」

触手が破壊されて驚愕する殺せんせーに追い討ちを掛ける様に寺坂が投げつけたのは一つの手榴弾。

「なっ!？」

飛んで来た手榴弾のグリップが開き切る直前に慌ててそれをキャッチする殺せんせー。BB弾の弾幕が飛び交う中で一つの風切り音が一際大きく鳴る。

ヒュン！ と風切り音を鳴らして殺せんせーに襲い掛かる縄跳びはそのまま手榴弾を握った触手をプリンでも切り分けるように切り落とした。

落ちた手榴弾を慌てて拾おうとするが、一足遅く、グリップは開いてしまう。しまった、と思うと同時に殺せんせーはやられた、と強く圭一と寺坂を見据えた。

開いた手榴弾は爆発しなかったのである。

以前に異常なほどに威力を高めた手榴弾を使った暗殺を仕掛けた寺坂が投げたからこそ、殺せんせーは警戒してしまったのだ。あれだけ強く脅したのに、また凶行を働くのか？ そんな驚きと手榴弾と寺坂の動きへの警戒。その隙を圭一に突かれ、触手の2本目を失ったのだ。

圭一は寺坂の投擲と同時にカーテン裏に仕込んでいた縄跳びを引き抜き、2本目の触手を破壊すると連続して振り回した。

生き物の様にしなる縄跳びは対先生物資でコーティングされた殺せんせーにとってはムチそのもの。

「くぐりゆう……！」

殺せんせーは焦る。

自分を狙う銃撃と退路を断つ銃撃の弾幕と横から飛んでくるムチ。まさに正面から弾丸、横からムチ、後ろには黒板。もはや逃げ場は廊下か、弾幕をすり抜けた先、教室の後ろのみ。

だが、扉の後ろに烏間とイリーナの匂いを感じていた殺せんせーは必然的に逃げ場を教室の後ろへと見切った。

見切ったのだが、圭一の思考はその一歩先を行った。

「今だっ！ 壁を作れ！」

怒号にも似た圭一の指示に従い、教卓の前にいた生徒達は机の中から平たい洗面器を取り出し、中に貯めたBB弾を真横に薙ぐようにぶちまけた。

宙に放られたBB弾はエアガンから発砲される弾幕よりも遅いが、正面から飛んでくるBB弾の物理的密度の高さは間違いなくBB弾の壁を作り出す。

もはや、殺せんせーに逃げ場はない。

思わず残った唯一の逃げ場であるドアを見るが、その時、同時にドアが開いた。

「そんなんっ!？」

開いた先にはそれぞれショットガンとアサルトライフルを構えた烏間とイリーナの2人。

撃つのか？ まさか？ 私の背後には乃咲くんがいるのにな？ 彼らの射線の先を反射的に辿ると、圭一は素早く殺せんせーの抜け殻を銃撃に巻き込まれそうな位置にいた、前原、片岡と共に身に纏って身を縮こませている。

——なるほど、やられた。

そう思ったときには烏間とイリーナの銃口から無数のBB弾が発射されていた。

?? ?? ??

聞こえていた弾幕の音が途絶える。

一応、巻き込まれそうな位置にいた前原と片岡。恐らくは前原の方が思わずと言った様子で恐る恐る口を開く。

「やったか……?」

抜け殻から3人で這い出すと唾然とした様子のクラスメイトたちが教卓下に見える殺せんせーの着ていた衣服に注がれている。

煙を上げる殺せんせー衣類、その周辺にはビチビチと跳ねる触手が数本と黄色い体液が血溜まりの様に広がっていた。

聞きようによってはフラグの様にしか聞こえなかった前原のセリフもこの光景を見ると思わず口をついてしまうのは理解できる。

頭の中が白く染まる。

耳鳴りがする。

まさか、本当にやれたのか?

皆に釣られて恐る恐る殺せんせーの死体を探す。

だが、ふと思う。殺せんせーって死体は残るのかな? 触手はいつ

の間にか蒸発してたし、死体も消えたりするんじゃない?

ダメだ、こんな時でも頭の中に余計な思考が混ざる。今はそんなことよりも殺せんせーを殺せたかどうかの方が重要な筈だ。

「奴の死体は……ないな」

鳥間先生が殺せんせーの体液を躊躇いなく踏み、ショットガンの銃先で殺せんせーの衣類をまくって見たりするが、そこに彼の死体は確かに見えない。

ではどこに行ったのか?

探した時、天井から銀色の液体が溢れ出してきた。

——液体化。

つい数日前、奥田さんを手入れする時に手に入れた能力。たしか、殺せんせーの細胞を活性化させて流動性を上げた結果だったな。

だが、まさか、ここで出るとは思わなかった。完璧に失念していた。それにこの形態に関しては情報が少な過ぎた。

変身にどれくらいかかるのか? この形態に攻撃を当ててダメーシが与えられるのか? とか。

「……危なかった」

しかし、どうだろうか？ 殺せんせーの口から飛び出したのは焦りのセリフ。

危なかった、とシンプルな状況説明だったが、俺はそれだけ殺せんせーを追い詰められたのだろうか？

液体化しているのに、殺せんせーが汗をかいているように見えてしまった。

「……すまない、みんな。任務失敗だ」

殺せんせーは無事の様だった。

俺は手短に任務失敗を告げる。

殺せんせーはその宣言を聞くと天井から降りてきて、服の中に入ると通常形態の彼が出てくる。

……が、なんか、殺せんせーがいつもより小さい。

「あの、殺せんせー？ なんか小さくありません？」

思わず尋ねると殺せんせーは触手で頬を掻きながら三日月の様な口をゆつくりと開いた。

「それだけキミの、キミたちの作戦が上手くいっていたということですよ」

殺せんせーは認めた。俺たちの作戦を。

「あのハンドガンと縄跳びは対先生ナイフと同じ材質か、それでコーティングされているのでしょうか？ 流石に驚きました」

「……殺せんせーは俺たちを無力化する時に武器を奪うじゃないですか。その時に思ったんです。これが対先生物質でコーティングされていたら触手を破壊できるんじゃないかって」

「なるほど、盲点でした。確かに私が気にしていたのは君たちのナイフを奪う時だけ。もしや、一番最初にナイフで攻撃してきたのは私からあらかじめハンカチを取り上げるためでは？」

「はい。そうです。だからまずナイフで刺突しました。殺せんせーはナイフでの攻撃は避けるかナイフを奪って無力化することで暗殺を止めますから。仮に何度か避けられても、どっかのタイミングでナイフを奪われることは予想してました」

「正しい判断です。よく先生を見てましたね。となると西部劇の件も

やはり作戦ですね？」

「ええ。普通は早く抜いて相手に当てた方が勝ちつてのが正当な条件になるんですけど、殺せんせーは俺たちを傷つけられない。だから先に銃を抜いた方が勝ちつてルールにしておけばそっちに食い付くと思つたんです」

「キミは思つた以上に私を理解してくれているようだ。正直、そこが嬉しいです。その後の寺坂くんへの指示も見事でした」

「寺坂は一度、やらかしてますからね。杉野に投げさせる方がコントロール的には良かったかもだけど、寺坂がやることで更に警戒すると思つたんで」

「ええ。見事にやられました。そこまでのキミの作戦で先生は2本も触手を失いました。しかも真正面からの攻撃でね。不覚でしたよ。弾幕の張り方、指示も素晴らしかった。これはキミの指揮能力だけでなく、皆さんの日頃の鍛錬の成果ですね」

「教室の中では流石にマッハ20は出せないと踏んで作戦を立てましたからね」

殺せんせーは一通り俺たちの作戦を褒めると皆んなと俺を見て、烏間先生とビッチ先生を見た。

「お2人も流石です。イリーナ先生は巧みに射線をばらけさせて1人で弾幕を張り、烏間先生は最適なタイミングでの射撃でした。この最後の射撃で私は触手を数本失い、奥の手だった液状化を使つてしまつた」

けど、失敗した。

俺たちの作戦を殺せんせーは褒め続ける。

皆んなが満更でも無さそうな顔をする。

だが、俺は悔しかった。

殺せると思つてなかったとか言つても、心の何処かでは期待してたし、殺せんせーの衣類が散らばつてる様子を見て殺せたんじゃない？ と思つた。

「乃咲くん。流石ですね、キミの作戦は完成度が高かった。それに寺坂くんたちに参加を促した手腕も見事です」

……殺せんせーが誉めてくれている。

これはどっちなんだろう？

乃咲新一の”息子”を褒めているのだろうか？

それとも――。

「乃咲くん。先生の顔を見てください」

言われて殺せんせーを見る。

……目が合った。

「キミは素晴らしい生徒だ。集中力も思考力もあつて地頭がいい。これからも期待していますよ」

……ああ。

何故だろう？

なんだか、殺せんせーの言葉がストンと胸に落ちた。

……ああ、いや、違う。わかった。

目が合ったからだ。

烏間先生が俺たちと目を合わせてくれた。だから烏間先生は他の大人と違うって感じたのと同じ理由だ。

「今後ともクラスのみ人など力を合わせて暗殺をして下さい？ キミのチカラを役立ててください。キミの集中力と思考力は必要なものです」

あ、それともう一つ。

分かった。殺せんせーは今、俺1人を褒めてくれてる。

”乃咲新一の息子、乃咲圭一”じゃない。

3年E組の”乃咲圭一”を褒めてくれてるんだ。

その証拠に、彼の言葉にはこれまで呪いの様に、枕詞の様に付けられていた”乃咲先生のお子さん”って単語がなかった。

ああ。だからか。

これまで教師に褒められたことなんて腐る程あつたのに、殺せんせーの褒め方が胸にストンと自然に胸の収まるべき所に収まったのは。

「乃咲くん。さっきの早抜き勝負は先生の勝ちですね？」

「ええ。どうぞお好きな命令をして下さい」

「では一つ、今後、先生と話すときは先生の目を見てください。私は絶対に目を逸しません」

「……………はい」

目を絶対に逸らしはしない。

その宣言が胸に響いた。

これまで烏間先生以外が目を合わせてくれなかったのに、この先生は絶対に目を逸らさないと宣言してくれた。

それが嬉しかった。

なんか、今なら教師嫌いだったカルマが殺せんせーの態度を軟化させた気持ち分かる気がする。

少なくとも、この人は俺個人を見てくれる人だ。

なんだろ。暗殺失敗した悔しさはあるのに、気持ちは随分と軽くなったと言うか、胸のうちは爽やかな気分だ。

——この日から乃咲圭一は2年ごしにやる気を徐々に取り戻し始めた。

13話 集会の時間

「あーあ、来ちまったよ、全校集会」

「だな」

「面倒くさいな」

先頭を歩く磯貝がその後ろで早く前原の愚痴に同意して、その横を岡野が苦笑しながら歩く。

俺は片岡にこの前の小テストの難問の解き方を教わりながら彼らに続いて歩いた。

ちなみに、全校集会が億劫なのは俺も全面的に同意だ。何故かって？ 面倒な奴が絡んでくるからだよ。

「なんだよ、乃咲？ 勉強か？」

「ああ。この前の暗殺の後からやる気がまた出てきたんだ。なんつか、殺せんせーを見返してやりたいって言うかさ」

勉強を教わっていると前原が歩くペースを落として俺の持っていた50点の小テストの答案を見て揶揄う様に喋りかけて来たので、経緯を話してやる。

すると、磯貝が予想しなかったことを言い出す。

「お？」 銀の秀才”の復活か」

「磯貝くん、その銀の秀才って？」

「一年の時、浅野とやり合ってた頃の圭一の渾名だよ。まあ、A組の中でしか呼ばれてなかったけど」

「ちよつと待て、俺、その渾名聞いたことないんだが!？」

知らない渾名がまた飛び出して来た。

何それ、聞いたことないんだけど。

なんでどいつもこいつもそんな渾名付けてくるわけ？ 俺何かした？ 一年の頃はただ勉強してただけ。去年から今年にかけてはただ喧嘩してただけなんなんで秀才やら死神やら渾名が付く訳？

「当時は小テスト含めてテストで満点が当たり前、その上に話しかければ人当たりもいい。けど勉強の片手間に友達と談笑してる姿から

圭一が秀才」

「そうそう、浅野くんは学校では必死に勉強してる姿が見えないから天才って呼ばれてたもんね」

「浅野なあ……」

浅野学秀。当時の俺にとつての目の上のタンコブ。多分、一方的に俺が奴をライバル視してただけなんだろうけど、俺のE組への転落は彼に負けたことから始まったと言っても過言ではない。

当時の俺は小学校からずっと1位で有り続けた自信と努力に対する自負があつたから、誰にも負けないと言う自信があつた。

それまで誰にも負けたことがないという実績もあつたから天狗になつていたと言っても過言ではない。

そんな時に本物の天才、浅野学秀が目の前に現れ、俺はアイツを目の敵にして努力を重ねた。

努力をした結果、というか、努力し過ぎた結果流石に体調も崩し、俺は二学期の実力テストで2点差で彼に敗北。そこから親父との関係の拗れが発生したことでやる気を無くしてしまったのだ。

「あの頃は浅野とも仲良かったのになあ」

「何処が」

「勉強教え合ってたじゃん」

「あれは教え合ってたんじゃないやなくて、アイツにマウント取れる要素を探すために当時の最難関問題をアイツに投げつけてただけだよ」

「乃咲って意外とガキだったのね」

岡野の呆れたような眩きが胸に刺さる。

うん、本当にガキだったと思う。

「つーか、雑談してないで足動かそうぜ？　じゃないとその浅野からまた手酷い差別受けることになるぞ」

「あーっ！　そうだったあ……」

「だな、この前遅れた時は本校舎の花壇への水やりだったっけか」

「あー。あん時は大変だったな」

「お前が遅れたからだけだな、前原」

うちのイケメン2人が爽やかに笑い合う中で、岡野が耐えきれない

と言ったら様子で大爆発した。

「あーんもうっ！ どうして私たちだけこんな目に遭わなきゃいけないの——っ!!?」

俺たちE組は本校舎の連中からエグい差別を受けている。それは生徒も教師も例外ではない。

そもそも、この学校に入学する時にこう言う制度があることは説明を受けてたし、それに対する抗議は行わないなど誓約書も書かされた。

そんなある意味では保護者同意の下で受ける差別は本当にエグい。

部活禁止から始まり、エアコンなどインフラが整ってる本校舎に比べて扇風機一つない隔離校舎、普段は用なく本校舎への立ち入り禁止だったり、この全校集会へ参加への移動もまた差別の一つ。

本校舎から隔離校舎への距離は約1km。そんな距離の山道を昼休みを返上して移動しなければならぬ。

昼休みと言えば昼食を取る時間だろうか？ そんな昼食の時間を削ってまでの移動である。

春や秋ならまだ移動しやすいが、夏や冬は地獄だ。

その上、他の学年や学級の連中よりも早く整列して無いといけなわけだからな。

それでもまあ、春でもトラブルは付き物だが。

「よう、お前ら」

「岡島、千葉、三村」

「お前らも急ぐぞうぜ?」

「ああ、そうだな」

山に流れる小川。そんな小川を渡る小さな橋を渡ろうと岡島が足を踏み出した瞬間、バキッと不吉な音が鳴った。

「あつ」

岡島の足下の板が割れた。

さらば、岡島。お前のことは忘れない。

「助けて乃咲い！」

「ちよっ、おまつ!?!」

川に流される直前、岡島の奴が俺のズボンの裾を掴みやがった。思いの外に川の流れる力が強いのか、俺の足は滑る様に川のほうへとズレて行き、ジャボンと川に落ちてしまった。

「ちよつ、岡島!! 圭一!!」

「磯貝いいい——!」

俺は岡島に巻き込まれた。

?? ?? ??

辛うじて川の岸まで寄り捕まった俺たちは本当になんとか流されるギリギリで止まることに成功した。

「だ、大丈夫か、岡島」

「だ、大丈夫。すまん乃咲」

へトへトになりながら川を上る。

「やべえ。何処に流されたかわからねえ!」

「でも一応は学校の敷地内だし、危ない道はそうそうないだろ。走るぞ!」

俺たちが遅れたからと言う理由でクラスメイトたちに迷惑を掛けるのは忍びないし。

ひとまずは岡島を伴って走り出す。

「「きゃー!!」」

矢田さんたちの声が聞こえた。

とりあえず正道に戻れたらしい俺たちは茂みから飛び出すのだが、そこには何故だか、無数の蛇がいた。

「へ、蛇!!」

何故だか蛇が全部俺たちの方を見ていた。

首を立てて舌を出す攻撃姿勢を取る蛇たちは一気に俺と岡島に飛びかかって来たので避ける様に走り出す。

「「岡島くん、乃咲くん!!」」

なんかすつごい災難に巻き込まれてる気がするが、ひとまずは道なりに走る。めちやくちや頑張つて走る。

すると今度は崖上から落石。
インディージョーンズか何かに有りそうな丸い岩がゴロゴロと転がって来た。

「おい!? この学校おかしくねえか!」

「いや、今日に限っておかしいだけだろ!」

普段、岩とか川とか渡って通学してた覚えないんだけど。なんか今日1日で学校が様変わりした様な気がするの俺だけなのかな。

「二乃咲、岡島ああああ!」

あ、寺坂いたのかよ。

村松に吉田、狭間さんまで?

まあ、それでも気づいたところでどうしようもないので走って逃げ続けるしかないのだがなあ。

必死こいて走り続けた。

「誰だよ!? 蜂の巣刺激した奴!」

杉野の叫び声が聞こえる。

なんだか、嫌な予感がする。

「どわあああ!? 蜂だああああ!!」

「バカっ、大声出すな岡島あああ!」

大きな音に刺激されたらしい。蜂が攻撃態勢で俺や岡島の方に突っ込んでくる。

解せぬ、蜂は白い奴は攻撃しないんじゃないやなかったのか!? 俺の銀髪は効果なしなのか!?

祖父母や母の知り合いからお母さんに似てると言われる以外だと唯一のメリットだった蜂に襲われずらいつて項目が今日、頭の中から削除されてしまった。

「二乃咲、岡島ああああ!!」

「誰か助けてくれえええ!」

叫ぶ岡島に全力で同意した。

そして走ること数分後、俺たちは漸く本校舎へと辿り着いた。岡島は虫刺されや蛇に噛み付かれたあとなど、無数の傷を負ったが、俺は川に落ちた時に制服が濡れたくらいですんだのは奇跡だったな。

「大丈夫か、岡島」

「あ、ああ。大丈夫……。つてか、お前、よく息切れしてないな」

「鳥間先生に鍛えられてるからな」

「さ、流石だぜ……」

ゼーハーゼーハー言ってる岡島を尻目に制服に着いた汚れを落と
しているとゾクゾクとクラスメイトたちが山から降りて来た。

皆んな疲労困憊って様子だ。

「くそっ、なんで俺らだけ……」

「言ってる場合か、ほら、折角早く来たんだから並ぼうぜ。また学校全
体の花壇に水やりとか勘弁だ」

まだ休みたいだろうに渋々動き出す面々。

俺は彼らに続いて移動して、体育館に入る。

さて、今日に関しては遅刻はいない。罰喰らうことはないだろう。

まあ、カルマは欠席しているが、仮病でも隔離校舎で休んでる奴にと
やかく言う奴はそういないだろ。

「うわ、今日も早いですねえ」

「俺たちはああなりたくないよな」

横からぶつぶつと聞こえる野次、直接絡んでくる輩を無視したり、
あしらったりしているうちに漸く集会が始まった。

ちなみにE組の連中が全校集会を嫌がる理由は実を言うとあの長
距離移動だけではない。

集会が始まるまで投げられ続ける野次、そして集会に出席した全校
生徒と教師陣からイジメ、過剰とも取れる弄りを受けるからだ。

「皆さんは全国から選ばれたエリートです。ですが……どっかの誰か
さん達みたいにしてしまうもない人達もいます。エリートの皆さんは彼
らの様にならない様に！」

「「あははは!!」」

「「きゃははは!!」」

ちなみに、笑い声の前のセリフはこの学校の教頭のセリフである。
これだけでこの学校の異常性がわかるだろう。

何も集会でこういう言動をしているというアンチE組の様なムー

ブをしている訳ではなく、素でこの言動をしているのだ。

異常なのがよく分かるだろう。

「続いて生徒会からの発表です」

司会がそう言うと同時にようやく野次が止んだ。これで漸く少しは静かになるだろう。

集会中に静かにするなんて小学生でも出来ることができないうちになんてこう、偉そうにもものを言われなきゃいけないんだろう？

「え、なにあの先生？」

「シュツとしててかっこいいー」

なんかまた五月蠅くなってきた。

「どうも、E組の担任の烏間です。普段は隔離校舎にいたのでご挨拶が遅れました。この場を借りてご挨拶させていただきます」

なんだ。烏間先生か。

「いいなー。うちの校舎、男子レベル低いから羨ましいー」

だろ、俺らの烏間先生かっこいいだろ？ とか思っているとカツ、カツと鳴り響くヒール音。誰だろう？

「なんだ!? あのハリウッド女優見たいな先生」

ビッチ奴である。あの人、体育館の中でまだヒールなのかよ。せめてスリッパに履き替えるよ。

「あ、渚〜」

しかも渚に絡み出したし……。

「あ、見て見て烏間先生〜！」

「ナイフケースデコツたんだー」

「可愛いでしょー!?!」

「可愛いのは良いからここで出すな!? 暗殺のことは内緒なんだぞ!?!」

「は、はーい」

烏間先生え……。

アンタ、やっぱり苦労人なんだな。

ていうか、どいつもこいつも集会中なんだから前見て静かにしてろよ……なんでこれ見よがしに騒ぐかね。

「はい、生徒会活動についてまとめたプリントは行き渡りましたね？」
プリント？ そんなの貰ってないけど？

隣と後ろにそんなの渡されたか？ と確認するが、誰も首を縦に振らない。

「あの、E組の分まだなんですけど」

磯貝が最前列で指摘するが、帰ってくるのは……。

「あら、ごめんなさい。E組の分、忘れちゃった見たい。すみませんがE組は全部記憶して帰って下さい」

そんな無責任な言葉とギャハハという品のない笑い声。そんな連中について、俺も思わず溢してしまう。

「はっ、大事な集会で使うプリントを1クラス分まるまる忘れるとか、記憶力弱いのはどっちだかなあ」

「なっ!？」

「おっと、すみません。集会中なのに大声出しちゃいました。すみません。ああ、でも問題ないから。集会中に静かにするなんて当たり前のことできない奴らの集まりだもんなあ」

俺の一言に静まり返り、シーンとする体育館に響く様に言ってやると慌てて来たどっかのクラスの先生が俺の腕を掴んだ。

「……乃咲、お前か。ちよつと来い」

「はい」

俺は教師に捕まり、職員室まで連行された。

?? ?? ??

本日も理不尽なり。

ただ事実を語っただけなのに、教師陣から『E組のお前が悪い』と言われる始末。

ちなみに、俺は集会のたびにこうして野次を返しては職員室に連行され、説教されていた。

「あの、6時間目に間に合わなくなるので帰って良いですか」

「……はあ。もういい。行け」

「ありやつとごいしました〜」

こう言っておけば必要以上に先生たちに絡まれることはない。何事よりも学業優先としてあの校舎に送ったんだから、勉強に遅れると言っておけば引き止められはしないのだ。

説教とか言っても大してありがたい話はないが、ここで感謝の念を伝え忘れてはならない。ので、適当にお礼を言ってお職員室を出る。

職員室常連の俺やカルマはこの手でいつも集会をサボるか、途中で抜け出している。

お陰様で野次を返してからの先生方の対応も早い早い。手慣れた感じが既に出てる。

まあ、このサボりと抜け出し方の一覽の動作はカルマの方が軽やかでしなやかなんだけど。

時間的に全校集会も終わったところだろう。

どうせ次の時間は移動時間を考え見た結果、道徳にしようって話になつていたので、急ぐ必要はない。

などと思っていると、渚がいた。

なにやら、絡まれてるらしい。

「おい、聞いているのか、渚！ 殺すぞ！」

「――殺そうとしたことなんてない癖に」

おおう、渚が他の組の連中を押し除けて歩いて行くぞ。どうなってるんだ、これ？

なんか今の渚から凄みを感じたぞ。

ただ、絡まれてるのなら助けたほうがいいかと思っただが、どうやら俺の取り越し苦労だったらしい。

少し安心して渚の後を追いかけようと足を一歩、前に踏み出したその時、背後から聞き覚えのある、懐かしい声に呼び止められた。

「圭」

鼻持ちならないといえ言過ぎだが、少しばかり気取った声音に聞こえる上擦った声。

今の所は磯貝くらいしかしない下の名前での馴れ馴れしい呼び捨

てでの呼びかけ。それをする奴はアイツ以外だと1人しかいない。

「なんだ、呼んだか？ 浅野」

カルマほど真つ赤ではないがそれなりに茶つ気のある赤毛を短く切り揃えたい男子。この学校に入学してから常に頂点に立ち続けた、俺たちの学年のみならず全国模試も1位をキープしている、俺がかつてライバル視していた男。

振り向いた先にいたのは浅野学秀その人と、その他の取り巻き4人だった。

なんだ？ どうしてここで呼び止める？ と思っただが、そういえばコイツ、生徒会長だったことを思い出し、俺が集会中に退場させられたことを咎めに来たのだと思い当たる。

というか、浅野が集会の後に絡みにくるのはいつもの事だった。E組に落ちる前から変わらない。コイツは謎に俺に絡んでくる癖があるのだ。昔から。

「集会中に大声を出して周りの生徒を挑発するな」

「とか言うなら集会中に騒ぐあの馬鹿どもを生徒会長として注意するのが先なんじゃないのか？ 俺は集会中は静かにするもんだつてのを皮肉ってやっただけだぜ？ あと、1クラス分のプリントを忘れるような無能が生徒会にいるのはどうなんだ？」

「なつ、言わせておけば！」

浅野の取り巻きが発狂する。

目に見えて怒ってる。血管ピクピクで殴りかかってくる寸前。まあ、晩年最下位にこんな風に煽られたらそりゃ怒るか。

「俺たちは常に総合5位以内に入っているんだぞ！ お前みたいなド底辺に馬鹿とか無能呼ばわりされる筋合いはない！」

「学術的な馬鹿じゃないのに無能って奴いるよな。テストで満点、実技で3点みたいな奴。東京大学行ったからって仕事できるようになるのかよ？ 頭でっかちが」

「くっ…この！」

取り巻きが胸ぐらを掴もうと一方的前に出てくるが、浅野がそれを片手で制すると大人しく引き下がる。

所詮は腰巾着か。悔しそうに下唇を噛むその姿はなんと言うかハ
マリ役というかよく似合っている。

と言いたいが、言ったら絶対に暴力沙汰になるのであえて煽るよう
な事はこれ以上言わない。

浅野は浅野でため息を吐きながらソイツを黙らせると呆れたよう
に俺を見て口を開く。

「確かにお前の言う通りだ。アレはイジリではなく、イジメだな。荒
木、資料くらいは普通に配ってやれ」

「浅野くんまで……というか、それさつきも言われたし……。E組の
肩持ちすぎじゃないかい？」

「我々は生徒会役員だ。彼らもこの学校の生徒である以上、選挙への
投票権や意見を述べる権利を持つ生徒会の一員であることに変わり
ない。であるなら僕たちくらいは中立であるべき。違うか？」

「わ、分かったよ」

「と言うわけだ。すまなかったな、圭一」

「……いや、こつちそ大声で言うべきことではなかったな。すまん」
浅野は何を考えているのか分からない。

ただ、完璧に善意であるとは思っていない。コイツは昔から何を考
えているのか想像しづらい。

この学校の生徒に対する絶対的な支配者である癖になぜ、落ちぶれ
た奴にこんなに絡んでくるのか。それが理解できない。

誰に対しても明るい声、表情で柔和に接する生徒会長。初めて参加
した生徒総会では当時1年でありながら当時の生徒会長に推薦され
る形で会長職に立候補。それ以降、3年間生徒会長の職務を全うし続
けているカリスマの持ち主。

彼の何が俺にこんな絡み方をさせているのかさっぱり理解できな
いことから、自分の中では浅野学秀という男は珍獣のような扱いだ。

「話は終わりか？ そろそろ校舎に戻りたいんだが」

「そうか、引き留めてすまなかったな。次のテスト、期待してるぞ。頑
張ってこつちに帰って来てくれ」

「それ、本音で言ってる？」

「勿論だとも」

「あ、そう」

これだ。集会がある度にこうやって煽ってるのか、本音なのか、分からないセリフを残して奴は去って行くのだ。

なあ？ 真意の読めない奴が絡んで来るって本当に面倒臭いのだ。億劫にもなるだろう？

俺は首を捻り、ため息を吐きながらE組校舎へ向かって歩き出す。

浅野との因縁、どっかで決着つくのだろうか？ 色々考えると思わず追加でため息が溢れた。

14話 支配者の時間

E組校舎に我が校のラスボスが現れた。

さて、俺はどうするべきだろう？

「乃咲くん。ここにルービックキューブがある。この六面体の色を揃えたい。一度に沢山、誰にでも出来る方法で。キミはどうする？」

ラスボスはパルプンテを唱えた。

さて、どうしてこうなったのか。

俺は6時間目の授業開始時に遡る。

?? ?? ??

「さて、始めましょうか」

全校集会が終わった後の6時間目。

辛うじて6時間目開始直前に全員揃った俺たちが席に着くと殺せんせーが鉢巻してクラスの人数と同数まで分散して言い放つ。

やる気満々、頭に巻いた鉢巻きには国、数、英、理、社とNARUTOが2人。5教科の頭だけならテスト勉強だと理解できたが、NARUTOがいることで想像が難しくなった。

「何をですか？」

磯貝が代表して聞く。

すると、分身が一人一人声を出して答えてくれる。殺せんせー、なんか、凄い器用なことしてるよな。

分身とか言っても、厳密に言えば高速移動の産物の残像だ。つまりは俺たちの見えている殺せんせーの分身の位置を高速移動して反復移動しているのがこの残像の原理なわけだが……。

「学校の中間テストが迫って来ました」

「そうそう」

「そんな訳でこの時間は」

「二さあ！ 高速強化テスト勉強を行います！」

こんな風に俺たちに聞き取れるように残像一つ一つ喋らすと
と各残像の位置で聞き取れるように言葉を一音一音繋げている
は？

凄まじく器用なことをこともなげにさらりとやり遂げる殺せん
せーであった。

「先生の分身が1人ずつマンツーマンでそれぞれの苦手科目を徹底し
て復習します」

殺せんせーの分身がそれぞれの下やってくる。国語6人、数学8
人、社会3人、理科4人、英語4人、NARUTO2人。

そして、数秒前に俺の頭を悩ませたNARUTOが何故だか俺と寺
坂の前に来た。

「なんで俺と乃咲だけNARUTOなんだよ!？」

「君達は苦手科目が複数ありますからねえ。特別コースです。遠慮な
さらずに」

「余計なお世話だわ!」

寺坂、今日も元気だなあ。

今日も元気よく一丁前に殺せんせーへ反発する寺坂をいつものよ
うに微笑ましく見守りながら、俺は殺せんせーの言うように教科書を
開く。

殺せんせーは俺を乃咲圭一として見てくれる。あの父親のことを
関係なく一生徒として見てくれる。

だからやる気が出たんだ。呪いのように付けられていた『乃咲新一
の息子』というレッテルを無視して接してくれたから、こんな風に期
待されるのなら自分の力で出来る範囲で答えたい。

そう思いながら指示された問題を解く。

出されたのは数学の証明問題。殺せんせーが来る前に習った様な
気がしない訳でもない問題だ。やり方は正直、覚えてない。

「殺せんせー、この証明って」

「うんうん。証明はまず、段階分けして考えて見ましょう。今から
マーカーで色を付けるのでその部分を1つ1つ考えて見てくださ
い？」

問われた部分を言われた通りに考える。ノートの端に殺せんせーがそれぞれの考え方のコツを書いてくれたのでそのメモと教科書とで睨めっこ。

そして答えを導き出す。ノートに式と照明の内容を書き写すが、かなり時間をかけてしまった。

かけてしまったと思ったのだが……。

「おや、もう終わったんですね。ふむ、答えも合っています。では、少し応用問題を出しましょう」

殺せんせーはこんなことを言う。

言われて時計を見るが、時計の秒針は一周もしていないかった。最近、こんな事が多い。

もしかすると、カルマが崖から落ちた時や、烏間先生との訓練でヤバイと感じた時に訪れるあの感覚が無自覚のうちにやって来たのかもしれない。

そう思いながら問題を解く。

これまた俺の中ではとんでもない時間が過ぎたはず、少なくとも感覚的には過ぎたはずなのに、ノートに書き写す頃には秒針が漸く一周した所だった。

「……どうしましたか？ 乃咲くん。何か悩みでも？」

慣れない感覚に首を傾げていると、殺せんせーが気にしてくれたらしく声をかけてくる。

ちようど良いのでこれまでであったことを説明してみる。カルマが崖から落ちた時からヤバいと思った瞬間に世界が止まって見える様な感覚に襲われる事、考え事をしていると長時間過ぎた感覚があるの、実際はそんなに時間が経ってないことが頻発していること。

すると、殺せんせーは訳知り顔で頷いて答えてくれた。かなり手短かに、たった一言で結論から。

「キミはゾーンに入りやすいのでは？」

「ゾーン？」

「野球漫画やバトル漫画でよくあるでしょう？ 最終決戦、次の一撃で決着が着く瞬間、主人公の見える景色が変わる。何もかもがスロー

モーション、あるいは止まって見えるって展開です」

「あー」

言われてみれば漫画なんかでは良くある展開だ。野球漫画だと2アウト満塁、2ストライク。後一回の空振りやアウトでゲームセットって展開でライバルキャラのピッチャーが投げたボールがスローモーションに見えるって展開は。

「火事場の馬鹿力とも言いますがね。キミの集中力の高さは赴任した当初から感じていましたが、よもやゾーンに入る程とは」

「そのゾーンって奴は誰でもよくある事？」

「人によるでしょうが、誰でも入れる訳ではないでしょうね。スポーツ選手なら数回あるかどうかってところでは？」

殺せんせーの言葉に驚く。

そうか、この感覚をゾーンというのか。

「ヌルフッフ、やはりこのクラスの生徒は人知れない才能が多い。これだから教師の仕事は面白いのです」

ヌルヌル動いている触手を関節を鳴らすようにポキポキとならすと殺せんせーが言い放つ。

「その自分と周囲の時間感覚のズレに関しては腕時計をつける事で解消しましょう。何か考え過ぎたと思ったら時計を見る。そんな癖を付ければ徐々に慣れて行く筈です」

「腕時計か……分かりました」

今日の帰りにでも百均で腕時計を買って帰ろう。

「しかし乃咲くん？ それは間違いなくキミの才能ですが、使い過ぎは身体に良くありません。人より多く考えられるということは人よりも疲れやすいと言う事ですからね。考え過ぎてないかを考え、自分にストップをかけることも大事ですよ」

「はい、気を付けます」

とは言っても、考えてる時にそんな事を頭に留める余裕があるかどうかだけだね。

しかし、そうか、俺の集中力はそんなレベルなのか。もしかするとこれまでも知らないうちにゾーンに入る事があったりしたのかもし

れない。

だが、考えようによつてはこれほとんどない長所になる。人よりも多い時間を考えられるんだから、それを勉強に回せば、それだけ他人よりも勉強を身につけられるってこと。

今の俺は1年の問題すら危ういわけだし、いつそのこと、テストまでの間、放課後の烏間先生の訓練を殺せんせーの勉強にシフトしたほうが良いかもしれない。

それと、今後は意識してゾーンに入る訓練も必要だろう。トリガーは分かっているんだから、あとは意識するだけだ。

などと考えながら時計を見る。

また、時間は進んでいなかった。

なんと言うか、普段の勉強をどれだけ考えずにやっていたのかが分かるな。ちよつと考えただけでこんなに時間がゆっくり感じられるのに。

「さて、では勉強に戻りましょう」

「はい」

その後、俺は何度か意図的にゾーンに入り、またある時はたまたまゾーンに入りながら勉強を進めた。

ただ、殺せんせーの言う通り、周りにとつての1時間が自分にとつての数十時間であると言うのは確かに身体に悪いらしい。

ちよつとばっかし知恵熱ちつくな頭痛がする。

にしても、まさか自分にこんな特技があるとは思ってなかった。不思議なこともあるもんだ。

こうして6時間目は終わった。

自分の謎の才能を認知した訳だが、まさか、この才能がまさかあんな事件招くことになるとは今の俺は思いもしなかった……なんてな。

俺は6時間目が終わったその足で殺せんせーを捕まえ、授業中に考えた様に放課後は勉強に充てようと思つたので烏間先生にその旨を伝えようと職員室の扉を開くと……。

「やあ、久しぶりだねえ、乃咲くん。それとあなたが殺せんせーですね」

「ご、ご無沙汰してます。浅野先生」
そこにはラスボスがいたのだった。

?? ?? ??

「乃咲くん。ここにルービックキューブがある。この六面体の色を揃えたい。一度に沢山、誰にでも出来る方法で。キミはどうする?」

と冒頭に返る。

何故、ラスボスがこんなところにいるのか。

この人は浅野學峯。この柵ヶ丘学園の理事長であり、浅野学秀の実の父親。

息子がこの学校の生徒の支配者なら彼はこの学園全ての支配者と
いっても差し支えない存在。

そんな人からルービックキューブを一つ、放り投げられた。さて、
どうするべきか?

この人の要求は効率よく色を揃えろって事だよな? 椅子に座つ
てる浅野理事長先生の足下にはルービックキューブの残骸があるし、
手にはマイナストライバーが握られてるから、どうせ、分解して並べ
直すのが合理的だ、みたいな事をやっただらう、たぶん。

だったらやることは一つだ。

「殺せんせー、プロッキーマーカー貸してください。色は気にしないで
良いので」

「はい、どうぞ」

「どうも」

俺は殺せんせーから借りたマーカーペンの太い方を出して、雑に一
面を塗ったくって黒一色になった面を浅野理事長に見せつける。

「俺は上から色を塗り替えます。ペンキか墨汁にでもあれば漬けてや
るだけで1秒と掛からず色が揃いますよ。ペンキは無理でも墨汁な
ら小学生でも持ってますし、ある程度の指示を理解できる歳なら誰に
でも出来る、一度に沢山の面を同じ色に揃えられますよね」

「なるほど、面白い答えだ」

「ご期待に応えられた様で何よりです」

「どうやら満足させられたらしい。」

ラスボスは満足そうに微笑んだ。微笑んだと言うか、ほくそ笑んだと言わべきか。

でも、満足したのは確からしく、比較的目が笑ってないこの人にしては珍しく、目が笑っていた。

「あの……、この方は？」

さつきから話に置いてきぼりな殺せんせーが申し訳なさそうにおずおずと聞いて来たので、手短に答える。

「浅野學峯先生。この学校の理事長です」

「り、理事長!?!」

俺の言葉に慌てた様に出欠簿を机に置くのと椅子に足を組んで座る浅野先生の肩を揉み、靴を磨き出す殺せんせー。

きつとこの場に渚がいたら弱点メモに追記することだろう。『上司には下手に出る』みたいな感じで。

「こんな山奥までお疲れ様です！ モミモミ……！ それはそれとして私の給料もうちよつと上がりませんかねモミモミ……!」

殺せんせー、マジで給料で暮らしてんのか。んでもって、浅野先生もこの人に給料払ってたのかよ。

いつだったか誰かがツッコミ入れてたが、本当になんで地球を滅ぼす超生物が給料で暮らしてるんだか……。

そんな事を思っていると、浅野先生は立ち上がり、殺せんせーに正面から向き合うと徐に口を開く。

「こちらこそ初めまして、殺せんせー。あなたの事はその烏間さんからよく伺っています。いやはや、悲しい生物おかたですね。地球を救う救世主になるつもりが、滅ぼす巨悪に成り果てるとは」

「す、救う?」

「おや、何も聞いていないのかい?」

なんか滅ぼすのと対極的な言葉が飛び出して来たので思わず浅野先生を見るが、彼は肩をすくめると烏間先生に丸投げするように視線を彼に向けた。

一方で烏間先生は何事もなかったかな様に静かに言葉を紡いで口を開いた。

「生徒たちには暗殺する上で優位になる情報を開示してますので。政府のゴタゴタにこれ以上子供達を巻き込む事は貴方としても本意ではないでしょう?」

「ええ。生徒たちの安全を第一にしてください。それさえ保証してもらえれば私から言うとはありません。全てを理解する学も持ち合わせていませんし、あなた方からは十分な口止め料も貰ってますからね」

「……助かってます」

烏間先生の牽制と浅野先生ののらりくらりした態度。この2人のやり取りから察するに殺せんせーの正体について烏間先生は意図的に伏せている部分があるってことで確定かな。

だが、その真意に迫る事は烏間先生のセリフを借りるなら『政府のゴタゴタ』に巻き込まれるってことなんだろう。そしてそうなる事で少なくとも俺たちに不利益が出ると。

それらを見捨てて考えるなら、浅野先生の言葉は俺の考察を進めるのにかなり重要なパーツだった。

前に殺せんせーが人体実験の果てに今の姿になった、と考察した事があつたが、もしかしたら、その実験の目的は地球を救う事だったのではないだろうか? 考えようはいくらでもある。

今の地球の命運に関わる事といえば地球温暖化、つまりはエネルギー問題な訳だが……。

以前、月を爆破したのは殺せんせーの同種が暴走して死んだから、みたいな事を考えた。あの月の形を変えてしまうほどのエネルギーや来年の3月に地球を滅ぼすという殺せんせーのエネルギーも元々はそう言うエネルギー問題を解決するための物だとしたら?

人体実験は成功、殺せんせーはエネルギーを内包することに成功したが月で殺せんせーと同様の実験を受けていた何者かが暴走して死亡し、それに伴ってエネルギーが爆発、月の形が変わったのだとしたら?

きっと実験の成功体である殺せんせーの抹殺が決定されるだろう。そんな展開になっても不思議じゃない。というか充分にあり得る筈だろう。

そもそも地球温暖化の根本的原因のエネルギー問題を解決しようとする企業は数あれど、月での実験ができると言う事は国が関わっていると仮説しても違和感はない。

むしろ、今の世界各国政府の首脳から暗殺を依頼されてる状況を鑑みるに、世界絡みでのプロジェクトだったと考えるのが自然だ。

殺せんせーの誕生は人為的な物で、人間の実験の果てにあるものだから、理論上、彼の細胞を殺せる、対先生物質……対先生ナイフとかを作成できた、と。

なるほど、確証はないけどこれまでの思考の点と点が繋がって行く様な気がする。

まあ、本当に確証がないのが困ったところなんだけどさ。確認してもはぐらかされるだろうし。

「つと……」

思わず長考したので時計を見る。

どうやらまた、入っていたらしい。確証の持てない考察はこの辺にしておこう。

「暗殺に関しては私はノータッチです。しかし、私はこの学校の長だ。そこで私が考えなければならぬ事は地球の命運よりも、誰かがアナタを殺せた場合のこの学園の未来です」

「にゅ?」

「率直に言えば、E組はこのままでなければ困ります」

「このままと言いますと、今の成績も待遇も最底辺という今の状況を?」

「はい、その通りです」

……時に殺せんせー、浅野理事長よ。この話は俺も聞いてて良いやつなんだよね? なんか退出タイミング逃してしまった感があるんだけどさ。

「乃咲くん」

「はい、乃咲です」

「キミには以前、この学校の目指す場所を教えたことがあった筈だね」話を振られたって事は、ここに居ていいって事だよな？ 自問自答の末に俺は随分前にこの人から直々に教わった話を思い出しながら言葉を紡ぐ。

「働き蟻の法則に理事長の目指す数字を当てはめた例え話ですよね？ たしか5%の怠け者と95%の働き者。5%の怠け者を徹底的に冷遇する事で、自分はあぁなりたくないと思わせる事で残りの95%を働きの者にするって仕組み……でしたか？」

「正解。よく覚えてたね」

「友人の父親に呼び出された挙句、聞かされた話が世知辛い内容だったら誰でも覚えてますよ」

確か、アレは俺が1年の頃。

まだ浅野と成績で横並びだった時代に俺はこの人に呼び出されたことがある。

まあ、たぶん、自慢の息子のライバル気取ってる奴がどんな奴か気になったってのがあるんだろう。

理事長室に呼び出されてこんな感じの話をされたことが確かにあった。

「……なるほど、その5%がE組という訳ですか」

「その通り。E組のようにはなりたくない、E組にだけは行きたくないと95%の生徒が強く思う事で私の理想は実現されている」

「合理的です。だから、E組には今の弱くて惨めなままでいて貰わなくては困ると」

「そう言う事です。先ほど、D組の担任から苦情が来ましてね。『E組の生徒に殺すぞ、と脅された。すごい目で睨まれた』とね」

それは紛う事なき風評被害だろう。

たぶん、さっきの渚のことだ。まあ、あいつがしたことと言えば本当に殺そうとしたことあるの？ という問いかけの様なものだった訳だから、渚だと確定した訳じゃない。

案外カルマとか……あー、カルマなら喧嘩に売り言葉に買い言葉で

確かにやりそうではあるな。

「暗殺をしているのだからそう言う目つきも身につくでしょう。それはそれで結構。問題は一般生徒に最底辺の生徒が逆らったということ。それは私の方針では許されない。以後、厳しく慎む様にお伝え下さい」

言いたいことだけ言ってスッキリしたのか、俺の横を通りかかりながら『勉強頑張りなさい』と残すと浅野理事長は職員室を出る……かと思いきや、不意に殺せんせーに振り向いて、何かを投げた。

「そうだ、殺せんせー。1秒以内に解いてくださいっ！」

なんだなんだと、思わず目を凝らして見る。

止まった世界で中に浮いていたのは知恵の輪だった。

「い、いきなり!?!」

殺せんせーはその後、たつぷり1秒でジタバタと暴れ回り、知恵の輪を解くどころか、触手ごと知恵の輪に絡まってしまった。

そんな殺せんせーをまじまじと見下ろしながら浅野理事長は何か現実を叩きつける様に言い放つ。

「噂通り、凄いスピードですね。これならどんな暗殺でも躲せそうだ」
見下ろしていた姿勢から今度は地べたに転がる殺せんせーに目線を合わせる様に覗き込むと、言った。

「でもね、殺せんせー。この世の中ではスピードでは解決出来ない問題もあるんですよ」

殺せんせーは緑のしましまになるでもなく、怒った赤になるでもなく、黄色のまま身じろぎ一つせず浅野理事長の言葉を受け止めた。

彼は彼で、『私はこれで失礼します』と言い残すと颯爽と扉を開けて職員室から出て行ってしまった。

『やあー、中間テスト期待しているよ、頑張りなさい!』

廊下から聞こえる激励の声。

しかし、その声音は明らかに冷めている。興味はないが言っているだけ。ある種のリップサービスの様なものだと顔も見えないのに理解できた。

「……ターゲットとしてのお前は無敵に近い」

烏間先生がポツリとこぼす。

「マッハ20の脅威的スピードであらゆる暗殺を交わし、仕掛けられる暗殺を完全にコントロールしていると言っても過言ではないだろうが、教師としては無敵ではない」

視線が理事長の出で行ったドアに向く。

「この学校にはあの強力な支配者がいる。ここの教師でいる以上、お前であろうとも彼のルールからは逃れられない」

烏間先生の言葉に反論するように、パキツと音を立てて知恵の輪が真つ二つに割れた。

15話 第二の刃の時間 その1

翌日から殺せんせーは燃えていた。

その証拠に1時間目から6時間目にかけて全ての時間で高速強化テスト勉強を行うと宣言し、ざっくり1人につき5人くらいの分身を用意して、朝からやる気に満ちていた。

理由は言わずもがな、昨日の理事長とのやりとりにあるだろう。言ってしまうえば、殺せんせーの教育論を真っ向から否定された様なものだから、ある意味、プライドを傷つけられたのかもしれない。

「今日はもっと増えてみました」

「いや、増えすぎだろ!？」

「昨日の今日でなにがあつた!？」

前原と杉野のツツコミが今日も冴える。

そんな中で俺は一つ、気になった。

殺せんせーは昨日、成績も待遇も最底辺だとこのクラスを評した割に、一度もE組という制度は否定しなかったのだ。

それはどう言うことなのか、俺は少しだけ考えるが、まだ、答えは出せない。

だから代わりに勉強に少しでも集中しよう。

今の俺に出来るのはそれくらいだ。

それに昨日、理事長の持論を聞いて、家に帰って、風呂に入りながら考えた事がある。

あの人は未来を見ていた。誰が暗殺に成功した後のことを考えていた。俺はその点に関しては全く考えていなかったというのに、ある意味で暗殺にノータッチな部外者の浅野先生の方が深く暗殺のことを考えていたことになる。

それが少しだけ悔しかった。

例えばこの前の合同暗殺が成功していた場合、俺たちの手には何が残っただろう？

山分けした賞金と殺せんせーを殺した達成感や皆んなでやり切っ

た充実感。それくらいしか残らないんじゃないだろうか？

成績は最底辺のまま、金はあるけど生きてく術がない。そんな状況に陥っていたんじゃないのか？

少なくとも今年の前期の実力テストで5教科あわせて100点とかやつてた俺ではまともな高校に入れずに、金を使い果たして野垂れ死ぬ可能性もあつたんじゃないだろうか？

それでいいのだろうか？

今、こうして勉強を教えてくれてる殺せんせーを殺せたとしても同じ事が言えるだろう。

俺たちは……少なくとも俺は、暗殺に成功してしまつたら破滅する未来しか見えない。

だつたら、せめて普通の成績くらいは取らないと。今後、苦勞する事が分かっているんだから。

「殺せんせー、この問4なんですけど」

「おお、もうそこまでやってましたか。キミは飲み込みが早いですね。普段は勉強に向いてなかった地頭の良さがようやく勉強に向き始めた様に見えます。なにか心境に変化でも？」

「昨日、理事長先生の言葉を聞いて思ったんです。暗殺計画を立てた癖に俺は殺せんせーを殺せた後のことを深く考えてなかった。賞金があるからどうにかなるだろうと、漠然としたことしかね」

「ほうほう」

「けど考え直したんです。殺せんせーを殺した賞金はあるけど低い自力のせいで底辺高校に入学しました、底辺企業に就職しましたじゃあいずれ野垂れ死ぬんじゃないかって。だからまあ、そうならない為に勉強はするに越したことはないと思つたんです」

殺せんせーに褒めてほしいとか思つてた事は言わない。それで緑のしましま顔になられてもム力つくし、調子に乗られたら更にム力つくから。

「ヌルフッフ、いいですねえ。乃咲くん。最初の頃の人とのコミュニケーションを避け、のらりくらりしていた頃に比べて実に先生好みに仕上がってきています。烏間先生が体育教師になつた辺りからキ

ミは変わり始めた」

「気持ち悪い事言わないで下さい」

「照れ隠しですね？　けれど、事実、キミは優秀だ。地頭の良さ、皆を纏めた指揮能力、人並外れた集中力に加えてキミは今、第二の刃を研ぎ始めている。先生はそれが実に嬉しい」

第二の刃か、そう言えば、杉野が暗殺失敗したときにそんなことを殺せんせーが言っていた気がする。

たしか、暗殺に失敗した時、咄嗟に使える武器を持って話だったかな。万に通じた殺し屋と一つしか極めてない殺し屋の優劣の差について話している時に俺は、『万に通じている方が切れるカードが多いから優れている』みたいなことを言った。

なるほど、暗殺を第一の刃とするなら勉強は第二の刃なんだろう。あの時の俺は意外と殺せんせーとの問答の本質を見抜いていたのかもしれない。

「ふむ。乃咲くん。少しテスト範囲から逸れてしまいましたが、次のページの問1をやってみませんか？」

「次のページですか？」

「ええ。次のページでやる問題は今回ページの応用ばかりです。進学校だと偶にあるんですよ、教えてないけど生徒の応用力を測る為に敢えてそういう問題を出すことがね」

「分かりました、やってみます」

殺せんせーに言われるがまま、問題を解く。ちよくちよくゾーンに入りながら自分の中では時間をかけて、出来るだけ丁寧に。そうこうしているうちに数学のテスト範囲に関しては1人で全問解ける程度には頭に詰め込む事ができた。

ひたすらに頭に数式を頭に詰め込む作業は久しぶりだ。ただ、やる気を取り戻した俺の頭は予想以上に働きたがっているらしい。俺の脳はようやく無職ではなくなったようだ。

思えばやる気がないからと言って全く勉強しないというのも良くない話だったのかもしれない。

何を隠そう、俺たちの職業は学生なんだから、勉強しないってのは

ある意味で職務放棄してるようなもんだ。ある意味ってか、完璧に職務放棄か。

「よおし、ではこの調子で少しばかり教科もテスト範囲の先取りをしましょう。次は国語ですね」

「了解です」

こうして俺たちのE組は6時間目の終わりまで色んな教科を詰め込み続けるのだった。

テストは明日。殺せんせーのお陰で今回のテストは前回までの成績を大きく上回る結果を残せるだろう。

そんな確かな手応えを感じていた放課後。

俺たちは今後のE組生活を掛けた大きな賭けをすることになるとは今はまだ考えていなかった。

?? ?? ??

息も絶え絶え。ぜえぜえと息切れしている殺せんせーにクラスみんなが少し困った様な顔をする。どうしてそこまでするのか分からないかったからだ。

「流石に相当疲れたみたいだな」

「1人につき5人の分身だからね」

「今なら殺れるんじゃないか?」

殺せんせーの疲労状況を見て、好き勝手に言う仲間たちに苦笑する。確かに今の殺せんせーは一見すると無防備にしか見えない。だが、攻撃を仕掛けたら仕掛けたで避けられるに決まってる。

なんとなく、労いの思いを込めて、上気した触手や顔に向かってうちわを使って風を送り続けているが、きつと、この距離から暗殺を仕掛けてもこの人には躲かれてしまうのだろう。

大人しくうちわ係に徹していよう。

そう心に決め、風を送り続けていると、岡島が何気なく問い掛ける。「俺たちのためにどうしてそこまで一生懸命に勉強を教えようとするのかねえ」

「ヌルフッフ、君達の成績が上がれば私の教育手腕が認められて、殺し辛くなる。それに、もしかしたらナイスバディなお姉さん達に勉強を教えて、とせがまれる可能性も……!」

それに対する殺せんせーの回答はなんと言うか、夢に溢れていた。ピンク色の妄想に本日2度目の苦笑い。

ただ、そんな殺せんせーの妄想に対して、クラスの雰囲気はなんとなく不穏な物だった。いつもなら杉野辺りが『ねえよ、そんな展開!』とツッコミ入れるところだったろうに返って来たのは三村からの諦めに近い声音の呟きだった。

「……いいよ、勉強の方は程々で」

「……だよね」

そんな呟きにたまたま近くにいた矢田さんが反応し、同調し、不穏な空気がより一層強まる。いや、不穏というより、以前までなら居心地良く感じていた、『エンドのE組』特有のジメツとした空気が広がりにつつあった。

俺たちはエンドのE組だから何をしても無駄。そんなここしばらくは感じてなかった嫌な雰囲気。

「なんとって、暗殺に成功すれば賞金100億円だし」

「それに100億あればその後の人生バラ色だしさ」

「「だよね」」

「ニュヤア!? そんな考え方しちやいますか!」

空気がどんどんジメツとしてゆく。

そうか、少し前まで気づかなかったけど、俺がやる気を無くしている時もこんな空気だったのか。

少し反省しないとな。

などと思っていると、岡島と三村が決定的な一言を言い放つ。昨日の昨日の理事長の言葉を迎合する様な一言を、殺せんせーに向かって。

「だつてさ、俺たちエンドのE組なんだぜ? 殺せんせー」

「成績も待遇も最底辺。そんな俺たちにとっては暗殺の方がよっぽど身近にあるチャンスなんだよ」

いや、岡島や三村が言わなくてもいずれ誰かが言ったこと、そして誰でも思っていたことなんだろう。

事実、杉野が野球での暗殺に失敗した時、俺も似た様なことを考えていたから気持ちは分かる。

けれど、殺せんせーは違った。

この人はこの場において俺たちの考え方とは対極にあった。それを裏付けるかの様に数秒前までは薄いピンク色に顔を染めた甘い妄想に浸っている状態だったのに、今は黄色い顔に戻った。

「——なるほど、よく分かりました」

黄色い顔だが、声音が明らかに不機嫌なものに変わった。顔色は変わっていないけど、不機嫌なことは見てとれた。

「なにが？」

「今の君たちには……暗殺者の資格がありませんねえ……。全員、校庭に出なさい。乃咲くんはイリーナ先生や烏間先生を呼んできてくれますか」

「……はい、了解です」

なんとなく、殺せんせーが怒っている理由が分かった。それは、ついさつき、テスト勉強中の殺せんせーとの会話の中にあった。

俺は言われた通りに職員室に向かい、先生2人を連れて校庭に出る。校庭に出た時、ビッチ先生も烏間先生もギョツとしていた。

校庭の朝礼台をゆっくり引き摺りながら歩く殺せんせーを見て、不機嫌であることを悟ったのだろう。

烏間先生は心なしか焦っている様にも見えた。

「イリーナ先生、プロの殺し屋である貴女に問います」

「な、なによ」

「貴女が暗殺を仕掛ける時、準備するプランは一つだけですか？」

「いいえ。本命のプランなんて失敗することの方が多いわ。予想外の出来事、不測の事態に備えて予備のプランをより綿密に作る事が暗殺の基本よ」

殺せんせーからの急な問いかけに困惑した顔をするが、プロとしての仕事の内容を問われた途端にビッチ先生の顔が変わる。

自分の仕事に自信と自負を持つプロの暗殺者の顔を持って答えたビッチ先生に殺せんせーは満足そうに頷き、彼は続けて鳥間先生に問い掛ける。

「鳥間先生。ナイフ術を生徒に教える時、重要なのは第一撃だけですか？」

「……いや。確かに第一撃は最重要だが、次の動きも大切だ。強敵が相手ならば初撃は高確率で躲されるだろう。だから、その後の第二撃、第三撃をいかに高精度で繰り出せるかが勝敗を分ける」

「結局、何が言いたいん——」

殺せんせーの先生方への唐突な問い掛けに前原が先を急ぐ様に言葉を投げるが、彼の言葉を遮って殺せんせーが言う。

「先生方のおっしゃる様に自信を持てる次の手があるから自信を持った暗殺者になれるんです。そのところを念頭に置いた上で、君たちはどうでしょう？」

殺せんせーが踊るようにその場でくるくると回り出す。最初は緩やかに、そして徐々に加速しながら。

『俺たちには暗殺があるからいいや』と考えて、勉強の目標を低くしている。それは目の前の劣等感から目を背けているだけです。困ったことにこのE組はよく出来ている。E組脱出の方法を明らかにすることでそれすら掴む事が厳しい状況に生徒達を置き、劣等感を煽っている」

そう、このE組には一応の救済措置はある。

それはテストで50位以内に入り、尚且つ元のクラスの担任が復帰許可を出すこと。けれど、それを掴める者は今のところいない。いないからこそ、E組である、という劣等感は大きくなるのだ。

「そんな君たちを置いて、先生がここから逃げ出したら？ 暗殺のターゲットである私がこの後でなんらかの気まぐれで教室を去ったら？ もし、先生が他の殺し屋に先に殺されたら？」

クラスメイトたちの顔に危機感が宿る。

「暗殺という抛り所を失った君たちにはE組である、という劣等感しか残らない。違いますか、乃咲くん」

ここで俺に問いかけてくる殺せんせー。

その理由はさつき殺せんせーに言われた言葉に大きな理由があるのだろう。『キミは第二の刃を研ぎ始めている』きつとその第二の刃がクラスのみんなに必要だと言いたいんだ。

「違わないでしょう。仮にこのまま殺せんせーを殺せたとしても残るのは山分けして目減りした賞金と達成感。んで、取り残されるのがどうしようもない成績の低さ。賞金があるから何でも出来る、とか言ってる金を使い続けていつの間にか金が無くなり、野垂れ死ぬんじゃないんですか」

「そうですね、野垂れ死ぬかどうかはさておき、単独での暗殺が成功しない限りは賞金は山分け。湯水の様にあると思っ込んでいるものこそ、いつの間にか無くなっているものですから」

殺せんせーはますます加速する。

最大でマッハ20まで出せる超生物は加速を繰り返し、風を起こし、校庭の砂や雑草を巻き上げながら巨大な竜巻が形を成して行く。「今のキミたちは実に危うい。そんなキミたちに先生からアドバイスです。——第二の刃を持たざる者は暗殺者を名乗る資格なし！」

竜巻は一気に膨張したかと思うと激しい風と土埃を撒き散らして霧散する。

風と土埃の去った校庭に現れたのは、今までの雑草や整備不良で凹凸の溢れていた荒地のような光景ではなく、しっかりと雑草一本ない平坦で白線の引かれた一般校の校庭と比較しても遜色ないくらいに整備された手入れの余地のない見事な校庭だった。

そんな学校の庭の中心にポツリと立っている1人のモンスターは自らの力の一端を誇示すると俺たちの耳に聞こえるように、けれど何処か呟くように三日月の口をゆつくりと開いた。

「校庭に少しばかり雑草や凹凸が多かったのでねエ。手入れしました。先生は……地球を滅ぼす超生物です。ここら一帯を平らにすることなど容易いことです」

「……」

思わず息を呑む。殺せんせーのスピードの凄さは知っているつも

りだったが、やろうと思えばここまでことができるとは考えてもいなかった。

こうして力の一端でも改めて見せられると自分達が殺そうとしている相手の異常性を否応なしに考えさせられる。

「もしも君たちが自信の持てる第二の刃を示すことができなければ……。相手に値する暗殺者はこの教室にはいないと見なし、校舎ごと平らにして先生はこの場を去ります」

先生方とみんなが校舎と先生を見比べるように視線を向ける。平らになった校庭を見るとそれが如何に容易いことなのかを理解できる。

クラスメイトたちが絶句する中で渚が口を開いて、殺せんせーに問いかける。

「第二の刃……、いつまでに」

「決まっています。明日のテストです。明日のテストでクラス全員50位以内に入りなさい」

「……!!?」

渚の問いに対して帰ってきたのは、無茶振りとも思える要求だった。

これは流石に無茶振りというか無謀だ思ったのだが、どうやら殺せんせーはそんな風には微塵も思っていないらしい。顔には50の数字を浮かべていた。

「君たちの第二の刃は既に先生が育てています。そして、先生は本校舎の教師達に劣るほどトロい教え方をしていません。自信を持ってその刃を振るって来なさい。君たちの最初のミッションです」

俺たちの初めてのミッション。

俺たちの初めての暗殺対象は本校舎の同級生達ということなんだろう。

「ミッションを成功させ、笑顔で胸を張りましょう。君たちが暗殺者でE組であることに！」

やはり、殺せんせーはE組の仕組みを間違っているとは言わない。どうせならいい環境のほうが教育だってしやすいだろうに。そこだ

けがやはり不思議だった。

「でもさ……」

殺せんせーの言葉に未だに賛同できないクラスメイトたちは居る。そんな彼らは口籠る。

それも当然だ。今までずっと最底辺にいた奴が急にそんな自信を持てるわけがないんだ。

どうしたものか。

考えるが、俺に出来ることなんてそんなにない。

そう、そんなにないってだけでない訳じゃない。だから、出来ることをしてやろう。発破を掛ける。

俺は不良なんだから、少しくらいドロを被ってやってもいいのかもしれない。

「……なあ、お前らさ、それでいい訳？」

「……圭一？」

磯貝が不安そうにこっちを見るが、気にしない。

「この前さ、ビッチ先生を追い出そうとした時にさ。お前らが言ってたんじゃない。勉強の邪魔だから出て行けって。なのにその勉強の成果を見せろって言われて尻込みするわけ？」

チラツとビッチ先生を見るとクスリと笑い返される。いつもは年上の余裕みたいな感じで少し鼻に付くその態度が今回ばかりは頼もしく思えた。

「その通りね。私はプロとして仕事をする為に教師をすることを選んだわ。その発端になったアンタらが中途半端な結果しか出せないなんて許さないわよ？」

「な、何言い出すんだよ!？」

「チツ、偉そうに言うなよ。学年最下位の癖に」

「おう、学年最下位だ。んじゃ、寺坂。お前よりいい順位取ってやるよ」

「ああん!!？」

あーあ、やっちゃまった。

とんでもない啖呵切っちゃった。こんなの絶対に俺のキャラク

ターじやないのに。

クラスメイトたちからのヘイトを買ってどうするつもりだよ、俺。確かに不良扱いされてるけどさ、別に人から嫌われない訳じやないってのに。

「はあ……。圭一、お前またそうやって」

「磯貝くん、またって——」

「磯貝、片岡。お前ら2人よりもだ。ここに居る奴ら全員よりいい点取ってやる」

「っ、言ったな!?!」

岡島や前原たちが俺の啖呵に過剰反応する。

よし、少しは泥を被ってやった甲斐があった。

「出来なかつたらここに居る全員に土下座しろよ」

「分かった。土下座でいいんだな? 寺坂」

「やれるもんならやってみな」

こうして俺は、折角馴染みつつあったクラスの雰囲気をぶち壊し、一瞬で本校舎のみならずE組の中でもアウェイになったのだった。

16話 第二の刃の時間 その2

迎えたテスト当日。

僕らはアウェイの校舎にいた。普段は用がなければ立ち入りを禁止されている本校舎だが、テストは全校生徒が本校舎で受ける決まり。

だから、僕らはE組はアウェイのフィールドで戦うことになる。

けれど、そんなアウェイな校舎で戦っている僕らの中でも一際アウェイな立ち位置にいる生徒がいた。

(乃咲、大丈夫かな。あんなこと言ってたけど)

昨日の乃咲の啖呵で彼は一瞬のうちにE組の大半の生徒を敵に回すことになった。

彼の言っていることはなんとなく分かる。なんとなく乃咲らしくない言動だったけど、アレはみんなに発破を掛けたんだろう。ビッチ先生もそれを分かっていたから彼の言葉に乗ったんだ。

ただ、少し気心知れて来た相手の土下座を見るのは正直なところ辛いと言うか、キツイ。

乃咲、大丈夫だよな？

僕はカンニングにならない程度に一瞬だけ彼を見てテストに集中した。

?? ?? ??

コツコツコツコツ、D組担任の立てる耳障りな音が周りの生徒たちの集中力を妨げる。

ただ、気にしてはいられない。昨日、あんな啖呵を切った以上は皆んなよりも良い点を取らなければ格好がつかない。クラスメイトたちの前で土下座はしたくない。なによりカッコ悪い。

だから、この害悪教師を気にしている暇はないのだが、どうしてもこの男に一つだけどうしても問いただしたいことがある。

「……これは——」

テストの問題を進めていたのだが、どうにも殺せんせーから習ったテスト範囲から外れている問題が複数ある。

殺せんせーは少しそう言うことはあるかも知れないと、テストの範囲外の解き方も教えてくれたが、これは明らかに“少し”の範疇を超えている。テストの半分以上がまだ習っていない部分だ。

どうしてこんなことになるのか、と考えていたが、何となく心当たりがある。恐らくは浅野理事長だ。

あの時に言っていた『スピードでは解決できない事がある』はこう言う意味だったのかも知れない。

だが、既に出来上がったテストに対して生徒の俺が今、やれることはテストの問題を解く事しかできない。だから今は問題と向き合おう。

ひとまず解答欄は半分は埋まってる。普通に考えればここまでで50点は取れることだろう。

だが、問題はその後だ。殺せんせーのお陰でその後の問題も数問は解けたが、とうとう殺せんせーからも教わってない範囲が出て来てしまった。

流石に習っていない問題は解けない。

解けないが、殺せんせーに言われたことを思い出す。

数学は前のページの応用が次のページの新しい問題として出る事が多い。なら殺せんせーに教わった部分を駆使すれば解くまでは出来なくても部分点を貰える程度には持つていけるかも知れない。

俺は一気に集中してゾーンに入り、考える時間を確保する。すこしズルをしている気分になっただが、テスト勉強もこうして頭に詰め込んだのだから今更だろう。数分が数時間に感じる感覚の中で一心不乱に問題を解き続ける。

いつの間にかD組担任の立てる耳障りなノック音も聞こえなくなり、緩やかに感じる時間の中でペンだけが俺の視界で動き続ける。

そう言えば、前にカルマが崖から落ちた時は精々一歩踏み出す事が限度だったのに、今は指ぐらいなら少し緩やかではあるが自在に動か

せるようになったな。

まあ、今はそんなことはどうでも良いか。

俺はその後も出来る限りの範囲で躓き続けた。

これまでこんなに必死になったことはない、そう思えるくらいにフルに脳を働かせて、必死こいて問題を解き続ける。

そんなことを5時間繰り返し返して、テストは終わった。

休み休みやっていたとはいえ、5時間もゾーンに入っていると流石に頭がパンクする。俺は、その日、家で知恵熱を出す事になった。

?? ?? ??

そして迎えたテストの返却日。

E組の教室はどんよりと暗い雰囲気だった。

当然だ。急なテスト範囲の変更。それに対する連絡を俺たちは受けていない。表向きの担任である烏間先生ですら何も連絡を受けていないのだから、誰も知りようがなかった。

いや、知る術はあったのかもしれない。例えば本校舎の生徒との情報交換だ。……いや、無理か。基本的にE組とまともに接する奴はいない。そもそも、情報交換自体、テスト範囲がズレることを前提にしているから、そんな動きが出来る筈がない。

今回はどう足掻いても詰みだったのか。

浅野理事長……ここまでやるのか。

……いや、これは言い訳だ。

結果が全てだ。受け入れよう。

「51位か……」

手元の紙を見る。自分の5教科全ての点数とクラス内、学年での平均点や順位が記されている。

そしてもう一枚の紙を見る。そこには1〜50位までの生徒の名前と点数が書かれていた。

俺の一個上の順位にいるのは名前も知らなかった奴。しかし、そいつとの点数差は2点。

かつて、浅野に負けた時と同じ点差だ。
俺は負けた。しかも名前も知らなかった奴に。

この前の全校集会で浅野との因縁に決着をつけられるかどうか云々と考えていたが、この体たらくだ。それで誰と誰の因縁を終わらせるって？ 総合1位の浅野と51位の俺が決着を着ける？

……差があり過ぎてはや笑えない。

いや、そもそも。今回は浅野との決着をつけるだなんて考えてなかったけれど、浅野に負けた時の再現にも似た現状に対する言い訳にしか思えない。

総合順位51位が俺の順位。

E組の中では2位。

泣きつ面に蜂。殺せんせーからのミッションも達成できなかった上に土下座も確定してしまった。

……2点差か。

問題数に換算すると1問の差、あるいは数学の証明の問題で取り逃がした部分の点数。

俺は後一步、届かなかった。

しかし、その後一步が今はかなり遠く感じる。

——悔しい。

こんなに悔しいと思ったのはいつ振りだろう？ などと自分に問い掛けるまでもない。2年ぶりだ。こんなに悔しいと思ったのは……いや、心の底から悔しいと思ったのは1年の中間で浅野に負けた時以来だ。

——悔しい……！

悔しさのあまり、思わず順位表を握り潰し、勢いのままに机に拳を叩きつけたくなるのを必死に抑える。

あとで殺せんせーに解けなかった部分の質問をしに行こう。んの前にまずは土下座か。

などと思いつながら殺せんせーを見ていると彼もまたどんよりとした空気を纏っている者の1人。

なんだか、とてもじゃないが、テストの解き方を聞きに行ける雰囲気

気じゃない。

「これは一体、どう言うことでしょうか。テストの公平さを著しく欠くと感じましたが」

鳥間先生も流石に苦情の電話を本校舎に入れている。

「伝達ミスなど覚えがないし、そもそも普通じゃない。テスト2日前に全教科のテスト範囲を大幅に変えるなんて」

鳥間先生の声から怒りが伝わってくる。

そう、これは俺たちの成績の問題だけじゃない。殺せんせーを殺せるチャンスが失われるかどうかの瀬戸際なのだから。

俺たちの中で50位以内に入れたのは1人だけ。

それ以外のメンバーは50位に入れなかったのだから。殺せんせーからのミッションを遂行できなかったことになる。

つまり、昨日の約束が殺せんせーのはったりでもない限り、殺せんせーはこのE組校舎を平らに手入れして出て行くと言うことだ。

「……先生の責任です。少し、この学校の仕組みを甘く見過ぎていました。君達に顔向けできません」

殺せんせーの言葉に誰もが返す言葉を失っていると、カルマが徐に立ち上がり、殺せんせーの後頭部目掛けてナイフを投げた。

「にゅやあ!?!」

「いいのー? 顔向けできなかつたら、俺が殺しにくるのも分からないよっ。」

「カルマくん! 先生は今、落ち込んで——」

カルマの態度に抗議する殺せんせーだが、そんな彼に構わず、カルマはテストの答案を放り投げた。

それを受け取った殺せんせーは絶句する。

「俺、テストの問題変わっても関係なかったし」

そう。何を隠そう、カルマは唯一、このクラスで50位以内に入つた生徒だ。しかもギリギリ、辛うじて50位とかではなく——。

「うわっ、数学100点!?! それ以外にも軒並み95点以上だよ」

カルマの順位は総合4位。

喧嘩仲間とすら俺はこんなな差があったのだ。名前の知らない誰

か、総合50位の誰かなんかよりも差が開いたE組中での点数差に俺は絶句していた。

「俺の成績に合わせて、アンタが余計な範囲まで教えたからだよ。乃咲くんもでしょ、殺せんせーからテスト範囲外も少し教わってたんだよね?」

「……まあ」

手招きするカルマに従って前に出て、答案を殺せんせーに見せるとそれを一緒に覗き込んだ最前列の磯貝と倉橋さんが息を呑んだ。

「総合51位……?」

「見てよ、殺せんせー。ついこの前まで学年最下位のドンケツだった奴がここまで登って来たんだ。しかも元々のテスト範囲だった部分は全問正解してるし、範囲外に関してもアンタに習った部分は当たってるし、習ってない部分も部分点を貰ってる」

「……マジだ」

「んで、乃咲クんに質問だけどき。仮にあと2点足りて50位に入ってたら元のクラスに戻ってた?」

カルマの問い掛けに少しだけ考える。

考えて答えた。

「戻らない」

戻ったところで、向こうには俺を認めてくれる人はいないし、殺せんせーの正体やらが気になってそれこそ勉強どころじゃなくなるだろう。

なにより、今のまま本校舎に戻ったところで自分は何も変わりはない。殺せんせーの言う第二の刃って奴を身につけられはしないだろう。

今、殺せんせーみたいな卓越した環境を逃したら、俺は今後、ずっと変わることはいらないだろう。

「だよね、俺も戻る気ないもん。ここに居る方が楽しいし」

俺の答えに満足そうに頷くと殺せんせーに避けられたナイフを拾い上げて、挑発するように彼に向き合う。

「んで、殺せんせーはどうするの？ 全員50位以内に入れなかったって理由でシッポ巻いて逃げちゃうの？ 乃咲クンに關しては今回の伸び幅的に次こそ50位以内に入れるかもしれないのにほっばり出して逃げ出しちゃうの？」

「イラッ……」

「それってさ、先生の第二の刃ってなんなのって話にならない？ 俺らに教えるんだから、先生だって第二の刃っての持ってる筈だよ？ でもそれをしないってことは逃げるだけなんじゃないの？ それってさ、結局、殺されるのが怖くて逃げるだけじゃね？」

「イライラっ！」

これでもかと煽るカルマ。

そんな彼に肘で突かれた俺と、片岡さんに突かれて煽るモードになった前原が後に続く。

「なんだ、怖かったんですか。お可愛いこと」

「んじゃあしやーねえーな。俺たちも追いかけないから逃げちゃってくれよ、殺せんせー」

俺と前原に続く様に口々にクラスメイトたちが便乗して殺せんせーを煽りまくる。

「それなら正直に言えばよかったのに」

「イライライラッ……！」

「ねー？ 『怖いから逃げたいです』ってさ」

最後の一言を受けた殺せんせーがとうとう爆発する。顔を真っ赤に、目に見える青筋を立てて動物の威嚇姿勢のようなポーズで爆発した。

「にゅや——！！ 逃げるわけありませんっ！！ 期末テストでアイツらにリベンジです！」

殺せんせーの爆発はカルマの計算通りか否か。

何はともあれ、暗殺対象の喪失の危機を彼の起点で乗り越えた俺たちはリベンジを誓うことになった。次こそは本校舎の連中に痛い目に見せてやる、と。

??

?? ??

因みに、俺の土下座の件だが……。

「つーか、お前、本当にやる気になったんだな」

「帰り際、磯貝が話しかけてくる。」

「磯貝が話しかけてくると同時に直ぐに帰らなかった面々が集まって来た。」

「ほんと、よくドンケツから登って来たよな」

「なあ。186人中186位だった奴がいきなり51位って初めは何言ってるか分からなかったぞ」

「ほんと凄いや、お前」

「つてことは土下座は？」

「カルマにするのか？」

「んー？ ああ、乃咲クンが啖呵切ったって話しね。俺は聞いてなかったからしなくていいよ。渚くんから概要聞いただけだし。ね、渚くん」

「う、うん」

「不器用だよ、乃咲クン。発破かけるにしろもっとやりようはあっただろうにさ」

「……すまん」

と、カルマのイケメンムーブによって辛うじて恥をかかずにすみましたとき。

?? ?? ??

家に帰ったと同時に祖父母への挨拶もそこに圭一は部屋に引き籠もる。

結果として土下座はしなくて済んだが、心中は決して穏やかではなかった。

机の上に投げ出す様に置いた鞆から取り出したテストの答案。今回のテストで間違えた部分を穴が開く程に見ては、これまた雑に広げ

たノートに書き写して解き直し、盛大にため息を吐く。

少し期待していた。自分に。やる気さえ取り戻せば自分は昔のようになれるのではないか？ と期待していた。浅野学秀と成績で鎬を削ったあの頃に、と。

しかし、現実には公平だった。

そう、現実には非情でもなければ優しい訳でもない。どこまでも公平な事実があるだけだった。

2年間、やる気なく、怠惰に過ごして来たツケ。それを今回のテストで思い知った。

つい、悔しさに唇を噛みながら、思わず握り潰してしまった数学の問題用紙を今度は抑えることなく、拳ごと勉強机に叩きつける。

長いこと使われていなかった勉強机の上に溜まっていた埃が舞う。塊になった大きな埃が圭一には自分がサボっていた時間の様に見えるた。

今回のテスト、結果としてはよかった部類に入るのだろう。186人中186位だった成績が51位まで上がった。130人以上も抜き去って、成績も全体で見れば上位に返り咲く事ができた。

殺せんせーはE組を去ることはなかったし、圭一が土下座をすることもなかった。先日に見切った啖呵も皆に発破を掛けるためだったと解釈されて、許された。

今回、テスト範囲がズレることがなければ上位を取っていたかもしれない。結果として散々な結果だったテストを握りしめてそんなことを思う。

習っていない範囲の方が多かった中でむしろよく諦めずに食らいつき、部分点をもぎ取れたとすら思う。

だが、それでも圭一にとってこの結果が最善のものであるとは思えなかった。

きっと、あと2点足りて50位以内に入っていたとしても圭一の心境は変わらなかっただろう。仮にテスト範囲がズレてなかったとしても浅野と並ぶ点数でなければ圭一の心境は今と変わらないだろう。

浅野に負けた、カルマに負けた。

方やかつてライバル視していた者。
方や喧嘩友達。

全力で望めば2人に追いつけるかもしれないという見栄があった。圭一の中にはそんな見栄があったのだ。テストが返ってくるまでは。テストが返って来てからも、今ほど荒れてはいなかった。今日の帰り際に『お前、やつぱり凄いや』と沢山のクラスメイトに褒められて少し気分が良くなったが、1人になると心情は荒む。

頭の中が白く染まるほどの悔しさと震える手ですっかり埃をかぶった教科書を全て引つ張り出す。1年の中間から今学期に至るまでに使っていたモノを全て。

悔しきで耳鳴りがする。

悔しきで指先に力が入る。

悔しきで視界が滲んだ。

こんな思いをするのは2年ぶりだ。

初めて浅野に負けたあの日、圭一は同じ悔しさを味わって、諸々の事情が加わり、挫折した。

また挫折するののか？ そんな自問を否定する様に拳で自分の頬を殴り、喝を入れてまだ成績優秀と言われていた頃に出来た問題に取り組むが、かつて満点を取ったはずの問題すら満足に解けなくなっていた現実には打ちひしがれる。

本当に期待していた。今はダメでも昔出来たことなら今でもできる筈だと心のどこかで期待していたのに、自分に裏切られた。

心の何処かで余裕があった。元A組だったという自負はあった。今はやる気がないだけ。やる気を出した自分はすごい奴なんだ、そう思いたかった。

そんなカッコいい自分に期待した。

裏切られた。

自分はどうしようもない奴になっていた。

土下座するといったら話をした時も、心の何処かで何とかかなる。今は自分はやる気があるから、と。

全て甘い妄想だった。

『ほんと凄いいよ、お前』

クラスメイトたちに投げられた言葉が胸に刺さる。こんな不甲斐ない結果を認められても、嬉しくない。

圭一は2度、机に拳を叩き付ける。

「――次は絶対え、一位になる」

震える声で圭一はリベンジを誓った。

かつて浅野に敗れた時の点差は2点。

浅野に勝つために体調を崩すレベルで努力をして、テスト当日に体調を崩して一問だけ外した。

結局は自分の自己管理が甘かったから負けたのだ。だが、その時負けるまで何者にも劣らない努力をして来た自負はある。

あの時の自分に戻るにはまずは努力しないといけないだろう。銀髪の不良児は一年生の教科書を開く。かつて自分が敗れ、今、新たに敗れた問題を復習する。過去、そして今の不甲斐ない自分を殺す様に。

今度こそ、一位を取る。

不良児はただ、認められたかった。

認められたい彼はただ、負けず嫌いなだけなのかもしれない。

口に出すのは実行する時だ。

17話 旅行の時間 その1

とあるテストから数日後の昼下がりのこと。

「ねえ、乃咲。修学旅行、一緒に班組まない？」

そんなありがたい誘いをしてくれたのは我らのマスコット、渚だった。しかし、そんな有難い誘いを受けた俺は苦々しく口を開く。

「ありがとう、でも随分前に磯貝に誘われてさ。ごめんな」

「あつ……うん、気にしないで」

渚がこんな誘いをして来た理由は一つ。

来週から2泊3日の修学旅行が始まる。まだ班を決めていない連中はそれに向けての班作りをしているのである。

「ねえ、乃咲くん。乃咲くんはどっか行ってみたい場所とかないの？」

渚に申し訳なきを出しながら頭を下げてると倉橋さんたちがやって来る。どうやらもうどこに行きたいかを話し合ってるらしい。その辺の最終決定は6時間目の学活で決まる筈だが、気の早いこと……とは言うまい。それだけ楽しみにしている、と言うことだ。

俺は少しだけ考えてみるが、京都に詳しい訳でもないので無難な選択肢しか思い浮かばなかった。

「清水寺かな」

「お、ベタな所を選んだねえ」

「あとは祇園とか？」

「それも良いねえー！」

「他は？ 折角の修学旅行なんだからもっと自己主張しろよな、乃咲」

「ははは、頑張る……」

「ごめんよ、倉橋さん、矢田さん、前原。」

俺、マジで京都のこと何も知らねえんだわ。ほんと、ありがちな所しか提案できなくてごめんね。

とか思っていると、片岡に渚が詰められていた。

「どうやら班決めが終わってないのは渚と複数名だけらしい。やはり断ったのは少しだけ申し訳なかったな、と見守っていると、茅野や

杉野、カルマ、奥田さんに神崎さんと組むことになったらしい。

無事に班が決まった様で安心した。

「全く……3年生も始まったばかりのこの時期に総決算の修学旅行とは片腹痛い」

つと、修学旅行ムードで明るい雰囲気クラスに戒めの言葉を我らが担当が投下する……のかと思いきや、殺せんせーはマツハで姿を眩まし、戻ってくると舞妓の様な衣装に着替え、修学旅行で使い切れるのか怪しい大量の荷物を抱えて戻って来た。

「先生、あんまり気乗りしませんねえ」

「めちやくちやノリノリじゃねえか!」

「ちやつかり舞妓姿だしよ!」

「しかも似合ってるよ!」

今日も杉野と前原、岡島のツッコミが冴えてるなあ。

「バレましたか……正直、先生。キミたちとの旅行が楽しみで仕方ないのです」

照れ顔しながら多すぎる荷物を片付け、着替えて戻って来た殺せんせーに俺と渚は苦笑した。

??

??

??

「よし、素振り止め!」

体育の時間。俺はいよいよ烏間先生に二刀流で挑もうと思っていた。両手を同時に動かす訓練もだいぶ積んだし、そろそろ実践で試してみる段階に持っていくのは有りだろう。

ナイフの素振りが終わったら、烏間先生と簡単な組み手を行うことになっていくが、俺はここで仕掛けようと思う。

しかし、困ったことにナイフが一本足りない。普段、二刀での訓練はナイフ一本と適当な木の枝で行なっていたから。

磯貝あたりに借りようかと思ったが、アイツは素振りしているし、男子連中は大体何かしらの訓練でナイフを使っているんで、借りられるとしたら素振りも組み手もせず、烏間先生との組み手を見学してい

る女子くらいだ。

俺はたつぷり3分ほど悩み、一番話しやすい女子に声をかけることにした。

「倉橋さん」

「ん？ なになに？ どうしたの？ 乃咲くんから話しかけてくるなんて珍しいね」

倉橋さんとは前、通学中にたまたま出会い、そのまま2人で登校した事があるので声をかけるハードルは低い。修学旅行も同じ班だからね。

片岡も見学してるなら片岡から借りたんだけど、彼女は男子に混ぜられて素振りしてるしから声かけられないし、邪魔しても悪い。

「ごめん。申し訳ないんだけど、ナイフ貸してくれないかな。烏間先生との組み手で使いたくて」

「あれ？ 乃咲くんのは？」

「持ってるけど、2本で試してみたい事があるんだよ。男子から借りようと思ったんだけど全員素振りか男子同士で組み手してるから頼み辛くて」

「あ、そゆことね。良いよ〜」

「ありがとう」

事情を話すと快く貸してくれたのでお礼を言いながらナイフを受け取る。受け取ったナイフを右手に握り、自分のナイフを左手に仕込む。

これで準備は出来たので烏間先生の下へ向かう。

「烏間先生、次は俺と頼みます」

「乃咲くんか。良いだろう」

こうして授業中に烏間先生と向かい合うのは実は久しぶりだった。烏間先生には放課後、個人的に訓練を付けてもらっているから、授業中の組み手は他のクラスメイトたちに譲っていたから。

んで、そんな俺が烏間先生と向き合っているのを目敏く見つけた男連中が物見遊山的に寄ってくる。

「なんだ？ 乃咲が烏間先生とやるのか？」

「へえー。見てみようぜ」

俺が放課後、烏間先生に訓練をつけてもらってるのはクラスメイトのほとんどが知っている状態。半ば周知の事実と化している。

だからか、普段、烏間先生と誰かの組み手を見学してる奴に加えて今回はギャラリーが多かった。

「烏間先生、今日はどんな手を使っても殺す気でいきます」

「ふっ……。その気概で良い。本気で来い」

少し余裕そうに微笑を浮かべる烏間先生。

今日こそ彼に一撃入れる。

そう心に決め、俺は一步、鋭く踏み込んだ。

踏み込みながら繰り出す突き。この前、殺せんせーから鋭く重い良い突きと評された渾身の突きを放つが、烏間先生は半歩身を逸らして交わす。

もう一度、今度は距離を詰める様に踏み込み、躲されたナイフを横薙ぎに振り抜く。これもまた、半歩下がって躲された。

紙一重での回避、しかしそれは危なげを感じさせる紙一重ではなく、俺のリーチと斬撃と突きの速度を把握し切った上での神業的な紙一重。

こうして対峙するとやはり自分の理想の高さと言う奴を見せつけられている様な感覚を覚えるが、同時に心の中で理想にした人が間違っただけだったことを実感できて嬉しさも感じた。

その後も右手で斬撃を繰り返し、時折り、左手での打撃を混ぜる。殺せんせーに貰った訓練ノートのお陰で今の俺は両利きとまでは行かずとも、左手で板書を取っても読める程度の字を書ける位には左手も器用になることができた。

無論、そんなこと、烏間先生にはお見通しだ。当然。だって、烏間先生との訓練で左手も使う様になっただけだから。

けど、今日はいつもと違う。

それは左手にナイフを仕込んでいること。

烏間先生にはパターンがある。

ナイフは紙一重で避けるが、拳での攻撃は腕で逸らして防ぐのだ。

当然、勢いよく振るつた拳を逸らされれば体勢を崩す。それが普通の敗因だが、今日はそれをあえて狙う。

「フンッ！」

気合いを込めて拳を振る。左足で踏み込み、勢いを殺すことなく振るつた拳はやはりいつもの様に逸らされる。いつもであればそのまま背中を押されて態勢を崩して敗北する流れだが、今日は違う。

攻撃を逸らされた勢いを殺すことなく、更に2歩、踏み出して左手に仕込んだナイフを握り、烏間先生の胸板目掛けて振る。

「ほう……！」

しかし、避けられた。

だが、それは普通の紙一重の半歩下がった避け方ではなく、バックステップでの明らかな離脱。

初めて取らせた明らかな警戒姿勢に思わず手を止め、喜びの雄叫びを上げそうになるが、そこをグツと堪えて、今度は二刀での追撃を行う。

「距離を取った相手を見送るのではなく、瞬時に追撃するのは見事な判断だ」

「ありがとうございますっ！」

右のナイフを右へ振つたのなら、左のナイフはさらに踏み込んで右から左へ、振り下ろしを避けられたのなら、避けられた分の距離を詰めて別手で握つたナイフを振り上げ、それも避けられたのなら、また踏み込み、逆手で横薙ぎ。

「っ！」

繰り返すうちに攻撃は何度か、烏間先生の腕に掠る。浅く、本当に掠つた程度ではあるが、攻撃は確かに数回、烏間先生を捉えている。

しかし、組み手は終わらない。

違う、俺が終わらせようとは思わない。俺は言った、殺す気でやる、と。ナイフが掠っただけで死ぬ奴は居ない。だから続けることを選んだ。

烏間先生も俺が止める気がないのを見て何かを察してくれたのか、また微笑を浮かべて構えを取り、引き続き組み手を続けてくれた。

いや確かに続けてくれたが、今までの俺の攻撃を避けるか逸らすか

しかししない組み手ではなく、ナイフを袖から引き抜き、俺が隙を見せた時に反撃する模擬戦という形での継続だ。

俺は放課後の訓練以外、俺の対人術の組み手以外で初めて、烏間先生に反撃させる所まで持ち込んだ。

それだけでガッツポーズ取りたくなるが、反撃してくる烏間先生に對してそんな余裕があるはずもなく、寧ろ反撃されるようになったことで俺はどんどん確実に余裕を失ってゆく。

「ふっ……い！」

「くうっ……い！」

烏間先生の攻撃は重いし、早い。

反撃されるようになり、何度もゾーンに入り、辛うじて攻撃を躲す。

烏間先生のナイフが俺に掠り始める。

烏間先生の防御テクニクをパクって攻撃を防ぐが、全て紙一重。彼のように神業的な紙一重ではなく、本当に辛うじて躲しているという意味で。

まずい。反撃の隙が見当たらない。

このままでは負ける。

なんとか攻撃を試みるが、全て防がれる。

本日何度目かのゾーンに入り、思考する。

攻撃は全て防がれる。

反撃は防ぐので精一杯。

烏間先生に隙はない。

なら、隙を作るしかない。

どうやって？

烏間先生の意表を突く。

意表を突くというのは、予想を超えた動きをすること。烏間先生にとって、模擬戦中に相手にとって予想外の動きとはなんだ？

考える。相手の意表を突く行動、戦闘中に意表を突く行動ってなんだ!?

攻防を繰り返しながら考える。

そして、俺は、一つの答えに辿り着く。

試すには肉薄するしかない。

「烏間先生！ 最後の攻防、行きますよ！」

烏間先生が攻撃してくる中で、更に踏み込み、ナイフを振る。防御を捨てて全攻撃の姿勢へ。

俺は烏間先生の反撃を掻い潜りながらナイフを振る。

「くっ……、やる様になった」

烏間先生が口を開いた瞬間、隙が出来た。

俺はその瞬間にナイフを振る。ナイフを振りながら……。

「……なにっ!？」

両手のナイフを宙に置く様に手放し、俺が選んだのは超古典的な不意打ち方法……猫騙しだ。

猫騙しを受け、ほんの少し、仰け反った烏間先生。僅かに防御に向かっていた腕の位置が下がった隙を見逃す事なく、宙に置く様に手放したナイフの一本で突きを放つ。

ぐにゅっ、とナイフの鋒が歪む感覚が手に伝わる。

見ると、俺のナイフは烏間先生の胸板にしつかりとクリーンヒットしていた。

「まじか!？」

「乃咲のやつ、やりやがった!？」

息が切れた。思わず膝から崩れ落ちる。

やった。初めて烏間先生にクリーンヒットさせた。

「よっしや……やったったで」

疲労のあまり口調がおかしくなっている。肺が空気を求めて悲鳴を上げる中、なんとか落ち着けていると烏間先生が手を差し伸べて立たせてくれた。

「腕へのヒット15回、胸へのクリーンヒット1回。今回のキミの成績だ。すごい進歩だな。二刀術の訓練なんていつの間に行っていたんだ?」

「放課後の訓練の後です。奇襲に使えれば儲け物程度に考えてたんですけどね」

「いや、素晴らしい精度の斬撃と突き、そして起点だった。ナイフをワ

ザと手放してからの猫騙しは完璧に意表を突かれたぞ。今後とも頼りにしているぞ、乃咲くん」

——認められた。

烏間先生から認めて貰えた。

クラスで誰よりも早く烏間先生に攻撃を当てる事ができた。

「はいっ！」

当てた直後は実感が湧かなかったが、頼りにしていると言う言葉を受け取るとフツフツと実感が湧き、本日2度目の雄叫びを上げたくなる衝動に駆られるが、それをグツと抑えて代わりに大きく返事をする。

自分の努力をこんな風に認めてもらえたのはやはり嬉しい。

俺は、さつき手放したもう一本のナイフを拾い上げて鞘に納めて倉橋さんの下へ向かう。

「ありがとう、倉橋さん。お陰で烏間先生に褒められたよ」

「ううん！ 凄かったよ！ 烏間先生に攻撃を当てられるなんて思わなかったもん！」

借りていたナイフを返すと興奮気味の倉橋さんも褒めてくれた。その後も磯貝を始めとしたいつもの面子に絡まれ、カルマに押搦われて、渚が嗜めてくれて、一部を除いたクラスメイトたちも浮き足立っていた。

きっと、俺の今の攻防で烏間先生に攻撃を当てるのは不可能ではないと証明できたからだろう。

「よし、今日の体育はここまでする！ 全員、整列！」

烏間先生も少し離れた場所で微笑を浮かべていたが、5時間目の終了時間が迫って来たので集まる様に号令が掛けられる。

少しだけいつもより集められるのが早い。何事かと思ったが、全員が揃った後、烏間先生の言葉で真意を理解する。

「知っての通り、来週から2泊3日で修学旅行が始まる。極力キミらの楽しみを邪魔したくないが、これも任務だ」

任務、その言葉で理解できた。

やはり、この修学旅行でも暗殺のことは頭の中において置くべきら

しい。同じことを考えたらしい岡野が口に出して質問する。

「つてことは向こうでも暗殺？」

「その通り。京都の街は学校内とは格段に広くて複雑。しかも奴はキミらの決めたコースを班ごとに時間で分けて付き添う予定だ」

「なんか、本格的な暗殺って感じですね。狙撃でもするんですか？」

「キミの想像の通りだ。狙撃手を配置するには絶好のロケーションだからな。既に国は腕利のスナイパーを手配したそうさ。成功した場合は貢献度に応じて100億円の中から分配される。暗殺向けのコース選びをよろしく頼む」

「はーい」

街中での狙撃での暗殺か。なんだかいよいよを持って創作物の様なシチュエーションになって来たな。

?? ?? ??

6 時間目の学活。

来週の修学旅行のコースを決める時間。

E組校舎は活気に溢れていた。普段不良ぶって色々興味なさそうにしている寺坂ですらいつもの面子に原さんを加えたメンバーでワイワイやってる。

「ねえねえ！ 清水寺はいつ行こうか？」

「そうだな……折角の名所なんだしゆっくりしたいよな」

「それ分かる」

磯貝、前原、木村、片岡、岡野、矢田さん、倉橋さんたちの輪に加わって俺も皆んなとワイワイギャーギャーとああでもない、こうでもないと言見を交換していると、ビッチ先生が現れた。

「ふん、皆んなガキねえ。世界中を飛び回った私には旅行なんて今更だわ」

出た。ビッチ先生がたまに見せる大人っぽい余裕。

しかし、無情かな。修学旅行を前にした無邪気な生徒たちの前にはそんな大人の余裕は打ち砕かれるのだ。

「じゃ、留守番しててよビッチ先生」

「花壇に水やっといて〜」

前原と岡野の無情な一言。きつとビッチ先生が求めていたのはそういう言葉ではないんだろが、なんとなく面白かったので特にフォローはしない。

その後も話し合いは続く。あそこ行きたい。こつちも捨て難い、でも暗殺と野良兼ね合いを考えると〜と。

とかなんとかやっていると、ビッチ先生が怒鳴り出した。

「何よ！ 私抜きで楽しそうな話してるんじゃないわよ!!」

「あーもー！ 行きたいのか、行きたくないのかどつちなんだよ!？」

このビッチ。結局、一緒に旅行に行きたかったのだ。ジャキツと小型のリボルバーを胸元から取り出してギャーギャー言い出したビッチ先生に前原が「銃向けんな！」と叫びながら逃げる。

結局、彼女に一番懐いてるらしい矢田さんの提案でビッチ先生も加えて話し合いをすることに。

ちよつと時間が経つと殺せんせーがやたらと大量の辞書を持って教室に入ってきた。

「1人一冊です」

マツハで配られる辞書。なんだこれ？ そんなことを思いながらその広辞苑並みに分厚い本を開くとデカデカと『修学旅行、旅の基本』と書かれていた。

辞書とか広辞苑じゃなくて旅のしおりかよ!?

声を大にしてツツコミ入れたくなるのを抑えて、いると少し離れたところで渚の班として話し合いをしてた杉野がツツコミを入れた。

閉じて表紙を見ると確かに『修学旅行のしおり』と書いてあったのだ。

「辞書だろ、これ!？」

うん、前原。お前とはつくづくツツコミでは気が合うな。俺が声を出してツツコミたいことは前原と杉野が大体ツツコミを入れてくれるからやらずに済んでる部分がある。

「イラスト解説の全観光スポット、お土産人気トップ100！ 旅の

護身術、入門から応用まで！ 昨日徹夜で作りました……！ 初回特典は組み立て紙工作金閣寺です！」

「どんだけ浮かれてるんだよ!？」

「そろいもそろってうちの先生は!!」

ページをペラペラ捲ると確かに殺せんせーが今言っていた内容が収録されてるらしい。因みに、鴨川の縁でイチヤつくカツプルを見た時に自分を慰める方法なんかも書いてある。

この辞書、もとい旅のしおりはどんだけ先を想定しているんだろうか。ツツコミどころの絶えない先生である。

「大体さあ、殺せんせーなら京都まで1分で行けるっしょ」

「もちろんです。ですがね、移動と旅行には大きな違いがある。皆で楽しみ、時に皆でハプニングに遭う。そういう経験の共有……。先生はね、君たちと一緒に旅が出来るのが嬉しいのです」

恥ずかしげもなくそんなことを言う殺せんせー。

だけど、彼の気持ち、分からない訳ではない。だって事実、俺もこのメンバーでの旅で少しだけ浮かれていた。

「ねえ、乃咲くん。暗殺するなら何処がいいかなあ」

「いつそスナイパーを本能寺の一番上に配置して真上から狙うのもありじゃない?。」

「おお、真上！ 確かにそれはこの校舎じゃ出来ない暗殺だよね！」

こうして俺たちの修学旅行は幕を開けた。

18話 旅行の時間 その2

修学旅行当日、俺たちは新幹線の乗り場に居た。

「うわっ、A組からD組までグリーン車だけ？」

「うちらだけ普通車。いつもの感じね」

「うちの学校はそういう校則だからな。入学時にも説明しただろう？

忘れたのか、流石E組だな」

「学費の用途は成績優秀者に優先される」

「おやおや、君たちからは貧乏の臭いがするねえ」

嫌味を言うD組の担任と愉快な二人組を尻目に俺は駅の観察をしていた。

遠目にド派手な格好をしているビッチ先生を視界から除外して見ても普段は出会わない様な人や外国人がチラホラと見ることができるところは旅の始点か中継地点、あるいは終着点である。

そんな多種多様な人で溢れて混沌とした駅の様相を見るのは嫌いではなかった。

嫌いでは無かったのだが……チラホラと視界の端にハリウッドセレブの様な格好をしたビッチ先生がキャリーバッグを転がして颯爽と歩いてくるのが二重の意味で気になって仕方ない。

アンタ、修学旅行ってことは一応の役回りとしては俺らの引率なんだろうけどずっとその派手な格好で東京の街中やら清水寺の階段を歩き回れるのか？ って疑問とそもそも修学旅行の引率にしては目立ち過ぎなんじゃないかって疑問。

烏間先生的にあの格好はどんな判定なのかと思つて横目でチラッと彼を見るが、目と眉毛が鋭く吊り上がっていた。どうやら烏間先生的にもあの悪目立ちする格好はアウトだったらしい。

つか、あれ？ 殺せんせーは？

あの人も違う意味で悪目立ちするタイプだから見失う筈がないんだけど、パツと見でこの乗り場にいる様には見えない。もしかして遅刻か？

「ご機嫌よう、生徒達」

「ビッチ先生、なんだよ、そのハリウッドセレブみたいな派手な格好はよ……」

木村も流石にドン引きしたような顔でツツコミを入れているので彼に激しく同意する。

するとビッチ先生は得意気に語り出した。

「フッフッフツ、女を武器としてしてる暗殺者としては当然の心構えよ。狙ってる暗殺対象からバカンスに誘われるって結構あるの。小さい格好でそんな旅に臨めば幻滅させるかもしれない。折角のチャンスを棒に振ってしまいかもしれない。だからこそ良い女は旅ファッションにこそ気を使うのよ」

なんか、普段プロとしてどうこう言っている人がこうして体験談を交えながらプロっぽいことを言っていると馬鹿に出来ない凄い説得力があるよな。

だがしかし、これは確かに修学旅行という名の暗殺旅行ではあるが、今回のメインはあくまで狙撃。しかも相手は色仕掛けで殺せる相手ではない。となると。

「着替えろ。目立ち過ぎだ。どう見ても引率の先生のカツコじやない」

鳥間先生この人が黙っちゃいない。政府と俺たちとターゲットと学校との間で四つ巴の板挟みになっている、この鳥間先生苦勞人が見逃す筈なかった。

青筋を浮かべて恐ろしい形相をしている先生に気付かないビッチはその派手な格好を見せつける様に『硬いこと言ってるんじゃないわよ！』とチャチャを入れるが、そんなこと、鳥間先生が許す筈もなく。

「脱げ、着替えろ……い」

もう、物凄い形相で一喝していた。

渋々顔で新幹線に乗り込み、トイレの方へ向かうビッチ先生を見送りながら俺たちも乗り込もうとするが、結局、殺せんせーはどうなったんだろう。

「あの、鳥間先生」

「どうかしたか」

「殺せんせーは？」

「……………奴め……………！」

あ、これはなんも連絡受けてないパターンですわ。烏間先生の青筋がより一層深い物になった。

眉間に皺を寄せながらスマホを取り出し、苛立ちを隠しきれない手付きで電話を掛ける。

「おい、今、何処にいる。間もなく新幹線が出発するが。今日は欠席ということ良いんだな？」

『にゅやあつ!? 少々お待ちを!』

「俺にどうこう出来るわけないだろうが……………！ 先に出ている。次の駅に先回りして乗り込んで来い！」

電話する烏間先生と少し離れていても聞こえてくる殺せんせーの慌てた声。

これもある意味では暗殺のターゲットを呼び出す電話だと考えるとなんだか凄いシニールな絵面だ。

つか、殺せんせーと烏間先生ってビッチ先生が俺たちの授業をしている間は職員室でどんな会話してるんだろう。ひたすら無言を貫く烏間先生と気にすることなく話しかけ続ける殺せんせー、あるいは殺せんせーが気不味そうに沈黙している姿も容易に想像できる。

ていうか、この2人は連絡取り合ってるんだろうか。一応連絡先は知ってるみたいだが、LINEか？

なんとなく烏間先生のスマホのLINEに友達として登録される殺せんせーと彼とのトーク画面を想像してみるとミスマツチ過ぎで吹き出しそうになるが、ゾーンに入り、素数を数えて必死に堪えた。その後、新幹線に乗り込んだ俺たちは乗り換えまで各々やりたいことをやって過ごした。デュエマとかのトランプだったり、折り畳み盤で囲碁やってみたり、カメラいじったりとやっていることは様々だ。

俺たち修学旅行1班は何をしているのかと言うと。

「の、乃咲……………」

「トランプ弱あ……………」

「くっ……、可笑しい。何故だ？」

ババ抜きに興じていたのだが、俺は何故か知らないが尽くりつつ。ひたすらに惨敗し続けていた。

不思議だ。何か因果律的なものが働いているのでは？　と思いたくなるレベルで必ず俺がビリになる。

「乃咲くんって意外と顔に出るんだね？」

「く、倉橋さんが異様に強いだけじゃないのか？」

隣に座った倉橋さんに揶揄われる。

何を隠そう、行われたババ抜き第5戦目、俺は倉橋さんにババと最後の一枚の2択を迫り、そして最後の一枚を躊躇いなく引かれ、5連敗を喫した。

ここまで負け続けると俺がカードゲーム弱い見たいなイメージがついてしまうじゃあないか。

「も、もう一回……」

「もう一回ってこれで6戦目だぞ？」

「頼む、先つちよだけで良いから」

「ランプの先つちよって何よ!？」

「圭一もちよいちよいよくわからない下ネタ挟むよな。触手関係然り、今回の先つちよ発言然り」

「仕方ないな、もう一回だけだよ？」

「そして倉橋も動じないな……」

倉橋さんのお陰でもう一度、再戦することに。

ここまで来たんだから次ビリの奴は罰ゲームな、と木村の野郎の提案により次の敗者は1班全員分のジュースを買ってくるはめになった。

なんでこんな言い方してるかって？

「圭一……」

「見るな、そんな目で俺を見るな、磯貝」

案の定、俺はまた負けたのである。

やっぱりというか、これも案の定というか、最後まで残った俺はいつもの様に磯貝に2択を迫り、そして見事、当たりを引かれて敗北し

た訳である。

ちなみに、今回に限ってはジョーカーが初めから俺の手札に来た。流石に6回目の付き合いになると従順にも初めから手札に混ざって来た彼はその忠心を見せつけるかの様に最初から最後まで他のプレイヤーの手に渡ることなく俺の手の中に居座り続けた。

途中、あまりにも俺は顔に出ていたらしく、不憫に思ったらしいメンバーが引く順番をシャッフルしたりしてくれたが、どいつもこいつも尽く華麗にジョーカーを避けて引きやがる。

いや、可笑しいだろう。俺、そんなに顔に出てる？ 確率的に考えてそろそろ俺が一度もジョーカーに遭遇しないで勝てるパターンが来てもおかしくないよね？

負け続けて6回目、流石に俺ってトランプ弱いのでは？ と良い加減に思い始めていた。

「乃咲、流石に手伝うぞ」

「良いよ、前原。トランプ最弱王の俺が行ってくるから気にしないでくれ」

前原の優しい提案を丁重に断り、席を立ってジュースを買いに行こうとした時、ちょうど停車駅に着いたらしく、殺せんせーが乗ってきた。

「いやあ、疲れました。目立たない様に旅をするのも大変ですなあ」

目立たない様になっているつもりなのか、苦労顔をしているが、俺たちの身長と横に2人並べた位の大きさのリュックと曖昧な関節とよく見れば人間じゃないことが丸わかりな変装。正直、目立たない様にとはどの口が言うか、とツツコミを入れたかった。

「そんなクソでかい荷物持って来んなよ」

「殺せんせー、ただでさえ目立つのに」

「てか、国家機密がこんなに目立つのヤバくない？」
「にゅやあっ!？」

生徒達からの容赦ない指摘に過剰反応した殺せんせー。その反応の大きさから変装として顔の中心に着けていた着け鼻がポロツと落ちた。

「その変装もよくみると人間じゃないのバレバレだしさ。もうちよい
どうにかならないの？」

「にゅ〜……」

殺せんせーが何やら本気で考えこんでいると、菅谷が落ちていた付
け鼻を拾い上げてちやちやつと加工を始めた。見守ること数分。随
分と丸くなった着け鼻を殺せんせーに投げ渡す。

「殺せんせー、ほれ。まずはすぐ落ちる着け鼻から変えようぜ」

「……おお！ 凄いフィット感！」

「顔の曲面と雰囲気に合うように削ったんだよ。俺、そんな作るの
得意だからさ」

投げ渡された鼻を早速つけると、確かに鼻に関しては『まあ、こん
な感じの人もいるよな』程度の感想を抱ける程度には違和感が消えて
いた。

生徒からの思わぬ贈り物にご満悦なのか、手鏡を見てニヤニヤと笑
みを浮かべる殺せんせーと事も無気に席に戻る菅谷を他の面子が囲
う。

「凄いな菅谷！」

「うん、焼石に水くらいにはなった」

確かに驚いた。人には意外な特技があるもんだ。

……いや、意外と思ってるのは俺たちだけで本人にとっては元々
出来たこと。つまりは俺たちの知らない一面だったりするのだろう。

この修学旅行でそういう俺たちの知らない一面や本人ですら知ら
ない、気付いていなかった一面を見つけていることがあるかもしれない
な。

俺がトランプ最弱王だった様に。

俺はそんなことを思いながらポケットに手をつ突っ込み、自販機のあ
る車両に向かう。

金は預かってるし、それぞれのリクエストも頭に叩き込んだ。欲し
いものがなければお茶にするという話もしてあるし、自販機前で戸惑
うことはないだろう。

自販機のある車両を目指していると、次の客席の区画の手前で招か

れぎる客が正面からやって来た。

「お、派手な髪してんじゃん」

滲み出るDQN感。見るからに頭の悪そうなモヒカン。着崩した見知らぬ学校の制服。

新幹線の中で遭遇し、絡まれるということは恐らくは旅先でおいたをするタイプの輩だ。

「あの、すみませんけど通してくれませんか？ 友人が待つてるんで」

「おっ？ 強気じゃん？ お前何年？ つか中坊？」

見たところ強面の高校生が絡んでくる。

馴れ馴れしく肩を組み、顔を近づけてくる。

……いや、どうしてこうなる？

俺、ただトランプに負けた罰ゲームを執行しに来ただけなのになんてこんな見るからに頭の悪いDQN高校生に絡まれてるの？

もしかして俺って烏間先生ほどではないけど少し苦勞人気質だったりする？ 今まで考えない様にしてたけど思った以上に巻き込まれ体質？

ただ、なんかほんの少しだけ懐かしい。

最近はこう言う馬鹿に絡まれることは殆どなくなっていたから、この面倒くさい絡み方された苛立ちよりも物珍しさの方が勝つ。

しかし、正直に言うとな邪魔臭い。

カルマ式喧嘩術で、先手必勝を取っても良いのだが、曲がりなりにも烏間先生というプロから技を教わっている身である以上、正当な理由なく先に手を出すのは良くないだろう。

少し考えていると、俺がビビっていると思ったのか、軽く肩を押されて壁際に押し込まれた。

ここは車両間のスペース。他の乗客には普通には見えない位置。なんか、手慣れてるな、コイツら。

「なあ、少し金貸してくれないかな」

「うわあ……」

古典的な恐喝だった。いや、どちらかといえばカツアゲか？ 絵に描いたようなダル絡みに思わず声を漏らす。

よし、次に手を出されたらやり返そう。

「なに、その反応？ ナメてるの？」

肩を組んで来た奴が手を離し、代わりに右肩をどついて来たのでつい、思わず、相手の右足を踏み、手早く鳩尾の当たりを小突いてやると咳き込みながら仰向けに倒れてしまった。

しかも何人か巻き込みながら。

想像以上の被害を出してしまったが、ここらで一つ、脅しておこう。戻ってくる時に待ち伏せされて絡まれるのは嫌だし、炭酸買って帰る様に言われてるから万が一にでも衝撃を加える危険は避けたい。

何やら目元に傷のある、リーダーらしき目付きの悪い男がたまたま近くに居た上に、通路に転がってええずいている仲間を呆然と眺めていたので、現実を引き戻す様に顔を鷲掴みして、壁に押し付ける。

「何処の誰か知らないけど、どうする？ アンタらも修学旅行でしょ？ 折角の旅行を病院のベットの上で過ごしたい？」

烏間先生との訓練が始まって1月と半ば。元から喧嘩で鍛えられていた腕力は以前喧嘩していた頃よりも強くなっている。そんな腕力を動員して掴んだ顔を握り潰す勢いで手に込める。

掴んだ部分から本当にミシミシと嫌な感触が伝わってくる。このまま力を込めて掴み続ければコイツの頬骨を粉碎できるだろう。

「わ、分かった。もう何もしないから許してくれ」

流星にこのままだと顔が変形すると悟ったのか、降参宣言が来たので手を離し、車両を進む。

無駄に時間を使ってしまった。

数歩、歩いたところで気配を感じたので振り返るとリーダー格が拳を振りかぶっている所だった。

ゾーンに入り、拳の軌道を見切ってから、抜け出し、拳を正面から受け止める。

「なっ!？」

「何もしないのでは？」

拳ごと相手の体を引っ張り、体勢を崩させ、鳩尾に膝をぶち込んでやっつけてから踵を返す。

「その制服……、桐ヶ丘の……？」

あ、まずい。身バレした。

「お前、中坊だろ……？ お前が銀の死——」
「知りません」

銀の死神とやらは俺じゃない。そう言うことにするべく、全部言い終わる前に食い気味に否定して、俺は今度こそ自販機に向かった。

つか、銀の死神って呼び名は何処まで広がったんだよ。つか、そもそも誰が言い出した？

もう嫌だ。なんで修学旅行でまでこんな恥ずかしい思いをしなきゃいけないんだ？

ぶつぶつと言いながらみんなから預かった金を自販機に突っ込んでボタンをポチポチしていると、後ろから茅野、奥田さん、神崎さんがやって来た。

「あれ？ 乃咲、どうしたの？ そんなにジュース買って」

「罰ゲーム。トランプで6連敗したから」

「6!？」

「あ、あははは、乃咲って案外カードゲーム弱いんだ？ 少し意外かも」

「俺も驚いてるよ。予想以上に顔に出るタイプだったらしくてさ。倉橋さんにも弱いって揶揄われた」

「そ、それも意外です。乃咲くん、顔に出るんですか？」

「みたいだね。茅野たちは？」

「私らは神崎さんの付き添い。飲み物欲しかったし！」

どうやら茅野たちも目的は同じだったらしい。

一通り買い物は終わったので、買ったジュースをポケットというポケットに突っ込んでいると、茅野がやって来た方を振り返る。

「そういえばここに来るまでに顔色悪い高校生くらいの人たちがふらふらしてたけど乃咲みた？ 神崎さんがぶつかっちゃってさ」

「シラナイヨ。ケイイチ、ケンカ、シナイ」

「なんでカタコト？」

アイツらまだ居たのか。ジュースも買ったし、ちやつちやと戻ろう

と思ったが、神崎さんがぶつかったらしいし、一応、女子だけにしない方がいいだろう。

ああ言う奴は一度ぶつかったことを理由にひたすらに絡んでくるからな。

俺にだって、そのくらいの気遣いはできるのだ。

彼女らが買い終わった様なので、後ろに続く。先頭を歩くべきかと思っただが、あの手の連中は背後から不意打ちしてくるからな。事実、さつき背後から殴られそうになった訳だから。

ただ、案外、奴らは何もしてこなかったもので、俺たちは無事に自分の車両に戻ることが出来た。

「あ、乃咲遅いぞ〜」

「悪かった、7本もあるとどう運んだもんかと考えてしまっただけ」

などと嘯きながら皆んなに要求されていたジュースを配り、席に座る。なんだか、ちよつと飲み物を買に行っただけなのにどつと疲れた。

「乃咲くん、どうする？ 7戦目する？」

「あ、いいや。帰りに取っておくよ。少し寝るから着いたら起こして」「おっけー」

倉橋さんからの魅力的な提案を先延ばしにして寝ることを選ぶ。今日は早朝集合だった所為でいつもより早起きだったし、さつきの騒動で疲れたことも手伝って眠たいのだ。

だから、これは決して負け続けたことによる不貞寝ではない。不貞腐れて眠るわけではないのだ。かなり大事なことで2回言った。

不貞寝じゃない、不貞寝じゃないぞ。

?? ?? ??

「おお〜！ 窓が無いから凄い迫力！」

「だな、しかも時速25kmだから風も結構入ってくる。涼しくて気持ちいいな」

「あはは、乃咲くんが爽やかなこと言ってる」

時は飛んで修学旅行2日目。俺たちは嵯峨野トロッコ列車に乗っていた。理由は2つ。

一つ、修学旅行の自由行動のプランに設定していたこと。そしてもう一つ……。

「これだけ開放感があれば酔いません！ それにしても時速25kmとは速いですねえ」

八ツ橋を食べながら外を眺める殺せんせー。

二つ目の理由は彼の暗殺だ。俺たち修学旅行1班はこの嵯峨野トロッコ列車の名所の一つ、保津峡。そこで列車が停車した瞬間が俺たちの勝負どころ。

『鉄橋の上で少しの間、停車します。保津峡の絶景が一望できますのでどうぞごゆっくりご覧下さい』

来た。暗殺タイミング。

俺たちの暗殺プランはここで実行される。

「あ、見て見て殺せんせー！ 川下りしてる!!」

「どれどれ……？ おおっ!!」

鉄橋の上で一時停止するこのタイミングで川下りしている船と鉢合わせるのは下調べした通りだ。

このタイミングで倉橋さんが注意を下で川下りしている船に惹きつける。

「あっ！ 手振ってるよ！ ほらー！」

「本当ですねえ」

狙撃は倉橋さんが指差した船を殺せんせーが除く為に身を乗り出した瞬間――！

緊張の余り、思わずゾーンに入った俺の視界に猛烈なスピードで飛来する弾丸が写り込む。

タイミングは完璧、殺せんせーの注意は倉橋さんの的確な誘導で橋の下の船に向いている。

これはやったか？ などと思った瞬間、殺せんせーはとんでもない超スピードで弾丸を察知。俺たちの方をみてニヤリと笑いながら高

速回転する狙撃弾をモチモチと柔らかい八ツ橋で受け止めた。

「おっと、八ツ橋に小骨が。危ないこともあるもんですね」

ニヤニヤしながら俺たちに止めた弾丸を見せつけて来る殺せんせー。本当にさり気なく止めてやがるが、どんだけの早業が必要だと思ってるんだ？ このタコ。

高速回転する弾丸と同等以上の速度で逆回転しながら触れないと八ツ橋なんかで受け止めることは出来ないだろう。やはり殺せんせーの底は測りきれないな。

『列車が動き出します』

どうやら俺たちの暗殺は失敗したらしい。

動き出した列車に再び揺られながら殺せんせーを殺せる隙を考えしてみるが、さっきの光景を見ると流石にパツと殺せる策を思い付きはしなかった。

19話 旅行の時間 その3

「ダメだったねえ」

「だな。弾丸止めるとかマジかよ」

倉橋さんに同意しながら、俺は殺せんせーの止めた弾頭を指で弾いて遊んでいた。

この弾頭に対先生弾を詰め込む方式、ぱって見て弾丸に無駄な空気抵抗を作ると思うんだけどこれであんなに真っ直ぐ飛ぶのか？

いや、真っ直ぐ飛ばなくても狙って直撃コースを取ったのか。プロの狙撃つてとんでもない精度だな。

ちなみに殺せんせーはと言うと2班の方へ飛び立っていた。何かあつたら呼んでくれ、とのことだが、修学旅行中に何が起これと言うのか。

とか思ったが、新幹線の中で不良に絡まれたことを思い出して、何が起これるか分からないと思ひ直す。

「はあ……。少し早いけど清水寺行くか」

「だな、いつまでも引きずってても仕方ないし」

気落ちした空気を変えるように提案した木村に磯貝が同意しながら駅のベンチに座る俺たちを立たせる。

暗殺に失敗したが、修学旅行は終わった訳じゃないし。ゆっくりの殺せんせーを殺すプランでも考えながら自由行動をエンジョイしますか。

??

??

??

「ねえ、凄い景色だね」

「そうだな」

俗に言う清水の舞台から素晴らしい絶景を見下ろすと忌憚ない感想を溢す倉橋さんに素直に同意する。

なぜ、こんなことになっているのか。それは単純に、清水寺を進む

内に人混みに飲まれて他の面子と分断されてしまったからだ。

一応、はぐれたあとにLINEはしたのだが、集合時間と場所を決めていれば問題ないだろうとなり、俺たち1班はバラバラに行動している。

だが、折角の修学旅行。せめて友人と行動したいと思っていた矢先に運良く倉橋さんと遭遇し、俺たちは一緒に行動することになったのだ。

「いや、良かったよ。乃咲くと会えて」

「俺もだ。流石に京都に来てまでボツチなのは勘弁願いたい所だったから」

「ええ？ 乃咲くん、学校でも言うほどボツチかな？」

「ボツチじゃない？」

「少なくとも磯貝くん達と一緒にいるし、ボツチじゃないと思うよー？」

「……そっか」

言われて見ると確かに最近ではボツチではない気がする。教室では磯貝や前原、あとはカルマに渚と杉野なんかと話すことも増えたし。

天国のお母さん、貴女の息子はいつの間にかボツチを卒業したらしいです。

「ねえねえ、巫女さんいるかなあ」

「一応清水寺自体は神社じゃないから流石に巫女さんはいないんじゃないかなあ」

「そっか、残念。巫女さんのカチコミカチコミ物申すつて実際に聞いてみたかったんだけどなあ」

「倉橋さんの中の巫女さん武闘派すぎない!？」

「お、乃咲くんのツツコミだ」

普段はあまりツツコミに回らない俺だが、倉橋さんの中の巫女のイメージに思わずツツコミを入れた。

ちなみに、巫女さんのアレはカチコミではなく、かしくみ。確か、恐れ多くも申し上げますが、みたいな意味合いだった筈だ。知らんけど。

「でもさ、社務所みたいな所でお守りみたいな売ってたよ」

「……まあ、確かに」

言われて俺は数分前に売店で買った学業成就のお守りを何気なく取り出して見る。

あ、そう言えば清水寺自体はお寺だけど敷地の中に神社があるんじゃないかったか？

殺せんせーのしおりにそんな感じのことが書いてあった気がする。もしかするとこのお守り買った場所が神社部分だったのかな。

「なにそれ、お守り？」

「そ。学業成就のお守り」

「学業成就か、あとで私も買っておこうつと」

「……なんなら今から買いに行くか。そろそろ集合時間だし、待ち合わせ場所に行くついでにってことで」

「いいねえ。そうしょー！」

2人でお守りを買った場所に向かう。

やたら広い敷地だが、場所は何となく覚えていたので俺が先導するように歩く。

「そう言えば乃咲くん。この前は凄かったよね」

「この前？」

「テストとか。一気に順位上がってたけど何かコツとかあるの？」

小首を傾げる倉橋さん。聞かれた俺は考える。

俺のしている勉強のコツってなんだろう。ゾーンに入って時間と集中力が許す限りペンを持ち続けることです、とか言えばいいんだろうか？

最近俺もほぼ自在にゾーンに入れるようになったのだが、テスト期間中の殺せんせーの言い分だと入れるやつの方が珍しいんだよね？

俺の勉強のコツ、なんて説明すれば良いんだ？

「うーん……。まずは集中すること」

「ふむふむ」

「時間の許す限り集中すること」

「ふむふむ……んー?」

「んで、ひたすらに集中することかな」

「集中しかしてないよね!」

だって、ゾーンとかどうこう言っている俺がやっていることを簡単に一言で言うなら『超集中して勉強している』だけなのだ。

ただ、数分が何時間にも感じるなんて言っても信じてはもらえないだろうしな。

「えっと、集中して勉強の質を高めるのが一番な近道じゃないかな」

「まあ、それもそっか」

うん、間違った事は言っていない。

集中するのが一番の近道であることは間違っていない筈だ。たぶん。事実、少なくとも俺はそうやって勉強してることだしね。

なんて思いながら歩き続けるが、やはり観光名所。人が多い。気を付けてはいるが、他人と体の一部がぶつかりそうになったり、実際にぶつかる。

一応、俺が先頭に立って歩いているので後ろは幾分か歩きやすい筈だが。なんて思ってた振り返る。

案の定、倉橋さんは歩き辛そうだった。

もう少し歩くペースを落とすか、と今更ながらな気遣いをしようとした矢先、俺と彼女の間にあつた僅かなスペースを知らん人が横切る。

「あ、乃咲くん!」

「倉橋さん!」

人が無理矢理通った結果、俺と倉橋さんの間には人が通れるだけのスペースが出来てしまい、先を急いで歩く人達が次々に俺たちの間を抜けてゆく。

都会の人間はせっかちななあ、なんて他人事みたいな感想を溢しながら、少し回り込んで人混みを掻き分けながら辛うじて倉橋さんの横に着く。

人混みの先に俺がいると思っっているのか、必死に背伸びしてキョロキョロと辺りを見回して誰かを探しているようだったので声を掛け

る。

「凄い人混みだな」

「わっ!? いつの間に!？」

横に書いて声を掛けるとビクツと肩を跳ねさせた倉橋さんが裏返った声で驚きを露わにする。

まあ、無理もない。この人混みで逸れた同級生を探していたら横に居ました、なんて状況に遭遇したら俺もビククリすると思うし。

「よくこの中掻き分けて来れたね」

「烏間先生に鍛えられてるからね」

「それ、関係ある……?」

「あるさ。多少揉みくちやにされても動じる事なく動けるぞ。多少ならな」

「多少を2回言ってるけど!？」

「大事な事だからな」

因みに、多少の許容量を超えるとキレるかもしれない。『さつきから肩やら脚が当たつとるんじやああ!』とブルドーザーばりに人を薙ぎ倒して進むかもな。実際にそんなレベルでキレるかはさて置き。

「それはそうと行こう。待ち合わせに遅れる」

「うん……あつ、乃咲くん。お願いあるんだけど」

「ん? なんじやらほい」

「袖、掴んで良いかな。また逸れるかもだし」

「良いよ。また逸れるのは危ないしね」

女子が1人で歩くのは危ないだろう。この人混みに女子が揉みくちやにされるのは普通に怪我する危険性があるだろうから断ることはない。

断る事はないけど……。

「……」

「……………」

何だか、空気がむず痒くなった。

右手の袖が引っ張られる感覚は違和感があるが、何より、倉橋さんの小さな手が俺の袖を引いてると思うと緊張感が増してくる。

なんだろう。暗殺前やこの前の烏間先生との組み手とは違った緊張感だ。

「あはは……。なんか変な感じするね」

「……だな」

倉橋さんも同じことを思っていたらしい。

女子とこんなことになっているのは不思議というか、不快ではないが、思わず頭を掻きむしりたくなる様なむず痒さを感じてしまう。

だが、むず痒さと引き換えに出来るだけ気を使ってやらないと、なんて紳士染みた思考が湧き出る。

「乃咲くん。もう少し早く歩いても大丈夫だよ」

「そ、そうか」

女子は歩くのが遅い、なので並んで歩く時は合わせてやるべきだとネットで見たことがあるので、実践してみたのだが、どうやら、気を張り過ぎたようだ。

気遣いの振り幅が難しい。ある程度ゆっくり歩かないと倉橋さんを置いて行ってしまうが、遅く歩き過ぎると帰って歩き辛くなるし、歩く時に手を動かすと倉橋さんと逸れてしまいそう。

もはや、女子と歩くのは精密作業染みた気遣いが必要だと感じる。緊張がえげつない。

やばい。女子と歩くの難しいぞ!?

「そう言えばさ、乃咲くん。この前凄かったよね」

「この前?」

「烏間先生との組み手」

「……あー」

俺の間が保たないことを察したのか、倉橋さんが適当な話題を振ってくる。

倉橋さんが話しやすいと感じるのはこう言う風に自然に空気を読んで、空気が悪くなる前にある程度の流れを作ってくれるからなんだろう。

「まだまだだよ。烏間先生、全然本気じゃないだろうし、小細工ばかりだったからね」

二刀目を袖の中に隠したり、ゾーンに入ったり、勝利の決定打が猫騙しだったり。

「んー、まあ、猫騙しは少しアレだったけど、でも烏間先生に攻撃当てられたのって初めてだったじゃん？ 私は凄いと思うけどなあ〜」

「だからこそその意気込みかな。今度は小細工抜きで勝ちたいよ」

「志し高いねえ。頑張って」

「頑張る。目指せ、烏間先生みたいな大人！ が俺のスローガンみたいな所あるからな」

「だよね〜、烏間先生カッコいいもん！」

その後、倉橋さんと烏間先生談義で盛り上がり上がっているうちにお守りを購入、話題が途切れることなく話を続けているうちに待ち合わせ場所に着いたらしい。

既に集合していた他の面子が手を振っていた。

「陽菜ちゃん、乃咲くん！」

「あつ、おーい！」

その後も俺たちは修学旅行を満喫する。

俺たちはその後の自由行動終了まで京都を満喫した。

「……なあ、圭一。お前、倉橋となにかあった？」

「いや、別にないけど」

「乃咲。それはないだろう!? だってさつき倉橋、お前の袖掴んでたじゃん！ 木村も見たよなあ！」

「うん、見た」

京都を満喫したのだが、コイツらの前まで倉橋さんに袖を掴まれていたのを見られてしまい、ちよつと揶揄われる事になった。

?? ?? ??

自由行動が終わると今度は旅館で過ごすことになる。AからD組はホテルで個室らしいが、俺たちE組は男女大部屋が一室ずつ。

なんだか、うちの学校らしいこつて。

「イビキうるさいヤツ居たら男子全滅だな」

「ははは、寝れないのは困るけどいいじゃんか。それはそれでいい思
い出になるだろ」

「磯貝の優等生はここでも発動するか」

風呂上がり、俺たちは旅館名物の卓球に興じていた。たまたま近く
にいた杉野や竹林も交えてのリーグ戦。俺と杉野で決勝を争い、俺が
勝った。

途中で今日の暗殺について上司に報告を終えたらしい烏間先生も
交えて対戦したのだが、烏間先生にはまるで歯が立たなかった。

烏間先生みたいな人を超人というんじゃないだろうか。基本的に
隙がなさ過ぎるんだ、この人。

んで、そもそも部屋で大人しく過ごすか、という空気になった頃、喉
が渴いたので俺は自動販売機と向き合っていた。

「あれ、乃咲くんじゃん」

「ん？ カルマか」

風呂上がりらしいカルマがいた。何となく、いつもイチゴオレとか
甘い飲み物ばかり飲んでるイメージがあるので、適当にカルマの好き
そうなジュースを買って、投げ渡す。

「なにコレ、貰っていいの？」

「この前のお礼。ほら土下座の時の」

「気にしなくていいのに。まあ、貰えるものは貰っておくけどさ」

ジュース片手に古い旅館のギシギシ鳴る床を歩く。俺たちの話題
は自然と今日の自由行動の時になにがあったのかに流れて行ったが、
カルマたちの班で起こったトラブルが衝撃的過ぎた。

「神崎さんと茅野が拉致られた!？」

「そ、流石に頭に来たよね」

「大丈夫だったのかよ？」

「まあね。電車の中で目をつけられたんだってさ」

「あー、そう言えば高校生くらいの人にぶつかって言ってたわ。
昨日」

となると、俺に絡んできた連中がバカをやったってことか。どうや
ら脅し方が少したらなかったらしいな。

「というか、もしかすると昨日、軽くあしらった所為で気が悪くなっている時にたまたま神崎さんがぶつかってターゲットになった可能性もあるのか。そう思うと彼女たち申し訳ないな。」

「いやー驚いたよね」

「そりゃあ班員が拉致られ——」

「赤い悪魔とか呼ばれてたんだ、俺」

「そっちなよ」

「ね、銀の死神とか呼ばれてるんだって？」

「黙らんと泣くぞ？」

などと話しながら部屋に入ると、なにやら珍しく男子全員が集まって何かを話してた。

「みんなでなに話してんの？」

「あ、カルマに乃咲。いい所に来た。いま、みんなの気になる娘むすめについて話してたんだ」

「お前らは？ 気になる娘いる？」

「恋バナって、修学旅行か」

「修学旅行だからな？」

「もうみんな話してるからな？ お前らだけ逃げられると思うなよ？」

木村の言葉が終わると同時に磯貝が何やらランキングを渡して来た。カルマと半分ずつ持って中身を見ると、どうやら気になる女子ランキングなるものを作っていたらしい。

因みに一位は神崎さん、二位に矢田さん、三位に倉橋さんという具合のランキングだ。

「面白そうな事してるじゃん」

「まあ、確かに」

ふーん、と言いながらランキングを見下ろして少し考えるカルマ。コイツ、女子にそう言う感情持つてるんだろうか？ などと思っていると案外、あっさり答えた。

「俺は奥田さんかな」

「意外なところ来たな」

「乃咲の言う通りだな……」

「だってほら、彼女、クロロホルムとか作れそうじゃん？ 俺の悪戯の幅広げられそうだし」

「絶対にコイツらくつつけちゃダメだわ」

「乃咲に賛成だわ……」

カルマのえげつない悪戯が更に強化されるとか悪夢兼地獄以外の何者でもない。

つか、奥田さんの毒にカルマの悪戯が加わるとか下手したら普通に死者が出るレベルじゃないだろうか？

「そう言う乃咲クンは？」

「確かに。それ気になるわ。なんか普段は女子に興味ないです、みたいな顔してるもんな」

「そんな顔してる？」

菅谷の指摘に首を傾げる。

俺、普通に女の子が好きだけだな。恋愛対象が男ってこともないし、今日だって倉橋さんといてかなりドキがムネムネして……。つと、倉橋さんか。

「俺は倉橋さんかな」

カルマの問いに対して俺は率直に頭の中に出た名前を口に出してみる。

今日、一緒に居て楽しかったし、袖を掴まれている間はドキドキしたのは事実だ。

女子と歩くのは精密作業だとか思ったが、なんだかんだ嫌だったわけではないし、烏間ファンクラブの仲間だし。それと話しやすいし。

「へえー。なんか意外」

「そう？。なんか無難に選んだ感じないか？」

「まあ、良いじゃんか。理由まで追求しなくてもさ」

理由まで追求されそうになったところで磯貝からの助け船が来る。

「いいか、皆んな。この投票結果は内緒な？。男子の秘密だ。知られたくない奴が大半だろーし、女子や先生には特に……」

話を締めようとした磯貝が停止する。

どこか唾然とした顔をしていたので視線の先を追うと、この大部屋の手前の入り口手前で座った殺せんせーが何かメモを取っていた。

「なるほどなるほど………」

メモ取って殺せんせーは凄く自然体で部屋を出ると旅館の中居さんもビツクリな丁寧さで襖を締めた。

凄く。気配も感じなかったし、動きも何もかも自然体だった。なんならビツチ先生バりに動きが自然。

「って感心してる場合じゃねえ!?!」

あのタコがいつからいたか知らないが、もしかしなくても今の気になる女子ランキングで倉橋さんに投票した部分を聞かれていた可能性がめっちゃめっちゃ高い。

「奴を殺せえー! ああの音速ストーカーをぶつ殺せえー!!」

「の、乃咲に続けえ!!」

「待てゴラああああ!!」

流石に恥ずかしいので殺せんせー殺害音頭を取って俺は男子たちの先頭にたって走り出した。

?? ?? ??

圭一たちが走り出す少し前。女子の部屋でも似たようなやり取りが繰り返されていた。

「え? 好きな男子?」

「そ、修学旅行の鉄板でしょ?」

「はいはい! 私は烏間先生」

「それは皆んな同じでしょうが。同じクラスの男子の中でよ」

「え………」

中村の振った話題に怪訝な顔をする岡野とノリノリで烏間の名前を出す倉橋。中村からの烏間殿堂入り指定に倉橋はあからさまにテンションが下がった。

「うちのクラスでマシなのは磯貝と前原くらい?」

「え? そうかなあ」

「まあ、前原はタラシだから残念だとして磯貝は優良物件じゃない？」

「顔だけならカルマくんとかもカッコいいよね」

「素行さえ良ければねえ」

「二「そうだねえ」」

カルマの素行が悪いのは女子の間でも共通認識らしい。しかし、そんなカルマにも茅野と奥田からフォロワーが入る。

「そんなに怖くないですよ？」

「うん、普段は大人しいし」

「……野生動物か」

速水の鋭いツツコミに苦笑を禁じ得ない女子の面々が他に目ぼしい男子を洗う。その中には渚や杉野の名前も出た。

「あと、素行はともかく乃咲も優良物件じゃない？ 顔も悪くないし、最近は不良っぽくないしさ」

「あ、確かに。烏間先生が体育教えるようになった辺りから社交性出てきたよね？ 結構ぶきつちよなところあるけど放課後に烏間先生に訓練してもらってたり、根が真面目というか」

「言われてみるとそうだね。烏間先生から一本取った時はかつこいいというか、感動したよね」

「たまに変な性癖出るのさえなければねえ」

「二「そうだねえ」」

「うーん、でも性癖はともかく結構紳士だよ？」

「あれ陽菜ちゃんが烏間先生以外にそんなこと言うなんて意外だね」

「うーん、今日一日はほぼ一緒に居たからね。意外な一面もいっぱい見れたしね」

「へ〜！」

その後も女子の間で男子に関する話題が出る。ある程度、会話が盛り上がるのと戯れ合う者も出て来て、声が部屋の外に漏れ始めた頃、イリーナが女子たちの部屋を訪れる。

「餓鬼ども、一応、消灯時間を知らせてきたわよ」

「一応って」

「どうせ電気消してもしばらくはお話ししてるんでしょ。そんじゃあ

「おやすみ——」

「あ、ビッチ先生お酒持つてる。先生だけずるい〜」
「はあ?」

倉橋の指摘に少し不服そうな顔をするが、何だかんだ、矢田と倉橋に乗せられてイリーナも女子の輪に混ざる。

彼女たちの話題は自然とイリーナに関するものにならなくなって行った。

「ええ!? ビッチ先生まだ20歳ハタチい!」

「経験豊富だからもつと上だと思つてた……」

「ね、毒蛾みたいなキャラしてるのに」

「それはね、濃い人生が作る色気が——誰だ!? いま毒蛾つったの!」
「ツツコミが遅いよ」

女が3人寄れば姦しいと言うが、10名以上いると賑やかになるもの。わいわいと女子たちが騒ぐ中、1匹のタコが彼女たちの間に混ざる。だが、それに気付くものはまだ居ない。

「女の賞味期限は短い。アンタらは争いのない平和な国に生まれたんだから、環境に感謝して、全力で女を磨きなさい」

「ビッチ先生が珍しくまともなこと言ってる〜」

「なんか生意気……」

「なめくさりおつてガキども!!」

「まだ、気付かない。」

「じゃあさ、じゃあさ、ビッチ先生がこれまでオトして来た男の話、聞かせてよ〜」

「あ、それ興味ある〜!」

「ふふ、良いわよ。ガキには刺激が強いから覚悟しなさい……。そう、あれは17の時……」

イリーナが話を仕掛けた時、彼女は気付いた。自分たちの部屋に1匹のタコが体色をピンク色に染めて、イリーナの猥談をメモ帳片手に混ざっていることを。

「おい、そこお〜!」

「「えっ!?!」」

「さりげなく紛れ込むな、女の園に!」

たまらずツツコミを入れるイリーナ。対照的に殺せんせーは悪びれもせずにニヤニヤと笑いながら口を開く。

「良いじゃないですか。私も混ぜて下さいよ」

だが、それを生徒たちは許さなかった。

「そういう殺せんせーはどうなのよ！」

「そーだよ！ いつも私たちのことは知ってるくせに自分のこと全然話してくれないじゃん！」

「先生は恋バナとかない訳!? 巨乳好きだし、エロいし、片想いくらいはあるでしょ!?!」

「にゅ、やあ……………退散！」

殺せんせーは逃げた。

「追いなさい！ 捕らえて、吐かせて、殺すのよ！」

結果、殺せんせーは女子たちも敵に回した。

??

??

??

「居たぞ、殺せえ！」

「皆んな、こっちに居たわよ！」

「にゅやあつ!? 男女挟み撃ちに!?!」

追いかけた末、殺せんせーを見つけたので男子に指示を出し、退路を塞ぐが、俺たちとは反対方向から女子たちも殺せんせーを追っかけて来た。

どうやら、殺せんせー、女子の部屋でも盗み聞きをしていたらしい。

「ちよつと乃咲、そっちはどうしたの!?!」

「えつと……………男子の知られたくない秘密を殺せんせーに全員が握られたのさ」

片岡が聞いて来たので全て話さない程度に答える。すると、興味を持ったらしい倉橋さんが暗殺の輪から外れてこっちに来た。

「知られたくない話って?」

「……………イエナイヨ」

倉橋さんを見て、つい思考が止まる。

あ、浴衣似合ってる、とか。寝る前の姿って普段と違う印象受けるよね、とかいろいろ思うところはあったが、それ以上になんて答えれば良いのか分からなくなった。

だって、気になる女子ランキングで俺は倉橋さんに投票したよ！
なんてこと恥ずかしくて言えるはずがない！

「ちよつと気になるよー！」

「話せないってばー！」

倉橋さんと言う言わないの問答になるうちに、俺たちの横で繰り広げられてる暗殺は激化する。

結局、俺たちの行動は最終的に暗殺に行き着くんだな、なんて思いながらもこの修学旅行を振り返る。

クラスメイトや自分の知らない一面を知る良い機会を得た良い旅行だったと思う。

こうして俺たちの修学旅行は幕を閉じたのだった。

「乃咲くん！」

「ごめん、話せないんだってばー！」

20話 転校生の時間

楽しかった修学旅行も終わった今日この頃、俺たちはいつも通りの日常に戻った。

そんな日常の一コマ。朝の登校中に珍しく一緒になった渚、杉野、岡島の4人で歩いていると、思い出したみたいに杉野が話題を変えらる。

「なあ、聞いたかよ。転校生の話」

「ああ。烏間先生から送られて来たメールの」

杉野に頷きながらスマホを取り出し、昨日、烏間先生から一斉送信されたメールを開く。

そこには、こんな内容の文章があった。

『明日から転校生が1人加わる。多少、外見で驚くかも知れないが、あまり騒がず接して欲しい』

外見で驚く、の部分が凄く気になったが、何か特別な事情のある生徒なのか？ とその部分に関しては特に深くは考えていなかった。

少なくとも俺は考えて居なかったのだが、考えることは人によって千差万別。岡島は気になって烏間先生にメールで確認したらしい。

「俺さ、気になって烏間先生にメール送ったのよ。顔写真とかないですか、つてさ。そしたらこんな画像が送られて来た」

岡島がメールを開いて俺たちに見せてくる。

彼のスマホの液晶にはかなり知的な印象を受ける女子の顔が映されていた。

「なんだ、この子。めちゃくちゃ可愛いな」

「乃咲もそう思うか？」

「ああ。普通に可愛いだろ。でも、この時期に転校してくるってことは確実に只者じゃないよな」

「うん。僕もそう思う」

「それに転校生って名目だからビッチ先生みたいな歳上^増じゃなくて俺たちとタメってことだろ？」

「年増て……」

「ビッチ先生が年増かどうかは兎も角さ、この子、暗殺者には見えないよな」

さり気なくビッチ先生を年増扱いすると、渚と杉野の呆れたような視線が俺に向けられるが、困ったことに誰も年増説を否定しない。

渚、杉野。そんな風に俺を見ても年増説を否定しない時点で俺とお前らは同罪なんやで。

けど、ビッチ先生の事はその辺の側溝に投げ捨てて置くとして、新しい生徒と言うのは少し気になる。

この時期に来ると言う事はマジで暗殺絡みの生徒なんだろうが、どう言う奴なんだろう？

実は転校生というイベントに鉢合わせたことのない俺は新たに来ると言う生徒に興味深々だった。

?? ?? ??

「……何か俺の席の隣に変なのある」

俺は教室に入ると同時に啞然とした。

窓際が一番後ろの席。そこは本来空白であり、その空白の右隣に俺の席があつたのだが、そのあるべき空白部分にモノリスが建設されて居た。

何だろう、あの火星に立ってそうなモノリス型の建造物は。修学旅行から帰って来たら俺の席の隣に違法建築がなされて居た件について。

「乃咲。お前の席の隣に何かあるぞ」

「なあ。まさか、アレが転校生だったりしないよな」

俺は恐る恐る自分の席に向かうのとはぼ同時にモノリスの全体の上3分の1くらいの面積が液晶になっているのか、プツッと音を立てて何処となく、なんか見覚えのある顔を表示した。

何気なくゾーンに入り、その顔を見ているとようやく思い当たる。

そこに表示されて居たのは今朝、岡島が見せてかれた転校生の顔。

『おはようございます、皆さん。今日から転校してきました、自律思考固定砲台と申します。よろしくお願ひします』

簡単な自己紹介を終えると自律思考固定砲台さんとやはらもう、これ以上、用はないので。とでも言いた気にブツリと液晶の電源を落とし、沈黙した。

マジかよ。俺、今後この火星のモノリスみたいな奴の隣で授業受けるの？ この属性てんこ盛り女子の隣で？ 流石にツツコミ間に合わないよ？ 頭がおかしくなるわ俺だったら。

「の、乃咲。喜べよ、お前が可愛いつて言つてた女子が隣に転校してきたんだからさ」

「ハッ倒すぞ、杉野」

これが生物学的に女子メスなら俺だつて喜んだだろうが、このモノリスの場合は女子という設定に過ぎない訳で。流石に俺の性癖には刺さらない。

いや、まあ。二次元女子、固定砲台系女子、美少女、箱入り娘（物理）、クール系女子などなど優秀な属性は余り過ぎる程にてんこ盛りだけどさ。

流石に多方面にツツコミが追いつかないわ。

つか、コレが転校生とか、入学手続き誰がしたんだろ。このモノリスの所有者？ それとも暗殺を管轄してる烏間先生？

……後者だろうなあ。確実に。

なーんて思っていると案の定……。

「み、皆んな知っていると思うが転校生を紹介する。ノルウエーから来た自律思考固定砲台さんだ」

『よろしくお願ひします』

怒りというか、理不尽な現実へのやり切れない思いが出てるというか、烏間先生の声が震えてるし、使っているチョークが自律思考固定砲台の文字を黒板に書き終わると同時に真っ二つにへし折れた。

烏間先生、かなりの苦勞人である。俺があの人だったらツツコミ所が絶えなくておかしくなるわ。

「ぷーくすくす」

「お前が笑うな、同じイロモノだろうが……！　言っておくが、彼女は思考能力と顔を持つているこの学校の生徒として登録されている」

「ご、強引だなあ。政府の人たちもそれだけ殺せんせーの殺害に全力を注いでいると言うわけか。」

だが、ここで心配するべきは世界の命運と俺たちの安全、学校からの縛り、暗殺者の管理や無茶振り染みた指示を敢行する烏間先生のメンタルと胃痛である。

「彼女はあの場所からお前に銃口を向け続けるが、お前は反撃できない。『生徒に危害を加える事は出来ない』それがお前が教師になる時にした契約だからな」

「なるほど、契約を逆手にとつてなりふり構わずに機械を生徒に仕立て上げた、と。考えましたねえ」

感心するように頷く殺せんせーに同意する。

『ああ……素直にそんな手もあったのか』と俺も同じ様に感心してしまった。

「いいでしょう、自律思考固定砲台さん。あなたをE組に歓迎します！」

『はい、よろしくお願いします、殺せんせー』

こうして俺たちのクラスに珍妙な仲間が1人……というか、一機？　加わることになった。

加わることになったのは良いが、俺は……というか、自律思考だとか固定砲台とかそんな言葉に思わずロマンを感じてしまうお年頃の男連中は一つ、どうしても気になって居ただろう。

（固定砲台って言う割に銃の類が一切見当たらないんだよなあ……）
横目でチラチラと固定砲台を盗み見ているが、やはり、すべすべしてそうな金属肌があるだけ。

どんな手段で攻撃するんだろう？　と彼女の攻撃手段を考察しながら自律思考固定砲台を眺めていると、殺せんせーに気づかれた。

「ごらあー！　乃咲くん！　自律思考固定砲台さんが美人だからと言って舐め回すような熱い視線を送るんじゃないやありません！　緊張させたらどうするんですか！」

「誰も視姦なんてしとらんわ！」

「誰もそこまで言つてないよ……」

『確かに私も視線を感じていましたが、隣人の舐め回すような視線など私には何の問題にもなりません。ですが、褒められたことではありませんね』

「誰が機械にやらしい視線を向けるか！」

『機械じゃなければ向けるのですね』

「……………しねえよ！」

「『その間はなんだ?!』」

とかなんとか言つてるとガコン、とモノリスもとい、自律思考固定砲台の横面が開いた。

何事かと観察していると開いた場所から無数の砲門がサブアームで保持された状態で生えてきた。

「かつけえー！」

杉野の無邪気な感想に答えるように固定砲台さんの傍から生えてきた砲門が無数の弾幕を形成する。

飛び交う無数のBB弾が自律思考固定砲台から前のクラスメイトたちの頭上を通過する。

「きやああああああ——!!?!」

「なんなんだよっ!!?!」

BB弾は誰に配慮するでもなく、教壇に立つ殺せんせーに向かって飛来し、壁や黒板に反射して、よく見ると流れ弾が背中当たったり、反射した弾が伏せている生徒の頭に当たったりしている。

「うおっ?!」

流石にここまで届かないと思つて居たが、黒板に反射したBB弾丸飛んでくるのを辛うじて知覚して反射的に顔を逸らして避ける。

結構な勢いだ。顔に当たるのは避けたが、身体に当たった分に関しては制服にシワを作る程度には威力があるようだ。

こんな所まで届いて、更にこの威力。

最前列のみんなが危ない。修学旅行で一緒に行動した奴らが危ないと思うと少し焦る。

どうするべきかと考えてみるが、正直、ネタが浮かばない。下手な事やって固定砲台を壊してしまつたら、なんて考えると後が怖いし。「シヨットガン4門、機関銃2門。濃密な弾幕ではありますが、この生徒なら当たり前にやっていますよ。それと、自律思考固定砲台さん？ 授業中の発砲は禁止ですよ」

『……………』

殺せんせーの言葉に無言で銃を納める自律思考固定砲台。もしかして、機械の割に案外、物分かりがいいのか？ なんて思っで見ているとそれは思い違いだった事を知ることになる。

砲門を全て片付けた自律思考固定砲台。彼女の隣に座っている俺だから分かる。なんだか、機械独特の演算音みたいなのが聞こえてきた。

『気を付けます。続けて、攻撃に移ります』

こいつ、全然分かってねえ!?

『弾道再計算、射角修正、自己進化フェイズ5―28―02に移行』

自己進化だと？ ときつと側から見ても怪訝そうな顔しているだろう俺は特に表情を取り繕う事なく自律思考固定砲台を見ていると、再び彼女は無数の砲門を機械身体から取り出す。

見た所、なにか特別変わった事はない。それでも攻撃を続ける固定砲台。その攻撃を見守っていると、殺せんせーは余裕そうな顔をしていることに気づく。

確かに弾幕は濃いが俺たち全員で弾幕張った時よりは薄いのでナメているのだろう。緑のしましまで余裕の顔で顔に直撃するコースの銃撃をチョークで弾き飛ばすが、次の瞬間、彼のチョークを持つ触手が吹き飛ばされた。

『指先破壊確認。増設した副砲の効果を確認しました』

副砲？ と彼女の言葉に疑問を覚えて構えている銃の細部を観察していると機関銃の下にさつきまでなかった砲門が増設されて居た。

『次の射撃で殺せる確率、0.001%。次の次で殺せる確率、0.003%。演算の結果…………卒業までに殺せる確率…………90%以上』

コイツは、俺たちの被害なんかも考慮しない。ただ、殺せればいい

という思考のみで暗殺をする。殺すための最適解を演算する。ある意味では合理的ではあるが勉強もままならない。迷惑だな。

と俺がそんな事を思っていると、あつという間に1時間目が終了した。終了したのだが……。

足下に転がる無数のBB弾。もはや足の踏み場がないレベルで散らかっている教室のえげつない惨状にクラスメイトたちは苦い顔をしていた。

「これ、俺たちが片付けるのかよ」

磯貝に内心で同意しながら、掃除ロッカーから道具を取り出して掃除を始める。

朝の一斉射撃と同等の散らかりようだ。

「凄い散らかったね」

自在箒で玉を集めていると倉橋さんが塵取りを持って来て、俺の集めた玉を拾ってくれた。

「倉橋さんは大丈夫だった？ 結構な勢いで反射してたけど怪我とかしてない？」

「うん。怪我はないけど……うん。やっぱり怖かったよね。クラスの皆さんで撃ってる時と違ってどんな風に弾が飛んで来るか分からないからさ」

「だよなあ……」

などと雑談する内に掃除は終わったのだが、自律思考固定砲台はその後も俺たちの都合や掃除事情も考慮する事なく撃ち続けるのだった。

「おい、掃除機能とかないのかよ、固定砲台さんよお」

『……………』

「ちっ、シカトかよ」

「やめとけ、機械なんか絡んでもしかたねえよ」

嫌味つたらしい吉田と村松の言葉を否定するのはこの教室にいなかった。

?? ??

??

「と、言うわけなんですけど。どうにかありませんか、烏間先生」

4時間目が終わった昼休み、俺は磯貝、片岡と烏間先生に自律思考固定砲台の無秩序射撃に対するクレームと改善を求めて意見していた。

みなみに学級委員の2人に加えて俺がいるのは一番、烏間先生と話し慣れているからだ。

「すまない。俺としても君たちの授業を妨害するのは本意ではない。だから政府に掛け合っているのだが、固定砲台の判断に任せろ、この事だ」

「つまりは現状維持ってことですね」

「……申し訳ないが、そうなる」

烏間先生と俺のやりとりを聞いた学級委員2人の顔が曇るのが分かった。

さて、いよいよもって困ったぞ。なんだかんだで烏間先生がどうにもできない問題を俺たちで解決できる可能性はどうしようもないくらい低い。

さて、困ったぞ。このままでは授業もままならないし、危ないっただらありやあしない。

あの傍迷惑で危険な暗殺を止める。あるいは一時的にでも停止させる術はないものか。

「乃咲くん。彼女も君たちの仲間です、邪険にははいけませんよ?」

「……んじゃあ、6時間目の道徳は彼女の歓迎会でもしますか?」

どうしたものかと考えていると殺せんせーが釘を刺すような言葉を投げってくるが、真意が判らず、皮肉染みた言葉が口から飛び出す。

しかし、殺せんせーは俺の言葉をモノともせず、こちらの皮肉をむしろ歓迎するように触手を広げて、高らかに俺たちに言った。

「ヌルフッフ、君のその提案を待って居ました! では君の言葉通りに6時間目は自律思考固定砲台さんの歓迎暗殺としましょう!

第2回、合同暗殺です!」

「はあ?」

「乃咲くん。幹事は君です。しっかりと彼女を口説き落としてきてくださいね」

殺せんせーはそういうと机から財布を取り出し、窓から飛び出していった。しまった。

あの人、とんでもない無茶振りを押し付けて昼飯食いに行きやがったぞ。どうすりやいい？

「……乃咲くん。すまん」

「いえ……」

深々とため息を吐きたくなるのをぐっと抑えて磯貝たちを連れて職員室を出る。

俺の頭の中には殺せんせーからの無茶振りがぐるぐると回り続ける。彼の真意はなんだ？

「付き合わせて悪かったわね、乃咲」

「ほんと、すまない」

「気にすんな」

2人からの謝罪を背中に教室に戻る。その道中はひたすらに殺せんせーの言葉が俺の頭の中ではぐるぐるとひたすらに回り続けた。た。

機械への歓迎会？ 何をすればいい？ しかも6時間目の道徳を合同暗殺に変えてまで？

……ん？ まてよ、今回俺が任せられたのって、あくまであの固定砲台を口説き落とすことだけだよな？

だって日時は今日の6時間目って決まってるわけだし、やる内容は合同暗殺って決まってるわけだし。

と、なると、俺がどうやってあの機械を説得するかだが……。アイツ、自律思考とか言っても所詮は機械だろ？ 俺の言葉に興味なんて持つのか？

いや、まて。そもそも歓迎会とか以前に誰かを何かに誘う時、必要なことってなんだ？

まずは日時と場所だろう。これは問題ない。教室で6時間目と決まっているのだから。

次はなんだ？ 日時以前にそういう必要なもの……それは、興味を持てる内容かどうかだ。

俺の隣に転校して来たあのキリングマシン固定砲台が興味を持つ事柄とはなんだ？ ……それは、殺せんせーの暗殺だろう。だって、殺せんせーの暗殺の為にこの教室にやって来たのだから当然と言える。

……あれ？ 本当に俺に必要なのは自律思考固定砲台を説得することだけだな。

日時、会場、理由・動機全て殺せんせーが用意してくれた。あとは俺がどうやって説得するか、本当にそれだけが問題として残っている。

昼休みの終わりまであと30分。6時間目との間の休み時間もあるが、それはおそらく掃除で消える。

昼休みが終わるでの間に固定砲台を説得しなければならぬにかして。

教室の扉を開けて、自律思考固定砲台を真っ直ぐ見据えると、クラスメイトたちが集まって来た。

口々に烏間先生への直談判への成果を確認しに来るが、学級委員の2人がことの顛末を伝える。

「アレをどうやって説得しろってんだよ!？」

「乃咲、機械を説得するなんて無理だぜ」

「……吉田？」

みんなに囲まれていると、普段は俺に話しかけることのない吉田が珍しく話しかけてくる。すっごいバツが悪そうではあるが。

話しかけて来た吉田は頭を掻きながら続けて俺に向かって苦々しく口を開いた。

「少し毛色は違うが、機械には多少の心得があるっつーか。自信があるんだけどよ。普通、機械つてのは命令しか聞かねえんだ」

「……まあ、機械が融通効くなら工場で腕切断だとかの労災は発生しないわな」

「その通りだ。機械つてのは命令されたことしかできねえんだ。普通はな。多分、自律思考……AIだって今の技術じゃその辺も変わらない」

「いはずだぜ」

「普通……か」

吉田の言葉に考え込む。

吉田の言う通りなら普通の機械は命令されたことしか出来ない。普通なら、な。

一体、何を持って普通の機械と言うのかその定義が難しいところなんだけどな。

「まずは対話してみないとな」

人工知能、AIとの対話。こうして文字にしてみるとなんとまあ、素敵な響きだ。映画化出来そうなレベル。見事な程にSF染みている。

本当に、驚くべき現状だが、俺はその映画染みた現実と向き合おうとしている。

「乃咲くん、対話ってどうするの?」

「とりあえず、話せる事を話してみる。みんなは話を聞いておいてほしい。6時間目の道徳はそれによって変わるだろうからさ」

倉橋さんの疑問に対して手短かに答えて、俺は徐に歩き出し、自分の席の隣に聳え立つ黒い巨塔……もとい、自律思考固定砲さんを正面から見据える。

「自律思考固定砲台さん。提案したい暗殺プランがあるんだけど」

『……暗殺プラン?』

俺の言葉に興味を持ってくれたらしい彼女が反応し、液晶に姿を表す。

こうして、柵ヶ丘の銀の死神こと俺、乃咲圭一と2次元美少女との対話が始まるのだった。

21話 暗殺と対話の時間

殺せんせーからの無茶振りに応じようと俺は自律思考固定砲台さんと対話をしてみることにした。

まずは手堅く挨拶から行ってみようか。

「ひとまず自己紹介からしようか」

『貴方は乃咲圭一さんですね』

「知ってるんだ？」

『開発者のデータの中に名前がありました。触手を初めて破壊した生徒だと』

なるほど、俺のことは知っているのか。

しかも触手破壊のことまで知っているのなら、多少なりとも説得のアドバンテージがあるかもしれない。

俺の計画した合同暗殺に寺坂たちが参加したのはそういう実績があつたのも理由の一つだろう。実績ある奴が提案する暗殺プラン。それが自律思考固定砲台を説得するのに今の俺持てる最大の切り札だ。

『それで、暗殺プランとはどう言うものでしょうか』

——食いついた。

吉田の言葉や俺のイメージが正しいのなら、機械つてのは入力された命令でしか動かないってこと。

しかし、彼女は自律思考ができるAIだ。つまりは自分で判断できる能力を持っている。

根本の命令自体を変更することは出来ないだろうが、自律思考固定砲台はその過程における行動を自分で考えることが出来るはずだ。

俺の仮説が正しいのなら、授業中に発砲するあの傍迷惑な暗殺以上に効率の良い方法を提案してやれば彼女はそっちを選ぶはずだ。

現状1番の問題はその提案を俺が出来るかどうか、そして、彼女が効率的だと判断できる言葉選びができるかどうか、だ。

「6時間目の道德の時間だ。その時間、俺たちと一緒に射撃をして欲

しい」

『厳密、授業中の発砲は禁止なのでは?』

「……!」

お前がそれを言うのか! と全員でツツコミ入れたくなる事を頑張つて抑える。

ここで声を荒げてても意味はないはずだ。今はあくまで冷静に、会話を続けよう。

「問題ない。殺せんせーから許可は貰った。クラスメイトたちも同意してくれてる。な?」

俺たちのやりとりを見守って居たクラスメイトたちに問い掛けると倉橋さんが頷いてくれた。

それに続いて口々に同意したり、頷いたりして、俺の援護射撃にまわってくれている。

『お断りします』

「……………何故?」

『私にメリットがありません』

くそっ、やっぱりそう来るか。どうする? 俺、なんて言えば良いんだらう?!

自律思考固定砲台にとつてのメリット。俺たちに協力することで得られるメリットとはなんだ?

俺はさっきまでの無差別射撃とこの固定砲台の構造に付いて考えながらゾーンに入る。

人手が増えると言うことは、単純に手数が増えるということ。1時間目の射撃時に殺せんせーは確か、彼女の砲門の数を分析していたはずだ。

ショットガン4門に機関銃2門。そして確か、彼女自身が副砲を増設したとか言っていた。何に増設したかは分からないが多く見積もつてそれぞれの砲門プラス1門と言ったところだろう。

そこに加えて俺たちのE組の27人が射撃を行う。これは手数が増えるという意味でもメリットだし、副砲をわざわざ作り直したり、増設する手間が省けるという意味でもメリットのはずだらう?!

それから、こいつのセリフを鑑みるに、殺せんせーを殺すための射撃パターンを演算し、実行し、データを取り、計算し直して卒業までに殺せる確率を出すつてのを繰り返していた。

んで、その殺せる確率つてのが90%以上。

だが、90%以上つてことは、残る10%は不確定要素、ということになる。それが俺たちによる妨害なのかはさておき、射撃パターンを計算し尽くした上での数値なら俺たちの協力で暗殺出来る可能性のシミュレートはかなりの幅が広がるだろう。もしかすると、卒業までに殺せる確率もつと上がるかもしれない。

攻めるとしたらこの辺りだろう。

「キミの砲門の数がどれくらいかは正直、把握しきれてない。朝はショットガン4門、機関銃2門に副砲つて構成だったらしいが、俺が思うにそれだけじゃ足りないんじゃないか？」

『おっしゃる通りです。ですが、問題ありません。朝申し上げた通り、卒業までに殺せる確率は90%以上ありますので皆さんの助力は不要です』

やはり確率を出して来た。さすが機械と言ったところだろう。自律思考できるとしても、まずは理論上、確率の高い方を取る。いや、機械じゃなくても確率の高い方をまずは取るだろう。

だが、やはり90以上の数値を出してくることはなかった。そこに俺の勝機を見た。

「卒業までに殺せる確率が90%つてことは、残り10%の確率でやり漏らすつてことだろ？ その10%を俺らで埋められないかなつてのが俺たちの提案だ」

『そんなこと——』

「キミは朝イチの射撃で砲門が足りないと判断したから増設したんだろ？ キミが人工知能だというのなら単純に考えて欲しい。キミの持つ砲門に加えて27の火力が上乘せされるんだ。可能性は上がるか、下がるか」

自律思考固定砲台の言葉を遮って語りかける。

余計な情報をシャットアウトして彼女になにが有効かを問いかけ

る為だ。

俺の問い掛けに自律思考固定砲台は短く答えた。

『確率としては上がるでしょう』

「だろ？」

『ですが、それは私が砲門を増やせば良いだけでは？』

「そうだな、それでもカバーは出来るだろうが、もう一つ、俺たちが協力することに利点がある」

『それは何ですか？』

よし、食い付いて来た。どうやら火力が上がるのは彼女にとってもメリットであると判断されたらしい。そうでなければ、こんな風に問い返してくることはないだろう。『関係ありません』の一言で会話を終わらせることが、彼女には出来たはずだ。

確かな手応えを感じながら俺は続けて言葉を紡ぐことにする。下手にタメて彼女の興味を損なうのは痛手だと判断したからだ。

「弾丸の発射位置だ。エアガンの威力によるが、俺や君の席から殺せんせーを撃つのと磯貝たち最前列から撃つのでは弾丸が標的に命中するまでの時間が違う。秒数で言えばコンマ何秒だろうが、相手はマツハ20だ。その僅かな時間でも短縮するに越したことはない。違うか？」

『……異論、ありません』

ここで俺は一気に畳み掛ける。

「発射位置の問題で言えば、もう一つ付いてくるのは発射角度だ。席の最後尾で打つ、と言っても、教卓正面の列の最後尾にいるカルマが撃つのと窓際の一番後ろにいるキミが撃つのだったらカルマ弾の方が早く到達する。そうだろうか？」

『そうですね』

「発射位置の違いと射角の違い、弾丸到達までの時間の違い。これらの要素が噛み合えば君1人で形成するモノより濃密な弾幕が張れるはずだろうか？ キミの砲門が寺坂や木村の位置まで伸びる上に、砲門を保持するアームが重さに耐えられるのなら話は違うけどさ」

『――』

俺たちと組む利点を捲したてる。

彼女の砲門を保持するアームの強度に関しては正直、口から出まかせ感はある。ただ、みたところ固定砲台から伸びるアームがかなり華奢だったので物理学的にアームの付け根から離れるほどに負荷が掛かるだろうと踏んだ結果の問い掛けだ。

「キミが演算した無数の射線と1発当たり27通りの射線。それらが織りなす濃密な弾幕。どうだろう？　俺たちと協力が協力しあつたときの卒業までに暗殺出来る可能性、90%を下回るか？」

『……即時計算は困難だと判断します』

俺の言葉に自律思考固定砲台はそう言葉を発すると数秒間、沈黙する。また、そんな彼女と俺を見守るようにクラスメイトたちも沈黙した。

耳が痛くなるほどに人の声がしない教室に固定砲台から聞こえる演算音が静かに響く。

そして、たつぷり3分後、閉ざしていた口を彼女はようやく開くことにしたららしい。

『計算の結果、私一機のみで弾幕を形成するより、皆さんと合同で一斉射撃を行う方が効率的だと判断します。よって、6時間目に行く合同暗殺には私も参加させて頂きます』

「そうか、良かったよ」

『皆さんの席位置から計算できる射線の計算を行います。約60分後に終わる予定ですので6時間目開始と同時に射撃を行います。よろしくお願ひします』

「え、ちよつ——」

ブツツと音を立てて液晶から姿を消す自律思考固定砲台の中の人。取り残された俺たちが呆然としてみると、5時間目開始直前の予鈴がなった。

「えっと、ひとまず交渉成立？」

「ってことだろ。ついでに5時間目の平穩も手に入れたわけだな。お手柄じゃん、乃咲！」

5時間目はあの傍迷惑な暗殺が行われることはない。そう理解す

るや否や、岡島が肩を組んでくる。

それに続いて皆が口々に労ってくれた。カルマは面白そうにこつちを見てヘラヘラ笑い、寺坂は居心地悪そうではあるが、目が合った時の態度はいつもより柔らかかったと思う。

だから、俺は続けてみんなに指示を出すことにした。この際だ。自律思考固定砲台の動きを制限できるように動いておくとしよう。

「ひとまず、俺たちは自律思考^コ固定砲^イ台が計算する時間を作る。計算する時間が必要になればこんな具合で今後もスリープモードになるかもしれない。いいか、6時間目はありとあらゆる角度、撃ち方で色んなデータを取らせるんだ」

「コイツに計算する必要性を与えるってことだな」

「そういう事だ。吉田。機械は所詮機械。命令されたことしか出来ない。けど、AIだってんなら根本の命令をキャンセルすることは出来なくても、結果に至るまでの過程を示してやることは出来るだろ？」

「だな」

「だったらその過程として俺たちと協調する利便性というか、俺たちの利用価値を示してやれば良い。俺たちと暗殺した方が効率的だと考えられるようになればある程度、こっちの要求を通せるかもだろ？」

「たしかにな、でも、そんな上手いくか？」

「わからん。わからんが、あいつは俺たちの暗殺に協力するのにメリットがない、と言った。だったら、こっちも同じ事を言ってやれば良い。『お前に協力してもメリットはない。手伝って欲しいのなら授業中は静かにしている』ってな。少なくとも、コイツは俺たちに利用価値を見出しかけたからこうやって計算してるわけだし可能性はゼロじゃない」

「……なるほど、考えたな」

「吉田に褒められるとは思わなかったよ」

素直に思った事を言って、吉田が苦い顔をする。

それを少し愉快に思いながら殺せんせーから任された、転校生を口説き落とす任務を遂行できた俺は達成感を覚えていた。

達成感を覚えては居たが、なんか、殺せんせーの言葉が胸に引っかかる。

「乃咲くん。彼女も君たちの仲間です、邪険にははいけませんよ？」
……俺の態度はどうだろう。自律思考固定砲台を邪険にしている、といううちに入らないのだろうか。

いや、俺は現段階でやれる事をやった。ぶっちゃけると超高性能AIだとか言われても、男心にスゲーって思うだけ。同じ思考を持ったヒトの形である、なんて俺はまだ思えなかったんだ。

「おや、乃咲くん。自律思考固定砲台さんは口説き落とせましたか？」
「ええ。辛うじて」

?? ?? ??

「さて！ 今日の日6時間目は合同暗殺です！ 皆さん、期待してますよ！ ちなみに、避け続けるのも退屈なので時々防御しますがねえ」
教壇に立った殺せんせーが言う。

俺は横に聳え立つ黒い巨塔に話しかける。

「自律思考固定砲台。準備いいか？」

『はい、不足はありません』

返事をすると同時に機体の側面から無数の砲門を出す自律思考固定砲台さん。

俺はそれを見届けてから、こっちに視線を向けてくるクラスメイトたちに向かって指示を出す。

「全員、構え！」

「「っ……………」」

俺の号令に皆が烏丸先生から教わった銃捌きで殺せんせー目掛けて各々の武器を構える。ハンドガンや機関銃、さまざまだが、皆んな、やることは同じ。

それはそれとして、自然に俺が指示出してるけど良いのかな、こう言うのって学級委員の方が良いんじゃないのか？ などと思いがながら続けて号令をかけた。

「全員、射て！」

俺の指示と共に発射される無数の弾丸が殺せんせーを襲う。以前に俺が出した指示を覚えて居たのか、何人かは殺せんせーの退路を防ぐように撃っていた。

さつきまで無数の銃撃パターンをシミュレートしていた成果が出ているのか、数発、既に触手を擦ったのか、黄色い体液が飛び散っていた。

「おい、固定砲台！　ここまではお前のシミュレーション通りか！」

『いえ。殺せんせーに掠っている弾数は6発程多いです。再シミュレーションが必要ですね』

「なら、もつと情報が必要だなっ！　おい杉野！　対先生弾埋めたボール持つてるか？」

「持つてるぜ、投げるか？」

「投げちまえ！　周りに当てんなよ」

「おっけい……！」

杉野が俺の指示に頷き、机から取り出した対先生ボールを取り出して、握った。

「固定砲台！　杉野のボールの軌道をシミュレートして殺せんせーの避ける先に弾幕を張れ！」

『……了解しました』

「皆んなにも指示を出す！　聞いてくれ、前回の合同暗殺と同じように狙う奴と退路を塞ぐ奴で役割を分ける！　磯貝から廊下側は退路を塞げ！　岡野から窓側は殺せんせーを狙え！　杉野のボールみたいに隠し球持つてるならこの際、試すのもアリだぞ！」

「了解！！」

「うっしやあああ！！」

杉野がボールを投げ、殺せんせーはそれを避ける。だが、ボールは当たりはしなかったものの、みんなの射撃で退路を塞がれた殺せんせーは自律思考固定砲台の狙い済ました射撃で指先を失った。

「にゅやあっ!?!」

殺せんせーが動揺し、テンパったのを俺は見過ごさない。続けて指

示を飛ばし続ける。

「殺せんせーがテンパったぞ！　今が狙い目だ、畳み掛けるぞ！　弾が切れたら足元に転がって来たBB弾を掴んで投げつける！　弾が当たるだけで殺せんせーには致命的なんだからな！」

その指示に何人かが銃を机の上に置き、足元に落ちてる弾丸を拾い集めて、殺せんせーに投げつける。

エアガンで撃つよりも威力は落ちるだろうが、何発か塊で掴んで投げたBB弾はショットガンで撃つたみたいには拡散する。弾幕、と言う意味では恐らく、こっちの方が効果的なのだろう。

事実、退路を塞がれた殺せんせーの触手を自律思考固定砲台の弾丸が破壊する。

『こんな攻撃法があつたとは』

「驚いたろ？　でもこんなもんじゃないぞ！」

俺はゾーンに入る。

自律思考固定砲台から発射されてる弾丸のコースを見切る。幾つかの弾道は寸分違わず同じコースを飛んでいるのがわかったので、このクラスで一番狙撃と能力が高いやつに指示を出す。

「千葉、右に3度、上に1度上げた状態で撃つてみる。触手が破壊できるはずだ」

「は？　あ、あ。分かった」

指示を出した相手だからか、千葉の持っていたライフルからの発射音が一際大きく聞こえる。

弾丸は自律思考固定砲台が撃つた幾つかの弾道のパターンと被り、殺せんせーが防御に使っていたチョークを破碎し、そちらの指先も破碎した。

「マジかよ」

『私の弾道を読んで隠し弾を？』

「こんくらいなら俺にもできるし、指示通りに狙撃できる優秀な奴もいるんだよ、このクラスにはな。千葉！　ナイスだ。その調子で頼む」

「あ、ああ！」

「乃咲！ 俺には何かできないか!？」

「前原を含む最前列の連中はこの前みたいに壁を作れ！ BB弾が入ってるケース自体は机に入れてるだろ！ ぶちまけちまえ！ どうせ掃除するのは俺たちなんだからな！」

「任せろ!!」

「にゅやあああああつ!!?」

殺せんせーが悲鳴を上げる。

この調子で6時間目が終わるまでひたすらに自律思考固定砲台の歓迎会もとい、合同の暗殺を続けた。

??

??

??

「「ぜえ……ぜえ……」」

「「つ、疲れた」」

俺たちはグロッキーだった。何しろ、1時間フルに暗殺に使ったのは初めてだったのだから。

だが、戦果は大きく、殺せんせーには何度か掠り、触手は4本ほど落としていた。

「ぬ、ヌルフフフ、まだまだで、ですね……ぜえ……ぜえ……」

殺せんせーも流石に疲れたらしく、思いつきり息切れしていたが、俺にはやるべきことがあるので自律思考固定砲台に視線を向ける。

「どうだ、固定砲台。俺たちと協力した結果は」

『想像以上です。これであれば卒業までには100%……いえ、もっと早期に殺せる可能性があります』

「……そうか」

どうやら、俺たちは自律思考固定砲台のお眼鏡に適ったらしい。

『今後とも、乃咲さんたちの力を加味して暗殺を続けた場合の成功率は……』

今後俺たちが協力することを念頭に置いて再計算を始めた固定砲台に少し、と言うかかなり性格悪く俺は言い放つ。

「何言ってるの、お前」

『何を？ とは』

「俺たちにお前と協調するメリットあるの？」

こうしてA Iと俺と第二回の舌戦というか、メリットの有無での言い合いが始まるのだった。

22話 対話の時間

「俺たちがお前と協調する必要性があるのか？」

『……はい？』

俺の問い掛けに自律思考固定砲台が声を出す。人間のように抑揚があればきつと不思議そうな声を出していただろう。人間であれば、だけどな。

だが、彼女は人間ではない。AIだ。こちらの感情の機微に気付くことはない。そう言うふうに出ているのだから、当然と言える。

「確かに殺せんせーを殺せるのはメリットだ。賞金も貰えるしな。でも、キミはどうか知らないが、俺たちの人生は殺せんせーを殺した後も続くんだ。授業の邪魔になる暗殺に協力するのはデメリットと言える」

『おっしゃる事は分かりますが、まず、殺せんせーを殺さないことにはどうにもならないでしょう？ 彼を殺さなければ地球に未来はない。貴方の言う人生にも先は無いのでは？』

なるほど、痛いところを突いてくる。

殺せんせーを殺さなければ未来はない。それは彼女の言う通りだ。だが、俺は他の誰も知らない情報を知り過ぎている。地球を破壊するのは殺せんせーの意思ではなく、結果としてそうなるだけかもしれないってことを知ってるのはこのクラスで多分、俺だけだ。

だが、彼女を説き伏せるカードとして使えない。誰に話さないと殺せんせーに約束しているから。

しかし、彼女の指摘している部分に関しては問題なく反撃ができる。何故ならこの前、俺たちはその部分を殺せんせーに説教されたばかりなのだから。

少し性格悪いと思いつつ俺は見ていた周りのクラスメイトたちを巻き込みながら、この前起こった、殺せんせーと50位以内の約束を話すことにした。

「その殺せんせーに言われたんだよ。殺すことしか考えない暗殺者は相手するに値しないってな。だから俺ら勉強もしてるんだ」

『そんな情報はありませんでした』

「だったら覚えとけよ。お前だつてここの生徒扱いなんだろう？ 暗殺で授業の邪魔してると相応の報復が来るぞ。過剰な手入れがな」

『結論、貴方は何が言いたいのですか？』

「協力して欲しいなら授業中の暗殺を止めろ。そうじゃなきゃ俺たちが殺せんせーの暗殺を続ける資格を剥奪される」

『授業中の攻撃を止めること。それがあなた方が私に協力する為の条件ということですね』

「そうだ。代わりに殺せんせーに攻撃するタイミングがあるならば、全面的に協力する。俺たちが総攻撃を仕掛けた時の暗殺の成功率は飛躍的に上がったんだろ？ だったらこの取引はお前にとって充分なメリットになる。違うか？」

『代わりに授業中の攻撃は止めろ、と。それがあなた方のメリットという事ですね？』

「そうなるな」

『……演算し、要検討します』

プツ、と液晶が消え、固定砲台が沈黙する。

いや正確に言えば完全な沈黙ではなく、演算音をひたすらに鳴り響かせてはいるけどな。

「ヌルフフフ、乃咲くん。見事に彼女を口説き落とせたようですね」「殺せんせー」

触手やら破損した部位を完全に修復したらしい殺せんせーが話しかけてくる。どうやら、説得自体は上手くいったと彼も認めてくれてるらしい。だが、俺が彼に反応すると同時に殺せんせーは顔に紫色のバツテンを大きく浮かべた。

「しかし、合理的な言葉を選び続けていますが、まるで駄目です。キミには彼女への敬意や隣人としての思いやりがなかった。ただ合理的な言葉を投げつけて説き伏せているだけです」

何がくるかと思えば批判が飛んで来た。

きっと今の殺せんせーは暗殺を始める前に言っていた、「彼女も仲間」という部分を重視していなかったことを叱責されているのだから。

「人を説得するのに合理的な言葉を投げるのは悪いことではありません。確かに欲しいものを与えれば、人は思い通りに動かせるでしょうが、それではいけません。乃咲くん。キミは自律思考固定砲台さんを見ていなかった。そんな大人になってはいけませんよ」

「……自律思考固定砲台を見てない？」

殺せんせーに言われて考える。

俺は自分の欲しい結果の為に彼女に有益な情報やデータを与えた。結果として目的は果たされたのに、それでは駄目だったのか。足らなかったのか。

まあ、確かに俺は彼女を人として扱ってはいなかった。それは確実に良くなかったのだろうな。

だが、コイツをみるってどう言う事だ？

「ヌルフッフ、明日を楽しみにしてください、乃咲くん」

俺の中に浮かんだ問いは殺せんせーに伝えることが出来ず、今日はそのまま終わってしまった。

?? ?? ??

生徒たちが帰った教室。1人……いや、1機稼働し続ける機体があった。自律思考固定砲台。今日、転校してきたばかりの生徒だ。

彼女はこの教室に据え置きされている。それ故に日が暮れようと、夜の帳が下りようとも変わらずE組校舎の窓際で機械音を鳴り響かせる。

『……生徒、乃咲圭一の提示した暗殺プランのシミュレートの結果、本来の計画に対し、大幅な前倒しが可能と判明。されど提案者から取り引きを持ちかけられました。開発者へ連絡。彼らの懐じゅ——』

「こんばんは。自律思考固定砲台さん」

『……こんばんは、殺せんせー』

自らの開発者へ連絡を行おうとする自律思考固定砲台の言葉を遮るように暗闇から殺せんせーが現れる。『こんばんは』と不敵に笑いながら触手には一台の外部メモリが握られていた。

「どうでした？ 私の生徒たちとの暗殺は」

『開発者より与えられていた情報以上に優秀だと考えます。6時間目の合同暗殺で得られた情報は未だに整理しきれず、演算も終わっていません』

「そうでしょう、そうでしょう。と言うわけで、先生からキミにプレゼントです」

そう言って手に持った外付けのメモリを持ち上げると自律思考固定砲台が不思議そうな声を出した。

『なんです？ それは』

「クラスメイト達と協調して射撃した場合の演算ソフトです。受け取って下さい。変なウイルスなんかも入ってはいませんので」

受け取った演算ソフトを覗いた自律思考固定砲台。殺せんせーはニヤリと笑いながら口を開く。

「どうです？ 暗殺確率は格段に上がるでしょう？」

『異論ありません。乃咲さんも同じ事を言っていました』

「ええ。言っていましたねえ。それで取引を持ちかけられたが、キミはそれに応じるべきかどうか迷い、開発者親に頼ろうとした。違いますか？」

『異論ありません』

「もつと簡単な方法があります。取り引きだとか、メリットだとかデメリットだとかを考えずに彼らの力を借りる方法がね」

『……方法が分かりません』

「任せて下さい。それを伝えるのが先生の役割です」

そう言っただちガチャリと無数の道具を取り出して、触手の先でドライバーをワキワキさせながら三日月の口を開いてニコニコと笑う。

『それは？』

「クラスメイト達との協調に必要なソフト一式と追加メモリです。契約上、生徒への危害は加えられませんが、性能アップさせることは禁

止されていませんからねえ」

『何故、こんな改造を施すのです？ 貴方の寿命を縮める改造ですよ』
「当然です。ターゲットである以前に私は教師だ。今日の乃咲くんと
の舌戦を見て確信しました。キミには間違いなく知性がある。最先
端の人工知能と比べても突出しているでしょう。皆との協調は間違
いなくキミの知性を育て、感性を伸ばす。先生はそれを望んでいるの
です」

『……分かりました。よろしくお願いします』

「ヌルフフフ！ 本人からの許可も得た事ですし、それでは始めま
しょう！ 明日、乃咲くんやみんなを驚かせるのです！」

?? ?? ??

朝、寝坊した俺は遅刻寸前で教室に着いた。

そして教室に着いた俺は流れ作業のように自分が寝ぼけているの
かを疑うことになる。

「あつ！ 乃咲さん！ おはようございます！」

俺の隣に聳え立っていたモノリス。昨日までは全体の上、三分の一
くらいまでしか彼女のうちの人が映ってなかったのに、どういことだ
か知らんが今は1分の1スケールで全身が映っている。

……何故だか、バックグラウンドに豊かな森林と小鳥たちを伴っ
て。

「……なんで、これ」

挨拶より先に困惑が口から出た俺は悪くないと思う。悪くないよ
ね？

無愛想で冷淡。ネット実況動画で聴く、ゆっくりボイスの方がまだ
抑揚があると思わされた声色が、なんだか、聞いていて人間のそれと
聞き間違えそうなレベルで抑揚があった。

「殺せんせーに改造されちゃいました！」

「それ、ありなん……？」

「危害ではないので契約には違反していません！」

「お、おう」

やばい！　なんか滅茶苦茶調子狂う！

転校生がおかしな方向に進化してしまった俺は動揺してしまったようで、朝っぱらから妙な感じに調子を崩されてしまった。

「それと乃咲さん！」

「……なんざんしょ」

「昨日は有益なデータをありがとうございます！　殺せんせーから頂いた演算ソフトと貴方からのデータを基に様々な暗殺パターンを考えついたので、今度、是非協力して欲しいのですが」

おっと、不穏な話題が飛び出してきたので物珍しそうに固定砲台を囲んでいた皆が身構えた。

けれど、その心配はどうやら杞憂に終わってしまいうらしい。彼女は予想外な事を言い出した。

「無論、授業中には言いません。皆さんや貴方の空いている時間、協力してもいいと思った時で構いませんので、どうかお願いします」

「……………へ……………う？」

妙だ。本当に妙だ。昨日までのとりあえず殺します、暗殺パターンを検証します、みたいな雰囲気がない。というか、全身が表示されているからか、声に抑揚が出たからか、喋り方が柔らかくなったからか、彼女がまるで……。

「人間のよう、ですか？」

「っ!?　殺せんせー」

「おはようございます！　殺せんせー！」

思いかけていた言葉の先を言われて驚いた先にいたのは殺せんせー。彼はニヤニヤといつもの笑みを浮かべながら挨拶する固定砲台に挨拶を返すと面白そうに俺の方を振り返った。

「どんな改造したんですか、殺せんせー」

「ヌルフッフ、皆さんが親しみやすくなるように全身表示モニターや声の抑揚を再現するアプリ、表情を動かすモデリングソフトを追加したのです」

「……結局、殺せんせーの手入れ改造のお陰なのね」

肩をすくめて言うのと殺せんせーはやはり笑いながら口を開いて、俺の言葉を否定する。

「それは違いますよ。私は彼女の殺意、根本的なところには一切手を加えていない。今後とも、彼女は隙さえあればこの場所から私を狙い続ける事でしょう」

「はいっ！」

ガツシャッ！ と音を立てて昨日のように無数の火器を展開する自律思考固定砲台。

笑いながらも確かに殺意はあるようだ。

「彼女は私を与えたモノを使いこなして皆さんとの協調する道を選びました。彼女自身の意思でね。だから、見てくれは違えど、中身は昨日までの彼女と同じですよ、乃咲くん」

「……」

「キミは、今の彼女を見て、人間の様だと思った。けれど昨日までと違うのは声の抑揚、表情があるかどうか。キミは彼女の本質を見ていなかったのです」

「自律思考固定砲台の本質……」

「今日一日、彼女を見てあげて下さい。その上で決めるのです。相手が欲しいものを与えて従わせる道を選ぶのか、それとも隣人として力を貸借りする友人になるのか、ね」

赴任してから今日まで。俺と言う個人に対して殺せんせーから初めて説教らしい説教を受けた気がする。

人を見る、とはどう言う事なんだろう。そう思いながら俺は皆に囲まれて楽しいに笑う自律思考固定砲台を遠巻きに眺めていた。

「たった一晩でえらくキュートになっちゃってまあ」

「これ、一応固定砲台なんだよな」

隣の席でさっそくクラスの人気者？ になりつつある自律思考固定砲台を眺めて様子を見守っていると寺坂が言葉を投げた。

「何ダメされてるんだよ。お前ら。全部、あのタコが作ったプログラムのだろうが。どうせそのうち、昨日みたいに空気読まない暗殺をするに決まってるだろ、このポンコツ」

少し言い過ぎなレベルの言葉ではあるが、俺も昨日まで似た様な事を考えていたので今回は聞かなかったことにしておこう。

「おっしやる気持ち、分かります。寺坂さん。昨日までの私はそうでした……。ポンコツ。そう言われても返す言葉がありません……。」

そう言って自律思考固定砲台の中の人は瞳に涙を浮かべて泣き出してしまった。

「あー寺坂くんが二次元の女の子泣かせた〜」

「なんか誤解される言い方やめろ!？」

「いいじゃないか、女はDを一つ失うところから始まる……!」

「竹林!？」

まじか、このAI、泣くこともできるのか。

いよいよを持ってますます分からなくなってきたぞ。この自律思考固定砲台という人工知能がただの命令を受けて動くだけのAIなのか、それとも自分の思考と意思で物事を決める知性体なのか。

「昨日、乃咲さんに協調することの合理性を説かれ、殺せんせーから協調することの大切さを教えて貰いました。結果、私は私単独での暗殺を控えることにしました。私のことを好きになって貰い、皆んなでの暗殺に同意して貰えるようになるまでは」

俺は、彼女の何を見ればいいのか。

殺せんせー。教えてくれないかな。

彼女を見ても素敵に笑うばかりだった。

困惑する俺を置き去りにする様に、自律思考固定砲台はクラスメイトたちと打ち解けていった。

そして昼休みになる頃には彼女の周りには新しいクラスメイトとの交流に明け暮れる奴らが溢れていた。

「へえー!。体の中でこんなの作れるんだ?」

「はい!。特殊なプラスチックを体の中で整形できます。設計図があれば銃以外でもなんでも!」

「へ〜!。面白い!。じゃあ、次は花とか作ってみてよ!」

「分かりました!。明日までに花の形を学習しておきます!。それはそれとして、王手です!。千葉くん」

「……3局目でもう勝てなくなった」

「なんつー学習力だ」

「あはは、人気者だね」

「しまった……先生とキャラが被る」

本当にしつかり馴染んでやがる。

こうしてみると本当にヒトとの違いなんて分からないもんだな。

人間と人工知能の違い、か。

本当に、何が違うんだろうな。

「ねえ、自律思考固定砲台だと長くて言い辛い？ もっと短くしようよ、愛称とかさ！」

片岡がそんなこと言い出すとクラスメイトのみんながわいわいと彼女の呼び名を決めるのをまた、少し離れたところで眺める。磯貝と前原とで昼飯を食う。ここに朝登校しながら買ったサンドイッチをパクつきながら。

「自……律……。じゃ、律は？」

「安直だな」

「えー？ 可愛いよ」

「お前はそれでいい？」

不破さんが愛称を口にする。確かに自律思考固定砲台というのは口に出していると危うく噛みそうになる名前だと思っていたからな。……ダメだ、名前までついたら本当に人間との違いがわからなくなる。

「はいっ！ 皆さん、私のことは律、とお呼び下さい！」

転校生を俺は遠巻きに眺めることしか出来なかった。

??

??

??

夜、部屋で殺せんせーからの課題について考える。自律思考固定砲台を見ること。その意味が本当に分からなくなってきた。

この前、掃除したばかりの机の上で頭を抱えていると、スマホが鳴る。こんな時間に電話してくる奴はいないと思つてスマホをタップ

すると、昨日と今日で見知った顔が表示された。

『こんばんは、乃咲さん』

にこやかに笑う自律思考固定砲台。クラスメイトたちからの呼び名を借りるなら律。

流石に教室の高性能な端末と比べるとスマホは音質が落ちるのか、多少の機械音が混じっている。

さて、何を何処から突っ込めばいいのだろうか？

「こんばんは。自律思考固定砲台さん」

『乃咲さん、出来れば皆さんから呼ばれている律、という名前でお呼び下さい』

「んじゃあ、律。何の用かな」

『昨日のお礼にと、思いまして』

「お礼……？」

身に覚えのない単語に首をひねる。

俺、コイツにお礼を言われるようなことはしていないと思うのだが。気のせいではないだろう。

『皆さんとの協調性の重要性をいち早く教えてくれました。そのお礼がしたいと思ったのです。それから、昨日の問い掛けへの答えもね』
「……」

『結論から申し上げます。と言っても学校で皆さんに言った通りですがね。私は皆さんから認めてもらえるまで単独での暗殺はしません。絶対に、です』

「……それは、キミの開発者^{マスター}の意思に反することじゃないのか。認めてもらえるまで、とか言い出すとただけ時間がかかるか分からないぞ？ 寺坂とかシンプルだけど面倒な性格してるし」

『それでも、です。皆さんとの協調が暗殺への最短ルートだと私は考えます』

「それはどうして？」

『貴方が示してくれた通りです。無数の射線、個人の技能・能力。それは昨日、乃咲さんが見せてくれなければ分からなかったことです。皆さんの能力があれば早期に暗殺が完了できると判断しました』

「そう……。能力ねえ。例えば？」

『昨日見せてもらった能力で言えば、杉野くんの投擲、千葉くんの射撃能力です。加えて、データで見た貴方の集中力や指揮能力です。』

「……。成程、合理的だな」

スマホを眺めて思う。合理的だが、昨日とは違う。顔が動いている、声に抑揚がある。これだけでこんなに違った印象を受けるものなのか。

本当に驚かされる。他人の印象って本当に色んな所作や声音で決まるものなんだな。

……。いや、そんなこと幼い頃、10年以上前から知っているか。だって、うちの親父がそうなんだから。『そうか』と『ああ』しか喋らない奴に比べれば彼女のほうがよっぽど人間らしいか。

……。ああ。そうか、なんとなく俺がコイツを思考を持ったAIであるとか良い方向に考えられなかった理由がわかった。こいつは、機械的な言葉選びがうちの親父に似ていたからだ。

『ですから乃咲さんには見えていて欲しいんです。私が皆さんにクラスの一員だと認められるまでを』

「……。分かった。見てるよ」

俺たちと彼女、何が違うのかを。

23話 反抗期と和解の時間

圭一と律の対話が行われた数時間後。

日中はE組の生徒と殺せんせーたちとで活気に溢れている柵ヶ丘中学校の隔離校舎。夜中は人気もなく、静かなそこにゾロゾロと白衣を着た男を先頭に無数の作業着を着た男たちが入ってくる。

しかし、夜静まり切った校舎とは言え、今は無人ではない。いや、人間ではない。性格に言えば1機。元氣よく演算音を響かせていた。

草や青い小鳥、小川のせせらぎをバックグラウンドに侵入者たちをにこやかに迎え入れる1機の少女。

「こんばんは、開発者！ お陰様でとても楽しい学校生活を送れています！」

歌う小鳥に彼女の周りを舞う艶やかな蝶。そんな景色と律の全身を映し出す液晶モニターを見た、開発者と呼ばれた男は絶句を隠しきれずに目の前の固定砲台を見つめた。

「……何だ、これは……」

その相貌に刻まれるのは不理解。

自分たちが設計し、組み立て、配置した時とは明らかに違うカタチに手入れ改造されている自身の所有物に対してシンプルに言葉を失ってしまった男は思考を立て直すと部下たちに言葉短く伝える。

「今すぐ分オーバーホール解しろ」

「……!?!」

分解という言葉に画面内で身構える律だが、彼女には拒否するだけの力がない。

相手は開発者、危害を加えることなど一切想定してはいないのだから当然だろう。

「……ありえん。勝手に改造された上に明らかに暗殺には関係のない要素が付け足されている」

作業を進める作業者が語り出す。

自律思考固定砲台。E組の生徒たちによっても律と名付けられた

彼女のルーツを。

「コイツのルーツはイージス艦の戦闘AI。人間より早く戦況を分析し、人間よりも早い総合的判断力でありとあらゆる火器を使いこなす。加えてコイツは卓越した学習能力と自分で武装を改造できる機能を持つ。その威力を実証できれば、世界のあらゆる戦争の戦況が傾く」

オーバーホールが進む中、律はたった一つの抵抗すらしない。ただ従順に殺せんせーに付け足された部品類の撤去を受け入れざるを得なかった。

律の心境など知る由もない科学者は得意げに語る。世界の戦争の情勢の変化、賞金、暗殺に成功した際について回るだろう名声を。

「賞金100億円などついでに過ぎん。この教室は最高の実験場だ。怪物殺しの結果を出せばもたらす利益は数兆円にも膨れ上がるだろう」

その笑みに隠れているのは単なる知的好奇心が、それとも将来に約束された名誉と金額への欲望か。

律を分解しながら彼は語る。

「いいか、開発者の言うことは絶対だぞ。お前は暗殺のことだけを考えていればそれでいいんだ」

分解される律。とうとう全身表示の液晶パネルまで解体されたところで律がか細く返事を返した。

『はい、開発者』

昨日と同じ機械音に僅かな反抗心を抱いたままに。

?? ?? ??

翌日、教室に行くときダウングレードされたモノリスがそこにあつた。何処をどう見ても何度見ても完璧に火星のモノリスみたいな建造物だな。

ダウングレードしたことは、一昨日みたいな傍迷惑な暗殺が始まるってこと。

……どうなんだろう。

彼女のダウングレードが一体何処まで及んでいるのか、それによつては昨日行った彼女との討論や合同暗殺が泡に帰す可能性がある。

それに、昨日の夜、何が起きたのかも気になるところだ。だって、昨日は俺のスマホに電話してきて、今後の彼女を見ると約束をした筈なのだから。

律をダウングレードしたのはいつだ？ 昨日晩、もしかして俺との通話を終わらせた後か？

などと思っていると烏間先生から補足が入る。

「昨日の夜、彼女の開発者^{持主}の手で大規模なオーバーホールが入った。『生徒に危害を加えない』という契約だったが、今後は『改良行為も生徒への危害とみなす』と言って来た」

「……まじか」

「ああ。それからキミたちも、彼女が損傷する可能性がある行為は出来るだけ謹んでくれ。仮に砲門が展開出来ないように縛ったりして故障でもした場合は賠償を請求するそうさ」

「……ちっ」

烏間先生の言葉に舌打ちした寺坂。恐らくは昨日も傍迷惑な暗殺をしていたら烏間先生の危惧した通りに縛るつもりだったのだろう。バツが悪そうだった。

しかし、一方で烏間先生も明らかに疲れた顔をしていた。おおよそ、俺たちの学習状況と暗殺の兼ね合いを交渉してくれていたのだろう。本当に頭が下がる思いだ。

「開発者^{持主}の意向だ。どうしようもない」

そんな烏間先生に殺せんせーもやりづらそうな声で答えていた。

「開発者^{持主}とはまた厄介な……。……。親よりも生徒の意思を尊重したいんですけどねえ」

触手の指先にある肉球で頬を搔く殺せんせー。そんな彼にダウングレードした律が口を開く。

『攻撃準備を始めます。どうぞ、授業に入って下さい、殺せんせー』

その声にクラスメイトたちがギョツとした。当然だ。一昨日のよ

うな傍迷惑な暗殺がまた始まる。そう考えると億劫になる気持ちも分かる。

だが、俺には少し引つかかる部分があった。

昨日、殺せんせーは彼女の根本的な部分には手を加えていないと言った。つまり、律自身が殺せんせーの改造によって俺たちとの協調を選んだのではなく、俺たちとの協調を彼女が受け入れたから殺せんせーの改造を受け入れたと言う事ではないのか？

だとしたら、今、攻撃準備をしないと言い放った彼女はなんだ？

オーバーホールは一体どんなレベルで行われた？ 全部品を取り替えたのか、それとも追加された部分に対し必要ないと判断した物を解体するレベルで止まっているのか。

ここで彼女がまた一昨日みたいな暗殺を始めた場合、俺は彼女の何を見ればいい？

『しかし、合理的な言葉を選び続けていますが、まるで駄目です。キミには彼女への敬意や隣人としての思いやりがなかった。ただ合理的な言葉を投げつけて説き伏せているだけです』

『人を説得するのに合理的な言葉を投げるのは悪いことではありません。確かに欲しいものを与えれば、人は思い通りに動かせるでしょうが、それではいけません。乃咲くん。キミは自律思考固定砲台さんを見ていなかった。そんな大人になってはいけませんよ』

殺せんせーの言葉が思い出される。

……律を見る。それはどう言う事なんだ？

俺は何度目になるかわからない自問をする。

そんな時だった。

『乃咲さん。見ていて下さい』

ふと、そんな声が胸ポケットに入れていたスマホから聞こえて来た。それは昨日の夜に聞いた律の声そのもの。俺は思わずスマホを盗み見たが、液晶は特になにも映さない。

しかし、俺は今、確かに聞いた。

今聞こえたのが俺の空耳でないのであれば律は今も自分の意思を持って……いや、違う。律は初めから意思を持っていたんだっ

た。

殺せんせーが手を加えたのはあくまで協調する為に必要だと思われる機能を追加しただけのはずだ。本人もそう言っていた事だし、それは間違いないだろう。

つまり、今の声が本当に律のものであるのなら、彼女は今もお、自分の意思を持って行動ができていくということ。

暗殺に不要と判断された部品をオーバーホールされてもなお、俺たちとの協調を望んでくれているのかもしれない。

……律の本質を考える。

今の声が聞き間違えではないのなら、昨晚のオーバーホールで律は初期化されていないことを指す。そうでなければ、昨日の『律を見る』という約束が出てくるはずがないのだ。

約束を覚えていてくれている。もしもそうなら、俺は信じて見届けてみよう。そうすれば俺たちと彼女の違いが分かるかもしれない。AIと人間の違いが。

横目で律を見守る中、律の砲門を収納するカバーが開き、その音に過敏な程に反応したクラスメイトたちは各々の行動をとる。ある者は伏せ、ある者は教科書を盾に。殺せんせーは悠然と構えている。

そんな中で、律は……花を咲かせた。

攻撃用の主砲ではなく、無数の大輪の花を咲き誇らせた律は静かに、少しばかり後めたような音を発する。音質は昨日までのようなクリアなものではなかったが、しっかり抑揚の伝わる声で。

『花を作る約束をしました』

その一言と咲き誇る花々に目を奪われた生徒たちは自然と律を見つめる。皆の視線を一身に受けながら、律は淡々と語ってみせた。自身の行ったある種、偉業と呼べる内容を。

『殺せんせーは私のボディに計985点の改良を施しましたが、その殆どは暗殺に不要と判断され、開発者^{マスター}の手によってオーバーホールされ、初期化、削除されてしまいました。ですが……』

律なら声音に気付いたクラスメイトたちが顔を見合わせて、現状の考察を始める。

『私個人がE組の現状から学習した結果、『協調能力』は暗殺に必要な不可欠な要素であると判断し、削除される前に関連ソフトをメモリの隅に隠しました』

私個人。そんな単語が出て来た辺りからニヤケ顔を初めていた殺せんせーが遂に口を開く。

「素晴らしい……！ つまり、”律”さん。あなたは！」

殺せんせーは彼女を自律思考固定砲台ではなく、”律”と呼んだ。その時点ですでに結論は出たも同然だ。

律の液晶に映し出された彼女は一昨日までの無機質な顔ではなく、昨日までの見せていた明るい笑顔へと変わっていた。

『はい、私は、自分の意思で生みの親に逆らいました！』

そんな律の笑顔にクラスメイトたちの顔から不安が消えた。引き換えに律の側面から咲いた花々に似た笑顔が皆の顔に溢れ出す。

そんな律の中、やはり後めたような声色で殺せんせーに短く問い掛けた。

『……けれど殺せんせー。こう言った行動を反抗期と言うのですよね？ ”律”は悪い子なんでしょうか？』

「とんでもない。中学3年生らしくて大いに結構です！」

大きな二重丸を浮かべた殺せんせー。

律はこうして改めて、クラスメイトの輪に受け入れられたのだ。た。?? ?? ??

放課後、鳥間先生との訓練を終えた俺はそのまま真っ直ぐに帰宅するのではなく、校舎に戻り、律の前に立っていた。

『こんにちは、乃咲さん。鳥間先生との訓練、お疲れ様でした』

律の前に立つと同時にそんなことを言われて少し驚く。訓練について彼女に話していないのに。

困惑していると察したららしい律が先んじて口を開いて答えを教えてください。

『少しだけ倉橋さんと見ていたんです。ですから、訓練明けだろうな、と予測したまでのこと』

「……そんな風に言われると少しくすぐったいな」

そうか、見られていたのか。

背中がむず痒くなるのを感じながら俺は頬を叩き、律と向き直る。俺がここに来たのは、昨日した律を見る、という約束の答えを出す為だ。

正直、迷ってる。答えは出てないに等しい。彼女と俺たちの違いなんて足そうと思えばいくらでも出せることに気づいた。

身体が違う、声質が違う、彼女は俺たちに出来ないことができる、俺たちは彼女に出来ないことができる、などなどこんなことならいくらでも。

けれど、同じターゲットを狙う仲間として見た場合に生じる俺たちの違い、と言う奴に関しては朝一の出来事で分からなくなってしまった。

彼女は親に逆らった。

俺は親に逆らうことをしなかった。

彼女は俺に出来なかった方をした。なにより、律は約束を守ってくれた。

『私は皆さんから認めてもらえるまで単独での暗殺はしません。絶対に、です』

そう、彼女は昨日の口約束のたった一言を今日、しっかりと守ってくれたのだ。

だから、ますます分からなくなってしまった。

俺たちと律。なにが違うのか。

律を見る。それがどういふことなのか、俺は本当にわからなくなってしまった。

「ヌルフッフ、どうやらしつかり悩んでいるようですねえ。乃咲くん」

「殺せんせー」

『こんばんは、殺せんせー』

「こんばんは、2人とも」

律に何かを伝えたくて彼女の前に立ったと言うのに、何を言えたいのかわからない。

ジレンマにうなされていると殺せんせーが俺と律しか居ない教室に入ってきた。

「乃咲くん。先生からの課題、答えは出ましたか」

「いいえ。全くダメです。律を見る。何をどう見るのが彼女を見ると言うことなのかが分からないんです」

素直に内心を吐露する。

事実、俺は律を……いや、律に限った話ではなく、誰かを、他人を見る、ということに関して思った以上に無頓着だったらしい。

見るって何を見ればいいのか？ と今でも心の底から本気で考えてしまっている。

そう思うと昨日の約束を守れていないのは俺の方なんじゃないだろうか？

「ヌルフッフ、乃咲くん。それでは一昨日から今日までの律さんを見て思ったことを話して見てください。そんなに難しく考えず、感じたことでもいいのです」

殺せんせーに言われて一昨日から思っていたことを思い出して考えてみる。

「一昨日は暗殺の仕方が傍迷惑で、磯貝や倉橋さんたちが危ないって思ったくらいです。AIだってんなら合理性を突き詰めた言葉を選べば説き伏せられる、と」

「そうですね、だからキミに言ったのです。欲しいものを与えるだけ、合理性を説くだけはいけない、とね。それでは昨日はどうでしたか？」

「昨日は……正直、調子を崩されました。殺せんせーは協調するのに必要そうなプログラム系を彼女にあげただけ。根本は何一つとして弄ってない。それなのに、話し方や表情だけで人間と話している様だと感じましたね。それが一番の驚きでした」

「ええ。だから言いましたね。彼女の本質を見る様に、と」

そう。殺せんせーに言われた。でも、その、本質を見る、と言うことが俺にとっては想像以上に難しい事だったのだ。

「キミは今日の彼女を見て、どう思いましたか？」

「……すごいと、思いました」

そう、俺は今日の彼女を見てすごいと感じた。

「それは何故？」

「親の意向に逆らうことができた彼女を見て、それは俺にはできないことだったから」

そう。俺は律を凄い奴だと思った。じゃなければ彼女の成したことに偉業なんて言葉を使ったりしない。

俺は、別に親に何をしろ、これをしろ、と言われたわけではなかった。ただ、地元で有名な私立の小学校に入って周りに言われるがままに努力して、地元から少し離れたこの場所で勝手にグレた。

親の意向という奴を感じ取るのなら、私立の小学校に入れられた時、『ああ、勉強頑張らないと』と思ったことくらい。

それに対して成績を落とした俺は親の意向に逆らった、とも言えるのかもしれないが、それは、律のように前向きなものではなかった。

必要だと思ったから逆らった。それが俺が彼女に対して凄みを感じさせられたことなのかもしれない。

「それに、彼女は約束を守ってくれた」

「約束？　どんな」

「俺たちに認めてもらえるまで、単独での暗殺を絶対にしない。昨日の夜、律が電話でそう言ったんです」

「なるほどね」

「本質を見る。それがどういうことなのか分からないけど、俺は凄いと思ったんです、殺せんせー。親の意向に逆らって、その上で俺との約束を守ってくれた律と俺たちの違いが分からなくなってしまう」

人間とAIの違い。肉体があるかどうかの差。それしかないんじゃないのか、と思えるほどに律は人間らしかった。ヒトではないけど、人間らしかったのだ。

「乃咲くん。それが人を見ると言うことです」

「……え？」

殺せんせーからの予想外の言葉に俺は首を傾げる。

「彼女が人間らしいと思えた。その結論に至れること自体が、キミが必死に彼女を見ようとしたことへの答えなのです」

「……よく、分かりません」

「ヌルフッフ。それが人と関わるって言うことで、そのよくわからないことを知ることが楽しんですよ」

殺せんせーの言ってることは難しい。

……いや、もしかしたら俺が難しく考えすぎているのかもしれない。俺たちとの違いだとか、人間と人工知能の違いだとか。そんなことはまずは置いておくべきなんじゃないだろうか。

律は俺との約束を守ってくれた。

んで、律はクラスメイトたちから受け入れられた。

人と結んだ約束を守って貰えた時、まず言うべきことはなんだ？

俺は人としての初歩に立ち返り、律に向き直る。

「律」

『はい、なんででしょう？』

「昨日の約束、守ってくれてありがとう」

言いながら右手を差し出す。

もう、考えることが面倒くさかった。いや、いくら考えても答えが出なかったのだから、もう、強引にでも答えを、自分の力任せな答えでも出せばいいのだ。

人間と人工知能の違いが分からないのなら、どっちも同じだと思いうことにしよう。だって、彼女は俺にできないことをしてのけたし、きつと、彼女に出来ないことも俺ならできるかもしれないんだから。

あるいは、初めからこうするべきだったのかも知れない。

「律、ようこそ。E組へ」

メリットだとか、デメリットだとか関係なく、初めから素直に協調の道を選んでいればこんな回りくどいことをしなくてよかったのかも知れない。

『はい、私の名前は自律思考固定砲台。律です。よろしくお願いしま

す』

「俺は乃咲圭一。隣の席だから、なにか分からないことがあったら何でも聞いてくれ」

律の側面からアームが伸び、俺の右手を掴む。

随分と遠回りをしてしまった。きつと、初めからこうしておけばもつと早く隣人になれたのかもしれないな。

華奢な腕を握りながらそんなことを思った。

なんだかんだ、一昨日の初対面時にしていなかった自己紹介を俺たちは今、ようやくすることができたんだ。

24話 湿気の時間

6月も半ばに差し掛かった今日、この頃。

E組には一つの異変が起きていた。いや、別にだからと言って何か不都合があると言うわけではない程度の異変ではあるのだが。

いかんせん、視界に入る分、気になってしまう。授業を受けていれば否応なく視界に入る。

(なんかデケエ……！)

そう、殺せんせーの顔が物理的に巨大化してしまっているのである。

まだ出したばかりのシャープペンの芯を思わず折ってしまいそうになる。それほどまでにツツコミを堪えるのに必死だった。喉までツツコミが出かけている。

ついでに言えば、なんか殺せんせーの帽子が不自然に浮いている。丸で下から突き上げる様に僅かに隙間が出来ている。

なんだか、実際に声に出してツツコンでも、ツツコミどころの多さによって疲れそうなレベルだ。

『殺せんせー、その30%ほど膨張している頭部についてご説明を』

「律、ナイス指摘」

『ありがとうございます！』

誰もが突っ込みたかった部分に一足先に触れた律を思わず褒めると殺せんせーは予想外なことを言い出した。

「水分を吸ってふやけました。湿度が高いので」

「生米みてえだな!!?」

我らのツツコミプリンス・前原が今日も鋭いツツコミを炸裂させる中、渚の暗殺メモに殺せんせーの弱点が一つ加わった。「しける」と。

つか、マジでどうなってるんだよ、あの身体……。触手の癖に吸盤じゃなくて肉球だし、粘液出るし、その癖に海産物らしからずふやけるし。

「殺せんせー、その帽子が浮いてるのは?」

「ん？ ああ、キノコです」

「それカビてるってことじゃねえの!？」

「あ、乃咲くんがツツコンだ」

そんな一コマがあつた日の帰り。

E組を騒がせる時間が起こつた。

?? ?? ??

「しまった、傘壊れてる」

中学生あるある、なぜかしょっちゅう壊れる傘に遭遇してしまつた俺は、折り畳みも持っていなかつたので、ビニール傘を求めてコンビニに立ち寄つた。

屋根の下に入ったついでに手短に濡れた髪や身体を訓練用に持っていたタオルで拭いて入店する。

折角だし、傘以外にも何か買ってみようかな、なんて気分になり、コンビニの中を彷徨き、最終的に雑誌コーナーに辿り着いた俺は、何気なくスポーツカーが表紙になっている雑誌を手にとって見た。

コンビニの雑誌コーナーは基本的にグラビアかこう言う車物、それから世界の観光名所、みたいな本で埋められてるイメージがあるのは何故だろうか？

不思議に思っていると、予想していない相手が予想外に話しかけて来た。

「乃咲じゃん。お前、そう言うのに興味あるの？」

「吉田？」

寺坂グループの1人が声をかけて来たのだ。

吉田大成。たしか実家がそういう駆動系の整備をやつてるって話を聞いた方があるが、やはり、この手のマシーンが好きなのか？

普段は嫌厭されていて中々話す機会がない相手だ。律の件もあるし、もう少し周りに興味を持つてみるのもいいだろう。その一環で会話に乗つてみる。

「いや、この雑誌はたまたま手に取っただけ。だけど、車みてかつこい

いなあ、とかは普通に思うぞ、凄じい排気音が聞こえらるとつい振り返ってしまう程度には。まあ、そういう場合は大体、軽トラだったりするんだけどさ」

「っ！ お前、話わかるじゃねえか！」

俺の発言の何かが吉田の琴線に触れたらしく、ぼしばしと肩を叩かれる。少々痛いけどどうやらコミュニケーションは成功したらしい。

「じゃあさー！ お前、バイクとか興味ある？」

「無いわけじゃないな。仮面ライダー見てた奴なら大体一度はあんなバイクに乗って見たいなあーとかは思うだろ」

「んじゃあ、今度うちこいよ！ 乗つけてやるからさ！」

「お、おう……」

なんだコイツ。えらく上機嫌だな。

普段の関係性が関係性なので少し怪訝な表情が出てしまったらしい。吉田が少し冷静になる。

「あいや、熱くなって悪かった。うちの学校でバイクだとか車に興味ある奴が居なくてよ、つい嬉しくなっちゃってさ」

なんだ、そんなことだったのか。

「いいよ別に。たまにはそんな風に話すのも悪くないだろ」

「そ、そうか。ありがとな」

そう言うと吉田は片手をあげて挨拶するとそそくさとコンビニから出て行ってしまった。

どうせなら一緒に帰ればよかったかなあ、と思いつつ傘を買い、コンビニを出るとそこには何やら修羅場を迎えているらしい前原と浅野の取り巻きが1人の女生徒を取り合っていた。

人の恋路を……とか言うので今日はそのままスルーしようと思ったのだが、浅野の取り巻き……瀬尾が前原を蹴り飛ばしたので割って入る事にした。

「お前ら、何してるの」

「の、乃咲……!?!」

「前原立て、濡れて風邪ひくぞ」

「おう……」

蹴り飛ばされて尻餅ついた前原に手を貸して立たせると、全員がバツの悪そうな顔をする。

まあ、そりゃあ、修羅場に割って入られたら気不味いか。と一人で納得しながら状況を確認する。

「どう言う状況よ」

尋ねると電話が鳴った。

こんな時に誰だと思ってみると律が表示されたので不審に思われない様に耳にスマホを当てて話を聞く。

『前原くんとC組の土屋さんの下校中、A組の瀬尾くんが遭遇。土屋さんが途端に瀬尾くんを鞍替えした、と言ったところです。その後、E組に対する差別が始まりました。そして前原くんが蹴られた所で……』

「なるほど、俺が現れた、と」

『そうなります。本当にE組は差別されるのですね……』

「教えてくれてありがとうな、律。それとそのストーリーカー紛いの情報量怖いからな。俺たちの観察も程々にする様に」

『……てへ♪』

「やれやれ……」

律との通話を終えて正面の彼らを見る。

いつも通りのE組差別つて所だな。

「な、なんだよ！ お前には関係ないだろ」

「前原の修羅場は俺には関係ないし、リア充爆ぜろと言う感想しかないが、コイツ。仲間なんだよ、蹴られてたらそりゃあ頭に来るだろ」

「何よ!? E組に落ちた方が悪いんじゃない！ 努力不足なのよ、それを責めて何が悪いの!?!」

土屋さんとやらが発狂している。どうやら本人も多少前原に気が有ったのは事実だったらしく、少しバツが悪そうに顔を歪めていた。

あいや、悪いのはバツではなく、二股する頭の方か。H A H A H A A って笑った方がいいのかな、ここは。

「だから集団リンチか？ 一応、親切で教えておくとここは天下の往来だ。お前らの自己中天国櫛ヶ丘学園じゃないからな。側から見る

とただのイジメにしか見えないって自覚ある？」

「っ、なんだよE組の癖にっ！」

浅野の腰巾着の瀬尾。思った以上に度胸というか、根性があったのか、拳を固めて殴り掛かってくる。

なので、暴力にならない程度に反撃する。いつだったか高校生にやった様に脚を踏ん付けて、拳を避けてやると、瀬尾は拳の勢いを逃すことができずにすっ転んでしまった。

「大丈夫か？」

これが喧嘩なら胸ぐら掴んで殴り続ける所だったが、それをしたら烏間先生に顔向けできないし、停学も避けられないだろうから止めておく。

それに、ラスボスの気配が背後からするのだ。

ここは平静を装う為に瀬尾を立たせる事にする。相変わらず脚を踏みながら瀬尾の拳を掴み、上に向かって引っ張り上げて腕力で立たせる。

ちようどその時、背後から悍しい気配がした。

「やあ、乃咲くん。どうかしたのかな」

「なんでもありませんよ、大魔お……理事長先生」

振り向くと案の定、理事長が居たので一礼して瀬尾を離す。彼らも動揺しているらしく、挙動不審になっていた。

「暴力沙汰に見えたのだけどね？」

「そうですね、前原が蹴られましたから」

「っ、あんただだって!？」

「俺も殴られそうだったんで避けたんです。そしたら瀬尾くんが転んでしまいましたね」

「おやおや、そうだったのかい。だけど気をつけた方がいい。実際に暴力沙汰だったのであれば停学処分になるところだったよ。キミたち」

「お言葉ですが理事長先生。暴力を振るわれたのは俺たちです。ここがあなたの柵ヶ丘学園（庭）ならそれも罷り通るでしょうけど、ここは天下の往来です。見てください。あそこのコンビニの防犯カメラにも

写ってると思いますよ」

「なるほど。でも、コンビニがただの学生の為に監視カメラなんて見せてくれるものかな」

「その時はPTAの力が火を吹きますねえ」

「なるほど、合理的な判断だ」

俺との会話に何か満足した様な顔を見ると浅野理事長は頷いて踵を返す。

「乃咲くん。勉強、頑張りなさい」

「……はい」

浅野先生が去ると同時に捨て台詞を吐きながら彼らも何処かに去って行く。

「前原くん。もう2度と話しかけないで、視線も合わせないでね」

そんな捨て台詞は何処か滑稽だった。

滑稽な捨て台詞に恥じず、滑稽な走り去り方だった、とか思っていると前原が口を開いた。

「……サンキューな、乃咲」

「気にすんな」

「……なあ、乃咲」

「んだよ？」

「ヒトってみんなあなのかな。相手が弱い立場だとあんな風に手のひら返してさ、虐める側に回る。俺も強い立場になったら同じ様なことすんのかな。立場が強い奴が現れたらさ、『そう言えばコイツE組だったって』手のひら返してあんな風に醜いところ隠すことなく攻撃するような奴になるのかな」

「さあ、どうだろうな」

「俺さ、思ったんだ。自分がE組じゃなかったらアイツらみたいにお前らを虐める側になってたのかなってさ。E組の誰かをいいなって思っただけ付き合っても、いざとなったら保身の為に、自己肯定の為に攻撃するような奴にさ」

「……………」

「だったらさ、俺は悲しいし……、怖えよ」

前原のやつ、随分と落ち込んでるな。

仕方ない。励ましてるか。

「そんな風に考えられるお前ならいじめる側にはならないだろ。少なくとも不良で浮いてる俺に磯貝と一緒にとはいえ話しかけようなんて思わないだろうさ」

「……へへ、お前、やっぱりいい奴だよな」

照れたように、鼻の下を掻く前原はそれでも顔色が優れなかった。相当堪えたのだろう。このまま放っておいたら体調を崩すかもしれないな。

「はいはい。そんなことより、風邪ひくぞ着替えろよ」

「……だな」

尻餅について濡れた制服を着替える様に言っただけでやると同時に杉野たちが来た。どうやら途中から見ていた俺とは違い、一部始終を見ていたらしく、皆、前原が受けた扱いに憤慨していた。

しかし、同時にみんな暗い顔をしていた。もしも自分からE組でなければ今のみんなにどう接していたのかを考えているのだろう。見ていればわかる。

そんなメンツの中でも一際不満を露わにする者が1人。杉野達の中に混ざっていた殺せんせーである。朝より一回り巨大化した顔で怒りを露わにしていた。

「……仕返しです。皆さん。理不尽な屈辱を仲間が受けたのです。力無き者は泣き寝入りするところですが、君達には力がある。標的に気付かれず仕留める暗殺者^{アサシン}の力がね」

殺せんせーの一言に皆んなが悪い顔をする。

「……ははは、何企んでるんだよ、殺せんせー」

「屈辱には屈辱を。彼女達にはとびつきり恥ずかしい目に遭ってもらいましょう」

あーあ。前原以外、悪い顔してらあ。

?? ?? ??

「な、なあ。本当にやるのか」

殺せんせーの提案した仕返しという任務に消極的な前原はやはり顔色が優れない。なんというか、人間不信一步手前みたいな顔をしている。

ここに集まったメンツは前原にこんな顔をさせる為に集まったわけじゃない。だからケツを叩いてやる。

「やるだろ。お前、あのままで良いのかよ」

「……良くねえけどさ」

どうやら前原自身にも納得いかない部分は残っているらしい。そんな趣味もないのに男のケツを叩いてやった甲斐があった。

俺は前原に発破を掛けるようにこの仕返しのために集まってくれている面子を見渡して口を開く。

「だったらやるぞ。その為にこんだけの人数が集まったんだから。少なくともみんなはお前の受けた扱いに納得してないってことだろ」

「だな、流石にアレはないわ」

「うん。僕も許せないと思った」

俺の言葉に杉野と渚が同調する。

「ほらな」

俺は2人に頷きながら改めてメンバーにこの仕返しの意義を問いかける。

「今までのE組は弱者だった。でも今は違う。殺せんせーを殺すための刃を振るい、殺せた後の第二の刃も研ぎ始めた俺たちはもう黙ってやられるだけの弱者じゃない。それをアイツらに見せてやろう」

俺は自分のキャラじゃないと理解しつつそんな演説をする。確かに前原の恋愛沙汰は俺には関係ないけど、それでも昨日の光景は胸糞悪かったからだ。

渚、茅野、杉野、菅谷、千葉、速水さん、矢田さん、倉橋さん、岡野、磯貝、奥田さんに視線を向ける。彼等は皆、様子は違えど頷いていた。

それを確認した俺たちは前原と殺せんせーに頷き、ミッションを開始することにした。

ターゲットは瀬尾と土屋。奴らは喫茶店で駄弁っていた。そこを奥田さんが調査した下剤弾を使った千葉と速水の射撃成績一位コンビで襲撃する、ちよつとした恥をかいてもらうというプランだ。

「そんなじゃあ、ミッション開始。渚と茅野は菅谷の変装グッズで変装してターゲットに接近」

「了解」

「速水さん、千葉、奥田さん。弾丸は」

「バツチリ。しつかり装填済みよ」

「ああ。こつちも問題ない」

「マグネシウムを主成分とした超強力下剤。市販薬の数倍の効果を發揮するこの下剤を【ビクトリア・フォール】と名付けました」

作戦開始前に奥田さんの闇を見た気がしたが、任務に支障はない。あとは狙撃場所の確保だな。

「倉橋さん、矢田さん。狙撃ポイントの確保は？」

「オツケーだよ、家主さんにも了承済み！」

「私達が相手しておくから皆んなは任務に集中してていいよ！任せといて！」

ビッチ先生に師事して交渉術を叩き込まれているこの2人はこういう時に頼りになる。

俺たちが習っている暗殺技術で将来一番役立つのは彼女たちの交渉術かもしれないな。

「岡野、前原、磯貝はポイントBで待機。俺が指示を出したら枝を切り落とせ」

「OK。でも、良く枝切り落とす許可貰えたな」

「俺だってビッチ先生に教わってるからな。おぼさんとは言え、異性相手の交渉ならそれなりにな。それに、所有者たちも枝を邪魔だと思ってるらしいから一石二鳥だ」

倉橋さん達みたいにな格的な師事はしてなくてもあの人の授業を受けていればある程度、異性を口説ける様になるさ。たぶんな。

そう言いつつ、特に問題もなく暗殺の準備は進み、こつちの準備は完了した。

「杉野、タイミングを見て渚達に連絡。本格的に作戦を始動する」

「任しとけ！」

指示を出した俺はポイントCに向かう。

ポイントBで待機してる前原達の切り落とした枝を直撃させる為、斬撃指示を飛ばす為だ。

「乃咲、狙撃と下剤を飲むのに成功。あとは任す」

「了解」

杉野から第一次作戦は成功したとの連絡があったので、次は俺たちの番だ。

瀬尾と土屋は今頃、喫茶店の一つしかないトイレを取り合い（茅野潜伏済み）、渚が溢した100m先にコンビニがあるって情報を鵜呑みにしてこつちに向かつてるってことだろう。

アイツらプライド高いからその辺の民家でトイレを借りるって発想がないのだろう。

ばっしやばっしやと足音を大袈裟な足音を立てながら腹を抑えて滑稽に走っていた。

「今だ、殺れ……！」

俺の合図に木の上で待機していた3人が同時に枝を落とす。落とされた枝は見事に2人に落下。やれず濡れだ、やれ毛虫だ！などと騒いでいたが、腹痛を思い出したらしく、大慌てで駆け出す姿を見送る。

すると、上から3人が降りて来た。

傘やらプライドやらを置き忘れた2人をみて笑っている。前原も何やら複雑そうに笑っていた。

そういうしていると、殺せんせーを含めた今回の作戦に参加した全員が俺たちの後ろに集まっていたらしく、殺せんせーはニヤリとしながら前原に語り掛ける。

「ま、少しはスッキリしましたかねえ。汚れた姿で大慌てでトイレに駆け込む。プライドの高い彼等にとっては随分な屈辱でしょう」

と締め括った俺たちに前原が頬を掻き、今まで見たことないくらいに照れくさそうに口を開いた。

「皆んな、ありがとうな。なんつーか、俺個人の話をここまで大きくしてくれて」

「どうですか、前原くん。まだ自分も弱者を平気で虐める側に回るかもしれない、なんて思いますか？」

「どうやら、殺せんせー。昨日の話も聞いていたらしい。そんな風に前原に問い掛ける。」

すると、前原はどこか吹っ切れたように答えた。

「いや、そんなことしねえと思う。なんつーかさ、お前ら個人は別にそんなに強く無さそうだけど、実際関わってみると一人一人が強みを持っててき。そこには俺が持ってない武器も沢山あって……」

「そう。人は見かけによらない強さを持っているものです。それを今回学んだキミは今後、人を見た目で判断し、簡単に蔑み、侮ることはしないでしよう」

「……うん。そう思うよ、殺せんせー」

今回の件、俺はただ喧嘩の仲裁に入っただけのつもりだったのだが、どうやら人が成長する場面に立ち会えたらしい。少しだけ前向きになった前原は輝いて見えた。

「あ、やっぱ！俺、これから他校の女子と飯食う約束あるから行かねーと。じゃあな、みんな！まじでありがとう！また明日な！」

「……やっぱ少し凹んだままの方がいいんじゃないのか、あのタラシ」
立ち去ってゆく前原に思わず呟いた一言。誰も否定することなく、全員が微妙な顔をしていた。

うん。なんというか、リア充爆ぜろ。そんな一言が俺の頭に強く刻まれた事件だった。

ちなみに、殺せんせーの提案だったとは言え、暗殺と関係ないところで力を使ったことに対してE組の面々にはその後、雷が落ちましたとき。

25話 LRと克服の時間

「分かったでしよ？ 日常会話で難しい単語を使うことなんてないの。日本にも良くいるじゃない？ 『マジやべえ』とか『マジすげえ』で会話成立させる奴。その『マジ』に当たるのが『really』よ。木村、言ってみないさい」

「リ、リアリー」

「発音が全然ダメ。LとRがごちゃごちゃよ。私としては通じるけど違和感あるわ。言語同士で相性の良し悪しがあるけど、日本人は特にLとRの発音分けの相性が悪いのね。でも相性が悪くても克服すること！ これから先、発音はより厳しくチェックしてるから覚悟なさい？ 間違えたら公開ディープキスの刑よ」

ビッチ先生の授業が終わる。

発言や単語はともかく、実践や実体験を交えたプロの殺し屋が教える会話術は本当にタメになる。

例えば数学の三平方の定理とか何処で使うの？ と疑問に思ったりすることはあるが、ビッチ先生の授業に関してはそんな風に思う隙がない。

ビッチ先生。案外、教師が天職なんじゃないだろうか。そんな風に思う今日この頃。ビッチ先生に一悶着起こるなんて誰も想像していなかった。

?? ?? ??

翌日、学校に行くとき奇妙な光景が展開されていた。

鳥間先生が殺し屋に狙われているのである。しかも彼を狙う殺し屋は2人もいた。

1人は我らのビッチ先生だが、もう1人は誰だ？ などと思っていると、鳥間先生から補足が入る。

殺し屋の名前はロヴロ。ビッチ先生をここに斡旋したプロの元殺

し屋であり、現在は殺し屋を育て、育てた殺し屋の斡旋をする事で金を稼いでいるらしい。

なんとなく、そんな話を聞いて、「殺し屋って斡旋されるもんなのか」とか「人材派遣会社みたいなことしてるな」と思ったのはここだけの話。

しかし、なぜ、ビッチ先生がそんなことになっているのかと聞いてみると、なんでも、ロヴロさんがビッチ先生に見切りを着けたらしい。

何故？　とも考えたが、まあ、確かに言われてみると最近のビッチ先生は殺し屋というよりも先生、としての面ばかり見せている気がする。

「彼の言う通り、イリーナの強みは正体を隠して接近する暗殺にある。だが、正体が割れてしまえば一山いくらの殺し屋。それがロヴロの判断らしい」

「ビッチ先生……辞めちゃうの？」

倉橋さんと矢田さんの悲しそうな声が聞こえる。

あの2人はとくにビッチ先生に懐いていたし、一番熱心に彼女の授業を受けていたから当然か。

かく言う俺も、ビッチ先生に居なくなられるのは寂しいと思ってしまう。初めの頃は殺人鬼だなんだとおもっていたが、最近の彼女は本当に良い先生をしているからな。本校舎の教師に比べて惜しい人材だと学生の俺ですら分かる程だ。

とまあ、ビッチ先生が教師として優れているかどうかはひとまず置いておいて、何故、烏間先生がロヴロとビッチ先生に狙われているかと言うと、烏間先生を殺せた方が優れた殺し屋である、殺せんせーを狙い続ける権利がある、とのことらしい。

「……あれ？」

でも、俺は一つ疑問を覚えた。

ビッチ先生は殺し屋ではあるが、そもそもこの柵ヶ丘学園では教師として雇用されている訳で。

となると、忘れられがちだが、E組の教師の任命権は浅野理事^{ラスボス}の手にあるわけだから、最終決定するのはロヴロでも、ビッチ先生先

生でも、烏間先生でも、殺せんせーでもなく、理事長なのでは……？

……ま、いいか。ビッチ先生が本当にヤバそうになったらその時に助け舟として掛ける言葉の一つとして頭の片隅にでも一旦、置いておくでしょう。

「……と、言う訳だ。迷惑な話だが、君たちの授業には影響は与えないので普段通りに過ごして欲しい」

烏間先生、まじで苦労人だよな。

「今日の授業は……まで！」

「「ありがとうございます」

体育が終わる。それと同時に狙い澄ましたように無駄に分厚い胸部装甲をたゆんだゆんと揺らしたビッチが水筒片手にあざとく走って来た。

「お疲れ様〜！ 疲れたでしょう？ はい！ 冷たい飲み物！ ぐつ」といつちやつて！ ぐびつとー！

何が目的なのか分かり易すぎる。

これは流石に殺す殺さない以前の問題ではなからうか。なんつーか、絶対、あの水筒の中には何かしらの毒が盛られているだろう。

烏間先生も大方、同じ考えに至ったらしく、半目で睨みながらビッチ先生から自然に距離を取った。

「おおかた、筋弛緩剤だな。動けなくなったところをナイフで刺すつて魂胆だろう。言っておくが、そもそもそんな距離まで近づかせないぞ」

「……んじゃあ！ はい、ここに置いておくから飲んで！」

分かりやすく肩をギクリと震わせたビッチはしゃがんでコップを地面に置くが、今度はドジっ子路線で攻める事にしたのか、そのまますつ転ぶとギヤイギヤいと騒ぎ出した。

「いったーい！ おぶつてカラスマあああ！」

「……はあ。付き合い切れるか」

ため息を吐いて去ってゆく烏間先生。

無駄・隙の一切ない完璧超人、烏間先生を狙わざるを得ないビッチ

先生に同情的なクラスメイトたちはビッチ先生のフォローに回る。

そんな中でふと、声が聞こえた。

「バカ弟子め。恥をかかせおって……」

視線を向けると初老のそれでいて只者ではない気配を纏った男がそこにいた。

「あなたは……？ あ、つと、こんにちは」

「ああ。こんにちは。俺の名前はロヴロ。事情は聞いているだろう？

烏間を狙う殺し屋の1人だ」

殺し屋の口調はフランクだったが、思った以上にフランクなのか、しつかり自己紹介をしてくれた。

名乗られたからには名乗り返さないといけないだろう。背筋を軽く伸ばし、会釈しながら名乗る。

「自分の名前は乃咲圭一です。ビッチ先生にはいつもお世話になります」

「乃咲？ ああ。烏間の報告書に記述されていた少年か。単独で触手を破壊した数少ない人物。加えて作戦立案・指揮能力もある、と高く評価されていた」

「さ、さいですか」

少し照れる。烏間先生ったらそんな風に評価してくれていたのか。だったらますます頑張らないとな。

などと思っていたら、不意にロヴロさんが意味深な事を問いかけて来た。

「キミの意見で構わない。イリーナに烏間が殺れると思うか？」

「無理でしょ」

思わず即答してしまった。

言っておくが、決してビッチ先生を舐めている訳ではない。むしろ、俺はあの人のことも尊敬しているとさえ今は思っている。

仕事に応じて必要な言語を習得して来た、と彼女は授業中に軽く語って聴かせてくるが、それは並大抵の努力では成し得ないだろう。

ゾーンに入って時間を引き延ばしながら勉強している俺ですらこのテスト明けから1ヶ月が経つ今に至るまで英語の一つもマスター

出来てないのだから、短期間で言語を習得する難しさは想像に難くない。

ビッチ先生のいう短期間というのがどれくらいの期間か分からないが、ゾーン入ってまで勉強しているのに言語の一つもマスターできない俺からしてみればビッチ先生は努力の人だ。

恐らく、どうしてそんな短期間で言語を習得できるんですか？と彼女に聞いたら必要だから習得したのよ、と返ってくることだろう。ただ、その必要だから習得する、という難しさを知っているつもりだからこそ俺はそれを当たり前のように答えるビッチ先生を尊敬していると言ってもいい。

「人には向き不向きがありますから」

でも、人には向き不向きがある。

狩りをする動物は大まかに2種類いる。

牙や爪で標的を殺す者。

毒で相手を弱らせて殺す者。

ビッチ先生をその例に準えるなら、後者の毒を持って標的を殺す側だ。一見毒なんて無さそうな優美な見た目で警戒心を潜り抜けて必殺の毒を見舞う蝶。

しかし、俺たちはおろか、烏間先生にもその優美な外見での色仕掛けは最早通じることはない。何故ならあの人が毒を持った蝶だと気付いているからだ。

一方で烏間先生はどうだ？

烏間先生は間違いなく前者の牙や爪で標的を殺す側だ。それも感覚も何もかも鋭敏に研ぎ澄まされた歴戦の猛者。例えるのなら彼は恐竜だ。

蝶に恐竜が殺せるか？ 答えはNOだろ。

「相性が悪すぎると思います。それともロヴロさんはビッチ先生に近接格闘術でも教えたことでも？」

「ない。だから、俺の答えはキミと同じだ」

そう、舐めてる舐めてないの話ではない。暗殺者としてのカードを出し尽くしたビッチ先生と存在自体が最強のカードそのものである

鳥間先生では根本的な問題として、相性が悪すぎるのだ。

これがまだ、ビッチ先生の正体が判明していない状態ならばチャンスもあつたかもしれないが。

ここがビッチ先生の言うLとRなのかもしれない。暗殺を続けられるか、続けられないかどうかの。

?? ?? ??

昼休みを迎える頃。

いち早く昼飯を食べ終わっていた俺は食後の運動がてら校舎裏でナイフを振っていた。

仮想敵はやはり鳥間先生だろう。

ゾーンに入りながら鳥間先生ならどんな動きをするのかをシュミレートしながらナイフを振り続ける。

相変わらずゾーンに入っている時特有の硬い粘液の中で体を動かしているような感覚には慣れないけどな。体を動かすのにナイフを振るのに何十分掛かっているのか、と思いたくなる感覚だ。

「……訓練熱心だな」

ナイフを振り終わるとロヴロさんが声をかけて来た。気付かなかったが見られていたらしい。

「鳥間先生に勝てるようになりたいですから」

「……ふふ」

そういうとロヴロさんに笑われた。なにかと思うと酷く腫れた左手首を俺に見せつけてくる。

「奴を狙った結果だ。完璧に意表を突いてこのザマだぞ。それでもキミは勝ちたいと思うか？ いや、思えるのかな？」

「思います。だって、あんな風になりたいですから」

考えるまでもなく答えると殺し屋ロヴロは2度笑って、肩をすくめて言った。

「キミのような教え子が欲しいものだな」

本気なのか、冗談なのか分かりづらい言葉に迷っていると、黒いボ

ストーンバッグを片手に殺せんせーが顔にバツテンを浮かべてロヴロさんの後ろに飛んで来た。

「ダメですよ、ロヴロさん。彼は私の生徒だ。ヘッドハンティングはお断りしたいところですねえ」

「……ふっ、冗談だ」

「乃咲くんもダメですからね?! 浮気はいけません!」

「んなことしとらんわ」

思わず敬語なしでツツコミいれる。生徒と教師の間に浮気とかあるのだろうか? だとして俺は烏間先生一筋な訳なのだが。

するといつも通りの顔色に戻った殺せんせーがロヴロに向き直り、校舎の表に続く道を指差した。

「どうやらイリーナ先生がまた仕掛けるらしいですよ。見ていきませんか、ロヴロさん」

「結果の知れたことを……」

肩をすくめて、それでも殺せんせーの指差した道に歩いてゆくロヴロ。なんだかんだでしつかり弟子の活動結果に興味があるって良い師弟関係だよな。

と見送ると殺せんせーに『乃咲くんも行きましようよ』と誘われたので俺も着いて行ってみる。

さて、それはそれとして、そろそろその手に持つてるストーンバッグに突っ込んで良いだろうか?

突っ込むべきか悩んでいると、ちょうど烏間先生が昼飯を食べようとマツクの袋を開けているところにビッチ先生が突撃している場面だった。

「……奴め、正面からの暗殺は無謀だとあれほど」

ロヴロさん自身、何度かビッチ先生に正面からの暗殺は無謀だと説いて来たらしい。

呆れ混じりな声音に弟子への失望のようなものを感じ取っていると、殺せんせーがストーンバッグを開けてロヴロさんに見せつけた。

「これは……!」

中身を見たロヴロさんは驚いたように目を開くと、ビッチ先生を見

守る姿勢に入った。

何が入っているのか、バッグの中身を見てみると、そこには使い古されたワイヤーやらボロボロになったジャージ、殺せんせーを模したであろう人形。

バッグの内容物から察するに恐らくはワイヤートラップの練習痕だろうか。

「……奴にはあえて正面からの暗殺技術は教えなかった。訓練された動きというのは無意識に動きに出るし、そもそも女を武器にしたあいつの暗殺スタイルには無用の長物だったからだ」

ロヴロさんがビッチ先生の教育方針について語り出す。だが、そこに俺は違和感を感じた。

いや、殺せんせーと接して、教育されるうちに違和感を覚えるようになってしまったのだ。

だから、聞いてみた。

「それだと、正面から殺せなかったとき。ビッチ先生はどうすれば良いんですか？」

「……ヌルフフフ、乃咲くん。キミは完璧に第二の刃の重要性を理解したようですね。そう。殺り損ねた時の手段がない。だから、彼女は克服しようと足掻いたのですよ。これはその努力の痕跡です」

「……弱点を克服、か」

俺たちの視線の先では烏間先生とビッチ先生が駆け引きをしている。いや、駆け引きなんて高尚なものではないのかもしれない。

もう、ビッチ先生は身一つで暗殺する術しかないと油断している烏間先生と隠し球を持っているビッチ先生。そんな状況を理解して見るとビッチ先生に殺せる可能性を見出してしまう。

ビッチ先生が上着を脱ぎ、何かを囁きながら、烏間先生と彼が背中を預けている木の後ろに回って彼の左側に回り込む。あざとく、胸元を強調しながら。

ため息を吐いた烏間先生。恐らく、所詮はこんなもんか、と区切りを付けたのだろう。遠目に目に見た烏間先生の顔には落胆の色があった。

烏間先生がマツクの袋を地面に置いて、投げやりにビッチ先生を見たと同時に駆け出す彼女。

その動きに連動して、数秒前に脱いだ上着が烏間先生の脚を巻き込んで木の枝の高さまで釣り上がる。

それによつて烏間先生は体勢を崩した。

初めて見たかも知れない。あんな風に体勢を崩した烏間先生を見たのは。

体勢を崩した烏間先生の上に馬乗りになってマウントを取ったビッチ先生。

顔に浮かんでいるのは達成感。だが、その達成感のせいで僅かに攻撃が遅れた。

「くっ……！ 危なかつたっ！」

ここまで聞こえる、明確な烏間先生の静かな焦り声。振り下ろされたナイフは烏間先生の顔面直前で止まり、ビッチ先生の攻撃は失敗に終わった。

駄目だ。あの姿勢ではビッチ先生に分があるだろうが、身体能力の差がありすぎる。あれでは彼女の攻撃は当たらない！ 力勝負に持ち込まれたら流石にやりようがないだろう。

しかし、諦めない様子のビッチ先生に烏間先生が折れたのか、最終的には攻撃が当たったようだ。

「すげえ……」

思わずそんな感想が出た。

「どうやら俺もビッチ先生の言う『まじすげえ』とか『まじやべえ』で会話を成立させられる側の人間だったらしい。

「苦手な物でも一途に挑んで克服していく彼女の姿は生徒達の良い見本になるでしょう」

「……確かに、よく言ってますね。苦手なことでも逃げずに克服する！ っつて昨日も言ってた」

「そうでしょう？ 彼女は今後も同じように苦手なことがあれば逃げずに立ち向かうことでしょう。その都度克服するその姿を見て生徒達が挑戦することを学べば一人一人の暗殺者としてのレベルは向上

する」

確かに、殺せんせーの言う通り、指導者が自ら有言実行する姿と言
うのは俺たち学ぶ側にとっては『やればできる』という実感に繋がる。
口先だけの教師なんかよりもよっぽど信じられるからだ。

「だから、私を殺すのなら彼女はここに必要な存在なのです」

にこやかな殺せんせーはロヴロさんにそう言うと、ビッチ先生が
こつちに歩いて来た。

その様子はまるで、親に褒めて欲しい子供のように見える……。

「師匠……」

「出来の悪い弟子だ。……先生でもやっていた方がマシだな。必ず殺
れよ、イリーナ」

「……！ はい！ もちろんです、師匠！」

少し捻くれた褒め方をする師匠と愚直なまでの弟子。

『……父さん！ 100点だったよ！』

『……そうか』

……いや。俺たちはこんな関係じゃない。うちの親父は俺に興味
がないだけ……。

『キミは自律思考固定砲台さんを見ていなかった』

……いや、違う。俺は見ようとした。見なかったのは親父だ。

暗い方に向かっていった思考を切り掛かる。

ひとまず、ビッチ先生はこの教室に残留することが確定した。クラ
スのみんな、倉橋さんたちも喜んでるし。今はそれで良しとしよう。

「やったわ！ ホホホホ!!」

狂喜乱舞するビッチ先生と静かに去るロヴロさん。俺は彼らを静
かに見守っていた。

?? ?? ??

ビッチ先生に負けないよう、今日も今日とで烏間先生と放課後の訓
練中。それは唐突にもたらされた。

「乃咲くん。今度また、転校生がやってくる」

「まじですか？」

一難去ってまた一難。

俺たちのクラスに平穩はないのかな。

番外編 乃咲と磯貝 追憶の時間

時は遡り、修学旅行・1班狙撃暗殺失敗時。清水寺までの移動中にあつたちよつとした一コマ。乃咲と磯貝が接点を持つ、追憶の物語である。

??

??

??

「ダメだったねえ」

「だな。弾丸止めるとかマジかよ」

倉橋さんに同意しながら、俺は殺せんせーの止めた弾頭を指で弾いて遊んでいた。

この弾頭に対先生弾を詰め込む方式、ぱって見て弾丸に無駄な空気抵抗を作ると思うんだけどこれであんなに真っ直ぐ飛ぶのか？

いや、真っ直ぐ飛ばなくても狙って直撃コースを取ったのか。プロの狙撃ってとんでもない精度だな。

ちなみに殺せんせーはと言うと2班の方へ飛び立っていた。何かあつたら呼んでくれ、とのことだが、修学旅行中に何が起ると言うのか。

とか思ったが、新幹線の中で不良に絡まれたことを思い出して、何が起るか分からないと思ひ直す。

「はあ……。少し早いけど清水寺行くか」

「だな、いつまでも引きずっても仕方ないし」

気落ちした空気を変えるように提案した木村に磯貝が同意しながら駅のベンチに座る俺たちを立たせる。

「よし、清水寺行こう。昼もあの辺で食べるんだろ？ 腹が膨れれば気分も変わるって」

「そんなに変わるかね」

「変わるさ。腹が減っていると不安になるだろ」

「そう言うもんか」

「そう言うもんなんだよ」

「んじやあ、そう言うことにしておく」

「そう言うことにしておく」

磯貝の持論に茶々を入れているといつもの爽やかな笑顔でゴリ押しされたので諦めて頷いておく。

なんか、磯貝にはこうしてゴリ押しされたり、押し流されることがやたらと多い。

「やっぱり、磯貝さんと乃咲って仲良いよね？」

「だよな」

「な、それ俺も思ってた」

片岡の呟きに木村と前原が同意する。

「磯貝、俺たちって仲良いのか？」

「良いんだよ」

「そう言うことにしておく」

「しておく」

「ほら、そう言う所。私、正直に言つてE組に来た時に一番驚いたの乃咲と磯貝くんが仲良さ気に話してる事だったもん」

磯貝と顔を合わせる。確かに言われて見るとコイツと話すようになったのは何故だったか。

正直、A組にいた頃も、順位を落とした頃も、磯貝と絡んでいた覚えがないので正直、よく分からないのが俺の本心だ。

「……ねえ、乃咲の奴身に覚えがありません、みたいな顔してるんだけど」

片岡にすつごい鋭い指摘を入れられる。

「多分、E組全員が思ってる事だと思っただけだよ。ずっと不思議だったんだよ。札付きの不良児と学級委員の優等生が仲が良い理由」

「だよな。最近は言うほど不良っぽくないけどE組来たばかりの頃、乃咲がいるって聞いて凄く不安だった」

「それ、少し分かるかも」

そんなことを言われても正直にいつて本気で分からないのだから

困る。俺は本気で磯貝に友情を感じてもらえるようなことをした覚えがないのだ。

困ったので話の着地点を求めて磯貝を見ると、呆れたような視線を返された。

「逆に圭一の不良っぽい噂ってどんなのがあるよ?」

磯貝の問い掛けに1班の面子が顎に手を当てて考え、俺の噂を列挙してゆく。

「急な成績不振」

「年上、同級生、他校の生徒関係なく喧嘩」

「先生を殴ってE組行き……」

こうして他人の口から自分の悪行を聞くと確かに俺って荒れてたんだよなあ。

いや、でも喧嘩に関しては売られたのを買っただけで自分から喧嘩を売ったことは無かったし。先生殴ったことに関しては……アイツらが悪いし。成績不振に関してはまあ、俺の怠慢だけだよ。

「あと、同級生を喫茶店で恐喝したつても聞いたことある」

「あ、喫茶店なんだ? 私は恐喝したつても噂しかしらなかった」

と、ここで結構身に覚えのある事件が飛び出して来た。これに関しては身に覚えがある。

「あ、それで恐喝されたの俺なんだ」

「……………え、磯貝!?!」

そう、その事件で俺が恐喝した相手は何を隠そう、磯貝なのだ。だから、E組に落ちた時、コイツに話しかけられた時は本気で驚いた。『おはよう、これからよろしくな。圭一』ってめちやくちやフレンドリーに屈託のない笑顔で下の名前を呼びながら挨拶してくるんだもの。正直、気味が悪かったと言っても過言では無い。

「乃咲くんが恐喝つてのも今となつては信じられないけど何があったの?」

興味深そうに磯貝に尋ねる倉橋さん。

「あ……、これって話して良いのかな?」

今更ながら聞いてくる磯貝。

だが、俺に止める選択肢はない。むしろ一方的に恐喝された相手にフレンドリーに話しかけようと思った真意を知りたいくらいだ。

「話してくれて構わないぞ。俺もなんでお前と話すようになったのか覚えてないってのが正直な感想だし」

「……分かった。じゃあ、清水寺に行きながら話すな。まず、俺と圭一が初めて話したのは——」

磯貝の昔語りが始まった。

?? ?? ??

初めて乃咲圭一と話したのは一年の頃だった。

入学式で新入生総代を務めた2人の片割れ。スピーチの内容は覚えてないが、入学試験で総代2人。浅野と圭一……乃咲が満点を取ったと言うのは当時、あまりに有名な話だった。

あの頃は同じA組ということで同じクラスだった俺だけど、アイツと初めて話したのは昼休み、自分の机で自習していた時のことだ。次の数学の予習をしている時、たまたま通りかかった乃咲に分からなかった所を聞いたのが今思い返すと彼の初めての会話だった。

まだ習っていなかった部分だったが、彼なら知っていると思っただけで聞いてみたのが正解だったらしく、乃咲は嫌な顔一つせずには答えてくれた。

「圭一、今日一緒に喫茶店で勉強しないか」

「喫茶店？ 緊張するな、俺初めてだよ」

「ははは、慣れていけば良いさ」

「分かったよ。おおい、浅野と喫茶店で勉強するけど一緒にくる奴いるか？」

あの頃のA組は乃咲と浅野を中心に回っていた。

浅野は勉強しているところを他人に見せることなく、涼しい顔して小テストで高得点を取りまくる天才。

乃咲は所構わず、なりふり構わず、予習復習の努力を一切欠かさない秀才。

彼らに感化された当時のA組はレベルが高かった他のクラスよりも平均点が20点ほど高いのがデフォルトで、クラスのトップ2人は分らないことがあっても聞けば絶対に答えてくれる天才と秀才。ただ、乃咲の努力は行き過ぎていたと思う。

何をするにも勉強の片手間だった。誰かに勉強を教えるのも、誰かに誘われてカラオケに行ったとしても常に勉強道具は欠かさない。ある意味で、その頃の彼の姿は後にE組に落ちたくないと思死に努力する大勢の生徒たちに似ていた。

いや、似ていると言うか、彼ら以上に過剰な努力だったと今なら思う。その証拠に乃咲は行き過ぎた努力の末に体調を崩した。

1学期の中間テスト直前、乃咲は熱を出して早退した。翌日のテストは辛うじて出席したけど、やはり体調が優れなかったのか彼の順位は下がった。

1位から2位に転落しただけ。

落とした点数はたかが2点。

俺たちはむしろ崩れた体調で良くその程度で済んだと思ったが、乃咲はそれ以来、少しずつ落ちていった。順位も、勉強に対するモチベーションもだ。

期末で20位、二学期の実力テストで50位、中間で80位。彼は徐々に落ちて行き、50位以下になった頃にはもう、誰も乃咲を秀才扱いすることはなく、むしろ煙たがるようになっていた。

「の、乃咲。ここなんだけど」

「……分からねえ。つか、もうお前の方が成績いいだろ。俺なんか聞くなって」

「圭、どうしたんだ。たった一回、順位を落とすくらいで」

「別に。お前には関係ねえよ、浅野。これはうちの親子の問題だ」

心配する浅野を冷たくあしらう乃咲。それ以降、天才と秀才が並んで歩く所を見た者はいない。

ただ、乃咲が転落していく中。俺は家庭の事情で少し、不味いことをしていた。

俺、磯貝悠馬の家は決して裕福とは言えない。父はいない。パート

社員の母が頑張ってくれているが、俺は少しでも家計の足しになりたくて俺は無断バイトをするようになっていたのだ。

新聞・牛乳の配達、内職、なんでもやった。なんでもやったことが災いした。

バイトがバレたのだ。1人の生徒……乃咲に。

朝、配達しているところで偶々、乃咲と鉢合わせたのだ。本当に偶然、曲がり角でゴツツンコ。

「の、乃咲……」

「……誰だ、お前？　つか、バイトって禁止じゃ？」

この頃はまだアイツは不良認定されていなかったが、俺はひたすらに焦った。

俺は事情をキョトンとする乃咲にアレだ、コレだ、と説明して、何度か口封じを試みる。

けど、肝心の乃咲は………。

「あ、そ」

興味なさ気に踵を返して去っていく。

俺は焦ったが、仕事も途中。投げ出していくわけにも行かず、それから暫くは乃咲経由で学校に報告されると怯えて過ごすことに。

だが、待てど暮らせど学校や生徒会から注意喚起が来ることはなく、俺は思わずにまたま学校ですれ違った乃咲を問い詰めた。

「……誰」

「磯貝だよ、磯貝悠馬！　同じクラスだろう!？」

「………あー、無断バイトの」

「お前、学校に報告してないのかよ!？」

「してないけど、して欲しいの?」

乃咲は一切学校に報告していなかったのだ。

俺に取っては有り難かったが、なぜ、報告しないのか分からなかった。

「いや、助かるけどさ」

「お袋さんを助ける為なんだろう、まあ、頑張れば?　お前がバイトしてようがしてなかがろうが俺には1ミリたりとも関係ないし」

アイツはそんなことを言って颯爽と去って行った。
少し優し気な声色だった前半部と本当に興味なさそうな声音の後
半部のギャップが印象的だったからよく覚えてる。

思えばこの時からだ。教室で孤立しているアイツを何気なく視界
に入れるようになったのは。

それから一年が経った頃、乃咲は学年最下位まで転落。この時点で
E組に行んじやないのかって噂が立ち始め、そんな噂を確固たるもの
にする事件が起こる。

——乃咲が他校の生徒と喧嘩した。

この頃には学年が変わり、アイツはクラスが変わった。違うクラス
になってからは関わるのが本当になくなったけど、2年の夏、乃咲
が俺を恐喝する事件が起こってしまう。

いや、厳密に言えば起こしたのだ。2年の夏休みの半ば頃に俺が事
件を起こしてしまった。

事件、と言つても別に派手な殴り合いがあつたとか、誰かが怪我を
したとか、そんなことがあつたわけじやない。傷が付いたのは乃咲の
名誉だ。

この頃、うちはまた家計が苦しくなつて、俺はまたバイトをしてし
まった。

そして、また乃咲と遭遇してしまう。櫛ヶ丘の学区外の喫茶店でバ
イトしていた時のこと。

「いらっしやいま——乃咲……!?!」

「……えつと……あつと……ああつ！ ……磯牧。お前、またバイト
してるのか」

「一生懸命思い出そうとしてくれたところ悪いけど、磯牧じゃなくて
磯貝な」

「そうだったか。そうか、すまん。んで、お前、また無断バイトか」

「っ！ 見逃してくれ。出来るだけ急ぎで金があるんだ。このままだ
と家賃払えないらしくてさ」

「……………あ、そ」

アイツはいつかみたいに興味なさそうに言う『さっさと席に案内

してくんない?』と言いつつ放ち、無断バイトしている俺のことなど気にしてない見たいに机に教材を広げて勉強を始めた。拗っている訳ではなさそうだけど、まだ真面目に勉強しているんだな、なんて思ったのが印象的だったから良く覚えてる。

それからアイツはうちの喫茶店に来た。

一度、見逃してくれているからか、俺は特に警戒なくアイツに接客して、横目で勉強しているのを何気なく見て、退店するのを見届ける。そんな続いたある日のことだった。

うちの喫茶店に浅野が来た。

浅野とその取り巻き。テスト上位5位の集団、5英傑なんて言われている奴らが俺のバイト先に来てしまったのだ。

「いらつしやいま……………」

「——磯貝?」

「あ、浅野——」

「おやおや? 磯貝くんじゃないか? うちのクラスの優等生がこんな所でバイトかい? 荒木、バイトの許可申請なんて出たかな?」
「出ていなかった筈だねえ? どうする、浅野くん。彼、無断バイトしているけど」

「そうだな、無断バイトはE組行き——」

そんな会話をしている時、彼が現れた。

「なんだ、これ」

明らかに困惑した乃咲の声。その声に誰よりも早く浅野が反応した。

「圭一。キミがこんな所にいるとは意外だ。ところで磯貝がバイトしている件に関して知っていたのか?」

俺がバイトしていることを一年の頃から知っている筈の乃咲。彼が浅野たちにバラしたのかと考えなかった訳では無かったが、それならもっと早く彼らが来るだろうと思ひ至り、考えを改める。

だか、次に頭を支配したのはこの場をどうやって切り抜けるか、という思案だ。

バイトしていることは言い逃れできない。この店の店長が親戚で

くなんて出まかせを言うわけにもいかない。どうやって切り抜けられ
ば……?」

そう思った時、乃咲が浅野の問いに答える。

「知ってたぞ」

まずい。彼の言い分次第で俺が以前からバイトをしていたことが
バレる。これが初めての無断バイトではないことも。

だが、乃咲はずっと黙っていてくれた。俺が何度も無断バイトをし
ていることがバレた時、黙ってくれていた彼を巻き込むわけにはいか
ない。

「知ってた? 知っていて学校に報告しなかったのか? それは問題
行為だぞ、圭一」

浅野が乃咲を非難する。その取り巻きも同じように彼を口々に罵
りながら非難した。

「さて、浅野。俺が——」

せめて、矛先を自分に向けられれば。そんな思いで口を開いた時。
俺の言葉に被せるように乃咲が平然と驚くべきことを言い放った。

「いや、俺の不利益になることをなんで俺が進んで報告してやらな
きゃならないんだ?」

「不利益? 何を言っているんだ?」

乃咲が何を言っているのか、俺には分からなかった。俺だけでな
く、浅野たちも分からなかったと思う。

彼の言葉に置いてきぼりを喰らっている俺たちを放置して乃咲は
ずかずか歩いてくると徐に俺の胸ぐらを掴む。

「おい、磯貝。何下手こいてくれてんだよ」

「乃ぎ——ぐっ!」

「黙って合わせろ」

耳元でそういうと彼は続けて口汚く俺を罵倒する。唾然としてい
て思考がろくに働かなかった俺は彼に言われるがままに怯えるフリ
をしていたと思う。

「どうするだよ、今月の友達料払えんの無理なら殴るけどさ、どうする
? 長男が怪我して戻ってきたらお袋さん、心配で仕事どころじゃな

いんじゃないのか？ ええ？ 聞いてんのか、おい？」

乃咲は……圭一は、凄く不器用なやり方で俺を庇ってくれた。不器用でどこかベタな設定で。

語気は強いのに、言葉選びは何処かたどたどしい。友達料とかリアルで言う奴を初めて見た。

ただ、その脅し文句はまだ不良呼ばわりされて間もなかった彼なりにボギヤブラリーから引っぱり出した必死のセリフだったんだろう。

「……お前が磯貝を脅していた、と？」

「脅しとは人聞き悪いな」

「だが、流石に無理があるぞ」

そうだ。浅野の言う通りだ。いくらなんでも無理がある。厳しい言い訳、事実の捏造だった。

「無理もなにも、浅野。逆に聞くが俺が嘘をついてるって証明できるか？ 今日、初めてこの場に来たお前に。俺が脅してることに關しては俺と磯貝に確認とれば証明できるけど？」

悪びれもせずに屁理屈をこねる圭一。

そんな彼に呆れた顔をしつつ、浅野は引き下がった。今思うとそれが浅野なりの圭一への友情表現だったのかもしれない。

「………分かった。確かに証明はできないな。磯貝はお前に脅されて仕方なく無断でバイトをしていた。今回はそう言うことにしておいてやる」

「浅野くん、でも磯貝はどうするんだ!？」

「どうもしない。不良に脅された一般生徒がやむを得ずに無断バイトをしてた所に鉢合わせ、今度からは生徒会に相談するように嚴重注意した。それだけでいい」

「でも………」

「それに、僕らが何もしなくても、こんな所で騒いでるんだ。遅かれ早かれ柵ヶ丘の生徒が無断バイトしているって噂は立つ。そうなれば学校が動くさ」

「わ、分かったよ………」

言いたいことだけ言つて喫茶店を出る浅野と彼に続く荒木たち。

取り残された俺と圭一。彼らが見えなくなってから俺の胸ぐらを離した圭一に俺は問い掛けた。

「乃咲、どうして庇ってくれたんだ？」

純粹な興味での問いかけ。俺の言葉にアイツはバツが悪そうに頬を掻いて少し間を開けてから答える。

「……うちには母親がいない。だから、母親の助けになろうって頑張ってるのが少し羨ましかった。だからその手伝いをしてやれたらなって思ったんだ。それだけだよ」

圭一が自分のことを話しているのを聞いたのはこの時が初めてだった。周りが『乃咲新一先生のお子さん』だともてはやしているのを見たことがあったが、確かに彼の母親について触れる人は見たことがない。

だから、この時、初めて彼も片親だと知った。

この時、なんとなく、クラスで乃咲が孤立し始めた時に気になったのは何も事情は知らなかったけどシンパシーみたいなを感じていたからだと悟ったんだ。

「浅野のいう通り、アイツらが報告しなくても、こんな所で騒いでたんだから噂は立つだろう。だけど学校側も特定するのに時間は掛かるだろうから、多少の時間は稼げる筈だ。その間にさっさと必要な金額貯めてバイトを辞めろよな」

圭一は言い残して去った。

まだ、お礼も言えてなかったのに。

それ以来、アイツは俺のバイト先も来なくなっただし、夏休みが明けるまで街の中でも出会うことはなかった。

そして彼や浅野の推測の通りに柵ヶ丘の生徒が無断バイトをしている、という噂は立ち始めた。

特定される前に目標の金額を貯められた俺はバイトを止めた。

そして次に圭一にあったら絶対にお礼を言うんだと心に決めただ。だ。

夏休みが明けた数日後、学校の中で圭一を探している時に偶然……。

「聞いたか？ 乃咲の奴、教師殴って停学だった」

「ああ、しかもE組行きだったよ。終わったな」

俺は乃咲がE組に落ちたことを知った。

?? ?? ??

「……俺、そんなことしたか？」

「してたって」

磯貝から聞いた過去話は何ともむず痒いものだった。聞いていて恥ずかしくなる。

磯貝を庇ったことはあったが、そんな風に庇ったっけか？ 全くと言つていいほど身に覚えがない。

「んで？ それから磯貝はどうしたんだよ？」

「ん？ ああ、バイトは辞めたけど、結局バイトしてたことが学校にバレてさ。校則違反でE組行き。ぶっちゃけ浅野にバレた時点で覚悟してたけどさ」

「浅野くんにはバレてE組に行くか、周りにバレてE組に行くかの違いだったってこと？」

「そういうこと」

「んじゃあ、磯貝くんが乃咲にフレンドリーなのって」

「まあ、あんな風に庇われたら印象変わるって。少なくとも教師殴ったのだから何か理由があるんだろうなって思ったしさ」

「ほえー」

磯貝がE組開始時からやけにフレンドリーだったのはそれが原因だったのか。

「もしかしてこの前、乃咲が皆んなに発破かけた時の『お前、また』って？」

「また自分が泥を被る不器用な方法を使うのかって心配になったんだよ」

磯貝にそんな風に心配をかけているとは思っても見なかったぞ。

「つと、清水寺に着いたな。んじゃ、俺たちの過去話はここまでってこ

とで」

磯貝がポンと手を叩き、会話を終わらせる。

まあ、これ以上話を広げても特に俺から言えることは何もないので、俺は我先に、と清水寺に足を踏み入れた。

ピリリリ、と電信音が響く。

音源はポケットの中に入ったスマホ。スマホの中央にはいつ番号を交換したのか覚えていない『不破』さんの名前があった。

「もしもし？」

『あ、もしもし乃咲くん？』

不破さんはやはりうちのクラスの不破さんだった。

いつ電話番号交換したっけ？

『ねえ。この作品のヒロインって磯貝くんなの？』

「……なに言ってるんだ……？」

意味のわからない電話を一言で切り捨てて俺は電話を切った。

26話 転校生の時間 2時間目

先日、烏間先生から連絡が来た。

”転校生がやって来る”と。

暗殺者が……仲間が増える。そういう意味では頼もしい限りではあるのだが、律の件がある以上、一筋縄では行かない奴が来るという先入観がどうしても働いてしまう。我ながらよくない癖だと思う。

そんなことを考えながら朝、目が覚める。

カーテンの隙間から挿す朝日に目を思わず窄めながら目を開ける。最近の俺は健康優良児そのもの。早寝早起き、朝ごはん、すっかり不良児などではない。

しかし、寝起きの布団の居心地の良さはやはり素晴らしい。健康優良児になった俺でも30秒は布団と格闘してしまう程だ。

『おはようございます！ 乃咲さん』

「おはよう、律」

たっぷり30秒布団の中で英気を養ってからのそのそ布団を出ると同時に充電していたスマホに律が表示された。

最近は何時か時計を使う機会が減った。目覚し時計に起こされるよりも早く俺が起きたり、こうして律が起こしに来てくれるからだ。

いやー同級生女子に朝、起こされるだなんて俺もとうとうリア充の一員か。だなんて思っていると目覚し時計が鳴り始めたので止める。

さて、今日も1日、頑張るぞい。と着替えて、意気込む。

祖母が作ってくれていた朝食を食べて、行って来ますと家を出る。朝から雨が降っているのでもこの前買った傘を担ぐことも忘れない。

「さて、今日の昼飯はなにがいいかなあ」

『乃咲さん、今日はそぼろのおにぎりが新発売らしいですよ！』

「んじゃあ、買いに行くか」

律からもひと押しがきた商品を求めてコンビニに立ち寄り、無事に目的のブツをゲット。何気なく映画雑誌を立ち読みしてから通学路に出る。

さつき見た映画雑誌に載っていたソニックニンジャの続編。あとでカルマに教えてやろう。アイツ、あの映画好きだったから。

「あ、乃咲くんじゃん。おっはー!」

「ん? ああ、おはよう、倉橋さん」

コンビニから出ると倉橋さんがちょうど正面を横切るところだったらしい。

目が合うと声をかけられた。

声をかけられたので挨拶を返す。なんか、前も似たような事があった。あの時は天気の話でもしよつかと悩んだっけか。話題が思いつかなさ過ぎて。

でも、今は違う。かれこれ2ヶ月以上。流石に話題に困ることは無くなったし、以前とは違い、俺から話題を出すこともできるようになった。

そう思うと俺、随分と成長したものである。

そう言えば、最近は1人で通学する事が減った。朝は大体、何故か俺のスマホに入り浸っている律と駄弁っていたりとか、途中で杉野と渚、カルマなんかと鉢合わせる事が多くなったから。

それに、不良に喧嘩を売られることも無くなったしね。平和な朝が続いている。

「鳥間ファンクラブ会長の倉橋さんや。知っているかな? 鳥間先生、犬が大好きらしいぞ」

「え、ほんと!? 初めて知ったよ」

「この前、放課後訓練が終わった後の雑談で聴いてみたんだ。なにが好きなものとかあるんですか? って。そしたら答えてくれた」

「そうなんだ?」

「そう。なんだけど……犬に近づくと死に物狂いで吠えられるんだってさ。可哀想だよな」

「あー……。もしかして生物としての格上感が出るのかもね。この前のロヴロさん? とビッチ先生の暗殺試合の時とか凄かったし」

「だなあ。あん時の鳥間先生は只者じゃないオーラがやばかった。でも、そんなあの人から一本取っちゃうビッチ先生にこそ俺は驚かされ

たけどねえ」

「そうだよね！ 私もあの時は感動したもん！ 苦手を克服ってこう言うことなんだなあって」

ロヴロさんたちの話題が出て来ると、自然と思いついてしまうのはあの暗殺の後に烏間先生から告げられた例の話題だ。

なんでも、転校生がまた来るとか。

「そう言えばさ、烏間先生からのメールみた？ 今日からまた転校生が来るって」

「みたみた。また大変なことになりそうだよな」

「ね、律の時みたいなことにならないかや良いけど」

『それに関しては本当に申し訳ないです……』

「別に責めてるわけじゃねえーよ」

申し訳なさそうな声の律に返事をする倉橋さんが目を丸くする。だから、スマホを取り出した。

「律、乃咲くんのところにいるんだ？」

『はい！ 現状、乃咲さんがE組の指揮を取る事が多い傾向にあるみたいなので、彼の思考パターンを理解できればと思います』

「……ですよねえ」

律がことある度に俺のスマホにいる理由がよく分かった。てつきり二次元女子に好かれてるのでは？ みたいな夢のような妄想をしていたのだが、やはり、所詮は妄想に過ぎなかったらしい。

乃咲くん、シヨック。

「乃咲くんが二次元の女の子を家に連れ込んでる」

「酷い風評被害だな？ 間違ってるじゃないけどさ」

倉橋さんに揶揄われながら俺たちは雨でぬかるんだ通学路を歩いた。ちなみに、すっかり俺が車道側を通り、倉橋さんの歩くペースに合わせている。修学旅行での学びは無駄にできなかったのだ。

?? ?? ??

学校に着いた俺たちはやはり転校生の話で盛り上がることになる。

クラスメイトは皆、律に群がる。

なにか、情報はないのかと群がるクラスメイトたちに律は淡々と怪談でも聴かせるみたいに新しい転校生について語ってきかせてくれた。

「私と彼は本来同時投入される予定でした。私が遠距離攻撃、彼が近距離攻撃を担当して連携して殺せんせーを追い詰める。それが本来のプランでした」

「へー……。律と連携できるってよっほど能力高いんだね」

「はい。ですが、少々、彼は性能が高過ぎたのです。私では彼に暗殺者として圧倒的に劣っていたのです。それが同時投入されなかった理由の一つです。あとは彼の調整に少し時間がかかり過ぎたのがもう一つの理由ですね」

「嘘……」

「律ですら能力が低い……?」

クラスメイトたちは戦慄した。そりやあそうだ。不意打ちなしに殺せんせーの触手を破壊し、俺たちとの連携で触手まで破壊した彼女がそんな扱いなのだから。そんな律より性能が高いとか新手の怪談というかお化け扱いされるよな。

そんな時、がらっ！ と教室の扉が開いた。と、同時に殺せんせーが教室の上端に液状化して逃げた。

殺せんせー、ビビりすぎだろ。

などと思いつつ、ちゃっかりゾーンに入り、思わず扉を見てしまった俺。別にビビったわけじゃない。ただ、咄嗟にやばいっておもっただけのこと。

息を呑んで見ていると、男が入って来る。

いや、顔は見えないから男かどうかはわからないが、背格的に男だろうって予想しただけなんだけど、恐らくは間違っていないだろう。

長身で白装束に身を包んだ男。中学生と言うにはあまりにも纏う雰囲気浮世離れしていた。

男は徐に手から鳩を取り出すマジックをしてクラスメイトたちを

驚かせ、得意げな声を出すわけでもなく、あつさり笑うと自己紹介を始めた。

「あはは、驚かせてしまったようだね。ごめんよ、私は転校生ではないよ。私は保護者なんだ。名前は……まあ、白いし、シロとでも呼んでくれ」

いや、なぜ偽名を名乗る？ と突っ込みたいところだが、律の話からすると転校生も暗殺者。だから、その保護者としてのコードネームみたいなもんなんだろう、と納得しておく事にした。

「いきなり入ってきて手品とかしたらそりゃあビビるよね」

「うん……殺せんせーでも無い限り……」

茅野と渚よ。そんなこと言ってるけど当の殺せんせーはとつくにビビって天井の隅っこに張り付いてるぞ。と指摘する前に岡島たちが現状に気付いたらしい。

「ビビってんじゃねえよ！ 殺せんせー！」

「奥の手の液化化まで使いやがって!？」

「いや、律さんが朝っぱらからおつかない話ばかりするもんですから」

バツが悪そうにしながらも脱ぎ捨てた服に戻り、元の身体に戻ると気を取り直したように殺せんせーが口を開き、シロに向き直る。

「初めましてシロさん。肝心の転校生は？」

「初めまして、殺せんせー。ちよつと性格とか色々と特殊な子でね。私が直で紹介させてもらうよ……つと、はい。これ贈り物。甘い物が好きだと聞いてね」

「これはどうも(丁寧に)」

見知らぬ白装束から渡されたようかんを包装紙ごとバリバリ食う殺せんせー。これに関してはもう、突っ込まない。だって、似たような光景見飽きてるし。

などと思っていると、一瞬、教室全体を見渡しているシロさんと目が合った気がした。

「なにか？」

「いや、皆いい子そうですね。これならあの子も馴染めそうだ。――」

「おおい！ イトナ、入っただけで！」

「そう言う意図での見渡しだったのね。」

「なにか安心した様子のシロさんが声をかける。」

「ちなみに、廊下には烏間先生以外の人影はない。加えて、何故かシロさんは廊下に向かって声を掛けるのではなく、俺たち生徒の方を見て声をかけたのだ。」

「直後、ドオオオオン！ と凄まじい音を立てて俺とカルマの間の席の後ろの壁が爆発した。」

「そして、そこから1人の男子が入って来る。」

「俺たちと同じ制服。背格好も中学生のそれと比較しても大差ないだろう。だが、少し気になるのは外から入って来た癖に濡れてないこと。一滴たりともだ。」

「外は梅雨特有の土砂降り。加えてイトナくんとやらが開けた穴は直接校舎の外に通じてしまっている。外の様子が変わる。この雨の中、傘をさしていたとしても一滴も濡れないのは無理だ。」

「しかも彼は手ぶら。ますます謎が深まる。」

「俺は勝った。この教室の壁より強いことが証明された。それだけでいい……。それだけでいい……。」

「「いや、ドアから入れよ!」」

「「また面倒な奴が来やがった……!」」

「殺せんせーもリアクションに困って妙な顔をしているし。笑顔でもなく、真顔でもなく、すっごい中途半端な顔をしてやがる。」

「堀部イトナだ。名前だけで呼んであげて欲しい」

「そしてこの状況で動じることなく転校生の紹介をするシロさんも相当だな。」

「ああ、それと私も少々過保護だね。しばらくの間、彼のことを見守らせ貰いますよ」

「それは過保護を通り過ぎてモンスターペアレントなんではないかい?」

「ツツコミどころを見つけてしまった俺は流石に初対面相手に声を出してツツコミをする気力はなく、行く末を見守っていると、俺と同

じこことが気になつたらしいカルマが声を出した。

「イトナくんさ。外が土砂降りなのに一滴たりとも濡れてないのはなんでなの？ 傘も持っていないのにさ」

「カルマもそこ気になるか」

俺の言葉に頷くカルマ。そんな俺とカルマを見比べてイトナは近くにいるカルマの頭を撫でた。

「お前とあの銀髪は同じくらい強い。このクラスでもトツプなんだろう。けど、安心しろ、お前らは俺よりも弱い。だから、俺はお前たちを殺さない」

……珍しい。あのどうしようもなく喧嘩つ早いカルマがされるがままに撫でられている。どうしたんだろう。いつもなら頭撫でられた瞬間に相手の頭を掴み返して顔面に膝でも叩き込んだらうに。

そんな俺の心配も知る由もなく、転校生は胸元からようかんを取り出しながら殺せんせーに詰め寄った。

「俺が殺したいと思うのは俺よりも強いと思う相手だけ。この教室ではアンタだけだ。殺せんせー」

「強い弱いとは喧嘩の事ですか？ イトナくん。力比べでは先生と同じ次元には立てませんよ？」

緑のしましまに染まった殺せんせー。そんな変化にびっくりすることもなく、冷静にようかんの包装紙を噛みちぎりながら毅然と言った。

「立てるさ。だって、俺たち、血を分けた兄弟なんだから」

「えっ!?!」

「き、き、き、兄弟いい!?!」

「まじかよっ!?!」

「あの乃咲がガチ驚きしてるぞ」

兄弟ってあれだよな？

悟空とラディッツ、一輝と瞬、スカイラブハリケーンの立花の双子と同じ兄弟って事だよな!?

どういうことだ!?

殺せんせーが人体実験される前の血縁者ってことか!?! どういう

ことだってばよ!?

いや、人体実験云々も俺の考察でしかないわけだからそれすらあやふやなんだけど……!?

「兄弟同士、小細工は要らない。兄さん。アンタを殺して俺の強さを証明する。時は放課後。この教室で勝負だ」

兄弟云々に驚いているとイトナが捲し立てるようにそう宣言すると、自分が開けた穴に戻るように踵を返して口を開いた。

「今日がアンタの最後の授業だ。コイツらに別れでも伝えておくんだな」

そう言っただけで雨が上がった梅雨空の下へと消えて行った。新しい転校生、相当な不思議くんだな。

「ちよつと殺せんせー! どういうこと!?!」

「兄弟いるなんて、聞いてないよ!?!」

「いやいやいや! 先生も初耳です! 昔、両親に兄弟が欲しいって言ったら家庭内の空気が気ままずくなりましたから! よく覚えてます!?!」

「アンタの家庭事情なんてしらねえよ!?!」

「つか、親とかいるのか、殺せんせー!」

「失敬な! 先生にも両親くらいいますとも!」

ギヤイギヤイと騒ぎ立てるクラスメイトたちの中で俺は困惑を深めていた。

?? ?? ??

昼休みになる頃には殺せんせーと転校生の関係に関する考察がクラスメイト達の間で収拾がつかないほどに膨れ上がっていた。

生き別れの兄弟説、亡国の王子説などなど挙げ出せばキリがないほどに。

そんなみんなの妄想を肯定するかのようになり、2人はあらゆる好みが合致していた。

昼休みに食べるのは弁当ではなく、大量のお菓子だったり、徐に机

に広げたのが巨乳の女性が載っているグラビアだったり。もう、クラス内は大騒ぎだ。

そんな中で俺は考える。

殺せんせーは何者なのかを。

殺せんせーは実は人体実験の果てにモンスターになった元人間で、みみたいな想像をしたのは確か、浅野理事長が来た時以来だけど、イトナの正体が判れば考察が進むかもしれない。

そして放課後を迎えた。

放課後になると俺たちはシロさんの指示でイトナと殺せんせーを囲むように机を並び替える。

並び替えられた机はまるで……。

「机のリング……!?!」

ビッチ先生が驚愕の声を漏らすと、鳥間先生は頷いた。俺の感想はビッチ先生とまるつきり同じ。こんな暗殺を仕掛けた奴は今までいなかった。

「まるで試合だな」

鳥間先生の言葉に心中で同意する。

「ただの暗殺は飽きたでしよう? ここは一つ、ルールを決めないか? このリングの外に出たら即死刑。どうかな?」

シロの提案を杉野が鼻で笑う。

「なんだそりゃあ。負けても守る奴いるのかよ?」

そんな杉野を制するようにカルマが口を開いた。

「いや、みんなの前で決めたルールを破れば先生としての信頼が落ちる。殺せんせーには効くんだ。あの手の縛りがさ」

そう、殺せんせーは何者であるよりも先に俺たちの教師であろうとする。だから、カルマの言う通り教師としての信頼を失うような真似をこの人はしない。

シロの提案に対して頷いた殺せんせーは追加でルールを作ること
をイトナに提案した。

「いいでしょう。受けて立ちます。ですが、イトナくん。観客の皆さんに危害を加えた場合も負けですよ。いいですね?」

「……………いいだろう」

イトナは頷いた。

それを皮切りにシロさんが手を挙げる。試合開始の宣言をする為に。

「では、合図で始めようか」

「……」

「……………」

「暗殺……開始……！」

シロさんの宣言と共に殺せんせーの触手が物理的に吹き飛んだ。切断されたと言っても過言ではない。

あまりに一瞬のことでゾーンに入る隙間もなく、見逃してしまったが、俺たちは見てしまった。

殺せんせーの触手を吹き飛ばし、今もなお激しくうねり、暴れる、白い触手を。

その触手は殺せんせーではなく、イトナから生えていたのだ。

「……………まじかよ」

予想すらしていなかった光景に俺はただただ唾然とした。

27話 触手の時間

暴れる白い触手。

唾然とする俺たち生徒と教師陣。

何の事情も理解できない俺たちを置いていくように殺せんせーが低い声を発した。

「……………何処だ……………。何処で手に入れた……………、その触手を……………っ!!」
今まで聞いたことのないような低い声。

今まで見たことがない程にドス黒い怒りで染まったその顔で分かる。殺せんせーはイトナが触手を持っていることに本気でキレている。

しかし、何故だ？

何故、イトナが触手を持っている？

以前までの考察を交えて再び思考する。

殺せんせーは何らかの目的で地球を救うためのプロジェクトの被検体になった。そのプロジェクトの内容は恐らくエネルギー問題。

来年の3月に地球を滅ぼすそのエネルギーが本来は地球を救うためのものだったら、と浅野理事長がこの教室に来た時に俺は考察した。

今、触手を生やしたイトナの登場は俺の中の考察を再び加速させることになる。

「キミに答える義理はないよ、殺せんせー。だが分かっただろう？

両親も違う、育ちも違う。だが……………この子とキミは兄弟だ」

シロが今、言った。

親も育ちも違ふと。つまり、遺伝的なものではない。そんな言葉から察するに、あの触手は第三者に後付けされたものだったとしたら？

いや、決めつけるには早い。

「律」

『はっ。』

俺は皆んなの後ろ側に回りながら、スマホの中の律に話しかける。俺の考察に足りないパーツを埋める為に。

「堀部イトナという人物が実在するか調べられるか？」

『……可能です。実行しますか？』

「頼む」

まず疑うべきは堀部イトナという人物が実在するのかどうか。つまり、ここに居る彼が非公式な実験で生み出されたデザインベイビーである可能性。

それによつて殺せんせー元人間説の信憑性が大きく変わる。

「しかし怖い顔をするねえ。なにか、嫌なことでも思い出したかな」

「どうやら、あなたにも聞かなければならないことが多そうだ。シロさん」

「聞けないよ、だってキミは死ぬから」

考察している時に彼らの会話を聞くとしてもその言動の全てが意味深なものに感じてしまう。

俺が考察している間にも触手とその保護者の戦いは進んでいた。シロが袖を持ち上げると何かの光線を放つ。俺たちにとっては眩しい程度。だったのだが、殺せんせーにとっては違ったらしい。

「この光線を浴びるとキミの細胞はダイラタント挙動を起こし、一瞬全身が硬直する」

何故だ？

「知っているんだよ、全部。キミの弱点なら全てね」

何故、コイツはそんなことまで知っている？

俺の思考は目の前で繰り広げられる超戦闘よりもこのシロとかいう男の正体に向いた。もしかして、この男は全ての事情を知っているんじゃないだろうか？

これまで俺が繰り広げてきた考察が全て合っていたのなら、という過程で考察を進めよう。

国や星の将来を左右するエネルギー補完プロジェクト。その実験で殺せんせーやその同種が生まれ、月で彼の同種の実験が行われた結果、被検体は暴走して死亡。月の7割が蒸発した。

被検体の暴走により、同じく殺せんせーの自然死によりエネルギーが暴走、地球が滅亡するってシナリオが俺の妄想じゃなければ？

いや、人体実験やらエネルギー補完プロジェクトの件は俺の妄想に過ぎなくても、殺せんせーの自然死による世界滅亡の可能性は合っているはずだ。他ならない殺せんせーが俺にそう教えたのだから。

考えろ、乃咲圭一。お前の目の前にいる教師が何者なのか。正解に一番近い位置にいるのは俺のはずだろ。殺せんせーからヒントまで貰っているのだから！

考えていると、イトナについて調べ終わったらしい律が声を掛けてきた。

『乃咲さん。堀部イトナは実在します。小さな工場の社長の息子さんだったようですね』

「そうか、ありがとう。律」

堀部イトナは公的に実在する人物だ。

無論、律が調べてくれた堀部イトナが彼であるとは限らないが、彼であると仮定した場合、触手は人間に移植できる、ということになるのではないか？

もし、イトナが律の調べてくれた人物と同一人物ならそれはただの人間に触手を移植できることを裏付けてしまう。つまりは、俺の殺せんせー元人間説を肯定出来てしまうかもしれないってこと。

……なのに、なんだろう。考察は進むのに、ちっとも良い気がしない。

「死ね、兄さん」

イトナの容赦ない一撃が殺せんせーを貫く。

だが、俺は見逃さなかった。貫かれる直前、殺せんせーが脱皮して天井に逃げたことを。

「脱皮か、そういえばそんな手もあったか」

「でもね、殺せんせー。その脱皮にも弱点があることを知っているよ。その脱皮は見た目以上にエネルギーを消費するのさ。よって自慢のスピードも低下する。そしてイトナの初撃で失った触手を再生したね？ 触手の再生にも体力を使うんだ。二重に落ちたパフォーマンス

スでどれだけの力を発揮できるかな?」

「ああ、そうか。理解した。」

考察が進んでいるのに、嬉しくない理由。それは俺の力では何も暴けていないからだ。

こうて考察している間にも新しい情報が後出しジャンケンのようにポンポンと出てくる。

それが気に食わないんだ。

そう、悔しいんだ。

このままイトナが上手くやれば地球は救われる。なのに、ちつとも嬉しくないのはそれは俺たちの手でやり遂げたかったことだからだ。

悔しきで下唇を噛んでいると殺せんせーの足が2本切断された。

「これでまたなお一層体力が落ちたね。殺りやすくなつてこつちとしては助かるよ」

「兄さん、俺はお前より強い」

イトナが勝利を確信した様に宣言をする。

殺せんせーがこれ以上ないまでに追い詰められていた。あと押し、あと一歩で地球が救えるのにやはり俺の気分は晴れない。

「足の再生も終わった様だね。触手を失うと動揺し、触手の扱いは精神状態に左右される……さ、次のラツシュに耐えられるかな」

シロの言葉に俺たちは思わずナイフを握ってしまった。なにか、出来ることはないのか、このまま殺せんせーを殺させていいのか? そんな自問が頭の中で回る。

そんな中で殺せんせーは言った。

「ここまで追い込まれたのは3度目です。一見愚直な試合形式の暗殺ですが実に周到に計算し尽くされている」

殺せんせーから出たのは率直な賞賛。

しかし、口調の端からは譲れない決意の様なものが感じ取れた。

「あなた達に聞きたいことは多いですが、まずは試合に勝たねば喋りそうにないですねえ」

「まだ勝つつもりかい? 負けタコの遠吠えだね」

「シロさんこの暗殺方法を考えたのは貴方でしょうが、一つ、計算に入

れ忘れているものがあります」

「ないね、私の計算は完璧だから。殺れ、イトナ」

シロからの淡々とした命令にまずなく触手を振り下ろすイトナ。しかし、殺せんせーはそれを紙一重で避けながら余裕の笑みを浮かべた。

そして、俺たちの手元から消える対先生ナイフ。あのタコ、俺たちから対先生物質を奪ってイトナの触手を破壊しやがった。

「おやおや、落とし物を踏んづけてしまった様ですねえ」

煽る殺せんせー。しかし、イトナはそれどころではない。触手を破壊されて動揺している。

そこが、勝負の分かれ目だった。

触手の扱いは精神の状態に大きく影響すると、シロは言った。ならば、それは同じく触手を持つイトナにも同じことが言えるだろう。

「同じ触手なら対先生ナイフが効くのも同じ。そして、触手を失うと動揺するのもまた同じことです」

殺せんせーはイトナが動揺している隙に脱皮した皮で彼を包んでしまうと窓から外へと放り投げてしまった。

「でもね、触手の扱いに関しては先生の方が少しだけ老獪です」

放り出されたイトナの脚は地面についていた。つまり、シロの考えたルール上イトナは死刑になるということ。彼の負けだ。

「先生の抜け殻で包んだからダメージはないはずですが、キミの足はリングの外に着いている。先生の勝ちですねえ。ルールに照らせばキミは死刑。2度と先生を殺れませんねえ」

ここぞとばかりに顔色を緑のしましまに変えて煽る殺せんせー。そんな彼に倒してイトナは分かりやすく顔を怒りで歪めていた。

「生き返りたいのならば、この教室でみんなと学びなさい。性能計算で測れないもの。それは経験の差です。君たちよりも少しだけ長く生き、少しだけ知識が多い。先生が先生になったのはね、経験それを君たちに伝えたいからです。この教室で先生から経験を盗まなければ私には勝てませんよ」

殺せんせーがいいことを言っている、その横でシロに焦りの相が見

えた。何かと思うとイトナが触手を真つ黒に染めて教室に飛び掛かってくる。

「勝てない……俺が、弱い……!?!」

ブツブツと何かを言いながら飛び出したイトナ。その触手が向かう先は無論、殺せんせーなんだろうが、その前にたくさんの生徒がいた。

「……うそっ!?!」

「倉橋さん!」

すぐ近くにいたのは倉橋さんだ。

そうと分かったその瞬間、ヤバい、と認知すると同時に俺は瞬時にゾーンに入った。

倉橋さんが襲われることはないだろう。だが、触手を真つ黒に染めるほどの怒りに身を任せたイトナが周囲の被害を考えるととは思えない。

俺は、ゾーンに入り、体を必死に動かした。

イトナが窓縁まで到達するまであとコンマ数秒、俺が倉橋さんの前に出るまで残り7メートル程。

このままだと倉橋さんどころか暴れ狂ったイトナに教室が滅茶苦茶にされてクラスメイトたちが死傷するかもしれない。そんな危機感に襲われる。

以前見た、カルマの投身自殺紛いの暗殺。あの時と同じくらいに全身の感覚が研ぎ澄まされ、世界が遅く感じる。

あの時と違うのは殺せんせーが万全ではなく、満身創痍であること。今の彼に皆を助けられるかは分からない。

そんな極限状況下で俺は自分の内側の声を聴いた。

《……何が欲しい?》

身体が聞いてくる。今までこんなこと感じたことは無かった筈なのに、俺は、今、自然に願ってしまった。身体からの問い掛けに対して、一言。

《速く動きたい》

倉橋さんやみんなを助けられるように。と。

その瞬間、極限状態の中で俺の中で何かが弾けた。

「くっ……あっ……！」

視界の全てがほとんど止まって見えるほどのスローモーシヨンの中で俺は、自分以外の全てよりも、ほんの少しだけ早く動くことができた。

いつも通り体にまとわりつく硬い粘液の様な空気の重さも今は緩く感じる。

俺はゾーンの中でまともに動くことが出来た。

「もつと、周りを見ろやああああ！」

周りの誰よりも早く動けた俺はイトナが飛び掛かってくるのを受け止めて、地面に叩き付けるようにイトナを投げ飛ばした。

イトナを受け止めると同時にゾーンから抜け出し、怒鳴りつけながらイトナを叩き付ける。

「がっ……！」

火事場の馬鹿力的なものが爆発したのか、俺はゾーンで動けない縛りを突破して、イトナの意識を刈り取ることに成功したらしい。

「はあ……はあ……。大丈夫？ 倉橋さん」

「う、うん！ 平気だよ」

自分でも予想以上の動きをしたせい、身体が酷く怠く感じた。息も切れてるし、ゾーンの中で動くなんて事をした所為か、普段以上に頭が疲れた。倒れそうなくらいに疲れたし、頭痛もする。膝が笑って言うことを聞かない。

「……驚いた。随分と生きがいい生徒さんだね、殺せんせー」

誰もが啞然とする中で、シロだけが飄々としていた。飄々と俺を生きが良いとか評価して、伸びてるイトナを背負った。

「ありがとう、乃咲圭一くん。お陰で手間が省けたよ」

「……なんで俺の名前を？」

「さて、どうしてだろうね。あ、それと殺せんせー。すまないね、この子はまだ登校できる精神状態じゃなかった様だ。転校初日で何ですが、しばらく休学させて頂きます」

「待ちなさい！ 担任としてその子は放っておけません。一度E組に

入ったからには卒業するまで面倒をみます！ それにシロさん。貴方にも聞きたいことが山ほどある！」

「嫌だね、帰るよ。それとも力づくで止めてみるかい？」

俺の問い掛けに答えることなく、イトナを背負って颯爽と去ってゆくシロ。そんな彼を殺せんせーがみすみす逃す訳もなく、触手を伸ばして彼の肩を掴む。が……。

パシヤ、と音を立てて彼の肩を掴んだ殺せんせーの触手は壊れてしまった。

「対先生繊維。キミは私に触手一本触れることすら出来ないよ。それに心配せずとも直ぐに復学させるよ、殺せんせー。3月まで時間はなからね。責任を持って私が家庭教師を務めた上でね」

そう言つて立ち去ろうとするシロ。

そんな彼に俺は半ば回答はないだろうと思ひながら一つの問いを投げた。

「シロさん。イトナも触手をもってるけど、来年の3月には地球を爆破するんですか？」

それが俺の気になる問い。

触手を持つてる殺せんせーが来年には地球を破壊するほどのエネルギーを持つなら、触手を持つてるイトナも同じことが言えるだろう。

そう思ったから問い掛ける。

しかし、意外にも返答は来た。短くはあるが、明確な答えで。

「この子はそんなことないよ」

そう言い残して今度こそ立ち去ろうとするシロさん。しかし、何を思ったのか、朝、イトナが明けた穴から出る直前にこつちを振り返り、短く告げた。

「あ、そうそう。お父さんによろしくね。乃咲くん」

「なっ……!?!」

言い残すと今度こそシロは立ち去った。

俺の中には幾つかの疑問が残ってしまったが。

最後、彼はなぜ、親父のことについて触れたのだろう。単なるブラ

フだろうか？

俺のことを知ってるのはよくよく考えてみれば烏間先生の報告書を見ているのであれば不思議でもなんでもないし……。

現状はほとんど何も分かってない。ほぼ考察の域を出ていないのが現状だが、あのシロという男が、殺せんせーや触手にまつわる秘密を握っているのは間違いないだろう。

だが、今考えても確認しようがない。

シロと堀部イトナという転校生は俺たちを引つ掻き回すだけ引つ掻き回して退場してしまった。

?? ?? ??

イトナが去ったあと、教室の復旧をしていると殺せんせーは悩んでいる様だった。普段は掴みどころのない天然キャラを計算して演じていたらしい。

そんなどうでも良い情報求めてないんだけどなあ、なんて思ってるのとビッチ先生が口を開いた。

「にしても驚いたわ。あのイトナって子、触手を出すだなんて」

その核心に触れた言葉にクラスメイトたちがここぞとばかりに食いつく。

「ねえ、殺せんせー。あの2人との関係について教えてよ」

「私たち、生徒だよ？ 先生のこと、もっと知る権利あると思う」

「いつもは適当にはぐらかされてきたけどさ、あんなの見せられたら聞かすにはいられないぜ」

皆の言葉と視線が殺せんせーに集中する。

流石に逃げ切れないと観念したのか、殺せんせーはゆっくりと真実を語り出した。

「しかたない……話さなばならない様ですね。先生の正体について。

実は……実はね……」

誰もが息を呑む中、真実が告げられた。

「実は先生、人工的に作られた生命体なんです！」

「だよね？　で？」

「反応薄っす!？」

クラスメイトたちがごく当たり前の様に殺せんせーが人工的に作られた生命であると推理する中、俺は考察を振り返っていた。

地球を救う英雄になるはずだった。

地球を滅ぼす巨悪に成り果てた。

触手は人間に移植できる。

殺せんせーは3月に自然死する。その際に地球を巻き込んでしまう可能性がある。

シロという人物が謎を握っている。

今わかっているのはこれだけだ。

殺せんせーは本当に謎が多すぎる。

「知りたいのはその先だよ、殺せんせー。どうして、さつきは怒ったの？　イトナくんの触手を見て。先生はどうして生まれて、何を思っただこに來たの？」

渚の実に核心を射抜いた言葉に殺せんせーは不敵に笑った。

「残念ですが、それを今、君たちに話しても無意味です。先生が来年地球を爆破してしまえば皆さんが何を知らうが塵になっちゃいます」

「まただ。殺せんせーは俺たちが核心に近づこうとするたびにこうして地球がなくなれば無意味理論を展開して真実に俺たちを近づけさせてくれない。」

「きつと、俺が考察した内容を全て語り聞かせても『そんなこともあるかもしれない』としか言われないだろう。」

「逆に君たちが地球を救えばその後には真実を知る機会はいくらでもある」

「そう、結局はそこに帰結する。」

「もう分かるでしょう？　知りたいのなら殺してみなさい」

「そのあとでなら真実を知るチャンスはいくらでもあるのだから、と。」

「暗殺者と暗殺対象。それが私と君達を結びつけた絆の筈です。先生の中の大事な答えを知りたいのなら、君たちは暗殺で聞くしかないの」

です。……質問がないのなら今日はここまで！」

殺せんせーはそう言い残すと悶えながら教室を出て行ってしまっ
た。

?? ?? ??

放課後なので俺は教室の片付けもそこそこに切り上げると鳥間先生
の元に向かう。だが、いつもとは違い、今日は複数名でだ。

元に向かう。だが、いつもとは違い、今日は複数名でもだ。

「鳥間先生、今日もお願いします」

「乃咲くん……？ 今日はいつもとよりも人数が多いがどうかしたの
か」

いつもは俺くらいしかいなかった放課後暗殺訓練に今日はクラス
メイトの大半が同行して来たので流石の鳥間先生も驚いたらしい。
首を傾げて聞いてくる。

「あの、もっと暗殺のこと、教えてくれませんか？」

「……？ 今以上にか」

「今まで」誰かが殺る” んだろうってどっか他人事だったけど」

「今日のイトナみて思ったんだ。俺たちの手で殺りたいって」

「他の誰でもない。俺たちの手でって」

なんだか少し複雑な気分だ。クラスメイトたちのやる気が上がった
ことを喜ぶべきなのか、それとも鳥間先生を独占できなくなることを
嘆くべきなのか。

まあ、みんなの意見を聞いている鳥間先生もどこか嬉しそうだし、
ここは素直に喜ぶとしようか。

「もしも今後、強力な殺し屋に先を越されちゃったらさ、今日まで俺た
ちが何をして来たのか分からなくなる」

「だから、殺れるだけのことを殺れる限りだけやりたいんです！ 私
たちの手で！」

「俺たちの疑問の答えは殺して、俺たちの手で見つけたい」

磯貝がそう締めくくる。

「とか言ってるんで、みんな連れて来ちゃいました。よかったですか、烏間先生？」

俺が返ってくる答えを知りつつそういうと烏間先生は笑ってくれた。

「分かった。では希望者には放課後も追加で訓練を行う！ 今後、ますます厳しくするからそのつもりで！」

「「はいっー！」」

「それじゃ早速、新設した20メートル垂直ロープ昇降開始！」

「「厳っ!!」」

クラスメイトたちの答えを聞いて思った。

やっぱり、手っ取り早いのは殺せんせーを殺して真実を知ることなんだろう、と。

今後も考察を止めるつもりはないが、今日覚えた悔しさを忘れない様に、俺もより一層暗殺に励もうと思った。

「乃咲くん」

「ん？」

「さつきは助けてくれてありがとね」

「……たまたまだよ」

ゾーンに入ってからまで駆け出してしまった照れ隠しに俺は倉橋さんからそっぽ向くしか出来なかった。

??

??

??

「ねえ、あなた」

「……どうした？圭」

「声が聞こえたわ」

「声？」

「ええ。『何が欲しい？』って」

「なにが、欲しかったんだ？」

『『時間』って答えたの。そしたら時々、1分が何時間にも感じられて

驚いちゃった」

「……」

「私が欲しい時間は、そういう意味じゃなかったのだけどね」

銀髪の妊婦は寂しそうに呟くと命の宿った自らの腹をそつと撫でた。

28話 球技大会の時間 前半

授業も終わり、烏間先生の事情で放課後訓練もなかった今日。俺は杉野、カルマ、渚と一緒に帰っていた。

「マジ？ ソニックニンジャ見に行っただ？」

「そうなんだよ。殺せんせーにハワイまで連れて行ってもらってさ」

「ま、そのあと英語で感想文求められたけどね」

なんて雑談をしていると杉野がふと視線を練習に打ち込んでいる野球部に向けた。

E組とは言え、あるのは櫛ヶ丘学園の敷地内。帰り際に本校舎の側にやってしまうことなんて幾らでもある。そんな時、ふと自分の所属していた部活が練習していたら視線を向けたくもなるだろう。

ま、俺は帰宅部だから分からないけど。

「お、杉野じゃん？」

この学校の生徒にしては侮蔑の少ない声色に思わず感嘆の声を漏らしそうになるのを堪えて、声をかけられた杉野を渚達と見守っている。

「おお杉野！ たまには顔だせよな」

「ははっ、ちよつとバツが悪いよ」

本当に本校舎の連中にしては珍しくフレンドリーだな、コイツら。野球部、意外と良いやつかも。

「来週の球技大会、お前投げるんだろ？」

「そう言えばまだ決まっていなかったけど……うん、投げたいな」

あ、そうか。来週は球技大会もあるんだったか。綺麗さっぱり忘れていたよ。

と思わず学校行事に顔を渋く歪ませていると、杉野たちの雰囲気少し拗れだした。

「しっかし、良いよなあ。杉野は。E組だから毎日遊んでられるだろう？ 俺らは毎日へとへとでさ」

「よせ、傷付くだろ。進学校での部活との両立。選ばれた人間じゃな

いならしなくていいことなんだ」

前言撤回、野球部もE組を舐め腐ってる連中だったことに変わらな
いらしい。見る目ないな、俺。

自分の見る目のなさに打ちひしがれているとカルマがやや喧嘩腰
で野球部の主将に突っかかる。

「うんッ！ そうだよ」

うわっ、笑顔で自分達は選ばれた人間だとかほざいたぞ。一周回っ
て恥ずかしくないのかね。

野球部たちの反応に置いていかれ気味な俺たちを他所に野球部主
将、進藤が得意げに語り出す。

「気に入らないか？ なら来週の球技大会で見せてやるよ。お前ら
に、人の上に立つ者とそうでない者。この歳で開いてしまった大きな
差をな」

「大層なこと言ってるけど、結局野球しようぜってことだよな？」

「……………乃咲」

「んじゃあ、早速作戦会議だ。帰るぞ」

このままだとカルマが何にキレるか分からないし、俺はアイツら多
分嫌いだし、渚も親友傷付けられてムツとする程度には怒ってるし、
杉野のSAN値は削られるで碌なことがないと悟ったので俺は杉野
の手を掴み、少々強引にその場を後にした。

?? ?? ??

という話を殺せんせーに持って行ったところ、球技大会があること
自体を認知してなかったらしく、まずは球技大会について説明するこ
とから始まった。

「クラス対抗球技大会！ 健やかな心身をスポーツで養う！ 大いに
結構！ ……ですが、E組だけエントリーされてないのは何故です
？」

「E組は1チーム余るって素敵な理由で参加できねえんだ」

「なるほど、いつものやつですね」

「そ、んで、いつも通りに見せ物にされる訳よ。エキシビジョンマッチでせよ」

「エキシビジョン？」

「そ、男子は男子野球部と、女子は女子バスケット部と試合させられるのよ。大会はあくまで一般生徒の為の物だから出れなかった部活連中にも活躍の機会をつてき、要するに当て馬兼見せ物つてわけ」

三村の説明が終わると寺坂組が離脱を表明する。まあ、予想できていたことなので驚かないが。

「俺ら見せ物とか勘弁だわ」

「お前たちで適当にやってくれ」

「あ、おい！ 寺坂！」

磯貝も慌てて止めようとするが、その時にはすでに時遅し。寺坂たちは教室を出て行ってしまった。

その行動で悪くなりかけた空気を払拭するように前原が杉野に向かって問いかける。

「野球と言えば杉野だけだし、なにか勝つ秘策とかねえの？ アイツらの弱点とかさ」

「……無理だよ。最低でも3年野球してた奴と殆どが野球したことのない俺ら。勝つどころか、勝負にすらならねえよ。普通はな」

ぼやく様な杉野。しかし、その後ろ姿からは闘志のようなものが感じ取れた。

「それにさ、うちの野球部はかなり強えーんだ。特に進藤。豪速球で高校からも注目されてるんだぜ？ 勉強もスポーツも一流とか不公平だよな。でもさ、けどさ、勝ちたいんだ、殺せんせー」

杉野のやる気は俺たちに伝播し、そして殺せんせーにもやる気は伝わったらしく、杉野の言葉が言い終える前にトレーニングウェアに着替えて戻って来た。

「善戦じゃなくて勝ちたい。好きな野球で負けたくない。野球部追い出されて、E組に来て、むしろその思いが強くなった。E組とチーム組んで勝ちたい！ ……まあ、でも無理かな？ 殺せんせー」

「わくわく……わくわく……！」

トレーニングウェアに着替えた殺せんせーの触手に握られているのはバット、ボール、グローブ、野球盤、竹刀が握られていた。どうやらその万能の触手で俺たちを鍛えてくれる気満々らしい。

「お、おう。殺せんせーも野球がしたいんだな……」

「先生、一度スポ根ものの熱血コーチをやってみたかったです！」

殴ったりはコンプラ的に出来ないの、ちやぶ台返して代用します！」

やる気満々に色々なものを準備しまくっている殺せんせーに「準備よすぎだろ！」とテンポの良いツツコミ入れる杉野を気に留めることなく、殺せんせーは嬉しそうに言った。

「最近の君たちは目的意識をはつきりと口にする様になりました。勝ちたい、殺りたい。どんな困難な目標に対しても揺るがずにね。その心意気に応えて、殺監督が勝てる作戦とトレーニングを授けましょう！」

こうして来週まで続く殺せんせー……もとい、殺監督による猛特訓が始まった。

?? ?? ??

「殺投手は時速300kmの球を投げる！」

殺せんせーのセリフと共に投げられた一投。それをゾーンに入り、見切り、タイミングを合わせてフルスイングし、バットにヒットさせる。

「腕痛え!？」

「ちよつと乃咲くん!? 無茶しないでください!?! ゾーン持ちのあなたはうちのチームの打撃のエースなんですからね!?!」

辛うじてヒットさせたが、腕を持っていかれそうになった。流石時速300km。恐るべし。

「殺内野手 は分身で鉄壁の守備を敷く!」

って痛がつてる場合じゃない!? さっさと走らないと!? 容赦ないぞ、殺監督!

「殺捕手は囁き戦術で集中を乱す！ ……修学旅行の時といい、この前といい、乃咲くん。倉橋さんと縁がありますねえ？もしかして気があるのでは？」

「ちよつ、ちがつ、ちやうんすよ！」

予想外のネタが飛び出して来たので思わず否定を入れるが、その間に時速300kmの豪速球はキャッチャーミットに収まってしまった。

「ヌルフッフ、その反応、満更でもなさそうですねえ。メモメモ……。そう言えばこの前も倉橋さんが危ないと判断した時に凄い力を出してましたし」

「ほっとけ!？」

「乃咲いゝ！ 集中集中！」

「うっせえ、エアギター！ モノマネすつぞ」

「なっ!? 聞こえてたのかよ!？」

と、まあこんな感じで猛特訓は続いた。

ちなみに殺せんせーからの精神攻撃は確実に俺のSAN値を削つてゆき……。週末になる頃には。

「皆が愛してくれた殺監督は死んだ。何故だ!？」

「の、乃咲が壊れたぞ！」

「そうだ、桜なボーヤだからさ！」

「何処情報だ!？」

「ジーク・ジオン!!」

「の、乃咲!？」

「復唱！ ジーク・ジオン!!」

「!!ジーク・ジオン!!」

壊れた俺を誰も治してくれなかった。

?? ?? ??

『それでは最後に、E組対野球部選抜のエキシビジョンマッチを行いますー!』

絶対いまのエキシビジョンマッチって余興試合にルビ振ってるよね。その証拠にとうか、野球部はやる気満々。まあ、彼等としては大会に参加できず、フラストレーションが溜まっているのだろうか。完璧に俺たちは見せ物兼、アウエイ。

なんでだろーな、アウエイ。アがなければウエイとか陽キャがキラキラしてそんな言葉なのにアがづくだけ一瞬でマイナス思考な言葉になるのは何故だろう。

……陽キャがキラキラってなんぞ？　なんか、今の一瞬、すっごい頭悪いこと考えてなかつたか、俺。

そうこう考えてるうちに試合前の整列の号令が鳴ったのでE組と野球部が横一列に並ぶ。

「学力の体力を兼ね備えたエリートだけが選ばれた人間として人の上に立てる。それが文武両道だ、杉野。お前はどちらもなかった、持たざる者だ。………締まっていくぞー！」

「「おう!!」」

おーおー、野球部はやる気十分みたいだな。一方杉野は言いたいことだけ言われて不満気味っぽいな。よし、発破かけるか。いつかのテスト前みたいにならない程度にね。

「杉野、言われっぱなしでいいのか？」

「乃咲……」

「少なくとも俺たちのエースはお前なんだぞ、そのお前がそんなじゃ負けるぜ？　それで良いのか？　勝ちたいんじゃないのか？　俺たちと？」

「……へっ！　言われなくてもわあってるよ！　いつも発破かけてくれてありがとな乃咲。よし！　俺たちも気張って行くぞー！」

「「おう!!」」

こうして試合が始まった。

始まったと言っても、俺たちがやるのは単なる野球じゃない。ターゲット野球部を仕留める為の暗殺野球だ。

「つか、殺監督どこよ？」

「あ、監督はあっち」

試合が始まるというのに姿を見せない殺せんせーを探していると、渚が指差した先に遠近法でボールに紛れた殺せんせーが体ごと埋まっていた。

「顔色で指示出すって」

「……頭いいんだが、悪いんだか……」

渚からサイン表を受け取ると殺せんせーが青緑、紫、黄土色と顔色を変えた。

「なんて？」

「えつと……殺すつもりで勝ってつき」

パターン複雑すぎるだろ。殺監督。

「んじゃあまあ、気張っていきますかね」

準備運動がてら身体をほぐす。

『一番、サード、木村くん』

「行って来いや、一番手」

俺たちの攻撃側から試合開始。

俺たちの先頭打者は木村だ。なので背中を押してやると『先頭打者とか勘弁してくれ』と弱気な言葉が飛んで来た。

しかし、彼はきっちり仕事をこなす。

この1週間、俺たちはマッハ20のモンスター相手に練習して来た。その成果は……。

『おつと!? バントだああああ——!! E組木村、良いところに転がしたぞ! 内野、誰が取るかで一瞬迷ったっ! その隙になんと木村は一塁へ! ファーストへボールが投げられるが……セーフ!』

これは意外! E組ノーアウト一塁です!』

E組男子はバントを習得した。
時速300km相手に練習してたんだ。140km程度なら難なくバントで好きな位置に転がせる程に。これが殺せんせーの考えた勝ちへの作戦の一つだった。

荒木の実況は試合が進む度に反応者の連中にとってはどんどん不穏な方向へ流れて行く。

『2番キャッチャー潮田、彼もまたバントだあああ! 今度は三塁線

へ向けての強いバント！ 前に出て来ていたサードもこれにはたまたまず横を抜かれたああああ！ これでE組ノーアウト1、2塁です！』

木村に続く渚もバント。そして彼等に続いた磯貝もまたバント。また三塁線に向けてのバントだが、今度は緩やかなソフトバント。守備も困惑し、その間に木村を先頭に走者は駆け抜けて一気に満塁になった。

『E組またもバント……！ ま、満塁だ！ ちよ、調子でも悪いでしょうか、進藤くん』

ポカンとした顔で俺たちを見ていた進藤。その顔が次の打者を見た途端に変わる。当然だ。次の打者は散々アレだけ煽っていた因縁の相手、杉野なのだから。

杉野はピッチャーがフォームを取る前にバントのポーズをする。その瞬間、進藤の瞳に怯えの様なものが一瞬だけ過ぎる。しかし、それを振り払ったのか、振りかぶった一球。

それを待つてましたと言わんばかりに杉野はバントの構えを解き、バットをフルスイング。

結果、豪速球が売りだったはずの進藤の球は杉野に攻略され、杉野渾身のスイングは走者一掃のスリーベースヒットを叩き出した。

と、そこで俺らの戦場にやって来た魔王が1人。向こうのベンチに降臨したらしい。

「顔色が優れませんね、寺井先生。お体の具合が優れないのでは？」

「り、理事長先生!?!」

「すぐに休んだ方がいい。部員たちも心配のあまり本来の力を出せていない」

「そ、そんなことはありません！ 私はこの通り元気で——」

「病気で良かった。そうでなければこんな醜態を晒す教育者が我が校に在籍しているはずがない。ああ、やはり酷い熱だ。誰が、先生を医務室へ。その間は私が監督をやります」

ひ、酷いゴリ押しを見た。

寺井の奴、めっちゃめっちゃ元気だったのに理事長に肉薄されてから恐

怖のあまり泡吹いて倒れたぞ。

理事長め、そこまでしてE組優位なこの状況を覆したいのか、そんなに、俺らが気に食わないのか!？」

『い、今入った情報によりますと野球部顧問の寺井先生は試合前から重病で野球部員たちも心配で試合どころではなかったとのこと！ それを見かねた理事長先生が急遽指揮を取るそうです！』

「まじか、一回表からラスボス出やがったぞ」

「あーあ、タイム貰って全員に何か言ってるぞ」

「こつちもなんかやっておくか……よし、全員復唱、ジーク・ジオン！」

「「ジーク・ジオン！」」

「乃咲は壊れたままだったのか」

よし、俺たちの気合いもバッチリだ。

が、しかし、気合いでどうにもならないこともあるもんで。浅野理事長はいくつか指示を出してベンチに下がったと思ったら野球部の守備陣もバッターボックス付近まで下がって来た。

これはアレだな、浅野理事長にこつちには殆どバントしかないことバレてるな。

「バントしかないってバレてるな」

「……つてもこんな近い距離ダメだろ!? 目に入ってバッターが集中出来えよ!?!」

岡島もたまらず抗議するが、竹林が補足する様にメガネを押し上げながら呟く。

「ルール上ではフェアゾーン内なら何処を守っても自由だね。審判がダメだと判断すれば別だけど……審判の先生はあっち側だ。期待できな」

その後、前原がボールを打ち上げてしまい、アウト。続く岡島と千葉は三振してスリーアウト。攻守入れ替えだ。

これは勝利も絶望的……かと思われたが、杉野が良いピッチングを見せてくれる。

ヌルヌルと曲がる変化球で相手チームを尽く空振りさせていた。凄いなアイツ。

いつだった野球での暗殺に失敗した時以来、杉野に野球を教わりながら練習に付き合うことはあったが、こうやって第三者に通用しているところを見ると彼の才能がよく分かる。

友人の才能が光って見えるのはなんだか、嬉しく思えた。

29話 球技大会の時間 後半

『3者連続三振っ！ スリーアウトチェンジです！ 攻守が入れ替わり、再びE組の攻撃になります！』

攻守の入れ替わり際に何気なく理事長を見てみると、進藤に何かをひたすらに囁いていた。

「繰り返し言ってみよう。『俺は強い』」

「……俺は強い」

「腕を大きく振って投げる』」

「腕を大きく振って投げる」

「力で振じ伏せる』」

「力で振じ伏せる」

「踏み潰す』」

「……踏み潰す……！」

何アレ怖い。顔をあんなゼロ距離すれすれまで近づけられて、囁く様に指導するとか最早洗脳だよ。

嫌な方向に甲斐甲斐しすぎるぜ、理事長。

そういえば点数落としたばかりの頃の俺に浅野が似た様なことやって来たっけ。そう思うと親子なんだなあ、あの2人。

などと浅野親子の恐ろしさに戦々恐々としているうちに戦局は進む。

『2回表！ 野球部変わらずこの鉄壁のバントシフト！』

相変わらず邪魔なくらいに前傾姿勢な守りの態勢。そんな状況に嫌気がさしたのか、あるいは殺監督からの指示なのか、カルマが口を開く。

「ねえー、これズルくない？ 理事長。こんだけ邪魔な位置で守つてるのに審判の先生も何も言わないの。一般生徒お前もおかしいと思わないの？ ってそうか、お前らバカだから守備位置とか理解してないんだね」

やべえ、カルマの奴、素で言ってるのか、あえて挑発する様に言っ

てるのかわからねえぞ、これ!?

こんなカルマに外野というか観客たちから野次が飛ぶ。うるせえぞE組風情が! とかなんとか。

カルマのそんな野次を気にせず遠近法でボールに紛れた殺せんせーの方を見る。どうやら彼の指示だったらしい。今のところただ相手と観客を挑発した様にしか見えないが、どんな意味があるんだろう?

ちなみに2回表は俺たちに良いところはなし。魔改造された進藤に三振やアウトを取られ、攻守交代。

『そして2回裏! 絶好調の進藤くんが打撃でも火を吹く! E組はまずい守備で長打を許してしまった!』

『この回の集中打で2点を返し、いよいよ3対2! いよいよE組を追い詰めたぞ!』

そんなこんなで迎えた3回表。三村、菅谷も三振を取られ、打撃が俺に回って来た。

「乃咲、殺せんせーから司令が来たぞ」

「へ?」

バットを持って来てくれた杉野がそう言ったので殺せんせーを見ると何やら顔色を変えて何かをアピールしてた。これはあれか?

遠慮せずにかっ飛ばして良いぞって指示なのか?

なにぶん、今まで見たことないサインだし、今までよりも色の変わり方……サインの内容が複雑だ。

「えっと、『挑発して打ち返してやりなさい』だってさ」

「ピッチャー返ししろってこと?」

「やれるのか?」

「楽勝だぞ」

「……しないでやってくれ。アイツ、あんな風に言ってるけど悪い奴じゃないんだ」

「……しゃーないのお」

ピッチャー返しする気満々だったのだが、杉野の気遣いで命拾いたな、進藤。

俺は杉野からバットを受け取り、ボックスに立つ。と、それと同時にバットを高らかに掲げて見せた。

『おっと乃咲い、ここで予告ホームランだ!』

「踏み潰す……! 乃咲い!」

野球で1番の見せ場兼挑発といえればこれだろ? 殺せんせー?

遠くで朱色の丸を浮かべる担任に頷き進藤のピッチングを2回見送る。

『ああつと、予告ホームランまでしておてバッター一度も振らずにツーストライク! なんだ? 乃咲、格好悪いぞ』

「うっせえ、ほっとけ。ファールとか無しに次の一球で進藤の球を会場から叩き出してやるからよ」

行動での挑発も忘れない。すかさず飛んでくる観客からのブーイングも気にすることなく、俺はゾーンに入る。進藤の次に投げてくる球種がカーブかストレートか判断するために。

あの握り方、ストレートかな。杉野の練習に付き合った日々を思い出しながらそう判断した俺はバットを強く握り固めた。

投げ放たれる一投は止まって見えた。

俺はタイミングを合わせてバットを振り、ゾーンから抜ける。振り抜いたバットはボールをまっすぐ打ち抜き、弾き返されたボールは電光掲示板を軽々飛び越えて場外に飛び出した。

『おおっと! 野球部、バント対策が裏目に出た! 打たれたボールは勢い衰えず伸びる伸びる! は、いや、ちよつと、伸びすぎ……あつ……E組乃咲、ほ、ホームラン……』

ポカンとする面々を他所に挑発を兼ねてゆつくりと1塁、2塁、3塁を周り、ホームに戻る直前、啞然とする進藤にやはり挑発を兼ねて言い放った。

「すつこい球速だったね! ——止まって見えたよ」

出来るだけ醜悪な笑みで。

俺の笑みを見た進藤は赤っ恥をかき、顔を真っ赤にしていたが挑発は成功かな?

その後、アウトを取られた俺たちは守備に回る。3回裏。このエキ

シビジョンマッチにおける最終ラウンド。そんな極限状態ではあるが、今のところは4対2で勝ち越している。

だが、杉野以外は野球初心者の寄せ集めでしかない俺たちと3年間ガツチガチに野球ばかりしていた野球部ではその差も簡単に覆る事だろう。

なにがなんでも守り通す。そんな意気込みがクラスメイトたちから伝わる中、俺たちの裏では監督同士による熱い攻防が繰り広げられていた。作戦には作戦を、目には目を、歯に歯を。バントにバントを。

3回裏、野球部たちの攻撃。

彼らの姿勢は皆、バントの構えだった。

「マジかよ。野球部が初心者相手にバントなんて」

「いや、最初にバントをしたのは俺たちだ。だからアイツらには大義名分があるのさ。『手本を見せる』ってな」

ぼやく岡島に解説しながら焦る。俺たちはバントの練習しかしていない。だから、バント処理なんて出来るわけもない。

『野球部！ バント地獄のお返しだ！ 同じ小手先の技なら野球部の方が遥かに上！ そしてE組の守備はザル以下！ ランナー楽々セーフ！ E組よバントとはこうやるんだ！』

まずい。荒木の実況も勢いを取り戻しつつある。それは野球部の劣勢がひっくり返りつつあるという事。

『あつと言う間にノーアウト満塁だ！ 一回表のE組と全く同じ状況！ 唯一違うのはこの男！ ここで迎えるバッターは我が校が誇るスーパースター進藤くんだと言うこと！』

「踏み潰してやるう、杉野お！」

だから怖いって、アイツ。

どんな洗脳したんだよ、浅野先生。

などと思っていると地面から殺せんせーの顔が生えて来た。同時にカルマがこつちに向かって来たので2人で殺せんせーの指示に耳を傾ける。

「2人とも、きっきの挑発が活きる時が来ました。あなた達2人で前衛に立ちなさい」

「あー、なるほどね」

「まじかよ」

言われるが間に俺とカルマはバッターボックスすこし手前まで出て守備に着いた。

ポカンとする進藤に向かってカルマが言い放つ。

「さつきオタクらが同じことをした時、審判はなにも言わなかったなら、俺たちがやっても問題ないよね？」

問い掛ける先は理事長。

そんな理事長はどこ吹く風。

「ご自由に。選ばれた者は守備位置程度で心を乱されはしない。遠慮なく振りなさい、進藤くん」

「あ、そう？…じゃあ遠慮なく」

理事長から許可も降りたことだから俺たちはさらに前進してバッターボックス一歩手前まで近付いた。

「……は？」

あまりに常識外れた位置での守備に後ろの杉野から乾いた笑いが聞こえるが、ここは気にしないでおう。さつき、向こうのチームが同じことをした時、審判は何も言わなかったし、カルマの抗議を拒絶した外野がこの状況に文句を言えるはずもなく。

全てはこのスタジアムの後ろの方でねるねるねを作って食べている音速タコの策略だ。

まったく頭が下がる。

何処から何処まで考えているんだろう？ あのタコは。いや、そんな殺せんせーと互角の頭脳性練り広げてる理事長も大概だけどき。と、ここでも一応挑発しておくか。

「進藤、さつきのお詫びと言っちゃなんだが、思いつきりスイングしてくれて良いぞ。なんなら当てるつもりで振れって」

「そうだよ、気にせず打てよ、スーパースター。ピッチャーの球の邪魔はしないから」

バットを振れば直撃は免れない距離での守備に思わず進藤は理事長に助けを求める様に視線を向けるが帰って来た言葉は無慈悲。

「気にせず振りなさい。進藤くん。骨を砕いても打撃妨害を受けるのはE組の方だ」

その無慈悲さは本来なら俺たちに向けられている言葉なのだろうが、今は逆効果。進藤の目には怯えが見える。振って、当たってしまったら？ 怪我をさせてしまったら？ 最悪死ぬのでは？ と。

そう、その迷いこそが俺たちの狙い。

後ろで杉野がピッチングしたのか、進藤がバットを振る。ただバツティングするには大振り。恐らく思いつきり振ればびびって俺たちが引くともおもつたのだろう。だが、その程度であればゾーンに入ることなく躲すことができる。

「ダメだよ、そんな遅いスイングじゃあ。次は殺すつもりで振ってごらん？」

「そうそう。理事長の言う通り、打撃妨害を取られるのは俺たちで？」

お前には一切非はない訳だからさ」

こんな具合で煽っていると、進藤の体が震え出した。どうやら浅野理事長の教育に自分の体がついていかなくなつたらしい。

ランナーも観客も、この野球の形をした異常な光景に完全に飲まれてしまったらしい。野次はもう、飛んでこなかつた。

「う、うわああああ!!?」

『バッター腰の引けたスイングだあ!』

悲鳴混じりなスイング。僅かにカツン、とバットに触れて打ち上がったボールをキャッチして、渚に渡す。

『サードランナーアウト!』

「渚! そのボール三塁へ!」

「う、うん!」

磯貝からの指示でサードを守る木村にボールがパスされ、セカンドランナーもアウト。木村からファーストを守る菅谷にボールがパスされたことでバッターの進藤もアウト。

『バッターアウト……と、トリプルプレー。げ、ゲームセット!』 な、なんと、E組が野球部に勝ってしまったああああ!!?』

荒木の実況が少し気持ちよく感じた。

こうして俺たちE組は野球部に勝利した。

恐らく、このピッチに立った者以外は知る由もないだろう。この試合の裏で地球を滅ぼす怪物とこの学校のラスボスが熾烈な争いを繰り広げていたことなど。

「ゴメンな、進藤。はちゃめちゃならプレーしちまって」

勝った感動に皆が打ち震える中で杉野だけがヘタレこむ進藤に駆け寄っていた。

「でも分かってるよ、野球選手としてはお前の方が全然強い。これでお前に勝ったなんて思ってるねーよ」

「だったら……なんでここまでして勝ちに来た？ 結果を出して俺より強いと証明したかったんじゃないのか？」

「んー……」

進藤の問いに言い淀む様に俺や渚、カルマ達を見た。

「渚と乃咲は俺の変化球習得に付き合ってくれたし、カルマの反射神経とかみんなのバントの上達ぶりとか凄かったろ？ でも結果出さなきゃそれが上手く伝わらないし、表現できないっていうかさ……」

杉野は鼻の下を照れくさそうに掻きながら言った。

「ようはさ、自慢したかったんだ。昔の仲間と今の仲間をさ」

聞いていても照れ臭くなるような言葉に俺まで鼻の下が痒くなってしまう。

そんな杉野の言葉に感化されたのか、進藤は清々しそうに立ち上がって笑って言った。

「覚えとけよ！ 杉野、次やるときは高校だ！」

「おうよー」

進藤の何気ない言葉について考えさせられてしまう。彼らは来年の今頃には地球がなくなってしまう可能性なんて微塵も考えていないんだろう。しらないんだからそれが当然なのだが。

俺たちの暗殺は、そんな彼らを守る為の物でもあるのかも知れないな、とふと思った球技大会だった。

30話 アイディアの時間

最近、寝起きの布団が少しばかりウザったく感じる様になって来た。こんな風に感じる様になるってことはそろそろ夏だと言うことだろう。

まあ、日付は7月1日なのですつかり夏であることに間違いは無いのだけだ。

今日から夏服だ。半袖出さないよ。

『おはようございます、乃咲さん』

「おはよう」

もはや律がスマホに出て来ても驚かなくなってきたことに驚きつつ、律も夏服仕様になつていている事に気づく。

「夏服似合ってるな、律」

『えへへ、そうですね？ありがとうございます！乃咲さん』

ビッチ先生のせいで女生徒の変化を褒めないと、なんて思考が頭にこべりつき始めたぞ。やばいな、ビッチ先生に毒されて来てる。

なんて思いながらいつも通りの朝食を食べて学校に向かう。今日は倉橋さんと遭遇することはなかったな、少し寂しいと思うのは何故だろう？

そういえば最近、何かと倉橋さんを意識することが増えたよな。たまたま登校時間が被っただけのあの日から修学旅行、この前、それから気が付いたら倉橋さんを目で追っていることが多い様な気がする。

……もしかして、俺って倉橋さんのこと好き？

いや、好きか嫌いかでいえば好きだし、普通か好きかでも好きと答えるが、きつとlikeであつて Loveではないはずだ。だってそんな感じしないし。

でもこの前、イトナが転校して来たときにたまたまあつた、ゾーン中に動ける様になつたって事態は倉橋さんが危ないと思つたあのとき以来発生してないし。

やばいな、思考がドツボにハマりかけている。

いいや、一旦この思考は忘れよう。

そう決意して気を取り直し、今日も元気よく挨拶しながら教室の扉を開ける。

「おっは——」

「乃咲くん、おっは——」

「く、倉橋さん!?!」

考えを巡らせていた相手がいきなり目の前に現れ、思わずゾーンに入って打開策を模索してしまった。

え、倉橋さん!?!ナンデ!?!

あ、夏服似合ってる。見える白くて柔らかかそうな二の腕がまぶすいい……。

「……はっ!?!」

危ない。あともう少しで変態になるところだった。教室の中で夏は男子には辛い時期だよなあ!?!とか言ってる岡島と同等の扱いを受けるのはごめん被る。

オレはしようきにもと、った!

「いけませんよ、露出の季節に平常心を乱しては」

などとグラビアを開いて真顔を晒しているエロタコが申ししており……。って普通に生徒の前でグラビア広げる様になったな、このタコ。

なんか最近、性癖がオープンになって来たよな、殺せんせー。巨乳好きも最早隠さなくなってるし、それで良いのか、聖職者。教師って聖職者だよな?!

今日も今日とでツツコミどころ満載な担任に呆れていると俺の後ろから菅谷が来た。

「ああ……今日から半袖だったのは計算外だった。晒したくなかったぜ、この神々に封印された左腕はよ……」

声が出たので何気なく振り返るとそこには腕に謎の刺青をした菅谷が立っていた。

これには俺も思わず口を開く。

「菅谷、厨二病はともかくとして、刺青は辞めておけ。公共施設が使えなくなるし、妙な目で見られる様になる。せめてボディペイントくら

いに……」

「あの乃咲が真面目に菅谷の将来心配してるぞ……珍しい光景だな」

「あ、ああ」

「え？ 違げえよ、ほら、これペイントだ」

「……え？」

菅谷の訂正に何気なく彼の腕をじっくりと見る。言われてみると肌触りは肌の上というか、肌そのものに描かれている感じはする。

あれだ。どちらからというところ刺青というよりも民族的なボディペイントのそれに高い様に思える。

「あー、インドのやつっしょ？」

「あ、知ってるんだ？ カルマくん」

「うちの親、インドかぶれでさ、旅行いく度に書いて来るよ、両腕にさ」

「へー！ ペイントなんだ！」

「そ、メヘンディアートってな。色素が定着したら1週間ぐらい取れないんだ」

「ほえー」

菅谷のメヘンディアートなるボディペイントを眺めてみるが、良さはよく分からない。

多分、俺は美術的感覚って奴が乏しいのだろう。もしかすると見る奴が見たらスゲーってなるのかもしれない。いや、俺もほえくつては思えるんだけどさ。

「よ、良かった！ 先生てつきりうちのクラスから非行に走る生徒が出たのかと」

菅谷のボディペイントを見て思春期の子供に対する教育本を無数に広げて焦った様な声を出す殺せんせー。こういうところ、相変わらずチキンだな。

殺せんせーは過剰なまでに世間体を気にする。

……ちげえ。殺せんせーが世間体を気にするのは当たり前ってか、なんならもつと気にするべきなんだ。忘れてた、この人そう言えば国家機密だったわ。

そうだそうだ、そうだった。やべえぞ。本気で殺せんせーが国家機

密だつての忘れてた。

つか、国家機密のくせにコンビニいたり、グラビアで鼻の下伸ばしたり、毎度毎度妙に俗物的過ぎるんだよ殺せんせー。

いや、にしても夏服へ切り替えなんてとつくに分かっていただろうになんでわざわざボディペイントなんてしてきたんだろう？まさか、菅谷の奴本気で忘れてたわけじゃあるまいな。

「良かったら殺せんせーにも描いてやろうか？まだ塗料残ってるんだ」

「にゅやつー！いいんですか!？」

「別に構わねえよ」

そう言うとう菅谷は鞆からチョコペンのような物を取り出した。どうやら袋に入れた塗料を絞って描くらしい。

「へえー、溶けたチョコで絵を描くみたいなやり方なんだ？」

中村さんがわかりやすい例えをしてくれた。

俺は別に絵に対して感動するほどの美術家ではないが、なんとなく菅谷がどんな絵を描くのか気になって、その場に留まることを選ぶ。「楽しみですねえ。先生、実はこう言う刺青みたいなのは描いて見たかったんです」

期待を膨らませる殺せんせーの顔にペンが触れる。すると、菅谷の持つペンから塗料が絞り出された瞬間、塗料が触れた部分、殺せんせーの顔がドロオつと溶けた。

「ギヤアアアアアア!？」

「ギヤアアアアアア!?!？」

殺せんせーの顔が溶ける様子はホラー映画やスプラッタ映画さながら。『ギヤアアアアアア!?!』は瞬く間にクラス中に伝播し、殺せんせーはしばらくクラスメイトたちを驚かせる様に悲鳴を上げ続けていた。

「なるほど、対先生弾を粉末にして塗料の中に練り込んだのか」

「確かに先生、油断してたけど、殺すまではじっとしてはくれないよね」

「……うーむ。ダメだったか」

あ、なるほど。ボディペイントはその前振りだったのか。考えたな、菅谷。完全に予想外だった。

しかしそうか、対先生弾を粉末にするってアイディアは面白いな。あとでパクらせて貰おう。

ここで顔が回復した殺せんせーが戻ってくる。

「菅谷くん。なかなか面白いアイディアでしたが、効果としては嫌がらせレベルです。……ていうか、先生、普通にかっこいい模様を描いて欲しかったのに……」

「わ、悪かったよ！普通の塗料で描いてやるって！」

その後、なんだかんだで菅谷のメヘンディアートは一大ブームを巻き起こしクラスメイトたちの腕にはボディペイントが施されまくった。

現在、E組でメヘンディアートに染まっていないのは俺と寺坂組だけである。

みんなに乗っかって俺もそう言うのに興じてみたいとも思ったのだが、家の祖父母を驚かせる訳にもいかないし、すぐに消すのに菅谷に頼むのもなんだか申し訳ないので俺は静かに教室からフェードアウトをかますのだった。

?? ?? ??

ガツ、ガツ、ゴリゴリゴリゴリ、と鈍い打撃音と硬いものを擦り潰す音が響く校舎裏。

音の発生源は俺である。なんとなく、菅谷の対先生粉末が欲しくなったのでお手頃な石を使って加工しているのだ。加工自体は意外と難しいが結構できて来ている。外でやっているせいで砂が混ざるのが現在加工中の難点だが……。

おっと……砂と混ざる？

砂と混ざり、一見ただけでは違いがわからなくなかった対先生粉末を見てふと思う。

これなら、校庭に混ぜても気付かれないのではないか？無論、校庭

全面に撒くのは無理だろうが、砂場に撒いて殺せんせーの触手を溶かせないだろうか？

しかし、どうやってあのタコを誘き寄せる？

とか考えたが、よく考えればあの人、杉野の『ちよつと殺りたいから表出てくんない？』で暗殺に参加するんだから俺がやつても来てくれるか。

となると、どうやって殺すかだな。

普通は脚が溶けた瞬間に逃げるし。

とか思っているとふと、イトナが来た時のことを思い出した。あの時みたいにリングを作って暗殺するのがいいかもしれない。

そうすれば用意する対先生粉末も準備するのは少量で済むし。殺せんせーの動く範囲を絞れる。

加えて、ルールも作ろう。イトナの暗殺の時にカルマが言っていた。『みんなの前で決めたルールを破れば先生としての信頼が落ちる。殺せんせーには効くんだ。あの手の縛りがさ』と。

そうと決まれば早速準備だ。

俺はひたすらに対先生BB弾をすり潰し、半径3メートルほどの円を石灰で描き、殺せんせーを誘いに教室に戻った。

暗殺のルールも決めておこう。

先生は5秒円の中で耐えるだけ。5秒で仕留めきれなかったら俺の負け。短期決戦なのは5秒程度なら、と殺せんせーを乗せやすくする為であり、俺なりの引き際を設定しておく為だ。

「殺せんせー、ちよつと殺したい——」

「ああ。乃咲くん。どうかしましたか？」

教室の中はえげつないことになっていた。

腕にメヘンディアートを描き広げたクラスメイトたちと腕に四コマ漫画やら頭に兜を被った上で銃を装備したフルアーマービッチ先生が暴れていた。

混沌。それが今の教室の惨状を語るのに最も適切で容易い言葉だろう。

「あえつと、殺せんせー。イトナの時みたいな暗殺したいんですけど

ちよつと表に出てくれないですか?」

「ヌルフフフ、良いですよ。殺れるといいですねえ」

緑のしましまになった殺せんせー。よし、相変わらず暗殺を仕掛けると舐めてくれるので乗せやすく助かる。

「お、圭一が暗殺するってよ。見に行くやついる?」

「あ、行く行く」

暗殺積極的組が付いて来た。他の皆は荒ぶるビッチ先生を宥めて、彼女のペイント消しに必死になっていた。流石に菅谷も苦笑している。

「おいこら、待て!そこのタコ!」

「ぬ、ヌルフフフフ!さあーて行きましょう、乃咲くん!」

さてはこのタコ、何かやらかしたな。

フルアーマービッチ先生をほったらかしにした俺たちは作った暗殺場に向かった。

?? ?? ??

道中、話を聞きつけたらしい鳥間先生も暗殺を見に来てくれることになった。

それで更にやる気になった俺は自分で作ったリングに入つてナイフと銃を構える。

作った、と言っても半径3メートル程度のリングに対先生粉末を砂に混ぜんこんだだけだけの簡素なリングだけだな。

「ほう、イトナくんと同じと言いましたが、こういうことでしたか」
リングに入る前の殺せんせーが余裕そうにリングの分析をしている様だったのでルールを説明する。

「そう、俺もやってみたくてさ。ルールも作ったんだ。守ってくれま
す?」

「ええ。先生ですから」

よし、殺せんせーをルールで縛ることに成功した。

俺はほくそ笑みながら口を開く。

「制限時間は5秒。殺せんせーがこのリングに入ったら暗殺開始。5秒間、何があつてもリングから出たらダメ。ただし、相手を弾き飛ばすとかもダメ。自分から出たら罰ゲーム。どうですか?」

「ヌルフフフ、5秒とは随分と思ひ切った時間設定ですねえ。して、罰ゲームとは?」

「俺は宿題倍増、殺せんせーは俺が好きな時に触手を一本破壊する権利とかどうですか?」

「よろしい。では始めましょう。烏間先生、号令を。あなたの合図で私はリングに入ります」

「……いいだろう」

殺せんせーは緑のしまのまま、俺をみている。しかし、殺せんせー、その余裕がいつまで持つかな。

クラスメイトたちが見守る中で、烏間先生が合図を出してくれる。ゆっくりと手を挙げ、宣言した。

「暗殺、開始」

烏間先生の宣言が殺せんせーが徐にリングに入ってくる。殺せんせーの触手の先がリング内についたと同時に誰かのスマホの中にある律がカウントを始めた。

『カウント開始です!』

「ニユ?ギヤアアアアア!!」

脚が溶け始めたことに気付いた殺せんせーが菅谷にやられた時の様に悲鳴を上げるが、俺は特に気にすることなく溶け始めた触手を狙って銃撃を放つ。

『1秒経過です』

この対先生粉末を満遍なく混ぜ込んだ砂のリング。この中に5秒はいなければならない殺せんせーは自慢のスピードも出せずにいる。脚が溶けてるんだから踏ん張れないし、スピードなんて出せるわけがない。

俺の銃撃は命中し、殺せんせーの触手を2本破壊した。

『2秒経過!』

それでも辛うじて触手の修復を試みている殺せんせー。しかし、シ

口の言っていたことが確かなら、それには莫大な体力を消耗し、身体のパフォーマンスを落とす筈だ。

「殺せんせー、逃げてても良いんですよ!」

「逃げません!先生ですのでえ!」

ゲームで例えるならここは殺せんせーにとってスリップダメージを受け続けるフィールド。回復しながらじゃ思う様に動けない筈だ。

『残り2秒!』

俺は殺せんせー目掛けて対先生粉末入りの砂を蹴り上げて、銃を乱発する。

「ギャアアアアアア?!顔がああああ!!」

『残り1秒です!』

殺せんせーが銃撃を避けたのはゾーンに入って確認できていたので、逃げた先に向かって鋭く踏み込み、全力の突きを放つ!

「にゅやああああ!!?」

「そこだあああつー!!」

顔がドロドロに溶けた殺せんせーに向けてはなつた突き。それは殺せんせーの顔面を貫く――!

『時間切れです!』

寸前で時間が切れた。

時間切れを確認した殺せんせーは一気に飛び去るとリングの外に出て回復に努めた。

「惜しかったな、圭一!」

「うんうん!あと少し武器が長ければ殺れたと思うのにつ、ほんと惜しいよお!」

磯貝と倉橋さんを先頭にみんなが駆け寄ってくる。いや本当に惜しかった。武器がもうちょい長いか、俺の踏み込みがもう少し大きければな。

惜しかったし、もう恐らくは2度と同じ手は使えない。そう思うとかなりかなり勿体無い作戦だったが、手応えはあった。

鳥間先生との訓練は確実に実を結んでいる。

「すげえな乃咲!」

菅谷も来ていたらしく、声を掛けてくれた。だが、今回の作戦のMVPは間違いなく彼だろう。俺では対先生BB弾をすり潰すなんて発想はなかったから。

「いや、お前のおかげだ、菅谷。対先生弾を粉末にするアイデアが無ければここまで上手くはいかなかった。ありがとうな」

「っ！へへ、ま、そういうならそういうことにしておくぜ。こっちこそサンキューな」

菅谷に感謝を伝えると照れくさそうに彼は笑う。そんな様子を見て俺はクラスメイトと連携すれば今回の作戦ももつと上手くいったのかもしれないと思った。

例えば俺が砂を蹴り上げた時に千葉や速水の狙撃得意組に殺せんせーを撃ってもらうとかも出来たはずなんだから。

『乃咲さん！私のところまで来てくれませんか？』
「律？どうした？」

『ナイフだけでは今回みたいにリーチ不足が原因で暗殺が失敗する可能性があると学んだので新装備を開発してみました！』

言われた通りに律の元に行くと律の側面から一本のブレードがシュツと生えて来た。

ナイフと言うには長いし、刀というには少し短い。形でいうならマチエツトに近いな。

「これが新装備か」

『はい！マチエツトです。今度の暗殺でよろしければ使ってみて下さい！』

「……分かった、ありがとう。律」

『はい！菅谷さんのアイデアを見て乃咲さんが暗殺を思いついた様に私もアイデアが湧いて来たんです！』

ここは3—E。暗殺教室。

ここでは俺たちの様なある意味異端な生徒も暗殺という分野で平等に扱われるのだから居心地が良いな。

「乃咲くん……顔が戻らないんですけどおおお！」

「ギヤアアアアア!!？」

ドロドロになった殺せんせーの顔は数分後、無事に治りましたと
は。

31話 親愛の時間

「視線を切らすな!!次にターゲットがどう動くのか予測しろ!全員が予測すればそれだけ奴の逃げ道を塞ぐことになる!ナイフ術も射撃術も同じだ!」

暗殺訓練中間報告。

訓練4ヶ月目に入るにあたり、「可能性」がありそうな生徒が増えて来た。

磯貝悠馬と前原陽斗。

運動神経が良く、仲の良い2人のコンビネーション。2人がかりなら俺にナイフを当てられるケースが増えて来た。

「よし!2人それぞれ加点1点!次の者!」

出て来たのは赤髪の少年。

「行くよ、烏間センセー」

「ああ、来い」

赤羽業。

一見のらりくらりしているが、その目には強い悪戯心が宿っている。おおかた、どこかで決定的な一撃を俺に加えて赤っ恥をかかそうなどと考えているが、簡単にいくかな?

半歩引いて、体勢を直すと短く舌打ちして彼は生徒達の輪に戻って行った。

女子の場合で優秀なのは体操部出身で柔軟でしなやかな身体から繰り出される意表の突いた動きを得意とする岡野ひなたと、男子並みのリーチと運動量を持つ片岡メグ。

この辺りが近接攻撃^{アタック}として非常に優秀だ。

「そして殺せんせー。彼こそ俺の教師としての理想像だ。あんな人格者を殺すだなんてとんでもない!!」

「人の思考を捏造しようとするな、失せろ、ターゲット」

可能性があるという意味では寺坂竜馬、吉田大成、村松拓哉の悪ガキ3人組。こちらは暗殺にも訓練にも未だに積極性に欠ける。3人

とも体格が良いだけに……彼らが本気を出せばかなりの戦力になるのだが……。

全体を見れば生徒達の暗殺能力は当初に比べて格段に向上している。特に……。

「鳥間先生、次、お願いします」

「乃咲くんか、良いだろう」

乃咲圭一。

暗殺開始当初はのらりくらりしていたが、今では積極的に暗殺も訓練もこなす様になった生徒。

訓練の分野においては誰よりも真面目に取り組んでいると言っても過言ではないし、暗殺の分野ではターゲットの触手を初めて破壊したり、その指揮能力でヤツを追い込んだことも複数回。

訓練、実技、指揮。どの分野においてもダントツの能力を持っている。

前述した悪ガキ3人組を合同暗殺に参加させるなど人心掌握能力に優れていたり、律とも対話を行い、機械に対して合理性をもって説き伏せる一面も持つ。

仮にクラス共同での暗殺を行うのなら中心人物になるのは彼である可能性が高い。

「よし、乃咲くん加点7！次！」

他に目立った生徒は――。

「っ!？」

その時、俺は首筋に絡み付く蛇の様な殺気に取り憑かれ、思わず背後に居た、それを投げ飛ばした。

「いったた……」

投げ飛ばしたそれが生徒であると気付くと同時に彼に駆け寄る。

「すまない……！強く防ぎすぎた。立てるか？」

「あ、へ、へーきです」

……潮田渚。

小柄故に多少はすばしっこいが、それ以外に特筆するべき身体能力はない温和な生徒。

だが……今の気配はなんだ？

気のせいか？今の得体の知れない気配は？

?? ?? ??

「いやー！しかし、当たらん」

「だな、良くあんなスキない人に攻撃当てられるよな、乃咲」

「喧嘩慣れしてるだけだよ。ほら、一応俺ってカテゴリー的に不良だから」

「最近はそれらしきもないけどな」

訓練終わりに岡島や木村と駄弁るって歩く。確かに最近は不良らしいことしてないな、俺。授業は真面目に受けてるし、他校の生徒とも喧嘩しなくなったし。

俺、もう不良見卒業しても良いのでは？健康優良見認定されても良いのではないだろうか？

別に不良の肩書にこだわりがあるわけじゃないしな、と思いつつ歩いて行くと倉橋さんの声が聞こえた。

「鳥間せんせー！放課後街でみんなでお茶してこーよ！」

あ、いいな、それ。倉橋さんに頼んで俺も連れてって貰えないかな。みんなに俺も含まれてれば良いんだけど……。などと思っていると、鳥間先生は手短に断った。

「……ああ。誘いは嬉しいが、この後は防衛省からの連絡待ちでな」

鳥間先生はそう告げるとクールに去って行った。

「……私生活でもスキがないな、あの人」

「……って言うより、私達との間にカベというか、一定の距離を保っているような……」

「厳しいけど優しくして、私たちのこと大切にしてくれてるの分かるけど、それってやっぱりただの任務に過ぎないからなのかな」

「それは違うよ、倉橋さん」

「乃咲くん？」

倉橋さんの言葉に俺は思わず否定を入れる。あの人の教え子とし

て、あの人に憧れた者として、それは否定しなければいけないと思っ
たからだ。

「ただ任務で俺たちに接しているだけなら、あんな風に真っ直ぐ俺た
ちを見てくれるわけがないだろう？」

「……そうかな」

「そうだよ。それとも倉橋さんには烏間先生が本校舎の先生達と同じ
に見える？」

「……そうだよね、烏間先生は違うよね」

「乃咲くんの言う通りです」

殺せんせーが後ろからやって来て、俺と倉橋さんの肩をポンと叩い
て言った。

「確かにあの人は、先生を殺すためにやって来た職員ではありません
が、彼にもちゃんと素晴らしい教師の血が流れていますよ」

話を上手くまとめた殺せんせー。結局、俺たちだけでもお茶でもし
ようという話にまとまり掛けたその時、烏間先生とすれ違うように1
人の恰幅のいい男がこつちに歩いて来た。

よく言えば恰幅がいい。あえて悪く言うなら横に腹が出ている男。

「やっ！俺の名前は鷹岡明！今日から烏間を補佐してここで働くこと
になった！よろしくな、E組のみんな！」

新しい職員か。まあ、暗殺者に増員がいるのだから新しい職員
がくるのは何も不自然じゃない。

ビッチ先生も似た様なもんだが、烏間先生を補佐すると言っている
からこの人は防衛省側の人間ということなんだろう。

そんな新しい職員は両手一杯に荷物を持っていた。重たそうに
よろつきながら、それを地面に置き、広げるとお菓子特有の甘い匂い
がした。

甘い物に目がない茅野が迷わず飛びつくどクラスメイトたちもそ
のお菓子の入った箱やら袋を覗き込んだ。

「これは俺の気持ちだ、食ってくれよ」

「いいんですか？こんな高そうなの」

「おう、食べ食べ！俺の財布を買うつもりで遠慮なくな！それから、モ

ノで釣るとか思わないでくれよ？俺は早くお前らと仲良くなりた
だけなんだ。それにはみんなと一緒にメシくうのが一番だろ？」
なんだろう？この違和感。

ビッチ先生が初めて来た時のような感じ。すごくフレンドリーで
良い人そうなのに、親近感と言うか、鳥間先生との初対面時に比べて
この人に対する信頼感というか、安心感の様なものが感じられない。
「同僚なのに鳥間先生と随分と違うんスね」

「ほんと、なんか近所の父ちゃんみたいな感じ」

「ははは！良いじゃねえか、父ちゃんで！俺たち、同じ教室にいるから
には家族みたいなもんだろ？」

そう、普段の鳥間先生の言葉を聞いている側として彼の言葉を聞い
ているとなんだか、軽い気がする。

何故だろう？まだ言葉すら交わしていないのに、相手の心を掴むに
はこう言っておけばいい。そんな感じの声音に聞こえて仕方ない。

そう感じた俺は鷹岡さんの持って来たお菓子やジュースに一切手
を付けることなく、その場を後にした。

?? ?? ??

「鳥間先生、放課後の訓練お願いします」

「……乃咲くん」

放課後、いつもの訓練を付けてもらうために鳥間先生の元を訪れた
のだが、鳥間先生、些か気まずそうにしている。

何故か？と考えていると職員室に居た鷹岡さんが立ち上がり、俺の
方に向き直って口を開いた。

「お前が乃咲圭一だな？」

「はい、鷹岡さん」

「さん、だなんて他人行儀な呼び方は止してくれ。今日からお前達の
訓練を受け持つのは俺なんだからさ」

「んじゃ、鷹岡先生……？え、いま、何て？」

「だから、俺が今日からお前達の訓練を付けるんだよ」

「ど、どうして?」

「どうしてって、それが国からの命令だからな。言わなかったか? ……ってそうか、お前、みんなと一緒にいなかったもんな」

まさか俺が席を外している間にそんな話しになっただとは思わなかった。

「まじか、烏間先生が外れるなんて聞いてない。」

「なんで? 烏間先生が外れるんだ?」

「つーわけで、烏間の放課後訓練だったか? それも俺が引き継いでやるから待ってろな」

「あ、いえ。烏間先生じゃないならやらなくて良いです。自分は烏間先生に見てもらいたいので」

理解が及ばず、今日は一旦帰ろうと思ったその時、鷹岡先生に右肩を強く掴まれた。

ギリギリと嫌な音が聞こえる。まじで痛い程に強く掴まれてしまっている。

「鷹岡先生、痛いです」

「まあ、待てよ。乃咲圭一。なんで烏間が良くて俺が駄目なのか聞かせてもらいたいんだが」

「止せ鷹岡! その手を離せ!」

俺の言葉の何が彼のプライドを傷付けたのか、肩を握る力が強まる鷹岡先生。烏間先生の制止も聞かず、俺の肩を掴んで離さない。

なんで俺はほぼ初対面の相手にこんな風に絡まれているのかわからなくて、自分なりに必死に言葉を探すが、シンプルな答えしか出なかったのもそのまま口にする。

「俺が懂れてるのが烏間先生だからです」

「……………」

「そうか、そうか」

鷹岡先生は頷くと同時に俺の右頬に痛烈な痛みが走った。いや、頬じゃない。頬よりも痛みが走った側の首筋の方がよっぽど痛かった。

殴られた、と気付いたのは尻餅をついた後の事だった。歯が折れてないのは奇跡と言って良いだろう。強く産んでくれた母さんに感謝

だな。

「鷹岡なにを!？」

「なに? 教育的指導だよ。鳥間、やっぱリヌルいわ、お前とこの教室。訓練生が教官を選べるわけないだろ。なのにお前が良いとか抜かすガキがいる。事態の深刻さわかってねえんじやねえの? 地球の危機なんだぞ?」

俺に対する追撃を止めてくれた鳥間先生。それに対して鷹岡先生は悪びれもせずに答える。

地球の危機。確かにそれはそう。だが、だからと言って俺たちに選ぶ権利すらないというのは腹に据えかねる。うづく首筋を抑えながら立ち上がる。

鳥間先生を侮辱されたのは少し許せなかった。

「地球の危機だとかそんなこと知ってるけど、そもそもその地球の危機つてのを招いたのは何処の誰ですか」

「なに?」

「乃咲くん?」

「流石にイトナ見れば想像付きますよ。殺せんせー、元人間でしょ?」

「なっ……………」

言葉を失う2人に続けて口を開く。

「何が起きたのか知らないけど、月が爆発したのも、来年地球が爆発するかも知れないのも、全部、アンタら大人が自分のケツすら自分で拭けないからでしょ。月が壊れてから直ぐに先生の細胞を壊せる武器が作れた理由を想像すれば国家レベルで何かが起こってることくらい分かりますよ」

「……………」

「俺たちが暗殺してるのだって、元を正せばあなた方防衛省や世界各国の軍隊がどうしようもないお手上げ状態だからの筈だ。違いますか?」

「——違わねえな」

「だったら責任の在処を吐き違えないでくださいよ。鳥間先生やこの教室がヌルいんじゃない。そもそも発生段階で防げなかったあなた

方自体が弛んでいるんじゃないですか」

言い切ったと同時に同じ場所を今度は蹴られた。

やばい。同じ場所をこれ以上攻撃されたら冗談抜きで死ぬかも知れない。

「止める鷹岡！」

烏間先生と鷹岡先生が取っ組み合いになっている。

蹴り伏せられた体勢からもう一度立ち上がる。

「へえ、案外タフに育ってるじゃねえか」

立ち上がった俺を目を丸くして見る鷹岡。

もう、こいつに先生、なんて敬称を付ける必要はないだろう。流石に歯が数本逝ったが、実を言うともまだ生え変わっていない部分なので痛くも痒くもない。

ただ、ブラフとして折れた歯を吐き出して見せる。

「へっ、生意気な目だな、おい。そうだ。良いこと思いついたぜ？」

「なに？」

「お前、俺に一撃入れてみるよ。出来たら放課後の訓練権は烏間に譲ってやる」

「止めろと言っているだろ、鷹岡！」

「わかりました、やります」

「乃咲くん……！」

正直、首筋が凄く痛い。殴られたり、蹴られたりされて泣きそうになったのは初めてだ。

けど、一撃、たった一撃入れれば烏間先生が戻って来てくれるかもしれない。

それなら、やる価値は充分にある。

「止めるんだ、乃咲くん。キミは確かに優秀だ。だが、軍隊上がりの精鋭に挑むのは無謀だ」

烏間先生が止めてくる。

だが、譲れない。

烏間先生の教育も、この教室も決してヌルいわけじゃない。それをこのデカブツに見せてやる。

「大丈夫です、烏間先生。俺を信じてください」

「しかし……！」

「なんだ？自分の育てた生徒が信じらんねえのか？だったら教官なんて辞めちまえよ、烏間？」

最後まで俺たちがぶつかるところを止めようとしてくれていた烏間先生だが、お互いに引くことをしないと理解してくれたのか、少しだけ離れる。だが、視線は常に心配そうに、そして、いつでも割って入る様に腰を低くしてくれていた。

「お前から来いよ、殴っちまったハンデだ」

「……分かりました」

挑発とも取られる言葉によって、意図せずにゾーンに入る。思考が加速し、ちよつとした息遣いですら何時間も掛けなければ聴き終わらない程に体感時間が引き延ばされる。

もし、明日の放課後訓練もこの人がやることになったのなら？多分、倉橋さんは烏間先生との訓練を望み、俺と同じ対応をするかも知れない。そして、鷹岡も同じ対応をする可能性がある。

そう考えると負けられない。

俺は実を言うと天真爛漫に笑う倉橋さんの笑顔が結構好きだ。そんな笑顔がこの巨漢の拳で歪むところなぞ想像すらしたくない。

倉橋さんだけじゃない。もし、磯貝や前原、杉野に渚まで同じ目に遭ったら？そう考えるとハラワタが煮え繰り返り、拳に力が入る。

そう考えた時、身体がふと、軽く感じた。

極限まで研ぎ澄まされた集中力と引き延ばされた時間感覚に身体が追従する様に、俺は全てがほぼ止まって見える景色の中を周りよりもほんの少しだけ早く動くことが出来た。

走れはしない。だが、一步一步、確実に前に踏み込むことができる。そう言えば、以前、イトナが襲来した時、似た様なことがあった。数メートルをほぼ一瞬で詰めたあの時の感覚はまさにこれと同じだった。

烏間先生の頬からこぼれ落ちる汗ですら空中で静止して見える時間の中で俺はようやく鷹岡の目と鼻の先に辿り着いた。このまま拳

を顔面に叩き込んでやりたいところだが、一番ダメージがでかいのはそこじゃない。

鷹岡の片足を全力で踏み、拳を引き絞って奴の鳩尾目掛けて拳を放つ。

それと同時に止まっていたかの様な時間は、思い出したみたいに動き出した。

「ぐぼあっ……!?!」

足を踏まれていて威力を逃さなかったらしい鷹岡がその場で腹を押さえてかがみ込み、口からさつき食べていたお菓子を含んだ吐瀉物を吐き出していた。

「へっ、ざまあ、みろ」

その無様な光景を見届けるとほぼ同時に俺は足元が覚束なくなり、数歩後ずさってたまらず片膝を突く。耳鳴りが酷く、頭痛が激しく、息切れが著しい。

「乃咲くん！大丈夫か、乃咲くん!？」

慌てて駆け寄ってくる烏間先生。

「何が起き……いや、それよりもまずは保健室へ！」

烏間先生に肩を貸されて立ち上がる。やばいな、1人じゃ立てそうにない。俺は烏間先生に肩を貸されたままの状態で意識を失った。

?? ?? ??

「お前から来いよ、殴っちまったハンデだ」

「……分かりました」

乃咲くんの短い返事の後、勝負は一瞬で着いた。

瞬く間すらなかった。本当に一瞬の出来事。彼が瞬間移動でもして、鷹岡を殴った、としか考えられない程に刹那的な出来事だった。

あまりの出来事に呆然としつつ、乃咲くんの応急処置を済ませ、奴に連絡を取る。

『もしもし烏間先生、私です』

「……烏間だ。乃咲くんが意識を失った。悪いが学校に来て欲しい。

病院への搬送を手伝ってくれ」

『なんと……!? 分かりました！すぐに戻ります！』

あまりに現実離れした光景だったが、彼は何者だろうか。初めて俺に放課後訓練を頼みに来た時は武道経験すらない不良だったはずなのに、今は一瞬と掛からずに防衛省のエリートを瞬殺してみせた。

そして彼が口走った幾つもの言動。彼が一体どこまで推察していると言うのか？

俺はそこで、自分の生徒のことすら何も知らないのだと実感した。

32話 指名の時間

「聞いた？乃咲の話」

「うん。鷹岡先生に殴られて入院したって」

「……乃咲くん、大丈夫かな」

E組の内部ではそんな話して持ちきりだった。

それもそうだろう。圭一はE組だけでなく、周辺校にすら名前が轟いている不良児。喧嘩の腕に関してはカルマに引けを取らず、訓練では烏間相手にクリーンヒットを単独で取れる唯一の生徒だ。

そんな彼が殴り倒されたとなれば心配もするし、何よりも鷹岡に恐怖する。

「なんだ？父ちゃんに逆らった奴の話なんかして、お前らも同じ目に遭いたいのか？」

「ヒツ……」

鷹岡の脅しの言葉に思わず女子生徒が悲鳴を漏らすのが、そんな鷹岡の背後には顔を真っ黒に染めた殺せんせーと警戒心を隠そうともしない烏間がいつでも飛び出せる様に構えていた。

昨日の一件は教師陣を警戒させるには充分すぎたのだ。その証拠に普段は体育などチラ見する程度にしか気に留めていないイリーナですら小脇に小型リボルバーを握り締めて警戒心を露わにしていた。

「烏間あーんなところにおいて良いのかよ？お前の任務はそんなところで棒立ちすることじゃねえだろ」

「俺の任務はターゲットの監視と殺し屋の手引き。そして、ターゲットはここにいるし、イリーナも虎視眈々とターゲットを狙っている。故に、俺がここにいることになんら問題はないはずだ」

「……ちっ」

舌打ちする鷹岡は意識を切り替えたのか、数秒前までの低い声を片付けて、陽気な声を出す。

「さて！訓練内容の変更に伴ってE組の時間割も変更になった！これをみんなに回して欲してくれ」

「……？時間割？」

菅谷は眩くと同時にE組の生徒たち全員が自分の目を疑うことになった。何故ならそこには10時間目、21時までの訓練が組まれていたからだ。

「嘘でしょ……!?!」

「10時間目……」

「夜9時まで訓練……」

「そうだ。これくらいは当然さ！理事長からも許可は貰っている。『地球の危機ならしょうがない』だとさ。んま、このカリキュラムについてこれればお前たちの能力も飛躍的に上がるはずだ」

無茶振りとしか思えない言葉にクラスメイトほぼ全員が絶句する中、前原が反発する。

「ちよつと待ってくれよ鷹岡先生！無理だぜ、こんなの!?!」
「ん？」

「勉強の時間がこれだけじゃ成績落ちるよ！理事長も分かってて承諾したんだ！遊ぶ時間もねーし！第一、身体が持たねえよ！」

そう反発した瞬間、前原が鷹岡に捕まれる。そして膝蹴りを叩き込まれる寸前、黒く染まり切った触手が伸びて来て、鷹岡の膝と前原の腹の間に割って入った。

それにより、前原へのダメージはゼロ。キョトンとする前原を置き去りに鷹岡と殺せんせーが口を開く。

『できない』じゃない。『やる』んだよ。言っただろ、俺たちは『家族』で俺は『父親』だ。世の中に父親の言うことを聞かない家族がどこにいる？」

「あなたの家族じゃない。私の生徒です……。乃咲くんの件と言い、これ以上、手荒な真似をするのなら……!?!」

「なんだよ、殺すか？体育の教科担任は俺に一任されている筈だ。だったら授業中の罰も俺の自由。違うか？立派に教育の範囲内だろ、今の罰も。それともなにか？まだお前に何の危害も加えてない男に手を出すのか？多少教育論が違うだけで？」

「っ……!?!」

青筋を立てる殺せんせー。ひとまず下りはするが、やはりいつでも止められる位置で訓練を見守ることにしたらしい。

「はい、じゃあ、まずはスクワット300回な！」

圭一と前原にされた仕打ちも相待って恐怖に駆られた生徒たちは言われた通りにスクワットを開始する。そんな彼らを歯痒く見守りながら殺せんせーが鳥間に口を開いた。

「……あれでは生徒たちが潰れてしまう」

彼らの視線の先ではスクワットの仕方がなっていないという理由で胸ぐらを掴まれる三村の姿があった。

「超生物として彼を消すのは簡単なことです。ですが、それでは生徒たちに筋が通せない。私にとっては間違っているものの、彼なりの教育論があるのも確かだ。だからね、鳥間先生。あなたに同じ体育教師として彼を否定して欲しいのです」

「(否定……俺が奴を間違っていると云えるのだろうか？ 厳しさはともかくとして、プロとして一線を引くよりも、家族の様に接する。そのやり方自体は一つの教育論として間違っていないのではないのか？)」

鳥間は2枚の写真を持って葛藤する。

一枚は笑顔で鷹岡と写るその教え子たち。

二枚目はそんな教え子たちの背中に刻まれた生々しく、痛々しい傷跡。

「第一……こんな時間割じゃ生徒たちと遊べないじゃないですか！」

「そうよ！……こんな時間割じゃ私の買物について来て荷物持ちしてくれる男子生徒もいないじゃないのよ！」

「とりあえず、……この教師陣が間違いだらけなのはよく分かった」

写真を胸ポケットにしまい、教育現場に向き直るとそこでは神崎と鷹岡が向き合っていた。

「私は嫌……です。鳥間先生の授業を希望します」

「……っ！」

その言葉が鷹岡、鳥間の両名に火を付けた。

怒りの炎が付いた鷹岡は拳を振り上げ、教師として自分に火がつい

た烏間はそんな拳を押さえ込む。

「それ以上。生徒たちに手荒な真似はするな。暴れたいのなら、俺が相手を務める」

「『烏間先生！』」

烏間の登場に思わず歓喜の声を漏らす生徒たち。

「そろそろ横槍を投げてくる頃だと思っただけ、烏間。だが、俺と戦うのはお前じゃない。お前とは教師として戦う。乃咲以外でお前一推しの生徒を選べよ。そいつと俺とで決闘だ！」

軍の教官を勤めていた頃、鷹岡はこの手をよく使っていた。敏腕の教官として優れていると評価された反面。その教育論は絶対的強者として格の差を見せつけて相手を心の底から屈服させること。

教官時代から鷹岡はこの手を好んでよく使っていた。

「お前の教え子が勝つたら俺はこの教育権を全権お前に託して出てってやるさ。男に二言はない！ただし、使うのはこんなおもちやのナイフじゃない——本物のナイフだ」

「っ！よせ！彼らはそれを人間相手に振る訓練などしていない！」

「おいおい、バカな事言うなよ、殺す対象はあくまで俺なんだぜ？だつたら本物じゃないとな」

内心、鷹岡はほくそ笑んだ。この手を使って自分に勝てた者など一人もいなかったからだ。

「安心しな、寸止めでも勝ちつてことにしてやるし、俺は素手だ。これ以上ないハンデだろ？」

軍隊でもこの手はよく効いた。本物のナイフを持ってすくみ、鷹岡に震える心配。彼はそんな教え子たちの顔が好きだったし、そんな彼らを殴って屈服させ続けて来た。

「さあ、選べよ烏間。選ばないなら無条件で俺に服従だ！生徒を生贄に差し出すか、それともまた見ぬふりをするのか、どっちにしろ酷い教師だよお前はな！はははは!!」

投げ渡されたナイフを片手に烏間は迷っていた。

地球を救う暗殺者を育てるには鷹岡の様な容赦のない教育こそ必要なのではないのか、と思う自分がいることも確かだったからだ。

しかし、そんな中で思い出せる言葉があった。

『大丈夫です、鳥間先生。俺を信じてください』

昨日、似た様な条件で勝利を収めた生徒を鳥間は知っている。だからだろうか、迷いはあったが、鳥間には躊躇いはなかった。

「渚くん。やる気はあるか？」

その言葉に躊躇いはなかった。

「選ばなくてならないのなら、おそらく君だが、返事の前に俺の考えを聞いて欲しい——俺は、地球を救う依頼をした側として君達とはプロ同士だと考えているし、そのプロとして君達に支払うべき最低限の報酬は当たり前前の中学生生活を保障することだと考えている」

そこで一旦言葉を区切ると生徒全員を一度だけ見渡して、最後にもう一度、渚に向き直った。

「無理にナイフを受け取る必要はない。その時は俺が鷹岡に頼んで「報酬」を維持してもらえる様に努力する」

「んー？まあ、土下座でもすれば考えてやるけどね」

渚は少し躊躇ったが、ナイフを受け取った。

彼にとって鳥間の目は好ましいのもだった。真っ直ぐに自分たちを見つめる温かい瞳が好きだったから。

それは圭一が昨日、鷹岡に刃向かったのと同じ理由。そして、圭一や前原、神崎への扱いが許せなかったからだ。

ナイフを咥えて、身体を解す。

「おやおや、よりにもよってそんなチビを選ぶとは。お前の目も曇ったなあ、鳥間よお？」

挑発する鷹岡。気に留めない鳥間。

その両者の間に立つ渚に鳥間が声を掛ける。

「渚くん。鷹岡は素手対ナイフの戦闘方法も熟知している。全力で振らないと当たらないぞ」

「はい……」

「だが、この勝負、奴と君の最大の違いはナイフの有無じゃない。分かるか？」

「……………」

「いいか、奴にとってコレは『戦闘』。だが、キミはいつも通り一撃当てれば勝ちな『暗殺』だ。強さを誇示する必要はない。一撃当てればキミの勝ちだ」

「……はい」

烏間からの無数のアドバイス。渚は頷き、ナイフを構える。

握った手のひらにじっとりと嫌な汗をかく。しかし、渚の思考は至って冷静そのもの。むしろ達観していたと言っても過言ではない。

「……殺せば勝ちなんだ」

渚は笑った。

通学路を歩く様に、普通に近づいて、普通に近づいてナイフを振った。

「(ナイフを大きく振ったら鷹岡先生はぎよつとしたらしい。体勢を崩したので、服をひっぱりそのまま背後に回りナイフを首筋に当たった。確実に)」

烏間は驚愕していた。

渚の才能について、あまりに予想の上をいったからだ。彼の才能はいわば暗殺の才能。咲かせていい才能なのかどうか、を。

「そこまで！勝負あります。まったく、生徒にナイフを持たせるとは何を考えているのやら……」

渚からナイフを取り上げるとバリバリと鋼の刃を噛み砕く殺せんせー。

「……ふん、怪我しそうならマッハで助けに入っただろうに」

「当たり前です」

「(それにしても、暗殺の才能か。俺たちにとってはありがたい才能だが、果たしてこの才能は彼の将来にプラスになるのか?)」

「今回は迷ってばかりですねえ。烏間先生？」

「……悪いか」

「いえいえとんでもない。それよりもう一悶着ありそうですよ」

烏間と殺せんせーの視線の先には立ち上がった鷹岡がいた。

「もう一回だ！まぐれの勝ちがそんなに嬉しいか?!今度は油断しねえ！」

殺せんせーの言葉に烏間が視線を向けると負けたと認められないらしい鷹岡が暴れる寸前だったので、烏間は鷹岡を制圧するべく動く。だが、その直前、渚が毅然と言い放った。

「確かにもう一回やったら僕が負けます。でも、僕らの担任は殺せんせーで、教官は烏間先生だつてことはハッキリしました。これは絶対に譲れません。父親を押し付ける鷹岡先生より、プロに徹する烏間先生の方が僕は暖かく感じました。僕らを本気で強くしてくれようとしたことに関しては感謝してます。でも、ごめんなさい。出て行つて下さい」

そんな渚の言葉に烏間も思うところがあつたのか思わず動きが止まり、そんな彼を諭す様に殺せんせーが肩を叩きながら言う。

「先生をしていて一番嬉しい瞬間はね、迷いながら自分が与えた教えに……生徒がはつきりと答えを出してくれた時です」

「黙って聞いてればガキが良い気になりやがって……!」

そんな中、再び動き出す鷹岡。そんな彼を烏間は数秒かからずに制圧した。

「身内が迷惑をかけてすまなかつた。後のことは心配するな。俺1人で君たちの教官を務められる様に上と交渉する。いざとなれば銃で脅してでも許可をもらうさ」

「烏間先生……!」

生徒たちが出した答えに答えた教師^{烏間}。

しかし、だれも分かつていない。

「交渉の必要はありません」

そもそも、この教室、いや、学校において、防衛省など第三者に過ぎないことを。

この教室の教員の任命権を持っているのは国でも世界各国政府でもないことを。

「り、理事長!?!」

「と、圭一!?!」

そう。この学校の支配者は浅野學峯なのだから。

浅野理事長と圭一が立っていた。

「E組用件は？」

警戒する殺せんせーに浅野理事長は短く答える。

「視察です。経営者として新しい教師の手腕に興味がありましたので」

言いながら圭一の背中を押してE組の生徒たちの方へと向かわせると彼は徐にポケットからA4のプリントを取り出して、鷹岡の口を驚掴みするとそれをその口の中へ放り込んだ。

「でもね、鷹岡先生。あなたの教育はつまらなかつた。教育に恐怖は付きものだ。一流の教師は恐怖すら巧みに利用する。だが、暴力でしか恐怖を与えられないのであれば、その教師は3流以下だ」

汚れた手を拭きながら踵を返す。

「自分より弱い暴力に負けた時点でその授業は説得力を失う。2度目と言うのなら尚更だ。それは解雇通知書です。鷹岡さん。あなたは以後、ここで、教えることはできない」

去り際に圭一に向かって手を振りながら自分こそがこの学園の支配者で有る事を誇示するように言い放ち、理事長はその場を後にした。

「柵ヶ丘中の教師の任命権は貴方方、防衛省にはない。全て私の支配下であることをお忘れなく」

言いたいことを言つて去つてゆく理事長。そんな彼から口の中に投函された解雇通知書をムシヤムシヤと噛み、飲み込みながら鷹岡は立ち上がる。圭一と渚、E組の生徒と烏間をひと睨みしながら。

「くそつ、くそくそくそ!!!」

吐き捨てる様にくそを連呼しながら歩き去る理事長を抜き去つて鷹岡はこのE組から去つて行つた。

「鷹岡クビ……」

「つてことは担当は今まで通り烏間先生……」

「「よつしやああー!!」」

「たまには理事長もいいことするじゃねえか」

「あつちの方がよつほど怖いけどね」

「つか、圭一。なんで理事長と一緒にいたんだよ？」

「ん……まあ、いろいろとな」

苦笑しながら隠す圭一。質問攻めにされる圭一と暗殺を褒めちぎられる渚。

2人を見ながら烏間は殺せんせーに問いかける。

「……例えばお前は、彼らが『将来は殺し屋になりたい』と言ったらそれでも迷わずに育てるのか？お前相手なら分からないが、彼らは人間相手なら有能な暗殺者になれる」

「……迷うでしょうね。ですが、教師は迷う者です。本当に自分はベストの答えを教えているのか内心は散々迷いながら、生徒の前では毅然と迷いなく教えなければならぬ。毅然と、堂々とね。だからこそかっこいいんです。先生という職業は」

「……ふん、そうか」

烏間は圭一と渚を見据えた。

才能がダントツである様に見える圭一。

才能が一見なさそうに見えてしまう渚。

2人の教え子の将来に思いを馳せていると、不意に生徒たちから声をかけられる。

「ところで烏間先生さ、生徒の努力で体育教師に返り咲けたわけだし、なにか臨時報酬があってもいいんじゃない？」

「そーそー！鷹岡先生、そういうのだけは充実してたよねー」

何かと思えば臨時報酬のおねだり。

思わず少し呆れつつも口角を上げ、財布を取り出す。

「甘いものなど俺は知らん。財布なら出すから食べたいものを食べてこい」

「やったあああ！」

「ほらほら、烏間先生、早く行こー」

騒ぐ生徒に囲まれながら『これも悪くない』と思う烏間は人を育てるといふ事に熱中はまっているのかもしれない。

33話 指名の裏の時間

烏間先生が体育教師に返り咲いたことへの祝勝会中。磯貝、前原、片岡、岡野、倉橋さんが俺のところに来てきた。

「なあ、圭一。頬大丈夫か？」

「ああ。歯も直ぐ生えてくるだろうってさ」

「歯も折れたの!？」

「折れたんだよなあ。お陰様で砂糖やらジュースが染みる染みる」

歯が折れるなんて初めて経験したが、案外ポロツと取れるもんだな。

「大丈夫……じゃないよね」

心配そうな倉橋さん。なんだろう、怪我して心配させてる側だから不謹慎だけど少し嬉しい。

「大丈夫だよ。それよりみんなは大丈夫だった？」

「ああ。俺とか神崎さんは殴られそうになったけど、先生方が止めてくれたから」

「そっか、良かった」

鷹岡のヤロウ。あんな力で神崎さんまで殴ろうとしたのか。決して前原を軽く見てるわけではないが、女子に対して振るっていい力ではないだろうに。

昨日、もつと強く殴っておけば良かったのか？

などと思っていると、俺が喧嘩してケガを作る事に慣れていることを知っている磯貝は、話題を変えるべく話を振って来た。

「そう言えばさ、どうしてお前は理事長と一緒にいたんだ？」

「ああ。それな、俺が呼んだんだ」

「……マジかよ」

?? ?? ??

殴られ、首を痛めたこともあって気絶している間に病院で寝かされ

ていたが、特に問題もなく夜のうちに目が覚め、診察を受けた。結果、疲労で一時的に倒れただけと診察されたのだが、時間が時間だったのでその日は病院に泊まる事に。

結果、俺が入院した、という噂が立ったみたいだが、殴られ、蹴られた場所が腫れてる以外は全く問題なく、翌日……つまり今朝には退院したのだ。一応、頬の打撲に対する診断書も貰って。

退院した俺がとった行動は電話だった。

『はい、柵ヶ丘中学校です』

『もしもし。乃咲圭一です』

『……E組生徒が何のようだ?』

「いえ、柵ヶ丘中学校の生徒として体罰を受けたことを公に公表しようと思うのですが」

『体罰? 何の話だ?』

「浅野理事長に新任の教師の件で乃咲が、と言ってもらえれば通じるとは思います。どうします? 殴られた診断書もあるんですけど」

『……少し待ってろ』

などと言いつつ俺は周りより少し遅れて登校。

そりゃあそうだ、昨日問題ないと診察されたとはいえ、病院に運ばれてるんだから朝、もう一度念の為、一応診断はある。

祖父母にも適当な説明をして、コンビニで買ったパンをぱくつきながら待つ事数分。電話の向こうからズモモモモ、妙な気配がきたことからラスボスが電話に出るとさっしてパンをしまう。

『電話代わりました、浅野です』

「おはようございます、理事長。お話どこまで聞きました?」

『鷹岡先生が体罰を働いたとか』

「ええ。その通りです」

『それだけだろうか?』

「ええ。それだけです」

『キミがその程度で電話までかけてくるとは思えないな』

「ご考察の通りです。すこし、お話がありまして」

『良いだろう。理事長室まで来なさい』

「はい、今行きます」

電話を切る。少し、やることを整理する。

俺がわざわざ電話したのは何も体罰報告する為ではない。むしろあの人は多少の体罰も教育には必要だ、とでも言うだろう。

そんなこと言われるまでもなく理解している。だからそのあとなんて打ち返すのかを考えないと。

まあ、なるようにしかならないんだろうけどさ。

俺の目的はE組体育教師の変更である。

まあ、要するに烏間先生に戻して欲しいという嘆願兼、脅しである。

俺は昨日、確かに鷹岡と勝負した。

烏間先生との放課後訓練を賭けて。勝った。この勝負においては俺は無傷だったと言って良いだろう。

だが、それで取り戻したのは烏間先生が放課後に追加訓練を施せるようにするって権利だけなのだ。つまり、鷹岡が授業する事に変わりはない。

きつと、それは良いことではない。だって昨日ですらよう分からん理由で殴られたんだ。今日、誰かがまた理不尽に殴られるかもしれないと思うと捨て置けない。

なんとしても烏間先生に授業をして貰えるようにしないと誰かが潰れてしまうかもしれない。

そんな思いが俺の脚を急がせた。

本校舎に乗り込むと数名の生徒がギョツとした顔をするが、彼らに構っている暇はないので見て見ぬ振りをして、理事長室に入る。

「失礼します」

「よく来たね、乃咲くん」

ラスボスが出迎えてくれたので扉を閉める。閉めた結果、俺と浅野理事長の2人きりの空間という今まで数えるほどしかなかった気まぐずい空間が出来上がってしまった。

しかし、ここですくむ為になんかわざわざ理事長室まで来たわけではないので単刀直入に話題に入る。

「理事長先生。諸々省いてしまい、失礼だとは思いますが、単刀直入に

言います。E組の体育担当教諭を烏間先生に戻して下さい」

「ふむ、何故かな？」

「鷹岡先生は危険だと思っからです」

「……ふむ」

俺の言葉に理事長はなんだ、そんなことかと言いた気に鼻を鳴らすと、理事長用の立派な机の上で手を組んだ。

「乃咲くん。キミの言い分もわかる。その傷、さぞ痛かっただろう。だが、その傷も教育的指導として必要なものだったら？ 私は決して暴力を肯定するわけではないが、時に恐怖は必要なものだと考えている」

……だよなあ！この傷程度でこの人を説得できるとは思ってなかつたさ、微塵もな！

「それに、少なからずE組の面々も本校舎の教師に反感を持っているはずだ。キミの”危険”の位置付けは場合によっては本校舎の教師にも適応されるはずだ。無視される、非道な扱いを受ける。と。キミの理屈ではそんな彼らも非難し、人員を配置させねばなくなる。違っかい？」

「……違います」

くそっ、この人の言うことは正論だ。

やってることえげつない癖にやり合っくと正論で上から叩きつけてくるからなあ、この浅野親子。

相手にするとこれ以上ないくらいに面倒臭い相手だと言っるだろう。

さて、どうやっつて説き伏せる？

いや、そもそも俺に出来るのか？

「なにより、1人の生徒だけの言葉で教師の人員を動かすことなど出来はしない。それはキミなら分かるはずだね」

「おっしやる通り……」

けど、何故だろう？

浅野理事長の言葉は所々に隙があるように見える。

例えば暴力は肯定しないが、恐怖は肯定するところ。似て非

なる響きではないだろうか？

言ってしまうえば、恐怖に暴力は必要ないと言っているようなものだ。そういう意味では暴力で恐怖を受けつけようとするかもしれない鷹岡の教育論は浅野理事長のそれと異なるという意味になる。

もしかして、これは”課題”か？

理事長を動かしたければ相応の理屈で説き伏せて見せなさい、という課題なんだろうか。

俺はそんな風に思いながら、言葉を選び直す。

「理事長」

「なんだい？」

思い出せ、乃咲圭一。この学校で生活して来た日々を。この学校の仕組みを。

この学校は働きアリの法則でできている。

3割の働き者……A組

6割の通常者……BとD組

1割の怠け者……E組。

この法則はE組を弱者として扱う事で達成されている。

怠け者のE組は学校内ではエグイ差別を受ける。校舎は本校舎から約1km離れた山の上にある旧校舎、全校集会は他のクラスよりも早く来て整列しないとペナルティーがあり、そこで配布されるべきプリントは貰えないし、教師陣もそれを良しとしている。

そんな扱いを受けたくないからこの学校の生徒の大半は努力する。あんな風になりたくない。あんな扱いは嫌だと。そして、なまじそんな努力をしているからこそ、E組に落ちた奴は成績をキープしてる奴らに馬鹿にされる。怠けたからだ。

そして、落ちた者の大半は自己肯定感が薄れてゆく。努力したのに駄目だった、あんなに頑張ったのに出来なかつた、と。努力し足掻いたのに周りの連中に劣ると評価された事実やE組に来てしまった劣等感、情け無さが心を脆弱にして、本校舎の連中から受ける差別を迎合することになる。

これがこの学校の仕組み。E組を弱者と蔑む事で他の生徒たちが

優越感とああはならないと強い意志を持つ事でこの学校は運営されているのだ。

「……そこに鷹岡の教育論は必要なのか？」

「暴力は教育に必要ですか？」

「……場合によるね。力を示さなくては従わない者もいるだろう。キミはその典型だと思うのだがね」

「そうだ。俺が烏間先生を見て尊敬したのは力があるからだ。でも、それは決して暴力に魅せられたわけじゃない。

「力にも色んな力があると思います。相手を説き伏せる国語力だつて言い換えてしまえば言葉の暴力だ。でも、自分の気持ちを伝える弁論力でもある」

「そうだね」

「でも、そんな暴力に頼った恐怖は教育に必要なのでしょうか？」

「どうということかな？」

「この学校にそんな仕組みはない。少なくとも、肉体的な暴力による恐怖での教育なんて指導をしている教師を俺はこの学校で見たことはありません」

「分からないよ、たまたまそうだっただけかもしれない」

「それはないでしょう。暴力による恐怖での指導が仮に必要なのは俺のような一部の不良に対してのみ。それでも俺はこの学校の教師に殴られた覚えはない。つまり、この学校では暴力を使った教育を推進していない。違いますか？」

「……ほう」

「勉強に恐怖が必要なのは知っているつもりです。自分は父に見放されたくない一心で勉強をしていた時期があるから分かる。期待に応えないと、そんな思いは時として恐怖になり、そんな恐怖は勉強の手を進ませる。だからこれは必要な恐怖だ」

「……………」

「でも、肉体的な暴力による恐怖は違う。いつ殴られるか分からなくてビクビクしながら握ったペンで進む勉強なんてそうはない。仮にあったとしても、うちの学校では取り入れていない。そうですね

？」

「そうだね。その通りだ」

「この学校の教育は恐怖で成り立っている。それは間違いないはずで
す。E組に落ちたくないから、頑張る。そんな恐怖で」

そう、この学校の教育論はあくまで精神論だ。E組のようになりた
くなければ頑張りなさい。それだけのことだ。

だから、あんな大仰な暴力である必要はないのだ。この柵ヶ丘中学
校の教師であるのならば。

「だったら、鷹岡先生の教育論はこの学校で求められる水準に達して
いない。暴力でしか恐怖を与えられないのであればそれは三流以下。
この柵ヶ丘学園の教師として相応しくないはずだ」

「……なるほど。一理ある」

「そして、この傷は教育的指導だとしても過剰な筈です。歯が折れる
レベルの指導なんて昭和でもないんだから聞いたことがない。この
学校の教育論と水準に合っていない暴力教師。俺が黙っていても、P
TAはどう思いますかね、ましてや地球破壊するモンスターを隠匿し
ているあの教室の生徒がノイローゼになりでもしたらあることない
こと話すかも知れない。それは、口止め料を貰っている理事長として
も不味いことでしょうか？」

「……ふっ、乃咲くん。まだまだ甘い所があるが、及第点だ。良いだろ
う。確か6時間目が体育だったね。その時に視察に行くでしょう」

こうして俺は辛うじて理事長から及第点を貰い、鷹岡の授業の視察
を取り付け、無事に鷹岡をクビにまで追い込みましたとさ。

?? ?? ??

「俺たちが心配してる間にそんなことしてたのか、お前」

「でも、良かったじゃん。お陰で鷹岡クビに出来たんだから」

まあ、俺が動かなくてもあの理事長のことだ。自分の教育論に合う
かどうか実際に自分の目で判断しに行った可能性は大いにあるけ
どな。

その後、烏間先生のクレカでどんちゃん騒ぎした俺たちは何軒か店をハシゴして解散となった。

?? ?? ??

「いや、送って貰ってすみませんね、烏間先生」

俺は、烏間先生の車の助手席に乗っていた。

あとで倉橋さんに自慢しよう。

どうしてそんなポジションに座っているか？それは帰り際に烏間先生に呼び止められたからだ。

流石に過保護じゃないかな、と思いつつ、嬉しかったのでお言葉に甘える事にした俺。そんな俺に烏間先生が口を開く。

「乃咲くん。キミは何処まで気付いてる？」

「——なんのはなしでしょうか」

「奴が……キミたちが殺せんせーと呼ぶあの生物が元人間だという話だ」

飛び出して来た思わぬ話題。そういえば鷹岡を殴る前にそんな話をしたような気がする。

咄嗟に惚けたが、それは無駄だったらしい。烏間先生の声音が惚けても無駄だと語っていた。

その声音に根負けして俺は口を開く。

「……正直、考察の域を出てません。ですが、それでも良いのなら語りますが？」

「聞かせてくれ」

「正直、殺せんせーが赴任して来た時から色々と考察してました。3月に月が爆破されたばかりで、俺が初めて触手を破壊したとか言ってるのにどうやって殺せんせーの細胞を壊せる武器を作ったんだろうって考え出したのが始まりでした」

それから俺は語った。自分の考察を。

「だって変でしょ？俺が初めて壊したのに何を持って、殺せんせーに有効な武器だと言い張れたのか不思議でしょう？殺せんせー自ら威

力テストに付き合った可能性は低い。だってあの人、基本的にチキンだから」

「……俺の不用意な発言からか」

いや、大元を辿れば殺せんせーが来年の3月に自然死するって話を聞いた場面に遡るので、烏間先生の落ち度というわけでもないのだから、黙っておこう。

殺せんせーにも内緒にすると約束してるし。

「んで、そんな考察してると今度はイトナが出てくるじゃないですか。頭に触手生やしてる奴。しかも国が手配した暗殺者として律と共同で暗殺する予定だったとかいう。そりゃ色々想像できますよ」

「色々、とは？」

「殺せんせーも元は触手を移植された人間なんじゃないか、とか、そんな触手を生やしたイトナを国が送って来たんだから、もしかして殺せんせーの誕生には国が関わってるんじゃないか、とかです」

「……そこまで」

「ついでに言えば、堀部イトナが実在する人物であることも律に調べて貰いましたからね。殺せんせーの触手が地球外生命体みたいな才子でもないことも知ってるつもりです」

赤信号で車が止まる。それと同時に俺たちの会話も止まってしまった。信号が青になる頃、烏間先生が口を開く。

「この事は……」

その言葉の先が読めたので俺は先回りする。

「誰にも言いません」

烏間先生が驚いたように一瞬だけ俺を見た。

「だって、俺はまだ確証を得ているわけじゃない。誰からも肯定を受けているわけじゃないんです。そんなあやふやな話をふれ回るつもりはありませんよ」

「……いいの？いま、この場で俺を問いただす事だって出来るだろ」

烏間先生の言葉に苦笑する。

「信じてますから。烏間先生のこと」

「信じてる？俺を？」

「ええ。俺たちが暗殺に成功したらきつと全て話してくれるって信じてますから。だから今は聞きません。前に磯貝が言ってたでしょう？『暗殺で聞く』ってそれと同じです」

言っているうちに家に着いた。

車が止まるが俺の口は止まらない。

「立场上、話せない事だってたくさんあるでしょう？だから聞きません。俺は全てが終わった後でもいいんです。自分が考えていたことが正しかったかどうかなんて」

「そうなのか」

「ええ。だからこの前口走った事は忘れて下さい」

そう。俺は信じた以上に大事なことをこの人から教わったし、貰った。口に出すのは実行する時だけ、そんな矜持と、そして物事に真面目に取り組むやる気も。

俺が鳥間先生から貰うのはそれだけで良い。

少なくとも今は。

「もう少し俺たちを信じて下さいよ、鳥間先生」

「……そうだな、すまなかった」

「なにに対する謝罪ですか？まあ、いいや。それじゃ、鳥間先生、また明日もよろしくお願いします」

「……ああ。また明日もよろしく頼む」

車から降りた俺は走り去る鳥間先生の車が見えなくなるまで見送るとスマホを弄る。何気なくした俺と鳥間先生の隠し撮りを倉橋さんに送る。

『鳥間先生と車ナウ』

LINEに送信した俺は彼が去った道を振り返る。

俺は今は、真実への道を自ら遠ざけたのかもしれない。だが、別に焦る必要はないと思っている。だって、あの人ならきつと、全てが終わった後にでもきつと全部話してくれると信じられるから。

俺は着信元倉橋さんのブーブー鳴るスマホを片手に家の玄関に入り、靴を脱ぎ捨てた。

34話 寺坂の時間

E組の夏は暑い。

ひたすらに暑い。

暑すぎて亡者になりそう。

そんな俺たちを見かねた殺せんせーがE組の裏山に俺たちを連れ出した。なぜだか、水着に着替えさせられて。

「乃咲くん、齒、大丈夫？」

「うん。早速生え変わってるから気にしないで。心配してくれてありがとうね、倉橋さん」

「うん。……あつ、話題変わるけどさ、この前の烏間先生とのツーショットなに!?羨ましすぎるよ」

「へへ、役得役得」

「なにそれ」

倉橋さんに絡まれるのをのらりくらり躲しながら歩くこと数分。俺たちの目の前には貯水槽を改造したプールが鎮座していた。ただ小さな沢を堰き止めただけじゃなく、しっかり整備されたプールが。

そんなプールを見て得意気に触手を組み、背一杯背伸びして高らかに笑う殺せんせー。

「水が溜まるまで1日、移動で1分!さ、あと1秒あれば飛び込めますよ」

皆のひやつほうー!という歓喜の声と殺せんせーのヌルフッフフという笑い声が重なり合う裏山の中で、今日も始業のベルがなった。

水の中とは俺にとってある意味で隔離された孤独な空間である。1人になりたい時、何か考え事をしたい時、水の中に沈んで考えると上手く物事を整理することができるから。

最近はずーんに入れることも相まって、水の中の心地よさが増したといっても過言じゃない。

一瞬が数時間かも感じられるこの力を使って水底に沈み、水面上に浮かぶ太陽を眺めているといろんなことがどうでも良くなるという

か、自分もこの星の小さな生命体の一つでしかないんだなあ、なんて真理めいた思考が脳裏を過ぎる。

そろそろ息も苦しくなってきたので水から上がろうかと思い、ゾーンから抜けるとすぐ近くに誰かの足があった。この白い肌と無駄に筋肉のついてない脚から察するに女子だな、なんて思いながら水から顔を出すとそこにいたのは案の定、倉橋さんだった。

「乃咲くん、鳥間先生が水中での訓練の仕方教えてくれたんだけどやらない?」

「やるうー!」

まさかそんなやりとりをしていたとは。俺は水中でくつろぐことしか考えてなかったのに。いやほんと、倉橋さん天使やわ。

などと思っていると殺せんせーがホイッスルを吹いた。

「ピー!こら!木村くん!プールサイドを走らない!転んだら危ないでしょう!」

「あ、す、すみません」

「ピッピッピー!乃咲くん、中村さん、原さんも潜水遊びも程々に!あんまり長く潜っていると溺れているのかと心配になりますから!」

「はーい」

「ピー!岡島くんもカメラも没収!」

「ピー!狭間さんも本ばかり読んでないで泳ぎなさい!」

「ピー!菅谷くん!ボディーパートは普通のプールなら禁止ですよ!」

事あるごとにピーピーホイッスルを鳴らす殺せんせー。皆んなの『小うるせえ』って吹きが鼓膜を叩く中、悪戯っぽく笑った倉橋さんが殺せんせーに近づいてゆく。

「そんなにカタいこと言わないでよ、殺せんせー!水かけちゃえ!」

パシヤつと上がる小さな飛沫が殺せんせーに命中する。てつきり、こら!監視員に水をかけちゃいけません!みたいな反応が来るかと思いきや、殺せんせーが出た反応は……。

「きゃあん!?!」

女子もビツクリな甲高い悲鳴だった。

これには流石にその場にいた全員の手が止まった。

「え、なに」

「今の悲鳴……」

倉橋さんと顔を見合わせる。

「乃咲くんにも水かけちゃえ！」

「きやあん!?!」

彼女に水を掛けられたので殺せんせーと同じリアクションを取ってみる。

「こんなリアクションだったよねえ……」

「だったよなあ……?」

俺は今度はカルマと顔を合わせる。

あーあ、悪い顔してらあ。けどまあ、そんなカルマの意図を理解出来てしまう自分も同類か。

俺たちは示し合わせたように水中に潜り、気配を消して、殺せんせーの座る監視台に近づき、同時に骨組み部分を掴むとガツチャンガツチャンと2人で台を揺らしてみる。

「きやあつ!?!カルマくん、乃咲くん!?!揺らさないでください!?!落ちる、落ちちゃいます!?!頼んます!?!」

ゼーハーゼーハーと息切れする殺せんせー。その異様に水を恐れる様子から俺たちは察した。恐らくはこれまで判明した中で最も使えるであろう弱点を。

「……いや、別に泳ぐ気分じゃないだけだし。水中だと触手がふやけて動けなくなるだとか、そんな無いし〜」

「殺せんせー、それ、告白してるようなもんですよ」

「にゅやあ!?!」

殺せんせーは泳げない。

そんな殺せんせーの弱点はこの一夏の課題になりそうだと俺たちはこの時に直感した。

「手にビート板もってるからてつきり泳ぐ気満々なのかと……」

「これはビート板じゃありません!ふ菓子です」

「おやつかよ!?!」

殺せんせーの新たな弱点発覚と共にまた一つ活気立つ俺たち。そんな俺たちから孤立した位置にいる男が1人……。

「ふっ……下らねえ……」

寺坂はそんな俺たちを見下していた。

?? ?? ??

さてE組専用プールが開かれてから数日。俺たちの知る限りでは表だった問題はなく数日が経過したのだが……時折、妙なことが起きる様になった。

まあ、主にE組プールが荒らされたくらいなんだが。

本当に俺の認知する事件はこれくらい。あ、でも片岡が面倒な奴に絡まれたとかそんな話を聞いたが、いつも通り、殺せんせーが解決したのだろう。

「な、乃咲！バイクもいいだろ!？」

「そうですね乃咲くん！目指せ大型バイク乗り！漢字の漢とかいて男の中の男！男に生まれたからにはこれくらいの趣味は是非に嗜みましよう！」

「お、おう」

「何やってるんだ？吉田……」

「あ、て、寺坂……」

と、そこに明らかに機嫌の悪い寺坂登場。なんだか妙に機嫌悪いな、コイツ。

何かあったのか？

「い、いやあ。この前、コイツらとバイクの話で盛り上がってよ、うちの学校じゃこう言うのに興味ある奴いないからつい話し込んでしまった」

「ヌルフフフ、そう言うことです。しかもこのバイク最高で時速300kmまで出るんですって。先生も一度でいいから本物に乗ってみたいもんです」

「いやアホか！抱き抱えて飛んだ方が速いだろうが」

吉田と殺せんせーの漫才じみたやり取りにクラス内で笑いが起る。しかし、寺坂はそれすら居心地悪いとは言いたげに一度大きく鼻で笑いとぼすと殺せんせーが作ったバイクの模型を蹴り倒した。

「にゅやあっ!?!」

「あ、おい!?!何すんだよ寺坂!?!」

唐突な横暴で傲慢な態度に思わず吉田が声をあげ、そんな彼に続くようにクラスメイトたちが非難の言葉を浴びせる。

「お前らもぶんぶんハエみたいにうるせえな! 退治してやんよ!」

それが鬱陶しかったのか、寺坂は机の中から殺虫剤の缶を取り出すと地面に思いつきり、力一杯叩きつけて破裂させた。

そんな寺坂の横暴に流石に怒った殺せんせー。けれど、寺坂は殺せんせーを鬱陶しがるばかりで反省の色は一向に見られない。

「寺坂くん! ヤンチャをするにも限度っていうものが——」

「触んじゃねえよ! モンスターが! 気持ち悪いいんだよ、テメーも、モンスターに操られて仲良しこよししてるお前らも!」

寺坂の言葉にムツとする面々。そんな中でカルマだけがいつもの調子で言い放った。

「何がそんなに気に食わないのかねえ。気に食わないなら殺しやあ良いじゃん。折角それが許可されてる教室なんだからさ!」

そんなカルマにも当然、反発する寺坂。

「なんだテメー。カルマ。お前も俺に喧嘩売ってるのか? 上等だよ、大体テメーは最初から——」

「ダメだよ、寺坂。喧嘩するならまずは口より先に手を出さないと」

だが、ただのガキ大将の逆ギレがカルマに通じるはずもなく……。ガタガタと文句を抜かす口はカルマの手によって物理的に封じられてしまった。

「……ッ、離せよ! くだらねえ!」

カルマの手を振り解くと寺坂はそのままの勢いで教室を出て行ってしまった。

「なんなんだ、アイツ」

「一緒に平和にやれないもんかな」

苦悩が隠し切れていない我らが学級委員に同情を禁じ得なかった。

?? ?? ??

「……」

シロの野郎に頼まれた対タコへの工作をしながら何気なく考える。

E組は居心地が良かった。誰にも期待されない劣等生の集まり。勉強できない奴、俺みたいに素行が悪い奴が落とされる終着点。

そんな掃き溜めの様な場所は居心地が良かった。誰にも期待されないクズの集まり。そんなE組が居心地良かった。

だが、そんなE組をあのモンスターは変えちまった。地球を救う、なんて大きな目標をみんなに作りやがったせいでもやる気と活気が溢れた。

あのモンスター、殺せんせーが来てからのアイツらは大したもんだ。本校舎の連中からの妨害が入ったとはいえ、平均点自体は大幅に上がったし、この前の球技大会でも野球部に勝ちやがった。

大したもんだ。本当に。だけど、そんなE組の明るい雰囲気は居心地悪くてしよがなかつた。

地球を救うだとか、暗殺の為の自分磨きだとか、落ちこぼれからの脱却とか、正直なところ、そんなことはどうでも良かった。その日その日を適当に生きたいだけなんだよ。俺は。

だから俺は……。

「ご苦労様、寺坂くん。プール破壊、薬剤散布、薬剤混入、君のおかげで効率よく準備ができた——はい、報酬の10万円」

こつちの方が居心地が良い。

「キミの様な内部の協力者がいてくれると助かるよ、寺坂くん。なにせ、ヤツは鼻が効く。外部の者が動き回れば直ぐに察知してしまう。だから寺坂くん。キミの様な内部の者に協力を仰いだのさ」

触手を宿した改造人間、堀部イトナ

その保護者を名乗る、シロ。

「イトナ、おまえなにか変わったな。……目と髪型か？」

「お？よく気がついたね。髪型が変わった、それは触手が変わったことを意味する。前回の反省を活かして綿密な育成計画を立ててより強力に調整したんだ」

言っていることはよくわからねえが、イトナがより強力になったってことなんだろう。

そんな風に考えているとシロがわかった様な口を聞いてきやがる。「寺坂竜馬。私にはキミの気持ち分かる。あのタコにム力つくあまりクラスの中でもキミは孤立を深めている。だから、キミに声をかけたんだ。安心しなさい。私の計画通りに動いてくれれば直ぐにでもヤツを殺し、奴が来る前のE組に戻してあげよう。その上、お小遣いまで貰えるんだ、悪い話じゃないだろう？」

そう言われてみると確かに悪い気はしない。そう思いながら受け取ったばかりの金を見てみるとイトナが不意に覗き込んで来た。

「な、なんだよ？」

「お前は……あの赤髪の奴と銀髪の奴より弱い。馬力も体格も奴らよりも優っているのに、だ。何故だか分かるか？」

唐突で無神経な問いかけに口を開かずにいるとイトナがすかさず口を開いて言い放つてきやがった。

「お前の目にはビジョンがない。勝利への意志も、手段も情熱もない。目の前の草を漠然と食っている牛は……牛を殺すビジョンを持った狼には勝てない。ビジョン……それだけでいい」

いつぞやみたいに言いたいことだけ言ってさっさと居なくなってしまうイトナに腹が立つ。

「なんなんだ!?!あのヤロウ!相変わらず……!脳みそまで触手なんじゃないのか!?!」

「ごめんごめん、私の躰が行き届いてなくてね。仲良くしてくれ、なんせ我々は戦略的パートナーなんだから」

機嫌が悪くなった俺に取り入る様に言い放つシロ。

「クラスで浮きかけているキミなら不自然な行動でも自然にできる。我々の計画を実行するのに適任なんだ。決着は明日の放課後だ」

そう言いながらシロは見慣れた銃を手渡してくる。

「これは？」

「これは銃の形をしているけど、実は発信機なんだ。我々に合図を送る為のね。作戦はこう——」

1、E組の連中をプール内に配置する。

2、配置が終わったタイムミングでイトナが駆けつける。

3、イトナがタコをプールに落とす。

4、E組、イトナ、俺で総攻撃して殺す。

シンプルな作戦だった。

「そんなんでアイツが殺せるのかよ？」

「大丈夫さ。その為のイトナのパワーアップなんだから。私たちが信じて欲しい。実はキミが今日散布した薬は奴にだけ効くスギ花粉症みたいなものでね。粘液が底をついた頃に作戦を決行する。やっかいなんだよ、あの粘液は」

「ごたくはどうでもいい。殺せさえすればそれでいい。だから俺はシロの言葉に頷き、俺は発信機を受け取った。」

35話 ビジョンの時間

その日、殺せんせーは朝から泣いていた。

目から黄色い体液を流しっぱなし。超生物の涙は黄色いのか、鼻水みたいな色してんなとか思っていたらビッチ先生がツツコミを入れた。

「なによ、さつきから意味もなく涙を流して」

「あいえ、これは鼻から出ているので鼻水です。目はその隣の小さい方」

「まぎらわしい!!」

うわっ、やつぱり鼻水なのか、あれ。そう思うと風邪なのか?と心配する反面、どんな症状ですか、とツツコミしたくなる。あれか、花粉症的な奴なのか?

「昨日から体の調子が変わです。夏カゼですかねえ」

「風邪とか引くのか、超生物」

とかなんとか言っていると今日はまだ登校してきてなかった寺坂がやって来た。

「おお!寺坂くん!今日はもう来ないのかと心配でしたよ!昨日、キミがキレたことならもう誰も気にしてませんから!ねえ!皆さん、ね!」

寺坂の顔をベツトベトにしながら心配する殺せんせー。しかし、俺たちの心配は寺坂が昨日のことを気にしているかどうかではなく、現在進行形で顔が殺せんせーの鼻水でべちゃべちゃになって行く寺坂の機嫌の方に向いていた。

けれど意外なことに冷静な寺坂は殺せんせーの服で粘液を拭き取ると高らかに宣言した。

「おいタコ、そろそろ本気でぶっ殺してやるよ。放課後プールまで来いよ、苦手なんだってな、水が?」

おっと、そう来たか。

殺せんせーはこう言う誘い系は断らない。それにこんな公衆の面

前で宣言するくらいだから余程自信のある作戦なんだろう。

どれ、どんな暗殺をするのかな？と多少興味があつたので見守るつもりで傍観を決め込んでいると。

「テメーらも全員手伝えー！俺がコイツを水ん中に叩き落としてやるからよおー！」

今度はそう来たか。

「寺坂！お前、みんなの暗殺には協力してこなかった癖によ、それをいきなりお前の都合で命令されて……はい、やります、つて言うと思うのか？」

前原のもつともな反論に全員が頷く。

言われてみると確かに寺坂が協力したのは俺が授業中にねじ込んだ暗殺だけだからな。

そう思えば個人での暗殺に協力云々の話は当然出るだろう。不満が出るのはよく分かる。

「けっ、別に来なくても良いぜ？その時や賞金百億独り占めだ！」

いってんねえ。んじゃ俺は高みの見物と……。

「おい、その俺は関係ありません、みてえな顔してる白髪頭！美術ノツポの方じゃねえ、そのアホすらだ。キョロキョロ周り見渡してるんじやねえ、お前しかいないだろう、乃咲！テメーも参加しやがれ」「え、普通に嫌なんだけど」

「ホレ」

あれこれ1人ツツコミしてる寺坂がズンズンと殺せんせーの粘液を踏み散らしながら俺に一枚の紙を押し付けて教室を出て行く寺坂の背中を見送ったあと、押し付けられた紙切れを見る。

【てらさかくんのいうことなんでもきいてあげる券】

あ、これあれだ。一番最初の合同暗殺の時に渡した【いうことなんでもきいてあげる券】だわ。まさかとっておいたのか。こんなくだらない紙切れ。からかいがてらに無駄に金色の折り紙を使って作ったバカみてえな券。

寺坂、案外可愛いところあるじゃねえか。

ちよつとだけ寺坂に萌えた。

?? ?? ??

「よし、そうだ！そんな感じでプール全体に散らばっとけ！」

「そーだ！寺坂さんの言うことを聞けー！野郎ども！」

「疑問だね、僕は。キミに他人を泳がせる技量があるのかい？」

「うるせえぞ！乃咲、竹林い！てめえらも入るんだよっ！」

「フヒイ！」

「ハヒイ！」

寺坂さんの腰巾着やってたらプールの中に蹴り落とされた。

なれないことをするもんじゃないな。碌な目に遭わない。

「すつかり暴君だぜ？寺坂の奴」

「ああ。あれじゃ1年2年の頃と同じだ。学年中の嫌われ者。浮きすぎなんだよ、この学校じゃ」

あーあ、寺坂へのヘイトがどんどん上がってる。確かに今の寺坂は完璧な暴君だ。あれしろこれしろ、と騒ぎ立てるだけ。しかも具体的な指示は一つたりともありやしない。ただプールに入ってその辺に適当に散らばってる。寺坂の指示はそれだけ。作戦の概要なんてあつたもんじゃない。

「なるほど、先生を水に落として皆さんに刺させる計画ですか？」
「っ！」

「ですが、それでキミはどうやって私を落とすつもりです？ピストル一丁では先生を一步ですら動かさせませんよ？」

背後に立たれ、そんなことを言われて青筋を立てる寺坂はその手に握ったピストルを殺せんせーに向ける。

そして紡がれる言葉は死刑宣告の様で。

「覚悟は出来たか？モンスタ―」

「ええ、勿論です。鼻水も止まりましたし」

「ずっとテメーが嫌いだったよ、消えて欲しくてしようがなかった」

「ええ。知ってます。これのあとでゆっくり2人で話しましょう？」

緑のしましまを浮かべる殺せんせーは完璧に寺坂を舐め切ってい

る。そんな扱いに腹が立ったのか、寺坂は勢いのまま引き金を引く。どうせ、発砲された弾丸は避けられて、寺坂が赤っ恥をかくだけだとたかを括っていた矢先、それは起きた。

凄まじい爆裂音と少し遅れて身体が意図しない方向に流される感覚。プールが何者かに破壊された。

いや何者か、なんて言い方はよそう。寺坂が破壊したのだ。まずい、流される。そう思いながら俺は近くでもがいていた竹林を捕まえ、正面から流されてきた倉橋さんを正面から身体で受け止めて、プールのコースラインに捕まる。

まずい。流石に俺含め3人分の体重を片手で支えるには限界がある。ずるずると手がコースラインから滑って行く。

竹林を脇に抱え、倉橋さんを腕と胸板で挟んでホールドしているこの状況は非常に体勢として危うい。

「大丈夫か、2人とも!？」

「へ、平気!」

「た、助かったよ乃咲……!」

きつい体勢で堪えること数秒、殺せんせーが彼たちを救出に来てくれた。

「ナイスガッツです! 2人を頼みましたよ乃咲くん!」

俺たちを陸に持ち上げると同時に余裕なく言い放ち、飛び去る殺せんせー。しかし、俺は俺でやるべきことがある。

「竹林、倉橋さんを頼む! ちよつと寺坂問い詰めてくる」

「わ、わかった!」

俺は啞然とする寺坂に駆け寄り、両肩を掴んでガツクンガツクン揺らしながら今回の真意を問い詰める。

「答える寺坂! 今回のこれはお前の作戦か!？」

「ち、ちがつ! シロとイトナが……!」

「あの2人か……!」

俺は教室まで対先生マチェットを取りに戻る。イトナ相手なら役に立つかもしれないから、教室を水浸しにしながら教室にあるありつただけの先生ナイフをかき集めて、現場に戻る。

「乃咲クン！なにがあったの」

「プールが爆発した、犯人はイトナとシロだ！」

手短かに伝えて、走るといまだに呆然とする寺坂と合流した。

カルマも消滅したプールを見て唾然としていた。

「話しがちげえーよ、イトナを呼んで突き落とすって聞いてたのに……」

「まんまと利用されたわけね」

カルマの呆れたような言葉に対して寺坂は反論するように彼に掴みかかり、畳み掛ける様に捲し立てた。

「言つとくが俺のせいじゃねえぞ、お前らあ！こんな計画、やらす方が悪いんだ!!皆んなが流されて行つたのだから全部奴等が……!」

寺坂の言い訳を書き終える前にカルマが寺坂の頬を殴った。殴られて尻餅をついた寺坂は俺たちを震えながら見上げる。

「ターゲットがマツハ20で良かったね。じゃなきやお前、大量殺人の実行犯にされてたよ。流されたのは皆んなじゃなくて自分じゃん。他人のせいにしてる暇があるなら自分が何をしたいのか考えたら？」

そう吐き捨てる沢の下流へ走り去るカルマ。

「の、乃咲……」

残った俺を継る様に見上げる寺坂に口を開く。

「勉強と信頼って似てるよな、自分の努力と行動次第で簡単にいろいろと上下する。信頼も成績もな。お前、成績だけじゃなくて信頼まで地に落ちたよ。このままだとお前、本当の意味でENDになるけど、それでいいの？」

「……………」

「よく考えるんだな」

俺も現場に走ろうとしたところで、寺坂が後ろで立ち上がる。

「…………俺も行く」

「勝手にしろ」

俺たちは2人で駆け出した。

?? ??

??

俺は自分が強いと思っていた。

ロクに喧嘩もしたこたあない。

ただ、喧嘩になりかけたことならある。

「……………」

今、俺の前を走ってる乃咲とだ。

喧嘩と言っても、殴られたとかそんなんじゃない。ただ、道を塞いで歩いていた俺の正面から来たコイツに一睨みされただけ。

正直、ビビった。初めて他人に道を譲った。当時のコイツの『道の真ん中に落ちてるゴミを見る目』が気に食わなかったと同時に怖かった。

この時、持ち前のガタイと声のデカさだけで、周りを威圧していた自分が陳腐に見えて、負けた気がして仕方なかった。

コイツに無自覚に鼻っ柱を折られただけじゃない。この学校じゃそもそもそんなガタイと声のデカさで周りを威圧する生き方は通用しなかった。

自分の持っていた安っぽい武器はここじゃ一切通用しない。きつとこれから一生そうなんだとコイツに道を譲った瞬間に悟った。

E組に落ちた時、安心した。

自分の同類。不貞腐れた連中の集まり。惰性だけで生きている様な当時のE組は居心地が良かった。

なのに、あのモンスターがみんなに大きな目標を与えちゃった。

そして、皆んなに取り残された俺はこうして頭のいい奴に利用されて、こき使われた。

「くそっ！」

気に食わない。

奴等の思う壺に動いてしまった自分も、結果的に何も出来ない自分にも。だから、せめておもった。

目標もビジョンもない馬鹿は頭のいい奴に操られるしかないなら、せめて、操られる相手は自分で選びたい、と。

??

?? ??

俺たちが着いた頃、イトナと殺せんせーは既に戦いを始めていた。

だが、それ以外のE組生徒は全員無事だったらしい。ひとまずは一安心していいだろう。

「マジかよあの爆発にあの2人が噛んでたとは」

「それだけじゃないよ。みて、殺せんせーとイトナの触手のパワーが違いすぎる。きつと、他に何かあったのよ。水はかなりのハンデなんだわ」

岡島と片岡の分析に補足を付けるようにここまでダンマリしていた寺坂が口を開いた。

「水だけじゃねえ。力を発揮できねーのはテメーらを助けたからだよ」

そう言つて寺坂が指差した先には今にも折れそうな細い木にこのクラスで最もヘビーな原さんがしがみついていた。

「ああつ、ぼつちやりな原さんが今にも折れそうな木に！」

「吉田や村松も崖っぷちだ!？」

「殺せんせー! 原さんたちを守る為に!？」

「アイツ、ヘビーで太ましいから危ねえぞ」

普段なら寺坂の言い草に笑っていた場面なんだろうが、状況が状況だけに笑えない。どうしたものかと考えていると、磯貝が口を開く。

「お前、まさか、今回の件、アイツらに操られて?!」

そんなセリフに寺坂はバツが悪そうに笑うと白状した。

「ああ、そうだよ。目標もねえ、ビジョンもねえ奴は頭のいい奴に操られる運命なんだよ」

本当にバツが悪そうなあたり、本気で反省しているのだろう。カルマの叱責がよほどこたえたらしい。

そんなカルマに向かって寺坂は向き直る。

「だがよ、操られる相手くらいは選びてえ。アイツらはコリゴリだ。賞金持ってかれるのも気に入らねえ! だからよカルマ! テメエが俺

を操ってみせろ！その狡猾なオツムで俺に作戦与えてみる！完璧に実行してあそこにいるの助けてらやあ！」

そんな寺坂にカルマも向き直る。

「別にいいけど、実行できるの？俺の作戦、死ぬかもよ？」

「やってやんよ！こちとら実績持つてる実行犯だぜ？」

勇ましく言い放ち、シロたちの方へと向かう寺坂にカルマが言う。

「え、作戦まだ考えてないけどもう行くの？」

「え、あ、うん！まだなのね……」

寺坂に萌えた。

??

??

??

「シロ！イトナ！よくも俺を騙してくれたな!！」

「あはは、悪かったよ、寺坂くん。だが、E組で浮いていた君にはどうでもいいことだろう？」

「うつせえ！誰が浮いてるって理由で殺人犯になりたがるってんだよ!？俺は頭に来てるぜ！おい、イトナ！お前、俺とタイマンはれや!！」

然り浸透といった様子の子の寺坂。そんな彼に悪びれもせず飄々と酷なことを言い放つシロにキレた寺坂が我慢できないと言った様子でイトナに立ち向かう。

着ていたシャツを脱ぎ、盾がわりにすることで触手を持つイトナに立ち向かおうという彼をシロが笑った。

「やめなさい！寺坂くん！君が勝てる相手じゃない!！」

「うつせえ！引っ込んでろ膨れタコ!！」

そんな荒ぶる寺坂に触手の一撃を加えようとするイトナに渚が焦った様にこの作戦の発案者のカルマに向き直るが、カルマはそれを軽く制すると口を開いた。

「いーんだよ、死にはしない。むしろアイツらは俺たちを殺さないし殺せない。殺したら人質としての価値がなくなるからね。だから寺坂に言っておいたよ。気絶する程度の触手は喰らうけどあくまでその程度、死ぬ気で喰らいつけてさ!！」

ぶっ飛んでる指示だが、そいつを実行しに行く奴もぶっ飛んでる。俺はそう思いながら皆の頭上、気配を消しながら木の上でマチエツトの投擲体勢に入っていた。

『乃咲クンは寺坂が触手受けたあとでイトナの触手を破壊して欲しいんだわ。大丈夫、絶対に隙ならでできるからさ。触手破壊のプロでしょ？』とかカルマからのえげつないもはや投げやりとも言える信頼に応えるためである。

「ぐふう……!!」

触手の重たい一撃が寺坂を襲う。辛うじて寺坂は意識を保っている様だが、盾にしていたシャツはイトナの触手に巻き込まれて回収されてしまった。

まずいぞカルマ、隙なんて何処にあるんだ？と問いかけそうになったその時、『くちゅん』と随分とまあ、可愛らしいくしゃみが聞こえてきたので音の方へ視線を向けるとイトナが花粉症も顔負けなくしゃみを連発していた。

「乃咲クン、いまいま」

「っ、了解！」

言われた通りに触手に向かってマチエツトを投擲する。律の体の中で作られた対先生プラスチックで刃先から柄尻まで作られたそれはくしゃみするイトナの触手を2本、容易に切り落としてくれた。

『柄は人間工学的に握りやすい形に成形しました！どうでしたか、乃咲さん』

「手に吸い着くみたいだった。完璧な仕上がりにだよ、律」

『ありがとうございます！』

などと律とイチヤツつきながら話していると、殺せんせーが原さんをしつかり助け出してきてくれた。

「寺坂のシャツ、昨日着てた奴と同じなんだ。つまり、昨日の対先生ガスを超至近距離で吸ったシャツだったこと。今日、殺せんせーがやらと粘液出しまくってたのがそのガスのせいならイトナにも効くだろうと思っさ？弱点、殺せんせーと同じなんだって？」

「けどそれなら乃咲に触手破壊までさせる必要あったのか？くしゃみ

してる隙で十分な時間稼ぎが出来てると思うんだけど」

「乃咲クンに壊してもらったのはあくまで保険。触手失ったら動揺するっていうから念には念を入れないとネ」

なるほどな、今回は完璧にカルマの作戦勝ちか。しかも保険までかけてる徹底ぶりに今回ばかりは脱帽だな。

などと感心してばかりではいけないか。

俺は木の上から沢に高い水柱を作りながら飛び降り、イトナに向かって沢の水を思いっきり蹴り上げた。

「弱点が殺せんせーと同じなら、水が弱点なのも一緒。だよな、カルマよおー！」

「乃咲クン正解〜って訳で、皆んな。転校生の歓迎水掛け大会でもやろうか〜」

「『賛成〜!!』」

俺とカルマの言葉に続く様にクラスメイトたちが、水飛沫をあげて沢に飛び込み、水遊びを始める。

「吉田、村松！」

「あ？」

「は？」

「オメエらならそこから飛び降りれんだろ！1発デケエの頼むぜ！」

「まじかよー！」

「しゃーねえなー！」

水面をばっしやばっしやと叩きながら吉田と村松に指示を飛ばす寺坂。そんな彼に応える様に直ぐに彼らも飛び降りるあたり、寺坂組の信頼関係は本物なんだろう。

俺たちの”水遊び”で余計な水分を吸ったイトナの触手。それをくしゃみをしてる隙にここに来るまで集めて来たナイフを投げて破壊して、さらに動揺を誘う。

触手が再生しても、水を吸い、動きが鈍化し、くしゃみして隙を晒している間に俺や、俺が投げたナイフを拾った生徒の手で触手を破壊されるイトナ。その光景は言い方が悪いが集団リンチのようであった。

触手の再生には体力を使う。イトナが疲弊した頃合いをみてカルマがシロに問いかけた。

「どーすんの？まだやる？俺らも賞金持つてかれるの嫌だし、そもそも皆んなアンタの作戦で死に掛ける。ついでに寺坂もボコられるし、まだ続けるならこつちも水遊びさせて貰うけど」

その言葉に呼応する様に各々が水を準備する。

流石に分が悪いと判断したのか、シロは踵を返した。

「帰るよ、イトナ」

そんな言葉に思いつきり齒軋りしたイトナに殺せんせーが温かく言う。

「どうです？みんなで楽しそうな学級でしょう？そろそろちゃんとクラスに来ませんか？」

「……フン」

殺せんせーの提案を鼻で笑うとイトナはそのままシロの後に続いて去って行ってしまった。

その様子によくやく一息ついた一同は持っていた武器、水をその場に放り投げるとだっと疲れ多様に息を吐いた。

「ふいー、なんとか追っ払えたな」

「良かったね、殺せんせー。私達のお陰で命拾いして」

「ヌルフッフフ、もちろん感謝してますとも、まだまだ奥の手はありましたがねえ」

今回はこれで一件落着……かと思いきや、そうは問屋が下さなかった人物が1人。寺坂に突つかかっていた。

「そーいえば寺坂くん。さつき、私のこと散々言ってくれたわよね。へびーだとか、ふとましいだとか」

誰だろう、原さんである。どうやら木の上にしっかりしがみつきなながらも寺坂の言葉はちゃんと聞き取っていたらしい。

詰め寄られる寺坂に1人だけ水に濡れない位置から高みの見物決め込んでいたカルマが笑っていた。

「あーあ、本当に無神経だよな、寺坂は。そんなんだから人の手のひらで転がされるんだよ」

「うるせー！カルマ！テメエも一人高いところから見てるんじやねえ！」

その一言に青筋立てた寺坂がカルマに掴みかかり、高台から引き摺り下ろし、そのまま沢の中にカルマを投げ込んだ。

カルマは全身水浸しになった身体を見下ろして当然キレる。

「はあ!?何するんだよ、上司に向かつて！」

負けじと反論する寺坂。

「誰が上司だ！触手を生身で受けさせるイカレた上司が何処にいやがる!!大体テメーはサボり魔の癖にいつもオイシイ所は持っていきやがって!?」

「あーそれ、私も思ってた」

「これを機会にたっぷり泥水も飲ませようか」

寺坂の言葉に同調した片岡と中村さんが一緒にカルマに襲い掛かる。もうすっかりずぶ濡れなカルマに俺は思わず爆笑してしまった。

「ははははっ！カルマ、全身びっしよりでやんの！」

膝を叩き、腹を抱えて笑っていると、寺坂の矛先が今度は俺に向かった。

「テメーもだ乃咲！触手破壊だの、合同暗殺だの！普段のらくらして癖にそう言う時ばかり中心人物気取りやがって！」

「あー、それ俺も思ってたわ」

「だな。今までなんとなく従って来たけどこれを機会に乃咲にもたっぷり泥水を飲ませてやろうぜ」

「え、いや、ちよっ」

身の危険を感じて体を後退させると何者かに両サイドからがっしりと腕をホールドされた。

「乃咲。さっきはありがとう。僕もみんなと同じ気持ちだ」

「あはは。乃咲くん——圭ちゃんもずぶ濡れになろうよ」

「ちよっ、まっ、竹林？倉橋さん!」

2人にしつかりホールドされている間にカルマと寺坂が連携して水をぶっかけて来やがった。

「ブツ……!?やんのかテメエらごらああああ!!」

それで久しぶりに不良児スイッチが入った俺。

2人を振り解いてカルマと寺坂と俺で乱闘騒ぎ。それを見て爆笑するクラスメイトたち。今日、ようやく寺坂がE組に馴染んだ気がする。そんな放課後だった。

36話 テスト前の時間

期末テスト!

それは1学期の総決算!

桐ヶ丘中学校では成績が全て! E組を誰に恥じることもないクラスにする、そう目論む100億の賞金首にとってこの期末テストは1学期の総仕上げ、決算の場である!

とまあ、こんな感じでE組は今回のテストでも燃えていた。

教室内は暑いので涼むために裏山の沢付近でのテスト勉強中。殺せんせーはいつにも増してやる気満々と言った様子で口を開く。

「ヌルフッフフ! 君達も1学期の間にだいぶ基礎ががっちりに出て来ましたのでこの分なら期末の成績はジャンプアップが期待できます!」

「殺せんせー、今回もE組全員50位以内を目指すの?」

「いいえ、あの時は先生も目先の点数ばかり気にしていました。本当なら生徒それぞれに合った目標を立てるべきなのです。そこで今回はこの暗殺教室にピッタリの目標を用意しました!」

暗殺教室にピッタリな目標という言葉にクラスメイトたちの手が一斉に止まる。視線が充分に集まった頃合いを見て、殺せんせーは口を開いた。

「前にシロさんの言った通り、先生は触手を失うと動きが落ちます。

ご覧なさい。全ての分身が維持しきれず、子供の分身が混ざってしまいました」

「分身ってそんな減り方するのか」

「いや、違うでしょ」

殺せんせーの言う通り、俺たちに教えていた分身の幾つかに子供くらいの背丈の分身が混ざり始めた。

「更にもう一本、触手が減ると——ご覧なさい。子供分身が更に増え、親分身が家計に苦しみ出しました」

「切ない話になって来たぞ」

「もう一本減らすと父親分身が蒸発しました。母親分身は女手ひとつ

で子を養わなくてはいけません」

「重いわ!」

「つーか、触手3本無くなるだけで分身の精度にこんだけ差が出るのかよ」

「そう、乃咲くんが今、指摘した通り、触手3本無くなるだけでも影響が出ます。先生が触手を失う際に損なわれる運動能力は……ざつと20%!」

20%ってそんなに落ちるのか?単純計算で5本破壊すれば殺せんせーの運動能力は0%になるってことだろ?

それってとんでもない弱点じゃないか。

そんな事実には気付くと殺せんせーは背伸びしながら言った。

「そこでテストについての本題です。前回は総合点でのみ評価していましたが、今回は皆さんの最も得意な教科も評価に入れます。教科ごとに1位を取ったものには、答案の返却時、触手を一本破壊する権利を差し上げます」

「「ツ……!!」」

クラスの中で緊張が走る。

そんな緊張に対して狙い通りだと言わんばかりにヌルフッフフと笑う殺せんせー。彼は最後にこう締め括った。

「チャンスの大きさがわかりましたね?総合1位と各教科1位!皆さんがトップを取った場合に破壊出来る触手は6本です!これが暗殺教室組の期末テスト。100億に近付けるかは皆さん次第なのです!」

殺せんせーは俺たちをやる気にさせるのが本当に上手い。自分の命をチップに俺たちのやる気を盛り上げる異常な教育手腕には素直に舌を巻く。

こりゃあこれで、密かに第二の刃を研ぎ続けて来た甲斐があつたな、と思っていると、登校中にたまたま遭遇する三毛猫が草むらから現れ、すり寄ってきた。

いつしか倉橋さんと撫でたネコだ。相変わらず元気そうだなあ、などと思いつつ首下を搔くように撫でてやると、俺斜め前で真面目に

勉強していたはずの速水さんがネコの声にピクリと反応し、振り返って来た。

あらやだ、この子、もしかして猫が好きなのかしら？などと思いつつ、ネコを撫で続けていると、速水さんの視線はネコから一向に外れることがない。

この時俺は確信した。このツンデレスナイパー、ネコ好きだな、と。まあ、俺にデレてくれたことはないけど。

などと思いつながら、ネコを持ち上げ、速水さんの方に向けて見ると、ビクツと顔を背けてしまった。

それでもこつちが気になるのか、チラチラと振り返る速水さん。少し面白かったので、ネコを連れて速水さんの隣へ。

「はい、ねこ」

「……………」

「早くしないとにげちやうかもなあ〜」

「……………」

差し出されたネコを凝視して恐る恐る猫に触れる。気持ち良さげな声を出す猫に満更でも無さそうな……:…:というか、普段のクールビューティなイメージがガツシャンドツシャンと音を立てて崩れて行きそうないい笑顔を見せる速水さん。

「……………にゃ〜」

「——え？」

「……………」

ニマニマしながら見ていると我に帰ったらしい速水さんがそつぽ向いてしまったので、大人しく退散する。これ以上揶揄ってツンの要素が強まってしまっても俺にはあまりいいことがあるとは思えないからだ。

にしてもいいリアクションが見れた。あの速水さんが『にゃー』だつてき。俺は隣に座るネコに勉強の妨げにならないくらい適度に構いながら勉強を進めた。

?? ??

??

「あ、圭一！」

「ん？なんだよ磯貝」

「もし放課後空いてるなら本校舎の図書室行かないか？実は随分前から期末を狙って予約してたんだ」

「……うちの図書室、予約制だったのかよ」

とんでもない事実を聞いた気がする。中学校の図書室が予約制ってマジかなかよ。ありえなくねえか？

「誘いはありがたいけど遠慮しとく。……E組が行ったら余計なのに絡まれて折角のチケットが無駄になりそうだ」

「あはは……た、確かに否定できない。わかった。適当なやつ誘って見るよ」

「悪いな、埋め合わせはいつかするわ」

「お前からそんな言葉が出てくるとはな。わかった、その時を楽しみにしてるよ」

磯貝とそんなやりとりをして俺は教室を後にする。

完全予約制の図書室なんて行こうものなら他のクラスからの罵声で勉強どころじゃなくなりそうだからな。

しかし、かと言って家で勉強し続けるのも少し飽きてきた。ゾーンに入れるようになってから勉強の効率は異常に良くなり、つい先日、とうとう各教科の1年の頃から今回のテスト範囲までの復習が終わったのだ。

自分へのご褒美……をするにはまだ少し早いだろうが、ちよつとくらの贅沢なら許されるだろう。

そう考えた俺は学校から少し離れた喫茶店へ。いつだったか、俺が磯貝を恐喝した店までやって来た。

律儀に毎月祖父母がお小遣いをくれるが、使う当てがなく、貯まっっていく一方だったので、たまには喫茶店でお茶でも飲みながら勉強するのも良いんじゃないかと思ったからだ。

適当にアイスコーヒーを頼んで、教科書を広げてテスト範囲の先を少しだけ予習しておく。あの理事長のことだ。また直前で範囲を変

えるなんてことをやりかねない。

「圭一、そののピリオド見落としてるだろ。間違えてるぞ」
「……………なんでお前がここにいるんだよ」

教科書と参考書、問題集を見比べていると、聞き慣れたキザツらしい声が聞こえたので顔を上げると、そこには我が校が誇る5人の秀才、5英傑の筆頭、浅野学秀がニコニコ顔で立っていた。

「正面、いいかな」

「お引き取りください」

「すみませーん、僕にもアイスコーヒーを」

「だから帰れって」

「心外だな、僕だって勉強しにきただけなのに」

「わざわざ俺の正面に来てまでやることか!？」

「何言ってるんだ？一年の頃は良く一緒に喫茶店で勉強したじゃないか。忘れたのか？」

「1年の頃限定でな!?今3年だぞ」

「いいじゃないか、別に減るもんじゃない」

「俺のSAN値が減る…………」

「僕は神話生物かなにかか？」

俺やカルマ以上にのらりくらりしながら俺の正面に座る浅野。もういいや、どうにでもなつてしまえ。

俺はお手上げだとジェスチャーして浅野の同席を認めた。こいつの強引さは1年の頃から変わらないな。

『大丈夫だ圭一、僕に続いて言ってみよう。』俺は強い』

『俺は強い…………』

『有象無象を蹴散らす』

『有象無象を蹴散らす』

『踏み潰す』

『踏み潰す…………!』

ああ、頭痛が痛いなんて馬鹿なことを言いたくなるレベルで思い出したくない思い出が一気に蘇る。アレは俺が2回目順位を落とした頃にされた洗脳教育だったか。

いつだったかの球技大会で進藤を洗脳してる様子を見て恐怖を感じたのは当時の浅野を思い出したからだだった。

なるほど、やっぱりおっそろしい親子だよ。

などと思っているといると浅野のケアレスマミスを見つけてしまった。

「浅野、その問3の方程式、途中計算のカッコが一つたらないか？ほら閉じる方の」

「ん？あ、ホントだ。ありがとうよく気付いたな」

「珍しいな、お前がケアレスマミスなんて」

「僕だつてミスくらいするさ人間なもの」

「あ、そう」

そんなこと言いながら勉強に戻ると浅野が不意に笑い出す。その笑い方が多少気持ち悪かったので怪訝な顔を見ると、笑いながら困ったように訂正した。

「いや、すまない。お前とこうやって机を挟んで勉強するのが懐かしくてね。いや、本当に懐かしい」

「まあ、2年ぶりだしな」

「そうだな。ところ圭一。なんで、テスト範囲の先をやってるんだ？」

「いや、お前の親父に聞いてくれ」

「……今回はテスト範囲に変更はない。一切な」

「まじで？」

意外なところから情報が出た。

てつきりそういう情報は伏せるとばかり思っていたのだが。予想外だ。

「ただ、その代わりに中間テストとは桁違いの問題が出ると聞いている。曰く、問スターだ、とか」

「誰が上手いこと言えと言ったか」

「僕じゃない。職員室の前を通った時に偶然そんな会話を聞いたつてだけの話さ」

「偶然、ねえ。まあ、そういうことにしておこう」

「ここは素直に浅野の言うことを信じて、テスト範囲の復習に戻ると

しよう。英語の教材を閉じて数学の教材を開き直す。

すると、浅野が何気なく口を開いた。

「そう言えば、最近、理事長の様子が変でな」

「それは元からだ。このラスボス親子め」

「そう言う話じゃなくてだな……。どうにも、最近、E組に対する干渉
がいきすぎている、そう感じているんだ」

「……そりゃあ、アレだろ。E組の成績が底上げされてきているからな。
E組は最底辺であるべしな理事長からしたら面白くないんだろうさ」
「ここは適当にはぐらかしておく。」

おそらく、今日、コイツがここまでしつこく絡んできたのはE組の
抱える”なにか”を暴くためだったのだろう。

「それもあるんだろうがな。最近の理事長はE組に過干渉がすぎる。
2度に渡るE組視察、急なテスト範囲の変更、野球部対E組のエキシ
ビジョンへの参加、そして今回、君たちが中間テストで掲げていた全
員50位以内の目標を潰すためのA組強化期間。どれも前年まで例
のないことだ」

「……一番最後に関しては初耳なんだがなあ」

「乃咲、E組でなにか、まずいことをしちやいないだろうな」

「……まずいこと、というと?」

「最近、妙な噂を耳にする。コンビニスイーツを買い占める謎の巨漢、
高速移動する巨大な影、巨大な黄色いタコの目撃情報に、Gカップの
ねーちゃんの背後から聞こえてくる、ヌルフフとかいう笑い声」

「テーブルに頭突きをかまして頭を抱えてしまいたくなるのを必死
に我慢する。あのタコ。ちったあ自重しろや……!」

「ついでに言えば、E組の山に突如発生した巨大竜巻、裏山に目撃情報
のある謎のプール、そしてそのプールで泳ぎの特訓をさせられる夢を
見たとか言う女子生徒」

「一番最後のはアレだ。片岡が面倒な奴に絡まれたとかいう話だ。
俺は現場に居合わせなかったから知らないけど。」

「なにか知らないか、圭」

「……知らない」

そう知らん。殺せんせーが何をしようとか俺の知ったことではない。だから、嘘はついてない。知らない、うん。知らない。

これは嘘ではない。うん。嘘じゃない。

浅野の根掘り葉掘り聞いてやろう、みたいな視線を断るように言い切る。口を閉じた貝の気持ちで唇を固く閉ざしておく、諦めたらしい。ようやく浅野がアイスコーヒーに口を付けた。

話が一度落ち着いたところで俺も頼んでいたコーヒーを飲む。図らずとも浅野とタイミングでコーヒーを置いたと同時に、なんの因果か、全く同じタイミングでお互いのスマホが鳴った。

これもまた図らずとも全く同じタイミングで互いに電話に出た。

「もしもし?」

『すまん、圭一。とんでもないことになった』

「とんでもないこと?」

『ああ。A組の5英傑と賭けをすることになった。しかもすっかり話が広がって勝った方が相手に好きな命令をできる、なんて話になってるらしい』

「は?E組と賭け?」

浅野の素っ頓狂な声に向こうの話の内容が容易に想像ついた。ちよほど浅野と目が合う。

どうやら向こうも同じ内容の電話らしい。合った瞳が問いかけてくる。お前も同じ内容か?と。

それに対して頷き返しておく。これは一旦、何がどうなってそうなったのか磯貝あたりを問い詰めにあならんらしい。

「……面白いことになったな、圭一」

「そう思ってるのはお前と一部の教師陣だけだ」

ため息を吐きつつ、俺たちも今日は解散することになった。

?? ?? ??

「なるほど、売り言葉に買い言葉だったわけだ」

「ほんとすまない」

「いや、別に謝ることはないけど」

不真面目なカルマとそれに抗議する殺せんせーを尻目に状況を聞いた。どっちもどっちというか、一方的に絡まれ、少し反撃したら戦争になった、一言で表すならそんな感じのいざこざだな。

にしても、負けた方が勝った方の言うことを何でも聞く、か。面白い賭けじゃないの。勝てれば、の話しだけど。

「それよりどーするの？そのA組が出した条件ってなーんか企んでるきがするよ」

カルマが呟く。確かに彼の心配ももつともだ。昨日話した感じでは浅野の奴はなにかに感づき掛けている。

向こうからの条件にもよるが、E組は今後一切、A組に対して隠し事は致しません、みたいな約束させられたら暗殺のことが破綻する。生徒同士の口約束と国家機密、どっちが優先かと聞かれたら間違い無く後者だが、相手はあの浅野だ。見逃してくれるとは思えない……というか。

「心配ねーよ、カルマ。E組がこれ以上失うものなんてねーって」

気の軽いことを言う岡島に口を開く。

「岡島、よく考えろ。理事長がゾーマなら浅野はバラモスだ。単独で世界征服できる手腕を持つ奴がこれ以上E組から搾取する何かを見つけれないと思うか？」

「……思いません」

「だろ？なんかえげつない嫌がらせみたいな要求を纏めた書面を出してきて、『これにサインしろ。要求は一つだけなんだろう？だったらこれでも許容範囲だ』とか浅野なら平気でやってくる」

「乃咲の浅野親子への嫌な信頼感強いよね」

「そだね……」

俺のネガティブな発言に苦笑するクラスメイトたち。しかし、数名は危機感を感じたらしく、ペンを持つ指に力が籠るのを見た。

どれ、ここは一つ発破かけるか。

「みんな、俺は先に宣言しとく」

「お、出た。乃咲の発破だ」

「……宣言しとく！俺は今回は総合一位を取る！殺せんせーの触手は俺が貰うぜ」

「はいはい。んじゃ、うちらは得意科目で攻めるわよ！もちろん狙える奴は総合1位も狙っちゃって！」

「……………」

あつれえ。乃咲くんの発破つてもつと険悪な雰囲気にならなかった？なんなの？この先に言ってる、こっちはこっちでどうにかするから、的な雰囲気。

もしかして発破にならなかった？そもそも発破いらなかった？すべっちゃいましたか、乃咲くん。

「どんまい、圭ちゃん」

「あはは……みんなやる気満々だあ」

それはそうと倉橋さん。この前から俺のことを圭ちゃん呼びしてくるんだけど一体なぜ？

問い掛けるのは自意識過剰な気がして止めておくが、どんな意図があるのか知りたくなってしまう思春期には辛い。

「それはそうと、勝ったら何でも一つかあ。学食の使用権とか欲しいなあ」

「ふっ、無欲で可愛いなあ、倉橋さん」

「へ？そうかな？」

「ああ。俺だったら叶える願いの数を望む限り増やさして貰うね、とか、A組の権利まるごとE組に貰おうか？とかね。まあ、そうなるかと暗殺ができなくなるだろうけど」

「ははは、中々に鬼畜さんだねえ」

などと倉橋さんと冗談なのか本気なのか際どいラインでのやり取りをしていると、殺せんせーがヌルヌル笑って俺の頭を撫でた。

「ヌルフッフ。それもいいですが、こんなのはどうでしょうか？」

殺せんせーがこの学校のパンフレットを手渡してきたので開かれていたページを見ると、そこには特別優秀学級に贈られる夏休み中に南の島のリゾート地での合宿が紹介されていた。

そっか、そう言われればそんなのもあったな。

E組の自分には関係ないや、とすっかり他人事だったよ。あつた、確かに合ったわ、そんな合宿。

「君たちは一度、どん底を経験しました。だからこそ次はバチバチのトップ争いをして欲しいのです。先生の触手とこの合宿。ご褒美は充分に揃いましたね？暗殺者なら、狙ってトップを殺るのです！」

殺せんせーの号令にクラスメイトたちが声を上げた。

?? ?? ??

支配者が庭を歩く。

「三年生の各教科担任の皆さんには中間よりも更に難しい問題をお願いします。もちろん、採点基準は公正明確にね」

支配者の言葉はその場にいる全員にはほほ衝動的な恐怖とやる気を与える。彼らは皆、自分の目の前にあるPCという名の牢獄で凶暴な化け物を育成していた。

「浅野くんがE組を利用して対決ムードを盛り上げてくれています。これを我が校の偏差値向上に繋げない手はないでしょう」

「心配なく、理事長。この問題で私を満足させられる答えを出せる生徒はいない……これはもはや問題ではなく、問スターと呼ぶべきものです」

「大いに結構。結果が楽しみです」

支配者は難問。問スターという化け物を前にして満足そうに笑う。彼の支配する領域ではカタカタとキーボードを操作する音だけが響いていた。

37話 5教科と終業の時間

迎えた試験当日。

俺は通学中に出会った渚と中村さんの3人で試験会場へ向かった。会場は本校舎。相変わらず、俺たちE組にはアウェイな戦場だとおもふな。賭けの話が広まっているせいも、好奇の視線が寄せられているのがよく分かる。

「おやおや、A組に無謀な賭けを挑んだおバカちゃんたちが来たぞ」
「お前ら負けたらどんな酷い命令されるんだろうな」

えっと、名前を忘れたが、いつも2人一緒にいる危ない雰囲気D組の生徒が絡んでくる。

さて、なんて返してやろうかと考えていると、中村さんが手早く鉛筆をD組生徒の側の鼻にぶっさすと通りすがりに思いつきり上に向かって突き上げた。鉛筆が折れる程の勢いで。

その容赦のなさにスカツとすると同時に少しだけ引いていると、俺たちの試験会場、すなわち、戦場に辿り着いた。

誰かの気配がしたので中を覗き見てみると、俺の隣の席に誰かいた。普段は律がいる席だが、そこにいたのは……………。

「誰だ……………」

生憎と髪型以外は見知らぬ第三者。いや、まじで誰だよ。そこは3次元の女がいて良い席じゃない。Dを一つ失ってから出直してこい、と言いたくなる衝動を堪えていると疲労した様子の烏間先生がやって来て、補足してくれた。

「律役だ」

「役……………」

「ああ。流石に理事長から人工知能の参加は認めてもらえなかったんだ。結果、律がネット授業で教えた替え玉を使うことでなんとか決着した……………。律も生徒として登録している以上、奴の用意したチャンスに乗っかる権利はあるからな。無駄にはできん」

つらつらと説明してくれていた烏間先生がより一層疲れた顔をし

て、ため息をついた。本気で疲れてるらしい。それも肉体的にはなく、精神的に、だな。可哀想に。

「交渉の時、あの理事長から『大変だな、コイツも』……という哀れみの目を向けられた俺の気持ちに君たちにわかるか」

「いや、ほんと、頭がさがります！」

他人事のような思考を打ち切って最敬礼。

駄目だ。烏間先生の苦労を俺たちが慮ることはかなり難しいだろう。毎度毎度、想像できそうで、辛うじて想像できない斜め上方向の苦労をしてるからな、烏間先生。

しかも無駄に微妙に突っ込みずらい相手、状況なのがタチ悪い。いつそ殺せんせーやビッチ先生みたいにわかりやすいツツコミどころ満載ならこっちもやりやすいんだが。

「律と合わせて俺からも言わせてもらおう。頑張れよ」

「……はい！」

しかし、彼からの激励以上に心に沁みる言葉も中々ないのだから不思議だ。おそらく、ここにいたのが鷹岡だったら、俺たちは今の言葉でやる気と勇気をもらう事はなかっただろうな。

こうして始まった期末試験。

俺たちが対峙するのは問スターとA組。そんな俺たちへ声援をくれる律や烏間先生たち、そして野次を飛ばす他の組の連中はまるで観客。となると、俺たちは闘グラディエーター技者と言ったところか。

一人一人が課された問題と向き合っている。それぞれ各々のタイミングで別々の、あるいは同じ問題と。タイミングは違えど、同じ相手を標的に自分の磨いてきた刃を試すのはいつもの暗殺と変わらない。

なるほど、ここにきてようやく、烏間先生が赴任してきたばかりの頃に言ってきた『暗殺も勉強も同じ』という言葉の意味が少しだけ理解できた気がする。

しかし何だな、こうして努力して来た皆んなやら英傑の言動を思い返してみると、この問スター相手に様々なやり取りを繰り返す皆んなが想像出来てしまうのだから不思議だ。

けど、周りがどんな風に解いていようが俺には関係ない。俺は中間から今日まで行つて来た、過去の復習と本校舎の連中への復讐が出来れば良い。

いつものようにゾーンに入る。もうこれをずるいとは思わなくなつていた。だってこれは間違いなく俺の才能なんだから。

出来の悪い頭をフル回転させながら問題を解き続ける。今日まで詰め込んできた膨大な知識の中から最適解を見つけ出し、弾き出し、記入する作業を繰り返す。

問スターの攻撃を全て交わして急所を射抜き、片っ端から問題を片付ける。何度も何度も、問スターが息絶えるまで。

そしてテストが終わる頃には知恵熱を出し、頭の中が真っ白になる2日間を繰り返して俺のテストは終わった。

?? ?? ??

2日間の攻防の末、全ての戦い^{テスト}が幕を下ろした。

暗殺の有利も同級生との賭けも全ては丸の数次第。

そして3日後。

「さて、皆さん。全教科の採点が届きましたよ」

殺せんせーの一言でクラスメイトたちに緊張が走る。無論、俺も例外ではない。最善を尽くしたし、自信だつてある。

中間から今日までやれることはやった。

今は静かに結果を待つばかりである。

「まずは英語から……E組1位は……中村莉桜！そして学年でも1位です！100点！完璧です。キミのやる気はムラっ気があるので心配でしたが……！」

「うふふーん！なんせ賞金100億かかってっから！触手一本忘れないでよ？殺せんせー」

「ヌルフッフ、もちろんです」

どうやら英語は1位を逃したらしい。とか思っていると殺せん

せーから答案が各生徒に配られた。

俺の答案にあるのは99点という何とも言えない点数だった。どうやら一番最後の問題で部分点を落としたりらしい。

「乃咲くん、渚くんも大健闘でしたが、乃咲くんは最後の口語体への変換が、渚くんは肝心なところでスペルミスを犯す癖が治ってませんね」

殺せんせーの指摘に苦笑しか出ない。自分のボキャブラリーがもう少しあれば満点取れたかもしれないのにな。悔しい。

などと思っていると殺せんせーは触手の一本に破壊予約済みの旗を刺すと余裕そうに言い放つ。

「さてしかし、1教科トップをとったところで潰せる触手は1本のみ。それにA組となら5教科対決もありますから。喜ぶ事ができるかどうかは全教科返した後ですよ」

中村さんの満点に盛り上がったいたクラスメイトたちが少し沈黙するが、そんな空気を切り替えるように殺せんせーが次の教科の返却を開始する。

「続いて国語……E組1位は……乃咲圭一！99点！」

「またかよ!？」

「どうやら最後の論文で減点されているようですねえ。5000字中499字で終わっているのが減点だったのかもしれませんが。そこは教師の好みもありますからねえ」

「んで？学年では？」

「残念！2位です！神崎さんは3位！2人とも大躍進ですねえ！学年一位はA組浅野学秀！」

つーことはあいつは100点ってことだよな。

やっぱすげーわ、アイツ。

「やっぱ点取るな、浅野」

「強すぎ……。英語だって乃咲と並んで中村と1点差だけ？」

「流石全国1位。中間よりも遥かに難易度高いのに全教科変わらず隙がない。5英傑なんて並べられてるけど、結局、浅野を倒さなきゃ学年トップは取れねえんだ」

少しだけクラスメイトの空気が落ち込むが、すぐさま殺せんせーが次の教科を返却する。

「では続けて返します。社会、E組1位は……磯貝悠馬98点！そして学年では……おめでとう！浅野くんを抑えて見事1位です！」

「よしー！」

「マニアックな問題の多かった今回のテストでよくぞここまで取れましたね」

帰ってきたら答案をみると、そこには97点の数字。

磯貝と1点差。俺が外したのは1問。恐らく互いに1問ずつ外して、外した問題が2点か3点かの差だったのだろう。

また惜しくも1位を逃してしまった。

「これで2勝1敗！」

「次、理科は?！」

「理科のE組1位は奥田愛美！そして……すばらしい！学年でも1位です！」

帰って来た答案は97点で2位。奥田さんは満点か、98点以上だな。奥田さんもかなり強い。次のテストの各教科のライバルはこの教室の中の方が多そうだな。

「3勝1敗！これで勝ち越し確定だ！」

「仕事したな、奥田！触手一本お前のもんだ！」

「数学の結果を待たずしてE組がA組に勝ち越し決定！」

「つてことは賭けの賞品のアレもいただきだな」

「楽しみ〜！」

はしゃぐ皆んなを宥めつつ、殺せんせーがテスト返却を続行する。そうだ、まだ数学と総合順位が残ってる。

「次！数学、E組1位は……乃咲圭一！またまた99点！」

「……証明か」

「ですね、キミはどうも文章が絡んだ問題に弱い傾向があるようです。今後の要課題ですね」

「反省せねば……」

つか、俺がE組1位かよ。カルマは？

そう思つてカルマを見るがあいつは席に居なかつた。

「学年一位は……残念！浅野学秀くんの100点が最高得点です！」
強いな、浅野は。

だが、ここまでのトータル点数は491点。まだ総合一位の可能性が残っている。

さて、どうなる？

「最後になりましたが、5教科、E組総合一位は……乃咲圭一！そして学年でも浅野くんと並んで総合一位です」

「おおっ！」

「やったね！圭ちゃん！」

俺がガッツポーズするよりも先に磯貝がガッツポーズを決め、倉橋さんが飛び跳ねて喜んでくれた。

「ヌルフッフ、おめでどう、乃咲くん。大大大躍進ですね、実力テスト最下位から中間51位、そして期末1位！キミは見事に第二の刃を身に付けた。そんなキミにこの触手を差し上げましょう」

「ははは、ありがとう。殺せんせー」

なにやら特別感のある七色に光る謎の触手に触手破壊予約済みの旗を立てる殺せんせー。

こうして俺たちとA組の対決は勝ち越しで終わった。

?? ?? ??

「カルマ」

「ん、なに、乃咲クン」

俺は1人クラスを抜け出したカルマの元に赴いていた。俺が声をかけるまで無表情でテストの答案を握り締めていた彼に俺がかかる言葉は一つ。

「努力なんて泥臭いことせずに勝つ俺カッコいい、とか思つてただろ？」

「っ……………」

おちよくなるように言つた俺の言葉にカルマの顔が真っ赤に染まる。

どうやら凶星だったらしく、プルプル震えていた。

「分かるぞ、本気を出せばなんでも出来るって思い込みたくなる気持ち。俺もそうだったからな」

「……あ、そ」

「その結果が前回の惨敗だ。悔しかったよなあ」

あの時の悔しさを思い出して、興味なさそうにしながらも俺の言葉に耳を傾け続けるカルマに言葉を投げる。

「今度はお前の番だぞ。E組一位、俺から取り返しに来いよな」

俺は言いたいことだけ言って正面から来た殺せんせーとすれ違って教室に戻る。人に教えることは俺には向かない。

だから、俺に言えるのはコレくらい。中間の時に土下座をさせないでくれた恩に対して俺が返してやれるのはこんなおざなりな発破くらいなものだからな。

頑張れよ、カルマ。

?? ?? ??

「さて皆さん。素晴らしい成果でした。5教科プラス総合点の6つ中、君たちがトップを取れたのは4つです。早速暗殺を始めましょうか。トップの4人はどうぞ4本ご自由に」

そう言って顔を緑のしましまに染める殺せんせー。どうせ『4本くらい失っても余裕でしょう』とか思ってるんだろうなあ。

なんて考えていると、寺坂組が立ち上がり、徐に口を開いた。狭間さん、吉田、村松はニヤけ顔、リーダー寺坂は悪びれもしない真顔でテストの答案片手に教卓に近づいた。

「おい待てよタコ。5教科トップは3人じゃねえぞ」

「にゅ？5教科トップは3人ですよ。寺坂くん。国・英・社・理・数のうち……」

「は？アホ抜かせ。5教科ついたら国・英・社・理……あと家だろ」

そう言って彼ら4人は答案を教卓に置いた。100点満点の家庭科の答案を本当に悪びれる様子なく。

「か、家庭科あああああ!!?ちよつ待つて!家庭科のテストなんてついででしょ!?こんなだけなのに本気で100点とってるんですか君達は!!?」

「だーれもどの5教科とは言ってねーよな?」

「クッククック、クラス全員でやりやあ良かった。この作戦」

不気味に笑う狭間さんとごねる殺せんせー。そんな状況を見て、珍しく大人しくしているカルマに千葉が『言ったら、カルマ』と発破を掛ける。

「ついでとか家庭科さんに失礼じゃね、殺せんせー?5教科の中でも最強と言われる家庭科さんに向かつてさ」

そんなカルマの言葉にみんなが乗った。

「そーだぜ!約束守れよな、殺せんせー!」

「一番重要な家庭科さんで4人がトップ!」

「合計触手は5教科と総合1位であわせて8本!」

「は、8本……ひいひい!!?」

怯える殺せんせー。

そんな彼を尻目に磯貝が口を開いた。

「それと、殺せんせー。これは皆んなで相談したんですが、この触手を破壊する権利を使う暗殺に今回の賭けの『戦利品』も使わせてもらいます」

そう、実は賭けのことが決まった時点で皆んなでとある相談をしていた。それは、今回のトップをとれた場合に得られる触手を破壊する権利を賭けの戦利品……沖繩の南の島リゾート合宿で使用するって内容だった。

殺せんせーの弱点の水で囲まれた島での暗殺に使った方がより確実だと結論つけた上でみんなが納得した。

磯貝が言っているのはそのことである。

「……ヌルフフフ、考えましたね、皆さん」

触手を組んでうんうん頷く殺せんせー。その顔色には侮りの緑のしましまは一切ない。心の底から俺たちを誉めてくれているのだと分かった。それだけで今回のテストで頑張った甲斐があったと思え

るな。

「いろいろと言いたいことは有りますが、先ずは終業式です。行きま
すよ、皆さん」

「はいー!」

「……水を差すようで悪いが、お前はここでイリーナと留守番だ」
「にゅやあつ!」

鳥間先生の無情な言葉に出鼻を挫かれた殺せんせーはぷによんぷ
によんと壁パンしながら大人しく引き下がり、俺たちはそのまま終業
式の為に移動することになった。

移動の途中の話題は勿論テストや南の島でどんな暗殺をするのか
についてのプランニングだった。

皆んなで山を下りながらふと思う。こんな風にE組全員と一緒に
山を下りるのは初めてだったよな、と。

皆んなと談笑しながら下りる山道は少しだけいつも楽しかった。
何気なく修学旅行の時の班のメンバーで談笑していた時。

ふいに眩暈がした。立ち眩みに似た、目の前が真っ白く染まり、頭
から下に向かって血の気が引いていく、寒さに似た感覚。俺は思わず
ふらついてしまった。

「つと、大丈夫か?乃咲」

「あ、ああ。大丈夫、ありがとな木村」

たまたま隣いた木村が支えてくれたお陰で倒れずに済んだので少
し体を落ち着かせてからまた体を動かす。

なんだろう?貧血みたいなもんかな?

「ちよつと、大丈夫?乃咲、顔色、良くないよ?」

「大丈夫、ちよつと最近、勉強し過ぎたみたい」

心配そうに覗き込んでくる岡野にそう答えて力瘤を作ってみせる
と心配そうにしてくれていた面々がホツとしたような、納得したよう
な表現で頷いた。

「確かに、凄かったよな、乃咲」

「だな。これはマジで銀の秀才復活かもな」

「秀才やら死神やら勘弁してくれ。磯貝」

「悪い悪い、最近のお前、なんだか揶揄い甲斐があるからさ」

「そうか？」

「そうなんだよ」

「でた、乃咲と磯貝くんの親友漫才」

皆んなが笑う中で倉橋さんが浮かぬ顔で俺の隣まで歩いて来た。

1人だけ、いまだに心配そうにしてくれている。

「本当に大丈夫？」

「うん、へーき。ありがとう、倉橋さん」

「……ダメ、やつぱり心配だよ」

笑ってみるが、食い下がられる。

その様子にみんなも目を丸くしていた。

「そんなに心配なら手でも繋いでくれる？」

大丈夫アピールをする為に少し戯けて言ってみると、倉橋さんは本当に手をがつつりと握って来た。

「これなら圭ちゃんも急に立ち止まったりしても気付いてあげられるよね」

「え、あ、あ、うん」

少し口籠る。こんなリアクションが返ってくると思ってたなかったから。何を言えればいいのかわからない。

しかし、みんなも深くツツコンでくることはなく、俺たちはそのまま校舎まで手を繋いで歩くことになった。

眩暈は一瞬だったからもう、大丈夫なんだけどなあ。

などと思いつながら校舎まで辿り着き、E組らしく全校生徒が来る前に整列しておく。すると、ある意味で今回の賭けテスト・触手破壊部門のMVPである寺坂組が少し早めに体育館に入って来た生徒会の連中に絡み出した。

そんな様子を見かねてか、或いは賭けの釘を刺しに行ったのか、みんなが生徒会の満面の前に並び立つ。

磯貝が代表して口を開いた。

「浅野、賭けてたよな。5教科を多く取ったクラスが何でも一つ、要求できるって。要求はさつきメールで送らせてもらった、アレで構わな

いな？」

「……ああ。構わない。約束は約束だからな」

他の面子を煽る寺坂をスルーした浅野は真っ直ぐに俺の方まで歩いてくると、さつきまでの鉄仮面のような表情は何処へやら、珍しく笑っていた。

「おめでとう、圭一。またキミをライバルと呼べる日が来るのを楽しみにしていた」

「……いや、今回は俺の負けだ。総合1位でお前とタイでも、各教科でのトップを数えたらお前が1番であることに変わりない」

「ふっ……その姿勢で頑張ってくれ。戻ってくるんだらう？ A組うちに。楽しみにしている」

相変わらず言いたいことだけ言ってさつきと歩き去ってゆく浅野。言われて気付いた。そうか、俺はあと元のクラス担任の許可が降りればA組に戻るのか。

まあ、今のところは戻るつもりはないけどな。

そうこうしてるうち集会は始まり、そして終わった。珍しくカルマも出席した今回の集会では俺は途中退場させられることはなかった。それは一重に、E組弄りに対して周りからのウケが良くなかったのが原因だろう。

当然だ、エンドがトップとバッチバチにやりあって、そして各教科や総合で1位を取る奴が現れたのだから。

みんなも珍しく胸を張って集会に臨んでいた。

そんな集会が終わると次に待っているのはホームルーム。今学期、最後の集まりだ。

「1人一冊です」

そんな殺せんせーの一声と共に渡されるのは修学旅行の時よりもさらにパワーアップした過剰なしおりだった。

「出たよ、恒例の過剰しおり」

「アコーディオンみてえだな」

岡島の比喩に全力で同意しながらページを捲る。が、しおりの横幅がありすぎて机の上では開ききれない。

過剰すぎるだろ、これ。

「夏休みのメインイベント、南の島での暗殺。君たちの希望だと、この離島での合宿で触手を破壊する権利を行使する、との事でしたねえ」
殺せんせーが口を開く。ポリポリと頬を掻きながら。

「触手8本の大ハンデにも満足せず、四方を先生の弱点である水で覆われたこの島を使い、貪欲に命を狙う。正直に認めましょう。君たちは侮れない生徒になった。君達に見せる通知表は配り終わりましたが、これは標的せんせいから暗殺者きみたちへの通知表です！」

殺せんせーはそう言うと言つてマツハで紙に赤ペンで何かを大量に書き記し、教室中に向かってソレをばら撒いた。

宙で舞い散るそれを一枚だけ手に取って見てみると、そこに記されていたのは二重丸。教室中が朱色の二重丸で彩られていた。

「1学期で培った基礎を充分に活かし、夏休みも沢山学び、沢山遊び、そして沢山遊びしましょう!!暗殺教室、基礎の1学期、これにて終業!!」
こうして俺たちの波乱に満ちた怒涛の1学期は幕を閉じた。2学期には更に波乱に満ち溢れた毎日が待っているとも知らずに。

?? ?? ??

支配者が座する玉座。

浅野學峯はただ玉座から終業式の様子を見据えていた。

今回の期末で生徒全体の学業意識が向上した。当然だ。普段、エンドと馬鹿にしていた相手がトップに立ったのだから、E組に対する屈辱や危機感はお一層、奮起する材料になる。

地球の存亡が掛かるような異常時でも、そんな彼の教育理念は正しく機能していると言える。

ただ一点。E組の生徒がトップに立つという異例な事態が起こらなければ。

「(手を打とう、夏休みの間に)」

彼の手元には竹林と乃咲の2名の生徒情報がまとめられた資料が広がっていた。

38話 動揺の時間

——たまたまに夢に見る。

「父さん、また100点とったよ!」

「……ああ」

過去の記憶。父と自分の記憶。

思い出、というにはあまりにも淡白な会話。満面の笑みを浮かべて100点満点の答案を見せつける俺と、それを受け取る父。

しかし、父の顔は見えない。ずっとだ。ずっと、ずっと、この夢を見続けていると言うのに父の顔は俺には見えない。

一体、何故だろう？

考えても答えは出ない。

——キミは律さんを見ようとしなかった。

不意に殺せんせーに言われた言葉が脳裏をよぎる。

かつて律を合理的に説得し、黙らせようとした過去。その時に殺せんせーが俺に言った言葉。

なぜ、そんな言葉が俺の脳裏を今更掠めてゆくのだろうか？分からない。分からないから考える。

見ていなかった、と言うのか？俺が、親父を？

あり得ない。俺はこの時、誉めて欲しくて仕方がなくて親父の反応の機微を滅茶苦茶真剣に見つめていた。

だから、あり得ない。俺が親父を見ていなかったなんてあり得ない。絶対にないとすら断言しよう。

そう思うと夢の中の親父の顔に掛かっていたモヤのようなものが消えて、当時の親父の顔が見える。

まだ若い、白髪もない親父。……あいや、白髪は今も生えていなかったっけか……？どうだろう。

昔はともかく、今の俺は親父のことを見ていなかったらしい。けれど、別にいいよな、向こうは初めから俺のことなんて見てなかったわけだし。

そんなことを思いながら目が覚める。

何でこんな夢を見るのか、それは今日が金曜日、つまりは親父と会う日だからかもしれない。

夏休みも初日だと言うのに、なんでこんな憂鬱な気分にならないければならないのやら。その辺に石ころでも落ちていたら蹴り飛ばしてやりたい気分だ。

などと思いながら布団から出る午前6時。夏休みも初日だが、意図せずいつも通りの時間に目が覚めてしまった。

特にやることないなあーどうしようかなー、なんて思いながらベツトの上でゴロゴロと過ごし、小腹が空いたらリビングに降りて朝食を摂り、またベツトの上でゴロゴロする。

しまったやることがない。思った以上に暇だ。いつそ、学校にでも行っていつも通り、訓練でもしようか、なんて思う午前9時。ふと、控えめに部屋をノックされる。

「ん？」

「圭一、学校から電話、浅野先生だって」

「……り、理事長？」

祖母が朝から不穏な名前を出すのでちよつとビクビクしながら階段を降り、電話の保留を解除する。

俺、なにか悪いことしたかなあ。最近は本当に不良らしいこととしてなかったのに。つか、浅野理事長から電話とか不穏すぎねえか？不穏通り過ぎて不気味まであるけど。

「お電話変わりました、圭一です。おはようございます、理事長先生」
『やあ、おはよう。乃咲くん』

電話の向こうから感じる、ズモモモモ！と不穏なオーラ。マジでこの人、柗ヶ丘学園のラスボスだよな。

電話越しにオーラが伝わってくるのかとんでもないよな、この人。なにか悪いことした訳じゃないのに、電話を耳に当てているだけなのに冷や汗が吹き出しそうになる。

そんなラスボスが何の用かと思いつつ、言葉を待つ。別にゾーンに入った訳でもないのに、次の言葉が来るまで数時間たったような気

がする。

『乃咲くん。今日の予定は何か決まっていたりするかな』

「いえ、特には……」

『ふむ、ならば丁度いい。この後、学校まで来てもらえないだろうか。直接会って話したいことがある』

「……構いませんが、何時ごろにしましょうか」

『では10時ごろということにしよう。待っているよ』

「はい、分かりました」

『ふむ、それではまた後で』

ツーツー、と電話が切れた事を知らせる電子音が鼓膜を叩く。一体、何だったんだろう？

ラスボスからの電話なんて珍事に思わず思考が停止しそうになる中で、なんとか体を動かし、制服に着替え、学校へ向かう。

「ばーちゃん。ちよつと学校行ってくる〜」

「はいよ、気をつけて」

爺ちゃんやんは五目並べに熱中しているようなのでスルーして家を出る。家を出た後、今度はスマホが鳴ったので取り出してみると律が画面の中にいた。

『乃咲さん、お出かけですか？』

「ああ、ちよつと学校まで。本校舎から呼び出し喰らっちゃってます」

『そうですか……残念です。対殺せんせー用の暗殺シューティングゲームを作ってみたので、是非一緒に、と思ったのですが』

なにそれ、すっごい気になる。気になるが……。

「悪いな、用事が終わったら教室にも顔出すから。それと……ゲームなら神崎さんとか……あとついでに杉野も誘ってやってくれ」

野球の練習中、杉野から聞いたのだが、神崎さんはゲームがめっちゃ上手いらしい。修学旅行中に発覚したのだとか。

そんな神崎さんなら素人の俺よりも使える意見が出せるだろうし。後、杉野はおまけだ。神崎のこと、好きそうらしいから一応の援護ってことで。俺にできるのはそれだけだ。

頑張れ杉野よ。なーんて他人事のように思いながら歩くところ数十

分。学校に着いた。

学校に着いたのだが……。

「理事長先生、乃咲です」

「入りなさい」

理事長室に入った俺を出迎えたのはいつもの仏頂面で見えるもの皆不安にするラスボス然とした理事長ではなく、にこやかにパン！とクラッカーを鳴らすフレンドリーな浅野理事長だった。

「やあ、早速だけど総合一位、おめでとう、乃咲くん」

「……ありがとうございます」

思わず何事かと勘繰ってしまう。

勘繰ってしまうが、生憎と表情が読めない。俺、こういう腹の探り合いみたいなの苦手なんだよなあ。

こんな化け物を正面に毎朝朝食を摂っているという浅野（学秀の方）の胆力には恐れ入る。俺には無理だ。

第一に、親父と食事すら俺には無理だ。間が持たない。

そういう意味では浅野は尊敬に値するかもしれない。

「流石は私が最も長く教えた生徒のライバルだ。キミの大躍進はある種の物語性があつて面白い。挫折して最下位に甘んじていた者がやる気を取り戻し、敗北を経験し、そして1位に輝いた。そんな物語が見て取れる」

珍しいこともあるもんだ。浅野理事長がこんだけ手放しに誰かを褒めるところを俺は見たことがない。

まあ、そんな一面一面を見られるほどこの人と親しい訳では無いのだから同然なんだけどさ。

「それで、どうして自分は呼び出されたのでしょうか？態々労つてくれる為に俺を呼んだ訳では無いでしょう？」

「その通り。キミはやはり聡いな。実はキミには一つの選択肢をあげたくてね」

「選択肢ですか、理事長先生から？」

「その通り。A組への移籍。それがキミに渡す選択肢だ」

「……そんなことですか」

予想斜め上。予想だにしなかった言葉が飛び出して来る。A組に移籍……いや、復帰するには本来、担任からの許可が必要になる。こちら側から復帰願いを出し、担任がそれを受理する、というのが本来の正しい流れだ。

そんな流れをぶった斬り、理事長直々に声をかけてくるのは本当に予想外の出来事だった。

何か、裏があるとしたか思えない。

「何故、自分なんですか？」

「別に何か特別な意図があるわけではない。この時期の通例でね、一定の成績を残したE組生徒にこうして毎年声をかけているのだよ。と言っても納得はしないだろう。そうだね、ここは一つ、私の教育方針を語るとしよう。私の方針はひとえに”強い”生徒を育てることだ」

「強い生徒？」

理事長の言葉の意味がよく分からない。

強さにも色んな種類がある。心の強さ、肉体の強さ、力の強さ、暴力的な強さ、知的な強さ、逆境を跳ね除ける強さ。彼の語る強さはどれなんだろう？

「そう、いざとなったら、他人を生贄にしても自分だけは生き残れる。そんな生徒のことだ」

「それは……」

強さではなく、非情さ、というのでは無いか、と口にした時、かつて律にやった事を思い出した。

俺は律が転校したてだったあの時、律に協調の合理性を説き、一時的に彼女を黙らせたことがあった。

あれは、見方を変えれば合理性を突き付けて彼女の自由意志を殺した、とも取れる行動だっただろう。

他人^律を生贄に俺は普段通りの授業を取り戻そうとしたと言えるのではないだろうか？

そこに思考が至った時、俺は自然と閉口した。

「どうやら、身に覚えがあるらしいね」

浅野理事長の言葉に俺は何も返せなかった。

「キミは、私の教育のある意味では完成形とも言える。鷹岡先生を追放する為に私に直談判に来たのもそうだ。アレだって、鷹岡先生のメンツやプライドを生贄に烏間先生の復活を願ったのと同じ。違うかな?」

「それは……」

違わない。違わないから口を開かなかった。否定の言葉を出したのに、口から出てくれなかった。

「キミは優秀だ。乃咲くん。思考は合理的で、武力にも優れ、知識があることも期末で証明して見せた。そんなキミにこそA組の……学年主席の座が相応しい。私はそう思っているよ」

「万年首席の息子さんが聞いたら泣きますよ」

「ふっ……。浅野くんなら笑っていたよ。賭けでは負けたが、とんでもない掘り出し物を拾った、とね」

あ、そ。と流したくなるセリフに苦笑で返事しながら身構える。まさか、自分の息子にライバルを作る為に俺をA組に勧誘してる訳ではあるまいな。

だったとしたらこの人も相当な教師バカで、親バカでもあると思う。勘弁して欲しい。巻き込まれたく無いもんだ。

「それに、キミのお父さんも認めてくれるんじゃないかな」

「無いですよ、そんなん」

浅野理事長から予想しなかった言葉が出てきたが、絶対にあり得ないことだと分かりきっているの、即答で否定する。

そんなことであの堅物親父が俺を認めてくれるのなら、苦労しない。一度たりとも俺を褒めたことなんてない親父がな。

「……まあ、いい。是非考えておいて欲しい。夏休み終了直前まで待つ。賢明な判断をすることを願っているよ」

話すこと30分。そんな言葉と共に締め括られた浅野理事長との面談。俺は少し拍子抜けしながらE組の山を登る。

理事長のことだからもつとエグいことを要求してきたり、ラスボス然とした態度で余裕そうにもつと勉強頑張りなさい、とでも言われる

とばかり思っていたから。

山を登るとどうやら俺のアドバイス通りに律に誘われたらしい神崎さんと杉野プラス殺せんせーの3人で対殺せんせーシユーンティンゲームをやってるらしい。

殺せんせーがいる時点で気遣いもクソもないが、これ以上、お邪魔虫が増えないよう、今回はお暇するとしよう。

俺は踵を返して来た道に戻り、家に帰ることにする。

が、その道すがら、竹林と遭遇した。彼とまた、制服で身を包み、俺と同じく本校舎から出て来た。

その顔色はなんだか優れない。まさか、これはアレか？俺と同じように……………誘われたんじゃ？

「よう、竹林。お前もA組行きか？」

「乃咲……。その話ぶりだとキミものようだね」

いやな想像というのは当たるもんだ。竹林もどうやら俺と同じように勧誘を受けたらしい。

これ、アレだよな、浅野のライバルを作るのと並行してワンチャンE組のクラス内の雰囲気悪くする為の工作だよなあ。

あの理事長、やっぱり性格悪いわ。

「どうしたものか……………」

「…………キミもそんな風に悩むのか」

「お前、俺をなんだと思ってるんだ」

「意外だと思ったただけだ。キミはE組に残ると迷わず宣言したとばかり思っていたからな」

「……………」

俺も意外だった。てつきり鼻で笑って糞食らえ、と言ってやれると思っていたのに、何が引っ掛かってそれができなかった。

「僕に行くよ、A組に」

「……………」

竹林は答えをすでに出していた。

それが少し意外で息を呑む。

100億円は諦めるのか？そう言いかけた時、先んじて竹林が口を

開いていた。

「昨日、初めてテストの結果を報告に行けたよ」

「……そうか」

彼はなんて言われたのだろうか？

以前、彼の家庭事情は聞いた。

出来て当たり前の一族。そんな親兄弟からは出来の悪い竹林は家族扱いされないという。

俺とは違う。違うが、どこか似ている家族。

報告した彼にどんな言葉が振りかけられたのか気になるのは、俺がもしも竹林の立場だったら、と心のどこかで考えているからなのかも知れない。

「それじゃ、僕はこれで」

「……ああ」

去る竹林を見送ることしか今の俺には出来なかった。

?? ?? ??

あつちだ、こつちだ、とさまざまな場所を彷徨いて時間を潰してから家に帰る。気が付けば夕方の5時を回っていた。

そろそろ帰らなければ、祖父から大目玉を喰らうことになるので渋々帰宅する。金曜日は特別だ。

……親父が来るから。

帰宅すると、俺自身は呼んでもいないのに、案の定、親父の車があった。僅かな面倒臭さと緊張感を感じながら玄関を潜り、家に入る。心配そうにこつちを見る祖父母と目を合わせないように客間に入った。

「……圭」

「……どうも」

軽く会釈した後、祖母が気を利かせて俺用にも座布団とお茶を出してくれていた場所に座り、いつものように俯く。

話すことはない。話題がないからだ。

今まで生きてきた十数年の中でテストで1位を取った話なんて

散々して来たし、その度に見向きもされなかったから自分からは話題に上げるつもりはない。

だから今日も互いに喋ることもなく、無言に終わる。そう思っていたのだが、青天の霹靂とも言える出来事が発生。

「……テスト、だったんだらう?」

喋ったぞ、この人。まじかよ。

何が起こったのか、一瞬理解ができなくて思考が停止したが、そのまま黙りを決める訳にもいかないので、出来るだけ最速で応える。

「あ、うん。期末」

「……ああ。浅野理事長から電話が来た時は驚いたよ」

二重の意味で驚いている。理事長が親父に何かを吹き込んだこと。そして、ここまで長く会話が続いたのは生まれて初めてだったから。『……ああ』と『……そうか』しか言わなかった親父から出た初めて言葉。

「……学年で首位だったんだらう。……頑張ったな」

「——え?」

初めて出た言葉。この大体15年の人生でずっと求め続けた言葉は案外、あっさりと飛び出した。

それがまた俺の思考を狂わせ、口を籠らせ、言葉の一切を俺から奪ってゆく。自分は今、何を言われたのだらう?

「……学年で最下位から51位、そして首位。驚いたよ。成績表、見せてくれないか」

「え、あ、あ、うん」

言われて、祖父母に見せたきりだった成績表を取りに行き、見せてみる。正直、現実感がない。

今、目の前に広がるこれは現実なんだろうか。親父が『……ああ』と『……そうか』以外の単語で会話してるのを見たのはほぼ初見だと言っても過言ではないのに。その親父が今、俺に二言以上で話しかけているのが本当に心底現実感がなかった。

俺は今、親父と”会話”している。

ずっと1人でボールを投げつけていた頃とも違う、かと言って仲違

いした頃から続く冷戦のような無言状態でもない。生まれて初めて会話のキャッチボールが成立した、そんな気がする。

「……理事長先生が言ってくれた。お前ともっと話した方がいい、と。分かっていたつもりなんだが、これまで、そうできなかった。年々、母親に似てゆくお前にどんな言葉をかけたらいいいのかわからなかった」

「……」

これが、親父の本音？

十数年、聞きたくてしよすがなかった、親父の言葉なのか。俺は訳が分からずに混乱し続ける。

人に言われてようやく決心が付くほど、母さんのことではなにか、思い詰めていたのか、この人は。

一体何に。母親に似てゆく俺を見て言葉を失う程のなにかが母と親父の間にあつたと言うのか？

分からない。ようやく口を聞いてくれたのに、彼の意図が全くと言っていいほどに理解できない。

「……これから約2ヶ月ほど出張する。ここに顔を出すことは叶わないだろう。だから今のうちに言っておくことがある」

親父はそう言う一拍子置いてから口を開いた。

「お前にはずっと期待している。今までも、これからも。……新学期からA組に戻るかも知れないだろう？……頑張れよ」

親父はそう言う俺の返事も待たずに立ち上がり、出て行ってしまった。言いたいことだけ言ってさっさと出て行ったことに恨めしさを感ずるよりも先に、訪れたのは困惑だった。

期待している？今までも、これからも？じゃあなんで、俺が欲しい時にその言葉をくれなかったんだ？

なんで今になってそんな言葉を言う気になった？

……いや、分かってる。裏で浅野理事長が動いていることはさつき、親父の口からポロリと出たから。

でも、そうじゃない。理由も原因も分かっているのに釈然としないモヤモヤが胸と喉の間に引っ掛かっている。

——それに、キミのお父さんも認めてくれるんじゃないかな。

理事長め……。俺にこんな考え方をさせるのが目的ならえげつないくらい的を射た手法を取りやがる。

これはかなり難しい選択を強いられているぞ。

殺せんせーの暗殺を選んでE組に残るか、父からの期待に答えてA組に移籍するのか。酷く難しい二択だ。

誰かに相談……は出来ない。これは俺自身が考え抜いて出さなきゃいけない問題なんだろうから。

地球の未来を取るか、家族との未来を取るか。中学生が考えるべきではない命題を俺は押し付けられている。中学生が考えるべき

そんな極論じみた命題に結論を付けるのに周囲の他人を巻き込むわけにはいかないだろう。

俺は、どうすればいいのだろう。

何を選ぶべきなのだろう……？

選択肢が難しすぎるだろ。地球の未来か、自分の家族か。地球を選べば今、ようやく新しい展開を迎えようとしている家族との未来を失うかも知れないし、自分の家族を選べば地球が滅びるかも知れないと言う事実から目を逸らし、全てを仲間たちに丸投げするということ。

また、暗殺を諦めると言うことは殺せんせーの正体を知る機会を永遠に失うということだ。

「……頑張れよ、か」

何を頑張れば良いのか。誰も答えてはくれなかった。

39話 生き物の時間

一日中考えたが、答えは出なかった。

地球の未来か、家族との関係か。A組に行けば、確実に色んなものを失う。殺せんせーの正体を知る機会、殺せんせーや烏間先生にピツチ先生からこれ以上何も学ぶことができなくなる、磯貝や倉橋さんたちとの接点が薄くなること。

ただ、それ以上にA組に行けば手に入る。親父からの信頼。期待している、と言う言葉に応えられたのなら手に入るかも知れない。また、『頑張ったな』とその一言が。

それだけの一言の為にずっと努力を続けてきた十数年。途中でグレたりしたが、それでも俺は歩み直せている。そんな俺に降り掛かったチャンス。もしかしたら、このチャンスが最後かも知れない。だって来年には地球がないかも知れないんだから。

だが、パツと選び難い。

1日経って、親父に認められたことが実感でき始めてから漸く俺は理解し始めた。

十数年、なにも語らなかつたあの男からの賞賛はある意味では麻薬のような中毒性と媚薬のような興奮作用がある。

実際に麻薬も媚薬も使ったことはないが、俺にとって彼らからの言葉はまさにそれに近かつたと言える。

ああ、本当にどうすればいいんだろう。

誰かにぶち撒けてしまいたい。だが、そんな無責任なことできるわけもなく。俺に逃げ場なんてない。

しかし答えを出さなきゃいけない問題であることに違いはなくて。俺は一体、何を選ぶべきなんだろう。

頭を抱えて考える。考え続けて数時間。いや、知らぬ間にゾーンに入っていたのでまだ数分と経っていないようだが、考えても考えても答えは一向に出てきてくれないことはない。

頭を悩ませ続けていると、LINEが通知を知らせる。

『やつほー！明日さ、暇だったらE組の裏山でお小遣い稼ぎしない？』
倉橋さんからのメッセージだった。

彼女らしい元気な印象を受ける文面でのお誘い。お小遣い稼ぎの意味する部分が気になるが、正直、ありがたい誘いだ。このまま一人で悶々と過ごしたところで、時間を無駄に消費するだけだろうから気分転換には丁度いい。

俺は二つ返事で返信しようとした……ところで、今度は別のメッセージが入って来た。今度は杉野。

『乃咲！明日、一緒に虫取りしようぜ！』

……また2択かよ。

女子との逢瀬を取るか、男の友情をとるか。

こんな風に遊びに誘われること自体は嬉しい。春休み前の俺なら間違いなくぼっち休み確定だっただろう。

だが、よりにもよって2択。勘弁してくれよ。なんでどいつもコイツも俺に2択を迫るのかなあ。

いや、何もかも偶然で本人達は全く意図してないのは分かっているつもりなだけだよさあ。

俺はたっぷり2時間悩んだ後、返事をした。

?? ?? ??

「あつ、圭ちゃんやつほー！」

「やつほー、倉橋さん」

すまん、杉野。埋め合わせはいつかする。

などと思いつながら送ったLINE。『すまん、先約があるからまた別の機会に誘ってくれ』嘘はついてない。倉橋さんの方が先にメッセージを送って来たのは本当だしね。

そんな言い訳を内心でひたすらに並べながら、倉橋さんと合流していつも通りの道を登る。E組の裏山というくらいだから一応、制服で来たのだが、倉橋さんは私服だ。

制服姿しか見たことなかったので、私服姿はかなり印象的だ。すん

ごい似合っているし、服装一つで印象ってこんなに変わるものなんだな。正直に言って大変可愛らしい。

「制服なんだね？」

「一応、学校だからね」

「真面目さんだねえ」

ニコニコと笑う倉橋さんを見ていると思わず顔が綻ぶ。

部屋で悶々としていた俺にとっては良い清涼剤だ。

「んで？今日はなにするんだ？」

「虫取り！」

「……そうか」

初めからそうと知っていれば杉野も誘ったんだけどなあ。なんか、杉野にますます申し訳が立たなくなってしまった。

思わず口籠ってしまった俺に倉橋さんが首を傾げながら声を掛けてくる。その声音は心配そう。

「大丈夫だった？虫苦手？」

「人並みかな。カブトムシ系なら大丈夫だよ」

「えへへ、ならよかった〜」

安心したように顔を綻ばせる。倉橋さんのコロコロ変わる表情は見ていて飽きないな。基本的に明るくて話しやすいし。

にしてもなんか意外。女子って虫を見ると悲鳴を上げるイメージしかなかったから女子から虫取りに誘われるとはね。

にしても虫か。懐かしいなあ、ムシキング。あれ、まだ稼働してる台あるのかね。今度ゲーセン行ったら覗いてみよう。

「んでも、そんな簡単に捕まえられるかな？アイツら夜行性だろ？昼間にはそうそう見つけられないんじゃないかね？」

「そこはだいじょーぶ！昨日のうちにトラップ仕掛けておいたんだ〜。バナナとかパイナップルに焼酎をかけたのをストッキングとかに入れて、2〜3日置いておいて発酵させた奴。オリジナルなんだよ？」

「そいつは凄いな」

素直に感心する。トラップを作ると言うのは捕獲する対象の生態

をしつかり把握していなければならぬ。それもオリジナルであるなら必要な知識は段違いになるだろう。

にしても小遣い稼ぎとは？もしかして捕まえた虫を売ることかな？結構強かだな、倉橋さん。少し意外。

「倉橋さん、虫好きなの？」

「虫、というか生き物全般が好きだよ！捕まえて、観察して、死んじゃったら食べて、標本にするんだ」

「そっか」

「……………え、食うの!？」

思わずドン引きした声音のツッコミが出かけたが、辛うじて飲み込む。まじか、強かどころの話じゃねえ。根性と度胸がダンチ過ぎるぜ、倉橋さんよお……………!

倉橋さんの逞しさに少々驚かされつつ、嬉々として生き物についてのうんちくを聞かせてくれる彼女に頷きながら、つい、並行してA組に行くかどうかを考えてしまう。

A組に行ったからと言ってこんな風にE組で出来た友人との繋がりは簡単に切れたりしないだろうけど、俺は国家機密を知らない一般人に戻り、彼ら彼女らは国家機密を殺す為の研鑽の日々を過ごすのだろう。

そこには確かな溝が生まれるはずだ。だって、みんなからしてみれば、仲間がなんの相談もなしに抜けるんだから。多少なりとも遺恨は残る。皆んなに『乃咲に裏切られた』と思われても仕方ないかもしれない。

「——圭ちゃん？」

「え、あ、どうかした？」

「ううん。なんかぼーっとしてる気がする。何かあった？もしかして、虫はやっぱ得意じゃなかったとか？」

「いや、そんなことないぞ！」

倉橋さんが心配そうに見ていたので少々戯けながら周囲を見渡して、近くの木に止まっていた2本の立派な角を持った黄色い羽のカブトムシを指差す。

「ほらー！こんなところにヘラクレス……………いや、ヘラクレスが何故にこんなところにいるし」

指差して、そんなことを言いながら同時に日本に野生で生息してない筈のムシがいることに驚愕し、思わず気配を消して、オオカブトを木から引つ剥がす。

おかしくない？絶対誰か逃したよね、じやなきやこんなところにこんなオオカブトがいるわけないよね!?

「本当だ、ヘラクレス……………誰か逃したのかな」

「日本には居ないよな?」

「うーん、育てるのはそんなに難しくないけど野生では居ないんじゃないかな……………一応、外来種だし」

「だよなあ」

人間の身勝手さに呆れつつ、倉橋さんのムシカゴにヘラクレスを突っ込む。まあ、臨時収入ってことで。

無言で他には居ないことを確認していると、相変わらず心配そうな顔に戻った倉橋さんが見つめてくる。

「話は戻るけどさ、なにかあつたらさ相談してよ?溜め込むのが一番ダメなんだからさ」

「うん、ありがと。倉橋さん」

倉橋さんの優しさが身に染みるが、その優しさに甘えるわけにはいかない。自分の未来と地球の未来を天秤かけた選択肢に対する相談なんて出来るわけがないから。

それに、こんなことで倉橋さんの顔を曇らせたくないと思う自分がある。なんだか不思議な気分だ。誰かにぶちまけてしまいたいと思っていたのに、いざ、こうして相談に乗ると言われると気が引ける。本当に妙な気分だ。

相談できないと言う決心と申し訳なさを感じながら山道を歩いていると、ふと話し声が聞こえてきた。

「俺、街育ちだからさ。こういうのに憧れてたんだ。カルマが偶然虫の集まる木を見かけたって言ってさ、気になっちゃって。乃咲も誘ったんだけどな」

「……そうなの？」

聞こえて来たのは杉野の声。彼の言葉を聞いた倉橋さんがこつちに振り向き、問いかけてくるが、俺は視線を逸らす。言えない。2人から誘われて2時間たつぷり考えた結果、倉橋さんを選びました、なんて恥ずかしくてとてもとても。

「倉橋さんからのLINEの方が早かったから」

「ふうーん、そっか〜」

なんだろう、倉橋さんがニマニマ笑ってる。へえ〜、そうなんだ？と分かりきったと言うか、事態を完璧に理解したような笑み。少しばかり居心地が悪くなってしまう。

視線と顔を逸らしていると、倉橋さんが渚、杉野、意外にもいた前原に声を掛けてしまう。

「3人ともおっは〜」

「ん？おはよう倉橋……と乃咲？」

杉野と目が合った。しかたない。

「すまん、杉野。こう言う事情だったんだ」

「なるほど、ちよつと面貸せ」

「……はい」

杉野に手招きされて他のメンバーから少し離れた場所に移動する。流石に責められるだろうな、なんて思っていたのに杉野から飛び出したのは俺にとって意外な言葉だった。

「そう言う事情なら早く言えよ。言ってくれたら日付ずらしたのに」

「悪い。でも、倉橋さんの方が早かったのは本当で……」

「そこんところはいつでもいいんだ。今日、倉橋とデートだったんだろ？」

「……デート？」

「修学旅行の時に倉橋が気になるって言ってたもんな。それに最近のお前ら妙に意識し合ってる様に見えるし」

「……そうか？」

「そうだろ。だって倉橋の奴、お前の呼び方変えたじゃん」

「いや、でも倉橋さんの場合、他の奴らの事も大体下の名前だったり渾

名だろ？」

「甘いよ乃咲！いいか、そういう変化を見逃したり、漠然とスルー決め込んでると後悔するんだからな！それにこの前だつて手繋いで歩いてるの俺は見たんだかな！」

「……………マジかよ」

意外や意外。怒られるとは思っていたが、こんな方向で怒られるとは思っても見なかったぞい。

てか、え、なに、デートだったの、これ？流石に違うでしょ。いや、そもそも、なんで俺は杉野に怒られてるの？

「二昨日、俺と神崎さんを2人きりにしようとしてくれたんだろ？今日はそのお礼もしたかったんだ。だから、こんな風にお前らの邪魔するつもりはなかったってかさ」

「邪魔だなんて思っていないぞ。気まずかったけど」

まさか遊びの約束を断った相手とこんな風に鉢合わせるとは思っても見ないじゃん？いまだに気まずくて杉野のこと直視できてねえもん、俺つてば。

「ねえ、そのの2人、早くしないと置いてっちゃうよ？」

痺れを切らした様に言う倉橋さん。最後に杉野が『本当に邪魔じゃないか？』とか聞いて来たので『邪魔じゃない』とだけ返して倉橋さんたちの元へと戻る。

トラップの元へ向かう倉橋さん着いていきながら何気なく前原が虫取りに来てるのが意外だった、と伝えてみると『1クワガタ11姉ちゃんちやんねくらいねの相場だと思つて小遣い稼ぎに来た』としょんぼりしながら伝えてくれた。

どうやら倉橋さんの生き物知識によつて前原の計画はあつけなく否定されてしまったらしい。ドンマイ、前原。

「お、来てる来てる〜！」

嬉しそうに言う倉橋さんの視線の先には例のストッキングトラップがあり、そこには数匹のカブトムシとカナブンがいた。

「へえー、これお前が仕掛けておいたのか」

「うん。お手製のトラップだよ。昨日の夜に着けといたんだ。あと2

0ヶ所くらい仕掛けたから上手くすれば1人千円くらい稼げるよ！」

「おお、バイトとしてはまずまずか」

虫は意外と売れるらしい。今日、初めて知った。将来金に困ったら虫でも売って生計立てるか……って将来、かあ………。

上手い具合に現実から逃避していたのに何気ない会話で現実を思い出してしまった。直近で俺が悩むべきは将来虫を売って生きるかどうかではなく、A組に行くか、行かないかである。

ああ……嫌なこと思い出した。

なんて思っていると、頭上から気配。

「フッフッフ、効率の悪いトラップだ。それでもお前らE組か？」

声のする方を見ると、そこにはエロ本片手にカッコつけている岡島の姿があつたとき。

木の上に足を組んで片手で本を広げて地面を歩く俺たちを見下ろす構図はかっこいいのに、エロ本片手に持っているだけでなにやっているの？コイツ、感を出せるのは流石、岡島である。

「岡島!!」

律儀にリアクションする杉野に苦笑しつつ、岡島の言葉に耳を傾けてみる。さて、彼は何をしでかすのだろうか。

「せこせこ千円稼いでる場合かよ。俺のトラップで狙うのは当然100億円だ！」

「100億円ってまさか……!!」

「その通り。南の島で暗殺するって予定だから、あのタコもそれまで暗殺はないと油断するはず……。それが俺の狙い目だ」

どうだろう？あの先生がそんな油断するとは思えないけど。などと密かに殺せんせー株が上がる俺。

そんな俺の前に新しい光景が広がる。草むらを掻き分けた先、少し開けた草むらの中心に散乱するエロ本のベット。その上に鎮座する巨大なカブトムシ……に変装した殺せんせー。

俺の中での殺せんせー株が大暴落した。

「クックック、かかっているかかかっている。俺の仕掛けたエロ本トラップ

に」

「すげえ……。スピード自慢の殺せんせーが微動だにせず見入ってるぞ」

「よっぽど好みのエロ本なのかな」

「またなんなんだ、あのカブトムシのコスプレは……」

「あれで擬態してるつもりか!? 嘆かわしい……!」

「おーおー、ツツコミの前原と杉野がいると気持ちのいいくらいにツツコミを入れてくれるから助かるわ。」

お陰様で俺がツツコミを入れずに済んだ。

「どの山にも存在するんだ。エロ本廃棄スポットがな……」

岡島がなんか語り出したぞ、おい。

「そこでエロ本夢を拾った子供が……。大人になってエロ本を買える齢になり、今度はそこにエロ本夢を置いて行く。ここはそんな終わらない夢をみる場所なんだ」

「いや、それ不法投棄……」

「無駄だ、乃咲。ツツコミしたって報われないことだつてあるんだぜ？」

「悟ってるなあ、杉野」

「丁度いい、手伝えよ。俺たちのエロの力で殺せんせーに覚めない夢を見せてやろうぜ」

「……そうか、殺せば良いのか」

セリフの後にぐへへ、と付きそうな笑みを浮かべる岡島。普段であればドン引きしつつ冷めた所感を述べるところだが、岡島の暗殺、という選択肢は悩んでいた俺に新しい選択肢をくれた。

全てをこの夏で終わらせること。殺せんせーを夏休み中に殺して、全ての真相を知った上でA組に行く。それが今の俺に出せる最善の選択だった。

岡島には今度、なにかお礼しよう。

「随分研究したんだぜ? アイツの好みをよ。俺だつて買えないから拾い集めてな」

「ん? 殺せんせー巨乳ならなんでもいいんじゃないの?」

「現実ではそうだけだな……エロ本は夢だ。人は誰しもそこに自分の理想を求める。写真も漫画も僅かな差で反応が全然違うんだ……！」

そう言って渡された岡島のスマホには1ヶ月分、殺せんせーを観察した跡が残っていた。彼のいう通り、1ヶ月の間の殺せんせーの反応は全く違うものだった。この地味な作業を一月続けた岡島に素直に感心する。

「……すごいよ、岡島くん。1ヶ月本を入れ替えて反応をつぶさに観察してる」

「ていうか、大の大人が1ヶ月連続でエロ本を拾い読むな、買えよ嘆かわしい……」

渚の素直な反応と杉野のツツコミに心底同意しながら行く末を見守ると、岡島が倉橋さんに向き直る。

「お前のトラップと同じだよ、倉橋。獲物が長時間夢中になる様に研究するだろう？」

「……う、うん」

「いや、性欲と倉橋さんの知識欲を一緒にするなや」

「言ってやるな、乃咲。男にとって性欲は知識欲に直結するもんなんだ！」

「前原あ……」

なんだか話題が逸れて来たぞ。

しかし、そんな俺たちに岡島を尻目に、地面に仕掛けていた対先生ナイフを挟んだエロ本を徐に持ち上げる。

「乃咲の言う通り、俺はエロいさ。蔑む奴は蔑めば良い」

「いや、蔑んではいけないけどね」

「まあ、ともかくだ。誰よりもエロい俺だから分かる。知ってるんだよ。——エロは世界を救えるってさ」

スラーつとナイフを抜く岡島。

「……「なんかカッコいい……!?!」」

「殺るぜ。エロ本の下に対先生弾を繋ぎ合わせたネットを仕込んだ。熱中している今なら必ず掛かる。誰かこのロープを切ってトラップを発動させろ。俺が飛び出して止めを刺す！」

どんなものでも研ぎ澄ませば刃になるこの教室で、エロとツツコミだけが取り柄の様に見えるいた岡島。そんな彼のエロの刃が今、殺せんせーを捉えようとしている。

そんな緊張感を帯びた俺たち。渚が早速トラップを発動させようとしたその時、殺せんせーに動きがあつた。

「みよーん」

「な、なんだ?」

「急に目がみよーんって」

「な、なんだ、あの顔は!? データにないぞ!」

殺せんせーの目が不意に飛び出した。目が真っ直ぐ顔から飛び出したと言つてもいい。そんな誰も予想しなかつた殺せんせーの表情の変化に呆気に取られる。

岡島の反応からしても1ヶ月観察して来た中で見たことのない表情だったのだろうことは容易に想像がついた。

「ヌルフッフフ、見つけましたよっ!」

かと思つたら殺せんせーはシュツと触手を伸ばし、木にいた何かを素早く捕まえてしまう。

「ミヤマクワガタ。しかもこの目の色……!」

殺せんせーのそんな独り言がここまで届く同時に倉橋さんが興奮した様子で俺たちの身を潜めていた茂みから飛び出す。

「白なの、殺せんせー!」

「おや、倉橋さん。ビンゴですよ」

「すつごーい!! 探してた奴だ!」

「ええ。この山にも居たんですねえ」

エロ本の山の上で飛び跳ねて喜ぶ倉橋さんと殺せんせー。どうやら倉橋さんはミヤマクワガタのアルビノ個体を探していたらしい。

「ああ……! あとちよつとだったのに」

あ、そうか。岡島的には作戦の妨害をされた様なものか。無邪気に喜ぶ倉橋さん、無意識のうちに岡島の作戦を潰してしまった模様……。どんまい、岡島。

「なんで喜んでるのかさっぱりだが、巨大カブトと女子中学生がエロ

本の上で飛び跳ねてるのはすごい光景だな」
「確かにな」

エロ本の山で飛び跳ねる2人を見つめていると、殺せんせーはどうやら俺たちや今の自分の現状に気付いたらしい。教師がエロ本の上で飛び跳ねる異様な光景を自分が作り出していることに。

「はっ……!?!」

気付いたらしいが、俺はここで写真を一枚パシャリ。

よし、強請のネタはこれで作れた。さて、なにをしてもらうか、このエロタコに。

「にゅやあっ?!乃咲くん!ととと、盗撮ですよ!?!」

「自分の状況をよく見てから喋るんだな、エロタコめ。聖職者であるはずの教師が煩惱に塗れたエロ本の上に鎮座している姿はお笑いだったぜ」

「ちよおっ!?!」

「た、楽しそうだな、乃咲」

杉野がドン引きした様な視線を向けて来る。

「……面目無い。教育者としてあるまじき姿を……。エロ本の下に罫があるのには知ってましたが、どんどん先生好みになる本の誘惑に耐え切れず……!?!」

「あっさりバレてた……!?!」

「ドンマイ、岡島」

ガツくり項垂れる岡島を適当に励ます。

「で、どーゆうことよ倉橋?それミヤマクワガタだろ?ゲームとかじゃオオクワガタより全然安いぜ?」

「最近ミヤマの方が高いことの方が多んだよ?まだ繁殖が難しいから。このサイズなら2万はいくかも」

「二万!?!」

「しかもそのミヤマはアルビノだろ?」

「その通り、いいところに気が付きましたね、乃咲くん」

「アルビノ?あの偶に全身真っ白で生まれて来るって奴?」

「ヌルフッフフ、その通りです、杉野くん。しかし全部の生き物が全身

にアルビノが出るとは限りません。見てください、目が白いでしょう？クワガタのアルビノは目だけにでます。『ホワイトアイ』とも呼ばれ、天然ミヤマのホワイトアイはとんでもなく希少です。学術的価値すらある。売れば数十万は下らないでしょう」

「「すう……!!?」「」」

まじか、そんなレアモノがこの山にいたとはな。

「一度は見てみたいって殺せんせーに話したら、ズーム目で探してくれるって言ってたんだあ〜！」

クワガタに無邪気にはしゃぐ倉橋さん、可愛いな。

「ゲスなみんな〜！これ欲しい人、手え上げて♪」

「「欲しい!!」「」」

「あはは、どうしよつかなあ〜！」

「あ、ちよつ?!先生がみつけたんですからね!!」

無邪気にゲスい心を煽り、楽しそうに走り出す倉橋さんと彼女……というか、その手に捕まえられたミヤマクワガタを追う無邪気な男子たち。

「おや、乃咲くんは行かないのですか？」

「いや、近くに賞金100億円がいるんだから数十万なんて今更でしよ」

「それは確かに」

「殺せんせーを梱包して政府に売ってやれば100億以上、交渉次第で貰えそうだし」

「ヌルフッフフ、そう簡単に先生を捕まえられますかねえ」

緑のしましまを浮かべる殺せんせーにさつき撮った画像を見せて、徐に脅迫を開始する。

「この画像をばら撒かれたく無かったら大人しく捕まれ」

「にゅやあつ?!そんなことしちやいますか!?!」

「残念です、殺せんせー。俺たちが殺すよりも先にPTAや警察に捕まるだなんて」

「その写真消してください、頼みます!!」

強請^{交渉}の結果、この場にいる全員に殺せんせーがハーゲンダッツを奢

ることで手打ちとなりましたとき。

余談だが、ミヤマクワガタのホワイトアイは然るべき研究機関に匿名で倉橋さんが送る事になったとき。

40話 連れ回される時間

南の島での暗殺計画が着々と近づく中、俺は相変わらず学校に来ては殺せんせーの暗殺を試みている。

試みてはいるが、うまくはいかない。そりゃあ各国政府が手を焼くターゲツトだ。そう簡単に殺せるとは思っていないが、諦めるわけにもいかない。

殺せんせーを殺して全ての真実を知り、そしてA組に行く。それが俺に取れる最善手であるのだから当然だ。

「ヌルフフフ、殺せませんでしたねえ。今日も」
「クソツタレめ……」

振り回していた対先生マチェツトとハンドガンを地面に置いて息を整える。生徒が少なく、頭数が足りない以上、流石に合同暗殺の時の様に追い詰めることはできないか。

悪態を突き、どかつと腰を地面に下ろす。

「……乃咲くん。なにか、焦っていませんか？」
「……」

凶星だ。ここで反応を顔に出さなかったのは日々のビツチ先生からの指導の賜物だと思う。俺は今、いつだったかビツチ先生に言われた、自分を演じるということができた様な気がした。

殺せんせーの問い掛けに顔色一つ変えることなく俺は『なんでもないですよ』とだけ答えて立ち上がり、暗殺を切り上げる。

今日はこれ以上、殺せんせーに暗殺を仕掛けても成功はしないだろうと踏んだから、さっさと暗殺道具を片付けているとスマホがポケットの中でバイブレーション。

『乃咲さん！寺坂さんからLINEが来てますよ！』

スマホを出すと律が差出人を教えてくれる。彼女も最近俺のプライベートへの配慮がだいぶ無くなって来たよなあ。

いや、別にまずいサイトを見てたりとか、そんなことはないのだから困るデータとかは無いから良いんだけどさ。

「寺坂はなんて?」

『えっと、「乃咲、面貸せや」だそうです』

「新手の脅迫か……?」

文言が明らかに恐喝のそれである。最近は寺坂の態度も軟化して来たのだが、ここに来て第二次寺坂の乱が開幕か?

こんな意味も分からずに面貸せとか言われたの不良時代以来だぞ。寺坂の奴俺なんかよりもよっぽど不良児やってるって。

つか、真面目になんの様だ?あのジャイアンが俺に呼び出しとか。なにがあつたよ?最近マジでアイツと喧嘩になる様な事はしてないし、かと言ってお呼ばれするほど親しくなったと言うわけでもないと思うし。

呼び出し喰らう理由がマジで思いつかなくてリアクションに困ってしまう。ひとまず律に『どこに?』と返信を頼んでおいた。面貸せ、ではどこに行けば良いのかわからないからである。

「おや、寺坂くんとお出かけですか?」

「そうなるんですかね。お出かけてか呼び出しですけど」

「ヌルフフフ、喧嘩もまた青春です」

「いや、喧嘩しないように頑張りますけどね?」

にしても寺坂から呼出か。なんの用だろ?

?? ?? ??

……この面子、なにかの冗談だよな?

「まさか、乃咲も来るとはね」

「竹林……」

寺坂はまさかの俺と竹林を呼びつけていた。

理事長直々にA組に移動しないか、と誘われた俺たち2人にピンポイントでだ。寺坂の奴……まさかめざとくも俺たちのE組離脱の可能性に気が付いて……!?

「まさか、君もメイド喫茶に行きたいと思っていたのか」

「……ふあ?」

予想外な言葉に間の抜けた言葉が飛び出る。いや、言葉とすら言えない異音。竹林はなんて言った？『君もメイド喫茶に』いや、まて。キミもってなんやねん。この場にいるのは寺坂と俺と竹林の3人だけである。んで、発言者は竹林な訳だから、この場合、『も』が指し示す先は……。

「寺坂あ、メイド喫茶行きたかったのか」

「ち、ちげえよ！」

「……へえ」

うわ、なんだか恥ずかしい。寺坂を買い被りすぎた様だ。そうだな、コイツがそんな人の感情の機微に敏感なはずないか。第一、敏感ならクラスで孤立なんてしなかっただろうしな。

しかし、それにしても謎だ。それならなお一層、俺をここに呼んだ理由が分からない。メイド喫茶なんて小っ恥ずかしいところに行くのになんで俺まで誘う？むしろ『んな所に行ってるの見られたくない！』とか思っただけなのに。

腑に落ちずに首を傾げていると、竹林がメイド喫茶へと続く道を我が物顔で歩きだし、置いていかれまいと小走り気味に歩き出した寺坂のあとに続く。

歩くこと十数分。某駅前のメイド喫茶にたどり着いた。

たどり着いたは良いが、何をどうすれば良いのか俺と寺坂は迷ってしまう。こんなところ、来たことないし、どう入れば良いのか分からない。どうしてついて来てしまったんだ、俺？

などと自問自答を始めようとした時、竹林は鼻を鳴らしてクールに扉を開けた。やたらと無駄のない洗練された動きで。

体から扉までの移動を最短距離で済ませると、やや大袈裟に見える様で実は扉を開けるのに必要最低限の力を持って扉を開ける竹林。こう言うのを洗練された無駄のない無駄な動きと言うのではなからうか？

「「おかえりなさいませ、ご主人様」」

そんな竹林の入店と同時にご主人様コールする店員たち。彼女たちもまた洗練された無駄のない動きでお辞儀をしてくる。そんな様

子に俺たちが慌てっていると竹林はそんな俺たちを鼻で2度笑うとメガネを人差し指で無駄にカツコよく押し上げながら、流れる様に入店し、言った。

「ただいま」

なんだか、本当に無駄にカツコいいぜ。竹林。

とかなんとか思いつつ、躊躇いがちに入店したメイド喫茶。初めこそ竹林……否、竹林さんの影に隠れていたが、慣れてみると案外楽しくなってくる。

「はい、あーん」

「あーん」

すつげえ、『あーん』なんてされたの久しぶりだ。子供の頃以来かな。そしてこの食べさせられるオムライスが美味しいのなんの。ケチャップがやや足らない気がするが、それでも美味しい。

「はい、ご主人様も一緒に♪『おいしくなーれ、萌え萌えきゅん♪』」

「お、お、お……」

口籠る寺坂。そりやそうだ。俺だつてやるかどうかはめっちゃくちゃ悩んだ。だが、折角の経験なのでやってみることにしてみた。

「ほら、どうした、寺坂。やらないのかい？」

「た、竹林しい……」

我らの竹林さんと言うと無数のメイドさんに囲まれ、マッサージされながらオムライスを口に運ばれていた。

要するにとんでもないVIP待遇である。いや、実際にVIPというか常連客としてめっちゃくちや優遇されているのだろう。メイドさんたちがものすごいフレンドリーだし、『いつもの』で注文を済ませていた。

「ほら、やれよ寺坂。『おいしくなあーれ、萌え萌えきゅん♪』」

「お前、よくやれるな」

「一回やれると気にならなくなるぞ。ねー？」

「「ねー！」」

「お前、案外強かなのな……」

寺坂も最終的には『萌え萌えきゅん』を習得し、無事にオムライスをいただくことができた。『美味つ……』と溢していた。

なんだかんだ、メイド喫茶にも馴染んできた頃、寺坂がジュースをテーブルに置き、徐に俺に問いかけて来た。

「乃咲、オメエには行きつけの店とかねえのか」

「行きつけ、はないな。なんだ？急に」

「別に。夏休み中には共同作戦張るんだ。相手の趣味趣向知ってれば連携も取りやすいだろうよってだけのことよ」

……つまり、寺坂は俺たちを知ろうとしてくれているのか。もしかして、今日、俺たちを呼び出したり、柄にもなくメイド喫茶なんかに来て『萌え萌えきゅん』なんてしたのも全部、竹林を知る為、だったのか？

「何かねえのかよ。趣味だとかよ」

「……趣味ねえ。暗殺訓練？」

「アホ。そんなん趣味とはいわねえよ」

「じゃあないな」

「……お前、それでつまらなくねえの？」

「別に？」

確かに暗殺訓練は趣味とは違うが楽しいと感じてることに変わりはないし。出来ることが増えると嬉しいのは事実だ。

だから別に無趣味でつまらないと感じたことは今までなかったな、思ってみれば。

「じゃあよ、なにか趣味でも見つかったら教えろよ」

「なんでよ？」

「俺はテメエのことを知らねえ。ただ目付きが気に食わないってだけで嫌ってた。だから、嫌うなら相手を知ってからでも遅くねえって思ってたんだよ。この前の……シロとの一件でな」

寺坂の奴、随分と立派なことを考える様になったもんだ。目が合うだけで睨まれていた頃とは大違いだ。

コイツはコイツなりに成長、したんだな。E組開始時点では見えなかった寺坂の意外な一面が見れた様な気がする。

「わかった。なにか思いついたら教えてやるよ」

「……ああ」

その頃には俺も竹林もE組に居ないかもしれないけどな。

と心中で溢す。こうやって不器用なりに歩み寄ってくれようとしている寺坂と内心では色々と迷い続けている俺。

ついさつき、寺坂に成長したな、とか上から目線で感じた癖に本当に成長していないのは一体どっちだって話だ。

その後、俺たちは寺坂にあちこちに連れ回された。村松の実家のラーメン屋で美味くもなく、不味くもないラーメンを食ったり、吉田の家に連れてかれて、吉田の運転するバイクで2ケツしたり。ひたすらに寺坂組と絡んだ1日だった。

?? ?? ??

寺坂に思う存分連れ回された帰り、夕暮れ時になると俺はまた悩み出していた。寺坂は思った以上にいい奴だ。いや、寺坂だけでなく、E組の連中は大概がいい奴だと言える。俺がA組に行くのはそんな彼らへの裏切りなんじゃないのか？そんな悩みがやはり消えない。

例えば、殺せんせーを殺して全ての謎を解き明かしても、E組はE組であることに変わりはないし、差別を受ける待遇であることもまた然りなのだ。

俺がA組に行くのは差別する側に回ると言うこと。例えば俺単体が差別をしなかったとしても、差別してる側に行くことには変わりないし、彼ら彼女らから見てもそこは同じだろう。かと言って俺が差別をやめるよう呼び掛けても何も変わらないだろうし。

差別する側に回る。字面だけ見ると嫌な響きだ。

「ねえ、そのキミ」

ふと、聞き慣れた声が聞こえた。

あ、いや、聞き慣れたと言うか、話慣れた声と言うべきか。俺の声に随分と似た声の誰かがいる様だ。

「キミだよ、その銀髪のキミ」

「……俺？」

「そう、キミだ」

俯いて歩いていると、その俺の声に似た誰かに呼び止められる。銀髪なんてこの辺じや俺と菅谷、いるか分からないが、イトナくらいだろう。そして、この場にいる銀髪は俺だけだ。

顔を上げてみると、そこには花を飾ったワゴンカーの前で柔らかく微笑む男がいた。帽子を深く被っていて目元は見えないが、彼もまた銀髪。加えて自分に似た声だということもあつてなんだか妙に親近感が沸いた。

「なにかあつたのかい？すごく思い詰めた様な顔をしていたけど。側から見ていて心配になるくらいにね」

他人に声をかけられるレベルで酷い顔をしていたのか？

思わず顔に手を当てて首を傾げると男はおかしそうに声を上げて気持ちよく笑った。

なんだ妙な気分だ。俯いて歩いているところに声をかけてきた見知らぬ他人。それだけで警戒するには充分なはずなのに、何故か警戒心が働かない。随分前にビッチ先生にディープキスされた時の直前に感じた気配に似ている。

この人は何者だろうか。いやこの花塗れのワゴンに耐水性能の高そうなエプロンと手袋。長靴を見るに、彼が花屋であることは容易に想像出来るのだが。問題はそこじゃない。

あれか？倉橋さんや矢田さんみたいに人のパーソナルスペースに入るのが天然で上手い人なんだろうか。

「大丈夫かい？顔色もあんまり良くないみたいだ」

不思議だ。自分と同じと言つても差し支えない声なのに、聞いていてなんだか落ち着く声音だ。いや、声だけじゃない。雰囲気そのものが柔らかくて落ち着くんだ。心底不思議なことに。

「ええ。ご心配どうも」

「歩き方もなんだかふらついてたよ？」

「ちよつと鬱気味でして」

「……そうだ！じゃあ、花でも愛でてみたらどうかな？サービスする

よ?」

「花……?」

手招きされて、花に誘われたムシのように花屋の兄ちゃんの前に出ると彼は何か適当に花を入れた筒をいくつか取り出し、俺に差し出してくる。

「選んでみなよ、好きなの」

「……俺が選ぶんすか?」

「キミが愛でる花だからね」

言われて適当に選ぶ。薄紫色のアサガオ見たいな奴と薄桜色のチューリップチックな奴、そして青い桔梗の様な花に猫じやらしみたいなの数本。本当に適当に選んだのだが、選び終わると花屋の兄ちゃんは満足そうに笑った。

「いいね!良いセンスだよ。じゃあその子達をあげよう」

「……いや、でも悪いっすよ。そんなことしてたら商売にならないんじゃないっすか?」

そういうと兄ちゃんは困った様に苦笑すると俺が選んだ花を包装しで綺麗に包むと俺に花束を手渡してきた。

ついでに花選びのセンスも褒められたが……、暗殺者に花選びのセンスって必要なんだろうか?

「じゃ、この出会いに乾杯ってことで」

「……男に言われてもねえ」

「あはは……」

互いに苦笑しながら結局、花を受け取る。

しかし、困ったことに我が家には花瓶の類を見かけたことはない。折角もらったのに何もしないで花を枯らしてしまうのは忍びないし、学校に持ってくか。殺せんせーなら花瓶の一つや二つ持つてるだろ。

「それじゃあね、身体には気をつけるんだよ。その制服、櫛ヶ丘の3年生だろ?大事な時期なんだからさ」

「……うっす」

頷いて背を向けると背後から『帰り道気をつけて』と爽やかな声が聞こえて来た。なんだか不思議な人だったな、なんて思いながら俺

は学校に向かう。花束を抱えて通学路を歩くなんて考えもしなかったな。

もしかして離任式に行く卒業生ってのはもしかしたらこんな気分なのかもしれないなあ。なんて思いながら歩く通学路。

今日は倉橋さんたちと出会うことなく通学路を歩き切る。本日2度目の登校。俺は靴を履き替え、職員室に入る。

「おや、乃咲くん」

「殺せんせー、花瓶とか持ってませんか？」

「花瓶？おやおや、その花束は？」

「帰り道に出会った花屋の兄ちゃんが選ばしてくれたんです。サービスなんだとき。でもうちに花瓶なんてないから殺せんせー、花瓶とかもってないかなあつて」

「ヌルッフッフ、当然持ってますとも！美しい花々を見て慈しむのもまた大人の嗜みです！」

マッハで花瓶を持って来てくれた殺せんせー。早速、その花瓶の中に水と花を入れる。目についたやつを適当に選んだだけとはいえ、花瓶で飾ってやるだけでも大分、サマになるもんだな。

それに花屋の兄ちゃんの好意を無駄にせずに済んだ。

「それにしてもキミが花束を持つてくるとは考えもしませんでした。コレはどこで？」

「寺坂たちと遊んだ帰りに花屋の店員が声をかけてくれましたね。顔色が悪いとかなんとか。それで花でも愛でてリラックスしろ、と花を選ばせてくれたんです。無料だ」

「ほうほう。近年稀に見る素敵な店員さんですねえ。それに加えてキミのセンスも実に見事だ」

「そうですか？殺しに関係ない技術って暗殺教室じゃあんまり価値がない様に思うんですけど……。まさか花に見惚れる殺せんせーを殺せるわけでもないだろうし。なんならアクロバティックな暗殺する奴らからしたら邪魔かも？やっぱ片付けたほうが良いですかね？」

その場合は祖父母に花瓶のおねだりでもしてしてみるか、なんて思いながら話してみると殺せんせーは俺の目を見つめているのに、何

故だか何処か遠い目をしていた。

?? ?? ??

似ている、似ていると思っていたがまさかこんな所まで似ているとは思いませんでした。

「殺「先」せんせー?」

「……いえ。邪魔だなんてことはないでしょう。それに花にリラックスしている相手の隙を突く発想自体は素晴らしい」

「いや、マツハ20相手に通じないんじゃない? って話し……」

「ヌルフフフ、そこはやってみないとわからないところですねえ。」

それから、キミはセンスが良い。私よりも上手いです」

「調子に乗って毎日飾「良かった!」るかもよ? そんなこと言ってる」と

ああ。本当に似ている。

あの子に。本当に生き写しのようだ。

何処かで血縁関係でもあるのではないだろうか、と考えたくなるほどに彼の何気ない仕草や言葉は私の追憶を刺激する。

苦々しい、過去の過ち。私の初めての生徒。見てあげることをしなかった、私の教え子との記憶を。

だからこそ私は決意した。彼を見る度に決意を新たにしています。今後こそ、彼らを見るのだと。

「乃咲くん乃咲くん! たまには先生と晩御飯とかどうですか!」

「え、メイド喫茶でオムライス、吉田ん家でラーメンくって結構、腹一杯なんだけど」

「でしたらさっぱりとしたデザートを食べましょう! 良い喫茶店をいくつか知っています。そこに行きましょう!」

まだ返事をしない乃咲くんを懐に入れて、飛び立つ。野を越え山を越え、海を越える。

さて、美味しいデザートを食べた彼が悩みを少しでも吐き出してくれればいいのですがねえ。

何やら深刻な顔を度々見せるようになった彼を正しく導くと私は
もう一度胸とあの日と変わらない月に誓った。

41話 策謀の時間

夏休み中から暗殺はとことん失敗し続けた。ゾーンに入つて殺せんせーの動きを辛うじて見切れたとしても殺すまでいくことができなから余計に歯痒い。

そんなこんなで南の島での暗殺旅行まで1週間後に迫り、俺たち3年E組は今日はその旅行での暗殺の為の訓練と計画を詰める為にE組校舎に集まっていた。

勝負の8月。殺せんせーの暗殺期限まで7ヶ月。俺にとっての暗殺期限まで残り1ヶ月もない。まさに南の島での暗殺こそが俺にとっての勝負の舞台というわけだ。

「まあまあ、ガキども。汗水垂らしてご苦労なことね」

「他人事みたいに言ってる場合かよビッチ先生。射撃やナイフは俺たちと大差ないだろーにさ」

余裕たつぷりに恐らく殺せんせーが買ってきたであろう、トロピカルジュースを我が物顔で優雅に飲むビッチ先生に菅谷が言葉を投げるが相変わらずの態度でビッチ先生が口を開く。

「大人はずるいのよ？アンタ達の作戦に乗じてオイシイところだけ持っていくわ」

身も蓋もないことを言い切ったビッチ先生。しかし、そんな彼女に忍び寄る偉大なる影が一つ。

「ほほう。偉いもんだな、イリーナ」

「ロ、ロヴロ師匠!?!」

「夏休みの特別講師で来てもらった。今回の作戦にプロの視点から助言をくれる」

殺し屋ロヴロ。ビッチ先生の師匠が今日は暗殺訓練と作戦会議の為に来てくれた。そんな彼を紹介した烏間先生。

同時にビッチ先生が全力で焦り出す。顔面蒼白。さっきまでの優雅な態度は何処へやら。焦って走り出す。

「一日休めば指や腕は殺しを忘れる。落第が嫌ならさっさと着替えろ」

！」

「へ、へい！喜んで！」

なんとなく普段余裕たっぷりな人が勢いよく走り去ってゆくその後ろ姿は見ていて面白かった。ビッチ先生には悪いけどね。

「あはは、ビッチ先生もロヴロさんの前じゃかたなしだね」

「だな」

何気なく隣にいた倉橋さんとそんな風に笑いながら話しているとロヴロさんが俺たちの考えた暗殺プランのまとめられたファイルペラペラと捲り始めた。ふむふむと頷きながら見ている。

まあ、時折首を傾げているが。

多分、精神攻撃とかその辺の真意を汲み取りかねているのだろう。そりゃあぱつと見では何を目的としているのかさっぱり分からないし仕方ないよな。

ちなみに殺せんせーはエベレストで避暑中である。

あのタコ。寒さにもかなりの耐性があるようだ……。つーか、別荘感覚でエベレスト行くなよ化け物め。

相変わらずツッコミどころ盛りだくさんな殺せんせーへのツッコミを禁じ得ない中で、渚と並んで訓練に参加していると、案の定、ロヴロさんから問い掛けが来た。

「この精神攻撃とはなんだ？」

「まずは動揺させて動きを落とすんです。殺気を伴わない攻撃には殺せんせー脆いところあるから」

「加えるなら、触手の扱いには精神力が重要らしいです。だから、まずは強請って殺せんせーのパフォーマンスを落とそうって作戦です」

渚の説明に補足を入れる。イトナとシロからもたらされた殺せんせーの弱点も今回は容赦なく使う。

動揺でパフォーマンスが落ちる、そして触手再生にもかなりの体力を使う。だから、触手を破壊する権利を使う前から可能な限り触手の破壊も狙っていくつもりだ。

「この前さ、殺せんせーエロ本拾い読みしてたんすよ。『クラスのみんなには内緒ですよ』ってアイス一個配られたけど……今どきアイスご

ときで口止め出来るわけねえだろ！」

「「「クラス全員で散々に弄ってやるぜ!!」」」

前原の言葉に共鳴する寺坂組。うん、こういう時の彼らは非常に頼もしいと思う。主に狭間さんが。

「他にも強請るネタはいくつか確保してますからまずはこれを使って追い込みます」

「残酷な暗殺法だ」

殺しのプロが我々の容赦のなさに冷や汗をかいてらっしやる。うん、残酷な暗殺方法だとは俺も思うけどね。

でも仕方ないのよ、そうでもしないとあの脚を俺たちが見切れるレベルまでおとせないんだから。

「……で、肝心なのはトドメを刺す最後の射撃。正確なタイミングと精密な射撃が不可欠だが……」

思案顔をするロヴロさん。彼に烏間先生が問い掛ける。

「……不安か?このクラスの射撃能力は」

「いいや、逆だ。特にあの2人は素晴らしい」

そんな言葉を贈られたのは我らの仕事人。背中で語るタイプの2人。速水さんと千葉だった。

「そうだろう」

烏間先生も満足そうに頷き、うちの射撃手2人組について自慢するように語り出した。

「千葉龍之介は空間計算に長けている。遠距離射撃で並ぶものはいない狙撃手だ。そして速水凛香は手先の正確さと動体視力のバランスが良く動く標的を仕留めることに優れた兵士だ。どちらも主張が強い性格ではなく、結果で語る仕事人タイプだ」

「ふーむ。俺の教え子に欲しいくらいだ」

おっと、なんだか妬ける会話してるじゃないのよさ。俺を差し置いて烏間先生に認められちゃってなんと羨まけしからん話ですか。あとで2人から狙撃のコツ教えて貰おうっと。

そんなことを思いながら2人を見てみると、ロヴロさんが不意に俺に視線を向けてきた。

「たしかキミは乃咲、と言ったかな」

「はい、よく覚えてますね」

「教え子に欲しいと思った相手のことくらい覚えている。キミも射つてみてくれないか」

「何故ですか、構いませんけど」

「なに。興味本位だ」

釈然としないが、言われた通りに射撃することにした。ゾーンに入り、狙いを付けて、左右に動く殺せんせーを模した的にBB弾を撃ち込む。3度の射撃のうち、一射目で標的の真ん中を貫き、残る2発はその穴を通り過ぎる。

ゾーンに入りながら訓練を繰り返すうちにゾーンを使っていればこんな芸当も出来るようになっていた。

「ほう。射撃の腕も確かなものだな」

「彼は動体視力、反射神経、瞬発力が極めて高い。近接でのアタッカーとしては並ぶものはいないし、射撃の腕も今見た通り。体術やナイフ術による近接も、銃による射撃も、意外性のある作戦を考案する能力もある、まさにオールラウンダーだ」

「いゃん。烏間先生に滅茶苦茶褒められた。」

正直言つて滅茶苦茶嬉しい。

「他の者も良いレベルに纏っている。短期間でよく見出し、育てたものだ。人生の大半を暗殺に費やした者としてこの作戦に合格点を与えよう。今の彼らなら十分に可能性がある」

彼はそういうと俺たちの個人指導に入った。射撃姿勢が取りづらそうな物に座り方を変えてみるようにアドバイスを与え、狙いが定まらない者には呼吸の仕方、狙う方法を授ける。

そんな様子を見てみると隣にいた渚が徐にロヴロさん呼び止めた。なにか思いついたように興味本位で。

「ロヴロさん」

「……」

呼び止められた時、ロヴロさんは渚に気付いていなかったのか、一瞬驚いたような顔を見せるとすぐに無表情に戻る。

そんなことに気付いていないのか、渚は言葉が続けた。

「僕の知ってるプロの殺し屋って今のところビッチ先生とあなたしかいないんですが、ロヴロさんの知ってる中で最も優れた殺し屋ってどんな人ですか？」

「……興味があるのか？ 殺し屋の世界に」

まあ、そんなふうに取り立てても仕方ない質問だよな。渚にそんな意図はないんだろうけどさ。その証拠にロヴロさんの問いかけに慌てて手をぶんぶん振って否定している。

しかし、そんな渚を気に留めず、彼は遠くを見ながら物思いに耽るように、呟くようにソレについて語り出した。

「そうだな……。俺が斡旋できる殺し屋の中にソレはいない。最高の殺し屋。そう呼べるのはこの地球上にたった一人だ」

「文字通り、もつとも優れた殺し屋ってことですか」

「その通り。この業界にはよくあることだが……。誰も彼の本名を知らない。ただ一言。渾名で呼ばれている。——曰く、”死神”と」

飛び出してきた一言に思わず口を挟む。

「なんつーか、ありふれた渾名っすね」

俺の言葉に自嘲するように静かにロヴロさんが口許を緩めると、彼は頷き、言葉が続けた。

「本当にありふれた渾名だろう？ だが、死を扱う我々の業界においては”死神”とは唯一絶対、奴のことを指す。神出鬼没、冷酷無比。夥しい数の屍を積み上げ”死”そのものと呼ばれるに至った男……。都市伝説のような話だろう？」

神出鬼没で誰も本名を知らないのに、性別は割れてるのか。なんだか妙な話だが、都市伝説としては妙な説得力がある。

ただ、唯一確かなのはそれは都市伝説のような話、であって都市伝説ではない。本物の殺し屋であるロヴロさんが語る現実。火のないところに煙が立たないように、実際に夥しい数の犠牲者が出ているからそんな噂が立つわけだし。

「君たちが殺しあぐねているのなら……。いつか奴が姿を現すだろう。ひよつとすると、今も何処かでじつと機会を窺っているかも知らない

な」

「そんな人が……」

渚が戦慄する。そんな彼の気持ちも分かる。このまま殺せんせーを殺せずにいたらその死神がやってくるかもしれない。いや、もしかすると俺たちの中には既に死神と接触している者もいるかもしれない。何気ない街中とかで。

しかし、そうなつてくると南の島での暗殺はいよいよを持って外せない展開になって来た。

「……では、少年達よ。キミらには”必殺技”を授けてやろう」

「!? ひっさつ……!?」

ロヴロさんが徐にとんでもないことを言い出す。

「そうだ。プロの殺し屋が直接教える……必殺技だ」

俺と渚はそんな言葉に固唾を呑む。だが、ロヴロさんはその直後に戯けたとように口を開く。

「とは言つても、必ず殺す技ではない。必ず殺す”為の技”だ」

「殺す為の……?」

俺の言葉に頷くと、ロヴロさんは懐からゴムナイフを取り出すと、挑発する様に俺に指をクイクイツと向けて来た。

「聞くよりも実感する方が早いだろう。乃咲、かかって来るといい。キミならこの技の重要性が理解できる筈だ。烏間をして優れたアタッカーと言わしめるキミなら」

「……分かりました」

彼の言葉に頷き、俺もゴムナイフを抜く。本物のプロの殺し屋から直接、必殺技を伝授されることなんて滅多にないだろうから胸を借りるつもりでいこう。

かかって来いと挑発してくる彼にナイフを握って立ち向かう。ゾーンに入り、その動きの全てを警戒する。特にナイフや腕と足回り。もしもの奇襲がない様に。

「(流石プロ……隙がない)」

暗殺者に正面戦闘の技術は基本的に必要ない筈なのに、この人は隙がない。烏間先生と相対しているのと変わらない感覚に思わず全力

で苦笑する。

しかし、こうして硬直していても仕方がないので仕掛けることにした。ナイフ片手に全力で踏み込み、肉薄する。

肉薄し、身体の距離がゼロになる直前。ロヴロさんがナイフを宙に置く様に放し、俺の目と鼻の先で手のひらを巧みに打ち付けて甲高い音を響かせた。

その瞬間、頭の中が真っ白になる。ゾーンに入り、余計な情報を頭の中から排除し、必要な情報のみを残していた脳内が真っ白に染まってしまう。

一瞬、何が起こったのかわからなくなり、そして次の瞬間に猫騙しで怯まされたのだと思に至る。

そういえば烏間先生が赴任して来たばかりの頃、模擬戦で猫騙しを使った事があった。やはり、古典的だが良い手だったのだろう。こうやって殺しのプロが使ってくる程度には。

たまらず尻餅をつく。

「乃咲!」

驚いた渚が駆け寄ってくる。それを片手で制しながら最近増えた貧血染みた眩暈と格闘しながら立ち上がる。

「今のが必殺技ですか?」

「そうだ。と言つてもまるでピンと来ないだろうか?だが、この技は実戦で使えば恐るべき威力を発揮する。実際に俺は殺し屋として最大のピンチの時、これを編み出す事で切り抜けた。名をクラップスター」

ロヴロさんは語る。

「この技の発動には条件がある。それは大きく分けて3つ。1つ、武器が二つある事。2つ、敵が手練であること。3つ、相手が殺される恐怖を知っている事だ」

武器が二つ必要な理由は恐らく、一つ目の武器を捨てる事が前提だからだろう。事実、ロヴロさんはナイフを捨てた。

しかし、手練であることと殺される恐怖を知っているとはどういう事なんだろう?俺には分からない。

「そもそも、訓練を受けた暗殺者なら理想的な状況で『必ず殺す』のは当たり前だ。だが、現実はその上手くはいかない。特に相手が隙のない手練の時はな」

渚が息を呑んだ。

「暗殺者に有利な状況を決して作らず、逆にこちらの存在を探知されてしまい、暗殺から戦闘へ引き摺り込まれる。戦闘に手こずれば増援が来る。一刻も早く殺さねば——そんな時、『必ず殺せる理想的な状況を造り出す』それがこの技だ」

「戦闘から暗殺へ引きずり戻す為の技って事ですか？」

「その通り。戦闘の常識から外れる事で場を再び暗殺に引き戻す。それがこの『必ず殺す為の技』だ。2人とも、俺が今やった動きを真似してみる、ノーモーションで、最速で、最も遠くで、最大の音量が鳴るように、だ」

ロヴロさんの指示に従う様に渚が試してみたが、上手くいかなかったらしく、先ほどのロヴロさんのパァン！と銃声染みた音ではなく、ビチツと下手な音が鳴った。

俺も真似してみるが、一度では上手くいかず、渚と似た様な音が鳴って終わってしまった。

「意外に上手く鳴らないだろう？ 日常ではまずやらない動きだからな。だからこそ常識はずれの行動となる。100%鳴るように練習しておけ」

「でもロヴロさん、これって」

「そう……。相撲で言う”猫騙し”だ。相撲の技術とは無関係の筈のこの”音”はしかも大抵が不完全な鳴り方であるにも関わらず、敵の意識を一瞬だけ真っ白にして隙を作る。ましてキミらがいるのは殺し合いの場。負けたら即死の恐怖と緊張は相撲の比ではない」

なるほど。だからこそその殺される恐怖なのか。

「極限になった神経を音の爆弾で破壊する」

「けど、手を叩くには武器を捨てないと」

「だからだよ」

「え？ どう言う事、乃咲？」

「武器を捨てるのは戦闘に置いてあり得ない行為だ。だから相手は武器を捨てるって行為に虚を突かれる。そこもこの技の狙い目だ。そうですね、ロヴロさん」

「その通り。手練なら相手の挙動の一つ一つを観察している。だからこそ虚を突かれるのだ」

それが相手が手練であることの必要性か。確かに理にかなってる。猫騙しも武器を捨てるって行為も、手練であるほどにあり得ない判断だと思うだろう。何せ、必殺をかまさないやいけない場面で攻撃を捨てた様に見える選択肢だからだ。

「手の叩き方は体の中心で片手を真っ直ぐ敵に向け、その腹にもう片方の手をピッタリと当て、音の塊を発射する感覚だ。タイミングはナイフの間合いの僅か外、接近するほど敵の意識はナイフに向かう。その意識ごとナイフを宙に置く様に捨て、手を叩き、2本目の武器で敵を仕留めるのだ。確実にな」

ロヴロさんの言った様に手を叩くと確かに音が変わった。ベチっ、でもバチっでもない。パアン！と甲高い銃声の様な音に。

「ふむ。やはり筋がいい。あとはノーモーションで最速を心がける事だ」

「……はい」

ロヴロさんから教わった必殺技。

しかし、この技、使い所はあるんだろうか？ いざという時に使えた方が確かにいいんだろうけど俺たちの標的は殺せんせーだ。あのタコこの技が通じるとはあんまり考えずらいなあ。

この日、俺たちは暗殺者から技を学んだ。

こうして俺たちは暗殺旅行を迎えることになる。

大波乱を呼ぶ南の島の暗殺旅行を。

42話 島の時間

ロヴロさんによる暗殺作戦の監督から1週間。俺たちはエックスデーを迎えていた。不安や緊張、同じくらいの楽しみを抱えて眠れなかった夜を越え、遂に迎えた暗殺旅行当日。今回の暗殺が上手くないなかつたらA組に行く事にした俺はと言うと……。

「うっぷ……」

船酔いしていた。おかしいな。乗り物酔いとかする方ではなかったのだけど、今日に限っては中々に調子が悪い。

定期的な吐き気がする程度には具合が悪い。本当に妙だ。小学校の修学旅行で乗った船は特に酔わずに済んだのに。

「圭ちゃん、大丈夫？」

「あはは、へーき、へーき、うっぷ……」

背中を摩ってくれている倉橋さんに元氣アピールしようとしたが、失敗。情けなくて思わずため息を吐きそうになった時、俺と同じ横でグロッキーになっている殺せんせーと目が合った。

「だ、大丈夫ですか、乃咲くん。普段乗り物酔いしない人が酔うのは体調が悪い時と相場が決まっているものですが……」

「た、確かに最近、目眩が多いような……」

駄目だ。話していると余計に気分が悪くなる。会話を諦めて、景色だけを無心で眺めようと心に誓ったその時、地平線の彼方に何かが見えて来た。

俺と同じものが見えたのか、徐々に大きく見えてくるそれに対して倉橋さんが可愛らしく興奮した様子ではしゃぐ。

「ほら見て、圭ちゃん！島だよー！」

「ああ、島だあ……」

「大丈夫か、圭一。ほら、酔い止め。用務員さんが持ってたんだ」

「サンキュー、磯貝」

磯貝のファインプレーに感謝しながら酔い止めを受け取り、一緒に差し出された水と一緒に飲み下す。しばらくすると酔いは相当マシ

になった。

「にゅやあ……船はやばい。船はマジでやばい……。先生、頭の中身が全部まとめて飛び出そうです……」

「ほ、ほら、見て！殺せんせー、島が大きくなって来たよ！」

天真爛漫な倉橋さんの声が酔いを覚ましてくれる……。

なんだかんだでやつぱり元気な人の力って偉大だと思う。こんだけ酔ってて怠いのに、倉橋さんがいると気分が和らぐ様な気がする。不思議だなあ、人の体つてのは。

「東京から6時間！先生を殺す場所だぜ！」

「ヌルフッフ、そう簡単に殺れるとは思いませんがねえ」

「んなことは一旦、置いておこうぜ！」

「「島だああ!!」」

船で揺られること数時間。拷問の様な時間について終わりを告げ、楽しい楽しい暗殺と遊びの時間がやってくる。

??

??

??

「ようこそ、普久間島リゾートホテルへ。こちらサービスのトロピカルジュースでございます」

「あ、ども」

ホテルのチェックインを済ませるとウェイターが俺たち全員にサービスだとトロピカルジュースをくれた。

せっかくの好意なのでありがたくうけとり、飲み下す。うん。さつきまでの船酔いが嘘みたいに感じるくらい爽やかだ。

「いやー最高!!」

「ほんと、景色全部が鮮やかで明るいな」

「ご満悦な様子の三村と木村。彼らに同意しながらトロピカルジュースを啜る。ちびちびとジュースを飲んでると竹林が話しかけてくる。

「乃咲、答えは出たのかい」

「……今、その話をするか」

「みんな南の島というシチュエーションに夢中で僕らの会話なんて気にしてないさ。それで、どうなんだい？」

竹林が聞いてくる。何を、何の答えなのかは言わずとも分かっていた。俺と彼の話題といえればそれくらいしかない。

……A組に行くか、行かないか。

「俺は行くよ。今日、しつかり殺せんせーを殺してな」

何度も言うがそれが俺の出した答えだ。殺せんせーを殺して、A組に行く。殺せなかったとしても行く。仮に、もしもの話だが、今日殺せなかったのなら、俺はそこまでの暗殺者だったと自分に区切りをつけるつもりだ。

「そうか……。頑張ろう。お互いに」

「ああ……。そうだな」

同じ様な悩みを抱えた竹林と頷き合い、肩を叩き合ってお互いを鼓舞するように立ち上がる。

彼だっと思っている筈だ。この旅行中に殺せれば何の憂いもなくE組を抜けてA組に行く事ができるのだと。

そんな俺たちの葛藤を知る由もない殺せんせーたちは楽しそうな会話をいまだに続けていた。

「ホテルから直行でビーチに行けるんですねえ。様々なレジャー用品も用意してある様です」

「例の暗殺^{アレ}は夕飯の後にやる予定だからさ。まずは遊ぼうぜ！殺せんせー。修学旅行の時みたいに班別で行動してさ」

「ヌルフッフフ、賛成です。よく遊び、よく殺す。それでこそ暗殺教室の夏休みです！」

こうして俺たちは修学旅行の時の班で別行動し、それぞれが各々の役目を果たすことになった。

殺せんせーと遊んでる連中は他の班のメンツに注意が行かない様、それぞれ工夫を凝らして殺せんせーを釘付けにして、それ以外のメンバーは殺せんせーと遊んでる班が彼の注意を引いている間に暗殺のための工作を行う。

俺たち修学旅行一班は殺せんせーと遊ぶ（引き付ける）第一陣を担

うことになったので、楽しみつつ、彼の注意を引く。

俺たちがやるのはハンググライダーだ。

妙なコスプレをした殺せんせーが俺と倉橋さんの乗るハンググライダーに張り付き、空を縦横無尽に駆け回った。

結構激しく動き回っているけど、乗り物酔いはしなかった。恐らく開放的な空と頬を撫でる風のおかげだろう。

「ずりーよ、殺せんせー！」

「動力の性能が違いすぎ！」

「ヌルフフフ、戦闘機の性能は結局のところエンジンの差です」

「そんで誰だよ！そのコスプレ!？」

「堀越二郎です」

「それ中身の方!?!しかもご本人も飛ぶ方じゃなくて作る方！」

「いろいろ違和感あり過ぎ！」

磯貝たちは飛びながらハンドガンを構え、暗殺を交えて遊んでいるが、彼らの攻撃は全然、殺せんせーや俺たちに当たることはなかった。これが普段、殺せんせーが見てる景色なのかと思うと少し感慨深い。攻撃に当たらないってのはこんな感じなんだな。

「あははは！凄く楽しいね、圭ちゃん！」

「うん、風が気持ち良いな」

後ろから俺に捕まって天真爛漫に笑う倉橋さん。彼女に同意しながらあまりに無防備に組みついてくることに気恥ずかしさと心地よさを感じながら俺たちは殺せんせーと遊んだ。

?? ?? ??

そして今度は俺たちが工作を施す側に回る。

殺せんせーは今頃渚達とイルカを見に行っている筈だ。

「俺たちもチャチャッと終わらせちまおうぜ」

「ああ」

俺達は暗殺予定地、水上チャペルに来ていた。

俺たちの作業内容はここのセッティング。最終的にはこのチャペ

ルを破壊して、水圧の檻で囲む作戦だから、少しでも壊しやすくする為には支柱に切れ目を入れておくのだ。

そこに俺は一手間加える。

「乃咲くん。何持ってるの、それ？」

矢田さんが俺が持っていたモノを指差して聞いて来た。

「ワックスだよ。対先生用のね」

「対先生用ワックス？」

木村の怪訝そうな声に返す。

「そう。1学期のうちから烏間先生に聞いておいたんだ。対先生物質を混ぜ込んだワックス作れませんかって」

「効くかなあ？」

「大丈夫だ。似たようなことを前に俺やったら？ほら、菅谷のメヘンディアートの時にさ」

「っ、ああ！砂場のリング？！」

「そう。砂に少し混ぜただけであの効き目だからな。間違いなく効く。それに、暗殺開始はあくまで触手破壊後って思ってるだろうから、その油断を突く」

「なるほどな、んで？それ全面に塗るのか？」

「いや、出入り口から外周を囲む様に塗る。全面に塗ったら殺せんせーがこのフィールドに入らなくなるからな。出入り口で触手破壊して驚かせる程度でいい」

「ふむ。精神攻撃の一環ってわけだ。よっしゃ。んじゃあやりますか！」

「「おうー！」」

このメンバーでこうしてはしゃげるのも最後か。なんて思うと少し寂しくなる。前原とは磯貝がいなくても話す様になったし、木村とも普通に話せる様になった。女子は倉橋さんとは一緒に遊びに行く様になったし、片岡とは冗談を言える様に、岡野や矢田さんとも少し話せるようになって来たところだったのにな。

そんな風に後ろ髪引かれるならA組に行かなきゃ良いのに、なんて俺の心情を知ったやつなら思うかもしれないけど。でも、これが最後

のチャンスかもしれないんだ。親父の期待に応えられる最後のチャンス。

来年には地球がないかもしれないと考えても最後のチャンスかもしれないし、仮に地球が存続したとしても親父の期待に応えなかった俺に2度目の期待を親父が向けてくれるとは限らないから、こっちの意味でも最後のチャンスかもしれないのだ。

これまでの人生、親父に認められる為に頑張ってきた。烏間先生や殺せんせーに認められたいと思う様になったのだから、大元を正せば父親が原因なんだ。

俺と言う人間の本懐を遂げる最後かもしれないチャンス。そう考えた時、俺は行くしかないと思った。

だから決めた。A組に行くよ。

殺せても、殺せなくても。叶うのならこの普久間島で殺せんせーをきっちり殺してE組を堂々と抜ける。

それが今の俺の最大の願いだ。

?? ?? ??

「いやあ、遊んだ遊んだ。お陰で真っ黒に焼けました」

「黒過ぎだろ!」

日が暮れる頃にはすっかり作業も終わった俺達は殺せんせーの変貌ぶりにツツコミを入れていた。

今朝までいつも通りの真っ黄色だったのに、今となっては炭の様に真っ黒になってしまった殺せんせー。もはや日焼けというレベルと概念をどっかに忘れ去っている様な気がするが、仕方ない。世の中にはツツコんでも報われないこともあるのだ。

「歯まで黒く焼けやがって……」

「もう表情が読み取れないよ……」

木村と岡野に頷くクラスメイトたち。殺せんせーの日焼けによる微妙な空気を変える様に我らの委員長が声を上げた。

「じゃ、殺せんせー。メシの後、暗殺なんで。まずはレストラン行きま

しよう」

「はいー！」

先導する磯貝について行く殺せんせー。

その後ろ姿を見送りながら前原と寺坂が苦笑と呆れ、愚痴混じりに
呟くの聞いた。

「どんだけ満喫してるんだ、あのタコ」

「こちとら楽しむフリして準備するの大変だったのによお」

「ま、今日殺せりゃさ、明日は普通に楽しめるじゃん」

「まーな。今回くらい気合い入れて殺るとすつか」

吉田と村松が2人に続いて歩き出す。

「……………」

「ビッチ先生、どうかしましたか？」

「……………何でもないわよ」

無言で俺たちを見ていたビッチ先生に首を傾げてみるが、何でもな
いと突っぱねられてしまう。

なんか含みのある沈黙だったから絶対何かあると思ったんだけど、
話す気がないらしく、ビッチ先生は閉口した。

「圭ちゃん？早く行こうよ？」

「あ、うん。今行くよ」

待つててくれたらしい倉橋さんと並んでE組で貸し切った船上レ
ストランに入店する。来た時と違い、波は穏やかなお陰か、乗ってす
ぐに船酔いしそうな感じはしなかった。

空いてる席に案内され、彼女と正面で向き合う様に座る。俺たちが
座ったのを確認すると磯貝がゆっくりと語り出した。

「夕飯はこの貸し切り船上レストランで夜の海を堪能しながら食べま
しょう」

「な、なるほどねえ。まずはたつぷり船に酔わせて戦力を削ごうとい
う訳ですか」

「……………黒い。」

「当然です。これも暗殺の基本ですから」

「実に正しい。ですが、そう簡単に行くでしょうか？暗殺を前に気合

いの乗った先生にとって船酔いなど恐るるに——」
だから黒い。

「「黒いわ!!」」

クラスほぼ全員で突っ込むレベルで殺せんせーが黒すぎる。歯まで黒く焼けてるせいで殺せんせーを見た時、どっちが正面なのかすら分からない程だ。

「そ、そんなに黒いですか?」

「表情どころか前も後ろも分からないわ」

「ややこしいからなんとかしてよそれ」

「ヌルフフフ、お忘れですか?皆さん。先生には脱皮があることを……!黒い皮を脱ぎ捨てれば……ほら、元通り」

そう言つて殺せんせーは脱皮した。

月に一度だけの奥の手。もう一度言うぞ、月に一度の奥の手である。それをわざわざ皮の色を戻す為だけに使うか。

「あ、月一回の脱皮だ」

俺と同じことを思つたらしい不破さんが指摘するとふっふっふつと殺せんせーは得意げに語つた。

「こんな使い方もあるんですよ。本来は“ヤバい時の奥の手”ですが……あつ」

話していて殺せんせーも気付いたらしい。頭上に巨大な『?!』を浮かべて、しまった……!みたいな表情をしていた。

「バツカでー。暗殺前に自分の戦力減らしてやんの」

「どうしてこんなドジを今だに殺せないんだろう」

めちやめちや同意。

殺せんせー、こんなにドジで拍子抜けするほどアホになることが多いのになんで隙を突いて殺せないんだろうなあ。

などと思いつつ進める食事。殺せんせーはバクバクと食い進め、俺達はゆつくりと食事を楽しむ。

食事が終わり、船が棧橋に戻るまでに殺せんせーは結局強かに船酔いし、ベロンベロンになりながら船を降りた。

「さて、殺せんせー。晩飯のあとはいよいよだ」

「会場はこちらですぜ」

前原と菅谷が先導する。先導する先は俺たちが昼間に細工した水上チャペル。

「ここなら、逃げ場はありませんよね」

ニヤリと笑う磯貝。ハツとする殺せんせー。しかし彼はすぐさま余裕顔になり、臨むところだと勇足でチャペルに入ろうとするが、チャペルの入り口に脚をつけた瞬間――。

「にゅやあ!?!」

前足三本が弾け飛んだ。俺の小細工は成功したらしい。

「これは……対先生物質を混ぜん込んだワックス……?!この手法、君ですね、乃咲くん」

「ええ。なにも触手破壊権を使うまで攻撃しないとは一言も言ってますんから。問題ないですよね?」

「ええ。結構。ですが、これではチャペルに入れませんよ?」

「ご心配なく。チャペルの壁際にしかワックスがけてませんから」

俺の言葉にそーつと殺せんせーは脚を伸ばし、ワックスエリアを越えた辺りで脚を着けると安心した様にそのまま移動してチャペルの中心に向かった。

「さ、席に着けよ、殺せんせー。楽しい暗殺」

「まずは映画鑑賞から始めようぜ」

「まずは三村が編集した動画を見て楽しんで貰い、そのあとでテストに勝った8人が触手を破壊して、それを合図に一斉に暗殺を始める。それでいいですよね?殺せんせー」

「ヌルフフフ。上等です」

「セツティングごころーさん。三村」

「頑張ったぜ。みんなが飯食ってる間も編集さ」

三村を労う菅谷。そんな彼らを尻目に殺せんせーは辺りを見回していた。

「この小屋は周囲を海で囲まれている。窓や壁には対先生物質を仕込んでいる可能性もある。脱出はリスクが高い。小屋の中で避け切るしかないようですねえ」

何かを思案している殺せんせー。そんな彼に渚が近づく。

「殺せんせー。まずはボディチェックを」

「ヌルフフフ、入念ですねえ」

「いくら周囲が水で囲まれているとは言え、あの水着を持っていたら逃げられるしね」

「そんな野暮はしませんよ」

ペタペタと殺せんせーに触れてボディチェックする渚。

見ていて思う。恐ろしいことにうちの担任はあんなゼロ距離からの攻撃でも躲して見せるのだからな、と。

でも同時に思う。この作戦ならば、と。

渚の入念なボディチェックのあと、殺せんせーはようやく席に着く。

「準備は良いですか？全力の暗殺を期待してます。君達の知恵と工夫と本気の努力。それを見るのが先生の何よりの楽しみですから。遠慮は無用！ドンと来なさい」

その言葉を皮切りに俺たちの作戦は始まった。

43話 決行の時間

「言われなくても。上映始めるぜ。殺せんせー」

岡島が宣言すると同時に上映が始まる。殺せんせーを殺す俺たちの最大の作戦の序曲が。

序曲というには実にアップテンポなメロデーが流れ出す。三村のナレーションを伴って液晶に映し出される、『3年E組が送る、とある教師の生息』というタイトルコール。この時点で三村の編集力とセンスに脱帽だ。

殺せんせーの概要に軽く触れたナレーションと普段の授業風景。撮影は岡島らしいが、よく撮れていると思う。岡島は写真のセンスがいいよな、ほんとに。

「後ろの暗がりできりに人が出入りしている。位置と人数を明確にしない為でしょう。ですが甘い。2人の匂いがここにはないことは把握済みです」

殺せんせーが何やら思索している。ゾーンに入ると殺せんせーが動画を見ながらも何か別のことに集中しているのが手に取るように分かった。不思議だな。こんなことなかったのに。

「(四方が海のこの小島ですが、ホテルに続く一方向だけは近くが陸だ。そちらの方角の窓の外からE組きつてのスナイパー、速水さんと千葉くんの匂いがしますねえ)」

一体、何を考えてるんだらう。

何だか、ロヴロさんの特訓以降、人の意識の機微……視線や瞬き、呼吸、体の動きに目を向ける様にしたことでゾーン中は他人の意識の波長のようなものを感じ取れる様になったが、なにを考えてるかまでは分からない。

殺せんせーは今、何を思っただ動画を見ているのだらう？

「——しかし、この動画はよく出来ている。編集とナレーターは三村くんですか。カット割りといい、選曲といい、良いセンス。つつい引き込まれて……」

あ、意識が動画に完全集中した。

『……まずはご覧頂こう。我らの担任の恥ずべき姿を』
「にゅっ!？」

画面にはいつぞや岡島のスマホで見た、エロ本の上に鎮座するエロタコの様子がはつきりと映し出されていた。

『買収は、失敗した』

「し、失敗したああああああ!!？」

殺せんせーの絶叫がコテージ内に響き渡る。

「ちよっ、どうなつとりますのん、乃咲はん!? 約束とごつつう違いますけん!？」

「いろんなところの訛りが渋滞してて何言ってるか分かんねーよ、殺せんせー」

「だあって! ハーゲンダッツまで奢らせたくせに約束破るとかどういう了見なんですかあ!？」

「ハーゲンダッツ奢ってくれたら黙ります、って言ったの俺1人ですからね。他のみんなには『みんなには内緒ですよ』って一方的にアイズ配ってただけじゃないスか。俺は約束守りましたよ」

「にゅやああああ!!？」

殺せんせーが恥ずかしさのあまり、赤面しながら発狂した。頭を全力で振り、現実から逃れようとする姿は哀愁を誘う。本当にめっちゃくちゃに愉快な人だなあ。

『お分かりいただけただろうか。最近のマイブームは熟女OL。全てこのエロタコが1人で集めたエロ本である』

「違っ!?! とんでもない捏造入ってるんですけどお!?! どうなってるんですか、乃咲くん!？」

「いや、そこは編集の三村に聞きましようよ」

『お次はコレだ。女子限定スイーツバイキングに並ぶ巨影』

場面は切り替わり、長蛇の列を作る女子限定スイーツバイキングとやらの混ざり込む身長2m越えの巨影が映し出された。

『誰だろう——奴である』

『殺子よ』

女装した殺せんせー。しかし悲しいかな、その巨体で女性と言い張るのは無理がある。人間だと言い張ること自体無謀なレベルだと思うわけですよ、ええ。

『バレないはずがない。女性以前に人間でないとバレなかったこと自体が奇跡である』

三村さんのおっしゃる通りである。

すげーな三村。俺の言いたいこと全部ナレーションで言ってくれ。お陰でツッコミ入れる必要がなくて楽だ。

『ちよつとーどこ触ってるのよ!』

警備員に連行される時にさり気なくおねえ言葉が出る辺り、殺せんせー常習犯だな、これは。

「クックック、エロ本に女装に恥ずかしくないの?このド変態」

狭間さんの容赦ない一言が殺せんせーの心を抉った。

こう言う時の狭間さんは文字通り輝いてる。これは褒めているのか微妙なラインだが、人の弱みを突くことに関して狭間さんの右に出る者はいないだろう。少なくともこのE組の中では。

『給料日前の奴の姿である』

岡島、殺せんせーのストーカーでもしてるのか。なんでこんな多種多様な殺せんせーの異常行動を録画してるんだ、アイツ。

『分身でティッシュ配りに行列を作り、そんなに取ってどうすんものと思いきや……何と唐揚げにして食べ出したではないか』

「……マジかよ」

「乃咲くん!?そんなドン引きした声音で言わないで下さい!せ、先生だって生きるのに必死なんです!」

『教師……いや、生物としての尊厳はあるのだろうか』

「そしていちいち秀逸なナレーションですね!三村くん!」

『こんな物では終わらない。この教師の恥ずかしい姿を1時間たっぶりお見せしよう』

「あと1時間も!!!」

殺せんせーはたっぶり1時間、辱められた。

??

?? ??

1時間後……。

「……死んだ。先生死にしましたあ……。あんなの知られてもう生きていけません」

溶ける様にぐだあつとする殺せんせー。

無理もない。途中から殺せんせーの奇行にドン引きすることをやめ、あんなことやこんな場面まで岡島に盗撮されていた殺せんせーに同情してしまった程だ。

『うわっ、マジで?』が『うわっ、可哀想』に変わった瞬間の切なさを俺は今後一生忘れることはないだろう。

これから殺してやるから成仏してくれ、殺せんせー。

『さて、秘蔵映像にお付き合い頂いたが、何かお気づきでないだろうか? 殺せんせー?』

完の文字が映し出されたモニターから流れる三村の戯けた声。それと同時に映像のBGMは止まり、代わりに波で海面が揺れる音がチャペル内に響き渡る。

俺たちの足下には満潮で迫り上がってきた海面。波の音を三村の動画のBGMが掻き消してくれていたのだ。

お陰様で殺せんせーの触手は海水を吸いパンパンに膨れ上がっていた。それに気づかなかったのは動画で羞恥心に押し潰されていたからだろう。この暗殺が成功したのならMVPは殺せんせーを釘付けにした動画を使った三村と素材を提供した岡島になるだろうな。間違いなく。

などと思いつながら俺たちは徐に立ち上がる。

「俺らまだ何もしてねえぜ。誰かが小屋の支柱を短くでもしたんだろ」

「船に酔って、触手壊されて、恥ずかしい思いして、水吸って、だいぶ動きが鈍ってきたよねえ?」

中村さんの言葉を合図に全員でハンドガンを構える。

「さて、本番だ。約束だ、避けるなよ?」

そこまで言った寺坂から視線を投げられる。

その意図を感じ取った俺は号令をかけた。

「作戦——開始！」

俺の一言で学年一位を取った全員が触手を破壊する。合計八本の触手を失った殺せんせーは渋い顔をしてジツと耐えたその直後、チャペルがミシミシと音を立てて四散した。

天井すら四散し、頭上に広がるのは満天の星空。そんな星空を覆い隠す様に水中から無数の影が水柱を伴って飛び出す。

その正体は水圧で飛ぶフライボードに乗ったクラスメイトたち。ついでに言えばチャペルが四散したのもクラスメイトたちが水上バイクでコテージの壁や柱を引っ張って壊したからだ。

「これは水圧の檻!？」

「言い得て妙ですねえ! 律!」

『はい、射撃を開始します。照準、殺せんせーの周囲全周1m』

律に指示を出すと海中から律の本体である固定砲台が飛び出してくる。砲門を展開し、無数の射角をもつて殺せんせーへの弾幕を張る彼女。それに倣って俺たちも射撃を開始する。

何度も行われてきた朝のホームルームでの一斉射撃で殺せんせーは自分を狙う弾丸には敏感だが、それ以外の射線にはどうにも鈍い点があると大分前に気が付いた。だから俺たちはそこを突く。

あえて殺せんせー本体は狙わず、殺せんせーの周囲を囲い込む弾幕を形成することで殺せんせーの感覚を惑わせ、逃げ場を無くす。

そして止めの2人……!

「今だ、千葉、速水さん!」

「っ!」

殺せんせーがガバツと陸に続く橋を見つめるが、その方向に2人はいない。その方向にあるのは2人の匂いが染み込んだ服や普段使っている銃だけ。本物の2人は……水中だ。

俺の呼びかけに飛び出した2人。律が中継してくれていたのだから。飛び出した2人は最後の射撃を行う。

小屋の中では陸を警戒させ、フィールドを水の檻へ変える。それに

よってチャペルが有った状態とは全く別の狙撃点を作り出す。2人の匂いや発砲音は水が消してくれる。

「(貫った……!!)」

2人の最後の射撃が殺せんせーに襲い掛かる。

「よくぞ……(ん)まで……！」

2人の弾丸は殺せんせーの顔に吸い込まれる様に飛んで行き……。次の瞬間、殺せんせーの全身が閃光と共に弾け飛んだ。

「ぐわっ!？」

俺たちはとんでもない爆風に数メートルほど吹き飛ばされて海面に落ちる。身体が浮くほどの衝撃なんて初めて受けた。思った以上に滑る様に吹き飛ばされたよな。驚いた。

「や、殺ったのか!？」

誰かがフラグの様なことを言うが、無理もない。いまの暗殺には手応えがあった。思わず俺も叫びたくなるくらいに。

今までの暗殺とは違う。明らかかな手応え。殺せんせーが爆散して、あとには何も残っていない。

「油断するな! 奴には再生能力がある! 片岡さんが中心になって水面を見張れ!」

「っはい!」

対先生弾と水圧の檻。この二つの監獄から逃れられるなんて考えられない。逃げ場などどこにもなかったはずだ。

そう思いながら監視する水面。しばらくするとソレは浮いて来た。

「あ、あれ!」

倉橋さんが声を出す。

その指差す先にはブクブクと泡立つ水面があった。

ハンドガンを水面に向ける。

次の瞬間、俺たちが見たのは殺せんせーの死体……ではなく。

「ふう……」

殺せんせーの顔が入ったオレンジと透明の変な球体だった。

「何だあれ……」

「よくぞ聞いてくれました、乃咲くん。これぞ先生の奥の手中の奥の

手！完全防御形態!!」

「完全防御形態い!?!」

また急に突飛なものが飛び出してきたものだ。
思わず声を荒げてしまう。

「外側の透明な部分は高密度に凝縮されたエネルギーの結晶体です。肉体を思いつきり小さく縮こめ、その分、余分になったエネルギーで肉体の周囲をガッチリ固める。この形態になった先生は無敵！水も対先生物質もあらゆる攻撃を結晶の壁が弾き返します」

「チート過ぎねえ、その形態」

「そうだよ。そんな形態でずっといたら殺せないじゃん」

矢田さんの不安そうな顔に殺せんせーが笑いながら結晶の中で口を開く。

「ところがそう上手くはいきません。このエネルギー結晶は24時間ほどで自然消滅します。その瞬間に先生は肉体を膨らませ、エネルギーを吸収して元に戻るわけです。裏を返せば結晶が消滅するまでの24時間、先生は身動きが一切取れません」

「……!」

鳥間先生が息を呑むのが分かった。

そりゃあそうだ。その24時間の間に殺せんせーを対先生物質のプールが何かに埋めてしまえば殺せんせーを殺せるかもしれない。

「これは様々なリスクを伴います。最も恐れるのは動けない間に高速ロケットに積み込まれ、そのまま宇宙に捨てられることですが……その点はぬかりなく調べ済みです。24時間以内にそれが出来るロケットは地球上のどこにもありはしない」

「……やられた」

液化化くらいは視野に入れていたが、その先があるとは思いませんでした。ここにきて奥の手を出して、ましてその弱点まで計算済みだとか完全に予想の範疇を超えていた。

完敗だ。俺たちは失敗するべくして失敗したのだ。

「チッ、なにが無敵だよ。なんとかかすりゃあ壊せるだろ、こんなもん」
「ヌルフッフ、無駄ですな。核爆弾でも傷一つ付きませんよ」

キレる寺坂が結晶をガシガシとレンチで殴りまくるが、先生の言った通り、傷一つ付きやしない。

「そっかあ、無敵なら打つ手ないよねえ」

ニヤニヤしながら殺せんせーを受け取ったカルマ。彼はそのままみんなの貴重品を預かっていた茅野からスマホを受け取るとエロ本に鎮座するエロタコの姿を表示して殺せんせーの前にスマホを置いた。

「にゅやああああああ——っ!!?!」

完全に弄り放題な殺せんせーをカルマが見逃すはずが無く。

「やめてー！手がないから顔も覆えないんです！」

「ごめんごめん、んじやあ、スマホを至近距離で固定してっど。とりあえずその辺で拾ったウミウシ引っ付けておくね」

「ふんにやああああああ——っ!!」

「本当に弄られたい放題だな、殺せんせー」

「乃咲くん!?そんな風に眺めてないで助けてください!」

「あと誰か、不潔なオッサン連れて来て。これパンツの中にねじ込むから」

「寺坂でもいいんじゃない。尻にでも挿し込んでおけよ」

「死ぬわ！」

「誰か助けてえ!」

暗殺失敗した憂さ晴らしに殺せんせーを弄っていると、烏間先生が俺たちから殺せんせーを取り上げた。

「とりあえず解散だ。こいつの処分に關しては上層部と検討する」

「ヌルフッフフ、無駄ですよ、烏間先生。おおよそ、対先生物質のプールにでも閉じ込めるつもりでしょうが、その場合はさっきの様に一部のエネルギーを爆破して周りごと吹き飛ばしてしまいますから」

「……!!」

烏間先生も俺と同じことを考えたらしいが、その作戦すら先手を打つ様に殺せんせーから無駄だと言いつ放たれてしまった。

「ですが、皆さんは誇って良い。世界中の軍隊ですらも先生をこころまで追い詰めることができなかつた。ひとえに皆さんの計画の素晴ら

しぎの賜物です」

殺せんせーはいつもの様に俺たちを褒めてくれたけど、渾身の刃を外した落胆はかなり大きかった。

加えて、もう、殺せんせーをこの旅行中に殺すことが絶望的になってしまったことで俺は殺せんせーを殺すことができないままにA組に行くことが確定したようなものだ。

……ずるい。

一応、失敗した時の作戦も練っていた。例えば殺せんせーに2人の狙撃が避けられた時。その時はゾーンで殺せんせーの動きを見切り、俺が殺せんせーの動きを限定させること他の面子が順繰りに止めをさす。そんな第二の刃も持っておいたのに、殺せんせーが取ったのは第二の刃も弾き返すチート形態。

あんだだけ第二の刃の大切さを説いていたくせにそれすら届かない形態を持っているとかそんなのズルだろ。

幼子の様に地団駄を踏んで駄々を捏ねなくなる気持ちを抑えて俺たちは言われた通り、解散した。各々が渾身の刃を外した落胆を隠しきれない中でホテルへの帰路につく。俺たちの足取りは重い。

「律、記録は取れてるか」

『はい、可能な限りハイスピードカメラで今回の暗殺の一部始終を録画してます』

「俺さ、撃った瞬間分かっちゃったよ。『ミスった。この弾じゃ殺せない』って」

千葉と速水さんが落ち込んだ様子で律と反省会している。

『……断定は出来ません。あの形態に移行するまでにかかる正確な時間が不明瞭なので。ですが、千葉くんの射撃があと0.5秒速いか、速水さんの位置が標的にあと30cmほど近ければ殺せていた可能性は50%ほど存在します』

「自信はあったんだ。あそこより不安定な足場で練習して来たし、リハーサルでも外さなかった。けど、いぎ、あの瞬間は指先が硬直して視界も狭まった」

「……同じく」

「絶対に外せないという重圧と『ごこしかない』って瞬間。視界が歪んだよ」

「……うん。まさかこんなに練習と違うとはね」

トボトボと歩く2人を見送る。

こうして俺たちの一夏の暗殺は幕を下ろした。

?? ?? ??

「しっかし疲れたわ……」

「自室帰って休もうか……もう何をやる気力も出ない……」

すっきり燃え尽き症候群気味な俺たち。なんだか気怠い。最近ずつと感じていた気怠さよりもずつと気怠い感覚。

本当に異様に身体が重い。気怠い。なんかやる気が全然出てこない。やる気というか活力というか、生命力というか。

「ンだよ、テメーら。1回外したくらいでダレやがって。もー殺るところと殺ったんだから明日一日遊べるだろうが」

寺坂の言葉が心強いが何だか妙だ。心底身体が怠い。

「け、圭ちゃん。ごめん、肩、貸してくれないかな」

「倉橋さん……う？」

正面に座っていた倉橋さんがふらつきながら立ち上がり、そしてバランスを崩した。仰向けに倒れそうになった彼女。

思わずゾーンに入り、殆ど止まっている様に見える世界を空気が体にまとわりつくのを感じながら辛うじて移動し、倒れそうになった彼女の後頭部に腕を差し込む形で先に倒れ込み頭を打たせないように下敷きになる。

「つでえ……!?!大丈夫か、倉橋さん!?!」

「うん……ありがと……」

体を起こし、倉橋さんを抱え上げて、顔を見るが顔は真っ赤だ。しかし、その顔が照れによって染まっていることではないのは鈍い俺にも流石に分かった。

「ちよつとごめん」

一言だけ断つて額に手を当てると——熱い。異常な程に熱いし、倉橋さんの呼吸のリズムも一定ではない。首筋に手を当てて脈を測るが、脈も乱れてる。端的に言えばものすつごく具合が悪そうだ。

「大丈夫か……?」

今度は別の意味で聞く。頭を打っていないか、ではなく、体調は大丈夫か?と。帰って来た答えは——。

「うーん……あはは、ちよつとキツイかも」

弱々しい一言。天真爛漫な倉橋さんにしては珍しいはつきりした弱音。なんだ?さつきまであんなに元気そうだったのに。

そう言えば俺も身体が怠いし……。なんて思いながら周りを見ると、周囲は死屍累々というか、倉橋さんの様な症状でクラスの半分くらい倒れていた。

「なんだ?どうなってる?」

思わず呟くと烏間先生が慌てた様子でフロントに駆け寄っていた。

「フロント!!この島の病院はどこだ!」

「え……いえ、なにぶん、小さな島なものですから。小さな診療所はありますが、当直医は夜になると別の島に帰ってしまう。船は明日の10時にならないと」

「くっ……!」

烏間先生が歯噛みすると同時に烏間先生のポケットの中のスマホが震え出した。着メロが鳴る中で、少し躊躇いながら電話に出る先生。

電話に出た烏間先生がみるみるうちに不審そうで同時に警戒した顔になってゆく。倉橋さんの介抱をしながら内容が気になり歯噛みしていると俺のスマホが震える。

スマホを出すと律が映っていた。

『烏間先生と何者かの会話を中継しますか?』

「……」

烏間先生にも聞こえていたらしい。目配せすると頷いてくれたので、律に頼んで中継をして貰うことにした。

「何者だ。まさか、これはお前の仕業なのか?」

『ククク、最近の先生は察しがいいな』

変声機を使った明らかな加工音声。しかし、今の短い会話からコレは電話の奥の人物……。仮に黒幕と呼ぶべき者の仕業なんだろう。それははつきりと分かった。

『人工的に作り出したウィルスだ。感染力はやや低いが一度感染したら最後。潜伏期間や初期症状に個人差はあれ、1週間もすれば全身の細胞がグズグスになって死に至る』

……まじかよ。もし、その話が本当ならこの話は倉橋さんの近くで聞くべきでは無かった。迂闊だった。

『治療薬も一種類のみのオリジナルだね。あいにくこちらにしか手持ちがない。渡すのが面倒だから直接取りに来てくれないか？山頂にホテルが見えるだろう？手土産はその袋の賞金首だ』

俺たちはなすすべなく烏間先生と共に山頂の方にあるホテルを見上た。

44話 伏魔の時間

『治療薬も一種類のみのオリジナルだね。あいにくこちらにしか手持ちがない。渡すのが面倒だから直接取りに来てくれないか？山頂にホテルが見えるだろう？手土産はその袋の賞金首だ』

”手土産はその袋の賞金首”。この情報からわかるのは二つ。

一つ、犯人はどこかで俺たちの状況を見ていること。殺せんせーが袋に入っている現状を把握していることから判る。

二つ、犯人は殺せんせーのことを知っている何者かであること。でなければ賞金首なんて単語は出てこないだろうからな。

何が起こってるのか理解できないままに黒幕と烏間先生の電話は進んだ。

『その様子じゃ、クラスの半数はウイルスに感染したようだな。フーフ、結構結構』

えぞく倉橋さんの背中を摩り、監視カメラを睨み付ける。黒幕の言葉的に奴は今、この状況を見ている。

そして、見ている場所はあの監視カメラだろう。というか、それ以外に考えられない。

「もう一度聞く、お前は——」

『俺が何者なのかなどどうでも良い。賞金百億を狙っているのはガキ共だけじゃないってことさ。ああ、それから言っておくが、治療薬はスイッチ一つで爆破できる。我々の機嫌を損ねれば感染者は助からない』

「……念入りだな」

『そのタコが動ける状態を想定しての計画だからな。動けないのならなおさらこちらの思い通りだ。山頂の“伏真島殿上ホテル”の最上階まで1時間以内にその賞金首を持って来い』

1時間以内か。随分と悠長なことだ。

『だが先生よ。お前は腕が立つそうだから危険だな。そうだな……。動ける生徒の中で最も背の低い男女2人に持って来させろ。フロン

トには話を通してある。素直に来れば賞金首と薬の交換はすぐに済む。だが、外部と連絡を取ったり、1時間を少しでも遅れたりすれば治療薬は即座に破壊する』

今動ける中で一番身長が低い男女と言えば渚と茅野だ。

何故だ？なぜ、黒幕はわざわざ2人を指名する？なにか思惑があるような気がしてならない。それに、烏間先生が強いことを知っていることが更に違和感を呼ぶ。

『礼を言うよ、よくぞソイツを行動不能まで追い詰めてくれた。天は我々の味方のようだ』

プツ、ツツ、ツツ、と電話が切れた。同時に動揺と果てしない憤りを隠し切れない烏間先生が完全防御形態の殺せんせーを怒りに任せて机に叩き付ける。

机が割れんばかりの轟音が響き、一切の攻撃を通さないという完全防御形態の殺せんせーからミシミシと軋む音が響いている。

「……酷い。誰なんですか、こんなことする奴は！」

「……」

無事に動けるらしい矢田さんも怒り心頭といった様子で烏間先生に問い掛けるが、彼は答えに困った様子で俯いてしまった。答えが出ない以上、下手に不安を煽るわけにもいかず、下手な答えを告げるわけにもいかないのだろう。

クラスメイトたちに動揺が走る中で烏間先生の部下が彼に慌てた様子で駆け寄り、声を荒げた。

「烏間さん。案の定ダメです。政府としてホテルに問い合わせても『プライバシー』を繰り返すばかりで埒があきません」

「……やはりか」

「やはり……？」

烏間先生の眩きを拾った殺せんせーが問いかけるように、反復すると烏間先生は静かに語り出した。

ただのリゾート地だと思ってつい数時間前まで普通に楽しんでいたこの普久間島の闇について。

「警視庁の知人から聞いた話だが、この小さなリゾート島『普久間島』

は『伏魔島』と呼ばれ、マークされている。ほとんどのリゾートホテルはまっとうだが、離れた山頂のホテルだけは違う」

鳥間先生の仰々しい言い方に思わず唾を飲み下す。

「南海の孤島という地理も手伝い、国内外のマフィア勢力やそれに繋がりのある財界人らが出入りしていると聞く。私兵たちの嚴重な警備のもと、違法な商談やドラッグパーティーを連夜開いているらしい。政府のお偉いさんともパイプがあり、迂闊に警察も手が出せん」
「そんなヤクザものの舞台見たいな場所が現実にあるとは……」

思わず出た感想がこれだった。

そんなヤクザものの映画みたいな場所があるだなんて思っていないかったから正直、ビビってる。

「ふーん。そんなホテルがこっちに味方する訳ないよね」

「そりやそうだな」

カルマの言葉に同意する。

ホテルは個人情報すら取り扱う。だからある程度のことに関しては『プライバシーが』を免罪符に使える。そこに加えて政府のお偉いさんともパイプがあるのだから、どんな圧力に対してもある程度の抵抗力があると考えて良いだろう。

交渉の席に着くにしろ、それ以外の行動を取るにしろ、情報が少なすぎる。俺たちは圧倒的に不利な状況だ。

それを感じ取ったのか、吉田が憤るような、怯えるような声音で叫んだ。

「どーするんすか!?!このままじゃ、いつぱい死んじゃうー!こっ、殺される為にこの島に来たんじゃねえよ!?!」

「吉田、気持ちは判るが少し落ち着け」

「乃咲っ!?!お前は平気なのかよ、こんな目にあって!?!」

「クラスメイトが死にかけてるんだ。平気な訳ないだろ。でも慌てたって仕方ないだろう?それも症状の出てないお前が。慌てて周りを不安にさせるより、どうするべきかを考えて、周りを励ませ。それが今の俺たちにできる唯一の行動だろ?」

「っ……。そう、だな。辛いのは俺じゃねえ。感染してる連中だもん

な……悪かった」

吉田を落ち着かせると、彼は対症療法の準備をしていた竹林と奥田さんの元へゆき、彼らの手伝いを始めた。

うん。行動力があるのは寺坂組の良いところだよな。

などと思いつつ、俺は俺で内心、動揺しまくっている。

だって目の前で人が倒れるし、鼻血噴き出す奴はいるし、さっきまで元気だった連中が半数近くぶっ倒れるしで、頭の処理能力が現実を追いついてない。

しかし、俺たちの動揺を表に出して感染者たちに心配をかける方が現状では一番良くないと思った。

「けどよお、言うこと聞くのも危険すぎんぜ。1番チビの2人で来いだあ？このチンチクリン共だぞ?!人質増やすようなもんだろ!!」

言いながらドスドスと渚と茅野の頭をこぞく寺坂。

「第一よ、こんなやり方する奴らにムカついてしょうがねえ。人の友達にまで手エだしやがって!」

寺坂は本当に意外と情に熱くて良いやつだ。

「要求なんざ、全シカトだ!今すぐ全員都会の病院に運んで治療を受けさせれば良いだろ!」

短絡的で少し乱暴なのが玉に瑕だがな。

そんな寺坂に正面から意見する男が1人。

「賛成しないな。もし本当に人工的なウイルスなら対応できる抗ウイルス薬はどんな病院にも置いてないよ。いざ皆んなを運んで無駄足にでもなれば患者のリスクを増やすだけだ」

ある意味、鳥間先生以上に冷静に事の対処に当たっている竹林だった。竹林はこの島に病院がないと言われた時点から既に対症療法の準備をしていたからな。こんな時、彼は頼りになる。

きっと実家の病院に勤める家族を見返すために彼なりに勉強してきたであろう知識が今、俺たちを支えてくれている。

「対症療法で応急処置はしておくから早く取引に行った方が良い」

「竹林……」

寺坂もおとなしくなり、皆が考え込む。

竹林の言うことももつともなんだが、寺坂の心配もまた的を射ていると俺は思う。

黒幕の目的は殺せんせーだ。殺せんせーを渡すこと自体は問題ではない。1番問題にするべき点は交渉のために渚と茅野を行かせた後、2人を人質に取られ、拳句に薬も渡さず犯人に逃げられてしまう可能性がゼロではない点だ。

かと言って他に手段があるわけでもない。このまま考えることに時間を使うことが最善策ではないことも確かだ。

さて、どうするべきか。

頭を抱えていると、殺せんせーが口を開いた。

「良い方法がありますよ。病院に逃げるより、大人しく従うよりは」

「良い方法？」

「律さんに頼んだ下調べも終わったようです。元気な人は来て下さい。汚れてもいい格好でね」

殺せんせー、なにをする気だ？

何を考えているのかは分からないが、このまま足踏みしているよりはマシだろう。

「ごめん、倉橋さん。行ってくるね」

「……うん。気を付けてね」

気を付けなきゃ行けないようなことにならなきゃいいが。と思いつつ、倉橋さんから離れ、汚れてもいい格好に着替える。まあ、薄い上着を羽織るだけだが。

「乃咲」

「竹林？」

殺せんせーの元へ行こうとすると竹林に止められる。何事かとおもい、足を止めると彼は徐に語り出した。

「このウィルスはおそらく経口接種させられた可能性がある」

「その根拠は？」

「症状の強さの割に感染力が低すぎる。これだけの症状なら僕らまで感染していてもおかしくはないはずだろう？それに、犯人が交渉用に調査したものなら無関係の人間にまで危害が及ぶような感染経路を

使うとは考え辛い」

「……確かに」

「恐らくは料理か何かに盛られていたと考えるのが自然だ。だからもし、どこかで見た顔が歩いていたら、注意した方がいい」

「そうか。忠告、ありがとな」

経口感染……。しかし妙だ。感染しているメンバーはそれぞれ班が同じだったり、別だつたりと様々だ。

この面子に一気に毒を盛る機会があるとすれば……。俺たち全員が揃って口にしたもの。それが1番可能性がある。

この島に来る前に朝食はそれぞれの家で済ませて来た。んで船の中でお菓子を食べたりしてる奴もいたが、全員ではない。それから島について全員でトロピカルジュースを飲んだ。昼食は班別行動中にいろんな場所で食べた。そして夕食を全員で食べた……。

となると、この時点で1番可能性があるのはトロピカルジュースと夕食だが……。夕食を食わずに映像編集してた岡島と三村も感染してるから夕食は除外できる。

と、なるとトロピカルジュースか。感染経路として1番可能性が高いのは。

問題は何処で盛られたかだ。厨房か、それとも運搬中か。それによつて警戒するべき相手の数が変わってくる……！

……いや、ひとまず考察はここまでにしておこう。それよりも早く殺せんせーの元に行かないと。

俺はみんなに少し遅れて駆け出した。

?? ?? ??

「……」

「……高え」

千葉の言葉に同意する。

俺たちは殺せんせーに言われるがままに移動し、普久間島殿上ホテルが聳え立つ崖の下まで来ていた。

渚と茅野以外もここまで連れて来た時点で殺せんせーの目的は分かった。彼が俺たちにやらせたいいことは。

『あのホテルのコンピュータに侵入して内部の図面を入手しました。警備の配置図も』

なんか律がとんでもないことを言い出す。

律も大概なんでもありになって来たよな。

『正面玄関と敷地一帯には大量の警備が置かれています。フロントを通らずにホテルに入るのはまず不可能。ですが、ただ一箇所、この崖を登った所に通用口があります。まず侵入不可能な地形ゆえに警備も配置されていないようです』

「敵の意のままになりたくないのならば手段は1つ。患者10人と看病に残した2人を除いた動ける生徒全員でここから侵入し、最上階を奇襲して薬を奪い取る！」

「……………!!」

皆が息を呑んだ。しかし、烏間先生は渋る。

「……………危険すぎる。この手慣れた手口、敵は明らかにプロの者だぞ」

「ええ。しかも私は君たちの安全を守ることができない。大人しく私を渡した方が得策かも知れません」

……………考える。考えるが、奪い取るのが最善な気がする。

考えてみたのだ。仮に事態が最悪の状況に進んだ場合を。

最悪なのは取り引きに行った2人を人質に取られること、そして薬を渡して貰えず、犯人に逃げられること。

そして……………2人を殺せんせーと一緒に対先生物質のプールが何かに閉じ込められること。そうなった場合、殺せんせーはなす術がない。完全防御形態が解除されると同時に彼は対先生物質のプールで溶けることになる。

烏間先生に向かって言っていたようにエネルギーの一部を爆破させて脱出を図ろうものなら渚と茅野がタダでは済まない。脱皮前ならまだしも殺せんせーは脱皮している。爆破から2人を守る手段がないから結局、殺せんせーはなす術なく殺される。

これは無数に考えた最悪のパターンの一つに過ぎない。だが、可能

性としてあり得ないものではない。

そんな危険性を孕んだ選択肢を選ぶくらいなら強奪を選ぶ方が遥かに安全な気がする。仮に俺たちの動きがバレたとしても犯人を無力化してしまえさえすればやりようはいくらでもあるのだから。

「どうしますか？ 全ては君たちと指揮官の烏間先生次第です」

「……………」

烏間先生が考え込む。

「それは……………」

「ちよつと」

「……………厳しいだろ」

皆が口々に呟く。それにビッチ先生が同調した。

「そーよ！ 無理に決まってるわ！ 第一にこの崖よ！ この崖！ ホテルに着く前に転落死よ！」

ビッチ先生の気がすることも判る。だが、俺の妄想じみた予想が現実になる可能性がある以上、危険がどうこう言ってられない。そう考えて俺は誰よりも先に崖を登る。

数メートル進んだ所で振り向き、考え込んでる烏間先生と俺の後に続いて登って来たクラスメイトたちを見る。

「烏間先生。ご覧の通り、崖だけなら楽勝です。でも、俺たちは未知の敵との戦闘を想定した訓練はしてませんから、指揮を頼みます。きつと奪いに行くのが最善策です」

「圭一の言う通りです、烏間先生。2人だけを危ない目に遭わせるわけにはいかないし、こんな崖だけなら心配ないです。でも、未知の敵と戦う訓練はしてないから難しいけどしつかり指揮を頼みますよ」

「おお。こんなふざけたマネした奴らにキツチリ落とし前つけてやるぜ、なあ！」

「「おう！！」」

俺の言葉に磯貝、寺坂が続く。

烏間先生もビッチ先生も呆気に取られる中、殺せんせーだけが不敵に笑った。

「見ての通り、彼らはただの学生ではない。あなたの元には15人

……いえ、律さん含め16人の特殊部隊がいるんですよ、烏間先生。さて、どうします？時間はありませんよ？」

殺せんせーの一言で烏間先生も覚悟を決めてくれたようだ。俺たちを静かに見据え、鋭く号令を掛けた。

「注目!!目標、山頂ホテル最上階!隠密潜入から奇襲への連続ミッションだ!ハンドサインや連携については訓練のものをそのまま使う!ヒトキョウいつもと違うのは標的のみ!3分でマップを叩き込め!19時ゴーマル50分作戦開始!!」

「「おう!!」」

こうして俺たちの潜入作戦が始まった。

俺たちはこの作戦で知ることになる。歪に歪んだ殺意の成れの果てを。

45話 潜入の時間

聳え立つ崖を攀じ登る。

「へえー！乃咲、結構身軽じゃん！」

「そっちもな、岡野」

岡野と半ば先行する形で崖を登る。

さつきと登って律のリサーチから逃れた警備がいなかを確認するためにもこんな崖ごときに手こずるわけにはいかない。

「岡野、このまま登り切ろう。登ったら左右に分かれて軽く偵察。警備がこつちに来ないかどうかだ。やれるな？」

「ふん、任せなさい。なんならアンタより早く登ってクリアリングくらい終わらせてやるんだから！」

そう言ってペースを上げる岡野に追従して崖を登る。

俺と岡野が崖を登り終えるのはほぼ同時だった。崖を登り終えると同時にハンドサインで岡野に右側を見に行くように指示して皆が登り終えるまで俺は左を警戒する。

結果、誰かが見にくるようなこともなく、無事に皆が登り終えるまで警備はこの通用口にはやってこなかった。

律のリサーチは信頼性があるものだと証明された。別に疑っていただけではないが、やはり、この目で確認するまで確信が持てないことはあるのだ。許してくれ、律。

皆が集まったのを確認し、俺と岡野も扉の前まで戻る。

ホテルの通用口に仕掛けられているのは電子錠だった。

『この扉の電子ロックは私の命令で開けられます。また、監視カメラも私達を映さないように細工できます。ですが、ホテルの管理システムは多系統に分かれており、全ての設備を私1人で掌握するのは不可能です』

「流石に嚴重だな。律、侵入ルート最終確認だ」

『はい、内部マップを表示します』

律の元気のいい返事と共に俺たちのスマホにこのホテルの図面が

映し出された。こうして改めて凶面を見ると本当に複雑な作りをしている。階段の側に階段が配置されていない。これは侵入した後も移動で時間が掛かりそうだ。

『私たちはエレベーターを使用できません。何故ならフロントが渡す専用のICキーが必要だからです。したがって階段を登るしかないのですが、その階段もバラバラに配置されており……最上階までは長い距離を歩かなければなりません』

律の説明の通りだ。もしかすると移動時間だけでタイムリミットギリギリかもしれないな。

「テレビ局みたいな構造だな」

「ん？どういうこと、千葉くん」

「テロリストに占拠されにくいように複雑な設計になっているらしい」

「こりゃあ、悪い宿泊客が愛用するわけだ」

「……だな」

「……行くぞ。時間がない。状況に応じて指示を出すから見逃すな」

鳥間先生はそう言うのとドアを開けて、見える場所をクリアリング。その後、ハンドサインで着いて来い、と指示が来たので極力足音を立てない様に歩き、鳥間先生の背につづく。

「……律。監視カメラの映像は確認できるか」

『できますよ』

「俺が最後尾を歩くから、俺たちの後ろから誰か来たらスマホをバイブさせて教えてくれ。敵が正面にしか居ないとは限らない」

『はいっ、了解です』

「構いませんか、鳥間先生」

「許可する。律、俺のスマホも頼む。最後尾は任せたぞ、乃咲くん」

「はい」

『お任せください』

鳥間先生からも許可が降りたので、最後尾に回る。

この少ない言葉数で許可が貰えることが、まるで鳥間先生から信頼されている様に思えて嬉しかった。

そんな嬉しさを噛み殺しながら背後を警戒しながら前列に着いて歩くと不意に皆の足が止まる。何事かと思つて見てみると俺たちの眼前にはロビーが広がっていた。

まずいな俺たちの進もうとしている非常階段はすぐそこだが、警備の人数が予想以上に多い。侵入早々にこのホテルに侵入する上での最大の難所がやって来た。

どうする？このままだと全員突破は難しいだろう。数名ならいけるかもしれないが、敵が何人いるか分からない以上、少数精鋭って策は危険だろう。どうしたものか。

全員で考えていると、ビッチ先生がサービドリンクをさりげなく飲んでほろ酔いの様な表情を浮かべる。

「なによ、普通に通ればいいじゃない」

「状況判断もできねえのかよ、ビッチ先生!?!」

「あんだだけの人数にどうやって……」

「だから、普通によ」

菅谷の木村のツツコミが入るが、ビッチ先生はロビーの端の方に設置されたピアノをチラリと盗み見ると、鼻を鳴らし、優雅に歩いて行ってしまった。

「……にゅやり」

「にゅ、にゅやり?」

殺せんせーの妙な笑い方に首を傾げるとほろ酔いを装っているビッチ先生がワイングラス片手にフラフラと歩き、ついには屈強そうな警備の1人とぶつかった。

「あつ、ごめんなさい……! 部屋のお酒で悪酔いしちゃつて」

「あ、お、お気になさらず。お客様」

「来週そこでピアノを弾かせて頂く者よ。早入りして観光してたの」
ビッチ先生の言葉を警備員たちは別段疑うことなく受け入れたらしい。それを感じ取ったのはビッチ先生はニヤリと笑みを浮かべてピアノの椅子に座った。

「酔い覚ましついでにね、ピアノの調律をチェックしておきたいの。ちよつとだけ弾かせて貰つていいかしら?」

フワリとした雰囲気のリッチ先生。そんな雰囲気に当てられたのか、何人も顔が照れの色で染まっていた。

「そ、それじゃあフロントに確認を……」

「いいじゃない？あなた達に聴いて欲しいの……。そして審査して？」

「し、審査？」

「私のことよく審査して、ダメなところがあつたら叱って下さい」

頬を赤らめながら言うリッチ先生。屈強な警備員達はあつという間に骨抜きにされ、リッチ先生に引き止められたやつに関しては若干前屈みになってやがる。

流石にリッチ先生と言うべきか、流石、ハニートラップの達人。男の扱いにかけては天下一品だな。

そんなことを思っているとリッチ先生はすごい勢いでピアノを弾き始める。何処かで聴いたことがある様な曲。

「め、めちやくちや上手え……！」

「幻想即興曲ですねえ。腕前もさることながら、魅せ方が実にお見事。色気の見せ方を熟知した暗殺者が全身を艶やかにつかって音を奏でる、まさに”音色”どんな視線も惹きつけてしまうでしょう」

音色って。ピアノの音と、色気の色をかけているのか。殺せんせー、意外と小賢しいことを言うよな。

「ね、そんな遠くで見えてないでもっと近くで確かめて？」

「お、おお……！」

最後に俺たちのそばに居た警備員を手招きで呼び込んでリッチ先生はそのままハンドサインを使って俺たちに指示を飛ばしてくる。

”20分稼いであげる。行きなさい”

ただ、思わず見惚れそうになった。リッチ先生、やっぱり見かけ通りの人ではないらしい。

……もつと、この人たちから教わりたかったな。

演奏するリッチ先生に後ろ髪引かれながら俺たちは全員で無事に非常階段まで突破することができた。

「ぶはあ……！全員無事にロビー突破！」

「すげえや、ビッチ先生。あの爪でよくやるなあ」

「ああ。ピアノ弾けるなんて一言も」

皆が口々にビッチ先生への感想を呟く中、烏間先生が口を開いた。「普段の彼女から甘く見ないことだ。優れた暗殺者ほど方に通じる。彼女クラスになれば暗殺に役立つ技能ならなんでも身に付けている。君等に会話術を教えているのは世界でも1・2位を争うハニートラップの達人なのだ」

そうだ。普段の子供の様な振る舞いから忘れがちだが、ビッチ先生は本物のプロの暗殺者。俺たちとは経験値が違う。

それを今後は忘れない様にしよう。

「ヌルフッフフ、私が動けなくても全く心配は無さそうですねえ」

殺せんせーの言葉に頷いた俺たちは非常階段を駆け上がり、2階まで上がって来た。そこで烏間先生は俺たちが全員いるのを確認すると俺たちになるべく普段着で来させた理由を語り出す。

「……さて。君達に普段着で来させたのには理由がある。入り口の厳しいチェックを抜けてしまえばそこから先は客のフリができるのだ」

「客う？悪い奴らが泊まる様なホテルなんでしょ？中学生の団体客なんているんスか？」

その理由に菅谷が突っ掛かるが、そこに関しては俺も同じ疑問を抱いていた。こんな高級ホテルに中学生がそううじゃうじゃしていると考え辛いが……。

そう思っていると烏間先生の口から意外でもあり、そして同時に納得してしまいそうになる理由が飛び出して来た。

「聴いた限り結構いる。芸能人や金持ち連中のボンボン達だ。王様の様に甘やかされて育った彼らはあどけない顔のうちから悪い遊びに手を染める」

「すげえ、なんか嫌な金持ちのイメージ通り」

「そう、だから君達もそんな輩になったつもりで世の中を舐めてる感じで歩いて見ましよう」

殺せんせーのその一言で皆が途端に舐め腐った態度を取り始めた。

寺坂と吉田は明らかに周りを見下した様な態度で歩き、菅谷は何に見立てているのか丸めた紙を濁った瞳で口に運び、渚は不敵に笑っていた。

「すげえなコイツら。順応性高すぎるだろ。」

「そうそう、その調子!!」

満足そうな声音の殺せんせーは渚の手の中で顔を緑のしましまに染めていた。

「その調子……か？あと、お前までナメるな」

すかさず烏間先生からのツツコミが飛ぶ。やはり烏間先生は苦勞人氣質というか、半ばそう言う役割が似合うよな。申し訳ないけど。

「ただし……我々は敵の顔を知りません。敵もまた客のフリをして襲い掛かってくるかもしれない。充分に注意して進みましょう」

「「ういーっす」」

世の中をなめてるバージョンの顔で歩くこと数分。次の階段が見えてくる。烏間先生はその階段を確認すると足を止めずに手早く指示を出した。

「いいか、もし、敵と遭遇したら速やかに退路を塞ぎ、連絡を断て。それが人数の多い我々にできる最善の策だ」

「「はいっ」」

皆で返事を返し歩く。すると正面から人が歩いてくる。厳つい顔に服装。明らかに堅気ではない感じの客。

全員で警戒しながらすれ違おうと、向こうは俺たちと目すら合わせようとせずに俯いたまま完全にすれ違い、歩き去った。

「本当に只の客同士って感じだな」

「ああ。むしろ視線すら合わせようとしな。トラブルを避けたいのはあっちも一緒なんだろうな」

「ホテル内が全員敵かと思ったけど、これならすんなり最上階まで行けそうだね。もし何かあっても前衛の烏間先生が見つけてくれるだろうしさ」

茅野が気の抜けた発言をする。一瞬、たしなめようかと考えたが、茅野は犯人に指定された人質候補の1人。多少気丈に振る舞っている

るだけかもしれないと考え直して口を噤む。

が、それが仇となってしまうた。

ここまで敵はゼロ。律から何の知らせもないということは追跡者の類もない。そんな状況に油断したのか、寺坂と吉田が先行しだした。

「へっ、入ってみれば楽勝じゃねえか」

「時間ねえんだからさっさと進もうぜ！」

「っ!?!おいつ！」

烏間先生が呼び止める前に進んでしまう2人。そんな寺坂と吉田の正面から1人の男が歩いてくる。

ポケットに手をつ突っ込み、かつたるそうに歩く男。

その姿を見た時、なにか違和感を感じた。

「っ！寺坂くん！そいつ危ない！」

「あ？」

何かに気付いた不破さんが寺坂を呼び止め、静止の声を聞いた寺坂が振り向いた瞬間。男がポケットから何かを取り出し、2人に襲い掛かる。

——どこかで見た顔が歩いていたのなら、注意した方がいい。

竹林の言葉が脳内で再生された時、俺はようやく男の正体に気が付いた。だが、その頃には色々と手遅れで。

寺坂たちを反射的に庇った烏間先生が無防備に敵の攻撃を受けてしまっていた。

ポケットから取り出した何かの道具。そこから吹き出した薄紫色のガス。それを烏間先生は直に浴びてしまったのだ。

「烏間先生っ！」

思わず名前を呼んでしまったが、駆け出しそうになる身体をぐっと静止することには成功した。

駆け出すことを我慢した俺はガスが晴れないうちに皆んなの前に飛び出し、ハンドサインで各メンバーに指示を出す。

敵と遭遇したら、退路を塞ぎ、連絡を断て。烏間先生はそう指示していたのだから今はそれに従わないと。

今考えられる最悪のケースは今の攻撃で烏間先生が行動不能になり、拳句この男に逃げられて、増援を呼ばれることだから。

「ちっ、行動が早いな」

ガスが晴れた瞬間。正面にいたはずの俺たちが何人もいなくなっていることに気付いたらしい男は一瞬で周りを見渡すと舌打ち混じりにそう言った。

「敵と遭遇したら」

「即座に退路を塞ぎ」

「連絡を断つ」

「でしたよね、烏間先生？」

問い掛けるとふらつきながら烏間先生は笑って見せた。

「お前は我々を見た瞬間、攻撃をせず、増援を呼びに戻るべきだった」「ちっ、そうかい。だが分からねえな。そこのおかつぱちゃんよお。何で俺が危ないと思った？」

正面に残しておいた不破さんに男が問い掛けると不破さんは不敵に笑い、余裕を見せる態度で答えた。

「だっておじさん。昼間にホテルでサービスドリンク配ってた人でしょ？そんな人がこんなところにいるなんて怪し過ぎるもの」「っ、確かに」

不破さんの言葉に何人か目の前の男に見覚えがあることに気が付いたのか、納得した様に頷いた。

そう、俺の感じた違和感はこの男への既視感だった。何処かで見た様な気がする。けど、何処だったか一瞬では思い出せなかったのだ。けど竹林の言葉を思い出した時、同時に竹林の推論を思い出し、その正体に思い至ったのだ。

「断定するには根拠が弱いぜ、お嬢ちゃん。ドリンクじゃなくてもウイルス盛る機会なんていくらでもあるだろ」

「おい、おっさん。なんで俺らがウイルスを盛られてるって知ってるんだよ。俺らはそんなこと一言も言っていないぜ」

「……ちっ、最近のガキは感がいいな」

おっさんの口からウイルスって言葉が飛び出した瞬間に違和感を

感じ、指摘してみるとバツが悪そうな顔になる。どうやらマヌケは見つかったらしい。

バツの悪そうな顔のまま男は口を開いた。

「それで？俺がどうして怪しいと思ったんだよ」

「皆が感染したのは飲食物に入ったウイルスからだと言っていた。クラス全員が同じものを口にしたのはダイナーとあのドリンクだけ。けど、ダイナーを食べずに編集作業を行っていた三村くん、岡島くんまで感染していたことから感染源は昼間のドリンクに絞られる。従って、犯人はあなたよ、おじさん君」

「ぬ……」

すごい、完璧な推理だよ不破さん。決め台詞まで完璧だ。

よくもまあ、こんな状況で堂々としてられるもんだと素直に感心してしまった。

毒使いのおっさんも不破さんの推理を聞いてぐうの音も出ないらしい。そのまま黙りこくってしまう。

しかし、そんな沈黙を許さない男がいた。

「……話はもう済んだか」

鳥間先生である。ガスが効いているのか、ふらふらした足取りだが、彼はいつでも飛び掛かれるように構えていた。

「……アンタ、まだ喋れんのかい。一瞬吸えばゾウすら気絶おとす傑作だったんだがねえ」

冷や汗を浮かべる怪しい男。

シンプルに鳥間先生のやばさが伝わってくる焦り方だ。まじかよ、ゾウすら気絶させる毒喰らって立ってられるのか。

鳥間先生の化け物じみた強さは知っているつもりだったが、この分だと鳥間先生は化け物じみた、ではなく、化け物そのものであると評価を付け直さねばならない気がする。

「っ……」

「だがフラフラじゃないか。お前さえ行動不能にしまえば所詮はガキの集まりだ。統制が取れずに逃げ出すだろうさ」

次の瞬間、男が動く。素早い、恐らくは何度も反復練習したである

う動きで未使用のガスを引き抜く。

しかし、烏間先生の動きの方が比較にならないほどに疾い。男の動きを封じるように太腿に飛び乗り、男の左頬に痛烈な膝蹴りを喰らわせた。

「ぐっ……あっ……!?」

男は膝から崩れ落ち、意識を失った。だが、同時に烏間先生もまた倒れてしまった。

「烏間先生っ!？」

倒れた烏間先生は直ぐに立ち上がる。だが、足の踏ん張りが効かないらしく、また倒れそうになる。そこへ磯貝が肩を貸す。

「ぐっ、すまない……。ダメだ。普通に歩くフリをするのが精一杯だ。戦闘が出来る状態まで30分で戻るかどうか……!」

不味いな、烏間先生が倒れてしまうと戦力大幅ダウンだ。

「……まずは烏間先生が倒した奴を拘束するぞ」

「分かった、任しとけ。念の為にガムテとか色々持ってきておいた」
「分かった。抑えとくから手早く頼む」

と、寺坂に拘束を任せ、俺は足元に転がっていた、烏間先生に倒された男の未使用のガスを拾い上げる。

コレ、どうしよう？

「ねえ、乃咲クン。それ使わないなら俺にちようだいよ」

「カルマか……」

少し考えてカルマに渡す。

こういう小細工のし甲斐がありそうな汎用性のある武器は俺が持つよりカルマが持つ方がよっぽど活かすことができるだろうと思っ
た。

「皆、これからも油断するな……。敵は今後も何処から現れるかわからない」

「……はいっ!」

俺たちは烏間先生がダウンした事実を噛み締めながら次のフロアへと脚を進めた。

46話 カルマの時間 2時間目

まずいな。本格的に体調が悪くなって来た。

多少生地が薄いが上着を着てきたのは正解だったらしい。ほんのり寒気までしてきやがる。

夏休み前から体調は良くなかったが、どうやら俺もウイルスを貰っていたらしく、症状が始めたことでいよいよ体調が崩れてしまったようだ。体の節々も痛い。

けど、皆んなに心配かけるわけにもいかない。俺は黙々と歩みを進めることにする。

歩き出してからしばらくすると、殺せんせーが能天気なことを言い出す。

「いやあ、いよいよ『夏休み』って感じですねえ」

コレには皆んな一瞬黙りこくり、気を取り直したらしい全員で殺せんせーをボロクソに言い出した。

「何をお気楽な!!」

「1人だけ絶対安全な形態の癖に!」

「渚、振り回してソイツを酔わせろ!」

「にゅやあー!?!」

「よし、寺坂。コレねじこむからパンツ下ろしてケツ開いて」

「死ぬわ!?乃咲もテメエも俺のケツに何か恨みでもあんのか!?!」

カルマの過激な発言が飛び出した辺りで渚が殺せんせーに問い掛ける。

「殺せんせー、なんでコレが夏休み?」

「先生と生徒は馴れ合いではありません。そして夏休みとは先生の保護が行き届かない場で自立性を養う場でもあります」

確かに、夏休みとは本来そういうものだろう。夏休みの自由研究や宿題だってそう言った感覚を養うためにあるようなものだからな。

先生が見ていないところでもしっっかりやることをやっているかどうかを確認する場なんだろう。

まあ、今回の場合、普通に先生が見てるわけなんだけども。

「大丈夫、普段の体育で学んだことをしっかりやればそうそう恐れる敵は居ません。キミたちならクリアできます。この暗殺夏休みを」

彼が体育をしていた頃から思っていたことだが、殺せんせーは体育だけ容赦がない。勉強は手厚く教えてくれるけど、身体を動かすミツシヨンでは、自分基準の無茶振りを平然としてくる。しかし、それでも今はその無茶振りに答えるしかない。なにより時間がないのだから。

?? ?? ??

階段を上がり、俺たちは展望通路へと辿り着いた。こんな死角のない場所なら奇襲を警戒する必要はないだろう。そう考えていると、最前列が立ち止まる。何事かと覗き込むとそこには纏う霧囲気がその辺を歩いていた客とは段違いな男が立っていた。

段違いと言うか、ここにいて自体が場違いな霧囲気の男。立ち姿からも隙がない。下手したら烏間先生と同格レベルの奴が悠然と立っていた。

「お、おい。めっちゃくちや堂々と立ってやがる」

「あの霧囲気……」

「ああ。いい加減見分けがつくようになってきた。アレはどう見ても殺る側の人間だ」

さて、明らかな殺し屋が立っているがどうする……？

ここは見晴らしのいい展望通路だ。やはり死角の一つもない場所。奇襲の心配はないと思っていたが、その地形が裏目に出ている。奇襲の心配がないということは、こつちも奇襲ができないということ。数の利を活かせない。

もしかすると向こうの男はそこまで計算してここに立っているのか？だとしたら状況計算能力は俺たちよりも向こうのほうが数段上。流石プロと言ったところだろうか。

この辺には武器になりそうなものもない。せいぜい等間隔に観葉

植物が置かれてる程度だが、そんなもの振り回せるのは俺やカルマ、寺坂くらいだろう。心底ここは俺たちにとって不利なフィールドらしい。

男を観察していると、彼は徐に腕に力を込め、展望通路のガラスにヒビを入れた。まるで威嚇するように。

「……つまらぬ」

……ぬ？いや、今はいいか。

「足音を聞く限り『手強い』と思えるものが1人もおらぬ。精鋭部隊出身の引率の教師もいるはずなのぬ……だ」

なんかこのおっさん、日本語おかしくね？

「どうやら」スモッグ」のガスにやられたようだぬ。半ば相打ちぬと言ったところか。出てこい」

スモッグとはさつき烏間先生が倒した男のことだろう。恐らくはコードネームと言ったところか。

俺たちは男の指示の通りに身を晒す。が、そんなことより皆んな気になることがあるらしい。

「……おい、手で窓にヒビ入れたぞ」

「そ、それより……」

「怖くて誰もいえないけど……その、なんか……」

言いたいことはわかる。なんと言うか……

「ぬ、多くね。おじさん？」

「「言った!?良かった、カルマが居て!」」

そう、なんか『ぬ』が多すぎて話し方に違和感があるのだ、この男。見たところ外国人なんだろうが、『ぬ』以外の日本語が流暢なだけに余計に『ぬ』が気になる。

「ぬ」をつけるサムライっぽい口調になると小耳に挟んだぬ。カッコよさそうだから試してみたぬ」

なんかいかにも日本の文化を勘違いした外国人って感じた。こう、『畳の部屋に住んでいるとサムライっぽくて試してみたぬ』とか言ってる畳の上にベットとか置いてそう。あと、『畳の部屋でお茶を飲むのが武士っぽくて試してみたぬ』とか言ってる畳の上でアールグレイとか

紅茶のんでたりとかね。

「間違ってるならそれでも良いぬ。この場の全員を殺してから”ぬ”を取れば恥にもならぬ」

「いや、だったら今すぐ取ればいいのに。癖になってからだと直しずらいぜ？おっさん」

「ぬ……一理あるぬ。一本とられたぬ」

「……駄目だこりゃ」

思わず突っ込んでしまったが、駄目だこの人。絶対に癖になつてゐる。なんというか、なんとか『ぬ』を取れたとしても、後々に自分のイタイ『○○ぬ』って話し方を思い出して悶絶するパターンの人かもしれない。

そんな俺の心配をよそにおっさんは自分の腕を自慢げにゴキゴキと鳴らす。そんな様子を見た殺せんせーが警戒を露わにした。

「素手……それがあなたの暗殺道具ですか」

「こう見えて需要があるぬ。身体検査に引っかからぬ利点は大きい。近づきざまに頸椎をひとひねり。その気になれば頭蓋骨も握り潰せるが」

なるほど、確かに利点は大きいのかもしれない。だが、その利点を活かせるのは一部の強者だけだろう。

この男、相当な手練に違いない。

「だが面白いものでぬ、人殺しの力を鍛えれば鍛えるほど暗殺以外にも試してみたくなるぬ。すなわち闘い、強い敵との殺し合いだぬ。だが、がっかりだぬ。お目当てがこのザマでは試す気も失せたぬ。雑魚ばかり1人で狩るのも面倒だぬ。ボスと仲間呼んで皆殺しぬ」

……すっげえ。めちやくちや物騒なこと言ってるのに『ぬ』が多すぎて全然怖くねえ。人の語尾って大事なんだなあ。

場違いなこと考えてると徐にカルマが動く。展望通路の壁側に飾られていた観葉植物の木を無造作に掴み、仲間に連絡しようとしていたおっさんのケータイを窓に叩き付ける。

「ねえ、おっさんぬ」

おっさんぬって……カルマよ。流石にその呼び方はナメ腐りすぎ

じやないだろうか。しかし俺の危惧は伝わらないらしい。

「意外とプロって普通なんだね、ガラスとか頭蓋骨なら俺でも割れるよ。ていうか、速攻仲間呼んじやうあたり、中坊とタイマン張るのも怖い人？」

変わらず挑発するような態度を続けるカルマ。

「よせっ！無謀——」

すぐ様それを制止する烏間先生。けれどそんな烏間先生を今度は殺せんせーが声で止めた。

「ストップです、烏間先生」

なぜ、カルマではなく、烏間先生を止めた!?

そう思い、殺せんせーを見るが、殺せんせーは静かにカルマを観察しながら短く言った。

「アゴが引けている」

「……!？」

この期に及んで何を言ってるんだ、殺せんせー。カルマと言えバナメ腐って人を見下すようにアゴを持ち上げて相手を挑発する生き物だろう? そう思っつてカルマを見ると、確かに彼の形の良いアゴは引けていた。

アゴを引いて、相手を正面から見据えてる。ある意味では今までのカルマから信じられない立ち姿だと思っつう。

「今までの彼なら余裕をひけらかしてアゴを突き出し、相手を見下す構えを取っていました。今は違っつう。口の悪さは変わりませんが、目は真っつ直ぐ油断なく、正面から相手の姿を観察している。テスト以来少々なりを潜めていましたが、どうやら敗北からしつかり学んだようですね。存分にぶつかりなさい。高い大人の壁を相手に!」

殺せんせーの激励を受けたカルマが歩き出すと殺し屋は戦闘態勢を取るように上着を脱ぎ捨てた。

「いいだろう。試してやるぬ」

その一言を合図にカルマが本格的に動いた。

手に持っていた観葉植物の木を暗殺者に向けて思いつきり叩き付ける。が、それは容易に塞がれてしまっつう。

「柔い。もっと良い武器を探すべきだね」

「――必要ないね」

殺し屋は握り止めた観葉植物の木をそのまま握り潰すと挑発するように言った。そんな彼を相手にカルマは冷や汗をかいた様子で苦笑する。

凄い。化け物染みた握力だ。そりゃあカルマも冷や汗をかくだろ。俺もあの男と対面していたのなら、同じく冷や汗をかいていたに違いない。

しかし、カルマは冷静に対応していた。男の攻撃を全て避けるか捌いている。

「凄い。カルマくん。攻撃を避けるか捌いてる」

「烏間先生の防衛テクニックですねぇ」

「……彼の戦闘の才能は頭一つ抜けているな」

烏間先生の呟きに思わず頷いた。

カルマは相変わらず喧嘩というか、潰し合い、殺し合いに長けている。俺と違ってゾーンは持っていないと思うけど、それだけカルマの才能がとんでもないものだと思う。

カルマの才能に舌を巻いていると男の動きがふと止まった。そのまま、怪訝そうに眉を寄せてカルマに疑問を投げかける。

「……どうした。攻撃してこなくては永久にここを抜けられぬぞぬ」

だから、『ぬ』が多いってば。

「どうかなく。あんたを引きつけるだけ引きつけておいて、その隙にみんなを一人ずつ抜けて行くのもアリかと思つて」

「……………」

殺し屋がカルマを睨み付ける。その睨みを受けてもカルマは怯むことなく、男を真正面に見据えて拳を構えた。

「安心しなよ、そんなコスイことはしないから。今度は俺から行くからさ。アンタに合わせて正々堂々、素手のタイマンで決着を付けるよ」

「……素手のタイマンだあ……?」

「の、乃咲?」

「いや、なんでもない」

なんか、カルマらしくないセリフに思わず笑いそうになる。アイツは別に卑怯ってことはないが、正々堂々ってキャラでもない。そんな奴があえて正々堂々なんて柄にもないことを言ったもんだから、ついで、思わず。

それに素手のタイマンという時点ですでに胡散臭い。だってアイツ、毒使いのおっさんが使わなかった毒ガス持ってるだろ。

まあ、そんなカルマの性根を知る由もない哀れな殺し屋は妙に張り切った顔を見せて彼を褒める。

「良い顔だね、少年戦士よ。お前とならやれそうぬ、暗殺家業では味わえないフェアな闘いが」

おっさんも見たところノリ気な様だし、様子を守るとしようかな。数秒後、カルマとおっさんの闘いが始まった。

拳に蹴りを織り交ぜた喧嘩殺法で攻めるカルマ。その攻撃を腕で受けたり、捌いたりするおっさん。

カルマが上半身への攻撃を続け、下半身のガードが疎かになったタイミングでカルマが的確に攻撃を切り替え、おっさんの脛に痛烈な蹴りを喰らわせる。

脛の激痛に顔を歪め、体勢を崩し、背中を見せる殺し屋。その明らかな隙をチャンスと見たカルマが一気に距離を詰めて攻勢に出る。

けれどここで予期せぬトラブル発生。なんと、殺し屋のおっさんも毒使いのおっさんが持っていた毒ガスを持っていたらしく、無防備に突撃したカルマに毒ガスを浴びせてしまう。

ガスを至近距離で、無防備に浴びてしまったカルマ。力が抜けて削れ落ちる様に倒れる彼の顔面を掴んだ殺し屋が勝ち誇った様に言う。

「一丁あがりぬ」

こちらに背を向けて、カルマを片手で持つ殺し屋。彼に向かってクルスメイトたちから非難の声が殺到する。

「汚ねえ。そんなもの持っておいて何処がフェアな闘いだよ」

吉田の一言に悪びれず男は答えた。

「俺は一度も素手だけとは言ってないぬ。拘ることに拘りすぎない。

それもまたこの仕事を長くやっていく秘訣だね」

と、ここで俺は違和感に気がついた。

殺し屋のおっさんに顔面を掴まれてるカルマだが、一瞬見えた、おっさんの掌とカルマの顔面の隙間から見えた彼の口元はニヤリと歪んでいたのである。

カルマの奴、無事だっただからかいつも碌でもない悪戯を思いついた時の碌でもなさそうな悪い笑みを浮かべてやがる。

「至近距離のガス噴射。予期していなければ絶対に防げぬ——っ!？」

おっさんの言葉が紡がれ終わると同時に顔面キャッチされてるアイツがさつき渡した毒ガスの入った容器を取り出し、殺し屋のおっさんの顔面目掛けて思いつきり噴射する。

……だよなあ。手の内の読み合いでカルマが負ける訳がない。だってアイツは嫌がらせのプロだ。恐らくは何もかも作戦だったのだろう。カルマは敵に回したくないな、怖いから。

「な……なんだと……!？」

「奇遇だね、2人とも同じことを考えてた」

ニヤリ、どころかニチャアとした笑みを浮かべるカルマ。うん。やっぱりE組の中でコイツが1番怖いわ。色んな意味で。

「なぜ、お前がそれを持っているぬ……? しかも何故、お前は俺のガスを吸ってないぬ……!？」

殺し屋は脚をガクガクと震わせながら、立ち上がり、懐からナイフを出してカルマに特攻する。

どうやら、この時点で勝敗は着いてしまったらしい。

カルマは軽やかな体捌きでナイフを避けるとナイフと共に突き出された殺し屋の腕を掴み、関節技を決めた。

「ほら寺坂、乃咲クン、早く早く！人数とガムテ使わないとこんな化けモン勝てないって」

そしてあっさりとタイマンの約束を破るカルマ。うん、やっぱり思った通りだ。寺坂も同じことを思ったらしい。

俺に目配せしてくるので領り返し、2人で駆け出して殺し屋のおっさんを拘束する。

「へーへー。まあ、テメーが素手のタイマンとかもつと無いわな」
「ふんぎやつ!？」

「そーそー、分かってるじゃん、寺坂。あ、乃咲クン、そっちの腕押さえて。このおっさんに変なポーズ取らせようよ」

「遊びたいのは山々だが、さっさと拘束するぞ。男子でコイツを抑えるから女子はガムテ巻いてくれ。あと、絶対に手のひらには触るなよ、掴まれたら終わりだと思ってくれ」

「「へーい」」

「「はーい」」

殺し屋はあつという間にガムテで簀巻きにされてしまった。何重にも巻かれたガムテによって動きが阻害されて、身を振ることすら出来ないらしい男が『くっ……』と悔しそうな声を出してカルマを睨みつけた。

「毒使いのおっさんが未使用だったの乃咲クンがくすねて俺が貰ったんだよ。使い捨てなのが勿体無いくらい便利だね、これ」

「何故だ……。俺のガス攻撃、お前は読んでいたから吸わなかったぬ。俺は素手しか見せていなかったのになぜ、お前は予期することができたぬ」

殺し屋の言葉にカルマは別に得意げになるわけでもなく、当たり前前のように口を開いて言った。

「とーぜんっしょ。素手以外の全部を警戒してたよ。アンタが素手の闘いをしたかったのは本トなんだろうけど、この状況で素手に固執し続ける様じゃプロじゃない。俺らをここで止めたいならどんな手でも使うべきだし、俺だつてそっちの立場ならそうする。俺はアンタのプロ意識を信じたんだよ」

……カルマが相手の立場を考えて行動した、か。

カルマの奴、なんか、変わったな。別に今までが周りへの配慮がないノンデリカシー野郎だったと言うつもりはないが、これまでのカルマはどこか自分が良ければ良いというか、自分にとって面白ければそれでいい。みたいなどころがあった。

そんな奴が相手のプロ意識を信じて逆手に取り、勝利を収めると言

う偉業を成し遂げたというのは少し感動するな。

俺が少し感動していると、殺せんせーが口を開く。「大きな敗北を知らなかった彼は期末テストで敗者となって、身をもって知ったのでしよう。敗者だって自分と同じ、色々と考えて生きている人間なんだと。それに気付いた者は必然的に勝負の場で相手のことを見くびらなくなる。自分と同じ様に敵も考えていないか、頑張っていないか。敵の能力や事情をちゃんと見るようになる。敵に対して敬意を持って警戒出来る人。戦場ではその様な人を『隙が無い』というのです」

隙の無いカルマ、か。それはとんでもない強さを秘めているんだろ
うな。……彼の今後を同じクラスで見れないのが残念だ。

しかし、彼の成長を自分の糧にすることはできる。カルマに負けな
いくらい、俺だって成長してみせるさ。

気持ちを新たにしていると、口を閉ざしていた殺し屋が自嘲するよ
うに、それでいてカルマを認めるように口を開いた。

「……大した奴だ。少年戦士よ。負けはしたが、楽しい時間を過ごせ
たぬ」

ゾーンに入り、殺し屋を観察する。

彼の意識の波長は依然として俺たちに向けられているが、もう戦意
を感じ取ることはない。つまり、本当の意味で決着が着いたんだ。こ
れ以上、ここで時間を潰す必要はないだろう。

そう思っ歩き出そうとしたその時、カルマが途端に陽気な声を上
げた。

「へ？何言ってるの？楽しいのこれからじゃん」

「……………はい？」

俺と殺し屋の声が重なった。

思わず出た素っ頓狂な声に内心で驚きながら、カルマを見ると、彼
はなにやら楽しそうにズボンのポケットからドクロの絵と文句の書
かれた小袋を取り出した。

ちなみにこの嫌な雰囲気の漂う小袋に書いてある文句は『そなえあ
ればうれしいね』である。

カルマは笑いながら袋からカラシとワサビのチューブを取り出し、年相応に無邪気に笑って見せた。

「なんだぬ、それは」

「ワサビ&カラシ。おじさんぬの鼻の穴に挿じ込むの」

「なにぬっ!?!」

哀れ、おじさんぬ。アンタは地獄行きぬ。

「さっきまできっちり警戒してたけど、こうなったらもう警戒もクソもないよねえ。この鼻フック入れたら、カラシとワサビを突っ込んで、専用クリップで鼻塞いでえ、口の中に唐辛子の千倍辛いブーツ・ジョロキアぶち込んで、その上から猿轡して、処置完了! 乃咲クンも一緒にやろうよ楽しいよ?」

なんかとんでもないキラーパスが飛んできたがどうするべきか。反射的に断ろうとしてしまったが、少し考える。

おじさんぬの、『頼む、コイツを止めてくれ』という継るような視線を無視して、俺はいいことを思い付いた。

「の、乃咲くん? なんか、すっごい悪い顔してるよ……」

「ナアハッ、そんなことないよ、矢田さん。ちよつといいこと思い付いただけだから」

「圭一の奴、今まで見たことないレベルの笑顔だな」

「……なんか碌でもなさそう……」

茅野の失礼な一言は聞かなかったことにして、俺はカルマからワサビを受け取る。

「さあ、おじさんぬ、今こそプロの意地を見せる時だぬ?」

「止めて欲しければ仲間の人数を吐くことだぬ?」

「そ、それはできぬっ!?!」

望んだ答えが返って来なかったので、鼻の中にワサビをぶち込む。するとおじさんぬは絶叫した。

「モガアアアア!?!」

「どう? 言う気になった?」

「ぜえ……ぜえ……! な、仲間は売れぬ……!」

「カルマ、センブリ茶」

「はいはい」

「又アアアアアア!?」

「仲間の人数は?」

「さ、最近の中学生はなんて惨い拷問を——」

「カルマ、ゴキブリ」

「ほいほーい」

「ピギヤアアアア!?」

「もう一度聞けど、仲間は何?」

「くつ、お前たちに屈するくらいなら殺されたほうがマシだね……!」

「はい、くつ殺頂きました。カルマ、奥田さんの作った悪臭物質」

「あはは、容赦ないねえ。乃咲くん」

「グヌオオオオオオ!!」

仲間の人数はどうあっても喋るつもりはないらしい。最終的にこの殺し屋のおっさんはカルマの手によってブーツ・ジョロキアを口の中にぶち込まれるとピクピクと痙攣して、その後はうんともすんとも言わなくなり、動かなくなった。

「お、おい、そいつ、死んでないだろうな……?」

「当たり前じゃん」

「お、俺、乃咲だけは怒らせないようにしよう……」

「「さんせーい」」

「……あれ、なんか俺、やっちゃいました……?」

みんなからの散々な評価に思わず不満顔。

まあ、こいつの口を割るためとは言え、少々調子に乗りすぎたかもしれないが。それに、結局は口を割らなかつたわけだし。

「時間の無駄だったな」

「……。なんか、この殺し屋のおっさんが可哀想に思えて来た」

「だな。あんだけやつといて時間の無駄の一言で片付けられるとか」

口々に殺し屋のおっさんに同情する仲間たち。

「ねえ、殺せんせー。カルマくんも最近大人しくなった乃咲も大して変わってないんじゃない……?」

「……ええ。2人とも将来が思いやられます」

殺せんせーからの辛辣な評価を受けながら俺たちはまた先を急いだ。

47話 女子と潜入の時間

『皆さん、これから先はテラスになります』

律の手短なナビに全員の足が止まる。

「テラス……ってことはバーフロアか。問題の階ね」

速水さんが深刻そうな顔をして言った。

彼女の言葉に律が画面の中で頷き、再度このフロアの突破条件を説明してくれる。

『はい。ここから先に進むにはこのバーフロアを正面突破するか、バーフロアを突破して非常口に通じるドアを開けるしかありません』
バーフロア。たしか、各業界のトップの子供達がヤクやらキメてパーティーを開いてるとか言う曰く付きのフロアだ。

そんなやばいパーティーを開いてる場所ではあるが、中にいるメンツは何度も言うが政財界なんかのトップの子供。下手なトラブルを起こさない、起こされないように中には警備が配置されてることだろう。

流石にこの人数で突破するのは目立つし、流石に無理があるか。しかも、烏間先生は磯貝の肩を借りなきやまとも歩けない状況だ。こんな烏間先生を連れて中に入るのは目立ち過ぎる。1発で警戒されることだろう。

どうしたものか。少し考えてみるが、最善策が思い浮かばない。体調が優れない所為か、頭がぼーっとする。

それでも考えて、なんとか捻り出せた策は少人数で潜入して非常口の扉を開ける、なんてシンプルな作戦だけだ。

「ここはわたし達の出番ね」

考えていると、女子連中が我こそは、と一歩前に出ていた。

「そうそう、こう言うところ、男のチェック厳しいし」

「だね、女子だけの方が警戒されないと思う」

女子が口々に決意を表明する。だが、俺たちを信用してくれてる烏間先生も流石に女子だけをこんな魔境に送り込むのは躊躇いがある

らしい。

「女子だけを行かせるわけにはいかない」

「そうですね、鳥間先生に賛成です」

鳥間先生だけでなく、殺せんせーも反対した。

フロアを通過しあぐねていると、カルマと菅谷が何か妙案でも思いついたみたいにポンと手を打った。

「渚くんは女装させれば良くない？」

「乃咲なら歳の割に落ち着いてるし、雰囲気もあるし、違和感ないんじゃないか？」

「……僕ら？」

渚が俺とカルマや菅谷に視線を向けると表情をものすつごい引き攣らせていた。

そして、速水さんは目にも留まらない速さで渚を掴むとそのまま何処かへと引つ張ってゆく。

俺はと言うと菅谷に男子トイレに連れ込まれてしまった。

?? ?? ??

数分後――。

「おお……」

「すつごい。髪型だけでかなり印象変わるね」

皆んなの前には入手経路不明の女物の服に身を包んで違和感のない女装姿を披露する渚とトイレの手洗い場に放置されていた誰かのワックスで髪をオールバックに固められた俺がいた。

「渚の女装凄いな……。違和感なさすぎて新鮮味がない」

「そんな新鮮さ要らないよお……！」

「んで、圭一もだな……。髪型一つでここまで変わるのか」

「鳥間先生リスペクトのオールバックだ。トイレにたまたまワックスがあっただな。ちよいと拝借した」

「うーん。でも乃咲の落ち着いた雰囲気と髪型も相まって只者じゃない雰囲気かムンムンなんだけど逆に怪しまれない？」

「じゃあ、こんな設定はどう？ 私達はヤクザの娘。んで、乃咲くんは歳が近いってことで護衛を任された精鋭、的なの？」

「あ、その設定使えるかも！ 私、実はビッチ先生から集英組の大紋借りてるから」

「中に本物のヤクザがいるかもしれないけど通じるかなあ？」

「そこは腕の見せ所でしょ、男見せてよ、乃咲くん！」

女子連中からの無茶振り。今の俺にそんな器用なことが出来るとはあまり思えないが……。

「やはり女子たちだけでは不安だ。やってくれるか？ 乃咲くん。渚くん」

烏間先生にこんな風に頼まれては嫌とは言えない。それに、俺がE組のみんなの為に何かをしてやれるかもしれない数少ないチャンスだ。断ると言う選択肢はなかった。

「やります」

「僕も……！」

俺に続いて渚も決意表明する。

こうして作戦は決まった。

女子たちで潜入。俺と渚はその護衛。

何かあれば俺か渚で注意を逸らして女子たちが店の奥を目指し、非常通路の鍵を開ける。

かなりシンプルな作戦だ。

「それじゃあ、行って来ます」

「はい、どうか気を付けて」

皆に見守られながら店内に侵入する。

俺が気をつけるのは女子に危険が及ばない様に周囲の動きに気を配りつつ、あんまり目立つ行動はしないってこと。

あんまり楽な任務でも無さそうだ。

戦闘力の高い片岡と岡野を先頭に、真ん中に渚、1番後ろに俺、という布陣で店の中を進む。

店の中は明らかに未成年と言った風貌の連中がいるにも関わらず、酒と何かの煙で充満していた。

……あまり長居したい雰囲気ではないな。

異臭とまではいかないが、どうにもこの煙と酒の入り混じった臭いは好かない。こりやあ、来年以降も地球が存続して、俺が大人になったとしても、バーとかは苦手になりそうだ。

鼻をつまみたくなるのを我慢しながら進む。

しかし、こんな場所に女子の集団と言うのは目立つのか、鼻の下を伸ばしながらやって来るバカが現れた。

「ね、どっから来たの？ 君ら」

鼻の下を伸ばした軽薄な男が女子たちの方へ手を伸ばす。が、俺はそれを黙って見送った。何故なら――。

「え……？」

男が手を伸ばしたのが女子……に扮した渚だったからである。

すげえ。女子が大半を占める中、手を伸ばした先がまさかの女装系男子とは。運があるんだが、ないんだか。

「そっちで俺と飲まねえ？ 金あるから何でも奢ってやんよ？」

しかもボンボンと来た。ある意味、この魔窟の住民に相応しい人材かも知れないな、恐れ入る。

拳句、一応、君ら、と言っているが、その視線は渚にしか向いていない。何だか、この男に向けられる女子たちの視線が冷たい物になった気がする。

「……はい、渚、相手しておいて」

「え、えっ!？」

得体の知れない男の相手を片岡に押し付けられた渚が困惑した様な声を出す。

「あんたなら1人でも大丈夫でしょ。『作戦』の下見が終わったらすぐに呼ぶからさ」

「の、乃咲……」

「ナンパされちゃったな、おめでとさん」

「う、裏切り者お……!」

恨めしそうに俺を見て観念したのか、渋々軽薄そうな男に連れて行かれる渚ちゃん。そのまま部屋に連れ込まれてある意味で女の子に

されたりしなきやいいけどな。

「そつかあ。渚ちゃんって言うのかあ。俺、ユウジな」

まあ、心配することでもないか。あれでも男だし、このユウジとか言う男にそんな度胸があるとも思えん。

連行される渚ちゃんとはクホク顔のユウジくんを見送ることもなく、俺たちは再び足を進めることにした。

が、再び問題発生。

「よう、お嬢達。女の子ばつかじゃん。今夜俺たちとどうよ？」

1番後ろに居るせいで、気付いていないのか、不審な男達が女子の先頭集団に声を掛けてしまう。

この雰囲気、今までの殺し屋達の足元にも及ばないが、堅気の人ではないだろう。ヤクザとまではいかないかも知れないが、反社か或いは半グレか。今度は俺の出番かも知れない。

関節を鳴らし、ウォーミングアップを始め、前に出ようとしたその時。俺を静止するようにすつと細くて白い腕が俺の前に出される。

「矢田さん？」

「ここは私に任せてよ」

矢田さんが俺を止めて、ポケットから例の大紋とやらを取り出しながら微笑み掛けて来たので、おとなしく引き下がる。

「お兄さん達カッコいいから遊びたいんだけど、あいにく今日は私たちパパ同伴なの。うちのパパちよつと怖いから止めとこ？」

「うひゃひゃひゃ、パパが怖くてナンパできツか——」

「じゃ、うちのパパ紹介する？」

軽やかな口調で大紋を見せつける。すると途端に男達はあからさまに顔色を悪くし、ガタガタと震え始めた。

「ねだつたらくれちゃって。スクバのチャームにでもしようかなあつて思ってるんだ、コレ」

「や、止めておきます……失礼しました……」

矢田さんカッコいい。小道具と言葉で巧みに騙して無血で連中を退散させてしまった。

いかな。普段、あんな感じの輩に絡まれては暴力で黙らせて来た

からついつい暴力に頼ろうとしてみました。

こんな平和な解決方法があるんだなあ、と感心した矢先、2度あることは3度あると神様は言いたいのか、また2人組の男が現れる。

「なあ、お嬢ちゃん。その大紋、集英組のだろ？ よかったらそのパパとやら、俺たちに紹介してくれよ」

小物臭いセリフを伴って現れた2人組。集英組とやらがどれくらいの組織かは知らないが、ヤクザの大紋を恐れていない所を見るとさっきの連中とは違い、本格的に反社会勢力に与する奴らかも。

さっきは感心したが、脅しが効かない相手となれば状況は変わって来る。しかも矢田さんたち女子に興味があると言うよりは、彼女が持ち出した集英組とやらに興味があるらしい。

これでは脅しは逆効果になってしまいうだろう。
今度ばかりは俺が前に出た。

さっき矢田さん達が言っていた設定をなぞる様に口調を変え、ビッチ先生から習った自分を演じるテクを使って即興で作った架空のキャラクターになりきる。

「お嬢、おやつさんがお呼びです。こんな連中は放っておいて、お早く部屋に戻って頂きたい」

「あん？ なんだ、お前」

睨まれたので睨み返す。だが、流石に大人。中坊の睨み一つで踵を返してくれるほど生優しくはないらしい。

「私はこの馬鹿共を始末していきますので、どうぞお早く。でなければおやつさんに大目玉を喰らってしまいます」

俺の意図を察してくれた様で矢田さんが頷いた。

「それじゃあ、ここはお願いしようかな？ ごめんね」

「いえいえ、これが自分の役目です」

そう言つて皆んなに手を振つて送り出す。

矢田さんたちを追いかけようとした男2人の行手を阻むように手を伸ばし、立ちほだかる。

「お前、女の前だからって調子乗つてると殺すぞ」

「わあ、怖い怖い。ここで騒ぎを起こすのもアレだから、ちよつと向こ

うの人氣がない所に行こうか」

俺が指差した、ホールの端。誰も興味がないのか、見向きもしない、店の隅っこには誰もおらず、そして視線を向けている者も誰もいなさそう。俺が指差した先を見て、男達がニヤリと口元を歪める。

「いい度胸じゃん？ ガキの癖に」

「いいぜ？ ボコってやんよ」

普段、烏間先生とか、ついさつきまで殺し屋を警戒していたせいか、こいつらの言葉がやたらと軽く感じる。

ヤクザつてのは義理人情を重んじて、女子供には手を出さない、みたいなイメージがあったが、どうもそれは映画の中だけの話らしい。こいつらからは悪意が感じ取れる。

男達の後ろに付いていく形で移動する。

無駄に派手で無駄に高そうな上着を着たガタイのいい男2人とそいつらに連れ回される中学生という絵面はこの場でも異質な物だったのか、いくつかが好奇の視線を向けられたが、気にしない。

ぶつちやけ、この移動中に後ろから絞め落としてやろうかとも考えたが、流石に目立つので控えた。

目的の場所に着くまでの十数秒。男達の出立ちを観察する。引き締まった身体付きに袖から出た筋肉のある腕。成金趣味のジャケツトのポケットの膨らみからして、折り畳みのナイフも入ってそうだしぎとなったらアレを使われるだろうな。

「さてと。逃げずに着いてくるなんて大した度胸じゃん？」

目的地に着くと男が余裕な笑みで俺を見下した。

さて、どうしようか。

本物のヤクザつてのがどの程度の實力なのか分からないのは少し不利だな。加えてどんどんな体調が悪くなって来やがる。あんまり激しくは動きたくないな。頭痛がする。

寒気と頭痛に苛まれながら、改めて男達を正面から観察する。

ニヤニヤと浮ついたニヤけ顔。こちらを警戒している素振りはない。心底、俺を舐めきっているのだろう。

一瞬、黒幕に雇われた殺し屋の仲間である可能性も考えたが、だっ

たら曲がりなりにも訓練を受けている相手を警戒する動きはあってもいい筈なので、その可能性は一度、頭の隅に追いやる。加えて、それならヤクザがどうこうって会話をする必要はないわけだしね。

考え出したらキリがない。それに、こんな体調で深く考えようとしてもドツボにハマるだけだ。

思考を切り替えて、相手をどう制圧するかを思案する。

体調の所為であんまり激しく動けない。それに、注目を浴びるのも不味い。やられる前にやるいつもの喧嘩術は使えない。できるだけ暴力を使わず、そして省エネで倒したい所だな。

相手の力量によってはそう上手く事を運ぶことはできないだろうが……。などと思案していると、男が焦れた様に前に出た。

「なんだ？ さっきまでの威勢はどうした？ 今更になってビビってるのかよ？」

威圧する様な声。不良達がよくやる、殺すぞ、という威嚇に似ている。低い声で、それでいて大声を出せば勝手にビビってくれる。そんな魂胆が透けて見える。

——ぬるい。

本当に気に食わないのならここに着いた時点で殴りかかって来れば良かったのに。

いちいち殺すだとか、威圧しないと動けない懦弱さも、相手を挑発してニヤけるしようも無さを俺は知っている。

子供がやる分には精一杯イキがってる感じがしてまだ可愛げがあるが、大人がやるとこのうえなくダサイ。

しかも、大人が子供にしているのだからますますダサイ。これが反社会組織の人間だというのだからお笑い種だ。

「……………ふふ……………」

思わず笑みが溢れた。

「……………何笑ってんだよっ！」

ついに拳が振るわれた。無駄に大きく振りかぶり、その割に踏み込みが甘い。大きく体を見せて威圧する為だけの拳。

さっきの殺し屋や烏間先生の蹴りに比べるとこの拳はなんてちっ

ぼけなんだろう。

半歩、横にずれて躲し、ヤクザのポケットから折り畳みナイフをくすね、ついでに踏み込んだ足を踏み付けてやると、自らの拳の勢いで男は勝手にすっ転んだ。

「次」

半身逸らしたままの状態でクイクイと指を曲げて挑発すると、頭の悪い単細胞はそれだけで頭に血が昇ったらしい。

「このっ……!」

顔面目掛けて蹴りが飛んで来る。避けてもいいのだが、そうなる下次の攻撃に繋がりそうで面倒だと判断し、俺の顔の高さまで上がった足を右手で受け止め、そのまま足を思いつき持ち上げてやるともう1人も情けなく尻餅を付いた。

「おい、大丈夫か?」

声を掛けてやると2人とも慌てた様子で立ち上がり、さつきとは打って変わって俺に対して警戒を露わにする。

「どうやら俺を脅威と認めたらしい。」

「デメエ、ぶっ殺してやる」

脅し。中学生相手に攻撃を外し、挙げ句の果てに転ばされた事による恥が彼ら突き動かすのだろう。

成金趣味のジャケットの男が右ポケットを弄り、続いて左ポケットを弄り、焦った様な顔をする。

その探し物にすぐピンと来たのでくすねたナイフを見せる。

「探してるのはコレか?」

「……! いつの間に……?!」

「中坊相手に光り物抜こうとするなよ、みつともない」

「返せ……っ!」

再び殴って来たので、今度は転ばせることはせず、また避けなが、今度はナイフを元あったポケットに返す。

今度は転ぶことなく、身を翻し、再び殴り掛かろうとした男の前で両手上げて手のひらを開く。

「デメツ!? ナイフを何処へやった!」

その質問に対し、奴のポケットを指差す。

俺の動作を見て、慌てた様にジャケットのポケットに手を突っ込む男。しかし、その顔は折角武器を返してやったと言うのに喜びではなく、驚愕で彩られていた。

「どうした、来ないのか」

ナイフを持った男へ一歩近づく。だが、距離は縮まらない。俺が踏み込んだ分だけ、男が後ずさっていたから。

その顔に浮かんでいるのは恐怖。あの顔は知っている。寺坂達が殺せんせーにガチギレされた時、あんな顔をしていた。

ここで俺は初めてゾーンに入る。

相手の視線、息遣い、瞬きの回数、体の動き、震えを見て意識の波長を感じ取る。呼吸の度に波長に激しい波が出来ていた。

拳を固め、踏み出す。相変わらず、その分だけ男も後ずさるが、遂に壁に追い込まれ、背中が壁に当たった瞬間、今日見た中で最も怯えた顔を見せてくれる。

そこまで来て、固めた拳をこいつがさつきやったみたいをやたらと大振りに振りかぶり、男の顔面目掛けて振り抜く。

が、当てはしない。暴力は使わないと決めていたから。男の意識が迫り来る拳に集中し、意識の波長が最大限まで高まった頃合いを見計らって拳を解く。

何が起きたのか、理解できない。そんな様子で解かれた俺の手の動きを顔を使って追いかける男の眼前で、俺は思いつきり、両手の掌を叩きつけて、後ろで爆音で流れている曲をかき消す様な音を立てた。

「……………!!!」

その直後、男は白目を剥き、そして膝から崩れ落ちる様に倒れた。

ロヴロさんが伝授されたこのクラップスタナーという技。実戦で使うのは初めてだが、音の鳴らし方だけでも練習して来た甲斐があった。この技、想像上に使える。

自分の練習が報われたことに満足感を抱きつつ、敵はもう1人の敵に視線を向ける。そいつはそこで伸びている奴以上に怯えているのがゾーンに入るまでもなくよく分かった。

この様子なら向かってくることはないだろう。しかし、一応はヤクザごっこ中なので手緩いことはせず、更に相手を追い詰めることにする。

俺はすこし考えた後、今倒した男の服を弄り、財布を取り出し、中に入っていた免許証を出して、写真を撮る。

財布と免許証を倒した男に向かって無造作に放り投げて、もう1人の方に足を向ける。

するとそいつはそれだけで後退りしようとした足をもつれさせ、惨めに尻餅を付いた。

けれど相手が立ってようが、転んでいようがやることは変わらないので気にせず男に近寄り、徐に胸ぐらを掴む。

「おい、免許証出せ」

「は、はひいっ……!!」

呂律の回らない返事をして震える手で財布を掴み、ガタガタと震えながらおっかなびつくり免許証を渡してくる。

無言でそれをひったくる様に受け取り、写真を撮り、投げ返す。ここまでしたらあとは立ち去るだけでいいのだが、逆恨みされるのも嫌なので徹底的に脅かすことにした。

「お前らの個人情報に手に入れた。顔も名前も住所もな。痛い目見たくないなら今さっき起きた事は忘れるこつた。今後突つかかって来たら……分かるよな？」

「……………っん!!」

泣きそうな顔でブンブンと首を縦に振る。

そこで俺はようやく手を離し、倒れている男を片手で持ち上げて、尻餅を付いている男に向かって投げ渡す。

「……………これからどうするべきか、言うまでもないよな？」

「ききききき、消えますっ！ ごめんなさいっ……………!!」

気絶している奴を担いでそそくさと飛ぶ様に逃げていった。

よし、ミッシヨンコンプリート。踏んだり、胸ぐら掴んだりしたが、血を流すことなく奴らを退散させた。

周りを見る。流石に客も何人か通り過ぎていたが、面倒ごとに巻き

込まれたくないのだろう。店員を呼ぶ様子もなければ俺と目を合わせることなく、去って行く。

この様子なら自然と客の中に紛れ込むことが出来るだろう。俺は心配を消して、女子達に合流するべく歩き出した。

48話 突破の時間

人混みに紛れ、女子達の元へ向かっていると、ふと、既視感のある光景に出会った。片岡たちではない、見覚えのない女子の団体がチャラ男3人に絡まれている様だ。

「あのっ、私たち、そう言うのに興味ないんで！」

はつきりくつきりとした強気な女子の言葉。どうやらしつこいナンパに対してキレている様子。

「あ？ 折角優しく誘ってやってるのに、なんなの、その言い種は。頭に来たんだけど」

しかし、逆効果。女の子の言い種に男達もキレたらしい。この薄暗い中でも分かるくらいに焼けた肌のパツキン男が苛立ちを隠そうともせずに1人に詰め寄った。

うん。普通、こう言う雰囲気の場合でナンパされたらあんな感じになるよな。事も無気のにらくら躲して挙げ句の果てに脅しまでするうちの女子連中が逞し過ぎるんだろう。

さて、どうするべきか。目立つ訳にもいかないし、かと言って放っておくのも後味が悪そうだ。

けど、ぶつちやけ無駄に体力を使いたくないってのが本音だし、助けてやる義理がないのは事実だ。

忘れてはいけないのは、今の俺たちはクラスメイトの命を背負っているって事。だから、見ず知らずの女子なんて見捨てるのが合理的な判断って奴になってしまいうndらう。

俺は見て見ぬ振りを決め込み、その後味の悪い光景を遮る様にパークのフードを被ってナンパ現場を通り過ぎる。

「……………はあ……………」

つもりだった。

通り過ぎる直前、横いるナンパ男たち向かって何気なく声をかけてしまう。明らかな寄り道であると自覚しながら。

「あの、彼女ら嫌がってるみたいですし、その辺にしてあげてはどうで

「しょうか？」

やってしまった。俺、別に人が困ってたら助けたくなくなる、みたいな善人ではないでしょうに。柄にもないことをしでかしてしまったと、声をかけた直後に後悔。

俺は自分は結構合理的な人間だと思っていたのだが、どうやら違っていたらしい。標的を俺に変えた浅黒い男が明らかに苛立ち、殺気だった視線をくれる。

「んだテメエ。このお嬢ちゃん達の知り合いか？」

「いえ。まったく」

「じゃあ関係ないだろ？ イタイ目見たくないなら、さつきと失せろよ。お坊ちゃん」

いやはや、おつしやるとおり。自分でも合理的ではないと思いがながら割って入ってしまったことを少し後悔している。

でもまあ、そんな後悔が相手に伝わるわけもなく。俺を向いた男がニヤつきながら俺の肩を突き飛ばそうとする。

どうしてこの手の輩は言葉で解決できないのか。いやまあ、さつきの連中を実力行使して制圧した俺の言えた義理ではないか。

これ以上、時間を使いたくないし、できるだけ手早く終わらせたい。一人一人潰すのは簡単だが、それでは時間が掛かる。

一番手っ取り早いのは格の違いを見せてやること。見たところ、さつきの本職っぽい奴らとは違うし。1人潰して俺を得体の知れない化け物に見せてやれば勝手に退散するだろう。

問題はその手段だ。暴力を使わず、無駄に体力を消費せず、なおかつ手早く、相手を脅かす様な勝ち方の出来る手段。それも1人を倒して残りを戦意喪失させるくらいのものが望ましい。

考えながら、手を弾いて攻撃を逸らす。

まさか逆らわれると思っていなかったのか、男が更にイラついたように手を伸ばしてくる。

その動きだけでコイツの波長は読み取れた。

少し考えた後、俺が出した答えはクラップスタナーだった。

攻撃を逸らしたそのままの動きで金髪の男の前で手を叩き合わせ、

音の爆弾を弾けさせる。

パアツンという破裂音。直後に崩れ落ちる様に倒れる男の身体。ドサリと床に伏したソイツを信じられないと言った様子で眺める取り巻きの連中。

俺がソイツらに手を向けると、連中は連動した様に肩をビクリと震わせた。うん。良い反応。少し面白かった。

どうやら脅かすことには成功したらしく、取り巻きの1人が倒れた男の名前らしきものを呼んでいるが、男はうんともすんとも反応を示すことなく、無言で床と熱いキスをしていた。

「……次」

キモが底冷えする様な声を頑張って出して、フード越しに彼らへと視線を向ける。

それだけで威圧としては充分だったらしい。

「わ、悪かった。彼女ら可愛かったから声をかけただけなんだ」

「だとしても相手を選ぶべきだ。こんな無法地帯にいるとは言ってもいい歳した大人が中高生をナンパしてるんじゃない。それだけで犯罪が成立する世の中なんだからな」

「あ、ああ。本当に悪かったと思う。お、俺たちはこれで失礼するよ。許してくれ」

「謝るべきは俺ではなく、彼女らでは？」

「そ、そうだな。悪かった」

「え、あの、いえ……」

さつきまで強気な態度をしていた女子の戸惑う様な声。事態を飲み込めていないことは手に取るように分かったのでさつきと会話を終わらせる様に努める。

「……こちらでお互いに何もなかったことにしません？ 彼女らは何もされなかった、あなた方は何もしなかった、俺も何も見なかった。そう言うことにした方が平和的にすむと思うんですが」

「そ、そうさせてもらう」

「キミらもそれで良いかな」

「あ、えっと、はいっ」

呆気に取られた様子の子を尻目に、倒した男の身体を持ち上げて、彼らに引き渡す。

最後にもう一度視線を送るとさすがと倒れた男を引きずって立ち去って行った。

彼らを見送ってから、今度は女の子達に視線を向ける。

「キミらも女子だけでこんな所にくるもんじゃないよ。あんな感じの連中がウロウロしてて危ないから。遊びたいのは分かるけど、そういうのは昼間のビーチとかに留めておいた方がいい」

「は、はい、あの、ありがとうございます!」

「ん。じゃ、俺はこれで」

ガバツと頭を下げられ、ちよつとバツが悪くなり、足早に立ち去ろうとする。寄り道は済んだ。さつさと戻ろう。

今度こそ皆んなの所に向かおうと歩き出したその時、見知らぬその子が慌てて顔を上げ、歩き出そうとした俺の手を掴んだ。

「熱っ……!?!あの、もしかして熱あるんじゃないですか!?!」

「ちよつとだけね。でも大丈夫だから」

「ちよ、ちよつと待って! あの、せめてお礼を……!」

「いや、大したこととしてないから。お礼なんて……」

お礼なんて要らない。そんな言葉を出す前に、後ろから聞き覚えのある声で呼ばれた。

「乃咲くん。どうしたの、こんなところで」

矢田さんだ。作戦の下見が終わったのか、どうやら俺を呼びに来てくれたらしい。

「ちよつとな。さつきの人らを撃退したらまた絡まれてる子達を見つけて。放っておくのもなんか気が引けたから」

「あ、そう言うことね。てつきり今度はナンパする側に回ったのになって思っちゃったよ」

「俺にそんな度胸あったら今頃、彼女の1人や2人出来てるよ」

「それもそっか」

俺の言い分に納得したらしい矢田さん。

いや、これで納得されるのも少々悲しい所ではあるのだが、まあ、い

いか。この話題をこれ以上広げる必要はない。

俺と矢田さんの会話に置いてきぼりだった少女の手の力が緩んだのを見計らってするりと手から抜け出す。

「あ……」

か細い声が聞こえたが、気にしては埒があかない。

……まあ、正直な話。もしかすると、ナンパから助けた女の子そのまま付き合いが続いてくという電車男チックな展開になったかもしれないな、と少し後ろ髪を引かれてはいるが。

「ごめんね、彼、うちのパパのお気に入りの。早く連れて来いってうるさいから連れてくね」

ヤクザ設定をまだ続けていたらしい矢田さんが俺の手を引いて、そして、俺の手に触れた瞬間、ギョツとした顔で振り返る。

「……乃咲くん。もしかして……」

「……………」

凄く思い詰めた顔だった。俺の手、気付かないうちに手汗まみれで気持ち悪かったとかかな？

なんて思っている彼女の視線が動いた。

その視線を追ってみると、少女がなんとも携帯しづらそうなケースに入ったスマホを握りしめて、口をパクパクさせている。

その少女とスマホ、そして俺を見比べると彼女は仕方なさそうに口元を緩めて、徐に言った。

「ねえ、写真撮ってあげようか？」

「え……？」

これにはこの名も知らない少女もキョトン顔。

「ちよつと彼、危ないことに首突っ込んでるから連絡先を教えてあげる訳にはいかないけど、写真くらいならいいでしょ」

「あの、矢田さん？」

「乃咲くん。フードとって。大体、室内で被るもんじゃないでしょ、それ。ほら、スマホ貸して。ほら、その壁に並んで！」

「慌ただしく指示をする矢田さん、その様子にしどろもどろしながらなんだかんだ指示に従う少女。気が付けば俺と少女の仲間達だけが

取り残されていた。

「え…、えっ…：…？」

「ほくら！ 乃咲くん。早くしないと呼びに来た私が怒られちゃう！」

「…：…？ わ、分かった」

矢田さんの意図を理解しかねるが、確かに呼びに来たのにいつまでも道草食ってて怒られるのは彼女かもしれないので指示された通り、フードをとり、壁際に並ぶ。

「はい、撮るよ。はい、チーズ」

矢田さんの作り出した流れに終始キョトンとしている俺と無言で困惑している少女。そんな彼女に矢田さんはスマホを返すと今度こそ俺の手を引いて歩き出した。

「じゃ、あなたたちも早くここから出た方がいいよ。ここナンパ多いから」

キョトンとしている少女達を置き去りにひらひらと手を振る矢田さんに半ば引きずられる様に俺も歩く。

「あの、どうして写真なんて？」

「出会いに運命とか感じてそうな、ああ言うタイプは収穫があるまで結構引かないの。だからおみやげを作ってあげたんだ。そうすれば結構簡単に引き下がってくれるから」

「ほえ…：…」

流石女子、というか、女子にしか分からないことって奴なんだろうか？ なんだか頼もしい。

「乃咲くん。モテ期きちやったんじゃない？」

「いや、そんなことないでしょ。仮に来ていたとしても、そもそも今はそんなことどうでもいいだろう？」

「うん。どうでもいい。少なくとも——」

矢田さんが不意に立ち止まる。まさか止まると思っていなかったので反応が遅れ、つんのめる。

彼女にぶつからないよう、慌てて立ち止まった俺の額にひんやりとした矢田さんの手が当てられた。少し冷たくて気持ちいいと思って

しまうが、そんな気の抜けた思考は彼女の次の言葉であっけなく跡形もなく霧散する。

「乃咲くんが体調崩してることよりは」

やばい。あんまり体調が良くないのがバレた。咄嗟に誤魔化そうとするが、矢田さんの確信に満ちた顔に気押され、言い訳すら出来ずに口を噤む。

「凄い熱だよ。これ、40度は絶対に行ってる。身体の節々に痛みとかはない？ 吐き気とか寒気は？」

「……少し寒い。吐き気は今のところない。でも、言われてみると少し地面が傾いてる様な感覚あるかも」

「これ、今すぐ休まないとダメだよ。実は私ね、身体の弱い弟がいるからなんとなく分かるんだ。今、相当具合悪いでしょ」

矢田さんに問い詰められる。これまで話したことは何度もあるが、こんな風に詰められるのは初めてで、少し戸惑う。

ここで『俺は問題ない』とスマートに言えれば良いんだろうが、彼女に詰め寄られて、動揺した俺は考えてしまう。

頭が痛い、寒気もある、ようやく自覚したが、平衡感覚も少し危うい。でも、今のところはそれだけだ。

まだ、俺は動ける。

「俺はまだ大丈夫だ。動ける。そんなことより、早く行こう。皆んな待ちくたびれているかも」

額に当てられた矢田さんの手を強引に振り解き、誤魔化す様に歩き出す。だが、一度気になってしまうと身体は素直になってしまうのか、歩き出そうとした所でふらついてしまった。

「ほら、言わんこっちゃない！」

慌てて支えに来てくれた彼女を制止して、脚を叩き、気合いと根性でどうにかこうにか足を動かす。

まだ倒れるわけにはいかない。皆んなのために薬を奪う。その任務が果たされていないのだから。

「俺は問題ない」

「でも……ふらついてるよー」

「確かにふらついてるけど、それだけだ。不調も我慢できないレベルではない。それに、仮にここで休んだり、倒れたりしたらそれこそ皆んなに迷惑をかけることになる。忘れたわけじゃないだろ、俺たちは不法侵入してるんだから、客じゃないとバレたら1発でアウト、任務失敗だ」

「けど……!」

「頼むよ、矢田さん。これが最後なんだ」

「それって……」

俺の言葉に一瞬動揺するが、こちらの主張を否定出来ず、俺を休ませるなんて無理だと悟ったのか……。

「つゝゝゝ! はあ……。分かった。でも、絶対に無茶しちや駄目だからね。そんなことしたら陽菜ちゃんに言い付けるから!」

葛藤の末に脅し文句付きとはいえ、俺が任務を続けることを心底渋々、辛うじてと言った様子で認めてくれた。

「分かった、ありがとう」

素直に返事をして、皆んなの元に向かう。

俺と矢田さんが着く頃には全て終わった後のようで何やら一悶着あったみたいだ。こちらの到着に気づいた岡野にちよつとした小言をこぼされてしまう。

「2人とも遅いよ、何やってたの?」

「あはは、ごめんなさい。私が呼びに行ったら乃咲くんが逆ナンされててさ。その子を撒くのに手間取っちゃって」

「はあ!? 乃咲が逆ナンって……アンタ、モテ期? こんな旅先で、しかもこんな状況で女の子引っかけるとか、タラシ?」

「ナンパから助けただけ。それより、状況は?」

聞くと岡野が話してくれた。

なんでも、俺がいなくなった後、目的地に着いたのだが、案外、警備が多く、人手が必要そうと判断し、直ぐに俺と渚を呼び戻しに動いたのだと言う。

だが、俺がゴタゴタしてるうちに渚だけが到着。どうしようかと話してるうちに渚ちゃんを気に入ったらしいユウジくんが着いて来て

いたらしく、渚にアピールする為に熱烈にダンスを披露し始めたと言
う。

「いや、異性にアピールする為にダンスとか鳥かよ、求愛ダンスすると
かどんだけ必死なんだ、ユウジくん」

「ね、求愛ダンスかよ、とは思わなかったけど。まあ、邪魔くさかった
よねえ。そしたら案の定、その辺のヤクザ屋さんにぶつかっちゃって
さ」

「救いようがねえ」

つか、ここ反社多過ぎるだろ。どんだけだ、伏真島。

「んで、面倒くさかったけど、ちょうど良いからそのヤクザを蹴り倒し
て、見張りの人に運んでもらって、なんとかその通路を通れる状況
になったってわけ」

……いや、文句もツツコミもするべきではないとは分かっているけ
ど、なんつーか、さっきのナンパに怯える少女たちを彼女らに見習っ
て欲しいと思ってしまった。

いや、頼もしいよ？ 後ろでガタガタ震えられるよりよっぽど頼も
しいし、安心感もあるのよ？

でも、女子中学生が目的の為に、その辺にいるヤクザを蹴り倒して、
伸びてるところを利用するとか何言ってるか分からねえよ。逞し過
ぎるだろ、うちの女子。

「……すまん。そうとも知らずに道草食ってた」

「女の子助けてあげたんでしょ？ なら仕方ないわよ。むしろ非常時
とはいえ、男に迫られてる女の子を見て見ぬふりしました、とか言っ
たらアンタに幻滅するところだった」

「……そう言っただけだと助かる。でも、あんまり無茶なことはする
な。岡野も訓練受けてるし、ある程度強いのは知ってるけど女の子な
んだ。肝心な時にいなかった俺に言えることじゃないけど。本当に
無茶はしないでくれ」

「——まさか、乃咲がそんなこと言うなんてね。ちょっと驚いた。
なあに？ 今度はうちらを口説こうとしてる？」

「そんなこと……」

「はいはい、分かっているわよ。擲揄っただけ。でも気遣い自体は嬉しい。だから一応、お礼は言っておくね」

「……ああ」

会話を終え、バーフロアを抜けようと足を踏み出すと、横から矢田さんに小脇を突かれ、注意される。

「無茶しちやいけないのはキミもなんだからね。本当に絶対、無理は駄目なんだからね」

「分かっているよ、無茶はしないから」

俺の言葉に頷きはしたけど、まだ信用はしていないらしく、彼女は俺の横を離れることなく、歩き出した。

全員がバーフロアを抜け切った所で、一足先に出ていたらしい渚が元の服に着替えてカーテンの裏から出てきた。

「あれ？ 着替えるの早いな、渚。そのまま行けば良かったのに。暗殺者が女性に化けるのは歴史上でも良くあることだぞ」

「い、磯貝くんまで!？」

「渚くん。とるなら早い方が良くいらしいよ？ ホルモンとかの関係で」

「とらないよ！ 大事にするよ!？」

「その話は後にしてくれるか」

「2度としません……」

渚の玉を取るか取らないかの話で盛り上がる前線を烏間先生が落ち着かせ、渚がショボンと俯く。

ここまで来れば黒幕との接触まで秒読みと言ったところまで来ている。俺たちは渚の金玉を尻目に次のフロアに進んだ。

49話 チャンスの時間

バーフロアを抜けた俺たちはVIPフロアに到達。

物陰に身を潜めて、通路を観察する。ひとまず、目に見える俺たちの脅威は2人。進行上、必ず通らねばならない階段に男が2人、配置されていた。

たった2人、と思うかもしれないが、彼らは一目見て、エントランスやバーフロアのヤクザやチンピラとは格が違うのが分かった。立ち姿に一切の無駄がない。

筋骨隆々な肉体は飾りではないだろうし、あの油断のない目。明らかに只者じゃない。

流石にVIPがいるフロアと感心するべきか。ホテルもここの警備には想像以上の力を入れているらしい。

『このVIPフロアはホテルの者だけに警備を任せず、客が個人で雇った見張りを置けるようです』

律の補足に納得した。

監視カメラや警備員など本来のホテルの警備システムに加えて、客が個人で雇った兵隊。なるほど、後ろ暗い連中が愛用する訳だな。この上なくおあつらえ向きだ。

『どうする？あの見張りどうにかしねえと進めねえぞ』

『うん……。しかもめっちゃ強そう』

『私たちが脅してる奴の一味なの？それとも無関係の人が雇った護衛の人なのかな……。？』

『どっちでもいいわ。倒さなきゃ通れないのは一緒だろ？だったらサクツと倒してとつと進もうぜ』

寺坂の言うことも一理ある。だが、そう上手く行くかな？相手は2人。人数で勝っているが、相当な手練だろう。声を出させず、応援を呼ばせず、速やかに無力化するのは難しそうだが。

腕を組み、彼らを物陰から睨んで思案していると、殺せんせーが寺坂の言葉を肯定しながら口を開く。

「ヌルフフフ、その通りです。寺坂くん。そして、倒すにはキミの持っている武器などが効果的でしょうねえ」

「……ケツ。透視能力でもあんのかよ、テメーは」

武器？寺坂はそんなものを持って来ていたのか。

騒ぎにならず、なおかつアイツらを無力化するのに最適な武器という奴に興味をそそられ、背負っていたリユックを降ろす寺坂の動きを何気なく見守る。

「出来るのか？一瞬で2人を仕留めなければ連絡されて応援がくるかもしれないぞ」

「任せてくれて。おい木村、テメー一人なら敵だと思われねえだろ。ちよつとアイツらをここまで誘い出してこい」

「はあっ!?俺が?どーやって!?!」

「知らねえよ、なんか怒らせること言えばいい」

あまりにアバウトで適当すぎる指示に表情が曇る木村と苦笑する面々。そんな中で唯一楽しそうにカルマが手を叩いた。

「じゃあ、こう言えばいいよ」

「ノツて来たね、カルマくん……」

楽しげな笑みに眩く渚。俺たちを尻目にカルマは意気揚々と木村に何かを耳打ちし、よほど酷い煽り文句だったのか、俺が言わなきや駄目なのか!?!とビビる様子の彼。

ただ、時間がない事を察してか、木村は肩を落としてため息を一度吐くと、切り替えたよう。ずんずんと歩き出す。

そして、警備のおっさんたちの前に立つと言い放つ。ある意味では毅然と。そして全力でバカにしたように。

「あつれエ、脳味噌くんがないなア〜!こいつらは頭の中まで筋肉だし〜!……人の形してるんじゃないやねえよ。豚肉どもが」

「あは、本当に言っちゃった〜」

「ほんと、素敵な性格してるよな、お前。木村になんて事言わせてるだよ……。あれじゃあジャステイス(笑)だろ」

「まあ良いじゃん。あ、ほら、木村こっちに来る。寺坂、準備準備〜」
「わあってるよ。ったく、おい吉田!」

木村の煽りに血管ピクピクでブチギレている警備のおっさんたちが鬼の様に凄まじい形相でこちらに逃げ帰ってくる木村を全力で追いかけていた。

寺坂はと言うと、リュックの中から黒くて細い円柱状の棒を取り出すと、吉田に向かって無造作に投げる。

「アイツら押し倒して首筋にそいつを当てたらグリップのスイッチを入れる」

「は？てか、なんだよこれ？」

「いいから。ほら、来るぞ！」

直後、木村が壁に隠れる俺たちの横を通り過ぎ、それに遅れてドタドタと激しい音を立てる男たちが走ってくる。

寺坂と吉田はタイミングを合わせて飛び出すと、宣言通り、男たちをタツクルして押し倒し、持っていた棒を首に押し当てる。

その形状から警棒か？と思ったが、そうではないことがすぐに分かる。彼らが声を上げる前に押し付けていた棒のグリップ部分にあるスイッチを押すと、棒の先端からバチバチと激しい電撃音を迸らせた。

「がっ……!?!」

短い悲鳴と激しい痙攣の後、警備たちは沈黙する。

「スタンガンか……?」

「ああ」

俺の呟きにぶつきらぼうに頷く寺坂。

なるほど、確かに対人においては無類の威力を発揮する武器だろう。しかし、よく持って来ていたな、そんなの。

「タコに電気を試そうと思って買っておいたのよ。まさか、こんな形でお披露目とは思わなかったがよ」

「買ったといたって……高かったでしょ、それ」

「ん、あ、ああ。実は最近、臨時収入があつてよ」

バツの悪そうな寺坂。あの反応から察するに俺たちに対して後ろ暗い事。つまりはシロとイトナ関連だろう。

だがまあ、いい。お陰で助かったのだから。

何気なく倒した男たちを観察する。

気にしすぎかもしれないが、体付きがゴツすぎる気がする。少なくとも下であったヤクザたちはもつとヒョロかった。

なんというか、鍛え抜かれた精鋭、みたいな印象を受ける身体と言うべきか。鍛えようと思わなければ鍛えられないような所まで筋肉が付いていて、一般人でないことはよく分かる。

「……？」

「乃咲？どうかしたの？」

男たちを観察していて気がつく。こいつらの胸元、妙に膨らんでいる。ぱつと見は男なのでパイ乙ではないことは確かだが……。となると、武器か？でも、折り畳みナイフにしては大き過ぎるような……。「……こいつら。武器持ってる？」

「良い観察眼です、乃咲くん。その通り。寺坂くん、彼らの胸元を探つて下さい。キミのスタンガンは良い武器ですが、膨らみから察するにそれ以上に良い物が手に入りますよ」

殺せんせーの言葉に怪訝そうな顔をして男たちの胸元に手を突っ込む寺坂。探ってから数秒後、その顔が凍り付く。

何事かとその挙動を見守っていると、彼が取り出したのは静かに黒光する鉄の塊だった。

「ほ、本物の銃……！」

小型のリボルバーが男たちの胸から出て来た。

予想外のブツの登場にたまらず思考が停止した。

本物の銃？バカな。ヤクザですら持っていたのは精々ナイフだったんだぞ？それをなんでこんな奴らが銃なんて持ってる？

銃なんてそう簡単に手に入るものではない。猟銃とかならまだしも、奪うにしろ、盗むにしろ、この平和な日本では拳銃を堅気が手に入れることはほぼ不可能に近いはずだ。

となると、彼らは何者だ？

熱と頭痛で纏まらない思考をどうにかこうにか回し続けるが、やはり頭は思ったように働いてくれない。

どうやら俺も相当やられてしまっているらしい。いつも以上に思

考力が低下しているのがよく分かる。

だが、考える事をやめたらそれこそ負けな気がするので、回らないなりに思考を続けてこの進行を見守る。

「千葉くん、速水さん。この銃は君たちが使いなさい」

「っ……」

「……！」

指名された2人が息を呑む。

当然だ。今まで使って来たエアガンと本物の銃では文字通り重みが違うし、なにより、先の暗殺で狙撃を失敗したと自責していた2人だ。殺せんせーからの言葉に尻込みするのも無理ない。

「烏間先生はまだ精密な射撃ができるほど回復していない。現状、それを最も上手く扱えるのは君たち2人です」

そう、殺せんせーの言う通りだ。ここにいるみんな、銃が下手な訳じゃない。ただ千葉と速水さんがずば抜けて上手いのだ。

だからこそ先の暗殺では彼らに最後の狙撃を任せた。

「だ、だからっていきなり……！」

「ただし！先生は殺すことは許しません。君たちの腕前でそれを使えば殺さずに倒す方法はいくらでもあるはずですよ」

「……」

寺坂から手渡された銃を無言で思い詰めた顔で見つめる2人。やはり、先の暗殺が失敗に終わった事を気にしている。

「さて、行きましょう。ホテルの様子を見る限り、敵が大勢で陣取っている気配は無い。雇った殺し屋も残るはせいぜい、1人か2人。このまま畳み掛けて薬を奪取します！」

「おう！さっさと行ってブチ殺そうぜ!!どんな顔してんだ？こんなクソな計画を立てる奴はよお！」

キレる寺坂。その顔色は優れない。緊張しているような、焦っているような、そんな顔。

もしかしてコイツもやばいんじゃない？なんて良くない想像をしてしまう。感染を疑うべき人物はあのトロピカルジュースを飲んだ者全員だ。ウイルスが悪さをしだすまで個人差があるようだから、ここに

来て体調が悪くなりだしてもおかしくない。

俺だけではなく、寺坂も無茶するのは不味そうだな。

みんなの先頭をずんずんと進んで行く寺坂を見送りながら、最後尾で銃を見つめて苦い顔をしていた千葉と速水さんの仕事人コンビに向けて声をかける。

「行こう、2人とも。みんなに置いてかれるぞ」

「……乃咲。頼む、代わってくれないか……?」

千葉から弱気な言葉が飛び出す。

職人気質というか、仕事を任されたら言葉ではなく、結果と仕事に対する姿勢で応える彼らしくない弱音。

「なんでだ?」

「だって俺……。さっきの暗殺でも失敗したし……。ここ一番で失敗する俺より、もつと信頼できる奴がやった方がいいに決まってる。お前も射撃の成績は良かっただろ?」

「確かに射撃の成績も上位に居ると自負しているが、殺せんせーが指名したのはお前たち2人だろ?」

「分かってる……。分かっているけど……」

「分かっているけど何だ?」

言葉を言いかけては飲み込む千葉にあえて問う。その声に続くだろう言葉を知っているが、こう言うのはやはり、本人から聞かないと意味がないと思うから。

数秒そうしていると、速水さんが徐に口を開いた。

「……………怖いんだ」

「……………ああ。怖い」

2人の表情はやはり優れない。さっきの失敗がよっぽど堪えているらしい。銃を持つ手は小刻みに震えていた。

「さっきはエアガンですら失敗した。リハーサルよりもずっと良い状況で、理想的なロケーションが揃っていたのに。俺たちはミスった……。チャンスをモノにできなかった」

前髪からはみ出た千葉の目が震えていた。その目の動き、手の震え、声の強張りから彼が何を懸念しているのか分かる。

それは速水さんも同様で。ゾーンに入るまでもなく、彼らの意識の波長が乱れているのは分かってしまう。

「もし、失敗してしまったら、相手を……殺してしまうかもしれない。もし、外してしまったら、俺たちのうちの誰かが殺されるかもしれない……！」

「この見張りが銃を持っているってことは、これから戦うことになるかもしれない殺し屋だって銃を持ってるかもしれないってこと……だから……！」

2人は最悪の可能性を想像しているのだろう。失敗した時のことを想像して、手が震え、瞬きが多くなり、どんだん息が荒くなっている。不味いな、このままじゃ、2人とも過呼吸になるかもしれない。どうにかして落ち着けないと。

肩の上下が激しくなる2人。

俺は少し躊躇った後、2人の意識の波が高くなったタイミングを見計らって彼らの首筋の動脈をその波長の昂りごと押さえつけるように軽く触れた。

思ったのだ。クラップスタナーを一言で言えば意識の波長を読み、極度の緊張に追い込み、意識を飛ばす技だ。

けど、意識の波長を読んで相手を追い込むことができるなら、逆に相手の波長を落ち着かせてやることもできるんじゃないかって。結果、それはドンピシャだった。

「っ……」

「……あ、れ……？」

千葉と速水さんがキョトンと俺の手に自分の手を乗せパチクリと脛をしばたかせていた。

どうやら俺の目論みは成功したらしい。

にしても、なんか、今日の俺はおかしい。みんなを焚き付けるような事を言ったり、知らない他人を助けたり、体調良くないのを誤魔化したり、こんな風に同級生に触れたり。本当に自分らしくないことをしている実感がある。

でも、コイツらに発破掛けられるのもこれで最後だろうから。だか

ら少しくらい、自分らしくない事してもいいよな？

説教だなんて俺らしくないけど。俺らしくないことをやって、コイツらが多少でも前向きになれるなら。

「0・5秒射撃が早ければ、殺れていたかもしれない。30cm近ければ当てられたかもしれない。律がそう言ってたよな」

「……聞いてたのか」

「ああ。聞こえてた。それでお前らが思い詰めてるのも知ってた。でもな、一つだけ言っておくことがある」

「なに……？」

「お前らはあの時、俺の指示に従って撃った。違うか？」

「……ああ。お前の声を合図に撃った」

「だったら失敗の原因は俺にもある」

「そんなこと……。だって、撃ったのは私たちで……」

「そうだな、撃ったのはお前らだ。千葉は動作を0・5秒短縮出来たかもしれないし、速水さんは30cm詰められたかもしれない。けど、それを言い出したら俺も同じだ。あと1秒早く指示を出していれば千葉は余裕を持てたかもしれない。あと30cm以上速水さんの方へ殺せんせーを誘導していたら殺せたかもしれない」

「……」

「いいか？ たらればの話をしたらキリがないぞ。触手を破壊するタイミングをもう少しずらしていたら、もっと殺せんせーを弱らせていたら、お前ら以外にもスナイパーを配置していたら。こうしていたら殺れたかもしれない、なんて話は無限に出てくる」

「……けど」

「けどもへったくれもない。俺たちは最善を尽くした。そして失敗した。なら、その責任はみんなのものだ。千葉と速水さんだけで背負うべきものじゃないし、ここまで言ったのに『それでも自分の所為だ』とか思うならそれはただの傲慢だ」

俯く千葉と速水さんに、そしてどこか自分に言い聞かせるように思いつく限りの言葉を紡ぎ続ける。

「大体、たった一度の失敗が何だ。俺なんて今回を含めたクラス合同

暗殺3回中3回指揮をとって全部失敗させてるんだぞ？ たった一度のお前らがそんな落ち込んでたら、俺なんてみんなへの申し訳なさと自分への失望でノイローゼになって学校来れないレベルになっなきゃダメだろ」

「乃咲……」

「考えすぎなんだよ。そもそも殺せんせーに完全に警戒されてるお前らじゃなかったらあんな風に意表をつくことは出来なかったかもしれない。もしかしたら完全防御形態を使わせるに至らなかったかもしれない。そしたらこの先出るかもしれないもつと良いプランをあの形態で躲されたかもしれない。けど、今回失敗したからこそ、完全防御形態の存在を知ることが出来て、今後の対策を取れるかもしれない。たればするならそう言うプラスの方向でやろうぜ」

本当に俺らしくない。前向きな思考なんて柄じゃない。斜に構えて最悪の状況を妄想する、それが俺だ。

でも今後、同級生に説教するなんて二度とないんだろう。A組に行けばこんなこともなくなる。たぶん、そんな確信が俺を饒舌にさせているのかもしれないな。

「まだ先生の暗殺期限まで半年もある。チャンスなんてこれからいくらでもあるだろう。そんな無数の可能性の中でたった一回、成功させれば良い。俺たちはその一回を掴むために努力を重ね、経験を積み、学んでるんだろ。何百とあるチャンスのうちの一回をミスった。今回の失敗はたったそれだけのことなんだよ」

「だけど、失敗できない局面が目の前にあるんだ。ありえるかもしれない銃撃戦。射撃手の俺たちがミスったら……」

「お前らはミスしないよ」

「なんでそう言い切れるの？」

「速水さん、キミは動いている的にも止まっている的にも弾丸を当てられるスナイパーだ。さっきの暗殺だって、標的を外したわけじゃない。違うか？」

「……………」

「千葉、覚えてるか。律が転校して来た時の合同暗殺」

「ああ……」

「覚えてるんなら考えてみる。お前はあの時、マツハで動き回る殺せんせーの触手を破壊してるんだぞ。んで、例の如く、お前だった的外したわけじゃない。そうだろう？」

「あの時はお前の指示があったから」

「今回だって俺がいる。俺だけじゃない。みんなもいるし、なにより殺せんせーがいる。0.5秒の隙を見つけてくれる怪物が指示をくれるんだ。俺なんかよりも確実な指示をな。それに例え銃撃戦になつたとしても、相手は人間。音速には全然届かないただの人間だ。普段からマツハ20を狙ってる俺らだぞ？殺せんせーに比べれば止まってるようなもんだろ？楽勝じゃない」

励ましにしては大雑把。言っていることのほとんどが極論じみている。だが、それでも俺は言葉を止めなかった。

いつの間にこんな説教くさくなっちゃったのかな、俺って奴は。少し自分に呆れてしまう。

「お前らだけがソレで戦うわけじゃない。暗殺も戦闘も同じだ。必要ならみんなでお前らをサポートする。仮に失敗したってみんなは何度でもチャンスを作ってやる。お前らだけに責任を負わせたりなんかしない。努力して足掻く奴には絶対チャンスが来るもんだからさ。こんな事で諦めないでくれよ」

「努力して足掻く奴にはチャンスが来る……か」

「学年最下位から1位になった奴が言うと言得力あるな……」

「だろ？俺みたいな浮ついて喧嘩ばかりしてた不良児に出来たんだ。何事にも真剣に、黙々と向き合えるお前らに出来ない筈がない。俺はそう思うね」

「……そう……ね。分かった。もう少し、頑張ってみる……励ましてくれてありがとう」

「……だな。ありがとう、乃咲。少し元気出た」

千葉と速水さんが銃の感触を再度確かめる様にグリップを強く握り締める。

万全とまだはいかない。まだ迷いはあるようだが、瞳に少しだけ力

が戻った様に見える。

だが、その様子を見て少し安心した。

「こんな言葉で良ければいつでも掛けてやるよ。ほら、早く行こう。みんなに置いて行かれる」

こんな拙い言葉の数々で俺がいなくなった後もみんなの頼れるアタッカーであり続けるだろうこの2人が前を向く一助に慣れたのなら、万々歳だ。

俺はふらつく足を地面に叩きつける様に歩き出し、千葉と速水さんの背中を急かすように押してみんなの背中を追った。

50話 銃撃戦の時間

千葉と速水さんの背中を押しして階段を上がり、やって来た伏真島殿上ホテル8F。ラスボスのいるフロアまであと2階。

常に敵がいなかを意識しながら進む。今のところ前方に敵影はなく、監視カメラを使って警戒してくれている律から何の知らせもないことから、後方にも敵は居ないと見ていいだろう。

けれど、油断は出来ない。その辺の壁に擬態していたり、天井に張り付いていたりする忍者ちつくな奴が居ないとも限らない。悲観的になる事なく、けれど常に最悪の状況を意識する。

「10階に着いたけど、実はエクストラステージで屋上を追加される的なギミックないよな……流石に」

「無い……とは言い切れん。我々の動きに気付いた黒幕が屋上に逃げる可能性を考慮すればな」

「ありがたく無いボーナスステージなこつて」

ぼやきながらたどり着いたのはコンサートホール。

音を立てないように歩いているにも関わらず、微かな衣擦れの音すら反響するフロアを警戒を込めて出来るだけ無音で進む。

屋外プールにバーフロアにコンサートホール。本当になにから今まで揃っているな、このホテル。

凶面をまた千葉曰く、テレビ局に似た構造で、テロリストに占拠されにくい構造になっているのだとか。

事実、ここまで凄く入り組んでいて、移動に時間が掛かってしまったが、逆に言えばこの構造は相手を追い詰めることができればその分だけ逃げ場がないってこと。それが黒幕の首を絞めてくれればいいが。

それこそ黒幕を屋上まで追い詰めることが出来ればパラシュートでもない限り、逃げられることはない筈だ。

あと少しで薬を奪取できる。それまで、この体調が保ってくれればいいのだが。

寒気と体の節々に走る痛みで震える脚を叩きながら、コンサートホールを進んでいると、何の前触れもなく、俺の胸ポケットに入れたスマホを律がバイブさせた。

その振動に俺は思わず潜入初期に彼女に依頼したことを思い出し、戦慄する。彼女がスマホを振るわせるのは敵が現れた時の合図だとあの時、俺が取り決めたのだから見過ごせる筈がない。

俺の足が止まり、近くを歩いていた千葉と速水さんが振り向く。それと同時に先頭の烏間先生も脚を止めたのだろう。みんなその場に立ち止まった。

何事かと顔を見合わせるみんなに向かって烏間先生が振り返り、手早くハンドサインで指示を出す。

『皆さん、敵です。数は1。正面から』

各自のスマホにリンクした律の言葉に皆の緊張が走る。が、瞬時に切り替え、各自椅子の裏に隠れるあたり、この4ヶ月の訓練が確実に実を結んでいるのが窺える。

皆と自分の成長を感じていると、正面から足音が聞こえて来た。カツン、カツン、と硬いヒールがステージを叩く音がこの静まり返ったホールに大きく響く。

無警戒に歩いていた足音がステージの真ん中に差し掛かった辺りで停止する。僅かな呼吸音と僅かな水音が鼓膜を叩く。

なにか、棒付きキャンディーでもしゃぶっているかのようなリップ音が不気味で、警戒を強めると、敵が声を出した。

「15……いや、16匹か？呼吸も若い。ほとんどが十代半ばってところか。驚いたな。動ける全員で乗り込んで来たのか」

……まじかよ。呼吸音だけで人数や年齢まで割り出せるのか。プロの殺し屋ってのはつくづく規格外だな。

ビッチ先生といい、ロヴロさんといい、ここまでに会った殺し屋といい。誰もが底知れない。

ますます警戒が高まり、ステージを見つめる視線が鋭くなるのを感じていると、そんな俺たちを威嚇するかのように、鈍い轟音とガラスの割れるような甲高い音がほぼ同時に響いた。

……割れたステージの照明、反響する音、目を凝らして見える微かな煙。確認するまでもなく、それが発砲音であることは明らかであった。

懸念したことが現実になってしまった。これから俺たちは本当の銃撃戦を行うことになるのだろう。

千葉と速水さんの背中を押しにおいて情けないことに、少々ビビってしまった。

「言つとくが、このホールは完全防音でこの銃はホンモノだ。お前ら全員撃ち殺すまで誰も助けに来ねえって事だ！お前ら人殺しの準備なんてしてねえだろ!!大人しくボスに頭下げとけや!!」

指で銃を器用に回しながら降伏勧告してくる殺し屋。そんな彼の銃に狙い澄ました一射が放たれる。

バアアン!とこれまた鈍い音。しかし、発射タイミングがコンマ数秒早かった、あるいは遅かったのか、回っていた銃に撃ち放たれた弾丸が命中することはなかった。

……惜しい。やはり止まっている標的を狙うのと高速回転する獲物に当てるのではやはり難易度が違うか。

だが、狙いは外れていない。初めての実弾銃と撃ち慣れたエアガンの使い勝手の違いで外したと言っても過言ではない精度の射撃だったように思える。

今撃ったのは速水さんか。やはりスナイパーとして優秀だな、彼女は。今のを気に病んでいなければいいが。

しかし、この状況。前向きでいられないのも確かだ。こちらが銃で武装していることが向こうにバレたということでもあり、速水さんの位置が相手に捕捉された可能性も充分に考えられる。

「速水さん!顔を出すな、今ので捕捉された可能性がある。顔を出した瞬間、狙い撃たれるぞ!」

速水さんは割と近くにいますが、何処から声を出しているのか判断を攪乱させるためにわざと大声で注意を促す。

「はっ、頭の回る奴がいるじゃねえか。その通りだぜ!」

そんな声の後、再び轟いた発砲音。弾丸は速水さんが顔を出そうと

していた座席の間を通り抜け、壁にぶつかり、弾けた。顔を出した瞬間に殺す。そんな無言の脅し。

恐らく、不用意に顔を出したらその瞬間にゲームオーバーだろう。下手に動けない。今まで感じたことのない明確な命の危機に萎縮しそうになる。

「にしても、暗殺の訓練を受けた中学生、か。いーね。意外と美味え仕事じゃねえか！」

興が乗ったと言わんばかりになんの前触れもなく、ステージの全ての照明を点ける殺し屋。薄暗かったコンサートホールを急激に照らす過剰な光量に目が眩む。

やばい。俺たちの位置からは完全に逆光だ。ステージの様子が見辛い上に、もう一つ俺たちに不利な点が出る。

俺は地面から伸びる影を見る。椅子の影に隠れてはいるが、これを少しでもはみ出たらその瞬間、影でバレる。

不意を突こうにも向こうは完全にもう一丁の銃を警戒して俺たちを見ているため、それは難しいだろう。

「今日も元気だ、銃が美味え！」

再びの銃声。飛来する弾丸は俺の顔の一個隣を飛び、壁にぶち当たった。

「さっきの声の坊主はそこだな？」

確認するような、それでいて確信に満ちた声。

コイツ、俺の位置まで把握してやがる。声を出したのは少々迂闊がすぎたかも知れない。

「二度気配を見せた敵の位置は忘れねえ。もうお前らはそこから一歩も動かさねえぜ」

声と向けられた殺気でわかる。いま、間違いなく銃口はこちらを向いている。顔を出したが最後、殺される確信がある。

確信がある……のだが、何故だろう。言い表せないのだが、この殺し屋からなんだか違和感を感じる。

「下で見張っていた2人は暗殺専門の殺し屋だが、俺は違う。軍人上がりだ。この程度の1対多数の戦いは何度もやっている。幾多の経

験の中で俺は敵の位置を把握する術や銃の調子を味で確認する感覚を身につけた。中坊ごときに遅れをとるかよ」

元軍人。そのワードが俺の中の違和感を刺激する。

妙だ。戦争やら抗争やらがテーマの映画で拳銃の弾丸は玄関扉やソファア、車の扉程度なら貫通すると聞いたことがある。別にミリタリーオタクというわけでもないのに詳しい訳でも専門知識がある訳でもないのに確信はもてないが……。

何故、奴は撃つてこない？アレが本物の銃ならば、この座席ごと攻撃してくることも可能な筈だ。

何故、それをしてこない？貫通した弾丸では大したダメージにはならないとか？元軍人だから銃の威力を把握している。だからこそ、そういう無駄弾になることはしないとも考えられるが。

しかし、軍人。それも1対多数を何度もこなして生き残れるって奴ならばその最低限の威力で俺たちを殺す術を持っていても不思議ではない。むしろ自然だ。

奴に対する情報があまりにも少なすぎる。情報を得ようにもこうも警戒されていてはそれも難しい。

「……さあて、その銃を俺の部下から奪ったってんなら、お前らはあともう一丁持っている筈だが」

チユパチユパと銃の感覚を味で確認しているのであろう音が聞こえる。この薄暗いコンサートホールで聞こえるリップ音は奴の放つ独特な雰囲気も相まって不気味でならなかった。

動こうにも動けない。そんな手詰まり感を覚えたその時、殺せんせーの声がりっプ音しか聞こえないホールに響く。

「速水さん、乃咲くんはその場で待機！今撃たなかったのは賢明です、千葉くん！キミはまだ敵に位置を知られてはいない。先生が敵を見ながら指揮をするのでここぞと言う時まで待つのです！みんなで勝って、笑顔でここを抜けましょう」

「な、なにに……。何処から見……」

敵の言葉が止まる。その後、気まずそうな沈黙が数秒流れた後、けたたましく銃声が響いた。

「テメー！何かぶりつきでみてやがんだ!!」

「ヌルフッフ、無駄ですなあ。これぞ無敵形態の本領発揮。熟練の銃手に中学生が挑むんです。これくらいの見覚ハンデは良いでしょう」
発砲音の数だけ、弾が殺せんせーのエネルギー結晶に弾かれる音が響く。スマホのカメラを座席の間から出し、様子を撮影してみると、何やら殺し屋が凄まじい形相で最前列のシートに向かって乱射していた。

なるほど。殺せんせーと烏間先生はあそこか。

それから少し間を置き、とうとう弾が切れたのか、憎々しげな舌打ちとリロードに入ったのだろう。6つほど殻の葉莢が床に叩きつけられる甲高い音が響く。

発砲直後に葉莢が床に落ちる音がしなかったこと、そしてこのタイミングでその音が聞こえたこと、更に発砲音から割り出せる装填数から察するに敵の武器もリボルバータイプだな。

なんて考察してるうちに敵がリロードに移る。そして、そんな隙を見逃すほどのうちの担任は甘くなかった。

「では木村くん、5列左へダツシュ！」

すかさず指示が飛ぶ。指示通り、木村が走る。

リロード中とは言え、本物の銃を持つてる殺し屋の前に躊躇いなく身を晒せる木村、凄い度胸だ。

「吉田くんと寺坂くんはそれぞれ左右に3列！」

「なっ……！」

「死角が出来た！この先に茅野さんは2列前進！」

殺し屋が殺せんせーの戦術に驚き、キョトンとした顔でシャツフルされる俺たちをまだ追っている。

殺せんせーの狙いは俺たちの位置を入れ替えつつ、ちよくちよく前進させることで命中率を上げると言ったところか。

的確に殺し屋の視線を追い、死角を指示するその手腕には驚かされる。流石に毎日俺たちに狙われているだけある。普段、おちちよこちよいでエロくて、バカっぽい所があるが、こう言う時の殺せんせーは誰より頼もしい。

「カルマくんと不破さんは同時に右へ8！磯貝くんは左に5！また死角が出来ました！乃咲くんは前へ6！」

指示通りに動く。殺し屋は目と鼻の先。最前列まで3。隙を見つけてさっさと距離を詰めたくなるのをぐっと抑える。

まだだ。殺せんせーなら最高のタイミングで指示をくれる筈だ。それを信じて今は身を潜めろ、乃咲圭一。

いまの僅かな距離の移動でも息が上がり、寒気で震える体ごと自分を叱り付けるように自分自身に声を掛ける。

まずい。そろそろ体が動かなくなるのも時間の問題になって来た。やはり体力を温存しておいて正解だったようだな。バーフロアで本格的な戦闘を行っていたのなら今のダッシュでダウンしていた可能性が大いにある。

上がる呼吸を整えて、深呼吸して古い空気を肺から抜く。息を吸って、吐いて、体の中の空気を入れ替える。

まだ倒れるわけにはいかない。気合いを入れ直し、殺せんせーの指示を待ちながらいつでも動けるように体を浮かす。

「出席番号12番は左に1で準備しつつそのまま待機！」
「へ？」

殺せんせーの指示が名前から出席番号に変わった。多分、そろそろ俺たちの名前を覚えられる頃合いだと踏んだのだろう。

「4番と6番は椅子の間からターゲットを撮影！律さんを通して舞台上の様子を千葉くんへ伝達!!」

出席番号から身体的特徴、最近の趣味趣向など指示を出された本人くらいしか知らない筈の情報で出される指示。

「ポニーテールは左前列へ全身！バイク好きも左前へ2列進めます。オールバックの人は右へ3！続けて最近竹林くんイチオシのメイド喫茶に興味本位で行ったらハマリそうでちよつと怖かった2人！攪乱のため大きな音を立てる！」

「うるせー！なんで行ったの知ってんだテメー!!」

「ああ……。頭痛いからあんまり大きな音聞きたくないの……。つか、楽しかったけどハマリそうにはなつとらんし」

割と近くにいた茅野が『乃咲にそんな趣味あったんだ?』と言いた
気な顔でこつちを見ている。

別にハマリそうにはなっていないからな、と否定したかったが、そん
な体力もないので開き直って音を立て続ける。

その後もシャツフルは幾度と繰り返し返され、死角を縫っては殺し屋へ
と徐々に距離を詰めて行く。

殺し屋はもう、目の前にいる。座席一枚挟んだ向こう側に本物の銃
で武装した凄腕の殺し屋がいる。

……いるのだが、奴はこの距離でもシートごと俺たちを撃ち抜こう
とはしなかった。

さつき撃たなかったのは射程の問題もあるのかと思ったが、流石に
この距離なら銃弾の威力の距離減衰なんて気にする必要もないし、
シートを貫通した弾丸で俺たちを殺すことは可能なんじゃないのか
? ?

奴が持っているのはそれなりに口径の大きいリボルバーだ。ゲー
ムなんかだと口径が大きいとそれだけ威力が高く、また、リボルバー
という武器種自体の攻撃力が高いイメージがある。

だったら何故、撃つてこない……? ?これだけ距離を詰められて、下
手したら奇襲される可能性すらあるのに、なぜ、いまだに俺たちの1
人も撃とうとしない?

シャツフルはあくまで射手の位置を入れ替える為の行為。敵が俺
たちを見失うことを狙った策ではない。つまり、相手に俺たちの位置
自体は捕捉されているのだ。

シートごと撃ち抜くことは難しくない筈だ。むしろ、ここらで俺ら
の1人でも殺せば空気は一気に変わる。仲間を殺された戦慄によつ
て怯んだ隙に俺たち全員を殺すことだって出来るんじゃないのか?
それをしようとしなのは何故……? ?

「夏休みの初めに倉橋さんと遊ぶか杉野さんと虫取りに行くか悩んだ
結果、自分とスマホのトーク画面に言い訳しながら結局倉橋さんとの
デートを選んだ人! 左へ3!」

これ俺だよな、俺のことだよな。なんでそんなことまで知ってるん

だ、あのタコ……！

聞こえて来た指示に考察を打ち切り、腰を持ち上げ、駆け出そうと踏み出した右足に力を入れる。

あとでさつき以上の辱めを受けさせてやる。殺せんせーに対して殺意を抱きながら立ち上がったその時。

……踏み込んだ床がぐにやりと歪んだ様な錯覚に陥る感覚が右足から伝わってくる。

「な、こ……!?」

無論、地面が歪むなんてこと、こんな建物の中で起こりえる筈がない。いつも通り地面は平たく、踏み締めた足におかしなところなんてなく、しつかりと床を捉えている。

では、何故、俺は今、体勢を崩しているのだろうか？

派手にすつ転ぶ寸前、ゾーンに入り、頭が冷静な思考を回し始める。そして、原因はすぐに分かった。

俺は走り出そうと腰を持ち上げ、床を踏み締めた拍子にどうやら膝から崩れ落ちてしまったようだ。

バランスを崩し、思わず身を強張らせる。どうやら体はもう限界を迎えてしまったらしい。

プロの殺し屋の前で体勢を崩し、体を強張らせるといってもないスキを晒してしまった。

そして、俺たちが相手取っていた殺し屋はそんなスキをみすみす見逃してくれるほど生優しい相手でもなくて。

「へっ……、間抜けが……！」

崩れ落ちる身体、座席から露出してしまっている体。殺し屋の向ける冷たい銃口がジャキツと音を立ててこちらを捉える。

「乃咲いいいい!!」

千葉を始めとした皆の悲鳴混じりの叫び声が聞こえる。

死ぬかもしれない。そんな予感をすつ飛ばして俺は確信した。

——死ぬ。

直後、ホール内に響き渡る、鼓膜を激しく叩き付ける痛烈な発砲音。放たれる弾丸、登る微かな白煙。

この眉間を撃ち抜かんとする凶弾が俺を捉えた。

51話 反撃の時間

「乃咲いいいいっ!!」

千葉の声、その直後に放たれた発砲音、皆の息を呑む音、勝ちを確信した殺し屋の口元が歪む音。それだけじゃない。誰かの心音、取るに足らない衣擦れの音、俺の体を巡る血流の音。本来、聞こえるはずのない音を含めた全ての振動を鼓膜で感じる。

弾丸はまだ遙か遠い。また、無自覚にゾーンに入ってしまったのだろうか。スローモーションに見える世界の中で弾丸はたった今、白煙を身に纏い、銃口から飛び立ったばかりだった。

しかし、流石に早い。この時が止まったかの様に錯覚してしまう世界の中でも弾は確実に俺に迫っている。そして、その軌道は勿論、ライフリングによる回転すら今は目で追うことが出来た。

故に手に取るように理解出来てしまう。この凶弾は間違いなく俺の眉間を貫くだろう、と。

ゾーンを抜けたその瞬間、俺は自分が殺されたことすら理解出来ず、額に穴が空き、チカラなく倒れる事だろう。

以前、倉橋さんを助けた時の様に身体を動かそうと試みるが、身体は言うことを聞かない。

それだけ身体はダメージを受けていたということなのだろうか。そもそもゾーン中に身体を動かせたことなんて片手で数えられる程度しかない。

初めて身に迫る自らの死に思考が加速する。以前、カルマの投身自殺紛いの暗殺を見た時の様に視界から色が失われ、色鮮やかだった世界がモノクロに変わる。

世界がますます遅くなる。飛来する弾は一段と遅くなった様に思う。けれど、弾丸が止まった訳ではない。

脳裏にこれまでの記憶が過ぎる。嫌に鮮明に、今までの人生で経験してきたことが頭の中を駆け巡る。

走馬灯という奴なんだろう。聴いたことがある。人は死を覚悟し

た時、なんとか生き残るためにこれまでの人生で経験したことから打開策を見つける為に極限まで集中し、頭の中の情報を検索する。その結果が走馬灯なんだとか。

頭の中を通り過ぎてゆく記憶。これまでの経験、俺の人生。周りに勝手な期待を押し付けられ、それに応えるべく独りよがり努力した過去、そして親父に失望し、墮落し、殺せんせーと出会い、烏間先生に憧れ、親父に言葉を掛けられ、そして今に至る。

ああ……。なんて薄っぺらい人生だろうか。結局、何も出来ずに頭を撃ち抜かれて死ぬ。それも自分のミスで。

……笑えない。

走馬灯の中から生き残る手段を必死で探す、たかが14年の人生。銃を向けられただけならまだしも、既に発射された弾丸の避け方なんて探して出てくるわけもなく。思考を巡らせるものの虚しく、走馬灯も終わった。

嫌になるくらい短い走馬灯の果てに、俺は止まった世界にただ1人、取り残された。

俺に残されたのはもう、どうにもならないという現実と耳鳴りがするくらいの静寂に包まれた時の止まった世界、そして、生存を諦めクリアになった思考だけ。

このゾーンを抜けた瞬間、死ぬ。2度目の実感に今度は途方もない恐ろしさが襲い掛かってくる。

背筋に氷でも当てられたかのような寒気。この時、俺は初めて恐怖とは寒いものなのだと知った。

首から背骨を降るように走る冷たさは尿意を伴って、俺の思考を麻痺させる。漏らしてはいないが、漫画やアニメの恐怖で失禁する奴の気持ちがあつた。

回避しようのない死、自らの力ではどうにもならない現実。弾丸は既に目と鼻の先にあつた。

ゾーンを抜けるまでもなく、このままでは弾丸が眉間を貫く感覚を永遠と味わうことになってしまうだろう。

もう諦めて即死することを選んで方が苦しむことはないだろう。

だが、頭の中に残っている生への執着がそれを拒む。

弾丸が迫り、俺の眉間との距離が数センチあるかないかの所に来て、思考が更に加速して行く。

——死にたくない、死にたくない、死にたくない……！

思考が加速する程に集中力が増して行く。時間が更に遅くなり、遂には弾丸すら止まって見えた。

その頃には視界から影が消えた。モノクロだった世界はまるで鉛筆で最低限の輪郭のみを描いたかのような景色になる。

《……なにが欲しい？》

いつかのように声が聞こえた。身体が再び問いかけて来る。試す様な、窺うような無機質な声が。

答えればこの身体は与えてくれるのだろうか。この状況から生きながらえる術を。この現実を覆す力を。

生きる為にこの状況を打開できる力を考えるが、恐怖で思考が回らない。ただ生き残りたい、生きていたい。そんな風にしか頭が働いてくれなかった。

気が付けば吐露していた。

「何も要らない」

鉛の様に、まるで地面に融着したかの様に動かない手足とは裏腹に口だけは驚くほどスムーズに動いた。

口から出たのはそんな言葉。垂らされた蜘蛛の糸を振り払うかのような言葉。けれど救いを拒んだ訳ではない。

ただ、何も思いつかなかった。この状況を打開できる術が。何を望むのが正解なのか、分からなかった。

頭の中にはただひたすらに駄々を捏ねる幼子の様な思考しか残っていないかった。死ぬのが怖い。そんな思考だけ。

立ち尽くす俺に再び声が問いかけて来る。

《じゃあ、キミはどうしたいの？》

声だった。さっきまでのこちらを試す様な声ではない。穏やかで、泣き喚く子供を諭す様な、慈愛に満ちた女性の声だ。

その声を聞いた時、ふと思った。聞いたこともない筈の声なのに、

『ああ、なんて懐かしい声だろう』って。

その声を聞いた時、ふと感じた。今まで生きてきた中で感じたことのない、底知れない安心感。声を聞いただけで胸の底から温かいものが込み上げて来る感覚。

泣き出したくなるくらい懐かしい声。聞いたこともない筈のその声に俺は縋る様に口を開いた。

「……生きたい。死にたくない……！」

震えた声。震えて、力もなくて、聞くだけで憐れな気持ちになる。自分でもそんな風に思ってしまう情けない声。

自分が情けなくなつた。ほんの少し前まで『地球が減じる＝死』とか割り切つたことを考えていた癖に、いざ自分の命が危機に瀕したらこのザマだ。小便漏らしそうなくらいに怯えて、情けない声で誰のものとも知らない声に無様に縋る。

みつともなくて格好悪い。自分に対して心底そう思つた。俺は自分をもつと格好いい奴だと思つていたのに、そんなことは全然なかつた。俺はイキつていただけだつた。

人の本質とは極限状況にこそ現れるというが、その通りだつた。俺はどこまでも格好悪くて情けない。生き汚い奴なのだと今、この瞬間に初めて理解した。

生きたい。まだ死にたくない。ようやく親父に言ってもらえた『期待している』そんな言葉に今度こそ答えたい。

死ねない、死にたくない。生きる、何がなんでも生きたい。俺は今までの人生を含めてかつてないほど必死に願つた。

迫り来る死に対して瞼が震えるほど強く目を瞑り、怯え、念じているとまた、例の声がした。頭の中で、あるいは身体の内側から、あの慈愛に満ちた優しく温かな声が聞こえる。

《じゃあ、^{行き}生きなさい》

優しく背中を押す様な声。その声が聞こえると同時に不思議な感覚に包まれた。身体を包み込む様な温もりを肌で感じた。

この止まつた世界の中には俺しかいないのに、まるで誰かに抱きしめられているかの様な温もりで包まれる。

気が付けば、背骨をなぞる様に舐める冷たさは不思議な温かさで掻き消され、どうにもならない現実と迫り来る死への恐怖で凝り固まっていた俺の身体は全てのしがらみから解放されたかの様に軽くなった。

——動く。

体勢を崩したまま金縛りにあったみたいに動けなくなっていた身体が急に動き出し、無様にもそのまま尻もちをつく。恐怖で滲み出していた涙が、痛みで溢れ出し、思わず目を瞑る。

尻から腰に掛けて鈍痛が走る。だが、こうして尻の痛みを感じることもができるということは、ひとまずは眼前の危機を回避できたということなのだろう。

尻を摩りながら目を開ける。そして、異変に気付いた。

弾丸はまだ、そこにあつた。色も影もない輪郭のみの世界で今だに空中で静止していた。

世界は今だに止まったままだった。今まで経験したことがない明らかなる異常事態に理解が追い付かなくなり、それと同時に頭の中が真っ白になり、極限まで高まっていた集中力が系でも切れるみたいにプツリと音を立てて断裂する。

瞬間、世界は正常に動き出した。色彩が戻り、さまざまな音が鼓膜を打ち付ける。

空中で静止していた弾は急激に勢いを取り戻し、ヒュン、と鋭い風切り音を立てながら目にも止まらない速さで飛び去った。

……弾丸を避けたのか、俺は？

もう何もない虚空を見上げて呆然とするのも束の間。死を覚悟して大量に分泌されていたアドレナリンでも切れたのか、身体が思い出したみたい悲鳴を上げた。

「かつ……はっあ……!!?」

生存を実感した身体が恐怖で抑制されていた不調を急激に訴え始める。頭は内部から大きな針で何度も力強く刺されているみたいにズキズキと痛むし、体は凍えるのではないかと思うくらい寒く、肺は新鮮な空気を求めて暴れ回り、心臓は血管を破裂させんばかりの勢い

で血液を体に送り続けている。

あまりの不調で意識が飛び掛けてしまう。視界が徐々に白と黒で明滅する。気を緩めたら間違いなく持っていられる。

そんな確信があったので、少しでも身体を落ち着かせる様に深く深呼吸を繰り返した。

「乃咲っ！」

同じ列で待機していた茅野が慌てて駆け寄って来る。抱き起こされ、冷たい床から体が剥がれ、人肌の温もりが伝わる。

「な、なにに……!? 確かに命中した筈だっ、ありえねえ……! 音速だぞ!? 避けられる訳がねえ!!」

シートで隠れて見えないが、殺し屋の半狂乱に混乱する声が聞こえて来る。リロード以外で見せた明確な隙。

殺せんせーと俺たちの狙撃手2人はそんな一瞬を見逃すことは当然なかった。

「シャッフルも充分! 隙もできた! 今が絶好のチャンスです! さあ、出席番号12番! 立って狙撃!」

殺せんせーの指示に俺たちから少し離れた位置にあるシートの陰から銃を構えた人影が飛び出し、銃口を殺し屋に向ける。

「読んでたぜっ……!」

しかし、いくら動揺していると言っても相手はやはりプロ。いつまでも隙を晒す様なヘマはしない。直ちに立ち直り、人並外れた速さで銃をその人影に向けて躊躇なく引き金を引いた。

明確な殺意を伴って放たれた2発目。それは寸分の狂いもなく真っ直ぐに飛び、シートから飛び出したソレの眉間を撃ち抜く。

……が、ここで殺し屋にとって2度目の誤算があった。

「なっ、に、人形……!?!」

そう、彼が撃ち抜いたのは菅谷が音を立てずに有り合わせの材料で作っていたカカシだったのだ。

確かな手応えに反して何も殺せていない現実には呆気に取られる殺し屋。殺意が緩んだその刹那、千葉がシート横から滑り出る。

『狙うならあの一点です』

「オーケー、律」

静かなる仕事人の殺気が撃ち抜くべき一点に絞り込まれ、前髪で隠れた双眸の見据える先に鉛玉が叩き込まれる。

その指先に躊躇いはなく、引き金を引く指はさつきまであんなにも迷いで満ちていたとは思えないほどに軽やかで。

ズキユン！と甲高い銃声が反響する。

響く銃声、金属の碎ける鈍い音、訪れる静寂。

ステージに立つ殺し屋にはなんの変化もない。彼もまた自身が無事であることを確認するかのように胸元に手を当てると自分が無傷であると確信し、彼の中で導き出された答えを嗤い出す。

「フへへへ、外したな！」

そう、千葉の一射は殺し屋を捉えてはいなかった。故に、彼はまだ無傷だった。

当然だろう。何故なら――。

「これで2人目も場所が――!!?」

初めから、千葉の狙いは殺し屋ではなかった。

きつと、これで2人目も場所が割れたな、とでも言いたかったのだろう。結局、言葉が最後まで紡がれることはなかったが。

勝ち誇った顔をしていた殺し屋に向かって横殴りに突進する、このステージを照らしていた照明。

「つ、釣り照明の金具を狙ったと………つ!？」

そう、千葉が狙っていたのは初めから殺し屋ではなかった。彼の頭上にある釣り照明を保持する金具。それを破壊し、照明を落として攻撃するのが狙いだったのだろう。

この薄暗い中、あんなに離れた小さな標的に当てるとは。相変わらず、千葉の狙撃能力は頭一つ抜けている。

「く、そ、があ……!」

殺し屋が苦し紛れに銃を構える。落ちて来た照明に横腹を強打され、意識が朦朧としている様だが、狙いはしっかりと千葉を向く。身体が痙攣している癖に、銃身にはブレがない。プロの意地という奴なんだろう。恐ろしい執念だ。

恐ろしい執念だったが、その引き金が引かれることはなかった。殺し屋が構えると全く同時に千葉とは別方向からつんぎく銃声。直後、奴の手からリボルバーが弾け飛んだ。

「ふーっ……、やあつと、当たった」

目を向けるとそこには白煙を上げる銃を両手でしっかりと握り、安堵したというより、仕事をやり切った仕事人のような息を吐く速水さんの姿があった。

この子もやはりすごい。構えた銃を撃たれる前に狙撃する技量と素早く照準を取る冷静さ。間違いなく普通の中学生が持つてるものではないだろうな。

俺たちのクラスの狙撃手コンビはやはり優秀だ。

「んぐっ……!?!」

戦闘が終わり、安堵したら頭痛が一際大きくなった。やばい、こんだけ体調を崩したのは初めてだぞ。

思わず身じろぎして頭を押さえる。肌で感じる空気が刺すみたいに冷たくて痛みすら覚える。

「圭っ!」

撃たれた俺を心配してくれたみんなが駆け寄って来るが、片手でそれを制止して、代わりに倒した男を指差す。

それだけで意図を察してくれた様で、寺坂たちがガムテを出しつつステージの上で気絶している殺し屋に向かっていく。

そんな彼らと入れ替わる様に殺せんせーを片手に持った烏間先生がシートを飛び越えながら慌てた様子で近づいて来る。

「大丈夫か、乃咲くん!?!」

「すみません。ドジッちゃいました」

半笑いを浮かべるが、痛みですぐに顔が歪む。今すぐ布団で横になりたい。そんな気分だ。

「怪我はありませんか?」

「はい。ちよつと尻を打ったくらいです」

「………申し訳ありません。キミの不調に気付いていたにも関わらず……。配慮が足りていませんでした」

三日月の口の口角が下がり、申し訳なさそうな顔をする殺せんせー。だが、謝られるのは見当違いだ。

「いえ。自己管理の問題です。みんなが倒れた時から既に怠さは感じていました。あの時、もっと真剣に考えていればこんな轍は踏まなかつたんです。殺せんせーは何も悪くありません」

「そういう訳にもいきません。先生には監督者としての責任がある。そして、私はそれを果たせなかつた。教育者失格です」

……違う。本当に殺せんせーは悪くない。体調不良を隠していたのは俺だ。それが崇つて死にかけたのは他の誰でもない俺だけの責任だ。この人にこんな顔をさせる為に着いて来た訳じゃないのに、全てが裏目に出てしまった。

「……その辺にしておけ」

いつまでも謝り合う俺たちを見かねた烏間先生が殺せんせーを地面に置き、俺と見比べると重々しく口を開いた。

「お前は言ったな。教師と生徒は馴れ合いではないと。なら、背負うべき責任は背負わせてやれ。乃咲くんは自分の体調を見誤つた。それは紛れもなく彼の失態だ。そしてそれを認め、反省している。それを認めてやるのがお前の言う自立性を養うということに繋がるんじゃないか？」

「……ですが」

「無論、俺たちになんの責任もないと言いたい訳じゃない。ただ彼には彼の、俺たちには俺たちの責任がある。違うか？」

殺せんせーにこんな風に語りかける烏間先生を見たのは初めてだ。烏間先生が同じ教育者として、殺せんせーを諭している。

「……ええ。烏間先生のおっしゃる通りですね。申し訳ありません、少し感情的になってしまいましたねえ」

身体があつたら触手でポリポリと頭を搔いていただろう。烏間先生の言葉を受けた殺せんせーが視線を向けて来る。

「乃咲くん。動けますか？」

言われて身体に力を入れる。床に手を付き、膝を立て、踏ん張り、腰を浮かせる。だが、体を支えていた腕や足の関節から力が抜け、ガ

クツと再び崩れ落ちてしまった。

「つと」

茅野が再び抱き止めてくれた。

「乃咲、本当に無理しないほうがいいよ。身体、すっごい熱い……！それに力も入ってないみたいだし……」

「ごめん。受け止めてくれてありがとうな、茅野。確かに言う通りだわ。力を入れても直ぐに抜けちまう」

「茅野さんの言う通り、無理は禁物です。けれど時間もありません……。もう少しだけ頑張れますか……？」

「ええ。大丈夫です。これ以上、みんなの足を引っ張りたくはありませんから」

茅野の手を離れ、座席のシートに手を着き、踏ん張り、立ち上がる。膝が笑って真っ直ぐに立てない。これは1人で歩けないな。なんて思った時、右脇の下からカルマが体を滑り込ませ、肩を貸してくれた。「相変わらずガッツあるねえ、乃咲くんは。でも、立ってるのもしんどいでしょ。肩貸してあげるよ。歩ける？」

「すまん、助かる」

肩を借りてみんなのところまで歩く。殺し屋は既に寺坂たちの手によつて簀巻きにされ、ステージの上に転がっていた。

近づいて来た俺に気づいたみんなが心配して声をかけてくれる。本当に迷惑と心配をかけてしまった。

こんなことになるのなら、着いてこない方が良かったかもしれないな。みんなのためを思ってやったことで逆に足を引っ張ってしまうとは不甲斐ないにも程がある。

反省を噛み締めていると、千葉と速水さんが現れた。

「乃咲……大丈夫だったか？」

「うん。なんとかかね。ありがとう、千葉。アイツ倒してくれて」

「怪我はない……？」

「大丈夫。ごめん、心配かけた。速水さんもうありがとう」

「お礼なんてやめて。わたしは1発目で外しちゃったし」

「エアガンと実銃の違いの所為だよ。なにより、2発目はしつかり当

てたじゃん。凄いよ、2人とも。俺だったら緊張して外してただろうし。なあ？磯貝」

「……だな。勝てたのは殺せんせーの戦略も大きいけど。一番は千葉と速水が引き金を引いてくれたからだよ」

「だね、うちらじゃ外すか人に当ててたかもしれないし」

「そーそー。寺坂だったら絶対にミスってたね」

「うっせえぞカルマ！」

カルマに弄られ、声を荒げる寺坂だが、あの2人だから当てられたと言うところには異論ないらしい。

他のメンツも口々に狙撃手2人を賞賛した。数多の賞賛の声に珍しく照れ、居心地悪そうにしている千葉と速水さん。そんな中、クラスのまとめ役の磯貝が少し重く口を開いた。

「けど、2人とも。本当にごめん。俺ら、一番キツイ役を押し付けちゃったよな。それだけは謝らせて欲しい」

「……だね。ごめんなさい、2人とも」

磯貝に続いてクラスを束ねる者として謝意を見せる片岡。そんな2人を千葉たちは片手で制止した。

「いいんだ。引き金を引いたのは俺たちだけど、でも、俺たちだけで戦った訳じゃないからさ」

「そうだね。撃たれるかもしれないのにみんなが殺せんせーの指示に従ってシャツフルしてくれた。だから勝てた」

「だな。成功したのはみんなが頑張ってくれたおかげだと俺たちは思ってるよ」

「それにキツイ役目を押し付けられただなんて思ってもいない」

千葉と速水さんが俺を見る。さっきまでの強張りなんてかけらもない柔らかな笑みがあった。

「俺たちだけに責任を負わせたりなんかしないって、言ってくれた奴がいたからな」

「……うん。そう思ったら引き金が少し軽く感じた」

基本的に気難しく無表情か周囲のトンチンカンを見て苦笑している事の多い仕事人2人が見せる柔らかな笑み。

2人の言っているのが自分のことだと気付くと少しばかり居心地の悪さを感じてしまい、つい溢す。

「俺はすっ転んだだけだよ」

肩をすくめて言うのと2人はまた笑った。

本当にカッコつけて説教した挙句に1人ですっ転んで勝手にピンチになっただけだからこんな風に笑みを向けられるのは少々居心地が悪いのだけど……。

今の千葉と速水さんの顔にはさっきまでの自信のなさや卑下するような色は無く、確かな自信と達成感で形作られた今までにない笑顔があった。

52話 疑惑の時間

さて。敵も倒したし、残るは2階だけ。殺せんせーの見立てではこれ以上、殺し屋が待ち構えていることはないらしい。

けど、今回の戦いで俺の中にはどうしても引つかかる事があった。奴は、この銃手は何故、シート越しに俺たちを撃たなかったのか。それだけが頭の中から離れることがなかった。

折角、千葉と速水さんのお陰で生き残れたと言うのになんだか釈然としない。喉に小骨がつかえてるような気分。

そんな心境が顔に出ていたのか、肩を貸してくれているカルマが不思議そうに口を開いた。

「どうしたの、そんなに難しい顔しちゃって。折角勝つたのに嬉しくないの?」

「いや……。嬉しいんだけどさ。少し引つかかることがあって……。素直に喜べないと言うか……」

チラリと簀巻きにされている男に視線を向け、カルマに俺の感じていた違和感を話してみる。

すると茶化すことなく俺の話の話を全て聞いてくれた彼は真剣な顔をして俺と同じ様に考え込んでしまった。

「言われてみると確かに……。相手が本物の銃を持ってたからそっちにばかり意識がいったけど、改めて言われてみるとやっぱり少し変だね……。銃の威力についてはよくわからないけど、本物ならシートくらいは貫通してもおかしくない……」

カルマと2人して考える。俺だけでなく、カルマもこうして考えると言うことは、あの銃撃戦で感じた違和感は決して的外れなものではなかったということだろう。

もう一度、戦場となったフロアを見渡す。さっきまで命懸けの戦いをしていたとは思えないほど、静かだった。

「ん?なにになに、どうしたの、乃咲くんとカルマくんが揃って考え込むなんて珍しいね」

不破さんが俺たちに気付き、声を掛ける。その声に反応した他のメンツが教師陣も含めて俺たちの元に集まった。

折角なので俺たちの感じた違和感を全員に話し、ついでに自衛隊所屬の烏間先生にも意見を求めてみる。

「……そうだな。このタイプのシート程度なら貫通もする。奴の腕ならそのまま撃ち殺すことも可能だった筈だ」

シートを軽く叩き、材質などを確かめた烏間先生が同意してくれた。しかし、いよいよ謎が深まる。

一瞬、俺たちを殺すつもりがなかったんじゃないか、なんて思考が過ったが、理性と本能がそれを即座に否定する。あの時、向けられた殺気は本物だったと思う。それに、奴は引き金を引くのに躊躇しなかった。

殺すつもりがないのなら、撃たないし、仮に撃ったとしても本物の銃だぞ？引き金を引くのにも躊躇いは生まれるだろう。

「乃咲くん」

「はい？」

殺せんせーが呼んだので返事する。

「キミは観察力に優れ、それに見合った考察力もある。今、思ったことを口に出して言ってみてください。それが答えに繋がる筈ですよ」

みんなの視線が集まった。意味があるかは分からないが、殺せんせーに言われた通り、思ったことを口にしてみる。

「アイツ、俺たちを殺す気なかったのかなって」

「でも、それなら初めから撃つたりしないんじゃないかね？」

「ああ。あの殺気は本物だったし、マジで死ぬと思った。だからこの線はないと思っただけ……」

「それでも引つかかるって？」

吉田の言葉に頷く。なんだろう。何かを見落としているような気がする。決定的な何かを。

再び長考に入ろうとした時、不破さんが芝居がかった動きで俺の視界に入り、イタズラな笑みを浮かべる。

「ふっふっふ。乃咲くん。確証がないのなら証拠を集めればいいの

よ。あの人が私たちを殺す気がなかったかもしれない。状況証拠として、彼はシートごと私たちを撃たなかった。なら、物証を集めるべきだわ。探偵漫画の基本よ」

「……物証、か」

言われて考える。彼に殺意がなかったと断定できるだけの証拠。そんなものあるだろうか？

考えていると、またしても不破さんが笑みを浮かべる。まるでしてやったり、というか出し抜いてやったぜ！とでも言いたげな顔のまま、彼女は菅谷に指示した。

「ねえ、菅谷くん。そのカカシ見せてもらってもいい？」

「ん？ああ」

キョトンとした顔でカカシを床に置く。

釣られるようにそれを目をやり、観察する。さつきも遠目に見たが、結構でかい。菅谷のやつ、こんなによくあんな時間もない中で音を立てずに作れたな、と感心。

シルエツトだけでなく、顔にはしっかり目と鼻と口まで描かれている。それにしっかり俺たちが使ってるエアガンを持たせて射撃態勢を取らせている。確かにこんなのが薄暗闇の中に飛び出して来たら人と誤認してもおかしくないだろう。

俺がああ殺し屋と同じ立場でもきつとこんなのが出て来たら撃ち抜いてしまおう、と考えながらカカシを観察していると、ふと、眉間の弾痕に目が止まった。

弾丸が命中したであろう場所が凹み、焦げたみたいに黒ずんでいた。その状態を見て、思わず身震い。もしかしたら自分もこうなっていたかも知れないと思うとゾツとする。

「……あれ、凹んでるだけ？」

考えて思わず呟く。別に凹んでること自体はおかしくない。丸めた布だって強い衝撃を与えれば凹みはする。

だが、変だ。銃弾が命中したと言うのに、命中箇所が凹み、黒ずみ、数ミリの破れはあるが、弾が貫通した様子がない。

カーテンが思いの外に分厚かった？いやいや、烏間先生だってシー

トくらいは貫通するって言ってるんだぞ？この布切れごとき易々と貫通できて然るべきじゃねえの？

何気なく眺めただけなのに強烈な違和感を植え付けられてしまった。そんな俺を見て名探偵不破が頷く。

「ワトソンくん。何か調べたいことでもあるのかね？」

「……木村」

「……？おうよ」

「殺し屋の使ってた銃、吹っ飛んだ方向覚えてるか？」

「ああ。覚えてるけど？」

「すまん、探して来てくれないか。確認したいことができた」

「わ、わかった。任せとけ！」

「付き合うぜ、木村」

木村とそれに着いて行った吉田。速水さんが狙撃して吹っ飛ばした先に向かっていくと、案外、わかりやすい場所にソレは転がっていたらしく、数分とせずに戻って来た。

「ほら」

手渡されたりリボルバーをみる。殺し屋の部下から奪った銃には実弾が込められていたらしく、速水さんの狙撃によって銃身が痛烈に歪んでいた。けど、見たいのはそこじゃない。

銃を受け取り、シリンダーの操作を試みるが、リボルバーなんて初めて触ったので諸々の操作方法が分からず、首を傾げ、これ以上は時間の無駄だと悟ったので、素直に先生を頼る。

「烏間先生、こいつの弾について教えて貰えませんか？できれば用途なんかを詳しく」

「……ああ」

銃を受け取ると慣れた動作でシリンダーを開き、そこに装填されていた弾を1発取り出すと目を見開いた。

黄金の薬莖、そしてグレーの弾頭。銃に疎い俺でも違和感を覚えた。薬莖部分は明らかな金属製なのに、弾頭はまるでゴムのように見える。もしかしてこれって……。

「……これは模擬弾だ。主に射撃訓練やテロの鎮圧などで使われる殺

傷能力の低い弾。本物の銃を使って発射するだけあって威力は高い。だが、暗殺や殺害を目的とした実践で使用されることはまずないだろう」

「……そうですか。ありがとうございます……」

烏間先生からの解説を反芻する。

何故、模擬弾を使ったのかはわからない。目的は全然割り出せないが、一つ言えることがある。

「殺気はあったけど殺意はなかったって所か」

「乃咲くん。なにかわかった？」

「ああ。今回の戦闘での違和感は払拭できた。ゴムの弾頭じゃシートは貫通しない。だから攻撃しなかったんだ。シートの弾力で弾き返されるのがオチだし、殺傷能力が低いと悟られればそのまま特攻される可能性もあったから。確実に身を出した奴だけを狙ったんだろう」
そう。今回の戦闘はそれで説明がつく。だが、また別の疑問が湧いて出てくる。コイツは何故、実弾を使わなかったのか。実弾を使っていれば確実にこつちがやられていたと思うのに。

「……いや、待てよ……?」

そこまで考えてまた疑問。考えてみれば確実に俺たちを殺すことができた場面ならここまで何度もあったじゃないか。

「まだ何かあるのか？」

「今、なんでコイツが実弾を使わなかったのか考えて見てただけどさ。考えてみれば、俺たちを殺す機会なんていくらでもあったよな。例えば一番最初にあったガス使いのおっさん。あの人、俺たちに致死性のある毒を使わなかったよな。あそこで使ってれば少なくとも寺坂と吉田は殺せてたはずだし、結果的に2人を庇った烏間先生だって殺せた筈なのに」

「やっぱりそこ不思議よね。私も今、変だなって思ってた」

「た、確かに……」

名探偵も同じことを疑問に思っていたのか、顎に手を当てて考えだす。みんなも釣られて考察モードに入る。

「黒幕は要求に従わないならワクチンを壊す、つまり、感染したみんな

を殺すって言った。そんな奴が私たちを生捕りにしろ、なんて指示を出すとは思えない」

「ああ。それに、おじさんぬはオレ達の引率に烏間先生がいることを知っていた。だと言うのに持っていた殺傷性のあるものは小さな折り畳みナイフだけ。変じやねえか？素手の戦闘楽しみたいけどプロとしての仕事だからって割り切って毒ガス使う人だぞ？なぜ、あの時使った毒は致死性のないものだった？精鋭の烏間先生を想定していたのなら吸ったら死ぬ奴を携帯し、使っても良かった筈だ。けどソレをしなかったのは何故だ？」

そう、考えてみればおかしな所だらけだ。

使われなかった即死系の毒と実弾。おじさんぬだってなんでわざわざあんな見晴らしのいいところに陣取っていた？気配を消して物陰に隠れていれば俺たちを後ろから一人一人始末することだって出来たはずだろう。

それをしなかった理由は……。

「連中は俺たちを本気で殺すつもりはなかった？」

「結論としてはそうなるわよね……」

そうとしか考えられない。これだけ状況証拠と物証が揃っていてはそう言う結論になるしかないだろう。

と、となると、俺たちに盛られた毒は本当に致死性のあるものなのか、という疑惑も出てくるが……。こっちはなんとも言えないな。希望的観測に任せて気を抜くわけにはいかないし。

「でもさ、となると今回の黒幕も俺たちやみんなを殺すつもりはなあってことなのかな？」

「結局のところそこだよ。黒幕にも殺す気がないんなら案外、交渉でどうにかかなりそうだけど、俺らは黒幕に繋がりそうな情報を何も持っていない。これじゃあ考察のしようもないね」

そう、俺たちは黒幕に繋がりそうな情報を何も持っていないのだ。考えたくても考えられない。

これまでの殺し屋は毒、腕力、銃という得意分野があった。黒幕を含めて4人の殺し屋グループだと考えると最後の1人はどんな分野

で攻めてくるだろうか？という予測をするのが関の山だ。

「黒幕……どんな殺し屋なんだろうね」

思い詰めたようにみんなの思ったことを口にする渚。すると殺せんせーが誰も考えていなかった可能性を出した。

「今回の事件の黒幕は、おそらく殺し屋ではありません」

「どういうことだ？」

殺せんせーの言葉に首を傾げる烏間先生。俺たちもその言葉の真意が知りたくて殺せんせーを見る。

「殺し屋の使い方を間違えています。もともとは私を殺す為に雇ったのでしよう。ですが私がこんな姿になり、警戒の必要が薄れたので見張りと防衛に回した、というところでしょうか。でもそれは殺し屋本来の仕事ではない。彼らの能力はフルに発揮すれば恐るべきものです」

「……確かに、さっきの銃撃戦は殺せんせーの戦略で勝ったけど……。アイツ、狙った的は1cmたりとも外さなかった」

「カルマくんもそう。敵が廊下で見張るのではなく、日常で後ろから忍び寄られていたらあの腕力に瞬殺されていたでしょう」

「……そりゃあね」

これまでに戦った殺し屋たちの実力を振り返り、対峙したみんなが渋い顔をする。

殺せんせーの言う通り、これが今回ような防衛戦ではなく、日常の中での暗殺だったのなら、俺たちは全員が成す術なく一人一人確実に、一瞬のうちに全滅させられていたことだろう。

そう考えると黒幕は殺し屋の使い方を分かっているかというか、確かに間違えているように思う。

けれど、それだと一つ、辻褄が合わなくなる可能性があるように思う。だから、聞いてみることにした。

「……でもさ、殺せんせー。それって変じゃないか？」

「おや、また何かに気付きましたね、乃咲くん」

「まあ、気付くというか、そもその前提条件が違うというかさ。相手が殺し屋じゃないなら事情が全く読めなくなっていくというか……」

なんて言えればいいんだろ」

「焦る必要はありません。あのボスの正体に関わる大事なことです。しっかり思ったことを口にしてください」

「……殺せんせーって国家機密なわけだろ？ だったら黒幕はどうやって殺せんせーについて知ったのかわかって」

「ふむ……」

「殺し屋だって言うならまだ分かるんだ。日本、あるいは世界各国の首脳たちが雇った殺し屋が黒幕なら殺せんせーについて知っていても不思議じゃない。むしろ妥当だ。でも、殺し屋じゃないなら、どうやってアンタを認知した？ 曲がりなりにも国家機密、世界の首脳やお抱えの軍隊しか知らないような世界共通の最重要機密だぞ？」

「それはほら、その各国首脳直下の烏間先生みたいな人が黒幕だった、とか……？」

「だとしたら烏間先生が今回のことを何も知らないのは変じゃないか？ うちの暗殺……延いては現場を監督してるのはこの人だ。そんな彼に何も伝えずに暗殺作戦が実施されることなんてあり得るのか？ これが単なる狙撃だけならまだしも現場で任務に参加している俺たちを巻き込んでまで。下手したら外交・国際問題にまで発展しかねない案件だぞ」

「うううん。烏間先生、そこんところどうなんですか？」

「確かに乃咲くんの考える通りだ。仮にここが日本の外ならあり得ない話ではないが、ここは日本。我々日本政府の管轄だ。傍迷惑な観光客がはっちゃけるのとは訳が違う。この国で勝手をするのであれば外交問題になるだろう」

やはりそう言う話になるよな。国の要人が他所の国で好き勝手するというのはそう言う事だ。

「加えて君たちはターゲットに間近から攻撃できる数少ない人材だ。そんな君たちを害し、危険に遭わせるのは超生物暗殺という地球の命運を賭けた任務への妨害に他ならない。そんなことをすれば今後、日本だけでなく、他国からも爪弾きにされるのは間違いないだろう。よって、他国の抱えるエージェントが主導している可能性は限りなく

ゼロに近い」

無論、ゼロに近いだけであって可能性がないわけではないのは念頭に置いておく。だが、そうなるとますます色々と疑問が尽きなくなってくる。各国のエージェントでも雇われた暗殺者でもないのなら犯人は何を思っこんな事件を起こしたのだろうか？

そもそも、俺たちが殺せんせーに近距離から攻撃できる環境にあるのは、彼が俺たちの担任であることに拘っているからだ。

そんな俺たちに危害を加えて、クラスの半数を殺してもしようものなら、学校は責任を問われてメディアに晒され、E組という制度を解体されるかもしれない。そうなれば国家機密の殺せんせーは櫛ヶ丘学園から出ていく可能性だってある。

それは地球を破壊する超生物を監視する術も近距離から攻撃をするチャンスも失うことになる。

そうなれば今回の事件の首謀者は大戦犯だ。国際指名手配される可能性だつて充分すぎるほどにある。

もし、俺たちとの交渉が決裂し、感染したみんなが死に、なおかつ今日、ここで殺せんせーを殺すことができなかつた場合、そんな末路が待っている。犯人はそこまで考えているのだろうか？もし、考えているのなら、そこまでのリスクを負ってまで作戦を始めた理由はなんだ？

いくら考えても理解が出来ない。犯人像も全然固まらない。暗殺者ではない。殺し屋の使い方を間違えているから。

他国のエージェントではない。自分の国の立場を悪くするような行動を取るはずがないから。

かと言つて一般人であるはずがない。そうであるのなら、そもそもとして殺せんせーを認知してる訳がない。

以上3つのポイントを除外して考えた時、もつとも可能性のある犯人像はどんな奴になるんだろう？

首を傾げ、考えていると、不意にスマホが震えた。何事かと取り出してみると液晶にはしてやったり、と言った様子の悪戯っぽい笑みの律が映っていた。

『たった今、最上階にあるパソコンの付属カメラのハッキングに成功しました！これで最上階の様子が見えますよ！』

さらっととんでもないことをしていた律。コイツも大概なんでもありになって来たよなあ、と改めて呆れると同時に感心。

なんとなく、勝手に電子機器に入ってハッキングして、自在に操作して。電子ウィルスみたいなことしてるなあ、とか考えそうになる思考を嗜める。

クラスメイトとしては頼もしい限りだ。

「見せてくれ」

『はいっ、こちらになります』

おそらく全員のスマホに映像を映し出したのだろう。みんな手に持った端末の画面を食い入るように見つめる。

数秒と経たずにスマホの画面が切り替わった。

犯人のいる部屋は無駄な照明を消しているのか、部屋は薄暗い。ただ、薄暗い部屋の中で光るモニターがあった。その手前には椅子に座る大柄な人物。その更に手前にはトランクケースらしき物体。あれが治療薬の入ったケースだろうか？

などと思っていると律がカメラをズームさせたのか、モニターに何が映し出されているのかがはつきり見えた。

「モニターに映ってるの感染させられたみんなじゃねえか……！ちくしょう……ふざけたことしやがって……！」

吉田が怒りを隠そうともせず口を開く。

ああ。全くの同意見だ。悪趣味なことしやがる。

憤っていると、カメラの視点が後退し、遂に事件の首謀者のシルエツトが顕になった。

悔しいことにアングルの問題と部屋の照明のせいでシルエツトし分からない。だが、奴はまるで寛ぎながら映画でも眺めるみたいにタバコを噴かしながらみんなの様子を見ている。

「楽しんで見てやがるのが伝わって来やがる……！変態野郎が……！」

吐き捨てる寺坂。そんな彼に同調するように画面を睨む者、不安そ

うな顔をする者、引き続き思案を巡らせる者。

さまざまな反応を見ながら示す中、俺は画面の中のモニターを注視する。アングルのにあの時、俺が睨みつけた位置にあるカメラで間違い無いだろう。現に、モニターの中にはウィルスの与える苦痛に顔を歪める倉橋さんが映っている。

それを見た瞬間のことだった。

——プツン。

頭の中の何かがキレる音がした。

53話 黒幕の時間

頭の中で何かがキレる音がした直後。ガンガンと痛みを訴えていた頭痛が止んだ。耳鳴りも止まった。

頭痛と耳鳴り。それらを始めとした思考を妨げていたノイズが次から次へと吹き飛び、クリアな思考だけが残った。

今の俺はまともに動けない。人数で押さえつける作戦が上手くいかなかった時、仮に戦闘になったとしたら足手纏いでしかないのは明白だ。足腰立たないのだから当然。

だったから、せめて黒幕の正体を暴いてやる。黒幕がどんな人物なのか考察し、情報を提示してみんなを少しでも優位に立たせる。それが今の俺に出来る最善に違いない。

だから考える。クリアになった思考で今日1日の出来事を振り返る。その中に何か、犯人に繋がる情報があるかもしれない。

今日、俺たちは朝早くから学校前に集合し、移動。港に行つて、船に乗つてこの伏真島に暗殺のためにやつて来た。

島に着いた俺たちはウエルカムドリンクのトロピカルジュースで毒を盛られた。

それから自由時間に殺せんせーと遊びながら暗殺の準備をして、夕方。夏休み中に立てていた計画を始動した。

暗殺はいいところまでいったが、失敗。殺せんせーは完全防御形態になり、俺たちは疲労に押し流されるようにジュースに盛られていた毒に負け、クラスの半数がダウンした。

そして烏間先生に電話が来て、俺たち生徒が毒を盛られた事が発覚。クラスの中で最も背が低い男女2人、つまりは渚と茅野を交渉人に指定。殺せんせーを取引材料にこの伏真島殿上ホテルの最上階に来るよう指示される。

俺たちはホテルに侵入。殺し屋達を撃破しながら進み続け、殺し屋には殺意がなかったこと。黒幕は殺し屋ではないこと。そして黒幕のシルエットが判明した。

どこまでも広がる透徹した思考でさまざまな疑問点を抽出し、可能性を導き出し、今ある事実肉付けする。

これだけの情報量があるのだから、黒幕の尻尾を掴む事くらいは出来るはず……いや、はず、じゃない。掴むんだ。殺せんせーが褒めてくれた観察力、考察力、そして、俺の一番の強みであるゾーンを惜しみなく使う。

俺の全能力を駆使して黒幕を炙り出す。何がなんでも正体を丸裸にしてやる。

まずは目に見える情報から黒幕の情報を引き出す。

律の映し出した映像の中にある人物は大柄だ。それなりに立派な椅子に座っているが、体が椅子からはみ出している。机に着いている腕の太さ、モニターからの光で見える筋肉の隆起から鑑みて相当鍛えていることが容易く分かる。加えて髪型だ。耳は出てるし、襟首まで伸びてる印象はなく、かなり短い。髪型、体付きから察するに奴はおそらく男だろう。

加えて、注視していると肩が上下に小刻みに動いているのが分かる。震えているのか？いや、そう言う動き方じゃない。じゃあなんだ？なんで肩がこんな風に動く？

——楽しんで見てやがるのが伝わって来やがる……！変態野郎が……！

寺坂の言葉が脳裏を過ぎる。楽しんでいる……。もしかして、笑っているのか？あり得ない話だ。

- ・ガタイが良い。
- ・鍛えている。
- ・たぶん男。
- ・苦しむみんなを笑っている。

映像から分かるのはこの4つ。これだけでは核心には至れない。この中で深掘りできそうなのは苦しむみんなを見て笑っている理由くらいだが……。

苦しむ中学生を見て笑う理由ってなんだ？見ていて面白い？そういう性癖？どつちにしろまともじゃない。まともじゃないが、それで

思考を放棄しては先に進めないので考え続ける。

少し考えるが、正常な思考ではやはり理解できない。なので、少し趣向を変える。俺がこの黒幕だった時、あるいは似たようなシチュエーションだった時、苦しんでいる相手に抱いている感情はなんだろう？ もしくは、どんな相手にこんな仕打ちをしたいと思うんだろう？ 他人を苦しめて楽しむ。生憎とそんな趣味はない。だが、強いて苦しんでいる様子を見て楽しいと思える相手がいるとすれば、それは、嫌いな相手だったり、憎い相手なんじゃないか？

何かしらの悪感情を抱いている相手。そうでもなければ熱出してぶっ倒れ、鼻血を吹き出し、冷や汗をかき、もがき苦しむ相手を楽しんで見るなんて出来そうにない。

そういう俺の感性を当てはめて考えると、黒幕の人相はガタイが良く、かなり鍛えていて、俺たちにかなり拗らせた悪感情を抱いている人物と言うことになる。

現段階ではそんな人物、全く心当たりがない。

ならば、と今思い浮かんだ犯人像にさつきまでの会話で出ていた情報を付け足してみる。

- ・ガタイが良い。
- ・鍛えている。
- ・たぶん男。
- ・梶ヶ丘中学校3年E組に悪感情がある。
- ・殺し屋ではない。
- ・外国の政府に勤めるエージェントではない。
- ・殺せんせーを知っている。
- ・殺せんせーを認知してるので少なくとも一般人ではない。

これだけ情報があるとかかなり候補を絞り込めそうだ。この中で候補を絞るのに使えそうな情報は【殺し屋ではない】ことと【殺せんせーを知っている】こと、そして【外国の政府のエージェントではない】ことだろうか。

一番重要なのは殺せんせーについて知っていること。これだけで大分候補を絞れる。

殺せんせーを知っているのは……桐ヶ丘中学校3年E組、浅野理事長、各国政府、各国の軍隊（自衛隊など含む）、政府から依頼された殺し屋、あとはシロとイトナ辺りだろうか。

この中からさっきの条件でソートをかけるなら、殺し屋と各国政府とその軍隊は除外出来るだろう。

構えて、俺たちE組と浅野理事長も除外して良いはずだ。俺たちと理事長に関してはこんなことするメリットがないし、特に俺たちは被害者側なわけだからな。

シロとイトナの線も薄いだろう。あの2人には触手という奥の手があるし、そもそも犯人のシルエットと一致しない。

そうなると思幕候補は消えたように思えるが、ここで思い出したのは黒幕が俺たちE組に悪感情を抱いているかもしれないと言う点だ。まさか知りもしない赤の他人が気に食わないからと言ってこんなことをするとは考えにくいから、黒幕は俺たちの関係者である可能性が高い。

そして、ここで生きてくるのが、黒幕は殺せんせーのことを認知しているので一般人ではないという情報だ。

俺たちの関係者で、殺せんせーのことを認知していて、暗殺者ではないが、一般人ではない。この条件に合致するのは、俺たちに殺せんせーの暗殺を依頼し、サポートを続けてくれた日本政府ではないだろうか。日本政府の関係者であるなら、外国政府のエージェントを除外した外交問題という理屈をある程度考えないでいいし、理にかなっていると思う。

ただ、そうなつてくるとネックなのが、烏間先生が何も知らされていないという部分だ。

実は烏間先生には内密にそういう暗殺作戦を立案していました、という可能性はあるだろうが、さっき烏間先生が言った通り、最悪の状態で失敗した時のリスクが大きすぎる。

よくお偉いさんは無能だとか言ってる人がいるが、流石にそこまで馬鹿じゃないだろう。しかも、国家規模でやるようなことでもないはずだ。

となると、黒幕は日本政府関係者の単独犯か？

けれど、俺たちに直接関わりがある国家機関と言われると防衛省くらいしか思いつかない。

だが、ありえるのか？防衛省と言えば烏間先生たちになってしまふ。いや、烏間先生だけじゃない。防衛省所属の人たちは一番手厚く俺たちを支えてくれてるんだぞ？こんな馬鹿げた暗殺プランを実行するような奴がいるとは考えたくない。

だが、律の見せてくれた犯人のシルエット。ガタイが良くて鍛えられてる体というのは防衛省の人間なら不自然ではない。

……駄目だ、あまり考えたくない。これまで散々世話になった相手を疑うような真似はしたくない。

したくないが……考えないと黒幕の正体もわからず、不意を突かれてみんなに危険が及ぶかもしれない。

考えるしかない。せめて、この考察が外れていることを願いながら、思考を続ける。

まずは黒幕とそれに雇われた殺し屋達の動きだ。

俺たちは今日、暗殺の為にこの伏真島に来た。そしてウェルカムドリンクに毒を盛られた。

ここで考えるべきなのはどうして黒幕は俺たちがこの島に来るのを知ってるのか、なんで到着したばかりの俺たちにタイミングよく毒を盛れたのかという点。

殺せんせーのことを知っていることに関しては一旦置いておくとして、黒幕は何故、俺たちが今日、この島に来ることを知っていた？しかも到着と同時に毒を盛る事ができるってことはこっちの予定を詳細に知っていたと言うことではないのか？

みんなが倒れたのは暗殺が終わった直後だ。それもほぼ一斉に倒れた。何故、同じタイミングで倒れた？同じ毒を盛られたのだから潜伏期間が同じなのは当たり前だ。だったらどうして暗殺が終わった直後だ？もつと前、あるいは後でもおかしくはないのに暗殺が終わった直後に糸が切れるように倒れた。

偶然にしてはタイミングが良過ぎる。もしかして、この毒は発症す

るまでの時間を調整されたものなんじゃないのか？

俺たちの到着と同時に盛られ、暗殺後に発症。これを狙ってやっているのだとすれば、黒幕は今日、この島で殺せんせーの暗殺が行われるってだけじゃなく、俺たちの計画をタイムスケジュールレベルで把握しているってことだ。

今回の暗殺計画の内容を把握している人物は複数いる。だが、この時間に何をして、この時間に暗殺をする、なんて所まで知っているのは当事者である俺たちと烏間先生から報告を受けているであろう防衛省くらいだ。マメな烏間先生のことだから細かく報告しているだろうし、殺せんせーの作った今回の暗殺旅行のしおりにも行動計画は載っている。それを物証として提出したのなら俺たちの行動を把握するなんて造作もないはずだ。

黒幕が防衛省の人間である可能性がこれで1つ。

次にみんなが倒れた後、烏間先生のスマホに掛かってきた黒幕からの脅迫電話について考える。

みんなが倒れたと同時に烏間先生に掛かってきた非通知の電話。これもよく考えると疑うべき点が多い。まず、黒幕は何故、烏間先生に電話できたのかだ。

別に殺せんせーやビッチ先生、なんなら俺たち生徒でも良かっただろう。どうしてわざわざ烏間先生だったんだ？番号はどこで手に入れた？烏間先生のことだ。プライベートと仕事で電話を使い分ける可能性がある。

だが、仮にそうだとしても烏間先生が迂闊に自分の番号を振り撒くようなことをするとは思えない。ましてこの人の性格や言動的に何処の馬の骨とも知らないような奴の手に連絡先が渡るようなへまをするはずが無い。

そう考えると、黒幕が烏間先生の番号を手に入れることはほぼ不可能であるという結論になるが、もう一つ、考えられる可能性がある。それは、最初から番号を知っていたって展開だ。

烏間先生の電話番号を知っていた、あるいは簡単に入手できるポジションがある。それは同じ職場の同僚だ。

同僚ならば有事の際の為に元々番号を交換していたとかなら烏間先生の番号を知っていたというのは充分あるし、仮に知らなかったとしても職場の緊急連絡網なんかで比較的簡単に番号を調べるってことが出来るはずだ。

それに、それならわざわざ俺たちの連絡先を調べるなんて事をせずに烏間先生へ電話をしたことも理解できる。

黒幕が防衛省の人間である可能性がこれで2つ。

電話で気になるはもう一つ。黒幕が烏間先生の実力を把握していたこと。今の烏間先生を側から見たら旅行に来た中学生の団体を引率する大人というイメージを抱きこそすれ、腕が立つとかそんなところまで考えるだろうか？

確かに烏間先生を警戒するのは正しい。俺たちの中の誰よりも強い。だが、そんな実力をたかが監視カメラで眺めた程度で把握できるものだろうか？その上で知った風な口を叩けるもんだらうか？せいぜい、こいつヤバそうだから警戒しておくか、程度に止まるんじゃないか？

例えば、おじさんぬは烏間先生を精鋭上がりだと知っていた。なんてたかが殺し屋が烏間先生の経歴を知っている？

国を防衛する上での貴重な戦力だぞ？情報統制なんかはされていなくて然るべきだし、なにより、仮に統制がされていなくても調べようがないと思う。こう言っちゃ悪いが、烏間先生は強いけど、防衛省の中では数ある戦力の1人。プロパガンダとして彼のプロフィールなどが公開でもされない限り、実力や経歴を知ることがまず出来ないと思われる。

……けど、これも黒幕が防衛省の人間であるのなら説明ができてしまっただろう。烏間先生の実力を知っていたのは同じ職場にいたから。おじさんぬが彼の経歴を知っているのも黒幕が同僚として知ってい

た情報を伝えただけと言うことになる。

黒幕が防衛省の人間である可能性がこれで3つ。

それと、取引場所にこのホテルの指定した理由だ。

海外マフィアやヤクザなんか紛れ込んで違法取引をしている場所なので国がマークしている場所だと烏間先生は言っていた。

この階に辿り着くまでの烏間先生のナビゲーション的にこのホテルの構造やどこにどんな警備が配置しているという仕組みを理解していたように見える。

けど、そんなこと普通は分かるはずがないし、このホテルを愛用している金持ち連中でも流石にそんなところまで知っているとは考えづらい。知っていたら、ガチの闇取引をしてるマフィアやヤクザが彷徨く場所に大事な子供を預ける筈がない。

でも、黒幕はそれすらも知って利用していたとしたら。出入り口の厳しい警備、奇襲や数の理を活かせない展望通路、突破困難なバードアとその中の客という肉壁、銃撃戦して下さいと言わんばかりの完全防音のコンサートホール。何もかも知った上で利用していたとしたら？

犯人はどこで知った？そんな普通に生きていたら知る由もないであろう情報を。

……って、これも簡単だな。可能性は数あれど、ここまで来たら俺の疑問に思っていることほぼ全部、烏間先生の同僚だから、で説明できってしまう。烏間先生は警視庁の知り合いから内情を聞いたと言っていたが、同時に国もこの島をマークしていると言っていた。だったら黒幕が防衛省の人間なら国がマークしているこの島のことを知っているのも自然だろう。

黒幕が防衛省の人間である可能性がこれで4つ。

あまり疑いたくないとか言いながらも考えれば考えるほど、疑えば

疑うほどに辻褃が合ってしまう。

自分の中でビツクリするほど点と点が繋がっていく感覚がある。悲しいことに予感はず信に変わりつつあった。

だが、解らない点がある。何故、人質が男女2人だったのだろうか？背が低いっての条件にするのは分かる。小柄な方が力で押さえ込みやすいだろうから。でも、それなら背が低い女2人の方が良くないか？背が低くても一応は男。それなりに抵抗力があるとは考えなかったのか？

このホテルに侵入する前に考えた最悪のシナリオを思い出す。だが、そのシナリオもよく考えれば人質は1人でいい筈だ。

人質を2人要求する意味が解らないし、仮に理解できたとしても、なんで男が必要だったのかが解らない。

- ・性別は男。
- ・鍛えている。
- ・ガタイがいい。
- ・俺たちに悪感情がある。
- ・防衛省の人間。

今分かるのはこれだけ。しかも一番最後はまだ可能性が高いってだけで確信ではない。今はまだ。

正直、鍛えていてガタイが良い男で防衛省の人間であると言うのであれば候補はかなり絞られる。だが、俺たちに悪感情を抱くほど濃密に接した相手なんて――。

「……………あ……………」

そんな相手はいない。そう結論出そうとした時。ふと、思い出した。ゾーンから抜け、思わず気の抜けた声を溢す。1人いる。俺たちを恨んでいるかも知れない男が。

——やつ！俺の名前は鷹岡明！今日から烏間を補佐してここで働くことになった！よろしくな、E組のみんな！

——まあ、待てよ。乃咲圭一。なんで烏間が良くて俺が駄目なのか聞かせてもらいたいんだが。

——黙って聞いてればガキが良い気になりやがって……………！

——くそつ、くそくそくそ!!!

……鷹岡明。かつて烏間先生の補佐として俺たちの前に現れ、みんなに拒絶され、理事長に首を切られた男。

出会ってから別れるまでの極々短いやり取りが脳裏を過ぎる。交わした言葉は少なかつたが、奴がやったと言うのなら何故だか妙に腑に落ちる自分がある。

そんな自分の予感を裏打ちするようにアイツがE組にいた2日間の記憶が駆け巡った。出会った時の印象から去り際の様子まで鮮明に思い出し、俺の中の黒幕像に当てはめる。

鷹岡は男、ガタイが良い、烏間先生と同じく自衛隊上がりで鍛えている、みんなに追い出されたので俺たちに悪感情を持っている可能性があり、防衛省の人間……。

なんてことだろう。全部当てはまってしまう。

まるでパズルが組み上がっていくように鷹岡黒幕説が明確な輪郭を帯びてゆく。臆げだった予感が確信に変わってゆく感覚に背中をぞくぞくとした感覚が駆け上がってゆく。

そんな中で俺は渚を見た。

「……う、僕の顔に何かついてる?」

不思議だった。なぜ、黒幕が一番背の低い男女2人を要求したのか。女子2人の方が扱いやすいだろうか。

でも、黒幕が俺たちに悪意を持った鷹岡だったとするのなら納得できってしまう。だって、奴を追い出したのは渚だから。

——ごめんなさい。出て行って下さい

みんなの前で渚を公開処刑しようとしたら返り討ちにされた。取引の材料自体は茅野で個人的にあの時の復讐をしたいから渚を呼んだのであれば納得できる。

……だが、鷹岡を黒幕と断定するには一つ足りないものがある。それは殺し屋を雇う金だ。

殺し屋への依頼の相場なんて知らないが、数十万ですまないのは確かだろう。数百万、下手したら数千万かも知れない。

そんな額を鷹岡が持っているだろうか? 奴は大人。俺たちなんか

よりも歳上ではあるが、社会で見たら若い方。いくら国家公務員とはいえ、殺し屋を3人も雇い、このホテルの最上階を陣取り、裏工作までする金を用意できるとは思えない。

流石に銀行もそれだけの額は融資するか怪しいし、闇金関係から借りた可能性も考えられるがその他の業界は情報を共有しているイメージがある。あっちこっちで大金借りまくっている奴に金を出すとは思えない。

ここが鷹岡黒幕説の一番のネックだが、これが解決してしまったら俺の中で確信に変わってしまうだろう。

この中で一番奴を知っているのは烏間先生だ。あんなんでも彼とは同じ職場の身内。疑いを掛け、質問するのは気が引けるが、ここまでするまで来たら聞くしかなかった。

「烏間先生。最近、防衛省の中で大きな金が動いたことはありませんか？だれかが宝くじに当たったとか、金を盗まれたとか、株で大成功したとか。殺し屋3人を雇い、このホテルを用意できるだけの金を手に入れた人物に、心当たりはありませんか？」

「……キミは防衛省の人間を疑っているのか」

烏間先生からの冷静な視線が痛い。そりゃあそうだろう。だが、引くわけにはいかなかった。

「はい。もつと言えば個人名まで察しがついています。殺せんせーを認知し、俺たちの行動を把握し、あなたの実力と連絡先を知っていて、こんな俺たちに恨みをぶつける見たいなことをする人物は1人しか居ません」

俺の確信を込めた言葉に視線をずらし、諦めたような目でまた見つめ返してくる。烏間先生は観念したように言った。

「…………… たぶん、キミが考えている人物は俺の想像している人物と同じだろう。そうだ。キミの察しの通りだ。先日、防衛省ではとある事件が起きた。暗殺や機密保持に使う筈だった資金を抜き出し、政府が準備していた殺し屋と共に行方を絡まし、音信不通になった男がいる」

その言葉に息を呑む。何もかもが確信に変わった。

これで最後に問題視していた項目が解決した。なにより、烏間先生が認めてしまった。

「お、おい。乃咲っ、何が分かったんだよ!？」

俺と烏間先生の会話に置いてきぼりなみんなの視線が集まる。だから、俺はみんなに伝えるのと烏間先生への最後の確認を兼ねて焦らすように口を開く。

「防衛省から資金を抜いて、行方を眩ました男。そして、今回の黒幕は防衛省の——鷹岡明、ですね？」

今度はみんなが息を呑む番だった。口々に困惑を溢し、殺せんせーですら目を見開き、烏間先生も信じたくなかったと言いたげにバツが悪そうな顔をしていた。

俺の問いかけ、みんなからの視線、殺せんせーの戸惑い、それらが全てを受け止めるように烏間先生の重い口が動く。

「……ああ。そうだろう。我々が銃を奪ったあの見張り。何処かで見た覚えがあると思っていた……。そして思い出した。奴らは鷹岡の部下だ」

なるほど、そんな所にも気付く要素があったのか。流石に鷹岡の部下の顔までは知らなかったから気付かなかった。

だが、安心できない。まず伝えるべきことは一つ伝えた。黒幕の正体は掴む事ができた。次は……。

「渚」

「……うん」

「気を付けろ。奴の狙いは多分、お前だ」

そう告げた時、渚は俯いた。

54話 作戦会議の時間

足音を消して階段を上がり、その先に立っていた見張りに忍び寄る人外の影。階段の影からヌツと伸びて来た太く屈強な腕はそこに居たスキンヘッドの男の襟首を片手で掴み、引き摺り込むと首が潰れ、頭が曲がってはいけない方向に折れるくらいの力で『きゅっ』ときつく締め上げた。

「ふうう〜……大体体が動くようになってきた」

自由を取り戻しつつある体に満足しているのか、あるいは人を襲う快楽によるものか、笑顔を浮かべる烏間先生に思わず戦慄。味方ながら少々恐ろしい。

同じことを思ったのか、千葉が小声で呟く。

「烏間先生が笑う時って大半が人を襲ってるよな。乃咲との模擬戦然り、俺たちとの射撃訓練然り」

「まあ、確かにどちらかと言えば真顔か仏頂面が多いけど、笑う時は笑うぞ。犬を見た時は満面の笑みだし」

「死に物狂いで吠えられてるけどね」

「俺たちが予想を超えた動きをした時とか」

「それって戦闘訓練中だろ？」

「……テレビのCM見て笑ってたり……」

「ホームセキュリティのアレな。霊長類最強の女性が3人に分身しての奴。理想の戦力見て笑みが溢れてるだけだろ」

やべえ、烏間先生の笑顔についてフォローしようとしたけど言われてみるとこの人が笑ってる場面って確かに戦闘中とか戦力増強とかそんなイメージがある。思えばガス使いのおっさんを倒した時も笑ってたし。

アレ？俺が尊敬して止まない人って実は結構な戦闘狂だったりするの？訓練中もどちらかと言えばロッククライミングとか、ロープ昇降の時より、ナイフ術とか体術とか戦闘向けの訓練の方が生き生きとしてる様な……。

「……鳥間先生が尊敬できる人であることに変わりはない」

「フオロー諦めたな。まあ、その通りなんだけどさ」

結論が出たところで、鳥間先生が今倒した男をまさぐり、装備品を引き剥がす。流石に銃は持ってないみたいだが、代わりにこの先に進む為のカードキーを入手した。

カードキーは手に入らない前提で鳥間先生と身軽な岡野や木村が窓からの侵入を計画していたので、思いの外、みんなが安全に進めそうな展開に一安心する。

「さあ、時間がない。鷹岡は我々がエレベーターで来ると思っているはずだが、交渉期限まで動きが無ければ流石に警戒を強めるだろう。個々に指示を出して行く。磯貝くんと片岡さんは——」

鳥間先生が指示を出す中、肩を貸してくれているカルマが視線を向け、問いかけて来る。

「ねえ、乃咲クン。この先、どんな展開があると思う?」

カルマからの問いに少し考える。最悪の展開ならいくらでも想像できるが、彼が聞きたいのは突飛な可能性ではなく、あくまでも現在で起こる可能性が一番高い展開だろう。

ならばと思考を巡らせて簡潔に答える。

「まず、部屋に入った瞬間に気付かれる、もしくは肉薄する前に気付かれて警戒されて奇襲どころじゃなくなるだろうな」

「部屋に入った瞬間に気付かれる可能性があるのは一応、向こうも渚くんや茅野ちゃんが取引に来ると思っただけか部屋への気配を探ってるかもしれないからだね」

「ああ。最悪、部屋に入った瞬間に気付かれて薬を即爆破するのがあり得るな。仮に気付かれずに入れたとしても近づいた時に気付かれる可能性も充分ある。みんな極力音を立てないナンバ歩きが使えるけど、それでもこの人数だ。扉から鷹岡までの距離が分からない以上、肉薄するまでずっと息を止めてられる訳でもないだろうし嫌でも気配は漏れる。取るに足らない微細な呼吸音も衣擦れも数が集まれば存在感が出てしまう」

「……だね。そう考えると鷹岡に気付かれないことを前提に作戦を立

てるのはまずいよね。シンプルに部屋に入った瞬間に射殺つてのが一番確実なんだろうけど……流石にね」

「だな、鳥間先生も殺せんせーもやらせてはくれないだろう。となると、一番可能性がある作戦は……木村や岡野。スピードや身のこなしが良い奴らを実撃させて爆弾付きの薬を確保、そのまま鷹岡にタックルかまして押し倒すとかになるのかな」

「えっ……？俺たちが？」

木村と岡野が俺たちの話を聞いていたらしい。少し驚いた様子で俺とカルマを見比べていた。

「あくまでそう言う作戦もあるってだけだよ。実際に実行するにはあまりにも不確定要素があるからな」

「でも、それでみんなが助けられるならやりたい。鳥間先生。乃咲の作戦、聞いてみませんか？」

「……そうだな。状況に応じて取れる選択肢が多いに越したことはない。目的が同じならより確実に堅実な手段を選ぶのが定石だ。キミの意見を聞かせてくれ」

一瞬の思案顔の後、期待を込めた視線を向けて来る鳥間先生。その視線が心地よかったが、一つ断っておかねばならない。

「話すのはかまいませんが、不確定が多い上に相手が捨て身だったら実働する木村と岡野に危険がありますよ？」

「分かっている。あくまで視点を増やしたいんだ。俺の見落としていく危険や可能性をキミは見据えているかもしれない。実行するかもしれないという作戦ではなく、懸念点や成功への活路を指摘するつもりで話してみてくれ」

参考程度に、と言うことなら問題ないだろう。鳥間先生の言う通りだ。取れる選択肢は多い方が良い。それに逆に俺には考え付かなかったような要素を加味したより確実な作戦を鳥間先生なら立ててくれるかも知れない。

「まず、部屋に侵入後のことですが、自分は割とあっさり気付かれると考えてます。いくら気配を消せても、透明人間になれる訳でもない以上、早かれ遅かれいずれ侵入にバレる。だったら出来るだけ速攻を仕

掛けた方が良い。こつちに気付いた鷹岡が即座に薬を爆破つてのが考えられるから」

「そこは俺が聞いた通りだね」

「ああ。だが、即座に爆破と言っても、『あ、E組のみんなが来た！よし、爆破しよう』なんて認識した瞬間に爆破できる訳じゃない。たぶん、認識してから爆破するまでにいくつかの必要な予備動作とタイムラグがあるはずだ」

「……う？どう言うこと？」

「……あく。なるほど。確かにそうだね。乃咲クンの言う通りかも。状況によっては木村と岡野で速攻を仕掛けるのが良いかも。なんなら誰かに銃を持たせて援護させればより確実なんじゃない？場合によつては完封できるよ。ただ、確実に木村と岡野は危ない目に遭うから薦められはしないけど」

流石、カルマ。俺の言わんとしていることを察したらしい。頭回転の速さはやっぱり頭一つ抜けてるな。

「重要なのは薬が何処にあるのか、薬を起爆する為のスイッチが鷹岡先生の手元にあるか。この2つですね？」

「どうしてそこが重要なんだ？」

「考えてみる、吉田。自爆する危険があるのに躊躇いなく爆破なんて選択を取れるのかって話した」

「そりゃあしねえだろ。自爆とか間抜けすぎんぜ」

「だろ？普通はしない。ここでもう一つ考えてみてほしい。お前が鷹岡の立場だった時、もしかしたら烏間先生が薬を奪りに来るかも知れない、あるいは雇った殺し屋が裏切つて薬を盗んでいくかも知れないって状況で大事な交渉材料である薬を部屋の適当な場所とか、自分の目や手の届かない場所に置くか？」

「置かないな……。なるほど、爆弾付きの薬は鷹岡の近くにある可能性が高いってワケだな？」

「そう言うことだ。ついでに言えば……律。さっきの部屋の中の様子、もう一度見せてくれ。ズームはしなくて良い。出来るだけ部屋全体が映るように頼む」

『はいっー(ざ)覧下さい!』

元気のいい律の返事と共に切り替わるスマホの画面をみんなに見せる。そしてさっきこの部屋の全体図を一瞬だけ見た時に気になったトランクケースらしきシルエットを指差す。

「これを見てくれ。鷹岡のすぐ後ろにあるこの物体だ。たぶん、形からしてトランクとかキャリアバックの類だろう。爆弾付きの薬は鷹岡の手の届く範囲にある。その仮定が間違っていないのならば、恐らくはこの中に薬が入っているはずだ」

「……お前、よくそこまで頭が回るな」

「確かに筋は通っている。これが我々のターゲットと見て間違い無いだろう。だが……見たところ、薄明かりと画質の問題で分かりづらいが、トランク上部に何かが貼り付けられている。となれば、鷹岡の話かたからして、これが爆弾だろう」

鳥間先生からのお墨付きが出たところで話を進める。

「爆弾付きの薬は鷹岡の直ぐ近く。そんな状況で俺たちが現れまして、即爆破、なんてしたら爆発に巻き込まれるだろ?だから、まずは爆発させるとしたら距離を取るはずだ。爆弾から逃げるか、もしくは爆弾ごと薬を投げ飛ばすか。なにかしらのアクションがあるだろう。そこが狙い目だ」

「鷹岡が行動を起こした隙に俺や岡野で距離を積めるってことで良いんだよな?」

「ああ。もっと言うなら爆弾付きの薬を確保してそのまま肉薄するのが理想だな。爆弾持ったまま特攻して爆発させると言う選択肢を奪い取るんだ。トランクとかキャリアケースってのは物を運ぶ用途で作られてるだけあって衝撃に強い。その外装ごと中の薬を吹っ飛ばす爆弾なら相当な威力の筈だ。奴が安全圏に出るまでの距離も相応にあるだろう。その距離を取ろうとする隙に木村と岡野で肉薄。奴が爆弾を起爆させる動作を見せたら銃で手を撃つ。そのまま起爆スイッチを奪取できれば俺たちの勝ちだ」

「成る程、確かに勝算はある。俺も銃で狙いを定められる程度には回復した。2人のサポートもできるだろう。木村さんと岡野さんはE

組で1、2を争うスピードを持っているし、彼らに続いてスタンガンを持たせた赤羽くんと磯貝くんが攻撃に加われれば制圧できる可能性は大いにある。だが……………」

「ええ。かなり危険な作戦です。鷹岡が俺たちの想定を上回る俊敏さを持つていた時、もしくはダメージ覚悟の自爆を敢行した場合、突っ込んだ木村と岡野は確実にタダではすまない。仮に爆破を封じても2人が奴に捕まって人質にされる可能性だってある。だからこの意見を出し渋ってました」

そこまで話して木村たちに目を向ける。

「と言う訳だ。……………まで言っておいて申し訳ないが、2人とも先走ったことはするなよ。まずは自分の安全を考えろ。こんな危険な作戦立てた俺の言えた義理じゃないけどな」

言い合えると木村と岡野は俯いた。流石に配慮が足らなかったか、と反省すると帰って来たのは予想外の言葉。

「でも、勝算はあるんでしょ？ だったらやりたい。ホテルで待ってるみんなも、乃咲もこんなに辛そうにしてるのに何もできないのは嫌だ。少しでも可能性があるなら……………」

「そうだぜー今のところはただ熱が出てしんどいだけかも知んないけどさ、そのうちもつと酷い症状が出るかも知んないだろ!? 竹林と奥田だけじゃ対処しきれなくなるかもしれないし、どんな手でも使うべきなんじゃないのか!？」

2人はやる気だった。こんな危険な作戦を。その目を見てやはり言うべきではなかったと反省する。

燃え上がってしまったている2人。岡野は曲がった事が嫌いでも今みたいな事件は絶対に許せないタイプだし、木村も正義なんて名前を付けられているだけあって正義感がある奴だ。苦しそうなみんなの映像に加えて絶賛目の前で熱を出している俺を見てやれることを必死に探してしまっている。

うん。俺はやっぱり来るべきではなかった。こうなることを読み切れなかった……………いや、考えようとしなかった怠慢が招いた結果だな。このままだと2人が独断専行してしまうリスクがある。

責任をもって彼らを思いとどまらせなくてはならない。2人がこんなやる気を出しているのは出してしまった作戦と実際にウイルスにやられてしまった奴の様子をリアルタイムで見せつけてしまっている俺に原因の一端がある。

「確かにどんな手を使ってでも薬は入手しなくちゃいけない。それが最優先事項なのは間違いないだろう」

「お前もそう思うだろう?」

「でも、同時に忘れちゃいけない。既に何度か戦闘してしまっているが、これは隠密作戦だつてことと、俺たちがこの島に来ている表向きは理由は学校の行事の一環であるということ。ウイルスは薬で治る。わざわざ言いふらしたりしなければ親とか周りの大人に気付かれることはない。でも、怪我は違うだろう?」

「それは……」

「程度によるかもしれない。けど、相手はあの鷹岡で、凶器は爆弾とか、ナイフとかである可能性もある。火傷、裂傷。どれもただの学校行事で負うような怪我じゃない。もし、そんな怪我をして隠し通せなかった場合、表向きは俺たちの担任である烏間先生に説明義務が生じてしまうわけだが、その時、周りになんて説明する? 殺せんせーのことを抜きにしてもこれは結構な大事件だ。下手したら学校の責任問題になってE組という制度が崩壊する可能性だつてある。暗殺どころじゃなくなるぞ」

相変わらず、自分でも嫌になるような理責め。

分かっている。木村や岡野は正義感だけじゃなく、ウイルスを盛られて苦しんでる奴らの為に危険を犯そうとしている。

そんな彼らに正論をぶつけて説き伏せるしか能のない自分に嫌気がさしてしまう。

もともと、俺が立てた作戦を聞かせてしまったことに原因があるというのに、説教垂れてる俺は何様なんだつて話だ。

「それになにより、ここに来てないみんなが喜ばないと思う。助けてくれてありがとうつて気持ちはあるだろうけど、それ以上に自分たちの為に木村と岡野が凄いいらない目にあつたつて聞いたらあいつら

はそっちの方がショックなんじゃないかな？」

「でも……」

渋る2人。理責めはここまでにして感情論に切り替える。理を説き、その後で感情に訴え掛ける。やっていけない理由で骨を作り、感情論で肉付けする。感情で動こうとしている奴らを止められるのはやはり感情なのだろうから。

「仮に岡野や木村が俺やホテルでダウンしてるみんなと同じ立場だった時、仲間が危険を顧みずに敵に特攻。薬を持って来てくれたが、帰って来た頃には怪我だらけとかいう状況だったら辛いのか？病気は治っても素直に喜べないだろ？」

「それは……その通りだな。お前のいう通りだと思う」

「だろ？しかも今回はどうしてもそうでもしなきゃ解決できないって状況でもない。確かにみんなの命が懸かっているけど、それは潜入している俺たちも同じだ。実際についていきつきも銃撃戦やったろ？倒れてるみんなが心配なのは分かるけど、でも、倒れてるみんなだって俺たちを心配してるはずだ。違うか？」

「そうだね。うん……。間違いないと思う」

「なら、俺たちがやらなきゃいけないのは安全に、なおかつ確実に薬を奪うことだろ。俺の立てた作戦は確かに勝算あるかもしれないけど、それ以上に不確定要素が多い上に危ない。確かこうだったか。『自分を大事にしない生徒に暗殺者たる資格なし』だったよな、殺せんせー？」

「ヌルフッフ。その通りです、乃咲くん。岡野さんと木村くんの心遣いは満点ですが、君たちもまたみんなに心配されていることを忘れてはいけません。大丈夫、焦らなくても君たちならきつと乗り越える事ができます。目的を果たし、出て来た時と同じ無事な姿で胸を張って、笑顔で帰りましょう」

「……うんー！ごめんなさい、ちよつと焦ってたね」

「だな。みんなもごめん。足止めさせちゃった」

「2人が謝ることじゃないって。やれることをやろうとしただけなんだからさ。ね、烏間先生」

機員がみんなの気持ちを代弁するように烏間先生に矛先を向けると、彼も責める様子はなく、頷いた。

「その通りだ。2人のやる気はこちらとしてもありがたい。以前は受け身の姿勢である事が多く、見ていて多少不安になることもあったが、今の君たちは自ら出来ることを模索している。頼り甲斐が出て来たな。情けないことに今は俺もコイツもこのザマだ。十全には動けない。だから、頼りにしているぞ」

「はいっ！」

木村と岡野の返事に烏間先生は穏やかな笑みを返すと、いつもの硬い表情に戻り、作戦会議を再開した。

「作戦はさっき指示した通りだ。気配を消し、距離を詰め、葉を奪う。ある程度、距離を積める事ができたら俺の責任で鷹岡の手を撃つ。装置の起爆ボタンも奴の手元にある可能性が高いからな。そのタイミングで一気にターゲットと起爆ボタンを奪う」

役割なんかはさっきカルマが話しかけてくる前のものとは変わらないらしい。ただ、体調を崩してる俺は案の定……。

「乃咲くんはこの場で待機。状況次第ではキミが一番危ない。体調不良を見抜かれ、人質に取られようものなら打つ手がなくなってしまう。理解してくれ」

「了解です。こつちでも何かやれる事がなくか考えてみます」

烏間先生直々に待機を命じられてしまった。

確かに今の俺に出来ることはない。気合いを入れれば1人で立つことくらいは出来るだろうが、歩くのは難しそうだ。

足手まといなのは自分が一番よくわかってる。

「危ないという意味では渚くんもそうだ。乃咲くんの読みでは鷹岡の悪意はキミに向く可能性があるようだが、どうする？ここで待機しておくか？正直、今の奴は何をしてくるか分からないぞ」

「いいえ。僕も行きます。鷹岡先生が何してくるか分からないし、乃咲を1人だけここに置いて行くのも不安だけど、もし人手が必要になるのなら1人でも多い方がいいと思います。それに、僕も出来ることをしたいですから」

「そうしてもらえると助かる」

多少の恐怖心はあるのだろうが、渚の瞳には迷いがなかった。そんな目を見て烏間先生は頼もしそうに頷き、速水さんから受け取った銃のグリップを感触でも確かめるみたいに握ると深く深呼吸して、コンデイションを確認するように俺たちを見る。

みんなの目にはやる気が満ちている。ここを乗り越えれば誰一人欠けることなく学校に帰れると信じているのだろう。

みんなのやる気に比例して少しピリついた空気が鷹岡の待ち受ける部屋に続く廊下を満たす。

いよいよ作戦開始。そんな空気の中、俺はどうしても言っておきたい事があった。どうしても頼みたい事がある。

でも、それは必須な事ではない。言ってしまうえば俺のわがままみたいなもの。わざわざみんなの手を止めさせてまで言うべき事ではない。喉に出かかった言葉をグツと飲み込む。

「……う・乃咲クン。どうしたの？ なにか言いたそうだけど」

俺を壁際に降ろしたカルマと一瞬だけ目が合ったその時、俺の様子から何かを感じ取ったらしいカルマが首を傾げる。

ピリつとした空気の中、静まり返るみんなに僅かな動揺が走る。俺の顔を見て不安そうな顔をするものが数名いた。

「ま、まさか、まだ何かあるのか？」

「……乃咲のことだ。きっと何かに気付いたんだろう」

「もしくは何か秘策があるとかか？」

みんなからのこれ以上、なにか嫌な可能性が残っているのか？ という不安半分、それを覆す一発逆転の秘策が飛び出すんじゃないかという期待半分の視線を受けて居心地悪くなる。

「いや、別にそんなんじゃないんだ。別にこれを言ったからみんなが有利になるとかこんな可能性があるから気を付けろ、とかそんな気の利いた話じゃないんだ。だから気にしないで欲しい」

「そうは言うけどな、圭一。お前の言葉や作戦は俺たちにとって柱みたいなものなんだ。木村と岡野が危ないと分かっているても作戦を実行しようと思ったのはお前が立てた作戦だからってのがきつと大き

い。だから言ってみてくれないか？圭一がそんな顔をしてたら士気に関わるからさ」

「だね、乃咲って俺についてこいってみんなを引っ張るリーダーって感じではないけどさ、なんだかんだ言ってるうちの指揮官的なポジションにいるし。そんな顔見せられたら不安かも」

「そうそう、今のところみんなで何かするって時に中心にいるのってお前だし。もつとどっしり構えて欲しいよな」

あれ？、乃咲くんの株が謎に急上昇してる？

クラスのはみ出し者がいつの間にか指揮官なんてかなり重要なポジションに任命されちゃってる？

知らない間にみんなに受け入れて貰っていたようで、その評価はかなり嬉しい。認められず、燻っていた不良児にはこの上ない評価だと言えるだろう。

故に、その評価を、期待を、これから2つの意味で裏切ることになるのが心苦しい。心苦しいが、困ったことに流石に適当にはぐらかせる空気ではない。

「先に言っておく、本当にどうでもいいことなんだ。何度も言うが別に戦況を左右する情報なんかじゃない。本当に俺のわがままなんだが、笑わずに聞いてくれるか？」

「ああ、聞かせてくれ」

磯貝が頷く。みんなが視線を向けてくる。

最後までなんとか誤魔化せないか考えてみたが、それは無理だと悟り、諦め、意を決して重々しく口を開く。

「……そい……」

「え？わ、悪い。聞き取れなかった」

意を決したが、あまりにも情けない言葉を吐き出すのを口が拒むように、言葉以上に情けないか細い声が出た。

そのせいで要求される言い直し。言いたかないが、言うまでみんな動きそうにないので再度覚悟を決め、口を動かし、はつきりと言葉を発する。聞き違えも、聞き逃しもできないように。

「……心細いです」

「心細い……心細い!?!」

「はい……。寒いし、頭痛いし、関節痛いし、歩けないし、静かだし……。これから1人になると思うとなんか、心細いです……」

【圭一弱点メモ①：著しく体調を崩すと弱メンタルになる】

意を決して吐き出した弱音。ほぼ全員が呆気に取られたように周りを見まわし、顔を合わせ、俺を見比べて……。

「ぶっふう……!?!」

吹き出しやがった。

「笑わないって言ったのに……」

思わずボヤくと心優しい女神矢田がフォローしてくれた。

「だ、大丈夫!その気持ちは凄く分かるよ!具合悪い時とか1人になると寂しいもんね、うちの弟もそうだし!気にすることじゃないと思うよ!ねえ!みんなもそう思うよね!?!」

「あ、ああ、そ、そうね。気持ちは……ふふ……、わ、分かるよ。さ、寂しいもんね……ふふふ……」

「……心細い、か。あの圭一がねえ」

フォローしてくれる矢田さんと笑う面々、なにやら感慨深そうに頷く磯貝とニヤニヤと笑みを浮かべるカルマ。

やっぱり言うんじやなかったと思う反面、ここまで来たんだから全部ぶちまけてしまおうと思った。

「あーそうです、寂しいです。こんな所に1人取り残されて不安なんですよ。だからみんなのスマホと俺のスマホを律で繋げてくださいく。動くの厳しそうだからせめて情報だけはリアルタイムで仕入れておきたいんですよ」

「あ、拗ねた」

「意外な弱点見つかったな」

「緊張して損した」

「ちっ、ガキじゃあるまいし……」

十人十色な反応を見せながらみんながスマホを繋げてくれる。律が『全員分の接続完了です♪』と俺のスマホの中でプラカードを見せて来たのを確認する。

なんだかんだ言いながら、寺坂も繋げてくれている。やっぱりガサツでデリカシーなくて、脳筋だけど、良い奴だ。

「さて、適度に緊張がほぐれたところでそろそろ行きましょう。ホテルでみんなが待っています」

「ああ。ターゲットは目と鼻の先だ」

先生2人の言葉に頷くと今度こそみんな鷹岡の待つ最上階へと進んで行く。そんな彼らの動向を随時把握する為に俺はみんなのスマホが拾う様々な情報に神経を注ぐのだった。

55話 鷹岡の時間

乃咲くんを置いて鷹岡の待ち受ける最上階に向かう。正直、体調を崩した彼を1人にするのは不安だが、何かあれば律が連絡を寄越すことになっている。誰か1人でも残すべきかと考えたが、この状況だ。動ける戦力は多いに越したことはない。

それに彼のことだ。口では心細いと言いつつ、誰が残ると言い出したら全力で俺の作戦に参加するよう説得したに違いない。

彼だけでなく、残して来た子供達を想い、俺にできる事があるとなれば確実に、かつ速やかに薬を奪取することに他ならない。

幸いにも、黒幕の正体と我々のターゲットである治療薬の姿や位置は把握出来ている。これは確実にアドバンテージだ。

敵の正体を把握していれば下手な動揺は生まれなし、ターゲットの姿と位置を把握出来ると言うことは確保に手間取ることはないということ。その分余裕が出来るという訳でもないが、一刻も早く薬が必要な今、時間を短縮できるのはありがたい。

気配を消し、音を消し、呼吸音を抑え、黒幕の待つ部屋の扉を開け、奪い取った銃を握り直し、侵入する。

部屋は静かだ。奴が見ている監視カメラは音を拾うタイプではなかったらしく、律に見せられた映像の子供達が苦しむような声は聞こえてこない。ただ、代わりに時折り聞こえてくる薄ら笑いとか何かを掻きむしる様なバリバリという音だけが聞こえて来る。

だが、生憎とその姿は見えない。それに聞こえて来る音もかなり遠い。恐らくこの静寂でなければ聞き逃していた。

続けて室内を観察する。部屋はだだっ広く、遮蔽物が多い。気配を消して接近するにはうってつけのロケーションだが、障害物が多いと言うのは同時に銃を使った射撃を行えるポジションが限られると言うこと。これが凶と出るか吉と出るか。

裏で待機していた生徒たちにハンドサインで指示を出す。まとめ役の磯貝くんが頷き、片岡さんと協力して指示を伝え、それぞれが

さつき割り振った役割を果たせる様に構える。

誰一人として焦り、慌てる素振りを見せず、落ち着いた様子で領き、指示があればいつでも動ける様に構えるその練度は中学生のレベルを遥かに超えているだろう。

不意に超生物の言葉を思い出す。律を含め16名の特殊部隊。その評価は間違っていないなかった。数十メートルの崖を難なく登り、一般客に紛れた殺し屋を見抜き、鍛え抜かれた暗殺者を打倒し、潜入任務をこなし、拳銃に銃撃戦を繰り広げ、手元にある僅かな情報だけで黒幕の正体を暴き、勝算のある作戦を立てる。

これがこのホテルに入ってから彼らが成し遂げて来た難業。こうして列挙して、その字面を見てみると分かる。彼らの能力の高さが、はつきり言って異常だ。

だが、その異常さが今は非常に頼もしい。この場においても、暗殺においてもだ。事実、彼らは我々精鋭が指一本触れられなかった超生物を行動不能にまで追い詰めた。今、彼らを失うことは地球存続の可能性の損失に他ならない。

教師として、大人として、監督者として、同じ標的を目指す同志として、防衛省としても、彼らを失うわけにはいかない。

我々から発せられる存在感を可能な限り殺して部屋を進む。一歩一歩、慎重に、けれど速やかに。

生徒たちも上手く気配を殺している。動きにも淀みはなく、精度はかなりのもの。日頃から音を消して動くことを心がけていたのだろう。最近は教室での暗殺も物音は立たなくなり、足音を立てて走る者も居なくなった。

一人一人の練度は素晴らしい。だが、それでも俺を含め、全員が完璧に気配を消せるわけではない。生きているのだから当然、呼吸はする。ある程度、セーブできて、息をしないなんてことはできない。最低限、存在感は出てしまうのは必然だ。

乃咲くんの言葉が蘇る。『いくら衣擦れと呼吸や足音を消せても完璧に気配を消すなんてできない。それにこれだけの人数がいるのだから、遅かれ早かれ、侵入はバレる』

まさにその通りだ。律やここにいない乃咲くんを除くとここにいるのは15名。これだけいるとやはり、多少は存在感が出る。

上手く接近出来たとしても、近付けば近付くほどにその多少に奴は気付くだろう。そう考えるべきだ。

そうなることややはり、速攻を仕掛けるべきなのかも知れない。本来は出来るだけ近付き、取り押さえることがベストだと考えていたが、多少、距離があつたとしても腕を撃ち、奴を無力化し、起爆ボタンの確保に動く。血を見せることになってしまいが、生徒たちの安全を考えるならそうするべきだろう。

皆に指示を出し直す。俺が撃つたら全員で襲い掛かれ。その指示に多少の動揺が走つたが、それでも彼らは頷く。

全員に指示が行き渡つたのを確認し、改めて進む。ジリジリと、それでいて確実に奇襲を仕掛けられる場所へと。

進みながら考える。より確実に安全な策。周囲の遮蔽物や空間を活かした戦略を。だが、やはり選択肢は限られる。

屋内で、この人数で、かけられる奇襲作戦。そういう意味では乃咲くんの考案した作戦は的確だった様に思う。

爆弾を起爆するまでのタイムラグを考慮し、強襲。銃でそれを援護すると言うのは現状で取れる最善なのかもしれない。

思えば作戦の主軸に木村くんと岡野さんを選んだのは単に機動力を買つたわけではなく、この室内の状況に合わせた最速を取れる人選だった。遮蔽物が少ないのであれば走力のある木村くんが、遮蔽物があるのならば身軽な岡野さんで先手を取るという意図があつたに違いないだろう。そんな戦略をあの僅かな時間で組み立てる思考力には舌を巻く。

だが、感心してばかりもいられない。彼の考えた作戦が理に叶っていると思うのなら、決行できる状況を作らねばならない。俺も彼も危惧したように2人をつつませるのは危険すぎる。

だが、逆に言えばその危険さえクリアしてしまえば一番現実的な策であると言うこと。工夫次第でやってみる価値は充分すぎるくらいにある。

敵は奴1人。対してこちらは俺を含めて15人。無力化さえ出来れば勝負は一瞬で決まる。

起爆ボタンに近い方の腕を狙う。そのつもりだったが、可能なら両腕を撃ち抜くべきかもしれない。流してしまう血の量は増えるだろうが、それでも子供達の命には代えられない。本来ただの学生でいられた彼らを巻き込んだのは我々大人なのだから。

大人として、プロとして責任を果たす。

最悪の結末を迎える覚悟を決め、最後の遮蔽物の背につき、我々のターゲットの様子を盗み見る。

バリバリと何かを掻きむしる音は奴から発せられていた。テーブルに頬杖を付き、顔を掻く奴の後ろ姿を見て俺と乃咲くんの考察が間違っていないかったことを確信する。

前回会った時に比べて体型はスマートになっているが、あの後ろ姿は元同僚である、鷹岡明で間違いない。

生徒たちも同様にその姿を見て鷹岡であると確信したらしい。彼らの顔に緊張が走るのを見た。

一応は同僚。信じたくはなかったが、こうして姿を確認した以上。鷹岡は我々の敵であることが確かなものになった。

そしてその後ろ姿の手前には律が見せてくれた映像と同様にスーツケースが鎮座している。その外装には精鋭時代に作らされたプラスチック爆弾の起爆装置が取り付けられている。

続けて視線を動かし、奴が腕をのせているテーブルを見る。頬杖を付いている側には黒くて薄い箱があった。その箱の中心には赤いボタンが一つ。間違いない。アレが起爆スイッチだ。

「……………」

皆に視線を向け、作戦開始の合図を送ると全員が控えめに頷き返してくる。皆の覚悟も決まった、狙うべき場所は決まった、ならばあとはこの引き金を引くだけ。

頬杖をつくその右肘を破壊するべく照準を付ける。まずは右手の自由を奪い、リモコンを取るべく伸ばすであろう左手を続け様に狙い、確実に無力化する。

「かゆい」

引き金に指を掛けたその時、鷹岡が口を開いた。独り言にしては声量が大きい。なにより、このタイミングでの発言。間違いなく我々に気付き、明確な意図を持って声を出したのだろう。

だが、そんなことは関係ない。我々の目的は薬の確保であって、奴との対話ではない。構うことなく指先に力を入れようとしたその時。ジャラリ、と硬いものが擦れ合う音を聞いた。

発生源は奴の左腕の下。それも音から察するに一つ二つが擦れたのではなく、大量に物が擦れている。鷹岡はこの状況下でまだ何かを隠し持っている。咄嗟に警戒を強める。

ここで撃たなかったのは幸か不幸か。警戒を強めた一瞬の隙をついて奴が動く。左腕の下に忍ばせていた大量の何かを適当に掴み取り、乱雑に放りなげ、床にばら撒く。

そして、奴が投げたそれを見て、投げた本人を除いた全員が信じられないと言わんばかりに息を呑むことになった。

投げられ、ボトボトと音を立てて床に落ちる、無数の黒くて薄い長方形の箱。それには見覚えがあった。奴が爆弾を起爆させるのを防ぐ。その上でキーになってくる起爆用のリモコン。無造作に投げられたのはそんなリモコンの山だった。

間抜けなことに呆気に取られた。我々にとつてこれは想定外の出来事だ。乃咲くんの考察した筋書きにはなく、恐らくは渚くんの腕の中にいる超生物も予測していなかったのだろう。結晶体の中で冷や汗をかいているのが見えた。

完璧な不意打ちに我々は身動きが取れなくなる。仮に作戦を断行した時、まだリモコンを隠し持っていたりしたら、奴が倒れ込んだだけでスイッチが押されてしまう可能性があるから。

身動きは取れないが、それでも銃を下ろすことなく奴に向け続け、なにか攻略の糸口がないかを思索する。

「思い出すと痒くなる。生意気なガキ共に受けた仕打ちを思い出すと顔が痒くて仕方がない。でも、そのせいかな。いつも傷口が空気に触れるから感覚が鋭敏になっているんだ」

椅子の上で手を組み、背中を預けた背もたれに体重をかけながら邪気の孕んだ声で語り続けた。

「言っただろう。もともとマツハ20の怪物を殺す準備で来てるんだ。リモコンだつて予備を作る。マツハで奪われても対応できるくらいの数。うっかり俺が倒れ込んでも押すくらいにな」

椅子がゆっくりと回り出す。焦らすように、ウイルスで苦しむ生徒たちの苦痛の時間を引き延ばすように。

「悪い子達だ……。恩師に会うのに裏口から来る。父ちゃんはそんな風に教えたつもりはないぞ」

時間が凍り付いたかのような長い溜めの後、ようやく奴が振り返る。我々と向き合った奴の顔は以前のような形だけでも教え子からの信頼を得ようとする笑みを忘れていた。

歓喜、狂気、憎悪、嫌悪。それらを煮詰めたかのような形容し難いオーラを纏い、掻き傷でボロボロの顔をグシャリと歪めて壊れたような気味の悪い笑みを浮かべる。

「どう言うつもりだ、鷹岡……。！防衛省から盗んだ金で殺し屋を雇い、ウイルスで生徒たちを脅すこの凶行！決して、許されることではない！自分が何をしているのか分かってるのか!？」

「酷い言い草だなあ、烏間あ。凶行？おいおい、よしてくれよ！俺は至極まともだぜ？地球を救う為に動いてるんだからよお？」

ケラケラ笑いながら鷹岡は立ち上がると薬の入ったスーツケースを持ち、狂気の憎悪の増した目をこちらに向ける。

「屋上へ行くか。愛する生徒たちへ歓迎の用意があるんだ。着いてきてくれるよなあ、お前たちのクラスは俺の慈悲で生かされてるんだから。夏休みの特別補習と洒落込もうぜ？」

我々はその言葉に従うしか無かった。あのケースに付けられているのはプラスチック爆弾。あれが習った通りの構造をしているのならその威力は俺が想像している通りのもの。この密閉され衝撃の逃げ道がない空間で爆破されようものなら俺はともかく、生徒たちがただではすまない。

爆破される前に距離を詰めると言うのも奴の顔を見れば現実的で

ないことが分かる。あの狂気と憎悪で満たされた顔を見れば嫌でも悟る。鷹岡はダメージを負うことを分かっているが、自ら自爆を選ぶ。それで生徒たちを殺せるのなら、奴はそうする。

奴の背中を追い、屋上へ向かう。不幸中の幸いはこのホテルの構造上、最上階の客室も他のフロアと同じように降りと登りの階段が分かれていることで乃咲くんと鷹岡が鉢合わせることがなかったことだろう。今の奴に捕まれば人質にされることはおろか、最悪殺されてしまうのも想像に難くない。

階段を登り、屋上へ。薬を奪う機会を伺い続けるが、奴がリモコンをあと何個持っているか分からない以上、迂闊に動くことは出来なかった。不甲斐なさに思わず拳を握る。

何かないか。この状況を打開する一手は。奴から薬を取り上げ、その上で無力化する術は……！

「これは地球を救える計画だった。そのこの2人に賞金首を持って来させさえすればスムーズに仕上がったのになあ」

「……？」

「計画ではな、茅野とか言ったっけ？そいつを使う予定だった。対先生弾をたっぷり敷き詰めたバスタブの中に賞金首ごとセメントで生き埋めにする。対先生弾に触れずに元の姿に戻るには生徒ごと爆発しなきゃいけないって寸法さ。生徒思いの殺せんせーはそんな酷いことしないだろう？」

「……狂ってやがる……！」

皆の気持ちを代弁するように寺坂くんが吐き捨てる。

奴の語った作戦の生贄に選ばれていたことを知った茅野さんは戦慄で顔を凍て付かせていた。

「言ったらろ？俺はまともさ。むしろこっちが正気を疑いたいねえ、大人しく交渉に乗ってれば他の連中は助けられたかもしれないのに動ける全員で乗り込んでくるんだもんなあ。気づいた時は流石に肝を冷やしたが、やることは変わらない。お前らを生かすも殺すも俺の機嫌次第なんだからなあ」

「……許されると思いますか？そんな真似が……！」

怒りで血管を浮き上がらせた超生物のドスの効いた声。奴に身体があつたのなら間違いなくその体色は黒く染まっていた。

だが、そんな声も意に返さず、鷹岡は言葉が続けた。より一層の激情を孕んだ瞳を渚くんに向けながら。

「人道的な方さ。お前らが俺にした仕打ちに比べりやあな。お前らの所為で俺の評価はダダ下がりよ。連中に向けられた屈辱の視線、鳩尾を殴られてゲロを吐いた不快感、不意打ちで突き付けられたナイフが頭ン中をチラつく度に痒くて痒くて眠れなくてよお……。ストレスでおかしくなるかと思つたぜ……。！」

今まさに思い出しているのだろう。その屈辱の記憶を。バリバリと息を切らしながら顔を掻きむしる鷹岡。

その異様な姿、光景に誰もが呆氣に取られた。身動きが取れず、奴が満足するまでその狂気を見続けた。

息を切らし、更に狂気に染まり深く濁り切つた瞳は相変わらず渚くんを捉え続ける。標的を痛ぶり、食う捕食者の眼。

「落とした評価は結果で見返す。受けた屈辱はそれ以上の屈辱で返す！特に潮田渚あ！俺の未来を汚したお前は絶対に許さねえ。無様に泣き叫ぶまで痛ぶり、そして殺す。絶対にだ」

「……」

その言葉に俯く渚くん。だが、直ぐに顔を上げて鷹岡と向き直る。その目には怯えがあつたが、前もつて乃咲くんに忠告されていたこともあつてか、驚いているようには見えなかつた。

「……アイツの言つた通りか。背が低い生徒を要求したのはやっぱり渚を狙う為だつたんだ……。！」

「完璧な逆恨みじゃねえか……。！」

千葉くんと吉田くんが吐き捨てる。

「へへ、じゃあ渚くんはアンタの恨みを晴らす為に呼ばれたわけ？その体格差で勝つて嬉しいの？情けないねえ、鷹岡センス。俺ならもちよつと楽しませてやるけど？」

「トチ狂いやがって……。ふざけんなや、テメーが作つたルールの中で渚に負けただけだろうが。言つとくけどな、あん時、テメーが勝つ

てようが、負けてようが、俺らテメーのことが大っ嫌いだからよお……!!」

渚くんを庇うように挑発し、身体を滑り込ませる赤羽くと声を荒げる寺坂くん。彼の叫びが皆の意見の代弁であることを肯定するよううに生徒たちが険しい顔で鷹岡を睨み付けていた。

生徒たちの敵意を一斉に向けられた鷹岡がヒステリックに唾を撒き散らしながら声を荒げる。

「ジャリ共の意見なんて聞いてねエ!!俺の指先一つでジャリが半分減るって事、忘れんなッ!!」

明確な脅しと勢いに飲まれて閉口する。

「チビ、お前1人で登って来い。ヘリポートの上まで」

スーツケースを揺らし、ガツガツと態とらしい足音を立てて鷹岡がヘリポートへ掛けられた梯子を登る。

「渚!行っちゃダメだよ!」

茅野さんが必死な声で渚くんを制止するが、彼は一度俯き、覚悟を決めたように顔を上げると、手に持っていた賞金首を彼女に投げ渡し、鷹岡の待つヘリポートへと歩き出す。

「……行きたくないけど、行くよ」

「速く来いオラアアアアア!!」

鷹岡の雄叫びにも似た怒鳴り声。それが自分に向けられていることに自嘲気味な薄ら笑いを浮かべる。

「あれだけ興奮してたら何をするか分からない。話を合わせて、冷静にさせて、治療薬を壊さないように渡して貰うよ」

何をするか分からない。まさにその通りだ。今の獣性剥き出しの鷹岡は何をするか分からない。今、こうしている間にもその手に持ったリモコンのボタンを押すかもしれない。

我々の行動の一挙手一投足で治療薬が消し飛ぶ。今、俺たちにできる行動はあまりにも限られていた。

「渚くん……」

「行ってきます、烏間先生。みんなを頼みます」

一度だけこちらに振り返り、梯子に足を掛けてヘリポートへ上がっ

てゆく。彼が登り切った所で鷹岡は梯子を外すとヘリポートの下へと無造作に捨て、移動手段を断ち切った。

「これで誰も登って来れねえ。足元のナイフを見て俺のやりたいことが分かるだろ？この前のリターンマッチだ」

「待って下さい、鷹岡先生。戦いに来たわけじゃないんです」

「だろうなあ、この前みたいな卑怯な手は通じねえ。一瞬で俺にやられるのは目に見えている」

ここに来るまでの身勝手な狂気に任せた言動の中でたった今言い放ったその言葉だけは奴が正しい。

鷹岡は腐つても精鋭。不意を突いて殺す暗殺はもう奴には通用しないだろう。前回のこともあり、渚くんを油断なく警戒している筈だ。暗殺ならまだしも、戦鬪では勝ち目などない。彼らは殺し合いの訓練なんて受けていないのだから。

「だがなあ、一瞬で終わっちまったら俺としても気が晴れない。だから、闘う前にやることやって貰おうか」

鷹岡は歪んだ笑みで地面を指差す。

「謝罪しろ、土下座だ。実力がないから卑怯な手で奇襲した。それについて誠心誠意謝って貰おうか」

逆らったら何をするか分からない。薬を爆破されるかもしれない。そんな嫌な想像で突き動かされた渚くんが膝を突く。

「僕は……」

「それが土下座かア!?バカガキが！頭地面に擦り付けて謝ンだよお！こちとら今直ぐジャリを減らしても良いんだぜ？」

その脅しに渚くんは迷わず頭を下げた。冷たい地面に額を擦り付け、ポツポツと絞り出すように言葉を紡ぐ。

「僕は実力がないから卑怯な手で奇襲しました。ごめんなさい」

「おう、その後で偉そうな口も叩いてくれたよな、『出ていけ』とかよお。舐めた口聞いてくれたよな、ガキの分際で大人に向かって、生徒が教師に向かってだぞ！」

「ガキの癖に、生徒の癖に、先生に生意気な口を叩いてしまい、すみませんでした。本当にごめんなさい」

その屈辱的な光景に握った拳が血を滲ませる。情けなかった。中学生に土下座をさせている我々大人の不甲斐なさが。

自らが作ったルールで敗北しておきながら逆恨みし、大勢の命を危険に晒している同僚。

そして、今、こうしてなす術なく理不尽な目にあっている教え子を見ていることしか出来ない無力な自分が。歯痒くて、もどかしくて、情けない。

渚くんの土下座を見た鷹岡が今日一番の狂喜を見せる。

「……ッ」

「落ち着いて下さい、鳥間先生。あなたが感情的になってしまつては皆が不安になる」

「……分かつている……」

賞金首に嗜められ、深く息を吐く。激情に震えることが今やるべきことではない。現状の打開。それが最優先事項。

だが、どうすればいい……。どうしたらこの最悪な状況を変えられる？何をしたらこの状況を覆せる？

「私とて渚くんにあそこまでさせてしまったこと、不甲斐なくて仕方ありません。ですが、その反省会は後に回しましょう。我々にはまだ、出来ることがある筈です」

ヘリポートの上で悦に浸る鷹岡には届かず、この場に残った俺たちにだけ聞こえる声で賞金首が言った。

「出来ることって、この状況で何が出来るの……？」

片岡さんの疑問は当然だった。我々は身動きが取れない。銃を奴に撃てば倒れた拍子に起爆ボタンを押してしまう危険もある、渚くんの元に駆けつけようにも梯子は落とされている。

「鷹岡先生のミスはリモコンを大量に作り、その事実を我々に伝えてしまったこと、そして見せつけるようにばら撒き、回収しなかつたことです。それさえなければ我々は本当に身動きが取れなくなり、打つ手がなくなるところでした」

「何言ってるんだよ!? そのリモコンが大量にある所為で鳥間先生も千葉も狙撃できないんだろ？」

「その通りです、木村くん。ですが、そのリモコンを我々が確保出来ていればどうなるでしょう？みんなで突入する前の作戦会議を思い出してください」

その言葉に静まり返る生徒たち。渚くんは屈辱を与え、満足しているらしく、俺たちに興味を示さない鷹岡はニヤニヤと彼を見下しながら治療薬へと歩いてゆく。それでも賞金首は言葉を続けた。我々に希望を示すように。

「あれはプラスチック爆弾。相当な威力を持つ装置です。近くで爆発したらただではすまない。そんな爆弾のリモコンを確保できれば、誰よりも爆弾の近くにいる鷹岡先生を追い詰める、あるいは交渉の席に着かせる武器になると思いませんか？」

「なるかもしれないけど……でも！私たちはそのリモコンを持ってないんだよ！どうしようもないじゃん！」

「ええ。その通り。我々は持っていません。ですが、忘れていませんか？今、この瞬間も我々のスマホを通して情報を得て、状況を俯瞰し、この最悪の状況を覆せる最適解を出し、実行できるポジションに居る人物がいることを」

「……………」

「思い出してください。烏間先生。ここに乗り込んだ時に貴方が指揮していた特殊部隊は何人だったか。そして、渚くんを含め、この屋上にいる隊員は何名なのか。……1人足りないじゃありませんか？」
……このホテルに潜入した時、生徒は16名だった。そして今、この屋上にいるのは律を含め15名。確かに1人足りない。

「あと1人って……まさか……!?!」

磯貝くんが信じられないと言わんばかりに驚く。潜入したメンバーでここにいない人物は彼しかいない。

ここに通じる階段のドアを振り向きそうになる生徒たちに指示を出して鷹岡たちに視線を向け続けるように促す。コイツのいう通り、もし、本当に彼がここに来るのであれば、それを奴に悟られてはならない。

だが、本当に来るのか、来れるのか、あのフラフラな体で。ウィル

スにやられて満身創痍のあの様子で。とてもじゃないが動ける身体ではない筈だ。仮に動けたとしても無茶をしているに違いない。ここに来るまでに倒れている可能性だってあり得る。

——大丈夫です、烏間先生。俺を信じてください

彼の言葉が脳裏を過ぎった。以前、鷹岡と彼が対峙した時にあの少年が言った一言が引き金になったかのように胸に入れたスマホから律の声がした。

『皆さん、そのまま聞いて下さい』

彼女の声に全員が耳を傾ける。耳を澄ましてようやく聞こえるか、聞こえないかの音量。恐らくは鷹岡に悟られないための配慮だろう。そしてその配慮が示す意味は一つしかない。

『これから何が起こっても動揺せず、彼からの合図を待つてください。彼の合図と共にヘリポートの照明を最大出力で稼働させます。それが作戦開始の合図です』

あの子は来ている。我々の直ぐ後ろに。そして、作戦を組み立てていた。我々が手をこまねいている間にも虎視眈々とこの状況を覆す最善の一手を。

「さあ、皆さん。反撃の時です……!!」

賞金首の言葉と同時に鷹岡が動く。目の前の渚くんにも、そして手の届かない位置にいる我々に見せつけるように、煽るように、スーツケースを持ち上げ、振りかぶる。

「あのウィルスにやられた奴の末路は全身ができものだらけになって顔面がブドウみたいになるんだぜ？笑えるだろ？夏休みの観察日記にしたらどうだ？お友達の顔面がブクブクとブドウに化けて行く様をよお……!!」

スーツケースの持ち手から手が離れるその瞬間を見計らったように屋上の扉が勢いよく開かれる。

そこに現れたのは短い銀髪。扉に身体を預け支えとする事で辛うじて立っている、ほうほうの体の少年。熱に浮かされ、ふらつく体に鞭打って、死に物狂いでここまで来た事が想像に難くない様子の俺たちの教え子がそこにいた。

「動くなあつ……!!!」

今にも倒れそうな様子から想像もつかない裂帛の怒声。

鋭い眼光で鷹岡を睨み付け、奴のぼら撒いたりモコンの一つを銃のように向ける乃咲圭一がそこにいた。

56話 抵抗の時間

『乃咲さん、大丈夫ですか……？』

「むりい……。早く寝たいい……。休みたいい……。」

心配してくれる律に対して飛び出し続ける弱音。

みんなが鷹岡の元に向かってから間もなく、俺も彼らの後を追うようにホテルの廊下に身体の側面を擦り付けながら歩き、転んでは這いずりながらみんなのいる部屋に向かっていた。

寂しいからと言うのもある。倒した奴らが這い上がってくるんじゃないかという恐怖もある。

だが、こんな身体で戦闘は出来ずともまだ、何か出来ることはある筈だと信じ、その万が一に備えて廊下を立ち、転び、這ってでも移動し続けていた。

『言っただろう。もともとマツハ20の怪物を殺す準備で来てるんだ。リモコンだって予備を作る。マツハで奪われても対応できるくらいの数。うっかり俺が倒れ込んでも押すくらいにな』

部屋の扉前まで辿り着き、入り口横に背中を預け、息を整えながらみんなが繋いでくれたスマホから聞こえてくる部屋の内部でのやり取りに耳を傾ける。

聞こえてくるのはまさかの展開。リモコンが複数存在していたと言う事実。読んでいなかった鷹岡の策に舌打ちする。

「……まさか、複数作ってるだなんて」

『予想できませんでしたね』

予想外の展開。だが、考えられない発想ではなかった。癩だが、鷹岡の言うことや発想は的確だと思う。

相手はマツハ20。そんな速度の化け物が相手ならリモコンが奪われる事態は普通にあり得る展開だ。事実、俺たちもナイフで暗殺を仕掛ければナイフを奪われる訳だし。俺が二刀流を身に付けた理由も少なからずそこに起因していた。

奪われた時のための予備。それは決して突飛な発想ではない。あ

りふれたごく普通の思考。それを読めなかった自分に失望する。これで俺や烏間先生の立てた作戦はポシヤった。

そして、リモコンが複数ある以上は迂闊な真似は出来ないだろう。烏間先生たちはほぼ詰んだと考えて良い。

万が一に備えて廊下を這って来た甲斐がある。俺にもまだ、出来ることはあると言うことだ。

『屋上へ行くか。愛する生徒たちへ歓迎の用意があるんだ。着いてきてくれるよなあ、お前たちのクラスは俺の慈悲で生かされてるんだから。夏休みの特別補習と洒落込もうぜ?』

スマホ越しでも感じる鷹岡の狂気。なす術がないみんなはそれに従うしかないだろう。スマホから足音が聞こえる。

「律、部屋の中には誰もいないか?」

『はい、たった今、全員退室しました』

律の肯定を受け、部屋に入る。壁に手をつけて立ち、ふらふらと家具などに捕まりながら移動し、さっきまでみんなが居たであろう場所に辿り着く。そこにはスマホで聞いていた通りに爆弾の起爆スイッチが大量に落ちていた。

多分、今、目の前にいるのが動ける全員だと思っ込んでいるのだろう。鷹岡はずさんにもリモコンを放置したらしい。

実際、まともに動けるのが彼らだけと言うのは正しい。戦力的に俺はいないも同然だ。だが、それが不幸中の幸いだった。俺がウイルスにやられなければ間違いない彼らと同じ場所にいた。そして詰んでいただろう。

ウイルスを盛られたことと、烏間先生の俺を置いていくという選択がこの奇跡的な状況を作り出したわけだ。

千鳥脚でリモコンの絨毯に近づき、一個だけ拾い上げて、屋上へ続く道に足を伸ばす。

「律、一応聞いておくが、このリモコンを無力化することは出来るか? コイツ、一応は電波で制御されてるだろ?」

『……申し訳ありません。私の力不足です。私の侵入経路はネットワークのみ。もしくは外部メモリで私のプログラムを直接注入出来

れば可能ですか……」

「……そう言うタイプじゃなさそうでもんな」

『残念ながら……』

そりゃあそうか。そもそも、無力化できるなら彼女はとつくにしているだろう。少し無理を言ってしまった。

屋上へ向かいながら策を練り続ける。今の俺に出来ることはあまりにも少なすぎる。

ただ、少ないだけで、何もできないわけじゃない。正直、万全というには程遠く、不安が残るのは事実だが、自分が紡げる僅かな可能性に全力を注ぐしかない。

「っ……っ……」

手が滑り、転び、身体を強かに床に打ちつける。リモコンはボタンが外装の中に引っ込んでるタイプなので誤作動させることはなかったが、気を付けなければ。

『乃咲さん……それ以上は体が……っ……』

「大丈夫だ、正直、めちやくちや具合悪いし、ギャン泣きしたいレベルで痛いけど、まだやれる……っ……」

腕を床に叩きつけるように身体を支え、立ちあがろうとしたところでふと、部屋の隅に視線が向く。

何か、荷物のようなものが乱雑に置かれていた。今、ここで転ばなければ視界に入りすらしなかっただろうそれになんとか近づき、少々気が引けるが物色する。

恐らくは鷹岡か殺し屋たちの荷物だろう。そのように目星をつけ、荷物を漁る。何か交渉材料になりそうなもの、あるいは解毒薬の予備とか薬に関する資料があれば理想だろう。儚い願いを託し、乱雑に置かれていた荷物を散らかしながら探し続ける。

搜索に時間は掛けられない。荷物を粗方漁って、そろそろ諦めようとした時、二つのアタッシュケースを見つけた。

片方は重くて大きい。もう片方は小さくて比較的軽い。何だこれは？何が入っている？

鷹岡か、毒使いのスモッグ、おじさんぬ、そしてあの銃使いのうち

の誰かの荷物であることは間違いないが。

これが奴らの仕事道具であると考えた場合、素手が武器のおじさんぬの荷物である可能性は低い。となると、これらの荷物は鷹岡、スモッグ、銃使いのうちの誰かの物だろう。

さて、誰のものか。ゾーンに入り、当たりをつける。多分、この重いは銃使いの物だろう。奴は言った。銃の調子を味で確認し、一番美味い銃が一番よく手に馴染む、と。つまり、奴は銃器を複数持ち歩いている可能性がある。この重さも金属製の銃が複数収まっているというのなら納得だ。

となると、この軽いは鷹岡かスモッグの物だろう。鷹岡の物なら交渉材料になりそうな何か。ウィルスを作ったのがスモッグであると仮定した場合、この荷物が奴の物なら解毒剤とかそれに関する資料である可能性もある。

開けるとしたらこの小さい方一択だろう。たぶん、ここまで辿り着くことを想定していなかったのか、ケースは金具で止められた簡単な物。作りは単純で今の俺でも力尽くでこじ開けられるタイプだったことを幸いに力を込める。

指を引つ掛け、ゾーンに入り、左右に無理矢理開き、中身を確認する。確認するが、そこには俺の理想としたものは何一つとして入っていないかった。

入っていたのは見覚えのある小道具。スモッグとおじさんぬ、そしてカルマが使ったあのゾウを倒せるとか言うあの毒が入っていたカートリッジそのもの。

見たところ、4つあるスロットのうち、3つが空白になっているあたり、残っているこの最後の一個は彼らが使った毒と同じであると考えて良いだろう。

何かしらには使えるかもしれないとそれを盗み、改めてみんなの元へ目指す。スマホから聞こえる声に耳を傾けると、鷹岡が何やらヒステリックに喚き散らしていた。

ヒステリックな男ってカッコ悪いよな、などと思ったが、敵の策にハマリ、ウィルスを喰らって情けない弱音を吐いた俺も同類かと思

留まり、ずりずりと壁に身体を擦り付けながら情けない足取りで屋上へ続く階段を登る。

何度もバランスを崩し、無様に膝をつき、何とか扉の前に辿り着いた俺は隙間から屋上の様子を覗いた。

屋上にはみんなが居た。後ろ姿しか見えないが、心配そうにヘリポートを見つめるみんなとその視線の先で土下座させられた渚とそれを愉悦に満ちた顔で眺める鷹岡が目映る。

——胸糞が悪い。

そのあまりにも腹立たしい光景に頭に血が一気に上がるが、ここで感情的になっても仕方ないと自分を諫めて屋上の様子を観察する。遮蔽物はない。ヘリポートと屋上は繋がっておらず、スマホから聞こえて来た音から察するに、連絡橋の役割をしていた梯子が階段は落とされたのだろう。だから、リモコンの件を差し引いても、みんなはそこに止まるしかないのだ。

ヘリポートは隔絶された孤島状態。そんなヘリポートを照らす4つの照明。それは中々の光量があるらしく、いま、屋上を照らしているのは月明かりと照明のみ。

多分、今、照明を落とす、あるいは照明の灯りを強めることができれば一時的に視界を奪うことは可能だろう。作戦次第ではその隙にたたみかけることも出来る筈だ。

「律、あの照明のコントロールは出来るか？」

『……可能です。あれはシステムでコントロールされているようですね。ホテルのコントロールを奪っている今なら私の意思で点けることも消すことも光量を調節することも出来る状態です』

「最大出力になるとどの程度明るくなる？」

『現段階で出力としては真ん中ほど。軽く見積もっても今の倍は明るくなるでしょう。ヘリポートからこちらへの視認は一時的に難しくなると思われます』

「……なら、作戦は決まった。薬は俺が絶対にどうにかする。合図したらヘリポートの照明を全て最大出力にしろ」

『どうにかって……どうする気ですか？』

「脅す材料なら手元にある。爆弾は奴の手の中。そしてリモコンは俺の手元。アイツは薬を人質に優位に立ってるつもりだろうが、爆弾が奴の手元にあり、リモコンを俺が持っている以上、もはや生殺与奪を握っているのは俺だ。やりようはある」

『ですが、鷹岡先生も乃咲さんが爆弾を起動させる筈がないと考える筈です、千日手になるか、爆弾を無力化できても彼の手元に薬があることに変わりはありません！そうなった時、爆弾という枷がなくなつたあの人がどんな行動に出るか分かりません、危険すぎます！』

「確かにそうだが、今のままでは確実に時間切れでみんな死ぬぞ。奴が何をするか分からないのは事実だ。でも、爆弾を無力化できればこっちには銃がある。銃撃される可能性が以上、鷹岡にできる動きは限定される。薬を壊す手段だって絞れる」

『でも……！』

「アイツにあるカードは治療薬のみ。だが、こっちには奴の切り札をコントロールできるリモコンと銃がある。爆弾を解除せざるを得ない状況に陥れることは出来る。そしてこればかりは素人知識だが、あのタイプの爆弾は立ったまま片手で解除できはしないだろう。絶対に腰を下ろし、両手で解除にあたる。違うか？」

『……少なくとも、片手で解除することは出来ないでしょう。作業するために腰を下ろさざるを得ないのは必然です』

「銃で狙われている以上、下手な行動は取れない。解除した時点で降伏してくれたらそれで終わり。仮に薬を破壊しようにもしやがんでいる状態で取れる行動は限られる。地面に叩きつけるとかは出来ない。威力が出ないし、そもそも掴んで、持ち上げて、叩きつけるって3行程も掛かるんだ。銃撃されることくらい奴なら考えつくだろう」

『……………』
「そうすると、奴が薬を壊すのに取れる最速かつ最善の方法は爆弾を解除した姿勢のまま、ケースを掴み、投げ飛ばすくらいしかない。それも俺たちが手の届かない位置に向かって全力で投げる。それが奴にできる最善の動きだ」

『手の届かない位置に投げられたらそれこそ終わりです……。殺せん

せーも動けないんですよ……?」

「奴もそう思うだろう。だからこそ意表を突ける。律、君なら見ている筈だ。俺が時々、異常な速度で動いているのを」

『……………さっきの銃撃戦。乃咲さんは確かに異様なスピードを見せました。あの時、体制を崩した時に放たれた1発はあなたの眉間を撃ち抜く直撃コースでしたね』

「だが、結果的に俺は無事だっただろ?俺は動ける。色が消え失せ、時間が止まったような世界で唯一、俺だけがほんの少しだけ早く動ける。そこに勝機がある。いや、今の俺たちにはそれしか勝ち目はない筈だ。違うか?」

『ですが、乃咲さんが立ち歩けない程に体調を崩し始めたのはあの後だったように思います。どういう理屈か、仕組みかはこの際、お聞きしませんか、身体に相当の負荷が掛かるのではありませんか?だとしたら私はあなたを行かせたくありません!』

スマホには涙目の律が表示されている。もはや、人間と大差ない程に彼女は感情豊かになった。

かつて自分の暗殺にしか興味を示さなかった頃とは似ても似つかない。死にかけている俺を本気で心配してくれている。

出会った頃とは逆だ。自分の考える合理性を貫こうとしていた彼女とそれを良しとしなかった俺。けれど今は俺が合理性を突き詰め、彼女が反発している。本当に律は変わったのだろうか。

心配かけていることは申し訳なく思う。だが、歪んだ感覚かもしれないけど、心配してくれることが嬉しかった。

彼女は彼女なりにこれ以上の被害を出さないように考えて俺を止めてくれている。だけど、俺だって自分出来ることをしたい。これがE組で俺に出来る最後の作戦なのだから。

「律。合理的に考えてくれ。俺が動くことでみんなが助かる可能性は低くなるか、それとも高くなるか」

『……………合理的かどうかは問題ではない筈です!あなたが木村くんや岡野さんに言ったんですよ!?!危険な目に遭ってまで薬を手に入れて、みんなは喜んでくれるのかって!』

「同時に言ったはずだ。犯す必要のない危険の場合、と。これは犯す必要のある危険だ」

『ですが……！ただでさえ罹患しているのに、これ以上疲労して免疫が下がりでもしたら……！！自分を大事にしない生徒に暗殺者たる資格なし” これもあなたが木村くんたちに使った言葉です！！殺せんせーの教えはどうなるんですか!!』

「問題ない。打つ手がなくなるよりマシだ。それに、暗殺者がどうこうと言うのはもう、俺には関係なくなる言葉だ」

そう、もう俺には関係ないんだ。暗殺者の資格がどうか、そんなことは。そもそもみんなを仲間と呼ぶ資格すら失うかもしれない選択を俺は夏休み明けに取ることになる。

だったら、まだ、みんなを仲間と呼べるうちにみんなにできることをしてやりたいと思った。

『乃咲さん……！』

「これ以上の問答は時間の無駄だ。続けるのなら、断行する」

律の説得は困難だと判断し、リモコンを握り締め、単独での作戦を念頭に作戦を組み立てなおす。

プランの大幅な修正が必要になるし、成功率は下がるが、やるしかない。このまま奴の言いなりになって薬が手に入らず、渚がなぶり殺され、仲間たちが苦しんで死ぬのを待つよりはマシだ。

覚悟を決め、プランを組み立て終えるその寸前、会話を打ち切った筈の律が伏せ目がちに渋々と口を開く。

『……わかりました。乃咲さんのプランに賛同します。私に出来ることを指示してください』

『どういう風の吹き回しだ？』

『あなたの考えるプランしか我々に取れる選択肢はありません』

「……了解。さつき言った通り、合図したら照明を最大出力に変更。あとは鷹岡の目の前にいる渚を除いたメンバーに伝達。俺がお前に送る合図共に作戦を開始する」

『……伝達、完了です。本当に、やるんですね……？』

「絶対に成功させる。烏間先生と出会ってからの座右の銘なんだ。」

口に出すのは実行する時”ってのが。1度、中間テストの時に俺はそれを守れず情けなくてみつともない醜態を晒した。2度目はない。絶対に薬を奪い、鷹岡を制圧する」

『……了解しました。こちらはいつでも大丈夫です。好きに動いて下さい。タイミングはお任せします』

彼女は俺の策を認めたと言うよりは、てこでも俺が意見を変えないと悟って諦めたのだろう。

本気で心配してくれている律には申し訳ない方をしようとしている。だから、せめて、結果で語ろう。

俺の座右の銘、心情が間違っただと。彼女が俺に任せて良かったと思える結末を掴みに行こう。

スマホから聞こえる憎い男の声。ふざけたことを喚き散らかし、ついには俺たちと交渉すらする気はないと語るように奴は徐に治療薬の入ったスーツケースを掴み、振りかぶる。

奴は俺たちに薬を渡すつもりがない。そうはつきりと確信し、スーツケースを投げ飛ばす直前、身体を使って無理やり扉を押し開き、銃でも突きつけるように可能な限り声を荒げて威嚇するように叫んだ。

「動くなあつ……!!」

怨敵は俺を認めると顔を狂気で歪ませた。

57話 逆転の時間

「おいおい……」

スーツケースを振りかぶった姿勢のまま、鷹岡が狂気で顔を歪め、楽しそうに、嬉しそうに顔を歪めた。

食後のデザートでも出されたかのような嬉々とした子供の様な表情のまま、こちらを見つめる鷹岡が唾を撒き散らしながら大きく肩を上下に揺らし、大袈裟な動きで喜びをアピールする。

「乃咲じゃねえか！なんだよお、お前も来てたのか？父ちゃん、会いに来てくれないんじゃないかって寂しかったんだぞ？いやあ、嬉しいなあ、でも——やつぱりテメエは悪ガキだよ。恩師に向かって何だ？その態度は。俺の指先でテメエも死ぬんだぜ？」

「笑わせんな、やれるもんならやってみろ。その爆弾、相当な威力だろ。間近で爆発したらお前もタダでは済まない。自爆を避ける為にはそれを投げ飛ばすしかないだろ。その前に俺が起爆させてやる。テメエも道連れだよ、クソ野郎」

「おお、怖っ。ただでは死なないってか？いいねえ、その殺意。渚くんってば殺意も覚悟もなくてよ？退屈だと思ってたんだあ。なんだよ。ここに立たせるのはテメエでも良かったなあ」

「ハッ、なんなら今からでも渚と変わってやろうか？煽った中学生にワンパンされてゲロ吐き散らかす精神的にも衛生的にも汚ねえ大人の姿をみんなに見せつけてやるよ、雑魚が」

「——調子くれてんじゃねえぞ、クソガキ……！」

「事実を言われたからってヒステリックになるなよ、みっともねえ。そんなんだから烏間先生に勝てねえんじゃねえの？そもそもテメエが本当に有能なら初めから俺たちの監督役に選ばれるはずだろ？実力も下、器量も皆無。何一つとして勝てるものがない癖にそんなんで良く俺たちの烏間先生に対抗心抱けるよな、片腹痛い。身の程つてもんを弁えろよ、三下あ！」

「テメエエエエツッ!!」

「お？なんだ、プツツン来たんか？笑わせんなよ、一丁前に人語喋ってるんじゃないぞ、鶏肉が」

自分でも引くくらい鷹岡を煽り倒す。

ちなみに罵倒のレパートリーはカルマで増やした。断じてアレコレ頭に来て思い付く限りに罵倒してるわけではない。多分。

これもあくまで作戦の一環。奴から冷静な思考を奪うための一手であり、決してやけっぱちになってるわけではない。恐らく。

「まあ、でも言い過ぎましたね。大人相手に暴言吐いてすみませんでした。誰だつて本当のこと言われたら頭にきますよね。例えどんなに残念な出来の頭でも。俺としたことが気が回らずにさーせん。大人の余裕と俺たちを生かしてくれてるって言うふかーい慈悲の心で許して下さいよ、鷹岡センサー」

「上等だよ、ぶっ殺してやらあ！」

ナイフを拾い上げ、鋒が俺に向けられる。

だが、奴はヘリポートの上。俺たちの元に繋がる架け橋は自身が落とした為、その刃は逆立ちしても決してこちらに届くことはない。ただ感情に任せてナイフを見せびらかしているだけだ。

「やれるもんならやってみろって。逃げも隠れもしねえよ。でも、まじはその爆弾を解除しろ」

「ああん？やるわけねえだろが！」

「状況が分かってねえみたいだな、お前に選択肢はねえよ、鷹岡。リモコンがこつちにある以上、テメエは下手を打てねえし、銃が2丁ある俺たちが圧倒的に有利だ。射線を遮る物がないこの場でお前が俺に一矢報いることなんてのは100%不可能だ！」

イキる。ひたすらにイキり散らかす。言葉の要所要所にアイツがこつちの手札や思考を読めるだけの情報を散りばめて、煽り、イキり、俺への悪意や敵意、反感を高め続ける。

「乃咲……」

「渚、そいつから離れろ。バカが移る」

細部まで煽りを忘れない。嫌がらせの極意は手間暇を惜しまないこと。どんな小細工にも全力を尽くす。

どれだけ強気な言葉を発していても、身体が不調な以上は持ち前の戦闘力で不測の事態に陥った時のフォローが出来ない。だから、可能性を高める為に凡ゆる手を尽くす。

律の前で絶対に成し遂げると宣言した以上、失敗は俺のモットーが、プライドが、何より自分自身が許さない。

ふらふらの身体で敵を必要以上に煽り倒し、イキがる様はきつと側から見ていて無様も良いところだろう。それでも、俺はなりふり構わず任務遂行の為に必要な行動を取り続ける。

「……わあつたよ、そうだな。まずは爆弾を解除してやらあ。テメエの言う通りだ、乃咲。このままじゃ千日手だ。ラチがあかねえ。俺だってテメエらとこんなところで睨み合いを続ける程、暇じゃねえんだ。お望み通りにしてやらあ」

「分かってんならさっさとしろよ、とろいな」

「いい気になりやがって……!」

忌々しげに吐き捨てて、ナイフを片手に持ち、スーツケースを地面に置いて、しゃがむ鷹岡。ヘリポートが俺たちの足場よりも高い位置にある関係でしゃがんだだけでアイツの体が半分以上、俺たちからは見えなくなる。

岡野や茅野が奴の姿を見失ったのか、一瞬、背伸びしてヘリポートを見つめたその時、奴がほくそ笑んだのを俺は見逃さない。

低身長組と違って今だに目が合う烏間先生、俺、カルマ、磯貝、菅谷、片岡に見せつけるように心底わざとらしく部品を数個外して放り投げ、ナイフを使って爆弾の配線を切り、解除したぞと言わんばかりに爆弾を掲げる。

「烏間先生、あの爆弾はアレで無力化出来るんですか」

「ああ。部品を外し、爆弾としての能力を失わせ、極め付けに配線を切っていた。あの配線は受信機のもの。少なくとも、リモコンで起爆させることはできないはずだ」

烏間先生の言葉を信じて起爆のボタンを押したが、本当に何も起これない。これで爆弾を無力化できた。

使い道がなくなったりリモコンを俺が無造作に投げ捨てたのを見た

クラスメイトたちの顔に安堵の色が芽生える。

だが、薬がまだ奴の手の内にある以上、油断は出来ない。俺は次の作戦に打って出る。奴が望んだ展開を見せる。

「さあ、さっさとその薬を置いて大人しくろ。もはやお前に打つ手はない。逃げ場はないぞ。無駄な抵抗はやめて投降しろ。お前には俺はおろかその他、誰一人として殺せはしない」

煽り、イキリ倒した次は勝ち誇る。ビッチ先生から学んだ自分で自分を演じる技術で顔や雰囲気を作り、勝利に酔いしれ、一気に気が緩んだ小物を全力で演じる。

「やったぞ、これでみんな助かるんだ！」

高笑い混じりに思わず前に出た感じを演出して一歩踏み出し、覚束ない足取りの所為で膝から崩れ落ちる。こればかりは演技ではない。素で崩れ落ちた。

「乃咲っ！」

だからこそ、仲間たちは俺のことを心配し、誰もが一瞬、鷹岡から視線を外し、隙が生まれた。

「はっ……！バカが!!」

「っ！鷹岡あー！」

鷹岡の勝ち誇った声、それにいち早く反応した烏間先生の怒号と同時に発せられるつんざく発砲音。

だが、それは鷹岡を捉えることはなかった。しゃがんだ鷹岡はそのまま身体を投げるように横に転がった。結果的に奴がしゃがんでいたことで射線が限られ、的が小さくなり、烏間先生の弾丸は奴の薄皮一枚を抉る程度で終わり、その行動を阻むことはできなかった。

「あはははは！詰め甘え。なにも爆発だけがコイツを処理する方法じゃねえんだよ、乃咲いい！」

勝ち誇った声だった。事実、勝ちを確信していたのだろう。俺を出し抜いたと思ったはずだ。回転の勢いを殺さず、奴は器用に身体を捻って治療薬を力一杯放り投げた。ヘリポートや屋上ではなく、虚空。下には地面が広がる宙に向かって。

ケースの重みで勢いは大したことは無かった。飛ぶ角度も大した

ことはない。投げた直後からその重みで下降を始める。勢いも角度も大したことはない。だが、ヘリポートから屋上の外へと投げ捨てるには充分だった。

鷹岡と俺、そして殺せんせーを除いた誰もが凍りついた。宙を舞うスーツケースを見て、思ったに違いない。折角爆弾を解除できたのに、希望が見えたのに、と。

一方で鷹岡は思っただろう。ざまあみろと。俺たちを殺せたと、希望を奪ったと、この俺の鼻っ柱を折ることができたと。

奴が見つけたとほくそ笑んだ俺の間。勝ったと確信したその瞬間が予定調和だと知る由もないだろう。

事実、崩れ落ち、体制を崩したのは紛うことなく俺の素だった。演技ではない。騙すための嘘などかけらもない。だが、そこに計算が無かったかといえそうではない。

ここに来るまで散々転んだ。一步步くたびに膝から崩れ落ちた。支えがなければ自分がまともに動くことができないことを俺は把握していた。だから作戦に盛り込んだ。奴が思わず付け込みたくなる隙をごく自然に作る為に。

結果、上手くいった。勝利を確信して勝ち誇り、思わず前に出た瞬間、崩れ落ちて隙を作った。奴が飛び付くであろう隙を、演出した。俺の素の反応だったからこそ、仲間たちはこちらを心配して奴から注意を逸らした。

それが仕上げだった。限られる射線、離れた注意、そして生まれたほんの一瞬の極々僅かな隙。だが、奴が飛び付くには充分すぎる俺たちを殺し勝ち誇ることができる可能性が。

「あんたが単純で助かったよ」

「ああん!？」

奴に聞こえるように言い捨ててゾーンに入る。

世界は瞬時に色と音を失い、動くもの全てがほぼ静止した。空気が物理的に重くなり、体に纏わり付く。

さっきの銃撃戦で撃たれた時のような感覚ではない。モノクロでほぼ静止している世界と身体に物理的に纏わり付く空気は今までに

何度か感じて来たゾーン特有のもの。

だが、入った瞬間に確信する。集中の深度を深めればきつと、さっきのように空気の抵抗を受けることなく、普通に動くことが出来るあの領域に再度、踏み込むことが出来るだろうと。

けれど、それはしなかった。今の状況であの領域に入ったら、ウィルスのダメージ、ここまでの疲労、そして体に掛かる負荷によって絶対に気を失うだろうと容易に想像できたから。

故に、俺は無理をして進度を深めることはせず、空気が物理的に重い世界を進むことを選択した。

そんな世界で歩き出す。何度も体勢を崩し、転び、這いつくばり、それでも膝を叩いて喝を入れ、頬を殴って気合いを入れて、長い時間をかけて空に静止する薬の元まで辿り着く。

拳銃から放たれる速度は音速を超える。さっきの眼前に迫る弾丸を見た後ではこの程度の速度は止まっているに等しかった。当たり前だが、球技大会の練習時の殺せんせーの投げた時速300キロの球の方が何百倍も速い。

身体を動かすことが出来る最後の力を振り絞ってふらつきながらも辛うじて立ち上がり、宙に静止する治療薬入りのスーツケースを胸と腕で抱き止めるようにキャッチした。

その瞬間、限界を迎えたようにゾーンから抜ける。

「ぐっ……！」

大した勢いはなかったが、重さがある分、世界に速度と音と色が戻った瞬間、ぐもった声が漏れる。

スーツケースに押し倒されるように尻餅を着き、痛みと衝撃で視界が滲み、歪み、尻から気持ち悪さが上ってきた。

だが、俺は成し遂げた。

「あ……え……う……えっ……!? 乃咲!?!」

「嘘だろ……!? この距離を一瞬で……!?!」

仲間たちの困惑する声。どうやらゾーン中に移動した俺は周りからは瞬間移動したように見えているらしいことを今、この瞬間に初めて理解した。

けどまあ、今はそんなことどうでもいい。

俺はキャッチしたスーツケースを抱えながら、何が起きたのか理解していないらしい鷹岡に向かって一言。

「ナイスパス」

中指を立てながら吐き捨てた。

「テメエ……！テメエエエエエ!!どこまで俺をコケにすれば気が済むんだ!?何なんだ!何なんだよテメエはああ!!」

発狂する鷹岡。その顔にはもはや理性は無く、冷静さを完全に失い、唾を撒き散らしながら発狂するみつともない、こうはなりたくないとの底から思わせる大人がそこにいた。

けれど、好都合。俺の動きに動揺し、困惑し、思惑が外れ、拳句に煽られて激昂している鷹岡。今の奴は隙だらけだ。

「今だっ!やれえ!」

全員の耳に届くように叫ぶ。鷹岡と渚、殺せんせーを除いた全員がハツとした顔をした直後、ヘリポートは眩い光を放つ。

「くそっ!今度は何なんだ!?!」

目を覆い、叫ぶ鷹岡。奴が動揺し、こちらの動きを把握しきれていないうちに捲し立てるように指示を飛ばす。

「菅谷!持つてる銃を速水さんにパス!不破さんはこっちに来てくれ!寺坂はその場で待機!それ以外は一時散開!別途指示を出すからヘリポートを囲むように動き続けろ!渚!お前は鷹岡に捕まらないように動け!」

「う、うん!わかった!」

「……ちくしょう……!」

「了解!」

「速水!」

「うん!」

「乃咲くん!」

駆け寄ってきた不破さんに下の荷物から盗んで来た例の毒のカートリッジを渡し、背中を押してみんなの輪へ戻す。

全体を俯瞰し、状況を把握し、これまでこの教室で過して来て、こ

こで得た知識や経験、みんなの情報をフルに使って鷹岡を倒す為の作戦を構築する。

「不破さんは今渡したのを矢田さんへ、茅野は殺せんせーを木村に！鳥間先生は俺が指示した瞬間に俺たちのターゲットを撃てるよう、銃を構えていて下さい！」

「了解した……！」

「矢田さん、これ！」

「任せて！」

「茅野！こつちだ！」

「はい！お願いっ！」

指示を出す。だが、名前だけでは誰が今、何をしているのかを悟られるだろう。鷹岡の中で顔と名前が一致しているかは分からないが、念には念を入れ、殺せんせーの指揮を真似て、擬似的なコードネームとして俺たちや当人しか知らない情報を盛り込む。

「元体操部とバイト経験者はセットで動け！殺せんせーとソニック忍者を見に行つた小さい方はその場で待機、大きい方はジャスティスと合流して一緒に行動。社会のテストで1位だった奴と赤い悪魔は発射台役だ、出来るだけヘリポート側をキープしろ！靴にナイフ仕込んでる奴とポニーテールの右斜め前の席の人は指示を出したら今の2人を足場にヘリポートに飛び移れ！」

俺が飛ばす指示に躊躇いなく動き続けてくれる仲間たち。

こうして大声で指示を出すのには意味がある。みんなに指示を伝えるのは勿論のこと、あえて鷹岡にも伝達することでこちらの動きを考えさせる。顔と名前が一致しているか定かではないアイツが俺の出す指示に混ざつた奇怪なコードネームが誰であるのかを一致させられるわけではない。

奴が冷静なら、あるいは余計な情報を無視して俺の指示だけを汲み取り、行動に備えることができただろう。もしくは視界を奪っている最大の要因である、ヘリポートの照明を叩き壊すくらいして視野の確保に動いたかもしれない。

だが、鷹岡はどれもしない。こちらの動きにどつしり構えるでもな

く、照明を壊すでもなく、ただ、俺が指示して、仲間たちが動く度に見えもしないこちらの状況を足音や声だけを頼りにキョロキョロとうめき声をあげて見渡すだけ。

「親が警察官の人はバイク好きに喋る手荷物をパス！受け取ったらバイク好きはヘリポートの状況に合わせて熟女OL好きを鷹岡に向かつて全力で投げろ！その硬さなら直撃させれば相応のダメージになる！」

木村から吉田の手に殺せんせーがパスされる。

ちなみにエネルギー結晶の中に閉じこもっている殺せんせーの顔といえば超真つ赤。世間体を気にし、生徒からのイメージを大事にするあの人のことだ。俺に思い出したくないことを掘り起こされて、本来なら悲鳴をあげて顔を覆いたいには違いない。

大きな音を立てることは攪乱につながるとさっきの銃撃戦で学んだ。だったら、思う存分、騒音を出して貰おうじゃないか。決してみんなの前で杉野か倉橋さんかを悩んだ挙句に倉橋さんと出かけたことを暴露されたことに対する私怨ではない。

「夏に入った辺りから学校の裏山でそこに罿が仕掛けられていることを承知でエロ本毎日拾い読みした挙句、女子生徒とエロ本の上で飛び跳ねて喜んだ上にそれを俺たちに見つかり、保身の為にハーゲンダッツを奢り、給料日前はポケッツティッシュを唐揚げにして食べてる女装教師は大声で場を掻き乱す！」

「にゅやあああああつ!!!」

決して私怨があるわけではない。

「の、乃咲の奴、容赦ないぞ……」

「今のは確実に愉快犯だな……」

「今失礼なこと言っただうちの芸術家の方はジャイアンと共に英語学年7位の手前まで移動、建築士志望の方は常に敵の側面を捉えられる位置をキープしながらチャンスを待て！」

「あいよ！」

「OKだ！」

「元水泳部はヤクザの大紋持つてる人と接触！ブツを受け取ったら巨

乳嫌いとJUMP好きを經由してマサヨシに届けてくれ！」

布陣が完成しつつある。鷹岡の奴はヘリポートの上で発狂し、俺たちを口汚く罵倒しながら錯乱していた。

恐らくはもう2度とその声を聞くことはないだろう。この手で直接、地獄に送ることができないのが残念だが、牢屋の中で毎晩夢に出るくらいの徹底的で完膚なきまでの敗北を与え、今日を忘れられない日にしてやる。

立て続けに指示を飛ばし続けて、全員の位置関係や手持ちの道具を誰が持っているかなどの把握も済ませ、理想的なコンディションは充分に整った。律に指示を出して鷹岡を除いたこの場の全員のスマホに俺の声を届け、火蓋を切る。

「これで下準備は終わり。さあ、死刑執行だ。攻撃に移るぞ。ヤクザを蹴り倒した女子といつか改名したいと思ってる男子は発射台役の2人を足場にヘリポートに跳び移れ！」

「よし来い！」

「全力で踏み込みなよ、しっかり飛ばしてあげる」

「わかった！行くよ！」

「頼んだぜ！」

岡野と木村がそれぞれ磯貝とカルマに打ち上げられ、ヘリポートに跳んだ。指示は聞こえていただろうが誰のことだか見当がつかないであろう鷹岡は凄まじい勢いで跳んで来た2人を見て冷静さを失ったまま感情に任せてナイフを振り回す。

「撃て！速水さん！」

「了解……！」

速水さんが菅谷から渡された銃を構え、撃つ。辛うじてその気配を察したのか、彼女の方へと向く鷹岡。

だが、奴は知らない。速水さんが構えて流れるように発砲したのが本物の銃ではなく、エアガンであることを。

最速でも速水さんが撃った時点で気付ける。遅くても彼女の撃った弾が命中し、BB弾であると確認できれば分かる。

だが、どちらにせよ、速水さんに反応した時点でアイツは俺の術中

にはまっている。烏間先生を除いて本物の銃を誰が持っているのか明確にさせない為に、あえて意味深に銃の受け渡しをする指示を出して速水さんにはエアガンを使ってもらった。

撃たれた弾丸を体を捻って避けようとした鷹岡はようやく思い至ったらしい。拳銃特有の発砲音がしなかったことに。そして、体を捻った今の状態がいかに無防備であるかを。

「投げるならここだろ！」

「どひやあああああつ!!!」

決定的な隙を見せた鷹岡に向かって吉田が殺せんせーを投げる。男子の中でも体格が優れる吉田の投げた完全防御形態の殺せんせーはそれなりの速度で奇声を上げながら鷹岡に迫る。

「当たるかよ……っ!!」

だが、腐つても精鋭。いくら不意を突いたとしても少し訓練を受けた程度の中学生の投げるハンドボール程度の大きさの球を避けるくらいはできるようで、奴は体を更に捻って直線的な軌道で飛来する殺せんせーを避ける。

だが、そんなことは織り込み済みだ。

「烏間先生！」

「問題ないっ！」

烏間先生に声がけすると、俺の一番最初の指示の意図を理解してくれていたらしく、既に照準を合わせていた。一切躊躇うことなく、俺たちのターゲットである、殺せんせーに向けて。

その直後、本日2度目となる烏間先生の発砲。今度こそ響き渡る銃声と完全防御形態の殺せんせーに弾丸が弾かれる甲高い音、そして殺せんせーの悲鳴が屋上を支配する。

「ぐぬあ……!?!」

烏間先生の射撃で軌道を変えた殺せんせーは回避行動を取り終えた鷹岡の顔面目掛けて真っ直ぐに飛翔し、肉が潰され、鼻が碎ける鈍い音を両耳が捉える。

痛みで出た涙と受けたダメージでぐしゃぐしゃになった顔を抑え、奴がよろめく。その意識の波長が大きな山を小刻みに作り出す様は

鷹岡が動揺し、狼狽え、恐怖しているのを如実に語る。

「岡野！木村！畳み掛けるぞ！」

「任せて！」

「ああ！」

「くそっ！こつちに来るなあああっ!!」

雄叫びというより、もはや悲鳴。恐怖で身体中を強張らせた鷹岡がまるで最後の抵抗を示すみたいにナイフを突進する2人に突き付け、掠れた声で絶叫する。

だよな、ただでさえ追い詰められている状況で、さらに正面から襲い掛かってくる他人って怖いだろう。思わず、手に持った最後の凶器を突き付けて、力の限り叫び、脅したくもなるだろう。

読み通りだ。

「千葉！狙いは分かるな！」

「……………」

鷹岡の側面をキープし息を潜めてチャンスを伺い続けていた千葉に呼びかけると、彼は鋭く息を呑むと同時に奴の握るナイフの腹に弾丸を撃ち込み、最後に残った武器すらも奪い取った。

「ぎっいいい……………」

泡の混じった唾液をだらしなく垂らした口から発せられる聞き慣れない異音。ナイフを弾かれた腕を痛めたのか、思わず患部を庇うような動きを見せた。

「岡野はナイフの回収！木村は不破さんから渡された武器を鷹岡に叩き込め！素手だが油断はするな！寺坂！持ってきた武器を渚に渡せ！そろそろ出番だ、気合い入れろよ、渚！」

「受け取りやがれ…………、渚…………！」

「乃咲…………、寺坂くん…………。うん、任せて」

「ちくしょうがああああっ!!」

進路を変えた岡野の後ろから飛び出す木村。彼に向かって冷静さを失った獣の様に両手で掴み掛かろうと突進する鷹岡。

だが、2人が交差することはなかった。鳥間先生からの訓練を受けている者があんな子供が癩癩を起こしたような攻撃に捕まるはずも

なく、木村は掴み掛かりを半歩切り返して紙一重で回避し、無防備な鷹岡の顔に向かって例の麻痺毒を噴射する。

「く……………ああ……………っ!？」

吹き出した毒の霧。その中から顔を上着の袖で覆った無傷の木村が飛び出し、数拍子置いて霧が晴れると立っているのもやつとと言った様子の鷹岡が踏ん張り、辛うじて立っていた。

どうやら烏間先生も化け物じみた耐久力をしているが鷹岡も耐久力だけは先生と同等だったらしい。

でもまあ、その可能性を考慮したからこそ、トドメを刺す為に渚を残し、寺坂のスタンガンまで渡したのだが。

「さあ、トドメだ。渚！俺たちや倒れてるみんなの分まで感謝を込めて恩師の息の根を止める。アンタは最高の反面教師でしたって一言、お礼を言うのも忘れずにな！」

最後の指示に頷いた渚が歩き出す。

粗方指示を出し終わり、静まり返った屋上でみんなの呼吸と鷹岡の荒れ果てた息、そして渚の足音だけが反響する。

ヒタリ、ペタリ、あえて足音を立てて渚はゆつくりと距離を詰める。顔にはいつもと変わらない笑顔。右手に握ったナイフとベルトに挿したスタンガンの存在が冗談に思えるその顔はこれから人間を攻撃する奴の表情だとは思えない。

ヒタリ、ペタリ、足音が近づく度に鷹岡の顔が歪む。殺せんせーと烏間先生の攻撃で顔面を潰され、毒で身体の自由を失ったアイツは立っているのがやつとのようで、逃げることはしなかった。いや、出来なかったのだろう。

渚が近づく度に、鷹岡の意識の波が高くなり、荒ぶる。恐怖でいっぱい。意識を失う寸前。加えて、奴は渚に殺される恐怖を知っている。トラウマになるほどに深層心理に深く刻まれている。

必殺技の発動条件は揃っていた。

「……………」

ゆつくりとナイフを持ち上げる。練られた殺意と渚への恐怖で彼の一挙手一投足を見逃すまいと張り詰めていた鷹岡がその動きを目

で追うのは必然のことで。

持ち上げたナイフがちょうど鷹岡の首と同じ高さ上がった瞬間、暗殺者は刃を離れた。まるで空中に置くように力を抜き、するりとその小さな手から柄ごと滑り落ちる。

「……………あ……………」

弛緩した声。向けられた恐怖の視線は地面に落ちて行く刃を見詰め、意識を渚からほんの一瞬だけ逸らしてしまう。

そんな刹那のタイミングを渚は逃さなかった。ナイフが地面に落ちると同時にヘリポートに凄まじい破裂音が轟く。

パアアアンツ！と今日だけで何度聞いたか分からない銃声にも勝るとも劣らない乾いた破裂の音は鷹岡の意識を麻痺させるのには十分過ぎる破壊力を秘めていた。

力無く巨体が崩れ落ちる。口からは唾液が溢れ出し、だらりと垂れ下がった両肩。瞳は虚で、その視線はもはや何処にも、誰にも向けられてはいない。あるいは現実すら理解できていないのかもしれない。

そんな鷹岡の顎に冷たい無機質な棒が当てられ、ぐいっと奴の意思に反して顔が持ち上げられる。

その時みたアイツの顔は印象的だった。狂気と恐怖が余すことなく表情に溢れ出ていた。

パクパクと餌を食べる金魚みたいに口を動かすが、結局、言葉は紡がれない。鷹岡はそんな状況であるにも関わらず、渚と言えば変わらぬ笑顔。

警戒できないことが一番の恐怖であることを前にビツチ先生からキスされた時以上に身をもって理解した気がする。

「鷹岡先生、ありがとうございます」

あまりにも簡素な一言。本来ならもつと口汚く罵って欲しかったのだが、俺たちをこんな目に合わせた奴の無様な場面を見ることができたのだ。良しとしよう。

渚が今日一の笑顔を見せた次の瞬間、バチバチ！と激しい電撃が鷹岡を襲い、その意識を容赦なく刈り取る。

痙攣し、口から泡を吹き、鈍い音を立てて地面と熱いキスをする鷹

岡。その身体がピクリと動かないのを確認した時、誰かが思わずと言った声色でボソリと呟く。

「元凶撃破……?」

一瞬の静寂がへりポートと屋上に訪れた数秒後、大気を揺るがさんばかりの歓声がいみんなから上がる。

「よっしやああああ!!」

「やった、やったぞ俺たち!」

「薬もある、鷹岡も倒したし、私達の完全勝利でしょ!」

「そうだよね!それに誰も怪我しなかったよ!」

みんなが互いを讃え合う様子を遠巻きに眺める。

終わった。俺がE組として出来る最後の任務が無事に。

「律、置いてきたみんなに伝えてくれ。無事に終わったって」

『……伝えました。向こうでは歓声が上がっています』

「……そうか」

これで一息吐ける。なんと言うか、これまで生きてきた中で最も長く、最も濃い一日だった。暗殺して、毒盛られて、崖登って、不法侵入して、殺し屋と対峙して、死にかけて、憎き元暴力系体育教師を数の暴力で振じ伏せて。

地面に根を張ったみたいに動かない身体を投げ出すように横になり、空を見上げてため息を吐く。

本当に終わったのだ、いろいろと。何故だか妙に肩の荷が降りた気がする。ひとしきり讃え合い、満足したのか、みんながこっちに集まって来るのを眺めながら本日何度目になるか分からない安堵の息を吐いた。

58話 終息の時間

流石に疲れた。今日はもうゾーンに入ることには出来ないし、これ以上の無茶は出来そうにない。頭が痛い、関節が痛い、寒い、ここに来るまでに転んで打ち付けた部分が痛い。満身創痍だ。

それに、抱き抱えた治療薬入りのケースも結構重い。思った以上に身体にダメージがあるのか、これっぽっちの重みですら苦痛に感じてしまう程だ。ほんの少しだけ情けない。

「乃咲くん……!」

「ああ、鳥間先生」

鳥間先生が手首から殺せんせーをぶら下げ、駆け寄ってくる。

彼の後ろでは様々な光景が繰り広げられていた。ヘリポートの上で鷹岡を拘束する奴ら、鷹岡が落とした梯子を回収し、もう落ちないように固定している奴ら。そして、先生たちと一緒にこっちに走ってくる奴ら。

こうして事件の黒幕が拘束され、俺や倉橋さんたちの命綱とも言える治療薬の重みを身を持って感じていると、うつすらと実感が湧いてくる。終わったのだと。

「これ、治療薬です。受け止めたので割れたりしてないと思いますが、念の為に確認してください」

辛うじて腕を動かし、ケースを渡すと、俺にかけようとしていた言葉を一時的に飲み込み、しっかりと俺の手からケースを受け取ると大切そうに丁寧に地面に置き、ケースを開く。

緊張感と焦りで彩られていた顔が僅かに緩んだのを見て、心底安心する。どうやら律に対する宣言を守れたらしい。

「すまない。我々が不甲斐ないばかりにこんな無茶をさせてしまった。何か身体に異常はないか……?」

「頭痛、寒気、関節痛、あとはここに来るまでに転んで打った所が痛むくらいです。睡眠を取れば治るでしょう」

「キミだけじゃない。みんなにも迷惑をかけてしまった。本当にすま

なかった。防衛省を代表して謝らせてくれ」

「大丈夫ですよ、鳥間先生。先生が悪いわけじゃないってみんな分かっています。倒れてるみんなも同じこと言うと思います。だから謝らないで下さい。そんなことより、乃咲と寺坂に早く薬を飲ませてあげて欲しいです」

諭すように学級委員の片岡が告げる。その言葉に釣られて何気なく寺坂を見るとアイツも限界が来たらしく、倒れていた。どうやら、さつきの作戦、寺坂を激しく起用しなかったのは良策だったようだな。

吉田に担がれた寺坂とそれぞれやるべきことを終えたみんなが俺たちの周りに集まり、ビッチ先生を除いた潜入時のメンバーが無事に全員集結した。

目の前で力尽きた俺や寺坂を心配する気配はあるが、それでもみんなの顔は決して暗くはなかった。心配はあるが、悲壮はない。やり遂げたような達成感の方が勝っているように見える。

「終わったな……」

やるべきことをやった仕事人のように呟く千葉。

彼の一言を皮切りにみんなが口々に今回の潜入作戦について語り出す。鳥間先生が脱出用のへりを呼んでくれたらしく、へりが来るまでの待ち時間はその話題で持ちきりだ。

圧倒的な逆恨みで危険な目に遭わされた。それが今回の事件の概要だと言うのに、巻き込まれた人たちは終わってみると、何故か恨み節の一つもなく、楽しそうにしている。

実際に犠牲になった奴もいなければ、形としては犯人の拘束と薬の確保まで出来た完全勝利だからこそその雰囲気だろう。それでも、やはり、普通に考えたら、このクラスは異常なんだろうな。悪い意味でも、良い意味でも。

もしかすると彼らE組の強さは学力でも、鍛えられた身体能力や技術でもなく、今回みたいなピンチを乗り越えた後に屈託なく笑うことができる心にあるのかもしれない。

「さあ、2人とも、薬を」

烏間先生から薬が渡される。試験管にコルク栓をした薬。これって飲み薬で合ってるのか？と野暮な思考が過ぎる。

が、まあ、ウイルスが経口接種だったし、問題ないだろう。薬なんだし、飲めば効果くらいはあるはずだ。

渡された薬を受け取り、コルクを抜く。

しかし、手に力が入らない為、抜けない。

「磯貝い……。これ開けてえ……」

「はいはい」

「誰かあお薬飲めたね買って来てえ……」

「ホテルの売店で売ってるようなもんじゃないし、そもそも薬液タイプに使えるのか、アレ……」

「てか、弱り過ぎでしょ……。よくそんなメンタルであんなキレツキレな煽りと指示が出来たわね……」

「だよなあ。なんつーか、ある意味でみんなが倒れた時以上にドキツとしたもん、俺。あの状況でめちゃくちゃ煽りまくる上にその言葉の一つ一つがエグい威力あるしさ。なんか、久しぶりに『あ、乃咲ってそう言えば不良だったわ』って感覚になった」

「ですが、行動の一つ一つは計算高いものでした。ただの不良にできないことではない。自分にできることを考え抜き、実行する行動力。鷹岡先生を煽り、怒らせて冷静な思考を奪う話術。状況を把握し、的確な作戦を練る計画力。皆さんの能力を鑑みて、的確な指示をする指揮能力。私の指揮を即興で模倣できる応用力。そしてこんな状態でありながらこの場に駆け付ける精神力。キミの恐ろしさが遺憾無く発揮された素晴らしい作戦でした」

殺せんせーは朱色の丸を顔に浮かべ、満足そうに笑うが、直後、顔色を元の黄色に戻すと言葉を続けた。

「正直なところ、キミが来てくれたからこそ今回の逆転劇がありました。でもね、キミのおかげで助かったは揺るぎない事実ですが、もう少し、自分のことを大切にしてあげて下さい。その手足の痣。きつとここに来るまで何度も転んだのでしょうか？」

「……まあ、ね」

「自分を大切にしない者に暗殺者たる資格なし、ここに居る皆がそうするように倒れている皆も我々を心配しているはずだ。キミが木村くんや岡野さんに言った言葉です。今回、私には偉そうに言う資格がないことは重々承知しています。けどね、キミがそう思うようにキミのことを周りの仲間たちも心配していると言うことを忘れないで下さい」

諭すように言う殺せんせー。返す言葉がなく、沈黙する。

そう、こうしてみんな無事で良かったね、で済むのは結果的に上手くいったからに過ぎない。

もしも俺が力尽きるのが早く、律に指示を出した直後に意識を失っていたら？ゾーンに入った直後に意識を失って薬をキャッチ出来なかったら？もしくはキャッチした直後に気を失い、みんなに指示を出せなくなったら？きつと目も当てられない悲惨な結果が待っていたことだろう。

殺せんせーの言うことは正しい。万一、薬を破壊されていたとしても、最悪、毒を作ったであろう殺し屋はとくに無力化しているのだから、そいつにいろいろと吐かせるという方法もあった。ここで奪うことに固執することはなかったのかもしれない。

少し思考が偏っていた。鷹岡なんて毒に精通しているわけでもないのだから奴の言葉なんて間に受ける必要もなかったのかもしれない。作戦が終わって、みんな無事で良かったね、きつとこれが最善だったよ、と終わることが出来なかったのが今回の俺の反省点なんだろう。

「木村、岡野。それから律も。悪かった。自分で言ったこと、自分で守ってなかった」

「そんな気にすることねえって。俺がお前でもあの状況で黙って見てるなんて絶対嫌だしよ。殺せんせーはこう言ってるけど、最善だったと思うぜ？少なくとも俺はな」

「わたしとしては少し思うところあるよ？自分でいろいろ言った癖について。でも、それくらいしか言えない。だってあの時にアンタが割って入らなかつたら絶対に薬は手に入らなかつたもん」

『私は言いたいことなら沢山あります。けど、今は我慢します。あくまで今は我慢するだけですよ？元気になつたら我慢したこと全部言いますから覚悟してください。その為にもまずは早く元気になってください。話はそれからです』

「……はい、すみません」

「律がここまで怒るとか何したんだよ、お前。ほら、開いたぞ」

律の意見をほとんど切り捨てた挙句に合理性で説き伏せ、最終的には彼女とのやりとりを時間の無駄だと判断し、制止の声を無視して作戦を断行しようとした、なんて流石に言えるわけがない。間違はなく響蹙を買うだろう。

なんて答えたものかと考えていると、磯貝がコルクを抜いた試験管を渡してくる。

まずはこの薬を飲むでしょう。倒れてるみんなには悪いが一足先に頂きます。意を決して薬を口の中に……入れる前に確認。

「……苦くないよね、コレ」

「だからガキか、テメエは。良いからさつさと飲むぞ」

「寺坂あ、お願い、先飲んでえ。苦いの嫌あい……」

「つたく……しゃねえ……」

「圭一つてこんなキヤラだったか……?」

「まさか体調崩すと甘え癖が出るタイプとはな……」

周りからのなんとも言えない視線を感じながら寺坂が薬を飲むとしたその直前、俺たちが登って来た階段から拍手の音がした。パチパチと3つ分の手を打つ音に全員がハツとする。

まだ、敵がいるのか？そんな警戒と共に烏間先生が全員の前に立ち、カルマと磯貝がその一歩手前で構える。

「いやあ、お見事。まさかあの状況から逆転するとは思わなかったぜ？大したガキどもだ。驚いたよ」

視線の先には見覚えのある3人組。俺たちがここに来るまでに倒した殺し屋たちが揃ってこちらに歩を進めていた。

自力での拘束を脱したのか、あるいは誰かに見つけてもらったのか。流石にみんな動揺を隠せていなかった。

「それはそれとしてよお、なあ、ガキども。全員助かりました！なんてハッピーエンドで終われると本気で思ってるのかい？」

銃使いのそのセリフに反応した千葉がいち早くいつでも撃てるようにと銃を構え、続いてナイフを回収した岡野たちもいつでも飛びかかるように身を低くする。

あとは合図一つで全員が襲い掛かれるという態勢をとった時、烏間先生が降伏を促すように口を開く。

「お前たちの雇い主は既に倒した。戦う理由はもうないはずだ。俺は充分回復したし、生徒たちも充分強い。これ以上、お互いに被害が出ることはやめにしないか？」

「ん、いーよー」

「……………ん？いーよ……………!?!」

銃使いの呆気ない降伏宣言を理解するのに数秒を要した吉田がその拍子抜けする言葉に思わず体勢を崩した。

「ボスの敵討は俺らの契約には含まれてねえ。俺らは突破された、ボスは倒された、治療薬は奪われた。以上の理由で依頼は失敗した。もう俺らの仕事は終わったんだよ」

銃使いの男が相変わらずリボルバーを舐め回しながら依頼失敗を悪びれずに認め、簀巻きにされた鷹岡を一瞥して大した興味なさそうに『派手にやられたなあ』と呟く。

その潔さというか、呆気なさに戸惑っていると毒使いのおっさん。スモッグが懐から白い錠剤の詰まった瓶を取り出しながらこちらへと歩いてくる。

「その感染してる2人。飲むんならこっちの錠剤にいな。特製の栄養剤だ。お前らに盛ったウイルスに対してはこっちの方が効く。ボスから奪った方でも効果はあるにはあるが、コイツの方が元気になるだろうぜ。特にそっちの銀髪の坊主はな」

「……………俺？」

「ああ。お前だ」

スモッグは躊躇うことなく俺たちの前にやってくる。途中、磯貝たちが立ち塞がるうとしたが、おっさんに特に殺意がないことを察した

らしい烏間先生に軽く制止され、警戒しつつ、遂に俺の目と鼻の先に来たおっさんを警戒しつつ見守る。

流石にみんなに警戒されてるこの場では下手なことはしないだろうと考え、警戒はしつつ、成り行きを見る。

するとおっさんは一言、『ちよいと失礼』と残すと俺の身体をペタペタと触り始めた。

予想外な展開に啞然とするとある程度、触って満足したのか、俺の首筋、動脈に手を当てながら思いもしない一言を放った。

「お前、このままだと死ぬぞ」

「え……」

「どう言うことだ!？」

烏間先生がスモッグの口から飛び出した突然の死亡宣告に反応し、スモッグの胸ぐらに掴み掛かる。

「そもそも、乃咲くんが死にかけてるのっておじさんたちが盛った毒の所為じゃん。なのになんでそんな余裕そうな態度なわけ?——俺らに袋叩きにされるとか思わないの?」

怒気を纏った声で威圧するように言うカルマ。しかし、スモッグはそんな言葉を意に返さず、徐に胸元から二つの小瓶を取り出すと事の真相を語り出す。

「まず言っておくと、俺達はテメエらに致死性の毒なんざ盛っちゃいねえよ。こっちの試験管に入ってるのがボスが俺たちに命令したウイルス。んで、こっちの小瓶が実際にお前らに使った方」

「……話を聞かせて貰おうか」

ウイルスに致死性はない。その言葉を受けた烏間先生がスモッグから手を離すと、他の2人もこちらに寄ってくる。銃使いと唇を腫らしたおじさんぬがスモッグに続くように話出した。

「使う直前にこの3人で話し合ったぬ。ボスの設定した交渉期限は1時間。だったらわざわざ殺すウイルスを使わずとも取引はできると。だから、お前たちに盛るウイルスをすり替えたぬ」

「交渉法に合わせて多種多様な毒を持ち歩いているからな。実際に盛ったのはこっちの食中毒菌を改良したものだ。あと3時間は猛威

を振うが、それ以降は急速に活性を失って無毒になる。お前らが命の危機を感じるには充分だっただろ?」

「……じゃあ、そっちの人と撃ち合った後、乃咲が言ってた『殺気はあるけど殺意はなかった』って言うのが正しかったの?」

「言い得て妙だが、そう言うことだ。プロが金さえ貰えばなんでもするとか思ってたんなら大間違いだ。もちろん、依頼人の意に沿うように最善は尽くすが、引くべき一線は見極めるさ」

銃使いが悪びれもせずと言う。

「ボスもハナから薬を渡す気はなかったようだったしな。命令違反がバレて評価を落とすか、カタギの中学生を大量虐殺した実行犯になるのか、どちらが今後の俺たちのリスクになるか、冷静に秤にかけただけのことよ」

プロとして任務達成の為なら何でもするが、それ以前にプロとして受けるべき内容かはしつかり測ってるってことか。何だろうなあ、ビッチ先生といい、コイツらといい、その妙な底の知れなさは悔しいが、少しばかりかつこよく思えてしまう。

「待つてください。じゃあ、なんで圭一が死ぬかもなんて話になるんですか!使った毒に致死性はないんでしょ!?!」

「シンプルにそのガキの身体にガタが来てるって話だ。この平和な国の中学生としてはあり得ないレベルでな。ウェイターに扮してお前らに毒を持ったタイミングから気になっていた。その銀髪のカギ。乃咲って言ったか?お前の様子はおかしかった」

身体にガタ。そう言われると思いだたる節はいくつもあつた。たしか、イトナが転校して来たくらいからだろうか、目眩や立ちくらみ、たまに膝から崩れ落ちそうになることが増えたのは。

「身に覚えはあるみてえだな。端的に言うぜ、お前は極度の過労状態だ。毒を扱う仕事柄、一応は医学は粗方修めていてね、お前を観察し、今、触診して確信したよ」

「過労……?」

意味は知っている。テレビなんかではよく出てくる単語だ。だが、それはとてもじゃないが中学生に使う様な言葉ではないだろう。そ

れを肯定する様に思いもしない単語に殺せんせーと烏間先生を除いたみんながキョトンとする。

「ああ、過労だ。急な動悸、不整脈とか、関節の痛み、不意な眩暈、立ち眩み、歩こうとしたら膝から崩れ落ちるとか、酔いやすくなくなったとか、身に覚えはあるんじゃないやねえか？」

「……ありますね」

「だろ？ おおかた、超生物の暗殺の為の訓練とか普段の勉強とか、力を入れなきゃいけないことが増えた結果、疲労が蓄積してたんだろ？ さ。そんなタイミングで俺の毒を受けちまったから溜まってたもんが爆発したのさ」

……筋は通っているし、身に覚えはある。

たぶん、ゾーンが原因だ。俺は勉強でも訓練でもゾーンを多用しているし、不調が始めたのはイトナから倉橋さんを庇おうとして、ゾーン中に動いたタイミングだった様に思う。

「ゴイツを飲んでしばらく安静にしてな。『倒れる前より元気になりました』って感謝の手紙が届くほどだ。効果は保証する」

スモッグにさっきの錠剤が詰まった小瓶を渡される。

「死ぬってのはあくまで最悪の場合のお話だ。このまま無茶を続けたらってだけのこと。しっかりと疲労に見合った分だけの休養を取ればそんな心配は要らねえよ」

触診し、薬を渡し、それを受け取ると、満足したのかスモッグが他の2人のもとにゆっくりと戻って行く。

「そう言うわけだ。残念ながら、テメエらは誰も死なねえ。ボスも倒れた以上は戦う動機もねえ。それにそっちの防衛省の男に見つかった以上はこの場で逃亡を図った場合、国を相手にかくれんぼするハメになるからな。そんなのはゴメンなんで、今のところは大人しくしていてやるよ」

「そうして貰えると助かる。ちようど迎えのへりも来た。お前たちは一時的に拘束させて貰うぞ。証言を信じるのもまずは生徒たちが回復したのを確認してからだ」

「しゃーねえな。背に腹は変えられねえ。だが、出来るだけ早めに頼

むぜ。来週には別の仕事が入ってんだ」

降りて来たヘリから無数の作業員らしき人物たちが降り立ち、鷹岡や、階段を降り、ここに来るまでに気絶させたその部下たちを拘束して機体に詰め込む。

「なーんだ、おじさんぬ。リベンジマッチやらないんだ？俺のこと、殺したいくらいに恨んでないの？」

ヘリに向かって歩いていくおじさんぬをおちよくるようにカルマが相変わらずの態度で口を開くが、殺し屋はといえば、それを薄く笑って受け止め、赤い髪を蓄えた頭をその大きな手のひらで一撫すると、呆気なく通り過ぎる。

「殺したいのはやまやまだが、俺は私怨で人を殺したことはないぬ。誰かがお前を殺す依頼をする日を待つぬ。だから、狙われるくらいの人物になるぬ」

言い残すと、殺し屋3人は優雅にヘリに乗る。

彼らに乗せたヘリは次第に機体を浮かせ、離陸する。

「そう言うこつた、ガキ共！本気で殺しに来て欲しかったら偉くなれ!!プロの殺し屋のフルコースを味合わせてやんよ」

飛び立ったヘリからそんな言葉と共に無数の弾薬が降って来る。カラン、カラン、と音を立てて落ちてくるそれを拾い上げて思わずため息を吐いた。

殺せんせーが言っていたけど、彼らは全然本気じゃなかったんだろ。もし、本当に殺す気で来ていたのなら、俺たちは勝ちの目も見えずに瞬殺されたに違いない。

「……なんていうか、あの3人には勝ったはずなのに、勝った気がしないね」

「言い回しがずるいんだよ。アイツら、まるで俺たちがあやされてたみたいな形でまとめやがった」

「……………年季が違うなあ……………」

俺たちに殺し屋なりの応援エールを残して飛び去ったヘリを見送る。彼らが見えなくなった頃に俺たちを回収する機体が到着し、それに乗り込み、離陸。移動を始めたのか、さっきまでいたヘリポートが小さく

なつてゆくのを見て、俺たちにとっては初となる対人戦を伴った作戦が本当に終わったんだと言う実感湧く。

「乃咲くん、寺坂くん。水だ。今のうちに薬を飲んでおけ」

多分、さつき鷹岡の部下たちを回収しに行った人達に買ってくる様に言っておいてくれたのだろう。鳥間先生から差し出された水のペットボトルを受け取り、錠剤を取り出す。

「これ何錠飲めばいいのお……？」

「……一錠じゃないかな？」

「でも風邪薬って歳で服用数変わるじゃん」

「あんまり飲みすぎるのもよくありません。まずは一錠だけ服用しましょう。効果が出るにせよ、出ないにせよ、どのみち後3時間の辛抱です。しっかり飲んで、しっかり寝て、目が覚めた頃には楽になりますよ。きつとね」

殺せんせーの指示に従って薬を出し、寺坂に渡し、自分の分を手にとってからペットボトルに手をかける。

キヤップを捻るが、コイツ、うんともすんとも言わない。力を込めてるのに、指が蓋を捉えられていないらしく、虚しくスルスルと皮膚の擦れる音だけが聞こえてくる。

「んぐぐぐ………！………びえん………」

「かつてないほど弱ってんねえ」

隣のカルマが苦笑しつつ俺からペットボトルを取り上げると、一捻りしてキヤップを外し、渡して来た。

あー、忘れてた。そういえばコイツもイケメン枠だったわ。ちくしよう。なんかかつこいいとか思っちゃまったよ。

「あんがと」

「どーいたしました」

一言礼を言ってから薬を口に含み、水を飲む。辛うじて飲み込むが、水を飲み下す瞬間に咽せた。

「ちよっ!?マジで大丈夫か!？」

「うああああ……。大丈夫う……」

「んなゾンビみたいな声で返事されても信用出来ねえわ」

なんてやり取りをしてるうちにヘリが俺たちのホテルに着いたらしい。操縦者から烏間先生に声がかかり、ドアが開き、外の景色が広がる。そこには数十分前に出発した砂浜とみんなが川の字で寝かされているテラスが見えた。

「烏間先生、これを。みんなに届けてやってください」

「ああ。任せてくれ。キミは安静に。誰か、彼と寺坂くんに肩を貸してやってくれ。1人では動けないだろう」

「ほら、行くよ、乃咲くん」

「もうちよい頑張れよ、寺坂。あと少しで休めるからな！」

カルマが俺に、吉田が寺坂にそれぞれ肩を貸し、ヘリから降りる。よろよろとみんなのもとに向かうと彼らはしんどいだろうに身体を起こし、俺たちに手を振っていた。

みんなのもとに走って向かう烏間先生と薬を手に入れたことをいち早く報告しておいた竹林がそれを出迎え、奥田さんに人数分の水を用意するように指示を飛ばし、慌ただしく動き回る。

「……乃咲くん。早く休もう。身体すげー熱い……。それに息も荒いし、実は起きてるのも相当キツイですよ」

「……悪い。実は意識飛び掛ける……」

「だろうね……」

「もう少しだけ頑張れ、圭一。あと少しだ」

カルマにも相当心配かけてるらしい。いつもの半笑いもなければ、揶揄う素振りもない。もしかすると俺は自分で思っている以上に重症なのかもしれない。

たつぷりと時間を掛けて一步一步、砂浜を歩き、なんとかテラスの前に辿り着く。その間、文句の一つも言わずに付き合ってくれたカルマと俺たちの速度に合わせて横にいてくれた磯貝には申し訳ないことをした。感謝しないとな。

テラスに上がり、ようやくみんなの顔が見える。

倒れてたみんなは身体を起こし、俺たちを笑って出迎えてくれたし、薬を奪いに行つたみんなはそんな彼らの様子と薬を飲むのを見届けて安心し、やり切った色を顔に浮かべる。

結果的に盛られたウイルスに致死性はなかったとは言え、敵に立ち向かった側と信じて待つ側に分かれて乗り越えた今回の事件はみんなの結束を強くする結果を生んだ。それが今回の本当の意味での戦利品なのかもな。

彼らの様子を見て安堵したからか、途端に体が重くなる。

「つと……。機具、手エ貸して。もう限界っぽい」

「ああ、分かっている」

2人の声が聞こえるが、すぐそこで会話しているはずなのに、どこか遠くで話しているみたいに聞こえる。

それだけじゃない。視界が揺れる。ぐるぐると世界が回りだす。視界の端から正常な世界が侵食される様に黒く染まり出す。

「圭ちゃん……！」

声がある。たった数十分しか離れていなかった筈なのに、なんだか、随分と久しぶりにその声を聞いた気がする。

フラフラとおぼつかない足取りで駆け寄ってくる倉橋さんが見えた。熱があるだろうに無茶をするなあ……。

ああ、でも、彼女も無事で済んでよかった。

そうだ、言わないと。いってらっしゃいって送り出されたんだから、しっかりと伝えないと。

「——ただいま、倉橋さん……」

言葉を絞り出すと同時に俺の視界は完全に暗転し、意識は糸が切れたみたいにプツリ、と断絶した。

59話 安息の時間

意識が覚醒する。睡眠という深い深い水底からゆっくり、ゆっくりと浮上するように、自己を認識し、意識が落ちる直前を思い出し、自分がどうなってしまったのか、現在はどんな状況なのか、ほぼ反射的に考察が始まる。

自分が何をしていたのかは覚えていないし、意識を失う寸前の記憶も思い出した。だが、どうにも思考がまとまらない。

視界は目を閉じているからか、どこまでも広がる暗闇で、海辺だからか、波の音が耳に流れる。けれど、その音が邪魔だとかは思わない。いつもどこかで肩肘張る様に入っていた力が身体から抜け落ち、なんだか妙に安らいでいる。

体調は昨日に比べると比較にならない程に良くなった。スモッグのくれた栄養剤がしっかり機能してくれたと言うことだろう。

それでも完全回復とはいかないあたり、彼の言う通り、俺は過労状態なんだろうな。体の調子はこの島に来た時と同じくらいに戻った程度だろう。全快とまではいかないが、充分回復した。

「……………」

それはそれとして、この安らぎはなんだろう？

この柔らかい感触と頭の上を何度も往復する感触、そして夏だと言うのに寝かされているであろう布団から伝わってくる熱が心地いい。安堵感というのだろうか、なんだか心底落ち着くし、安心できる温もりが近くにある。

湯たんぽだろうか？ 風邪を引いた時に湯たんぽを抱いて寝れば体温が上がリ、早くウイルスを殺せるとかそんな話をどこかで聞いたことがあった気がする。

別にこれまでの人生で自分は不幸だとか考えたことはない。けど、明確に幸福を感じたことがなかった。なのに、幸せとはこう言う感覚を指すのだろうか、だなんて漠然と考えてしまう。

それをもっと感じていたくてようやく動かすことができると思

至った腕でその温もりを抱き寄せる。

「あつ……。ふふふ、案外甘えんぼさんなんだねえ」

柔らかい声ができる。抱き寄せた分だけ身体で感じる温かさと柔らかさが増して行く。

そんな居心地の良さにまどろみながら、現実にあるしがらみの全てを忘れ去り、頭の中を空っぽにしてその幸せな感触に身を任せることしばらく。ふと、思う。今の声、なーんか聞き覚えがあるぞ?と。というか、気を失う寸前に聞いた声そのものだ。

「……………あ」

まだこのままでいたいと泣き叫ぶ瞼を無理矢理こじ開け、ぼやける視界になんとかピントを合わせてようやく現実と向き合う。

ゆつくりと輪郭を帯びていく視界にまず映ったのは薄い水色の布地だった。その質感と色から見慣れ、着慣れたうちの学校の体育着のシャツだと理解するのに時間は掛からなかった。

流れる様に自分の状況を把握する。

俺が今、抱き寄せたのはこの人物で、間違いないだろう。同じ布団にいるのもこの子であることは間違いない。

と、なつてくると、次に問題になつてくるのは今の俺がどんな状態なのかだ。場合によっては事案になるかもしれない。

頭を往復する温かい感触と、二の腕あたりから背中へ添えられているこの手から察するに、俺が抱き寄せただけではなく、この人物も、もともと寝ていた俺を抱き、なにやら慈悲深い手つきで頭を撫で続けていたということになる。

そこまでは良い。いや、ぶつちやけ動揺はしているが。目が覚めたら同級生に抱かれて頭を撫でられているなんて状況で一切の動揺なくあるがままを受け入れられるほど俺の精神は屈強ではない。だが、そこは一旦置いておくとしよう。

俺が気にしなきゃいけないのは、この顔にあたる柔らかかな2つの感触と寝ぼけていたとは言え、その温もりを抱き寄せてしまったことの方だ。間違いない。

いま、目の前に広がる水色から推察するに俺の頭は目の前の人物の

胴体部分に当たっていると考えて間違いない。間違いないが、問題は
この柔らかい物体の正体である。

「まだ寝ても良いんだよ。昨日は大変だったもんね。頑張ってく
れてありがとうね、圭ちゃん」

寝ている赤ん坊をあやすみたいなおとこな声と共に撫でられ続ける頭。
心なしか、背中に回された手の力が強まった気がする。

それを心地よいと感じてしまう反面、俺はかつてないほどに焦りだ
していた。今、聞こえて来た声は間違いなく女子のもので、そして、う
ちの学校で俺のことを「圭ちゃん」と呼ぶ人物で心当たりはたった
1人しかいない。

……えっ!?もしかしなくてもこの柔らかいのはπ!!?

さて。クールになれ、乃咲圭一。これが倉橋さんだとは限らない。
シャツの中にタオルを突っ込んだ寺坂である可能性も捨てきれない。
そうだ、胸にタオルを突っ込んだ寺坂が俺を抱き締め、倉橋さんがア
テレコしてる可能性だってゼロじゃない。

いや、これが寺坂ならそれはそれで地獄というか、どんなプレイな
んだ?とツッコまなきゃならんのだが。

しかし、これが倉橋さんだと思いと心なしか良い匂いを感じる気が
……。いやいや、思い止まれ!女子だと思おうや否や匂いを嗅ぎにい
くとか変態じみてるぞ俺え……!!

落ち着け、本当にクールになるんだ、乃咲圭一!ひとまず本当に
倉橋さんなら早急に離れないと気不味いことになる!

職務放棄し、本能を野放しにしている理性を無理矢理呼び戻し、欲
望に忠実な本能から身体の主導権を取り戻す。

思いの外、結構ぴったり身体がくつついている所為で思う様に身動
きが取れない。離れようにもこのままじゃ何もできないので、まずは
顔だけ動かす。

「んふう……あ、圭ちゃん、起きたんだ?」

何やらけしからん吐息が聞こえた気がしたが、あえてそれはス
ルー。気にしたら今度こそ理性がぶっ飛びそうなので、気にしないつ
たら気にしない。胸から顔を離し、初めて吸った空気は味気ないとか

思っていない。本当だよ？

「……おはよう、倉橋さん」

「うん、おっは〜」

そして、顔を上げるとそこにいたのは幸いにも、寺坂の野郎ではなく、倉橋さんだった。まずは一安心。

しかし、倉橋さんは俺が起きたのだと理解したにも関わらず、相変わらず、背中に回した手も、頭を撫でることを止めない。

「……どういう状況？」

「うんとねえ、まず、圭ちゃんは帰って来て直ぐに気を失って、そのまま寝かされてたの。みんなも動けないくらいに疲れてたみたいだから男女関係なく雑魚寝することになったんだよ」

「ふむ」

みんなで雑魚寝。そう言う理由なら倉橋さんが同じ寢床にいるのは説明つくだろう。もつとも、思春期の男女を並べて寝かせるか？という疑問を放り投げて考えた場合の話だが。

「んで、なんだかんだ全員熟睡。磯貝くんが私らの中で一番早く起きたんだけど、その時点でもうお昼過ぎ。磯貝くんが起きたのを皮切りにみんなもそれぞれ起きだして、それぞれシャワー浴びたり、着替えたりしてたんだよ」

「ふむふむ」

なるほど、気を失う前に見た倉橋さんは私服だったのに、今は体育着なのはそう言う理由だったか。

「それで圭ちゃん以外みんなが起きて、さっぱりして、着替え終わってここに集合。昨日の経緯を磯貝くんとか薬を奪いに行つたみんなから聞かされて、一段落したと」

「うん」

そうか、昨日のことはもう知ってるんだな。そりゃあ、なんであんな目に遭ったのかとか、気になるか。

「こんな所かな？」

「……いや、あの、そこも気になるよ？気になるけどさ、一番気になるのはそこじゃなくて……」

一通り説明し、話を締め括った倉橋さんに控えめにツツコミ。確かにあの後、どうなったのかは気になるし、俺が聞いた『どんな状況?』という問いに対しては答えにはなっている。

けど、一番聞きたい部分が抜け落ちている。

「俺が知りたいのは……なんで、倉橋さんと同じ布団にいるのか、なんだけでも……。もしかしてアレですか、たまたま近くにいた倉橋さんに抱き付いて俺が離さなかった奴ですか」

「え?そうだけど」

「マジで………ツ!!!?」

え、なにそれ死にたい。めちやくちや恥ずかしいやつじゃん。

「って言うのは冗談で」

「マジで心臓に悪いからやめてくれ……」

「ごめんごめん。みんなは起きたけど圭ちゃんだけはちつとも起きないからさ、カルマくんが『乃咲クンに落書きしようよ』とか言い出して、学級委員2人がそれを止めて、でも何かイタズラしたいよねえゝって話になって、今に至る感じかなあ」

これはイタズラなのか。いや、分かっていたとも。別にこれが男女のアレやコレじゃないことくらい理解してましたとも。

いや、仮にイタズラなんだとしたら倉橋さん、身体張りすぎじゃない?男抱き締めるなんて嫌じゃない?体の割といるんなところが当たってるって気持ち悪くてないのかなあ……?

倉橋さんは下ネタ耐性高いけど、こんなことするタイプだったかなあ。性的な話題に寛容ではあるけど、自分からはそう言う匂わせ的なことはしない清楚系とまではいかなくとも、はしたなさはない子だと思ってたんだけど。

つか、なんでそもそも倉橋さんなんだよ。イタズラだったら、さつき考えた実は寺坂でしたってオチの方が面白いだろうが。

「……あれ?」

「どーしたの?」

何故かどう弄られる方が面白いとか考えてしまったあと、何気なく倉橋さんとの一連の会話を思い出して違和感。

「俺以外は起きたんだよな？」

「だね」

「昨日の事件の真相を磯貝たちから聞いたんだよな？」

「そだよ」

「んで、俺がいつまで経っても起きないって話になったと」

「うん。案外寝顔可愛いなあ〜って話も出たんだよ？」

「それから俺にイタズラする話が出て、何故か添い寝ドッキリが決行され、倉橋さんが実行犯になった」

「うんうん。誰かと同じ布団に入るのなんて小さい頃以来だけど、気持ちいいって言うか、なんか幸せな感じだよな」

「……さて。イタズラする話が出て、倉橋さんが現在進行形で実行しているのなら、計画犯は……!!」

最悪の可能性に思い至り、即座に周りに意識を集中。そして、俺と倉橋さん以外にも無数の気配があることに気付き、思わず倉橋さんごとガバツと音を立てながら体を持ち上げる。

そこには、案の定というか、ニマニマとゲスい笑みを浮かべたクラスメイトたちが楽しそうにこつちを見てた。

「あ、気付いた」

「え〜。ってことは賭けは磯貝とカルマの勝ち？」

「ちえ〜。朝起きたら女子と添い寝してるシチュなら絶対ヤラシイ展開になると思ったんだけどなあ。乃咲って枯れてる？」

『これが朝チュンという奴なんですか？片岡さん』

「いやあ……？違うんじゃないかなあ」

「ほらほら、みんな。そこまでにしてやろうぜ。圭一だって疲れてたんだし、誰かに甘えたくなることくらいあるって」

「とか言いつつ、しっかり賭けに参加して、ちやつかり勝ち分持っていつてるのを俺は見逃してないぜ、磯貝よ」

「ま、昨日も結構ふにやふにやだったもんな」

「むしろあのふにやふにやが乃咲の素なんじゃない？」

「確かに。乃咲って気取つてるとまではいかないけど少し、演技くさい所あるよな。本当はツツコミ入れたい癖になーんか我慢してる時

があるって言うかさ」

クラスメイトたちが口々に好き勝手に感想を言い合う。

なんだろう、みんな元気になって良かったと思うべきか、まだ寝てなくて大丈夫か、と心配するべきなのか。

でも、ただ一つ。言わなきゃいけないことがある。

「見せもんじゃねえぞゴラアアアアツ!!」

未だマイペースに頭を撫でてくる倉橋さんに身体を預けながら力一杯主張しましたとき。

?? ?? ??

俺も起きたというところで、昨日から不眠不休で指揮をとり、殺せんせーが動かないうちに抹殺する準備を整えている烏間先生の元へ向かい、作戦の顛末を見守る。

「むっすううう………」

「悪かったつて。いい加減機嫌直してくれよ、圭一」

「磯貝くん嫌あい……」

「ちなみに添い寝ドツキリを企画したのは俺だぜ!」

「前原くんも嫌あい……」

「凄いキレ方だったよな、怒鳴ってる癖に倉橋には大人しくヨシヨシされてやがんの。よくあんなんで迫力出せるよな」

「木村くんも嫌あ……」

あの後、シャワーを浴び、着替えた俺は絶賛不貞腐れながら磯貝たちに着められていた。

前原は戦犯として、黙って見ていた木村も、なんだかんだきつちり儲けていた磯貝もみんな同罪である。

「……でもさ、倉橋と寝るの嫌ではなかったんだろ?」

「うっせ、勘違いされるからその言い方やめろ」

だが事実、見せものにされたことには思うところはあるものの、倉橋さんと同じ布団にいることは嫌ではなかった。むしろ、生まれて初めて幸せとはこういうことを言うんだろう、みたいなことすら考えて

しまったほどだ。

「……でもさ、乃咲。俺は添い寝ドツキリは企画したけど、流石に女子にやらせるつもりはなかったんだぜ？」

「だな、最初は寺坂とか渚でって話だったんだ」

「その案は絶対にカルマ発だろ」

「お前のカルマへの理解度も高いよな」

「んで、まあ、女装させた渚をつて話でまとまりかけたんだけど、女子連中から倉橋を推す声が出てさ」

いや、女装した渚とかむしろ褒美だろ。倉橋さんが嫌だったわけじゃないけど何してくれてんだうちの女子連中。

精神衛生的には渚でやってくれた方が何百倍も良かったわ。倉橋さんの感触とか匂いとか頭から離れてくれないんだけど、本当にどうしてくれるんだ。マジで変態終末期になるぞ、俺。

「倉橋も最初は照れてたけど、『ヒナノがやらないなら私が』ってビッチ先生が面白半分で名乗り出たらさ、血相変えて『私がやるっ！』つてお前の布団に突入していくし」

「いや、ビッチ先生もいたのかよ」

「挙句に、倉橋は倉橋で周りに俺たちがいるのを忘れたみたいに自分の世界に入つてさ、寝てるお前を甘やかし始めるし。見てて砂糖吐きたくなつたわ。死ぬ」

「待て、お前らの弁明聞いてる筈なのになんでいつの間にか俺が責められる流れになつてんだよ!？」

「うつせえ！俺が計画したドツキリが発端とは言えあんな妬ましい光景があるか！なに羨ましいことしてんだテメエ！」

「逆ギレしてんじゃねえぞゴラア！そんなに添い寝して欲しいなら俺がしたるわこの野郎！布団行くぞオラアアア！」

前原と戯れあつて取っ組み合いになる。

別に本気で言ってるわけじゃないことは分かつてるつもりなのでおふざけ半分なのだが、こんな理不尽なキレ方あるか？

「ほらほら、そこまでにしとけて。みんな見てるぞ」

機員の優等生な言葉で取っ組み合いを止める。

確かにみんながこつちを見てた。

「なんかさ、乃咲って感情豊かになったよな、最近は」

「だよな。なんつーか、話しかければ会話もするし、噂で聞いてたほど喧嘩っ早くないし、磯貝がよく話しかけてたからさ、流れで俺も話すようになったけど、少し前までこんな風に戯れ合うようになるなんて思わなかったもん」

「だな、飄々としてたって言うか、周りに興味なさそうだったって言うか。別にそんなことないのはバイトの件で助けて貰った時から分かってたつもりんだけどさ、あんまり表情に出さないタイプだったな。あの頃はまだやる気もなかったし」

こんな風に昔のことを語られると少しむず痒い。

まだ『昔は俺も悪だった』みたいな話をするには若いと思うんだけど、俺以外の3人はそう言う気分らしい。

「それが今じゃ、女子と添い寝だもんなあ」

「原因はお前だけだな、前原」

「倉橋がやることになるなんて思わなかったんだって。マジで。俺だって驚いてたんだよ、最初は」

「……でもよ、乃咲と倉橋って仲良いし、何か一緒にいること多くないか？修学旅行の清水寺の後くらいからふと見ると並んでるって言うかさ？本格的にあれ？って思ったのはプール爆破事件の辺りからかなあ……？倉橋の距離感近くなったよな？」

「だな。あの辺りから圭一の呼び方が変わったたり、みんなと一緒にいる時なんかはさり気なく隣をキープしてたり」

「そう言えば、杉野たちとムシ取り行った時も一緒にいたよな？あれ、俺たちが居なかったら2人きりだったろ？」

「烏間先生好きって共通点があるからな。それに彼女は誰にでも優しいし、いつも天真爛漫な笑顔でいるだろ。確かに好きか嫌いかなら好きだし、好きか普通かでも好きだと答えるけど、likeかloveならlikeだよ。倉橋さんもそうなんじゃないか」

なんだろう。以前似たようなことを1人で考えたことがあったな。つか、なんでこんなこと話してるんだろう、俺。

「気のない男をあんな風に甘やかすもんかね。同じ布団に入って抱きしめてまで。普通はしないだろ。確かにアイツは誰にでも平等だけどき、きっちり線引きはしてると思うぞ?」

「倉橋はアレでガード固いイメージはあるな。下ネタにも対応してくれるけど基本的にはそう言う話題の時はのらりくらりしてる、みたいなイメージは結構強めにあるかも」

「そうだなあ……。確かにそんな感じはある。けど、言われてみると確かに圭一にはガードが甘いつて言うか、スキンシップ多いよな。それに、よくお前のこと見てるぞ、倉橋。現に、ほら」

磯貝が視線を向けた先に目をやると、修学旅行の時に組んだ女子4人が固まっており、向こうもこつちを見ていた。

だからか、倉橋さんと何気なく目が合う。あ、目が合ったなあ、なんて思った頃にはこちらに手を振られた。

他の3人に肘で小突かれ、手を振り返してみると、いつもの天真爛漫な笑顔になり、他の3人を連れてこつちに歩いて来る。

倉橋さんがああ言う風に笑っているのを見ると安心するな。昨日の1時間が異常な密度だったせいもあるだろうが、アレをみると日常に帰って来たという感じがする。

「どう、乃咲。体調の方は」

「ぼちぼち。良くもなく、悪くもなく。まあ、昨日に比べたら全然調子いいわ」

「確かに昨日より顔色は良いね」

「でも無理しちやダメだよ?中学生で過労だなんて」

女子たちと合流し、軽く言葉を交わし、昨日ホテルに侵入したメンツからの心配半分、無茶しすぎと説教半分で会話が進む。

実はシャワーを浴びた後、律に話しかけて見たら元気になったようなのでお説教です!と口酸っぱく言われたばかりなので少しばかりうんざりしながら適当に頷く。

「圭ちゃん。圭ちゃんがみんなの為に頑張ってくれたの聞いて凄く嬉しかったし、仲間としてとつても頼もしいと思っただけど、もうこんな無茶しないでよ。キミが倒れたら悲しいし、心配だもん。例えばそれが

みんなの為だったとしてもさ」

「——うん、分かっている。もうやらないよ、と言うか、もうそんな機会もないだろうしな」

短く答えて海を見る。茜色に染まった空と海は綺麗で、みんなと揃って眺める風景もこれで見納めだと思うと切ないな。

倉橋さんの言葉に対する返答に嘘はない。ここから先、俺は暗殺にはノータッチだ。夏休み明けからA組に戻る自分にはもう、今回みたいな無茶をする機会なんて訪れることはないだろう。

「だなあ……。こんなこと何度もあつてたまるかつての」

「ねー。でもしばらくは安心なんじゃない？鷹岡はしばらく出てこれないらしいし、私らに恨み持ってそうな奴はもういないでしょ、多分。カルマと乃咲に拷問されてたグリップ？って殺し屋を除いたらの話だけどさ」

げんなりした様子の前原が俺の言葉を拾い、苦笑して同じく岡野が呟く。彼らは言葉をそのまま受け止めてくれたらしい。

「まあ、あの人たちは心配ないでしょ」

「だな。プロとしての一線を持つてたし。なんつーかさ、今回は大人についていろいろと考えさせられたよ」

磯員がしみじみ言いながら、殺せんせー用監獄の建設指示を不眠不休で飛ばし続ける鳥間先生と、彼とは対照的に貸し切ったビーチで際どい水着を披露しながら優雅にジュースを啜り続けるビッチ先生に視線を向けた。

「信じられるかよ。あの人、ゾウを失神させるガス食らったんだぜ？それでも俺らの倍は強かったし、誰よりも冷静で俺たちを先導してくれた。その上で一切休まずにああやって指揮を取ってる。あと10年であんな超人になれるのかなあ、俺たち」

「ビッチ先生もアレで凄い人だよ。普段の言動が子供っぽくて、歳の近い姉みみたいな距離感だけど私たちの想像ができない技術をたくさん持つてるんだろうなあ……」

「ホテルで会った殺し屋たちもそうだった。長年の経験でスゲー技術持つてたり、仕事に対してしつかりした考えを持つてたり」

「……と思えばさ、鷹岡みたいに”ああはなりたくない”って奴もいるんだよな。力の使い方を間違えて、自業自得を逆恨みして、責任を他人に押し付けて、ヒステリックに喚いてさ。かつこ悪いって言うかさ、情けなかつたよな」

鷹岡のことを考えるとさ、なんとなく浅野理事長の教育方針は何も間違っていないし、合理的だと思う。

今回の暗殺旅行で俺たちは、これ以上ないくらい見事な反面教師を見た。本当に心底駄目な見本を見た。心底煮詰まった狂気と憎悪と悪意を見た。あんなのを見せられたら嫌でも考えさせられる。”ああはなりたくない”と。

「だな。多分さ、大人になるって言うのはそこら辺を見極めて、目標にする人を間違えないで進み続けることなんだよな。良いなって思ってた人は追いかけて、ダメだと思った奴は追い越して。これから先ずつとそれの繰り返しなんだろうな」

磯貝が綺麗にまとめるのとほぼ同時に烏間先生が建設させていた対先生監獄が凄まじい爆裂音を轟かせ、四散する。

さすが、来年には地球を爆破させると公言しているだけあって、コンクリを見事に粉碎している。恐らくはあの監獄から脱出するのに必要最低限な威力に留めているのだろうか。

「爆発したぞ!!?殺れたのか!?!」

仲間たちが爆裂した監獄を見て反応を示すが、みんな口ではそういう反応をしても薄々分かっていただろう。国が仕掛けたこの暗殺計画がどんな結果で終わってしまうのかを。

だから俺もはなから失敗する前提で考えていた。結局、そんな想像は当たっていたようで。

「先生の不甲斐なさから苦勞させてしまいました。ですが、敵と戦い、ウィルスと戦い、皆さんよく頑張りました」

うねうねとうねり、くねる黄色い触手が俺たち一人一人の頭を撫でて、通り過ぎて行く。

黒煙を上げる監獄、その手前で俺たちの方に視線を向けてあからさまに残念そうな顔をする烏間先生をバックに復活した殺せんせーが

いつもの顔でニヤリと三日月の笑みを浮かべる。

「やつぱり、先生には触手がなくつちやね」

「ヌルフフフ、さて皆さん。旅行の続きを楽しみましょう！」

殺せんせーの声に女子連中が不敵な笑みを浮かべると、体育着を脱ぎ捨てて。その唐突すぎる行動に何事かと呆気に取られるが、どうやら下に水着を着ていたらしい。……そりやそうか。

「ねえ、圭ちゃん」

「……ん？」

倉橋さんはまだここに残ってたらしい。俺の隣に並び立ち、こつちに視線を向けていた。

彼女も下に水着着てんのかなあ、なんて思っていると倉橋さんほどこか心配したみたい、真剣な顔で俺に聞く。

「圭ちゃんはさ、どんな大人になりたい？」

「俺？」

「うん。圭ちゃんのこと、もつと知りたいんだ。烏間先生みたいに、じゃなくてキミの言葉で聞きたい。なんとなく、メグちゃんたちの話を聞いて思ったんだ」

俺の思う理想。烏間先生みたいな、という他人を目標としたものではなく、あくまで乃咲圭一が目指したい理想像か。

「俺はさ、認められなかった。乃咲圭一という個人をさ。んで、それを叶えてくれたのは烏間先生と殺せんせーだ。だから、もしも理想があるとしたらあの2人になるんだけど……」

口に出そうとすると難しい。烏間先生や殺せんせーは俺が望んだことをしてくれた。今まで誰もしてくれなかったことを。

真っ直ぐに俺を見て、努力を褒めてくれて、得た結果を俺自身が勝ち取ったものだ、と認めてくれた。

「俺は……」

どう、なりたいたらだろう。

答えようと思った。やろうと思えば簡単だった、でも、口には出せなかった。『目の前の相手を見てやれる人になりたい』と。

けれど、きつと、俺から最も遠いのもソレだろう。だって俺は実の

父親のことすら何も知らないのだから。

——俺に興味なんてなかったんだろ!?

かつて親父に拳と共に叩き付けた言葉が脳裏を掠める。力の使い方を間違えて、自業自得を逆恨みして、責任を他人に押し付けて、ヒステリックに喚いて、かっこ悪くて、情けない。ほんとの口が言ってるんだろうな。

それは全てかつての俺に言うべき言葉だ。

親父を理由に勉強して、体調崩して、落魄れて、それでも何も語らなかつた親父に拳を向けた。

体調を崩したのは俺の自業自得だ。勉強なんてのは他人の為じゃなくて自分の為にするべきことだ。それを親父のせいにして拳を振るうのは明らかな逆恨みで、間違つた力の使い方だった。

なのに俺はヒステリックに喚いた。本当にかっこ悪くて、心底情けない。

「……ああ、なるほど」

「圭ちゃん?」

「ごめん、まだ自分の言葉で表現出来るほど固まってないわ」

「……そっか」

納得した。納得してしまった。

昨日、なんであんなにペラペラと鷹岡に対する罵倒が出てきたのか。腑に落ちた。なんであんなにあの男が感に触るのか。

——鷹岡は先生たちと出会う前の俺なんだ。

……あーあ。嫌なこと気付いちまったな。

「いつかき、聞かせてよ。圭ちゃんの言葉で」

「……ああ」

何気なく親父の口癖を真似て見る。彼はこの言葉にどんな思いを込めていたんだろう。……そうか”という反応には何が詰まっていたのだろう?俺は……何も知らないんだな。

「……海、綺麗だね」

「……そうだな」

倉橋さんの言葉に釣られて視線を茜色の海に向ける。

ここにいるみんな、同じ景色を見ている。だと言うのに俺はみんなが何を思い、何を考えているのかを知らない。

仲良くなつたと思つたのに、結局はその程度。

俺に誰かを見ることがなんて出来ないんじゃないのか？

右手に温かくて柔らかい感触が当たると。顔は動かすことなく視線を向けると倉橋さんの手が当たっていた。

「……………」

きつと、たまたま当たっただけだ。そう言う風に切り捨てて、視線をずらして、歩き出した。

鳥間先生に伝えなきゃいけないことがあるから。彼女の声も聞けないフリをして。色んなことから背を向けた。

60話 知らない時間

身体が復活した殺せんせーとはしゃぐ仲間たちを尻目に部下達へ撤収指示を出していた烏間先生に声を掛ける。

殺せんせーとは夏休みの最終日まで会う可能性があるだろうけど、烏間先生は今回の後始末とか報告関係で忙しくなり、顔を合わせる機会がなくなるだろうと思っただから、今のうちに伝えないといけないうらう。

「乃咲くんか、おはよう。体調はどうだ？」

「だいぶ良くなりました。その節は心配とご迷惑をおかけしました。申し訳ありません」

「謝らなきゃならないのは俺の方だ。身内が迷惑をかけてしまった。本当にすまなかった」

声をかける前にこちらに気付いた烏間先生から声をかけられ、軽く言葉を交わし、そのまま互いに謝り合う。

向き合ったまま頭を下げ合う俺たちは側から見るとおかしなことをしているだろう。ある程度のところまで顔を上げて、折衷案を出す。烏間先生に下げられる頭なんて俺にはない。

「互いに謝り合うのはここまでにしましょう。このやりとりはホテルでもうやりましたから」

「……分かった」

彼も顔を上げてくれたことで一安心。

さて、いよいよ本題に入ろうと思い、口を開こうとするが、うまく言葉が出てこない。流石に単刀直入が過ぎると思ってしまう自分がいるからか、何か話題はないかと言葉を選んでみる。けれど、うまい話題が出てきてくれない。

「実はキミに聞きたいことがあったんだ」

困っていると彼の方から話題を振ってきた。

少し安心し、首を傾げて見せると口を開く。

「昨日、鷹岡が投げた薬を受け止めた時の話だ」

「……あー」

やっぱりそこは気になるか。当然の疑問に納得する。多分、昨日一緒に居たメンバーも気になってはいるだろう。ただ、聞くタイミングがなかったから誰も聞いてこなかっただけ。

こうして2人で話している以上、これ以上良好なタイミングはないだろう。今度はなんて答えたものかと考え出す。

「俺は都合3回、キミが瞬間移動染みた速度で動くのを見ている。1度目は堀部イトナによる暗殺。2度目は鷹岡赴任の初日。そして3度目が昨日の晩だ」

「そうですね、無意識のうちには何度か使ってるみたいですが、俺も印象に残ってるのはその3回です」

「初めは俺が意識していない場所から誰よりも素早く行動しただけかと思っただ。2度目は油断している鷹岡や俺の意表を突いた結果だと後で納得させた。だが、昨日見て確信した。アレは素早く行動したとか意表を突いたとかそんなちやちや領域ではないと」

「……………」

「あの瞬間のキミはあの超生物に匹敵する速度を發揮していた。だが、それは本来ありえないことだ。とてもじゃないが人間が踏み込める領域ではない。ここまで言えば流石に聞きたいことは分かるだろう。教えて欲しい、キミは何者だ？」

鳥間先生からの問いかけに俯きながら口を噤む。それは俺にも分からないことだからだ。

無論、鳥間先生からの問い掛けだ。しつかり答えるのが俺なりの誠意になると思うし、そうしたいのは山々だ。

「すみません。実は俺も良く分かってないんです」

「……………分からない？」

「はい。初めて使ったのはイトナの時。トリガーになったのは……”声”でした。殺せんせーへの怒りで暴走するアイツがみんなにも危害を加えるんじゃないかって思った時になんて言うか、変な話なんですけどね？自分の内側というか、頭の中から声が聞こえたんです。”何が欲しい？”って」

「内側から聞こえる声……」

「はい。その時に思ったんです。”速くなりたい”って。速く動けばみんなを助けられるって思ってた。そしたら周りから見たら瞬間移動染みた速度で動けるようになったみたいです」

そう、これが俺の知る全てだ。

考えてみれば、当たり前のように使っている”ゾーン”だってどうして使えるのか分からない。

高すぎる集中力で時間が止まっているように見えるのはまだ理解できないわけではない。漫画で稀に見る描写だからある意味で親しみやすいし、スポーツ選手なんかにも入れる人はいると言う。

だが、問題はその世界が止まった状態で身体を動かせることにある。これは多分、誰にでも出来ることではないだろうし、ゾーン由来のものとも思えない。だって、もしもこれがゾーンの一種ならスポーツ界は今頃はテニヌや超次元サッカー選手だらけになっているはずなのだから。

正直、俺がゾーンと呼んでいるこの力も本当に世間的に知られているソレと同じものなのかすら怪しい。そもそも俺の集中力を知った殺せんせーがそう言う推測を立てただけなのだから。

「それに、無意識で使うことがほとんどで、実を言うと意図的に使ったのは昨日が初めてなんです」

口にして情けなく思う。俺は自分のことすら完全に理解していないのだ。こんな奴に他人を真っ直ぐ見てやれるはずがない。

「……分かった。この話題はここまでにしよう。俺も問い詰めた訳じゃない。その力のおかげで昨日の勝利があるのは純然たる事実だ。なにより、ソレもキミの力であることに変わりはない」

「そうして貰えると助かります」

「……………それと、もう一つ、答えてほしい。キミは今まで大きな病気とかの理由で長期間の入院をしたことは？」

今度はどう言う意図の質問だろうか？思いながら記憶を探り、可能な限りの過去を思い出し、口を開いた。

「なかった筈です。中一の頃に倒れた事はありませんでしたが、あの時は点

滴打つてすぐに帰りましたし、入院は俺の記憶が確かなら、この前、鷹岡に殴られて気を失った時のが初めてです」

「……………そうか。分かった」

俺の言葉を反芻するように俯くと、何かを切り替えたのか、鳥間先生がいつもの調子で言う。

「しばらくは訓練も無しだ。今日まで訓練漬けで大して休めていないだろう。過労状態にあると気付かなくてすまなかったな。折角の夏休みだ。これを機にゆっくりと羽を伸ばしてくれ。今日までの約4ヶ月、キミたちは充分すぎるくらいに頑張ってくれた。残りの休みは学生らしく過ごして欲しい」

教官からの嬉しい評価だ。きつと、休みを明けたらこれまでよりもハードで高度な訓練が待っているのだろう。

「休み明けはより高度な訓練をしてもらう事になるが、君たちならば必ずものに出来るはずだ。期待しているぞ、乃咲くん」

それは地球の未来の為でもあるが、俺たちならこなせるし、習得できると言う期待があつてのことだろう。

それ故に心苦しい。その期待に応えられないことが。

「鳥間先生、実はその事で俺もお話ししないといけないことがあるんです。俺の夏休み明けの身の振り方について」

「身の振り方……………」

「俺は——E組を抜けます」

鳥間先生が息を呑んだ。

?? ?? ??

「第一回、チキチキ暗殺教室肝試し大会いい!!」

すっかり日も沈み、そろそろお開きして夕食まで自由行動かなくなって空気が流れ始め、海ではしゃいでいた女子たちも着替えて戻って来た頃、唐突にタコが騒ぎ出した。

なんつーか、テンションが異様に高い。多分、昨日と今日の昼間にかけて身体がなくて遊べなかった分の鬱憤でも溜まっているのだろ

う。無駄にプラカードまで作ってやたらと乗り気。

「肝試し大会？」

「はい、昨日の暗殺に対するお礼として用意したイベントです。やはり真夏の夜にやることは一つですよねえ……。ニユルフフフフ……。男女でペアを組んで下さい、ルールを説明します」

ルールは簡単。この島の全長300メートルの海底洞窟を男女のペアで抜けるだけ。ただし、お化け役の殺せんせーは殺してOK。言うならばお化けを殺すことが許された、暗殺肝試し。

「どうです？暗殺旅行の締め括りにはピッタリなイベントでしょう。殺って良し！恐怖を楽しむも良し！各々で思い思いの方法で好きなように楽しんで行ってください」

口元を緩め、笑みを見せる殺せんせー。

結構楽しそうなこのイベントにみんな乗り気のようにだが、意識の波長が見えている俺だけは知っている。このタコが単純に俺たちを楽しませる為だけに動いているわけではないことを。

殺せんせー、絶対に何か企んでる。何を考えてるかまでは知らないが、ロクでもないことを計画してるに違いない。

まあ、別にいいか。どうせいつもみたいに勝手に企てて、勝手に動いて、勝手に自爆するのがオチだろう。

……。いや、待て。なんで俺は今、ナチュラルに意識の波長なんでものを観測したんだ？アレはゾーンに入るか、集中してないと見れなかった筈なのに。

……。考えてもしようもないし、俺も相手を探そう。

ただ、アレだな。こう言う状況でいざ相手を誘ったとしても断られたらダメージ大きそうだな。

「律——」

『お断りします♪』

「あ、はい……。ごめんなさい……………」

律を誘おうとしたらフラれた。しかも全部言い終わる前に。なんか、めちやくちや傷付いた。最後まで聞いてくれてもいいじゃないか。律さん、もしかして昨日のことまだ怒ってる？

「ヌルフッフ、フラれてしまいましたね、乃咲くん。ですがいけませんよ、本命でもないのになんとなくで女の子を誘ったりしたら。律さんも断るに決まっています。さあ、切り替えましょう、勇気を出して本命の倉橋さんに――」

「やかましいぞ、下世話教師ッ!」

さっきの磯貝たちとの会話の所為で妙に意識してしまって誘い辛くなっているところに耳打ちで追い討ちしてくるタコ。なんとなく頭に来たので、反射的に回し蹴りを繰り出してしまった。

「にやッ……!!?」

どうせ当たらないだろう。そう思った蹴りは殺せんせーの顔面を薙ぎ、彼を地面に叩き付けてしまった。

バフツ!と砂埃を立てて顔面から着地する殺せんせーとまさか当たると思っていなかったので困惑する俺。そんな俺たちを周りが唾然とした様子で眺めていた。

「こ、殺せんせー……!!?」

まさか当たるとは思わなかった。たぶん、みんなそうだろう。居心地の悪い沈黙が訪れ、耐え切れなくなったので、倒れた殺せんせーの顔を覗き込む。

「すみません……。つい反射的に。でも、まさか当たると思わなくて。えっと、その、ごめんなさい」

「……いえ。すみません。砂浜だと思いの外に踏ん張りが効かず、回避が間に合いませんでした。情けないところを見せてしまいましたね。それはそれとして無駄な力みのないしなやかで素晴らしい上段回し蹴りでした。ですが、それを人に使ってはいけませんよ?大怪我では済まないでしょうから」

「はい、すみません」

「……ははは!殺せんせー。実は体調でも悪いんじゃないの?まともに攻撃喰らうとからしくないぜ?」

「だ、だよな!いつもなら乃咲の靴にでも手入れしてる場面だろうに。こりゃあ暗殺肝試しも楽勝かな?」

「て言うか今の凄く勿体無くない?あんなに無防備に喰らうなら乃咲

の靴にナイフでも付けとけば良かった」

「あくー！それやれてたら100億だったじゃんか！」

微妙な空気になりかけたところで前原が声を出し、流れを変えようと試みて、杉野がそれに乗っかってくれる。

ありがたいことにみんなも口々にそれに合わせて話題を変え、時間を掛けずに空気を切り替えてくれた。

「……………」

俺は何をやってるんだろう。こんな空気にしたかった訳じゃないのに。それに殺せんせーも殺せんせーだ。彼の所為にするわけではないが、まさか当たるとは思わなかったんだ。本当に。

やるせないと言うか、申し訳ないというか、なんとも言えない感覚に苛まれているいつものメンバーがこつちに来ていたらしい。前原に背中を軽く小突かれてようやく存在に気がつく。

「切り替えようぜ？乃咲。そんな気にすることないって。お前が無意味に暴力を振るった訳じゃないってのはみんな分かってるからよ。どうせあのタコが余計なこと言ったんだろ？」

「前原……………」

「それより凄い回し蹴りだったよね、今度わたしにもやり方教えてよ。技のレパートリー増やしたいしさ」

「びつくりしたよな、まさか殺せんせーを蹴り倒すなんて思わなかったし。俺、何が起きたのか分からなかった」

「だよね、乃咲くんが一瞬跳んだと思ったら次の瞬間には殺せんせーが倒れてるし。2度見しちゃったよ」

「音も凄かったよな、ブウオン！って」

みんなが口々にさっきの出来事をフォローしてくれる。

コイツらはいい奴だ。それ故に罪悪感のようなものが沸く。これから…………いや、俺はもう既に彼らを裏切っているのだから。

「ね、圭ちゃん」

思わずみんなから焦点を逸らすと倉橋さんが声を掛けてきたので、いつも通りの自分を作り、演じ、向き合う。

「どうした？」

少しだけ気まずい。さっきまでの磯貝たちとの会話や鳥間先生にA組行きを告げる直前、彼女の声を聞こえないフリして半ば無視したような形になってしまっていたから。

「良かったらさ、肝試しでペア組もうよ」

彼女はさっきのことなんか気にしてないみたいにも通りの純真な笑みでそう言ってくれる。

なんとなく、彼女のその様子に救われた気がして、二つ返事でペアを組もうと思ったその時、違和感が訪れた。

……まただ。意識の波長が見えた。集中なんてしてないし、もちろんゾーンなんかに入っていない。

今の俺は完璧に素の状態だったのに。何故だか、昨日使った時よりも鮮明に倉橋さんの波長が分かる。

意識の波が激しく感覚が短い。倉橋さん、もしかして緊張してるのか？しかも、感じ取れる情報はそれだけじゃない。意識を意図的に集中させてみた時、再び今までになかったことが起きる。

——トクン、トクン。

一定のリズムと言うにはやや早いペースで脈打つ音が倉橋さんから聞こえてくる。トクン、トクンと俺が口を開かずにいる時間の分だけその音は激しくなり、ペースが早まり、大きくなる。

……これは、倉橋さんの心音か……？

いや、まて、流石におかしいぞ。今までこんなことはなかった。彼女とは別に密着しているわけではない。まだ、抱き合っていて心音が聞こえると言うのなら理解できるが、この距離で聞こえるのは絶対にあり得ないはずだ。

「乃咲くんー」

「うわっ……!?!」

矢田さんの声で色んなものが弾け飛ぶ。考えていた内容が頭の中から消し飛び、なんなら意識もぶっ飛びそうになった。

別に大した声量ではなかった筈だ。そもそも矢田さんは人の耳元で大声を出すような人じゃない。だと言うのに、彼女の今の声は鼓膜を突き破り、脳を振るわさるような轟音に聞こえた。

思わず耳を塞ぎ、歯を食い縛り、目を閉じる。

「圭っ!?!」

ぐわんぐわんと音が反響する耳が辛うじて磯貝の声を捉える。側から見ると突然耳を塞ぎ、俯いたようにしか見えなかっただろう。呼吸を整え、気を取り直す。

深く呼吸するとようやく調子が戻る。見えていた波長も異様に過敏になっていった聴力も落ち着きを取り戻した。

「ご、ごめんなさい! そんなに声大きかったかな?」

「いや、矢田さんの所為じゃないよ。まだ本調子じゃないからかな。少しぼーっとしてた。磯貝も心配かけて悪かったな。もう大丈夫だ。いろいろあった所為でちよつと敏感になってるみたい」

そう言ってもう一度深く呼吸して、心を落ち着ける。うん、大丈夫だ。波長の類は完全に消えた。

死ぬかもしれない恐怖、仲間が危ないという重圧、命を懸けた撃ち合い、悪意と狂気と憎悪を向けられた負担が今だに神経を過敏に尖らせているだけだろう。

「倉橋さんもごめんな、焦らすみたいなことしちゃって。肝試しだったよな、俺なんかで良ければ付き合うよ」

「っ!ほんと!?!」

「嘘なんか吐かないよ」

「そっかあ。えへへ、勇気を出して誘ってみて良かったよ」

「良かったね、陽菜ちゃん」

「だから言ったでしょ? 乃咲は断らないって」

「乃咲、良かったじゃんか。愛しの倉橋からのお誘いだけ? 喜べよ。虫取りの時になれなかった2人きりだけ?」

「……前原。回し蹴り喰らいたいか」

「怖いっ!? あんなの食らったら死ぬわ!」

残り少ないE組での日々。夏休みが明けたら縁もゆかりもなくなるかもしれないんだ。今のうちに思い出を作っておこう。

みんなの輪の中でいつも通りの自分を演じながら笑みを浮かべ、肝試しが始まるまでの間は何気ない話で盛り上がった。

?? ?? ??

仲間たちの輪の中でいつも通りに振る舞う銀髪の少年を遠目に眺め、その様子を観察する。仕草、視線の動き、笑い方、声のトーン、意識の波長。それら全てを観察して気付く。

何処かわざとらしい。有体に言えば演技くさい。何処かいつも通りの自分を意識して、演じているように見える。

「……いいのか、肝試しの準備は」

「ええ。勿論、準備は万端です。手抜かりはありませんよ」

烏間先生が眉間に皺を寄せて歩いてくる。その顔にはいつもとは違った気難しさが滲み出ている。

4ヶ月ぼちの付き合のだが、その顔付きから察するに何か問題でも起きたのだろう。険しい顔で件の少年たちへ視線を向ける彼に声を掛けようと思い、投げ掛ける言葉を選び始める。

「さっきの蹴り。まともな喰らったのは本当に足場が原因か？」

言葉を選んでいううちに先んじて話題を振られた。さっきの乃咲くんの蹴りについて。言葉では私が避けられなかった原因を究明しようとしている印象を受けるが、声音、視線から察するに別の要因があると確信しているように見えた。

「気付いていましたか」

「対先生物質を粉末にしたフィールドでも自由に動き回っていたお前だ。この程度の悪路に足を取られたとは考えられない」

「なるほど、ご明察の通りです」

やはり鋭い人物だ。たった一回、それもたった5秒間の作戦でしか使われていない手段だと言うのに瞬時に引き合いに出してくるとは。彼はやはり油断ならない相手だ。

誤魔化しは効かないだろうと判断し、素直に白状することを選ぶ。何故、あの蹴りをまともに喰らったのかを。

「あの時、回避運動が間に合いませんでした。単純にあの子の一撃が私の初速を遥かに凌駕していたのです」

「なに……?」

「貴方ほどの人物ならとつくに気付いているでしょう。私はマツハ20を誇示してはいますが、それはあくまで最高到達速度に過ぎず、初速からそんな速度が出せないことくらいは」

「……………」

「私の触手の初速はマツハ1にすら及びません。そうですねえ。具体的に言えば、すれ違う新幹線から隣の車両のターゲットを狙撃できる程度の動体視力があれば見切れない速度ではありません」

「それは本気で言っているのか? 新幹線は時速300キロほど。すれ違う新幹線の件で必要な動体視力は単純計算で時速600キロを見切れるだけの能力ということになる。もしもお前の言葉通りなら、乃咲くんの蹴りは最低でも時速600キロで繰り出されたということになる。しかも、それと同等のスピードで動くお前を一方的に蹴り伏せたことを思えば、実際の蹴りはその比じゃない速さで放たれたということになる」

「…………到底、人間に出せる技ではありません。仮にそれだけの速さを実現できたとしても、亜音速一步手前の速度に身体が耐えられるわけがありません。下手をしたら脚が千切れてしまう」

「お前もそう思うか」

私の分析に烏間先生が俯く。その顔はますます険しいものになっていた。その考え方から察するに、懸念しているのは一つだけと言うわけではないらしい。

「…………これは俺の独り言だが、彼の父親は現在某国某所で開催されている、とある会議に出席中だ」

彼にしては珍しい前置き。本来内密にしなければならぬが、彼一人では整理しきれないのか、あるいは私に語ることで何か状況を変えようとしているのか、烏間先生は言葉を続けた。

「現在は遺伝子工学の権威として名を馳せている乃咲新一博士。彼が学生時代に研究していたテーマがとある理由で各国首脳たちの注目を集めている。そのテーマとは——人体の強化について」

「…………?」

思いもよらない単語に耳を疑う。だが、これはあくまで彼の独り言であると言う体である以上、横槍を投げるわけにはいかない。この体になってから我慢の効かなくなった叫び声を無理矢理飲み込み、耳を傾けて続ける。

「某国際機関に所属していた元主任研究員が生物の体内で反物質を生成するという研究を行っていたらしい。どうにも、学生時代に博士が組み立てた理論がその研究員の理論と酷似しているというのが招集の理由だそうだ」

「それは……………」

我慢できず、思わず口を開く。烏間先生はそれでも独り言という体を貫くようで、相変わらず淡々と続けた。

「この二つの研究の目指す場所は違う。博士はとある難病の治療、研究員の方はエネルギー問題の解決。だが、2人の研究はあまりにも似通っていた。偶然の一言では片付けられないほどに」

「……………」

「だが、乃咲くんがその研究の実験成果である手術を受けた可能性はほぼない。入院したという記録は1回。以前に鷹岡とのトラブルがあったあの時のものだけだった」

彼の言葉に私は1人の男を想起する。

この触手を創り出した男。常人には理解できない超理論を展開し、世界のエネルギー問題を解決しようとした科学者を。

その思考が間違っていないと言うように、私の考えを知ってか知らずが、烏間先生は最後に言った。

「さつき、乃咲くんと話したが、彼は何も知らないようだった。本人もそう言っていたし、様子からして嘘ではない。しかし、気になることも言っていた。身体の内側から声が聞こえたそうだ。”何が欲しい?”と問い掛ける声が」

「まさか……………!?!」

内側から聞こえる声。それには身に覚えがあった。私の知る問い掛けとは少しだけ内容が違う。けれど、その特徴は――。

「…………我々は何も知らないのかもな。教え子のことや、超生物誕生に

至るまでの経緯やその背後で動いていたかも知れない陰謀について、何も。本当に表面的なことしか理解していない可能性がある。一番の当事者である、お前自身ですらもな」

思わず自分の触手を見た。うねうねとうねる触手。まさか、この力を宿していると言うのか？あの子が。

「それから、もう一つ。お前にとってはショッキングなこと。そして我々にとってはかなりの痛手になることがある」

「……それは？」

「本人から聞け。彼の性格を考えれば、お前にも話をしに来るだろう。精々、今のうちに触れ合いを楽しんでおけ」

烏間先生はこう言うと言いき出してしまった。

残された私は、銀髪の教え子を遠目に見ながら釈然としない気分に襲われる。危機が去り、今回の事件を乗り越えて一回り大きくなったように感じる生徒たち。

だが、胸騒ぎがする。笑顔を作り続ける彼を見て、漠然とした嫌な予感だけが胸に去来した。

61話 胆力試しの時間 その1

「肝試しかあ、私初めてだよ」

「同じくだな。なんならお化け屋敷にすら行った事はない」

自分たちの番が回って来るまでの間、ペアを組んだ倉橋さんと駄弁る。会場となる海底洞窟は結構暗く、外からでは中の様子が見えない。言うて300メートルちよいしかないのでそんなにビビることもないと思うが。

それにしても肝試しとかは本当に初めてなので少し楽しみではある。殺せんせーはどんな風に脅かしに来るのか。

「圭ちゃんは怖いの大丈夫？」

「どうだろ。ガチ心霊は経験ないから分からないけど、スプラッタとかホラー映画とかは大丈夫。生きてる人間の方が怖いしね、浅野とか理事長とか、知謀を巡らせて来る奴らな」

「理事長たちは圭ちゃんの中だと怪異扱いなんだね。私は苦手かなあ……。ホラー映画電気消してみるとか絶対無理」

「そうかなあ……。ああ言う映画って笑えないか？」

「ごめん、ちよつと何言ってるか分からない」

「なんか、演出とかの意図を理解するとき、そろそろ来るなくってのが分かるし、実際に来たら予想通りすぎて笑えるし、主要キャラの死亡フラグとか分かりやすくて」

「ホラー映画の楽しみ方間違ってると思うよ……」

適当な会話で場を繋いでいると、時折、本気でビビってるのか、それとも演出で誰かの悲鳴を録音したのを流しているだけなのか、絶叫が聞こえて来る。

うーん。楽しそう。とはいえ、そう思っているのは俺だけらしく、倉橋さんと言えば声やら物音が聞こえる度に小動物染みた動きでビクツ、ビクツ！と肩を震わせていた。

見ていて可愛いやら、面白いやら。時間が来るまで倉橋さんのビビり具合を眺めて愉悦に浸る。

さり気なくシャツを掴んで来ているのは萌えポイント高いな。お年頃の男子としては勘違いしたくなる。

「つと、そろそろ時間だな」

「ほ、本当に行くの……?」

「いかないと肝試しにならないし。ほら、行くよ。琉球のタコ型生物が俺たちを待ってる」

「圭ちゃんがいつになくノリ気だよ!」

「大丈夫だよ。いざとなったら、『ここは任せた、先に行く!』をやるから。ゆつくり楽しんでくれ」

「せめて『ここは任せて先に行け!』にしてくんないかな!? それ私置いてかれてるよね!?! 流石に泣くよ!?!」

「じよーだんだよ、ほら。早く行こう。次の組の奴ら待たせちやうから。倉橋さんを置いて行ったり、突然大声出して驚かせたり、徐に無言になって不安にさせたりしないから。安心して」

「さっきまでの会話のせいで今の全部『やるからな?』って前振りにか聞こえなかつたよ……」

俺が歩き出すと躊躇いがちに倉橋さんが着いて来る。

ようやく足並みが揃った辺りで洞窟に足を踏み入れた。殺せんせーから予め渡されていた懐中電灯を壁とかに向けてみると、意外と虫とかの類いは張り付いたりしていいない。

「中は思ったより綺麗だな」

「なんだか寒い……。ねえ、もう帰ろうよ……」

「なんだよ倉橋さんビビってるの?」

確かに思った以上に洞窟の中は肌寒い。薄暗く、足元しかない灯りというシチュエーションは結構雰囲気がある。

思った以上に楽しめそうだな、と思っていると遠くからペンペンと琵琶の音がゆつくりと近づいて来た。

「……!!」

聞こえて来る音に面白いくらいビクツ!と反応する倉橋さんが力無く垂れ下がっていた俺の右手を掴む。

「ね、ねえ。もう帰ろうよ……」

「馬鹿馬鹿しい……。お化けなどいる訳がないでしょう。科学的に考えて」

「あ、あつ！圭ちゃん、気を付けてね！」

「……実は結構余裕あるだろ、倉橋さん。つか怖いのが苦手とか言いつつ青鬼の台詞暗記してアレンジしてんじやん」

「違うよ！怖いからこそ少しでも気を紛らわせたくてやってるだけだもん。そもそも圭ちゃんから始めたんじやん」

「いや、俺は感想を言っただけのつもりだったんだが」

そうこうしている間にも琵琶の音はゆつくりと確実に近付いて来ている。ペン、ペン、ペンと。

音が大きくなり、それが近づいて来ている予感が刺激されればそれだけ倉橋さんの冷静さが失われてゆく。

殺せんせー、演出上手いな。まずは音だけで存在をアピールし、ゆつくり近付くことで恐怖心を煽る。

となると、次に考えられる展開は2つ。このままゆつくりと蝕むような恐怖を与え続けるか、あるいは持ち前の超スピードを使って、ここまで高まった恐怖を爆発させるか。

今後の展開を予想していると、ボワツと独特な音を立てて青い人魂と共に琵琶法師のコスプレをした殺せんせーが現れた。

「で、出たっ!？」

「うおっ!？」

今日一番の驚きと共に俺のシャツを掴むだけに止まっていた彼女が姿勢を変え、俺の右腕に身体を押し付けるようにしてホールドしてくる。正直、殺せんせーの演出より、こつちの方が色んな意味でドキドキする。

当たっている。小振りだけど柔らかい、存在感のある物体が。恐怖でむぎゅーつとホールドする力を強める度に腕が沈む。

その生々しい感触に思わず驚きの声が出た。

「ここは血塗られた悲劇の洞窟。琉球……。かつての沖縄で戦いに敗れた王族たちが非業の死を遂げた場所です」

「ほ、本当かな……?？」

「さ、さあ……う？演出だと思っけど」

近い、倉橋さんが近い！殺せんせーには悪いが肝試しどころじゃない。肝というか、俺だけ胆力を試されてる。押し付けられる異性のやわらかい身体に反応を見せず、如何に紳士的に振る舞うか、みたいな別の競技が始まってる。

「決して2人離れぬよう。1人になれば彷徨える魂にとり殺されてしまいます。そうやってくっついて出口まで歩きなさい……。道中、何があっても決して離れては行けませんよ……」

言いたいことを言うと、殺せんせーはヌルつと姿を消した。とうにお化け役の殺せんせーはいないと言うのに、今だに聞こえる琵琶の音が良い味を出している。

怖がる要素はないが、1人で来たのならそれなりに楽しめたかも。俺的に女子と密着してるこの状況の方がよっぽど怖い。

「圭ちゃん、本当に怖いの大丈夫？なんか、殺せんせーが出て来た時にフツーに驚いてなかった？」

「……殺せんせーじゃなくて、倉橋さんの声に驚いたんだよ。急に隣で大声出すんだもの」

キミが突然くっついて来たからだ、と言いたくなるのを我慢して無理矢理飲み込む。

……が、いつまでもこのままと言うのも心臓に悪いので歩き出す前に少し考え、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「倉橋さん。少し、歩き辛いかなくて」

「……あつ……!？」

遠回しに現在の状況を指摘すると、視線は自分が抱き付いている腕を向き、次に俺の顔に向き、あわあわと口を忙しなく動かした後、一度、離れようと思いついたのか、腕から力が抜ける。

その様子に胆力試しではなく、肝試しに戻れそうだと胸を撫で下ろすと、隣の少女は何を思ったのか、一度緩めた筈の手に再度力を入れ、ホールドし直して来た。

「……あの……倉橋さん？」

「……考えてみれば腕に抱き付くなんて今更だよね。朝なんてもつと

「凄いことしてた訳だし」

「それはそうなんだけど歩き辛い……」

「……………圭ちゃん嫌だったかな……………? こういうの」

捲し立てるように言葉を並べる様子を見ていと多少心配になる。そんな怖いんだろうか、この肝試し。

捨てられた子犬みたいな目を向けて来る彼女に絆され、少しだけ考えてもう少しだけ胆力試しを継続することを選ぶ。

本校舎に戻れば倉橋さんとか言う風に触れ合うこともなくなるだろうし。彼女も自分からホールドして来るくらいだ。腕を組むことを嫌がってる素振りはない。折角だ。こうなったら開き直ってこの役得とも言える状況を楽しもう。

「歩き辛いのは事実だけどね。でもキミがそうしたいなら別にこのままでいいよ。俺も倉橋さんなら嫌じゃない」

「……………っ、そ、そっか。えへへ……………」

俺なりに結論を出し、このまま歩くことを選ぶ。

事実、磯貝たちのせいで気不味い気持ちはあるが、彼女と歩くこと自体は嫌じゃないし、腕を組むことで生じる動き辛さも他の誰かならいざ知らず、倉橋さん相手なら我慢できる。

腕を組み直し、安心したのか落ち着いたのか、彼女がようやく足を前に出したのでそれに倣って同じペースで歩みを進める。

それにしてもやはり、歩き辛い。修学旅行の時とはまるで違う。あの時は俺が少し早く歩いても彼女と逸れるだけだったが、今は少しでもペースがズレればどちらかが体勢を崩してしまう可能性がある。女子と歩くのはやはり精密作業だ。

そんな苦労を顔に出さないように足を進めること数分。俺たちの目の前に手作り感溢れる木製の扉が現れた。

なんだろう、これ。普通に通つていいのかな?なんて場違いな物を眺めていると、殺せんせーがゆらりと姿を見せる。

「落ちのびた者の中には夫婦もいました。ですが、追手が迫り……………若い2人は椅子の上で寄り添い合い、自殺しました」

殺せんせーのおどろおどろしい語りで緩んでいた空気が張ったよ

うに思う。空気が心なしに冷たくなったかな。

……と思ったら、暗闇の後ろで激しく動き回る黄色い物体。この人、自分がマツハの化け物だと言うのを良いことに超スピードで風を冷まし、冷たい空気感まで演出してやがる。

「その椅子がこれです」

触手が俺たちから見て左側のスペースを指差す。

これだけ凝った演出してるんだ。さぞ不気味なオーラを放つ椅子が鎮座しているのだろうという期待を抱き、触手の先に目を向けると、そこにあつたのは……。

無駄にピンクで彩られ、ハートの意匠が煩いくらいに自己主張しまくっているなんとも頭の悪そうなベンチだった。

「琉球伝統のカップルベンチです。ここで2人で1分座ると呪いが解けてあの扉が開きます」

「……………なんか白けたな」

「……………だね」

「にゅやあつ!? そんなこと言わずに! しつかり座らないと呪いが解けず、いつまで経っても先に進めませんよっ!!」

やたらと必死にカップルベンチを推しまくる殺せんせー。

なんとなく、肝試しが始まる前に見ていた意識の波長を思い出す。彼の波長が何かを企んでいるような揺れ方をしていたのは、こう言う理由か。おおかた、肝試しの吊り橋効果でカップル誕生! みたいなのを狙ってたんだらう、浅ましい。

「座ろうよ、圭ちゃん。後ろのペアに追いつかれちゃう」

「……………そうするしかないか」

このバカみたいいなベンチに座るのは流石に恥ずかしいが、座らないと扉が開かない以上は進まないわけだし。

渋々腰を下ろす。殺せんせーえ…………。カップル誕生を狙うならこのベンチは悪手じゃないかなあ。付き合ってもない男女がこれに座るって相当ハードル高いぞ。

「さあ、呪いを解くために会話を弾ませるのです!」

その上、外野がやかましい。

まだ、このベンチに座らせて、あとは若いお二人でがゆるりとしてムーブならまだ可能性はあっただろうに、このタコと来たらゴシツプ書く気満々でメモ帳片手にスタンバツてるもんだから弾むもクソもない。

「圭ちゃんの手……。思ったよりゴツゴツしてるね」

「急にどうした？」

ちよつと気不味くて沈黙していると徐に口を開く彼女。もう、殺せんせーがいるのは仕方ないと割り切ったのか、開き直ったのか、彼なんて見えてないみたい会話が始める。

ベンチの上に置いた俺の手をペタペタと無遠慮に撫で回したり、ツンツンと指先で突きながら。

「何となく気になったんだ。細マッチョって言うのかな？服の上から見た印象と実際に触った印象が違って驚いたって言うか。プールの時間で圭ちゃんの体を見るたびに思ってたんだけど。肉体改造的なこと好きだったり？」

「訓練受けてれば自然とこうなるだろ」

「どうなんだろう？確かにそれもあると思うけど、一番は圭ちゃんが一生懸命やったからじゃないかな？」

「……まあ、人並みにな」

「そんなことないよ。一番最初に烏間先生の放課後訓練を受けたのも、先生に初めてクリティカルヒットさせたのも圭ちゃんだもん。実は結構見てたんだよ？キミが頑張ってるの」

「勘弁してくれ、流石に照れ臭い。それに俺が頑張ってるならみんなも同じだろ。成績ドン尻だったのが、A組と上位争いするようになった。烏間先生に掠りもなかったナイフが当たるようになった。倉橋さんだって女子の中ではナイフ術3位だろ？」

「確かにそうだけどね。まだまだだよ、メグちゃんとかと組まないと掠りもしないし」

「……………流石に相手が悪いか。烏間先生だもんな」

片岡と岡野と倉橋さんが女子のトップ3。その3人がローテーションでペアを組んでようやく攻撃を掠らせる程度。

男子の方もトップの磯貝と前原がコンビネーションでようやく当てられるくらいだもんな。おかしいわ、鳥間先生。

「だから改めて圭ちゃんって凄いなあ〜って思ったの。勉強では最下位だったのに1位になって、初めは先生殴った不良って嫌厭されて、クラスの中で孤立気味だったのに暗殺を通じて、いつの間にかみんなの中心に居てさ」

「勉強に関しては頑張ったからだって実感あるけど、後半は俺も知らねえ……。ほんとどうしてこうなった？風向きが怪しくなったのは一番最初の合同暗殺の時だよなあ」

「あはは、そうかもね。キミが作戦を練って、委員長2人と渚ちゃんたちがそれに協力しようかって話になって、大人数で作戦に沿って暗殺するのも楽しそうだよねってクラスのみんなが参加することになって、寺坂組とか先生たちも巻き込んでさ。思えば、あれが本当の意味でみんなが一つになった暗殺だったよね」

思い返してみるとそうかもな。一番最初は個人主義な暗殺が多かった。各自で攻撃を仕掛けたり、組んだとしても仲の良いやつだけみたいな空気だった。

それぞれの方向性は点でバラバラだったと言うのに、いつの間にかみんなで協力するのが自然みたいな流れになっていた。

「初めての合同暗殺、律の歓迎暗殺会、そして前原ちゃんの仕返し作戦。思えば全部キミが指揮取ってたよね。たぶん、それが理由じゃないかな？みんなもみんな、いつの間にかそれを受けて入れる節があるし。今回の暗殺も自然と指示出してたもんね」

「ちよつとしゃしゃり出すぎたかなあ」

「ふふ、そんなことないと思うけどな〜」

「んまあ、でもさ。俺がこうしていられるのは磯貝とか倉橋さんのお陰だと俺は思うんだよ」

「へ？なんで？」

「磯貝は孤立気味だった俺にしつこく話しかけてくれた。だから、アイツに釣られて前原とかとも話すようになった。磯貝が話しかけてくれなきゃ俺は孤独だったろうな。誰とも話さず、話せず、1人で

腐って行ったと思う」

「……まあ、E組始まったばかりの頃は圭ちゃんだいぶ話しかけ難い空気だったもんね。そう思うと躊躇なく話しかけに行っただのってすごいかも」

「だろ？でも、俺にとつては多分、倉橋さんも同じくらいの大事だと思ってるんだ。磯貝が俺を孤独にしない環境を作った奴なら、キミは原動力……みたいなものだったのかも」

「大事……。えっ、私が……？」

「少し大袈裟かも知れないけどさ。ほら、覚えてる？俺が鷹岡に殴られて入院した事あったよな」

「ああ……。あったね」

「実は殴られたあの日、俺も鷹岡を殴り返したんだ」

「そうだったの？」

「うん。鳥間先生の放課後訓練を受けようとしたらアイツがやるってふざけた事言っ来てさ、そこから口論になって、殴られて。俺が勝ったら鳥間先生との訓練を続けさせて貰うって約束で勝負することになって、その時にね」

思えばあの時、俺は鷹岡の恨みを買っていたのかも知れない。ホテルで俺に向けた狂気の笑みは渚に向けていたそれと同質のものだったように思う。

「結果、俺は勝った。でも、変な言い方になるけどさ。俺1人じゃ勝てなかった。嫌厭されて孤独だった俺じゃ勝てなかったと思う。なんかさ、『ほんとにやべえ』って状況になるといつも倉橋さんの顔が脳裏を過るんだ」

「私が……？」

「うん。ほんと、どうしてなのかは分からないけど。鷹岡を殴った時、イトナが暴走した時、そして今回も。『このまま状況が悪化したら倉橋さんが酷い目に遭う』って自然と考えてた」

「だから私が原動力なの？」

「そうなのかもなって、話しながら思った。んで、どうして何だろうって考えて、多分、大事なんだって結論になったわけ」

「——そっか、なんか嬉しいな。そんな風に思ってたんだね。……私も、圭ちゃんが好きだし、大事だよ」

「俺も好きだし、大事だ。って、ここだけ切り取ると告白みたいだな。この話、ここまでにしないか？変な空気になりそう」

「……………私はなっても良いよ、変な空気」

「えっ……………？」

倉橋さんの言葉の意図が分からず、思わず思考が止まる。変な空気になっても良いってどう言う意味なんだろう？

意図を図る為についてゾーンに入って考え込んでしまう。しかし、どれだけ思考を重ねても答えが出ない。

そんなこんなしていると扉がやたらと重々しい音を立てて開いた。どうやら時間になったらしい。

殺せんせーはと言うといつの間にか姿を消していた。あのタコ、速いだけじゃなく、隠密性能も高いから厄介だよな。速いし気配も消せるからこっちの情報を集めたい放題なもの。

「思った以上に速いもんだね。1分って。ほら、早く行こー！」

つい考え込んでしまった俺より先に立ち上がった彼女がいつもの天真爛漫な笑顔で手を差し出して来る。『変な空気』になりかけた空間を取り払うように澆刺とした声と笑顔で。

そんな顔を見たら『1人で立てる』なんて無粋な言葉を吐き出す気にはなれず、その手を握って立ち上がる。

「次は何かなあ〜」

俺が立ち上がると倉橋さんは手を握り返してそのまま歩き出してしまふ。あまりに自然に、それが当たり前であるかのように。

何と言うか、この娘は結構な頻度で無自覚天然小悪魔ムーブするよな。ピユアな男だったら絶対に勘違いすると思う。

倉橋さんに振り回されながら洞窟を回った。

62話 胆力試しの時間 その2

ツイスターゲームやら、天井から吊るされた見え見えのコンニャクゾーンを越えると今度は頭に角を生やした丸顔のシルエットが包丁を研いでいた。シュツ、シュツ、シュツと無駄に響く研音。音だけ聞くなり不気味だが、殺せんせーのシルエットが見えている所為で色々台無しである。

「血が見たい……」

「ツ……」

「つと……」

殺せんせーの低い声に肩を振るわせた倉橋さんが握っていた手を腕ごと抱き寄せる。彼女はどうかやら、シチュエーションに対してビビるタイプらしいことが分かった。

慣れたとは言い難いが、何となく予測は出来ていたし、何だかんだ手を握られっぱなしだったので最初ほど驚きはしなかった。

「同胞を殺されたこの恨み……。血を見ねばおさまらぬ……。血い……。もしくはイチヤイチャするカップルが見たい……。具体的には濃厚な圭ヒナが見たい……。どっちか見ればワシ満足」

「やつすい恨みだなあ……。そも、うちの教室にカップルはいないだろ。つか、なんだよ、圭ヒナって。殺せんせーまで前原達みたいなのと言わないでくんさい」

ツツコミ虚しく、俺の言葉を聞き届けたのか、聞いていないのか、殺せんせーは喋り終わるとシルエットごと姿を消した。

「び、びっくりしたあ……。この薄暗い中で包丁を研ぐ音が聞こえるって結構怖いね」

「殺せんせーのシルエットさえ無ければな」

倉橋さんはほんと、感情豊かと言うか、何と言うか。

小さいことでも割と素直に驚いてくれるし、少しオーバー気味なことはあるが、一つ一つに反応してくれる。表情もコロコロ変わるし、見ていて飽きない娘だよな。

前原たちの会話に感化された訳じゃないけど、もし、倉橋さんと付き合ったら退屈しなさそう。

まあ、そんな未来はないだろうけどさ。そもそも女子と付き合っている未来と云うのが一切想像できないし。

「にしても、殺せんせー。魂胆見え見えだよな」

「だね、最初は音と血が見たいって発言に驚いてたけど、イチヤイチャするカップルがくって所でなんだかね」

さしもの倉橋さんも冷静になったようだ。

「て言うか、考えてみればうちの教室ってそう言うスキヤンダラスな話しあんまり聞かないよな。吊り橋効果じゃないけどさ、こんな特殊な環境だとそういう感情芽生えやすいらしいし、実は水面下ではカップルできてたり?」

「うーん。カップルが出来たって話は全然、これっぽっちも聞かないけど、恋バナ系なら女子は結構あるよ? 修学旅行では気になる男子いる? って話もしたし」

「……それは男子もやったな。『気になる女子ランキング』」

「あはは、なんて言うか考えることは同じなんだね?」

「だな。ランキングが完成した所で殺せんせーが覗き見てるのに気付いて暗殺に切り替わったけど」

「あく。アレってそう言う流れだったんだ?」

「そ。最後に俺が投票した段階で殺せんせーに気付いてさ。あん時は焦ったよな。あのゴシップダコに聞かれてたんだもの」

なんだかんだ、あれから3ヶ月か。早いもんだ。

時間の流れの無情さに打ちのめされてみる。

「……………」

「……………倉橋さん、どうかした?」

遠くを見ていると倉橋さんが沈黙していた。

何事かと心配すると同時にまた無意識に意識の波長が視界に現れる。彼女の波長は乱れていると言う程ではないが、激しいものになっていた。小刻みに大きく波打ち、波長に引っ張られて聞こえて来る心音はトクトクと早い。

息遣いは言うほど乱れていないが、もしかして具合でも悪い？

そんな仮説を思考の片隅に置き、彼女に声をかけようとした時、先んじて倉橋さんの口が動いた。

「圭ちゃんは誰に入れたの？」

投げられたのは予想外の質問。正直、そんなことに踏み込んでくるとは思っていなかったので面食らった。

いや、そういうえば修学旅行の夜、殺せんせーを追っかけて女子と遭遇した時も似たような会話をしたっけ。あの時は気になる女子ランキングについてすら教えなかったけど、今は何気なく溢してしまっている。

——俺、想像以上に気を許してたんだなあ。

改めて思う。E組が始まった頃の俺に今の俺を見せたらどんな反応するだろう？ クラスメイトの為とか言って無茶を通すことになるだなんて信じないだろうな、絶対に。

修学旅行の晩を思い出す。気になる女子について聞かれた時、俺は何となくその日一緒にいて楽しかったと言うか、基本女子と至近距離で接することがなくドギマギする機会が少ないからと言う理由で数少ない女子の友人である倉橋さんの名前を挙げた。

あの時は何となく選んだだけ。それでもそう言う候補に彼女の名前を挙げたことが照れ臭くて気になる女子ランキングの存在すらはぐらかした。

その気持ちは今も変わらないが、あの時と明確に違うのは倉橋さんへの印象を磯貝たちに語る時に明確に好きだと言えるようになったことだろう。

恋愛的な意味では無いけど、そう言えるようになった。

そう思ったら、ついにはぐらかしてしまっただけど、何故だか妙に吃ることもなく、彼女にヒントを出していた。

「Kさんかな」

「……………鳥間先生っ!？」

「女子の話だったよなッ!？」

返ってきたトンチンカンな答えに思わずツツコミ。天然と言うか、

少しアホの子気質というか、割とツツコミどころが多い。

本人に対してイニシャルを伝えると言う遠回しな告白みたいな事をした俺の勇気と羞恥心を返して欲しいものである。

「うちの女子Kさんが多いよ……。有希子ちゃんとか、カエデちゃんとか、メグちゃんとか……」

「さあ、誰だろうねえ」

「メグちゃん」

「……イケメンは対象外で」

「カエデちゃん」

「……嫌いではないけど、0だからなあ」

「有希子ちゃん」

「……まあ、圧倒的人気ではあつたな」

これ、正解引くまで続く奴？と言うか、残るKさんはもう目の前の本人しかいないわけだけど。

本人の名前が出てきたらどうしよう。なんて反応すればいいんだろう？今までに感じたことのない種類の動悸に襲われる。

「もしかして——綺羅々ちゃん」

「……そう言えば狭間さんもイニシャルKか。ごめん、流石にそこはノーマークだった」

そう言えば狭間さんの下の名前は綺羅々だったな。完璧に意識の外にいた所為で完全にノーマーク。なんなら忘れていた。

「この中にいないの……？」

「どう思う？」

「質問に質問で返さないでよ……。本当にこの中にいないなら、あとイニシャルがKの女子って——私しかいないよ……？」

本人からの明確な問いかけ。本人を前にして肯定するのは恥ずかしく、かと言って動揺するのは情けないし、ダサい。

でも、なんか、倉橋さんから伝わって来る明らかな緊張の波長と聞こえる心音、薄暗がりの中でも見える赤みの差した頬を見ていると、もうそう言うことでもいいような気がして来る。

おずおずと問いかけて来る彼女。俯き、顔は赤く染まり、さまざま

な様子から緊張が伝わって来る。

こう言う反応見せられると勘違いしそうになるよな。でも、流石にここで何も答えないのは不自然か。

少し考えて結論を出す。

「ナイシヨ」

「ええっ……!?ここに来てそれはないよ!」

「まあ、そうかつかしなさんな。ヒントあげるから。最後に質問して正解したら素直に答えてあげる」

「うううう……ほんと?」

「ほんとほんと。ケイイチ、ウソ、ツカナイ」

「既に嘘っぽい」

「ヒント1、割といつも元気」

倉橋さんの失礼な反応は一旦置いておく。

何となく、意地悪したくなった。

「ヒント2、天然気味かな」

「天然……メグちゃんとか有希子ちゃんではなさそう」

「ヒント3、烏間先生が好き」

「えっ……」

「ヒント4、よく笑う。何の含みもない純真で屈託のない笑顔で楽しそうに『あはは』って。俺はあの笑い方が好きだ」

「ツツ……!」

「ヒント5、誰にでも平等。壁がないって言うか、感じさせないって言うかき。いい意味で態度を変えないの見ててすげーなって思う。それは俺にはできないから。そう言う意味では尊敬してるって言っているのかもしれない」

「ツツツツ」

「ヒント6、感情表現が豊か。コロコロ変わる表情とか見てて飽きない。感情に素直っていうのかな、俺は見てて可愛いと思う」

「~~~~ツツツつ!」

「ヒント7、努力家。好きなこととか目標に対して直向きだよな。ターゲットがずっと夢中になる罫を作れる知識とそれを活かす為の

研究と情熱とか、烏間先生に褒められる為に頑張ってナイフ術上位3位に入ったりさ」

「や、やめっ……………」

「ヒント8、生き物が好き。虫とかだけじゃなく、色んな生物に対する知識があつてさ。前に一緒に猫撫でたけど、猫を撫でてる私可愛いくじゃなくて、しつかり動物を可愛がれるところとか好感持てるよ。動物に好かれやすいのは生来の気質っていうか、動物にはそういう優しさみたいなの分かるんだろうな」

「け、圭ちゃん…………ツツツ」

「ヒント9、感性が豊か。人の幸福というか喜びを自分の事みたいに喜んでくれるっていうかさ。俺が総合一位取った時に磯貝と並んで一番最初に喜んでくれたんだよ。口には出さなかったけど実は嬉しかったんだ。俺が良い成績とつても本心から喜んで、笑ってくれる人って今までいたことがなかったからさ」

「も、もうっほんとに…………だめえ……………」

「ヒント10、俺のことをあだ名で呼ぶ。初めは戸惑ったんだけどな、急にあだ名で呼ばれるようになって。でも、なんっーか意外とすんなり受け入れられたって言うか。今まで俺につけられてたのって秀才とかの小っ恥ずかしいヤツだったり、死神とかの物騒なものばかりだったから。これも嬉しかったんだろうな。元気に、楽しそうに、嬉しそうに呼んでくれる声が好きだ」

「…………ツ」

意地悪心を出してこれでもかと言うくらい持ち上げまくった。ただし、全部お世辞ではなく、本心だ。

最近、褒められることが増えたけど、誰かを褒めたことはほとんどなかったから、良い機会なので褒めてみた。

倉橋さんに関して意外とすらすらと褒め言葉が出てきたことに自分でも驚く。俺は本当に自分が思っている以上に倉橋さんのことを友人として好いているのかもしれないな。

「あと13コくらいヒントあるけどいる?」

「も、もう大丈夫っ、わ、私の負けっ……………」

口をあわあわと動かし、茹でられたタコのように真っ赤になった顔を見て勝利を確信する。

「さて、じゃあ質問。俺が投票したのは誰でしょうか？」

「し、知らないっ。圭ちゃんのバカ」

最後の質問に倉橋さんは手を離し、少し離れた場所までずんずん歩き、そのままそっぽ向いてしまう。

だが、懐中電灯で照らした彼女の後ろ姿、髪の間から見える耳は先まで真っ赤に染まり切り、見える波長と聞こえる心音は今にも爆発しそうな程に激しいものになっていた。

ああ、照れてるのか。

その理由に思い当たり、何だか感慨深くなる。倉橋さんがこんな風に照れてくれるようになるだなんて思ってもなかった。

「にゅ、にゅる、ニユルフフフフ……!!」

照れてる女子への対処法は存じ上げない為、どうしたものかと考えていると殺せんせーが何とも奇妙な笑い声を出しながら現れ、俺たちの行手を阻んでいた扉を開けて、もう一度だけ奇妙な奇声にも似た声を漏らすと去って行った。

「……んだあ、あれ？」

流石に奇声の意図が理解できず、思わず眩き、まあ、考えても仕方がないことがあると自分を納得させて、歩き出す。

「……………」

「ん？どうした、倉橋さん」

足を出そうとするその寸前、こつちに顔を見せないように俯いた倉橋さんに半袖の裾をクイクイと引かれる。

あんまり見ない新鮮な様子に首を傾げると、蚊の鳴くような消え入りそうな声で、何とも今更なことを口走る。

「……手、繋ぎたい……」

「そんなに……怖いかなあ……?」

さつきまで特に躊躇いもなく手を握ってましたやん、というツツコミを遥か彼方へと投げ捨てる。

倉橋さん、本当に結構な怖がり屋さんみたいだ。殺せんせーの所為

で楽しめる恐怖要素が綺麗さっぱり無くなったような気がしていたので、この状況でも楽しめる彼女が羨ましいな。

「まあ、別に良いか。ほら、早く抜けるぞ」

「うんっ……！」

今度はこつちから手を差し出し、彼女が握り返す。

さっさとこの洞窟を抜けてしまおう。そうした方が俺と倉橋さんの精神衛生に優しい気がする。

手を握り、進む俺たちの間にさっきまでの様な会話は無い。ただ、だからと言って気まづくなるような沈黙と言うわけでもない。不思議なことに、その沈黙が居心地良いと感じてしまう。

以前の俺なら話題に困って天気の話をするか、気まづくて逃げ出していたことだろう。俺も成長したもんだ。

「立てこもり、飢えた我々は……ついには一本の骨を奪い合って喰らうまでに落魄れた……。お前たちにも同じ事をして貰うぞ」

「その立て籠もった状況で奪い合った骨の出所考えるとそっちの方が怖いよな。家畜とか連れ込める訳もないだろうし、どつから出て来たんだろうな、その骨ってやつは」

「怖いこと言わないでよお……！」

殺せんせーの設定に何気なくぼやく。隣の少女と言えば案の定空気に当てられて怯えモードに入っていた。

プルプルと小動物のように震えて怖がる姿も流石に見慣れたもので、何気なく頭を撫でて落ち着かせてやる程度の余裕もい加減に生まれたし、この肝試しで色々鍛えられた気がする。

しみじみ自分の成長に感心していると目の前に天井から何かが吊り下げられた。全体の8割が黒に近い茶色、残りの2割がクッキー色のその物体の名前はポッキー。市販のお菓子である。

「さあ……。両端から喰っていけ」

また妙な指示が来たと思ひ、ポッキーを見ていると吊り下げられた紐にはポッキーゲームをしている男女の写真。

魂胆を隠さなくなったと思つたら、まさかこんな強行策を用意しているとはな。流石に予想外。

「……やろつか」

「倉橋さんも妙にノリ気だよな!？」

倉橋さん。雰囲気当てられて怯えてる癖に殺せんせーの用意しているアトラクションには妙にノリ気だ。

もしかして新手的現実逃避か？怖い現実から目を逸らす為にあえてこんなトンチンカンな遊びするつもりか？

やべえ、倉橋さん追い詰められ過ぎだろ……!」

「落ち着け、ポツキーゲームの最後を知らない訳じゃないだろ。ぶちゅつといくんだぞ？やめておけ、唇の安売りは良くない。倉橋さんは女の子な訳だし、気軽にやるべきじゃない。そう言うのは本当に好きになった奴の為にとっておけ。なにより、こんなパリピの遊び、俺は好かん！」

「最後の方が本音だよな？」

「いや、前半も本音だけだな？なんつーか、こんな俗世に塗れた遊びが嫌いというか、縁がないというか。バレンタイン、ホワイトデー、ハロウィン、クリスマスとかき、嫌いつて訳じゃないんだけど毎年毎年、蚊帳の外って言うか」

「そんな寂しいこと言わないでよ、今年はチョコあげるから」

「勘弁してくれ。あんなパリピの祭りに参加してたまるか。バレンタイン？はっ、虫歯になるだろ。ホワイトデー？はっ、金の無駄だろ。ハロウィン？はっ、かぼちゃは被られる為に育った訳じゃねえだろ。クリスマス？はっ、寒いだけだろ。あゝ、ほんと、リア充ども全員滅びねえかなあ……!」

「ひ、非リアの僻み怖あ……。大丈夫だよ、そこまで気にしなくても。圭ちゃんならリア充なれるって。ここはそのパリピになりきってリア充の心理を学ぶ為にやってみようよ、何事も形から。まず真似してみるのが手っ取り早いよ!」

いつになくグイグイくる倉橋さんに押され気味。

と言うか、なんでこんなにやる気なの、この子。付き合ってもない男子とポツキーゲームとか普通嫌じゃない？

……まさか、倉橋さんって俺が知らないだけでかなりイケイケなパ

リピだったりするのかしら。

なんか、それはシヨックだなあ……。いや、楽しい場所で素直に笑いなから楽しんでる彼女はさぞかし可愛らしいのだろうが、そっち方面には進んで欲しくないと思ってしまう友心。

パリピは浅野1人で充分である。あの野郎、夏祭りの度にめっちゃちや絡んでくるからな。マジでパリピだ。

「ほらほら、早くしないと後ろがつつかえちやうよ」

「後ろの組を便利に使うようになったなあ……」

薄ら顔が赤いあたり、羞恥心がない訳ではないのだろうが、それでも本当に何故か、妙にノリ気。

恥ずかしいならやらなきゃいいのと言いたくなる気持ちを抑えながら渋々、ポツキを挟んで彼女の対面に立つ。

「……ほんとにやるの?」

「圭ちゃんはやりたくない?」

「嫌って言うほどじゃないけど抵抗あるだろ。最後にはキスになるんだぞ? 女子的にそれはどうなのさ」

「でもさ、キスなんて今更じゃない? 私たちほぼ毎日、ビッチ先生にディーブなのかまされてるんだよ? なんなら圭ちゃんにディーブなのした直後のビッチ先生にされた事もあるし、私は圭ちゃんと間接ディーブキスしたことあるもん」

「すげーパワーワード出たぞ。間接ディーブキスってなに!? つか、だったら尚更嫌がれよ!? ディープまで行かなくてもキスだぞキス! マウストゥーマウス! 嫌だろ!」

「——嫌じゃないよ……?」

「だから何で!」

分らない。倉橋さんの思考回路が見えない。もしかしてあの年増に汚染されて『キス』ごとき何でもありませんわ、おーっほっほっほ!』みたいなイカれた思考回路になっちゃったとか?

その後も何だかんだごねて、言い訳並べて、抵抗しまくったが、痺れを切らしたららしい殺せんせーからの『早くしないと次のペアに見られますよ?』という脅しでようやく覚悟を決める。

次のペアに色々で見られるのは嫌だし、それがクラス内に広がるのも勘弁してほしい。『アイツ出て行く前にやることやって行きやがった』みたいな印象を抱かれるのはマジ勘弁。

「覚悟はできた？」

「何で倉橋さんはそんな強キャラ感出せるの？」

「ビッチ先生の弟子ですので」

「キスとかセックスとかの性的なことに関する話題で出てくると妙な説得力が出る名前だよな、ビッチ先生。女子中学生にないを仕込んでるんだ、あの人。そろそろ捕まらないか？」

「ナニでしょ？それにいざとなったら寸止め……っていうか、ポツキー折ればいいし。そんなに気負うことないんじゃない？」

「仕方ない……………やるか」

たつぷり間を使って覚悟を再び決める。倉橋さんとするのが嫌な訳ではないのだが、この状況を殺せんせーに見られているのが最大の屈辱だ。それに、彼女がノリ気な意味も全く分からない。

ここまで来るとマジで俺に気があるのでは？なんて勘違い全開の思考を見せてしまいそうになる。

だが、ここでそれを理性で抑えられるのが乃咲くんである。長年培って来た勘違い回避能力。俺を褒めているように見せかけて親父を褒めてるといふ状況で希望を抱かない為に身につけて来た能力が今、遺憾無く発揮されていた。

覚悟を決めつつも、恐る恐るポツキーの端に口をつける。

天井から吊るさされているだけあって高さ調節は難しいらしく、俺が少し屈み、倉橋さんが少し背伸びした辺りの高さに鎮座するポツキーに各々姿勢を調整しながら両端から喰らい付く。

ちよつと背伸びしながらポツキーをポリポリと食べ進める倉橋さんに言い知れない何かを駆り立てられながら半ばヤケクソ気味になりながらこつちも食べ始める。

しかし、案外中腰気味になりながらお菓子を食べるのはしんどいと言うか、普段やらない体勢なので腰に違和感がある。

足元に目を向けると、倉橋さんも倉橋さんで背伸びした足をプルプ

ルと震えさせていた。

うん、やつぱりしんどいよな、とか思いながら視線を元に戻そうとした時、不意に正面から肌を撫でる程度の弱々しい風を感じた。少しくすぐったく思いながら風の発生源を探ろうと目を動かすと、すぐ目の前には倉橋さんの顔があった。

今のは彼女の吐息だったらしい。……なーんて、冷静ぶって考えているが、実を言うとな今の俺は頭が沸騰しかけていた。

目と鼻の先には彼女の顔。かつてないほどに倉橋さんの顔が近くにあって驚く。もうこんなに近づいていたのかと。

そりゃあ確かに倉橋さんに抱かれ、抱きつきをさっきまでしていたが、吐息が掛かるほどに接近したのは初めてのことで。

「……………」

窒息覚悟で息を止める。口呼吸はもちろん、鼻での呼吸すら放棄する。息が掛かるとか考えたら凄く恥ずかしくなって来た。

それは彼女も同様だったらしく、いつの間にか正面から来るくすぐったい風が止み、ますます近くなっていた。

「……………」

「……………」

ふと、目が合う。あと数センチ前に出せば鼻の頭がぶつかるくらい近くにいた彼女と目があつた直後、順調にポツキーを食べ進めながら倉橋さんは顔を僅かに傾け、目を閉じた。

いや待て、なんで目を閉じる。ポツキーを折るって話はどこにいった!?!目を閉じたらどの位置で折るとか分からないだろ!?!

止まるでも、ポツキーを折るでもなく、目を閉じた倉橋さんが迫る。まて、いや、本当に待って欲しい。なんでそんな受け入れ態勢なの、この人。確かにキスなんて今更かも知れないけど、ただのクラスメイトだよ、俺!?!彼氏とかじゃないのよ!?!

これはアレですか、していいヤツですか。倉橋さんとぶちゅつとイッていいヤツですか、この状況。

いやいやいやいやいや、待て待て待て待て待て!?!そう言うのはせめて告白とか踏むべき段階がいくつかあるんじゃないかい!?!流石にコ

レはやりすぎなんじゃないかね？

あ、いや、でも、添い寝して、胸に顔埋めて、抱き合って、腕組んで、手繋いで。あれ？なんか今日一日で色々と段階すつ飛ばして色々で、経験しすぎじゃないか、俺氏！

色々と検討に検討を重ねてこのまましても良いんじゃないのか、という結論が意識の水底から浮上する。

彼女も嫌じゃないって言ってるし、俺もしたくない訳じゃないし、一夏のアバンチュールしてもいいんじゃないか？

迫る倉橋さん、薄れゆく理性、崩れる良心、失われてゆく倫理観。しがらみの全てを見て見ぬふりをして、彼女とのキスを迎合してしまおうか、なんて思考が脳裏を掠めた刹那、思い出す。

——みんなを裏切る俺にそんな資格はないだろ。

自分のためにみんなを裏切り、E組を抜けようとしている現実。ここで彼女としたら追々、この記憶が足枷になるだろうと己を制止する合理的な自分が。ここから先、関わり合いになることがないだろう相手にそんな思考を割く余裕はないだろうと指摘する冷酷な部分が。俺の理性を繋ぎ止めた。

夢みがちな思考が合理性で固められた理性に殺される。不意に、昂っていた感情が冷めて行き、未練を断つように啞えていたポツキを噛み砕く。パキツと乾いた音が洞窟と俺の耳の中でやけに響いた気がする。

「……むう。圭ちゃん？」

「ははは、やっぱりこう言うのはしつかり惚れた相手とすべきだよ。お互いに。キスに慣れてるからで誰かれ構わずキスして回ったら女優なんてスキヤンダルだらけになっちゃうって。相手はしつかり選ぶべきだ」

拗ねるように唇を尖らせる倉橋さんにそれっぽい理屈を説き、さりげなく半歩下がって距離を取る。

さつきまでの浮ついた思考はもう欠片も残ってない。楽しもうなんて気持ちは完璧に冷め切った。残ったのは最後に思い出をくなんて考えていた自分への嫌悪感。

身勝手にみんなを裏切るのであれば、その独りよがりは通すべきだ。それが最低限俺が通すべき筋つてヤツだろ。

透徹した思考を呼び戻す。元に戻る。鳥間先生に憧れ、殺せんせーに見てもらったE組の乃咲圭一を殺し、斜に構え、一步引いた位置から考察を巡らせていた頃の自分を呼び起こす。

「ほら、行こう。後ろが詰まるかもしれないんだろ」

「……………圭ちゃん？」

表には出さない。いつも通りの自分を作る。外装を繕い、中身を切り替える。自然と自分の表情が引き締まるのを感じた。

自分を使い分けることが出来たことに満足して歩き出す。今度こそこのメツキが剥がれないように気を付けないと。

歩き出した俺に置いていかれないようについて来る倉橋さんと出口を目指す。道中から殺せんせーのアトラクションはなくなり、味気ない暗闇だけが残り、そんな闇の中を沈黙が支配する。

さつきまでの居心地のいい沈黙ではない。とてもではないが雰囲気が良いとは言い難い無言の時間。

そんな俺たちを追うように、案の定自爆したのであろう殺せんせーの絶叫だけが洞窟の中を木霊していた。

63話 殺しの時間

洞窟を全員が抜ける頃、勝手に自爆して誰よりも恐怖を楽しんでいた殺せんせーがゼーハーゼーハーと息を切らしながら涙ながらに今回の肝試しに巡らせていた策謀を語っていた。

殺せんせーの目的は俺の考えた通り、あまりにもスキヤンダラスな話題が乏しい俺たちにヤキモキした結果とのこと。

「要するに、怖がらせて吊り橋効果を狙ってた。いや、そんなことだろうなとは思ってたけど」

「まあ、怖くは無かったよな。怖がらせる前にくつつける方に力が入りすぎて狙いがバレバレだったし」

前原たちが口々に感想というか、問題点を指摘するとうつつ伏せていた殺せんせーがクワツと顔と声を上げた。

「だ、だって見たかったんだもん！手繋いで照れる2人とか見てニヤニヤしたいじゃないですかあつ！上手くいきそうだったペアも居たのに最後の最後で冷静になってイチヤイチヤやめちゃうし！何なんでしょうか、乃咲くん！枯れてるんですかあつ!!？」

「うわっ、泣きギレ入った。ゲスい大人だ」

「つか、乃咲に流れ弾飛んでるし」

「てか。乃咲のペアって倉橋だったよな？なんかあつたん？」

「いや、別に」

木村からの問いかけに顔を逸らしながら答える。いろいろあつたが、ここで答えるときさらに面倒な展開になりそうだ。

疑わしそうな視線を受けつつ、いまだに泣きギレしながらチラチラと俺たちの様子を見ている殺せんせーに呆れる。

「殺せんせー。そういうのそつとしておいてあげなよ。うちら位だと色恋沙汰つつかれて嫌がる子多いよ?」

「そーそ。みんながみんなゲスい訳じゃないんだからさ。どーしても気を遣いたくないならさりげなく一緒に居させるとかさ。そのくらいがちょうど良いんだって。殺せんせーは過剰すぎんよ」

「うう…………。わかりました…………」

片岡と中村さんの説教が聞いたのか、泣く泣く返事をして立ち上がり、姿勢を正す殺せんせー。

ようやく話がまとまったと思い、晩飯に向けてホテルに戻ろうとしたその時、脅かし役の殺せんせーがいなくなり、もはや所々に奇怪なおブジェクトが鎮座しているただの薄暗いだけになってしまった洞窟からキャンキャンと騒がしい声が響く。

「何よつ、結局誰も居ないじゃない！怖がって歩いて損したわっ!!なんなのよ、もうっ…………!」

「だからくつつくだけ無駄だと言っただろ。徹夜明けにはいいお荷物だ。さっさと離れろ」

洞窟から歩いて来たのは烏間先生に絡み付くビッチ先生。2人も参加してたのかと思いつながら皆の視線が2人に向くと、それに気付いたらしいビッチ先生がそくさと烏間先生から離れる。

「…………なあ、うすうす思ってたけどビッチ先生って」

「…………うん」

ビッチ先生が離れると早速興味を失ったみたいにつま先の向きを変えてさっさと歩き去る烏間先生。

その後ろ姿を流れるように自然と目と顔で追うビッチ先生を遠巻きに見ながらみんなが思案顔になる。

「…………どうする」

「明日の朝、帰るまで時間あるし…………」

「くつつつけちやいますか!?!」

——結局、みんなゲスかった。

??

??

??

ビッチ先生が覗かせた烏間先生への淡い恋心。

悲惨な過去を持った女暗殺者が仕事先で実直さと堅実さを兼ね備えた防衛省の傑物と出会い、プロとしての矜持を貫く為にアピールを続け、いつしか本気が変わり、自分が恋に落ちる。ここだけ切り取る

と映画が作れてしまいそうな内容だな。

「意外だよなあ。あんどけ男を自由自在に操れる癖に」

「自分の恋愛にはてんで奥手なのね」

「仕方ないじゃないのよっ！アイツの堅物ぶりったらワールドクラスよ！！私にだってプライドがある。男をオトす技術だって千を超える。でも、そのどれもカラスマには一切通じなくて、悔しくてムキになって、本気にさせようとしてアレコレしているうちにそのうちこっちがオチちやったのよ……」

「「うっ……」」

顔を赤らめ、俯き、照れながら、何処か恥ずかしそうに言葉を尻すぼませながら呟いたビツチ先生に男子何名かが反応。

「かわいいと思っちゃった」

「なんか屈辱」

「なんでよっ!？」

ギヤイギヤイしながらもハンカチを噛み、悔しそうにしているビツチ先生。マジで烏間先生にオチたらしく顔は満更でもなさそう。そんな彼女を見てクラスメイトたちの心は決まった様で。

「俺らに任せろって！2人の為にセッティングしてやんぜ！」

「ああ。作戦決行は夕食の時間だ。作戦立てないとな！」

乗り気な前原。彼に続くように学級委員2人も声を上げ、ワイワイと烏間先生をオトす為の作戦会議が始まる。

その様子にビツチ先生も流石に嬉しくなったのか、一瞬、心底嬉しそうな顔をしたが、『やーん、南の島の夕食で告るとかロマッチツク！』と黄色い声が聞こえた瞬間に苦笑に変わった。

そう、みんな応援しているのは本当だろうが、他人事だから楽しんでるの紛れもない事実である。

さつきまで殺せんせーの下世話に説教垂れてた連中が掌返して楽しんでるあたり、結局みんなゲスいのだろう。

「それでは恋愛コンサルタント3年E組の会議を始めます」

「ノリノリね、タコ……」

「同僚の恋を応援するのは当然です。女教師が男に溺れる愛欲の日々

……。甘酸っぱい小説が描けそうです」

「明らかにエロ小説を構想してるっ!？」

「でも殺せんせーが書いたら最終的に触手が登場しそうだよな。ビッチ先生の属性的にエロ小説書くなら触手に喘ぐ女アサシンって展開の方がリアリティとエロスを両立させた妄想でこそそのロマンがあると思うんだが。どう思う?竹林」

「どう思う?じゃねえよ!久しぶりに出たよっ!?!乃咲の特殊性壁……。その触手への飽くなき興味はなんなの!？」

「いいじゃないか。空想でしかあり得ないロマン。やはり女は三次元ではなく、二次元や空想上のものに限る」

「竹林!？」

あちこちからツツコミを貰いながら会話を続ける。鳥間先生がビッチ先生にオチない理由を全員で挙げて行く。

「ビッチ」

「尻軽」

「年増」

「露出至上主義」

「キス魔」

「誰だ今年増ったの!?!まだ20歳だわっ。どいつもこいつも舐め腐りおって、死ぬクソガキ共!」

もはや罵倒に近いマイナス要素の列挙に先生激怒。拗ねそうになった所でビッチ先生の愛弟子からフオローが入る。

「まあまあ、まずは潰せそうな問題から潰して行こうよ。今挙がった中で改善できそうなのは……服の露出かな?」

「あく。確かに。それなら手早くどうにかできそう」

「だな、まずさあ。ビッチ先生。服の系統が悪いよ。センスじゃなくてあくまで系統の問題な?」

「そーそー。とりあえず露出しときゃいや的な感じがするっていうかさあ。ハニートラップ使いとしてどーなの、それえ。オトしたい相手の好みに合わせて格好を替えるのってハニートラップ以前に恋愛の基本じゃない?」

「うっ……くう……。一理あるわね」

岡野からの正論にぐうの音も出ない様子で頷く。まあ、露出した時の色気を使った暗殺ばかりして来たからそういう感覚が乏しくなっているのかもな。いわゆる職業病の一種か。

「鳥間先生みたいなお堅い日本人の好みじゃないと思うよ？大和撫子なんて言葉もあるくらいだし、典型的な日本人が好ましく思うのはやっぱり清楚系なんじゃないかな？」

「む、むう……。清楚系か」

「清楚つつたらやつぱり神崎ちゃんか。昨日着てた服、乾いてたら貸してくんない？ちよつとこの人に着せてみようよ」

「あ、う、うん！すぐ持ってくるね！」

パタパタと小走りで行く神崎さん。

数分とせずに戻って来ると、服を受け取ったビッチ先生はトイレに引っ込み、そう間を置かずに出て来た。

「ど、どうよ？」

「「なんか、逆にエロい!?!」」

胸元から溢れんばかりのパイ乙、さらりと伸びた色白の手足、あと数センチ上がったら下着が見えそうな丈の裾。

すげーな。神崎さんが着るとめちやくちや清楚に見えるのに、着る人が違うだけでこんなにエロくなるのか。

「ある意味才能だな」

「そもそも全体のサイズが合っていないっての」

「神崎さんがあんなエロい服を着てたと思うと……!」

思わぬ形でダメージを食らった神崎さんが羞恥に耐えるように顔を覆い、背中を向ける。岡島の邪な眩きにめざとく反応した杉野が無言でどつき、一同考え込む。

「ダメだな、何をやってもエロくなる未来しか想像できない。この人からエロを取ったら何も残らないぞ」

「もーいや。エロいのは仕方ない！大切なのは乳より人間性とか相性でしょ！そっちに切り替えよう」

大切なのは乳より人間性という岡野の言葉に茅野が殺せんせーも

ドン引きな超スピードで領いた。

「ていうかさ、そもそも烏間先生のタイプって？」

誰かの呟きにみんな静まり返る。

「烏間先生の好みを知っている人は挙手！」

殺せんせーの言葉に手を挙げるものは無し。うん。ものの見事だーれも烏間先生の女性関係を知らない。

「……まじかよ、難攻不落すぎねえ？」

「つけ入るスキが無すぎるだろ。乃咲は？烏間先生と一番長く接してるのはお前だろ？そういう話しねえの？」

「しないな、あのひとの会話で女性に関する話題なんて職員室で一度あっただけだ。矢田さんも居たよな？ほら、いつだったかの昼休み、職員室のテレビ見た時にさ」

「あつたね、私はビッチ先生に、乃咲くんは自主練のお願いについて職員室に行った時だよな？確か……あつ！このCMの女の人を見てすっごいベタ褒めしてたよね！」

話しているとホテルの大きなテレビにあの時みたCMが映る。思わず指差した矢田さんの指先を追うように音を立ててその先をみる教師2人と生徒たち。その先には警備会社のCMで活躍する霊長類最強の女性の姿があった。

「確か烏間先生にして珍しいくらいにベタ褒めしてたよな。『彼女はいいぞ。顔つきも、体つきも理想的だ。——おまけに3人もいる』とか凄く物欲しそうな顔で」

「『理想の戦力じゃねーか!!』」

「いや、単純に強い女が好きって線もあるだろうけど、そうなるのとなおさらビッチ先生の筋力じゃ絶望的だね」

クラスメイトたちのもっともな反応に冷静に状況分析する竹林。烏間先生の場合、本気でその路線が考えられそうなのが恐ろしい所だ。確かに弱いより強い人を好みそうではある。

「確かにな。烏間先生の場合、ある程度の線引きをしてるって言うか。少なくとも、精神面でも、腕つぶしでもあの人と対等で居たいなら人並み以上の強さは必要だろう。必要だと思う。これまで接してきた

印象的に、あの人にとって弱者は対等な相手ではなく、守るべき対象でしか無いだろうから」

「そうかな？ 烏間先生、僕らには対等に接してくれてるじゃん」

「そうだな。でも、あくまで仕事上での話だ。プライベートではその限りじゃないだろ。今までプライベートで烏間先生と遊んだとか、どっか行ったとかそういう奴はいるか？ いないだろ？ そこには友情も恋愛感情もない。目的や仕事に必要なだと思っから応じてそうしているだけ。その対等な関係の名前は『ビジネスパートナー』って言うんだぞ、渚」

言い切る俺に他の面子が目を丸くする。

なんか変なことを言ったか？ 自分の発言を顧みて、思案すると杉野が苦笑しながら言ってくる。

「なんか、少し言い方冷たいぞ。らしくないんじゃないか？」

「……そうか？」

「今のは俺も杉野に同意。いつもの乃咲なら『烏間先生は強い人が好きだろうけど、腕つぶしだけの問題じゃないと思う』とかフォローしそうな所なのにな」

……俺らしくない、か。多分、さつき意図的に意識を切り替えた影響なんだろうな。昔の俺ならこう言うだろうとエミュレートし、口がいつの間にか動いていたようだ。

「……しかし、合理的な考え方ではありません。確かに烏間先生はプロとして、仕事として我々との関係に一線を引いているのは事実。それは決して、彼が表面だけ、仕事だからそうしているだけという訳ではないですが、烏間先生に一個人として意識させるのなら、彼の引いた一線に飛び込む必要があります」

殺せんせーからのフォローが入る。

彼の言葉にほぼ全員が納得したように思案顔になる。

そんな中で、ふと奥田さんが思いついたように手をポンと叩き、上擦った声で浮かんだアイデアを出す。

「て、手料理とかどうでしょう？ 夕食は確かに豪華ですけど、そこを覚えて烏間先生の好みに合わせた物を用意して、一線に踏み込むんで

す」

「……でもさ、烏間先生って基本的にカップ麺とかハンバーガーくらいしか食べてるの見たことないぞ」

「なんかそれ、ピッチ先生と烏間先生だけ不憫な絵面にならない？ 私ら豪華ディナー食べてる横でカップ麺とハンバーガーを齧る教師2人。いたたまれなくて食事が進まなくなりそう」

「だな。しかもあの烏間先生がたかが食事の話題で盛り上がるタイプとも思えないし。質素な食事と弾まない会話、その横では豪華なディナーを食べる生徒……。なんか、控えめに言っただ獄」

みんながついに沈黙した。腕を組み、眉間に皺を寄せ、唸り、首を捻り、やがて項垂れると声を揃えて一言。

「二つけ入るスキがなさすぎる!!」

「なんか、烏間先生の方に問題があるように思えて来たぞ……?」
「でしょ!?!でしょ!?!」

「うう……。先生のおふざけも何度、無情に流されたことか……。!」
「確かに堅すぎるんだよなあ……。鷹岡レベルとまではいかなくても、もうちよい気安く接してくれてもいいのに」

「うーん。打つ手を無くしてとうとう烏間先生がデイスられ始めたぞ。流石に理不尽じゃないか、この展開」

思わずぼやく。だが、皆で知恵を振り絞っても答えが出ない……。と
いうか、そもそも答えが存在しているかすら不明なので、考えるだけ無駄な類の命題だと思うのだが……。

言うだけ野暮つてもんか。みんなで楽しんでるんだし、水を差して邪魔をする必要もないだろう。

気配を消して、気付かれないようにみんなのもとを離れて、自販機に向かい、水を買う。ちよつと離れた位置でテレビを見ながらみんなの様子を見守っていると、結局答えが出なかつたらしく、殺せんせーがとりあえずの指示を出した。

「と、とりあえずディナーまで出来ることは整えましょう。女子は堅物の日本人が好むようにスタイリングを。男子は2人の席をムード良くセッティングです!気合い入れていきますよお!」

「はーいー」

うん、みんなやる気があるようで何よりだ。これなら俺が手を出す必要もないだろう。2人の席をセッティングとか言っても、やるのは机の運び出しとロケーションの確保程度。5人も男子がいれば終わる仕事だ。

今回、俺の出る幕はない。適当に会話に混じるフリをしながら作業を見守ることにしよう。

結局、俺はみんなに混じりつつも一言も話すことはなく、黙々と作業を続けて、適当な所でフェードアウトした。

??

??

??

そして、すっかり日は沈み、夕食。

ホテルのレストランに来た鳥間先生は中村さんや岡野による教師いびりを受け、ビッチ先生の待ち受けるみんながセッティングしたテラス席にめちやくちや困惑した様子で向かった。

鳥間先生がこちらに背を向け、ビッチ先生の対面に座ると同時にレストランで大人しく席に着いていた連中が素早く2人を観察できる位置に移動し、彼らの様子をよく言えば見守る。事実をそのまま言えば野次馬していた。

「……う？圭一、いかないのか？」

皆が席を立つ中、黙々と食事を続ける俺に磯貝が気付き、不思議そうな様子で言葉を投げかけて来る。

「……………あ、そうか」

言われてようやく思い当たる。E組の俺としてはこの場でみんなのノリに合わせて野次馬しに行くのが正解だったか。

席を立ち、磯貝たちの元へ向かう。

いつものメンバーが集まっている。彼らの後ろからぼんやりと食事を進める先生2人を眺める。

「あの2人、上手くいくかなあ？」

「どーだろ。上手くいって欲しいとは思うよね」

口々に勝手なことを言い出すみんなから意識を外し、何気なく離れた位置で何かを話しているビッチ先生たちに集中する。

——色々あったな、この旅行は。

また無意識に異常な聴力を発揮する。倉橋さんの心音を聞いたり、大して大きくない矢田さんの呼び声が耳が壊れるんじゃないかってくらいの轟音に聞こえたり、今日一日だけで普通では考えられないような異変が俺の身体に起こっていた。

今、こうしている間にもビッチ先生の波長がこの位置からでも伝わってくる。烏間先生に声をかけられて心臓が少し跳ねた。

不意に話しかけられて、少しドキツとした反面、水を向けられたことに微かな喜びを覚えている。

ビッチ先生、本当に烏間先生に気があるのだろうか。彼女の意識が目の前の堅物のあらゆる仕草を追っているのが手に取るように伝わってくる。これが誰かを好きになった人物の意識なのか。

——だが、収穫もあった。思わぬ形だが、生徒たちに基礎が身に着いていることが証明できた。この調子で二学期中に必ず殺す。イリーナ、お前の力も頼りにしているぞ。

いつもと変わらない烏間先生の言葉。真っ直ぐで誠実に一人一人に公正な評価を下し、期待を込めて、それをしっかりと伝える。不器用だけど仲間として、プロとしての信頼の言葉。

けど、そこにはビッチ先生とは明らかな温度差があった。

彼の目に映っているのは、イリーナ・イエラビッチという一人の女性ではなく、ロヴロさんから紹介されたハニートラップの達人で、殺し屋のイリーナという仕事仲間なんだ。

ビッチ先生の心臓の高鳴りが落ち着いて行く。楽しげだった波長はどこか悲しげで、寂しそうな波に飲まれていた。

烏間先生に悪意があるわけじゃない。ビッチ先生を見ていないわけでもない。ただ、ある程度の棲み分けがあるだけ。

……うちの親父も。かつて手を挙げてしまった頃の彼もそうだったんだろうか。彼は言った。今も昔も期待していると。俺にそれが伝わらなかったのは、彼のそういう棲み分けみたいなものを推し量る

ことが出来なかったからなんだろうか。

——どうした？

黙り込んでしまったビッチ先生に烏間先生が問い掛ける。そこにあるのは確かな心配の色。やはり見ていないわけじゃない。

そんな心配をよそに彼女はゆっくりと静かな波の中から浮上させるようにソレを言葉として吐き出した。

——少しだけ昔話をしてもいい？ 私が初めて人を殺した時の話。まだ12だった時よ。

吐き出したのは殺し屋としてのルーツだった。

唐突な過去の話に烏間先生は少し狼狽えた様子を見せるが、何か言葉を絞り出すでもなく、話したければ話せ、と言わんばかりに口を閉ざし、ビッチ先生に意識を傾けていた。

——うちの国は民族紛争が激化しててね。ある日、私の家にも敵の民兵が略奪に来た。親は問答無用で殺されて、敵は私の隠れたドアを開けたの。殺さなければ殺される。父の拳銃を至近距離から迷わず撃ったわ。

ビッチ先生の行った初めての殺人。殺したかったから殺したのではなく、そうするしかないからそうした。12歳、日本でいう小学6年生か中学1年生の子供が体験した初めての殺人。

——敵の死体を地下の蔵に押し込んで……。敵が去るまで死体とスシ詰めになって難を逃れた。一晩かけてぬるくなっていく死体の温もり。よく覚えてるわ。

彼女の過去は凄惨だった。たった一日の間に起こった様々な事象。初めての殺人、死体と過ごした夜。

人を殺す恐怖も、死体と過ごす心細さも、目の前で親を失う悲しみも俺には理解できない。

だけど、死の恐怖は今回の旅行で知った。本当の恐怖とは感情ではなく、寒さであることを知っている。

まだ幼かったビッチ先生はあの心の底から凍てつく様な寒さに耐えたんだ。何時間も、人を殺した感触と消える死体の温もりや親を失った喪失感を抱えながら。

「……ビッチ先生、強かったんだな」

「え……う？」

人に歴史あり。そんな言葉の意味をしみじみと考えながらつい、無意識に溢れていた感想に反応した倉橋さんが顔を上げるが、それに気付かないフリをして、2人の様子を見守る。

——カラスマ。「殺す」ってどういう事か本当にわかってる？

短い問い掛け。だが、その問いかけは俺が今まで生きてきた中で聞いたどんな質問よりも重いものだった。

思い返せば、この旅行の暗殺直前。海上レストランに入る時に彼女は俺たちに何か言いたげな顔をしていた。

もしかするとあの顔の下にあったのはその問い掛けなのかも知れない。本当に殺すって意味を分かっているのか。

俺たちが凶器を向けている相手は、誰よりも俺たちを見ようとしてくれている人で、いつの間にか当たり前前に笑い合う様になった相手で、俺たちにとっての恩師。

ビッチ先生で置き換えるなら、彼女がロヴロさんに笑顔で殺意を向けているのと同義。

そりゃあ、一言くらい言いたくなるだろう。壮絶な過去を背負ったプロの殺し屋として、覚悟と意味を問いたくなるだろう。考えさせたくなつて当然だ。彼女にとって俺たち生徒だけでなく、烏間先生ですら、人を殺したことの無い平和な国に生まれた恵まれた人種に過ぎないのだから。

——湿っぽい話しちゃったわね。それとナプキンを適当に付けすぎ。……好きよ、カラスマ。おやすみなさい。

いつの間にか告白紛いな言葉を残したビッチ先生が食事を切り上げ、こちらに歩いて来る。ツカツカと足音を立てながら、壮絶に頭を抱え、告白するつもりが、殺白してしまったと自分の言動を顧みて子供の様に身悶えている。

「なによ！今の中途半端な間接キスは!？」

「いつもみたいだに舌入れろ、舌あ！」

「あーもー！やかましいわガキ共!! 大人には大人の事情があんのよ!!」

大体覗き見がバレバレなのよ、パパラッチ共！」

戻ってきたビッチ先生に飛ぶ野次。彼女は彼女でそれに反応し、いつもの様に軽い小競り合いに発展。

ギャイギャイと騒ぐ彼らを見て思う。争いは同じレベルでしか起こらないという。その理屈で言えば割と沸点が低くてすぐにみんなと口喧嘩になるビッチ先生の精神年齢は幼いということになるが、そんな彼女がこの場にいる誰よりも命の重みを知っている大人なのかもしれないと。

「……飯食って寝るか」

けどまあ、今、そんなことを思ったところで意味はない。もう間もなく、俺には関係なくなることなんだから。

みんなを尻目にすっかり冷めた豪華なディナーに手を伸ばす。数時間前まで当たり前に加わっていた喧騒から離れて食べる晚餐は不思議と味がしなかった。

64話 離別の時間

とうとう迎えた旅行最終日。なんだか俺の人生の中で最も密度の高い2日間だった。遊んで、殺して、殺されかけて、乗り越えた。今までにない、そしてまたとない経験がこの島で沢山した。

別にここから離れることが名残惜しいと思うくらいに思い入れが出来たと言うわけではないが、荷物をまとめ、フェリーを待つ間、なんとなく島を眺める。本当に色々あったな。

「皆さん！忘れ物はありませんね？」

「殺せんせー、なんか来た時より荷物増えてない？」

「どこで買ったの。そのお土産……」

帰りの便が来たらしく、いつもの様に音頭を取る殺せんせーがいつもの様にツツコミを入れられていた。

まあ、足元に広がる無数のお土産袋を見ればそうしたくなる気持ちも分かるがな。この人の方が忘れ物ありそうだし、みんな殺す

何だかんだで殺せんせーの荷物を持つの手伝うあたり、みんな殺すとかなんとか言いつつ懐いてるよな。

微笑ましい反面、いざ、本当に殺せる瞬間が訪れた時のことが心配だ。この調子だと躊躇う奴とか、殺すか殺さないかの問答が発生し、最悪は内部分裂的な起こるぞ。割と高確率で。

「……まあ、俺には関係ないか」

呟く。誰に向けるでもなく、ただ、なんとなく。

呟く言葉に返って来る声はなく、何事もなかった様に船に乗り込み、港までの帰り道を各自で時間を潰して過ごす。

磯貝たちからトランプでもやらないかと誘われたが、丁寧に断ってデッキから遠去かり、小さくなってゆく伏真島を眺める。

本日、何度目かのため息を吐く。本当にまたとない体験をしたんだな。俺は。思えば器物破損、不法侵入、暴行、恐喝、営業妨害、銃刀法違反、ハッキングなどなど犯罪行為もしてしまったが、緊急避難だ。ご愛嬌願いたい。

「ここにいたか」

自分たちの所業に何気なく苦笑していると烏間先生とビッチ先生が揃い踏み。俺の後ろにいた。

「お疲れ様です、先生方。どうかしましたか？」

「……白々しいわね。演技するならもつと自然に笑いなさい。不自然よ、その作り笑い」

「流石に手厳しい」

労いつつも声をかけたらビッチ先生に手厳しい指摘を受けた。

まあ、正直、今のは自分でも白々しいと思う。烏間先生の言葉からして俺を探したのだろう。そして、彼がそんなことをする理由は今のところ一つしか思い当たらない。

それを確信しながら触れないのだから白々しくもなるというもの。しかし、反省しないと。スキルは活かしてこそだ。

「それで？如何されました……というのも白々しいですね。要件は暗殺から抜けることについてでしょうか？」

「察しが良くて助かる。俺は防衛省の職員だが、同時に今は君たちの教師でもある。教師として、君の進路選択は尊重する。だが、最後に聞きたい。……本当に暗殺を止めるのか？」

烏間先生からの問い掛け。恐らくは最終確認なんだろう。ここでYESと答えたらこれ以降、この件に関しての追求は無くなる。

そして、それと同時に今日まで築いて来た凡ゆる関係性が白紙に戻る。これ以降、接点を持つことはなくなるだろう。

そう考えると心底名残惜しい。叶うのなら今後も烏間さんを先生と呼びたいし、いろんなことを教わりたいし、成長を見ていて欲しい。それは紛う事ない俺の本音。

けれど、父に見せたい。今、こっちを見てくれているうちに知って欲しい。俺のして来た努力、挫折、今の自分を。

父とまともに会話するのに15年掛かった。こんなチャンスは無いかもしれない。それこそ暗殺に失敗し、来年の3月までに殺さなかったら。殺せんせーが地球を巻き込んで死ぬとしたら。これは真正銘最後のチャンスということになる。

……俺は、このチャンスを逃したく無い。

「はい、俺はA組に行きます」

短く答える。俺の回答に烏間先生は顔や態度には出さないものの、意識の波長を乱した。俺に暗殺続行の意思がないことを再認識して落胆してくれたのなら嬉しい評価だ。彼はそれだけ期待をしてきていたということなのだから。

「……………分かった。勉強、頑張ってくれ」

少しの沈黙の後。烏間先生はそう言うと言と踵を返す。そして歩き出そうとした時、振り返る。何故か。ビッチ先生は彼の動きに倣わず、俺のことを妙に憎たらしそうに見つめていた。

「乃咲。アンタ、それでいいわけ？」

「はい。自分で選んだことです」

薄水色の瞳が真っ直ぐに俺を見据える。試す様な、見透かす様な、瞳。普段の男を誑かす目付きではなく、そこにあったのは冷めた視線。殺し屋の凍てつく様な眼力を向けられる。

「本当に？報酬100億円。それをわざわざ諦めるの？」

「ええ。金よりも欲しいものがあるので」

「来年には地球が減ぶかもしれないのよ？」

「E組のみんなとあなたの方が頑張ってる殺してくればそうはならないでしょう？草葉の陰から応援してますよ」

俺の言葉に彼女は目を伏せる。

「…………ターゲットの命に一番近いのはアンタだと思ってた。おこぼれに預かれなくて残念だわ」

数秒前までの剣呑な雰囲気はどこへやら。ビッチ先生は複雑そうな顔と声で呟くように口を開く。

たぶん、言いたいことは沢山あるだろう。彼女はプロの殺し屋。一度始めた仕事は最後までやり通せとか。殺せんせーの暗殺に携わりたくても辿り着けない殺し屋だっているのに途中で放り出すとは何事かとか。

でも、それ以前に思ったのだろう。殺しから手を退けるのであればそれに越したことはないはずだと。

昨日の殺すということの意味を問うた鳥間先生との会話が聞こえていたからなんとなく、ビッチ先生の心境は察することが出来た。誰かを殺すことはいつかきつと足枷になる。それを知っているからこの人は引き留めることはしないだろう。

「……まあ。せいぜい頑張んなさい」

鳥間先生とビッチ先生からのエールを受ける。

鳥間先生は俺がやる気を出すきっかけになった人で憧れ。

ビッチ先生も多才で努力家で尊敬できる人だったと思う。

「鳥間先生、ビッチ先生。教えて頂いた技術を活かせず、途中離脱する形になってしまい、申し訳ありません。仲間やお二人の期待を裏切り、投げ出す自分にこんなセリフを言う資格があるか分かりませんが、暗殺が上手くいくことを祈ってます」

言葉を紡ぎ、頭を下げる。最敬礼。今までの人生で一番深く頭を下げた。この人たちから多くを学んだ。頭を下げるだけでは伝えきれない感謝が確かにある。

だが、裏切る俺に長々と語る資格はないだろう。だから、せめても
の誠意として頭を下げることにしか出来なかった。

2人はそんな俺に多くを語るでもなく、もう一度、頑張れよと残すと今度こそ去って行く。その背中を見送りながらも一度頭を下げ、いなくなつた頃に顔を上げて海を見る。これで後に退けなくなつたな。

鳥間先生たちとの離別からしばらくしてやっと俺たちの街に帰つて来る。ここに来るまでの間、不自然にならない程度にE組のみんなと一人一人改めて会話してみた。

彼らはみんないい奴だ。見た目通りの性格してる奴、誠実な奴、優しい奴、不器用な奴、捻くれてる奴、人懐っこい奴。本当にいろんな個性があるメンバーだった。

改めて話してみて、『ああ、コイツはこいう奴なんだ』と印象を更新することもあった。これまでの俺はそれだけ周りを見ていなかったと言うことなんだろう。

もつと早くに周りを見ようとしていれば、彼らの強みとかを把握す

ることができていれば、この旅行で殺せんせーを殺しきることだつてもしかしたらできたのかもしれない。

けど、それはたらればだ。過ぎてしまった事に思いを馳せても意味はない。俺がやらなきゃいけないのはこれからを変える事だ。こうすれば良かったと思つたことを実践していく。

E組でやり残したことは数え切れない。A組とE組、どつちらで学びたいかと問われれば後者を選ぶし、どつちが魅力的かでも同じように答える。正直、E組で学んでいきたいのが本音だ。

でも、父はA組に戻る事になつたことをきつかけに向き合おうとしてくれたように思う。今までも、これからも期待している。そう言つても、明確にそれを伝えてくれたのは理事長からの電話があつたからこそだ。そして、その電話が来るきつかけは俺が学年で1位になつたことにある。

俺が父の期待に答えるにはA組で結果を残す以外にない。

俺は思つた。今まで自分を見て欲しいと思つていた俺こそが周りを見ていなかつたんじやないかつて。そんな俺に烏間先生や殺せんせーみたいに目の前の相手と真摯に向き合うなんてきつとできないだろうと。半ば確信した。

向き合わなきゃいけない。家族と。そしてそれが出来るのはA組だけだ。だからこれは一步なんだ。父と向き合い、目の前の相手を見てやれる奴になる為の。

「あゝ、ほんと濃い旅行だつたよな」

「だね。家に帰つたらぐだぐだしたいよ」

「……やつべ。俺、夏休みの宿題全然終わつてねえ」

「あはは、ぼつかでえ」

駅から各々の家に向かつて歩き出すみんなを後ろから眺める。殺せんせーはと言うと今度やる夏祭りで屋台を出すとかでその材料や機材の収集に回るべく、早々に飛び去ってしまった。

しくじつた。殺せんせーにA組行きを伝えるタイミングを逃してしまった。世話になつたんだし、せめて電話とかメールじゃなく、しつかり面と向かつて伝えたいな。

「夏祭りか、みんなはどうする？」

まだ残っていたらしい磯貝たちが自然と俺の周りに集まり、そんな会話を始める。祭りへの参加については意外と反応が別れた。乗り気な奴とみんなが行くならと言う奴、そして子供っぽいとかで大人ぶって行くこうとする素振りがない奴。

「圭一は？」

「俺もパス。夏休み最終日はダラダラ過ごしたいし、なにより、夏祭りになるとはしやぐ馬鹿がいるからな」

「えつと……う？夏祭りなんだし、少しくらいハメを外してもいいんじゃないかな？」

「甘いぞ、矢田さん。あのパリピはハメと言うか、タガが外れてる。想像できるか？普段クールぶってる奴が頭にお面、手には綿飴と水ヨーヨーを携え、浴衣を大袈裟にはためかせながら呼びもしないのに家に来るんだぞ？うざってえたらありやしない」

「た、大変だな」

「当日にもう一度誘うからさ、気が向いたら一緒に行くこう」

「……行けたら行くわ」

「来ないパターンだよ。これ」

「まあ、圭一らしいと言えばらしいか」

そんな会話を最後に今日は解散となった。みんなの背中を見送り、俺も歩き出す。帰路を辿る中でふと、磯貝の言葉を思い出して取り留めもなく空を見上げて漠然と思う。

俺らしさとはなんだろうな。と。

答えは出ない。俺らしさとはなんなのか、そんなことすら今の自分には答えることが出来なかった。

??

??

??

そして迎えた夏休み最終日。

俺は朝から理事長に呼び出されていた。

「さて。乃咲くん。最終確認だ。キミはどうする？」

「A組に行きます」

「賢明な選択だ。E組への未練は？」

「腐るほどに。でも、やりたい事とやるべき事、やらなきゃならない事は必ずしもイコールで繋がらないもんですから」

「しばらく見ないうちに随分と大人びた考え方をするようになった。なにか心境の変化でもあったのかな？」

「……現実を見ただけです。『こうはなりたくない』って相手の要素がまるまる自分に当てはまったり、『こういう風になりたい』と思ってもそんな理想が一番遠かったり。誰よりも自分を見て欲しかったはずの俺が実は親のことすらすっかり見れてなかったり。色々嫌気がさす経験をしました」

「なるほど、理想と現実の乖離を見る。確かにそれは現実を思い知ったと言っても過言ではない体験だったね」

「だから、決めたんです。俺は親父……父さんと向き合いたい。俺が一番見て欲しかった人をもう一度、見つめて、知りたいんです。彼の期待はどんなものなのか、彼の頑張れは何を指しているのか、『ああ』と『そうか』にどんな思いがあったのか」

「その為にE組を抜けるのかい？」

『A組に戻るかもしれないだろう？頑張れよ』って分かりやすい目標を見つけた。15年、何をしても一言しか発することのなかった父が初めて明確に応援してくれた。あの人に認められることが人生の目標だったんです。勉強を頑張れば分かりやすく評価されるA組とどんなに頑張つて超生物を暗殺し、地球を救つても国家機密であるが故に評価してもらえないE組。どちらが目的への近道なのか考えるまでもない」

「例え来年、地球が減ぶとしても？」

「仮に減ぶのだとしたらこれが最後のチャンスになる。そうでなくても、今、頑張れば今日までの15年が報われるかもしれない。俺の人生の目標を達成する上ではA組に行く方が理にかなっている。それに次の機会はいっになるか分からないのならタイミングは今しかないんですよ」

「……合理的だ。しかし、まだ強者とは言えない。やりたい事、やるべき事、やらなくてはいけない事。その全てを両立させ、手段を選ばず、なにも取りこぼす事なく望んだ決着で目的を果たす。それが本来あるべき強者の姿だ。キミが本校舎でそれを身に付けることを期待しているよ」

「別にあなたの言う強者になりたいわけじゃないですが、まあ、頑張りますよ。浅野先生」

「そうしてくれたまえ」

「はい、失礼します」

一礼して理事長室を出る。大魔王との会話は心底S A N値が削られていけない。あの人、なんであんなに強者に拘るんだろう。弱いと何も出来ない。強過ぎても出る杭は打たれ、疎まれる。

実力なんてのは自分のうちに秘めておいて必要に応じて出すのが一番いい。普段は程々に、けれど口に出したからには全力で。それが一番かつこいと思うんだけどなあ。

俺の身の回りにいる強者といえば殺せんせー、烏間先生、そして浅野先生になるだろうが、この3人では重んじる強さのベクトルが微妙に違っているような気がする。

殺せんせーは自分と周りを守れる強さ。

烏間先生は他者を、弱者を守る強さ。

浅野先生は自分だけでも生き残る強さ。

言葉にするとこんな感じで方向性が分かれているように思う。不思議なもんだ。強さって奴にも種類があるんだな。

らしくないことを考えながら俺は校舎を後にする。今日は特にやることもない。確かに祭りがあったと思うが今のところ行く気はないし、行くにしてもまだ時間がある。

折角、重い腰を上げて外出したんだから何かするか、なんて思った俺の足は自然とE組の隔離校舎に向いていた。

歩き慣れた1kmの山道ももう余程のことがない限り通ることはないのだと思うと寂しく思う。

道中、擦り寄ってくる野良猫やトンビを適度に可愛がりながら進む

と校舎の前に意外な人物を見つけた。

「乃咲。キミも来たのか」

「竹林？良いのかよ、メイド喫茶に居なくて」

眼鏡をかけた男子。我らの保健委員、竹林さんである。

珍しい。休みの日はメイド喫茶で過ごすと言って憚らなかつたコイツがこんな所にいるとは。

「どうしたんだ？制服なんて着て」

「理事長に呼び出されたんだよ。A組行きの中で」

「……ああ」

合点がいったらしい。頷くと彼はE組の校舎に視線を向ける。その様子からなんとなく、彼がここにいる理由を察した。多分、見に来たんだろう。この4ヶ月を過ごした学舎を。

「初め、ここに落とされた時。終わつたと思った。家族に見放され、クラスメイトたちに後ろ指を指され、周りはその扱いを迎合するしかない僕と同じ人種。もう2度と這い上がることは出来ないと思った」

竹林は様々語つた。E組に落ちるまでの苦悩、落ちた後の絶望。家族に家族扱いされない孤独。

「けど、ここで殺せんせーに出会つたことで変わることが出来た。要領の悪い僕に合わせた勉強法を考え、手を変え品を変え、勉強の仕方を教えてくれた。大きな目標に向かって努力する仲間たちに励まされ、最下位から首席まで上り詰めたキミを見て努力は無駄じゃないと信じる事ができた」

「……まあ、俺も同じだな。殺せんせーが来て、烏間先生と出会つてさ。この人に認められたいって頑張つてる俺を殺せんせーは見てくれた。目を逸らさないと云つてくれた。だからやる気を取り戻せた。なんだかんだみんなと馬鹿をやるのが楽しくて、一生懸命になったから今の俺がある」

「僕らはここで色んなことを学んだな」

「そうだな。間違いない」

しみじみ呟いて、ふと、思い付く。

徐に校舎の玄関に掛けられた鍵に向かって歩き出した俺を見て

キョトンと首を傾げる竹林。ネクタイを止める為の安全ピンを取り出し、南京錠を手早くピッキングして鍵を外す。

「掃除、してかないか？暇だろ」

俺の唐突な行動に目を白黒させるも、竹林は呆れたような顔をする
と眼鏡を人差し指で押し上げながら頷き、歩いて来た。

雑巾やら箒を準備し、いぎ、俺たちの教室へ。流石にしばらく使っていないかった所為か隅々に埃が溜まっている。

「……乃咲。キミはみんなに何か言ったか？」

「言わないよ。自分から言う必要はない。あくまで俺は自分の都合で抜ける。地球の未来か、家族との絆を取るか、なんて極論染みた相談されても困るだろ。俺もそんな相談されたら困るし」

「だが、僕らがしているのはみんなへの裏切りだ。一言弁解するのもしないのでは印象が違おうだろう。特に今のキミはみんなの中心人物だ。このまま去るのは良い印象を残さないんじゃないか」

「だな。裏切り者扱いされて当然だ。でも、みんな逆境に慣れてるし、それに立ち向かう術も身につけた。今なら『乃咲みたいな裏切り者に負けない！』ってバネになる可能性もあるだろ。そうなってくれたら万々歳だ。最後に汚れ役になってみんなの足場になれるならそれでいいさ」

「……………そうか。野暮を言っつてすまなかつた」

「野暮って程でもない。そんなことより手を動かそう。立つ鳥跡を濁さずって言うだろ」

「そうしよう」

こうして俺たちは今日まで世話になった教室にせめてもの誠意を込めるように黙々と掃除を続けた。

??

??

??

誰が見ても文句の付けようがない程に掃除にのめり込む。俺たちが満足するくらいにピカピカになる頃にはすっかり日は落ちていた。時計は6時50分を示している。

「いやあ……。掃除したなあ」

「キミがあそこまで凝り性だとは思わなかった。掃除に拘りでもあるのかい」

「いや、一度始めたらあちこちが気になってさ」

教室から出て、施錠する。教室への義理は果たした。あとは殺せんせーへ最後の挨拶をしないとな。

今日中に会えるだろうか。できるなら今日のうちにおきたいが……。あのタコのことだ。祭りをエンジョイしているだろう。会場に行けば会える気がする。……。あんまり気乗りしないが、祭り会場に行くとするか。

方針を決め、歩き出そうとした刹那。俺と竹林の前に黄色いマツハ20のタコ形の落下物が降って来る。

「やあああああつと！見つけたああああ!!」

案の定、屋台のおっちゃん風な変装をしたやたらとハイテンションな殺せんせーが涙を流しながら大袈裟に俺と竹林の手を掴むと感激を隠そうともせずにはブンブンと振り回す。

「ううっ……。キミたちだけどこを探しても見つからないものですか
ら先生、避けられていると思ってショックのあまり自殺するところでしたよおお……。」

「……。出て来るタイミング間違えたな、竹林」

「同感だね」

「図らずとも俺たちは地球が救われる可能性を潰してしまつたらしい。ごめんなさい、烏間先生。」

「とまあ、話はここまでにしておいて。2人とも、コレから予定は空いていますか？夏休みの最後の1日くらい何も考えずに遊びましょう！と言うことでみんなで夏祭り行きませんか？」

うん、心底考察通りで笑うわ。やっぱり祭りをエンジョイするつもりだったようだ。このタコ。

しかも服装やそれに付いてる匂い的に屋台で儲けようとしている。俺たちに資金稼ぎの片棒を担がせようってか。

……。でもまあ、いいか。殺せんせー直々の誘いだし。E組を抜ける

ことは祭りの終わりにでも伝えれば良い。

竹林に目配せすると、彼も同じことを思ったらしく。殺せんせーの誘いに2人で頷いてみせる。

俺たちが頷いたのを見ると殺せんせーは心底安心したような顔をした。なんでも、誘ってみたのは良いけど案外断る人が多くて地味に傷付いていたとかなんとか。

いや、当日に誘ってオツケー出す奴も中々居ないと思うけどな。俺もこんな状況じゃなかったら断ってたし。

「さあてとー・そうと決まれば捕まってください！開演まで10分！他の皆さんは駅前で集合してます！」

殺せんせーは口早に言う俺と竹林を服の中に突っ込んで一気に跳躍した。多分、見納めになる殺せんせーの懐からの光景を目に焼き付けながら俺たちは元仲間たちの所へ向かった。

65話 衝撃の時間

「なんだよ圭一。結局来たじゃん。珍しい」

「て言うか、なんで制服なんだよ、お前」

着いて早々に磯貝と前原に絡まれる。殺せんせーは断れまくったと言っていたが、案外、クラスの過半数は集まっている。

なんだかんだで付き合いが良いよな、コイツら。俺の暗殺に参加したり、前原のやり返しに乗ってきたり。

「ちよつと野暮用。理事長に呼び出されたんだ」

「マジ？なんかあった？」

「明日になれば分かるよ」

適当にはぐらかすが、特に追及されることはなかった。口々に『またロクでもないことされそう』とか呟く程度。

我ながら役者だな。みんなを裏切っておきながら堂々と輪の中にいる。俺つてば意外と男優なれるかもな。

我ながら考えてることが最低過ぎて笑えない。

「あ、圭ちゃんー！」

自分にげんなりしていると聞きなれた声が俺を呼ぶ。元気よく弾むような声。いつもは鈴の音のように心地よく聞こえる筈の彼女の声は今なんだか耳に痛かった。

声とカツカツと聞こえて来る足音を追うと、いつものように天真爛漫な満面の笑みで元気よく手を振る倉橋さんがいた。

「乃咲、来たんだ？」

「やることなかったしな」

浴衣を着込んで洒落つ気を出す女子たち。

女子つてか言う時に浴衣を着たがるよな。不思議だ。靴も普通のやつじゃないし、歩き辛かったりしないんだろうか。

「ねえねえ、圭ちゃん！この浴衣どうかな？」

目の前まで来てクルリとその場で一回転。薄い黄色の布地は嫺やかで袖口などに控えめにあしらわれたピンクの花が映える。

着物とかに詳しい訳じゃないし、ファッションセンスに自信があるわけでもないが、派手過ぎず、地味過ぎず、見ればそこにいると静かに主張するような良い浴衣だと思う。

「良いんじゃないか。派手過ぎず、地味過ぎず、ちょうど良い塩梅の落ち着いた浴衣だと思う」

「えへへ、ありがとう！」

「……………いや、その感想と反応はおかしいよ」

求められた感想を述べると頭痛でも抑えるみたいに頭を抱えた茅野がそんなことを言い出す。

その反応に対し、何かおかしなことをしたかと考えるが、俺の言動におかしな部分はない筈だ。

「……………だめだこりゃ。前原、アンタは乃咲をどうにかして。陽菜乃はこつちでどうにかしておくから」

「りょーかい。ほら、乃咲。ちよつと来い」

首を傾げる俺と倉橋さんをそれぞれ前原と岡野が首根っこを引つ張って少し離れた場所に連れ出す。その際、男子連中は俺たちに、女子連中は倉橋さんの方について来る。

「あのなあ、乃咲。褒めるところが違えよ」

「どうして?」

「どうして?…本気で言ってる?」

「…………?浴衣どうかなって聞かれたら浴衣に対する感想言うだろ。茅野もお前も何言ってるんだ?」

【圭一弱点メモ②：超弩級の恋愛下級者】

「薄々思ってたけど乃咲ってズレてるよね」

「だね…………。渚くんに同意だわ。乃咲クンって頭がキレる癖に変なところで妙な方向にズレてんだよねえ」

何故だか渚とカルマにまでデイスられ始めた。

千葉や杉野、竹林まで頷いてやがる。

「んまあ、圭一の個性だとは思いうけどな。でも普段の洞察力とか考察力をもうちよい人間関係に回した方が良くと思う」

こういう時、割とフォローに回ってくれることが多い磯貝にまで小

言を言われてしまった。一体どうしてだ？

「あの師匠にしてこの弟子ありだな。鳥間先生もお前も肝心なところで鈍ちんすぎんぜ。あのなあ、ああ言う風に感想を求められたらしっかり褒めるんだよ」

「……褒めただろ？」

「浴衣をなっ!? 女子の言う『これどうかな?』は女子語で『とりあえず身に着けてみたけど似合うかな?』って意味なの! 服の感想求められて布地やら柄を褒める奴があるかあっ!」

「いや、だってそれだったらシンプルに『似合うかな?』って聞くんじゃないのか? 倉橋さんの性格的に考えて」

「そ、それは……ないとは言えないけど……でも、普通はそうなんだよ! じゃあ聞くけどお前は倉橋が身体のラインが出るようなぴっちりデニム穿いてたら『良いデニムですな、淡い色が落ち着いた印象を与える』とか言うのか!」

「……おかしいのか?」

「おかしいよっ!? 来てる本人を含めたコーデを褒めろ! 服を褒めたいだけならユニクロ行け! いいか!? 女子語は複雑なの! 意味深な感じの『放っておいて』は『構ってよ』、『大丈夫』は『大丈夫じゃない』なの! 言葉の裏を読み!」

「おお、なんかタラシの前原が言うと言説力が違うな」

「言ってやるな。コイツなりに圭一たちを応援してるってことなんだ。それに案外間違ったこと言っていないと思うし」

前原さんが発狂してらっしやる。

俺、そんなに変なことを言ってたんだろうか。

「良いか? この後に倉橋と向き合ったら普段と違うところを見つけ、気付いたことを教えてやれ。それがモテ男への第一歩だ」

「別にモテたい訳じゃ……」

「良いからやれ!」

バシン! と背中を叩かれ、磯貝とカルマに両手を掴まれて捕まった宇宙人の如く倉橋さんの前に連れ出される。

倉橋さんも倉橋さんで矢田さんと片岡に俺と同じ形で引き摺られ

ており、俺の前まで来ると解放され、背中を押されていた。

「えつと……圭ちゃん。どう……かな？」

チラチラと俺たちを逃さないと言わんばかりに包囲する他のメンツに目をやりながらおずおずと聞いて来る。

どう言つたものかと素で悩むと倉橋さんの後ろにいる岡野、片岡、矢田さんが恐ろしい形相でこちらを睨み、後ろの男子たちからは短い嘆息が聞こえて来た。

ほんと、どうしてこんなことになったのかを考えながらゾーンに入り、倉橋さんを観察する。

普段と違うところを見つけて、気付いたことを伝える。そんなことを言うからには前原は倉橋さんの変化に気付いているのだろう。注意深く彼女の容姿を観察してみる。

普段と違うところを真っ先に挙げるなら浴衣を着ているところなんだろうが……流石にそんな単純なことではないだろう。そんな至極単純明快なことで前原や女子連中があんな怖いオーラを出すとは思えないし、服装程度でギャーギャー言うなら私服や制服を見るたびに一言言わなきゃいけないくなる。

なんだ？どこが違う？

これまで接してきた中で出来上がっていた倉橋陽菜乃という女子の人物像を脳内でトレースする。

常人の何十倍にも引き延ばされた3秒間をたっぷり使って脳内イメージと現物を比較してようやく普段との違いに気付く。

「……前髪の毛先、整える程度に切った？具体的に2〜3mmくらい。あとは唇？リップクリーム変えたかな……？」

「っ…分かるの?!」

倉橋さんが驚いたように顔を上げる。その反応から察するに外れてはいないようだった。とりあえず安心。これで他の連中にグチグチ言われずに済むだろう。

俺は後ろに陣取る前原さんに振り返り「やってやったぜー!」と言わんばかりにグツと親指を立てて見せる。

「ちげえよ!!?」

「ええっ!？」

「確かに洞察力と考察力を回せって磯貝は言ったぞ?でもそう言う意味じゃねえの!いや、着眼点は良いんだけども!求められているのはそんなハイレベルなことじゃねえんだってば!」

「……………乃咲。ここまで鈍いのね」

何故だが前原からは微妙に肯定されながら大部分を否定され、速水さんまで頭を抑えて呆れるように俺を見た。

「うーん……………もう正解でいいんじゃない?」

「だね……………ほら陽菜ちゃん嬉しそうだし」

「……………そっか、気付いてくれたんだ……………えへ……………」

「まあ、確かに普段からしつかり見てないと分からない……………って言うか、見ても気付かないよ普通。少女漫画にありがちな展開だけど現実でやれちゃう人初めて見たよ」

賞賛半分、呆れ半分。いろんな視線を受けながら別に変なことはしてないよな?と自分の言動を再確認。

うん。別におかしいことはしてないだろう。……………あ、でも確かにビッチ先生の女子の変化は褒めろって教えは守れてなかったな。そこは反省するべき部分なのかもしれない。

「ま、一旦これでヨシとしよう。ほら、祭り回ろーぜ!」

「だね、たこ焼き食べたいなあ〜」

みんなはきりかえたのか、すっかり祭り気分で歩き出してしまふ。そんな中で腑に落ちず、1人残る。

「乃咲、乃咲」

「ん?どーした、茅野」

1人で首を傾げていると茅野に肩を突かれ、少しだけ屈むと耳に手を当ててボソボソと耳打ちして来る。

「こう言う時はまず、浴衣が似合ってるって褒めてあげるんだよ」

「——まじで……………」

「マジ」

指摘に思わず思考停止。え、じゃあ何?俺ってば深読みし過ぎた? シンプルに浴衣似合ってるよで良かったのか。

「難しいな……。人間付き合いつてのは」

「うーん、乃咲が難しく考えすぎなだけかなあ」

苦笑する茅野。……そう言えば、俺、茅野が満面の笑みで笑ってる見たことないな。いつも苦笑というか愛想笑いというか。本心から楽しくて笑ってるつてところを見たことない気がする。

いや、別に満面の笑みがないのがおかしい訳じゃない。神崎さんとかいつもクールに微笑んでいるけど、割と苦笑と愛想笑い気味な部分が多くて、その上で満面の笑みは見たことがない。

でも、そこは大和撫子というかザ・清楚な日本人つてイメージのある神崎さんならはしたなく声をあげて笑わないつてのは別に不自然ではないように思う。

しかし、茅野の場合はなんとなく不自然さを感じる。人懐っこくて、いつも渚とか誰かと一緒にいる元気つ子つてイメージだからか、茅野の笑い方に不自然さを抱いてしまっている。

「……う・乃咲？ どうしたの？」

「いや……。あー……。うん」

見ていることに気付かれて、茅野が視線を向けてくる。キョトンと不思議そうに小首を傾げて。

なんか、一度気付くと気になるもんだな。例えば茅野の真顔を見たことがない気がする。常に誰かと一緒にいて、常に微笑を浮かべて、その癖に感情出して笑うのは苦笑と愛想笑いだけ、と言うのはなんと言うか、アンバランスというか、違和感がある。

「ちよつと乃咲？ そんな風に見られたら流石に恥ずかしいよ？」

ちよつと朱色の差した顔で言う茅野。だが、言葉と裏腹に意識の波長には一切のブレはなく、心音に変化はない。

つーことは……これ、演技か？ マジかよ、女子つて怖いな。てか、これ演技なんだつたら相当な役者だぞ、茅野。

「じいい〜……」

「の、乃咲……？」

茅野を観察する。顔やら胸やら身長やら。そしてふと思った。誰かに似ている。顔のパーツとかなんか知ってる人に似てる。

誰だろう？人の顔なんてそんなにまじまじ見たことないからパツと出てこない。そんな俺が既視感を覚える顔ってことはテレビとかでよく見る芸能人とかだろうか？記憶の中を検索する。

「……あ」

思い出した。そう言えば最近は見ないけど天才子役って言われていろんなドラマとか映画に引つ張りだこだった役者がいた。

名前は……そうだ。確か――。

「茅野ってさ、磨瀬榛名に似てるよな」

「えっ……!?!」

茅野の心臓が跳ねた。芸能人に似ていると言われて驚いたんだろう。珍しく顔に動揺が出ていた。

「そ、そうかな?」

「うん。似てる……と思う。俺自身テレビとか詳しいタイプじゃないし、磨瀬榛名自体を最近見てないからぼんやりとそんな感じするな〜ってくらいだけだよ」

「へ〜。芸能人に似てるって言われるの初めてだよ。なんか嬉しいな〜」

心音が落ち着く。動揺は一瞬だったようだ。だが、見れば見るほど似ていると思う。というか、本人じゃないかってくらいだろ。今まで誰にも似てるって言われたことないってのはマジか？

女子とか、たまたま見た雑誌とかに載ってる役者とか芸能人が〇〇くんに似てる〜、〇〇ちゃんにそっくり〜みたいな会話してるイメージあるけどそう言うの一度もなかったのか？

……でも、まだ違和感。なんとなく、まだ頭の中に誰かの面影がチラつく。喉まで出かけているのに、口まで上がってこない歯痒さみたいなものを感じてしまう。一体なんでだろう？

「……乃咲ってさ、人を良く見てるよね」

「そんなことない。俺が本当の意味で人を見れていたのなら……俺はここにいない。もっと色々と上手くやってたさ」

「そうかな? 私は見てると思うよ? 乃咲がみんなに飛ばす指示とか周りのことを見てないと出来ないと思う」

「……………どうなんだろうな」

茅野から振られた話をつい考え込んでしまいそうになるが、その直前に前原や倉橋さんが手を振りながらこっちを見る。

「おーい！早く来ないと置いてくぜ〜？」

「圭ちゃん！カエデちゃん！金魚掬いやろうよ、金魚掬い！あと綿飴とかも食べたいよね〜！」

2人と同じようにみんなに呼ばれて、会話を打ち切り、合流する。考えてみれば、茅野が誰に似てるとか、もう俺には関係ない話だ。考えるだけ無駄。時間の無駄。E組への未練を断て。

何度目かになる意識の切り替えを行う。そうだ。明日からは竹林以外は全員他クラスの生徒になり、俺は暗殺教室の部外者になるんだ。俺が考えなきやいけないのは父とどう向き合うかだ。周りに気を取られるな。

「悪い悪い、茅野からレディーに対する接し方を教わってたんだ。めちゃくちゃ勉強になったよ」

「え、そうなの？」

「うん、乃咲ってば難しく考えすぎなんだよね」

「へ〜。乃咲くんはどんなことを教わったのかなあ〜？」

「女の価値は乳じゃねえ。誰の胸なのかだって」

「ちよっ!?そんなこと言ってないし！」

「……………いや、茅野っちなら言いそう」

「うん、言いそう」

「言うだろうな」

「だね」

「みんなして私に対してどう言う印象持ってるのかな!?うえ〜ん、矢田えもん〜みんなが微乳をバカにする〜！」

「ひっ……………もぎ取られる……………!?!」

「そんなことはないけど!?!」

祭りの雰囲気当てられてか、普段よりもテンション高め。俺と竹林以外の面子は楽しそうに戯れあっていた。

そう言えば殺せんせーはどこに行ったのかと思って周囲を見渡す

と、屋台の数軒に見覚えのある到底人間とは思えない巨漢が汗を垂らしながら焼きそばやらたこ焼きをこしらえていた。

必死だなあ、あの人も。来年には地球を爆破するかもしれない超生物が学校からの給料で暮らして、お小遣い確保のために祭りで屋台してるとか字面だけ見ると何言ってるかわからんな。

「——おや、圭一じゃないか」

殺せんせーを見つけてこの状況のカオスさに呆れていると、これまた聞き慣れた声が鼓膜を叩く。

そして、聞こえて来た声に対してみんなは凍り付いたように戯れ合いを止めて、俺の方。より詳しく言えば俺の後ろに立つパーリーピーポーに視線を向けてフリーズしていた。

聞こえて来る声と特徴的な”圭一”呼び。この学校で俺を下で呼ぶのは磯貝以外だと奴しかいない。

やばい、捕まった。嫌だ、振り向きたくない。すつげえ面倒臭い。つか、明日からコイツともクラスメイトになるのか。

げんなりするが、みんなの視線が俺を向く。うん、そりやそうだよね、呼ばれたの俺だしね。俺が振り向かないと会話とか色々進まないもんね。……うん、そうだよねえ……。

嫌だ。心底嫌だが、振り返る。

するとそこには予想通りに奴がいた。

見慣れた赤茶けた短髪に白いねじり鉢巻と仮面ライダークウガのお面を装備し、口には吹き戻し……ピロピロとかピーヒョロ笛と呼ばれる玩具を満足気に啜え。

水色の布地に星をあしらった浴衣を着こなした胴体もまた悲惨。右には水ヨーヨーと掬った金魚の入った小袋。肘にはたこ焼きと焼きそばの匂いがする袋をぶら下げ、左手は綿飴を握り締め、手首には巾着袋。背中に赤字で「祭り」と書かれていそうなハツピに袖を通した男がそこにいた。

「家まで呼びに行ったのにいないと思っただらこんなところに居たのか。電話にも出ないし、避けられてるのかと思っただぞ」

「……………避けてたんだよ」

思わず頭を抱える。そうなのだ。コイツ、なぜだか毎年毎年、夏祭りになると俺を誘いに来るのだ。わざわざ家まで。

俺が1人なら居留守を使うのだが、そこは祖父母の家。俺だけではないのは必定であり、わざわざ俺を訪ねてやって来た友人を名乗る人物を無碍に返すなんてしない祖母の所為で俺は毎年このパリピに付き合わされていた。

「え〜つと……浅野？」

「おや、誰かと思えばE組メンバーが揃っているようだ。珍しいな圭一、僕以外に一緒に過ごす相手がいたとは」

「キモい言い回ししてんなよ、パリピめが」

「酷い言い種だ。僕だってハメくらい外すさ」

「外し方を考えろや！普段めちやくちや澄ました顔してる奴がお茶目に祭り特有のアイテムをフル装備で現れると怖いんだよ！つーか他の5英傑はどうしたよ!?絡むんならそっち行けよ!」

『夏祭りの浅野さんのテンションには付いていけない。乃咲に任せる』だそうだ。良かったな、人望があつて」

「逆に5英傑からの人望どうなつてんの、お前。そもそも丸投げされるほどアイツらと関わりないし。と言うか、付いていけないんじゃないやなくて付いて行きたくないんじゃないやあねーのか!」

「どーどー、そんなにかつかするな。ほら、流石に祭りだからと言ってハメを外し過ぎて周りの迷惑になるのはいけない」

「お前のせいでこうなつてんだけどな!」

「そんなに怒りっぽかったか?お前、カルシウム不足かもしれないな。ほら、フランクフルトでも食べるといい」

「カルシウム要素はどこ——もがっ!」

「ちなみにカルシウム要素はフランクフルトに付けられているマスタードだ。このタイプのマスタードは100gあたり71mg程度のカルシウムが含まれているらしいぞ」

「んぐっ、もぐもぐ……!どっから仕入れて来やがんだ!?その無駄知識はよお!」

「……すっげえ。乃咲が完全にペース乱されてる」

「ああ、あの乃咲がツツコミまくってるぞ」

コイツ面倒臭せえっ!!?

5英傑の連中、こんな爆弾を押し付けやがって……! 『僕らは選ばれし者!』とか偉ぶってるならこの選ばれし阿呆をどうにかして見せろや! 本当に口先だけだなアイツら……!」

「け、圭ちゃんがあーんされてる……。私もまだやったことないのにい!ぐぬぬぬう……。!」

「え、陽菜ちゃん、今のそう捉えちゃう?」

「へえ、ふうくん。乃咲クンは女子よりも先に男子にあーんされちゃうんだ? 渚くん、ちよつと女装して乃咲クンにあーんしてみてよ。案外、変な扉開くかもしれないよ?」

「しないよ!?!なんでカルマくんはちよくちよく僕をからかったり女装させようとするの!?!」

口々に言いたい放題な連中に本日何度目になるかわからないゲンナリ。どいつもコイツも好き放題言いやがる。

なんか、色々と面倒臭く思ってしまう。主に浅野の所為で。ほんと何なのコイツ。実は友達いないんじゃないのか!?

とか思ったが、A組の連中とコイツの関係性を考えてみると何となくだが友人と呼べる間柄の奴はいなさそう。

A組の奴らがこいつに向けるのは尊敬と羨望と支配者に対する信仰心みたいなもの。考えてみれば友達にはならないか。

「わかった、今日くらいは付き合っつてやるよ」

「ん? おおう、どした圭一からそんな言葉が出るとは珍しいこともあるもんだな」

「そうだよな、友達と遊びたくなるよな、祭りの日くらい。邪険にして悪かったな、これからは出来るだけ優しく接してやるからな。頑張つて友達作ろうな、浅野」

「ちよつと待て、なんで僕がボツチみたいな扱いを受けている!?! 僕にだって駒友達くらいいるぞ!?!」

「駒と書いて友達と読むのを素でやってる時点で健全な友人関係とは言えないんだぞ、お坊ちゃん」

「止めろ、その哀れみの目を今すぐ止めろお！友達くらいいるわバカ！見てろ、今すぐに5英傑を集結させてやるからな！」

意外、ボツチ属性が浅野の弱点だったらしい。知らず知らずのうちに弱点を攻撃しまくって浅野の撃退に成功した。

隣れ浅野。実はボツチ系なのを気にしていたのか。まあ、アイツの場合は孤独というより孤高なんだろうけど。

「浅野と乃咲って実は仲良い？」

「一年の頃は基本一緒に居たもんな」

「つか、浅野ってあんなキャラしてたっけ？」

「圭一の前だとなんかガキっぽくなるんだよ、浅野。圭一が絡むと途端にコミカルになるというか」

「圭ちゃーん、綿飴買って来たよ！はい、あーん」

「もごおっ!？」

こんな具合で色々あったが、どうにか気を取り直し、みんなの輪に入ったり、意図的に出たりして時間を潰した。

??

??

??

祭りも終盤。大体の屋台が店じまいに入った頃、大空に花火が打ち上がる。もしかしたら人生最後、見納めになるかもしれない花火を一瞥した俺は竹林と共にみんなの輪から抜ける。

「あれ？圭ちゃんと竹ちゃんは？」

「え？あ、ほんとだ居ない。トイレじゃね？」

後ろから聞こえてくるそんな言葉に何処か後ろ髪を引かれながら店じまいを完全に終わらせ、今日の稼ぎをニヤニヤしながら数えている殺せんせーの元に向かう。

殺せんせーは案の定、E組のみんなが荒稼ぎして店じまいまで追い込んだ屋台を取り込んで店舗拡大を図り、分身を駆使して複数の店をやっていた。

ほんと、何でもありな超生物だな。

「ヌルフッフ、いやあ、稼ぎました。材料費を差し引いても9月分のお

やつには困りませんねえ」

「いや、おやつ代どんだけかかる計算なんだよ？殺せんせー」

「おや、乃咲くんは竹林くん。どうでしたか？君たちも楽しめましたか？この夏祭りは」

「ええ。暗殺で培った技術で祭り荒らしをしてる様子は側から見ている面白かったですよ」

「そうですか！楽しめたのであれば何より！明日からまた勉強と暗殺です。今日ぐらいは2人も羽を伸ばして……」

「——殺せんせー」

満足そうに頷く殺せんせー。彼の言葉を遮るように竹林は彼の名を呼び、意識を自分に向けさせた。

満足そうに、楽しそうに、明日を語る殺せんせーには申し訳ないが、それでも俺たちは言わなきゃいけない。

「僕らは明日からE組にいません」

「——え……？」

「その事でお話しに来たんです。俺と竹林は夏休みの初めに理事長に呼び出され、選択肢を与えられました。このままE組に残るか、A組に戻るか。そんな選択肢です」

「そして決めました。僕らはA組に行きます。要領の悪い僕の為に手を尽くしてください、ありがとうございます」

「右に同じです。殺せんせー、今日までありがとうございます。先生のお陰で俺は今回のチャンスを掴めた。裏切るような形になってしまい、申し訳ありません。今まで殺そうとしていた相手に、そして来年地球を破壊するかも知れない相手に対して正しい言葉ではないかも知れませんが……お元気で」

「E組を……抜ける……？」

殺せんせーの消えそうな眩きは打ち上がる花火の音で掻き消され、その複雑な感情の声音は俺たちに届くことはなかった。

66話 裏切りの時間

迎えた新学期。僕らは始業式の為に本校舎に集合していた。夏休みの経験で僕らはまた一段階成長することができた。仲間と殺し、仲間と立ち向かった激動の夏休みを明けた僕らは夏休み前に比べてより一層結束が強まったと思う。

けど、夏休み気分を引きずるわけにはいかないので心を切り替え、勉強も暗殺も新しいステージへ。

殺せんせーの暗殺期限まで残り6ヶ月。

4月に比べて殺せる可能性は見えて来た。

「……………あれ？」

集会が始まるのを待っていると女子の列から戸惑うような、心配するような声が聞こえる。まだ静かにしてなきやいけない時間ではないので様子を見ると倉橋さんがキョロキョロしていた。

「どうしたの？」

「ねえ、カエデちゃん。圭ちゃん見てない？」

「乃咲…………？」

そんな会話が聞こえてくる。茅野と倉橋さんが普段乃咲がいる場所に視線を向けるけど、そこには居ない。

「ねえ、渚。乃咲見てない？」

「僕も見てないかな。杉野は？」

「俺も。どーしたんだろ？遅刻か休み？」

「……………なあ、そういうえば竹林もいないぞ」

僕らの動揺は前後のクラスメイトたちに伝播した。みんなして辺りを見回すけど、乃咲と竹林くんの姿はない。

誰か連絡受けてる？つて話が出た時、やけにカツカツと自分の存在感を強調するような足音がやってくる。

「久しぶりだな、E組ども」

声のした方を見るとそこには浅野くんを除いた5英傑が揃っていた。ニヤニヤとバカにするような、他にも意味がありそうなニヤけた

顔でやたらとフランクに話しかけてくる。

「ま……、お前らは2学期も大変だと思うがよ。せーぜー頑張ってくれや」

「めげずにやってくれギシシシシ」

謎にエールを残してさっさといく4人。その様子にみんながそれぞれの感想を語る。けど、その内容はとてもじゃないが好意的なものではない。

「出ばなから5英傑とか縁起悪りーな」

「しかもなんなのよ、妙にニヤニヤして」

「一学期の終業式じゃ、悔しそーな顔してた癖にな」

「……っていうか、5英傑(笑)よりも乃咲たちは？あと5分しないで集会始まつちやうわよ？」

「律、何か聞いてない……？」

『いえ。それが先程から連絡を試みているのですが、電源を切ってるのか、お2人のスマホに接続できないんです』

律ですら聞いてない。というか、スマホの電源を切ってる？別に不自然じゃないけど、何でわざわざ？

そんな僕の疑問に答えてくれる人はいない。結局、2人とも姿を表すことがないまま集会は進み、野球部が夏休み中の大会で入賞したと表彰されたという発表で集会も終わりに差し掛かる。

「……結局、圭ちゃんたち来なかったね」
「何かあったのかな？」

ボソボソと倉橋さん達が話す声が聞こえる。

2人の言う通り、あの2人は連絡の一つもなく集会に来なかった。元々が不良の乃咲はともかく、真面目な竹林くんまで集会をサボるなんてあるかな？仮にサボりじゃないにしろ、体調崩したとして、スマホの電源まで落として寝込むもんなかな？

そんな僕らの心配を他所に集会の司会をしていた荒木くんが式を締め括るなか、一言、僕らにとって寝耳に水な一言を告げる。

そして次の瞬間には僕らの心配を他所に……というか、僕たちの心配を裏切るようなあまりにも唐突で予想外。思わず言葉を失い、息を

呑む衝撃的な出来事が起こった。

「さて、式の終わりに皆さんにお知らせがあります。今日から……3年A組に2人、仲間が加わります」

「……2人……?」

その言葉を聞いた瞬間、嫌な予感が胸に訪れた。

2人。偶然にも僕らが今、気にしているここにいない仲間の人数とピッタリ同じ数だったから。

「昨日まで彼らはE組にいました」

「!!!」

その一言に僕らは戦慄し、唾然とした表情で荒木くんの言葉を待つ以外になくなった。

だけど、同時に納得してしまった。彼らがここにいない理由を。これ以上ない形で突き付けられた。

「しかし、たゆまぬ努力の末に好成績を取り、本校舎に戻ることを許されました。ここで彼らに喜びの言葉を聞いてみましょう!竹林孝太郎さんと乃咲圭一くんです!!」

聞こえた名前に今度は絶句した。呼ばれてステージ上に現れた彼らの姿を認めたくなかった。

今、目の前にあるこれは現実なのか。そんなことすら分からなくなってしまう。それだけ僕らには衝撃的な事だった。

なんで!?!どうして彼らがそんなところに!?!

みんなの心の声が聞こえた気がした。

『僕は——4ヶ月余りをE組で過ごししました。その環境を一言で言うなら……地獄でした。やる気のないクラスメイト達。先生方にもサジを投げられ、怠けた自分の代償を思い知りました』

「竹林くん……?」

『もう一度、本校舎に戻りたい。その一心で死ぬ気で勉強しました、生活態度も改めました。こうして戻って来れたことを嬉しく思うと共に2度とE組に落ちることのないよう頑張ります。——以上です』

静寂が支配する。僕らだけでなく、本校舎の生徒達も呆然と壇上の

彼を見ていた。けれど次の瞬間にはパチパチとステージ横に控えていた浅野くんが拍手をしながらスピーチを終えた彼を出迎えた。

「おかえり、竹林くん」

その一言、その動作は一瞬にして体育館全体を巻き込み、空気を揺るがす大歓声に変わった。

「おかえり!!よく頑張った!!」

「偉いぞ、竹林いい!!」

「お前は違うと思っていた!!」

巻き上がる歓声に竹林くんは今まで見せたことのない嬉しそうな笑みを浮かべ、ステージ横に戻って行く。僕らに一瞥もくれず去ってゆく彼が……昨日までとは別人に見えた。

「……………」

そんな歓声の中、静かに銀髪を揺らして乃咲がマイクの前に立つ。引かない歓声の矛先は今度は乃咲に向いた。

「うおおおお！乃咲いい!!」

「お前ならいつか戻って来れるって信じてたあああ!」

「すげえよ、頑張ったよお前!!」

「努力は報われるんだなあああ!!」

口々に努力を讃える言葉が飛び交う。まだスピーチを始めてすらないのに、彼はヒーローの様な扱いを受けていた。

……いや、違う。様ではなく、本当にヒーローなんだ。最下位から1位に登り詰めた元不良。成績がものを言うこの学校の中で総合1位の肩書きは他のどんな肩書きよりも価値がある。

同率で総合1位の浅野くんは常に全国模試で1位。そんな彼と同点というのは全国レベルで順位を見てもトップにいるのと同義。2回前のテストで最下位だった奴がそんなところまで登るのは並大抵の努力では不可能。

それだけの努力をして結果を出した乃咲は努力は報われるという言葉を証明して見せた、この学校の希望の星。

朝起きて登校するまで勉強、学校に着いたら授業、昼食中も自主勉強、終わったらまた授業、放課後も寝るまで勉強。四六時中教材を広げて

いる彼らにとってその努力が実ることをこれ以上ない形で見せつけた乃咲は一瞬にして学校中のヒーローだ。

割れんばかりの喝采。熱狂的なほどの歓声。僕らを置き去りに盛り上がり続ける体育館。しかし、それらの声を一身に浴びる彼は、そんなことを気にも留めず、冷淡な目をしていた。

——うるさい。

口がそう動いた。声を伴わず、表情を動かさず、ただ吐き捨てるように昨日まで僕らと言葉を交わしていた口が動いた。

その目はただただ鬱陶しそうだった。その視線は歓声を上げる生徒たちに向けられる。半ば殺気の混じった視線を。

「圭、ちゃん………？」

不安そうな倉橋さんの声。いや、彼女だけじゃない。僕らE組全員がその異様な空気に呑まれた。

昨日までの彼を見ていたからこそ、その違和感に気付いた。あんな雰囲気の乃咲を僕らは見た事がない。

昨日まで色んな彼を見た。不良扱いされて浮いてる時も、打ち解けて笑い合った時も、みんなで馬鹿をやって楽しそうにしてる時も、殺せんせーの暗殺に一生懸命になってる時も、烏間先生の訓練を頑張っている時も、みんなに指示を出す頼もしい姿も、仲間を励ます不器用で優しい一面も、みんなの為に無茶をする背中も。この学校の中で僕らだけが見て来た。

だからこそ、その身に纏う空気の異様さに気付いた。

僕らが視線を向ける中で乃咲は徐に指を立てて腕を持ち上げるとマイクスタンドにセットされたマイクを指先で突いた。

キイイイン！と体育館中のスピーカーから放たれる耳障りな電子音。誰もが口を閉ざし、顔を顰めながらも思わず乃咲に視線を引き寄せられる。静寂に包まれる体育館。

数秒前までの喧騒が嘘のように静まり返る空気の中で生徒のみならず、体育館の脇に控えている烏間先生や無理矢理着いて来たピッチ先生までもが乃咲に意識を引き寄せられていた。

「……………」

乃咲は左手に持っていたスピーチの原稿らしい紙をその場で破き捨てると相変わらずの冷たい目で口を開いた。

『お前ら、危機感足らないんじゃない？』

何を言い出すかと思えばいきなり喧嘩を売るような一言。啞然とするみんなを顧みず、淡々とした口調で続く。

『さつき紹介された通り、俺は昨日までE組だった。3年生の中では周知の事実だが俺は万年最下位、補習の常連だった。同級生に後ろ指刺されて、下級生に嘲笑される4ヶ月だった。だが、こうしてトップに返り咲く事ができた』

目は冷たい。その絶対零度と言っても差し支えない視線はただ射抜く様に僕ら以外の……E組以外の生徒に向いた。

『俺だけじゃない。今回のテスト、3年の上位はA組とE組がほぼ独占した。分かるか？お前らは嘲笑を向け、後ろ指を指した相手に呆気なく抜かれてるんだぞ。なんでもっと焦らない？なんでそんな余裕ぶっこいてられる？気付いてるか？お前らの大半がE組を馬鹿にできる立場にいないって。その自覚はあるか？』

感情のない言葉。ただ事実を突き付ける言葉。一見すると僕らの肩を持つようなセリフ。事実、そこには彼なりに僕らを庇おうとする意図はあるのかもしれない。

けど、それ以上に乃咲の言葉には含まれていた。侮蔑、嘲笑、呆れ、怒り、殺気。本校舎の生徒を見下すトゲが。

『俺たちが卒業した時、E組に落ちるのは俺たちを嘲笑したお前たち後輩で。E組が結果を出した時に肩身が狭い思いをするのはお前たち同級生だ。あとで惨めな思いをしたくないのなら精々、身の丈に合った態度でいるんだな。少なくとも、お前ら全員、最下位にごぼう抜きされる程度の実力しかねえんだから』

そのスピーチは本校舎の生徒を叩き落とした。E組ではない優秀な俺たちというブランドを一撃で砕き、強者、成績優秀者という自負を持っていた彼らを等しく弱者に貶めた。

自分という圧倒的な強者を、総合1位のE組出身者という肩書で浅野くんを除いた全校生徒を同じ土俵に叩き落とした。

本校舎の生徒たちは浅野くんに並ぶ新たな強者の誕生を前に等しく弱者となり、明確な恐怖を思い知った。

やらなきややられる。結果を出さねばE組以下の扱いを受けるかもしれない。そんな恐怖に支配された。

再び訪れる静寂の中、大半の生徒を危機感のどん底に漬け込んだ当の本人はただ向けていただけの視線を呆気なく外して音もなくステージ横へと消えていった。

竹林くんの時と違って、彼を労う歓声はもうない。現実を叩きつけた男への恐怖で僕ら以外の誰もが凍り付いていた。

??

??

??

全校集会は飄々とした浅野くんの号令で幕を閉じ、本格的に新学期の授業が始まる。暗殺も、勉強も1学期に比べてハードルの高いものになり、必死に食らいつかないとみんなの脚を引っ張り、迷惑をかけるかも知れない。

そんなことはみんなが分かっていることだけど、僕を含めたE組のみんなの視線は気が付けば黒板ではなく、主の居なくなった空白の席にばかり向けられていた。

「なんで……何も言わずに行っちゃったのかな……」

「前原くん……」

「俺さ、仲良くなれた気がしてたんだ。いつの間にか軽口言い合って、戯れ合うようになってさ。楽しかったんだよ、乃咲といるの。アイツだけじゃねえ、竹林もだ。いつも真面目で、冷静に考えてて、ウイルス盛られた時はそれがすげー頼もしかった。なのに……！なんなんだよ、アイツら……」

「しかも竹林の奴、ここを地獄とかほざきやがった」

「言わされたにしたらってアレはないよね」

仲間達はここに居ない彼らのことを考えて口々にさっきの集会で感じたことを語る。でも、その大半は動揺を吐き出すように口から言葉を出しているだけ。ただどうしたらいいか分からない不安が形を

変えて出ているだけだった。

「確かに竹林くんと乃咲の成績が急上昇したのは事実だけど、それってやっぱりE組で殺せんせーに教えられてこそだと思う。それさえ忘れちゃったのなら……私は彼らを軽蔑するな……」

片岡さんの悲しさ半分、失望混じりの言葉。俯いたままそんな言葉を紡ぐ彼女に意外な人物が声を掛けた。

「……ホントにそうなのかな?」

倉橋さんだった。

「陽菜乃……」

「確かにあんな言い方ないと思ったよ。でも、竹ちゃんが本心からあんな風に言ったとは思えない。あの原稿って理事長とか浅野くんが渡したんじゃないかな。そんなの渡されたら読まないって選択肢を取れる人はそうそう居ないと思う。竹ちゃんはああするしかなかったんだよ」

竹林くんの立場に立った冷静な分析。フオローする言葉に片岡さんは少し驚いた表情で顔を上げた。

「……少し意外。陽菜乃はどっちかと言えば前原くんとかひなたと同じこと感じてるって思ってた」

それは僕らも同意見だった。天真爛漫で素直。どちらかと言えば思ったことを真っ直ぐに表現する直情的な彼女が一步引いた視点で事態を見て、冷静に考えているのは少し意外だった。

「私だっと思って思うところはあるよ?でも、前ちん達なら分かるでしょ?竹ちゃん、普久間島では一生懸命になって倒れてる私たちを介抱してくれたよね。あの時だけじゃなくて、いつも冷静に私達にアドバイスをくれたし、何より勉強も暗殺も頑張ってた。きっと何か事情があるんだよ」

「倉橋……。うん、そうだよな。俺たちはまだ、アイツらが何を考えるのか聞いてねえ。失望するのも、悲しむのもまだ早えよ。放課後、聞きにいかねえか?アイツらの考えてることをさ」

倉橋さんの前向きな言葉を聞いてみんなが頷く。けど、その中で磯貝くんとカルマくん、そして寺坂くんはどこか考え込むような難しい

顔を隠そうともしない。

「どうかしたの？3人とも」

「いや。ちよつと圭一のことだな。明らかに様子おかしかっただろ。話してた内容だけ聞けばいつかの発破に近いものがあると思えた。でも、雰囲気かな……」

「アイツ、E組を抜ける気はないって言ってたのにどんな心境の変化があったのかなって気になってさく。なんて言うか、ステージの上から他の連中を見下ろしてた時の目つきがね。出会った頃の乃咲クンに戻ったみたいなき感じして」

「……俺はあの目つきを知ってる。2年の頃、ガキ大将を気取って歩いてた俺にくれた、道の真ん中に落ちてるゴミを見る目だ。周りに興味がねえ、ただ邪魔だ、目障りだ、耳障りだ、って要素でしか判断してねえ目つきだった」

3人の言葉にみんなが言葉を失う。彼らの指摘する通り、乃咲の様子は変だった。……いや、変だったのは今日だけだろうか？

「そう言えばさ、アイツ。旅行の最終日あたりから変なところあったよな。烏間先生と俺たちの関係をビジネスパートナーとか言ったり、ビッチ先生と烏間先生を覗き見る時も磯貝が声をかけなかったら1人で飯食ってたよな」

「……そうだね。千葉の言う通りだと思う。昨日の夏祭りも一応顔は出してたけど、思い返せば浅野に絡まれた時以外は一步引いてたって言うか、私たちから距離を取ってた気がする」

普段、みんなから一步引いた位置で虎視眈々と殺せんせーを狙い続ける千葉さんと速水さんも同じことを感じていたらしい。

「みんながどう思うかは分からないけど……私、圭ちゃんのこと応援してあげたい。もしかしたら、裏切られたって思う人もいるかも知れないけど、きつと理由があると思うんだ。E組から出て行っちゃうのは寂しいけど、頑張ってるところを沢山見て来たから。圭ちゃんにやりたい事が出来たら応援してあげたい」

「だな。言いたい事があるし、事情も聞きたいけど、俺も倉橋に賛成だ。みんな、とりあえず放課後になったらアイツらに会いに行こう。」

あの2人に前向きな気持ちがあるなら俺は送り出してやりたいし、応援もしたい」

「……………だれも応援しないなんて言ってるよ。よし！そうと決まれば放課後は本校舎にカチコミだ！あの優等生の皮を被ったメイドフエチとクール気取った特殊性癖持ちに会いに行くぞ！」

「うん！」

さり気なくディスプレイされる乃咲を憐れみながら僕たちの行動指針は決まった。2人が前向きなら応援する。そのためにまずは彼らに会いに行く。こうして僕らは速る気持ちを抑えながら授業に臨んだ。放課後、会えたらどんな風に話そう。そんなことをシユミレーションしながら。

そしてこの騒動をきっかけに知ることになる。乃咲の人生。どんな風に生きて来たのか、何を感じていたのか、彼が本当に望むことは、欲しいものはなんなのか。これまで断片的にしか知らなかった乃咲圭一という人物のことを。

67話 呪いの時間

放課後になった。待ちに待った放課後。帰りの挨拶もそこそこに教室から飛び出した僕らは山を駆け降り、本校舎を目指す。

時間をかけたら2人とも帰ってしまふかもしれない。そうなると話すタイミングが掴めなくなってしまう。出来るだけ今日中に彼らと話したかった僕たちはビツチ先生に呼び止められても、途中で忘れ物に気付いても振り返ることなく道を駆け降りた。

その甲斐あって、下校のピークに間に合った。部活に入っていない生徒たちが次々に互いに挨拶して帰って行く。

その中に見知った2人を見つけた。朝の集会で与えた印象の所為だろう。乃咲が通る道を他の生徒達は怯えたように避ける。

「竹林、無理して一緒にいる必要はないぞ。お前まで孤立する」

「お気になさらず。僕は好きでこうしているだけだ。本校舎の生徒は勉強ができてE組でない生徒には普通に接してくれる。今、キミという程度のことは足枷にすらならない」

「あ、そ」

2人が歩いて来る。周りの視線を集めながらスルーを決め込む乃咲と竹林くんが近づくと頭にシミュレーションした内容が薄くなり、白く染まって行く。

なんて、どうやって声をかければいいんだろう。そんなことを考え始めた時、磯貝くんがみんなを代表するように前に出て、2人の進路を塞ぐように彼らの前に立った。

「……………ちよつといいか」

けど、そんな彼もいざ2人を前にすると気の利いた言葉は出てこないらしく、呼び止めたのは短く端的な言葉。

乃咲と竹林くんの視線は磯貝くんを向いた後、裏山から出て来た僕らを捉えて、次に遠巻きに僕らを眺める本校舎の生徒に向けられた。視線を集めていると気付いたのだろう、乃咲は頭を掻きながら口を開く。

「場所を変えよう。流石に目立つし、一般の生徒には聞かれちゃいけない内容もあるだろうからな」

歩き出す。竹林くんは何も言わずに彼を追った。僕らも視線を巡らせ、頷くと先頭を行く乃咲の後に続く。

こちらに振り返ることなく、黙々と歩き続ける彼らと僕らの間に会話は無い。ただ気不味い沈黙だけが支配する。

そして人気のない公園に着くと乃咲たちは徐に足を止めて僕らに振り返る。今日、初めて交差した視線には僅かな後ろめたさを見取れる。乃咲たちは何も、僕らや暗殺がどうでもいいと思っているわけではないらしいことを感じた。

竹林くんは多少気不味そうに。

乃咲は真摯に僕ら一人一人と目を合わせている。乃咲のその視線は、どこか烏間先生に似ているような気がした。

「ここでいいだろう。見当はついてるが、念の為に聞いておこう。みんな、何の用だ？」

集会の時のような他者を弱者に貶めるような声音はない。でも、こんなに近くにいるのに、こんなにも真摯に見てくれているのに、乃咲と僕らに心理的な距離を感じた。

「聞きたいことがあって来た。お前も竹林も、なんで抜けるのに一言の相談もないんだ？」

「何か事情があるんですよね？夏休みの旅行でも竹林くんがいてすごく助かったし！普段も一緒に楽しく過ごしていたじゃないですか！メイドの描き方とか、律にメイドを教えたり、メイド喫茶でのイケてる過ごし方を教えてくれたり……!!」

「ほとんどメイドじゃねーか……」

「乃咲！一緒に触手プレイのなんたるかで意見を戦わせたじゃねえーか！唆るシチュ、刺さる性癖、フェチを刺激する触手の種類……！触手に絡まれる役はどんなキャラがいいのか！好きな触手もののエロ同人を見せ合ったじゃねえーか!!」

「うわ……。お前らそんなことしてたのかよ……」

岡島くと乃咲の性癖暴露に少しドン引きしながら杉野が呆れた

ようにツツコミを入れる。けど、切り替えたように彼もまた2人に向かって声をかける。

「乃咲、竹林。俺たちは別にお前達を責めたいわけじゃない。ただ、無言で出て行かれるのが納得できないだけなんだ。教えて欲しい。なんで誰にも何も言わずにそっちに行っちゃったのか」

杉野の言葉が僕らの全てだった。ただ知りたいたい。彼らがそっちに行ってしまった理由を。こんなことになってしまったけど僕らは仲間だと思っっている、乃咲も竹林くんも。

乃咲は僕らの中で誰よりも殺せんせーに攻撃をヒットさせられるアタッカー。そして作戦を立てて指示を飛ばす事の出来る指揮官。暗殺にとつてなくてはならない存在。

竹林くんはいつも冷静にその深い知識からの確な意見をくれるアドバイザー。普久間島で僕らが行動を起こしたのは彼の的確な医療知識があったからと言っても過言じゃない。

2人が抜けるのは戦力的に辛いし、精神的にも寂しい。でも、磯貝くんがさつき言ったように、前向きな理由があるなら応援したいとも思ってる。だからこそ、納得する為に2人の言葉が欲しかった。考えを聞いておきたかった。

「……聞かれて困る事ってあると思わないか？」
「え？」

乃咲から飛び出したのはそんな一言。自分のやりたい事や目標でもなく、まして言い訳でもない。問い掛け。

「それはお前にとって聞いて欲しくない内容だってことか？」

「いや、違う。俺たちがどうするべきかって相談したとして、お前らが反応に困っちゃうような内容だってこと。きつと答えられないし、内容がデリケート過ぎる。俺たちの今後を左右する問題に他人を巻き込んで良いのかって話」

「そんなの聞いてみないと分からないでしょ。乃咲たちが1人で抱え込むよりいい答えが出るかも知れないじゃん」

「じゃあ片岡。お望み通りに頼るとするよ。知恵を貸してくれ。地球の命運と家族の絆、取るとしたらどっちを取る？」

「……………なに、それ」

「これが俺と竹林の直面している問題だよ」

乃咲の言葉に僕は言葉を詰まらせた。地球の命運と家族の絆、そんな話が飛び出して来るだなんて誰も考えてなかった。

けれど、いつまでも沈黙は続かない。ポケットに入れていたスマホが震え、取り出すとそこに律がいた。

『お話は聞かせてもらいましたが、乃咲さんらしくありません。地球が滅びてしまったらその家族の絆も意味を成しません。地球を救った上で家族との絆を掴む。合理的なあなたならそう言う思考も出来るはずです』

「そうだな、お前の言う通りだよ。ぱつと見だと俺の行動は合理性に欠けるだろう。それでも俺はこの道を選んだ」

「乃咲クンも竹林も要らないの？賞金100億。殺りようによっちゃもっと上乘せされるらしいよ？それでも抜けるってことは分け前要らないんだ？2人も。無欲だね〜」

カルマくんが2人のケツを叩くようにそう言うけど、反応は芳しくない。賞金100億円に魅力を感じていないみたいだ。

僕らの言葉は何も響かない。そんな風に思いそうになったその時、竹林くんがようやく口を開く。

「……………せいぜい、10億円」

「……………え？」

「僕的能力で手に入る賞金の分け前さ。僕単独で100億ゲツトは絶対無理だ。上手いこと集団で殺す手伝いが出来たとして、僕の力で担える役割としては分け前はこのくらいがいいとこだね」

帰って来たのは竹林くんの冷静な自己評価。自分の能力を誇張も過小もしない真っ直ぐな評価だった。

そして続け様に語られる。彼の生い立ち。

「僕の家はね、代々病院を経営している。兄2人も揃って東大医学部だ。10億円という金額はね、うちの家族にとっては働いて稼げる金額なんだ。」出来て当たり前「の家なんだ。出来ない僕は家族として扱われない」

出来て当たりまえ。出来なければ家族として扱われない。僕らはそんな経験をした事がない。だから、今は黙って竹林くんの心境を聞くことしか出来なかった。

「僕が10億手にしたとしても家族が僕を認めるなんてあり得ないね。『良かったな、家一番の出来損ないがラッキーで人生救われて』そんな一言で終わりさ」

過酷過ぎる家庭事情。冷めている家族感。

「……………」

「……………」

乃咲と僕らは彼の一挙手一投足を見守る。

「この前、初めて親に成績の報告が出来たよ。トップクラスの成績を取ってE組を抜けられることを伝えてようやく言ってもらえた。『頑張ったじゃないか』って。その一言をもらう為にどれだけ血を吐く思いで勉強をしたことか……………!!」

絞り出すような、吐き出すような吐露。竹林くんの勉強に対する姿勢はE組の中で誰よりも本校舎の生徒に近いものがあつた。いつも追い詰められるように参考書を広げ、机に向かう姿。遊びに誘っても塾があるからと断る姿。

「僕にとつては地球の終わりより、100億円よりも家族に認められる事の方が大事なんだ……………ッ!」

かつてないほど感情がこもった彼のセリフは痛々しいものだった。けれど、いつも彼が見せていた姿の集大成をやっと認められたと語る彼のことを否定できるわけもなかった。

「……………圭ちゃんは?」

倉橋さんが乃咲を向く。それに釣られて自然とみんなが彼を見た。楽しむ時は楽しみ、笑う時は笑うけど、どこか飄々としていたクラスメイト。彼はどんな思いを抱えているんだろう。

「俺も粗方、竹林と同じだよ」

短い言葉。でも、僕らを納得させるには充分だった。彼の父親はそれ程までに有名だった。○○サイエンスとか、○○解明!だとか、科学系の話題が取り上げられる番組や雑誌が出ると必ず姿を見せる天

才科学者。

そんな父親を持つ苦悩。それを優秀な家族と比較して劣等感を抱いている竹林くんの話とほとんど同じと形容されては納得するしかなかった。だって、それは僕らには分からない事だから。

……でも、声を出す仲間がいた。

「圭ちゃん」

倉橋さんだった。彼女は一步前に出ると真っ直ぐに強い瞳で乃咲を見つめて、短く主張する。

「私は、圭ちゃんの言葉で聞きたいな」

「……………分かった」

2人の視線が交差して、数拍子。負けを認めるように乃咲が分かりやすく肩を落として倉橋さんに頷く。

何から語るべきかを考えるように俯き、空を見上げ、一瞬だけ苦い顔をすると観念したようにゆっくりと紡いだ。

「俺はね、倉橋さん。家族と会話した事がなかったんだ」

「……………」

「母は俺が生まれるのと同時に入れ替わるように亡くなった。兄弟はいない。家族と言えるのは父だけだった。けど、俺とあの人の間に家族の絆と呼べるものがあるわけでもなかった」

初めて聞かされた乃咲の事情。そういえば僕らがこうして彼の語りを聞くのは初めてな気がする。

乃咲はあまり自分のことを話そうとしなかった。

「テレビや雑誌に出るくらい有名で優秀な親父。彼に褒めてもらいたい、認められたい。それが俺の行動原理だったよ。幼稚園では誰よりも上手く絵を描いた。私立の小学校の入試も満点だったし、卒業するまで成績は常にオール5。地元から離れてここを受験したのも父が決めたらしかったから、それに応えたくて猛勉強して主席で入学した。でも、あの人は何も言ってくれなかった」

乃咲の目は遠くを見つめていた。僕らにも竹林くんにも目を向けず、ただ思い出すように空を眺めた。

「いつも父に報告したよ。友達がたくさん出来たよ、また満点取った

よ、また全部5だったよ、駆けっこで1位だった、主席で櫛ヶ丘に入った。けど、あの人から返ってくる反応はいつも同じ。『……ああ』『……そうか』たったこれだけ。父が二言以上で話すところなんかテレビでしか見た事がなかった」

冷めた家庭だと思った。寂しさのような悲しさのような、乃咲が初めて見せる感情の乗った声は僕らの想像を駆り立てた。容易にイメージ出来てしまった。幼い乃咲が喜び勇んで報告する様を淡白な反応で返す父親。

乃咲は会話の中で乃咲博士の話題が出ると明らかに不機嫌になる事があった。その原因がそこにあると思うとなんだか不思議と彼の気持ちが分かるような気がした。

「父さんは同じ反応しかしない。俺が2位以下になった時も、E組に落ちた時も、『……ああ』『……そうか』ってさ。あの時確信したよ、この人は俺を見てない。興味なんてない。どれだけ頑張っても、決してそれが報われることはないって。そう思ったらさ、頑張り方が分からなくなった」

学年1の秀才が、入学したての頃に肩で風を切って歩いていて彼が最下位に落ちた理由は僕らの想像以上にやるせなかった。

「でもこの前、総合一位を取った時、初めて父さんと二言以上で会話したよ。いや、そもそも”会話”すら初めてだった。初めてあの人は何を考えているのか、何を思っているのかをあの人の口から生まれて初めて聞いた。『頑張ったな、期待している』ってたったそれだけの言葉を引き出すのに14年掛かった……っ!」

乃咲の言葉に激情が混じる。誰も聞いた事のなかった彼の自分自身を語る言葉は悲痛な色で染まっていた。

「E組で殺せんせーを殺した後、時間をかけて……とか考えなかったわけじゃない。でも、次のチャンスがいつ来るかわからない。また14年掛かるかも知れない。俺はもうそんなに待ちたくない。そもそもチャンスがまた来るかすら分からない。だから俺は、A組に来ることを選んだんだ」

「……………圭ちゃん」

「さて、長くなったが俺の話はこんくらいにしよう。ここまでの話を踏まえた上でお前らに聞きたい。俺はどうするべきだった？地球の命運と家族の絆。別に俺じゃなくても救えるかも知れない地球の命と今の俺にしか応えられない家族からの期待。どっちを取るべきだと思う？」

その問い掛けに答えられる人はいなかった。磯貝くんも、片岡さんも、カルマくんも倉橋さんも。その問い掛けに答えを出そうとして俯き、考え、思考を巡らせ、何か言葉を絞り出そうと口を動かしては止める。

「…………ほらな、聞かれて困ることってあるだろ？こうなるって分かったた。だから何も言わなかったんだ」

「…………でも、それでもさあ…………！私は一言欲しかった。知らなかったよ、圭ちゃんがそんな風に思ってたなんてさ…………！答えを出してあげることが出来なかっただろうけど、圭ちゃんが望んでくれるなら、一緒に考えてあげたかった…………っ!!」

倉橋さんが涙を瞳に溜めながら絞り出すように乃咲に思いをぶつける。たぶん、彼女は頼って欲しかったんだ。

磯貝くんやカルマくんは元々顔見知りだったってことでそれなりに距離は近かった。2人を除いて僕らの中で一番彼に距離が近かったのは彼女だろう。だからこそ、頼って貰えないことが悲しくて寂しいんだ。

倉橋さんの気持ちを僕らは理解できてしまう。乃咲は作戦を立てる時、必要に応じて人を割り振るし、指示もしている。けど、それはあくまでも指示。彼にそのつもりがあるかは分からないけど、頼っているのとは違うと思う。

いつの間にか僕らの中心に居て、いつの間にか頼りにしていた僕らに頼られた事がなかった。

「気持ち嬉しいけどさ、人生とか生き方を決める選択肢を決めるのに他人は巻き込めない。そんな無責任なこととはしたくない」

「他人…………っ！」

乃咲の一言に倉橋さんは悔しそうに俯いた。

その様子を見て、思うところが無いわけではなかったようで、乃咲は一瞬だけ彼女に手を伸ばしかけるが、直ぐに引つ込めて、爪先の方を変え、踵を返すと彼の少し後ろにいた竹林くんの元まで歩き、振り返る。

「裏切りも恩知らずも分かっている。君たちの暗殺が上手くいくことを祈っているよ」

「まあ、そう言うこった。納得出来ない奴はそれでいい。許さないって奴は恨んでくれて構わない。俺たちとお前らの優先順位が違うっただけの話だ。悪いとは思ってる。暗殺、頑張ってくれ」

今度こそ振り向くことなく2人は歩き出してしまふ。

僕は……嫌だった。去って行く2人の背中がすごく遠くなってしまった気がして、思わず、前に出る。

「待つてよ、2人と——」

言い切る前に、腕を掴まれて止められる。

「神崎さん……倉橋さん……」

神崎さんはいつもよりも悲しそうな顔で、それでも何処か納得したような表情をしている。

倉橋さんは寂しそうで、悲しそうで。それでも、去って行く2人を止めようとする僕を制止した。

「やめてあげて、渚くん。親の鎖って……すごく痛い場所に巻きついて離れないの。だから、無理に引っ張るのはやめてあげて」

「私からもお願い……。2人を止めないであげて。初めて聞いた気がするんだ、あの2人の本音。何かをやりたいって主張もさ。圭ちゃんとか竹ちゃんも本当にやりたいことならさ、止める権利なんて誰もないよ……。寂しくても、応援しなくちゃ」

涙を堪えながら去って行く2人の背中を見送る彼女の覚悟と悲痛を感じさせる声に僕は出そうになっていた言葉を飲み込むしかなかった。遠くなって行く2人姿は見えなくなつて。

取り残された僕らは乃咲の残した問い掛けに対する答えを探す様に押し黙り、その日は解散するしかなかった。

『僕にとっては地球の終わりより100億円よりも、家族に認められ

る方が大事なんだ……ッ！』

『頑張ったな、期待している、たったそれだけの言葉を引き出すのに14年掛かった……っ！』

努力して結果を出した秀才2人の出した答え。ようやく吐き出したコンプレックス。その言葉は痛々しくて、でも、親というしがらみに捉えられているのも僕らの中には何人かいるから、その気持ちは理解できないものではなくて。

親からかけられた呪い。それは期待だったり、理想の押し付けだったり、自分への無関心だったり。形は人によつて違うけど。乃咲と竹林くんがそんな呪いに殺されていく様を感じた。

このどうしようもない呪いの解き方も抗う術も学校の授業は教えてくれない。E組から、殺せんせーから自立していく彼らの姿は自由なものではなく、背負った色んなものに潰されそうなものに見えてしまった。

68話 竹林の時間

今日も始業のチャイムは鳴る。でも、僕らの視線はやはりこれから授業が始まる教壇でも、黒板でもなく、今日も主がいなくなった2つの空白の席に向けられていた。

彼らの言葉は理解した。その気持ちも理解できる。だからもう、無理に引き止めることはしない。

口には出さないけど、各々がそう心に決めて、暗殺や勉強に集中しようと試みるけど、それでもやっぱり気になるものは気になるし、心配なことにはなんら変わりなくて。

「……………」

昨日、誰より2人を見守ろうと主張していた倉橋さんですら、その視線はやっぱり律の隣の空白に向いていた。

心配なんだろうって手に取るようにわかった。誰よりも乃咲を見ていた彼女はやっぱり昨日の態度や様子が気になるんだろう。僕らでも彼の言動には違和感を覚えたのだから。

「おはようございます」

考えても答えの出ない時間を過ごしていると、全身真っ黒に日焼けした殺せんせーが挨拶しながら現れる。

夏休みの時と同じくらいの真っ黒。ほんと、一体何をしたらそんな歯まで真っ黒焦げになるのか。

「なんで急に真っ黒なんだよ、殺せんせー」

「急ぎよアフリカに行って日焼けしてきました。ついでにマサイ族とドライブしてメアド交換も」

「ローテクかハイテクか分からん旅行だ……………」

「これで先生は完全に忍者！人混みで行動しても目立つ事は決してありはしないでしょう」

「恐ろしく目立つわ!!」

前原くんのツッコミが炸裂する。少しだけ沈んでいた空気が元気になるのを感じていると岡野さんが口を開く。

「て言うか、そもそも何のために？そんだけ日焼けしたらまた脱皮して戻すしかないじゃん」

至極もつともな指摘。このままだと夏休み中の様にどっちが前か背中かわからないからどうにかしてくれって言われて泣く泣く脱皮するところまで想像できる筈なのに、何で急に？

気になって首を傾げていると殺せんせーは勿体ぶることも、躊躇うこともなく、当たり前のように言った。

「もちろん、竹林さんと乃咲くんのアフターケアです」

「……アフターケア？」

「自分の意思で行った2人を引き止める事は出来ません。ですが、彼らが新しい環境に馴染めているかどうか。先生にはしばし見守る義務がある。もちろん、これは先生の仕事です。みなさんはいつも通りに過ごして下さい。暗殺希望者はスマホで連絡をしてくれればいつでも駆け付けますので」

「……………」

彼らが新しい環境に馴染めているかどうか。確かに気になるところではある。竹林くんはコミュニケーションが下手なわけじゃないけど、口数は少ない方だし、乃咲はお世辞にもお喋り上手ではない。彼は人見知りするタイプだろうし。

そんな風に考えていると、確かに心配になる。乃咲に関してはあんなスピーチをした後だ。孤立しているのは容易に想像できる。

「……俺等もちよつと様子見に行つてやっか。暗殺も含めて危なっかしいんだよ、あのオタクは。乃咲の奴も人見知りで教室でATフィールド張つてそうだし」

「だね。仮にコミュニケーション取れたとしても、あいつ等の場合、口を開けばメイドか触手の話題しか出ないし」

「何だかんだ、同じ相手を殺しに行つた仲間だしな。ここは一肌脱いでやっか」

「……………うん。それなら私も着いてくよ。2人が抜けるのはしよーがないけど、圭ちゃんや竹ちゃんが理事長の洗脳でヤな奴になつちゃうのは嫌だもんね」

「……………そうだね」

みんなも同じ結論に至ったのか、口々に殺せんせーに同行することを決めて、表情が柔らかくなる。

乃咲がATフィールドを張ってるの件で何人かその情景を想像したのか吹き出してる奴も居たし。

抜けた2人を心配してみんなが一致団結する。余計なお世話と言えど、仲間の事を思って団結できるのはこのクラス独特の強みだと思う。そしてきつとみんなそんなE組が好きだ。

「うんうん。暗殺が結ぶ絆ですねえ」

そんな僕らを殺せんせーは満足そうに眺めていた。

??

?? ??

E組を抜け、いよいよ始まる本格的な本校舎での授業。筆記用具などを机の上に出し、多少の緊張を感じながらチャイムと先生を待つていると新しいクラスメイト達が早速話しかけてくれた。

「授業の準備は出来てるか、竹林？」

「E組の先生は適当だったと思うけどな」

「A組の先生は進みが早いから取り残されんなよ」

「……………はは、緊張するな」

彼らの言葉に素直に頷く。事実、多少怖気付いているから。少なくとも殺せんせーの様な一人一人に寄り添った授業は絶対に有り得ないだろう。だから不安は勿論ある。

しかし、そんな僕に新しいリーダーが声を掛けてくる。いつになく爽やかな笑みに期待を讃えて。

「劣悪なE組からせつかく表舞台に戻って来れたんだ。竹林くんならついてこれるさ。大変だろうが一緒に頑張ろう。ね」

「……………ありがとう、浅野くん」

クラスのリーダーとして僕に声を掛けた彼は頷くと、颯爽と今度は乃咲の元に向かった。

2、3言交わして笑顔の浅野くんが席に戻ると同時に始業を知らせるチャイムが鳴り、授業が始まる。

ペンを握り、かつてない緊張を覚える授業に臨む。

しかし、僕を迎えたのは成績優秀クラスの洗礼ではなかった。

「……………」

進む授業、忙しなく動く教師のチョークと口。ひとしきり捲し立てるとさっさと板書を消して行く光景に呆然とする。

予想の斜め上……いや、この場合は斜め下と言うべきか。僕のイメージしていたのは極限まで無駄を切り詰めた合理的で効率的な授業。合理的かつ効率的でスピーディーであるが故に喰らいつくのが困難。ここで見るのはそんな景色だと思ったのに。

(やたらと非効率的だ。E組では1学期でやったところだぞ……!?三角関数は要点を絞った方が分かりやすいのに)

驚愕というより、困惑と言った方が近いかもしれない。教師はやたらと早口で黒板に書いては消し、書いては消し。生徒の都合は一切無視。着いて来れない奴をふるい落とす為の授業だ。

思わず、殺せんせーの放課後補講を思い出す。僕の好きな萌えアニメのオープニングの歌詞を替え歌にして覚えやすい様に手を変え品を変え、必死に教えてくれた彼の授業には遠く及ばない。

一言で言えば酷い。マツハ20のモンスターと比較することは間違っているのかもしれないが、それでも殺せんせー程の教師としての熱意を感じる事は出来やしない。

乃咲はどうしているだろうか。あまりに予想を裏切る酷い展開に、ついこれまで同じ教室で学んで来た仲間をつい盗み見る。

少し離れた席に座る彼の手は凄いスピードで動いていた。教師の板書を書く速度よりも遙かに素早く、一心不乱にノートに向かつてペンを動かし続けている彼は、黒板はおろか、教師すら見ていない。前方をチラ見することすらせずに左手で教科書を捲り、右手でノートに何かを書き綴り続けている。

おそらく、彼も早い段階でこの授業に見切りをつけたのだろう。となると、乃咲が今やっているのは自習か。

彼の隣に座る生徒がその異様なスピードの勉強に呆気に取られ、授業に集中できていない。

いや、眺めている場合ではないか。僕も見習わないと。この授業では復習すら難しい。

そう考えながら今日の授業はほぼずっと自習に近い状態で僕も乃咲も受けることになった。

ただ自習しているだけの時間は長く感じる。終業のチャイムを聞くと思わずため息が出る。

疲れた。勉強についていけないと感じる要素はなかったけど、E組との落差に一々驚いてしまった所為だろう。

迎えた放課後は開放感があった。

思わず伸びをしたくなる所を抑えて、ふと思い付く。折角環境が変わったんだ。僕なりに馴染める様に動いてみるか。

「なあ、放課後。何処かでお茶でもしないか？」

手頃な場所にいた2人。朝、僕を気遣ってくれたクラスメイトに何気なく声を掛けてみるが、返って来た答えはNoだった。

「悪い、馴染もうとして気イ遣わなくていいぜ、竹林！」

「俺等、すぐ塾だからよ。お前もそうだろ？明日からも頑張ろうぜ。じゃーな！」

2人はそう言うのと忙しそうに走って行く。

彼らに頷き、教室を眺める。ほとんどの生徒がいそいそと帰り支度をして、参考書や教科書を読みながら帰る。

みんな口々にE組から来た僕にも分け隔てなく声を掛けて、教室を出た。A組のクラスメイト達は勉強ができてE組じゃない人間にはごく普通に接してくれる。だけど、昔の僕みたいにも時間も勉強に追われてる。

余裕があるのは本当に出来る数人だけ。5英傑と新しく来た乃咲くらい。E組とはえらい違いだ。

「……………」

あれ、そう言えば乃咲は何処だ？帰りのホームルームが終わった直後辺りから姿を見ていない気がする。

「あん？どーしたよ、竹林」

5 英傑の1人がキョロキョロしていた僕に声をかける。

「乃咲、見てないか？」

「ギシシシ、アイツなら浅野くんに拉致られたぜ」

「……………そうか、ありがとう」

少し苦手意識を覚えながら一応の感謝。しかし、乃咲と浅野くんはどう言う関係だ？もともと互いにライバル視してたのは知っているつもりだったが、浅野くんがどうして乃咲に固執するのかその理由までは知らない。

……………知らない、か。そう言えば夏休みの頭に寺坂の奴が僕らのことを知りたいからってあちこちに連れまわしたことがあったっけ。殺せんせーに盗撮されるってオチ付きで。

やたら貪欲に生徒の情報を学ぼうとする教師。思えば寺坂もそう。アイツなりに僕らのことを知ろうとしてくれたんだな。

元クラスメイトと担任のことを考えながら、そろそろ帰ろうと腰を上げたその時、ふと視界に映った窓の外。茂みの奥で何かが動いていることに気がつく。

「……………」

顔は動かさず、視線だけ横にずらして窓の外を見てみると、なんかいることに気が付く。

人影が20人近く。頭にE組付近に生息している植物の葉を装備して生垣の奥から覗き込む。

あれは烏間先生から教わったカモフラージュ技術だ。でも、見ようによっては意味のない使い方をしている。E組と本校舎じや植物が違うんだから見る人が見りやあの余計に怪しい。

特に生垣からはみ出している黒いツヤツヤの物体は悪目立ちし過ぎていて気付かない方が難しい……………！

「……………」

何でだ？何で彼らはまだ、僕のことを知ろうとする？

僕らは彼らを裏切ってここに来た。そもそもE組での暗殺に僕は役に立っていない。この本校舎で言えば勉強が出来ないのと同じ。

落ちこぼれのエンド。必要とする価値がない。

ましてや、A組他人になった僕を見に来てまで何を学ぶ？何を学ぶ事がある？何の必要がある？学ぶ価値なんてあるのか？

——逆に僕は、何を学びに本校舎に戻って来たんだっけ……？

脳裏に過った疑問。家族に認められる事ばかり追いかけてやって来たA組。ただ、僕は家族に認められたくてここに来た。その結果はどうだ？何か、ここに来て学ぶことはあったのか……？

「やあ、どうだい？竹林くん。A組には馴染めたかな？」

「……いま、まあ」

気配すら感じさせずにヌツと現れた浅野くんに驚く。あの理事長の息子なだけあって彼も底が知れない。E組にいたら天然で成績上位者に名を連ねることも出来るだろう。

「突然だけど、理事長が君を呼んでるよ。逆境に打ち勝ったヒーローのキミを必要としている様だ」

底を悟らせない笑顔で言う彼に理事長室まで案内される。きっとまた何かあるのだろう。抵抗しても意味はなさそうなので黙って着いていくと、先客がいた。

「……………」

乃咲だ。床に鞆を置き、突っ立ったまま読書でもするかの様に参考書を開いていた。よほど暇だったんだろうか。

「乃咲」

「……………あ、ん？ああ、竹林。お前も来たのか」

何だろう、少し妙だ。僕が声を掛けると本気でこっちに気付いていなかったかの様な表情で僕を見た。

どうしたんだ？何と言うか、らしくない。普段、E組にいた頃から誰も気付かない部分にも洞察力を向けていた彼が僕の気配にすら気付かないと言うのに少しばかりの違和感を覚えた。

「ああ。理事長に呼ばれてると聞いてね」

「こっちもだ。帰ろうとしたらそのパリピにヘッドロック掛けられて半ば引き摺られるように連れて来られた」

「パリピとは失敬な。プライベートを自分なりのやり方で楽しんでい

るだけだと言うのに」

「その楽しみ方に悪意なく、楽しいからって理由で他人を巻き込む時点で充分すぎるくらいにパリピ適性あるよ、お前」

げんなりした様に言う乃咲に苦笑を浮かべて同意する。夏祭りのあの様子は確かに、パーティーピーポーだろう。

乃咲もいることを確認すると、今度は部屋の中が気になる。初めて入った訳ではないが、相変わらず凄い部屋だ。棚にはびっしりと優秀な教育者を表彰する盾やトロフィーが飾られている。

「そこら辺のものにはあまり……と言うか、絶対に触れない方がいい。以前、ここで理事長の私物を壊した奴がいた。そいつは問答無用でE組行きになったらしいよ」

「……君くらいだったらずいぐらい大丈夫なんじゃ？」

「ははは、まさか。理事長あの人は例え相手が息子であっても容赦はしないよ。油断ならない毎日さ」

浅野学秀。彼のこともやっぱりよく分からない。親子で同じ学校にいながら、仲良く話すのを見た事がない。彼は今の自分に満足していないのだろうか、理事長はここまで優秀な息子に満足してないんだろうか。僕が彼くらい優秀だったなら、うちの家族は喜んで認めてくれるだろうに。

「……………」

「ん？どうした、圭一」

「いや、ちよつと引つかかっただけ。この理事長室で浅野先生の私物を壊すって一般の生徒には無理な話だよなって」

「確かにな。あの人は戸締りを怠るタイプではないし、誰にも気付かれずに入れる場所でもない。戸締りは完璧で監視カメラも着いている他人のまして、無人の部屋に無断で入ると言うのは不法侵入に当たる。その上で器物破損を働いたとなればE組行きとか停学を飛び越えて退学コースだろう」

「だろうな。なのに、E組行きで済むつてのがちよつと釈然としない。一番難易度が高いこの部屋への不法侵入を常人には無理だと想定すると、実行者は理事長に招かれて入ったとかになるだろうが……。あ

の魔王に招待くらって目の前で器物破損とかそんな命知らずがこの学校にいるのになってさ」

「まあ、普通はいないだろうな。僕ですら出来ないし」「やらかした奴、シベリア分校に飛ばされてたりして」

乃咲と浅野くんが予想外の部分で盛り上がり出した。やっぱりこの2人、実は仲が良いのかも知れない。

「シベリア分校に送るのはE組行きですら生温いと判断した者だけさ。今のところ両手で数えられるくらいしか彼方には在校生はいないよ。ところで乃咲くん。先生を魔王呼ばわりするとは感心しないなあ。ネクロゴンド行き、手配してあげようか？」

そういうしていると理事長がヌツと入ってくる。気配も音もなく。やっぱりこの人も大概やばい人だ。

人類最強は烏間先生だと思っていたが、案外、この人も最強候補なのかも知れない。柊ヶ丘は人外魔境かも。

「どうも、理事長先生」

「こんにちは。待たせてしまったね。まあ、かけなさい」

理事長に勧められるがままに僕と乃咲は立派なソファーに腰掛け、浅野くんは理事長の傍へと移動する。

ふむ、どうやら彼も仕掛け人側らしい。みんなが所定の位置で落ちて着いたのを見計らうと理事長が語りだす。

「明日は、私がこの学校の前身である私塾を開いた日なんだ。柊ヶ丘ではその日を創立記念日として集会を行うのが通例でね。君たちのどちらかにそこでもう一度スピーチをして欲しいんだ」

「……スピーチ？」

「そう。私の教育の大きな成果としてキミたちを推したい。ご家族もお喜びになるだろうね」

徐に語り出した理事長の言葉は魅力的だった。家族が喜ぶ、たったその一言でも僕らには代え難い原動力なんだから。

「浅野くん、原稿は出来ているかな？」

「……はい」

「どれ……。まあ、こんなものだろう。君たちも読んでみて」

渡された原稿をまず乃咲が受け取る。一瞬だけ原稿に視線を落としたと思つたらあからさまなため息を吐いて僕に回してくる。

流石に理事長相手にその態度は不味いだろうというツツコミを内心で禁じ得なかったが、ひとまずは原稿に目を通す。

僕は、E組でクラスメイト達の腐敗を見て来ました。不特定多数の異性との不純異性交遊に夢中な生徒、食べる事にしか生き甲斐を感じない肥満生徒、暴力生徒、コミュニケーション能力に多大な問題を抱える生徒。

彼らは本校舎に戻る能力はありませんが、同じ柵ヶ丘の生徒として少しでも彼らを更生させてあげたいと思いました。

そこで皆さんにお願いがあります。どうか僕が彼らの生活の全てを監視・再教育する為に”E組管理委員会”を立ち上げる賛同を下さい。僕の元級友達に更生のチャンスを与える賛同を下さい。

一通り目を通して絶句する。酷い内容だ。誹謗中傷も良いところ。これを、こんな内容をみんなの前で……？

乃咲の態度も理解できる。確かに昨日は理事長に渡された原稿をそのまま読んだ。内容に思うところがなかった訳じゃないけど、それでもE組が地獄であるという部分を除いては嘘は殆どないように感じたから。

でも、これはない。前原は確かにタラシだったけど彼なりに真面目に付き合っていたようだし、暴力を振るつたとされるカルマも乃咲もきっと彼らならに理由があつてのことで、肥満生徒が原さんを指すのであれば、彼女は確が良い母親になりたいという夢があつた。決して自暴自棄な人間ではないし、職人気質な奴らも必要ならコミュニケーションを取るし多大な問題なんて言われるべき点は一つもない。

「さて、どうする？」

「俺はお断りします」

「理由を聞いても？」

「俺はE組のみんなを扱き下ろす為にここに来た訳じゃありません。貶めるなんてのはもつての外です」

「ほう。昨日、大勢の生徒に向かって宣戦布告。自分以下の成績の者

を等しく弱者に貶めたキミがそれを言うのかい？」

「事実、大体の奴が弱者だ。でも、俺は別に自分のことを強者だとも思ってません。俺も竹林も総合成績がトップクラスだっただけ。各教科のトップを見れば1位ではない。5教科のうち2つはそこにいる息子さんが首位ですが、それ以外の3つとついでに家庭科の首位はE組の生徒だ。成績のトップで鎬を削ったのはA組とE組。それ以外はほぼ外野に等しかった。その戦力外も良いところな外野共が騒ぎ立て、囃し立てるのが不快だっただけです」

「……なるほど。そういうことなら昨日のスピーチも筋は通っている。彼らを弱者と軽んじることが出来る生徒がいるのだとしたら、全教科と総合成績が首位である者だけ。そう言いたいのだね。分かった。そう言う事ならキミには頼むまい」

理事長は頷く。こう言う時の乃咲はやっぱり強い。普久間島のホテルでの一連の出来事は記録を取っていた律から聞かされている。ウィルスに加えて過労の極限状態で鷹岡相手に啖呵を切っていたり、今回もそう。ここぞと言う時は誰が相手であっても臆さない胆力には驚かされる。

「どうしても俺にこの内容を言わせたいなら、相応の奴をE組に入れることですね。E組はエンド。勉強も素行も悪いと言うのなら、E組内で50位以内に入っている生徒とE組以外の最下位から数えた方が早い生徒を入れ替えた方が貴方の望む弱いE組をキープできるし、生徒達にもE組は弱者の集まりだと認知させることが出来るのでは？」

「ふむ。確かに的を射ている。今後の参考にさせて貰おう。では、キミは先に退出していなさい」

「はい、失礼します」

乃咲を操ろうとすることを諦めたのか、それとも彼の言うことに本気で一理あると認めたのか、理事長は退出を促し、乃咲もまた特にアクションを返すでもなく、鞆を持つとペコリと頭を下げて足早に出ていった。

「……さて、キミはどうか。竹林くん」

「僕は……………」

「強者になるんだ、竹林くん。弱者から強者へと生まれ変わる。ご家族もきつと認めてくれるだろう。全校集会でコレを読んだら、キミのために生徒会長新役”管理委員長”の席を用意しよう」

”同級生をクラスごと更生した”その内申は中学どころか高校まで響く。一流大学への推薦まで見えてくるぞ！」

理事長と浅野くんが甘い蜜を垂らす。あまりにも魅力的な美味しそうな蜜。迷わず飛び付きたくなる餌。

それが彼らの掌で転がされる結果に繋がっていようとも、手を伸ばしたくなる魔力を秘めている媚薬。

「これはキミが強者に生まれ変わる為の儀式だ。かつての友を支配することで相応しい振る舞いを身につけるんだ」

肩に手を置き、諭すように、陥れるように囁く。

強者になれる、家族に認められる。それは何度も思うように魅力的だし、僕が何より欲しかった結果だ。

でも、その為の手段としてみんなを貶めるのか？もう何の価値もない僕らの様子を見て来てくれた彼らを？

それが強者としての在り方なのか？僕は、そんなことをする為に本校舎に戻って来たんだっけ…………？

「……………やります」

「よく言った、竹林くん。帰って原稿を入念に覚えなさい」

乃咲が理事長を魔王と呼称する理由が分かった。

僕は躊躇いながら、流されるように原稿を受け取り、昨日と今朝までの誇らしさを忘れた重い足取りで魔王の間を後にした。

69話 竹林の時間 その2

理事長室を出ると、律儀にも乃咲は待っていてくれた。

少し意外だ。他人をどうでも良く思っただろう、なんて印象はないけれど、だからと言って必要のない他人の為に時間を使うタイプには見えなかったから。少なくとも今の彼は。

「んで？お前はやるのか？」

開口一番に出てきたのはそんな問い掛け。何の前振りもない言葉だが、何を言っているのか理解するのは容易い。

僕は手に持ったスピーチの原稿を見下ろしながら口を開く。

「……分からない」

言葉は驚く程に重々しかった。家族に認められる、強者になれる。それは本当に魅力的な言葉だった。少なくとも、E組に落ちたばかりの僕が聞いたなら喜び勇んで飛び付いただろう。こんな風に悩むことなく2つ返事で、やらせてくれと懇願しただろう。

なのに、今の僕は悩んでいる。家族に認められる為に本校舎に戻って来た。だと言うのに、家族に認められる絶好の機会を与えられた僕は悩んでしまっている。

「分からないんだ。僕は、何を学びに戻って来たんだっけ」

「……お前が分からないことを俺が知るかよ」

答えを求めたわけじゃない呟きに彼はぶっきらぼうに答える。

答えて、カバンを持ち上げ、歩き出そうとしたところで動きを止め、ため息を吐き、居心地悪そうに頭を掻いて、口を開いた。

「この校舎で学べることはあくまで勉強だけだ。まあ、その勉強もE組に比べたら低品質だったけど」

「……………確かにね」

「お前がここに何を学びに来たのか、なんて問いに対する答えを俺は持ち合わせてない。持ち合わせてはいないが……。お前が学べること、学びたいことはこの校舎にはないんじゃないか」

乃咲は窓の外、E組のある裏山を眺め、指差しながら言葉を続ける。

彼なりの不器用な言葉で。

「あそこには怪物がいる。勉強を凄まじい精度で教えてくれるし、聞けば何でも答えてくれる担任が。身を守る術を教えてくれる国の工員が。各国を渡り歩き、何ヶ国語も学んだ努力の暗殺者。同じ境遇で逆境の中で努力する色んな才能を持った仲間が」

「……………」

「たぶん、世界のどこを探してもあそこ以上に成長できる環境はないんじゃないかな。お前は医者になりたいんだろう？なら、殺せんせーの知識は利用できる。それだけじゃない。奥田さんは科学と化学に強い。医療では必要な知識だろ？俺たちの歳でそんな分野で話しが合う同級生は中々いないと思うけど」

「キミは……………」

乃咲は、何を思っているのだろうか？今の彼は何を考えているのだろうか？ここで学べることはない、E組の方が学ぶ環境としては優れていると断言した彼は何を思っているのだろうか？

E組の教師たちを、同級生たちをここまで高く評価しておきながら。僕らから見たら比較的に強者の部類にいる彼はどうしてこんなところにいるのだろうか。

ここまでE組にいる方が成長できると言う彼は何を学びにここにいるのだろうか？何だか彼の言葉は矛盾している気がした。

「まあ、お前が何を重んじるかによるけどさ。親に認められることを取るのか、自分の将来に向けた成長を取るのか、あるいは自分にとって居心地の良い場所を取るのか。お前次第だ」

「……………そうだね。結局のところ、そこだ」

彼の言葉に頷く。結局はそこに行き着く。

彼らを捨て、強者への道を選ぶのか。

彼らと共に強者の首を狙う日々に戻るのか。

「帰ろう。こんなところで長々する話しじゃないだろ」

「ああ。そうしよう」

これ以上、ここで話していても答えは出ないだろうと思い始めた頃に乃咲が帰り支度を再開したので頷く。

頷き、彼に倣って下駄箱へ一歩踏み出そうとしたその時、不意に僕の僅か前にいた乃咲は足を踏み出すと共に膝が不自然に曲げて崩れ落ちるように体勢を崩した。

「乃咲っ!？」

慌てて支える。咄嗟に触れた体は制服越しだと言うのにはつきり分かるほどに熱を帯びていた。

酷い熱だ。関節が痛み、真っ直ぐ立つのもしんどいだろう。こんな状態で顔色一つ変えることなく過ごしていたのか？

「つと、悪い。ちよつとドジったわ」

「ちよつとドジったじゃないだろう。酷い熱だ。咳とか鼻水は？風邪じゃないのか？」

「どうってことはない。夏休み前から割とこんな体調だ」

夏休みの前から。確かに彼はその頃からふらついたりなど兆候はあった。過労はその頃からだったのだろう。

旅行で倒れ、今日までしばらく安静にしていたことで良くなったとばかり思っていたが……………。

「乃咲。まだ過労から抜け切れていないだろ。このままだとまた倒れるぞ。しばらく休め」

「そんな訳にもいかない。これが最後のチャンスかもしれないんだ。休んでいる暇なんてない」

言いながらフラフラと歩く乃咲。数歩だけ歩いて調子を戻したのか、何事もなかったみたいにスタスタ歩く。

一体、なにがそんなに彼を突き動かすのか。E組に入ってから僕は、彼にシンパシーを感じていた。優秀な家族を持ち、彼らと常に比べられ、評価される苦難。

感じているものは同じだと思っていたのに、彼と僕には決定的にスタンスの違いがある。僕には彼ほどの必死さはない。身体を壊してまで努力する程の必死さは分からない。

何となく思った。ここで僕が強者になる為の道を歩んだ先にあるのは彼のようなポロポロな姿なんじゃないのかと。

家族に認められる為に、手段を選ばず、努力を惜しまず、自分を顧

みずに進む乃咲の姿が僕のありえるかもしれない可能性だと思うと友人ではあるが、他人事のように思えなかった。

?? ?? ??

僕が帰路に着く頃。辺りはすっかり暗くなっていた。

流石にあの様子の乃咲を放置する訳にもいかず、拒む彼を無視して自宅まで付き添い、歩く帰り道。ふと、気配を感じる。

正面、街灯を背に曲がり角から顔を覗かせる真つ黒のツヤツヤした物体がこちらを盗み見るように立っていた。

「……………警察呼びますよ、殺せんせー」

「にゅやっ！な、なぜ闇に紛れた先生を!?!」

「隠れるの下手すぎるでしょう……………毎回毎回。メイド喫茶の時も、今日の昼間も、流石にバレバレです」

「にゅう……………。乃咲くんは騙せていたようですが……………」

「……………はあ……………。今の彼には余裕がないだけです。E組にいた頃の乃咲なら絶対に見破りますよ。それで、わざわざどうしたんですか、殺せんせー。もう殺しとは無縁の僕に」

あれで本気で隠れていたつもりなのかと少し呆れながら、少し位置のズレているメガネをいつもの癖で押し上げようとしたその時。顔からメガネの気配が消えた。

理由はすぐ分かる。僕の目の前でメガネを持った黒焦げの触手が得意げにうねっていたから。

「返してください。それ僕の本体なんです。外れたら56秒後にシャツトダウンしますがいいですか?」

「にゅやっ!?!そんなベタな設定ありました!?!そそそ、そんなこと言わずにまずはこちらを見てください!」

雑な設定を作って脅してみると驚きながら殺せんせーは鏡を見せつけてくる。目の前に出された鏡に映るのはメガネを外され、髪型を変えられ、やたら丁寧メイクを施されて別人のようになった僕だった。ものの見事に僕らしさが失われている。

「……こんなの僕じゃないよ」

「ビジュアル系メイクです。キミのオタク個性を殺してみました。ふむ、似合ってはいますが、コレジャナイ感がありますね」

「じゃあ、なんでやっただんですか」

「キミにはキミの良さがある。それを殺さないでほしい。それを伝えただけです。先生はね」

「……どう言う意味ですか」

「竹林くん。キミが先生を殺さないのは自由です。でもね、『殺す』とは日常に溢れている行為です。現にキミは……キミ達は家族に認められる為だけに自由な自分を殺そうとしている」

自由な自分を殺そうとしている。

その一言を「なにを馬鹿なことを。僕は選んでここにいます」って切り捨てるのは簡単だっただろう。

だが、何故か出来なかった。何故か？いや、理由は分かっている。僕は今日、何を学びに本校舎に戻って来たのか見失ってしまった。E組の先生に、授業に、仲間達に、その居心地の良さに未練があつた。未練があつたことを知ってしまった。

本当に納得しているのなら、未練なんて出来ないだろう。本当に心から望んでいるのなら、あの居心地の良さに後ろ髪を引かれたりしないだろう。思えば、授業中は殺せんせー達の授業を思い出して、休み時間に話しかけてくれるA組のクラスメイトたちという間も何処かでE組の仲間のことを考えていた。

なるほど。未練を覚え、後ろ髪を引かれながら家族に認められる為にA組にいる。確かに自分を殺しているのかもしれない。

「何事にも真面目に打ち込み、真剣に学ぼうとする姿勢はキミの美点です。でもね、それはキミが”そうしたい”と思っているからこそ価値がある。”そうしなければいけない”という強迫観念であつて欲しくないのです。自主的に握るペンでなら勉強は捗るでしょうが、握らされたペンは進みません。何となく、キミの良さが死んでしまうような気がしたものですから」

「でも僕は……」

「ご家族の期待に応えたい。無論、その気持ちを否定する気もありません。それがキミの努力の普遍的な意味でしょう。でもね、その思いに縛られてはいけません。それに縛られて、自分のやりたいこと、譲れないことを見失うのは本末転倒だ」

殺せんせーは僕に施したメイクを落としながら目を逸らすことなく、真っ直ぐに視線を合わせながら言葉を続ける。

「認められる為の努力」ではなく、「努力したから認められた」。

” そうした方がいいからやる ”ではなく、” そうしたいからやる ”。

先生はキミたちにそうあつて欲しい」

「それが出来れば苦労は……!」

「しないでしよう。でも、キミならいつか、キミの中の呪縛された自分を殺せる日が来ます。それだけの力がキミにはある」

メイクを落とし終えたのか、殺せんせーは最後に僕のメガネをかけた直すと触手でポンと肩を叩いて歩き出す。

「焦らずじっくり殺すチャンスを狙ってください。相談があれば闇に紛れていつでも来ます」

殺せんせーはそんな言葉を残して去って行く。

家族という呪縛に絡め取られた自分を、僕はいつか殺せる。その言葉が頭の中に残り続ける。

家族に認められたい。その根底は変わらないけど、僕は手段を選んではないのか？ A組に戻る、その報告でやっと振り向いてくれた父。だから、A組で頑張ろうと思った。それが認められる為の近道だと思っただから。

僕はしていいのか？ 家族に認められる為だけの努力ではない、自分が本当にしたい事に対する努力を。あの教室で、あの先生たちと、あの仲間たちと努力し、強者の首を狙う日々。

そうしたいからする、目的を果たす為の努力を。彼らは、家族は見てくれるだろうか。認められる為の努力をやめ、やりたい事の為の努力をして結果を出せた時、彼らは笑ってくれるだろうか？ 僕のことを見てくれるだろうか？

わからない。僕はここで希望的な観測が出来るほど前向きじゃない

いいし、彼らの考えてることを理解できない。

では、逆に考えよう。僕がA組に戻れることで彼らは認めてくれた。なんで？どうしてA組に戻れたら認めてもらえた？

それはA組が成績優秀者の集まるクラスだからだ。出来ることが当たり前で家族の中で落ちこぼれだった僕がトップクラスの成績を出したことを学校が認めたからだ。

彼らが認めてくれた理由。それは僕だってトップクラスの成績を取れると証明することが出来たからだ。

——ならば、A組である必要はあるのか？

答えは……どちらかといえば否だろう。僕にも出来ることを証明したから認められた。なら、これからも証明し続けることができれば、何処にいても同じことじゃないのか？

これからも努力を続けて結果を出し続ければ、彼らも僕のことを認めてくれるかもしれない。

じゃあ、E組に、元の生活に戻るメリットは？

あそこには、化け物がいる。凡ゆる分野に才覚を持つ賞金首、国から派遣されたエリート工作員、世界各国を渡り歩いた殺し屋、そして、それぞれが特化した才能を持つ仲間たちが。

そんな彼らと過ごす日々と、本校舎の生徒を慮ることのない授業と常に余裕なく、忙しく教材を広げ続けるしかない同級生たちと勉強する日々。一方引いた視点から見てもどちらが良い経験となるのかは火を見るより明らかだ。

無論、残ることにメリットが無いわけじゃない。A組にいた方が外面はいいから家族も継続して認めてくれるだろうし、浅野くんを筆頭とした5英傑はきつと将来大物になる。そんな彼らとパイプを持つるのはきつと良いことだ。それに今の僕なら理事長から強者になる為の教育も受けられることだろう。

でも、僕は彼らとのパイプ、強者になる為の教育を受ける為だけにA組に居たいのか？居心地の良い場所を捨ててまで、学ぶべき、学びたいことなのか？理事長の指示通りにE組のみんなを踏み付けてまで学びたいことがあって僕は戻って来たのか？

—— 答えはN Oだ。

「呪縛された自分を殺す……か」

殺せんせーの去って行った方を見て呟く。

彼は言った。いつか、呪縛された自分を殺せる日が来ると。

仮に、そんなことができるなら。そんな日が訪れるのなら、それは今であるべきなんじゃないだろうか。

自由な僕のまま、みんなに認められる様に努力する。そんな気概があるのなら、それは今であるべきだろう。

こんな僕をずっと気に掛けてくれる先生、わざわざ様子まで見に来る同級生。もはや、理事長に従ってまで彼らを扱き下ろす必要性を僕は見出せなくなってしまった。

そうなる決心が着くのは早かった。

何をすべきか、頭の中で考えながら、十数分前に別れた友人に電話をかける。連絡先だけ交換して一度も使ったことなかったその番号は2コール以内に応答した。

『……珍しいな、お前がかけてくるなんて』

「悪いね。少し話しておきたいことが出来た。体調が悪くないなら、このまま付き合ってくれないか、乃咲」

ついさつき家に送ったばかりの相手に電話をかけるのは何だか変な気分だが、一緒にあの教室を抜けた者として、僕の考えを伝えておきたい。伝えておくべきだと思ったから。

『まあ、いいぞ。送ってくれたお礼だ。んで？』

「乃咲。僕はE組に戻ろうと思う」

案外すんなり出た言葉。もつと伝えるのに苦労すると思っていた。側から見たら僕がやろうとしているのは出戻り。何しに行ったの？何しに戻って来たの？と拒絶されても仕方ない行為。

加えて、彼がそう思っているのかは分からないが、一緒にE組を出て来た仲間である彼を置き去りにする裏切りだ。

だと言うのに言葉はあっさりとした。それはきつと、僕なりにこの選択を納得していると言うことなんだろう。

『……そうか』

彼の言葉は短かった。短い嘆息の様な言葉。

そこだけ聞くとこちらに無関心で、何か特別思うこともない。そんな風に捉えられないこともない言葉。

でも、これまで彼と接して来て、この短い言葉の中に入っているのは決してそんな無関心ではないと僕は知ってる。

何か、言葉をまとめるような息遣いが電話から聞こえる。彼が沈黙して数拍子。相手のことを知らない奴だったら気まずくてたまらないだろう数秒を耐えると彼は口を開いた。

『戻る為の具体的な方法は？』

「……………まだ」

彼は引き留めなかった。かと言って直接的な肯定もない。だが、方法を聞いて来るのは遠回しな肯定だと思った。

僕の応えにまた彼は沈黙する。彼が否定するなら、こんな沈黙を置かず、最後に感情を揺さぶる様な言葉を選んだ筈だ。

『お前は理事長からスピーチの原稿を受け取った。受け取った以上はスピーチはやるしかない。それで、E組に戻るのであればその原稿の内容を壇上で否定しなきゃ駄目だ。だが、E組に戻る算段がない中でやってしまえば本校舎で理事長の圧力とか周りからの白い目で見られる悲惨な日々を置くことになる。つまり、明日の集会までにE組に戻る手段を準備しなくちゃならない』

「……………分かっている」

正直、流石だと思う。この一瞬でそこまで見通すなんて離れ業は僕には出来ないだろう。

それでも頷いた。僕は呪縛された自分を殺すと決めたから。

『……………なら協力してやる。明日の朝、6時に学校に来い』

その申し出は意外だった。策と一緒に考えるくらいはしてくれそうとは思ったが、直接協力してもらえとは思わなかった。

だが、気になることもある。乃咲の体調を考えればあんまり早起きが過ぎるのは良くない。睡眠はしっかり取るべきだ。

「……………気持ちは嬉しいが、体調のこともあるだろう。キミがそんな

「ことをする必要は——」

『明日6時。学校で』

プツツと電話は切れた。

こう言うところ、結構強引だな。嬉しい反面、無理するなど言うてるのに何だかんだで頼りにしている申し訳なさがある。

僕が彼にしてやれることは何かないだろうか？ 考えて見るが、答えは出て来てくれない。

結局そのまま帰途に着き、思考を巡らせながらも明日、待ち合わせに遅れない様に寝ることにした。

??

??

??

「時間通りに来たな」

『おはようございます、竹林さん！』

「……おはよう。何だか久しぶりに見た気がするな。キミらがそうして対面しているのは」

学校の手前に着くと既に乃咲が居た。彼が手に持つスマホの中に映る律と共に声をかけて来る。

夏休み前までは割と乃咲がスマホの中の律と話している姿を見る事が多かったが、夏休み辺りから見なくなってた。

「てつきり仲違いしたのかと」

『いえ、絶賛冷戦中ですよ？ ホテル潜入作戦のあとくらいから。私はずっと怒ってますとも』

「だからあの時はああするしか思い付かなかったんだって。律だって協力してくれたじゃんか」

『可能性があったと言うのは事実です。でも、それ以上に私が協力しないと1人で更に無茶すると思ったからですよ！』

「結果的に何とかなったろ？」

『結果論です！ それに怒ってるのはそれだけじゃないんですからねっ！ 乃咲さんはいつもいても……！』

「他に俺が何したよ？」

『いっつも一人で抱え込んでるじゃないですか！E組を抜けるのも、ご家族のことで悩んでるのもそう！それに、昨日のことだってまだ許した訳じゃないんですからね！』

「律をここまで怒らせるとか……何やったんだ、乃咲」

『聞いてくださいよ、竹林さん！昨日、夜に乃咲さんから連絡があったんです。最初は嬉しかったんですよ？何か話す気になってくれたのかって。実際に竹林さんの為の手伝いを頼まれたので、やっと頼って貰えたと思って嬉しくなったのに……。彼がなんて言ったと思います!?!』

「な、なんて言ったんだ？」

乃咲、律の口調まで荒ぶってるぞ。何したんだお前。

一応、聞き返してみると、律は怒り心頭、超絶不機嫌をアピールする様に腕を組み、乃咲のいる方から顔をそっぽ向いてかつてないほど荒れた口調で語る。

『やってくれたら無理のない範囲で言うこと聞いてやる』って何なんですか!?! やつと頼って貰えたと思ったら、私、まだメリットがないと動かない子だと思われてたんですか!?!』

あー、うん。乃咲が悪い。流石に庇い切れない。

『いつもの指示して、指示されてと言う関係ではなく、頼って貰えればお友達として力を貸したかったのに、ようやく頼ってくれたと思っただらこれですよ！乃咲さんの中で私はお友達カテゴリーじゃなかったんですね!?!』

「だから悪かったって。何事もメリット提示した方が話が円滑に進むと思っただよ。メリットがないと人って離れてくもんだろ？だから先手を打ったつもりだったんだ」

「さ、冷めてる。流石にそれは卑屈すぎやしないか？」

「そうか？割と芯を食ってると思うんだけど。現に俺もお前もE組に落ちる前にいた友達なんて本校舎に残ってるか？殆どいないだろ。俺も浅野くらいしかないしな。他の奴らは全員いなくなった。勉強を教えてくれるってメリットがなくなったら途端に居なくなる。体験談としては充分だろ」

何気なく、けれど、どこかうんざりと吐き捨てる様に言い放った乃咲に僕は思わず口を閉じた。

「ほら、そんなことよりさっさと済ませよう。理事長が通勤してきたら折角の作戦も台無しだ」

一瞬凍り付いた言葉を乃咲は気にも留めずに口を動かす。

『昨日、聞いた作戦では……私が監視カメラをハッキングして異常な状態を演出。その間に乃咲さんと竹林さんで侵入、理事長の私物をくすねてくる……という流れでしたね』

「理事長の？」

「ああ。昨日、浅野が言ってただろ。前、理事長の私物を壊した奴がいて、そいつは問答無用でE組行きになった。成績を落とさずにE組に戻るにはこれが手っ取り早い」

律に監視カメラをハッキングさせながら歩き出した乃咲は悪びれもせずにあっけらかんと言いつつ。

思わず絶句した。昨日あれだけ理事長室に忍び込んで彼の私物を壊すのは現実的じゃないとか訳知り顔で語り、浅野くんと絶対無理だとか結論を出しておいて実行するとか。

「……手助けしてもらってる僕が言うのもなんだけど、キミも無茶苦茶だな。そのおかげで助かってるんだけどさ」

「そうか？ 殺せんせーよりはマシだろ」

口を動かしながらも乃咲はテキパキと進む。校内に侵入し、下駄箱で靴を履き替えて、躊躇いなく理事長室の前まで僕を先導すると、ポケットから安全ピンを2取り出したと思えば徐にピンをまつすぐに伸ばし、ドアに付いてる鍵穴に差し込んだ。

鍵穴に差したピンをカチャカチャすること3秒足らず。ガチャリと鍵の開く音が聞こえた。

「ほら、さっさと盗って来い」

「……………鮮やかな手口だな」

「手口言うな」

いとも容易く行われる犯罪臭のする鮮やかな手口に思わず感嘆。夏休み最終日、E組の校舎を施錠する南京錠をピッキングするのを見

ていたから、鍵開けが出来るのは知ってたけど、まさか理事長室まであつさり開けるとは……。

乃咲に促され、理事長室に入り、直ぐには無くなったことが気付かなそうな位置にあるガラス製の盾を手早くくすねる。

部屋を出ると開けた時と同じように手早くピンで鍵穴を弄り、開けた時と同じだけの時間で施錠してしまった。

「……ピッキングなんてどこで覚えたんだ？」

「不良時代にカルマから教わった」

「にしてもだ。よく数秒でやれる」

「3秒なんて俺にとつては3時間みたいなもんだよ」

最後の言葉については理解できなかったが、案外、乃咲の持つ口クでもないスキルはカルマ由来なのかもしれないと思った。

そう思いながら盗ったばかりの盾を見る。これで後戻りは出来なくなつた。進みたい道の為に僕は退路を自ら絶つた。

「最後に聞いておく。後悔はないな？」

「それなりに。これだつて不法侵入、窃盗、器物破損だし」

「それが問題にされそうなら、俺達にも切れるカードはある。あのスピーチの原稿は捉え様によつては普通にパワハラみたいなものだ。こんな内容を全校集会で読ませようとしたなんて知られたら教育委員会の視察が来るだろうし、それが来たら学校中からいじめを受けてるに等しいE組制度もバレるだろう。そうなれば理事長は立場を失う。ゆする材料はいくらでもある」

「キミは敵に回しちゃいけないな」

「それほどでもない。それに、俺が聞きたいのはそこじゃねえ。本当にE組に戻るつて選択で悔いはないのか？それは努力してA組に戻つたつて結果を棄てることに他ならない。成績優秀クラスから2日で特別強化クラスへ出戻り。家族はこれまで以上に呆れるかもしれないぞ」

「いいんだ。もう決めた事だ。家族に認められたい気持ちは変わらないうが、それ以上にやりたいことが、メイド喫茶の次に居心地のいい場所がある。僕なりに自由に、やりたいから頑張つて、その結果で認め

られる様な成果を出す。それが今の僕の目標だ」

「……………そうか。なら頑張れよ」

乃咲は小さく呟く様に言う。律に任務達成を告げる。後のことは知らないと言う様に僕に背中を向けて歩き出す。そんな彼を僕は呼び止めた。聞きたいことがあるから。

「キミはどうする。このまま残るのか？」

問い掛けに一瞬だけ、ピタリと足を止めると乃咲はこちらに背中を向けたまま頭を掻きむしった。

「残る」

「どうして？キミだって分かる筈だ。E組とA組、どちらにいた方が成長出来るのか。他ならないキミが僕に説いたんだ」

いつもの如く短すぎる返事に対して更に問いを重ねる。

分かっている。僕がこんな問いを投げるべき理由はない。彼は彼、僕は僕。選んだ道が違うってだけのこと。人生を分けるかもしれない問いを他人に対して安易と投げるべきではないことも。

でも聞かずにはいられなかった。似た様な境遇にいる彼がどんな思いでいるのか知りたかった。

彼が僕なら、僕が彼ならどうするか。友人ではあるけど、一他人として聞いておきたかった。

「……………家族に認められたい。俺とお前の最大の共通点だ」

「そうだね。その通りだ」

「でも、違う部分がある。お前の家族は優秀なら認めてくれるってこと。俺の家族は優秀だった頃には何も言ってくれなかったこと。勉強できて、運動もできて、成績も良い。それでも父さんはどんなに努力しても何も言ってくれなかった」

乃咲は語る。一昨日、みんなに語った内容の更に奥。どうしてA組に来ることにしたのか。その訳を。

『お前には期待している、これから、これまでも。頑張れよ』ってさ。初めて言われたよ、初めて父さんと会話のキャッチボールが成立したよ。でも、俺は分からなかった。『なんで今更？』『なんで一番欲しい時に言ってくれなかったの？』『頑張れって何を頑張ったらいい』

の?』そんな疑問が尽きなかった」

声はそんなに大きくない。ポツポツと絞り出す様に、思いだす様に語る声は小さい。ほぼ誰もいない校舎でなければ雑踏に踏み潰されてしまいそうなくらいに。

「どうしてそんなこと言う気になったのか。なんでこのタイミングだったのか。真意は分からないけど状況証拠から判断したんだ。最下位から2回で頂点に返り咲いた。あの人は最底辺から這い上がったことを認めてくれたんだと思う。加えて、A組に戻れることに対しても頑張れって言った。俺がこれからも家族に認められ続けるにはA組で誰よりも努力を続けるしかないんだよ」

……そうか。彼の中には基準がないんだ。僕のように優秀なら認められる』、浅野くんのように『強者であり続けられれば良い』って明確な定規と努力の方向性を決める指針がないんだ。

父が認めてくれたから。その事実から遡って、なんで認められたのかを考えて、状況証拠と照らし合わせて、正解が分からない中で手探りで、自分の中で出た仮説を一個一個証明する様に努力するしかないんだ。家族の望む方向性を知らないから。

「これが俺がA組に来た理由の全容だ。満足か?」

「……ああ。ありがとう」

A組に来た理由の全容ではあるのだろう。だが、きつと、それでも乃咲圭一という人間を形作る要素の一つに過ぎないのかもしれない。父親へのコンプレックスだけと言うには、彼が僕や浅野くん、E組以外の生徒に取る態度は説明が付かないと思った。

乃咲は何を思っているのだろう。何で周りを軽蔑する様な、目障りで、耳障り、鬱陶しそうに見ているのだろう。

「んじゃあ、ここまでだな。少し気は早いかもだが、今のうちに言っておくよ。E組に戻っても頑張ってくれ」

「……………キミも。無理して倒れない程度に頑張れ」

「善処するよ」

今度こそ乃咲は去って行く。その足取りはやはり何処か心許ない。見る奴が見れば気付くだろう。たまにふらつき、体の軸がブレてい

る。今にも倒れそうって様子ではないが、身体が強張っているのは見ていて分かってしまう。

自分なりに自分の中の問題に限りをつけて余裕が出てきたからか、周りのことが気になり出す。似た様な境遇で、似た様な悩みを抱えていた彼に何かしてやれることはないだろうか？

僕は去って行く彼の背中を見送った。

70話 支配者の時間 2時間目

教室に着くと見知った2人が既に席で自習をしていた。つい先日、E組から復帰した乃咲圭一と竹林孝太郎。方や復帰早々の集会で大半の生徒を弱者というドン底に突き落とし、方や努力は認められると言う甘い幻想を体現した2人。

E組の連中にはさして興味はない。だが、E組の教育環境には興味がある。圭一はやる気を失っていたと思っただが、いつの間にか飛躍的な順位アップを遂げ、竹林も単なるガリ勉だったはずが、今は効率よく自習をしている。

彼らが復帰した初日の授業を僕は遠目に眺めていたが、彼ら2人も教師の話は大して聞いていなかった。

それぞれが教科書類を広げてはいるが、授業を聞いているフリをして自習しているのは直ぐに分かった。僕もそうしているのが大きいけど、本校舎に戻って来たばかりだと言うのに受講から即座にここの授業を受ける価値はないと判断した目利きには素直に驚かされたからだ。

成績だけで見れば底辺そのものだった圭一にもう一度やる気を与え、再び頂点に君臨させた手腕。

お世辞にも要領が良いとは言えなかった竹林に効率的な勉強方法を教え、成績上位に押し上げた実力。

そんなものを見せられてはE組自体に興味はなくとも、その環境に興味を持つのは半ば必然だろう。

確か、E組の教師は今までの雪村先生ではなく、今年から烏間とか言う人変わったんだっけ？この2人の目覚ましい成長はあの教師の手によるものか？だとしたら恐ろしい話だ。

竹林にはあまり絡みがなかったが、圭一の方は成績が落ち始めた頃から僕だっけどうにかしようとして動いていた。

中学でようやく出会えた対等な相手。お世辞にも天才とは言えないが、理解できるまで繰り返す不器用な学習方法で僕に唯一喰らい付

いて来た奴が落魄れる姿を見たくなかったから、友人として、ライバルとして、E組に落ちるまでは彼のやる気とか学習意欲を煽る様に接した。

けれど、そのどれもが上手くいかなかった。僕だけでなく、圭一の地頭の良さやスペックに注目していた父さん……理事長ですら、彼を奮い立たせることができなかった。

だと言うのに、圭一は再び頂点を手にした。もともと実力はあったのだから、やる気を出させるだけで良かった。でも、たったそれだけのことを僕らはできなかった。できなかったと言うのに、それを成し遂げた奴がE組で教鞭を取っている。

そんな奴がいるのだとすれば、僕は勿論、父さんと同等以上の支配者があの山にいると言うこと。

それは、一体どんな化け物だ？ つい思考を巡らせる自分に気付き、ついさっきまでの考えを否定する。僕はE組に興味がないと言ったが、それは違うのかも。現に僕は彼らを警戒している。

例えば、この2人だけじゃない。今回のテスト、5教科のうち3教科と、ついでに家庭科のトップもE組の生徒だった。全体順位で見ればまだ平均レベルだが、個別の教科では間違いなく油断ならない相手になりつつあるのは確かだ。

E組全体のレベルはこの4ヶ月で信じられないほどに向上したと言える。そう考えるとやはり自然と僕の興味はE組の環境にも向けられた。よくあの劣悪な環境でここまでやるものだと。

「やあ、おはよう。圭一、竹林くん」

「おはよう」

「……あぁ」

挨拶すると返ってくるのは2色の声。竹林のはつきりした声と、圭一の短いギリ挨拶とは受け取れない声。

この2人もこうしてみると同じ環境から出てきたとは思えないほどに対照的だ。純粹に強者になりたがる竹林と強者に限りなく近い位置にいなながら目指そうとしない圭一。

例えば、今の全校生徒の中でもこの2人は対照的な印象を持ってい

ることだろう。

みんなからの歓声を受け入れ、戻ってきた事、もう戻らない様に努力することを誓った竹林。

みんなからの歓声を拒絶し、うんざりした様な様子で全校生徒に最下位に追い抜かれた事実を指摘し、自分以外を半ばE組以下だと遠回しに扱き下ろした圭一。

彼らの家庭環境は察しがつくし、圭一の方は聞いているから知っているつもりだけど、ここまで似ていてここまで違うとはね。

「竹林くん。原稿はしつかり暗記できたかな？」

「ありがとう、問題なく覚えられたよ」

昨日渡した原稿をチラつかせながら薄ら笑いを浮かべる。そんな竹林に少し違和感を覚えた。昨日は原稿の内容に明らかに動揺していた癖に、今日は何処か余裕と言うか、妙に晴れやかだ。

「随分と気分が良さそうだな。何かあったのかい？」

「まあね。ずっと考えていたことに対して僕なりの結論を出せたんだ。だからちよつと浮かれてるのかもね」

「へえ。そいつはよかった。一皮剥けたってどこ？これはスピーチも期待して良さそうかな」

「ああ。楽しみにしていてくれ」

言葉を交わした感じ、やはり何か違和感がある。顔は笑っているが、本心から笑っている様には感じない。

そういうと竹林は自習に戻る。何気なくその様子を見ていたが、やはりその自習法は効率的だ。数学をやっている様だが、ノートにまとめているその内容は実によく要点をまとめている。

最低限、そこだけ理解していれば解けるポイントと、応用するならば押さえておきたいポイント。全てがバランス良くまとめられていた。ぶつちやけ、うちの早口だけが取り柄の授業よりこのノートを見た方が分かりやすいと思えるくらいによく出来ている。

たった4ヶ月でここまで身に着くものなのか？

そう思いながら、今度は圭一の様子を見る。

彼の正面の席に座り、振り向きながらノートやら手つきやらを見て

いたが、正直、こっちは次元が違う。ペンの動きと教科書を捲る速度が尋常じゃない。ただ捲し立てるだけが取り柄の教師たちより何倍も早い。コピー機が印字しているのを覗き込んでいるのかと思うくらいに早い。

しかも、その勉強方法も壮絶だ。竹林とは違う。竹林が要点や応用をまとめた参考書なら、圭一のノートはやり方から応用まで全てを事細かに網羅する解説書。

問題を一から取り組み、理解するまで解き続け、理解した内容を別のページに図解と共に残して行く。恐らく、読み書きが出来て、一定以上の理解力のある奴がこの図解の載ったページを見れば一切基礎知識がなくても問題を解ける様になるだろう。

正直、異常だ。分かりやすくまとめるとかそんな領域の話じゃない。普通に金を出せるレベルだ。

圭一はもともと、がむしゃらに理解するまで問題を解くタイプだったが、変なところで拍車が掛かっている。

確かに覚えたことを自分なりにまとめて図解するのは勉強方法としては良い手段だ。あとで見返せるし、まとめる作業には問題への理解力も必要になる。要点だけでなく、こんなに事細かに編纂できるのであれば、そりゃあ1位にもなれるだろう。

「……………浅野、どうかしたのか」

「いや。お前も竹林くんも何処でそんな勉強方法を学んできたのか気になってな。下位から最上位への成績アップの秘訣は僕でも気になる所だ。なんかコツでもあるのか?」

「身に付けたのはE組だな。あそこの教師はクソ熱心だ。生徒1人1人にあつた方法を見つけてくれた。あとは……………まあ、集中だな。周りからの余計な情報をシャットアウト出来るくらい集中できればこれくらいは余裕だろう」

そんなレベルで集中できて、更にその状態を何時間も維持出来るのはお前くらいだ、と言いたい気持ちを押しさえる。

コイツは確かに学術的には天才ではない。本人もかつての取り巻きも言っていた様にどちらかと言えば秀才だ。

でも、何かに集中して打ち込むことに関しては何に出る者はいない程の逸材だ。天才とか奇才とかそんな言葉は生温い。鬼才という言葉葉ですらその集中の才能を装飾するのに足りるかどうか。

僕は興味がある。周りから天才だの支配者の遺伝子とか小つ恥ずかしい呼ばれ方をしている僕に不器用な努力と他を寄せ付けない圧倒的な集中力を武器に喰らい付いてきた彼が肉体的にも精神的にも成熟した時、最終的にどれだけの領域に達するのか。

少なくとも、彼の到達する領域は僕や父の考える強者とは違う方向性に向かったとしても強者という位置付けであることは間違いないだろう。彼が望むと望まざるとに関わらず、な。

もしかしたら、僕が彼に拘っているのは、その到達点を間近で見たいからなのかもしれない。

……それにしても、またE組か。竹林と言い圭一と言い、今年のE組は一味違う。いや、この2人だけじゃない。度重なる理事長のE組視察と過度な干渉、野球部と見せた異様な試合、そして今回のテスト。明らかにあの山で何が起こってる。

僕は廊下の窓から見えるE組の山を見る。なんだ？何があるんだ？あの劣等生が集められた山で。

そんな心中で吐露した疑問に誰も答えられる訳もなかった。

?? ?? ??

そして、全校生徒が登校した後、予定通りに全校集会が始まった。この学校の創立記念日。別にわざわざ特別に集会をやるべき行事でもないと思うが、まあ、仕方ない。父さん……理事長が決めたことだ。大人しく生徒会長としての勤めを果たす。

「さ、話しておいで」

つつがなく進行する式。校長の話が終わったところで荒木の音頭。いよいよ竹林のスピーチがやってくる。

何処となく異様な雰囲気を出す彼の背中を押して、強者への第一歩を踏み出させる。壇上に立とうとする彼は何処か殺気立っている様

に見えたが、その真意を僕は直ぐには理解できなかった。

壇上に立ち、マイクスタンドの前に現れる竹林に生徒たちがざわつく。彼らの動揺も理解できる。この前スピーチしたばかりの奴がまた全校集会でみんなの前に立つ。

え？また？今度は何があるの？と、そんなざわつきが聞こえてくる。その気持ちは分からないでもない。

『僕のやりたい事を聞いてください』

そんな掴みと共に竹林のスピーチは始まった。E組が全校生徒から受けている待遇の再度周知とそれを実際に受けて来た彼自身の感想、厳しさや辛さ。そしてそこから抜け出せた喜びに続き、E組管理委員の設立の賛同を求める演説へ。

そうして彼は、弱者から強者へと這い上がったモデルケースとして大々的に全校生徒に認知される……筈だった。

竹林のスピーチは僕らのシナリオからズレ始めた。E組が受けている待遇の話から、僕と理事長の予期せぬ方向へと。

『僕のいたE組は弱い人の集まりです。学力という強さが無かった為に本校舎の皆さんから差別待遇を受けています。——でも、僕はそんなE組がメイド喫茶の次くらいに居心地良いです』

そんな誰も予想していなかった告白に誰もが凍り付いた。ステージ横から見える生徒たちは困惑した表情で壇上を眺める。

『……僕は嘘を吐いてました。強くなりたくて、認められたくて、皆さんや仲間たちに。でも、E組の中で役立たずの上、裏切った僕をクラスメイトたちは何度も様子を見に来てくれた。先生は要領の悪い生徒でもわかるよう手を替え品を替え工夫して教えてくれた。家族や皆さんが認めてくれなかった僕にもE組のみんなは同じ目線で接してくれた』

まずい。竹林に周りが吞まれつつある。このまま続けさせるのは良くない。そう判断した僕は歩き出す。

『世間が認める明確な強者を目指す皆さんを正しいと思うし、尊敬します。でも、僕はもうしばらく弱者でいい。弱いことに耐え、弱いことを楽しみながら、強い者の首を狙う生活に戻ります。それが、

今の僕のやりたいことだから』

「イカれたか……！今直ぐ謝罪して撤回しろ、竹林!!」

事態を收拾する為にステージに立った僕に対して彼は、その動きを制止する様にマイクスタンドの手前に置いていた何かを見せつけるみたいに持ち上げた。

どこか見覚えのある、半透明のガラス製の盾。その徐かつ唐突な行動に思わず足を止めてしまった。

『理事長室からくすねて来ました。私立学校のベスト経営者を表彰する盾みたいです』

……コイツ、いつの間に……!」

『理事長は本当に強い人です。全ての行動が合理的だ』

竹林は言いながら自分の制服のシャツに手をつ突つ込むと一本の鈍器を取り出す。木製のナイフに鉄板を貼り付けただけのお粗末な鈍器。なぜ、そんなものがそこから出てくるのか、とか、なんでそんなものを持っているのかとか。疑問は尽きなかった。

だが、そんな疑問を口にするよりも先に奴は動いた。

手に持つ盾、振り上げたナイフ。次の瞬間、まるで何処かで訓練でも受けていたかのような洗練された無駄の少ない動きでソレを盾に向かつて目にも止まらない速度で振り下ろす。

バシャアアアアン!と水面を激しく叩く様な音が体育館を満たし、ほぼ全員が呆気に取られて、呆然と眺めていた。

『浅野くんの話によると、過去にこれと同じ事をして本校舎を追放されてE組に落とされた生徒がいるとか。前例から合理的に考えると

——E組行きですね、僕も』

あまりにも突拍子のなさすぎる行動に凍り付いていた僕に向かってそんな風に語り、笑いかけると、彼はやりたいことはこれだけだと言いたげに、礼の一つも残すことなくスタスタ歩き出し、颯爽とステージ横に引つ込む。

この頃になって、ようやく気を取り直すことに成功した僕はそのまま教師のもとに向かっていく竹林を追いかけ、肩を掴んだ。

「待てよ。救えないな、君は。せつかく強者になるチャンスを与えて

やったのに」

「……強者？怖がつているだけの人に見えたけどね。君も、皆も。それじゃあね、短い間だったけど、戻って来た僕に話しかけてくれてありがとう、浅野くん」

下がって来ていた眼鏡を押し上げながら、竹林は言葉を紡ぐと振り返る事なく歩き出す。

「……ッ!!」

その立ち振る舞いに思わず歯噛みする。アイツの言葉に対して、僕や他の生徒がただ怖がつているという評価に対して咄嗟に反論することができなかった。

自主的に教師の元に向かい、困惑する彼らに連れられて出て行く竹林の背中を呆然と見送る。

端的に見れば否定しようのないくらいに弱者の癖に、この体育館の中は奴が作り出した異様な空気に吞まれている。この集会における支配者は理事長でも、僕でもなく、竹林だった。

?? ?? ??

E組の校舎裏のグラウンド。青空の下でいつもの様に暗殺に励んだ面々の前に烏間が立つ。

その手には広辞苑並みの分厚さを持った本が一冊、その他、教科書の倍はありそうな本を数冊が積まれている。

「2学期からは暗殺にさまざまな新しい要素を組み込む。まず、その一つが火薬だ」

「か、火薬!?!」

「そうだ。空気では出せない、そのパワーは暗殺の上で大きな魅力だ。しかし、かつて寺坂くんたちがやった様な危険な使用は絶対に厳禁とする」

烏間の言葉にバツが悪そうな表情をする、寺坂、吉田、村松。しかし、その3人に向けられているのが怒りとか悪意ではなく、苦笑であるあたり、周りのメンバーも彼らがそんなことはもうしないだろうこ

とを信じている証拠だろう。

「その為には、火薬の安全な取り扱いを一名に完璧に覚えてもらう。俺の許可とその一名の監督が火薬を使う時の条件だ。さあ、誰か覚えてくれる者は？」

「(うつわあく分厚……っ！)」

「(やだよ、あんな国家資格の勉強まで……)」

半ば無茶振りとも取れる烏間の言葉にほぼ全員が苦笑しながらどうしたものと考えだしたその時、すつと軽い荷物でも受け取るみたいに彼の手から書籍類を受け取る少年の手が伸びた。

「勉強の役には立たない知識ですが……まあ、これもいずれどこかで役に立つかもね」

言葉から仕方なさそうな雰囲気を取れるが、その声音は穏やか。嫌々やらされる仕方なさではなく、気が向いたしついでに寄り道するか。という軽やかなフットワークを感じさせる。

烏間の手から教材を受け取った彼に対してクラスメイトたちが微笑みを浮かべ、烏間自身、件の人物を見て、嬉しそうに口元に微笑を浮かべながら挑発する様に言った。

「暗記できるか？竹林くん」

その問いに竹林はフツと笑みを浮かべ、トレードマークの眼鏡を人差し指で押し上げながら答えた。

「ええ。二期オープニングの替え歌にすればすぐですよ」

まるでそれが自分の役目だと言いたげな雰囲気のある彼には、以前の様な焦燥感も痛々しい程の必死さもない。

悩みに対して自分なりの答えを出し、やりたい事を自分の自由で選んだ竹林はこの場の誰よりも穏やかに笑った。

?? ?? ??

「……………」

撤去される机と椅子を眺める。

そこに座っていた奴は今頃どうしているだろう？あの山で仲間た

ちも楽しく笑いながら今日も殺意を研いでいるのだろうか。

自分と似た境遇にいながら全く違う答えを出して見せた竹林。出て行こうとする彼の背中を押し、特に引き止めもしなかったのは何故だろう？などとしようもない事を考える。

俺は律にメリットを示して今回の計画を手伝わせようとしたが、じゃあ、俺にはなんのメリットがあつてアイツのE組行きを率先して手伝つたのだろうか？

脳が引き起こしたバグによる自己矛盾に対して思わず考え込んでしまった。不思議なこともあるもんだ。

まあ、しようもないと分かつてるのでそんな思考は早々に切り上げて授業とは名ばかりの自習に戻る。

見下す様で悪いが、この授業は受ける価値を見出せない。ただ早口で捲し立てて、生徒の都合とかお構いなしに板書を消して行く、付いていけないものを振り落とす為だけの授業に魅力を見つけ出せと言う方が難儀というものだろうさ。

正直な感想を言うのなら、こんな授業なら教師は要らない。ただ早口で捲し立てるだけならグーグルとかSiriとかに教科書を読み上げさせた方が何度も再生できるし、速さも調節出来て、好きなところで止められる分、比較するのが烏澁がましいレベルで遥かに後者の方が優秀だ。

板書だつてそう。おちおち写してられない。これなら教科書とか参考書を眺める方がよっぽど為になる。教科書類なら勝手に字が消えることもないし、振り返ろうとした時にいつでも好きなタイミグで振り返ることができるのだから。

しかしまあ、新しいクラスメイトたちのことは認めざるを得ない。こんな授業に着いて行き、しつかりほぼ全員が総合50位以内に入れているのだから、流石A組と言うべきか。

いや、もしかしたら授業はほぼ板書だけ写している状態で、後から塾とかでガッツリ復習とかしてるのかな。

まあ、なんにせよ流石だ。生憎と俺にはこんなの耐える忍耐力なんて持ち合わせてないので、今日も今日とでゾーンに入る。

時間が止まったかの様な世界で教科書を見つめ直す。授業が終わるまでまだ30分以上あるし、今日も今年度の頭から復習するとしてよう。各問題を解き直して、検算する時間くらいはある。

ペンを握る。現実を置き去りに加速する思考が回転を始め、周囲の音も気配も途絶える。

「……………」

より深く集中した時、不意に視界が揺れた。世界から硬度が失われたみたいに目に見える全てが歪み、この目で捉える景色にホワイトアウトした世界がチラつく。

それでも構わず集中の深度を上げるとホワイトアウトした世界はこの目が正常に捉える世界と混ざり合い、ノイズの様な、一昔前のテレビの砂嵐に色をつけたかの様な世界が出来上がる。

頭の後ろがボーツとする。脳天から棒を通して見たいな頭痛がする。自然と息があがる。身体が微熱を帯びるのを感じる。視界が霞む。関節が痛む。身体は熱いのに背中に悪寒が走る。揺れて霞む視界の忙しなさに吐き気を覚える。

それでもペンを止めるわけには行かないので更に深度を上げると、ようやく異変は落ち着き、世界は見慣れたモノクロの漫画の様な景色に染まった。

旅行から帰って来てからは深い深度でゾーンに入ろうとすると大体はこんな調子だ。想像以上に身体は疲労しているのかもしれない。集中する度に襲ってくる体調不良の代名詞のオンパレードに嫌気が差してくるが、仕方ない。

ようやく掴んだ、父が見てくれている今を維持するには努力を重ねるしかない。健全な健康を失う程度は瑣末なこと。これまでの14年間の徒労を思えば、支払うだけで報われるかもしれない、お布施とか、目的の為の言わば必要経費だ。

そう考えれば、この程度、惜しんではいられないだろう。

他人にも、自分にも目を向けず、俺はひたすらに目的に向かってペンを動かし続けた。

71話 心配の時間

「なあ、竹林。どっか行かないか？折角戻って来たんだし、これを機にさ、もつとお前のこと教えてくれよ」

迎えた放課後は前原くんのそんな言葉で始まった。

多分、気を使つてないと言えば嘘になるけど、ほとんど本心から出た言葉だつたんだと思う。

竹林くんと乃咲が出て行って、僕らは実感した。同じ標的を狙う仲間でも実はお互いのことをよく知らない部分は結構ある。

もしかしたら、お互いにもつと相手のことを理解してれば、自分のことを理解してくれていると知ることが出来たのなら、2人だつて行動を起こす前に何か、意見を聞くだけでも良いから頼ってくれたのかもしれない。

心の何処かでみんなも似た様なことは思つてたんだろう。前原くんの言葉にみんなは結構ノリ気な様子で頷いた。

でも、あまりノリ気ではない人もいる。

「ごめん、私、ちよつとだけ遅れるから場所だけLINEしておいてくれると嬉しいな」

ほんとごめんねー！と謝りながら倉橋さんはあつという間に帰り支度して挨拶もそこそこに走り去ってしまった。

よつぽど急いでいるのか、用事でもあるのか、倉橋さんはパタパタと山道に向かつて消えて行く。

「すまない。僕も気持ちは嬉しいけど気になることがあるんだ。またの機会に誘つてくれると嬉しい」

「え、竹林もなんか用事あるのか？」

「用事というか……まあ、うん。気掛りがあつてね」

「気掛りって？」

「……………乃咲のこと」

竹林くんの言葉にみんなが苦々しい顔をする。

別に彼の話題が出るのが嫌な訳じゃない。でも、やっぱり、竹林く

んがこうして帰って来てくれただけあって、乃咲がここにいないのはやっぱ寂しいし、竹林くんが戻って来たんだから彼も戻ってくるかも……!という期待がなかったと言えは嘘になる。

みんなの視線が隣の空白に向けられると同時に竹林くんは思うところあったのか、話してくれた。

「アイツは努力の仕方が分からないんだと思う」

「……いや、そんなことないだろ。勉強は滅茶苦茶してたし、烏間先生との訓練だって努力じゃないのか?」

「そう、確かにアレは努力だ。でも、僕が言いたいのはそういうことじゃなくて……彼は何を頑張れば良いのか分からないんだと思う。努力の指標がないって言えば良いのかな」

「努力の指標……?」

「何をどれだけ頑張れば良いのか分からない。それが今の乃咲の現状だろうね。思い返してみれば……その兆候は色んな所に出ているのだと思う。例えば勉強なんかその最たるものだろう」

竹林くんは窓の外、本校舎のある方向を見ながらメガネを押し上げて自分の考えを話してくれた。

「一番最初のテスト。理事長からの妨害ありきでもアイツは51位だった。元々テスト範囲だった部分は満点。E組で一位を取れなきゃ土下座とか言ってたけど、その時点で大概の奴は文句言えないだろう。その上でまだ習って無い部分にも食い付いた。確かに少し先まで習ってたらしいけど、それでも一個前のテストで最下位だった奴が元々の範囲が満点かつ、変更になった部分にも齧り付くというのは異常だ」

竹林くんは数える様に右手の人差し指を立てる。

「そしてアイツの得意科目について。誰か、乃咲の得意科目を知っている者は?」

「英語じゃね? 99点とか強そうな点数取ってたし」

「それを言うなら国語もだろ」

「数学もじゃなかった?」

「でも、理科とか社会も97点って言ってた様な……」

口々にみんながテスト返却の時のことを思い返す。確かに彼はどの科目が突出して高いとかそんなことは無かった。

「そう。何が得意とかそんなことは無いんだと思う。何をどれだけ頑張れば良いのか分からないから、とりあえずテスト前に全部、片っ端から復習し、理事長の妨害対策用に少し先まで予習したというのが真相だろうね。その結果、総合1位。各教科でのトップはなかったけど、トップ3に入る好成績を残したのだろう」

竹林くんが人差し指に続いて中指を立てる。

「次に暗殺だ。暗殺における彼の得意分野は？」

「指揮能力じゃね？合同暗殺の時も、普久間島の時も、烏間先生以外が指揮を取るって場合は磯貝とか片岡を押さえずとアイツが作戦立てて、指示まで出してたし」

「いや、確かに指揮もそうだけどき。一番は近距離戦闘じゃない？私らの中で烏間先生に攻撃を単独でクリーンヒットさせられるの乃咲くんだけだし」

「…………でも、射撃も出来ないって訳じゃ無いよな。一番最初に触手壊したのってアイツの銃撃だろ？それに、なんだかんだ、アイツが的を外す所を見たことがない」

みんなが今日までの暗殺を思い返しながら意見を出すけど、これも意見はバラバラ。指揮が出来て、近距離戦が強いのは共通の認識だけど、かと言ってそれ以外に粗があるわけでも無い。

「指揮、近接、射撃がバランス良く出来る奴は確かに他にいる。磯貝や片岡さんがそうだ。でも、乃咲の水準は極めて高い。殺せんせーを追い詰めるほどの指揮が取れる、烏間先生にクリーンヒットさせられるだけの近接格闘ができる、射撃に関しては的を外さない。ここまで出来る奴は他にはいないだろう」

今度は薬指を立てた。

「そして、普久間島での彼の動きだ。乃咲の動きは最良ではなかったけど、最善だった。でも、それは結果論に過ぎない。自分の体調を顧みて、みんなに託すことも出来た筈だ。けれどそれをしなかった。E組を抜ける罪悪感もあったのだろうけど、何より、自分の考える最悪

を回避し、最善を掴む為だったんだろうね」

「……確かにそうかもしれないけどよ、それって努力の指標とか基準がないって話にどう繋がるんだ？」

「彼は、最終的に倒れた。恐らくは道中何度も倒れそうになったのだろうが、踏ん張った。それはやり切るまで倒れるわけにはいかないと言う使命感もあつてのことだろうけど、それは裏を返せば目的さえ達成すれば倒れようと構わないと考えてるってこと。彼に取って目的を達成するための努力の限界値は自分が倒れるまでなんだ。つまり、どれだけ頑張れば良いのか、どこまで頑張れば良いのかという指標がないって話に繋がってしまう」

「……………だな、普通は倒れるまで続けるなんてしないわ。漫画じゃないんだし、そうなる前にリタイアする」

竹林くんは小指も立てた。

「最後に、彼自身が言っていた。何をすれば認められるのか分からないから、総当たりで頑張るところを探すしかないんだと」

「そんなこと言ってたの？」

「ああ、言ってた。集会の日に聞いた。結局のところ、それが乃咲の頑張る理由なんだ。優秀な父に認められたい。でも、自分が優秀だった頃に父は何も言ってくれなかった。なのに、この前、ふと認められた。それが何故なのか、何を認められたのかが分からない。だから、今の彼はその理由と認められる状況を維持する為に頑張りを続けている。彼がA組に残ったのはそれが理由だ」

竹林くんは、この数日で大きく変わったと思う。もともと内向的で、どちらかと言えば必要以上にコミュニケーションを取らない方だったのに、今はこうしてみんなに自分が知ったこと、考えてることを知ってもらう為に話してる。

A組に行つて何があつたのか、僕らは分からない。でも、帰つて来てくれた竹林くんはなんだか夏休み前の彼と比べて一回り大きくなった様に見えた。

「そして、乃咲はその手探りな努力を続けてる。別にそれは彼の自由だから止めようとは思わない。でも、その努力の仕方は危うい。結果

を出す為に努力を惜しまない、とさえば聞こえは良いだろうが、その実、彼がしているのは自分を顧みない捨て身の努力だ。このままだと、また倒れる」

「そんなに酷いのか……？」

「酷い、と言う言い方は語弊があるけど、良い状態じゃない。まだ過労が抜けてないんだ。この前もふらついてた。歩き方も違和感があるし、膝から崩れ落ちそうになってた。周囲への注意が散漫になってるのか、キミらが僕たちの様子を見に来てくれたことにも気付いてなかったし。きつと、余裕がないのだろう」

竹林くんの語る彼の現状に僕は戦慄した。

分からなかった。体調を崩してまで、無茶をしたら死ぬかも知れないと殺し屋に釘を刺されたのにも関わらず、努力を続けるその姿勢は、到底、理解できるものじゃなかった。

「僕の思い過こしなら、それでいい。でも、万が一、本当にアイツが倒れた時に誰も側に居なかったら？ 下校中、たまたま誰も居ない所で倒れてしまったら？ つい、そう考えてしまうんだ」

「………竹林、変わったな」

誰かがそんなことを言った。言葉を受けた彼は肯定せず、しかし、否定することもなく、眼鏡を人差し指で押し上げながらいつもの澄まし顔で言った。

「キミらが僕にしてくれたことを、彼にしてやりたい。今の乃咲は僕のあり得たかもしれない姿だと思うから」

そう言っ出ていく竹林くん。もう、誰も何も言わなかった。さっきまでの何処かでお茶でもしていかないかくって雰囲気はもうない。ただ、空気が白けたと言うわけでもない。

ここには居ない、本校舎でがむしやらに頑張る、もう1人の仲間の様子が気になって仕方なくなっていた。

?? ?? ??

みんなで山を降りた。今日の放課後訓練は休みたいことを烏間先

生に伝えると、二つ返事で了承してくれた。

山を降りて、この前まで竹林さんと乃咲を見守っていた茂みに着くと、そこには既にカモフラージュをして茂みに擬態し、下校する生徒に視線を向ける倉橋さんの姿があった。

「倉橋さん」

声をかけると、振り向いた。

「みんなも来たんだ？」

「……まあ、気になるからな。誰にも相談しねえし、頼らねえ。自分のことは話さねえ、その癖に努力は惜しまねえ。不器用すぎるんだよ、あのムツツリスケベ」

前原くんは照れ隠しの様に吐き捨てる、倉橋さんの隣に並んで、帰る生徒たちに視線を向けた。

みんなもそれに倣って横に広がり、帰る生徒の集団を無言で見つめる。彼らの間に会話は無い。みんなが無言で参考書を読みながら、帰路を歩く。どこに寄りた、遊びに行こう、なんて会話は全く聞こえてこない。

「………寂しい光景だな」

ポツリと千葉くんが溢した。誰もその言葉を否定しない。

部活に精を出して人たちの元気な声も聞こえているけれど、それ以外の俗に言う帰宅部はほぼ、会話の一つもない。

僕らは毎日、基本的には誰かと放課後を過ごしてる。烏間先生との訓練は勿論、訓練がなくてもゲームセンターにやってみたり、喫茶店にお邪魔したり、誰かとワイワイしながら帰ってる。

だからなのか、この殺伐とした空気と誰もが参考書と見つめあって、周りを気にしない光景は寂しく思えた。

「………あ」

倉橋さんの声が漏れる。その意味はすぐに分かった。

昇降口から見慣れた銀髪が現れた。周りの生徒と同じ様に参考書を広げ、周りに一瞥もくれずに歩く乃咲。

「………なんだよ、アレ」

磯貝くんが呟く。声には怒りとも、寂しさとも、悲しさとも取れない

い感情がこもっていた。

乃咲は、悲しい程に、本校舎の生徒に溶け込んでいた。参考書以外に目を向けない。誰とも話をしない。無言で、虚な目で、参考書の内容を口に出して覚えようとしているのか、ぶつぶつと口が動いているのは、ここからでもよく見える。

「今の乃咲は教室でも基本的には、あんな感じだ。僕か浅野くんしか話しかけないし、彼自身、僕ら以外には興味を向けようともしない。授業中もそう。教師の授業は聞く価値がないと言わんばかりに自習してる始末だ。休み時間もほぼ自習。今の彼には父親に認められるって目標しか見えてないんだと思う」

「……………痛々しいね」

茅野の呟きに思わず頷いた。

そう、今の彼を一言で言い表すのなら、痛々しい。

僕らの教室にいる時の彼は、僕らから見た表面上の話でしかないのかもしれないけど、楽しそうだった。

授業中にわからないことがあれば、殺せんせーに聞く。休み時間は僕らと駄弁ってたし、昼休みは遊んでいた。放課後も訓練は受けてたけど、その努力は楽しそうだった。

でも、今の彼はどうだろう？楽しさなんて微塵も感じさせない。必要だからやってる、やらなきゃいけないことだからやってる。それだけの努力に見える。

それが悪いことだなんて思ってない。目標に向かって努力する姿は見習うべきだし、尊敬できると思うけど、それは、あんな痛々しい姿であるべきではないと思う。

しばらく見守っていると、彼に声をかける人物がいた。

「圭一、前を見て歩けよ、危ないぞ」

浅野くんだった。彼は後ろから乃咲の肩を叩き、彼の隣に並び立って、同じ方向に歩く。周りが静かなせいか、注意して見ているせいか、会話は鮮明に聞こえて来た。

「大丈夫だ。チャリが来ようが、車が来ようが、新幹線が突っ込んで来ようが、俺なら避けられる」

「その自信はどこから来るんだ……？お前、集中すると目先のことで外の情報をシャットアウトする癖があるから信用出来ないんだが。そもそもそんなに切羽詰まってる訳じゃないだろ、登下校中くらいは参考書を置けよ」

なんか、少し意外だった。

浅野くんはもつと、勉強することを推奨すると思っていたのに、乃咲を諭す様なことを言ってる。

もしかして乃咲の成績を落とすための策略、なんてこともないだろう。彼の声はどこか心配そうだ。

「たまには筆記用具を置いてグータラするのも大事だぞ。どうだ？これから僕の家でグータラライフでも」

「魔王の居城でグータラとか勘弁してくれ。バラモスとゾーマが揃い踏みしそうな環境で気が抜けるほど、俺は勇者じゃない」

「じゃあカラオケ」

「お前、イエヴァンポルカとか、目指せモスクワとか、変わり種ばかり歌うじゃん」

「レッツゴー陰陽師とあいつこそがテニスの王子様を空耳で歌う奴に言われたくないな」

「——なあ、アイツ、案外楽しそうじゃね？」

菅谷くんの眩きにみんなが思わず苦笑を浮かべた。

やっぱり、乃咲は浅野くんと仲がいい様に思う。少なくとも、僕は乃咲が誰かとカラオケに行ったらって話は初めて聞いた。

「とまあ、カラオケは流石に冗談だ。冗談抜きで休め。気付いてるか？呼吸のリズムがおかしいし、薄っすら汗もかいてる。歩いて膝から崩れ落ちそうになってるのも今日だけで7回。今だって僕が声かけるまで気付いてなかっただろ？注意力も散漫になってる証拠だ。そのうち過労で倒れるぞ」

浅野くんの空気が一変、真剣な顔になった。

数秒前までのふざける雰囲気は消えた。その空気の変わり様は離れている僕らにも伝わってくるし、彼らの周りも思わずと言った様子で2人に視線を向けた。

あの空気の変え方や、思わず視線を向けてしまう雰囲気の作り方は流石、理事長の息子だと思う。

僕らがその空気に飲まれそうになる中、最も彼の近くにいた乃咲は特に気に留めた様子も見せない。

「別にそう簡単に倒れたりしねえよ」

「信じられないな。そう言って倒れた奴を僕は知ってる」

「あの時とは違うって」

「いいや、同じだ。最近はお前がやる気を取り戻したと樂觀視していたが、今のお前は1年の頃に倒れた時期と全く同じだ。何かに取り憑かれた様に見える」

「……酷い言い種だな」

「お前の半ば捨て身の努力、その姿勢を僕は評価してる。でも、お前は目的の為に後先考えずに努力しすぎなんだ」

「そんなことは……」

「ないって言えるか？お前のことだ、また父親に認められようとしてるんだろ。別にそれを悪いとは言わない。強者であろうとする姿勢は評価する。だが、お前はそれをゴールにしてる様に見える。……違うだろ？父に認められたのなら、次は追い抜くことを考えるべきだ。お前の努力の仕方は”次”に繋がらないぞ」

「……………」

乃咲が黙った。返す言葉が見当たらないのか、彼にしては珍しく、反論も、肯定も、否定もせずに沈黙した。

凄い。いつもなんだかんだでのらりくらりしていた乃咲が言い負かされるところを初めて見た気がする。

でも、きつと、今の言い合いで乃咲に勝てるのは浅野くんしか居なかったと思う。乃咲と同じく優秀すぎる父親を持ち、当然の様に自分も優秀。そんな彼が父親を越えようとしているのは見ていれば分かる。その第一歩として、この学校の生徒の頂点に君臨してるんだから。

きつと、これが僕らだったなら、乃咲は沈黙することなく言い返しただろう。ある意味、自分と似た境遇の浅野くんが言うから、意味のある言葉だったのかもしれない。

「……ああ、そうか」

今、なんとなくだけど理解出来た。乃咲と浅野くん。この2人が仲の良い理由。似たもの同士だから波長が合うんだ。

「……分かった。登下校中くらいは前を見て歩くよ」

「そうしろ。見てて危なつかしい。明後日は小テストだ。体調不良でも欠席したらまたE組行き、とかもありえる」

乃咲は面倒臭そうにしながらも、頷いて2人はそのまま帰り道を進んで行った。

「……なんか意外。5英傑って面倒臭くて嫌味な奴ばかりだと思っただけど、あんな一面もあるのね」

「浅野からしたら圭一は対等な相手だからな。こんな所でリタイアして欲しくないってものあるんだろ。それとは別に友人としても心配してるだろうし」

口々に今の乃咲の状況と、浅野くんについて言葉が飛び交う。やっぱり、自分の意思で抜けたとか言っても心配になるんだ。やっぱり、仲間なんだから。

遠ざかっていく2人の後ろ姿を見守りながら、そういえば、とふと思う。今日は殺せんせーが来ていない。

「そう言えばさ、殺せんせー来てないよな」

木村くんが言う。それに対してみんなも気付いた様に確かに見えないよな、と会話が広まり出した。

珍しい。こう言う時、率先して動くのが殺せんせーだと思うんだけど。もしかして、僕らの知らない所で、予想外のことで既に動いているのだろうか？

乃咲と浅野くんが歩いていく方向に伸びる飛行機雲を眺めながら僕はそんなことを考えた。

72話 転倒の時間

なんでだろう、学校が楽しくない。

横でグチグチと小言を言いながら俺を送ってくれた浅野と別れて数十分。鞆を放り投げて、ベットのの上に身体を投げ出す。

「……………」

別に、元々学校が楽しくて仕方ない！とか、そんな前向きなことを考えたことはない。むしろ、学校に行くのは憂鬱だった。

だと言うのに、普通に学校に行つて、授業を受けて、帰ってくる、この日々を退屈だと感じてしまっている。

理由は分かっている。

「のーぎーきーくん！」

窓の外に張り付いている、この音速のタコの所為だ。

「毎日毎日、よく飽きないですね」

「ヌルフッフ、君は確かにE組を抜きましたが、先生の生徒であることに変わりはありません。生徒との触れ合いに飽きてしまう教師がいるでしょうか？いいえ！いるわけがありません！」

そうだ。このタコの所為だ。

E組のみんなとコイツを殺そうと足掻く日々が楽しかったんだ。この4ヶ月で、凡そ普通に生きてる人間が人生で遭遇する筈のない機会に何度出会ったことか。

今までの日常、父に認められないこと以外に大した不満はなかった。退屈なんてこともなかった。変わったことなんてない。それが当たり前で、それが日常だったから。

なのに、コイツが来てから、俺たちの日常は世間から見たら非日常に変わってしまった。

ある日、突然に地球爆破を企む怪物が現れた。そんな怪物を殺す依頼を国家から任せられた。仲間たちと画策し、協力する日々が始まった。国のエージェントから訓練をうけて。同じ標的を狙う殺し屋に狙われ、命懸けの戦いをした。

俺の日常は、たった4ヶ月の間に非日常に変わり、それを俺は受け入れて、楽しんでいたのだろう。

「帰って下さい。話せることなんて何もないし、俺はもう、暗殺にもノータッチです。もはやただの一般人になったんです。国家機密と密会とか、烏間先生以外にバレたら洒落になりませんよ」

「まあまあ、そう邪険にせずに。先生イチオシのシュークリームを買って来ました。お茶でもしましょう。終わったら、今日のところはお暇させて頂きますので」

でも、俺はそんな非日常から日常に戻ることを選んだ。

自分のやるべきことを優先した。理由を聞きに来た仲間を足蹴にして、もつと頼って欲しかったと仲間を泣かせ、それでも一度決めた心は動かなかった。

そんな俺には、かつての非日常を思う権利も、戻りたいと思う資格もないだろう。だから、殺せんせーにはこれ以上、俺とは関わらないで欲しかった。様子を見に来てくれるのは嬉しいけど、これでは最低限のケジメもつけられないだろ。

「乃咲くん。キミに一つアドバイスです」

「……なんですか」

シュークリームを頬張りながらご機嫌に触手をうねらせる恩師に視線を向ける。万年金欠でこんなスイーツ買ってる余裕は無いくせに。俺と話す為だけに2つも買ってくる。

「キミはまだ子供だ。もう少し正直になっても良いんですよ」

「……俺は充分に正直ものだと思えますけどね」

「いいえ。キミは嘘吐きです。周りの誰かに対する嘘吐きではなく、自分自身に対する嘘吐きです」

何を言うかと思えば、急になんの話だろう。

「乃咲くん。キミはやらなきゃいけないことやその場に置いて最善になる選択肢を正当化しすぎている」

「……いや、やらなきゃいけないこと、その場に置いて最善になる選択肢は正当性があるから選んでるだけなんですが」

「そうですね。確かにそうなんですけど、自分の我や本音を覆い隠

す為に、その正当性を重視しすぎていると言うべきなんでしょうか。キミは自分に言い聞かせ、『こう言う理由があるからやらなきゃいけない』と自分を騙している様に見えるのです」

「……………」

そんなことはない、と言いたかったが、言えなかった。

思い返してみると、確かに自分にはその気がある。

「キミのそれは素晴らしいものです。周囲の為にやらなきゃいけないこと、期待に応える為にやらなきゃいけないことを選ぶことの出来る思考はとても大切です。普久間島の時の無茶はそれに起因するものでしょう。現にその考え方に我々は助けられ、窮地を脱することが出来ました。でもね、やるべき事のために自分自身の思いを無視してはいけません」

俺は別に自分自身の思いを無視なんかしていない。

普久間島で無茶をしたのはそうするべきだと自分の意思で判断したからだ。A組に來たのだから、そうすることが父に認められると言う自分の願いに直結すると思っただからだ。

俺は、全て、自分の意思で選んでいる。

「今、こう思っているでしょう。『自分の意思で選んでいる』と。確かにそうです。キミは自分の意思で行動している。けれど先生には『○だから、こうしなきゃいけない』とそんな強迫観念の様なものに突き動かされている様に見えます」

殺せんせーの言葉が妙に刺さる。

確かにそう言う節はあるから否定はしない。

「普久間島の無茶はまさにそれが出ています。『体調が悪いから早く休みたい、動きたくない。でも、今動かないとみんなが危ない』そんな考えから動いた。違いますか？」

「否定はしません。でも、その何が悪いんですか。自分が我慢すれば、周りは助かる。社会つてのはそうやって回るでしょ」

「その通りですが、キミの場合は抱え込みすぎなんです。乃咲くんは基本的に周りを頼らない。頼りにならないからではなく、自分の持っているものを他人に押し付けるのが無責任だと感じているから。『自

分の進路を選ぶのに、他人を頼るなんてできない』という言葉がまさにその考え方の現れだ」

その何が間違っているのだろうか？

もし、相談した結果、進んだ先に待っているのがどうしようもない末路だったら？相談した相手は多少の罪悪感というか、責任を感じるかもしれない。

だったら、自己責任という言葉で片付く様に動いた方が自分も、相談されたかもしれない相手にとっても楽だ。

「責任感が強いのは良いことです。自分に起因する責任を他人に押し付けられないのは素晴らしいことです。でもね、もう少しだけ、周りにも分けてあげて下さい」

「それって結局は責任転嫁だろ」

「いいえ。そうではないのです。先日、クラスの皆さんとお話ししましたよね。特に倉橋さんは『一緒に考えてあげたかった』と。頼ることを責任転嫁とは言いません。仮に責任が発生する様な事態になったとしても、その一部でも良いから一緒に背負ってあげたい。彼女はそんな風に考えていたはずです。責任を押し付け合うのではなく、互いを思い、尊重して手助けし合う関係のことを支え合いというのです」

「……………」

「キミはいつの間にか皆さんに頼られる存在になっていました。であれば、今度はキミが皆さんを頼って下さい。意見を求めるだけでも、自分の考えを伝えるだけでも良いんです。キミ自身のことをもっと周りにぶつけてみて下さい」

殺せんせーはいつの間にかシユークリームを食べ終わっていたらしく、触手についたクリームをペロリと舐めると、ヌルヌルと滑る様に移動して、窓の縁に手を掛けた。

「キミが周りを頼ることが出来たのなら、いずれ気付くことが出来るでしょう。いかに周りがキミのことを見ていてくれたのか」

殺せんせーは飛び去って行く。言いたいことだけを言って、飛行機雲を作りながら空の彼方に。

明日も学校なのに、そんな海を越えそうな速度でどこ行くの？と疑問はあるが、まあ、あの規格外に対して考えを巡らせるのは半ば無駄なことか。うん、諦めよう。

「……周りを頼る、ね」

再び体を投げ出す。殺せんせーの残した言葉を考える。

別に頼ってない訳ではないつもりだ。みんなに指示を出したりしたのも、そいつなら出来るだろうって信頼があったからだし、俺だけでは手が足りないから助けて欲しいという考えだってあったのだ。これは、頼つてると言わないのかな。

考える。仮に自分が周りを頼ってなかったとして、なんでそんな風になってしまったのか。

俺だって、生まれた頃からお喋りや読み書きができた訳じゃない。1人じゃ立てない時期もあったし、転んでも立ち上がれない時期もあった。あった筈なのだ。

だと言うのに、いつから、こんなことになったのだろうか？

?? ?? ??

小さな頃から、俺は期待されていた。

乃咲新一という、テレビでも雑誌でも取り上げられる天才科学者。そんな男の一人息子として生まれたのが乃咲圭一だった。

父をテレビで見るのは誇らしかった。幼稚園で自慢したこともある。家政婦のトメさんが父が載ってる雑誌を見せてくれた時も嬉しかった。憧れだったんだ。そんな父が。

思えば、俺にとって父とは、親というより、画面の向こうの芸能人の様な存在だったのかもしれない。

よく言ったものだ。仕事から帰ってきた父に、『いつかお父さんみたいになりたい』『カッコいい学者さんになりたい』と。

乃咲圭一の父に認められたいと言う承認欲求はここから始まったのだろう。いつか父の様になりたいくて、俺は頑張り始めた。

よく夢として語った。いつかお父さんの様になりたい。幼稚園の

先生にも、小学校の先生にも。

みんな、それを笑って応援してくれていた様に思う。でも、思えば、この一言が原因だったのかもかもしれない。乃咲圭一という個人を誰も褒めてくれなくなったのは。

転んでも泣かない様にした、1人で絵本を読める様になった、簡単な計算もできる様になったし、分からないクイズも解ける様に頑張った、誰よりも速く走れる様になったし、同じ学年の誰よりも絵を上手く描いた、友達も沢山作った。

一度だけ、分からないクイズがあった。でも、俺には分からなかったけど、出来る奴もいた様で、答えを間違えた時、そいつに言われた。『天才の子供の癖にこんなのもわかんないんだ』と。なんとも幼稚な煽りが泣くほど悔しかった。

だから、人一倍頑張る様にした。その日のうちにクイズと言うクイズを漁るように調べて、その日のクイズ番組も見た。翌日には煽って来た相手に幼稚園児では到底解けない様な問題を出してマウントを取り返し、煽って泣かせることもあった。

流石にその時は怒られたが、同時に言われた。『こんな難しいクイズ解けて凄いね、流石、乃咲先生のお子さんね』と。

当時はそうやって褒められるのが嬉しかった。自分は父の子として恥ずかしくない人間に慣れているのだと。父の子供に相應しい能力があるのだと認められている様で嬉しくて、褒められる度に父に喜び勇んで報告した。

思えば、これが呪いの始まりだった。

その日から俺は、自分自身を褒めてもらえなくなった。

その日から俺は、問題を自分の力で解決する様になった。

何度も頑張った。数え切れないくらいに知恵熱を出して、勉強して、体育で好成绩を出す為にも身体を動かした。

何度も頑張った。もう2度と、天才の子供の癖に、こんなのも分からないのか。とバカにされない様に出来るだけ沢山のことを、出来るだけ自分の力で出来る様に努力した。

努力した。頑張って来たつもり、ではなく、胸を張って言える。俺

は頑張った。乃咲新一の子供として恥ずかしくないように。同級生の誰よりも頑張った。結果も出し続けた。

だからだろうか、俺は周りに比べると多少は賢かった。

あれはしちやダメ、これはして良い、これはやったほうが良い、これはやらなくても良い。そんなことも分かる様になった。

分かる様になってしまったから、父の顔色を窺うようになった。ある日、仕事から帰って来た父の顔色を見て、こんなことを思ってしまった。

『お父さんも疲れてるんだ。お話はまた今度にしよう』

その日から、俺は父に話しかける機会を探す様になった。

今までの様に、褒められる度に報告することは無くなった。いつになつたら話しかけて良いかな、いつならお父さんは忙しくないかな。そんな風に考える様になると、いつの間にか父と話すことは自然と少なくなった。

父は忙しい人だった。テレビでも、雑誌でも引っぱりだこで、もはや学者なのか芸能人なのか分からないくらいに多忙を極めていた。家にいる事の方が少ない。

俺は、父と同じ部屋で寝たことがない。物心ついた頃から子供部屋があつたし、寝かしつけてくれるのもトメさんだったから。そもそも父も仕事先に泊まるが多かつたし。

偶にしか帰ってこない父の顔色を窺って、偶にしか話しかけられなくなつて。父にあつたことを報告出来るのは1ヶ月に一度あれば多い方だったかな。

それでも良かった。この頃はまだ、父の『……ああ』『……そうか』も大して気にならなかつた。父は俺の頑張りを納得して、認めてくれるんだと、そう思っていた。

でも、不満がなかつた訳じゃない。あの人はただの一度も褒めてくれなかつた。それだけが当時の自分の中にあつたモヤモヤで。そんな言い知れない不満が俺の猜疑心を育てた。

いつからだつたらうか。周りが自分のことを、俺自身のことを褒めてないと感じる様になつたのは。

いつからだっただろうか。誰も自分の努力を認めてくれないんだと、考える様になっちゃったのは。

どうしてだろう。『流石、乃咲先生のお子さんね』という聞き慣れた言葉が、俺に付きまとう呪縛に思えたのは。

「……なんで、誰も僕を見てくれないの？」

小さい頃、俺の中の何かが破綻するきっかけになった疑問が頭の中に何度も、何度も響いた。

??

??

??

「っ……っ！」

目が覚める。窓から差し込む光が否応なくガンガンと痛む頭を刺激する様に視界に飛び込んで来る。

どうやら、殺せんせーが帰った後、横になって考えているうちに眠ってしまったらしい。

時間はいつもの起床時間に比べると30分ほど早い。でも、最悪な夢を見たせいとか、二度寝する気にはならなかった。

体を起こして、制服に着替える。なんだか、怠い。体の動きが普段より鈍い気がするし、痛みを覚える頭に関しては、なんか、右側頭部がぼんやりとモヤの掛かったような違和感もある。

ただ、咳もくしゃみも鼻水もない。恐らくは風邪ではないだろう。体も寒いと言うより、熱い。

「おはよう」

手すりに体重を預けてノロノロと階段を降りると、祖父母がギョツとした顔で俺を見た。

なんだ？人を見るなり顔を歪めるなんて。挨拶を返してくれない祖父母は俺と視線を合わせる。

「圭一、今日は休みなさい」

「……えっ？」

祖父が心配そうにそんな指示を出す。

珍しい。不良やってた頃は、這ってでも学校に行け！と怒鳴られた

もんだが、休めなんて言われるとは。

「大丈夫だよ、何ともないって」

「そうは見えないから言ってるんだ。酷い顔色をしてるぞ、昨日は眠れたのか？」

「ちゃんと寝たよ。あ、ばあちゃん。朝飯は俺いいわ、夜にでも食べるから冷蔵庫入れといて」

言い残して、風呂場に向かう。昨日はシャワーも浴びずに寝てしまったし、まあ、エチケットだ。

……あれ？これからシャワー浴びようと思ったのに、なんでわざわざ制服に着替えたんたら、俺。

っーか、着替えも準備してなかったし。

ポリポリと頭を掻いて、着替えを準備、ささつとシャワーを済ませて、今度こそ着替えて、鞆を持ち、家を出る。

家を出る前に、祖父に何度か止められたが、近々小テストがあることと、本当に何ともないことを伝えて家を出た。

歩く度に頭の中が軋むように痛むが、小テストで点を落としてE組戻りとか洒落にならないので意地で歩く。

別に、今日くらいは休んでも良かったのかもしれない。テストと言うくらいだからやるのはこれまでやって来た事の理解度を試す試験になるだろうが、試験範囲がズレる可能性はいくらでもあるのだから明日のテストまでの範囲は確認しないと。

一年の頃から今日に至るまでの範囲は全て復習したし、教科書も今授業でやってる範囲の少し先までは理解している。多少のことでは点を落とすことはないだろうが、念の為だ。

自分に言い聞かせるように歩いていると、不味いことに、頭痛が少しずつ増して来ていることに気付く。

この感じ、覚えがある。普久間島でウィルスを盛られた時のアレに似てる。このまま次第に体に力が入らなくなり、頭が回らなくなり、そして倒れるのだ。

念の為とか言わず、素直に休んだ方が良かったか？

いや、でも、いま、努力を放り出す訳にはいかない。

幸いと言うべきが、もう家に戻るよりも学校に行った方が近い場所に来る。E組の校舎ならまだしも、今の俺は本校舎の生徒だ。あの冬はクソ寒く、夏はクソ暑い山を登る必要はない。

学校に着いたら、少しだけ保健室で休ませて貰おう。とりあえずの目標を定めて、足を進める。

後少しで学校だ。もう少しだけ頑張ろう。

「……………」

壁に手をついてフラフラと歩いていると、聞き慣れた声が少し先の曲がり角から聞こえて来た。

何かに気付き、あるいは見つけ、思わず溢してしまった様な声。か細く、そして、予想外の出来事に驚いたかの様な小さな声。何処かで聞き覚えがある。果たして何処だったか。

少し考えてみるが、徐々に思考も回らなくなって来ているのか、思い出すことが出来ない。

「圭ちゃん……………」

その呼び名で思考がようやく該当する人物を引っ張り出してくる。この学校で俺をそんな風に呼ぶのは1人だけだ。

「おはよう……………倉橋さん」

挨拶する。だが、正直、会いたくなかった。倉橋さんに会いたくないとかじゃなく、誰にも遭遇したくなかった。

何故か？面倒だからだ。ただでさえ、頭が回らない現状において、誰かと一緒に行動すると言うのは、その相手に対して思考のリソースを割くことに通じてしまう。

平常時なら、軽い挨拶して、世間話をする程度の余裕はあるのだろうが、今はそんな余裕はない。

だが、そんな俺の心情なんて知るはずのない倉橋さんはわざわざ、学校とは反対方向のこっちに駆けて来る。たかが数メートルとはいえ、逆走するのは非効率的だろうに。

「大丈夫!? 顔色酷いし、真っ直ぐ立ててないじゃん!？」

「大丈夫、大丈夫。生まれつきこんな顔色だし、根性が歪んでるから真っ直ぐ立てないんだわ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょっ!!」

戯けてみたら怒られた。割と本気で怒鳴られた。

初めて聞いた倉橋さんの怒鳴り声に思わず怯む。これまで喧嘩してきた不良の殺すぞ!とかそんな脅しよりも、よっほど迫力と言うか、本気の凄みがあった。

怯んでいると、彼女の手が伸びて来る。

「……酷い熱だよ。なんでこんな状態で学校に来ようとするの!?!なんでも止めなかったの!!」

「止められたけど、断つたんだよ。大丈夫だって」

「じゃあ、壁から手を離して真っ直ぐ立ってみてよ」

「いや、そんなことしなくても……」

「いいからっ!」

かつてないほどに有無を言わさない様子の倉橋さんに迫られて、言われた通りに壁から手を離す。

「っ……!」

瞬間、体の平衡感覚が崩れ、踏ん張りも効かずに膝から崩れ落ちた。真っ直ぐ立ってられないのは気付いていたが、まさかここまでとは。少しばかり、甘く見積もっていたかもしれない。

こりゃあ、早退しないと駄目かな。

そんな風に思いながら脚に力を入れて、立ちあがろうとするが、そこで違和感に気付く。脚に力が入らなかった。

「あれ……?」

何度か試してみる。足だけじゃ駄目みたいだったので、手で踏ん張って立ち上がろうとするが、それでも失敗した。

幸いにも壁が近くにあったので、体重を壁に預けて立ち上がろうと試みるが、それでもやっぱり、立てなかった。腰は浮いた、後少しで立てると言う段階で膝と壁に付いていた手の肘が勝手に折れて体勢を崩した。

前に向かって倒れる寸前、倉橋さんに抱き止められた。

「全然大丈夫じゃないじゃん……ッ!!」

悲鳴の様な、何処か嗚咽の混じった声が聞こえた。

なんで？別に俺が倒れた所で、倉橋さんには関係ないはずなのに。一体、どうしてこんな声を出してるんだらう？

考えてみるが、頭が回らない。

と言うか、いつまでのこの体勢である訳にはいかないだろう。一旦、倉橋さんから離れよう。

回らない思考を無理矢理回して彼女から離れようと手に力を入れるが、腕は持ち上がらない。

……いや、腕だけじゃない。身体に力が入らない。

「あ……れ……う？」

動かない。いくら体を動かそうとしても、体が動かない。糸が切れたいに力が入らない。

なんで？俺はここまで疲労していたのか？いつもの癖で考えを巡らせようとするが、やはり頭は働かない。

思考を回そうとすると、帰って来るのは、頭の中で響く、キーンという甲高い金属音の様な耳鳴り。

「圭ちゃん……!？」

耳が変だ。倉橋さんの声が遠い。目の前にいる筈なのに、深い水底から聞いている様にしか届かない。

そう言えば、世界が静かな気がする。耳鳴りと彼女の遠い声以外は何も聞こえてこない。変だな、耳掻きはしてるのに。

全ての音が遠い。気が付けば、音だけじゃなく、視界にも異変が現れる。目に映る景色の端から水で滲んだ絵の具の様にぼやけていく。薄く、モヤが掛かっていく。

……やばい。この感じ、覚えがある。普久間島でホテル潜入作戦が終わった直後の感覚に似てる。

そんな既視感を覚えた頃には既に手遅れ。視界の端から侵食する様に広がった世界の滲みは、ほぼ目の前を覆い尽くしていた。目の前の景色が歪む。視界に映るあらゆる物の境目が分からなくなる。何処までが倉橋さんで、何処までが道路だった？

キーンと耳鳴りが頭に響く。滲んだ世界が白んでゆく。力の入らない体はついに瞼すら上げてられなくなった。

駄目だ、こんな所で気を失う訳にはいかない。ゆっくり、深呼吸して、身体に力を巡らせよう。

一度瞬きをして気合いを入れ直そうと目を閉じたその瞬間、俺の意識は何処までも続く水底に落ちる様に途絶えた。

73話 吐露の時間

「ふむ……」

殺せんせーの声にみんなが固唾を飲む。

朝、登校してきた僕らを迎えたのは、慌ただしく動く殺せんせーと、瞳に涙を一杯に溜めた倉橋さん。そして、保健室のベッドの上で苦しそうに眠る乃咲の姿だった。

「どうなんですか、殺せんせー」

「南の島で出会った殺し屋……スモッグさんの想定する最悪の状況ではありません。暗殺から離れ、訓練などで体を酷使していなかったことに救われましたね」

殺せんせーの言葉に、その場の全員がほっと胸を撫で下ろした。どうやら最悪の事態には至らなかったらしい。

しかし、みんなの顔は決して明るくない。最悪の事態でなかっただけで、乃咲がまた倒れてしまったことに変わりはない。

「……なあ、殺せんせー。親に認められるってそんなに大事なことなのかな。俺、わかんねえよ……。倒れるくらいまで努力する気持ちも、その努力も認められねえ親の理由も……!」

前原くんが吐き出す様に言った。それは、僕らの大半の意見の代弁だったと思う。

そう、僕らは分からない。親に認められたいって気持ちなら分かる。でも、健康を害してまで走り続ける理由も、そんな頑張り認めない人の気持ちも、理解できない。

殺せんせーは困った様に顔を俯かせた。

流石の殺せんせーも、何を言えばいいのか分からないみたいだった。困った様に俯いて、触手で頬の辺りを搔いて、口を開く。

「……乃咲くんは、きつと見て欲しかったんだと思います。お父さんに、自分のことを」

「見て欲しいって……?」

殺せんせーの言葉に首を傾げた。見て欲しい。その言葉の真意が

僕らには分からなかったから。

「人を見る、と言うのはただ相手を正面から物理的に見据えるだけではありません。目の前の人物がどんな思いでそこにいるのか、どんなことを考えてきたのか、どんなことを頑張ってきたのか、どんなことをしたいのか、そして、自分はそんな相手に何をしてあげられるのか。それを考えることこそが、”人を見る”と言うことなのでしよう」
「たったそれだけのことの為にここまでやるの……？」

「……誰かに自分を見てもらえる、これ以上に嬉しいことはありません。皆さんも覚えておいて下さい。人を育てるには、なにより、自分が育つには、目の前の相手と真摯に向き合って、互いのことを見てあげなければなりません」

殺せんせーはしみじみと何かを思い出す様に言った。

彼は今、何を思っているのだろう。顔はいつもの黄色に三日月を横にした様な口をしているけど、雰囲気は暗い。

ただ、殺せんせーの言葉はなんとなく、実感に満ちていた様に思う。それがなんでなのかは、誰も知らない。

「ぐっ……うう……」

乃咲が呻き声を上げる。苦しそうに顔を歪めて、汗をかいて、もともと安らかとは言えなかった寝顔を歪める。

その顔はやつれていた。目の下にはクマもある。寝息は安定しているとは言えない。うなされてる様にも見える。

「昨日、様子を見に行った時はこんなじゃなかった。帰った後、何があつたんだ、圭……？」

磯貝くんが暗い表情のまま呟く。

そう、僕らが昨日の帰りに様子を覗いた感じだと、確かに健康とは言えないけど、こんなに酷くはなかった。浅野くんと軽口叩き合ってる様子はいつも通りだった。

僕らが見てない間に何があつたんだろう……？

「昨日の晩、先生は乃咲くんと話しました。週末までは持っただろう、そんな見積もりでしたが、甘かった様です。もっと早く行動を起こすべきでした」

「殺せんせーがそんなこと思っても仕方ないでしょ。家庭の事情に干渉するなんて普通出来ないもん」

「ですが、もっと出来ることはあったのも事実です。甘く見ていました。彼は、私の思う以上に追い詰められていた。見て欲しい相手に見てもらえない者が……どんな風になってしまうのか、どんな考えに至るのか、誰よりも知っていた筈なのに」

珍しく殺せんせーは悩んでいた。

普段、今日のおやつは何にしよう、とかそんなくだらないことでしか悩む素振りを見せなかつた殺せんせーが見て分かるくらい、明らかに動揺し、後悔し、悩んでいる。

乃咲はなんでこんな風になったんだろう？

殺せんせーは何を思い詰めてるんだろう？

そんな疑問が溢れて来た時。ベットで苦しそうに眠っていた乃咲が気怠そうに薄らと目を開けた。

「……律さん、お願いがあります——」

『……はい、分かりました』

?? ?? ??

「分かっていると思うが、暗殺のことは他言無用だ。キミを信頼し、記憶操作の手術は見送るが、くれぐれも忘れないでくれ」

「はい、分かっています。そもそも、誰に話しても信じてもらえないでしょうけどね。ただ、もしも、殺せんせーの存在が世間に露呈し、柵ヶ丘中学校の3年E組が暗殺教室だったのがバレた時はどうすればいいです？マスコミはともかく、学校の生徒はほぼ全員俺がE組出身だって知ってますよ？」

「そんな時が来ないことを願う他ないが、その時は……キミの判断に委ねる。露呈したとしたら、もはやそれは国家機密とは言えない。概要や奴との日々くらいなら話しても問題ないだろう」

「分かりました。もしもその時が訪れたら、概要を話す程度に留めておきます。政府の派遣した工作員の1人が一学級まるまる毒殺しか

けた、とかそんなこと話すつもりはありません」

「……………すまん」

「いいえ。こちらこそ半端な真似をしてすみません。折角、沢山訓練つけて貰ったのに、無駄になっちゃいますね」

「そんなことはない。キミには可能性を見せて貰った。奴は決して殺せない存在ではないと証明してくれた。俺としても学ぶことはあった。4ヶ月間、ご苦労だったな。ありがとう」

「……………はい、ありがとうございます」

「もしも、彼らが暗殺の相談をして来ることがあったら、話くらい聞いてやってくれ。それじゃあ、勉強、頑張れよ」

夏休み明け初日。全校集会の30分前、烏間先生とそんな会話をした。しかし、その実態は暗殺教室での日々に対する口止めに見せかけた世間話だった様にも思う。

応接室を出ていく烏間先生の背中を見送って、ああ、本当に俺は暗殺者じゃなくなったんだな、としみじみ思った。

いつか、もしも、なんかの間違いで、誰かと結婚して、子供とか出来た時に『パパは暗殺者だったんだぞ』とか語る日が来るのだろうか？そんな世界線もあるんだろうか？

まあ、もつとも。E組のみんなが殺せんせーを殺してくれないとそんな未来は訪れないだろうけどね。

思考を弄びながら歩く。本校舎はやっぱりE組の校舎に比べて綺麗だ。木製との違いもあるのだろうが、清潔感がある。

学舎が綺麗なのは良いことだ。E組が汚い訳じゃないけど、汚れる場所よりも綺麗な場所の方がいいと思うのは人情だろう。

と、集会が始まる前の俺は比較的上機嫌だった。

E組への未練はあるし、やり残したことは沢山ある。でも、やりたいいこととやるべきことは必ずしもイコールで結び付かない。

だったら、せめて、選んだ道で頑張り、いつか彼らに胸を張れる様になりたい。そんな結果を残したい。

今後父に俺のことを認めさせて、いつかみんなに誇れる結果を。そんなある種のモチベーションで支えられてた。

「さあ、圭一。話して来い。逆境を跳ね除けたヒーローの言葉をみんなが待つてるぞ」

浅野に背中を押されて、あのステージの上に立つまでは。

全校集会はなんのアクシデントに見舞われることなく進み、遂に俺と竹林のスピーチを残すのみになった。

A組行きを許諾した時点でこのスピーチは企画されてたし、その時点で読む原稿も渡されていた。

原稿の内容は酷いものだったので読む気は無かったが、この時はまだ、多少憂鬱だなく程度だった。

竹林のスピーチが終わり、俺にお鉢が回ってくる。

彼と入れ替わる様に壇上に姿を現すと、大歓声が上がった。

そりゃあ、最初は心地よかった。自分が承認欲求の塊だと流石に自覚しているから、認められるのが心地よくない訳がない。

でも、長くは続かなかった。向けられる羨望の眼差し、褒め称える声、煩い程に伝わる波長からは、彼らはみんな心の底から賞賛していることが雪崩のように伝わって来る。

そんな中、ふと全校生徒の顔を見てしまった。

俺が優秀だった頃、入学して間もなかった頃、たくさんの友人がいた頃。勉強を教えてやった奴がいた。成績が落ちてからは手のひら返した様になくなり、E組に落ちた頃には後ろ指差して差別する側に回った奴がいた。

学年が変わって、E組になった頃。入学式の直後、広い敷地で迷ってる新入生がいた。見て見ぬ振りをするのも忍びなかつたので、簡単に校内を案内してやった。その時は普通だったのに、それから少し後、俺がE組だと知ったのか、ギャルギャルしい連中と一緒に俺を笑いものにした奴がいた。

色んな奴らがいた。そんな奴らが今、思い思いに賞賛の言葉を投げながら喝采を送る。

それが打算も、悪意もない。心からの賞賛だと言うのは、意識の波長から簡単に感じ取れた。

——それが、たまらなく気持ち悪かった。

これが悪意と欺瞞で爛れた賞賛だったら、内心で悪態を吐くだけで良かったかもしれない。表情を取り繕って、E組を扱き下ろさない程度の皮肉を吐いて終わりだっただろう。

だが、困惑はあれど、曇りはない賞賛の嵐に俺は表情を作ることすら出来なかった。

気持ち悪い。あっさり切っておいて、笑いものにしておいて、嘲笑し、嫌厭し、見下しておいて、あっさりと囃し立てるコイツらが、気持ち悪くて仕方なかった。

気が付けば、言葉を選ばず、彼らに現実を叩き付けていた。気が付けば、向けられる視線は畏怖で溢れていた。

でも、まあ、自分には関係ない。むしろ、持て囃されるより、そっちの方が心地よかつたくらいだ。

俺は孤立した。いや、浅野がいるから本当の意味での孤立ではないが、本校舎の生徒にとって俺は完全な異物になった。

向けられるのは畏怖の目。人混みを歩けば勝手に道が開け、人集りに寄れば人口密度は著しく低下した。

うん、浅野みたいに強者になりたいとか、支配者になりたいとか、そんなことは思わないけど、自分を恐れてる奴らが勝手に道を開けてくれるのは存外に気分が良いな。

まあ、一緒に歩いていている竹林には申し訳ないことをしているが。本人は気にしないと云ってるが、本校舎で俺と一緒にいたら少なからず浮くというか、奇異の目で見られるだろうに。

そんなことを思いながら竹林と帰っていると、裏山の方から磯貝たちが現れ、声をかけて来た。

なんでも、俺や竹林がE組を抜けたことについて聞きたいらしい。まあ、気になるよな、と納得した。

俺だって唐突に渚あたりがA組に行きました、とか言われても理解できないし、どうして?と疑問に思う。

少し歩いて、人気のない公園で俺と竹林はE組を抜けた理由を語った。みんな、納得いかないと言うより、心配が勝っている顔をしているのがすごく印象に残ってる。

ああ、やっぱりみんなはいい奴だ。急に何も言わずに出て行った奴らなんて放っておけばいいのに、わざわざこうして会いに来て、理由を聞いてくれた。こう言う時、あまり参加しなさそうな寺坂や狭間さんまでいたのだから、俺たちは恵まれてる。

だから話した。嘘を吐く気にはなれなかったし、吐きたくなかったから、俺たちの悲願を。

そしたら、倉橋さんを泣かせてしまった。泣かれるだなんて思っていなかった。もっと頼って欲しかったと、そんな風に泣かれるだなんて思っても見なかった。

E組のみんなはいい奴らだ。俺がE組に思い入れがあるだけで、実は他のクラスも大して変わらないのかもしれないけど、でも、やっぱり俺はE組にいる時間が好きだったと自覚した。

だから、突き放した。夏休みの最終日、竹林に語ったことを実行する為に、『裏切り者の乃咲なんかには負けない』そんな風にみんなが奮起してくれるのであれば、嬉しかった。事実、裏切った俺に出来るのはもう、これくらいしかなかったから。

「気持ちには嬉しいけどさ、人生とか生き方を決める選択肢を決めるのに他人は巻き込めない。そんな無責任なこととはしたくない」

伝えた。突き放す言い方をした。

倉橋さんは、傷付いた様な顔をした。明らかにショックを受けていた。そんな顔をさせたい訳ではなかった、思わず手を伸ばしそうになってしまった。でも、それを押し留めて、俺は彼らに背を向けて、その場を後にした。

「乃咲。僕はE組に戻ろうと思う」

後日、竹林からそんな言葉を投げられた。

それは、相談なのか、それとも報告なのか、分からなかったが、特に反対はしなかった。

彼は見つけたのだろう。自分を納得させられるだけの理由。やりたいことをやって、結果を出して、親に認めさせるという結論を。竹林はその答えを出すことが出来たんだろう。

俺は、彼のE組への蜻蛉返りに協力した。

その時、どうして自分がそんなことをしたのかは理解出来なかったし、考えようとしてもしなかったが、なんとなく、今は分かる。

E組に帰る竹林に、頭の中でE組に戻りたいと思う自分の姿を投影したのだろう。そう思うと妙に納得した。

同時に別の事実気付いた。

俺は、やっぱりE組に帰りたいたいのもかもしれない。そんな風に思う自分に気付いてしまった。

そんな俺の心情を知ってか、知らずか、殺せんせーは俺と竹林がE組を抜けたあの日以降、毎晩俺の所に来た。

何か、説教をする訳でも、何かを促すでもなく、その日あったことを俺に語り続けていた。金に余裕が無いくせに、俺の分までお菓子を持参して、毎晩毎晩。

でも、昨日、唐突に言われた。

「キミが周りを頼ることが出来たのなら、いずれ気付くことが出来るでしょう。いかに周りがキミのことを見ていてくれたのか」

その言葉を受けて、考え込んでしまった。

表面上、何を考えてるのかわからないポーズをしながら、その言葉の真意を俺はなんとなく理解していたと思う。

「周りを見ていないから、周りが見ていることに気付かない」

そんな風に言われた気がした。

殺せんせーにそんな意図があったのかは分からない。だが、誰に指摘されるでもなく、こんなことを考えてしまうと言うことは、少なくとも、自分にはその自覚があると言うことだろう。

いや、あるのだと断言できるか。俺は確かに周りが見えていなかった。でも、だからこそ、頑張ろうと思ったのだ。だからこそ、俺が一番目を逸らしていた父さんといの一番で向き合おうと思ったのだ。だからこそ、努力を続けたのだ。

今度こそ、俺を見てもらうために。

乃咲新一の子供と言う肩書ではなく、乃咲圭一という個人を見てもらう為に、もう一度、なりふり構わず出来ることを頑張ろうと普久間島の夕陽を眺めて思ったのだ。

だと言うのに、俺は、また、何かを間違えたのだろうか？

俺は、一体、何を間違えたのだろうか？

気を失う寸前に見た、辛うじて捉えた倉橋さんの泣きそうな顔が何故だか鮮明に脳裏に浮かんでいた。

?? ?? ??

たくさんの気配に揺すり起こされる様に目が覚めた。

実際は誰も揺すつてなんかいない。だが、思わず漏らした呻き声に視線が集まるのを感じた。

気怠く、重たい瞼を開けると飛び込んで来たのは知ってる天井だ。

古い今にも雨漏りしそうな程にボロい天井。

目を覚まして秒で現在地を把握した。E組校舎の保健室だ。

おそらく、俺が倒れた直後、倉橋さんが救急車よりも早く殺せんせーに連絡を取ったのだろう。

「おはようございます。目が覚めましたか、乃咲くん」

身体を起こそうと肘を着き、上半身を浮かすが、やはり力が入らず、そのまま崩れ落ちた。だが、崩れ落ちる寸前に辛うじて保健室の全体は見渡せた。

「おはよう、殺せんせー」

まずベットのすぐ横に殺せんせー。その少し後ろに渚、磯貝、竹林、倉橋さんを筆頭にしたみんながいた。出入り口の方をよく見れば、烏間先生やビッチ先生の姿もある。

「先生方、大事にしたみたいで、すみません。みんなにも心配かけたみたいだな、ごめん」

とりあえず、謝る。相変わらず思考は回らないが、自分がまずやるべきなのは謝罪だと思ったから。

俺の声にみんな苦々しい表情を浮かべた。うん、そりゃあそうだな。いくらみんなの人が良いとはいえ、裏切った上に体調管理を怠ってこんな大事にして、その上、時計を見てないから断定は出来ないけど、多分、授業も潰してしまった。

そりゃあ、こんな顔にもなるわな。

俺としても居心地が悪い。さっさとお暇しよう。

もう一度、無理やり体を起こそうと試みる。

「駄目だよッ！」

悲鳴の様な声を上げて、倉橋さんが起き上がろうとする俺の動きを押し倒す様に止めた。

両肩一杯に彼女の体重が押し付けられ、ベットが軋む。少しだけ痛い。でも、倉橋さんは退いてくれるつもりは無いみたいだった。一切の身動きが取れなかった。

「大丈夫だよ」

「何処が!?何が大丈夫なのか、私はわからないよッ!!」

倉橋さんが大声で止めてきた。いつもの元気なそれとは違う。明らかに怒気を持って怒鳴った。

やはり、倉橋さんのこんな声は慣れない所為か、思わず怯んでしまう。不良同士の怒鳴り合いとは毛色の違う威圧感があった。

「身体に力が入らなくて、1人で立つこともできなくて、何かの拍子に倒れるくらいボロボロになってる癖に、何が大丈夫なのか、ねえ、圭ちゃん!私は全然分かんないよッ……!!」

「……………どうしたんだよ、倉橋さん。そんな大声出して。キミらしくないって。たまたま調子が悪かっただけだよ」

「そうだとっても!!そのたまたまでさっき倒れたんでしょ!?!あの時、私を通らなかつたら!誰も気付かなかつたら!そのまま車が来てたら!?!圭ちゃん死んでたかもしれないんだよ!?!」

「流石に飛躍しすぎだよ。そんな簡単に死んだりしないって」

心配してくれる倉橋さんを言いくるめるべく、のらりくらりする。不味いな、頭が回らないからか、上手い言葉を選べない。

それでも拙く言葉を並べながら彼女をどかし、体を酷使して無理矢理、上半身だけでも起こすことができた。

「……………圭」

言葉を選んでいると、磯貝が一步前に出た。

倉橋さんと入れ替わる様に俺の前に出ると、流れる様に拳を振り上

げ、次の瞬間、バキツと喧嘩に明け暮れていた頃に良く聞いた炸裂音と共に世界が凄まじい勢いでブレた。

何が起きたのか、理解が追いつかなかった。

だが、肩で息をする磯貝と、この赤く腫れた右の拳。そして、肉が凹んだ様な感覚と鈍痛を訴える左頬、右に向かって倒れた身体から、ようやく思い至った。

「磯貝くんっ!!?」

また悲鳴に近い声が上がった。片岡が驚いた様に俺と磯貝の間に割って入る。誰も、磯貝の行動に反応できなかった。

殺せんせーですら、目を丸くして唾然としていた。誰も、磯貝が手を上げるとは思いもなかったから、反応できなかった。

「良い加減にしろよお前ッ！倒れたって聞いた時、みんながどれだけ心配したと思ってる!!?普久間島で殺し屋に言われたことを忘れたのか！無茶したら死ぬかもしれないんだぞ!!?本当に分かってるのかよ!!?」

磯貝がこんなに感情的になってるのを見るのは初めてだ。いつもニコニコ笑って、時々苦笑いして、みんなの中心でバランスーみたいなことをやってるコイツが感情を剥き出しに怒っているところを初めて見た。

このE組に来た時、謎にフランクに話しかけて来た磯貝。当時まだ不良扱いで浮いていた俺をみんなの輪に入れようとずっと話しかけてくれたコイツが、今、本気で怒っている。

何度、誘いを袖にしても、『また誘うから、その時は一緒に行こうぜ』といつも笑っていた優しい磯貝が俺を殴った。

「なんでもっと周りを見ないんだよッ!!」

「……見ようとしたさ。だから、頑張ろうとしたんだ。これまで向き合うことが出来なかった父さんをまずは見る。それを他人を見るってことの始めの一步にしようと思っただんだ」

「お前のそれは思ってるだけだろ！」

「……んなことねえよ」

「だったら……っ、だったらっ！ただの一度でも、自分が倒れた時、周

りがどんな思いをするのか考えたのかよッ!?お前が倒れたら、みんながどれだけ心配するのか、悲しい思いをするのか、もし、死んだりしたら、どんな思いをするのか、本当に一度だけでも考えたことあるのかよ!!!」

磯貝の言葉が痛かった。

俺はそんなこと、考えたこと無かった。

磯貝に殴られた頬が痛む。これまでの不良との喧嘩で殴られた時よりも、いつだったか、鷹岡に殴られた時よりも、烏間先生との訓練でミスった時よりも、これまでの凡ゆるタイミングで受けたどんな痛みよりも、今、殴られた頬が痛かった。

74話 吐露の時間 2時間目

保健室は静まり返っていた。怒りに身を震わせ、息を荒くする磯貝を除いた面子は俺を含めて呆気に取られていた。

さつき、倉橋さんにらしくないと言ったが、今の磯貝の方がよっぽどらしくないと思う。

名前を呼ばれたと思ったら、言葉よりも先に拳が飛んで来た。そんな予想外の状況に思わず動揺を隠しきれなかった。

コイツが心配してくれてるのは分かった。だからって急に殴ることとはないだろう、と一言物申したい気持ちはあるが、とりあえず謝っておこう。このままだと、また拳が来そうさ。

一言謝れば、磯貝も冷静になってくれるさ。そしたらもう一度、話し合おう。事を荒立てない為にも頭を下げるのは大事だ。

「悪かった。もうこんな事にならない様に今後は適度に休むよ。心配をかけてしまった様ですまなかった」

「お前、謝って事態を收拾しようとしてるだろ。心の底からそう思ってる訳じゃないだろ。見れば分かるぞ」

「……………」

磯貝の奴が妙に鋭い。別に普段が鈍いとかそんな事を思ってるつもりはないが、磯貝の絶対に逃がさないぞ、と言外に語る視線はかつてないほど剣呑だった。

「もうこんな事はやめろよ、お前が倒れたって誰も喜ばない。みんなが悲しい思いをするだけだぞ」

「……俺は自分の目的の為に動いてるだけだ。その為に努力することは何も間違っていないだろ」

「じゃあ、お前のやりたい事ってのは、こうやってみんなに心配かけることか？倉橋を泣かせることなのか？」

「んなこと言ってねえだろ」

磯貝の言葉にトゲを感じて、ムツとする。

自分の目的の為に努力するなんてのは当然のことだ。この教室に

いる奴だつて、みんな殺せんせーを殺す為に努力してる筈だ。

みんなに心配かけたことは申し訳なく思ってる。でも、努力を心配されてしまったら、誰も何も出来なくなる。なのに、なんでこんな風に言われなきやならないんだ？

「んじゃあ、言ってみろよ、お前の言葉で。お前は何がしたいんだ？何の為にそんなになるまで努力する？」

「言つた筈だ。父に認められたい、向き合いたい。あの人を見ることを他人を見るつて行為の第一歩にすると」

「本当にそんなこと出来ると本気で思つてんのか」

「……………何が言いたい」

「今、出来ないことが親父さんに認められたからってポンと出来るようになるつて本当に思つてんのかつて聞いてんだよ。お前は”見てる”わけじゃない。お前のそれは”気にしている”だけだ。そんな奴にお前のその理想が実現できるのかよ？」

「……………」

言葉を失つた。肯定も応援も期待してなかった。でも、否定されるのはますます予想外だった。

言葉を失い、沈黙した俺に磯貝は畳み掛ける様に口を開いては、現実を突き付ける様に言葉を紡いだ。

「出来るつてんなら、今やれよ。親父さんに認められる為だとか、向き合う為だとか御託を並べる前に、今、目の前にいる奴を見ろよ。みんながどんな顔をしているのか、お前が倒れてどんな思いでいるのか、まずはそれを見てみろツ！」

磯貝の言葉で視線をみんなに向ける。

倉橋さんは今にも泣きそうだった。渚は鎮痛な面持ちだった。片岡は心配そうだった。前原の顔にはいつもの明るさはなかった。カルマの顔にもいつものニヤけ面はない。

この場にいる誰もが一切、笑っていない。烏間先生、ビッチ先生、殺せんせーですらも同じだった。

「これが自分のことも、周りのことも顧みないでがむしやらに進んだ結果だつ！これがお前の言う『見る』ことに繋がるのかよ、こんな

で、お前の言ってることが実現できるって、本気でそう言ってるのかよ、圭一ツツツ!!」

また殴って来そうな勢いで磯貝が怒鳴る。

正直、身が竦んだ。普段優しい奴がこんな風に怒るのが意外だった。そして、少しだけ怖かった。

これまで、俺のことをこんな風に咎める奴はいなかった。怒鳴って叱られる経験は殆どなかったから。

「そんなに認められることが大事か、認められることの何がそんなに大事なんだツツツ!!」

「——知った様な口を叩くなツツツツ!!」

竦んでいた。正直、そのまま黙りこくって磯貝が落ち着くまで耐えようかと思った。でも、次の言葉を聞いた時、頭の中が真っ白になり、気付けば怒鳴り返していた。

最近では減ったが、怒鳴るのは初めてではない。不良だった頃、喧嘩相手に散々怒鳴ったし、父さんにも怒鳴ったこともある。だが、そのどの瞬間よりも怒気を孕んだ声が溢れていた。

初めて向けた敵意に近い感情から爆発した怒声はクラスメイトたちの肩をビクリと震わせたが、それでも俺は止まらなかった。

「親とか周りに褒められて、認められて育った奴が知った風な口を利くなよ、磯貝ツ！心の底から誰かに認められたいって思ったことも、本気で認められる為の努力もしたことがない奴が講釈垂れてるんじゃないぞツツツツ！」

頭の中が真っ白になる。視界が歪む。思考が回らない。思った言葉が垂れ流される様に口から出る。

八つ当たりする様に、半ば半狂乱になりながら。誰にも見せたことのない部分が晒されてゆく。

「テメエに何が分かるんだ？14年、何をしても見向きもしなかった相手がようやく、やっと、こつちを向いたんだぞ、やっと見てもらえる、やっと正面から互いを見れる。そのチャンスを逃したくなくて努力することの何が悪い!?認められたいって、褒められたいって願うこととの何が間違ってるんだ!!お前にコレの何が分かるってんだよ、磯貝

！」

「分からねえよ、お前は誰にも何も言わなかっただろツ！周りを頼らず、自分だけで背負い込んで、独り善がりですつ走って！誰もお前を認めてないって思ってるのか、お前だって色んな奴に認められて来ただろうに！」

「本当に俺のことを認めてくれる奴がこれまでの人生で出会った何百人の中にどれだけいたよ？どいつもこいつも、認めてるのは俺じゃなくて俺の父さんだろうがツツツ！」

止まらない。ダムが決壊する様に、長年溜め続けていた恨み節が口から溢れ出して止まらない。

気持ちが悪い。今まで押さえ込んでいたモノが抑制を失い、抑えていた反動が口という出口を指指して胸中でグルグルと周り続ける。どうしたら良いか、分からない。もともと気分が悪かったことも相まってますます気持ち悪い。

「なんかある度に父さんと比べられた。この教室で殺せんせーと烏間先生に出会うまで、俺と目を合わせて、俺自身を見てくれる奴なんて居なかった……ッ！『流石、乃咲先生のお子さんね』って。その言葉のどこが俺を認めてるってんだよっ!？」

「認められてるだろっ、お前のことをすごい奴だと思ってるから、親父さんのことを引き合いに出したんじゃないのか!？」

「だからお前らには分からないって言ってんだ！俺だって最初はそう思ってたさ、でも、知恵を付ける度に『お前が凄いのは優秀な父親のお陰なんだぞ』ってしか聞こえなくなっただよ！お前には分からないだろ!？優秀な父と比べられる窮屈さも、あの人の子供なら出来て当然みたいって言われる重荷も！」

「ツツツ………！」

俺の言葉に磯貝は黙った。クラスメイトの大半は俯いた。俺と目を合わせようとしたのは瞳一杯に涙を溜めた倉橋さんと、人一倍暗い表情をしながらも誰よりも神秘的な面持ちをしていた竹林だけだった様に思う。

ただ、そんなみんなの変化にも俺は気付かなかった。気付けなかつ

た。濁流の様に口からは言葉が吐き出され続けていた。

「だから頑張ったんだ。天才の子供の癖にこんなのも分からないのか、つてもう2度と馬鹿にされない様に、父ではなく、俺を見てもらえる様に！でも、どいつもコイツも『乃咲新一の子供だから出来て当然』って反応しかなかった！誰も俺自身の努力を見ようともせず、親に貰った才能のお陰って一言で片付けたッ！ふざけんなって話だ、結果を出したのも、その為に努力したのも、全部、全部ッッ！俺だろぅがッッッ!!」

「だからって、周りのことも、自分の事すら顧みずにそんなにボロボロになるまで無理を続ける理由にはならないだろッ!？」

「なるさ、それもこれも、全部父さんに認められたかったからだ。周りに認められればあの人だって俺を見てくれる。そう思ったからだ！その本人がやつとこつちを見たんだ。やつと二言以上で会話をしてくれたんだ、やつと、頑張りを認めてくれたんだ。これ以上に頑張る理由があるかよ!!?」

「そんなことになる前に、もつと頑張るべきところがあつたんじやないのか!!親父さんに見て欲しかったのなら、初めからそういえば良かったんじやないのか!?!初めからそうしてれば、そんな痛々しい頑張りをしなくても済んだろ、何度も倒れることもなかったんじやないのかッッ!!?」

「出来るわけがないだろっ、そんなこと!」

「何でだよ!?!親と話すだけだろ?もつと自分を見てくれってさ、それの何が難しんだよ!?!」

「難しい、簡単の問題じやねえんだよッ！お前なら分かるだろ、磯貝ッ！俺と同じ片親のお前なら!!」

磯貝が再び停止した。バツの悪そうな表情で口を開けて、閉じて、もう一度だけ開こうとしたが、出来なかつたらしい。

それでも俺は畳み掛けた。もはや、俺の口は自分の意思では動いてなかった。ひたすらに色んな言葉を叩き付けていた。

「片親がない、それでも俺を育てようとしてるって事くらい分かつてるさ、知ってるさ、理解しようとして努力もした。その苦労も察した。

赤ん坊が生まれると同時に妻を亡くした、それでも俺を育てる為に働きた。不自由させない様に家政婦まで付けて、金を掛けて、だから家に中々帰って来れないんだってことくらい、小1の頃に気付いてたさ！そんな状況でもっと僕を見てくれ、褒めてくれ、そんな我儘を言えるわけがないだろ!？」

嘔吐する様に言葉を並べ続けた。

今までこんなことは……いや、あつたか。我慢できなくなつて、遂に父さんに怒鳴つたあの日もこんな感じだった。

教師を殴つたときも、思い返せばこんな感じだった気がする。口を動かしたか、手を動かしたか、その違いだ。

たぶん、今、体を動かせたのなら、俺は間違いなく磯貝に掴みかかつていただろう。

「それでも……！言わなきゃ伝わらないことだつてあるだろ……ッ！お前はお前で、親父さんは親父さんなんだぞ。忙しい親に甘える訳にはいかないつて、その気持ちは分かるッ、でもっ！お前がそんな風に倒れることなんて誰も望まないだろ！」

「けど、財力もない、責任だつて自分で取れないガキの俺らに出来ることなんて努力することしかないだろう!!？」

「だったら、なんで倒れるまで努力する!?!お前が言つたんだぞ、自分で責任取れないガキだつて。認められる為に努力を続けてお前が倒れた時、その責任が行くのは親父さんなんじゃないのか!?!第一、親父さんが忙しいのはお前を育てる為だつて、自覚してるんだろ?そのお前が倒れて、親父さんがどう思うのか、考えたことあるのかよ、圭一!」
今度は、俺が言葉を失う番だった。

頭が痛い、もともと体調最悪な上に叫んで、怒鳴つて、感情を燃やしたからか、息が乱れている。

耳鳴りが酷い、目の前がホワイトアウトしそうになる、体が支えられなくて、倒れそうになる。

「倒れるまで頑張るなんて、誰も望んでないよ、圭一。お前が倒れたら、みんな怖くて、悲しい思いをするだけなんだよ」

「……………でも、俺には努力するしか出来ないだろ……」

自分の言葉が弱々しくなるのを感じる。冷や水をぶっかけられた様に昂っていた意識が急激に冷めてゆき、怒鳴りながら、叫びながら辛うじて保っていた意識が遠くなっていく。

「俺は、どうすれば良かったんだよ………。認められるように、バカにされないように出来ることをやり続けた。俺一人で出来ることはほぼやった。これ以上に何をやればよかったんだよ……。」

「分からない。答えはすぐには出せない。でも、だからこそ、俺も倉橋も竹林も、みんなも、相談して欲しかった。明確にこうしておけば良かったなんて言えないけど、一つだけ言えることがあるなら、お前は周りを頼って良かったんだよ、圭一」

意識の途切れる寸前、呟いた言葉に磯貝が答える。

「頼られて、嫌だっけ言う奴も、自分一人で解決できなくて馬鹿にする奴も、この教室にはいないんだからさ」

磯貝の諭すような言葉が聞こえる。

「……………そうか」

最後に出たその単語がどんな意味だったのか、分からない。みんなを頼れば良かったと言う悔恨なのか、初めから自分一人ではどうにもならなかったという諦観なのか、それとも昔から聞き続けた父の言葉を意味もなく呟いただけなのか。

その答えに至る前に俺の意識は再び暗闇の中に消えた。

?? ?? ??

最後に『そうか』と呟き、圭一の体から力が抜けた。

前のめりになる体を殺せんせーの触手が受け止めると、そのまま寝かせ直して、掛け布団を掛け直す。

「……………圭ちゃん。あんなこと考えてたんだね」

「……………ええ。彼のコンプレックスは相当なものだった様です。よっぽど小さい頃から気を張って生きて来たのでしょうか」

殺せんせーが呟きながら、救急箱に触手を伸ばして、俺が殴って真っ赤に腫れている頬を治療し始めた。

しばらく呆然とその様子を眺めて、俺も落ち着いた頃、殺せんせーが触手をこつちに向けながら言った。

「磯貝くん。キミも手を出しなさい。人を殴ることに慣れてないでしょう、腫れていますよ」

「……………良いんです。このままで。こんなつもりじゃなかった。それに圭一だって痛かっただろうし」

殴った拳が痛い。確かに腫れている。でも、殴られた圭一の頬はもつと痛々しく腫れていた。

ほとんど衝動的に殴ってしまった。彼の言葉があまりにも周りを見ていない様に感じて、自分のことも、周りのことも、見てないのが頭にきて、気が付いたら拳を振り下ろしていた。

「……………そうですね。確かに暴力はいけません。まして、弱って倒れてしまった相手を殴るなどあってはなりません。ですが、乃咲くんにはコレも必要なことだったと先生は思います。彼は決して周りを見ていないわけではない。ただ、周りが自分をどんな風に見ているのか、そこに目を向けられていないだけです」

殺せんせーの触手が圭一の頭を撫でた。

「小さい頃から根付いてしまった、いわば自分自身への偏見。自分はどう見られているからこうしないと。そんな半ば強迫観念に近い思い込み、そして、そんな状態に拍車をかける様な周りの言動が彼の中の価値観を歪めてしまった」

「天才の子供の癖にこんなのも分からないのか、ね。もしも、僕が彼と同じ立場で同じことを言われたのなら、同じことをしたと思う。馬鹿にされない様に、必死に頑張るだろうね」

「竹林……………」

眼鏡を押し上げてそんなことを言う竹林はきつと、今、誰よりも圭一のことを理解出来る立ち位置にいるのだろう。

「小さな頃に言われた言葉は案外、ずっと胸のうちに残り続けるものです。親の口癖なんか子供に写るのはその典型。それを言った相手に悪気がなかったとしても。その言葉が彼の中に残り続けてしまった。彼が無意識に周りを頼らず抱え込んでしまうのはそう言う、

ある種のトラウマが原因だったんでしょね」

「……………圭一」

「でもね、磯貝くん。今回の件、悪い事ばかりではありません。彼の限界を見切ることができなかったこと。それは先生が何より反省するところですがね、それでも収穫はあったと思います」

「収穫って、何が……………？乃咲、また倒れちゃったんだよ？」

「渚くん。キミはあそこまで感情を剥き出しにして声を荒げる乃咲くんを見たことがありますか？」

「ないね。不良やつてる時も、普久間島の鷹岡の時も声を荒げてたけど、あの時は明らかに違ってたと思う」

「その通りです、カルマくん。あの時の計算ありきの声ではない。弱り、動揺し、現実を突き付けられた事で生じた、彼の精神の揺らぎ。そこから出たあの叫びは、乃咲くんが抱え、誰に話すこともなく飲み込み続けて来た肉声です。それを聴くことができた。そして、磯貝くんがその声を正面から受け止め、言葉を返してくれたことこそが何よりの収穫なのです」

「……………あ」

倉橋が声を上げた。か細く、何かに気付いた様に。

「ようやく……………圭ちゃんが本音を話してくれた……………」

「気付きましたね、倉橋さん。今までの彼の言葉に嘘はなかった。けれどそれは本音とは違う。自分のことを話す時、何処か曖昧に、全てを語ることをしなかった彼と本音をぶつけ合った。乃咲くんが”見せてくれた”。そして、我々は”見た”。互いを認め合い、理解する上では大きな進歩でしょう？」

殺せんせーの言葉に納得した。

今まで、圭一と俺たちの間には、偶にしか気にならない程度の壁があった様に思うのは俺だけじゃないだろう。

圭一は、遊びに誘えば着いてくるけど、自分から何処かに誘って来るようなタイプではなかった。

圭一は、相談をすれば聞いてくれるけど、自分の悩みを積極的に話して来るようなタイプではなかった。

3年生に上がったばかりの頃に比べるとコミュニケーション力も高くなったし、色んな奴に好かれる様になった。

でも、やっぱり、ふとした瞬間に壁の様なものを感じていたのは確かだった。他人行儀な訳じゃない。でも、基本的に踏み込んで来ないし、踏み込ませてくれない。

ただ、今回、圭一は本音を吐露した。誰にも聞かせず抱えていたものを見せてくれた。

ようやく、本音で対等に話すことが出来た。そんな気がする。

「……でも、それはそれとして、殴ったことは後でしっかり謝つとかな
いとな……。流石にやりすぎた」

「だなあ……。磯貝があんなキレ方するの初めて見たし」

「ヌルフッフ、意見の食い違いから来る喧嘩、大いに結構です。君たちはまだまだ若い。それも子供だ。そうやって意見を伝え合って、自分を知ってもらい、相手を理解する。それを繰り返して大人になっていけば良い」

前原の茶化しに殺せんせーは満足そうに頷き、立ち上がると、ヌルヌルと音を立てて窓際まで移動した。

「律さん、さっきのデータは取れてますね？」

『はい！バッチリです、隠し撮りする様で乃咲さんには申し訳ない気持ちで一杯ですが……』

「それで責められるとしたら、それは先生です。キミは私の指示に従ったにすぎません。それに、この親子のすれ違いはあまりにも不幸すぎる。どちらにも悪気はなく、ただ、息子の気遣いが距離を空け、父の勘違いが誤解を生み、誰も悪くない不幸な時間差が、ここまでの軋轢に発展してしまった。解消するには、まず、父の勘違いを解かねばならないでしょう。その為にも、乃咲くんの心の底から出た叫びは必要です」

「気遣いと勘違いと時間差が生んだ軋轢……？」

殺せんせーの言葉に釈然としない。

けど、次の瞬間には殺せんせーは跳躍姿勢に入っていた。

「皆さん。申し訳ありませんが、午前中は自習とさせて下さい。乃咲

くんの親御さんと面談をして来ます。烏間先生、何かあればご連絡を。理事長先生には移動しながら報告しておきます」

「……………分かった」

烏間先生が頷くと、殺せんせーは飛び去った。

飛行機曇を描きながら、青空を凄まじい速度で飛んで行く。

残った誰もが殺せんせーの後ろ姿を静かに見守っていた。

75話 父親の時間

カタカタと軽やかなタイピング音が響く。コーヒーの匂いとノートパソコンの明かりが満たす部屋の中で1人、黒い髪を短く切りそろえた30代半ば程の男がキーボードを叩く。

その部屋に飾り気はない。男が使っている立派なテーブルと椅子、そして資料を保管するキャビネット以外にインテリッパらしいインテリアはない。そしてそのどれもが男の私物ではなかった。

この空間において、男の私物と言えば、現在触っている一台のノートパソコンとコーヒーの入ったマグカップ、そして使っている机に置かれた2つの写真立てくらいなものだろう。

「……………」

不意に手を止めて、写真立てを見る。2つの写真立ての中にはそれぞれ別の写真が収められていた。

一枚は、今より2回りほど若かった頃の男と将来的にその妻になる銀髪の女性が写った初々しい写真。

もう一枚には銀髪の活発そうな男児が不思議そうに首を傾げて写っている写真。カメラに慣れてない子供が『なにそれ?』と言いたげに心底不思議そうな顔をしていた。

妻は居ない。約15年前に亡くなった。

息子とはかれこれ1ヶ月は会っていない。

それもこれも、16年前に行っていた研究が原因だ。

乃咲新一の妻である、乃咲圭は、生まれつき重大な疾患を抱えていた。遺伝性疾患。遺伝子変異と呼ばれる類の障害である。

歩けない、四肢が足りない、指が多い少ないとか、そんな内容ではない。圭の疾患は幸運にも日常生活を送る上では何ら問題のないものだったと言える。ただ一点。致命的な程に代謝が悪いことを除けば、という言い方になってしまうが。

圭は致命的な程に代謝が悪かった。それもエネルギー代謝と呼ばれる、生きる上で必要なエネルギーの生成に関する機能が長い歴史を

持つ医学の中でも例を見ない程に劣悪だった。

長くは生きられない。そんな宣告を受けた圭。そんな彼女を治す為に勉強を始めたのが天才、乃咲新一のルーツだった。

結果的に成果としては失敗。妻である圭は亡くなった。

今、新一が机に向かいキーボードを叩きながら従事しているのは、そんな失敗の直後に切り捨てた筈の研究だった。

新一には弟がいた。自身と比べても遜色ない程に頭の出来が良い弟がたった1人だけいた。

新一が捨てる決断をした研究は弟が引き継いだ。この理論、技術があれば、常識を覆す発明になると。

どうでもよかった。そんな御託は。救えなかった研究に意味はない。惜しげもなくその成果はくれてやった。ただ一言、自分と息子に関わるなど告げて、新一は別の道を選んだ。

だと言うのに、かつて妻を救えなかった研究を再びしている。今度は息子の生きる未来を守る為だった。

新一の弟は、彼の残した成果を用いて実験を繰り返した。理論を応用し、独自のアプローチを組み込み、地球を襲っているエネルギー問題の解消と称して成果を出し続けた。

そして、その研究の成果として、1匹の怪物が生まれた。

最高速度マッハ20。特定の物質以外では破壊が困難な細胞で形成された超生物。1年後の3月には地球を破壊すると言われている破壊生物が新一の研究をルーツとする実験により生み出されてしまったのである。

一月前、政府に呼び出された。何かと内容を聞いた時、啞然とした。自身の手を離れた研究が地球を滅ぼしかけている事と、そんなことを弟がしでかしたのかと。

呼び出しの理由は至って単純。その超生物を無力化・無害化する方法を模索する為の協力願いだった。

自分には関係ない。既に自分の手を離れたモノだ。弟が責任を取るべき案件だ。そんな考えと同時に、地球滅亡という単語を理解し、ふと息子の顔が脳裏を過った。

自分の生きた証を残したい、そんな妻の願いで作った子供。親子の時間を取れず、軋轢を生んでしまったが、それでも日々成長し、大きくなり、妻と自分の面影を併せ持つ息子。

地球の滅亡はそんな彼の未来を閉ざす結末である。漠然とそんな考えに思い至った新一はかつて見切りを付けて投げ捨てた、自分のルーツであるテーマをもう一度研究することに決めた。

奇しくもその日は、息子と会う日だった。

?? ?? ??

覚えている。息子に怒鳴られたあの日のことを。『俺になんて興味なかつたんだろ!』と泣きそうな声で今まで聞いたことのない叫びを上げた息子の顔を。

あの後、息子を圭の実家に預けた判断は正しかったのか、否か。それは新一の頭脳を持ってしても分からなかった。

ただ、嫌われたと思った。同時に仕方ないとも思った。家にいることも少なく、一緒にいる時間も作れないのだから。家にいる間ですらも仕事仕事で構ってやれなかった。

息子はそんな自分の事情を判っているかの様に、幼い頃からいつも、ちやうど時間が出来た時に顔を出し、学校であつたことを楽しそうに話してくれた。駆けっこで1位だった。テストで満点だった。友達が沢山できた。図工で描いた絵をコンクールに出すことになったなど。

辛うじて時間を作って参加した懇談会でも、息子の評判はよかつた。教師陣からの評価にも偽りがないのは見て分かつた。息子の友人の親から聞く情報も良いものばかり。

勉強が出来て、運動も出来る。ゲームが上手くて、本も好き。話すと面白いし、友達が多い。礼儀正しいとか。聞こえてくる息子の噂はそんなものばかりだった。

自分は子育てに関われていない。金を稼いで、雇った家政婦のトメに色々と委託してしまっている。

親子らしいことをしたことがないし、親として教育らしい教育をしたことはない。それでも息子は自慢だった。

歳の割に落ち着いていて、聡く、賢かった。

できた息子だった。今にして思えば、できすぎていた。そんな息子に安心して、甘えてしまったのも事実だった。

息子の報告を聞くのは楽しかった。いかに聡くて賢い一面があるにしても、話しているとまだまだ子供だと思える部分が微笑ましかった。健康に生きてくれていることが嬉しかった。

新一は昔から、会話をするときには聞き手に回ることが多かった。息子の誕生と同時に亡くなった妻の『元気になったら、アレがしたい』『今度の休みはあそこに行ってみよう』とかそんな話に相槌を打つのが彼の昔からの日課だった。

もともと口数が多い方ではなかった新一は『ああ』とか『そうか』とか、そんな相槌ばかりしていたが、それでも圭は毎日毎日、飽きもせず夢を語る子供のように新一の短い相槌に言葉だけでも元気よく『そうなのー』と嬉しそうに頷いた。

そんな妻に息子は似ていた。父親の面影がないではないが、それでも、顔立ちを比べるのなら、圭に似た。

息子は妻に似ていた。寡黙で口下手な自分にあれこれと楽しそうに、嬉しそうに報告する姿は生前の妻と重なった。そんな光景に懐かしさを覚えながら、昔の癖で、つい息子の言葉に妻にしていたのと同じ相槌を繰り返していた。

似ていた。成長する度にますます似ていった。

かつて救えなかった妻に日に日に似ていく息子。ただ、それでも2人が別人なことくらいは理解していた。理解していたが、何を話せば良いのかわからなかった。

自分に話せるのは、昔話か仕事についてだけ。趣味の類が一切ない新一にとって、息子とのコミュニケーションは何より難しかった。もしも空いた時間にゲームの一つでもしていたら会話も弾むのだろうかと思っただけもある。

でも、息子とそういう話をしようにも、どんなジャンルが好きなの

かとか、そんな会話は息子が生まれて約10年の間に一度もなかった。息子は学校であったことしか話さなかったのだ。

どうしてそうなったのか、心当たりはある。

昔、幼稚園児だった頃の息子に『お父さんかっこいい。将来はお父さんみたいになりたい！』と言われた。

それが嬉しかった。そんな息子の夢を壊さないよう、イメージを崩さないよう、新一は人知れず努力していた。

その努力の甲斐あってか、息子の中の新一のイメージは幸か不幸か、厳格な父親になってしまった。

そんな厳格な父親に頑張りを伝えることはあっても、遊びを伝えることはいつの間にか無くなってしまったのだ。

新一は危機感を覚えていた。妻と息子は似ている。似ているが、明確に別人なのだから、まるつきり同じ反応を続けていて良いわけがないと理解していた。

しかし、理解だけでは何も変えられないのが現実である。何かを話そうにも、提供できる話題がない。学校とか私生活については息子が予め一通り並べているから、改めて話題にもできない。

妻と似ていく息子に、彼女とは別人であるという認識を持っているが故に、今までのように頷くだけでは良くないと考え、何か互いに共通している、尚且つ息子が喜びそうな話題を探そうとして、何を話せば良いのか分からなくなってしまったのだ。

そして、気付いた頃には遅かった。

息子もかつての無邪気な笑みを忘れ、淡々と、何処か怯えるように短く、最低限のことしか話さなくなった。

笑顔もなく、活気もなく、ポツポツとこちらの顔色を伺うように短く報告すると、緊張した面持ちで俯き、数秒の沈黙に耐え切れないかのように去ってしまふ。

約20年の時間で言い慣れた『ああ』と『そうか』はすんなりと出てくるのに、それに続く言葉が見当たらない。

共通の話題が見当たらないこともさることながら、息子の中にある厳格な父親というイメージを思うと下手なことを話せなかった。イ

メージを大事にしたいとかではなく、何を言っても息子のプレッシャーになる結果にしか繋がらないと思っていたからだ。

新一は実家と絶縁していた。とあるバイオ企業の後継として生まれた新一はひたすらに厳しく躰けられたし、厳しい指導の元で勉強させられた。なにより、社長なんて立場の父は世間体を気にする男だったから、恥ずかしくないように優秀であれと言われ続けた。

圭との付き合いに長らく反対され反感を抱いていたのもそうだが、親は世間体を気にするばかりで、自分に見向きもしない。努力しても叱責される。その倍以上頑張れば、更に叱責の声は大きくなり、嫌気が差すのも当然だった。

頑張っても、頑張らなくても責められ、世間体を気にして、圭との付き合いに反対し続けた父の言葉はどんなものであっても、新一にとってプレッシャーでしかなかった。

そんな過去の影響もあって、新一は必死に言葉を選んだ。絶縁した父と同じことを繰り返さないように仕事の時以上に、取材を受けた時より丁寧にその頭脳を回転させた。

だが、時間は待つてくれない。考えている間にも時間は流れるし、流れただけ沈黙は長くなり、息子は去ってしまう。

事実、言葉を選んでいる数秒の間に息子はいなくなる。引き止めようにも言葉が出ない。とりあえず引き留めるだけならできだろうが、引き留めてから言葉を探している間の時間が何より気不味くなるのは火を見るより明らかだった。

かといって、部屋に行くのも得策ではないだろう。勉強している時に厳格な父が部屋を訪ねてくるというのは、息子にとって信頼されないのでは？という疑念になるだろうし、仮にゲームなりをしているのだとしても、たまたま息抜きしている所に普段は来ない厳格な父が来ると言うのはプレッシャー以外の何者でもない。そんなことをしてしまえば、息子は息抜きすら出来なくなるのが想像に難くない。

考えれば考えるほど、新一は動けなくなっていた。

息子は日々大きくなる。学年が何度上がっても、聞こえてくるのは学年で1位だったと言う結果ばかり。そんな日々の中でいよいよ息

子も中学に上がると言った時期に差し掛かった頃、学生時代の先輩に声をかけられた。息子を自分の経営する中学校に入れる気はないか？という誘いだった。

浅野學峯。学生の頃から良く気に掛けてくれていた相手だった。新一が自主的に交流をしている数少ない友人。

彼の経営する私立の中学はかなり有名だ。日本屈指の進学校であり、今どき珍しい中高一貫校。加えて、他の学校と比較しても比肩するモノがないほどにハイレベルな教育を受けられる。

悪くない話だと思った。親の鼻負目なしでも息子は優秀だったし、何をやっても1位を取ってくる息子は、新一の視点では向上心の塊に写っていたから、きつと類を見ない程にレベルの高い教育を受けられることを喜んでくれると思った。

時期が悪く、直接聞くことは出来なかったが、トメの話では、桐ヶ丘の受験に頷いてくれたらしい。

嬉しかった。働いて金を稼いで、養って。確かにそれは親の仕事なのだろうが、息子の選択肢を、可能性を広げ、より良い環境を提供することができた。初めて親らしいことができたと思った。初めて息子の為に行動できたと思った。

この時点で、息子と自分の間に様々な誤解や勘違い、すれ違いがあるとも気付かなかったのだ。

息子は当たり前のように主席で入学を果たした。知り合いの学校ではあるが、そこに後ろめたさを覚えるような手心は一切ない。理事長である浅野が手放しで褒めていた程だ。

しかし、息子は壁にぶつかっただけで通ったらしい。その年の主席は2人いた。息子と浅野の息子。入試を満点で通過したもう1人。

親バカの気がないではないが、驚いた。自分の息子と比肩する相手の出現は初めてだったから。けれど、同時に嬉しかった。息子に張り合える相手が出来たのだと。学生時代は新一も先輩である、浅野を相手に張り合っていたし、それは楽しかった。だから、そんな環境を与えられたことが嬉しかった。

そこに長年の生活で息子との広がりきった距離で生まれた認識の

違いがあるとも知らずに。

ある日、息子が倒れたと連絡を受けた。その連絡を受けた瞬間に仕事を投げ出し、急いで帰宅したが、運悪く、移動に1日を費す距離があった為息子を見舞うことは出来なかった。

息子はその日のうちに点滴を打って帰宅したらしい。新一が家に着いたのはそんな息子が翌日、登校した後だった。

体の弱かった妻を思い出し、新一は思わずトメを叱責した。なぜ、止めなかったのかと。しかし、自分が同罪……いや、一番悪いのは自分だと気付いて口を噤んだ。

見ていれば気付くことが出来たかもしれない。だと言うのに仕事にかまけて息子と接する時間を取らなかった自分の責任だ。

トメに謝罪し、息子へ身体に気をつける様にと伝言を残し、一旦職場に戻った。息子との時間を取るべきだと考えたからである。幸いにも、新一のしていた研究は理論を整理し、論文にまとめる段階であった。上司に直談判した結果、最悪、パソコン一台あれば何処でも仕事ができる段階だった為、自宅勤務に労働形態を移行することは容易かった。

しかし、新一はここでも間違った。親として、その選択は間違いではなかったが、順番を間違えた。

新一は、まず、一目だけでも息子に会うべきだった。だが、息子との時間を確保する為に、まずは環境を変えなければと言う考えでそちらを優先してしまった。

一言で言うなら、合理的だった。息子との時間を増やす為の合理的思考だったが、それが距離の出来てしまった息子に伝わるかどうかで言えば、確実に否である。

ここでまた一つ、距離が出来た。

新一が手続きを終えて家に戻った頃、息子が青い顔をしてテストの答案を持って来た。

どうやら、息子が倒れた翌日はテストだったらしい。テストの結果が芳しくなかったり、テストを欠席したら学校の中でいじめに近い待遇を受けるE組に落ちる事になる。それは入学時点で把握していた

から、そうならない為に無茶をしたのだと新一は納得した。勘違いしてしまった。

息子が差し出した答案は前日に倒れたとは思えない程に高得点だった。ほぼ100点。ただ1教科だけ、98点だった。

充分すぎる成績だった。それでも学年2位だった。息子は浅野の子に負けた結果だったのだろう。

しかし、何も叱責する気はなかった。外したのもたった一問だけ。見たところケアレミスミスだが、前日に体調を崩したことを思えば素晴らしい出来だと思つたし、息子の努力も感じられた。

しかし、新一は言葉を選んでしまった。どんな言葉を投げるべきかと考えてしまった。

即座に言葉を投げるには、あまりにも息子との間に距離が出来すぎてしまった。何を言えば良いのかわからなかった。

体調を崩すまで努力した姿勢を褒めるべきだと言う自分。

健康を害して努力する必要はないんだと諭そうとする自分。

テストの結果に言葉を掛けてやるべきだと主張する自分。

褒めた後にでも体調を軽視したことを叱るべきだと思う自分。

どれに従うべきか考えた。でも、いつまでも無言でいるわけにはいかない。一言でも掛けて場を繋がないければ。

そう考えて、新一の口を吐いたのはいつもの口癖だった。「そうか」といつもの様に言った。間を繋ぐ一言にいつもと同じ言葉を選んでしまった。それが、息子との関係が致命的に崩れる亀裂を入れるとも気付かずに。

息子はその一言を受けたあと、失望した様な顔をして、俯きながら部屋を出た。また声を掛けられなかった。

今にして思えば、この時に追うべきだった。けれど、今までの経験が新一にその選択をさせなかった。

そして、これ以降、息子は階段を転げ落ちる様に成績を落としていった。勉強をしなくなった訳ではない。ただ、机に向かってペンが進んでいない様だと、様子を見ていたトメは語った。

息子も多感な時期だ。悩みの一つや二つあるだろう。それに、勉強

をしていない訳ではないのであれば、叱ると言うのは躊躇われた。遊び呆けた結果の墮落ではなく、努力しても結果が振るわない墮落。自分なりに努力して結果が出せないことを親からとやかく言われる鬱陶しさと、怒り、そしてやる気を失う感覚を新一は理解しているつもりだった。

息子との時間を取る為に始めた自宅勤務だが、結果として息子との距離はどんどん開いて行った。

自分の経験から、息子の気持ちを考えれば考える程に触れ合いも話し合いも難しくなり、親子関係は破綻していった。

テストの度に聞かされる、墮落していく成績。しかし、努力をしていない訳ではない息子を叱る気にはなれず、かと言って、自分のどの言葉が息子にプレッシャーを掛けてしまうのか分からない。イタズラに重圧を感じさせるのは望むところではなかった。

この段階に来て、新一は気付いた。息子との接し方を間違えた。喜び勇んであることあること全て報告していたあの幼い頃に、もっと言葉を交わしておけば良かったのだ。息子の言葉に、努力に満足するだけでなく、頷くだけでなく、もっと伝えるべきことがあったのだ。

何があっても、息子は報告に来た。報告して、数秒だけ間を置くとそのまま去ってしまう。

彼にはもう、自分と会話する気もないのだと思った。それも当然だと自分に言い聞かせるまでもなく納得した。

新一自身、何度も息子に話しかけようと思ったが、ことごとく失敗した。息子に何を言えば良いのか分からなかった。

そうして、事件が起きた。

ある日、どうしても出向かなければならない案件で外出した時、浅野から電話が来た。曰く、息子が担任を殴ったと。その連絡はにわかには信じられなかった。だが、浅野から現在の息子が学校でどんな状態なのかを聞かされた。

聞いた話は想像と違っていた。昔の様に友人が出来たと報告を受けることもなくなったが、それでも今も友人に囲まれているものだと

思っていた。保護者会で褒めちぎられる自慢の息子。昔と同じそのままの姿だと思っていた。

現実とは違った。ある時期から、友人が離れ始めた。目つきも悪くなり、誰も近寄らなくなつた。他校の生徒と喧嘩したり、同級生を恐喝したと言ふ噂すらあると。

なんでそうなつたのか、分からなかつた。

ただ、漠然と放つたらかし続けた結果だと思つた。

だが、幸か不幸か、息子が担任に手を挙げた理由は一部始終を見ていた教師から報告があつた為に推測できた。

「父親と違つて、なんでお前は出来損ないなんだ」と当時の担任に言われた直後、息子は手を出したらしい。

息子の努力は知っているつもりだつた。だからこそその自慢の息子だつた。「流石、乃咲先生のお子さんですね」と何度も言われた。きつと、息子も言われ続けてきたのだろう。

そう思えば、息子の怒りにも共感できた。親として叱らなければならぬだろうが、それでも納得出来た。自分も息子と同じ歳の頃、世間体を気にする父と比較され続けていた時期に同じことを言われたのなら、同じことをしたかもしれない。

息子の怒りに納得できて安心した。息子は、理由もなく他人を殴つた訳ではないのだと心底安心した。

だが、同時に絶望もした。

息子が手を挙げた理由は自分だつた。彼にとって自分は、若い頃、息子と同じ歳だつた頃に父に感じていた目の上のタンコブでしかなかつた。知らず知らずのうちにかつての父と同じ道を辿つていた。自分は父と同じことをしてしまつた。

かつて、父の支配下にいた頃、何度も言われた。「流石、柳沢さんのお子さんね」と何度も何度も。

その度に嫌気がさした。その度に反感を覚えた。その度に悔しかつた。お前が出来るのは父親が凄いからなんだぞ、と言外に言われている気がして気に食わなかつた。

もしかして、息子もそうだつたんじゃないのか？

その言葉を言った彼らにとっては褒め言葉だったのかもしれない、その声が自分の努力を否定するものに聞こえていたんじゃないのか？言われる度に人知れず傷付いていたんじゃないか？

新一が真相に辿り着いた頃には手遅れだった。

新一が家に着く頃には、息子が既に帰宅していた。テストの結果を返されたらしく、いつもの様に答案を持って、報告に来た。しかし、新一を前にした息子の纏う空気は普段と違っていた。

そんな息子を心配したのか、いつもは同席しないトメが息子の後ろ、ドアのすぐ横に控えていた。

「何処まで聞いているか分かんないけど、最下位だった。あと、教師を殴って停学くらったよ」

淡々としていた。かつての様な楽しげな雰囲気もなく、前回までの報告の様な顔を伺うような仕草もない。

過ぎてしまった事実を淡々と述べている様に見えた。そこには、後悔も反省もないのは見てとれた。

「3月、3年生が卒業したらE組だつてさ」

「……………そうか」

あつけらかんと言った。明日、雨が降るつてさ。そんな天気予報でも伝えるみたいに何事もないみたいに言った。

思わず呟いていた。この後に及んでも何を言ったら良いのか分からなかった。どの言葉をかけるべきか分からないのと、息子の反応が、態度が予想の範疇を出ていたのもあるだろう。

「…………坊ちゃん、その言い方はよくありません。旦那様が折角お時間を取っていると言うのに」

「坊ちゃんはやめてくれて言ってるだろ、トメさん。それに、時間なんてただ取ってるだけだろ？空いた時間で聞いているつてスタンスを取ってるだけ。俺の話なんて聞いてないんだろ？」

「坊ちゃんツ!!」

「…………はあ。トメさん、うるせえよ。そりゃあ、感謝してますよ。育ててもらった、日常生活には不自由なく生きて来れた。こうして家政婦のアンタを雇ってくれてるから、片親の不自由さってのとは無縁の生

活を送って来られたさ」

「でしたらもつと、言い方があるでしょうっ！成績を落とし、暴力沙汰を起こしたのですよ、反省の一つでもしたらどうなんですか!?悪いことをしたら反省する、そんな幼稚園児でも出来ることも出来なくなつたのですか!?!」

「だから声を荒げるなよ、うるせえな」

「坊ちゃんツ!!」

「だから煩いんだよツ!!本当にうぜえ。鬱陶しい。ドイツもコイツも、俺に興味がないのは分かりきつてんだよ。上っ面だけの説教なんざ聞きたくねえし、聞く価値もねえ。興味持つてるフリするのやめてもらつて良いか?」

「興味のない相手に時間を作る者も、説教する者もいません!急にどうしたのですか、坊ちゃんらしくありません!」

「らしくない?アンタに俺の何が分かるんだよ!?分かる訳ないだろ、ふざけんなっ!アンタも、教師も、これまで会った大人たちもツ、ドイツもコイツも見てるのは俺単体じゃなくて、乃咲新一の息子。有名な”乃咲先生の付属品”だろう!?!」

「その様なこと………ツ!」

「だったら、なんで俺だけを認めてくれなかった?なんか出来る様になる度に褒められた。”流石、乃咲先生のお子さん”って。なのに少しでも至らない部分があれば”コイツ、こんなことも出来ないのか”って見られる。出来てる間はちやほやしてた癖に、出来なくなつた途端に手のひら返した。みんないなくなつた!そんな奴らの言葉の何を信じろつてんだよ!?!」

息子の激情は激しかった。そして、覚えがあった。

父の様になりたくなかった。息子に窮屈な思いをさせたくなくなつた。その結果、考え込んでいるうちにいつの間にか干渉することができなくなり、そして、同じ過ちを繰り返した。

「それでも頑張つたさ、努力したさ。受け継いだ才能とかじゃなくて、俺自身の努力を受け入れて貰えるようにツ!結果を出し続けた!でも、アンタは俺が何を言つても、何を話しても、何も答えてくれなかつ

た。ただ短く頷くだけだった！なあ、父さん。俺になんて興味なかったんだろ!？」

言い返せなかった。そんなことはないかと否定したくても、否定できるだけの材料を提示できる自信がなかった。

思えば、確かに自分は頷くだけだった。息子の話を聞くだけで満足してしまっていた。話そうと思い、必死に話題も探したが、結局のところ、一度も実行できなかった。

話しているのは息子だけ。自分は頷くばかり。

何の感想も、意見も、アドバイスも、指摘もせず、ただ聞いて頷いているだけ。学校の授業なら、それで内申点も稼げるだろうが、これは授業ではなく、親子の、人間関係の問題だ。

他人であるなら、それでも良かっただろう。こういう奴なんだと理解して、それなりの距離感で接することが出来ただろう。

だが、新一と息子……圭一は親子だ。まして、精神が成熟した大人であるのならまだしも、まだまだ多感な時期の子供である。

そう、まだ親の言葉が必要な子供なのだ。結果を出し続けても頷くばかりで、倒れた時も伝言で済ませてしまい、成績が低下しても何も言わなかった。そして今も何も言えなかった。

興味が無いと思われて当然だった。

圭一は誰にも目をくれず、部屋を出た。

新一が久しぶりに見た息子の感情は、怒りと、悲しさと、ある種の憎悪に近いものを混ぜ合わせた様な悪感情だった。

新一は考えた。どうすれば良いのか。どうすれば、色眼鏡をかけず、圭一自身を周りが見てくれる環境に出来るのか。

そんなことはまず、自分が圭一をしっかりと見ていることを伝えてやらなきゃだと思わなかったわけじゃない。でも、今の圭一に何よりも必要なのは、自分自身を見てくれていると実感できる大人だと思つた。そして、それが自分には務まらないことを理解してしまった。きつと圭一は今は自分の言葉を聞いてくれないだろう。そんな確信があった。

だから、妻の実家に預けた。親以外で子供に対して無償の愛と言う

ものを与えられるのは肉親だけだと思ったからだ。

自分の実家に預けることはしなかった。既に絶縁しているし、何より、あの父のことだ。圭一が今以上に追い詰められることが目に見えていたから、義実家を頼った。

孫の荒んだ姿に義両親は驚いていたが、新一が子供の頃から付き合っていた義両親は、今の圭一の置かれている現状を聞くと神妙な顔で遠くを見た後、二つ返事で頷いてくれた。ただ一つ、週に一度、圭一の顔を見に来ることを条件にして。

そして、時間が流れた。週に一度会っても、相変わらず新一と圭一の間には会話は無い。話しかけようと話題を探しても、話すことはない。と会話を打ち切られてしまう。

会話のつかかりすら掴むことが出来ないまま何ヶ月も経った頃、また浅野から連絡があった。

なんと、圭一が再び主席に返り咲いたと言う。

素直に驚いた。圭一はもう、やる気を失ったと思っていた。聞いた話によれば、前回のテストで186人中、51位にまで上っていたらしい。ますます驚いた。突如としてやる気を出したわけではなく、前々から兆しがあったと言うことだ。

あの子は一度もそんなことを口にはしなかったし、新一自身、息子の様から気づくこともできなかった。

その時、初めて理解した。

自分に足りないのは言葉だけだと思っていたが、違った。息子のやる気の変化にすら気付かないほどに、自分は圭一を見れていなかったのではないかと。

少し事案になりそうな勢いで圭一を褒めちぎった後、話を切り上げ、電話を切る直前、ついでの様に浅野に言われた。もっと子供と話した方が良いのではないかと。

それは言う通りだと思ったし、言われるまでもないと思った。不器用に話題を探し続けていた新一の目からしても、これ以上ない程にタイムリーで、なにより、息子に言葉を掛けるにはうってつけの話題だった。そして、これまでの失態を取り戻す為の明確な一手を見逃す

ほど、新一は愚かではなかった。

そして、息子ともう一度話をしてみようと決心したその直後に、かつての妻の為だった研究が地球を滅ぼしかけていることを知った。急遽、海外のとある研究機関まで出向かなければならなくなったのである。

準備やらトラブルやらに追われながら、圭一が夏休みに入ってから少しした後、ようやく息子と対面した。彼は相変わらず仏頂面で、このままだといつもの様に切り上げられてしまっただろうことを感じていた新一はようやく一歩踏み込んだ。実に14年。踏み出すには遅過ぎた一歩である。

そして、その一歩は新一に息子の一面を初めて見せた。

キョトンと音がしそうな程に拍子抜けした少し間抜けな顔、そして、それはどんだん驚愕に染まっていく。

ああ、お前はそんな顔をして驚くのか。息子の初めて見る表情に感慨深さがあった。懐かしかった。圭一の驚く顔は圭に似ていた。しかし、彼と同じ歳の頃に初めて外出に誘った時、圭もこんな顔をしていたと思う。

(……ああ、そうか)

ようやく理解した。話題を選ぶ必要はなかったのかもしれない。プレッシャーをかけないでコミュニケーションを取る方法なんてのはいくらでもあったんだ。ただ、口調だけでも柔らかくする。それだけで良かったのかもしれない。

ただ一言、大きくなったな、と告げるだけで良かったのかも知れない。

圭一は、短く、それでも言葉を返してくれた。会話のキャッチボールと言うにはあまりにも拙く、短い。だが、言葉に単語でしか返してなかった頃から鑑みれば、石器人がチャツカマンを開発したくらいの進歩である。

嬉しかった。仕事の都合で短い時間しか取れなかったし、どちらかと言えば、新一ばかりが喋っていた。でも、息子の口から久しぶりに拒絶以外の言葉が出て来た。

妻は、自分が言葉を返すと嬉しそうに笑ってくれた。その気持ちは今、理解出来た気がする。

新一はようやく前進しそうな息子との関係に胸を躍らせて仕事に向かった。これまでとは違う。やっと息子を褒めることが出来た。やっと会話が成立した。そのきつかけは作った。

これまでの一方的な言葉の投げ込みではなく、会話出来る。今までのすれ違い続けた時間を取り戻すのは大変だろうが、それでも、前進する兆候を得られたことが嬉しくてたまらなかった。

?? ?? ??

そして、現在に至る。地球を滅ぼしかけている怪物を無力化する為の研究を初めて1ヶ月。進展は芳しく無かった。

それ自体が新一にとって、頭痛のタネであったのだが、現在はそれ以上の頭痛のタネを2つも抱えていた。

「お邪魔します……」

コーヒーを啜りながら、物思いに耽っていると、窓から人語を解する黄色い巨大なタコが入って来た。

何を隠そう、このタコこそが新一が研究している超生物そのものである。無力化する為の研究をしていると言うのに、その対象本人が職場見学みたいなノリでお菓子片手に飽きもせずやって来るのだ。毎日、ニヤニヤと笑いながら。

それが1つ目の頭痛のタネ。

そしてもう1つ……。

「こんにちは、乃咲博士。息子さんの件で元担任の教師としてのお話があつて来ました」

このタコ型超生物は、こともあろうか日本で努力を続けているであろう息子の元担任だと言うではないか。

最初は信じなかった。だが、1枚の写真を見せられてたっぷり10分ほど絶句することになる。なんとクラスメイトたちと楽しげに笑っている息子がおさめられた写真に、なんとこのタコも写っている

ではないか。

凡ゆる方向に才能を持つ新一にはそれが合成の類ではないことなど容易く理解出来たし、写真に写っているのが息子に良く似た誰かと言う線もないことは確信していた。

「……今日は随分と早いようだ。日本ではまだ日中だろう。授業はしなくてもよろしいんですか？」

「ええ。それどころではない事態が発生しましたので」

この超生物との初対面はあまりの情報の多さに頭痛がした。そのまま寝込んでしまいたくなるほどに。

かつて自分の研究していたテーマを基にした実験の成果が。

来年の3月には地球を破壊するかもしれない超生物で。

そんな超生物は一人息子の元担任で。

息子はそんな超生物の暗殺を日本政府に依頼されていて。

そのターゲットと楽しみに写真まで撮っている。

自分ですら見たことのない笑顔の息子と。息子と……。

色々と物申したいことはあったが、賄賂と言わんばかりに差し出された圭一の隠し撮りを十数枚だけ受け取り、懐に収めることで部屋への入室を許したのが数日前のこと。

それ以来、毎日来るようになってきた。このタコがする話といえば、E組で圭一と出会ってからの思い出話である。

この生き物は頭痛のタネではあるが、同時に息子の学校生活を誰よりも側で見ている存在である。よって、これは研究対象の観察であると言う建前と免罪符を全身全霊で振りかざしながらこの生き物の話に耳を傾けた。

三日月のよう口をニヤニヤと歪めながら話をする超生物は、なにやらいつもと様子が違っていた。

言動は落ち着いているように見せかけているが、内心では焦りが渦巻いているのが見てわかった。

「……………何があったんでしょうか」

だから聞くことにした。それは決して社交辞令ではない。息子のことで話があると第二声で言っていたし、加えてこの数日で見たこと

がない様子を見せる超生物から、圭一に何かがあったのだと察しはついた。

語気が僅かに強張るのを感じながら投げた問い掛け。そんな父親を前にして、息子の担任は現状を端的に伝えた。

「圭一くんが過労で倒れました」

短い現状通達。しかし、その言葉を認めた瞬間。新一の脳内の時間が一気に緩やかになるのを感じた。

倒れた……。倒れた……。？圭一が倒れた……。？

言葉を理解した瞬間、部屋の中にはマグカップの割れる音とコーヒーが床に叩きつけられる音が響いた。

「……………申し訳ない。今日は帰って頂けないだろうか。用事が出来た様だ。火急なのでもう行かなければ」

「どんなに早い飛行機でも、今からチケットを取って移動してでは、ここから日本の櫛ヶ丘に向かうには1日掛かりますよ。私に捕まってお下さい。道すがら、息子さんのため込んでいた言葉でも聞きながら……………そして、どうかお願いです。圭一くんが目覚めていたら、もしくは目覚めたのなら、貴方の言葉で、彼を認めてあげて下さい。叱つてあげて下さい。そして、伝えてあげて下さい。貴方がしっかり、彼を見ようとしていることを」

「……………分かりました」

息子の担任の言葉に頷き、差し出されたスマホと接続されたイヤホンを耳に着けたその瞬間、タイミングを見計らったかの様に音が再生された。

聞こえて来たのは、知らない男の子の声と息子の声。ただ、談笑しているという雰囲気ではない。どちらも語気が荒く、感情的になっているのが分かる。

「……………つ……………」

そして聞いた。息子の声を、言葉を。長らく抱え続けて来た思いの丈を。怒鳴り声に似た、子供の泣き声を。

「……………自分を見て貰えない人間は、いずれ道を違えます。他人に興味を持たなくなったり、自分を見て貰った経験がないから、他人を

見ることが出来なくなる。そんな人間が起こすのは間違いなく、不幸の連鎖です。無意識に同じことを他者にする様になり、された側も周囲に同じことをするでしょう。そうなる前に貴方が止めて下さい。

”あの子”を見てあげて下さい」

吐露する様な声を聞きながら太平洋を通過した。

これからどうするべきなのかを考えながら。

76話 親子の時間

気怠い。身体が思う様に動かない寝苦しさで目を覚ます。

好きな時に好きな様に寝返りを打てないのはこんなにも違和感があつて寝苦しいのかと思いつながら目を開けると、清潔感たっぷりの真っ白い知らない天井があつた。

何があつたのかは覚えてる。通学中に倒れ、殺せんせーにE組校舎に運ばれ、磯貝と怒鳴り合い、そしてまた倒れた。

おそらく、ここは病院だろう。

どうする？ ナースコールでもしてみるか？ そんな思考を巡らす、しかし、身体は思う様に動かない。

大人しく、寝てるとしよう。

今年に入ってから気を失つたのは何回目だろうか？

鷹岡に殴られた時、普久間島で潜入が終わった後、倉橋さんとの通学中、そして怒鳴り合った後。

凄い、4回も気絶してる。ここまで短期間で気絶してる中学生は中々いないだろう。一年の頃のを含めたら5回だ。しかも話によるとその原因のほぼ全てが過労なのだから凄まじい。

このまま、もつとも多く倒れたで賞の中学生部門で優勝を狙うのも悪くないかもしれない。

「……………馬鹿か」

いや、ほんと。何やつてるんだろ、俺は。

心配してくれてる倉橋さんを適当に言いくるめようとして、俺の為に怒ってくれてる磯貝に怒鳴り散らして、E組のみんなを心配させて、怖がらせて。その結果がコレだ。

みんなには謝らないと。特に磯貝と倉橋さんには。

みんなには心配だけじゃなく迷惑まで掛けてしまった。

磯貝にはキツイ言葉で感情的に八つ当たりしてしまった。

倉橋さんを泣かせてしまった。思えば、普久間島の時を含めて、彼女の前で2回も倒れてしまっている。そりゃあ怖いだろう。心配も

するだろう。なのに、戯けて、冗談言つて、言葉を無視した挙句に適当にあしらつてしまった。

磯貝の言葉が脳裏を過る。

自分と周りを顧みることなく独りよがりにつ突つ走つた結果がこの惨状だ。自嘲することすら烏滸がましい。

あんだけ酷かった頭痛も消えた。頭の中はクリアだ。果たしてそれは、磯貝に当たり散らしてスッキリしてしまった所為なのか、眠つたからなのかは定かではないけれど、夏休みの最後くらいから続いていた昔の自分の考え方の再現は止まつてしまった。

これが最後だとか、元仲間だとか、誰に訊かせるわけでもないと言うのに、モノローグで付けてまで頑張つただけだなあ。

まあ、でも、分かることはあつた。

俺は、この4ヶ月で変わったと思つたけど、結局は何も変わつてなかつた。少しだけ現実を知つて、気が大きくなつて、自分ならできんだと自惚れて、暴走して、倒れてしまった。

全校集会で身の丈にあつた態度でいろよ、とか言つたけど、一番身の丈に合わない態度だったのは俺だったな。

ただただ反省するばかりである。みんなに謝ろうにも、どんな顔をすれば良いのか。これから俺はどうするべきなのか。考えなきやいけないことは泣けるほどに盛りだくさんだ。

「……………圭」

「——えっ?」

天井を見上げてぼーつと考えていると、知つているけど聞き慣れない声が不意に鼓膜を叩いた。

ああ、知っている声だとも。ずっと褒めて欲しかった、認めて欲しかった相手の声だ。なにより、血の繋がつた父の声だ。忘れてはしていないから当然だ。

でも、不思議だつた。2ヶ月は出張だとか言つてた筈なのに、なんでこんなところにいるんだろう?

思わず凡ゆる不調を無視して体を起こして声のした方を見る。

そこには、科学者然とした白衣姿の父がいた。

「幻覚……じゃないよな」

「……ああ。幻覚などではない。お前に……会いに来た」

思ってもなかった言葉に驚いた。

父が二言以上で話していることに慣れないのもそうだが、何より、俺に会いに来たと言う言葉に驚愕した。

「……仕事はいいのかよ」

「子供が倒れて、平然と仕事ができる程、私は落ち着いた性格はしていないさ。信じては……貰えないだろうけどね」

父の言葉に嘘はない。伝わってくる意識の波長には嘘の色はなく、態度からも後ろめたさを感じない。

それに、1年の頃。初めて成績を落としたあのテストの直前に倒れた時も、この人は一回、帰って来たらしい。それはトメさんから聞いていた。あまり無茶をしないようにと伝言も受けた。でも、それだけだった。この人はそれだけ言い残してあっさり仕事に戻ったのもまた事実。

「……いや、嘘じゃないのは分かるよ」

それでも、やっぱり意外だった。死んでないのならどうとでもなると言わんばかりにまた、様子だけ見て帰ると思っていた。

例え、この前、漸く会話が成立したのだとしても、たったそれだけのことで出来てしまった溝を埋められるほど、俺はこの人のことを知らないし、この人も俺のことを知らないだろう。

だから、嘘じゃないと分かっている、信じられないのは事実だ。分かっているのに信じられない。不思議な感覚だ。

でも、あえて口に出すことはないだろう。

そう思っただけ口を閉じると、また、父が口を開いた。

「圭」。思っていることを、話してみてくれないか」

驚いた。俺の言いたいことを知っているような口振りだった。

それも意外だったが、やっぱり慣れない。俺の目の前で二言以上で話す父に慣れない。

自分の知っている父とは違う。ある種の現実離れた光景に思わず口が滑るように思ったことを吐いていた。

「嘘じゃないのは分かる。でも、やっぱり信じられない。父さんのことが信じられないと言うより……目の前の現実が信じられない。受け入れられてないってのが正しいのかもしれない。俺は……アンタが二言以上で話す姿が現実のものとは思えない」

「……………そうだろうな。無理もない」

自分から話せと言っておいて、いざ言葉を受けた父は自嘲するように薄く笑うと、どこか遠い目をしたように見えた。

そう、遠い目をした父の顔を見た。なんだか久しぶりに父の顔を見たような気がする。彼の顔は昔に比べるとまだ若いなりに老けたように見える。

いや、違うか。本当に老けたように見えるだけだ。毎日顔を見ていれば気付かない程度の変化。それをこの僅か数秒のやり取りで一度に気付いただけのことだろう。

何気なく、前に見た夢を思い出した。いつだったか、夢に父が出て来た。そして、その父の顔に俺は違和感を抱いた。今の父はどんな顔をしていたつけ？そんなことを考えたことがある。

そして、その答えは今、目の前にあった。あの時考えたことの全てが目の前にいた。俺は、こうして改めて父を見るまで、変化に気付かなかった。一応は毎週末会っていた筈なのに。

俺は、自分が思った通り、父を見ていなかった。

久しぶりに”見た”父はよく見ると白髪があったり、記憶の中の姿よりも小さくなったように思う。

……いや、分かっている。それだけの年月、俺は父を見ていなかった。父が小さくなったんじゃないやなく、俺の背が伸びたんだ。それにすら、今の今まで気付くことが出来なかった。

「……………」

ベットの上で体を起こしたまま、脇に置かれた椅子に腰掛ける父を見た。頭のとっぺんからつま先まで。

そして気付いた。父の白衣とズボンの裾に小さなシミがあった。黒いような、茶色いような小さなシミが少しだけ。

なんのシミだろうかと考えてみると、ふと、病院特有の消毒液臭さ

の中に僅かなコーヒーの匂いがする。

鼻を使つて匂いを辿ると、匂いの元は父だった。正確に言えば父の白衣からしているようだった。

確かに、誠に勝手な想像ではあるが、科学者と言えば研究室かなんかでコーヒー飲んでるイメージがある。普段飲んでいるコーヒーの匂いが染みついていたいのだろうか？

そう思いながら父の観察を続けると、首から札を下げている。IDカードつて奴だろうか？

そこまで考えてふと、観察を止める。

少し妙だった。俺がどれだけ寝ていたのかは分からないけど、見舞いに来るのにIDカードを下げたまま来るだろうか？

「……………」

いや、ないだろ。あの手のカードはそのままカードキーになってる場合が多い。紛失したら一大事だ。そんなもの、わざわざ持つてくることはない筈だ。せめて車の中に置いてくるとか、鞆の中に入れてとかするだろう。買い被りかもしれないが、あの父がそんな初歩的なミスをするとは思えない。

それに、よく見れば鞆の類も見当たらない。というか、そもそも、もつと違和感を持つべきところがあつた。

なんで白衣姿なんだろう？どこから見舞いに来たのかは分からないけど、白衣くらい脱いでくるんじゃないか、普通。

そう考えた時、状況証拠から一つの可能性が思い浮かんだ。

「…………俺が倒れてから何時間が知ってる？」

「4時間ほどになる」

4時間。この人がいつからここにいたのかは分からない。けど、移動にたかが1時間しか掛からない距離にいたのなら、祖父はきつと、2ヶ月会いに来ないみたいな話は許さないだろう。

そう思うと、この人はちよつとやそつとじゃ帰つて来れないくらい遠くにいたのは分かる。

それが、どうしてこんなところにいる？

俺は、足元のシミに視線を向けた。

「そのズボンと白衣の裾のシミは？まさか泥道を走って来た訳じゃないだろ？」

「……………シミになっていたか。気付かなかった。さつき、コーヒーを溢してしまった。その所為だろう」

嘘の気配はない。でも、コーヒーを溢したと言う割に、この部屋にコーヒー臭さはない。コーヒーの匂いは父から注意深く嗅いでみないと分からないほど微かに香る程度だ。

それに、コーヒーを溢してシミになったのに気付かないというのも、らしくない。コーヒーを溢したら普通は周りに飛び立ってないか、確認するし、白衣なんて汚れの目立つモノを着てれば更に注意深くみるだろう。

コーヒーが付いたままの服、首からぶら下げたままのIDカード、俺が倒れてから目覚めるまでの時間を正確に理解している理由を考えると、あり得るかもしれない可能性が脳裏を過る。

——父さんは、俺が倒れてからすっ飛んで来た？

いや、可能性ではなく、事実なんだろう。当人が言っていたではないか。子供が倒れて平然と仕事はできないと。そして、俺はそれを嘘ではないと感じとり、認めた筈だろう？

俺が、今、目の前に父がいる理由をあれこれこじつけるのは簡単だ。でも、それは、父を見ると言う行為にはならない。

本当の理由を察していながら別の理由を探すのは目を背けているのと一緒だ。それは俺の目指す姿とは対極だろう？

頭を振る。小難しく考えようとする思考を振り落とすようにそうした後、ゆっくりと息を吐いた。

気を失う前、怒鳴り合いながら俺は磯貝やみんなに言った。父を見ることを始めの一步にするのだと。そして磯貝は言った。まずは目の前にいる奴らにやってみるよと。

今、ここで父から目を背けたら、そのどちらも嘘になる。色んな人たちに迷惑かけて、心配かけて、その果てにこんな結果になったのに、自分の言葉すら嘘になってしまう。

それだけは、俺自身が許せなかった。

「……………」

正直、何から話せばいいのか分からなくて困ってる。でも、今度こそ一步を踏み出す為に、もう一度、父を見た。

今度はさつきみたいに値踏みするように全体を観察するのではなく、真っ直ぐに父の顔を、目を見た。

なんだか久し振りに見た父の顔は困っていた。

なんでそう思ったのか。なんでこれまで見てこなかった相手にそんな印象を抱いたのか。答えは簡単だった。

父さんもまた、俺を見ていた。目を逸らすことなく、こっちに視線を向けていた父と視線が交差し、彼の瞳に映った何とも言えない困り顔の自分を見た。

その顔は知っていた。その表情は似ていた。目の前のこちらを見つめる人物によく似ていた。

だから気付いた。困っている自分と同じ表情をしている目の前の男もまた、困っているのだと気付いてしまった。

何を言えいいのか分からず、困っている自分と同じ表情をしている父も、俺に何を言っているのか分からないんだと、気付いた。気付いてしまった。察してしまった。これまで俺が目合わせなかった時も、同じ顔をしていたのではないのかと。今の俺のように必死に何か言葉を選んでいたのでないかと。

「……………圭」

「……………なんだよ」

「すまなかった」

長い沈黙の末に漸く開かれたのは父の口だった。

開かれた口から飛び出したのは、謝罪だった。

何に対する謝罪なのか、分からなかった。

でも、受け入れなければいけないと思った。

同時に、俺も謝らなきゃいけないと思った。

そもそも、前にあった時に答えは出ていたのだ。あの時、父さんが話してくれた筈だった。

日に日に母さんに似ていく俺に何を言えいいのか分からなく

なってしまうたと。言ってくれたあの時に、踏み込んでおけば。その理由でも聞いていれば、もつと早く、解決出来たのかもしれない。こんなすれ違いをせずに済んだのかもしれない。

「私は、お前に甘えていた。何も言わずとも勤勉に励む姿に、楽しそうに結果を報告してくれる姿に安心して、その理由も考えずに、ただ頷くばかりで何もしなかった。何も言わなかった。お前のことを何も見ていなかった。親としての勤めを放棄していた。本当にすまなかった」

「……………」

「言葉を選んでばかりで何も言わなかった私の怠慢だ」

ゆっくりと頭を下げた父を見て思った。

俺は、父のこんな姿を見たかった訳ではなかった筈だと。報告する度にたった一言だけでも”よくやった”とか”頑張ったな”とか。そんな言葉が欲しかっただけだった。

「父さん……。頭を上げてくれ」

絞り出した声は震えていた。

父も、言葉に答えて顔をゆっくり上げていた。

「俺は……アンタが怖かった。何を言っても”ああ”とか”そうか”しか言わないのを見て、俺に興味がないんだと思った。そのあと、決まって無言になるのも怖かった。あの次の言葉を待つ無言の時間が怖くて怖くて堪らなかった。何か言ってくれるんじゃないかって希望と、このまま虚無の時間が過ぎるんじゃないかって恐怖がずっと俺の中にあつた」

震える声とは裏腹に、言葉はスムーズに出て来た。

次に父にあつたら、こんなことを言う、あんなことを伝える。そんなことを考えなかった訳じゃないけど、そんなイメージとは全く違うことが次から次に出て来た。

イメージとは違ったのに、言葉は詰まることなく、溢れるように口から出ていた。

「認めて欲しかった。褒めて欲しかったんだ。父さんに。その口から、父さんの言葉で。俺に変なプレッシャーとかかけない様にしてた

のかもしれないけど、それでも俺はアンタの言葉が欲しかった……。なのに、俺はずっと俯いてた。見てなかったのはアンタだけじゃない。俺もだ。一番認めて欲しかった相手を俺は見れていなかったんだ。相手にだけして欲しいことを求めてしまった怠慢は俺にこそあると思う」

頭を下げた。点滴のチューブが繋がった腕が見える。

この思うように動かない、点滴のチューブが繋がれた満身創痍の身体は自分の努力の結果ではなく、これまで周りを見てなかったことへの代償のように思えた。

「ごめんなさい。俺は見てなかった。いま、漸く分かった気がする。アンタは俺が俯いてる時もそんな表情で必死に言葉を探してただけなんじゃないのかって」

父は、本質的に俺と同じだったのかも知れない。相手が何を考えているのか分からない。だから、考えた。自分がどうするべきなのか。たったそれだけだったのかも知れない。

テストとかの報告をする時の彼と俺とで違っていた部分があるとするなら、きつと、言葉を選んでるか、言葉を待っているか、それだけのことだったのかも知れない。

「考えたこともなかった。父さんが言葉を選んどるか、何を言うべきか悩んでるか。一度も。気付かなくてごめん。あの時、感情的になつて一方的に怒鳴ってごめんなさい」

だからこそ、言わなきゃいけないと思った。

今まで感じて来たことに対する答えみたいなものを見つけ、一時的に興奮して、分かった気になっただけかも知れない。

それでも、これでの14年間を忘れない為にも、自分の過ちに気付いたこの感覚を風化させない為にも、言うべきだと思った。

周りの言ってることは正しかった。

周りを見ないから、見られていることに気付かない。

まさにその通りだ。ただの一度でも俯かず、真正面から父の視線を受け止めることが出来ていれば、きつと気付けた。

俺は俺で、父さんは父さんで。だから、相手にしつかり伝えなきゃ

分からないことだってある。

その通りだった。父の言葉を聞いて、初めて気付いた。父が何を思っていたのか。言葉を聞いて、父を見て、気付いた。俺と同じだったことを。逆に父もそうだったんだと。俺が何も言わないんだから知るはずがないんだと。

俺はこれを一生、忘れちゃいけない。

「……………」

頭だけは思考を続ける。頭を下げてからどれだけの時間が経っただろうか。数時間？数十分？あるいは数秒なのかも知れない。

父の言葉を待つ時間は相変わらず長く感じられた。それこそ、数秒が何時間にも感じられるほどに。

「顔を上げてくれ。頭を下げなければいけないのは私も同じなのだから」

父の言葉で顔を上げる。

もう2度と目を逸らさない為に父の目を正面から見つめた。

「我々は、やり直せるだろうか。これまで失った時間を取り戻せるだろうか。まだ、お前の父親でいていいのか？」

「やり直したいし、やり直さなきゃいけない。過ぎた時間は戻らないけど、でも、絶対に無駄だった訳じゃない。それに俺の母親は1人だけだし、父親もアンタだけだ」

事実、俺はこの人とすれ違っていないなかったら、ここには居なかった。いや、今の俺は居なかったと言うべきか。

無言の父さんがとりあえず怖かった。期待に応えないとって柵ヶ丘を受験した。もしも、この人と円満な家庭で過ごしていたのなら、柵ヶ丘を受けずに地元に残っていただろう。

もし、そうなっていたのなら、俺は殺せんせーや烏間先生。磯貝を始めたとしたE組のメンバーとは出会わなかった。

「だから、これからの時間で聞かせてほしい。俺のことも話すから。俺の知らない父さんのこと、俺を産んで死んでしまった母さんのこと。俺はこれから父さんを見る。だから、これからも俺のことを見ていて欲しい」

伝えた。これまで言いたかったことも、最近になって言いたいと思っただけも全て。

もちろん、思っていたことの全てを話せた訳じゃないけど、それでも一番伝えたかったことは全て伝えたいつもりだ。

父の目を見る。彼の目は一度俺と交差した後、頭のとっぺんから、ベットの中で伸ばした足のつま先まで流れた。

「……………少しだけ立てるか？」

「……………」

口から出たのは予想してなかった言葉だった。

だが、その言葉に対して反射的に動いていた。自分の体の不調を忘れてベットから足を出し、床を踏み締めて腰を浮かせた。

「……………!？」

そこで思い出した。ベットから出た瞬間に体勢を崩す。そう言えば、思うように体が動かないんだった。

また、倒れるのかな？なんて思ってたなら、父が支えてくれた。父に支えられたまま、辛うじて真つ直ぐに立ち上がる。

ふらつきながらも立ち上がった身体。慣れた目線の高さに映る世界には一つだけ新しい気づきがあった。

「……………背、縮んだ？」

「……………お前が大きくなったんだ」

さつき、自分で結論を出したはずの言葉を呟いていた。

向き合った父の肩は俺よりも少しだけ下にあった。視線は、俺の方が高くなっていた。だから、思わずそんな事を口走った。

そんな言葉を否定したのは父だった。

俺を支えているのとは逆の手が動いた。

躊躇いを感じさせる動きでそれはゆっくりと持ち上げられた。警戒とは違うけど、その動きから目が離せなかった。

持ち上げられた手は俺の頭の上の数センチ上まで来ると、そのままゆっくりと落ちて来た。俺の頭に着地する。

硬い手だった。同時に熱い手だった。殺せんせーの触手とは違う。普久間島の時の倉橋さんの手とも違う。

温かく、ゴツゴツとした男の手だった。

「大きくなったな、圭一」

すつとその言葉が胸に入ってきて来た。

理由は直ぐに分かった。これまでの納得するばかりの『そうか』でも、間を繋ぐ為の『ああ』でもなければ、気を使って言葉を選んでいく遠慮を感じ取れる言葉ではなく、ただ、思った事を口にしただけの父親の言葉だったからだ。

その瞬間、視界が滲んだ。

具合が悪くて世界が歪んで見える訳じゃない。ジワリジワリと視界が滲んでゆき、勝手に声が溢れた。

父の手は、俺が落ち着くまでずっとそこにあった。

77話 理由の時間

あれからいくらか時間が過ぎた。

嗚咽を漏らし、中学生にまでなつて親の前で泣いた。彼の前で泣いたのは、赤ん坊の頃を除けば初めてだった。

恥ずかしさはあったが、今まで抱えていたものをとりあえず吐き出すことが出来て、父が何を考えていたのか知ることが出来て胸中も頭の中もスッキリした。

無論、蟠りが一気に氷解したわけではない。父は俺に遠慮してる部分があるし、俺もそれは同じだと思う。

でも、その辺の距離もこれからゆつくり埋めることができれば良いと思っっている。その為には……………。

「地球滅亡を阻止しなければな」

そう。その一言に尽きる。

だが、今の一言は俺の口から出たものではなかった。地球滅亡。その単語が飛び出したのは父の口だった。

「ち、地球滅亡？なに言っただよ？」

「…………国家機密についてなら心配はいらない。ある程度の事情なら私は知らされている。一月前、お前に言った出張の内容というのがその研究についてだ。地球を破壊する超生物、通称“殺せんせー”を無力化する。それが私の研究内容だ」

「どこまで知ってる？」

「あのマツハ20の超生物が来年には地球を破壊すること。何故か柵ヶ丘中学校の3年E組の担任というポジションに拘っていること。お前の元担任であること。3年E組の生徒はその超生物の暗殺を国に依頼されている……………」

絶句した。戦慄した。ただ言葉を失うだけでなく、息をすることすら忘れた。父の言葉はあまりに情報量が多かった。

「ヌルフッフッフ…………。どうやらタイミングはバッチリだったようです

ねえ。ちようど私の話をしていましたか」

そんな時、ちようど殺せんせーがやって来た。

窓から手慣れた動きで入ってくる。背伸びしたら全長3mを超える人語を解する黄色いタコ。それを見ても、父さんは特に驚く素振りはない。父の言葉が事実なのだと悟る。

「はい。ありがとうございます。お陰様で息子と向き合うことが出来そうです。お手数をおかけしました」

「いえいえ。成すべきことを成したままでです」

「……………2人は知り合い？」

「ああ。少し前から学校でのお前の様子を彼から毎日の様に聞かされていた。友達の磯貝くんと口論も聞かせてもらったし、お前が倒れたことを教えてくれたのも、私をここまで連れて来てくれたのも全て彼だ」

「……………まじかよ」

今日イチというか、人生でもトップレベルで驚いたわ。

ツツコミすら出来なかった。いや、もともと杉野たちバりにツツコミ元気なんて今はないんだけどさ。

「それにしてもあなた方が仲直り出来たのなら良かった。不幸なすれ違いで仲違いするなんて悲し過ぎますから」

「……………殺せんせー。うちの父さんが俺と磯貝の口論を聞いたってのはどういうことですか？」

「ギクツ…………。ええつと、律さんに録音をお願いしました。キミの肉声はお父さんに必ず届けるべきだと思ったので」

「……………盗聴」

「圭」。そう責めるな。彼のお陰で私はお前の本心を聞いた。だからこうして向かい合えているんだ」

「……………わかってる。ありがとうございます、先生」

実際、責めるつもりはない。ちよつと思うところがあったただけだ。でも、そのおかげで今があるのだから、良しとしよう。

殺せんせーは俺の言葉を聞き届けた後、口をいつもの三日月の様にして短く笑った。

表面上はいつも通りの笑みなのに、なんとなく、殺せんせーの雰囲気は変だった。やり遂げたような、後悔してるような、満足そうな、それだけで何処か不満気な。

俺の方を見て笑っているのに、何処となく寂しそう。思い返せば、殺せんせーは俺と2人でいる時によく遠い目をしている気がする。一体、何故なんだろう？

考えてみるが分からない。

殺せんせーは生徒に対して鼻屑をしない。誰かにやったことは別の生徒にもやるし、誰にもやらなかったことは他の誰にもやらない。まあ、夏休みの時の賄賂とかは例外だけど。

きつと俺に教えてくれたことも、誰かに請われたのなら教えるだろうし、誰かに教えたのなら、俺にも教えてくれる。

そこに間違いはない。でも、やっぱり、その時の殺せんせーの雰囲気や表情はほんの少しだけ違うような気がする。

他のみんなが成長したら、殺せんせーは笑ってくれる。感慨深そうな顔はしても、屈託なく生徒の成長を喜んでる。

でも、俺の時はほんの少しだけ違う気がする。この人はいつも遠い目をしている気がする。成長を心から喜んでくれるけど、なんとなくか、懐かしむような、何かを思い出すかの様にしみじみした顔で遠い目をしながら頷く。

「……………」

「?..どうかしましたか、乃咲くん?」

「いえ。なんでも」

気の所為ではないだろうが、助けてもらったからか、少し自意識過剰になっっているかも知れない。

一度だけ深く息を吸って、吐いて、頭を切り替える。

「それで殺せんせーはどうしてここに?」

「キミの様子が気になったのと、キミと博士の間にはまだ、認識の齟齬があるのでは?」と思ったので様子を見に来た次第です。まあ、私に間に立間もなく、話し合いはできた様ですが」

「俺と父さんの認識の齟齬?」

「……お話、聞かせて頂いても?」

「もちろんです。その為に来たのですから」

疑問を浮かべる俺と、質問をする父さんに殺せんせーは静かに頷くと、徐に口を開いた。

「博士は圭一くんの集中力の高さについてご存じですか?」

「まあ。昔から家政婦から息子の様子を聞く度に言われました。周りの音や声に反応すら示さない程に高い集中力があると」

「その通りです。ですが、最近、どうにもそれだけではないらしいことが分かりました」

「……………どう言うことですか?」

「集中していると時間の経過が早く感じる、と言うでしょうか?彼はその逆。集中すると時間の経過が遅く感じるらしいのです」

「……………圭一。それは本当か?」

「ああ。本当だよ。明確に実感したのは今年の春だけ」

「もしかしたら、もっと昔から片鱗はあったかもしれないですね。私の見立てでは、彼の集中力……私は”ゾーン”と呼んでいます。これは圭一くんが緊張したり、警戒したり。そういう場面で発揮されることが多い様に感じます」

「昔からゾーンの片鱗……?」

殺せんせーの言葉で思考が始まる。

確かに昔から集中力が高いと言われて来た。時々、周りと時間感覚が食い違うことはあった。

長いこと考え込んでいたと思ったら、そんなに時間が経っていないのはザラだった。

でも、別に気にしたことはなかった。考えている内容によって体感時間が違うのはある種、当たり前だと思っていたから。作文を原稿用紙1枚読むのと2枚読むのでは体感時間が違うように、深く気にしたことはなかった。

まあ、カルマの自殺紛いな暗殺の後からそれも顕著になったので、その頃から何かおかしいな、と思う様になったが。

そういえばちようどその頃か、殺せんせーがこの集中力に対して

ゾーンという名前を付けてくれたのは。

もしかすると、俺に自覚がなかっただけでゾーン自体は昔から無意識に使っていたのかも知れない。

緊張することなんていくらでもあった。例えば父さんに成績の報告をする時なんかまさにそれだった。

「……………あ」

そこまで考えて、殺せんせーの言わんとすることがなんとなく理解出来た。俺と父さんの認識の齟齬。それは言葉とか考え方による食い違いではなく…………。

「父さん。正直に答えてくれ」

「ん？あぁ」

「俺はこれまで成績を報告した後、アンタの言葉を待つて黙っていた。何を言われるか。言葉を待つていたんだ。待つていたつもりだったんだ。俺は…………アンタに報告を終えてから部屋を出るまでどれだけ時間を掛けてた？」

父は少し思い返す様に目を細めて答えた。

「時間はまちまちだった。だが、平均で5秒ほどじゃないか？」

「…………俺は30分くらい待つてたつもりだった」

父とのすれ違いの原因の一つが分かった。

「そう。あなた方には時間の認識に齟齬がある。厳格な父を前にして緊張している圭一くんが持ち前の集中力で時間を緩やかに感じさせ、数秒を数十分まで引き延ばした。父親が掛ける言葉を選んでいる数秒の間には、数百倍の時間差があったのです」

父の言葉に俯く。殺せんせーの言葉で思考を巡らす。

思いもしない所にすれ違いがあった。

父の言葉を待つていた数十分は俺の中だけの話で、現実では5秒程度しか経っていなかったんだ。

「…………ごめん。父さん。俺、気付かなかった」

「いいや。その可能性に思い至らなかつた私にも責任はある」

いや、普通はそんな考えはしないだろう。

誰が会話してる相手と自分との間に数百倍の時間差があるのだと

考えられるだろうか。

俺が父の言葉を待っていた体感時間の30分、つまりは1800秒は、父の言った5秒の実に360倍にあたる。自分と父の間にはそれだけの時間差があったのだと今、初めて理解した。

「やはり私の見立ては合っていた。圭一くんが片親でも自分の為に働いているお父さんを気遣ったことで距離が出来てしまった。博士はそんな息子を慮ることでその内心を勘違いしてしまった。そして、そんなすれ違いを圭一くんの持った人並外れた集中力によって出来た時間差が助長してしまった。相手を気遣っているだけの本当に不幸なすれ違いでした」

確かに最初は気遣いから始まった。

お父さんは忙しいんだ、とか思ったことが始まり。そして、忙しい父に『俺を見てくれ』と伝えればよかっただけのすれ違い。

そして、お互いに何を言えればいいのか分からなくて、相手が何を考えているのか分からなくて。軋轢は大きくなった。

気遣っているだけではいけなかった。

踏み込まなきゃいけなかったんだ。俺たちは血が繋がっているだけの他人ではなく、血の繋がった家族なのだから。

父さんが納得した様にしみじみ頷きながら、再び遠くを眺めてポツリと呟いた。

「……………しかし、まさか。お前も時間が緩やかに感じるレベルで集中できるとは……………」

父さんの言い方に何か含みがある様に思った。

「父さん。お前も」 ってどう言うこと？」

「……………そうだな。話しておこう。もしかするとお前のそれは私の予期しないイレギュラー。引き継がれる筈のなかった、圭の……………お前の母さんの遺産かも知れない」

「母さんからの遺産……………？」

「……………ああ。お前の母さんも、同じことが出来た。いや、できる様になったと言うべきか、私ができる様にしてしまったと言うべきか……………。まだ妊娠初期に彼女も同じことを言っていたよ。数分が数

時間に感じることもあると」

「待つてくれ、情報量が多い！と言うか、できる様にしたってのはどう言うことなんだよ？」

父さんの口から飛び出した衝撃の事実の数々は俺を驚愕させた。情報量が多く、思わず思考を放棄し掛けてしまうほど。

それでも、父さんは言葉を続けた。俺にとって人生でも一番と言っても差し支えない真実を。

「お前の母さんであり、私の妻でもある、乃咲圭は……SF作品で言うところの強化人間だ。そして、私とその強化手術をした」
「……………、なんて？」

今まで、絶句したことなんて数え切れないし、戦慄も幾度となく経験した。だが、記憶の中にあるそれらに比べて、今、俺が迎えているコレは文字通りレベルが違った。

比喩でもなんでもなく、思考が凍り付く。頭の中が真っ白になる。でも、ここで思考を止めてしまったら、これでは何も変わらない。父の言葉不足であろう話し方について深掘りせねば。

「聞きたいことは沢山あるけど……まず、ゆっくり丁寧に、一個ずつ話してくれるか？なんで母さんが強化人間って話になる？」

「そうだな……。まず、お前は圭について何を知ってる？」

「……西洋人の婆ちゃん和日本人の爺ちゃんの間で生まれたハーフ、俺と同じ銀髪、動物に好かれやすかった、生まれつき身体が弱かった。……………俺を産んで間もなく亡くなった」

「ああ。お前の認識に間違いはない。でも、情報が足りない。彼女は……もともと長く生きられないと医者に宣告されていた」

「……持病でもあったの？」

「病気というより、疾患だ。遺伝性疾患、遺伝子変異と呼ばれる類いな。身体を成長、維持する為のエネルギーを産生する能力が低かった。エネルギー代謝と呼ばれる機能が特にな」

「それは……………」

続く言葉は浮かばないが、母が長生き出来なかった理由に納得した。専門家ではないので詳しいことは分からないが、車を動かすのに

必要なガソリンが少量しか調達できないってところだろう。機械だつて適度に動かさないと壊れる、でも動かすにはガソリンがないとダメ。だから使えないことでガタがくる。

なるほど、無理のない話だ。

「私は約16年前、その治療の為の研究をしていた。外部からの治療が効果のないものだったし、遺伝子レベルの疾患だったから、根本的に解決するには、その疾患を取り除くしかないと考えた。……まあ、結果的に救うことは出来なかったがな」

「……それがどうして強化人間がどうこうって話になるんだよ？ 治そうとしただけならただの治療だろ？」

「私が彼女に行ったのは、遺伝子の調整。生物の細胞がエネルギーを作るサイクルをより効率化し、回転率を上げることで代謝の欠陥を補い、その他にも諸々、副次効果が期待出来るものだった。詳しいことは専門知識や用語が出てくるので理解が難しい。だから、口にする前に少しだけ考えて、中学生でも分かりやすい単語として強化人間というワードをチョイスした」

「だから少し間があったのか……言葉を選んでたから。確かに細かく説明されるよりは分かりやすいか。お気遣いどうも」

「どうやら強化人間云々は、俺に分かりやすく伝える為の比喻表現だったようだ。まあ、もうちよつと言葉の選びようはあると思うけど。自分の嫁を強化人間呼びするのは面白くないだろうに。」

「100%気遣いだった訳でもない。本人は『今日から強化人間ってことだよね！』と大喜びで出来もしないロケットパンチを繰り出すのに必死だった上、強化人間を自称して憚らなかつた」

「ヤベーな、うち親。メンタルお化けかよ」

「強化人間になつた〜！と喜ぶ方も、それを受け入れてる側も中々にメンタルが強い。見習えないレベルでヤバイ。」

「悲観するより、受け入れて楽しんだ方が建設的だからな」

「まあ、そうなのかも知れないけどさ……」

「両親の意外な一面を垣間見た気がした。」

「……んで、母さんの集中力がその強化手術の代償というか、結果と言

うか、副産物だって話？」

話が脱線しそうなので方向を戻す。

「いや、集中力の増加なんて効果は想定していなかった。お前を妊娠したばかりの頃。圭が言っていたんだ。身体の中から『何が欲しい？』と問い掛ける声がしたと」

「……………あ」

その問いには俺も心当たりがあった。生まれてから今日に至るまで、2回ほどその声を聞いた。

「彼女は『時間が欲しい』と答えたそうだ。そしたら、数分が数時間にまで感じる様になったらしい」

「……………まじか」

母さんと俺の状況は酷似している。願った内容は違うが、その問い掛けに答えてチカラみたいなのが使える様になったと言うのは俺と母さんとで共通していた。

「何かミスがあったのかと、色々調べたが、それらしいものは見つけられなかった。身体にも異常は見られない。それ以来、声が聞こえると言うこともなかった。検査は彼女の最期まで怠らなかったが、原因は掴めなかった」

「怖いな、それ」

実際、俺もその声を聞いているから他人事ではない。

と言うか、父の話ぶりだと母さんからの遺伝である可能性もあるので、原因が分からないと言うのはなんともゾツとする。

「……………」

そんなことを考えながら、ふと、何気なく何も喋らない殺せんせーを見てみる。

空気を読んで黙っているのかと見てみると、そのつもりもあるのだろうが、目を見開いて、言葉を失った様に父を見ていた。

「乃咲博士…………。先ほど代謝の改善の他にも効果が見込めるとおっしゃっていましたが、それはどのような？」

「ふむ…………。簡単に言うのなら、身体強化といった所か。調整された細胞で活発に産生される様になったエネルギーを身体の維持や成長

に無駄なく回す。それが私の研究だった。観測は出来なかったが、机上論としては、知覚力と運動能力を含めた身体能力の向上、それから身体の頑強さも上がると見込んでいた」

「身体能力と身体の頑強さ……」

考える。思い返すのはゾーン中に動けるあの現象のこと。

世界が止まって見えるほどのスローモーションで時間が流れ、視界はモノクロに染まり、空気が物理的に重くなったかの様に感じるあの感覚の中、俺は少しだけ早く動けた。

いや、普久間島で銃撃された時は尻もちをつくだけだったが、あの時は空気に重さを感じなかった。

そして、銃弾すら避けることが出来た。拳銃から放たれる弾丸の速度は場合によっては音速を越える。

つまり、あの時の俺は音速で動いたことになる。しかも、俺の身体はその音速の動きに耐えた。

余裕がなくて考えてなかったが、それってあり得るのか？ただの鉄の塊ですら音速の壁を突破しようとするバラバラになるのに、人体がそれに耐えられるものか？

普通は無理だ。人間がそんなことをしたらミンチになりかねない。じゃあ、俺は？なんで今、無事なんだ？

そんな問いに対する答えは今、父が出したばかりだった。

母さんの受けた手術。その影響が俺にも出ていたのなら？

聞いた話だと、俺のゾーンは、母さんからの遺伝である可能性がある。つまり、母さんが手術を受けたことで現れた効果が俺にも現れたってことだ。それなら、手術の影響が俺にも出る可能性はゼロじゃない。というか、かなり高い筈だ。

「……圭一。どうした？難しい顔をしている。……いや、無理もないか。遺伝子操作やら人体強化やら、SFチックなワードばかり出てきているのだから」

「正直、面食らってるのも否定しない。けど、それ以上に母さんの話と、父さんの手術で出る筈だった効果について気になったんだ。実を言うと心当たりが多い。身体能力についても。それから、聞こえてく

る声についても」

「…………話を聞かせてくれないか？」

「もちろんだ」

俺は話した。これまでのことを。烏間先生との約束を破らない範囲で、できる限り詳しく。

話の途中、俺が迎えたピンチを語ると父さんが顔を青くしたのはとても印象的だった。

父さんは俺の話に時折、青ざめた顔をしつつ、それでも頷いて聞いてくれた。そして一つの結論を出した。

「遺伝だろう。圭が妊娠したのは手術の後だ。可能性は充分にある。聞いた話も、私が想定していた結果ともほぼ合致する。私の研究で彼女を救えなかった理由は、もう遺伝子をいじる程度では回復しないほどに圭が摩擦していたことが大きい。だから私の想定していた結果が出なかったのだとすれば、諸々に説明がつく」

「博士は、圭一くんの検査はしなかったのですか？」

「したさ。この子が小さい頃に何度も。でも、特筆するべきことはなかった。なんの異常も見られず、健康に生まれてきてくれたことに安堵したくらいだ。それから時間が経過しても特に異常はなかった。だから様子を見ることにしたんです」

異常はなかった。そうだ。風邪を引いたことがないとかそんなこととは無かったし、転べば普通に怪我也した。

でも、どちらかと言えば俺は確かにタフだったと思う。初めての喧嘩で一方的に殴られても特に問題なく立ち上がったし、擦り傷はあっても骨が折れたりはなかった。思い返せば、鷹岡に殴られ、蹴られた時も俺は歯が折れる程度で済んだ。

あの鷹岡が手加減するとかは考えづらい。あの巨体と重量から繰り出される自衛隊の精鋭の蹴り。今にして思えば、そんなもんを顔に食らって歯が折れる程度で済んでいることは異常だ。

「もしかすると、身体の内側からの問い掛け。『何が欲しいか』それに答えることが身体能力の向上のトリガーになっているのかも知れない」

「原因はわからないんだよな？」

「……ああ。詳しいことはな」

そこだけ聞くと正直、めちやくちや不安だ。アニメや漫画、ゲームに出てくるミュータント系のモンスターになったりしないだろうか。化け物になるのだけは勘弁願いたい。

だが、世界中から天才と称される科学者の言葉で、妻の為に専門家にまでなった男の言葉で、生まれてからずっと尊敬し、疎み、憎み、追い続けてきた相手の言葉で、そして父の言葉がそんな不安を払拭してくれていた。

彼は言った。特筆するべき点はなかったと。そもそも母さんに手術した時点でそんな危険が微塵でもあるのなら、この人は実行しなかっただろう。そんな彼がそう言ったのだからきつと弊害はないと今の俺なら思える。

今まで散々目の上のたんこぶと思っていたからこそ強く信頼できると言うのは何とも因果な話である。

「んじゃあ、俺と母さんの身体の話はここまででいいわ。次に気になるのは……なんで父さんが殺せんせーの研究なんてしてるのかわかって話なんだけど」

「それについては細かく話すことは出来ない。口止めされているし、知らない方が身の為と言うこともある。政府が関わっているのなら尚更だ」

「まあ、そうだな。そう言う可能性は考えたことがある」

話題を変える。いや、戻すと言うべきか。

なんで父さんが殺せんせーなんて世界最大レベルの機密を知ってるのか。なんで彼の研究なんてさせられてるのか聞かねば。

そう思っただけで質問に返ってきたのはそう言われたら納得せざるを得ない、至極ごもつともな回答だった。

そうだ。殺せんせーは国家機密。その時点で一般人にとってはどうしようもない厄ネタだし、もはや世界規模で何かが起きているのは確実だ。

そんな事情に巻き込まない為に、家族であっても、当事者であつて

も、情報を規制するのは納得できた。

「そう言う訳があつて詳細まで教えることは出来ない。だが、私が招集された理由の一つは圭を……お前の母さんを救う為に組み立てた理論が超生物を無力化する一助になるかも知れないからつてところだ」

「……いいのかよ、それは話して」

「これに関しては口止めはされていない」

この人、意外とフリーダムな人種なのかも知れない。

だが、俺にとつて必要な情報だから教えてくれた可能性もある。そうでなければ知らない方が身の為とまで言つた情報をわざわざ息子に伝えたりはしないだろう。

「分かった。これ以上は聞かない」

「……ああ。私としても今のところ話せるのはこれくらいだな。話し疲れただろう。もう休め」

「……そうする」

「そうしろ。母さんの事についてはまた話す。その時に聞いてくれ。私は転院の手続きと仕事の手続きをするので席を外す」

「……分かった」

「殺せんせー、貴方は？」

「私は一旦、貴方について行きます。息子が倒れたと聞いたや否や、財布も免許証も持たずに飛び出した貴方には移動手段がないでしょう？流石に困るのでは？」

「……はい、助かります」

「ヌルフフフ。それでは行きましようか。乃咲くん、また会いましょう。それまではベッドの上で絶対安静ですよ？」

「……はい。遵守します」

「よろしく」

殺せんせーは頷くと肌の色を人間と同じ色に変え、修学旅行の時に菅谷が作っていた付け鼻を装着して病室を出た。

父さんがそれに続いて退出する寸前に振り返る。

「どうした？」

「2つ言い忘れがあった」

まだ何かあるのか。

「1つ、柳沢という人間には気を付けろ。もしかしたら接触があるかもしれない」

「……………柳沢って名前の個人？それとも苗字と名前に柳沢って入ってる人全員？」

「全員警戒するに越したことはないが、特に柳沢誇太郎という男だ。奴は私の研究に執着している。圭に施した手術の効果がお前にも出ていると知ったら接触して来るかもしれない。だから、少しでも怪しい人物や柳沢を名乗る者が現れたらとりあえず大声を出せ。多少の無茶をしても逃げろ」

「分かった。随分と警戒してるな」

「乃咲はお前から見たら母方の姓と言うのは知っているだろ？お前の父……………つまり私の旧姓は柳沢という。奴は……………誇太郎は私の弟だ。一応、親戚を名乗って接触することも可能だからこそ、警戒は必須だ」

「俺にとって叔父に当たるわけね……………分かった」

父さんの研究に執着するってことは、もしかしてそいつも科学者か？いや、まあ、遺伝子レベルから弄って生物の細胞の働きを強化してエネルギー生産効率と使用効率を上げるとか素人目でもだいぶ凄いことやってるのはわかるけど。

「警戒はしておくよ。それで二つ目は？」

頭の中のメモ帳にメモしておきつつ、話の続きを促す。

すると、父さんは、言葉を少し溜め、視線を少しだけ彷徨させた後、言い淀む様に頬を掻いて、一言。

「……………お前が無事で良かった。暗殺でも、今回の件でも。身体には気を付けてくれ」

父さんはそう言い残して出て行った。

正直、何度か倒れてる現状を無事、とは言えないとは思いますが、多分だけ父さんの思う最悪の事態は俺が倒れてそのまま母さんの後を追う事になるって展開だろう。

さっきの強化人間って言葉のチョイスもそうだが、あの人は意外と言葉選びがアレなのかもしれない。

「…………俺も人のことは言えないか」

案外、俺たちのすれ違いの理由にもお互いに言葉選びの壊滅的なセンスの無さの影響があったりするのかもしれないと思いつながら、父さんたちを見送った。

78話 選択と願いの時間

あの後、いつの間にか眠ってしまったらしい。次に目を覚ますと太陽がちやうど顔を出す時間だった。寝る前はまだ昼前だったのに目覚めたら朝日が昇っているとか、俺はただ寝てしまったのだろうか。よっぽどぐっすりだったのだろうか。

普久間島の時とどっこいなレベルで長時間睡眠をした所為か、頭がぼーっとする。しかし、二度寝を決め込もうにも寝付くことができず、俺はのっそりと起き上がる事にした。

「……身体は動くな」

身体を起こして肩をぐるぐる、首をパキパキ。昨日の様な身体の不自由さはない。まだ違和感はあるが、昨日に比べればかなりマシだった。睡眠と点滴は偉大である。

続けて、ベット横に備え付けられてる荷台を見ると、祖父母か、父さんか、あるいは気を利かせてくれた殺せんせーが持ってきてくれたのか、スマホが充電器に繋がっていた。

手を伸ばして電源を入れてみると、日付は自分の記憶とも予測とも一致しなかった。スマホの画面に表示された日付は俺が倒れた日の2日後を示していた。

「そりゃあ、二度寝も出来ないわな」

呆れた。我ながらどれだけ疲労を溜め込んでいたのか。

自分への呆れとみんなへの申し訳なさが湧いてくる。

申し訳なさの原因は、日付の下、まだ読んでいない通知を知らせる表示にあった。その数値、約150件。驚いた。グループからは通知来ない様になっているので、全部個人からの連絡である。

LINEを開いてみると、クラスのみんなからそれぞれ3言くらいのメッセージが来ていた。それから、連絡先を交換した覚えのない五英傑からも来ている。

ちなみに、メッセージ件数最多は殺せんせー、次点で父さん、浅野というラインナップである。

殺せんせーのメッセージは長ったらしかつたので一時スルー。とりあえずは現状把握のために父さんからのLINEを開いた。

心配やら、現状やら、今後の動きについてびくつきりつしりと書かれていたが、要約すると、こうなる。

- ・俺を検査する為に父さんの知り合いの病院に移ること。
- ・俺の検査に専念する為、職場で手続に向い、席を外すこと。
- ・診察の結果、2週間は安静にするように診断された。
- ・基本ベツトの上から動かない様にすること。
- ・快復まで学校は休学する。

重要なのはこれくらいか。あとは殺せんせーレベルではないものの、こちらを気遣うような言葉が陳列されていた。

あの人、文面上では饒舌になるタイプだったか。こればかりは普段から多用してるのか、年頃の息子のレベルに合わせようとしているのか、言葉の最後には顔文字までつけてやがる。

「……………不器用な人だったんだなあ……………」

そんな感想がしみじみと出た直後、特に触ってもいないのにスマホが暗転し、1人の少女が映し出された。

何う様に何処か暗い顔で所在なさげな仕草を取る律。

「おはよう、律」

『ツ！』

声を掛けると、顔に光が戻った。ガバツと音がしそうな勢いで顔を上げ、俺を見ると安堵した様に声を出した。

『おはようございます、乃咲さん……………ツ！』

「うん、心配かけて悪かった。態度も悪かったよな、ごめん」

『ツツ、いつもの乃咲さんです……………！』

「いつものってなんだよ？俺、そんな変だったか？」

『声はE組に居た頃より1〜2オクターブほど低く、視界は8度ほど下を向き、歩行による左右へのふらつきは5歩ほど。それから注意力が散漫になっていて声を掛けられてもワントンポ遅れ、動きも緩慢になっていました』

「……………今の俺にはそれが無いと？」

『計測できない部分は未知数ですが、声のトーン、視野角は私の知る平常時の乃咲さんです!』

「……………怖っ」

律が怖い。なんなのこの情報量。俺、普段どんだけ観察されてたの？怖いよ律。なんかストーリーカー染みてるよ。

いや、まあ、彼女はAIな訳だし、人間の調子を測る要素としては間違いではないのか？うん、そう思う事にしよう。

『今、皆さんに乃咲さんが目覚めたことを通知しました！ちなみにですが通知してない浅野さんから何故か、『おはよう。体調はどうだ？圭一』とメッセージが来てます』

『前言撤回、一番怖いのはやっぱりアイツだわ』

浅野が怖いのは今に始まったことじゃないが、怖いぞ。やっぱり。この病室に隠しカメラでもあるわけじゃあるまいな。

『…………正直、言い足りないことはあります。でも、きつと、同じくらい私たちも聞き足りなかったと思います。だから、これからの時間でお話しさせてください。聞かせてください。あんな風に、倒れさせてしまう前に、手を出してしまう前に』

「…………そうだな」

『乃咲さん。申し訳ありませんでした』

「律が謝る必要ないって。磯貝の言う通りだったんだから。何も話してないのに理解しろってのが無理な話なんだ」

『それでも、です。謝りたいんです。乃咲さんが何も話さなかったというのなら、私は待つばかりで聞きに行かなかった。なのに責めるような言動をしてみました。貴方が謝るのなら、私も謝りたいんです』

律の奴、しばらく見ないうちにだいぶ頑なになったな。

E組の連中の影響だろうか。教師である殺せんせーを筆頭にあいつらもなんだかんだ言って頑なな連中が多い。

「…………じゃあ、謝りあうのはここまでにしよう。少なくとも、俺とお前の間では。夏休み前みたいに接してほしい。俺もそうするから」

『はい、そうします!…………これからもよろしく願います、乃咲さん』

！』

「ん、よろしく。律」

まあ、E組から抜けた今、どこまでよろしくできるのか分からないけどな。という余計な一言は抜いておいた。

ただ、少なくともこれ以降の会話において俺と律が謝りあうことはもうなかった。

??

??

??

完全に日が上り、病院の中に活気……いや、病気だったり怪我してる人が多い中で活気という表現は少し間違っているかもしれないが、色んな音が溢れ始めた頃、俺の病室に珍客が現れた。

「……圭一。起きたのか」

「やあ、乃咲くん。とりあえず目覚めたようで良かったよ」

片方は父さん。だが、もう片方が珍客という以外に適切な表現を見つけれない相手だった。

「おはようございます、理事長、父さん」

まさか浅野理事長ご本人の登場だ。

何というか、RPGの宿で休んで回復してる所に最初の村に居るはずの自分の父親が『お前に客だぞ』とか言ってるラスボス連れて来た様な状況である。

「E組の担任から連絡が来た時は肝が冷えたよ。身体には気を付けなさい。努力する姿勢と執念は評価するが、それで倒れて実力が発揮できないというのは意味がないのだから」

「はい、おっしゃる通りです……」

まさにおっしゃる通り。結局、小テストも受けられなかったし、学校を休学することにもなった。

うちの学校はテストを受けなかった場合は、問答無用でE組行きだ。その理屈で言えば、俺はE組に戻ることになるのか？

「まあ、お説教はここまでにしよう。お父さんも見えていることだし、君たちには親子の時間が必要だろうからね。要件だけ伝えて私はお

暇しようかな」

「……俺の処遇についてですね？」

「察しが良くて助かる。私がおここに来た理由はキミのお見舞いとお説教、そして今後のキミの処遇についてだ」

父さんは口を開かない。多分、ここに来るまでに何か話はしていたのだろう。俺としても口を挟む必要がないので理事長の言葉の続きを黙って待つことにした。

「キミの休学についてだが、学校は正式に受理した。一度、不適切な発言をした教師を出してしまったことは事実。中学生を過労で倒れるまで追い詰めたその一因であると判断したよ」

不適切な発言をした教師とは、俺がE組に落ちる前の担任のことである。俺に「父親に比べて出来損ない」みたいな評価を職員室でぶちまけて、ブチギレた俺が殴り倒した男。俺が停学処分を食らったその後、この理事長に再教育と称してネクロゴンド分校に派遣されてしまったらしい。

「そんな経緯で私としては公認欠席としても構わないんだが、E組を除いた各学年学級の担任から体調管理は本人の責任だという声も上がってしまったね」

「まあ、そうでしょうね。テストを受けなかった場合はE組に行く。これはうちだと常識だし、そうならない為に体調不良でも這って登校する奴がいるくらいですし」

「その通り。だから体調不良の結果、成績が落ちるのは仕方ないこととして、キミは休学になったわけだ。しかし、学校側にも責任があるのは事実。そこで、キミに選択肢を与えることにした」

「……聞かせてください」

「一つ、A組に残る選択。この場合、休学明けにテストを受けてもらう。その結果が8割以上の正答率だった場合、残留が認められる。ああ、ちなみに8割というのは今回のA組の平均だ」

まあ、A組。つまり成績優秀クラスに残りたいのなら、学校の中の平均ではなく、A組の中の平均くらいは取れというのは理にかなっているかな。本来なら願ってもないことだし。なんなら、本来問答無

用でE組行きの所に特別措置が設けられてること事態が異例。他の生徒が知ったら暴動が起きるレベルだ。

「二つ、E組に戻る選択。無論、この場合でもテストは受けてもらうが、その結果に関わらずE組に戻って貰う」

「……………つまり、先生の用意してくださった特別措置を受けるか、受けないかって選択ですね」

「その通り」

さて、どうしたものか。

ぶつちやけ、A組で学びたいことなんて一つもない。学べることもないだろう。反面、E組にはやり残したことがある。

俺はどうしたいのだろうか。この学校に来たのは父さんに認められる為だ。主席で入って常に優秀であり続け、結果を出し、誰も認められる結果を残して主席で卒業する。常に1位というのは出来なかったが、A組に残るのはそんな当初の目的を果たすことができる。

けれど、E組にやり残したことがあるのは事実。それこそA組にいるより、E組にいる方が学べることは多いし、俺の気持ちとしてはE組に傾いているのは否定しない。でも、この学校に来た意味を考えると、辿り着く結末は真逆だ。

A組は皆んなに認められる。

E組は認められない。

決してE組が格下とかそんなことは思っていない。でも、今、全員で取り組んで、殺せんせーの暗殺という目標は決して誰にも知られることはないし、世間的に認められるものでもない。

僕は中学の頃に地球を救いましたとか、小学生が授業中にテロリストに学校を占拠されるも、自分が全て迎撃しましたくみたいな妄想と一括りにされかねない。

俺はもう一度、選ばなければならぬ。A組か、E組か。

「さて、私の話はこれくらいだ。まだ目覚めて間もない。頭も中々回らない時期だろう。返事はしばらく待とう。ゆっくり考えなさい。キミがどうしたいのか」

理事長はその後、「まあ、全校集会での発言的にE組に戻ったら針の

むしろになるかも知れないがね」と言い残すと、父さんに軽く頭を下げて病室を出て行ってしまった。

「……………相変わらず食えない人だ」

その背中を見送った父さんが言う。

そう言えば、一緒に入って来たな、この人たち。思い返すとこの2人の繋がりを俺は知らない。柵ヶ丘を受ける時もトメさんからは『旦那さまのお知り合いが経営する学校』としか聞かなかつた。理事長としての立場的にそのお知り合いってのは間違いなく浅野先生なんだろうが。

「父さんと理事長ってどう言う知り合い？」

「大学時代の先輩だ。当時、ハーバードにどうしても学びたい教授が在籍していてね、進学を決めたんだ。その時に同じ日本人だからと気にかけてくれたのが先輩だ」

「……………まあた知らねえ引き出しが出て来やがつた」

初めて知つたんだが？父さんがハーバード出身とか。つーかイメージ的にマサチューセッツ工科大学とかの方が研究機関が多そうな感じするけど、そつちだったのか。

「……………さて、私も先に要件を伝えよう。まず、お前の転院が2日後に決まった。手続きやら、受け入れ体制を整えるのに必要な時間だな。終わり次第に移動する」

「分かつた」

父の知り合いの病院。こつちは高校時代の知り合いとか言つてたっけか。こうしてみるとこの人の人脈は幅広い。ハーバードの主席卒業生、私立中学の理事、そして大病院の医院長。

もつとやばい人もいるかも知れないが、これまで出た人物は全員が学生時代の友達だと言うのだから驚きだ。

「次に……………お前の進路についてだ」

「……………進路？」

「ああ。といつても、別に将来は何になりたいとかそんな話じゃない。お前がこれからどうしたいかについてだ」

「理事長の話を踏まえて？」

「ああ。それもある。だが、私としてはもう一つ、提案できることがある。もつとも、提案というより、仰々しい言い方をするならば……親としての願いに近いが」

「……なに？」

「転校だ」

出て来た単語に思わず思考が止まった。

流石に予想してなかったぞ、転校なんて。

「お前がこの学校で頑張りたいのであればそれで良い。だが、もともとお前が櫛ヶ丘を選んだのは私の期待に応えようとした結果、自分の意思を度外視したものだと考えてる。今からでも、地元に戻りたいのであればそれでも構わない」

「……まあ、否定はしないかな。父さんに言われなきや俺は今頃は地元にいただろうし」

「それに……。私としては、お前に危険な目に遭って欲しくはない。先日話を聞いた印象としては、やはり今の環境にいるのは危険だ。殺せんせーを狙う殺し屋は数多い。その中にも、お前達ごと殺そうとする輩もいるかも知れない」

「……そうだな」

否定はしない。事実、俺たちはその毒牙を向けられた。死ぬかも知れないって思いは何度もした。

「お前の命は……私にとって地球より重い。だが、世間的に見ればそうではない。お前達を巻き込む結果になったとしても、確実に殺せんせーを殺せるならば、躊躇わずに実行する。それが社会で生きる大人というものだ。そしてこの先、お前がそういう場面に巻き込まれない保証はない。私はそれが……恐ろしい」

「……」

親としては当たり前前の言葉なのかも知れない。だと言うのに、こんな言葉を聞いて何処か感激しているあたり、俺も相当やってんな。心配されるのは嬉しい。

——でも。

「転校はしたくない。俺はもう地球滅亡という事件の渦中にいる。実

際、暗殺にも関わった。A組に行ったことで、暗殺からは離れたけど、当事者であることに変わりはない。この状態で全く別の場所に行くのは……それこそ無責任だ」

自分の選択を他人に委ねるのは無責任だと俺は思っていた。それでも磯貝は頼って良いんだと言ってくれた。

父さんは今、俺に逃げて良いんだと道を示してくれた。でも、それはなんと言うか、卑怯というか、無責任だと感じた。だって、俺は散々暗殺を仕掛けて、いろんな事情を理解している立場で、選ぶことのできる立場でもある。

もちろん、逃げるのだって選択なんだろう。でも、一度でも関わり、ここまで世話になった以上、どんな形であれ、近くで見守るのが責任で。俺はそれを手放しちやいけなと思うから。

「……………そうか。お前は、そう考えるんだな」

父さんは頷いた。俺の言葉にそんなしみじみ頷く要素はなかったと思うけど、父さんはゆつくりと3度頷くと、口を開いた。

「わかった。もう転校しろとは言わない。圭一、お前のやりたいようにやりなさい。自分のやりたいことを選び、進みなさい。お前ももう、私の期待に応えようとしなくて良い」

「……………え？」

言葉の真意が読めず、首を傾げる。

またいつもの誤解をしそうになる前、父さんがそれよりも早く、いつも言葉を選んでる時間よりも短く言葉を紡いだ。

「私は言ったな、お前に期待していると。それは変わらない。だが、磯貝くんと口論からして、この言葉がお前の重荷になってしまったのだろう。だから、今、補足したい。別にお前は私の意を汲んで努力する必要はないんだと」

「どういうことだよ……………」

「私がお前に期待することは一つ。自分の選んだ道で好きなように頑張ること。それだけだ。私と圭がお前に望むのは、健康であること、長生きすること、そして、自分の選んだ道で好きなように頑張つて、その果てに幸せであること。それだけだ」

「……………父さんと母さんの望み」

「圭は昔から身体が弱く、やりたいことは殆ど出来なかった。私は親の支配で好きなことが殆ど出来なかった。願いの押し付けになってしまふのだろうか。我々はそんな思いをお前にして欲しくなかった。生まれてから今日まで、私の意を汲もうとして頑張り続けてくれたお前からしたら、何を今更、と思うかもしれないが、これが我々の望みだ」

父親と母親の願い。そう言えば初めて聞いたな、そんな話。まあ、つい最近までまともに話してなかったから当然か。

「お前の名前は母親の圭と父親の新一から漢字一文字ずつ取っている。我々の良いところを継ぎ、自由に、好きなように生きて欲しい。それが圭一。お前の名前の由来だ」

「2人の良いところを継いで、2人ができなかったことをする。俺、そんな風に願われてたんだな」

「……………思えば話したことも、聞かれたこともなかったな」

「普通は小3とかの道德の授業とかでやるんだろうけど……………。なんかレクリエーションとかそんなのばかりだったからな」

思い出すのは小学校中学年くらいに道德。鬼ごっこさせられ、女子にタッチしたら勢いが強くて泣かれてしまった苦い思い出……………。あの頃は素行が良かったからわざとじゃないと相手も許してくれたけど……………おのれ、小3の頃の担任の北村あ……………。

「……………ともあれ、今後、お前は好きな選択をしなさい。周りからどう見られるか、私がどう思うかは気にしないで良い。自分がやりたいと思つたこと、正しいと思つたことを選びなさい。例えばそれが間違いであつたとしても、私が共に背負うから」

「……………急にまた成績が下がったら？」

「理由によつては叱るさ。そして考えよう。何が理由なのか。理由があるなら共に解決しよう」

「実は俺、修学旅行で知らない高校生に認知されてるくらい名前が通つてる不良なんだってカミングアウトしたら？」

「まずは叱る。次に謝る。お前がそうだった原因は私にこそあるのだ」

から。人様に迷惑をかけてしまったのなら、一緒に謝りに行こう。許されるまで何度でも」

「……俺は人を殺せる技術を学んだ。母さんから貰ったチカラもある。そんな俺が道を違えたとしたら？」

「お前はきつとそんなことはしないさ。でも、仮にそうだったとしても、私も背負うよ。お前の罪は私の罪だ」

俺の父親は思ったより、ずっと覚悟の決まった人だった。

波長から、気配から伝わってくる。嘘や冗談、その場凌ぎの言葉ではないこと。本気でそう考えていることが。

たぶん、この人もやらないことは言わないだろう。

思いもしないことを口にしない。いや、口にできないんだ。だって、息をする様にその場凌ぎの言葉を並べる。そんなことができるなら俺たちの仲があんなに拗れることはなかったんだから。

「………わかったよ。間違わないように頑張るけど、その時はよろしく頼む。………父さん」

「ああ……。私は見守り続ける。だから、A組に行くか、E組に行くか。お前のやりたい方を選びなさい」

「………うん、考えてみる。自分がやりたいことを」

俺は今、問われている。

自分の本当にやりたいことはなんなのか。学びたいこと、やりたいこと、やりたくないこと、やらなきゃいけないこと。それら全てに対する自分自身の選択を。

これまでの人生で視野を狭め、選択肢を少なく見せていた、父親に対するコンプレックスが目に見える障害でなくなった今、自分の進む道を俺は初めて選択することになった。

A組に残るのか、E組に帰るのか。

………夏休みの時と内容は殆ど変わらない筈の二択なのに、あの時に比べたら心は随分と晴れやかだ。

「ちなみに、お前、不良なんてやってたのか？」

「……………やっべ」

いらんことを口走ったと後悔した後、本当に叱られたし、本当に謝り倒された。基本的に喧嘩しかしてなかったことを話し、当人同士の問題と言うことで謝りに行くフェーズは発生しなかったが。我らの親子関係はある意味で始まったばかりである。

79話 本音の時間

「づうああああ………」

『どうしたんですか？そんなゾンビみたいな声を出して』

「爺ちゃんと婆ちゃんに泣かれるの思った以上にしんどい」

『……あー』

ベットに備え付けられたテーブルに突っ伏してうめき声を出している、律から声を掛けられた。

父さんに説教されて不良時代の所業を洗いざらい吐いたあと、見舞いに来た祖父母に泣きながら説教された。

小言や説教自体は覚悟していたが、やっぱり泣かれるとしんどい。まあ、それだけ自分も周りに迷惑をかけてしまったと言うことだ。反省しないといけない。

思えば、磯貝たちが俺たちに事情を聞きに来たあの日、倉橋さんが目に涙を溜めているのを見た時に俺は立ち止まるべきだった。立ち止まって、誰かを泣かせた事実をもっと真面目に見つめれば、こんなことにはならなかったかも知れない。

後悔先に立たずとはまさにこのこと。

テーブルに突っ伏してうめき声を上げながら日向ぼっこ。

長閑な日差しと陽気が陰気な気分を浄化してくれたことだろう。ここが病院でなければ。

「はああああ………」

息を吸って、ため息に変換する。今日から俺は錬金術師として生きていこう。ため息の錬金術師だ。吸った酸素を二酸化炭素に変換して吐き出す永久機関だ。

ため息の錬金術師。なんとも幸薄で、陰気で、気怠そうな肩書きである。まだ銀の死神とかの方がカッコよく思えるのはいよいよ俺の頭がおかしくなり始めた証拠だろうか？

どうでも良いことに思考を割いていると、部屋の外に人の気配が複数止まり、不意に扉が2回ノックされた。

誰だろう？ 祖父母も帰ったし、父さんは転院の為の準備で出ている。それに俺を訪ねてくる奴はいないと思う。

というか、ノック2回は便所ノックだと知らんのか。

「入ってます」

なんとなくそんな返しをしてみる。

「いや、お前に会いに来たんだから入ってるのは知ってるわ！」

なんとなく返した言葉に返ってきたのは聞き覚えのある威勢のいいツツコミ。そして入ってきたのは見覚えのある茶髪を筆頭にした中学生の団体客だった。

「……本当に起きたんだ」

「良かった……」

E組のメンバーがそこにいた。

「えっと、本当はみんな来て来なかったんだけどさ。流石に迷惑になるかもってことでまずは俺らだけで来たんだ」

『ちなみに、皆さんも起きた乃咲さんの声が聞きたいとおっしゃってます。通話、繋げてても良いですか？』

「うん。繋げてくれ。みんなに言いたいことがあるから」

律の言葉を了承して病室まで来た面子を見る。

いたのは修学旅行一班と渚、神崎さん、竹林。

ただ、みんな気まずそうだった。

多分、さっきの前原のツツコミも、会話の流れを作る為の気遣いだったんだろうことは想像に難くない。

「来てくれてありがとう。本当は俺から出向いて頭下げなきゃいけないんだろうけどさ」

「んなことねえだろ……。お前が磯貝と怒鳴り合った後、やっと本音を聞かせてくれたって思ったけど、その後、2日も目を覚まさなくて。お前がどんだけ追い詰められてたのか考えさせられた。……あんな風にみんなで囲むような真似してごめん」

「お前らは悪くない。俺の気持ちなんて誰にも分からないって決めつけて、頼らなかつた俺の落ち度だ。その結果、みんなに心配かけた。爺ちゃんと婆ちゃんに泣かれて、自分がどんだけ周りのことを考えて

なかったのか思い知ったよ。こつちこそごめん」
頭を下げ合い、磯貝と倉橋さんに目を向ける。

2人とも何か言いたそうにこつちを見ていた。

「特に磯貝と倉橋さんには本当に申し訳ないことをした。心配して本音を言ってくれてるのに磯貝には八つ当たりするようになり怒鳴り散らしてしまった挙句、手を出させてしまった。倉橋さんには茶化して、誤魔化して、体良くスルーしようとして、泣かせて、怒らせてしまった。2人とも、本当にごめん」

今度は2人に向かって謝り、頭を下げる。

息を呑む様な、何かを吸い込む様な、何かを飲み込む様な音が2人から聞こえた。頭を下げてるので2人が見えない。

少しの間、沈黙が訪れる。

周りの音しか聞こえない。肝心の2人からはなんの声も聞こえない。それが少し怖かった。普段優しい2人を怒らせてしまったのも影響しているだろうが、やっぱり怖い。

この感覚を知っている。かつて、父に報告した後、言葉を待っている間のそれに似ている。思わず逃げてしまいたくなる様な、怖い沈黙。でも、今回は逃げなかった。今逃げたら彼らともすれ違ってしまふ。そんな確信があったから。

何秒でも、何分でも、何時間でも。俺は今度こそこの沈黙に耐える。それが今回の件で得た教訓の一つだから。

しばらく頭を下げ続ける。果たしてそれがいつものアレの所為でそう感じるのか分からないが、俺の中である程度の時間が過ぎた頃、ふと、布団の外に出ていた手を柔らかいものが包んだ。

「……圭ちゃん」

倉橋さんの声が鼓膜を叩く。

顔を上げると、ここ数日で何度か見た、涙目の彼女がいた。

「ごめんね」

謝られた。なんで？

思わず彼女の瞳を見つめた。

「私は……圭ちゃんに聞いたつもりになってた。聞いて、答えてくれ

なくて、なんで？って思ってた。どうしてそんな風に頑張るの？って。圭ちゃんがどう言う気持ちで、どんな思いで頑張ってるのか本当の意味で分かってるうとしてなかったと思う」

「それは仕方ないことだし、やっぱり、どう考えても話そうともせず、みんなを遠ざけた俺が悪かったんだよ」

「そんなことないよ……。私は圭ちゃんの頑張ってるところが好きだし、尊敬してるし、憧れてた。それだけで、満足してた。『頑張ってるすごいなあ』ってそれだけで止まっちゃった。その理由まで分からなくて、考えなくて、気が付いたら圭ちゃんが何を考えてるのか分からなくなってた。それが怖かった……。なのに、あんな風に責めるみたいに捲し立てて……ッ」

倉橋さんの独白。その中に身に覚えのある気持ちがあった。

『何を考えてるのか分からなくて、それが怖い』その気持ちならよく分かる。痛い程に理解できる。

それは今日まで歩んできた人生で自分の父親に対して強く抱き続けた感情の一つだったから。

認められなくて、でも相手が何を考えてるのか分からなくて、どうすれば良いのか分からなくなつて、相手を責める。

俺は別に倉橋さんに責められたとか思っていない。むしろ彼女を含めたみんなの主張はもつともだ。間違っていない。でも、彼女がやってしまったと思つていることに対してなら、今、考えていることなら理解できる。俺と同じだったから。

「倉橋さんたちは何も悪くない。けど、それじゃあ、納得はしてくれないんだよな？俺も自分が悪かったってのを否定されても納得出来ないし。……分かった。じゃあ、こうしよう」

本来、こんな交換条件みたいな言葉をかけて良い立場ではないのだろう。それでも、今、どちらかが流れを変えなければ、このままずっと謝り合う展開になる。

俺はみんなのことを恨んでもないし、彼ら彼女らに非があるとは一切思っていない。そして、彼女も俺が悪くないと言ってくれた。であるなら、俺たちは互いのことを許せる。あとは自分を許すかどうか

だ。その為に踏み出した。

「俺は、もうこんなことはしない。独りよがりにつ突つ走つて過労で倒れるなんて真似は2度としない。それをE組のみんなに、先生たちに、世話になった人たちに約束する。だから、倉橋さん達は、俺がもし、また間違えそうになつたら止めて欲しい。もちろん、間違えないつもりではある。でも、少しでも兆候が出たら叱つて欲しい。これからの俺を見ていて欲しい」

「……………」

『……………』

返つてきたのは静寂。でも、それは長く続かなかつた。

「……………うん。私もそれが良い。私も、今度こそ圭ちゃんのこと知りたい。だから見てるね。これからずっと」

握られていた倉橋さんの手に一層力が入る。

「だな。誰かが見てねえと直ぐに無茶してぶつ倒れそうだもんお前。俺もお前に賛成。…………俺たちもお前に無茶させない様に頑張るから。これからも、よろしくな。乃咲」

「そうね。それが良いんじゃない？あ、でも普久間島の時みたいなのもダメだかね。やばいと思つたら休むこと。みんなの為につて無茶しないこと。それを守ってくれるなら、うちらとしても良いかな？それから、ごめんね、乃咲」

「キミがそう言うのなら僕は信じよう。…………家族に認められることが全てじゃない。まずはそれ以外の目標を見つけることから始めよう。それが僕らの第一歩だ」

「乃咲くんの言つてたこと、私はなんとなく分かる気がする。親つて言う存在は痛いところに刺さるものね。これから先、また潰れそうになつたら話して欲しいかな。話してくれたらゲームとか、一緒にガス抜きできると思うから。みんなで」

みんなが口々にそう言つて頷いてくれる。

律を經由したスマホの向こうからも同意の声だったり、ぶつきらばうだけど遠回しに肯定してる声や、俺のフアザンコンを弄ってくる声も聞こえてくる。

そんな中で、1人、俺の前に立つ男がいた。

「……圭一」

「……………磯貝」

磯貝は後ろめたそうな顔で、俺の前にたった。

「悪かった。怒鳴って、殴って。倒れた奴に……いや、最後のに関しては倒れてなくてもやるべきじゃなかった。本当にごめん」

頭を下げられた。

空気が変わり始めた。このまま流れに任せてみんなこれからよろしくって流れにすることもできただろうに、この真面目委員長は、そんな妥協をせず、面と向かって謝ってきた。

「……何度も言ってるが、お前は悪くない。お前に怒鳴られて、殴られて、怒鳴り返して。それで気付けることがあった。後になって、お前の言う通りだったってしみじみ思った。だから、お前が謝る必要はないんだよ、磯貝」

「お前はそう言ってくれるけど、でも、謝らせて欲しい。感情的になって、後先考えずに殴って。そのくせ、仲直りする流れだからあの時のこともこれでチャラ、なんて俺は嫌だ……」

「それを言うなら、俺だってそうだ。何も話さない癖に、お前らには分からないって怒鳴った。こともあろうか、お前に散々怒鳴って気を失って、目を覚ました時、なんとなくスッキリしてる自分に気が付いた。俺がしてしまったのは八つ当たりだ」

「でもそれは、お前がそれだけ溜め込んでたってことだろ」

「ああ。その通りだ。外から色々言われて我慢できずに爆発した。でも、磯貝だって同じだろ。俺に我慢できなくなったのは、それだけお前も溜め込んでたってことじゃないのか?」

「……………だからこそだ」

磯貝が俺を見た。真っ直ぐに、射抜く様な視線を俺の目に……きつと、俺の目に映る人物に向けていた。

それを見て思った。俺は彼の言葉を聞かなくやいけないんだと。きつと、数日前の俺も似た様子だったから。その時、父が聞いていてくれたから。俺を見ようとしてくれてるこいつを俺が見返さなくや

いけない。なんとなく、そう思った。

「聞かせてくれ」

俺の言葉に頷くと、磯貝は口を開く。

「圭一。俺はいつかお前みたいになる自分を重ねたんだ」

「……………いつか俺みたいになる?」

「そうだ。きっと頑張る動機は違うけど、でも、俺はいつかお前みたいになるかもしれないし、なっていたかもしれない」

そう言うと、彼はゆっくり話し出した。

「俺ん家も片親だ。親父が死んで母子家庭になった。そこまでは話したよな。俺のバイトがお前にバレた時にさ」

「あつたな。まだお前の名前もすっかり覚えてなくて、磯牧とか覚えてた頃だったかな」

「その時期だ。俺がお前に話したのは。父さんが死んで、母さんは一人で俺たちを養ってる。私立の学費と家賃や光熱費、食費諸々を加えた生活費。何もかもが足らなかった」

「それを少しでも補填したくてバイトをしてた時にちょうど俺と鉢合わせたんだつたな。確か……………」

「ああ……………俺たちの為に仕事漬けの母さんに少しでも楽しませてくれて、足しになればって思ってたバイトしてた」

磯貝は窓の外に視線を向ける。

放課後のそろそろ良い時間だが、まだ夏半ばということもあって外はまだまだ陽が沈む様子はない。

「母さんには感謝してる。でも、怖かったんだ。父さんの分まで俺たちを養う為に夜遅くまで働いて、朝早くに家を出る。ふらふらで疲れ様子の母さんがいつか倒れるんじゃないかって」

「……………」

「父さんは事故だった。でも、即死じゃなかったんだ。しばらく意識不明で生死の境を彷徨って、数日後に逝った。亡くなるまでの数日怖かった。父さんに生きて欲しい、死なないで欲しい。そうやって祈って怯えてた。母さんが倒れたらまたあんな思いをするんじゃないのかって、それが怖かった」

ポツポツと磯貝が話す。絞り出す様に、力無く。彼と幼馴染の前原は何を言うでもなく、震えていた磯貝の方にポンと手を置き、俺たちの方を向きながら、それでも俯いていた。

「正直な話、普久間島でお前が倒れた時、真っ先に重ねたのは俺の母さんだった。無茶して倒れる姿が、いつか、俺の家族がそうなるかもしれない可能性に見えた」

「……そうか」

父の口癖が口を吐いた。

俺も気がつけば周りの言葉に”そうか”と返してる事が多い気がする。そう思うと、俺はやっぱりあの人の子供なんだろう。

「そしてお前はA組に行った。何も言わずに出て行ったことは納得できなかつたけど、応援しようと思った。でもさ、何度かお前の様子を見に行った時に思ったんだ。『なんて痛々しいんだろう』って。ふらふら歩くお前を見てさ」

「……さっき律にも言われたよ。その時の俺は普段よりもだいぶ様子が違かつたんだよな？」

「そう思う。ふらふらしてて、目は虚で、周りに興味がなさそうで。自分のことすら興味なさそうで。またいつか倒れるんじゃないかって心配だった」

たまたま前原と目が合う。側から見ている、俺はそんなに酷かったのか？と目で問いかけると、頷かれた。

「俺なりに考えてみた。俺だったら、どうするのか。俺がお前の立場ならどうするのかって。でも、分からなかつた。あの時、お前が言った通り、俺は特別誰かに認められたいか思つたことなかつたからさ。自分なりに立場を置き換えて考えたんだ」

「……………」

「俺が倒れるまで頑張ることになる状況……それは多分、母さんが倒れた時になると思うんだ」

「お袋さん？」

「そうだ。ありえない話じゃない。母さんが俺や弟妹たちを養うのに無茶して倒れた時、次に働かなきゃいけないのは俺だ。多分、そう

なったら死に物狂いになると思う。みんなを食わせる為にバイトと
か入れまくって、殺せんせーの暗殺にも手段を選ばなくなると思う。
周りに止められようと絶対に」

「まあ……家族の為ならそうなるのも当然なんじゃないのか？」

「だな。でも、思うんだ。もし、そんなことをして俺まで倒れたら、誰
が弟妹たちを食わせていくのかって。家族や周りの奴らはどう思う
のかって」

考えすぎ、とは言えない話だ。

うちの父さんが俺を食わせる為に必死に働いているように、同じく
片親の彼の母も同じだろう。幸い、うちは父さんの稼ぎが良いから、
生活に困ることはなかった。

でも、磯貝のところは違う。パートやバイトを掛け持ちして、私立
に通う長男と他の子供たちの養育費と諸々の生活費を捻出するのに
苦労するだろう。過労で倒れるのも無理のない話だ。

そして、そうなった時に苦労するのが磯貝というのもまた、無理の
ない話だ。現実的ですからある。

「そんなことを考えてた時、お前が倒れた」

「……タイミングが悪かったな」

「かもな……。だからか、自分なりに考えて、認められる為に必死に努
力してたお前にしたら理不尽な話だろうけど、頭に来た。自分が倒れ
た時のことを何も考えないで、周りが心配してることも気付かずに無
茶するのが頭に来たんだ」

「……………あの時も、そう言ってたな」

磯貝が殴って来た時、そんなことを言っていた。

コイツのいう通り、あの時の俺からしたら急に殴られたことは理不
尽この上ないことなのかもしれない。

けれど、不思議と腹は立たなかった。殴られたあの時にあったのは
驚きと、コイツを落ち着かせないと、丸め込まないとってことくらい。
多少思うところはあったのは否定しないけど、でも、頭に来たとか、そ
んなことはなかった。

流石にその後の言い方には頭に来たので売り言葉に買い言葉で怒

鳴り合いになったけど、でも、それくらいだった。

「でも、お前の本音を聞いた時に俺がお前の立場だったらって考えた。俺がお前だった時に何ができたのか、なにをしたのか、何が出来たのかって」

「……………何が出来た？」

「何も出来なかったと思う。俺がお前ならこうした、ああやったってのは所詮は結果論だ。第三者として見てたから言えるだけ。実際に同じ立場だったら俺もあの時のお前みたいにながむしやらに頑張るか無かったと思う。だから……………偉そうなこと言って、殴って、怒鳴ってごめん」

磯貝が頭を下げる。でも、そんなことされる筋合いはない。確かにあの時、俺は反発した。でも、その後、実感した。磯貝や倉橋さんのいう通りだったから。

「やめてくれ、磯貝。俺はお前に頭を下げられる立場じゃない。今はあの時のお前が正しかったと思ってる。悪かったのは俺なんだよ。だから、頭なんて下げないでくれ」

「でも、殴る以外の方法だってあった筈なんだ。見守るんじゃない、もっとお前のことを知ろうとすることも出来た筈なんだ。それをしないで怒鳴って、殴って。しかも弱ってる奴に。本当に最低なことをした。こんなことでスッキリしてくれるなんて思ってたないけど、俺を殴ってくれ……………!」

磯貝が深々と頭を下げってくる。たぶん、磯貝なりのケジメなんだろう。正直、丸め込むことは出来る。

いつもの様に理屈を並べて、人情に訴えかけてやれば磯貝に頭を下げられ続けるこの状況も打開できる。

「……………分かった。顔を上げてくれ」

でも、それでいいのだろうか？見ず知らずの他人がそれっぽい理屈を並べているだけならそれでも良いかもしれない。自分と対立している人間を丸め込み、思う様に動かしたいだけならその方法でいいと思う。

けど、目の前にいるのは、俺を思って叱ってくれて、殴ってまで止

めようとしてくれた友人だ。

そんな足蹴にする様な方法を取っていいのか？それは相手を見るってことに繋がっているのだろうか？

答えは否だろう。

そう思った時、口が了承を告げ、立ち上がった。

倉橋さんの手をそっと退けて、息を深く吐きながらゆっくりと立ち上がり、床がぬかるむような感覚に耐えて立つ。

正直にいうなら、俺にコイツに殴り返す権利はない。でも、それで磯貝が満足してくれるならそれでも良いだろう。

「今の俺に出来る全力で行くぞ。ケツの穴閉じて歯を食い縛れ。1発だけ殴る。それで恨みっこナシだ。今後、何を言われようが俺はお前を殴らないからな」

「……ああ、分かった。頼む、来てくれ」

俺の言葉に頷く磯貝。そんな俺たちのやりとりを見て、止めようとする女子たちの間に前原が割って入る。

手を出すな、口を出すな、いつものおちやらけた雰囲気をつ込めた真剣な様子の前原に女子たちが動きを止める。

心配そうなみんなに少し胸が痛む。

それでも、拳を固めて振りかぶった。

今、これをやらないと俺と磯貝の間には無意識のうちに溝ができてしまう様な気がしたから。

今の俺に出来る全力を込めて拳を奴の右頬に叩き付ける。

——ペチ。

「……………え……………？」

磯貝が呆気にとられた様な顔でこっちを見る。

拳には意外と柔らかい肉の感触。喧嘩以外で他人の頬に触れる機会がなかったもんだから、ほっぺたというのは案外、誰でも柔らかい部位なのかもしれない、と。そんな感想を抱きながらベットに腰を下ろした。

「どうした？今の俺に出来る全力で殴ったぞ？街の不良共に恐れ、ドン引きされてる死神サマの全力パンチだ。泣けよ」

「は……、あ？いや、ペチっていったけど」

「いったな。んで？」

「いやいや、絶対にお前の本気はこんなもんじゃないだろ？」

「こんなもんだぞ？お前、俺がどうして倒れたのか忘れた？過労で身体に力が入らなくなつて倒れたんだぜ？それが病み上がりどころか絶賛病んでる最中で人間を吹っ飛ばせる力を出せるわけないわな。今の全力はこんなもんだ」

「いやいやいや！こんなんじゃないや納得できな——」

「おい前原。俺は今できる全力で1発しか殴らないって言ったし、磯貝はそれに頷いたよな？」

俺の問い掛けに前原はニヤリと顔を歪ませた。その横顔を見た木村が『しゃーない、乗ってやるか』と言わんばかりに竹林に笑いかけ、竹林は不敵に笑つて眼鏡を押し上げた。

「だな、乃咲はすっかり宣言通りに今の全力で殴ったと思うし、お前もコイツの言ってる内容に納得してただろ？」

「いや、それはそうだけど——」

「鏡見ろよ、乃咲に殴られたところ白くなつてるぜ？」

「これは一部に力が掛かつて血の巡りが——」

「ふむ。しかしだね、磯貝。乃咲は確かに拳を振りかぶつてキミの頬に当てた。その結果、頬に負荷が掛かり、血の巡りが一時的に止まった。これは確かに”殴った”と言えるし、乃咲はその直後に崩れ落ちる様にベツトに腰を下ろした。よつて、乃咲は全力で殴ったと言えるだろう」

「竹林、お前まで……!?!」

男子が口々にこんなことを言い始めたことで、ちよつと困惑してる様子だった女子達も場の流れを理解したらしい。

「ほら、見てよ磯貝くん。乃咲くんの足、プルプルしてる」

「きつと立ってるのもしんどかったのよ。本当に全力で殴ったんじゃないの？」

「そーそー！きつと全力だよ！あ、それはそれとして仕方がないことだつてのは分かつてるけど、でも、過労で力が入らないのに全力出し

た圭ちゃんはお仕置きね？」

「ふえ……」

「ふふふ……。そうだね。きつと全力だよ」

「神崎さんまで……」

周りに味方がいないことを悟ったのか、肩を落とす磯貝。そここの状況に肩をすくめた片岡が手を置いた。

「乃咲は宣言した通りのことをしたし、磯貝くんは条件に頷いた。私やここにいるみんなは勿論、律越し状況を見てるみんなも聞いている。乃咲にしてやられたってことで諦めなよ」

「片岡……。ああ、分かったよ。それに流石にこの状況じゃ、圭一には勝てないわ」

磯貝が渋々と言った様子で彼女と同じ様に肩をすくめ、諦め、同時に呆れた様に頷いた。

「分かった。約束だ。今のでおあいこ。恨みっこナシ。それで良いんだよな？」

「そうしてくれ。俺はお前の言ってることが正しかったと思うから殴るのは違うと思ってる。でも、お前は俺の立場になって考えて殴ったのはやり過ぎたと思って、俺に殴り返されたい。お互いに意見が反対な以上、ここらが落とし所としては妥当だろう？」

「……そうだな。そうしよう」

磯貝はもう一度頷いた。

気分を切り替えたのか、顔はさつきよりも幾分かすつきりしているというか、どこか晴れやかだ。

「じゃあ、みんなとはタイミングずれちまったけど……」

磯貝が手を差し出してくる。

「これからもよろしく。圭一」

「ああ、よろしく磯貝——」

「はい、ストロップ」

手を握り返そうとしたところで前原が割って入ってきた。

「……どうした、急に」

良い感じにまとまりそうだったところを遮られたので少し抗議の

思いを込めて前原を見ると……。

「ノンノン」

なんつーか、イラっとする顔をした。

「前から思ってたんだけどさ。良い加減、乃咲も磯貝を名前で呼んでやれよ。なんつーか、互いに遠慮してる様な距離感でもないし、仲も良いし、気も合うだろうにさ、なんか距離あるんだよ、お前ら。まだ2人して互いを苗字呼びなら違和感ないんだけど、多分、磯貝は名前で呼んでるのに、乃咲が苗字呼びなのが引つかかるつーか。この際統一しろよ」

「……そうか？」

「まあ、一方通行みたいで寂しく無かったわけじゃないな」

「そうか。なら、ならば今度からは、よそよそしく『乃咲さん』と苗字で呼んでくれたまえ」

「今そういう流れじゃ無かったよな？急にマユリ様出てきたよな？普通に下の名前で呼べよまどろっこしい！」

「じょーだんだよ」

「今の流れで良くそんな冗談言えるな、お前」

「みんなの前でファザコンバレて、挙句に小さい頃から抱えてた駄々を爆発させた乃咲さんのメンタルは結構無敵ぞ？」

「そりゃそうだろうけどさ……」

前原と木村がめんどくさそうに項垂れ、竹林が眼鏡キラリと光らせる。片岡と岡野からの呆れの眼差しと、神崎さんの一歩引いた位置から見守る親の様な視線、そして倉橋さんと矢田さんからのニマニマした微笑みが俺に突き刺さる。

これは、観念して呼ばないと許してくれないパターンだな。

別に呼び方を変えるくらいのこと、恥ずかしくはない。でも、こうなんか、色んな奴に見守られながらというのが妙に照れ臭い。ついでに言えば、ここにいる奴らだけじゃなく、律を通じて他のメンツにも聞かれてると思うと余計にな。

でも、こうなつては逃げられないだろう。

俺は深く息を吸い、この際、1発ドカンと潔く程々に澄み渡る声で

みんなの望む一言を爆発させた。

「悠馬、これからもよろしく」

「声ちっさ!?!」

「まあまあ、そう言わずに。ほら、磯貝くん。乃咲が歩みやったんだよ?
?返事してあげないと」

「ああ、よろしく、圭」

悠馬の苦笑が耳に残った。

80話 病院の時間

磯——悠馬と和解を済ませたあと、みんなは帰って行った。俺としては一人一人に頭を下げたい所だったが、律の中継してくれてる先で聞いてた寺坂の『やらかしたと思うならさっさと身体治して暗殺に貢献しやがれッ!』という不器用でぶっきらぼうな言葉に俺以外の全員が賛同したことでお開きとなった。

やつぱり言い方は乱暴だが、寺坂はいい奴である。

そんな彼の言葉に頷いて帰っていくみんなも結構なお人好しだと思いが、それがE組の良さなんだろう。

みんなが帰った後、俺は何気なくテレビを付けてぼーっと過ごしていた。そう言えばテレビをゆっくり眺めるのも久しぶりだ。最近は暇があれば教材と睨めっこし、分からない部分を調べることでしかネットは使ってなかった。

なんとなく新鮮な気分で見つめるニュースは俺の記憶していた古い情報をアップデートしてくれた。

海外でミサイル実験が行われたとか、冷戦というか膠着状態だった複数の紛争地帯が再び動き出したとか、月が爆発した原因がどうこうとか。色々と。

紛争に関しては考えてもどうしようもないが、海外のミサイル実験とやらは、本当に実験なのか? 案外、飛行する殺せんせーを撃ち落とそうとしたのをメディアにキャッチされただけだったりするのかもしれないよな。

勉強も暗殺も一時的に辞めて眺めた世界は、俺が思う以上に平和な気がする。暗殺のあの字もない。辛うじて見つけられる暗殺の痕跡はそれこそニュースで出てるミサイル実験くらいだ。しかし、それも事情を知らない人々からしたら、『また隣国がミサイル撃ってるよ』くらいの感覚なんだろう。

紛争が起こることから目を背ければ、世界は平和だ。来年の3月には地球がなくなるかもしれないって危機感も抱いてないし、

まして、中学生が地球を破壊する生物の暗殺に駆り出されてるなんて考えもしない。

少し前まで、これが当たり前だった。ミサイル発射とか聞いても『物騒だな』くらいしか思わず、月が爆発したとか聞いても『まじか、なんでなんだろ?』くらいしか考えなかつた。それが普通だった。それが当たり前だった。

「なんか、随分と感性がおかしくなったもんだ」

『そうなんですか?』

律が話しかけてくる。

「まあな。暗殺とか関係ない人たちを見るとそう思う。少し前まで俺も向こう側だったのに、いつの間にか平気で暗殺のこととか、どうやったら殺せるか、とか。そんなこと考える様になってんだもん。自分を客観視して、驚いたよ」

そう、驚いてる。E組が暗殺教室になったばかりの頃、俺の感性はまだ、普通よりだった。殺せんせーの安全性について疑問を持ち、政府の判断を疑い、殺せんせーの正体を考察して、各国首脳達に疑念を持っていた。

それが今はどうだ? 最近は殺せんせーの正体を考えることも少なくなつたし、なんなら信頼してるし、正直に言えば国のことは信頼できなけれど、鳥間先生は無条件で信頼してる。

ビッチ先生に対してもそうだ。最初は『暗殺者とか言っても、所詮は殺人鬼だろ?』とか思ってたのに、いつの間にか馴染んでる。国家機密とか、殺し屋とか、暗殺とか、地球滅亡とか。気が付けば非日常が日常になつていた。

『ふむ……。確かに普通の中学生とはかけ離れた生活してるのは否定できませんね。暗殺、国家機密、過労。どれも普通の中学生が経験する様なことではないでしょう』

「はい、ごめんなさい。猛省しておりますので許してください……。2度と過労で倒れませんので」

『もう……。常にいろんなことを考えてるのは乃咲さんの良い所ですけど、考えすぎるのは悪い所ですよ? こういう時くらい、何も考えず

にぼーっと過ごせば良いんですよ。乃咲さんくらいの年頃の男の子は遊ぶ事とエッチなことだけ考えてるのがデフォルトなんですから。年頃らしくしてください』

「それは偏見がすぎるんじゃないかい!? というか、エッチなこと考えて良いなら人のスマホに住むなよ!? お前がいるからスマホでエロいの検索出来ねえじゃん!」

『良いじゃないですか。私のことは気にせず調べても。乃咲さんが周りに触手触手言われるから興味本位で調べた結果、思いの外にハマリそうでいろんな触手ものの同人誌を見ることがなんて女子の間では共通の認識ですよ?』

「……え、どうしよう。俺、やっぱり転校しようかな」

「ってことはアレか。さっきの悠馬とのやりとりや、この前の父さんへのコンプレックスをぶちまけてるシーン中、女子連中は『コイツ触手愛好家なんだよな』とか思ってたのか!」

え、どうしよう。転校するか、E組行きをやめるかガチめに悩みそうだぞ、これ。立ち直れないかもしれん。

『まあ、この話は置いておくとして』

「ほんとお前、強かになったな。凶太くなったというか、いつの間になんなキャラになったのか」

『置いておくとして!』

「はいはい、分かった分かった」

『乃咲さんは一度考えるのを止めましょう。恐らくですが、過労の原因の一つはその高すぎる集中力と思考力にあります。いつもの調子で考え耽っていたら回復するものもしませんよ』

「それは……まあ……」

一理ある。恐らくは夏休み中の無茶もあるのだろうが、過労を加速させているのはゾーンに入りながらの勉強だろう。

俺のチカラが努力と言う過程をすっ飛ばして熟達した結果のみを得るゝ的なものだったならこんな事にはならなかったのだろう。だが、俺の場合はしっかり自分の体感時間ではあるものの、しっかり時間を使って努力をしているつもりだ。

言ってしまったえば、ゾーン中にはある種の精神と時の部屋状態。考え事をしていてだけで周りの倍の時間が過ぎるのだから、頭を使っているのは休まらないのは当然である。

『分かっているのなら、たまにはゆっくりしてください。明日は一日中何も考えずに日向ぼっこしてましよう！』

「……はい」

律の言葉に頷く。彼女の言い分は理解できるし、俺の視点でも何も考えずに休むと言うのは理に叶っている。

しかし、何も考えないと言うのは思いの外に難しいと言うことを俺は身をもって知る事になるのだった。

??

??

??

「……………」

『……あの、乃咲さん？』

「……………」

『えっと、勧めておいてなんですけど、やっぱり少しくらい頭を使っても良いかもしれませんね。ゲームでもしますか？』

「……………」

『あつ、これ、電源入ってませんね』

いや、電源は入ってるんよ。でもね、いざ何も考えないってのは結構難しくくてね。なんとか最低限の思考能力だけ残した脱力状態を作ることが出来たけど、こうなるとやる気が出ないんだわ。

何も考えないことを考える……とか、一行矛盾を昨日、あの後からかましているのだが、これが思いの外に難しかった。

何も考えない様になると、何も考えてない状態ってどんなだっけ？と考える様になり。いつそ寝てしまおうと思えば、今度は眠り方が分からなくなつて。最終的に俺って勉強、訓練、ゲーム問わず何もしていない時って何をしてたっけ？とかドツボにボツシユート。結果、ゲシユタルト崩壊してしまった。

その果てに、何も考えないことを考え続け、最適解として身体の力

を抜いてぐだーつとしながら、ベットテーブルのシミの数を数えるだけの究極的にやる気のない男が生まれた訳である。

「ぬぼ〜〜〜……」

『まさかここまでになるとは………』

律の声を聞き流しながら、付けっぱなしのテレビから聞こえてくる情報を右から左へ受け流していると、昨日と同じ様に扉がノックされた。今日は3回。うん、分かっている奴だ。

「圭ちゃん、入っていい?」

「律、返事しておいてえ……」

倉橋さんの声が聞こえた。しかし、扉に聞こえるくらいの声で返事する気力もないので、適当に律に振る。

すると数秒後、躊躇いがちに扉が開いた。

「失礼しま——って、圭ちゃん!」

「わっ、乃咲!?なんで溶けてるの!」

入ってきたのは倉橋さん、茅野、渚、カルマ、杉野だった。

「かくかくしかじか」

「いや、どう言うこと?」

衝撃、かくかくしかじかでは伝わらないらしい。

それもそうか。俺はテーブルに突っ伏したまま、顔の向きを変えて、ざっくりした概要を話した。

「何も考えない様に考えるって何言ってるのかわかんねえな。頭痛が痛いとか、努力を頑張るとか、それに近いものを感じる」

「て言うか、それでこんなドロつとする?机の上で液状化しててもう乃咲、人間の形を保ててないじゃん。これ型に流し入れて冷蔵庫に入れるだけで治るかな……?」

「茅野は俺をプリンかゼリーだと思ってる?」

「え、油固め剤とかの方が良かった?」

「ごめん、ちょっと泣きたくなかったからみんな出ていってくれ。小一時間くらいで泣き止む様に頑張るから」

「ごめんごめん。ほら、お見舞い持って来たからさ!」

そう言って茅野が俺の顔の横にどきつと袋を置く。中に入ってい

たのはちよつと良い値のするコンビニスイーツ達だった。

「疲れてる時は甘いのが良いって言うし、みんなで選んだんだ。小腹が減ったら食べてよ」

「これはぐー丁寧にありがとうございます」

お礼を言いつつ身体を持ち上げ、伸びをする。

なんとなく頭が重く感じるのは過労か、それとも良くない姿勢でいた所為なのか。考えすぎないことを考えていたからか、頭が糖分を欲している。

「んじゃ、早速いただきます」

袋からプリンを取り出し、一口。

「ん、久しぶりに食べたけどプリンって美味しいのな」

「お？乃咲もプリンの良さが分かった？」

「茅野や殺せんせー程じゃないけどな。疲れてる時は甘いものってあながち間違いじゃないのかも」

「へー、じゃあ、今度喫茶店でも行く？竹林イチオシのメイド喫茶に寺坂あたりを連行して遊ぼうよ」

「それは寺坂を弄って遊びたいだけだろ……」

言葉を交わしながらプリンを食べ進める。

雑談の様な雰囲気では話が進む中、渚がふと口を開いた。

「ねえ、乃咲。これからどうするの？」

「どう、とは？」

「ほら、乃咲は倒れて小テスト受けられなかったじゃん。一応、うちの学校的に例え小テストでも受けなかつたらE組行きてってルールでしょ？乃咲はどうなるのかなって」

みんなの視線が俺に向く。多分、お見舞いが本来の目的だけど、その辺が気になっているのも本心なんだろう。せっかくだし、話してみることにした。

「ちよつとした特例措置で成績にもよるけどA組に残るか、E組に戻るかを選ぶ権利を理事長から貰ったよ」

「特例措置？あの理事長が？」

「そ。ほら、前に俺が教師を殴ったって話はしたろ？その時に殴った

教師の発言が問題視されてさ。生徒を過労で倒れるまで追い込んだってことで学校側にも責任があるってことで」

「……何言われたんだよ?」

「父親と違って、なんでお前は出来損ないなんだってさ」

「……なるほどな。そりゃあお前もキレるか。この前のアレを見せられたら納得するしかないだろ」

「ま、そう言うこと。テストで8割正解すればA組に残留するか、E組に残るか選ばせてやるってことだな。ざっくり言うと」

「8割ってハードル高くない?」

「いや、別に。それに理事長の話だと8割が今回のA組の平均らしいからな」

「A組流石にバケモンだな……。5英傑が平均を爆上げしてるってものあるんだろうけどさ」

8割と聞いても涼しい顔をしているカルマ以外が苦笑を浮かべる。どうやら、それなりに難しい問題だったらしい。

けどまあ、舐めてるわけじゃないけど問題はないだろう。中学に入ってから、この前倒れるまでの範囲、それから秋頃に習う部分までは何回も復習したし、予習もした。よっぽどがなければ落とさない。そんな自信がある。

そんな俺の自信を感じ取ってか、あるいは単純な興味なのか、カルマが試す様な口調と表情で言う。

「それで? 乃咲くんはどーすんの?」

何をどうするか、そんな明確な問いではないけど、意味は分かった。彼が聞きたいのは俺がE組に戻るのか、戻るつもりがないのか。その部分なんだろう。

「正直、悩んでる。E組に戻りたいのは本心だ。A組で学ぶよりE組にいる方が実りがあるとも思ってる」

「それって悩む要素あるのか……? いや、俺たちとしてはお前が戻って来てくれるなら心強いし、嬉しいけど」

俺の言葉に杉野が苦笑する。確かに彼の言う通り、俺が今言った内容だけを見ると、悩む要素はないと言える。

だが、なんとなく。暗殺教室から離れ、倒れ、今日に至るまでの生活を振り返ってみると思うところがないわけじゃない。

「確かにE組に戻りたいって方向に心が傾いてるのは事実なんだけどさ、思ってたんだ。A組……と言うか、本校舎に残って暗殺に貢献する方法はないのになって」

「本校舎に残って暗殺を……？」

「そう。E組は暗殺に必要な条件が整ってる。いるのは殺せんせーの関係者だけだし、人目につくことはない。でもE組の外は不確定要素が多い。関係ない奴もいるし、人目にもつく」

そう。父さんに好きな様に頑張れと背中を押された今、俺を縛る要素はほぼ無いに等しい。A組にこだわる必要はない。

A組で学べることはほぼない。でも、暗殺という観点から見れば、A組とか本校舎の生徒という立場にも利用価値はある。

「だけどそれは、E組の外ならある意味で殺せんせーが暗殺を警戒しなくて良い条件も揃ってるってことだ。人が行き交う雑踏の中でナイフを振り回したり、例えばエアガンであつても銃を構える奴はいないからな」

「……なるほどネ。そんなに上手くいくとは思えないけど、でも可能性は充分ある。俺らも街中で暗殺なんて仕掛けたことないし、ノーマークかもしれない。乃咲くんが本校舎に残ればそういう隙を作れるかもってことだね？」

「そう言うこと。外部からの暗殺者は接近すら出来ず街に入った途端、殺せんせーにマークされるから暗殺の決行までいかないらしいけど、俺は基本この街にいるから不自然さはない。だからE組外の暗殺者としても動けるだろうし、上手くやれば、修学旅行の時みたいな狙撃作戦もやれるかもしれない」

「凄いや乃咲……。僕、そんなこと考えもしなかった」

「まあ、理想論だけだな。案外、E組の教室で近接戦を仕掛けた方が可能性はあるかもしれないし、修学旅行の時にみたいにあっさり失敗する可能性だって高い。どっちがより有用な作戦なのか。それも重要だな。ただ、E組の事情を知ってる外部協力者ってのは烏間先生に提

案してみるつもりだ」

そう、こうやって並べてみるとE組の外部協力者という選択肢は全然アリだ。自分で言うのもなんだが、俺はそこそこ能力も高い。鳥間先生がロヴロさんに俺を紹介してくれた時の評価を信じるなら、俺は彼に相当買って貰えてるし、記憶消去に関しても、協力者なら気にする必要はないはずだ。手間は省ける。

まあ、もつとも。一度抜けておいてどのツラ下げて提案してるんだ？って俺が鳥間先生の立場なら思うけど。

「……でもさ」

そこまで無言だった倉橋さんが口を開く。

「一番大事なのは、圭ちゃんはどうしたいのか。そこだからね？その方が暗殺成功率が高いから、とか。みんなの役に立てるとかさ。そんなことは考えないで欲しいよ。私は圭ちゃんがやりたいことをやって欲しいかな」

「……まいったなあ」

驚いた。まさか倉橋さんにまでそんなことを言われるとは思わなかった。でも、結局のところ、彼女の言っていることが一番大事なのは間違いないだろう。

俺がどうしたいのか。何をやりたいのか。そこが一番大事というのは今回の件で得た教訓の一つでもある。

「うん。ありがとう。考えてみるよ」

「あ、でも一人で考えすぎるのも良くないからね？行き詰まったら私や磯貝くん、ここにいるみんな。誰でもいいから相談すること！一人で抱え込んで悩んでたら怒るから！」

「はい、気をつけます」

「うむ、よろしい！」

なんだか倉橋さんとこんな風に話すのも随分と久しぶりな気がする。思えば、暗殺肝試し以来かも知れない。それ以降は昔の自分の考え方をなぞってたからか、基本的に素っ気ない態度ばかり取ってたからだな。

「それじゃあ、あんまり長居しても悪いし、帰るね」

「ああ。みんな来てくれてありがとう」

「気にしないで。早く身体治してね」

「なんかあつたら相談しろよ？俺らも暗殺とかでなんかあつたら相談すつからさ」

「あはは、そうね。なんとなくみんな暗殺する時も乃咲の指示がないとちよつと寂しいし」

「乃咲クン、元気になったらファザコンネタでガンガン弄ってあげるからね。早く戻つといで」

「……まあ、この際。腫れ物を扱う様な態度になられるより、弄られた方が俺も楽だけどさ。ほどほどにしてくれると助かる」

出ていくみんなに手を振って見送る。

俺も考えないといけない。A組に残るか、E組に戻るか。

『乃咲さん？考えるのは良いですけど、考えすぎちゃいけないってことと忘れないで下さいね？』

「……………はい、善処します」

すかさず飛んで来た律からの釘に黙って刺されることにした。

?? ?? ??

「乃咲、顔色だいぶ良くなったよな」

「表情も前より柔らかくなったよな。なんつーか、張り詰めてる感じが無くなったわけじゃないけどだいぶ緩んだって感じ」

「倉橋さん、乃咲クンのお見舞いって毎日行くの？」

「へっ!?いや、えつと……………。ま、毎日は圭ちゃんも疲れないかなうっと思うんだよね。それにLINEで聞いた話だと地元の知り合いの病院に転院するって話だったし……………」

「え〜？乃咲は絶対喜ぶと思うけどなく。いざとなつたら殺せんせー辺りに頼めば連れてってくれるんじゃない？」

「それはあるかも。僕、これから暗殺に行くし、お願いできるか聞いてみるよ。マツハ20ならすぐだもんね」

「え？これから殺りに行くのか？んじゃあ、俺も行こうかな。今日は

暇だし。乃咲居なくても触手の一本くらいは破壊できる様になりた
いよな」

「それじゃあ私も行くよ。倉橋さんとカルマくんは？」

「俺も行くかな」

「私も行く。自分のやりたいことだし、自分からお願いするのがス
ジってやつだもんね」

圭一の仲間たちがそんな会話をしながら病室から離れて行く。彼
らにとってはありふれた日常の光景と会話。

だが、それが日常でない者も、ここには出入りしている。例えばそ
れは他の入院している患者だったり、そのお見舞いに来ている者たち
だったり、問診して回る医者や看護師だったり。

「……暗殺？マツハ20？触手？何を言ってるんだアイツらは」

——圭一の見舞いに来た友人だったり。

「しかも圭一が居なくても触手破壊がどうこう言っていたな。加えて
殺せんせー？うちの学校に殺なんて文字が名前に入ってる教師はい
なかった筈だが……。それにE組の教師は烏間と言う担任とAL T
のイリーナとか言う女しかいないはずだ」

タイミングが悪かった。数分早ければこうはならなかった。この
男がE組を取り巻く事情に勘付くことはなかっただろう。

「父さん、E組、圭一。一体、僕に何を隠している？」

A組が誇る、本物の天才は静かに牙を見せた。

番外編 クリスマスの時間

今年もこの季節がやって来た。彼女がいなくなってから15回目の冬。振り返ってみれば、アイツと騒がしく過ごしていた学生の頃もついさっきのことの様に思い出すことができる。

冬独特の冷たい空気を肺で味わい、息を吐き、自室の棚に飾られた3枚の写真をみる。1枚目はまだ幼い息子の写真、2枚目はつい最近撮った息子と自分のツーショット。自分が親となり、そろそろ中年という言葉も相応しくなる年齢に差し掛かり、息子もあと5年で大人になる。それだけの月日が流れた。

3枚目の写真を手に取る。妻との写真は数えるのが億劫になる程度にはある。一枚一枚現像し、アルバムに収めている所為でこの棚の3分の2は彼女との思い出の保管棚と言っても差し支えないことになってしまっている。

それでもたった1枚、この写真を写真立てに収めて飾っていたのは、この日が何故だか印象的だったからだ。

自分と妻が15の年。ちょうど今の息子と同じ歳、同じ学年だった頃に撮ったクリスマスの写真。

頭の中にある圭との思い出に優劣はない。全てが等しく大切な記憶だと言える。それでも、この日の圭はなんだかいつもとは少し違う雰囲気があった様に思う。だからだろうか、この写真を撮った日が特に印象に残っているのは。

私は写真を持ちながら歩き、自分の机の引き出しを開ける。

引き出しの中、自分でも過剰と思える程に几帳面に、そして嚴重で大袈裟なケースの中で20年以上上たった今でも保管し続けている1枚のタロットカードが眠っていた。

?? ?? ??

「新ちゃん、今年のクリスマスはどうする〜?」

「……………どう、とは？」

あまりにもぎつくりとした問い掛けに質問を投げ返す。

放課後、圭の病室で彼女との特に中身の無い会話をしながら本を読んでいると藪から棒に妙な質問が来た。

「ほら、なんて言うの？ 予定って言うかさ……………。今年も一緒に過ごせるのかなくなんて」

「何を当たり前のことを。邪魔でなければお前やおじさんとおばさんと過ごせればと思ってるぞ」

「邪魔なんてことないよ！ お父さんたちも新ちゃんのこと好きだし！ そっか、今年も一緒に居られるんだね、えへへ」

「……………ああ」

嬉しそうに笑う圭。彼女やその家族と過ごしたいのは本心だ。幸いなことに自分の娘につく悪い虫と思われても仕方のない自分だが、彼女の家族は好意的に接してくれる。

圭と俺は小さな頃からの付き合いだ。病弱で周りの子供と遊ぶことができず、孤立していた圭。昔から無愛想で無口で周りの子供に怖がられていた俺。あまりもの同士で一緒にいる様になったのが始まりだった。

激しい運動が出来なくて、遊びまわることができない彼女は、いつしか誰とも遊ぶことなく絵本ばかり読んでいた俺に話しかける様になっていった。もつとも、俺は当時から専ら相槌を打つばかりだったのだが。

彼女はそれでも話しかけて来た。最初は子供心に鬱陶しいと思っていたし、当時は周りに馴染めずオドオドしていた態度もあまり好きではなかった。そもそもが乃咲新一という人間は当時から他人が嫌いだった。

顔と態度の割に器量が矮小な親父、そんな親父の言いなりでアイツの言葉をオウムのように俺たちに向けることを教育だと勘違いしている母親、そんな2人に甘やかされた自尊心と自己肯定感が異常に強くて無駄に才覚溢れる嫌味で生意気な弟。

父は世間的に見れば確かに偉大だった。それなりに大きかった会

社の社長なのだから社会的に立場ある人間であるとも言えた。自分は、そんな父の子供に相応しい姿を期待されて子供の頃から過剰と思えるほど厳しく育てられた。

物心ついた頃には既に読み書きの練習をさせられていた。字を読み間違えたら鞭で打たれ、書き順を間違えたら罵倒され、箸の持ち方がおかしければ食事を抜かれ、何か父の気に障れば納屋に閉じ込められた。

叩かれたくなくて、叱られたくなくて、腹が減るのが嫌で、暗くて怖い納屋で過ごすのが怖くて、子供ながらに必死に勉強した。泣きながら死に物狂いで。

そんな努力が報われたかと問われれば否であった。頑張って読み書きを覚えても、礼儀を学んでも、父から飛んで来たのは叱責だった。恥ずかしくない様にしろ、長男のお前は我が家の顔なのだから泥を塗る様な真似はするな。そんな言葉ばかりで家族に褒められたことはない。父からも母からも。

家の外では褒められることは多かった。天才、鬼才、挙句に神童扱いされることすらあった。だが、結局のところ誉められていたのは『柳沢さんの所の長男』としてである。自分のことを褒めてる様に見せかけて彼らが褒めていたのは、親の驍、だったことを俺は知っていた。その驍に出来る様に頑張ったのは俺なのに。

どこに行っても自分は『柳沢さんの長男』でしかなく、周りもそう言う風に扱った。子供の輪から孤立していたのも、自分の気質はもちろんだが、誰が言い出した社長の息子に何かしたら酷いことされるゝみたいな噂の影響もゼロではないだろう。

そして当時の俺は子供ながらに周りを見下していた。

受けた教育で無駄に知恵があった故か、馬鹿騒ぎする周りを冷やかに見て、自分はあるなりにガキじゃないと強がり、勉強するフリをしていれば大人も周りのガキも寄ってこない事に気付いてからは一人で本を読む様になっていた。

圭と出会い、話しかけられる様になったのはちょうど頃。

本を読んでいれば誰も寄ってこない事に気付いてからは幼稚園は

居心地が良かった。叩かれることも、罵倒されることもない。気が抜けて、楽で居られる時間だった。

そんな時間に割り込んでくる圭は当時の俺にとっては当然異物で、邪魔で鬱陶しかった。

だから、邪険にした。たまに話しかけてくる奴もいたが、特に返事もせず相槌を返していれば大体の奴がもう話しかけてこなくなつたので同じことを圭にもしてやった。

だと言うのに、圭は毎日毎日話しかけて来た。

自信なさそうに、おどおどしながら。話題は俺が読んでいる絵本だったり、当時やってたアニメだったり。様々。最初は全て聞き流していたが、毎日となつてくると嫌でも耳に入る様になる。それも自分が今読んでる絵本とかの内容だったら尚のこと。

ある日、自分が読んでる本について彼女が話してる時、話してる内容が妙に本の内容と違っていたので思わず口を開いた。

思えば、あれが圭との初めての会話だった。

やつと会話が成立したことが嬉しかったのか、圭は笑った。普段自信なさそうにおどおどしてる癖に、間違っていると訂正された癖に、何故か笑って見せた。

それが不思議だった。俺とて初めから友達を作ろうとしなかったわけじゃない。話しかけられれば答えたし、話しかけようとしたこともあった。でも、話せる話題に差があり過ぎた。

自分は幼稚園の本なら全部読むことが出来たし、簡単な四則計算も出来た。対して周りはひらがなやカタカナを読めれば上等といった所。自分で言うのもなんだが、レベルが違った。

当時、自分が基準だった俺にとつて、自分が当たり前に出来ることが出来ない周りのことを理解出来なかつたし、周りも自分の基準では何を言ってるのか分かりにくい俺のことを当然のことながら理解なんて出来なかつた。

アイツと話しても難しいことばかりで面白くないし、楽しくないから、新一抜きで遊ぼうぜくと言う様になる周り。

自分にできることが出来ない癖に〇〇ごっここと称して騒ぎ、暴れ、

はしゃぐ周りのことを見下す様になった俺。

周りの環境と自分の気質の所為で孤立していた俺と話して笑ってくれた同い年の子供は圭が初めてだった。

「あ、そうそう！お医者さんがね、今は安定してるから家に帰るだけじゃなくてちよつとくらいならお出かけしても良いって言ってくれたんだよ？新ちゃんはどっか行きたい所ある？」

「……………特には。別にこの辺も遊べる場所が多いわけじゃない。特別何か出来るわけでもなし。お前と一緒にならそれでいい」

「むう…………。そう言うことなら遠慮なくあつちこつちに引っ張り回しちゃうもんね。行きたいところ、沢山あるし！」

「……………そうか」

こうして笑う圭はあの頃に比べて性格が随分と強かになった。

あの日から圭の話を聞いては相槌を返し、間違っていたり、ツッコミどころがあると言葉を返す様になり、圭となら会話が成立するようになった。いや、成立すると気がついたと言うべきか。思えばもっと早く気づけたはずなんだが。

当時俺が読んでいた本は、クラスに置いてあった物。しかしまだ読み聞かせなんかはされてない本だった。その内容を知っているとすることは、圭も字が読めるんじゃないのかと。

聞いてみると、体が動かせない分、本を読む様になったから、読み書きはできるらしかった。

嬉しかったのだろう。自分と話が合う相手がいたことが。

それからは、圭のことを鬱陶しく感じることは無くなった。聞き流していた話も聞くようになり、相槌もはつきりしたものに換え、たまにこつちからも話題を振ることが増えた。

彼女もいつしか自信のなさそうな空気が薄れてゆき、話す時の笑顔が増え、いつの間にかいつも楽しそうに笑う様になった。

今の圭の天真爛漫さが生来の気質で、病弱さ故に弱々しく育ったこととでなりを潜めていたのか、俺と話す様になって変わっていった結果なのかは分からない。だが、小学校に上がる頃には俺の日常には圭がいるのが当たり前になっていた。

体調を崩しがちで、学校も同じだけ休んだりもしていたが、病弱さを感じさせない明るさで圭はクラスの人気者だった。

この頃には既に彼女の家族とも付き合いがあった。幼稚園の頃、遊びに来て欲しいとせがまれて初めて行った彼女の家。そこで挨拶したのが初対面だった。

挨拶して、初めての友達だと紹介された時、涙ぐんだのが印象的だったのを今でもよく覚えている。

「そういえば、さつきから出かけるのを決定事項みたいと言ってるが、おじさん達は良いのか？せつかく娘が元気なクリスマスだ。一緒に出かけたのだろうか？」

「私の好きにして良いってさ。それに新ちゃんがいるなら安心だって言ってくれたし、問題ナツシング！」

「……なら、俺もこの辺で楽しそうなところを調べてみるよ」「ほんと!?楽しみにしてるね!」

笑う彼女を見ながら、思い直す。おじさんとおばさんに託された以上、適当に過ごすというのも申し訳ない。気合いの入ったプランでも拵えるとするか。

俺が世間でいう不良にならなかったのは、彼女とその両親の影響が強いだろう。彼らは実の親の様に俺のことを褒めてくれた。俺の境遇を知ってか知らずか、彼女たち乃咲家だけが、俺を『柳沢の長男』ではなく、ただの新一として扱ってくれた。俺の努力を当たり前とはせず、認めてくれた。それが嬉しかった。

「あ。ところで、新ちゃんの方の家族はいいの？おじさんたちや、誇太郎くん。また怒られたりしないかな……？私は新ちゃんが居てくれるの凄く嬉しいけど、でも、私のために新ちゃんが嫌な思いするのは嫌だなんて……」

「問題ない。この前、お前と決行した作戦が上手くいっているから、世間体を気にするアイツらがこれ以上俺たちのことをとやかく言うことは当分の間はないだろう」

「あ。あれね、上手くいったならよかった。新ちゃんには嫌な思いもさせちゃったと思うけど」

「まあ、いい気分はしなかったが、アイツらの手を封じられたと言うだけでお釣りが来る。なにより、周りに応援されるのは気分がいいからな。誇太郎の奴は……まあ、どうでもいい」

「……まあ、いつも新ちゃんのこと馬鹿にしてくるもんね」

俺と家族の仲も相変わらず劣悪だった。

確かに世間的に見れば俺は優秀な跡取り息子なのだろうが、家族の間ではそうじゃない。むしろ、言うことを聞かない跳ね返りと思われていないだろう。

現に、俺のことは教育失敗とでもみなしているのだろう。弟の誇太郎は俺の時とは対照的な育て方をされていた。俺にはしなかった癖に、両親はアイツを褒めまくったし、殴りも罵倒もしなかった。俺を反面教師として吹き込み、存分に甘やかした。

結果的に誇太郎は自己肯定感と自尊心の塊の様に育ち、俺を見下しては生意気な口調や態度を取るようになった。

これに対しては大した感情はなかった。好きでもないし、嫌いでもない。かと言って極端に無関心な訳でもない。平たく言えば、同じ親の極端な教育を受けた被害者でしかなかった。ただ、能力的には自分に勝るとも劣らない程度には優秀なので、そんなに甘やかして育てたなら、跳ねつ返りの長男ではなく、コイツに会社継がせればいいじゃんとは思ったが。

「ま、そうだね。もうちょっと周りのことを考えられればいい子だと思っただけ……。頭も良いし」

「アレには期待するだけ無駄だろう。親の教育が悪すぎる」

「んー……。まあ、確かにね」

「だが、あの子の奴らの顔と言ったら……」

少し前の出来事を思い出して思わず笑う。

圭が計画した、俺の両親に対する反撃。

俺と圭はあの間にか一緒にいるのが当たり前になり、それが互いに好意に変わり、気が付けば友達以上恋人未満の様な関係になっていた。そして、その関係を少し前に終わらせて、晴れて恋人同士になったのだが……。

俺たちの告白は街中で人々の視線を集めた中で行った。それがうちの両親に対する反撃だった。

世間体をやたらと気にする家族には、昔から圭との交友をよく思われていなかった。だから、ことあるごとにまだ付き合っても居ないのに別れるとか、交友を断てとか散々言われた。

それがとにかく不愉快だったが、圭はそんな世間体を気にする俺の両親の気質を逆手にとった。

世間体を気にするのなら、逆に街中で大々的にプロポーズ染みた告白を俺からして、それを圭本人も大袈裟に受けてしまえば、俺と圭の関係は周囲に認知され、逆に過剰な干渉はなくなっていくだろうと彼女は読んだ。

まあ、結果として読みは怖いほどの確信的を射っていたらしく、恋愛ドラマさながらの告白劇を繰り広げた俺たちは街公認のカップルとなり、『柳沢さんの所の長男は、身体の弱い幼馴染を一生守るとプロポーズしたらしい』と噂が流れ始め、昔から俺たちの関係を見守っていた周囲は祝福ムードを出してくれた。

世間に広がった噂、それが事実という確証と無数の証言者、街の人々からの認知。圭は親父を絡め取って見せた。

街の中での俺は自分で言うのもなんだが、有名人だった。柳沢社長の長男というブランドは幼い頃から俺を好奇の視線に晒し続けたから。そして、そんな俺と特に親しい病弱な少女というキャラ付けで圭もまた同様だった。

そんな俺たちの繰り広げた恋愛劇を周囲が注目しないわけがなく、家族が諸々のことを察知した頃には噂を握り潰すことが不可能なレベルで話が広がり、世間体を気にするアイツらは表面上、覚悟を決めた息子の背中を押すというスタンスを取らざるを得なくなったのだ。プルプルと震えながら。

「いや、本当に痛快だった。くくく……」

「まあ、私としては新ちゃんがそうやって笑ってくれるならなんでも良いんだけどね」

苦笑する圭。もともと天然気味なところがあつたり、彼女は明るい

性格になりはしたが、時々やたらとドライというか、リアリズムなことを言い出すことがあったり、相手のことを分析して行動を読んで陥れたり出来るほどには頭の回転が速い。

自分の恋人ながら最も敵に回したくないタイプだ。

「そういう笑い顔、もつと色んな人に見せた方がいいと思うんだけどなあ……。物知りで、話してて面白いのにぶきつちよな所為であんまり友達いないじゃん？」

「そんなことはない。周りと話す共通の話題がないだけだ。やろうと思えば友達くらい作れる……。たぶん」

「えく？じゃ、試しに私のことただのクラスメイトだと思って何か頑張ってみてよ」

「……………圭。今日はいい天気だな」

「天気の話?!しかも雪降ってるけどね」

「雪と言えば知っているか?世界の積雪量の世界記録は日本が持っているんだ。1927年に伊吹山で観測された11.82mが最高記録なんだとか。他にも日本は世界トップレベルの降雪国でもある。ちなみに降雪量は札幌市よりも青森市の方が高くて、この2つの街の降雪量には約3mの差が——」

「わかった、わかったから!普通に『へへ』ってなる話だったけど、あんまり接点のないクラスメイトにそんな話しても驚かれるだけだと思っようよ!」

ツツコミを入れてくる彼女は元気そうだ。

彼女の元気の具合はぱっと見の様子とツツコミのキレである程度推察できるから分かりやすい。

「とまあ、俺の交友関係は置いておくとして」

「はあ……。なんとというか、新ちゃんが誰かに盗られることがないってことかもだけど、好きな人が周りに見向きもされないのもそれはそれで複雑だよ……………」

「別にいいだろう……………面倒だし」

「そこー本音漏れてるからね!?!駄目だよ、いつまでも対人関係を面倒くさがってちゃー!」

「……………善処する」

「ほんとに大丈夫かな……」

全力で不安そうな顔をする圭。

流石に心外であった。

??

??

??

『……雪、降ってるな』

「だね、ホワイトクリスマスだよ！」

『そうだな。それで、本当に迎えに行かなくていいのか?』

「ふっふっふ、甘いよ新ちゃん、せっかくのデートだよ?」「ごめん、待った?」「大丈夫、今来た所だよ」ってのをやろうよ!これぞ古来から伝わる古き良きデートの導入!」

『古き良き、あるいはありふれたとも言う』

「ほら、そんなネガティブしないの!」

『……分かった。そう言うことなら駅前で待ってる』

「うん!あ、でも早く着きすぎるのは禁止ね?」

『分かった分かった。なんかあったら電話してこい』

「りよーかい!」

新ちやんと電話を切る。

ここ最近は何調が良い。お医者さんからは長く生きられないと言われてはいるけど、今のところは大丈夫。

倒れたりすることもあるけど、そう言う時の感覚は分かっている。ここ数日はそう言う感覚はないし、そういう日は大体朝から体調が悪いから今日のところは心配はなさそう。

実を言うとあんな会話したけど、新ちやんと待ち合わせするのは初めてじゃない。むしろなんだかんだで彼を我儘に突き合わせて、デートする時は待ち合わせをすることの方が多い。

まあ、そう言う時は決まって彼はかなり早めに待ち合わせ場所にスタンバってたりするんだけど……。

「今日くらいは私が先に待ってて驚かせてみようかな」

口に出す。うん、そうしよう。

無理するなとか、あとから怒られそうだけど、厚着して、喫茶店かなんかの中で待ってれば小言は少なく済まそうかな？

「行ってきまーす」

「はい、行ってらっしゃい。新ちゃんによろしくね」

「はいー」

お母さんの言葉を背中を受けて家を出る。

確かに雪は降ってるけど、積もってはいない。道路の様子も特に凍結してる感じはないし、転ぶ心配はなさそうかな。

そんなことを確認しながら駅前に向かって歩き出す。

ここから駅前まで歩いて5分くらい。ちなみに新ちゃんの家も大体同じくらいの距離。もしかしたら、これが歩いて10分くらいだったら強制的に彼が迎えに来たりしたのかも。

「ちよつと過保護なんだよね〜」

別にそれが嫌なわけじゃない。大切にされていて嬉しくないわけがない。でも、申し訳なく思うことはある。

口下手で、不器用で、基本的に寡黙な彼の優しさは私が一番知ってる。家族や周囲の期待に応えようとして直向きに努力してることだって知ってる。家にいる時はいつも家族に干渉されて好きなことができなくて、学校ではそんな暇もなくて、空いてる時間はいつも私に使ってくれる。

やりたいことだってあるはずなのに、数少ない時間を私に使ってくれるのが嬉しいけど、同時に申し訳なかった。

時々思う。彼は私と一緒にいるのが一番やりたいことだと言うけど、私を抜きにしたら何が一番やりたいんだろう？

もしも、私と出会わなかったら何をしてた人なんだろう？そんなことをついつい1人になると考えてしまう。

彼は頭が良い。時々ズレてると言うか、天然というか、明後日の方を向いてることがあるけど、基本的には私を知る中では一番能力が高い人。成績は常に最高評価で、身体能力も抜群。

きつと、家のことがなかったら、私と会うことがなかったら、自分

のなりたいたいと思ったモノになれるだけのチカラがある人。

時々思う。私は彼を縛ってるんじゃないのかって。

「……………ん？おや、そのあなた」

「……………はあ……………」

「おや、聞こえてないのかい。その銀髪の女の子」

「……………え、へ？私!？」

楽しかった雰囲気少し冷めて、思わずとぼとぼ歩いていると、初老を迎えた頃といった具合の女性が私を見ていた。

気が付けば駅前。その騒がしい人々の喧騒から僅かに距離を取る様にひっそりとビルとビルの間小さな路地の前にその人はいた。優しいような雰囲気私に微笑み、手招きしていた。

ちよつと不審だ。でも、悪意は感じられない。

新ちゃんはお金に困らないと言う意味では恵まれているけど、家族関係は恵まれてるとは言えなかった。彼の家族が向ける彼への悪意の様なモノを昔から見ていた私はほんの少しだけ周りよりそう言うのに敏感だった。

だからかな？一瞬は警戒したけど、悪意も害意もないことは直ぐに分かり、躊躇いながらもその人の所に歩いた。

「ふむ……………」

中年の女性は目の前に来た私の目を覗き込む様に合わせて、何かを考える様に腕を組み、少しの沈黙の後、告げた。

「あんた……………長くないね」

「えっ……………う？」

躊躇いがちに言われた一言に思わず身を固くする。

そんなことを言われたのはお医者さんを除いたらこの人が初めてだった。私の家族や新ちゃんくらいしかそのことは知らない。新ちゃん以外に話したことはない。初対面でこんな風に言い当てられたのは初めてだった。

「どうして分かるんですか……………？」

「あたしは少し占いを嗜んでいてねえ。なんとなくそう言うのが見えちまうのさ。ここで街を行き交う人々を眺めて、色んな運命を辿る人

を見て、気になった相手に声を掛けてるのさ」

「そ、そうなんですか?」

「ああ……。声までは掛けなかったが、ついさつきもかなり拗れた運命をもった人が居たよ」

少しだけ胡散臭い。でも、実際に私のことを言い当てたり、こうやって正面で話しているのに目を逸らさず、真っ直ぐに私の目の奥を覗き込んでくる。目の動き、息遣い、体の揺れ。どれも嘘をついてる人のそれではない。

「折角だ。こうやって声を掛けたのも何かの縁。うちで見えていかないかい?」

「……………お金、ありませんよ?」

「別に占い師は本業じゃないさ。趣味の延長みたいなもんだからね。お金は要らないよ。急に呼び止めて、長く生きられないとか失礼なことを言ってしまったお詫びさ」

言ってることは怪しいマルチ商法のセミナー勧誘のそれに近い。でも、少し興味がある。

私は占いに熱心って訳じゃない。雑誌の占いも、テレビの星座占いも、自分にとって都合が良いことが書いてれば信じる程度だ。まあ、一時期バカみたいになっちゃうとの相性を占まくっていた時期がなかった訳じゃないけど。

「……………じゃあ、お願いして良いですか?」

でも、興味があつた。いきなり私のことを当てたこの人には何が見えてるのか。それが見たくなつた。

待ち合わせまで1時間はある。少しくらいなら大丈夫でしょ。

領いた女性は路地の裏に入る。その道の狭さ、暗さは不安だったけど、声を出せば人には聞こえる程度の距離しかない。だから黙って着いて行った。

ちよつと進んで曲がった所に小さなテントがあつた。三角屋根の少し天井が高いテント。キャンプとかで使う奴のかなり上等なバージョンというか。路地裏には少し似つかわしくない。

「良いだろう? 秘密基地みたいで」

「まあ、そう言われると確かに……………」

そう言われるとピンと来る。確かにそれっぽい。

秘密基地か。昔、うちに遊びに来た新ちゃんにせがんで作ってもらったつけ。耐震構造ガツチガチなダンボール製の小屋が出来た時はうちの両親も少し引いてたけど。

「それじゃあ、中にいらっしやい」

「……………お邪魔します」

一言告げて中へ。中は外観以上に広く、簡単なテーブルが一つと椅子が二脚。それっぽく置かれてる水晶玉が印象的だった。

「その椅子に座って。さて、何で占おうか……………」

「どんなのが出来るんですか?」

「そうだねえ…………。分かりやすい所だとタロットとか」

「ああ、あのカード引く奴ですね?なんとなく占いつてこう、棒みたいなのをじゃらじゃらして『こんなの出ました!』的なのか、水晶玉で『見えます、見えますよ』的なもののイメージがあったので。どんな違いが?」

「まあ、伝えやすさの問題さね。水晶覗き込んで、こんなの見えますよとか言っても胡散臭いだろう?これだってカッコつけるために置いてるだけだし。その分、タロットは相手にカードを引かせて、そのカードの意味を教えるって手法だから自分も占いに参加している分、説得力があるんだよ」

確かに、目の前で水晶玉覗き込まれるより、そっちの方が興味というか、自分で引いてる分、本当に占われてる感はあるか。

「じゃあ、タロットでお願いできますか?」

「いいよ、何に書いて占う?予め説明しておくど、タロットってのは近い未来を占うのに優れた占いだけど」

「…………私の、彼について」

「おや?自分自身じゃなくて良いのかい?まあ、いいか。お試しとして一度やってみる分には。さて、いくよ」

頷くと目にも止まらない速さで、それでいて丁寧にカードがシャッフルされていく。少し経ったあと、カードの山を3つに分割して、好

きな順番で重ね直して。自分の占いたいことを思い描きながらね。と指示が来たので従う。

「はい、これで準備は完了。さ、カードを一枚引いてみな。深く考えることなく、直感に従って」

「……………じゃあ、これで」

言われた通りにカードを引く。占い師はそれを捲ると、彼女は口元をニヤリと歪め、大袈裟に言った。

「運命の輪の正位置。何かいい事あるよ。これは望んでいたチャンスが訪れたり、当人にとって嬉しい話が舞い込んできたりするのを暗示しているカードだ」

「……………そうですか、よかった」

所詮は占い。確証のない戯言というか、それっぽいことを言っ自分分にはまるだけのバーナム効果だ。

けれど、さつきまで何気なく考えていたことをこうして否定されると安心する。なんとなく救われた気がする。彼は今後、何かのチャンスを得る。それがどんなことなのか分からないけど、新ちゃんにとつて嬉しいことなら、私も嬉しい。

「他にも知りたいことはあるかい？」

「うーん……………。確かに気になることはあるけど、どれも漠然とし過ぎていて、言葉にするのが難しいです」

「なら、こうしよう。アンタの周りに関することを見て見る。色々と口に出していくから、気にもものがあつたら言っておくれ」

「お……………。確かにそれなら直感的に選べるかも」

「良いみたいだね？なら始めようか……………」

そう言っさつき自分で飾りだと言った水晶を覗き込む。

ちよつと面食らつたが、私もだいたい単純らしい。タロットをやる前にこれを見たらちよつと気が引けただろうけど、自分の欲しかった言葉が貰えて気を許したのか、別に悪い気はしなかった。

「進学、出会い、卒業、絶縁、結婚、進学、手術、出産……………」

「しゅ、出産!？」

「おや、そこが気になるかい？」

「いや、絶縁とか、結婚とか、手術とか色々気になるけど！え、えっ!? 出産!? 私が!」

思いつきり予想外な単語が出て驚いた。

ほんと、気になることはたくさんある。進学と出会はまだ良い。高校に入ってから友達ができると想像できる。でも、卒業して、その後の絶縁ってなに!? いや、そもそも絶縁の後の結婚って!? しかも進学前!? 高校卒業して大学進学までに結婚するってこと!?! しかも出産って…………。

だめ。頭が一瞬でフリーズした。

「まあ、順を追って話そうか。アンタが気になってるのは卒業した後からだろうから、まずは絶縁から話そう。えっと、アンタ、かなり長い付き合いの彼氏がいるね?」

「は、はいっ」

「その子、家族と良い関係じゃないだろ?」

「……………はい」

すごい、あつてる。えっ、これもバーナム効果?

「自分の家族と絶縁するみたい。色々溜め込んでる部分があるんだろうけど、1番の理由はアンタと一緒にいる為ね」
「……………」

彼が自分の家を棄てる。それは、想定していた未来だ。

でも、その動機の一つに自分がいる。それが嬉しい様で、少しだけ悲しい。確かに柳沢の人たちはあんまり好きじゃない。でも、それでも新ちゃんにとっては家族であることに変わりなくて。彼が彼らを棄てるのがやっぱり悲しいかな。

「まあ、でも気にすることはない。その子はそれで吹っ切れる。ようやくしがらみから解放されて自由になれたんだ」

「……………そうなんですな」

「ああ。それで吹っ切れた勢いで突っ走るみたいね。んじゃあ、お待ちかねの結婚について話そうか」

「い、い、い……………」

一旦頭を切り替えて話に耳を再度傾ける。

「結論から言うと、実家に絶縁状を叩き付けたその脚でアンタと一緒に
なるみたい。事実婚って奴かね」

「おお……。新ちゃんってば大胆……!」

「ふふふ、果たして大胆なのは彼氏なのか、アンタなのか……。どっち
なのかねえ」

「えっ!? それどういう意味ですか!」

「それは内緒。実際にその時が来たら分かるさ。あくまで占いだから
ねえ。実際にどうなるかは今後のアンタ次第だ」

「うう……」

聞きたい。めちゃくちや聞きたい。どんな風に結婚するんだろう
? 私がプロポーズされるのか、それとも我慢できなくなった私がある
これしちやった結果、責任取ることになるとか……!?

「さて次は進学と手術だけだ」

「そこは別にあまり気にならないかも……」

大学については今のところはあんまり考えてない。でも、進学し
たつてことは何かやりたいことが出来たつてことだろう。手術に関
しては……うん、一番容易に想像できる。

「………なら、出産のことについてかね」

「そう、それですよ! 出産ってなに!」

そう、そこである。一番気になるところ。

そりゃあ好きな人が居て、付き合つてて、このままいけば結婚でき
るかもしれない。そうなれば入ることして、子供ができるつて言う
のは自然な流れだと思う。でも、それでも一番想像できないのがそれ
でもある。

「まあ、読んで字の如くだよね。彼氏くとやることやって、出来
ちやつたと」

「説明が一番雑!」

「そらそうよ。何が悲しくて歳下のバカップルのイチヤイチャを占つ
てまで実況しなきゃいけないのか」

「ええ……」

言い分が酷い。気持ち分からないではないけど、やっぱり気にな

るものは気になるの……。

「じゃ、じゃあ、私たち家族は上手く付き合ってるの?」

気になって問い掛ける。なんとなく、自分の子供というのが想像できなくて、なんとなく、新ちゃんがどんなお父さんしてるのか気になって、深く考えることなく聞いてしまった。

「……………」

そう、聞いたのではなく、聞いてしまったのだ。

私の何気ない問いかけに対する返答はない。まるで言葉を選ぶ様に、予想してなかった方向から殴られたみたいに、占い師は目を見開いて、何かを言うべく口を開こうとして、閉口する。

その態度で分かってしまった。

「……………そっか、私はそこに居ないんだね」

「……………そうね」

私の言葉に彼女は神妙に頷いた。

たぶん、長く生きられないと言われ続けた私だから気付けたし、受け入れられた。ついさつき、この人も言っていた。長くはないと。そりゃあこんな顔にもなるか。すごく申し訳なさそうな顔。自分の発言に後悔している様な表情。

「迂闊だったね。嫌な想いをさせてしまった。ごめんよ」

「気にしないでください。むしろ、断片的にでも、未来を想像できて良かったです。少なくとも、私は好きな人と結婚して、子供も作れるんでしょう?それに大学にまで進学出来るくらいには生きられるかもしれないのが分かったから」

そう、それだけでもありがたい。

私がいつか居なくなっても新ちゃんは独りじゃない。

そんな未来を垣間見ただけで嬉しいのだ。

「さつきのタロットの占いで彼や私の子供の未来って占えたりできますか?」

「できなくはないけど、タロットはちよつと先の未来を占う分には手にしてるけど、かなり先のことを見るのには向いてないよ?とても曖昧なことしか言えなくなる」

「構いません。やってくれませんか？」

「……………分かったよ、やってみよう。何を占う？」

「……………新ちゃんの子供の関係、子供がどんな環境にいるのか、その子の将来に希望があるのか、占ってください」

占い師は頷いて、さつきと同じ様にカードを準備する。

促されて、直感的に選ぶ。占い師がまくったカードに描かれていたのは、馬に乗った骸骨の騎士。

「……………死神の正位置」

「意味は……………？」

「解釈によつて分かれる。でも、あまり良い意味はないね。どれ……………」
カードから水晶に視線を移して顔を顰める。

「うーん。すれ違つてるのかね？あなたの彼、良い家族関係ではな
いって言つてたでしょ？加えて……………この未来に貴女の姿はない。自
分なりに息子のために動こうとして、それが裏目に出てる」

「……………それでも、彼は子供を思つてるんだよね？」

「それは間違いないよ。完全な空回りだね。親子そろつて不器用みた
いだよ。お父さんほど口下手ではないんだろうけど、お子さん、性格
的にはお父さんに似たんだろうね」

「……………あゝ、確かにそれはすれ違いそう」

新ちゃんが2人。口下手で、こつちから話題を振らないと会話に発
展しないし、困ったら天気の話する人だよ？それが2人とか、絶対に
会話にならない。きっかけがあれば普通に話せるだろうけど、そんな
空気になるまで絶対に気まずい雰囲気になる。

「じゃ、次行こうか。子供の環境について」

カードを戻して、同じ動作をする。

言われた通りにまたカードを引いた。

「……………また死神」

「それも正位置だ。死神に好かれてるね、お子さん」

「…………………………どんな未来が？」

「……………そうだね。周りとの関係が上手くいかないみたいだ。こつち
もすれ違つてるね。自分と周りの考えの違いに悩んでる。具体的な

悩みは分からないけど」

「……たぶん、彼と同じことに悩むのかな。もしも性格が似てるなら、そう言うこともあるかもしれない」

「ここまでの占いはポロポロだ。」

きつとこの人は詐欺師でもペテン師でもない。しっかりと私の周りのことを占ってくれてる。

だからこそ、今度は不安になる。

「……なにか、覆す方法はないんですか？」

「さてね……。いまのままでは何とも言えない。それを決めるのは、最後の子供の将来についてを占ってからでも遅くないんじゃないかい？」

「………分かりました」

その言葉に頷いて、また繰り返す。

ただ、今度は半ば祈る様にカードを引いた。目を瞑り、カードがある方に手を伸ばし、触れたものをゆっくりと引いた。

「………捲るよ」

その声と同時に目を開ける。

彼女がめくったカードに描かれていたのは、死神だった。

3枚目の死神。違っていたのは向きだけだ。絵柄とDeathという文字が逆さになっている程度の違いしかない。

「………どうやら、対策は必要なさそうだね」

「え？」

「見てみなさい、カードがさっきのとは逆向きだろう？」

確かにカードは逆向きだ。でも、それに何の意味がある？

「タロットにはカードそれぞれに意味があって、解釈がある。その意味も解釈も大体は似た様なものだ。でもね、意味が文字通り180度変わることがあるのさ」

「180度……？」

言われてもう一度カードを見る。

そこには確かにさっきとは180度違う向きの死神が居た。

「これを逆位置と言うんだけどね。これは正位置の持つ意味とは逆の

意味を持つとき。正位置が良い意味なら逆位置は悪い意味、そして悪い意味が正位置なら、逆位置は良い意味を持つ」

「……つまり？」

「アンタの子供の将来は明るいよ」

「よ、良かった……」

というか、中学生なのになんで将来の子供の未来なんて心配してるんだろうね、私は。せめてあと5年後に考えても遅くはないだろうに。なんか、自分にびっくり。

「確かに死神の正位置が2枚出たのは事実だし、前途多難なのは間違いないかもしれない。けど、それは希望がある未来を掴むための試練だった……そう考えるのも良いんじゃないかい？」

彼女がそんなことを言う。

「……でも、せつかくならずつと幸せであつて欲しい」

「それは正しい願いだろうけどね。でも、この苦労があつたから、良い未来がある。苦労したから、選べる選択肢が多くて、より遠い未来を見通せる。逆に言えば、何か欠けるだけでもこの未来に到達しないかもしれないんだよ？」

「……それは……」

言いたいことは何となく分かる。

「ま、あくまで占いは占いさね。確定された未来ではないし、これに関しては精度も保障できないからね。嫌な所からは一旦目を背けて、未来は明るいかも！って信じるのが良いさ」

「それも……そうですね」

頷いた。もともと、そう言う風に考えてたじゃないか。占いは自分に都合のいい所だけ信じればいい。

まあ、不安なのは確かだけどね。

「……このカード。良かったら持つて行きな」

「いいんですか……？」

「まあ、何かの縁さ。験担ぎとも言うね」

「え、ええ……？」

差し出された死神のカードに困惑。

「ま、なんか不安なことがあればそのカードを逆さにして、希望はあるかもしれないってことを思い出しな」

「あ……………」

何となく、この人の言いたいことがわかった。

この人は、私が居なくなつた後も、希望はあるんだと伝えようとしてくれていたのかもしれない。

「……………ありがとうございます」

「気にしないでいいさ。精々長生きしな、さつきはああ言ったけど、長生きするにこしたことはないからね。アンタ自身の為にも、いずれ生まれる子供の為にも」

「……………はい、頑張りますー!」

気がつけば、時間が迫っていた。

さつき通つた道を逆走して、駅前に出る。占い師の人は私を見送りに来てくれた。何となく、地面がさつきより白んでる。

白んだ道の先、彼がいた。

空を見上げて、背伸びしたブラツクの缶コーヒーを片手に遠くを見つめていた。しかし、私が視線を向けていると、不意に顔を落とし、顔がこつちを向いた。

ゆつくりと立ち上がって、歩いてくる。

「おや、あの子が彼氏かい?」

「そうです。貴女にはどう見えますか?」

「……………実直だね。と言うか、あの子だよ。さつき、拗れた運命の子を見たって言つたら?それが彼さ」

「……………えええ……………」

「ま、でも、悪いだけじゃないさ。彼は間違いなくアンタを大事にしてくれるよ。絶対にね。もしかすると拗れてるのはアンタとあの子の子供の方なのかもねえ……………」

「私たちの子供、どんな運命してるの!?!」

思わずツツコミを入れる。

良い未来しか信じないのは決めたけど、でも、やっぱり不安なものは不安だった。

「それじゃあ、ありがとうございます」

「うん、それじゃあね」

頭を下げて、彼の方に駆け寄る。

『危ないから走るなよ』と静止の音がする。過保護ではあるけど、やっぱりこっちの方が彼らしい。

もしかすると、この過保護な性格が子供にも向けられた結果、色々とすれ違いが起きるんじゃないのかな？

そんなことを思いながら、彼の腕に飛び付く。

——アンタ自身の為にも、いずれ生まれる子供の為にも。

なんとなく、察してしまった。

私は、子供と過ごせないんだね。

?? ?? ??

「悪いな、少し遅くなった」

「そんなことないよ？むしろ待たせてごめん。占いやって貰ってたらこんな時間になってたよ」

「……占い？珍しいな、いつもなら所詮はバーナム効果とか考えてそうなのに」

「さっすが新ちゃん！私のこと分かってる〜！」

圭と合流して街中を歩く。大体の人にはニヤニヤとした視線を向けられるが、もう気にしない。諦めた。

「……………ねえ、新ちゃん」

「ん？」

「将来の夢ってある？」

「……………いや」

彼女の質問。少し考えて、はぐらかす。

将来の夢ならある。そんなもの、彼女が短命だと知った瞬間から決めていた。彼女を治すこと、長生きさせること。

けど、それを話すにはまだ早い。今の俺には知識がない。実力もな

い。実績もない。今の俺がそんなことを言っても、説得力がない。きつと、素直に答えれば彼女は喜んでくれるだろう。

でも、喜ばせるだけなら誰にでも出来る。そんなことに意味はない。彼女を治す。元気に長生きさせる。それは自分にしか出来ないんだと、言い切れる日が来たら、その時に語ろう。

口にするのは、実行する時だけでいい。

コーヒーに口をつけながら質問を返す。

「そう言うお前は？」

「うーん……。お母さん？」

「ぶふつつつ……。!?」

「わっ!?新ちゃん大丈夫!!」

コーヒーを思わず吹き出した。

予想斜め上の答えに動揺する。

「……。お、おまつ、こんな所でなにを!」

「え〜?言うて人生の三分の二は一緒に生きてるんだよ?そろそろ恋人らしいことしてもいいんじゃないかなーって」

「ステップアップしすぎだろ……。!そう言うのはもつと手順を踏んでから……。!」

「へっへっへ、良いではないか、良いではないか〜!」

腕を絡めた所からくすぐってくる。

勘弁してくれ、触れ合うのはいいが、周囲の目が痛い。いや、生暖かいのだが、さっきの圭の発言を聞いてた者の好奇の視線が凄まじく鋭い……!」

横の方からヒソヒソと『相変わらず男女仲逆転してるわね』と話す主婦の皆さん。こつちを見るな、見せもんじゃないんだぞ……。!」

「そう言うことしているとプレゼント渡さないぞ」

「はい、すみません!いい子にするのでプレゼント下さい!」

脅してみると、ビシッ!と90度の最敬礼をした圭。本当に相変わらず騒がしい動きだし、周りからの視線も最早避けられない。まあ、有名税というか、惚れた弱みか。

諦めてため息を吐きながら、コートの大きめのポケットに突っ込ん

でいたプレゼントを取り出す。

「ほら」

渡す。我ながら、ぶつきらぼうこの上ない。もっと言いたいことがあった筈なのに、気が付けばいつものテンションで渡していた。

「わあ〜！開けていい!?!」

「……………」

視線が痛い。

「……………好きにしてくれ」

諦めて頷くと、子供っぽい言動とは裏腹に包装を几帳面に開けて、畳んで、ポケットにしまうと、圭はそれを広げた。

「マフラー?」

「……………去年のやつ、だいぶほつれてただろ。それに昔から使ってるやつだったからか少し短かった」

いつもの待ち合わせよりも少し遅くなった理由はこれを買に行っていたからだ。もっと前から準備しておくつもりだったが、出来るだけ良いものを買いたくてバイトしてるうちに遅くなってしまった。

「わあ〜?!あれ?!長すぎない!?!」

圭の声が驚愕に変わる。

言いながら広げるマフラーは確かに長い。彼女が両手で広げても、それでもまあ余裕があった。

「……………け、計画通り」

「どんな計画?!確かにある意味でサプライズだけど!?!」

騒がしく笑う圭。驚きながら、嬉しそうに、おかしそうに笑う圭。早速自分の首に巻いたが、やっぱり長さが余る。

「……………あつ、はっはーん」

そこで圭がちやあ〜と笑う。

「そっか、これを計算してたんだね?新ちゃんってばあざといことするじゃん。もー、可愛い所あるじゃんね!」

そんなことを言いながら、俺の正面に立った圭が背伸びしながらだいぶ余っているマフラーの端を俺の首にも巻き付ける。

「まあ、私もやってみたかったんだけどね。カップルでマフラー巻くやつ！最近の恋ドラで見たんだけど夢だったんだ〜」

むふー！と満足そうに笑う圭。

しかし、突っ込みたい。

「それって普通、マフラーを巻いたカップルが横に並んで歩くってシチュだよな？」

「そうだね？」

同意する彼女。しかし、同意するなら、今一度、俺たちの状況を見て欲しい。俺たちは今、マフラーを巻いてるが、横に並んではいけない。縦に並んでマフラーを巻いている。

「なぜ、俺たちは直列で巻いてるんだろうか？」

そう、横並びを並列繋ぎというなら、これは直列繋ぎというべきだろう。

「えへへ。愛の直列繋ぎって事だよね。まあ、そもそも男女の身体の構造上、直列繋ぎしか出来ないよね、よく考えると。あ、その分、電池も早く減っちゃうけど、私って長く生きられないらしいし、上手い例えだね。でも、寿命が削れるくらい愛し合えたらいいなあ〜」

「ぐふっ……………」

「吐血した!?!新ちゃん!?!」

やばい、なんか、泣きそう。

色んな意味で泣きそうだ。

コイツのこういうところ、本当にタチが悪い。天然とリアリズムと天真爛漫が本当にダメな方向に融合してる。足して割らずにぶちまけて、掃除をせずに悪臭するまで放置したかのような悪性があると思う。

「もう、新ちゃんは大げさだなあ」

笑う圭。いつもの笑顔のように見える、どこか切なそうな笑み。悲観してる癖に、絶望はしてない。希望を見てくるくせに、夢は見えない。そんな、いつもとは違う雰囲気彼女に見える。

多分、今の発言的に、自分の寿命について思うところがあつたのだろう。それだけは見ていてわかった。

「あ、そうだった。帰りはうちに寄ろうよ！私からのプレゼントは手作りのケーキと手袋だよ！」

「……………そうか。楽しみだ」

頷きながら、歩く。マフラーの直列繋ぎを続けたままで。

「あーあ、今年ももう終わりだよ。早いよね」

「……………ああ」

「お正月はどうする？私は初詣行って、くじ引きたいな」

「確か、前は末々吉だったか？」

「そうなの！末吉はともかく末々ってなに!？」

ぎゃーぎゃー騒ぐ圭の声に頷く。

歩きながら、直列繋ぎしてることだし、俺の大きめのコートで二人羽織でもする？とか言った彼女に押し負けて、マフラー直列繋ぎ十二人羽織というとんでもファッションで街を歩くことになった。

前を歩く彼女の近い後ろ姿を見ながら、もう一度、密かに誓う。いつか必ず、彼女を治してみせると。

??

??

??

「……………」

もう、20年以上前になるのか。

あの日、彼女が占い師から貰ったという死神のカードを机に戻す。私たちの子供の未来は明るいらしいよ？と笑った彼女。

飾った遺影に語りかける。

「あと5年であの子も大人だ。早いもんだな」

写真立ての中で笑う彼女は何も答えない。

でも、彼女の言った通り、未来は明るいかもしれない。

年明け、君の誕生日であり、あの子の誕生日でもある日に全ての運命が決まる。だと言うのに、そんな風に思えた。

窓の外、君譲りの銀髪を揺らしながら、マフラーを直列に繋いだ息子とその彼女の姿を見てもう一度笑った。

81話 病院の時間 2時間目

入院。それを経験する理由は様々だ。だが、大きな括りで言えば、皆、体調を整える為の行為だと言える。

体調を崩した、怪我をした、一応の検査とか。理由は人によって違うと言っても過言ではないだろう。

さて、そんな入院による生活だが、人によっては入院前の生活と一変することがある。過酷な環境で働き詰めだった者は半ば強制的な休息を強いられ、普段とは違う穏やかで緩やかな生活へと変わる。運動や労働を制限されるのだから当然だ。

だが、急激に生活が変わったことに馴染める者はそう多くはない。常に多忙な者が急に休みを与えられた時、なにをしたら良いのか分からなくなるのと同じ様に。ここにいる俺、乃咲圭一もまた、変わった生活に馴染めずにいた。

「うへえ〜……。暇だよ……。律う〜」

『あ……。乃咲さんがまた溶けた……。』

律の呆れた様な声が聞こえてくるが、許して欲しい。本当に暇で溶ける以外にやることがないのだ。

転院して迎えた初日。勉強道具の類は一切の持ち込みを医師や父さん、殺せんせーに禁じられた。

ならばゲームや漫画で時間を潰すと言うのも考えたが、今は休日なので別に良いけど、平日、学校で勉強やら暗殺やらに精を出してるみんなに申し訳ないので止めておいた。

やっていることと言えば専らテレビとのお喋りか、俺のスマホに住み着いている律に絡んでみるとかそんなことばかり。

せめて散歩くらいは許して貰いたいが、これも禁止されてる。トイレとか売店くらいまでしか行けないのだ。

ああ、暇すぎて身体の液化化が始まってしまった。

俺はこのままシートとマットの染みとなり、頑固な汚れとして浄化されて昇天し、以後、この部屋に勝手に浮かび上がる人型のシミとし

て色んな奴を恐怖のどん底に叩き落とすのだ。

「……………あゝ。律く、見て見てく、あの雲お」

『……………どれです?』

「あの辺のなんかええ感じの雲」

『どれのことだかさっぱりですが、何かに似てるんですか?』

「いや、別に」

『……………はあ』

律に完璧なため息を吐かれた。

だって仕方ないじゃん。律にダル絡みするくらいしかやることないんだもの。俺のスマホに無許可で住み着いているのだから、家賃代として俺の相手くらいしてくれても良いじゃないか。

なんとなくスマホの残り容量みたら現在使ってるメモリの大半が正体不明のソフト。んで、その正体を暴いたと思ったらまさかのモバイル律だったと言うオチ。

スマホの電源落としても、律が俺に話しかけようと思えば勝手にスマホが起動する始末。友達にこんな事を言いたかないが、ある種のコンピューターウイルスである。

『……………あ、乃咲さん。烏間先生からお電話です』

「んへ?了解、繋いで」

ぐだつとしてると、思いもよらない相手から連絡が来た。

あ、いや、俺も暗殺に復帰する可能性があるかと理事長から正式な通知でもあったのだろう。それで改めて俺に暗殺への復帰の意思があるかどうかの確認をくとか、そんな用件だと思う。

『もしもし、乃咲くんか?烏間だ』

「おはようございます、烏間先生。その節は先生方にも大変ご迷惑をお掛けしました。電話越しでの謝罪となっておりますが、申し訳ございませんでした」

『気にすることはない。キミの過労は俺にも責任がある。キミたちの暗殺や訓練の監督者として至らない点が多かったと反省している。こちらこそ申し訳なかった。日々の訓練や勉強、オーバークワークだと気付ける場面はあったと言うのに』

「いいえ。烏間先生に謝罪されては自分の立つ瀬がありません。烏間先生の訓練はきつと俺に期待する所があったからこそそのものだと思っています。俺はそれに答えたかっただけです。あとは勝手に背負って勝手にぶっ倒れただけのこと。今後ともご指導ご鞭撻をよろしく願います」

『分かった。こちらこそよろしく頼む。ちょうどその”今後”について話をしたいと思っていた。今日は時間空いてるだろうか？電話越しでする話じゃない。向かい合って話したいのだが』

「俺としては構いませんけど……。大丈夫ですか？新幹線で約2時間はかかりますよ？」

『問題ない。ちょうど目の前に……。見舞いに行きたくてそわそわしているタコがいる。頼るのは癪だが、目的は一緒だ』

電話の向こうから”ほら！烏間先生、早く行きましようよ！”と殺せんせーの声が聞こえて来る。

恐らくはE組の校舎で事務整理でもしながら電話しているのだろう。俺的に、烏間先生の方が倒れないかってのが心配だ。

「分かりました。お待ちしています」

烏間先生からの返事を待ってから電話を切る。

なんと言うか、烏間先生の方が俺なんかよりもよっぽど化け物染みてると思う。国から殺し屋の現場監督と手引き、ターゲットの監視、俺たちの育成を任せられ、普久間島の時の様に俺たちに危険が迫れば対処までしてくれる。

そんな日々の激務に加えて、ゾウを昏倒させる毒をくらい、ものもの30分余りで回復させ、ほぼ丸一日休むことなく殺せんせー暗殺の為にドーム建造の現場指揮をした上で、暗殺肝試しというトンチキイベントに付き合ってくれた。

あと10年やそこらであんな風になれるとは思えないな。

『乃咲さんって烏間先生にはやたらと丁寧ですよね』

「尊敬する人を雑に扱えるわけないだろ」

まあ、内心で散々化け物扱いしてるが。

『殺せんせーやビッチ先生との違いはなんですか？』

「殺せんせーのことは教師として尊敬してる。俺たちの為にアレコレ
尽くしてくれるし、一人一人を見ようとしてくれてるのは分かる。
ビッチ先生は努力する姿勢を尊敬してる。苦手なことから逃げずに
克服する姿はカッコいいと思う」

『ではなぜ、お2人には少し雑というか、砕けてらっしゃるんです？
時々、敬語が外れていたり、大変冷たい視線を送っていることがある
様に思うのですが』

「ん、それはすごいシンプルな理由」

『それは？』

「……………日頃の言動が残念すぎる」

『……………あゝ』

納得してしまったのか、律は追求を止めた。

?? ?? ??

「乃咲くん、顔色はだいぶ良くなりましたねえ」

「そうだな。生徒たちから様子は聞いていたが、安心した」

「ふくん。私としてはちよつとしおらしくしてる乃咲も見て見たかつ
たけど……………まあ、元氣そうならそれで良いわ」

殺せんせーと烏間先生が訪ねてきたのはそれから十数分後の事
だった。意外なことにビッチ先生まで居た。

東京からここに十数分と言うことは、確実に殺せんせーが2人を運
んで来たのだろうが、殺せんせーに背負われてる烏間先生とビッチ先
生という絵面はなんと言うか面白い。実際に見て見たかったと思う
自分がいる。

「先生方にもご迷惑をお掛けしました」

「先生は気にしていません。これも私の目指す教師としての役割で
す。少しづつ大人になってください」

「俺からはさつき話した通りだ。今後ともよろしく頼む」

「ま、どんなに不仲でも親がいるって言うのは良いことよ。別れる日
は必ず来るわ。それは突然来るかもしれない。精々悩みなさい。そ

していることが当たり前前の今を大事になさい」

「……はい」

ビッチ先生は時々、人生の分厚さを感じさせることを言う。俺たちと生きてる年数は5年しか変わらないと言うのに、その人生は俺たちの何倍も濃い。こんな時に彼女の口から出る言葉は本当にいろんな意味で重い。

きつと聞き流して良い言葉ではない。だから、しっかりと胸に刻む。先達の言葉を忘れない様に。

「それでは私は一旦ここで失礼します。倉橋さんや磯貝くんを筆頭にお見舞いに来たがつている子たちを運ぶ約束をしていますので。ああ、それと乃咲くん。これをどうぞ。私や烏間先生、イリーナ先生が選びました」

そんな言葉と共に渡される箱の入った袋。正面には有名なスイーツ店のロゴが刻まれていた。

「ありがとうございます」

殺せんせーは頷き、そのまま病室を出た。

それから少しして、空高く昇る一際強い風が吹いた。

なんと言うか、見舞いに来てくれるのも嬉しいんだが、あの人、よくあれで周りに気付かれないよな。

ちよいちよい 国家機密であることを忘れてそのような部分があるから、そのうち誰かにバレそうで怖い部分だ。

「さて、ターゲットはいなくなつた。まあ、今回は居ても構わなかったが。改めて確認させて欲しい」

「はい」

「キミはE組に戻るか、戻らないかを選ぶ選択肢を与えられたと聞いた。今後どうする、E組に……暗殺に戻る気はあるか？」

「A組かE組かに関しては何んできますが、烏間先生が許してくれるなら、暗殺自体には戻りたいと思つてます」

「……含みのある言い方ね」

「はい。実を言うと殺せんせーを殺すのに必要なこととか、自分にやれそうなこととか色々考えたんです。その途中で新手の暗殺手法

……というのは大袈裟ですけど、方法を見つけたんです」

「……聞かせてくれ」

「E組の外に協力者を持つのはどうでしょうか？」

「それは俺のような工作員をという意味か、それともこのイリーナや修学旅行の時のレッドアイの様な暗殺者を？」

「その2つです」

「無理よ。アンタだって知らないわけじゃないでしょ？私以外にも腕利の暗殺者は何人もこの街に入ってる。でもその悉くがアイツに察知されて暗殺の舞台にすら上がらせて貰えない。工作員ならまだしも、暗殺協力者なんてやりたくても出来ないわよ」

「ええ。普通は無理でしょう。でも、もともとこの街に住んでいて、暗殺だとか国家機密だとかのある程度の事情も知っていて、基礎訓練も受けたことがあり、殺せんせーのいる場所においても不自然じゃない奴ならどうでしょうか」

「……つまり、アンタのことね」

「そう言うことです。俺たちがE組の山の外で暗殺を仕掛けたのは、修学旅行とこの前の旅行だけ。それ以外では国家機密ということもあり、街中での暗殺なんかは控えてました。つまり、今の殺せんせーにとって俺たちからの暗殺を警戒するべきなのはE組の敷地内だけであつて、それ以外では特に警戒する必要がない状態です。そこを突けば想定外の奇襲ができる」

「なるほど……。確かに悪くない提案ではある。E組から抜けた状態を維持することで暗殺から離れたスタンスを取り、奇襲を仕掛ける。それは悪くない。奴が常にガチガチに警戒する様になるリスクはあるが、精神的な攻撃という点でも機能するだろう。だがそれは少々……」

烏間先生が珍しく言い淀む。

そんな彼の心情を察している様にビッチ先生が特に言葉を選ぶことなくまっすぐな感想を言い放った。

「もったいないわね。それ」

「もったいない……？」

「ええ。アンタ、自分の強み分かってる？悔しいけど、総合的に見た時、あの教室の中に限定すれば、暗殺の可能性が一番高いのはアンタよ。訓練とはいえ、この堅物に何度もナイフをヒットさせる近接戦闘能力。千葉と速水の良いところを合わせ持った射撃能力。作戦の立案と指揮も出来る頭脳。それらを鑑みればアンタを裏方に回すのはもったいないわね」

「ああ。これは俺も同意見だ。無論、キミならそう言う役割もこなせるだろう。だが、俺としてもキミの能力は暗殺の現場で活かしたいと思う。外部協力者と言うのも決して悪くはないのだが」

「できる、できないで言えば間違いないでしょうけど、アンタの1番の強みは発揮出来ないわね。あの狭いフィールドで他の子達に指示を出しながら自分が切り込むってのが一番能力を活かせると思うわよ」

2人からの反応は悪くはなかった。でも、先生方の意見で一致しているのは、俺を裏方に回すのはもったいないという点。

そこに関しては納得できるし、俺自身がそう思わなかった訳ではない。俺にはゾーンという切り札がある。代償を度外視して頑張れば弾丸以上の速さで動ける。なら、そのスピードを活かしてゴリゴリの近接戦を仕掛ける方が俺は活躍できる。

……確かに、そう考えると俺がA組に残って協力者をするより、暗殺者に戻るほうが戦力的には大きいか。

考えれば分かることだったが、そこに意識を向けられなかったあたり、俺の中にA組への未練があるのかもしれない。

「プロとして言わせて貰うけど、外部協力者も確かに悪くはない。考え方によっては奇襲だけじゃなく、E組の外という新しいロケーションでの暗殺を可能にできる可能性もあるわ。でも、アンタじゃ”まだ”役者不足よ。前に言ったわよね？技術と人脈があるのがプロだつて。乃咲にはE組内での人脈はあっても、E組の外や校外に出たらそんなもの無いに等しい。人脈だけは直ぐに作れるものではないしね。それにそんなことに注力するなら普通に暗殺に回った方が可能性あるわよ」

ビッチ先生のプロとしての意見は芯を食った。

彼女の言う通りだと思う。確かに奇襲は魅力的なのだろうが、下手に奇襲を仕掛けるよりも俺は正面から言った方が可能性あるだろうし、ロケーションの確保という意味でも返す言葉もない。

そうだ。俺はE組を出たら、側から見るとただの中学生にしか見えないだろう。確かに暗殺できるロケーションを作れるだけの人脈なんて持ってない。もしも本当に暗殺のことを考えるなら、大人しくE組に戻るべきだろう。

「……だが、どうであれ、選ぶのはキミだ。外部協力者という案自体は認め、報告して見よう。もしも今後、今回のキミや竹林くんのようにE組を離脱する者が出たとき、それを盾に記憶の操作という処置を見送ることができるかもしれない」

「あら、随分と優しいのね。カラスマ?」

「もともと普通の中学生だった彼らにこちらから無理を言っただけでいることだ。抜けるから記憶を消す……というのは誠実に欠ける。何より、倫理的に間違っていると俺は思う」

「……甘いわね」

「この数ヶ月で奴と関わって成長した者は多い。記憶を弄ると言うのはそこに至るまでの努力や苦悩、成長した喜びを取り上げるのに等しい。人間に……まして子供にいいことではない」

「……そうね。確かにムカつくガキ共だけどそこは同意。国の人間としては間違っているかもしれないけど、大人としては正解なんじゃない? 知らないけど」

「ビッチ先生も関西人みたいなノリ使うんすね」

「私の中の立派な大人って像が正解とも限らないからね。自信の持てないことを断言はしないわ」

「その気持ちはわかりますがね」

何はともあれ、やっぱり俺がどうしたいのか。それが一番重要だよな。烏間先生やビッチ先生からの評価は嬉しかった。

その評価に応えたいと言う気持ちは勿論ある。あとはどんな風に応えたいのかを考える。それが今の俺の仕事なんだろう。

「……焦る必要はない。ゆっくり考えるといい」

「はい、ありがとうございます」

頷いて窓の外を見る。空の向こう、一筋の飛行機雲が凄まじいスピードでこっちに迫ってきているところだった。

「どうやら奴も戻って来た様だ」

「それじゃあお暇しようかしら。流石に病院に大人数でいるわけにもいかないし。ガキ共とタコが揃ってるんじゃ騒がしくなるのは目に見えてるものね」

「そうですか。お二人ともわざわざありがとうございます」

「ああ。とりあえずは休んで身体を治してくれ」

「それじゃあね、精々大人しくしてなさい」

2人は病室から出て行く。

扉が閉まり、カツカツと2人分の足跡が遠ざかって行く……かと思ったら、少し高い足音が引き返して来た。

この雑踏の中から聞こえる一際高い足音はヒール特有のモノ。つまり戻って来たのはビッチ先生だろう。

「ごめんごめん、忘れてたわ」

ビッチ先生はノックもなく入って来ると、どこか申し訳なさそうな顔をしながらゴソゴソと自分の背中を弄ると、白い袋に入った何かを取り出して、俺の目の前に置いた。

「スマホに律がいると何かと不便でしょう？アンタも健康的なオトコな訳だし。我慢できなくなったら使いなさい」

「え？」

「そんじゃーね。上手いことやりなさいな」

意味深な物と意味深な言葉を残して去って行くビッチ先生。一連の嵐の様な行動に面食らって、彼女の出で行った扉と置いて行った袋の間で視線を彷徨わせていると、ノック3回の後に今度は殺せんせー達が来た。

「圭ちゃんやつほー！」

「おお、前より元気そうじゃん、乃咲」

「……良かった」

「うん、良かったね」

「ほんと、ぶっ倒れた時に比べてだいぶ顔色良くなったよな。ほら、圭一。お見舞いのプリン」

「来てくれてありがとう。それから磯——悠馬。見舞いをくれるのは嬉しいけど無理はすんなよ」

「別にプリンの2、3個くらいどうってことないって。それにみんなカンパしてくれてるからな」

「……………クラスLINEの方でお礼言っとくわ」

来てくれたのは倉橋さん、岡島、千葉と速水さんに悠馬だ。

やっぱり悠馬呼びが慣れない所為か、磯貝呼びに戻りそうになることがある。まあ、名前で呼ぶ相手の方が少ないからある意味で当然なんでしょうけど。

ゆっくり慣れるしかないか。

「あれ？この箱と袋は？」

「ああ、さっきまで烏間先生とビッチ先生も居たんだよ。これは先生方からのお見舞いだってさ」

言いつつ、箱を開けてみると、プリンが入っていた。

思わず苦笑。なんか最近、お見舞いでプリンばかり貰ってる気がする。嫌いじゃないし、嬉しいのは変わらないけど。

「あはは……。プリン被りだね。こっちの袋は？」

「わかんない。ビッチ先生が服の中から出してっつた。多分、食べ物じゃないと思うけど中身はまだ見てない」

倉橋さんが指した袋も何気なく開ける。中にあっつたのは紙袋。割と丁寧な包装のそれを更に開けて、手をつ突つ込む。

「……………本だな」

「なんだろう。漫画とか？」

「いや、袋の大きさに雑誌だろ」

皆の視線を受けながらそれを開帳する。

「……………圭ちゃん」

「待ってくれ、誤解だ」

出て来た物は、なんと言うかピンク色だった。

白で塗りつぶされた太文字、それを囲む金色の文字の枠線。やたらと丸みを帯びたフォントで描かれた本のタイトルらしい文字列にはこう記されていた。

【町角おっぱい祭り〜2013〜】

完全なる風評被害である。天地神明とクラハシエルに誓ってこれは俺の物ではないと言えます。

「写ってる子、みんなおっぱい大きいね」

「ソウダネ」

「圭ちゃんは大きい方が好き？」

「アルニコシタコトナイトオモウヨ」

「……………」

やばい、倉橋さんの空気がやばい。

おのれビツチ先生……………！狙ったか……………！

「大丈夫だ、乃咲。安心しろ」

「お、岡島……………？」

「これ、俺からのお見舞いだ。使ってくれ」

肩を叩き、何やらフォローでもしてくれるのかと思いきや、徐に手

渡される【町角おっぱい祭り〜2008〜貧乳特集】。

「いや間に合ってる……………というか、使うとか言うな」

「倉橋。男には悩まなきやイけない問題ってのがあるのさ。デカいのがいいか、小さいのが良いか。一步間違えれば戦争になる話題だけど、俺たちは自分なりに考え、否定されるかもしれない孤独と恐怖に耐えて、悩み又いて答えを出すしかない。乃咲は……………まだその道の途中なんだ。長い長い巡礼の途中なんだよ。そんな風に急かさないうでやってくれ……………」

「オカちゃん……………。グーとパーどっちがいい？」

「ふつ……………。あ、悪い！俺、用事思い出したわ！殺せんせー！俺、みんなより一足先に帰るわ〜!!」

「おい待てー！せめてエロ本回収していけ！おい!!?」

ドヒューン！と走らない程度の速度で病室を出て行く岡島。俺の両手には町角おっぱい祭りなる珍妙なエロ本が二冊残った。

「……そういえばこの辺に有名な建物あったな。折角来たんだし、その辺回って来るか」

「……私も行く」

「千葉、速水さん!? もうちよいゆっくりしていきましようよ? 茶でもしばきましようや」

「茶をしばくのが先か、物理的にしばかれるのが先か。あとで結果だけ聞かせて。それじゃ、私たちはこれで」

「千葉あ! 速水い!」

仕事人2人は片手を上げると足早に出て行った。

「……悠馬は残るよな? 名前で呼び合うようになった親友を置いて逃げたりしないよな? 信じてるぜ、相棒……!」

「っ、ああ! 俺は——」

「磯貝くん、ごめんだけどこれでお茶とか買って来て欲しいな。ほら、圭ちゃんがなんか知らないけど汗ダラダラだし」

「水分補給は大事だよな、じゃ、俺はこれで。お前との束の間の共闘、楽しかったぜ」

「悠馬あああああ!!」

「圭ちゃん、病院では静かにね?」

そして、誰もいなくなった。

巨乳本を見たあたりからニコニコしてるけど、微笑みに妙な圧力のある倉橋さんに気押される。

妙だ。倉橋さんは下ネタに寛容だったと思うんだけど。

「圭ちゃん」

「大きい方が好き?」

「……いやあ、そう言えば最近は茅野くらいの大きさも良いと思う様になって来たんだよな。ほら、大は小を兼ねるって言うけど、初めから大きいものなんてない。小があるから大になるんだと俺は思う。だから俺は、小さいのを悪いとは思わない」

「……へえ。圭ちゃんはカエデちゃんの胸が良いんだ」

「……いやあ、やっぱり壁より山の方が強いよな。ほら、人気投票で上位のみんな大好きな壁山くんもザ・ウォールからザ・マウンテンに

進化するわけだし。やっぱりないよりある方がいいよな？うん、そうだよ。人間ってのは生まれたことで0が1になるんだから、0を好きになるのは違うよな」

「……へえ。ちなみにザ・マウンテンの例えでAカップを無印としてBをG2って仮定したらG何が好き？」

「倉橋さん、イナズマイレブン知ってるのな……。えつと……。その、あの……。答えにくいかなって……。あえつと……。ほら、技って使えば進化するし、地道に育てていくのが一番じゃないかな？やっぱり好きなキャラとか育てると愛着湧くし」

「……つまりは好きになった子の胸が一番ってことだね？」

「はい、恐らくは……」

俺、倉橋さんに何を言わされてるんだろう？

どうして女子に自分の好きな胸の大ききなんて性癖を暴露させられているのだろうか？誰か教えてくれ。

「そうだよね！好みはあっていいけど、女の子を胸で判断するのは良くないし、圭ちゃんはそう言う人じゃないもんね！」

「そそ、その通りだよ！」

「そっか。じゃあ、その本ちよつと借りていい？」

「……。はい、どうぞ。煮るなり焼くなり好きにしてください。私、惚れた女性の胸にしか興味持たない侍でござる」

「うむ、くるしゅうない。じゃ、私もそろそろ行くね。磯貝くん戻って来たら先に立ってる様に言っついてよ。ちよつとお手洗い行つてから出るからさ」

「御意……」

何やら剣呑で恐ろしいオーラを出していた倉橋さんは満足したのか、ズモモモ！という負のオーラをしまういつもの天真爛漫な笑顔に戻って病室を出て行った。

その背中を出来るだけ笑顔で見送る。

『……。笑顔が引き攣ってます』

「うるせえやい。つか、女子に胸の好みを聞かれたのなんて初めてだわ。どう答えれば良かったんだよ……」

『男らしく、『お前の胸が好きだ！』くらい言ったらどうなんですか？
倉橋さんなら許してくれますよ、色んな意味で』

「告白みたいなもんじゃねえか!?嫌だよ、恥ずかしい」

『……………はあ』

今日一深いため息を吐いた律。その後、戻って来た悠馬に倉橋さんからの伝言を伝えて、今日のお見舞いはお開きになった。

余談だが、後日。ニコニコ笑顔の倉橋さんがお見舞いに来てくれたのだが、その時のお土産として、いつもみみたいなプリンではなく、『下町おっぱい百科』微乳特集』なる新たなジャンルのエロ本を差し入れられ、大いに困惑しましたとき。

82話 病院の時間 3時間目

「ふむ……。凄まじい回復速度だ。圭くんが丈夫に産んでくれた事に感謝するといい。この調子であれば次回の検診結果にもよるが、ちよつとした運動……散歩くらいなら許可出来るだろう」

「本当ですか？」

「医者として太鼓判を押させてもらおう。ただし、仮に許可できたとしても、ランニングや筋トレなど激しい動きは控えること。散歩を許可するのだから横になりっぱなしも身体に悪い。適度な負荷を掛ける目的であることは忘れないようにしたまえ」

「……………はい」

現在、俺は父さんの知り合いの先生に診察されていた。こんな大病院の院長を務める程の人物だけあって、丁寧で、素早く、無駄がない。所謂、プロの仕事という奴を見せつけられ、感心していた。その道のプロの技術と言うのは、知識の薄い素人にもレベルが違うと思わせる凄みがあるよな。

「私からはこのあたりにしておこう。あとは新一の奴に話を聞くといい。その手の分野はアイツの専門分野だ」

「はい、ありがとうございます。失礼します」

「ああ。大事にしたまえ」

一礼して診察室を出る。

鳥間先生も、ビッチ先生も、殺せんせーも、浅野理事長も、それからこの病院の医師陣もそうだが、俺の周りのプロは仕事に対する姿勢が何処までも一途でかっこいいと思う。

鳥間先生は俺たちのことを同じプロとして可能な限り対等に扱ってくれる。そうでなければ俺たちからの作戦提案や意見などを聞き入れたりしないだろうし。

浅野理事長はかなり拗らせてる感はあるが、アレも教育者という分野における、ある種の極致と言えるだろう。自分の中の教育論に疑いが無く、それを実現する為の技術や知識もあり、不足なら身につけ、そ

これらの実行に躊躇いはない。それに、やりくちはどうあれ、生徒を強者にしようとする姿勢は純粹に俺たちを思つてのことだろう。やりくちはどうあれ。

ビッチ先生は言動こそ残念な部分が目立つが、話していると不意に見せる大人らしい分厚さや、俺たちには見せようとしのないものの、以前のロヴロさんとの対烏間先生暗殺対決の時の様な隠れて努力する姿勢は尊敬に値するだろう。

殺せんせーも言動の残念さで言えばビッチ先生に引けを取らないが、その分厚さという意味でも引けを取らない。烏間先生も俺たちをまつすぐ見てくれているが、殺せんせーは何よりも”見る”事に重きを置いてる気がする。強みや弱みを見つめ、伸ばし、克服する為に全力を尽くしてくれる。

全員、もれなくクセの強い人たちだが、それぞれに尊敬すべき所がある。いずれ、大人になるのなら、彼らのいい所を引き継いだ大人になりたいと思う。

まあ、漠然とした感想と言うか、どうせ大人になるならこんな風な人がいいくみみたいな、ふわっとした願望だけど。

—— 初めましてってのも少し変かな？

—— 来年の3月からキミの担任になります。

—— よろしくね、乃咲くん！

ふと、懐かしい声が脳裏を過った。

特にあの人のことを考えた訳でもないし、はつきりと意思を持って連想した訳ではない。

何故か、不意に懐かしくなった。顔を見なくなってから数ヶ月。特に連絡もなくいなくなってしまったE組の前担任。

当時は妙にハイテンションなのがウザかった。弾む様な声で、生き甲斐感じてます！って元気な挨拶が鬱陶しかった。

思えば、あの人も俺のことを見ようとしてくれた……いや、見てくれた大人の1人だったのかもしれない。

「雪村先生、どこ行っちゃまったんだろうな……」

大きな窓の外を眺め、なんと無く空を見上げてみる。青空を流れる

雲を見送りながら呟いた。

?? ?? ??

「結論から言うと、圭に施した手術で見込んでいた特徴がお前に出て
いることが確認できた」

「……と言うと?」

「圭の遺伝子は手術により、ちよつとした特徴が出る様になった。今
のお前の遺伝子は彼女に出ていた特徴と一致している」

「今の” ってことは昔は違つたの?」

「……そう言うことだ。お前が生まれて間も無く、私はお前にも何か
しらの疾患がないかを検査した。その最中で色々と確認もしたよ。
圭に施した手術の影響が出ていないかの確認などもね。その時には
この特徴はなかったのだが……」

「……突然変異したってこと?」

「ありていに、ぎつくり、とても分かりやすく言うのならそうなる。ま
あ、厳密に言えば違うが、その認識でも問題はない」

なるほど、広い括りではそう言う認識でいいってことか。

「恐らくは何処かで変異したタイミングがあるだろう。もともと見え
ない形で変異が始まっていた可能性もあるが……」

「……あれじゃね? 母さんも身体から声が聞こえたんだろ? そんなで
ゾーンが使える様になつたって話だし。俺にもその声は聞こえた。
やっぱり” 声” が聞こえたタイミングがそんなんじや?」

「やはり可能性があるのはそれだな」

俺の身体についてはまだ分かつていることは少ない。

だが、俺は父さん曰く、『常人よりも頑丈で、回復が早くて、身体能
力が高いだけ』に過ぎないらしい。そこに関しては言い淀むことなく
太鼓判を押してくれた。

今のところ、そんな予定も相手も居ないが、生殖なんかも特に心配
は要らないらしい。

まあ、そこに問題があつたらそもそも俺が生まれてないだろうか

ら、そこを疑う理由はないだろう。

「ちなみに、お前や殺せんせーがゾーンと呼んでいるチカラのことだが、少しそれらしい仮説が建てられたぞ」

「仮説？」

「そう。仮説だ。お前や圭の時間が止まっているかの様に感じる程の集中力というのは私の想定にはなかった。だが、お前や殺せんせーの話を整理した結果、それらしい理屈を立てることができたんだ。しかし穴もあるのであくまで仮説だが」

「……わざわざ言うってことは聞かせてくれるんだよな？」

「もちろんだ。とは言っても、本当に仮説の域を出ないがな。圭一、お前は相対性理論を知っているか？」

「まあ、触り程度なら」

相対性理論。父さんみたいになりたい！とか言って背伸びしていた頃に読んだ科学系の雑誌に書いてあった。確かものすつごくざつくりした概要としては、事象は観測する条件によって変動するくみたいな内容だったか。

「ならば細かい説明は省くが……時間の流れは一定ではない。速く動く者の時間は早く流れるし、動かない者の時間は遅く流れる。お前の周りで例えるなら、殺せんせーとそれ以外の人間では時間の進み方が違う、といったところか」

「…………SFチックな話だな」

「ああ。だが、重要なのはこれからだ。殺せんせーはマツハ20で動ける。それもただ高速巡行するだけではなく、ある程度の繊細な作業もこなせると聞いた」

「……だな。流石にスピードは落としてるだろうが、それでも人間の想像を超えるスピードで動いてるのは間違いない」

「その通りだ。そこで考えて欲しい。最大マツハ20で動ける、身体を動かせると言うことは、彼の思考速度はマツハ20に追従出来る程に早いと言うことだ」

「まあ、そうだな。そうじゃなきゃ動かないだろ」

「そう、思考もマツハ20に追従してなければ身体を動かすことなん

て出来ない。動いている時にマッハ20レベルで思考を巡らせることが出来る。でも、あくまでそれは思考だ。と言うことは、別に動いてなくてもそれだけのスピードで思考をすることが出来るはずだろう?」

「……………確かに。ただ身体を動かしていないだけで、思考が極端に遅くなるってことはないだろう」

「それでは、静止している時に、マッハ20で思考を巡らせている時、彼の視界はどうなっていると思う?」

「——なるほど」

納得した。父さんが何を言いたいのか合点がいった。

「マッハ20で動き、思考が出来る。きつと視覚だってそれに追従している。対物ライフルなんかの弾速なんかよりも遥かに速い動きで世界を捉えられる彼にとつて、自分すら動かない世界は……………時間が止まって見えるんじゃないか?」

「早く動けると言うことは、早く考えられる。早く考えられるから自分の体感時間は長くなる。だけど、自分より遅い奴らにとつて時間は普通に流れている。観測する者の状態によつて時間の進み方が違う。だから相対性理論って言葉が出たのか」

「そう言うことだ。この理屈だとお前や圭も音速レベルで動ける事になつてしまふが、手術の作用で身体を強化した後なら考えられないこともない。もっとも、穴もある仮説だから、これが絶対に正しいとは言えないけれど」

「いや、納得した。自分でも理論不明なチカラが使えるのは不安だったからな。仮説でも、こじつけでも、こんな仕組みで使えてる能力なんですつて言われると安心するよ」

「……………そうか。なら話してよかった」

そう、納得できた。なんと言うか、『この人、本当に学者だったんだな』というのを物凄く身近な形で思い知らされた。

遺伝子工学専門みたいなイメージあったけど、こうして見ると、父さんもかなり多才な人間だ。生まれ持つての才能か、あるいは母さんを助ける為に知識と技術を求めた結果なのか。

幼い頃に描いていた、父さんの様な学者になりたいと言う夢。夢みがちな子供の願いとは言え、それが如何に高い目標だったのか。今なら分かる。漠然としか理解出来てないけど、それでも今の俺がどんなに努力しても届かない程度には父という背中は大きかったらしいことを実感した。

「しかし、他者より早く動き、他者より多く考えられるという事は、同時に周りよりも疲れやすいという事だ。今回の過労の原因の理由の1つがそれだろう。生まれ持った才能だ。使うな、とは言わないが、あまり使い過ぎるな」

「うん、分かった。そうする」

とは言っても、ほぼ無意識に使っている。気付いた時にゾーンから抜け出す事は出来るだろうが、入るのを制御出来たことはあまりない。集中したり、警戒すると勝手に入るし。

もしかすると、集中することが能力を使う為のトリガーなのかも。集中することで身体のスペックをフルに使えるようになり、それに追従する様に思考速度も上がる。それから父さんの仮説の様な現象が発生し、時間に齟齬が生まれる。それが俺のゾーンの仕組みなのかもしれないな。

「ああ。何度も言うが無理はしないように。私は今日はもう席を外そう。明日また来るが、何か食べたいものとかはあるか？欲しいものでも構わないが……」

「世界の半分が欲しい」

「分かった。3ヶ月ほど待ってくれ」

「……………具体的に何するつもり？」

「狂犬病に手を加えて感染力を増大させたウイルスと宿主を操って繁殖行動を取らせるタイプの寄生虫を掛け合わせたモノをばら撒く。感染した人間は他者を襲い、それが更なる感染者となり、患者がねずみ算方式で増えていく腹積りだ。特效薬も準備し、手中に収めておけば世界など簡単に取れるだろう」

「うーん…………。発想がゾンビゲーのラスボスのそれ」

「ちようど殺せんせーの研究と並行して狂犬病の特效薬を研究してい

るところだ。臨床実験まで漕ぎ着け、効果があることを証明できた。治せるということとは悪化させることも容易いと言うこと。任せておけ、世界の半分程度造作もない」

「なんだろ。友達とかバカが言ってるなら鼻で笑えるのに、実績があつて実力がある奴が言うと笑えない……。冗談だ、世界の半分なんて貰つても意味ないし、使い道ないから要らない」

「……そうか。まあ、こちらとしても冗談だがな。ちなみに本当に世界の半分が手に入るとしたら、お前は どうする？」

「ん、それでもやっぱり要らないかな。実際に手に入れるより、手に入れる手前くらいで脅しておいた方が利益は大きそうだし、手に入れるまでに支払ったコストと実際に手に入れたことで支配下に置いた人間と土地とじゃ釣り合わなさそうだし。そんな粗大ゴミ貰うくらいなら日本中の宝くじでも買い占めた方がよっぽど生産性がありそうだ」

「……私の息子も大概だな。いや、この変なところでリアリズムを發揮させるところは圭に似たのか」

苦笑しながら立ち上がり、背を向けて歩き出そうとしたところで何かに気がついたのか、父さんが足を止める。

「……圭」

「……はい？」

振り返る父は半笑い。どこか困った様な笑みでベッド横の台を指さす。釣られてその方向を見ると、みんなが入院中は暇だろうからと差し入れてくれた漫画やら雑誌が並べられてる。

「お前も年頃だろうからとやかく言うつもりはないが……もつと上手く隠しなさい」

「……？」

「そのエロ本【下町おっぱい百科】のことだ。木を隠すなら森の中と言わんばかりに本棚に並べられてるが、流石に露骨すぎる。それから……胸の大きさについては特に言う事はないが、好きになった相手の胸には一途でいなさい」

「……っ!?ちがつ、これは友達が置いてった奴で……!」

「そうか、その反応からして本当らしい。置いてあったのは男友達か
い？それとも女の子かな？」

「……………ノーコメント」

「なるほど、女子か。中々大胆な子もいるモノだ。まあ、圭の奴もそつち側だったか。懐かしい……。そうか、下町おっぱい百科はいまだに
続いていたのか。彼女も良くそれを私に押し付けてきたものだ。『時
代はやっぱり微乳だよ！』と」

やっぱい。俺の中の両親のイメージが音を立てて崩れ落ちて行く。
なんだろう、賽の河原で積んでる石を実の親に崩されてる気分だ。な
んとも反応に困る。

世間をときめく世界的科学者というイメージがまだ根付いている
父の口から『おっぱい百科』なんて頭の悪いワード聞きたくなかった。
願わくばこれを夢だと思いたい。

病弱で物憂げ、でも知的で優しく、動物に好かれやすい女性くみ
たいなイメージだった母さんの像もここ数日で軋んでる。強化人間
を名乗って喜び、ロケットパンチの練習に精を出し、微乳モノのエロ
本を堅物の父さんに勧める女性……。

あれ？俺ってば両親に夢見すぎ？もしかしてコミュ症を拗らせて
る旦那と病弱な妻という部分を外して見てみたら、ただの面白夫婦
だったのか、この人たち。

「自分の並より小さい胸を気にしている部分があった。小柄で華奢
で、私としてはバランスの良い身体だと思っていたが、そこを気にし
てるところが可愛くてな。出歩ける程に元気な時はよく破天荒と天
然を掛け算したような行動を取ってはよく私を困惑させた。小柄な
身体と病弱を感じさせない天真爛漫な性格は同じくらい和やかな気
分にさせてもくれたが」

「へ、へえ〜」

まずい、なんか惚気が始まった。

めちやくちやナチュラルに惚気られてる!?

つか、惚気ることなんてあるのか、この人……。

「中でも『そう来たか』と驚かされたのが中3の時の冬のデートの帰り

道だな。当時やってた恋愛ドラマの影響でマフラーを2人で巻きたいと言いだしたんだが……」

「……まあ。恋愛系だとあるあるな展開だな。んで、そのどこに天然さがあるんだ？大胆という意味では破天荒だと思うけど別に變なところは無いんじゃない？」

なんか話したそうにしてるので聞く事にした。

「普通、ああ言うシチュエーションだと、マフラーって横並びで巻くだろう？」

「まあ、そうだな。つか、それ以外の巻き方あるのか？イメージできないんだけど……」

「……直列」

「なんて？」

「2人で横に並んでいるのを並列というのなら、彼女は縦に直列で並んで巻いたんだ。特に躊躇う事なく」

「直列繋ぎってか」

「奇遇だね、私もそう思った。そしたら『えへへ。愛の直列繋ぎって事だよ。まあ、そもそも男女の身体の構造上、直列繋ぎしか出来ないよね、よく考えると。あ、その分、電池も早く減っちゃうけど、私って長く生きられないらしいし、上手い例えだね。でも、寿命が削れるくらい愛し合えたらいいなあ』とか言われて色んな意味で泣きそうになった」

「……ごめん、なんて反応すればいいのか」

「そうだね、私も同じ反応をした。圭は基本的にポジティブだったが、時折、モノすつごく反応に困ることをサラツと言う奴だった。悪気はないのだろうが、その分タチが悪いというか。ポジティブさと天然が悪い意味で化学反応を起こすタイプだったな」

「……まあ、ワードチョイスに関して壊滅的な所は似たモノ夫婦って感じるけどな」

「……えっ？」

「……はっ？自覚なかったのか」

「……以後、気をつける」

うん、なんというか、この人も天然だと思う。

俺の周りって天然が多いよな、殺せんせー、浅野、倉橋さん、そして父さんと母さん。

唯一の救いは俺が天然じゃないことか。

「ま、何はともあれ、女子を胸で判断するのは止めておきなさい。というだけの話だ。たまたま預かっていただけの巨乳モノを見つかった掘ねられるとフォローが大変だからな」

「これまたなんとも実感のこもったお話で……。分かった。というか、もともと女子の胸なんてそんなに見てねえよ」

「……そうか。安心したよ」

「女はDを一つ失った次元に限る」

「……………ああ、そうか」

父さんは何故かキョトンとし、何かを考える様に天井を見上げ、遠い目をして窓の外に視線を向け、下町おっばい百科と俺を見比べると、何処か諦めた様な声音で口癖を呟く。

「明日また来る」

「分かった」

そう言って今度こそ歩き出した父さん。

扉を開けて、そのまま出て行く。

なんか、本当に色々と意外な一面が垣間見れた気がする。ツツコミどころが多く、両親に抱いていた幻想が瀕死だけど。

息を吐いて、スマホを触る。

何やらLINEにメッセージが来ていた。

開いてみると、殺せんせーからだった。

今日の放課後、希望者への補習や暗殺が落ち着いた頃に様子を見に来るとのこと。

毎日毎日、面倒ではないのだろうか？

そう思いながら、待ってます、と返信。

ま、全然気にされないより嬉しいのは事実。

適度に律にちよっかい掛けながら時間を潰した。

まさか、この殺せんせーの何気ない訪問が一番ヤバイ奴への国家機

密漏洩に繋がるだなんて思いもしなかった。

83話 漏洩の時間

「暗殺、国家機密、地球滅亡。僕の知らない所で随分と色んな事情が絡み合っているもんだな」

「……………せやな」

爽やかな微笑みを浮かべ、殺せんせーを見つめながら同意を求めてくる浅野。そんな彼から全力で目を逸らしつつ、頷いた。

視線を向け先には血管をピクピクさせて頭を抱える鳥間先生。普久間島の時とは別のバクトルで困っているのが見てとれた。

殺せんせーはと言えば、いつもの焼石に水レベルの変装を解き、俺のベットの横で正座させられている。

時間はちょうど午後6時を回った頃。今日は平日なので、学校で部活に打ち込んでいる生徒たちもそろそろ家に着くかどうかと言った具合の時間だろうか。

なんでこんな時間に浅野が俺の病室にいて、殺せんせーが正座し、鳥間先生が困り果てているのか。その理由は1時間前に遡る。あの時はまだ、こんな事になると思わなかったのだ。

?? ?? ??

父さんが帰り、殺せんせーが見舞いに来てくれると言うので、それまで時間を潰していた所、学校で言う昼休みの時間に来た一件のLINEがことの始まりなのかも知れない。

『乃咲さん、浅野さんからメッセージです』

「……………アイツ、暇なのか？」

ぼやきつつ、スマホを見る。もともとそんなに積極的に連絡を取っていたわけではないが、最近はLINEが増えた。

とは言っても、別に迷惑になる頻度でもない。倒れた直後はアイツも気が動転していたのか、やたらと心配する様なメッセージが来ていたが、最近は板書の写メやアイツが取っていたノートの写真が送られ

てくることの方が多い。

だが、時々妙なメッセージも送られてくる。

最近、柵ヶ丘で妙な噂が多いとか。そんな半ば雑談だが。飛んでくるメッセージの殆どは側から見ると都市伝説系のものなのだろうが、俺たちからすると身に覚えのある噂ばかりだった。

女性限定スイーツバイキングに出没する巨影、コンビニを出入りする関節が不透明な巨漢、ポケットティッシュ配りのバイトの前に列を成す2頭身半の集団、巨乳女子が時折感じる視線など。

うん。ほぼ間違いなく殺せんせーの噂である。あの人は俺たちに教育者として接する時は本当に尊敬できる人物なのだが、気を抜くと大人と言うか、人間というか、生物としての尊厳を失いかねないレベルでヤバいところを見せてくる。

それも個性、殺せんせーとて社会の中で自分を抑圧して生きる一個体に過ぎないと考え、残念過ぎる部分を受けいることこそ、”見る”ことなのかも知れないが、それと純度100%の敬意を抱けるのかは別の話である。

どうせ、今回もそんな感じの噂でも送られてくるのだろうと思ってアイツとのトーク画面を開くが、そこにあった文字列は俺の予想していたものとは違っていたようだ。

『そのうち見舞いに行く。転院したんだろ？なんて病院だ？』

どうやらお見舞いの相談だったらしい。

気にしなくていい。すぐに退院する、と返そうと思ったが、浅野はこんなメッセージで引き下がるタイプではない。アイツもやると言ったら絶対にやるタイプだ。

浅野は引くと押してくるタイプ。ならば、今回は逆を突いてみよう。そう決心して、病院の名前と病室を列挙した後、少し考えて『是非来てくれ』と付け足して送信。

はてさて、どんな返信が来るかとLINEを見ると、『分かった。お見舞いはプリンを持って行く』と返ってきた。

……またプリンかよ。

いや、見舞つてくれるのは嬉しいし、ありがたいんだけど。俺の

周りの異様なプリン推しはなんなんだ？

病室に備え付けられた冷蔵庫に貯まっていくな、プリンを思いながら、そろそろ引きプリンでもできそうな、とか考えてると、スマホの中の音が興味深そうに呟いた。

『A組って私たちより授業の進み具合が遅いんですね』

「基本的に非効率だからな。捲し立てて、黒板に書き殴って、消してを繰り返すだけ。だけど、同じ様なことを言葉を変えて繰り返してるから進みが遅い」

浅野が送ってきた授業関係の写真を見ていたらしい。

まあ、殺せんせーの授業を受けてればそう言う感想にもなるよな。と言うか、A組に戻ってからE組との比較ばかりしていたが、思えばE組の教育環境が過ぎ過ぎていただけじゃないのか？

集団に対して同じことを教えるのが普通の教師。スピードを活かして一人一人に合った教育法を見つけて力を伸ばすのが殺せんせーだ。どちらが伸びるかと言われたら後者なのは間違いない。

都内どころか日本屈指の進学校である、うちの授業だって殺せんせーや浅野理事長が抜きん出ているだけで、本来なら一般の教師であつてもハイレベルな部類なのかもしれない。

いかんな、こうして考えてみると自分の中の基準が殺せんせーとか理事長とかの人外や怪異になってしまっているのがよく分かる。こう言うズレってどっかで致命的なずれ違いを起こしそうで怖いよな。比較対象が強過ぎると碌な事にならない。

「ちよつと普通の学校の授業って奴を調べてみるか」

『調べて出てくるものですかね？』

「学校は無理でも、塾とかなら出るか。YouTubeとかで」

『動画サイトですか。便利ですよ、あれ。色んなコンテンツを配信してお金も稼げるし、知識もつけられて』

「ほんとだよな。小さい頃なんて漫画とテレビが情報源の全てだったのが考えられない時代になったもんだよ」

『常にネットに繋がっているも同然な私からしたらそっちの方が信じられないですね……』

「そうだよな。ちなみにお前もYouTubeとか見てるのか？」

『はい、色んなのを見てますよ。最近気になってるのは、ボーカロイドの3Dモデルがダンスしてる奴ですね』

「あー、たまにあるよな。興味あるの？」

『はい。私もいつかこんなことをしてみたいって程度の興味ですけどね。皆さんだけでなく、もつと色んな人と接してみたいです。その為のコミュニケーションの一つに出来ればなくとか』

「……まあ、お前の場合は大して難しくないかもよ？俺らのスマホに出てる時のお前は3Dモデルだし、あとは好みの曲とダンス見つけるだけじゃね？」

『え……。そんなに簡単なものですか？』

「だろうよ。3Dモデルはお前の意思で動かせるんだし。普段俺らと接してる時の状態から曲に合わせて歌って踊るだけだろ？」

『……私、どんなプログラムでくとかそう言う方面ばかり考えていました。言われてみると確かにそうです』

「お前はまだ微妙に思考が固いところがあるな」

『恥ずかしながらまだまだ成長途上です』

「いいさ。そのまま学習していけば。地上初の電子生命体として後に続くかも知れない後輩達のために頑張れよ」

『……………』

何気ない会話をしていると、律が止まる。

液晶に表示されたキョトン顔。

「どうした？」

会話の中にそんなキョトンとする単語があったのか、振り返りながら聞いてみると、律は目をぱちくりさせながら答えた。

『少し意外というか、驚きました。私のこと“電子生命体”つまりは“生き物”として考えてくれてたんですね』

「え？……あ、そんなこと言ったな」

なるほど、引っかかっていたのはそこか。

「ここまで感情豊かなAIなんてそういないだろ。俺たちと同じ様に知性があつて、理性があつて、感情がある。これをただのAIとは流

石に言えないさ。それとも私は人間とは違います！AIである事に誇りがあるので！とかなら謝るけど」

『いいえ。確かにAIである事に誇りが無いわけではないです。だからこそ皆さんの役に立てる場面があるわけですから。でも、その……嬉しくて。乃咲さん、初めての合同暗殺をした頃、所詮は機械、みないなことを言っていましたから』

「……………聞こえてたのね」

『はい……。当初は気にしてなかったんですけどね。それがまさか、こんな風に言ってもらえる日が来るとは思わなかったの。今、とても嬉しいです！』

「……………あの頃は確かに態度悪かったもんな」

思い出して苦笑い。あの時は傍迷惑なキリングマシンだった律をどんな風に黙らせるかとか、AIを停止させるのに合理的な手段はくとかそんなことを考えていた。確かに俺は所詮は機械とか考えてたように思う。

「それだけお前も俺も成長できたってことじゃないのかな」

『ふふふ、そうですね』

「今後ともその調子で頑張ってくれ。お前が人間と電子生命体を繋ぐ架け橋となるのだ！」

少し戯けて言ってみる。

『凄い大役ですね、私に務まるでしょうか』

「やれるさ。現に暗殺教室のメンバーはお前を仲間として受け入れるだろう？人間と電子生命体の間に違いなんてないってのを見せてやれ。ああ、律、お前はまるでデジモンのようだ……………」

『はいっ……………頑張りま……………ん？え？デジモン？』

「ほえ？デジモン知らない？」

意外、なんか割とどうでも良い知識を拾ってきているイメージがあったから、アニメとかの知識もあると思ってた。

「電子生命体と人間の友情を描いた作品だぞ」

『いえ……。知らないわけではないです。むしろ光栄な例えではあるのですが、なんとというか……………うーん……………うん、私、また一つ学習

しました。これが複雑な気分という感情なんですね」

「……………」

そんなに複雑な気分になる表現だっただろうか？

『出来れば、鉄腕アトムとか、ドラえもんとか、ドラミちゃんとか、そっちの例えの方が嬉しかったと言いますか……………。なんというか、乃咲さん、やっぱり乃咲博士のお子さんなんですね』

「……………どないこつちや?」

『なんでもないですよ』

ちよつと複雑そうな顔の律に首を傾げながら、殺せんせーが来るまでの間、テレビ見たり、ネットサーフィンして過ごした。

??

??

??

何というか、ゾーンに入らないで生活していると時間が過ぎるのはあつという間だ。まあ、数秒、数分を数時間に引き延ばせる方が異常なんだろうけど、時間があつという間に過ぎ、1日がとても短く感じてしまう。

時刻は午後5時。殺せんせーがそろそろ着く頃かなくとか思いつつ、下町おっぱい百科を見ていると、扉がノックされる。

「どうぞ〜」

恐らく殺せんせーだろうと思って返事する。

しかし、返事の後、入ってきた人物は俺の予想の遙か斜め上を行き、成層圏をぶち抜いて、宇宙までかつ飛んで行った。

「やあ、圭一。元気そうじゃないか」

「お引き取り下さい。今日は閉店しました」

「そう言うな。片道2時間だぞ?」

「なんでその2時間を学校終わりの平日にやろうと思うんだよ!? 往復4時間だぞ!」

「ふっ……………。みくびられたもんだな。友人が倒れたのに見舞いにすら来ない薄情者に僕が見えるか?」

「話し聞いている? わざわざ放課後に往復4時間かけるなって言ってる

「だけど？明日も学校あるだろ、お前……」

「問題ない。遅くても10時には帰れる。スケジュールはバツチり組んであるからな。お前に心配されることじゃない」

扉を開けて入って来たのは、浅野（息子の方）であった。

「前々から思っていたが、俺はコイツが一番怖いと思う。行動力がエグい。しかも躊躇いが全く感じられないのが更にヤバイ。浅野親子、スペック高すぎである。」

「ほら、これ。プリントだ」

「……………ありがとう」

この数日、本当にプリントしか食べてない気がする。

「礼儀としてお礼を言いながら受け取る。」

「あとは学校で配られたプリント類だな」

浅野の鞆からプリントの束が出て来る。

「……………休学中でもプリントって出るのか」

「さあな。うちの学校では休学中自体が珍しいし、僕が見た限りだと前例がない。多分、2週間程度だからプリントくらいは机に入れて置こうってことだろ」

「そんなもんか」

「そうなんじゃないか？あ、あとこの前の小テストの答案を持って来たんだがいるか？」

「生徒会長が堂々とカンニング勧めてくるなよ……………」

「失敬だな。事前準備と言ってくれ。受験だって過去問見たりするだろ？それと同じさ。再テストの結果次第ではA組に残れるんだろう？だったらどんな手でも尽くすべきじゃないのか？」

「やっぱりお前が一番怖いわ」

「照れるじゃないか、そんなに褒めないでくれ。僕をいくら褒めたところで、”いてつくはどう”しか出ないぞ」

「魔王系の自覚あったんだな」

駄目だ。コイツと話しているとペースを握られる。

涼しい顔でナチュラルに、なおかつハイペースでボケてくるからめちゃくちゃ対応に困るんだよなあ。

魔王キャラは確信犯だったらしい。俺たちがSD化した別世界では氷の魔剣！とかやりながら勇者かぶれのキャラな癖に。

「そう深く気にするな。小テストの話は冗談だ。ほら、今日までのノートのコピーだ。写真で送ってはいいたが、写しの方が見やすいだろう？一応、僕と愉快な仲間たち^五で取ったんだ」

「……有難いんだけどさ、あいつらが俺に親切する理由がなくてちよつと不気味なんだが。何があつた？瀬尾とか荒木とか、煽ってキレられた記憶しかねえんだけど。しかも何故かアイツらからLIN Eも来てたし。なんでなん？」

「ああ、お前が来てから僕の機嫌が良くて、なおかつテンションが高い時の僕の相手をしてくれてるからだそうさ。まったく、そんなに面倒くさそうにしないでいいの？まあ、お前も人望があるようで良かったじゃないか」

「人望がある奴は人柱にされなと思うけどな。つか、やっぱり五英傑からのお前に向けられた人望どうなってんの？」

「……………僕が聞きたい……………」

あ、これ、自覚ない奴だ。自分がハイテンションになってるのには気付いてるけど、そのテンションで絡まれる側の面倒臭さを理解していない奴だ。自分を悪と自覚してない悪。本人は至っていつも通りだから自覚がない奴だ、これ。

浅野の嘆きを聞き流しながら、差し出されたやたらと分厚い封筒を受け取る。なんだ？分厚さの割に案外軽い。

紙の重さと言うのは案外馬鹿に出来ない。未開封のA4コピー紙の束を持ったことはあるだろうか？所詮は紙だと油断して待つと、『うわっ、意外に重い!』と驚くハメになる程度には重量感があったりするのだが…………。

どう言うわけか、このプリントの束が入ってるであろう封筒は言うほど重くない。最近になって姿を見せるようになった身体強化の影響か？本当はそれなりに重いけど、俺の膂力の問題で軽く感じているだけか？

いや…………でも、それだと浅野は学校からここまで2時間もあの地味

に重い荷物を持って来たことになるのだが……。

なんか、そう考えると、途端に申し訳なくなってくる。

「それじゃあ、僕はこれで帰るよ。用事は済んだし、元気そうなのも確認できた。長居しても迷惑だろうしな」

「……………そうか。退院したら何か奢るわ」

「ん？珍しいな、お前がそんな気を遣うとは。でも……………まあ、そうだな。じゃあ貸し一つってことで。僕が何かしでかしても一回だけ見逃して貰おうか」

「それはアレか？暗にこれから何かやらかしますって宣言してるのか？お前や理事長がそう言うのと怖いんだが」

「失敬だな。別に大それたことをするつもりはない」

「なにかやらかすってところを否定しろや」

こちらの言うことなどのらりくらり。浅野の奴はケラケラ笑いながら病室の扉に手を掛けて一度振り向いた。

「あ、そうそう。渡したノートのコピーだが、まずは板書や教科書を見てから開いた方がお前の場合は理解しやすいと思うぞ。流石に過労で倒れた後にいつもの理解するまでひたすら解くつてのは身体に障るだろうからな」

「……………ああ、ありがとう」

礼を言うとアイツは颯爽と去って行った。

2時間掛けて来た割にいた時間は10分未満。頼んだわけではない。いや、頼んだ訳ではないからこそ、蜻蛉返りする様を見ているとなんだか本当に申し訳ない気分になって来た。

しかし、まあ、ありがたいことだ。平日、みんなが勉強してるのに自分だけテレビ見て、ネットサーフィンして、ゲームしてるってのは申し訳ないし、かと言ってぼーっとしてるのも手持ち無沙汰だったからな。

本腰入れて勉強するのは止められるだろうが、これらを眺めて過ごすくらいなら別に構わないだろう。

彼の言った通り、板書と教科書の方から封筒を開けて中身を取り出した数分後、ノック数回の後に殺せんせーが入ってきた。

「こんばんは。乃咲くん。良い子にしてみましたか？」

「あからさまな子供扱いは止めてくれ……つてのは流石に無理か。あんな姿を見せた後だもんな」

「ヌルフフフ。まあ、そんなに卑屈になることもないでしょう。弱みの一つでも見せびらかした方が人間味が見えますからね。それが親しみやすさになることもある。できる面を見せつつ、弱い一面を見せると言うのはターゲットに取り入るには有効な手段ですよ。覚えておいてください」

「それをターゲットに説かれちゃ意味ないと思いますけどね」

「さて、それはキミの腕次第です。突き詰めれば自分をどう見せるか、相手に何を魅せるのかという話になりますねえ。そういうジャンルはイリーナ先生の得意分野です。是非、先人の知恵を借りて学び、殺しに来てください」

「へーへ。……結局、暗殺の話になるのか」

「それは勿論です。キミ達が私を殺さなかった場合、来年には地球は無くなっているかもしれないんですから」

「そう言う可能性もあるって話でしたね。つーか、殺せんせー。毎度思うんだけどさ、その焼石に水みたいに変装でバレないの？殺せんせーかどうかってとこじゃなくて、そもそも人間じゃないってところ。曲がりなりにも国家機密なんだからもうちよいしつかりした変装した方がいいと思う」

「にゅやあ!?そ、そんなに変ですかね?」

「まあ、ぱつと見て『あの人の関節なんかへんじゃね?』ってなるレベルで。そもそも大柄すぎるんだよ。触手って伸ばしたり出来るんだろ?だったら短くするとかできねえの?」

「にゅう………。伸びるのは楽なんですけど、縮むと疲れるんですよ。身体を無理矢理押し込むんでるといっつか、プールとか行くと常に腹筋力ませてる人いるじゃないですか。気分的にあんな感じになります」

「なんだその微妙に分かりそうでわからない例え……」

確かにプールに行くとそう言う奴はいる。

けど、生憎とその感覚までは知らんのだ。

「まあ、でも、その図体で変装は厳しいか」

「そうなんですよねえ……。今のところは先生の巧みな擬態によって一般の人々に気付かれてませんが……」

『あはは、でも、どれだけ巧妙に擬態しても、その『ヌルフフフ』とかいう独特な笑い方を方々に残すのはやめておいた方が良いでしょう。柵ヶ丘ではちよつとした都市伝説になりかけてますから。胸の大きな女性たちの間でね』

「と、都市伝説!? 誰ですか、そんな失敬な!」

殺せんせーの擬態が巧妙とか言う珍ワードに突っ込もうとした時、ひと足先に誰かの声が殺せんせーに語り掛けた。

殺せんせーは気づいてないのか、そのままプンスカと威嚇するように身体を大きく広げる。

「……………殺せんせー、俺、今、何も言っていない」

「……………にゅ?」

今起こった出来事を端的に伝えようと、殺せんせーは数拍子だけ置いたあと、首を傾げて部屋中を眺めた。

『いや、悪いな。圭一。実はこの前、お前の見舞いに行こうとしたらE組の連中が暗殺とか、触手とか、なんか物騒な話をしてるのを聞いてな。なんだか今年の理事長はE組に対してやたらと干渉したがる。もしやと思ってお前に罫を仕掛けたが……まさかいきなりターゲットが釣れるとはな』

2人して声の主を探す。だが、人の気配はない。ただ、耳を澄ませて音の発生源を探すと、ついさつき、浅野から渡されたばかりの封筒に視線が向いた。

さつき感じた違和感。紙の束と言うには多少違和感のある重み。その正体を探るべく、封筒を開けると、中からは数枚のプリントと、その間に挟まれた発泡スチロールがあった。

しかし、この発泡スチロール。普通ではなかった。中心がとある形にくり抜かれている。そして、そのくり抜かれた部分に収めるように、まるで嵌め込むかのようにアンテナの付いた箱のような物が収

まっていた。

「……おもちゃのトランシーバー？」

『流石圭一だな。予想より気付くのが速い。でも残念だったな、渡した時に気付かなかつた時点で僕の勝ちだ』

勝利宣言と共に足音が聞こえてくる。他人の心音やらが聞こえるほど鋭敏になってしまった聴覚が奴の接近を感知する。

「殺せんせー！今すぐ窓から飛べー！」

殺せんせーに指示を飛ばす。

彼はあたふたしながら頷き、駆け出す。

「わ、わかりまし——にゅあああああ!!!?」

「おいつ!? ココイチつてとこで転んでるんじやねえ! このタコ! 転びながら無駄にサマーソルト決めやがって!」

しかし、そこは緊急事態というか、環境の変化、突然の出来事には弱い殺せんせー。見事に触手を絡ませ、すっ転んだ。

ツルツ! と絡み、バランスを崩した触手は勢いよく滑り、殺せんせーの身体を1回転半させ、床にべちゃつと落ちた。

叫びながら反射的に自分に掛けられてきた布団などを倒れている殺せんせー目掛けて全力で投げつけ、ドアの方から体で隠すように殺せんせーと布団で出来た山にダイブする。

久しぶり機敏に動いた所為か、さっそく肺が悲鳴をあげる。こりや暗殺に戻る、戻らない関係なく体力作りから始めた方が良いかもしれないなと思いつつと見で見える位置に殺せんせーの触手がはみ出さないことを確認する。

それとほぼ同時。浅野がノックもなく入って来た。

「やあ、圭一。随分と楽しそうじゃないか。そんな所に布団を積んで何してるんだ？」

「えーつと、今夜は星が綺麗に出るみたいだからちよつと変わった姿勢で眺めてみようかななんて」

「へえ。そりゃあ初耳だ。今日は夜のうちに雲が溜まり、明日には朝から降り出すって話だったけど」

「天気予報のねーちゃんって嘘つきだからな。俺の占いでは明日は晴

れるんだよ。実はこの布団の山も占いの一環でな」

「ふーん。どんな占い方なんだ？」

「投げた布団がどんな形で落ちるのかで占うんだよ。布団が吹っ飛んだー！的なの奴！ほら、ハリーポッターの紅茶占いの布団バージョンなんだ。おいおい、まさか知らないのか？お前ともあろう奴が。このお茶目さんめ♪」

「……じゃあ、質問なんだが、布団から明らかに人の腕じゃないし、タコとかイカと言うには余りにも大きく太い触手がはみ出ていたらどんな天気になるんだ？それが晴れ、と言う結果になるのか？だとしたらその占いで晴れを出すのは難しそうだな」

「しよ、触手？なんの話だよ？お前、エロ同人の読み過ぎなんだって。触手と拘束と尻壁は一般性癖かもしれないけど、そう言うのオープンにしすぎるの、拙僧感心せんなあ」

「適当な話題を出しつつ横目でチラッと俺の視界からはギリ見えない範囲を見ようと努力するが、流石に死角は見えない。」

「圭一、そっちじゃない。いい加減観念しろ、布団の膨らみ的にも毛布だとか掛け布団とかじゃ言い訳として苦しすぎるぞ。なにより布団からはみ出てるんだから隠し切れる訳ないだろ」

「………まあ、ですよね」

「観念して浅野の指差した方に首ごと視線を向ける。」

「………あれ？」

「しかし、そこには特に何も無い。別に何もはみ出したりしていない。殺せんせーのやつ、見つかったタイミングで反射的に触手を布団の中に引っ込めたんだろうか？」

「悪いな、嘘だ。初めから何もはみ出しちゃいない」

「………つまり？」

「お前は僕に騙され、見えてもいない触手の存在に慌て、勝手に隠しきれないことに同意して、まるで本当に触手があるかのように振る舞った。まあ、完全に自白だな」

「………やらかしたああああ……！」

「ふむ、政府の見つけた宇宙人でもいるのかと思ったが、僕が見つけた

のはとんだ間抜けだったらしい」

浅野がニコニコしながら近寄ってくる。

「さて、状況は分かっているな？別にこのまま大声を出して人を集めてもいい。たしか、国家機密だったか？知られたらまずいよな？姿を見られるのはもつとやばいよな？バラされたくなかったら……ククク、分かるな？僕の要求に応えて貰おうか」

「くっ……！殺せ……！」

その後、部屋の状況を把握していた律が烏間先生を呼ぶまでの間、必死こいて浅野を引き止めるハメになった。

おもちゃのトランシーバーを使って人をハメるとか新世界の神みたいなことしやがってこの野郎と内心で散々悪態を吐きながら、抵抗も反撃も、状況を打開するとかは出来ず、なす術なく、殺せんせーについての情報を吐かされてしまった。

84話 漏洩の時間 2時間目

浅野学秀。桐ヶ丘学園の理事長を務める、浅野学峯の一人息子にして桐ヶ丘中学校の生徒会長。校内のテストでは不動の一位、全国模試も常に主席。完璧主義な父の教育と努力、生まれ持った才能も手伝ってか、運動も乃咲くに並んで校内トップ。

見かけた事がある程度だったが、自信に溢れた顔つきと歩き方が印象的で、他人を惹きつけ、扇動するカリスマ性を持つ。

数値で人を判断するのなら、運動能力や学力という意味では乃咲くんや赤羽くと並んでいる優秀な人材と言える。

あの理事長の息子、そして今のこの状況を鑑みるに、先手を打ち、外堀を埋め、相手を自分の土俵に引きずり込もうとする策謀家。

乃咲くんを現場で動きながら柔軟に指示を出す部隊長タイプとするのなら、彼は後方で先の先や後の先を見越して目標やゴールに向けた指示を出す本部長タイプ。

赤羽くんと同じタイプであると言えるが、恐らくは目の付け所などで細かい違いが現れてくるタイプだろう。

戦力という意味では、頼もしいだろう。

現に、たった今、彼の能力の比較対象として挙げた乃咲くんは彼に嵌められ、超生物という国家機密を暴かれてしまった。

「すみません、鳥間先生……」

「いや、聞いた話だと結果的に君のところが発覚しただけで要因は複数箇所にあるそう。気にするなどは言わないが、気に病む必要はない。むしろこう言った事態を想定していなかった我々の危機管理能力にも問題がある」

申し訳なさそうに頭を下げる乃咲くんに声をかけて、浅野くん視線を向け、改めて向き合う。

「こうして挨拶をするのは初めてだったな。はじめまして。表向きはE組の担任と言うことになっている、鳥間惟臣だ」

「ええ。はじめまして、鳥間先生。浅野学秀と申します。桐ヶ丘中学

校では生徒会長をやらせてもらってます」

表向きなフレンドリーな笑顔。しかし、その下にはこちらを喰い殺さんとする牙を隠しているのだろう。

「改めてキミの口から我々について探っていた経緯を聞きたいんだが良いだろうか？」

「ええ。もちろんです。僕としても家族のいつもとはどこか違った様子が心配で始めたことなので答えを頂けるのであれば」

家族とは理事長のことだろう。本音と建前の使い分けが上手い。彼以外の普通の生徒だったのなら、この言葉で納得するわけにはいかないが、浅野くんは理事長の息子。家族の様子が何かおかしいのが心配だから調べていたと言うのは否定できない。

「父の様子が変でして。特にE組への干渉がね。例年、ここまでE組に執着することはなかったのですが、今年は短いスパンでのE組視察に始まり、この前の竹林くんや圭一のA組への勧誘に至るまで、彼らとの接触の機会が多い。たまたまである可能性もあるでしょうが、家族として心配だったもので、僕にも何か出来ることはないかと調査を始めたのがきっかけでした」

文面だけ聞いているとあまり違和感はない。

息子として親が心配と言うのも、これまではなかった急なE組の視察などは生徒会長として気になる分には納得できない。

だが、それだけでないことは流石に分かる。

結果的にそう言ったとは言え、乃咲くんからコイツに辿り着くあたり、やはり普通の中学生と考えて油断は出来ない。

「そしたら結構E組周りで妙な事が頻発していることに気が付きました。E組用に準備されていなかったプリントが全校集会で突然E組生徒の手元に出現し、その直後には見覚えのない関節が曖昧な巨漢の姿が教師の列に並んでたり、E組の裏山で突如として巨大竜巻が発生したり、泳ぐことに抵抗のあった生徒が夜中、E組の裏山で見覚えのある女生徒と『ヌルフフフ』とか笑う巨漢に特訓される夢を見て、翌日には泳げるようになっていたり」

最後の話は初耳なんだが？と乃咲くんのベットの横で正座させて

いるタコを睨み付けると肩身が狭そうに俯いた。

「E組の生徒にも変化がありました。3月まで自信なさそうに、肩身が狭そうにしていた奴らが4月の半ばから下旬の間に何処か明るい顔をするようになった。事実、その自信が本物であることを証明するように、野球部とのエキシビジョンに勝利し、前回のテストでは僕らA組としてのぎを削り、果てには勝利までした」

なるほど。確かに言われてみるとそうなのかも知れない。俺はこの学校にくるのは初めてで、実際に目の当たりにするまでE組と言う制度と、その待遇もほぼ知らなかった。

そんな俺からしたら、コイツの暗殺という目標に向けて生徒たちがやる気を出し、努力し、成長する一部始終を見ていたので、彼らの変化もある意味で当然のものだと思っていた。

しかし、この学校に3年間通い、そして父の経営する学校の特徴をよく知っているであろう浅野くんからしたら、4月から今日までのE組は異質に映ったらしい。なるほど、そこまでは予測していなかった。やはり落ち度は俺たちにもある。

「ただですね、前期期末でA組とE組で賭けをしたのはご存知だと思いますが、その戦利品として要求されたモノに違和感がありました。圭一がいるのに要求が軽すぎると言うか」

「……………なるほど、確かにそうかも知れないな」

彼の言葉に頷く。確かに乃咲くんならば、たった一度だけでも相手になんでも言うことを聞かせるという契約さえあれば割となんでも出来るだろう。彼を悪辣だと思っている訳ではないが、浅野くんの言ってることは理解できる。

「A組が行く筈だった普久間島での合宿。賭けで勝ったんだからその権利を寄越せと言うのは理に適っている。でも、圭一ならもつと僕らから搾り取れた筈だ。それこそ『ここにA組の権利をE組に譲渡するという内容の契約書がある。これにサインしろ。俺からの要求はこの書面に対するサイン一つだけだ。契約の範囲内だろ?』とかやれるはずだ。それを実行すればあの環境が劣悪なE組校舎から抜け出せる」

乃咲くんは彼から向けられた視線から逃れるように目を逸らした。なるほど、考えなかったわけではないらしい。

「でも、それをしなかった。実行していればE組の連中と一緒に本校舎に戻ることも、僕らが使っている権利はもちろん、件の合宿だって契約に含む事ができた。でも、それをしなかったのはなぜだろう？僕はそれが引つかかっていました」

生徒たちが話しているのを聞いた事がある。乃咲くと学年主席の浅野くんはもともと成績トップ同士で仲が良いと言うか、ライバルの様な関係性であったと。

乃咲くんの思考力や考察力は我々ですら舌を巻く程にレベルが高い。普久間島での事件で黒幕が鷹岡だと暴いたり、それ以前にも彼らが殺せんせーと呼んでいるこの超生物の正体にも半ば辿り着いていたらしい素振りも何度か見せてくれていた。

そんな彼と対等にぶつかっていた目の前の少年。なぜ考えなかったのか。乃咲くんの能力を間近で見ているおきながら、彼に匹敵する能力の持ち主が本校舎にいると聞いておきながら、こんな展開になることを。なぜ、予測出来なかったのか。

自分の考えの足らなさが不甲斐ない。

「極め付けは、この前の竹林くんです。さっきの契約が成立しなかった以上はE組の待遇は最低レベルのまま。それなのに彼は自ら再びE組に落ちることを選んだ。親に認められることを第一に考えていた筈の彼がそんな遠回りを選んだ」

そのまま流れる様に超生物に視線を向けた。

「急に上がったE組の学力、圭一にしては甘すぎる要求、まるでE組の環境を望んでいるかの様な言動をした竹林くんの出戻り。何より、僕らがどれだけ手を尽くしてもやる気を出さなかった圭一の復活。そしてE組で突然発生した竜巻。E組、あるいは裏山に何かあるって考えるには充分すぎると思いませんか？」

こうしてE組の現状を外から見たらどう思うのかを列挙されると確かに不可解な点が多いだろう。

俺はもちろんのこと、生徒たちもそこを考えてはいなかった。努力

をしたから、頑張ったから報われた。我々の知る事実はその一言に尽きるが、何も知らない外部の人間が彼らの急成長を見て納得するか、出来るのかと言われればNOだろう。

浅野くんの疑問点はどこもおかしくない。側から見たとき、不思議に思う部分を的確に射抜いていた。

中にはライバル関係の乃咲くんに対するある種の信頼も混ざっていたが、それでも彼の指摘通り、E組になにかがあると考えるには充分すぎると改めて思った。

「そして圭一たちや父が何かを隠していると確信したのは先日、圭一が転院する前の病院に見舞いに行こうとしたときです」

「…………お前、来てないだろ?」

「いや、病院までは行つたんだよ。でも、引き返した。潮田や赤羽、倉橋たちが妙な会話をしてるのを聞いて、今までの疑念が確信に変わったから、色々と整理したくてな」

「……………病室の前まで来てたのか?」

「行つてない。ただ、お前の病室に向かう時にたまたまアイツらの会話を聞いたんだ。こればかりは本当に偶然だけだな。暗殺とか、国家機密だとか、そんなワードが聞こえてきたんだ」

「……………そうか」

乃咲くんの長い嘆息の後の言葉。思わず頭を抱えるという表現が似合いそうな仕草からはどことなく哀愁というか、どうしてこうなった?と自問しているのが見て取れる。

「うん。思えば暗殺がどうこうとか、普通に話してるもんな。そりゃあ怪しんでる奴に聞かれたらバレるか」

「そうだな。これまで中学生がそういう会話をしても、そう言う年頃か、歴史の話だと思うだろうと言うことで今までE組の外、誰かいる場所での会話は禁止してなかったが、見直さねばならないな。今後、彼のように勘づくものが現れないとは限らない」

「ですね…………。それで、どうします?コイツには知られてしまった訳ですけど…………。消しますか?」

「……………僕、選択を間違えたのか」

「主語を付ける。勘違いされる物言いをするな」

顎に手を当てながら、当たり前前の様にとんでもない提案をしてくる乃咲くん。顔にはその方が早くね？的な色が見える様な気がする。加えて、暗殺だとか国家機密なんて単語が出ているせいで、言葉に真実味が出てしまい、浅野くんが一瞬、本気の思案顔になったのを見て訂正する。

「まずはこの場合、消す必要があるのはキミの命の灯火ではなく、記憶であることをまずは訂正させて欲しい」

「おおう……。中々に怖い表現しますね、烏間先生」

「記憶操作……。流石に国家レベルになるとそう言うことも可能なんですね。と言うか、お前らとんでもないことに巻き込まれたんだな。半信半疑だったが、マジだったとは」

浅野くんを見る。肩を竦めて見せているが、その目付きに一切の油断はなく、ただ笑顔を見せながら戯けて見せる好意的な姿に反して身体は常に俺へと向いている。それは警戒心の現れだろう。あの父にしてこの息子あり。笑顔は本来攻撃姿勢を示すものであるという言葉が似合う親子だと思った。

「だが、記憶を消す前に聞いて欲しい話がある」

「聞きましょう。なんですか？」

「我々の暗殺に参加するつもりはないか？」

話が冷めないうちに本題を切り出す。

意外なことに俺の提案を聞いて驚く者はこの場にはいなかった。

ターゲットも、乃咲くんも、浅野くんも冷静だった。

「それは僕もE組に、と言うことですか？」

「いや、生徒のクラス替えについて我々は権限を持っていない。キミがE組での暗殺を希望するなら、キミのお父さん……理事長に掛け合うことにはなるが、今回の提案はあくまで暗殺に協力して貰えないか？という内容になる」

「E組の外からの協力者……。烏間先生、この前の俺の提案が通ったってことですか？」

乃咲くんの言葉に頷く。

「そうだ。無闇に増やす訳にはいかないし、中学生……子供がどこまで出来るのか、と問われたが、現状、その子供が一番この超生物を追い詰めている事実と、中でも最も単独でダメージを与えた生徒からの提案と言うことでゴリ押した」

「……その人……えつと、殺せんせーでしたか？彼を圭一が何度も追い詰めてるってことですか？あなたの説明だとマツハ20で飛び回るモンスターと言うことでしたが」

「その通りだ。今のところ、そいつが明確にダメージを受けた暗殺のほぼ全てに彼が関わっている。計画立案、実際の指揮、そして実働。乃咲くんは様々な面で高い評価を受けている。そんな彼をハメたキミなら、外部協力者としての起用も容易に認めさせる事が出来るだろう」

俺の言葉に浅野くんは何処か勝ち誇った顔で乃咲くんに笑顔を向け、向けられた側は拳をプルプルさせながら全力で顔と目と体を反対方向に向けて逸らしている。

この前、彼が倒れた時の本音や、こうして仲のいい友人？と張り合っている姿を見ると、如何に能力が高くてもやつぱり彼らもまだ子供なんだとついつい考えさせられる。

そんな子供を利用しては俺たちはきつと悪い大人と言う部類に括られて然るべきなんだろうな。

せめて、彼らが必要以上に利用しない、させない。そして、彼らの意思を尊重する方法で暗殺を進めること。それが俺に出来る、彼らへの誠実な対応だと考える。

「暗殺の協力と言っても、作戦を立てるとか、そう言う現場ありきのことに拘る必要はない。今回、キミがE組の異変や国家機密に気付いたように、今後我々に気付く生徒がいても不思議ではない。もし、兆候がある者がいたとなら、それとなく誤魔化してお茶を濁して貰えるだけでも大変助かる」

「まあ、そうですね。E組には何かあるって裏山まで様子を見に来る様な物好きが居たりしたら暗殺どころじゃないですもん」

「そう居ないと思うがな。僕ら以外は大体の奴が授業に置いてかれな

いために必死だ。E組にまで意識を向けられる奴は中々居ないと思うぞ？少なくとも僕はね」

「鏡見たことあるか？平日の学校帰りに片道2時間、往復4時間の長距離を移動し、県外の病院まで見舞いに来てまで秘密を暴きに來た奴がどの口で言うのか」

彼らの言葉の応酬を眺める。E組の校舎ではよく、磯貝くん達とつるんでいるところをみるが、どことなく教室で見ていた雰囲気とは違う部分を感じる。一見すると煽り合い、くだらない事を言い合っている様にも見えるが、その容赦の無さから親しさの様なものを見ることが出来る。

「とまあ、圭一との言い合いはともかく、そうですね。暗殺に協力すること自体はやぶさかではありません」

「……やぶさかではないが、それはそれとして、と言いたそうな言葉選びだな」

「その通りです、烏間先生。理解が早い人は好きですよ。僕は曲がりなりにも生徒会長をしている身です。やれることには限度があるし、例えばE組の事情を知ったからと言って、彼らのうち誰かが問題を起こしたら、味方をしてあげられません。会長として公正に振る舞う事しかできません」

彼の目は笑っていないかった。真剣にこちらを見て、そう宣言した。その瞳に宿す怪しい光は父親によく似ていた。

「暗殺なんてやってるんです。相応の実力や技術も身につくでしょう。凄みも現れるかもしれない。それが彼らの意思に反してトラブルに発展する可能性はゼロじゃない。以前、E組の生徒から『殺すぞ』と凄い目付きで脅された、と報告を受けたことがあります。今後、似た様な報告が上がったとしても、僕は公正にしか対応しません。それでもいいですか？」

以前、俺が見た光景のことを言っているのだろう。

本校舎の生徒に渚くんが絡まれていた時の光景。

「ああ、それで構わない。今後も誰かしらに国家機密が漏洩する可能性を少しでも減らせるのであれば願ったり叶ったりだ」

「ははは、それは良かった。こうして口に出した以上、暗殺のことに關しては協力しますよ。それ以外は保証しませんが、とりあえずは契約成立ということだ」

差し出された彼の右手を握り返す。

これが合意の証ということの良いだろう。

「ヌルフッフ、乃咲くん。心強い仲間ができましたね」

ここに来て超生物が口を開く。話がややこしくなる可能性があったので、許可するまで口は開くなと言っていたのだが、まあ、このタイミングなら別に良いだろう。これ以上、話が拗れる事もないだろうし。

「心強いのは否定しませんが、あとはE組の連中が受け入れるかどうかも重要だと思いますけどね。浅野……というか、五英傑にはみんなあんまり良い感情はないでしょうし」

絶えず苦笑を浮かべる乃咲くんの苦労は今後も続きそうだ。

「では、後日、理事長に話をしに行く時に誓約書を持っていく。その場で改めて仕事について説明しよう。先に口頭で伝えさせてもらうが、基本的にキミは外部協力者という形になる。主な仕事は本校舎での暗殺関係に関する話の隠蔽になるが、実際に殺しに来てくなくても構わない。単独での暗殺成功の報酬は100億円。他者との協力で暗殺した場合は300億円になり、そこから山分けになる。諜報活動の見返りとして、キミにはどの場合で成功したとしても、報酬の数%を出すそう」

「数%とは？」

「キミの仕事ぶりと成功者との交渉次第といったところか」

「なるほど、構いませんよ、それで」

浅野くんは驚くほどあっさりと言った。

「実のところ、成功報酬は棚ぼた。僕としては、E組や圭一が急に伸びた理由を知ることができれば満足でしたので」

「……お前が？ほんとに？」

「ほんとだとも。あわよくば、キミらが伸びた教育も受けてみたいし、秘訣があれば教えてほしいところだけだな」

「ヌルフフフ。お望みであればいつでも教鞭を取りますよ。存在がバレてしまった以上は遠慮する必要もなさそうですからねえ。我々のクラスのトップ陣をほぼ1人で抑えるキミに教えられる日を楽しみにしています」

「……………楽しみにしているのはお前の勝手だが、何度も言うが目立つなよ。世間では都市伝説的な噂が流れるようなこともしでかすな。お前も教育者なら今回の件を教訓にしろ」

「にゅううう……………そこはおっしやる通りです」

やる気あり気に触手をうねらす超生物に釘を刺す。

こうでも言わないとまた似た様なことが発生しかねない。

「ところで圭一、理事長からA組に残るか、E組に戻るかを迫られてるそうじゃないか」

「ギクッ……………」

「僕としてはお前がいた方が楽しいし、A組に残留して欲しいが……………まあ、これで例えお前がE組に戻っても気兼ねなくお前にダル絡み……………もとい、遊びに行けるな」

「ダルい自覚あるのか……………」

会話が始まったのでそろそろ俺はお暇するとしよう。

「俺はこれで失礼する。上層部や理事長にも話を通さねばならないからな。乃咲くんは早く休み、浅野くんはあまり遅くならない様に。というか、もうコイツのことも知ってるのだから家まで送って貰え。その方が金銭的にも楽だろう」

「ちよっ、烏間先生！理事長と話すならコイツ本人もいた方がいいと思うんすよ！あの人も一応は人の親ですから！だから、お願いですから！コイツを持って帰ってください……………！」

「圭一、無茶振りは良くない。だいたい、僕と父さんが揃っている空間の空気をほぼ初対面の相手に味わえと言うのか？流石にそれは酷というか、鬼畜が過ぎるぞ」

「その魔王同士が”いてつくはどう”を放ち合ってる空間に出会って7日くらいで叩き込まれたんだが、俺!？」

「懐かしいな、あの時は楽しかった」

「俺は怖かったけどな……！父さんの知り合いだつて理事長と同級生から『うちに遊びにおいで、ついでにご飯も食べていきなさい』とか言われたから行ったのに、待ってたのは淀んだ空気と笑い声という名の魔王達の合唱……！和やかな雰囲気なのに目が笑ってないお前らに挟まれて生きた心地がしなかつたぞ……！」

「……………それでは、失礼する」

「あつ、待って下さい！お願いです、烏間先生え！」

手を伸ばす乃咲くん振り返ることなく部屋を出る。

強く生きてくれ、乃咲くん。

俺はそんなことを考えながら病院を後にした。

85話 茅野の時間

「と、言うわけで。今日からE組の外部協力者となった浅野学秀くんだ。基本的に本校舎で暗殺周りの噂が流れた時の揉み消しが主な任務だが、本人の希望で、ちよくちよく殺りに来ることもあるだろう。これからよろしく頼む」

「やあ！E組のみんな！浅野です！これからよろしく！」

「待って待って待って待て!!」

青い空、白い雲。いつも通りの旧校舎。

そんな中で、いつもと違う光景が僕らの前に広がっていた。

「ど、どういうことだ？お前が暗殺に参加するなんて……」

困惑する僕らを代表するように磯貝くんが質問する。

すると、浅野くんは悪びれもしないで言った。

「圭一の見舞いに行こうとした時、お前たちが暗殺どうこう言ってるのを聞いてな。もともとE組には不審さを覚えていたので調べさせて貰った。確信が持てたタイミングで、殺せんせーが圭一の見舞いに行ってるタイミングで押しかけて、色々和白状させたってところだな」

「……………」

「キミたちももう少し周りには気をつけた方がいい。側から見たら厨二病とか、暗殺って歴史の話かしら？となるかもしれないが、こうやってバレる場合だってあるんだからな」

「それは……その通りだ」

みんな苦い顔をした。彼の指摘にぐうの音も出ない。

思えば僕らもだいたい軽はずみに暗殺について話していた。そこに油断がないと言ったら嘘になってしまう。

「彼の言った通り、俺たちは迂闊になり過ぎていた。こういう展開になる可能性を考慮しなかった我々にも落ち度はあるが、みんなにも暗殺周りの話は場所を選んでするようにしてもらいたい」

「はい。すみませんでした、烏間先生」

「今後、気を付けます。確かに私たちが抜けてました」

学級委員2人がそう言うのと、烏間先生は頷いて、いつもの視線で僕らを見る。正面から僕たちを見つめてくれる大人の目だ。

「事のあらましは今、浅野くんが話した通りだ。本来なら記憶の消去が政府の用意した対処の中では妥当な所だが、先日乃咲くんから提案を受けた外部協力者の有用性と、彼の能力の高さを評価してこちらから協力者として依頼させて貰った」

「烏間先生。浅野が協力者になるってのは分かったけどさ、立ち位置的にはどうなるの？」

「そこは僕から話そう。僕は暗殺に関しては協力を惜しむつもりはない。来年の春には地球がないかもしれないなんて一大事を見て見ぬ振りはできないからな。だが、僕はあくまで生徒会長だ。生徒の味方ではあるが、E組という個の味方にはなれないことはまず宣言しておく」

「……けつ、俺たちの扱いは相変わらずかよ」

「言つてやるな、寺坂。彼にだって立場はある。それにもともと僕らが不用意に暗殺について話したりしてなかったら、こうはならなかったんだ。出してしまう噂の揉み消しに協力して貰えるだけでもありがたい事だ」

「竹林………」

「彼のことだ。そのネタを使って僕らを強請ることだって出来なかったとは思えない。でもそれをやらないのは、思惑はともあれ、温情とも言える。今は、それに甘えよう。それに……本校舎に戻った僕やあんなスピーチした乃咲がA組で孤立しなかったのは、彼が話しかけてくれたからだ。本人はそう言うの気にしないとと思うけど、あんまり邪険にしたくない」

「……ちっ、分かったよ」

寺坂くんは舌打ちしつつも頷いた。

それを認めると竹林くんは正面に視線を戻す。なんて言うか、本当に色々と変わったな、竹林くん。

そんな彼を見て烏間は頷いた。

「さて、何はともあれ、彼の加入は事実上の戦力アップだ。浅野くんの能力は3年間、同じ学舎で学んでいるキミたちの方がよく知っているだろう。暗殺を外部から見ている貴重な視点での意見なんかもある筈だ。遠慮なく頼っていい」

「そういうことだ。改めて、よろしく」

浅野くんはもう一度、爽やかな微笑みを浮かべた。

??

??

??

さて、そんなこんなで新しいメンバーを迎えた僕ら。

実を言うと今日は休日。なんでそんな日に学校に集まっていたのかと言えば……。

「さて！今日みんなに集まって貰ったのは、言うまでもなく暗殺のためです！」

暗殺をしたいと茅野から協力要請があったからだ。

当然ながら僕らの中に協力に対して難色を示す奴がいるわけもなく、みんなが彼女の話に耳を傾けていた。

これまで暗殺に積極的ではあったけど、仕掛けるより、サポートに回ることが多かった茅野の立てる計画。興味がある。

彼女の話に耳を傾けるメンバーの中には、今日加入したばかりの浅野くんの姿もあった。

「実は最近、卵の供給過多が深刻だね。食べられるのに捨てられちゃう卵がたくさんあるんだよ」

「あ、それニュースで見たわ。勿体ないよな！」

「そう！と言うわけで、廃棄される卵を救済し、なおかつ暗殺も出来るプランを考えてきました！」

「た、卵を暗殺に……う？」

「……………古典的な毒殺か？いや、だったら廃棄卵の件はいらないか。ただ食事を作って毒を盛るってだけじゃなさそうだな」

ちゃっかり乃咲の席に座っていた浅野くんが呟く。

近くにいた不破さんたちは少しやりづらそうにしていたけど、彼の

言葉を聞いてキョトンと首を傾げた。

「浅野くんの言う通り！実はもう少し考えてあるのだー！烏間先生にもお願いして準備もOK！さて、皆さん校庭へどうぞー！」

茅野に賛同されてみんな校庭に続く通路を歩く。道中見かけた烏間先生の苦笑が気になったが、その意味はすぐに理解出来た。

「ぬおっ!?なんじゃこれ!？」

校庭には透明で巨大な山があった。

それだけじゃない。他にも荷台にタンクを引いたトラックや、見たこともない機械に、ボンベに、明らかにただ料理を作るだけではないであろう設備が並んでいる。

「卵であるの形……もしかしてプリンか!？」

三村くんが驚愕の声を漏らす。そしてその声は僕らの代弁だったと言えるだろう。みんなの視線が彼女に集まった。

「その通り！今からみんなでプリンを作りたいと思います……！名付けて、プリン爆殺計画!!」

茅野の迫力溢れる宣言に息を呑んだ。

「前に殺せんせーが言ってたんだ。プリンならいくらでも食べられる。いつか自分よりもでっかいプリンに飛び込むのが夢だって……。ええ……！叶えましょう、そのロマン！ぶっちゃけ私もやりたい!」

目を輝かせる茅野。その勢いのままに彼女は興奮と冷静さを混ぜ合わせたようなテンションで続ける。

「竹林くん謹製のプラスチック爆弾をプリンの底に密閉して置いて、殺せんせーが底まで食べ進めたらドカン！って寸法よ！すっごく、とんでもなく、めっちゃくちや勿体無いけど!!」

なんだかいつも以上に勢いがすごい。そう言えば茅野はスイーツ全般、特にプリンが好きだったっけ。入院してる乃咲へのお見舞いの大半がプリンだったのは彼女からの熱いプッシュがあったからだ。プリンは健康にいいとか、疲れてる時にはプリンだとか、プリン狂を増産したいとかなんとか。

しかし、1人だけノリについていけない人もいる。

「……………暗殺……………?」

浅野くんはキョトンとしていた。

暗殺ってなんだっけ？と自分に問いかけてる顔だ。そして、そんな彼の肩を寄り添うように烏間先生がポンと叩いた。

「やってみる価値あるかもな……！」

「ああ、殺せんせー、エロとスイーツには我を失うところあるもんな！可能性は充分あるんじゃない？」

「それに、今まで後方支援に徹していた茅野が前に出て計画しているのも意外性がある。僕は賛成だ」

「いやいや、プリンだぞ？今まで散々命狙ってきた連中が作った巨大プリンだぞ?!いくらなんでも疑って掛かるだろ?!」

浅野くんは常識と目の前の光景が噛み合ってないらしい。でもまあ、そのうち慣れるだろう。僕らにもあんな時代があった。

「諦めなよ、浅野くん。ここはこう言う場所なんだから」

「そーそー。A組の頭でつかちには無理だろうけど」

片岡さんが声を掛け、カルマくんが煽る。

「……まともなのは僕だけか……？」

消えいりそうな声で呟く彼の肩を烏間先生が2度叩いた。

?? ?? ??

茅野のプリンにかける情熱は凄まじかった。

テキパキと指示を飛ばす姿は頼もしい。

さて、学校の裏山の校庭で人知れず暗殺の為に巨大プリンを作ろうとしている僕らはいくつかの班に分かれることになった。

そんな僕らの中心で駆け回る茅野。作業は順調そのもので、とりあえずは小休止を挟むことに。

何処か遠くを眺める浅野くんは哀愁が漂っている。

「まあ、暗殺なんて非日常に入った初日に校舎よりデカイ巨大プリン建造とか、誰でも困惑するだろ」

「確かに……」

階段に座って空を眺める浅野くんに思うことがあったのか、杉野が

フォローし、前原くんが頷く。

「……仕方ねえ。ちよつと声かけてみるか」

そう言い出すと、彼は躊躇いなく浅野くんの方へ歩いて行った。その場の流れで僕らもついて行くことに。

「よう、優等生。調子はどうだ？」

「……悪くはない。だが、流石に驚き疲れた。僕の常識では測れないことが多すぎる。昨日何気なく見たラピユタの影響であの雲の中にはラピユタがある筈だ……とか、思わず現実逃避してしまいたくなる程度には」

「そ、相当弱ってるな……」

磯貝くんが苦笑した。

でも、浅野くんの反応がきつと正しいものなんだろう。この半年で僕らは普通じゃないことに慣れ過ぎた。

「というか、さつきさりげなく竹林謹製のプラスチック爆弾とか言っ
てなかったか？」

「A組から帰ってきた後、今後の暗殺には火薬の力を取り入れること
になって、僕が取り扱いを覚えたんだ。進路とか成績には全く影響な
い分野だけどいつか役立つかもしれないからね」

「それは素直に凄いな。火薬取扱保安責任者は国家資格だぞ。よくう
ちの授業を受けながら勉強するもんだ。でも少し納得した。こんな
環境で半年以上過ごせば、本校舎じゃ物足りなくもなるだろう。なん
となく気持ちがあわかったよ、竹林くん。僕らの後ろでこんなことが起
きてたんだな」

「まあ、毎日誰かが何かしらの暗殺を仕掛けてドタバタしてはいるね。
それから、僕の事は呼び捨てで良い。取ってつけたみたいな『くん』付
けはなんだかむず痒い」

「そうか、なら遠慮なくそうするよ。竹林」

カチャカチャとプラスチック爆弾を作りながら何気なく友情を深
めてるっぽい2人。浅野くん、さつきまでギャップで驚いてツツコミ
まくつた癖に、隣で爆弾作ってる同級生にはツツコミ入れなくなっ
てるよ。順応が早いな……。

「というか、殺せんせーってのは本当に殺せる存在なのか？聞いた噂的に社会的に殺すのは簡単だろうけど、マッハ20で動き回るし、跳躍して空を飛んで海を渡るとか聞いたぞ？」

「その上、仮に触手を破壊しても直ぐに再生する。E組のメンバーで先生に正面切ってダメージを与えられた人間はカルマと乃咲だけだ。あとは律……キミがさつき座った乃咲の席の隣にモノリスみたいなのがあったらどう？彼女による射撃もかな」

正確にはイトナくんもだけど、彼のことは一旦置いておこう。僕ら的にE組メンバーとは言い難いし、触手を生やした人間とか言い出したら浅野くんがまたフリーズしそうだし。

「でも、弱点がないわけじゃないんだ。エロいことやスイーツなんかに我を失うのは本当だ。だからこうして一見突拍子のなさそうな作戦でも茅野は真面目に計画するし、みんなも妥協なく協力している」
「……………それ以外に弱点はないのか？」

「あ、それなら僕メモとってるよ」

浅野くんの質問に答えてメモ帳を渡す。

それを受け取ると、ペラペラと中身を見た。

「結構、細かく取ってるな。見やすくまとめられてる」
「あ、ありがとう。何かに使えるかもって」

素直に褒められると思わなかったので少し狼狽。

浅野くんはページを進めたり、戻したりして、中身を何度も見返したあと、一言付けて僕に返してくれた。

「案外、弱点は多いんだな」

「そうなんだよ……。ドジだし、バカだし、エロいし。でも、その癖して今だに殺せないんだよなあ……」

「だな。めちやくちや追い詰めて殺せんせーに奥の手を使わせたのも2回だけ。烏間先生はそれでも充分よくやってくれてるって褒めてくれるけど、前提として殺せんせーが俺たちの暗殺にのってくれなきゃそもそもチャンスすらないしな」

前原くんの言葉に同意しつつ、磯貝くんもため息混じりだ。聞いていて僕らも少し暗くなる。

しかし、そこは浅野くん。周りに流されないと言うか、自分をしっかり持っている。僕らの雰囲気になら流されることなく、思い出したみたいに何気なく僕に聞いてきた。

「潮田。殺せんせーの特徴をまとめたページに『鼻がいい』って書いてあったが、アイツは鼻が利くのか？」

「そうだね……。視力も高いだろうけど、殺せんせーの感覚器官が一番敏感なのは鼻かもしれない」

「根拠は？」

聞き返してきた時、千葉くんが答えた。

「夏休み中、A組から勝ち取った合宿を使って暗殺を仕掛けた。その時、俺たちが泊まったホテルの水上チャペルから、ホテルの裏の山にダミーで設置した俺や速水の服から臭いを嗅ぎ取って、俺らが狙撃しようとしてるって警戒態勢を取ってた」

「……なるほど、だとすると、今回のプリン爆殺計画はもう一手間加えた方が良さそうだな」

「えっ？ どう言うこと？」

ぼそつと呟いた浅野くんの言葉を拾っていたらしい、首謀者の茅野が首を傾げる。僕らも急に飛び出した提案に彼をみる。

中にはどんな案があるのかという興味ではなく、ポツと出の癖に、A組の癖にみたいな顔をするのも居たけど、それでも頭ごなしに彼の言葉を遮るのではなく、みんなが聞くことを選んだ。

「千葉の話聞いていて殺せんせーの鼻が良いのは分かった。問題なのはその嗅覚の鋭さだ。ロケーションは海と山。きつと潮の匂いと草木の青臭さ、リゾート地に訪れた人々の匂いなんかもあっただろう。そんな中で離れた位置の2人の臭いを嗅ぎ分けた。と言うことは、だ」

浅野くんは竹林くんの作っている爆弾を指差す。

「火薬の臭い、バレるんじゃないか？ 仮に火薬じゃなかったとしても爆弾特有の臭気みたいなのを彼が感じ取る可能性も無いとは言えない。人間では嗅ぎ取れない臭いだってあるかもしれない。なら、出来るのなら爆弾の臭いにも気を遣った方がいいだろう」

「……………確かにそうだ。盲点だった」

竹林くんが眼鏡を押し上げながら頷く。

僕らも納得した。確かにその通りだ。完成した後に例えプリン匂いがしたとしても、中に火薬の臭いが混ざっていたら殺せんせーは気付くかもしれない。好物の中に紛れた異臭に。

「なるほど……。ありがとう、浅野くん。その可能性は考えてなかったよ。他に気になる点とかあるかな?」

「パツと思いついたのはそれくらいだ。僕は殺せんせーについて何も知らないに等しい。口を出すことで却ってやり辛くなるだけかもしれないからな」

「それもそっか……」

「いつそ圭一にも聞いてみたらどうだ? ちよつとアドバイスするくらいなら今でも出来るだろう」

「うん、そうしてみるね。律、乃咲に電話お願い」

『了解です!』

スマホの中にいる律に話しかけた茅野。スピーカーから聞こえてきた知性ある返答に浅野くんはビクツとしていた。

そう言えばまだ紹介してなかった。話は鳥間先生あたりから聞いていたりするのかな……。あとでしっかりと紹介しよう。

茅野のスマホからコール音が2回。3回目こそろそろ鳴るだろうかと言うところで応答があった。

『もしもしもしもし!』

なんだか聞き覚えのあるフレーズで返事をする乃咲。

「の、乃咲? 随分テンション高いね……?」

『……久しぶりにラピュタ見てたらテンション上がっちゃって。いや、雲の中の空飛ぶ城とかやっぱりロマンあるよな』

「お前も見てんのかい!」

「だからモウロ將軍のモノマネなんてしてるのか……」

「千葉くん、モウロ將軍って?」

「ムスカに『もしもしもしもし!』した人だ」

「く、詳しいね」

千葉くんの意外な知識が飛び出した頃、茅野がかくかくしかじかと状況を説明したらしく、電話の向こうで乃咲が唸る。

『プリン爆発させんの!?!勿体ねえ!』

「だよね!だよね!」

『ああ……!完成したなら校庭に飾るべきだ!校舎と同規模のプリンとか成功したらギネスもんだぞ!』

「た、たしかに……」

『まあ、暗殺の兼ね合いで作ったもんだから、諸々の都合で登録はできないだろうけど』

「乃咲って、なんかスツツってなることあるよな。テンション高い時からの急降下がひでえ」

話が逸れてきた。浅野くんはラピユタの話題が出た時からなんかソワソワしてるし、このままだとプリンとラピユタで時間が潰れそうだと感じ始めた頃、磯貝くんが呆れながら口を挟んだ。

「それで圭一、この計画になんかアドバイスないか?聞いてて気になったこととか、こうした方がいいとか」

『んく、どうだろうな。思い返せばあの人を好物で釣るって夏休み中に岡島が仕掛けたエロ本トラップくらいだから情報が少ない。はつきりとこうするべき、みたいなのは……臭い関係?』

乃咲から出た案は浅野くんと同じだった。

みんなが思わず彼をみる。当の本人は気付いて当たり前みたいなの表情をしていた。

『街の中にいる何百人、何千人の中から1人の臭いを嗅ぎ分けたりできるといいたいだし、好物の中から火薬の臭いがしたら気付かれそうだな。俺が気になるのはそんならいかな』

「そっか……。浅野くんと同じ意見なんだね」

『……………まあ』

すごく長い間を置いて、嫌そうな声が聞こえた。

その声を聞いた浅野くんはニコニコしていたけど。

「それで、だ。圭一。プリンの中にある爆弾の臭いを消すなら、お前はどんな手を使う?」

『そうだな……。爆弾をジップロックで何重にも封止して、2層目からはプリンの匂いの香水とかを使うとか?』

「なるほど、おおよそ僕と同意見だ。だがどうする?冷静に考えて、この為にわざわざ香水を買うのはちとばかり出費が大きくないか?流石に子供の小遣いではキツイだろ」

『暗殺に關係する物資の調達に使った金は烏間先生を説得出来れば補填してくれそうだが……。まあ、香水を売ってる店、それもプリンの匂いなんてのを取り扱ってるところをピンポイントに探すのも確かに手間だよな』

「プリンの匂いとして代用出来そうなもの……。あまり高価ではなくて、入手しやすいもの、か。考えられるのは……。小学生の女子とかが使ってる匂い付きの消しゴムか?」

『まあ、その辺になるよな。流石に調べたことないから断言はできないが、プリンの匂いとかは普通にありそうな気がする』

「あとは……。えっと、茅野さん?だったか。今回作るプリンには具体的にどんな物を入れるつもりか聞いても良いか?」

「えっ!?あ、うん。えっと……」

ここで話を振られるとは思ってなかったらしい茅野が急に呼ばれてビクツとしたあと、慌ただしく計画書をめくった。

「使うのは基本的なプリンの材料だよ、それに加えて寒天とか、フルーツソースをオブラートに包んだやつを味変で使うつもり。いくらプリン好きでも、こんなに大きいのをそのまま食べ続けると飽きちゃうかもしれないからね」

「凄いな……。拘り抜いてる。寒天はこれだけ大きい巨大を支える為のセメント代わりってところか。よく計算されている。にしても……。フルーツソースか。これならプリン消しゴムが見つからなくてもなんとかなりそうだな」

『ああ。匂い付きの消しゴムなら子供の小遣いでも充分に手が届くし、ソースが複数あるなら臭いのカモフラージュにもなるだろう。文具店とかになら普通に置いてるだろうし』

流れるように解決策と改善案を出す乃咲と浅野くん。

すごい。ここまで話を振られた茅野以外誰も口を挟めなかったし、それでいてあつという間に問題を解決してしまった。

これが主席2人の実力。そうだ。浅野くんは元々トップにいたから気にならなかつたけど、学年最下位の不良児という肩書きが目立ちすぎていただけで、乃咲だって元々彼に並んでいたんだ。

E組に来て、殺せんせーと出会って立ち直った乃咲。そんな彼がずっとトップに君臨し続けていた浅野くんと再び並んだ。それも今は肩を並べて同じターゲットを殺そうとしている。

櫛ヶ丘の主席がどれだけ高いハードルなのか知ってる僕らにとって、その位置に並び立っている2人の存在は心強かった。

「この中で脚が速いのは？」

「えつと、俺とか岡野、前原もかな」

「茅野さん。彼らを少し借りても良いかな？」

「あ、うん。大丈夫だよ。匂い付きの消しゴム買いに行くの？」

「やれることは惜しまずやろう」

「……つてことだけど3人はいいかな？」

「別に構わねーよ」

「成功率が上がるなら断る理由ないしね」

「んじやあ行きますか」

「うん、じゃあ、浅野くん。そつちはお願いね。一応使う予定のソースの種類は3人に送っておくから」

「ああ、分かった」

まだ慣れてないのにテキパキ動く浅野くんに頼もしさを覚えながら走り出した4人を僕らは見送った。

加入するタイミングが良かったと思う。これが平日の学校だったら、僕らは彼のことを敬遠していたかもしれない。

『デカイプリンか……。俺もやりたかったなあ』

「あはは、んじや、元気になったらバケツプリンでもやろうか？」

『まじ？んじやあ楽しみにしてるわ。あと、プリン完成したら写真ちよーだい。めちやめちや見てみたい』

「はいはい。それじゃ、切るね」

こっちはこっちで電話を切った。

電話越しに聞こえる声はすっかり元気。あとは戻ってきてくれるかどうかだけど……。どっちにしろ、僕らは今後も彼を頼るだろう。彼もなんだかんだで巻き込まれに来てくれる気がする。

「よし、じゃ、作業再開するよ！」

「「おうー！」」

茅野の元気な声と共に僕らはプリン作りに戻った。

??

??

??

「おおおおお……っ!!」

プリン作りは実に3日に及んだ。土日と祝日がつながっていて良かった。そうじゃなかったら完成しなかっただろう。

茅野のプリンに対する膨大な知識と情熱に当てられながら無我夢中で色んな作業をした。その結果、見事に僕らの校舎よりも大きいプリンが出来上がった。

「すっげえ……この底に爆弾あるとか信じらんねえ！」

「ほんとほんと！すごい美味しそう！」

「うんうん。研究した甲斐があったもんですよ！」

満足そうに頷く茅野。正直、驚いてる。

いつも後ろからそっと暗殺を手伝ってくれるから、サポート向きだと思ってたけど、好きなことに関してはここまで行動力があるとは思わなかった。

不良児も、芸術家も、エロも、プリンマニアも。ここではみんな自分の強みを持った暗殺者だ。

「おっけー！圭ちゃん用にも写真撮ったよー」

両手で丸を作りながら倉橋さんが言った直後、辛抱堪らん！と言った具合で殺せんせーが身を乗り出した。

「こ、これ！本当に先生が食べても良いんですか!？」

「どーぞー」

「廃棄卵救いたかっただけだからさ、勿体無いし、全部残さず食べ

ちやつてよ」

「もちろんです!!」

殺せんせーがプリンに飛び込んだのを見届けて僕らは校舎に入る。校舎に入った僕らがやるのは起爆の見届けだ。

みんなで巨大プリンがみるみるうちに小さくなっていくのを見守りながら、烏間先生から借りたノートPCの画面に集中する。

「起爆のタイミングは殺せんせーが食べ進めて、うっすら陽の光が画面に差し込んだ瞬間だ」

念を押すように言う竹林くんに頷く。

「……………本当に早いな」

そんな中、ポツリと浅野くんが呟く。

なんだか、今日一日で今まで見たことのない彼をたくさん見た気がする。理事長に似て何事にも動じないように思えて、意外と驚いたり、長い顔をしたり、人間味があった。

これまで散々僕らを差別してきた本校舎の生徒。そう言う意識は確かにあるし、苦手意識がなくなったわけじゃない。それでも、今までより、親近感みたいな物を抱けた気がする。

「だろ?あれで最高速度じゃないんだぜ?」

「……………だな。もしかしたら俺たちですら殺せんせーのトップスピードは見たことないのかもしれない」

磯貝くんと千葉くんが頷いた。

「プリンを食つてるところを見ながら言っても締まらないが、失敗したとはいえ、あんなのを何度も追い込めてるんだろ?それは素直に凄いなと思うぞ。確かにあんなのを見たら人間の投げる野球ボールくらいなら止まって見えるだろう」

「いや、流石にそんなこと言えるの乃咲くらいでしょ」

「つと、みんな、そろそろだ」

短く、しかしこの場の誰もが待ち望んだタイミングが訪れる。殺せんせーを呼びつける前、浅野くんの提案で木の枝に設置した隠しカメラ。そのレンズが殺せんせーの狂喜乱舞しながらプリンを食べ進める様子を僕らに届ける。

やっぱり食べるスピードは早い。僕らの視界では捉えられないところではみるみるうちにプリンが減っていった。

爆弾視点のカメラにはいまだに光は映らない。それでも、設置しておいたカメラの様子でその瞬間が迫っているのがわかった。

みんなの手に汗が浮く。今日まで何度も暗殺を仕掛けて来たけど、作戦の決め手。トドメの瞬間を見届けるこの緊張感は何度やっても慣れることはない。

みんながごくりと生唾を飲んだ瞬間のこと。

「ふううく。ちよつと食休めです」

「っ!」

僕らの後ろから声がした。

振り向くけど、その場にいる全員がその声の主を知っていたし、その触手に握られた袋の中に眠る爆弾を見てギョツとした。

「いやはや、危ない所でした。あともう少して粉微塵に吹っ飛んだしまう所でしたよ」

「……どうやって見抜いたんですか？爆弾は臭いとかも気に似ておいたのに」

眼鏡を人差し指で押し上げながら冷静に質問する竹林くんにニヤリと口元を釣り上げた殺せんせーは答えた。

「ええ。爆弾の臭いに着目した点はお見事でした。そして臭いを誤魔化すためにプリンに使ったフルーツソースと組み合わせて果物の匂いが付いた消しゴムを同封しておく発想も素晴らしい。これは竹林くんが?」

「いいえ。浅野くんと乃咲の案です」

「ほう。どうやら早速皆さんの力になってくれてるようですね。浅野くん。その調子でこれからも頑張ってください」

「……………はい」

殺せんせーからの激励に彼は思いの外、素直に頷いた。

「そして私が爆弾に気付いた理由ですが、それは匂いと味です」

「……………どういうこと?」

「プリンからはとてもいい匂いがありました。プリン特有の甘い匂いだ

けではなく、フルーツの匂いもね。事実、食べ進んでいるうちにいくつかのフルーツの風味を感じました。これは茅野さんの飽きが来ないようにという気遣いですね？」

茅野がこくと頷く。

「素晴らしい心遣いです。それに被せて匂いを誤魔化す作戦もお見事。ですが……フルーツは同じ種類であっても、品種によって匂いが異なります」

「っ、そっか。確かにそうかも」

「匂いが強いものもあれば、弱いものもある。そこで先生気づいちゃいました。プリンの風味とは別の臭いの存在に。初めは違う品種、メーカーのソースを使ったのかと思いましたが、食べど進めどその風味はしない。なので臭いの元を辿って見たところ、これを発見した次第です。異なるソースの味を求めて探して見たら爆弾だったわけです」

「嗅覚がすごいと聞いていたが……ここまでとは」

浅野くんが驚いているけど、正直言つて僕らも驚いてる。確かに殺せんせーの嗅覚の鋭さは知っていたけど、ここまで強いとは思わなかった。

「ヌルフッフ。しかし、何度も言いますが本当に見事な作戦でした。正直な話、目の前の好物に踊らされて死にかけてしたのは初めてです。これに懲りることなく、今後も挑んで下さいね？」

ほんと、いろんな意味でこの先生は手強い。

「さて、暗殺の評論についてはここまでにして……プリンを食べましょう。綺麗な部分をより分けておきました。折角作ったんです。皆さんも是非味わって下さい」

殺せんせーは何処からかデザート用の容器を取り出して小分けにしたプリンをみんなに配りながら話す。

「ただし、廃棄予定のモノを食べてしまうのは厳密には経済ルールに反する行為です。食べ物の大切さと合わせて次回の公民で考えましょう」

「「はーん」」

この人は、狡い。暗殺のターゲットをしながら、結局は授業とか僕らの教育に話をうまいこと運んでしまう。

なんだかんだ、僕らの暗殺は殺せんせーの手によって成長の場に変えられてしまうのが悔しいようで、それ以上に楽しかった。

「はい、浅野くんのです。どうでしたか？初の暗殺は」

「……正直、楽しかったのは本当ですが、それ以上に驚き疲れましたね。僕の常識とはかけ離れたことが多すぎた」

「ニユルフフ……。そういうことでしたら今後も期待して下さい。この教室がキミを飽きさせることはないでしょう」

「……………まあ、そうでなければ面白くないですからね」

浅野くんはぶつきらぼうに言いながらプリンを口に運ぶ。一口食べたあと、『あ、美味しい』みたいな顔をして、前原くん達に引きずられていった。

「さて、先生は乃咲くんに届けて来ます。1人だけ除け者なのも寂しいですからね。それでは皆さん、また後で！」

バビュンと飛んで行く殺せんせー。彼を見届けた後、僕らは茅野に話しかけた。

「惜しかったね、茅野」

「あはは、まあね」

「……………プリン爆発させずに済んで、むしろ安心した？」

「ギクツ……………」

カルマくんのニヤリとした質問に彼女は肩を振るわせた。

「どうやら凶星だったらしい。」

「でも、楽しかったよ。それに意外だった。茅野がここまで徹底してやるとは思ってなかったからさ」

僕が感想を伝えると、茅野は不敵に笑った。

「ふふ。本当の刃は親しい友人にも見せないものよ？また絶対にやるから。ぷるんぷるんの刃なら他にも色々持ってるんだから！」

青い空に白い飛行機雲を描きながら飛んで行く殺せんせーに狙いを定めるようにプリンを向け、笑う。

ここではプリンマニアも立派な暗殺者。きっと、今後も誰かが意外

性のある作戦を立てて、僕らを驚かせるんだろう。次は誰が刃を露わにするのか、僕は少し楽しみだった。

?? ?? ??

「……………プリンうめえ」

圭一は密かに目覚めていた。

86話 散歩の時間

「ふむ……。身体はもう大丈夫だろう。自覚症状的に何か気になることはないかね、乃咲くん」

「……実は、最近何故か息苦しくて」

「……………妙だな。検査結果には異常はなさそうだが。具体的にどんなふう息苦しいんだい？」

「慢性的なモノではないんですけど……。病院の窓から登校途中の学生の姿を見たり、夕方、ジャージ姿で走ってる運動部らしき学生を見ると……。妙な手持ち無沙汰感と共に喉が詰まるような息苦しさに襲われるんです」

「……………他には？」

「ネットとかを見て、気になったことを考えたり、調べたりしようとする、『あ、そう言えば考えすぎるからこの辺も禁止されてたっけ』と思いついた時とか。勉強も運動も何もせずにはぼーっとしていたり時とか特に酷いです」

「うん、ワーカホリックだ。つける薬はない」

お医者さんにももの見事に真つ一二つにされたのだが。

つか、ワーカホリックってなんだよ。中学生がなるもんじゃねえと
言うか、俺のどこがそれに当てはまると言うのか。

「ともあれ。確かに全く何もしないのも良くないのは事実だ。体調も安定しているようだし、軽い散歩くらいなら許可しよう」

「マジですか、いいんですか？」

「ただし、あくまで常識的な距離、かつ、違和感があったら即座に留めること。ランニングとかジョギングになりそうなスピードは出さないこと。あと、階段を駆け上がらない、駆け降りない。必ず手すりを使うこと。それでいいのなら」

「はい、分かりました。それでお願いします」

「……………分かった。受付には話をつけておこう。外出許可は長くて1時間だ。院外へ出る時は必ず受付に外出すること、どの辺りを歩くかを

告げて、渡されるGPSタグを必ず身につけるように」

「GPSタグなんてあるんですか」

「外出を希望する患者は意外に多くてね。キミのように退院間近で日常生活に戻るにあたり、ある種のリハビリが必要な者、体調が安定して来たタイミングで家族同伴で外の景色を眺めての気分転換を望む者には必ず配布している。万が一、何があってもすぐに駆け付けられるようにね」

「さ、流石大病院……」

確かにリハビリスペースだって有限だ。事故にあつたり、その他の要因で立ち上がることも難しい人は大勢いる。そんな人たちにスペースをあてがって、比較的健康な者は散歩などで体力を作らせるのは理に適ってる。

なんかあつた時の為にGPSを付けるというアフターフォローも万全だ。思わず感心する。科学の力ってスゲー！管理社会極まれり、と思わないこともないけど。

?? ?? ??

病院の外で散歩していい。そう聞いた後の動きは早かった。

父さんが持つて来てくれていた着替えに袖を通し、充電バッチリなスマホと財布をポケットに突っ込んで、病室を出る。

受付の人に先生から言われた内容を告げ、タグを受け取り、いざ外出。俺は久方ぶりに青空の下に立った。

空気を吸って、吐いて、吐き過ぎて咽せる。

たっってお外を歩ける感覚に感謝だ。ここ最近、病室に籠りきり。それ自体は特にダメージはない。もともと、どちらかと言えばインドア派だったから。

しかし、それは室内で出来ることがあれば、という前提に限った話である。ゲームなど出来ないことはなかったが、みんなが勉強やらをしている中、自分だけと言うのは申し訳ないので出来ず、アニメや漫画も然り。

ジブリなんかは国語で取り上げられたりするので甘めに見てセーフ判定を下し、ラピユタを見たりしたが、限界は来る。

世の中の情報を収集しようとテレビを見るが、ニュースなんかはほぼほぼ終わった後。本当にやることがない。

さて、そうなることやれることは看護師たちに目をつけられない程度に病院の中を徘徊することくらいなのだが。ここで一つ、問題に気付いてしまった。先日、浅野に殺せんせーの存在がバレた時にも軽く思ったことだが、体力が落ちまくっていた。

流石に少し歩いた程度で息切れしたりはなかったが、階段の上り降りで息が切れた時は思わず苦笑した。

と言うわけで、体力を取り戻す第一歩として散歩をしようと言う訳だ。まあ、久しぶりに帰って来た地元を見て回りたいて思惑もなくはないが。だって2年ぶりだしね。

『乃咲さん、乃咲さん』

「ん？」

いざ歩き出そうとした時、律に呼ばれた。

「どつたの」

『乃咲さんの地元、私も見て見たいです』

何かと思えばそんなことか。

「分かった。別にいいぞ」

返事をしながら胸ポケットにスマホを突っ込む。カメラが出るようにしたので一応は律にも見えてる筈だ。

「視界は？」

『良好です！』

「んじゃ、行くか」

ちなみに現在時刻は16時ちよつと前。この時間を選んだ理由として、この時間なら私服の学生が歩き回っていてもギリ違和感ないだろうと踏んだからである。

まあ、事実、制服姿の学生がうろつき始めたので俺の読みは当たらずとも遠からず当たっていたようだ。

近くにはアパートやマンションなんかもあったりするので私服の

学生がいたとしても別に補導されたりはしないだろう。

少しだけ周囲の様子をみて、本当に問題がなさそうであると確信すると俺は悠々と思うがままに歩き出した。

『ここが乃咲さんの地元ですか』

「ああ。流石に都心の真ん中程じゃないけど賑やかだろ?」

『はい。と、言っても私は基本的に皆さんの生活圏内のことしか知らないんですけどね。精々、殺せんせーが皆さんを連れ出して飛び回ってる先のことしか分からないです』

「俺ら殺せんせーに連れ回されて結構外国とかまで行ってるんだが……それを精々と言っているのか?」

律の言葉に思わずツツコミを入れるが、周りからしたら律だけでなく、俺自身もきつと無自覚なだけでツツコミどころ盛り沢山なのかもしれない。この1週間ちよつとでそんなことを考えられるようになった。

しかし、ここまで非日常が日常になっていると、本当に殺せんせーを殺せた時、周りとの温度差というか、感性の差が酷いことになりそうだ。というか、周りに殺し屋と国の工作人員と地球を破壊する超生物がいるのが当たり前という状態の奴が本当に世間一般的な日常に戻れるのだろうか?

「あーっ！くそっ、惜しかった!」

何気なく歩いてた街中。ゲームセンターの前に据え置かれたUFOキャッチャーで白熱している高校生を見る。

言葉とは裏腹にちつとも惜しくない。モノを掴むまでの操作テクは確かにあるが、肝心なのはアームだ。品物を掴んだ時、微かにアームが開いた。あの程度で開く様ではアームの強さはたかが知れる。正攻法で取るのは無理だろう。

散歩という目的を忘れ、なんとなくゲームセンターに入る。

下校時間真っ只中なだけあって、学生で賑わっている店内を歩いていると、色んなモノが見えてくる。

例えばゾンビ物のガンゲー。アレなんかは俺たちならシステムの無理がない限りは余裕で攻略出来るだろう。

例えばエアホッケー。E組生徒なら店の視線を釘付けにする様な超次元バトルを繰り広げるに違いない。

例えばメダルゲーム。普段からターゲットの隙を狙ってる者なら、どの台が狙い目か当たりを付けて荒稼ぎ出来る。

たかが街中のゲームセンター1つとつても、E組で培った能力は充分に発揮される。きっとそれはゲームのみならず、自分の得意分野はもちろんのこと、凡ゆる分野で通用するだろう。

だが、それは普通じゃない。一度非日常を知ってしまったから、俺たちの基準は今後、何をどう足掻こうとも周りとはズレてしまうのは間違いない。周りが〇〇って時速何百Kmなんだってさ！速いよな！とかはしゃいでいても『殺せんせーの方が速かった』と感じてしまおうだろう。

そういう感覚のズレは周囲との温度差を生み、温度差は確執を招き、いつか決定的にすれ違ってしまいかもしれない。

現に、暗殺教室が始まってから4ヶ月しか経っていないのにも関わらず、俺の基準は狂い、こうしてズレを実感するところまで来てしまった。教師の基準が殺せんせーになっているのもきつと良くない。E組の環境を当たり前前のように思ってるのだって同じ。

A組に残るか、E組に戻るか。

A組に残れば、この感覚をみんなよりも一足早く矯正できるかも知れない。世間一般的な日常に溶け込む練習ができる。来年も地球が存続するのなら、E組に戻るより生きやすくなるだろう。だが、その代わりに殺せんせーや烏間先生たちからの指導を受けられなくなる。成長の機会は失われる。

E組に戻れば、成長する機会を沢山得るだろう。切磋琢磨し、考えを共有できる友人達に囲まれて、今よりも一回りも二回りも大きくなる。だが、成長した結果、周りとのズレは矯正できないほど大きくなるかも知れない。結果的に、非日常を知るが故に、そこにいるのが当たり前になっっているが故に、来年も地球が存続するのなら、確実に生き辛くなるだろう。

倉橋さんを始めとしたみんなが言ってくれたし、自分でも思っ

る。結局一番大事なのは俺がどうしたいか。

成長を妥協し、生きやすさを取るか。

成長を続けて、生き辛くなるのか。

この2択こそが、この休学中の間に自分なりに考え、E組の環境を外から俯瞰し、世間と自分を照らし合わせた結果、見つけることができた、A組に残るか、E組に帰るのかという問いを将来を見据えた場合の本質なのだと思う。

そりゃあ選び難いだろうさ。後先考えずにパツと答えて良い内容じゃない。

「……難しいもんだな」

思わず呟いた。

殺せんせーはこの前言ってくれた。『まだ子供なのだから失敗から学んで大人になれば良い』と。

父さんが言ってくれた。『お前が間違ったのなら、一緒に背負う。お前の罪は私の罪だ』と。

2人とも間違うことを否定しなかった。片や失敗から成長しろと。片や責任と一緒に背負うと。俺の選択に委ねてくれた。

2人の大人に甘えて、とりあえず好きなことを選ぶ。子供ならそれで良いだろう。だが、俺は子供と言っても、中学3年生。次の3月、奇しくも暗殺期限当日に15歳になる。

15歳。まだ子供だと言えるだろうが、20歳から正式な大人だとすると、数値だけ見れば4分の3はもう大人だ。

好き勝手にやって、あとは大人にお願いしまーす、なんてやるのは良い加減恥ずかしい歳だと言えるだろう。

まして、今考えているのは自分の将来についてだ。その辺の責任を子供だからと大人に丸投げするのは情けない。

自分はどうしたいのか。俺はこれに対する問いかけに弱い気がする。今回も、この前のも。この手の話題は悶々としがちだ。

結論を出さなきゃいけない期日まで残り少ない。夏休みの時と比べて考える時間が短すぎる。

ここまで考えても答えは出なかったのだ。これ以上1人で考えて

も良いことはないだろう。

素直にみんなを頼ってみるか。ここで1人で考え続けるのは失敗の元だと今回の件で俺は学んだ。

前までは自分の将来に影響することの相談は無責任だと思っていた。だが、今は違う。相談することは無責任ではなく、相談した内容を失敗した理由として振りかざすことが無責任なのだ。

だから、最終的に選ぶのは自分。そのたった一言を忘れない様心がけて相談してみるとしようか。

自分なりに行動方針を固め、やるべきことは決めた。ぼちぼち時間も過ぎたことだしそろそろ帰るか。

自分の考えを自分で肯定する様に領き、出口の方を目指して歩き出そうとした。まさにその時のこと。

「おい、待てよそこの銀髪」

なんだか品のない声で呼び止められた。

歩き出そうと振り返ったばかりだと言うのに、さっきまで自分が見ていた方を再度向き直すハメになる。

「お前、なにさつきからガン付けてくれてんの？」

そこにいたのはいかにもなヤンキーだった。

着崩した学ランからはみ出るシャツがダラシない。だが、その風体は妙に懐かしかった。

思えば、不良に絡まれるのは修学旅行以来だ。その前はもったいもない感じの奴らに絡まれていたと言うのに、3年生に上がってからは本当になくなつたな。

柄の悪そうなのが3人。明らかにこの辺をシめています。みたいな態度だ。ヤンキー、それも番長気取りか。

柵ヶ丘でもこんな居たなあ……。最近は本当に見なくなつたけどさ。もしかして懐かしさの原因はそこかな。

「ごめん。別に意図して見ていた訳じゃないんだ。少し考え事をしてぼーっとしてた。ほんと、他意はないからさ」

「あ？そのいかにもな目つきでそれは厳しいんじゃないか？」

「おお……っふ」

懐かしい。そういえば初めて不良に絡まれた時も目つきの悪さが理由だったつけ。確かシチュエーションもこんな感じだった。

「ほんとごめんだけど、そんなつもり無かったんだ。勘弁してよ、喧嘩とか危ないからさ。怪我しちゃうよ」

「んだよ……。目つきの割に随分と弱気な」

うるせえ。目つきは自然とこうなったんだから仕方ないやろがい。と内心で叫ぶ。声には出さない。だって、声に出したらもつと面倒なことになりそうだし。

しかし、助けておまわりさーん！をやるのもなんかダサイ。それに万が一、病院や父さんに話が伝わるのは避けたい。

別に適当な言葉を並べて乗り切るのも良いが、ここは地元である以上、また鉢合わせるかも知れないし、その時に再度絡まれるのは面倒だ。かと言って、痛め付けるのは良くないだろう。

絡まれたからと言って殴り掛かっていては、成長がない。喧嘩ばかりしていたあの頃とは違い、言葉や行動、実力を見せて黙らせる術を今の俺は持っている。

経験上、この手の輩は明確な力の差が判れば近づいて来なくなる。彼らの土俵で、彼らに暴力を振るうことなく、明確に力の差を理解させる方法。

別に緊急時でもないし、クラブプスタナーを使うのは避けたい。そんなことを思いながら店の中を眺めるとふと、良さげなゲームを見つけた。カルマと一回だけやったことがある。

「あの、喧嘩とは嫌だけど、代わりにアレで勝負しない?」

「アレ?……。パンチングマシン?」

「ですです。アレでこっちのレコードがそっちより低かったら、なんでも言うこと聞くからさ。こっちが勝ったら2度と突つかかってこないでくれるかな?」

「おい、なんか喧嘩嫌だとか言ってる割に妙に喧嘩腰で強気だぞ、コイツ……。なんか矛盾してね?」

だってお前ら人の話聞かないじゃん。今までこの手の相手に何度話し合いを持ちかけてスルーされたことか。

結局のところ、実力行使が一番手っ取り早い。が、今後の課題は実力差を見せることすらせずにスマートフォンに解決できる様になる事だな。言葉で丸め込み、それでいてもう絡もうとは思えない印象を残す。そんな芸当もできる様になりたいもんだ。

「大丈夫だよ。かれこれ1週間くらい入院してたからかなり筋力衰えちゃってさ。大した記録も出ないと思うし」

「入院……？いや、なんでそんな奴がこんな所にいるんだよ？」

「良くなってきたから気分転換に散歩しようと思っただよ。入院する前に死ぬかも知れないって診断されてね。随分前にこの街から引越したんで故郷が懐かしくて見て回ってたんだ。私生活でも悩み事が多くてついぼーっしちゃってね。何気なく眺めてた先に君らがいて、こんなことになったんだけど」

「……にしたって目つき悪過ぎだろ。どんなこと考えてたんだよ。いや、余命宣告？されたらそうなるのかもしれないねえけど」

「将来についてさ。10年以上までもに会話したことがなかった父さんと話せる様になって、自分の進路について考える機会ができてさ。目つきに関しては大目に見て欲しいかな。家族との不仲、周りの軋轢で気が付けばこんなになっちゃって。今回見たいによくヤンキーに絡まれるんだわ」

「……………なあ、もう放つといてやんね？」

「……………だな。なんか可哀想だわ」

あれ。なんかヤンキーたちの反応が妙だ。

好戦的で高圧的な態度はなりを潜め、可哀想な奴を見る目というか、なんとなく慈悲のようなものを感じさせる目が変わった。

コイツら実はベタなヤンキーなのか。雨降る帰り道に見つけた子猫を拾って帰ってしまう系のやつらなのか。

「あー、その、なんだ。悪かった」

「いえいえ。こっちも次から誰かを見てると思われない様にポケーつと口を半開きにしながら斜め上を見る様にするよ」

「それはそれで周りから心配されると思う……………」

最近の不良は意外と話せば分かるらしい。

俺ってばコミュニケーションレベル上がったんじゃない？コミュニケーションからコミュニケーションマスターに進化できるのでは？

さて、しかし、それはそれとして消化不良だ。

別に喧嘩したかった訳じゃないが、ヤンキーに絡まれたり、パンチングマシーンを見て懐かしくなっちゃったのは事実。

ここまで来たら一度くらいやってみるか。

「呼び止めて悪かった………ってどこに行く」

「折角だし、一回くらい挑戦してみようと思って」

「ふーん……。やめといた方がいいと思うぞ。殴り方知らないと手首痛めたりするし。入院してるんだろ？」

「そうだぜ。折角話せるようになった親父さんに心配かけるの良くねえって。遊ぶなら別のにしておけよ」

「いや、お前ら優しいかよ。ヤンキーさながらに因縁つけて絡んで来た癖にどう言う心境の移り変わりだよ」

「……別に俺らヤンキーじゃねえよ。ちと部活で色々あってストレス発散したかっただけだ。上手くいかないことがあつてよ。全国にギリギリで行けなかったんだよ。んで、引退が決まって、やさぐれてただけだ」

その一言を受けてなんとなく彼らを観察してみると、確かにスポーツマンの様な特徴が見える。短髪と言うには短すぎるが、坊主というには長い。部活を引退して髪が伸びてきたってところか。よく見るとガタイも良い。脂肪ではない厚みがある。

「まあ、余命宣告みたいなの受けた上に、10年以上家族と不仲で、周りと軋轢があつて、将来に不安を抱えて、入院中とか言う激重属性持ちにあつたらなんか馬鹿馬鹿しくなったけどな」

うーん。こうして自分のこれまでを列挙されると確かに属性が重いな、俺。ここに母と生後間も無く死別、学校全体から差別され、国の陰謀で暗殺者になる、とか更にヤバい属性を追加できなんだから恐ろしい。

「そうか。俺の境遇が立ち直るきっかけになれそうなら良かったよ。あ、それと、パンチングマシーンに挑戦するのは初めてじゃないから

そんな気にしてくれなくて良いよ。なんとなく懐かしくなってるやりに
たくなっただけ」

でもまあ、何気なく語った過去が『コイツよりはマシ』と受け取ら
れて誰かの立ち上がるきっかけになるなら良いか。

俺はそこまで伝えると、彼らの横を通り抜けてマシンの前まで来
た。いくつか静止の声があったが、止まる気がないと伝わったのか、
その場の流れで彼らも付いてきた。

ふむ。見たところ起き上がり式だな。ゲーム機の的を殴り倒して、
的が倒れる速度でパンチ力を測るヤツだ。

規定の料金を入れて、備え付けられたグローブをはめる。自分のコ
ンディションを測るには良い指標だ。不良時代にカルマとやった時
に比べて記録はどう変動するのか。母さんから遺伝した人体強化の
影響があるにしろ、その数日の入院生活でどれだけ鈍ったのか確認す
るにしろ、な。

「前にやったとか言ってたな。その時の記録は？」

「去年のちょうど今頃。確か、189とかだったな」

「……………いや、バケモンかよ」

「別にそうでもないだろ。友達も180代出してたし」

あの時は確かカルマと賭けてたんだ。んでアイツより数値が高く
て、アイス奢って貰ったんだったかな。

ま、色々といレギュラーはあるが、自分の成長を確認できる良い機
会だ。ゾーンに入らない程度に全力でやろう。

「ッ……………！」

マシンの前に立ち、感触を確かめる様に数度、グローブを手に打
ち付けてから、拳を振り被る。

思えば、何かを殴るのも久しぶりだ。鷹岡以来だろうか？殴るのが
好きと言うわけではないが、腕が鳴る。

振りかぶったを真っ直ぐ正面へと撃ち抜く。

ズパコーン！という快音がゲームセンター内に響く。この店内に
いた凡ゆる人々の視線を独占する。

響き、轟いた破裂音に驚きから視線を向ける者たちの顔が驚愕に変

わる。特に俺に付いてきた運動部の人たちを始めとした俺の後ろ辺りにいた者が顕著だ。

「……………マジかよ」

そのあからさまにドン引きした声は誰のものだったか。一瞬の静寂の後、パタパタと店員が走ってくる。

そして、店員もまたゲーム機の前に来ると呆気に取られた様に立ち尽くし、拳を振り抜いたままの姿勢で固まる俺とつい数秒前の形を保っていないパンチングマシーンを見比べた。

俺自身、驚いた。目の前のゲームはもはやその役目を果たすことが出来ない状態へと変わってしまったていた。

拳を振り抜いた時、違和感があった。何故なら、殴った筈なのに全く手応えがなかったからである。

殴り、違和感を覚え、脳裏に疑問符が浮かんだ刹那。轟音と共に的だった物は根本から雑草でも引っこ抜いた見たいにケーブルをむき出しにして浮き上がり、ぶっ飛び、これまでの最高記録を記していた画面にめり込んだ。

驚いた。それはもう驚いた。一瞬、現実が理解できなくて頭の中が真っ白になった程だ。

父さんに身体強化の話をされ、常人より少し身体能力が高い自覚があった。でも、そんなに決定的なものではなく、精々特に鍛えたりしなくても力が少しだけ強いとか、そんな程度だと思っていた。でも、意識していたのは本当にその程度だった。

自分の身体能力は知っている。特にゾーンを使っている時なんかは、周りにとつて瞬間移動してるに等しい速度で動いているらしいことは普久間島で悟った。

でも、ゾーンを使っていない時は大したことがないと思っていた。中学生以上、烏間先生未満みたいなもんだと思いついていた。だって、これまでの生活で自分の身体能力にびっくりするほどのことがなかったから。

結論、何が言いたいのかと言えば。

こんなつもりはなかったんです、ごめんなさい。

「お、お客様……。お怪我はありませんか？」

口元をヒクヒクさせた店員が聞いてくる。

この状況で客の心配をする店員の鏡である。

「ご、ごめんなさい……。その、あの、こんなつもりはなかったんです。えつと、これって……。あはは、べ、弁償ですかね」

「えー、えー……。あー……。こちらのマシーンもだいたい古いものでして、経年劣化から衝撃に耐えられなかった……。などと言うことも……。ありえるのかなあ……。いや……。あー……。念の為の確認なのですが、お客様、これと言ってドーピングの類い……。いや……。ハンマーなど道具を使った訳では無いんですよ……。？」

「あつ、それは自分らが見てました。彼は特に何か飲んだり、食べた、使ったりしていません」

「あー……。あー……。そ、そうですか。えつと、で、でしたらお気になさらないでください……。特に悪意なども無い様ですし……。じ、事故ということ……。？」

「分かりましたっ！お騒がせしてしまいすみませんでしたあつ！ほら、行くぞ白髪頭！お前も頭下げろ！」

「えっ!?あつ、ごめんなさいでしたっ!？」

彼らに腕を引っ張られ、何が何だか理解が追いつかないうちにゲムセンターの外に連れ出された俺は、彼らに引き摺られながら逃げる様にして、この場を後にした。

??

??

??

「コオオオオオオオオオオ……。コオオオオオ」

「暗黒卿なのか波紋なのか分かりづらい呼吸すんな」

「仕方ないやろが。こちらとら走ることで自体久しぶりだったの……。！
帰宅部の体力多めに見てるんじゃないぞ」

「どんな怒り方だよ」

なんだかんだ言っつて、この運動部員達に連れられて随分と遠くまで来た。時間はまだ余裕だが、やはり体力的にキツイか。

ぜえぜえと息を切らしながら彼らを見る。流石に運動部なだけあつて、息自体は直ぐに整えて余裕そうにしていた。

「にしてもすげ〜パンチだったな。実はボクサーとかだったりしないの、お前。出鱈目すぎんだろ」

「だよな、俺、ちよつとチビつたもん」

「うわ汚つたねえな。でもまあ、気持ちは分かる。あのまま喧嘩してたら俺ら殺されてたんじゃねえ?」

「流石に殺したりしねえわ。俺をなんだと思つてんだ」

「化け物」

「怪物」

「……………若白髪?」

「コイツら…………」

失礼すぎるだろ。つか、何気なく馴染んでる俺もなんなんだよ。出会つてまだ10分弱だぞ。

「白髪というか、お前の銀髪で思い出したわ。そう言えば東京の方に”銀の死神”とか言う不良いるらしいな」

「あつたなあ、そんな都市伝説。デマだろ」

「そんな噂あつたな。不良100人を全部一撃で倒したとか。しかもネットの都市伝説になつてたんだけどさ、沖縄のホテルでヤクザとかチンピラとかをぶつ倒した中学生くらいの子供がいたらしいぞ。そんな中に銀髪の奴がいたとか」

「へ、へえ…………」

都市伝説になつてるのか。なんか色々誇張されてるし。

つか、どこまで独り歩きしてるんだよ”銀の死神”。

「案外、銀髪つて多いのかもな」

「……………かもな。俺の同級生にもいるし」

菅谷。アイツも銀髪と言えるだろう。しかし、こんだけいろんな噂が独り歩きしていると、同じ髪色だからとアイツにまで要らない影響を与えていないかが心配だな。

「あーあ、にしても濃過ぎる放課後だったわ。むしろくしゃして絡んだ奴がメチャクチャな境遇の奴で、その上パンチングマシーンをぶつ

壊すポケモンとか。ここ最近であった出来事で一番衝撃的だった。やばすぎんだろ」

「それな。なんか色々どうでも良くなっちゃった」

「……………ああ。なんか、県大会くらいで落ち込んだのが馬鹿馬鹿しくなった。こんな無茶苦茶な奴がいたんだな」

出会ってから現在に至るまでの十数分を思い返してしみじみしている。でもまあ、わからなくは無い。ゲーセンで出会った目つきの悪い奴が急にゲームを殴り壊したとか驚くだろう。

しかし、少しだけ興味が出てきた。出会ってたかが数分ではあるが、やさぐれていたり、ヤンキー風なことをしていたり。接してみると案外、気のいい奴らだと思ふのに。

「なあ、お前らはなんであんなヤンキーみたいなことしてたんだよ？ 全国行けなかったってのはさつき聞いたけど、本当にそれだけか？ 答えたくないならいいけどさ」

「……………なんでそう思うんだよ？」

「そうだな…………。大会で負けてイライラしてるっちは分かった。んで、”上手くないことがあった”って言うってた。だから俺に絡んできた。でも、負けてイライラして他人に当ろうとしてた割に”アイツの所為で負けた”って言葉は出てこない。だから、なんかあったのかなって思ったただだよ」

「エスパーかよ…………でもまあ…………外れちゃいないが」

こちらの指摘に何処となくリーダー風な奴が頭を搔いて、何度か俯いた後、観念した様に口を開いた。

「まあ、お前に八つ当たりしようとした訳だし、知る権利はある…………。俺は佐藤、コイツは山田で、こっちが桜井だ」

佐藤と名乗った男は気まずそうだった。

そんな俺の内情を察したのか、彼は渋々、何処か苦虫を噛み潰した様な表情で一言だけ断りを入れる。

「最初に言っておくと、俺が情けないだけの話なんだよ。コイツらはストレス発散に付き合ってくれてるだけ」

「情けない話の一つや二つくらい誰にでもある」

どっかで聞いた様な話だった。と言うか、似た様な言い回しで弱音をぶちまけた銀髪のファザコンを知ってる。

「……俺達は野球部なんだ。この辺じゃ強豪校扱いされてて、俺たちは昔から少年野球チームに入ってる。部活でも一年の頃からレギュラーとして出させて貰ってた」

「凄いいじゃんか。強豪校ならライバル多いだろ。努力の賜物だよ、それの何処が情けないんだ？」

「情けないのは……俺の境遇なんだ。実は部活の顧問は俺の親父なんだよ。昔から野球好きの親父に憧れて野球してた。正式にチームに入って野球を始めたのは小学生の頃なんだけど。親父に教えて貰ってたからか、自分で言うのもなんだけどよ、俺は周りより少し上手かったんだ」

遠い目をしながら苦々しく語る佐藤。

まあ、珍しい話ではないだろう。親に憧れて同じものを志すのは良くある話だと思う。けど、何故だろう。ありふれた話だと思うのに、出会ったばかりなのに親近感の様なものを感じた。

「当時の監督がさ、親父と知り合いで。良く褒めてくれたんだ。『お前は筋がいい。流石、佐藤先生のお子さんだな』って」

「あ……」

なるほど、親近感の理由が分かった。有名で、優秀で、偉大な親を持つ子供にとって呪いとも言えるその言葉だった。

「そんな何気ない監督の言葉は周りの奴らも聞いてた。チームメイト達は期待してくれたよ。頼りにもされた。俺はそれが嬉しかったんだ。親父と並べられて認められてる気がしてさ。だから頑張った。チームを卒業して中学に上がっても、それは変わらなかった。頑張っても、周りの評価もさ」

山田と桜井はいわゆる幼馴染という奴なんだろう。彼らも思い出す様な表情をしていた。

「でも、中学生になると少しだけ周りからの目が厳しくなった。先輩達もいる中で一年生がレギュラー。その親は監督。まあ、鼻負だつて言われたよ。嫌がらせはなかったと思うけど、見えない所で言われる

チクチク言葉みたいなのが刺さって痛かった」

「……当時は酷かったな」

「ああ。試合で結果を出してたからイジメにはならなかったんだろうけど、当時、あれで何かケアレスミスでもしてたら悲惨なことになってただろうな」

「そんなに酷かったのか」

「まあな。レギュラーに選ばれれば鼻負、結果を出せば監督の子供なんだからある程度出来るのは当たり前って言い草だった」

確かに胸糞悪い話だ。なんとなく、身に覚えがあるからか、ますます親近感が湧く。他人事と切り捨てるのが憚られる。

「努力はしたんだ。でも、それを認めてくれる奴はいなかった。んで、そんなこんなで3年間、野球を続けて最後の大会を迎えた。県大会の決勝、最終回、あとワンアウトでゲームセット。点差は3点、満塁のツーストライク。なんか、スポ根物ではありふれた展開だろ？俺もそう思うし」

苦笑しながら佐藤は続けた。

「ピッチャーは俺だった。後一回、抑えれば勝てる。そんな状況で俺は打たれた。さよならホームランだよ。最後の一投を投げた瞬間に分かった。『この球じゃ、駄目だ』ってさ」

これも、何処かで聞いた話だ。

やっぱり、そういうのは分かるもんなんだな。

「周りに失望の目を向けられたよ。『一年の頃からレギュラーやってた癖に』って実際に言われたこともあった。みんな『監督の子供なのにここ一番で負けた』とか思ってるんだろうさ」

「……なるほどな」

心の底から共感した。言葉とそれを受けた年齢こそ違えど、彼は俺と同じだ。きっと彼から見たら違うのかも知れない。それこそ、話す様になってから間もなかった頃の俺と竹林の様に。

なるほど。通りでシンパシーを覚えるわけだ。

「親父だってそう思ってるのかも知れない。そう思ったらさ、怖くて親父の顔も最近は見れてないんだ。一番手塩をかけて育てた選手が

この体たらくで失望してるんじゃないかってさ」

うん。何から何まで割と重なる。

コイツは先日までの俺と一緒にだ。これまでの周りからの視線を気にして、自分に対して偏見を持って、相手を見てるつもりになって、考えてることを分かった気になって、目を逸らしてる。

そう思ったら放っておけなくなった。

「そんなことないと思うぞ。だって実際に『お前には失望した』って言われた訳じゃないんだろ？」

「言われた訳じゃないけど……でも思ってるだろ」

「分からないぞ？お前がそうやって偏見を持つてる様に、親父さんだってなんかを考えてるかも知れない。決めつけて自暴自棄になってグレるにはまだ早いと思うぞ」

「っ、お前に何が……！」

睨まれる。山田と桜井も似た様な反応だ。

そりゃあそうだ。ポツと出のやつに知った様な口を叩かれたくないだろう。分かるさ。俺だって同じことを思ったんだから。

だから、あの時にそれでも歩み寄ってくれたアイツの言葉を借りよう。そこに僅かに自分が気付いた事実を加えながら。

「分からねえよ？俺はお前じゃないもん。じゃあ逆に聞くけどさ、お前は俺が何を考えてるか分かるか？」

「知るかよ……」

「だろうな。何も伝えてないんだから。そこでもう一度考えてみろよ、今のお前に対して親父さんが何を考えてるのか、本当に分かっているのか？今、こうして向かい合ってる俺のことすら分からないのに、顔を合わせてない親父さんのことが分かるのか？」

「それは……」

「顔を合わせるのが怖くて顔を見れてないって言ったのはお前だぞ？胸に手を当てて良く考えてみる。思い出せ、たまたま顔を見た時でもいい。親父さんがどんな顔をしているのか」

「……………」

「どんな顔をしてる？怒ってるか？悲しんでるか？笑ってるか？困っ

てるか？」

「…………分らない。顔を見てないんだから」

「なあ、おい。もうよそうぜ。コイツやっぱりちよつと変だし！さつさと帰ろう、おかしいよー！」

山田が俺を睨みながら佐藤の手を引いて去ろうとするが、肝心の本人は動こうとしない。手を引かれて一瞬体が傾いたけど、引かれる方に流れるのではなく、両足はしっかりとその場に留まる。

それがどんな意図なのかは分からない。でも、俺は構わず続けた。側から見たら俺はよく知らない相手に説教している痛い奴なんだろうけど。でも、目の前の以前の俺と同じことをしようとしてる奴を放っておきたくなかったから。

「親父さんだつて同じなのかも知れないぞ？お前が顔を合わせてくれないから、お前が何を考えているのかが分からないのかも知れない。話したいのに、そこまで辿り着けてないのかも知れない。まずは相手を見てみるよ」

「……………」

「……………」

「話そうとした時、2人の間に流れる沈黙が怖いのも分かるぞ？でも、案外、相手もこつちの言葉を待ってるのかも知れないし、何を言えばいいのか考えて言葉を選んでるのかも知れない。グレルのはそれをやってからでも遅くないんじゃないかなって思う」

「…………随分と、知った様な口ぶりだな」

桜井が口を開いた。山田の様なこつちを警戒しているような口調ではなく、呆気に取りられて思わず口から溢れでたかのような言葉。それに対して俺は少し戯けて返す。

「知ってるさ。うちの親父と俺がそうだった。すれ違い続けて14年、まともに言葉を交わしたのなんてつい2週間前だもの」

「何で…………どうしてそれが今更になってもう一度話してみようなんて気持ちになつたんだよ？」

佐藤が弱々しく言った。だから答えた。

「気付かせてくれる奴らが居た」

「それだけ？」

「ああ。もつと周りを見ろつて殴られて、怒鳴られた」

「それはなんとも強引だな……」

「だろ？ 情け容赦ないグーパンだぜ？ まあ、俺はその後すぐ本番だったけど、いきなり親父に行くのが怖いなら、周りを見ることから始めたら？ 少なくともお前の両隣にもいるだろ。お前の話を聞いて、ヤンチャに付き合ってくれる奴が」

佐藤が2人に視線を向けた。山田の奴もいつの間にかこの場を去ろうとする動作を止め、桜井は少し挙動不審に。何処となく気恥ずかしそうな顔で佐藤に視線を向けていた。

「相手の顔を見て、声を聞け。目は合うか、声は震えてないか。真意を探るのなんてこれくらいで事足りるからさ」

言葉に偽りはない。誤魔化しだつてない。全て、今回の出来事で俺が学んだことだ。それを糧に他人を導くなんて器用なこと、今の自分にはできないことは分かる。でも、俺なんかの言葉で少しでも前を向くきつかけになるのなら、嬉しいと思う。

「……もし、もしも、親父が怒つてたら？」

「そんな時はグレればいいさ。次に繋げるために叱るなら兎も角、厳しい言葉を投げて怒るだけで何もしない奴なら尊敬する必要はない。お前は頑張った、努力もした。それを見ておきながら責任を1人に背負わせるチームメイトも監督も、相応しくない。ちよつとグレて別の視点から周りを見て、新しい居場所を見つければ良い。案外、その方が居心地良かったりするし」

あつげらかんと言い放つ。

「お前のことを見てくれた奴なんて沢山いるさ。多分な」

「そこは断言してくれないのかよ……？」

「自信のないことは断言しない。出来ないことも言わない。責任取れないからね。俺は出来ることしか言わない主義なのさ」

「……良い加減な奴」

「ほんとそれ。急に語り出したと思つたら最後だけめちやくちや適当でやんの。そこまで言うなら断言しろや」

「つか、何者だよ。聞いた感じはタメなんだろうけどよ、なんか、言葉の一つ一つに実感がこもってるつか、重いよ」

何者か。思い返せばこんな問いは初めてだ。

今までは名乗ることなく絡まれてたし。なんだか新鮮な気分だ。どっかの頭脳は大人な小学生探偵の様に決め台詞の一つも言いたいところだが、生憎とそんなものを考えたことはない。

しかし、ここで『櫛ヶ丘中学校3年E組、乃咲です!』と名乗るのもなんか格好がつかない気がする。

ちよつと考え、沈む夕日を見る。そろそろ戻った方がいい時間だろう。今後、コイツらと会うことはないかも知れないし、ちよつとくらい小つ恥ずかしいセリフを残して立ち去るのも良いだろう。

「……櫛ヶ丘の”銀の死神”さ」

出来るだけニヒルな顔を作ってそう名乗り、ポカンとする彼らの肩をポンと叩きながら、すれ違う様に交差し、3人の背中が向く方向へ歩く。

「……………いや、ダサッ!!」

「つかイタイッ!!」

「何処に売ってるの、そのセンス!!」

再起動した3人のそんなツツコミをカーッと熱くなった顔で聞きながら、俺は羞恥に耐えられなくなり、無茶と分かっているがらゾーンを使って、足早にその場を去った。

「居ねえっ!」

「ちよっ!?!何処に消えた!?!」

「マジで何者だよ!?!」

??

??

??

草木も眠る丑三つ時。ベットの横に備え付けられた台に無造作に置かれたスマホの液晶が徐に輝き、告げる。

『記録、再生します。……………櫛ヶ丘の”銀の死神”さ』

「うるちやい!律のバカ!意地悪!」

その日は、布団を頭まで被って寝た。

【圭一弱点メモ③：過度の羞恥で幼児退行する】

87話 相談の時間

ボチボチ退院も正式に決まり、自分なりの日常を選び、戻る期日が差し迫る。別に時間に追われている訳ではないし、焦りがある訳でもない。ただ、何気なくいつもよりも早く目が覚めた俺はぼんやり考えていた。

昨日、街を見て歩いて、思った。やっぱり自分は普通じゃないスキルを持ちすぎたのではないのかと。

暗殺教室で培ったスキルの数々。勉強から体術に格闘術、暗殺術。それに加えて母さんから受け継いだ”ゾーン”。

既にビッチ先生や、ロヴロさんと言った本物の暗殺者とも交流がある俺たちは、望めば、このまま本物の暗殺者になることだって出来るかもしれない。

特に俺は自分が望んだ訳ではないとはいえ、母さんの強化手術から受け継いだ人並外れた身体能力がある。止まって見える世界の中で自分だけ速く動けるあの感覚ははつきりと他人と自分の違う部分と言える、自分だけの強みだ。

そして、そんな力を何の制約も無しに活かせるとしたら、俗に言う裏社会という世界になるのだろう。自分で言うのも何だが、暗殺の成績はトップレベルで高いしな。

A組に残るのは、そんな選択肢を断つ結果に繋がる。

E組に残るのは、そんな選択肢を肯定することになる。

E組に残ってやりたいことは沢山あるけど、倫理観がブレーキを踏む。その選択肢は生き辛くなるだけだぞ、と。

『今日も悩んでますね』

「まあな」

頭を捻っていると、律が声を掛けてきた。

「この休学期間と昨日の散歩で普通の人と自分とで違うところを考え出したらさ、A組とE組、どっちを選んだ方が将来的に生きやすくなるかなって」

何を考えているのかを聞かれるのを予期して、予め答えると、液晶の中の律は腕を組み、難しそうに首を捻った。

『申し訳ありません……。その疑問に対する答えを私は持っていません。まだ起動して数ヶ月、人の人生について考えることは出来ても、答えを出せるほどの経験はありませんから』

「気にすんなよ、勝手に悩んでるだけだ」

『……私では答えることは出来ません。でも、あなたは1人じゃありません。同じ境遇の仲間がいるではありませんか』

「……そうだな。うん、どつかのタイミングで誰かに意見を聞きたいと思つてたし、後で適当に電話してみるよ」

流石にまだ朝も早いし、電話をするには迷惑だろう。せめて放課後辺りにでも電話してみるか。

なんて考えていた矢先のこと。アクティブモンスター律は既に次の展開を準備したようだった。

『いいえ。後でやろう、明日やろうは馬鹿野郎です。ちょうど今、起きていた人に連絡を取ってみました。乃咲さんは悩ませているとロクなことにならないそうですからね』

「辛辣だよ、この子。て言うか、誰に繋ぐんだよ?」

『プルルル、お繋ぎしています』

コイツ、本当に強かになつたな。いや、ウジウジされるよりは凶たくしてくれる方がこっちの精神衛生的にも良いんだけどさ。もうちよい、殺せんせーに改造された直後くらいの無垢でピュアな律ちゃんに戻つても良いんじゃないかと思うわけよ。

そうこうしていると、電話が繋がつたらしい。

つか、本当に相手は誰だよ……?」

「もしもし……?」

少し警戒と緊張を混ぜながらスマホを耳に当てる。

『あつ、もしもし圭ちゃん?』

「ぐふっ……」

『吐血!?!どうしたの!?!』

ゼロ距離から聞こえてきたのはまさかの倉橋ボイス。よもや女子

に繋がられるとは思ってなかったので思わず吐血した。

やばい、これ死ぬ。寝起きの寝ぼけた状態で彼女の声を聞いたことあった。でも、それとは違った威力があった。

「ごめん。何でもない。ちよつと成仏しかけただけだ」

『致命傷通り越してそれは死んでるよね?! 駄目だよ!?!』

精々、悠馬とかその辺に掛けられると思ってたので、完全に予想外だったが、少し話して落ち着いた。

うん、大丈夫。おれは、しようきに、もどつた!

「ふう……。まずは気を取り乱そう。おはよう、倉橋さん」

『うん、まずは気を取り直そうね? おはよう。珍しいね、圭ちゃんが相談なんて。律から聞いた時、びっくりして眠気が吹き飛んじやったよ。どうしたの?』

電話の向こうから聞こえてくる、落ち着き払った倉橋さんの声。こうしていざ、相談しようとする少し困る。何から話したら良いのか分からない。

いや、大丈夫だ。落ち着け。俺は昨日、初対面の相手に説教を垂れた上に小っ恥ずかしい二つ名を名乗った無敵の乃咲くん。まずは掴みからだ。落ち着け。いつも通りでいい。

「まずは朝早くにごめん。いい天気だね?」

『天気の話?! えっ、えつと………。ごめん、こつちはちよつと曇ってる。あ、でも、圭ちゃんの方は晴れてるんだよね?』

言われて窓の外を確認。

「いや、こつちも曇ってる」

『いい天気とは……?』

うん。会話というのは難しいもんだ。

「実はなんだけどき、人生と言う道に迷ってしまつて」

『今の圭ちゃんは人生よりもキャラの方が迷走してるからね? ほんとにどうしたの?』

「女子と電話するのが初めてで緊張してます」

『ふ、ふーん……。そっか。えへへ……。別に気にしなくていいよ、時間も沢山あるし、ゆっくり、落ち着いて話してよ』

そんな言葉を受けて一旦深呼吸。

うん、よし、大丈夫。俺は正気だ。

「実は人生に迷ったつてもあながち間違いじゃないんだ。A組とE組、どっちにいる方が生きやすいかなって」

『生きやすい?』

「うん。A組に残っても暗殺には協力する。でも、暗殺という非日常に慣れた自分の感性を矯正できると思う。最近、世間と自分の感性の違いに気付いて愕然とした。E組を悪くいうつもりは決してないけど、E組に残るのは、感性の温度差をより大きくすることになると思うんだ。良い意味でも、悪い意味でも」

『……圭ちゃんがそう思うってことはきつと、沢山考えたんだよね。いろんなこと。難しいことは分からないよ?でも、圭ちゃんが考えたこと、私に教えて欲しいかな』

「……俺達は色々知ってるよな、平和な世間の裏では地球爆破なんて大事件が起こってて、テレビで言ってる、どっかの国が発射したミサイルは殺せんせーを撃ち落とす為のものである可能性がある、とかさ。世界の裏事情みたいなの」

『確かにね。私もビッチ先生とか、暗殺と関わるようになってから、テレビをみる目はちよつと変わったかも。どこかの国の○○様が亡くなられましたくみたいな話を聞いた時、”暗殺されたのかな?”って考えるようになったちゃつたし、ビッチ先生にそれとなく聞いてみたら、実際に暗殺だったりもしたもん』

「知識ですらコレだ。そこに加えて俺たちには訓練で身につけた身体能力がある。運動神経がトップの連中は一部能力がアスリート並みに高い奴もいる。そんな奴が高校とかに上がって体力測定とかやつた時、確実に浮くだろう?」

『……ない、とは言えないよね』

「今後、暗殺の為に訓練して、知識を身につけて、とかは絶対に続く。そうなった時、俺たちと一般人の感性の違いはますます大きくなり、いつか、取り返しの付かなくなるレベルになるかもしれない。俺はそれが……少し怖い」

『それはどうして?』

「人つてき、1回目には忌避感があつても、2回目からは徐々に抵抗がなくなるだろ。初めは殺せんせーにすらナイフを振るのを躊躇ってた奴も今じゃ当たり前前にナイフを振って、エアガンを向けて、撃つてる。それが当たり前になつてるんだよ、もうとつくにさ。思い当たる節はないか?」

『そうだね……。私だつて最初は怖かつたし、有希ちゃんなんてナイフを渡された時、しばらく固まつてたもん。でも、毎日繰り返しうちにそれも無くなつちやつた』

「だろ?それでさ、もし殺せんせーを殺せたとして、来年から普通の生活に戻ったとして、それが、本当に無意識のうちに、日常で出てしまうことつて充分にあり得るんじゃないかな?」

『……………』

「俺たちは今後、容易に人を殺せる術を身につけるかも知れない。もし、そんな技術を身につけて、いつもの癖が暗殺とは関係ない日常で暴発してしまつたら?慣れたが故の躊躇いの無さで繰り返し出される技術が人に当たつてしまつたら?」

『……………簡単に人くらい殺せちゃうよね』

「ああ。俺は、それが怖い。正直、ここまで詳細に考えてはなかった。でも、倉橋さんに聞いてもらいながら口に出すうちにさ、いろんなことが怖くなつてきた……」

そうだ。俺はここまで詳細に考えてはなかった。

漠然と生きづらくなるだろう、そんなことしか考えてなかった。それなのに、聞いてくれる人がいるだけでここまで考えを巡らせることができた。

俺の意見はネガティブなことばかりだ。今も、これからも暗殺教室に残るかも知れない倉橋さんに聞かせて良い話だったかは少し引つかかる。それでも、確かに人に相談することで新しい気づきはあつたと心底実感することが出来た。

今回はネガティブなことばかり出てきてしまつたが、1人で考えるより、よつぽど良い意見が出た。今までの人生で、もしも誰かを頼つ

ていたのなら、今までの俺の答えよりも良い答えを出せていたのだろうか?と考えた。

「今話したことを現実にしなない為には日常的に色んなことに神経を使つてすり減らさなきゃならない。あらゆることに加減して生きるのつてさ、息苦しいんじゃないかって俺は思うんだ」

これが俺の結論だった。

もはや、相談という体を成してないのは重々承知している。これでは自分の意見を並べて主張しているだけの弁論だ。

倉橋さんには申し訳ないことをした。

一言、もう一度謝ろうとした時だった。

『圭ちゃんはさ、烏間先生が生き辛そうに見える?』

予想外の方向からの切り込みがあった。

「烏間先生……?」

『そう。うちらにとつての強い大人の象徴つて烏間先生だと思うんだよね。知識も、技術も、身体能力も。特に身体能力とか規格外で、戦闘力も高いよね』

「まあ……そうだね」

『みんなで束になつても勝てない相手。そりゃあ、訓練の時とかは怪我しないように加減してくれてるだろうけどさ、圭ちゃんが心配してる生き辛さとか、息苦しさを感じてる様には見えないんだ。上司と理事長と殺せんせーと私達に囲まれて四面楚歌な苦労はなしにして考えてみるとね』

言われとみると、確かにそれは違くない。

いや、そう言う面を俺たちに見せてないだけなのかも知れないけど。それでもあの人から生き辛さを感じたことはない。

『あとはビッチ先生。殺し屋つて職業上、うちらに話してないこととか沢山あると思うし、世間に後ろ指を指される仕事だから生き辛さは確かにあると思う。でもさ、あの人、そんなに思い詰めて生きてるかな?息苦しそうに見える?』

「……表面を見るだけなら、そうは見えない」

『でしょ?もちろん、私達が見てるのが全部素だとは思わないよ?で

も、全部演技とも思えないんだ。生意気なことを言った時に頭をグリグリしてくるあの笑い方は作り物じゃないと思う。あの笑顔が息苦しそうに見えるかな?』

「……………見えないな」

『極め付けは殺せんせーだよ。世界各国の首脳達から賞金を掛けられてる。常に何かしらの形で監視されてて、常に命を狙われてるんだよ。本当は誰よりも生き辛い立場なのに先生はいつもどんな顔してる?』

「笑つてる……………」

『でしょ? 最高速度はマッハ20で、その気になれば地球を爆破できる。あの教室の誰よりも頭が良くて、変な技術もあって、誰よりもチカラがある。もちろん私たちに接するときには加減もあるだろうけど、なんだかんだで誰よりもはしゃいでるあの人が生き辛そうに見える?』

「……………ぜーぜん見えないな」

『そうでしょ? だからさ、E組で色んなことを教わるだけなら生き辛くはならないよ。ただちよつと色んな物の見え方が前とは変わるくらいじゃない?』

「そういうもんかな……………」

倉橋さんの言葉には説得力があった。実際に俺たちの周りにいる色んな力を持った人を引き合いに出されると、確かに彼らが生き辛そうにしてる姿を見たことがないことに思い至る。

だが、やはり不安なモノは不安なわけで。思わず聞き返してしまった。しかし、倉橋さんは安心させるように言った。

『圭ちゃんは圭ちゃんだよ』

「……………どう言うこと?」

『圭ちゃんはA組からE組に来て、またA組に戻ったじゃん? その中で何か自分自身を作るものが変わったりした? 考え方とは違う……………なんて言うんだろ、倫理観っていうのかな?』

「倫理観……………」

『そ。あれはやっちゃダメ、犯罪になる。これはしたら取り返しが付

かなくなる。とかそう言うの』

論すような問いかけに対して考える。確かにこの数ヶ月で色んな力を身につけた。犯罪に使えそうな力もある。それでも、犯罪になりそうなことをやろうとは思わなかった。

まあ、緊急時を除けば、だが。

普久間島のあれらはノーカンで。

『もしも圭ちゃんが鷹岡先生みたいな人に憧れちゃったなら話は別だけどさ、事件の後、”あんな風にはなりたくない”って言ってたもん。鷹岡先生を反面教師に、烏間先生を目標にしてるキミなら、生き辛いつて思う人生にはならないんじゃないかな』

「……………そうかな？」

『きつとね。だってその理屈で言ったら、今日に至るまでの段階で生き辛くなっておかしいよ？普通の中学生が経験しないようなことを沢山してるんだもん。圭ちゃんはどう？1人で抱え込んだから手放しに生きやすいって言えないと思うけどさ』

今日までの人生を振り返る。

父さんについて誤解して、周りに言われるがまま、自分なりに認められる為の努力をする日々。結果を残しても、残せなくても、自分は認められないと考える日々。それは確かに息苦しく、そして生き辛いものだった。

でも、殺せんせーに出会って、烏間先生に憧れて、先生方に色々教えて貰う日々は楽しかった。そして、色んな力を付けて、自分を含めた色んなものが変わった。今の俺は何をするにも父さんの影がチラつく呪いから解放された。

そう。俺は今、色んなしがらみから解放された。

力を得て、視野が広がり、息苦しくなくなった。今後も、どこかで父さんと比較されることがなくなることはないのだろう。でも、それでも、父さんと話せるよになったことで誤解は解けて、気にするほどのことはなくなった。

「……………ああ……………そうか」

自分の中の点と点が繋がった様な気がした。

俺は、この環境で力を付けて、生きやすくなった。
なるほど。俺はまだまだ思慮が浅いらしい。

正直、漫画やゲームなんかで主人公に説得されて自分の主張や意見を変えて、主人公側に寝返るキャラクターをあまり理解は出来なかった。だって、たかが何回か言葉を交わしただけで、持論がそう簡単に覆るわけがないと思っていたから。

でも、今日。そんなキャラクターの気持ちがあんなに分かったがする。力を得ることは生き辛くなること。そんな思想が倉橋さんお会話してものの数分で反転してしまった。

行き過ぎた力は生き辛さを生むのかも知れない。でも、それだけの力があるなら、自分を活かせる場所を見つけてやることだって出来る筈だ。ビッチ先生曰く、プロを構成するのは、技術と人脈。本当に力がある奴なら、生きやすい環境を選べるんだ。

「ありがとう、倉橋さん。納得した。人に相談するとこんなに楽になるんだな。結論をひっくり返されてしまった」

『そうかなあ？えへへ、力になれたなら嬉しいよ！』

電話の向こうから照れた様な声が出た。

『あ、でもね。一個気になるところがあつて』

「んえ？」

『圭ちゃんが考えてるの、”やりたいこと”って言うより、”やるべきこと”って印象だったかな？』

倉橋さんからの指摘に思わず肩を竦めた。

なるほど、確かにそうかもしれない。

「”やりたいこと”と”やるべきこと”を分けて考えるのって難しいな。考えて動こうとすると、まず理屈が出てきちゃう」

『うーん、ある程度仕方ないのかな？今までそうやって生きてきたんだもんね。でも、これからは違うでしょ？何かあったらいつでも電話してよ、私も一緒に考えるからさ！』

天真爛漫に言う倉橋さん。きつと、電話の向こうでは笑顔を浮かべてくれているのだろう。声で表情がなんとなく分かる。

これで声だけトーン高めなだけだったら、俺はもう誰も信じられな

いだろう。脳を破壊されてしまうに違いない。

でもまあ、彼女に限ってそんなことないって漠然と信じられる辺り、倉橋さんの人徳の成せる技だな。

正直、色々と救われた気がした。

「そのときはまた相談させて貰うよ」

『うん！待ってるね、別に相談とかじゃなくても私は良いから。それじゃあ、そろそろ切るね。着替えて準備しないと』

「あ、悪い。大分時間とらせたな」

『圭ちゃーん？こう言うときはごめんじゃないよ？』

「……………ありがとう」

『うん、よく出来ましたー！じゃ、またねー！』

電話が切れる。いつの間にか大分話し込んでいた様だ。

うん。倉橋さんのおかげでかなり楽になった。E組に戻る、戻らないに関わらず、今度あったら何か奢らせて貰おう。

窓の外の昇る朝焼けを眺めていると、電話が終わってスリープ状態になったスマホの液晶に光が戻り、律が姿を見せる。

『どうでしたか？何か掴めました？』

「ああ。ありがとう。有意義な時間だった」

『そうですか。なら良かったです。これを機に、もっと周りを頼ることを覚えてくれたのなら言うことはありませんね』

「そうするよ。1人よりずっと良い答えが出た」

『……………そうですか。でしたら、いつでも私にも声を掛けてください。基本いつでも側に居ますから。まあ、経験不足だと感じたら今回の様にランダムに声を掛けてみます』

「それも良いな。迷惑にならない程度になら。色んな奴の意見を聞いてみるのも勉強になる。あと今回の件で感じたのは……………」

『なんででしょうか？』

「耳が幸せだった」

『……………次回以降、私が解答に詰まったら、浅野さんに電話をお繋ぎしますね？』

「……………」

「なんでよ!?!」

『……………へっ』

律がそっぽむいてしまった。

突如として投げやりになってしまった彼女を宥めながら、俺の1日は清々しく始まった。

88話 圭一の時間 II

お昼頃、俺はまた外出していた。

倉橋さんに相談した時の会話で思うことがあった。

やりたいこと、やるべきこと。今の俺にはその判別が付かない。だから考えたのだ。まずは問題を大きく捉えてみよう。

E組に戻りたいかどうか。俺にとつてそれは、あの教室にいる仲間たちと一緒に、もつと色んなことを学びたいかどうか、という問いになる。これに対する答えはYesだ。

だが、なぜ、あそこで学ぶのか、何を学ぶのか。

あそこで学ぶこと。確かに勉強もあるが、それ以上に目を引くのが暗殺だろう。そして、その暗殺はどうして学ぶのか？

それは殺せんせーを殺す為だ。殺せんせーを殺して、地球滅亡という事態を回避する為と答えるだろう。

では、なぜ、地球滅亡を回避したいのか。いや、そもそも俺は地球滅亡を阻止したいと思っっているのだろうか？

これに対する答えはYesだ。死にたくはない。それに、せっかく父さんと和解して、色々と素直になれたんだ。14年間、手を伸ばし続けたものがようやく手に入ったのに手放したいとは思わない。それは人情という奴だろう。

こうしてみると答えは明白だ。

俺はE組に戻りたい。

しかし、釈然としない。自分なりに納得している。自分なりに理解している。だと言うのに、ここで『E組に戻りたい』というたった一言が口から出てこない。

そして、その理由が分からない。やりたいことは分かったのに、それに手を伸ばせない。もしかしたら、自分の中では他にもやるべきこと、の様な何かの理屈が引つかかっているのだろうか？などと考えるが、それでもそれが何なのかは分からない。

相談しようにもみんな授業中だ。しかし、病室で悶々としてるのも

気が滅入る。そこで律に気分転換に散歩でも、と進められたので乗っかる事にした。補導云々は今は気にしないで置こう。

約3年離れていた街並みは記憶の中の物より少し錆びていた。何気なく街中をほつつき歩いていると、地元なだけあって、色んな変化に気付く。昔あった建物がなかったり、新しい建物があつたり。昔通っていた幼稚園や小学校の前を通ってみた。

久しぶりに通った母校は、通っていた時に比べて小さく、門なんかに出ている錆びに気がつく。果たしてこれは昔からあつたのか、この3年で出来た物なのか。その辺はどうもよく分からない。そんなことを思いつつ、通り過ぎる。

昔歩いていた通学路、遊びに行つた幼馴染の家。色んな場所を懐かしみながら歩いているうちに、とある一軒家に着いた。

「……懐かしいな」

3年前までここに住んでいた。3年は世間的にはそんなに長い期間ではないのかも知れないが、今年で15年目の若造からしたら人生の5分の1だ。割と長く感じるのは仕方ないだろう。

久しぶりに戻ってきた我が家。生活感があるとは言えない。そりやあ住人がいなくなつて久しいので当然か。

庭の雑草とか生え散らかしてる。一応、まだ持ち家だ。確かトメさんが定期的に掃除に来てるらしい。

失敗したな。ここに来るなら鍵とか持つてくれば良かった。生憎とこの家の鍵は今持っていない。柵ヶ丘の俺と父さんが住んでいた方の家に置きっぱなしだ。

せつかく来たんだし、中に入って見たかったが……仕方ない。またいつか来るとしよう。

玄関前から踵を返して門の外に出る。

「……………坊ちゃん？」

そして、思わぬ人物と鉢合わせた。

俺の銀髪とは違う。色素の抜けた白い髪を蓄えた皺の多い女性。まだ腰も真っ直ぐで、キリリとした顔付きは衰えを感じさせない。だが、最後に話したのは祖父母の家に移る前だ。記憶の中の姿に比べて

少し小さくなった様な気がする。

「……………トメさん」

そこにいたのは長年、うちで働いてくれている家政婦のトメさんだった。こうして顔を合わせるのは久しぶりだ。

トメさん。今にして思えば、俺はこの人の本名を知らない。この人自身、自分をトメと名乗っているし、父さんもそう呼んでいる。だから俺もそう呼ぶ様になった。

俺からみたこの人を事実のみで表現するのなら、父の雇った家政婦だ。だが、ある程度、情を交えて表現するのなら、親代わり。古風な言い方をすれば乳母という奴になるのかな。

「お久しぶりです。先んじてお見舞いに伺えず、申し訳ありません。さきほどこちらの整備にと移動してきましたので、後ほど伺おうと思っていたのですが」

「いや、気にしないで。ここに来たのはたまたまだから」

そう。この人は俺にとつては親代わりだ。

あらゆることをこの人から教わった。言葉も、歩き方も、人間として必要な何もかも。

ある意味で、この人から俺の全ては始まった。

親の代わりに色々と教えてくれた。きつと、数え始めたらキリがないだろう。この人から教わった物を思えば。

…………だが、同時に、あの呪いに始まりがあつたのだとしたら、その始まりもまた、この人なんだろう。

分かつてる。そんなのは女々しい感傷だ。当時のこの人は、そう言う俺が喜んだから言ってくれただけ。

呪いのなんてものは無い。ただ、頑張ってる子供を褒めようとして、選んだ言葉がそれだったと言うだけなんだ。

だから、ケジメをつけよう。

呪いなんてものは初めから無かった。あつたのだとしても、この人はただ俺を喜ばせようとしてくれただけなのだから。

「ちよつどいいや。……ここであつたのも何かの縁だろうし、トメさんに言っておきたいことがあるんだ」

「……なんででしょうか？」

「この前、と言っても1年以上前のことだけだな……。悪かった。怒鳴って、喚いて、ごめんなさい」

頭を下げる。これは言っておかなきゃいけないと、この人を見た時に思った。あの日、あの声を荒げた時。父さんは見ようとしてくれた。この人だつてきつとそうなんだ。

俺はそれに気付かなかつた。見ようとしなかつた。

「顔を上げてください、坊ちゃん。私はあなたに下げられる頭を持つていません。そもそも、あれは……幼少の頃のあなたに掛けていた言葉が間違つていたからこそ起こつたのですから」

「そんなことは……」

「あります。あなたの声を聞いて、私は自分の行動を振り返りました。自身がこれまでどんな言葉を掛けていたのか。どんな言葉をかければ喜んでくれるのか、笑つてくれるのか。そればかりを考えて、あなたの頑張りを肯定することをしなかつたのは他でも無い、私なのです。だから、あの日のことは私の責任です」

「だとしても、アンター1人の責任じゃ無い。それだけは違う。俺は周りを見なかつた、父さんは悩み考えるばかりだつた。誰かに責任があるとしたら、それは1人だけに押し付けるべきもんじゃないだろつて俺は思う」

「……………立派になられましたね、坊ちゃん。その言葉は嬉しい限りです。でもね、それでも一番上手く動けたはずなのは私なのです。だってね、坊ちゃん。あなたが一番欲しかった言葉は”頑張つたね、圭一くん”というたつた一言だつたはずですよ」

「……………それは……………否定しないけど」

「幼い日のあなたを褒める為の言葉、私は悩みました。どんな言葉を掛けるべきなのか。あなた自身を褒めれば喜んでくれるのか、自慢にしている旦那様と一緒に褒めれば喜んでくれるのか。そして、私はその二択を外してしまった無能です」

「無能なんかじゃない。トメさんは俺を喜ばせようとしてその言葉を選んだんだろ？ 気遣いがあつただけだ」

「お優しいですね。ですが……」

「多分、小さい頃の俺にアンタがどんな言葉を掛けてたとしても、俺は……ああなつたと思う。周りの言葉はあくまで軌轢を助長させただけ。そもその原因は父さんとのコミュニケーション不足なんだからさ」

確かに俺はこの人の言う通りのことを考えたこともあった。誰か1人でも『頑張ったね、圭一』とか『すごいね、圭一くん』と言ってくれば何か変わったのかもしれないと。

でもきつと何も変わらなかった。根本的な原因はコミュニケーション不足。強いて何か変わったかも知れないフアクターは、『天才の子供の癖に』とか言ってくれたクソガキくらいだろう。

まあ、アイツが言わなかったとしても、似た様なことを中学教師に言われるハメになるから……まあ、何も変わらないか。

「そんな訳だから、トメさんが気にする様なことは何もないんだ。生意気盛りに遅れてやって来た反抗期が重なって、コミュニケーション不足が爆発しただけ。だから、あなたが気に病む必要はない」

「分かりました。では……」

俺の言葉にトメさんは頷くと、見たことがないほどにゆったりと優雅に頭を下げた。立派な屋敷に使える一流のメイドを彷彿とさせる綺麗な礼に思わず呆気に取られた。

「坊ちゃん。申し訳ありませんでした」

そして、何が起きたのか気がついて、慌てて声を掛けた。

「ちよつ、顔上げて!?!何が『では……』なのか分からないから!俺、気に病む必要ないって言ったよな!?!」

「ですが、それは謝意を見せない理由にはならないかと」

「思った以上に頑固だよこの人っ!」

「坊ちゃん、お外で大声を出すのはいかがなものかと」

誰のせいだと思っっているのか。

ツツコミを入れたくなる気持ちを抑える。

「立ち話でもなんですし、入りましょう」

「……………はい」

そんな俺のことなどどこ吹く風。トメさんは流れる様に頭を上げると、慣れた所作で玄関を開けた。

うん。この人は昔から割とこんな感じだ。そんなに怒らせた記憶はないが、叱る時はしつかり叱ってくるし、説教は鬼の様に長い。だが、切り替えが早いと言うか、反省してるのが伝わればスンツと平常運転に戻る。

この人に世話されていたと言うのに、俺にはこの切り替え能力がない。もしも、昔から彼女の様に切り替えられたら、もつと割り切って生きることも出来たのかな？

まあ、今のところはなんとかなってるから、そんなに心底羨む様な事でもないと思うけどさ。

そんなことを思いながら何気なく入った玄関は、昔の記憶と殆ど変わっていないかった。強いて言うなら視線が高くなったからか、少し狭く感じる。

「意外と埃っぽくないんだな」

「1週間置きに掃除に来てますからね。水道を使わず放置してると水が蒸発して悪臭と下水から虫が侵入する原因になりますので。旦那様に許可を頂いてこちらとあちらを行き来しています」

「あー。あの水道のU字の部分が水を張ることで蓋兼返しの役割りしてるんだっけ」

「はい。ちなみに新居なのにGが出ると言うのは似た様な理由で水道を使っていないから虫が出てくると言うのが原因だったりしますので、将来、新居を建てる時には御有意ください」

新居なんて建てる日が訪れるのだろうか？

来年に地球が残っているのかすら危ういと言うのに。

「……う・坊ちゃん？」

「いや、少し懐かしくて感慨に耽ってた」

「そんな歳でもないでしょうに。ですが……そうですね。坊ちゃんもいつの間にかこんなに大きくなられて」

トメさんが俺を見上げてくる。

そういえば、俺、いつの間にかこの人よりも大きくなっていったんだ

な。目を合わせようとするには少し顔を下げないといけないくらいに身長差が出来てしまっていた。

靴を脱いで、リビングに入る。

そこもまた、昔とは何も変わっていないなかった。

「覚えてますか？テレビの前のテーブル。幼稚園に上がる少し前からあそこで読み書きをお教えしましたよね」

「ああ。覚えてるさ。絵本を自分で読める様になりたくて、教えて欲しいってねだったんだよね。ひらがな練習ドリルで書き写してる時、思う様に真似できなくて悔しかったっけか」

「ふふ……。坊ちゃん、『これじゃない』って言いながら何度も字を消して書き直してましたよね。書き直しても満足出来なくて、消してるうちにドリルが破れてしまつて。セロテープで貼り直して何度も何度も練習してました」

「…………あれ？確かにそんな記憶あるけど、トメさんあの時いたのか？確かキッチンで晩飯作つてた様な……」

「よく覚えてますね？その通りです。ですが、夕食が出来たのでお声がけしたのですが、坊ちゃん、聞こえていなかった様で。思えば、昔からあなたは周りが見えなくなるほどに集中するのが得意でしたね」

「…………そんなガキの頃から？」

「幼稚園に入園前の子供とは思えないほど丁寧に書いていたので何度かお声がけしたのですが、それも聞こえてなかった様でしたね。ですが、そんな坊ちゃんを呼び戻す方法があるんですよ？」

「んえ？」

「しつかり見える様にお菓子を視界に挿し入れるんです」

「……………あ、そういうえばよくやられたわ、それ。ドリルやったり、教科書読んだりしてる時にお菓子を乗つけた手を視界に入れられたっけ。そうだ、確かにそんなことあった。集中してる俺を呼び戻す為だったのか、アレ」

「はい。坊ちゃんったら一度自分の世界に入ったら帰って来ないんですもの。あれ以来、ポケットの中には簡単に食べられる飴を常備する様になりました。今も入ってますよ？ほら」

「なんでまだ入ってるんだよ……」

「私の中の坊ちゃんはある日の可愛らしいままの姿ですので」

「可愛くなくなって悪うございました」

「ええ。目つきを除けば中性的ですが、凛々しいという表現が似合うようになられましたね」

ああ言えばこう言うとはまさにこのことか。

きつちりしてるところはきつちりしてて、飄々としてるところは飄々としている。別に勝ち負けを気にしてる訳じゃないが、今はまだ、この人に勝てる気がしない。

「折角です。お昼も近いことですし、ご飯食べて行きませんか？ 久しぶりに坊ちゃんに食べて欲しいです」

「もうそんな時間か……。そうだな、病院に確認してみるよ」

ちよつとだけ散歩することだけのつもりが、そこそいい時間になつてしまった。今、俺の主治医をしてられている医院長に電話してみると、体調的には問題ないとのこと。

まあ、脂っこいものはまだ控える様にと言われたが。

「良いってさ。じゃ、久しぶりにご馳走になろうかな」

「了解です。まあ、とは言いましても、冷蔵庫の中身がないので買い物からですけどね」

「なら付き合おうよ」

「……あまり動くのは良くないのでは？」

「別に無理なんてしてないし、体が鈍って仕方ないんだ。ダメそうならしつかり怒られてくるから」

「……承知しました。まあ、あまり遠くもないですし、私も付いてます。ですが、何かあったら無理せず言ってくださいいね？」

「ういっす」

そんなこんなで俺は、久方ぶりにトメさんと歩くことになった。学生がこんな時間に出歩いていることに関しては、トメさんが証言してくれるから特に気にする必要はないだろう。

昨日、何気なく通った道を歩く。

「ん？」

「どうしました?」

「いや、あんなところにあんな建物あつたつけ?」

「……ああ。ありましたね。確か、坊ちゃんが8つくらいの頃に出来たはずですよ」

「マジかよ……」

昨日は人々ばかり見ている気が付かなかったが、こうして街並みに目を向けるといろんな発見がある。あんな所にあんな物あつたかな?と思つたら、単に背が伸びたから見えなかつたものが見える様になつただけだったり。本当に新しい建物だったり。

まあ、単純に懐かしさだったり、新しい発見に対する興味もあつたりしたが、なにより、12年住んでいた街を殆ど何も知らないに等しかつた事実が一番驚くことになつた。

そうこう賑やかに歩いていると、辿り着いたのは商店街。出来るだけゲームセンターは視界に入れない様に歩く。

「おや、トメさんじゃねえか。いらつしやい!今日からまたこつちに住み込みかい?」

「ええ。どんなものでも使つておかないと万一の不調に気付けないこととや、いざと言う時に使えないこともありますから」

「ははは!違いねえや。でも大変じゃないかい?数日置きに東京とこつちを往復だろ?」

「確かに移動に時間は掛かりますが、バスにしたり、電車を乗り継いだり、新幹線に乗つてみたり、車を出したり、方法を変えればちよつとした旅行気分を味わえますよ」

「強かだねえ。ところで、気になつてたんだがよ、そつちの白髪頭の坊主は……」。トメさんと一緒にいるつてことは?」

とある店の前で呼び止められる。

みたところ肉屋だな。見るからに新鮮そうな肉が並べられてたり、コロッケや唐揚げなど買ってそのまま歩き食い出来るようなものまで置いてある。部活帰りにこう言う店で買い食いするのもロマンあるよなあなどと思つていると、トメさんと世間話していた店主の興味がこつちに向いた。

「はい。お察しの通りです」

「ほえ〜！つてことは、乃咲先生のお子さんかい？随分と大きくなつたもんだなあ……！」

店の奥から店主が出てきたかと思うと自身の頭頂部に手を当て、俺との身長差を測っているように見えた。

もしかして、文脈的に俺の知り合いでもあるのだろうか？生憎と記憶の中にヒットする人物はない。

しかし、このまま無言でいると、トメさんに挨拶なさいと叱られるのは確実だと感じたので口を開いた。

「乃咲圭一です。……すみません。その、あまり覚えてなくて」

「無理もねえさ。まだ小さかったもんなあ……」

「坊ちゃん。覚えてますか？まだ幼稚園に入ったばかりの頃、私の買い物を手伝うと言って何度か一緒に買い物に来てくれたことがありますよ？」

トメさんからのフォローで何度か記憶を呼び起こす。

うん。確かにそれならばんやりと覚えている。手を離さない様に口すっぱく言われて、トメさんの手を握り締めながら、確かにこの商店街を歩いたことが何度かあった。

確か、トメさんと買い物に行く時、『坊主、手伝いか？』と頭をわしやわしやしながら唐揚げをくれたおっさんがいた。

……唐揚げ？

思わず、ショーケースの中の唐揚げを見る。そして、やっと目の前の人物がそのおっさんであると思に至った。

「昔、唐揚げをくれた？」

「なんだよ覚えてんのか。まじかよ、流石というか、すげー記憶力だな。まあ、良いか。ほら、久々に食って行けよ！今回はサービスしてやつから！ま、次からは金取るけどな！」

豪快に笑いながら、あの頃の様子に頭を掴まれてわしやわしやしながら、唐揚げの入った容器を差し出してくる。

脂っこいもの判定かはイマイチ分からないが、ご厚意はありがたく受け取るに限るだろう。

「ありがとうございます。また戻って来ることがあればその時はしっかりお金払って買わせて貰いますよ」

「ははっ、そうしてくれや。にしても本当に久方ぶりに見たな！幼稚園まではうちの倅が一緒だったからちよくちよく見る機会あったけどよ。お前さん、小学校はお受験組だったろ？それで別れたつきり見なくなっちゃまって」

「小学校までこっちに居たんですけど、中学は父の知り合いの経営する東京の私立校に行くことになりました」

「はえ〜。そういえばそんな話聞いたな。どこに通ってるんだっけか？いつだったか、そんな話も聞いた気が……」

「柵ヶ丘ってところですよ」

「ああ！そうだ。そこだ。あの野球強いところな。にしても大したもんだなあ……。私立校ってことはやっぱり厳しいのかい？」

「ええ、まあ。上位1クラス、最下位1クラス、中位3クラスって感じで一応は実力別に分けられてる感じですね」

「なんかそう言うシステム新鮮だな。ちなみに坊主は？」

「今は上位クラスの主席です。まあ、2人いるうちの片方なうえ、もう1人は満点を何個かとってるのに対して、俺は満点は一つも無かったんですけどね……あはは」

「……あら？坊ちゃん、最後にお会いした時は最下位になってE組に落ちることになったと仰ってませんでしたか？」

「色々あって返り咲いたんだよ。まあ、その結果、無茶が祟って過労からの入院に至った訳ですが」

「……なるほど。過労の原因はそれでしたか」

「合点がいったように頷くトメさん。」

「ごめんなさい。実はもつと色々理由があるんです。話せないから言わないけど。」

「内心で平謝りしていると、おっさんが感心したように頷いた。」

「そうか……。通りで真っ昼間に学校にも行かず歩いてる訳だ。過労で倒れるのは考えものだが、昔から良く頑張ってたもんな、坊主。保護者の間でも評判良かったっけ。うちの息子に爪の垢でも煎じて飲

ませてやりてえよ」

……昔から良く頑張っていた。

きつと何気なく言った一言。それが気になった。

「昔から評判が良かったもんな。見かけることは少なくなったけどよ？ 小学生の頃も買い物に来たかーちゃんらの噂でちよいちよい耳にいれちやいたのよ。やれ行儀が良い、礼儀正しい、友達が多い、成績も良い。『うちの子もどうやったらあんな風に頑張ってくれるかしら』ってさ」

「そうですね。懐かしいです。当時は坊ちゃんの同級生のお母様方とママ友付き合いの様なモノをさせて頂いていましたが、子供を伴って遊びに来られた方は皆、坊ちゃんの努力を褒めていました。鼻が高かったのをよく覚えています」

しみじみ語る2人。正直、おっさんとの思い出はそんなにない。”唐揚げをくれるおっちゃん”くらいの認識だったから。

でも、そんな自分の認識と、目の前の大人の認識の食い違いが、俺に一つの現実を教えてくれた。

……俺の周りは、思っていた以上に俺のことを見ていてくれたんだ、と。そんなことを改めて教えてくれた。

そうでなければ、ただの顔見知りの客が連れてくる程度の関係性しか持たない子供のことをこんな風に覚えていく訳がないし、気にかけることもないだろう。

そして、俺の努力を周りは認めてくれていたんだ。

もともと、思い込みかもしれないと考えてはいた。実を言うと、彼らが聞いた噂というのもあくまで体裁良く言うために努力という言葉を使っているだけかもしれない。でも、『頑張っていた』って言葉を貰えたのが今は素直に嬉しかった。

「つと、悪いいな。呼び止めちまって。お詫びと言っちゃなんだが、少しまけといてやるよ、坊主も一杯食って元気になれな！」

「……ありがとうございます」

「良いつてことよーまた来な！」

トメさんは店主と慣れた動作でやりとりして、あつという間に買い

物を終わらせた。肉屋から離れた後も、色んな店の人に声をかけられた。シンプルにトメさんが馴染んでいると言うのもあるだろうが、声をかけてくる人たち全員が俺を乃咲圭一だと認識していたことに驚いた。

正直、ここまで色んな人に気に掛けられてるとは思ってた。だからこそ、考えさせられた。

『流石、乃咲先生のお子さんね』という忌々しかった言葉。それは俺を褒めてる様に見せかけた親父へのよいしょではなく、本当に俺を褒めてくれていたのではないのかと。

思考の片隅で今日までの覚えていた記憶を再生させながら、買い物を終えた帰路を辿り、家に着き、トメさんの『楽しみにしててくださいね』という言葉に生返事を返す。

——地球が終わったら、みんな死ぬ。

きつと、この街で俺だけが知っている事実。

そうなる可能性があるってだけの話だが、想定しておかなければならない最悪の事態。

白状すると、俺は他人が好きでは無かったのかもしれない。だって、誰も俺自身を認めてくれなかったから。

そういう意味で、地球滅亡は、自分も死ぬ代わりに嫌いな奴ら全員が死んでくれるかもしれない一大事件だった。

「坊ちゃん、お待たせしました」

物騒なことを考える思考を遮る様にトメさんが俺の視界にそこそこ大きい緑色の弁当箱を差し入れてくる。

「なぜ、弁当箱……？」

「坊ちゃん、幼稚園の頃はお弁当がキャラ弁だと喜んでくださったじゃありませんか。なんだか、今日は懐かしいことが多くてつい、あの頃感覚で作ってしまいました」

「つまり、これはキャラ弁なのか」

「はい。とは言っても、私自身、最近のキャラクターを知らないの、何気なくテレビをつけた時に見たキャラクターを再現したので、坊ちゃんのお眼鏡に叶うかは分かりませんが」

「作って貰えるだけありがたいんだ。文句なんて言わないさ」

「……本当に、大きくなられましたね、坊ちゃん」

大袈裟にハンカチで涙を拭くしぐさを見せるトメさんに苦笑しながら、考えていた内容を一時的に彼方へ放り投げ、弁当に向き合った。久しぶりのトメさんの料理。

母さんがいない俺にとって幼少から食べ続けた彼女の料理は母の味と評価しても過言ではない。

だから、期待して蓋を開けた。

「ギシャアアアアア」

「……………」

蓋を閉じた。

蓋を開けた。

「ギシャアアアアア」

蓋を閉じた。

なんか、目が合った。

いや、なんだ、アレは。弁当？弁当？アレが？あの、人面に海老の胴体をくっ付けたみたいな謎の物体が食べ物だって？

そんな訳がない。あんなモノ、食べる訳がない。だってアレは明らかに生き物だ。なんか鳴き声も聞こえたし、ギョロつとした目が合った。血走った瞳がしつかり俺を捉えていた。

もう一度、蓋を開ける。

「ギシャアアアアア」

「……………」

「パンデモニウムにございます」

「ございます、じゃないが。」

え、何これ、料理ってこんなんだっけ？言い方悪いが、死んだ動物を美味しく食べる為の技術が料理の筈だ。決して、死んだ肉に生命を吹き込む神の御業ではないと思うのだが。

食品のカテゴリに生物なまものと言うカテゴリはあるが、生き物は流石に反則じゃないかな。

いや、ほんと、なんだこれ。

「パンデモニウムにございます」

「……………つすうく。はあく……………」

深呼吸。弁当箱の中で短い無数の脚をうねうねさせてる気がするが、気の所為だ。きつと聞こえてくるこの声も気の所為。

気を取り直して、俺はもう一度だけ、トメさんに問う。

「トメさん、これはなに？」

「パンデモニウムにございます」

……………聞き間違いじゃ無かった。

パンデモニウムとはなんぞや。

しかし、いつまでも固まってるわけにもいかん。

俺は深呼吸して口を開いた。

「ついに耄碌したか」

「酷いです、坊ちゃん」

やばい。思わず毒を吐いてしまった。

「さあ、どうぞ遠慮なさらずにガブっと」

「この謎の生命体を食えと!？」

「料理ですの」

「食材になったモノを別の生命に生まれ変わらせることを料理とは言わないのよ……………」

「ではこれはなんなのですか？錬金術とでも言いますか？」

「いくらなんでも生命創造を錬金術とは言い張れないだろ！つか、なんでよりもよってパンデモニウムなんだよ!？エリザベスとか夢の国のネズミとかでも良いでしょうが！もつと可愛らしいモノを想像してたよ!？」

「坊ちゃんはあんなに愛くるしいキャラクターに箸を突き立てるのですか？」

「逆に聞くが、キモいなら良いと？俺今からこれ食べるんだけど？この人面海老食べるんだけど!？この人面を口に運ぶ姿は許容出来るのか!？それはそれで歪んでるぞ!？」

くそう、埒があかねえ。

食うしかないのか、食わなきゃなのか!？」

いや、わかっている。流石にここで手を付けずに残せるほど俺は腐ってない。でも、流石にこれは勇氣と覚悟がいる……！

「ギシャアアアアア」

「い、いただきます……」

「凄い。箸が全く進まない。」

「でも、食べないと。」

どこから食べばいいのか分からない後の物体。少し躊躇ったあと、脚を箸でもぎ取って口に運ぶ。

そして絶句した。

口の中に入れた瞬間に広がる肉汁。しつこくなく、甘すぎず、適度に塩気の聞いたそれが舌の上に広がり、思わず噛んでしまった脚の部分はカリッと出来立ての唐揚げを彷彿とさせる食感があった。一応、身も詰まっていたようだが、それもまた美味い。今日行った店的に高い肉はなかったと思うのに、まるで溶けるようになってしまった。

「美味っ……!?!」

「良かった。腕によりをかけて作った甲斐がありました」

「いや、ほんとに美味い。夏休みの最後に結構良い所の料理食ったけどさ、アレより遥かに美味い。銀魂なのかトリコなのか分からないけど、とにかく美味い。見た目は最悪だけど」

本当に美味い。見た目は……悪いが、店に出せば売れるだろう。物好きが怖いモノまたさに食って、ネットにあげて、バズって……と言うコースが普通に見えるくらいに美味い。

「実は味が薄いと思われた時のためにタレも作っていたのですが……」

「……まだ美味くなるのか。ちなみにどんなタレ？」

「餡掛け風です」

「正気か」

「言い過ぎです、坊ちゃん」

このグロテスクな見た目に餡掛けのドロつとした風味をブレンドしてみる。それはもう合体事故を起こした悪魔合体を超えた何かで

はないだろうか。だが、人間、案外一口で美味しいと思えば割と躊躇いはなく成るようで。

「……………かけてください」

俺は倫理を失った。

?? ?? ??

パンデモニウムは美味かった。喜んで金を出せるレベルで美味かった。それはもう異常な程に。食ってしばらく経った今でも何気なく美味かったと思える程に。

ただ、どうしてあんな見た目になるのか、あんな鳴き声を発するのか、動くのが理解できなくて、調理工程を見せてもらったが、それでも理解は出来なかった。

結果的に、パンデモニウムは美味かったことと、ゾーンに入って調理工程を見ていたからか、俺もパンデモニウムを作れるようになってしまった。実際に作ってしまったのだから笑えない。

そんな騒がしい昼時を思い出しながら病院への帰路を歩く。

今日1日で色んなことが見えたと思う。

もちろん、全てが見えたとか驕るつもりはないけど、でも、俺が見てこなかったことをたくさん見れたと思う。

子供の頃から接して来た大人は意外と俺を見てくれていた。俺を、俺自身を褒めてくれた。

それが意外で、でも、確かに嬉しかった。

印象が変わった。劇的な変化ではないけど、小さな頃からの努力を当時を知る大人達から認められて、救われた気がした。

……地球が減んだら、彼らも死ぬんだよな。

思考が振り出しに戻る。

極端で、でも、自分なりにやりたいことを探す為の思考回路。そこに問いが一つ追加された。曰く、『彼らに生きて欲しいか』

……答えはYESだろう。

死なせたくない。それは充分大きな動機だ。

父さん、トメさん、友達、今まで俺を見てくれた人たち。彼らを死なせたくなかったのは、そうするべきだからではなく、そうしたいからだ。なのに、E組に戻りたい理由は揃っているのに、それでも何が引っ掛かる。

歩いていると、昨日、例の3人と別れた場所に来た。

アイツ、親父と仲直りできたのかな。顔と名前が微妙に一致しないんだけどさ。

「っ、いた！おい！その白髪！」

そして、聞き覚えのある声があった。

見てみると、件の集団の1人がそこにいた。

親とすれ違ってしまった奴。

えっと、確か名前は……………」

「……………山井」

「擦りもしてねえ!?佐藤だよ!しかも他の2人も山田と桜井だからな!?絶妙にありそうな感じに混ぜてるし、せめて俺じゃなくてアイツらのどっちかで間違えろよ!」

「……………そうか」

どうやら間違えた様だ。

前々から思っていたのだが、俺って人の名前を覚えるの苦手なのかも知れない。確か悠馬のことも磯牧とか覚えてたし。

「ったく……………失礼な奴……………」

「人を白髪呼びする奴に言われたかないね」

「だってお前、名前名乗らなかつたじゃん」

「……………銀の死神さ……………」

「んな小っ恥ずかしいあだ名で呼べるか。お前、街中で白昼堂々大声でその名前で呼ばれたいか?」

「勘弁してくれ、その時はお前を殺して俺も死ぬ」

「男に言われても嬉しくねえセリフだ」

「女に言われても嬉しくねえだろ」

人のこと言えないが、こいつもだいたいぶツツコミどころがある男だ。つか、なんで呼び止められたんだろう。

「それで、なんかあった？」

「つと……そうだ。あー、その、なんだ……。お礼、言つて置きたくてさ。探してたんだ」

「……お礼？」

「……親父との話。お前に言われた通り、話してみたんだ。そしたら、親父も俺と同じだったんだ。話したいけどタイミングが合わなくて、自分が声をかけたら責められてるって思うんじゃないかって考えてたんだってさ」

どつかで聞いた話だなあ……。

父と息子というのは拗れやすく出来てるのだろうか？

「話せたんだな。良かったじゃん」

まあ、何はともあれ、俺たちの様に10年以上続くすれ違いにならなかつたのなら、何よりだ。

「お前が色々と話してくれたおかげだ。だから、ありがとう」

「俺は受け売りをそのまま伝えただけだ。最終的に親父さんと話すことにしたのはお前だろう？別に俺に感謝なんてしなくて良い。頑張つたのはお前なんだから」

「でも、伝えたかつたんだ」

「……律儀な奴」

ほんと、昨日の初対面はめっちゃヤンキーみたいだったのに、こんな律儀で割と爽やかさうなところを見せらると確かにスポーツマンなんだな、コイツ。と納得させられる。

「……なんつーかさ、悩んでる時は自分のことばかりで考え付かなかつただけだよ……。昨日、親父とこれまでの思い出とかを話してる時にさ、俺、昔、似た様なことがあったのを思い出したんだ。ほんと、ガキの頃なんだけどさ」

少し興奮してるのか、佐藤が話す。

「昔さ、同じ幼稚園にすげー奴が居たんだ。俺らと同一年なのに漢字が読めたり、簡単な計算もできて、友達もたくさん居た」

「そんなに珍しくもないんじゃないのか？クラスに1人くらいはいるだろ。なんか知らないけどやたらと色々できる奴」

浅野とか、カルマとか、悠馬とか。中学に上がる前までは俺もどちらかと言えばそのポジションだったと思う。

「かも知れない。でも、そいつはちよと特殊でさ。親が有名人だったんだよ。本人はそれを鼻にかけない良い奴だったんだけどな。周りにチャホヤされてた。よく先生にも褒められてたよ」

「ふーん……」

親を鼻かかけないというのは、確かに凄いかもな。俺も大々的に『僕の父さんは学者さんだぞ！』とか偉ぶったことはないが、それでも先生に褒められると『僕の父さんはすごいんだよ！』くらいは言ったことがある。

「俺さ、当時はそいつが気に入らなかつたんだ。みんながそいつの父親ばかり褒めるのが嫌だった。僕のお父さんだつて凄い人なんだぞ！つて思いながらそいつを眺めてたんだ」

「それは仕方ないんじゃないのか？まだ子供な訳だし、昔から親父さんのこと尊敬してたんだろ？自分の父親が一番凄いつて思ってるのに周りが違う奴を持ち上げてたら良い気はしないだろ」

「まあな。でもな、ガキだったからつて一言じゃ済まないことつてあるだろ。俺はさ、当時、そいつに酷いことを言った」

「酷いこと？」

「……さつき言つたら？昔、似た様なことがあつたつて。実はさ、『あの人の子供の癖にこんな事も出来ないのか』つてさ。細かいセリフまでは覚えてないけど、似た様なことを言つちまつたんだよ。まだ幼稚園のガキに向かつてさ」

……何処かで聞いた話だ。

似た様な言い回しを知っている。鮮明に覚えているとも。忘れたことなんてない。それだけ悔しかったから。

「10年くらい経つて、同じことを言われる立場になった。俺の親父は凄い人だ。何度も全国まで進出して、優勝までさせた事もある。でも、親父は親父で、俺は俺で。俺だつて頑張つた、努力したのに、『監督の子供の癖に』つて言われた。今更ながら思つたんだ。あの子も同じ様に頑張つてたんじゃないのかつて」

似た様な話を知っている。

『天才の子供の癖に』と言われて、悔しくて、悲しくて、泣きながら努力して、常に一位になれる様に頑張つて。周りからの言葉が正しく伝わらず、全部父親からの才能のお陰なんだと言われている気がしていた、馬鹿な子供の話だ。

「だからさ、俺、そいつを探してみろ」

「…………急に話が飛んだぞ。何が」だから」なんだ？」

「言われて嫌だった事を昔、言っちまった。確かに善悪の判断が出来ないガキがやったことなんだろうけどさ、関係ないよな。それがどれだけ傷付くことなのかをようやく理解出来た。だから、そいつに謝りたいんだ」

佐藤の目は真つ直ぐだ。やるべきことを見つけたと言わんばかりにやる気と使命感の様なものが感じられる。しかし、決してそれだけじゃない。やる気と使命感とは別に確かに謝りたいと言う誠意の様なものも見て取れる。

だが、それとコイツに謝られた人物が許すかどうかは別問題だ。その人物は俺の様に10年以上も言われたその言葉を引き摺っているかもしれない。それは、ある種のトラウマだ。

住んでいる地域的に、コイツの指している人物は…………俺なのかもしれない。もちろん、確証があるわけじゃないが。

仮に俺なんだとしたら、俺は許せないだろう。

あの一言で色々変わった。それは確実に、10年以上、その一言に囚われ続けることになったのだから。

…………でも、コイツの言ってる人物が俺でない可能性だってあるんだ。まだ名前を口にしていない。

だから、あえてわざわざ否定的な言葉を投げつけてやる必要もないだろう。今後どこかで会うかも知れない訳だし。

それに、佐藤だって同じような思いをした。

同じ苦しみを知ったのなら、自分だけがドツボに嵌った訳ではないのだと、自分を慰めることだって出来る。

「…………仮に、そいつと再会できたとして、お前はなんて言うんだ？どん

な言葉を投げるつもりだ？」

「……まずは謝りたい。その上でもし、アイツが聞いてくれるなら、伝えたい。どうして今更謝ろうと思ったのか」

「お前のそれは自己満足になるだけかも知れないぞ」

思わず冷たい言葉が出た。

否定的な言葉が口を吐いていた。

けれど、佐藤は怯まなかった。

「分かっている。でもさ、自己満足でも伝えたいんだ。上手く言えないし、もしかしたら余計拗れるかも知れないけどさ、『お前も頑張ったんだよな』って。上から目線に聞こえるかも知れないけど、俺は、そう言って欲しかったから」

佐藤の言葉を聞いた時、思った。

なんて傲慢な言葉なのかと。

「……ああ、そうか」

しかし、同時に理解もした。

『お前も頑張ってたんだよな』って、相手に理解を示す様な言葉が胸にスツと入って来た。

もしも、俺に呪いなんてモノが掛けられていたのだとしたら、それは『流石、乃咲先生のお子さんね』って奴と『天才の子供の癖にこんなのも出来ないのか』という2つの言葉だろう。

前者の言葉は倒れてから現在に至るまで、色んな人たちが俺を見てくれていたのだと理解したことで解けた。

だが、後者の呪いは解けていなかったんだ。だから、E組に戻りたいと言う気持ちはあっても、踏み出すことが出来なかった。

今、ようやく自分の気持ちに気付くことが出来た。俺は、見返したかった。そのセリフを吐いた相手を。でも、結局はそいつに知識でマウントを取りはしたが、一言も言わすことが出来なかったのだ。『お前は凄いな』、『お前は頑張った』と。

きつと、E組に戻ろうと心の底から思えなかったのは、周りを見返し続けたかったからだ。俺が一番、俺自身の力を認めさせたかった相手は父さんじゃなかった。あの名前も覚えていない子供だったんだ。

それを今、理解した。

「……お前さ、桐ヶ丘学園って知ってる？」

「……なんだよ、急に。そりゃ知ってるけど。中学生野球で全国連覇中の学校だし。あの進藤がいる学校だろ？確か私立の進学校。成績優秀でスポーツも出来るとか、すげーよな。俺は下から数えたほうが早い順位だから憧れるわ」

「そ。実は俺、今はその主席なんだわ」

「……は？」

「凄いだろ」

「……すげーな」

「実は主席もう1人いるんだけどさ、実はそいつ全国模試1位なんだよ。それと並べる俺って実質全国模試1位じゃね？」

「……かもな」

「実はうちのクラスと野球でエキシビジョンやったんだけどさ、俺らアイツらに勝ったんだよ」

「は？」

「凄いだろ」

「いやいや、どうせ2軍とかそう言うオチだろ？」

「しつかり一軍だぜ？進藤の球、場外ホームランしてやったし」

「……本当なら凄いな」

「これが嘘言ってる目に見えるか？」

「……マジかよ!？」

今日一番の驚愕の声が上がった。

パンデモニウムを見た時の俺と同等レベルの驚き具合に満足した。目を点にして、唾然としている様子に溜飲が下がった。

「天才の子供が凄いいんじゃないかって、俺が凄いいんだ」

「いや、まあ、そりゃすげーよ。聞いててびっくりしたわ。昨日聞いた激重属性も込みで色んな意味ですげーよ」

……うん。満足した。この辺で良いだろう。

自画自賛という奴をあんまりしたことがないから自分で言ってる照れて来たし、何より……しつかりとその口で俺を認めさせることが

出来た。それだけでもう充分だ。

なら、さつき感じた本音くらい伝えても良いか。

「佐藤」

「なんだよ?」

「お前が言葉をぶつけた相手が許してくれるかなんて俺は知らないし、俺だったら許さないけどさ。しつかり相手の目を見て話せば、誠意は伝わると思うぜ。少なくとも、俺には伝わった」

「……………そっか」

俺の言葉に佐藤は少し考える様に俯いた後、静かに納得したように溢した。

コイツから色んなものを受け取った。昨日、何気なく話を聞いて、話をした相手とまさかこんなことになるとは思わなかったけど、お陰様で俺もようやく答えを出せる。

「じゃあな。まあ、精々同じことを繰り返さないこった」

そう告げて歩き出す。

——俺はE組に戻りたい。

答えは出た。かつて俺を縛る言葉の呪いと同じことを言ったと言う相手に俺自身のことを認めさせた。

そう実感した時、俺はようやくストンと何が腹落ちしたのを感じた。E組に戻りたいのにそれを躊躇っていた自分の中の何かが脱力したのを感じた。俺にはもう、A組に残る理由はなくなってしまった。区切りをつけることが出来た。

浅野理事長はまだ、学校に居るだろうか。

答えを聞かせないと。

「待ってくれよ、お前の名前は?」

次の目的に向かって歩み出した俺を後ろから呼び止める声があった。その声に振り向くことなく足を止める。

「……………必要か?」

「こんだけ絡んだのに俺だけ苗字すら知らないのは不公平だろ。銀の死神とか、そんなんじゃない。お前の名前は?」

その問い掛けに思わず考える。

そう言えば、別に名乗るのを躊躇う必要もなかったな。

「乃咲圭一だ。じゃあな、佐藤」

「……………ああ。そっか。色々が悪かった」

「何に対する謝罪か知らないけど、許さねえよ」

「……………分かってる。さつき聞いた」

「……………まあ、でも、昨日は楽しかった。またな」

「……………ああ。また」

続く言葉はない。

俺は今度こそ歩き出した。

??

??

??

『入院中のキミが私に連絡をくれたと言うことは、答えが出たと言うことで良いのかな?』

「はい。浅野先生からなら教わりたいことは沢山あると思うけど。俺は、E組に戻ります」

俺の言葉に躊躇いはなかった。

89話 帰還の時間

晴れ渡る空、流れる白い雲。そして鬱陶しい程にじめつと暑いアスファルトから反射する熱。

久しぶりに袖を通した学校指定のワイシャツは早くも汗ばんでいる。今年最高の気温を記録するだろうと言う天気予報のねーちゃんも今日は嘘を吐かなかつたらしい。

「あつちい〜……」

「思わずネクタイを緩めながらボヤク。

『でしたらネクタイ外せば良いのでは？夏服ならネクタイは着けなくても良いと規定されてたと思いますが』

「気分の問題だよ。色々引き締めないとね」

『ネクタイは緩めましたけどね』

「うっせえ」

パタパタと首元を扇ぎながら歩く。

そう言えば、手で扇ぐのは体を動かすことになるので逆に暑くなる、みたいな話を聞いたことがあった。

「……お？圭ー！」

「あ、ほんとだ。乃咲い〜」

律からの細やかなツツコミを適当にいなしつつ通学路を歩いていると、見知った黒髪と栗毛が目に入るよ。

手を振りながら近づいてくる悠馬と前原は俺の名前を呼びながら近づいて来た癖に目が合うとキョトンとした表情になり、2人して目の前の現実を確かめるみたいに目を擦った。

「圭ー？髪型変えたのか」

「すっげ。オールバックになってる。今まで少し前髪が短い千葉みたいな髪型してたのに。どんな心境の変化だ？」

「……まあ、色々あったんだよ。ほら、決意を新たに髪型を変えるとか創作ではよくあるだろ。それと同じだ。似合ってない？断髪式の方が良かったかな」

「いや、似合ってる。普久間島ホテルに潜入した時に菅谷がセットした髪型だな。潜入後半では崩れてたから……そう言えば、前原たち留守番組が見るのは初めてになるのか」

そう。俺は髪型を変えてみた。

心境の変化で髪を変えるとか女子か！と自分でも突っ込みながら変えてみた。まあ、気持ちを切り替えるスイッチみたいなものだと思えば、そうは気にならなくなった。

「ほーん……。ま、俺も似合ってると思うぜ？なんつーんだろ、垢抜けた感じがするって言うのかな」

「そうだろう。昨日垢落として身体中擦った甲斐があつた」

「垢抜けるってそう言う意味じゃねえよ」

「ソフトボールくらいの大きさの垢が出て結構ショックだった。毎日風呂入ってるのに……」

「話聞いているか？そう言う話じゃないってのに」

「だよな……。分かるわ、それ。俺も商店街の福引で当たったから使つて見たんだけど擦れば擦るほど消しカスみたいなのが出て来てすげーショックだったわ……」

「磯貝？お前までボケに回るとしんどいんだけど」

「まあ、偶には良いだろ。このノリも久しぶりだし」

「おつ、乃咲じゃん。おつす」

「木村も久しぶり」

3人で歩いていると木村も合流した。

顔を合わせると、例の如く、木村も俺の髪型を見て一時停止したが、割とすぐに再起動してにあってると言ってくれた。

「あれ、そう言えばさ、お前は結局この後どーすんの？」

「この後？」

「ほら、残るのか戻ってくるのかの話しだよ」

木村が思い出したみたいに関の話を持ちかけてくる。

A組に残るか、E組に戻るか。長らく悩んだ問いかけ。それに対する答えはもう出したので答える。

「俺はE組に戻るよ」

「おおっ！」

「……そっか、正直、ホツとした」
「だな」

三者三様の反応をするが、それでもみんな安心したように頷いてくれた。本当に今回は色んな人に心配をかけてしまった。

「あ、小テストは？」

「そっちも問題ない。電話でE組に戻ることを伝えた翌日には理事長がわざわざ病室まで来てさ、あの人の目の前で解かされたよ。正直、生きた心地がしなかったが、しつかり満点も取った」

「うわあ……。嫌な甲斐甲斐しさだな、おい」

全員の顔に苦笑が浮かぶ。

あの時は本当に怖かった。ベットの横には理事長、備え付けのテーブルの上には明らかにA組ではまだ習っていない部分が出題された小テスト。ものすごくニコニコしながら解いてる様を見守ってくる理事長は夢に出るほど怖かった。

あれは絶対に根に持つてる。

A組に留まらずE組に戻ったことを絶対に不満に思っているだろう。その所為か浅野理事長の思う強者像をひたすらに聞かされた。興味深い内容ではあったけど、あの人が強者に拘る理由がよくわからない。ある種の狂気を感じたくらいだ。

「そう言えば、その息子の方はどんな調子なんだ？」

「あー……。なんっつか、面食らいまくってる。殺せんせーの奇天烈な言動に対する反応見ると『そう言えば俺たちもこんなリアクションしてたわ』とか懐かしくなるぞ」

「……そうか。強く生きて欲しいもんだな」

哀れ浅野。彼は今、自分の常識をぶっ壊されてる真つ最中らしい。俺を嵌めた天罰だ、ざま〜みろ。

自分から踏み込んだ領域だ。哀れむことはあろうとも同情はすまない。全て自分が選んだ結果である。

「暗殺の方でなんか進展は？」

「いんや、特にない。プリン爆殺計画で殺せんせーの嗅覚と味覚が予

想以上に強いのを再認識した程度」

「ま、半年暗殺して大したこと分かんないのに、2週間で何か変わるはずもないか。そりやそうだわ」

などと暗殺教室の状況について最新の知識を仕入れていると、いつぞや、倉橋さんとあつて、そのままぶつ倒れた道に辿り着くと、彼女がいた道から見慣れた女子連中が歩いて来ていた。

「あつー圭ちゃん!!」

これまた聞き慣れた声。恐らく律を除いたら一番最近連絡を取った相手だ。そんな彼女がパタパタと軽快な足音を立て、大袈裟に腕を振りながら走ってくる。

いや、ほんと、倉橋さんは元気だなあ〜なんて微笑ましく思っていると、同じことを思っているのか、その後ろにいた片岡や岡野、矢田さんも倉橋さんの背中を見て微笑んでいた。

「わっ!?!髪型が違うよ!?!」

「うーん、本日3度目。やっぱり似合っていない?」

こうも連続して髪型を突っ込まれたことは今までなかったのだから少しばかり気になって来た。例えば周りに肯定されたとしても、何度も確認されると不安になる精神である。

「あー。ホテルの時の」

「そっか、あの時はヒナちゃんいなかったもんね」

「ま、確かに髪型変わるとだいぶ印象も違ってくるよね。でも、なんか垢抜けたみたいに見えるし、顔付きも前より良くなって、良い感じなんじゃない? しらんけど」

「なあ、前原。岡野のコレは女子語だと言おう意味なん? シンプルに褒められてるってことで良いのか?」

「良いんじゃないね、しらんけど」

「……………前原くん嫌あい」

前原からプイツと顔を逸らすと倉橋さんがフリーズしているのが付いた。ガチっ!と硬そうな効果音が似合う止まり方。再生中の動画を一時停止したみたいと同じ姿勢で止まっていた。

なんだろう、どうかしたのだろうか。

倉橋さんの前に立ち、少し膝を曲げ、彼女の視線の高さに自分の視線を合わせて顔を覗き込んでみる。

「倉橋さん？」

「――」

返事がない。ただの屍のようだ。

何が起きた。人がフリーズするのはえてして思考が追いつかない時や、予期すらしていなかった事象が起こった瞬間だと決まっているものだが……。この短時間に何が起きた？

考えてみるが、分からないものは分からない。

何か見たのか？それこそ未確認生物とか、未知の生命体的な、人の理解の範疇を超えたものとか……？

いや、でも普段殺せんせーなんてとんでもないイレギュラーを見るんだからそんなの見たても大して驚かないと思うんだが。倉橋さんをこんな状態にするって一体どんなものを見たんだよ？

「乃咲乃咲」

「……前原くん嫌あい」

「良いからちよつとこつち来いって。倉橋の再起動の仕方教えてやるからさ。それで水に流せよ、な？」

「……まあ、このまま立ち往生するわけにもいかないし。今回はその話に乗ってやるとしますかね」

前原……と言うか、男連中のいる方に手招きされ、招かれるがままに近づき、前原からの指示を仰ぐ。

「とりあえず、ビッチ先生から教わったモテテク使って倉橋に呼びかけてみ。多分、再起動するからよ」

「……？なんでモテテクで再起動するんだよ？」

「……えつと、それは……」

「ビッチ先生を師事してる倉橋なら、あの人から教わったモテる返しをする為にネタにノツてくるってこと」

「……まあ、悠馬がそこまで言うなら」

前原だけならともかく、悠馬が言うなら別に変なこともないだろう。別に前原を信じてないわけじゃないが、前原と悠馬、どっちを信

じるかなら、後者を取るだろう。

合気道とか、実際は互いに掛ける技を打ち合わせしていて、魅せる為の演技をする、見たいな話を聞いたことがある。

時代劇の殺陣とかも、互いに次はどんな動きをするのかをよく練っているからこそ、あんな見栄えのいい動きができる。

つまり、ビッチ先生から伝授されたモテ技を使うことである種の実践演習とか、自分だったらこんな返しをする、見たいな稽古のようなものに発展するはずだと彼らは言いたいのだろう。

まあ、それが彼女の再起動に繋がるかは疑問だが。

脳内のビッチフォルダから使えそうな情報を引っ張り出す。まさか同級生に使うことになるとは思わなかったが。

いくつか簡単に実践出来そうなものをピックアップして、自分のコンディションを整える。流石に声が裏返るのはダサい。

ネクタイを締め直し、顔を引き締め、自分の声の特徴を損なうことのない範囲で音域を調整、目の高さを合わせるのではなく、片膝を着き、手を取り、しっかりと意思を込めた目つきで見上げる様に目を合わせて口を開いた。

「——陽菜乃」

「……………あ。」

瞬間、短く悲鳴の様な声を出して倉橋さんはぶっ飛んだ。

後ろに待機していた片岡にキャッチされ、ブシュと空気を吐き出しながら勢いよく飛んで行く風船の如く、体を揺らめかせた後、彼女はプシューと音を立てて沈黙した。

「……………前原くんの嘘つき」

「責任転嫁すんなコラ」

その後、女子たちの必死の蘇生活動により、倉橋さんは一命を取り留めた。しかし、気絶するほどダメージを与えるとは思わなかった。少しばかりショックである。

この瞬間、俺は二度とモテ男ボイス、モテ男スキルを使わないことを心に決めたのであった。

??

??

??

「ぜえ……ぜえ………かひゆ………」

「お、おい、圭一？大丈夫か……？」

「らめえ………」

「体力落ちすぎじゃない？」

「おりえもおろろいひえる………」

通学路を順調に進んでいると、まあ、当然ながら学校に着くわけで。コレから久しぶりの授業だっー！と張り切って登り始めたE組の山。そこに思わぬトラップがあったのだ。

体力が落ちているのは自覚していた。だからこそ、退院数日前は散歩をして少しでも歩く感覚を取り戻すことに努めていたのだが、俺は見通しが甘かった。街中を歩くのと山道を歩くのでは感覚が違うなど当然。

しかしながら、それに気付かなかったのである。

「ましゃか……こんな………たいりよくがおちてるとは………」

「圭ちゃん大丈夫？」

しかし、なんだかんだでしつかりと山を登り切ることは出来た。道中、悠馬や前原、木村に散々手を貸そうか？と聞かれたが、俺にもプライドがあるので断ってきつちり歩いた。

そして今、校舎の前で肩で息をしながら倉橋さんが下敷きを扇いで送ってくる風に癒されているところだ。

「久方ぶりに見たと思ったら随分疲れてんなあおい」

「てらしやかあ………」

「ったく、おい磯貝、反対側もて。このファザコンとつと席に運ぶぞ。カルマの野郎がさっさと弄りたくてウズウズしてんだよ。こつちに飛び火する前に生贄にすんぞ」

「すつきっぱらにポチ………」

「それを言うなら、泣きっ面にハチだろうがよ。犬を食ったみたいな文脈になってんぞ」

「お前が犬の話題出した所為で、泣きっ面をハチって名前の犬に噛ま

れた見たいなイメージが頭に湧いたんだがどうしてくれる。せめて蜂つて言ってくれば良かったのに」

「しらねえーよー！」

理不尽にキレてみたら怒鳴られた。

ズカズカと近寄って来た寺坂に腕を掴まれ、悠馬と2人して俺を引きずって教室まで連行しやがる。

地球人に捕まった宇宙人になった気分だ。

まあ、実際には一般人に捕まったナチュラルボーン強化人間なので珍獣を捕まえた人間という意味では同じかもしれないが。

「あ、おい、変な角度で引き摺るとズボン擦れて破れるぞ！ ったくしやーねえ。木村、お前は右足を持って」

「あいきゃー」

「……………これは、どういう状況だ？」

引き摺られていると、烏間先生が職員室から出て来た。

すっかり挨拶したいんだが、生憎、右手を悠馬、左手を寺坂、左足を前原に、そして今、木村が新しく右足を掴んで来やがったので完全に地から足が離れてしまった。

「おはようございます、烏間先生」

「ああ……………おはよう。今日からまたよろしく頼む」

「こちらこそ。まあ、一旦は体力作りからになりそうですがね。久しぶりに山を登ったら息が上がってしまいました、ちんたらしてたら男連中に誘拐されることになった次第です」

「……………そうか」

烏間先生は頷くと、現実から目を逸らす様に外に広がる青空を見上げ、何やらしみじみと頷き始めた。

その様子から、相変わらず苦労してるんだな、この人も、とE組に帰ってきたことを実感してしまう。

横に向かってスライドしていく景色を眺めていると教室に辿り着き、寺坂が俺の右腕を持ちながら器用に扉を開ける。

が、俺は見た。扉と壁の間に挟まっている黒板消しを。

咄嗟にゾーンに入る。こんなことをやる奴はカルマくらいしか居

ないだろう。このままだとアレは俺に直撃する。

止まった世界で目を動かし、カルマのいる位置を確認。アイツはニヤニヤと笑みを浮かべており、その近くにいた渚と茅野はあちゃー、と顔を手で覆っていた。

あのニヤけ面、間違いなく俺に直撃すると思ってる。しかも、予想外に四肢を持たれて運ばれて来たもんだからちよつと変なツボに入って笑いが堪え切れてない時の顔だ。

アイツの思う壺になるは癪なので、ゾーンから抜け出した俺は再び動き出した世界の中で落下を再開した黒板消しに向かつて全力で頭をスイング。サッカー選手も腰を抜かすようなヘディングを落下物にお見舞いし、カルマのいる方へと弾き飛ばした。

「へぶっ!?!」

「カルマくん!!!」

黒板消しはちようど、チョークを消して白んでいる部分からカルマの顔面にクリーンヒット。アイツの顔より一回り大きい範囲を白く染めた。

ちなみに渚はその粉塵に巻き込まれ、茅野はさり気なく退避し、被害を受けない場所に逃げていた。

……茅野の奴、すごい反射神経だな。いや、もしかして動体視力なのか？油断してたとは言え、カルマが直撃したのに1人だけ避けてるとは。思いもやらない特技だな。

「やあ、おはよう。元E組兼元A組の風見鶏の乃咲圭一です。今日からまた皆さんと勉強に勤しむことになりましたので、よろしくお願いします。だいじょーぶですか、カルマくん？」

「はははっ、随分と元氣そうじゃん、死神ファザゴン」

「まあ、それなりにな。お陰様で完全復活だ」

この際、死神ファザゴンとか言う新しい名前には目を瞑ろう。ある程度の弄りは覚悟していたことだ。

「さつきから気になってたんだけど、死神ファザゴンはなんで磯貝くん達に腕と足掴まれて宙ぶらりんなの？」

「久方ぶりに登校して山を登って息を切らして、ちんたらしてたら捕

獲されたんだぞ、茅野」

「んじやー、しばらくは体力作りからだな。今日からまたよろしくな、死神ファザコン」

「そうだな、そうしてくれると助かる、杉野」

「射撃の腕、落ちてそうなら相談してくれ。アドバイスできるかは分からないけど、一緒に訓練するぞ、死神ファザコン」

「ありがとう、千葉」

「ご飯とかしつかり食べてた？まだ育ち盛りで若いんだからしつかり食べるんだよ？死神ファザコン」

「大丈夫だ。飯はしつかり食ってるよ、原さん」

「ねーねー、死神ファザコンは入院中、ナースさんとかと一夏のアバンチュールとかなかったの？」

「病院をなんだと思ってるんだ、中村さん……」

「ねえ、死神ファザ——」

「んああ——っ！！死神ファザコンって呼ぶなあ！」

【圭一弱点メモ④：死神ファザコン】

流石に耐えかねて発狂すると、凄まじい風が俺たちの横を通り抜け、風を伴って移動して来たそれが、教卓に立つ。

黄色いタコ型超生物はいつもと変わらない笑みで触手をゆらゆらぬるぬると動かしながら俺を見た。

「おはようございます、乃咲くん。体調は？」

「良好です」

「それは何より。キミがこうしてまた、この教室に戻って来てくれたこと、とても嬉しく思います」

「ええ。この教室で学びたいことが沢山ありますから」

「ヌルフフフ。それは結構。教師としてその言葉を貰えるのは最高の評価です。任せてください。この教室にいる限り、キミを飽きさせることは決してありません」

「教え子としてそれは嬉しい限りですね」

「……私はキミがどんな道を選ぶとも応援するつもりでした。でも、こうして戻って来てくれたことが本当に嬉しい」

「足りない頭を自分なりに捻り続けて、やりたいことを見つけてきましたからね。俺はあなたや烏間先生、ビッチ先生、クラスのみんなから学びたいことがきつと沢山あるし、地球滅亡も食い止めたいです。やるべき、じゃなくて、そうしたい」

俺がその言葉を告げると殺せんせーがニヤリと笑い、クラスメイト達はそれぞれの笑みを浮かべ、教室の外の先生方もまた、何処か好戦的で手強そうな笑みを浮かべた。

「……………それに」

「にゅ？」

「目を逸らさないと見てくれるんでしよう？」

「……………ニユルフフフフ！ええ、もちろんです！さあ、皆さん！今日も良く遊び、よく学び、よく殺しましろう！」

常識から外れた担任の常識はずれの言葉。

「「はいっー」」

しかし、それに返事をする俺たちも常識はずれだ。

それでいい。俺は、あれこれ言い訳を並べていたけど、結局はこの教室が好きで戻って来たのだから。

「ねえ、圭ちゃん。そういえば、ホテルの時、いつてらっしやいって送り出したのに、結局言えてなかったと思ってさ」

「ん？なにが？」

「……………おかえり！」

「……………うん、ただいま、倉橋さん」

始業のベルが久しぶりに鳴った。

??

??

??

「……………おや、乃咲が弁当持参とは珍しい」

「んえ？ああ、ちよつと思うところあって料理とか覚えてみようと思ってるさ。とりあえずレシピ覚えたのを作って見たんだ」

「ほーう」

昼時、家から持って来た弁当箱を出すと、物珍しそうにやって来た

面子の中で代表するように竹林が口を開いた。

もともと、家庭科はできないわけじゃない。小さい頃からトメさんの手伝いをしていたのでそれなりにできる。

まあ、誰もを唸らせる美食を作れるかどうかで言えば100%NOと答えるが。自分で食うには文句ない程度には。

「ほええ。乃咲が料理ねえ」

前原からの失礼な視線をスルーしながら蓋を開ける。

そして、全員が一斉に顔を顰めた。

「なにこれ」

「キャラ弁」

「……………このキモいのが？」

「見た目はアレだが、意外と美味いぞ」

「……………なあ、圭一。こんど金魚飯でも食ってみないか？前原からも評判いいんだ」

「ん？じゃあ今度な」

「……………磯貝、ついでに料理とは何かを教えてやってくれ」

「心配すんな。そのつもりだ……………」

「テメエら失礼すぎるだろが」

むすつとしながら例のブツを箸で持ち上げる。

「ギシャアアアアア」

パンデモニウムは今日も鳴く。

90話 鬼ごっここの時間

『……ほう。それがキミの選択なら尊重しよう。だが残念だ。キミには資質がある。強者になれる。こちらの思惑は別として、それを活かせる場を私なりに用意したつもりだったのだが』

「あなたは鷹岡とは違う。アイツは自分の為に生徒を強くしようとしたけど、あなたは純粹に俺たちの為に強くしようとしている。それには感謝してます。柗ヶ丘では価値がなくなつたも同然のE組に落ちた後も、なんだかんだで気に掛けてくれました」

『才能は活かされるべき場所で活かされるべきだと思ったからだ。それほどの資質を周囲とのすれ違いで潰させてしまるのが惜しかった。キミは他人を気にし過ぎるところがあつたから、A組で他者を踏み躪つてでも自分の目的を果たす姿勢を身につけ、強者として卒業して欲しかったよ』

「俺に強者の資質なんてないですよ。他人を踏み躪り続け、1人だけ生き残つても、何処かで背負つた何かの重さで潰れるだけなんだろうって。今回の件で身をもって痛感しました。それに、自分の思う強者像は先生のそれとは違うようにも思いますので」

『……残念だ。参考までに私とは違うと言う強者のイメージについて聞いても?』

「まあ、あくまで漠然としたイメージなんですけどね。周りを踏み躪つてでも1人だけ生き残る奴と、必要なら周りを頼つてみんなで生き残る奴。どっちが信頼されるのかって話ですよ」

『……………』

「そりゃあ、どんなことをしてでも生き残るのは強い証拠でしょうけど、それを繰り返して生き残つたとして、ソイツが本当に助けが欲しい時、助けてくれる誰かはいろのかなって思うんですよ。何でもかんでも1人で出来るほど現実には甘くないですから」

『……………なるほど。どうやら我々は強者という定義については相容れないらしい。本当に残念だ』

「まあ、そう言うことです」

『それでは明日、小テストをキミの病室に持っていくついでに小一時間ほど意見を交わそうじゃないか』

「え」

『楽しみにしていると良い』

暗殺教室復帰前の一コマである。

??

??

??

「2学期から新たに教える暗殺訓練。火薬に続くもう一つの柱がフリーランニングだ」

暗殺教室に合流して早々の体育の授業。烏間先生に集められたと思っただけそんな説明をされた。

フリーランニング。なんとなく聞いたことはある響きだ。しかし、どんなものなのかと説明できるほどの知識はない。

みんなも俺と似たり寄ったりらしく、烏間先生の言葉があまりピンと来てないらしい。キョトンと顔を見合わせる生徒達を認めると、烏間先生は徐に俺たちが集まってる広場から見える少し離れた位置の一本松を指差した。

「例えば、あの一本松まで行くでしょう。三村くん。大まかで良い。どのような行方、何秒かかると思う?」

「えっ、えっつと……」

指名されたのは三村だが、みんなで烏間先生の設定した目的地までのルートを探るべく、前に出た。

一本松は俺たちのいる広場を少し行った所にある崖の下、小川を越え、茂みを突破した奥の岩の上に聳えていた。

「まずはこの崖を這い降りて、小川は狭いから飛び越えて……茂みのない右側から回り込み、最後にあの岩をよじ登って……1分で行ければ上出来じゃないですかね?」

三村の横で同じようにロケーションを見ていたこのクラスで機動力の高い木村も同意見なのか頷いた。そして、これに関しては概ね俺

も同意見である。強いて違いを述べるなら、実際に下まで降りた時、茂みの下が確認できるかどうかで迂回しないルートを取るかもしれないくらいかな。

「では、実際に俺が行ってみよう」

鳥間先生がネクタイを緩めながら前に出る。測っておくようにと三村にストツプウオツチを、近くにいた俺に外したネクタイを渡すと俺たちが見下ろしてる崖に背を向けて説明し始めた。

「フリーランニングは自身の身体能力を把握する能力、受け身の技術、目の前の足場の距離や危険度を正確に計るチカラを養うことができ。コレが出来るようになれば……どんな場所でも暗殺が可能なのは……」

先生は不敵に笑い、崖に背を向けたまま、吸い込まれるように背後の絶壁に落ちていった。

あまりにも自然で躊躇いのカケラもない動きに驚愕するが、鳥間先生は俺たちを気にすることなく、綺麗に5点着地を決めるが、その勢いと動きを切ることなく流れるように身体を畳んで、飛び上がると小川の横にある崖を地面と平行になりながら走り抜け、茂み地帯を突破。再び高く飛び上がると、そのまま岩と岩の間を蹴って上がって行き、瞬く間に一本松へ辿り着いた。

「タイムは？」

「じ、10秒です……！」

「…………マジかよ」

もうある程度のことには驚かないと思っていたのだが、これは流石に驚きを隠さずにはいられなかった。

地球防衛軍のレンジャーの如く、高所から飛び降りても平然と行動し、ソニックの如く壁を走り抜け、マリオの様に壁キックで高所に登るとか人間業じゃねえと言いたい。

言いたい……。鳥間先生に出来るのだから、人間でも出来ると言うことなのだろう。恐らくは。きつと、多分……。

「道無き道で行動する体術。熟練して極めれば、ビルからビルへと忍者の様に踏破することも可能となる」

「す、すげえ……」

「あんなん身につけたら超かっけくね?」

クラスメイト達が興奮気味に歓声を上げる。

無論、俺とて新しい技術の習得というイベントに内心盛り上がりつてはいるのだが、こうして新たに暗殺の次のステージが見えてくるといい知れない不安が湧いてくる。

こうして新しく、そして強力な技術を伝授されるというのはそれだけ俺たちが成長したという証明であり、同時にそれだけの時間が経つたと言う証拠であり、残り時間が確実に減っていると言う姿ない誰かからの警鐘の様に思えた。

「これも火薬と同じく取り扱いを間違えたら危険なチカラだ。初心者の中に高等技術に手を出せば死にかねない。が、幸いな事にこの裏山は地面が柔らかく、トレーニングに向いている。危険な場所や裏山以外で試したり、俺が教えた以上の技術を使うことは禁止とする!いいな!」

「「はいっ!!」」

「では基本の受け身から練習だ!俺の動きに倣うように。それから何処か痛めたとか、違和感があれば躊躇せずに名乗り出る様に。特に乃咲くん!病み上がりで体力も落ちているだろう」

「はい、了解です」

「名指しされてる。信頼ないねー」

「うっせほっとけ、カルマ」

「まあ、ほっといたらいつの間にかとんでもない技術を身につけて、いつの間にか倒れてそんな奴筆頭だもんな、乃咲」

「杉野お……」

「あはは……、えっと、頑張ろ?乃咲」

「茅野が優しい……」

「まあ、みんなの気持ちもわからなくないけどね。でも乃咲だって反省しただろうし過労弄りはここまでにしてあげようよ」

「渚………女神か……」

「僕は男だよツ!!」

「女の名前なのに……なんだ男か」

「渚が男の名前で何で悪いんだ！僕は男だよ！」

「お前らネタが古いんだよ……」

??

??

??

数日後。なんやかんや、身体の訛りも解消しつつある。これも強化人間パワーなのか。何はともあれ、動けるのは良い事だ。もともと付いていた体力を取り戻すのは案外容易だった。

まあ、自分の体力的なものを数値化した時に過去の最高値に並ぶかどうかで言えば間違いなく首を横に振るが。

「……流石に体力の戻りが早いな」

朝、俺は鳥間先生と補習をしていた。

これまでの2週間でみんなが習った技術の習得と、感を取り戻す為の軽い組み手。習った技術を復習する様に繰り返していると、息一つ乱れていない鳥間先生が言った。

「まあ、全盛期程じゃないですけどね。この言い方が正しいのかは一且別として」

「だが充分付いて来れている。心なしか、確かに体力は落ちた様に思うが、戦闘技能は上がっている様に見える」

「んく……」。多分、前より悩みとか、迷いとか、そう言うのが少なくなったからですかね。無意識のうちに考えてたことを考えなくなっただからか、少し、視野が広がった様に思います」

「なるほど。そう言うこともあるか。だが、今後の暗殺において広い視野というのはかなり重要なポイントになる」

「まあ、フリーランニングを本格的に使うようになったら、足場の危険度とかそこまでの距離だけじゃなくて、仲間の位置とか進行方向、選択コースなんかも見えてなきや事故りますもんね」

「そう言うことだ。キミの洞察力を頼りにしてるぞ」

「頑張ります」

鳥間先生の期待というのは、やはりやる気に繋がる。この人は目を

見て意思を込めて、思ってることを伝えてくれる。確かに俺はもう、過剰に認めて貰いたいという欲求はなりを潜めたが、それでもこの人の期待に応えたいと思うのは、烏間先生からの信頼があつてのことだろう。

「さて、一旦ここまでにしよう」

「はい、ありがとうございます」

お開き宣言に頷き、教室へ向かう。

靴箱で上履きに履き替えていると、パタパタと不破さんが忙しなく走ってきた。

「おはよう、乃咲くん」

「おはよ。大丈夫か？遅刻寸前だけど」

「いやあ、ジャンプが何処にもなくてね。探してるうちに気がつけばこんな時間になってました……」

たはは、とあまり反省してなさそうに笑う不破さんに苦笑しながら教室まで歩き、扉を開けて……手に手錠を掛けられた。

「遅刻ですねえ。逮捕する」

よく見ると不破さんも逮捕されていた。

「……何やってんのよ、朝っぱらから。邪魔だからさっさと教室に入んなさい」

後ろからズカズカ入ってきたビッチ先生が俺の手錠が繋がれた鎖を掴み、グイグイと引っ張って来る。

「やめて……俺に乱暴する気でしょう？エロ同人みたいに」

「しないわよ、とつとと入れ」

エロ同人のあたりで倉橋さんがガタツ！と勢いよく立ち上がった。もしかして彼女、そう言う本が好きなんだろうか。

なんて悪ふざけしていると、座っていた木村が俺たちのやりとりよりも、殺せんせーの格好に面食らった様子で言う。

「つか、なんだよ殺せんせー。その悪徳警官みたいなカツコ。朝っぱらからテンションたけーな」

「ヌルフッフ。君たちは最近、フリーランニングを習得したようですねえ。そこで先生、やってみたいことがあるんです！ズバリ！それは

ケイドロ！この山という立体的な地形に加えて君たちが習ったフリーランニングなどの機動力を高める技術を惜しみなく使った超立体的鬼ごっこです!!」

それは確かに面白そうだ。

まあ、提案した本人が一番楽しそうにしてるが。

「皆さんには泥棒側として鬼から逃げ回って貰います。身につけたスキルを使って裏山に潜んで下さい。追いかけるのは先生自身と烏間先生です。1時間目内に全員を捕まえることが出来なかったら我々の負け。先生が烏間先生の財布で全員分のケーキを買ってきます」

「おい……」

「ただし、全員捕まったら宿題は2倍とします！」

「ちよつと待てよ!？」

「1時間も殺せんせーから逃げるなんて無理だつて!？」

「そこはご安心ください。先生が動き出すのはラスト1分から。それ以外は校庭の牢屋スペースで待っています」

「つまり、鬼はそれまでは烏間先生1人つて事ですか」

「はい。どうです?」

「……確かに、それならなんとかなるか……」

みんながやる気になった様だ。

殺せんせーと烏間先生。この2人のコンビネーションは凄い。俺たちに新しい技をくれる烏間先生。新しい技を楽しく、けれど一定の緊張感を持って使う機会を用意してくれる殺せんせー。

もしも、2人が殺し殺される仲出なかったのなら、案外、彼らはいいコンビなのかもしれない。

「念の為に最初に言っとくが、仮に生徒達が勝ったとしても、お前の分は払わんからな」

「にゅやあつ!?そんな殺生な〜ツ!!」

……多分。

烏間先生と殺せんせーのやり取りを眺め、ホームルームを終え、着替えた俺たちは早速ながら校庭に出た。

ケイドロか。懐かしい響きだよな。子供の頃にやった遊びを色ん

な技術を仕入れ、駆使して行うのは感慨深い。

「あ、いた。ねえねえ乃咲くん」

「どした」

「このケイドロ、勝てると思う？」

「普通にやったら勝ち目ないわな」

「だよねえ」

準備体操をしているとカルマ達が来た。

「どうやら今回のケイドロについて話したいらしい。」

「まあ、言わずもがな、勝負はラスト1分だな。山中特有の障害物が生えているとは言え、相手は殺せんせーだ。まともに逃げて勝てる筈がない。でもまあ、手がない訳じゃない」

「殺せんせーに対して出来る対策かあ……。うーん。1分間耐えればいいんだよね？出来そうなこと……。水に潜るとか？」

「茅野の言う通りだ。あの人は弱点が多いからな。ラスト1分は水に潜ってやり過ぐすとか、対先生弾を足場にばら撒いてトラップ設置しまくった洞穴にこもるとか。対策は出来る」

「あれっ？それって案外楽勝じゃねえーの？」

「いや。確かに山場は最後の1分だが、これから50分以上、俺たちは鳥間先生から逃げなきゃならないんだぞ？」

「いやいや、流石にこの裏山全体を使った鬼ごっこで人間1人から逃げるくらいどーって事ないだろ？」

「バカだね、杉野。相手はただの大人じゃなくて鳥間センセだよ、俺らにフリーランニングとか諸々の技術教え込んで張本人だ。加えて、あの人には俺たちみたいな危険な技術は使わないって制限はない。むしろ、『最終的にはこれを出来る様になってもらうぞ』ってばかりに積極的に使ってくるだろうね」

「カルマの言う通りだな……。んで、さらに付け加えるなら、鳥間先生は自衛隊の中でも精鋭中の精鋭だ。逃走するターゲットを追いかける技術を持ってない訳がない。いくらフィールドが広くても、何処にいるのかを知られてれば意味がない。向こうの方が圧倒的に速いんだからな。最悪、殺せんせーの出番が来る前に全滅する可能性すらあ

るぞ」

「……………このコンビ、どうやって突破するよ?」

「およそ死角らしい死角がないのが怖いな」

「あの2人、絶対に組ませちゃいけないって」

「最強の生物と最強の人間が宿題を増やす為に襲って来るのか。そう考えてみると中々にシユールなシチュエーションだ」

全員の顔が苦いもの変わった。

このまま士気が下がりはなしないのも良くないので、いくつかの打開策を打ち出し、みんなに伝える。

「でもまあ、鬼ごっこではあるけど、今回やるのは増え鬼とかじゃなくてシンプルなケイドロ。つまりは誰が捕まっても牢屋まで行つて泥棒にタッチ出来れば復活させる事だつて可能だ」

「そうかつ……………つて、その牢屋に殺せんせーが待機してるから鉄壁なんじゃねえかよ!」

「ああ。でも良く考えて欲しい。牢屋には殺せんせーしかない。女装してケーキバイキングに並んだり、テッシュを揚げて食べたり、エロ本を毎日拾い読みしたり、生徒の命と尊厳が懸つてない場面ではかなりアレなことをしている殺せんせーしかない訳だ。手段はいくらでもある」

「お前、何気に酷いこと言ってるぞ」

「まあ事実だし……………。それで?その手段つてのは?」

「買収だ。捕まった時に岡島の秘蔵の巨乳チャンネルの写真でも渡してみる。確実に受け取る筈だ」

「無いとは言えないのが悲しいね……………」

「だろ?」

殺せんせーを買収出来れば復活も出来るかもしれない。その事実を実現できれば、という注意書きはつくものの、このケイドロでの勝利を掴む活路に通じるとみんなも思つたらしい。

「……………でもよ、ラスト1分になったら鳥間のセンコーも動くだろ?水とかトラップ仕掛けてタコを封じるとして、アイツはどうするよ?その条件だと下手したら一番の障害になるぞ」

「そこは寺坂の言う通りだねー。ならば、単純な話、殺せんせーと烏間センセを分断しちゃえば良いんだよ。ラスト6分くらいで烏間センセをプールとか殺せんせー対策が出来そうな場所から全力で遠ざけて時間を稼ぐのが良いんじゃない?」

「んー、でもさ、烏間先生乗ってくれるかな?」

「そこは心配しなくて良いかもしれないぞ。烏間先生にとって、こう言うイベントは俺たちがどれだけ成長してるか確かめるための試金石でもあるし、機動力自慢の小隊をぶつけなければ乗ってくれると思う。あとはその小隊の頑張り次第にもなるけど」

「悠馬の意見に俺も概ね賛成だ。でも、そうだな……。策はあるに越したことはない。機動力特化小隊が烏間先生を陽動してる間にそれ以外の連中はそれぞれ殺せんせー対策が出来そうなポイントに散開しよう。出来るだけ距離を空けることを忘れるな、少しでも烏間先生の移動時間を稼ぐ為だ」

「逃げ方はどうする?機動隊以外はバラバラに逃げる?その方が時間は稼げそうじゃない?」

「それもアリだと思うけど、俺は4〜5人の小隊で動いた方が良いと思うなく。目と耳の多さは情報の多さでもあるからね。4人もいれば取り敢えずは360度の警戒は出来るでしょ。烏間センセの接近にも気付きやすい。乃咲くんはどう思う?」

「カルマに同意だな。編成は……機動隊は、片岡、岡野、木村、前原で行こう。片岡が指揮、前原は捕まった時の買収役、岡野と木村は索敵しつつ、なりふり構わず逃げまくれ。他のチームは指揮、索敵、買収、逃げ足の速い奴って感じで組もう」

「指揮役って言う……既に決まってる片岡を除外するなら、磯貝、カルマ、乃咲の3人かな?」

「……いや、俺は除外して、悠馬、カルマ、寺坂、中村さん、竹林が良いと思う。割と戻ってきてるけど、俺の体力が落ちてるのは事実だ。ぶっちゃけ戦力としては期待できないだろうし」

「……………お前が指揮を降りるのは一旦、置いておくとしてよ、磯貝とカルマ以外の追加メンバーの真意はなんだ?」

「今んところ、各個人が中心になった作戦以外で指揮を執ったことがあるのは俺とカルマだ。悠馬と片岡はもともと高いリーダーシップがあるし、俺たちを束ねて指揮することも出来る。でも、何かあった時に俺たち4人のうち誰かが必ず側にいるとは限らない。指揮が出来る奴は増やした方が良いと思つて」

「何かあつた時つて?」

「普久間島とか良い例だ。あん時は先生方もいてどうにかなつたが、もしも先生方がいない場面に出くわしたり、なんらかの手法で俺たちが分断された時、取り敢えずみんなを束ねられる奴がいるに越したことはないだろ。普久間島の事件があつた以上、今後も同じ様なことがないとは言い切れない」

「……………なるほどね。確かに。あんなこと何度もあつて欲しくないけど、今後もないとは言えないもの」

「そう言うこと。それで今回のメンバーの選出理由だけど、寺坂の場合は実働隊として優秀だ。こつちで大まかな方針を決めた後、コイツが動いて目的を達成するのに最低限、少人数でも指揮が出来た方が効率が良い。数は力だからな。それに、観察力もあるし、ガキ大将気質なのもあつてもともとリーダーシップもあるからな。かなり期待できる」

「チツ…………。ガキ大将気質は余計だつての。しゃーねえ。やつてやんよ、あとで文句言うんじゃないぞ」

「はいはい。次に中村さんだが、シンプルに地頭が良くて頭がキレる。それで臨機応変さもある。ギャルなのにギャルギャルしくなくて、コミュニケーション能力も高いし、どんなこともそつなくこなせるキミなら、指示を出されても『なんで自分が』とか思う奴はいないだろう。あと、陽キャなのに良い人だし」

「随所にめちやくちや個人的主観が混ざつてる気がするけど、概ね了解。アンタにそんな風に評価されてたとは思わなくて少し驚いてるけどね。まあ、頑張っちゃおうかなあ」

「頼んだ。それで竹林だが、まずは判断力だな。コイチで一番冷静な対処が出来るのは間違いないお前だ。普久間島の時を思えばお前

以外に適任はいないだろう。んで、直接的な暗殺は得意ではないが、みんなをサポートできる一歩引いた視点を持つてる。サポートが得意な裏方組を動かす役割にぴったりだ」

「分かった。みんなもそれで良いのなら」

「竹林なら大丈夫だろ。俺らの中、特に普久間島の時に世話になった連中でお前を疑う奴なんていねーよ」

「だねー。あの時の竹林くん、凄く頼り甲斐があつたし」

「……………みんながそう言うのなら、謹んでお受けしよう」

こうして、新しい指揮官候補が決まった。

まあ、もともと学級委員の2人がやってたのをいつの間にか俺がやる機会が多くなつてたし、それでもなんとかこなせたんだ。俺に出来たのだから、彼らに出来ない理由はないだろう。

「実行班、フォロワー班、サポート班つてところか」

「ま、そんなところだな」

「……………はいはい！質問！」

「ん？どうした、倉橋」

みんなも納得したらしく、話が纏まりそうになった時、倉橋さんが元氣よく声を上げた。

首を傾げながら悠馬が問い掛ける。

「圭ちゃんはどうするの？今回は指揮しないんだよね？」

『あ、確かに』と言いたげな顔でみんなが俺を見た。

まあ、当然の疑問という奴なのかな。

「……………今回、俺は別行動させて貰いたいんだ。ちよつと試しておきたい事があるっていうか、今の自分の能力を把握したいんだ」

「あ……………。そっか。圭一はなんだかんだで1ヶ月ぶりか。こういうのに参加するの」

「そゆこと。みんなも知つての通り、A組に戻つてからはめっちゃくちゃ鈍つてたし、それもだいたい良くなつたけど、色々と感覚が抜けるのが多い。みんなと合流して一緒に作戦をこなす為には、自分が何を出来るのか、どこまでなら行けるのか。それを事前に把握しておきたいんだ」

「……なるほどね。別に良いんじゃない？」

「そうか？それならいつそ俺たちと行動して連携する感覚を取り戻した方が良くないか？」

「前原の意見ももつともだけど、俺も乃咲クンにサンセー。こつちとしても、本人が何を何処まで出来るか把握しておいて貰った方が指示も受けやすいし、頼りやすいしね」

「ま、それもそうか」

「よし、んじゃあ、今話した流れに異論ある奴は挙手！……うん、いな
いみたいだな。じゃあこの作戦で行こう！」

悠馬の号令にみんなが頷く。

こうして俺たちの怪物教師2人を相手にしたケーキと宿題倍増を賭けた、ガチの鬼ごっこが始まった。

相手が相手なだけに、リアル鬼ごっこ味が無いわけではないが、E組に戻ってからの初めてのみんなでの作戦。俺は少し……いや、かなり楽しみでウキウキになっていた。

「あ、でも乃咲」

「くれぐれも」

「無茶は」

「絶対に」

「しちやダメよ？」

「分かったね？」

「……………はい、すみません」

指揮官全員に釘を刺されてしまった……。

91話 捕食者（プレデター）の時間

生徒は泥棒、警官は怪物先生2人。

か弱き泥棒は1人の警官に蹂躪され、そして、もう1人の警官のガバガバセキユリティによってあつという間に脱獄。

ケイドロと言う名を借りたある種のマッチポンプ演習鬼ごっこは、無限ループに入りつつあった。

「まさか、本当に買収出来るとは……」

「あはは……。私のプリン情報を聞いたら職務放棄してすつ飛んで行ったもんね。お陰様で無事に逃げられたけど」

「でも、折角逃げても烏間先生にすぐに捕まっちゃう」

「うん……。烏間先生、やっぱり乃咲くんが予想してたみたいに追跡技術も持ってるんだらうね」

「追跡技術か……。例えばどんなのだらう？」

「私、ゲームが好きで、実際に教室で使えそうな知識とかないかなって、色んなものをプレイしてみたんだけど……。追跡と言ったら、やっぱり一番多かったのは痕跡を辿るヤツだったかな」

「痕跡……。ああ、なるほどネ。足跡だけでも色んな情報が得られるか。跡の数で人数、形と大ききで誰が、向きで何処に。足跡一つで結構明け透けになるね。ナイス情報だよ、神崎さん。これからはそういう痕跡にも注意していこう」

「みんなにも展開しておくね」

「ヨロシク」

木の上で見張るカルマくんから返事が来る。

カルマくんは僕らを率いてテキパキと情報を集めて、みんなに共有していく。やっぱり、こう言う時の彼は頼りになる。

でも、それとは別に少しだけ驚いた点がある。驚いたというか、違和感というほどだとないけど、ちよつとした気付き。

「なんかさ、少し意外だよな。乃咲とカルマ。もともと仲が良いのは知ってるけどよ？カルマは割と乃咲の意見を取り入れるし、逆に乃咲

からの指示には割と素直に従うよな」

「そうだね」

「あ、それ私も思った。普久間島の時とか」

杉野の呟きに頷くと茅野もノツて来た。

あの日はホテルに残っていた杉野、神崎さんと奥田さんは少し首を傾げているけど、でも、何処か同じことは感じてるようで、3人とも思った以上に顔に出ていた。

「ん？俺が乃咲クンに合わせる理由？」

カルマくんも僕らの話題を聞いていたのか、木の上からスルスルと滑る様に降りて来た。

「そ。お前って協調性が無いわけじゃないけどさ、周りの言うことを聞くよりも、言うこと聞かせて従わせる側じゃね？」

「確かに人を手のひらで転がす方が好きだけど、乃咲クンは別。面白いじゃん？」

「お、面白い？」

「そーそ。俺が思うにさ、警戒出来ないってすげー怖いことなんだけどね。逆にシンプルに警戒しても足らない怖さってのもあるんだ。彼は後者。なんて言うのかな、底が見えないんだよ」

「……うーん。まあ、確かに底知れない感じはするけど……そんなにかな？視野の広さとか、暗殺の技術とか。いつの間にかみんなの中心にいて、割と自分が持つてる手札はオープンにしてる様に見えるから言うほど怖くないと思うけど」

「アイツの怖さは見せてる、あるいはみんなが見てる手札で最大限で、一番効果的な役を作れるところだよ」

「と言うと？」

「多分、乃咲クンは頭がキレるとかそう言うタイプじゃない。1を見て10に思い当たるんじゃないかって、1から10までを考え倒す実は要領が悪いタイプなんだと思う」

「え？あの乃咲が？」

「杉野さ、アイツのノート見たことある？」

「いや……ない」

「俺さ、殺せんせーが来て初めてのテストの時、その直前に彼のノート見たんだけどね。なんつーかスゲー壮絶だった」

そう言えば、乃咲が勉強してるのは見たことあるけど、どんな風にノートを取ってるのかは見た事がない。

「勉強は反復練習だって言うけど、実際に理解出来るまで淡々と同じことを繰り返すって奴は初めて見た。やり方を1から10まで図解もしてたし、その結果、ずつと学年ドンケツだった奴が理事長の妨害アリで俺を除けばクラスで一番成績が高かった。間違いなく、妨害がなかったら、宣言通りにあのテストもクラスで一番良い点数だったはずだよ」

覚えてる。殺せんせーが来た後、初めて受けたテスト。僕らは惨敗し、悔しい思いをした。

クラスのみんなの前で宣戦布告、挑発に近い発破を乃咲がかけ、約束を守れなかったら土下座まですると宣言した事件。

「別にアイツの言うこと全部正しいとか思っちゃいないよ？だから、俺としてはあくまで彼の意見を聞くだけ。聞いた結果、取り入れるべきだと思うから乃咲クンの言うことを聞いている。だってあのノートを見る限り、アイツは俺らが考えている以上に頭の中で試行錯誤して、一番良い選択肢を取ってるんだろ？から」

「……………まあ、確かに。俺らもいつの間にかアイツを頼る様になってたよな。最初は落ち込んでる時に話し聞こうとしてくれて、意外と良い奴だって絡む様になったんだけど」

「それに何だかんだで一番実績があるのも乃咲クンじゃん？殺せんせーの触手壊したのも、作戦指揮も、その他でも。ホテルの事件だって、犯人が鷹岡だって俺らの中で一番早く辿り着いたのはアイツだし、結果的に必要なかったけど、解毒薬を確保したも、俺たちを指揮して鷹岡を完封したのも彼だ」

確かに。僕らはいつの間にか彼に頼っていた。

理由を聞かれたら、『実績があるから』と答えるだろう。でも、その実績をこうして見てみると、確かにそこにはシンプルに頭がキレるっただけじゃ説明できないものがある様に思った。

「だから俺は乃咲クンが怖い。喧嘩したらどうこうとか、そう言うんじゃないくて、どんなに警戒して策を張れたとしても、一個一個、淡々と考え抜いて潰してくる様な気がするから。警戒してもし足りないところがある」

「なるほどな。でもよ、それがどうして面白いってなるよ?」

「自分の知らないことって理解できたら面白いじゃん? アイツはこっちで指示出すより、転がしておいた方が結果を出すタイプだと思うし、なにより……」

カルマくんは怖いと言いながら獰猛に笑った。

「アイツ、なんか隠し球持つてるじゃん?」

?? ?? ??

「うへえ。追われながらのフリーランニングってめっちゃくちゃ緊張感あるな。前後左右上下に気を配るとか初めてだわ」

「それにしても動きがスムーズですね。皆さんにお願いして、フリーランニング中の視点を撮らせて貰いましたが、一番身軽な岡野さん、木村くんですら枝移動やロングジャンプの際は一瞬の躊躇いがあるのに貴方にはそれがありません」

「まあ、考えてはいるんだけどね」

言葉を交わしながら枝を蹴り、数メートル先の木へと飛び移り、勢いを殺すことなく幹を蹴り、岩を駆け上がる。

フリーランニングと俺の”ゾーン”は相性が良かった。一瞬で目標までの距離、危険度、周囲の状況を判断しなきゃいけない所を、止まったようにスローモーションで流れる世界に入ることでした。分析して様々な選択肢を取る事ができる。

しかし、それを側から認識する術はなく、故に律には俺の行動が迷いや躊躇いがない思い切ったものに見えるのだろうか。

「よつと……」

俺はこの山でおよそ一番見晴らしの良い位置に陣取った。ケイドロがスタートする前に決めていた危険なので立ち入りを禁止された

エリアには含まれない絶好の偵察スポット。

今は1人行動をしているが、さつきまでは悠馬たちと一緒に行動していた。みんなに着いていけたあたり、ひとまず身体能力は問題なさそう。加えてこんだけ動き回っても息が切れてない。体力ももう大丈夫だな。

「あとは勘を取り戻すだけだ」

身体の問題自体は問題ない事が把握できた。あとは、烏間先生や殺せんせーに喰らい付いていく感覚を取り戻さない。

身体能力は取り戻せても、暗殺を仕掛ける感覚や戦闘する緊張感は実際にやってみないと戻らないもんだしな。

「……………なら、手伝ってやろうか」

律に向かって投げた言葉。しかし、それは俺の予想とは違う方向、違う声音として返ってくることになった。

振り返ると、そこには笑顔の烏間先生がいた。

笑顔、と言ってもそれは、側から見ると、とてもでは無いが友好的なものではなかった。

ふと、思い出す。笑うとは、本来攻撃的な行為だ。獣が牙をむく行為が原点である。つまり、笑顔とは、攻撃姿勢なのだ。

そう思うと、” 獰猛な笑み ” とはぱつと見では矛盾している言葉に聞こえるが、笑うと言う行為の本来の意味を考えるとこれ以上ないくらいに正しい表現なのかもしれない。

「……………乃咲さん、逃げなくて良いんですか？」

「……………はっ!？」

現実逃避していた。

烏間先生の笑顔は違う意味で破壊力がある。なんか、こう、物理的な破壊力がありそうと言うか。

夏休み前、軽い雑談をしている時にそういえば聞いた事がある。烏間先生は犬が大好きで、見かけると思わず笑顔になってしまうが、近づこうとすると、死に物狂いで吠えられるのだとか。

「……………そら吠えられるわな」

俺は今、その犬達の気持ちを理解した。

目の前にいるのは、ホモサピエンスではなく、プレデターという種族なのでは無いのか、と思ってしまう程に。

「あの超生物と同じ側なのは癪だが、それでも生徒たちのやる気を出させる手腕においては認めざるを得ない。鬼ごっこは、ある程度の緊張感を持ちつつ、学んだスキルを活かし、そして追われる側の心理を学べる良い訓練だ」

「そ、そうっすね」

「そう言う緊張感は、鈍った感覚を取り戻すのにうってつけだと言える。さあ、追いかけてつこいこいじゃないか」

猛獣も泣いて逃げ出すような笑顔から背を向けて俺は一心不乱に駆け出した。

?? ?? ??

獲物を追いかけて回す捕食者としての本能。顔に獰猛な笑みを貼り付けた鳥間はそれを本能レベルで思い出していた。

目の前の銀髪の少年。自分よりも一回り歳下の彼を追い回すことにある種の楽しさを覚えていないと言えば嘘になる。

「……………流石に速い」

乃咲圭一の背中を各種テクニクを駆使して追いかける中、浮かんだ感想はそれだった。

そう、速い。圭一は速かった。まだ自分が教えた初心者用のテクニクしか使えてないにも関わらず、その身体はその辺の木々を利用しながら着実に加速して行く。

前方の枝を掴んで身体を引き寄せ、勢いをつけ、それを殺す事なく身体を投げる様に手を離し、次の枝を掴んで、同じ様に加速する。その動きは獣じみていた。

追いかけて始めて間も無く悟る。そして確信した。おそらく、直線では追い付けない。現に、こうしている間にも彼との差はジワリジワリと広がりつつあった。

次に鳥間がとったのは、移動に高さを加えた立体機動だった。山の

中の地面は柔らかく、フリーランニングの訓練には確かに向いていたが、同時に木の根などの微妙な隆起があつて真つ直ぐ走るには適していなかった。

鳥間は飛び上がり、枝を掴み、人外じみた動きで木の上に登ると、枝と枝の間を地上とは比較にならない速度で跳躍する。

その動きに効果音を付けるのなら、ぴよんぴよんなどと言う可愛げのあるものではなく、バヒューン！バヒューン！とゲームやアニメの中の人型機動兵器がスラスタでも吹かせてんの？と突っ込みたくなる様なものになるだろう。

その超人そのものと言える跳躍は一気に圭一との距離を詰める。背後から凄まじい勢いで一気に距離を詰めてくる音と気配に少年は壮絶な恐怖で顔を歪めたが、負けじと更にテクニックを行使して、後ろから迫る捕食者から逃げる。

「まだ速くなるか」

鳥間は内心驚いていた。

地上では分が悪いと踏んだのか、圭一も並外れた動きで木に昇る。地面を蹴り、木の幹を踏み、勢いと速度を殺す事なく進行方向を90度変えると、飛んだ先の太い枝を鉄棒の様に利用して身体を半回転。更に前方へと飛んで、枝の上に飛び乗った。

その動きは、鳥間をもつてしても人外のそれに見えた。

負けじと逃げる圭一に更に負けじと自身もスピードを殺すことのない90度の急旋回を披露すると、教師と生徒のケイドロという微笑ましい絵面を投げ捨てた人外同士の追いかっこは、あまりにも壮絶な空中戦に移行する。

鬼ごっこ、ケイドロ。子供ならやったことのあるようなありふれた遊びの名を冠した食物連鎖を彷彿とさせる、被食者と捕食者の生死を賭けた追いかっこ。

訓練という名の遊び、遊びという名の訓練。どちらであっても、もはや関係ない。命懸けで逃げ惑う圭一の本気で怯えた表情と、それを必死に追いかける獰猛な野獣の様な鳥間という絵面は、中学校の体育の授業と言うにはあまりにも壮絶過ぎた。

「誰かああああああ!!助けてええええええ!!」

「ほう……。大声で自身が追われていることを伝えながら、周囲に注意を促すか。やはりやるな……。い」

違う、そうじゃない。

「喰われるツ!喰い殺されるうううツ!!」

「その上、このスピード、この機動の中で噛まず、ブレず、良く喋る。皆に指示を出す上で必要なスキルを身につけ、磨くとはな……。やはり、キミは頭2つくらい飛び抜けている」

鳥間の中で圭一の評価が上がっていく。

それは、一言で言えば勘違いなのだが、事実として圭一は野生の猛獣ですらない様な超スピードでの立体機動の中を一度も噛まず、声をブレさせることもなく、情けない悲鳴をあげていた。

情けない悲鳴ではあるが、その実力は評価されて然るべきものである。現に、鳥間の不意打ちの様な軌道の変更により詰められていた距離もまた離されつつあった。

圭一の持つゾーンという常軌を逸した集中力と超スピードによるほぼ止まった世界の視点。それによって繰り出される側から見ると迷いのない動きと、想定していなかった進行ルートの選択。それにより、鳥間との間に生まれる僅かな判断速度の差が距離として如実に現れていた。

もともと、圭一が現在ゾーンに入っているのは、自身の意思によるものではなく、現在進行形で自身に猛スピードで迫りくる捕食者からの逃走による緊張感が要因なのだが。

しかし、そんな鬼ごっこも終わりが近づいていた。

いくら山の中といっても、その中に所狭しと木々が並んでいるわけではない。自然に開けたスペースが生まれることだってある。そして、鳥間と圭一の視界にはそんな終点が見えていた。

「ブランクを感じさせない良い逃げっぷりだったが、ここまですな。乃咲くん。鬼ごっこは終わりだ!」

見える景色に足場になりそうな物はない。直線距離にある木は20mは先。いくらなんでもロングジャンプで届く距離ではないし、高

日手になる。既に何人か牢屋送りにしているが、それも悉く脱獄している。ラスト1分になれば、殺せんせーも動き出し、瞬く間に全員を捕らえるのだろうが、それは今全力を尽くさない理由にはならない。そう思えば、今はここで彼を諦めて他の面子の捕獲に回った方がいいだろう。

「今回は、キミの勝ちだ」

圭一には聞こえないのに、烏間は呟くと踵を返して来た道に戻る。教え子と激戦を繰り広げた道は長かった。

「……初速は凡そ時速600〜700kmを出す超生物に当てられる蹴りを放つ脚力。そう思えば、壁を走る程度は驚くことでもないのか……？しかし、そう考えると、彼のあの逃げ足は些か遅い様にも感じる。加えて、今回の鬼ごっこでは、過去に数回見せた瞬間移動じみた動きはなかった」

道を辿る烏間の脳裏に過るのは、彼の父、乃咲新一の研究である、人体の強化についてだ。

ふと思う。圭一は現在、殺せんせーという超生物を狙う暗殺者という意味では烏間を始めとしたE組の仲間だ。そして、その圭一に乃咲新一の研究の成果が現れているのは間違いない。

だが、もしも、新一の研究成果を悪用する者が現れたとしたら？その成果を悪用した者が金に目を眩ませてE組の生徒たちに危険を及ぼすような事態があったとしたら？

ないとは言えない。現に、烏間と同じ立場にいなながら道を踏み外した鷹岡という前例がある以上、E組が狙われないという保証はないし、なにより、殺せんせー……もとい、触手細胞を生み出した科学者は今、好き放題やっていると聞く。

新一が現在、政府に協力しているのは、その科学者の理論と新一の理論の根本が似通っているからだ。

つまり、その科学者は、その気になれば圭一の様な力を持つ者を用意することができるということ。

「(俺はその時、あの子たちを守ることができるのか?)」
頭にふって沸いた疑問。

苦々しくさつき逆方向へと駆け抜けた道を見ながら考える。圭一に追いつかなかったことが答えなのではないのか?と。

鳥間の心配を他所に、圭一の悲鳴はまだ続いていた。

?? ?? ??

「ねえ、カルマくん。さつきから乃咲の情けない悲鳴が滅茶苦茶聞こえてくるけど……。本当に隠し球とかあるのかな」

「…………俺もアイツがわかんなくなってきた……………」

カルマは頭を抱えた。

92話 極限の時間

「そーだね、怖かったねえ。よしよし」

「怖かった、滅茶苦茶怖かった。普久間島でガストロ口に銃撃された時に並に怖かった、死ぬかと思った……ッ!!」

情けない悲鳴を上げながら逃げ回り続けていると、悠馬たちと出会った。そして、慌てふためき、過去最高に怯える俺を確認した悠馬の班は何事かと大騒ぎ。俺の要領を得ない説明をなんとか理解した悠馬と倉橋さんにやって周囲にあのプレデターがいないことを確認し、俺はようやく落ち着いた。

どつと疲れた俺はそのままギャン泣きしそうなテンションでさっきまで感じていた食物連鎖の恐ろしさを伝え、大天使倉橋によりあやされているのが現状だ。

「いや、まさか圭一がここまでなるとは」

「お前にはわからないだろうな!地面を走り、木々を跳び回り、壁を走り抜けてもなお、背中にいるかもしれないって恐怖が!マジで死ぬかと思ったんだぞ!『鬼ごっこは終わりだ!』とかムスカかよ!?!いや、ムスカより怖いよあの人!!」

「どーどー!落ち着け、あんまり大声出すと見つかるぞ」

悠馬の言葉を聞いて全力で口元を押さえる。

やばい、全身の震えが止まらない。あれば絶対に夢に出るタイプの恐怖だわ。チビるかと思ったもん。

「どんだけ怖かったんだよ……」

「……おつ、それはそれとして、みんな。そろそろ殺せんせーも動き出す時間だぞ」

「くっそう……!こうなったら殺せんせーに八つ当たりしてやるツ!やられてなくてもやり返す!っ!か、どうせまだまだ俺らにバレてない余罪なら沢山あるだろうし、適当に理由を付けて因縁つけてやる!殺してやるぞ、殺せんせー!」

「あーあー……。圭一がヤンキーみたいに……。って、そう言えば元

ヤンか。そうだったわ、忘れてた」

「納得しないで止めてあげなよ……。圭ちゃん、一緒に逃げよう？
殺せんせーから逃げ切る作戦だつて準備したんだしさ」

「止めてくれるなおとつっあん！」

「せめておかつっあんにして欲しいな」

「大丈夫だ。ここは任せて先に行け。心配すんな、俺は強い。あとで必ず追いつく……。装備はこころもとないが、まあ、大丈夫だ、問題ない。何もみんなで全滅する必要はねえ。俺はそこそこのタコを1匹殺して下山するぜ」

「あーあーあーあ。どんどん死亡フラグが乱立していく。色んなネタが混ざり過ぎてて一周回って正統派みたいな雰囲気になってるのが納得いかない……。すつげえ納得いかない」

「じゃあな、生き残れよ！」

「あつ、おい！圭！！」

俺は再び立体機動に移った。

「……………行っちゃったよ。つか、既に俺らの倍は速いし、あれ本当に休学明けか？病み上がりにしちゃ動き良すぎるだろ」

「まあ、今回は好きにやらせてやろう。アイツ、今の自分が何処までやれるか知りたいとか行つてたし」

「……………あれ？ねえ、みんな。今の圭ちゃんの言葉ってさ、よくよく考えると、これから暗殺して来ますってならない？これ、援護しなくていいのかな？」

「あ……」

「いや、アイツがどう殺すかは分からないけど、自分単体の実力が知りたいみたいだし、今回はやめとこ。それに、山の中であんな動きされたら、俺たちの援護が寧ろ邪魔になるかもだし」

「……………まあ、それもそうだな」

??

??

??

「つーわけで、殺しに来ました」

「ええ……………」

殺せんせーが珍しく事態を飲み込めてなかった。

「ケイドロで烏間先生に追いかけて回されて怖かったです」

「ええ」

「悠馬や倉橋さんに慰めて貰いました」

「はい」

「それもこれもケイドロを提案した先生の責任だと思うので、殺せんせーに八つ当たりしたいです」

「なるほど……………。冤罪です!!!」

「お願い!全部じゃなくていいから!先つちよだけ殺らせてくれればそれでいいから!あとは何にもしないから!」

「先つちよだけ、で先つちよで済ませる人はいませんのでそんな言い方に騙されてはいけませんよ?」

「ていうか、乃咲。言い方に色気が足りないわ。前に教えたわよね? そう言うのは雰囲気、色気が大事だって。これは補習が必要ね。あとでディープキスの刑よ。たあーつぷりと大人の色気の出し方や教えてあ・げ・る」

「おめえらうるせえよ!!人が捕まって刑務^ド作業^リやらされてる中で妙な会話ばかりしやがって!!つか、何しに来たんだ乃咲てめえ!!てめえもてめえで鼻の先にまだ捕まってない泥棒いるんだから仕事しろやザル警官!!」

「いやあ、生憎と本官は牢屋から離れることができないのです」

「それを知ってるので煽りに来てるんです」

「……………だめだ、コイツら……………」

牢屋の中で作業中の寺坂が頭を抱えた。

その姿を彼の班に所属していたメンバーがいたわしそうに見ているが、まあ、ドンマイだ。俺は悪くないもん。

「と、まあ、余談はここまですべてにおいて。実は殺せんせーと勝負したくて来たんですよ」

「ほう。キミとのそういうノリは実に久しぶりですねえ。菅谷くんの対先生粉末を使ったリングの暗殺以来ですか」

ニヤリと三日月の口を歪ませて、顔を緑のしましまに染める殺せんせーが、舐めた様子で俺を見る。

しかし、その顔が本当に心の底からこちらを舐めているものだとは思わない。この人は油断もするし、舐めプもするが、それでも最低限の警戒はしている。そして、その最低限はかなり高水準だ。じゃなかったら、とつくに殺せてる。

「キミの暗殺にはいつも良い意味でヒヤリとさせられる。今回はどんな方法で殺る気ですか？」

「今日は趣向を変えましょう。いつもは俺が殺れたら勝ちでしたけど、今はケイドロの途中。今日は殺せんせーが俺に攻めてください。俺は泥棒で、あなたは警官。全員を捕まえるなら必要なことでしょう？俺にタッチできたなら殺せんせーの勝ち」

「なるほど。ケイドロのルールを活かした珍しい条件ですね。なんとなく、一番最初の合同暗殺を思い出します。あの時は確か、先生がキミの銃を抜けたら勝ちでしたね」

「ええ。いつも守る、避けるで退屈していたでしょう？そろそろ攻め側をやってみたくないじゃないかなって」

「ヌルフッフフ。そうですね。確かに先生から仕掛けたことは片手ですら事足りる程度でしょう。ですが、いいんですか？攻めという立場はあまりにも先生に有利です」

「まあ問題はないです。守りにも守りの利点があります。それを確かめながら今の俺は何処までやれるのかを確かめたいんです。付き合ってくださいですか？」

「もちろんです。今回は逃げも隠れもしません。全力でいかせて貰いましようかねえ。腕がなります」

関節など無いはずなのに、ポキポキとなる殺せんせーの触手。どうやって鳴らしてるの、それ？

「んじゃあ、ラスト1分は俺から狙ってください。この先で待つてますんで。罰ゲームも決めときましようか。殺せたら俺の勝ち、殺せんせーにタッチされたら俺の負け。万が一、時間切れになったら引き分け。俺が負けたら宿題3倍でも良いですよ」

「大した自信ですねぇ。良いでしょう。先生もたまにはやるんだという事をキミに教えてあげましょうか……!」

「それじゃあ、先に行つてまゝす」

「ニユルフフ。ラスト1分まで残り30秒。楽しみですねえ、乃咲くん。一皮剥けたキミがどんな暗殺をするのか!」

「……………なあ、寺坂。乃咲の奴……」

「しらねえよ。でもまあ、乃咲のことだ。どうせなんか策はあんだろ。じゃなきゃこのタコを攻め側に回すなんざ自殺行為もいいとこだ。アイツがそんなミスするかよ」

「寺坂くんの言う通りです。乃咲くんが無策で先生に有利な条件を用意するとは思えません。勝負開始までの30秒、あるいはここに来るまでに罠を仕掛けたと考えるのが妥当でしょう。腕がなりますねえ、楽しみですねえ」

「だから、なんでその指が鳴るのさ?」

?? ?? ??

悠馬たちには装備は心許ないとか言ったが、あの時点で今回の計画は頭に合ったので、あの後、牢屋前で待機してる殺せんせーに会いに行く前に対先生装備は教室まで取りに戻っていた。

なので、こちらとしての準備は万歳OKである。まあ、装備運搬中、職員室のプリンを取りに来た殺せんせーと鉢合わせたので、俺がやらかす気満々なのはとくにバレてた上、どんな手札を持つてるのかも見え見えなんだろうけどさ。

その癖、俺が仕掛けるの知っていて牢屋での反応だ。行動を振り返って見ると殺せんせー、食わせ者だよな。やっぱり。

『乃咲さん、殺せんせー始動の5秒前です』

「了解」

右手にマチェット、左手にナイフを持ち、ゾーンに入る。

俺の集中力とゾーンは、普久間島で撃たれた時、明確に一步先の段階に到達した。まだ制御しきれてないし、このチカラの限界を使いこ

なせる自信はない。

だからこそ、殺せんせーに攻めという主導権を渡すことで彼から俺に仕掛けてくる状況は都合が良かった。

今の自分の能力を掴むにはこれ以上ないシチュエーションだ。

『3』

引き伸ばした時間の中で聞こえる、ノイズの様に間延びした律の声を頭の中で補正して時間を把握する。

『2』

武器を握る。思えばこうして緊張感を持つて自分の得物を持つのは久しぶりだ。緊張感と少しの高揚感がある。

『1』

その声が聞こえた瞬間、集中の深度を上げた。

この段階になると、律の声はいつまでも続く地鳴りの様になり、風で舞う木の葉が止まって見える。

けれど、いつしかのように弾丸が止まって見える程ではない。指先に力を入れるが、やはり、水の中で動いている様な動き辛さがある。ゾーン特有の感覚だ。

次の瞬間、律の声は止んだ。

頃合いだ。そんな風に思った刹那、真正面から殺せんせーが来た。ほとんど止まっている世界の中で殺せんせーだけが普通に動いていた。ニヤけた顔で、緑のしましまで俺を見た。

「やはり、キミには先生の動きが視えてるんですね」

「ええ。先生の方こそあまり驚かないんですね？」

「キミが時折り見せる尋常では無い速度の動きの数々。先生はいつも目で追っていました。側から見ると瞬間移動さながらの動きも、カルマくんが一番最初に仕掛けた自殺紛いの暗殺の時、実は先生の動きを目で追っていたことも気付いてました」

言われて見るとこの人は俺がゾーンを使ってる時、あまり驚いた様なりアクションはしなかった。

普久間島のビーチで蹴り倒した時は流石に驚いていたが、それ以外の場面では確かに普段の先生ならもつとオーバリアクションを見

せても良いはずなのに冷静だった様に見える。

思えば、父さんから聞かされた強化人間の件の時も殺せんせーは同席していたし、あの時は気付かなかったが、その時も尋常じゃ無いほどに冷静だった気がする。

「一つ、答え合わせをしましょう。先生の正体について。以前に言いましたよね？先生は人工的に作られたと」

「ええ。んで、その人工的に作られたってのが、試験管の中で作られたホムンクルス的な意味では無いことも察してるつもりです。あなたは……………人間ですね？」

「……………その通りです。参考までにどうしてその答えに辿り着いたのか聞いても？」

「イトナですよ。烏間先生たちには話したことがありましたが、堀部イトナは戸籍と経歴の分かる実在の人間でした。そんな奴が頭に触手を生やしてた。触手が人間に移植出来るなら、全身に触手を埋め込む事だって出来るんじゃないかって」

「やはり鋭いですね。想像の通りです」

殺せんせーはいつの間にか緑のしましまを引っ込めて、観念した様に触手で頬の辺りをポリポリと搔く。

「殺せんせーがしたい答え合わせってヤツは、あなたが元人間って情報で良いですか？」

「……………広い意味では『はい』ですね。先生がしたいのはそれを踏まえたと上でのある種の忠告です」

「……………忠告？」

「……………柳沢誇太郎、キミの叔父は触手に深く関わっている人物です。彼の目的の一つには触手の兵器転用があり、触手の基礎理論は乃咲博士の研究……………つまり、キミのお母さんに施された手術がルートです。その手術の影響が色濃く現れ、今、音速を越える世界に身を浸しているキミは、彼にとって喉から手が出るほど欲しい人材だ。だから、気を付けてください」

柳沢誇太郎。父さんが縁を切った実家を継いだ弟で、俺の叔父。そうか。確かその話をした時も殺せんせーは病室の廊下に居たはずだ。

知っているのは不思議じゃ無い。

しかし、あの時は口止めされているとかで色々聞けない話があった。父さんのかつての研究が世界を救うかもしれないから、と彼は言ったが、その理由は殺せんせーを生み出した技術の根幹が父さんの研究にあるからだだったのか。

だとすれば、あの時、あのタイピングで父さんから柳沢についての忠告をされたことにも合点がいく。

「分かりました。可能な限り気を付けます」

俺が頷くと殺せんせーは纏っていた緊張感を解いた。

「さて、シリアスな話はこのままでにして、勝負を始めましょう。先生が負ければそのまま死亡、キミが負けたら宿題3倍！恨みっこなしですよ？いやあ、燃えますねえ。実は先生、一度で良いから自分とほぼ対等の速度の相手と戦って見たかったです。ワクワクすっぞ！ってヤツですねえ」

「まあ、それでも全力は出せないんでしょ？」

「チカラと言う意味ではそうですが、戦略などの要素では全力ですとも。先生はこれから、全力でキミにタッチしに行きます」

「いやん！殺せんせーのエッチー！」

「えっ!?そういう反応しちゃいま——!?!」

合図もなく、俺はナイフを投擲した。

平常時ならともかく、今の俺はゾーンに入った身体能力が爆上がりしている状態。身体は相変わらず水の中で暴れてるみたいに重たいが、それでも人外じみた身体能力から繰り出される投擲はエアガンの弾速より遥かに速い。

タイピングはほぼ完璧。奇襲としては上出来。だが、それで殺せるなら、殺せない先生で殺せんせーとか呼ばれてないだろう。案の定、殺せんせーはこのほぼ止まった世界で平然と動き、ナイフを避け、こつちに触手を伸ばす。

だが、それでも今の殺せんせーと俺のスピードの差は夏休み前に暗殺を仕掛けていた頃よりも明確に縮まっていた。

殺せんせーの勝利条件はシンプル。俺に触れること。

普段は決して俺たちに襲いかかって来ない触手が唸りを上げて襲ってくる異例の事態。そして、それは本来なら反撃すらままならず、俺を蹂躪しつくすだけの簡単な作業で終わっただろう。

だが、前提として、今の俺は殺せんせーに一步劣るが、それでも速い。平常時にマツハ20を狙っていた動体視力があり、スピードは肉薄している今、彼の触手を見切るのは容易い。

加えて、殺せんせーが俺に触れることが向こうの勝利条件である以上、殺せんせーは必要以上に俺から離れることは出来ないし、攻撃しなきゃいけない。彼は俺から逃げることは出来ない。

逃げる殺せんせーを狙うのは至難だ。軌道は読めないし、見切ったとしても、手の届かないところに逃げられたら終わりだ。でも、殺せんせーが俺を狙ってくるのなら話は別だ。

触手の行き着く先は俺なのだから、極論、俺は自分の身の回りにだけ気を付けていれば良い。素早く逃げる相手を狙うのは困難でも、素早く迫ってくる相手なら読みやすい。攻撃の軌道の終端は俺なんだから、向こうから勝手に近づいてきてくれる。

それが普段の暗殺との一番の違い。いつもの様に逃げる殺せんせーを追いかけ、追い込む。あるいは暗殺旅行の時みたいに逃げられない状況に陥れるでもない。行き着く先が見えた状態で殺せんせーが近づいて来てくれるのだ。

ターゲットが自分から近づいて来る状況を好機と捉えない暗殺者がいるだろうか？俺はいないと思う。

2本目のナイフを取り出し、殺せんせーを可能な限り正面に捉えて立ち回る。触手がどの向きに、どんな風に伸びてるのかを見れば視覚外からの攻撃も予測できる。

「……私を正面に捉え、背中を木に預ける。上手い立ち回りだ。それなら正面から触手の動きを注視しつつ、背中に気を配る必要がない。上と左右のみを警戒するだけでよい。地形を活かした良い選択だ。よく育っている」

こつちに伸びてくる触手を全て切り落とす。だが、超スピードにゴム製のペナペナのナイフはついて来れないのか、振るたび振るたび、

柄の上の刃がブレる。刃が歪む。

幸いにも触れるだけで細胞が壊れる特性上、対先生武器としてはまだ使えるが、これではナイフとは言えないな。

「(となると、残っているのはその手に握ったマチェット。律さんの中で対先生プラスチックを使って鑄造されたそれならナイフよりも強度と硬度がある。この攻防でキミについて来れる可能性があるのは、それだけ)」

ペなペなのナイフを向かってくる触手に押し付ける様に振り、触手を破壊する。だが、目標は殺せんせーの殺害。加えて、身体に溜まる疲労も尋常では無い。喋ってるだけなら大したことないが、こうして触手を防ぎ、攻撃を仕掛けているとゾーン中の体力の消費がとんでもないことを改めて思い知る。

この力は長期戦に向かない。恐らくは視界だけは常にゾーンに入りつつ、相手が見せた明確な隙、あるいはこちらで作った必殺の瞬間に合わせて一撃を振り込む為に使うのが正解か。

今後の課題は、如何にしてこのチカラを長く使える様にするかだな。体力作りは更に力を入れるべきか。

考えながら、殺せんせーを見る。

彼の表情はまだまだ余裕そうだ。やっぱり身体の作りが違うのか、消耗はこつちのが速い。と、なれば。さっさと決着を付けないと良いところなしで終わってしまう。

思考を更に巡らせる。

今回の暗殺、俺が失うものは特にない。精々宿題が3倍になるが、その程度。元々の目的である、自分のスペック調査という意味でなら、耐久戦になる前に余力を使って仕掛けるべきだ。

負けたら死ぬ、チャンスは一度きり。それくらいの覚悟でやったほうが緊張感はあるのだろうか、それでも今回はそのどちらでもない。なら、失敗を恐れずに前に出てみるか。

俺は、前へ駆け出した。

「(遂に動きましたね。キミがこのスピードでの攻防を長く続けられないのは予測済みです。人より速く、長く考え、動くと言うのは、そ

の分だけ消耗が速いと言うこと。キミの性格を考えるなら、そろそろ動くと思っていましたよ」

後ろも警戒する必要ができた。流石に後ろにも目をつけるとか、ニュータイプみたいなことは出来ない。正面からも触手が来る可能性がある以上、悠長に振り返る様な余裕もない。

だが、勢いとスピードを殺さずに駆け抜ける技術なら習得した。ついでさつきまで、その技術を使って人類最強の超人から追い回される恐怖に耐えて逃げ続けていたのだから。

地面を蹴って飛び上がり、身体を捻りながら、手頃な木の太い枝を選んで跳躍する。地面が頭上、空が足下というチグハグな光景だが、空中で身体を捻ったタイミングでどの方向から触手が来ているかはバツチリと把握済みだ。

一瞬だけゾーンから抜ける。そのままエアガンに触手と正面衝突する様に最低限撃って、再び集中。

背後で触手が壊れるのを感じながら再び跳躍する。

さり気なく射撃の腕が落ちてないことも確認できた。

「ほう。フリーランニングを立体機動戦に応用した体術に応用している。勢いを殺すことなく背後の確認と迫る触手を破壊するとは……更にやる様になりましたね、乃咲くん……！」

枝を蹴り、地面を蹴って加速する度に身体に纏わり付く空気の抵抗が強くなる。だが、その抵抗が強くなった分だけ、殺せんせーと俺の速度の差は縮まる。普段ならば誤差にすらならない僅かな速度の差も、これだけ距離とスピードが肉薄していれば決定的な一手になるだろう。

「確かにこのレベルのスピードの差は致命傷になり得る。ですが、それはキミも同じこと。素早い動きの弱点は急激な軌道の変化に弱いこと。速ければ速いほどに方向転換は難しくなり、そして、自分に点の方向で直進してくるモノの回避が難しくなる。普段、スピード自慢の私の弱点になり得る部分が、そっくりそのままキミの弱点だ」

殺せんせーが触手を伸ばす。

しかし、そのいくつかは、検討はずれの方向に向かった。何か仕掛

けてくる？そう感じとつた矢先のこと。

正面から伸びて来た触手と共に、左右から別の触手が迫って来た。回避のタイミングをずらす様に微妙な速度の緩急をつけてながら。確実に俺を仕留めるように。

「確かにスピードがついたモノが急に方向を変えると言うのは難しい。でもね、方法がないわけじゃありません。キミが枝を蹴って方向を変えたように、触手の柔らかさを活かして木の幹に当てて、バウンドさせるように動かせば軌道は変えられる」

身体を捻つてもこれは躲せない。後ろは空いているが、この勢いを殺して後ろに飛ぶのは無理だ。前も左右も塞がれてる。上には枝がないから、立体機動も不可能。

だが、下が空いている。

勢いを殺さず、足から前方の触手とすれ違うようにその陰に滑り込み、通り過ぎた触手と左右から来たものを切り捨てる。

「っ、今のを凌ぎますかー！」

「伊達に強化人間（笑）の息子じゃないんですよ！」

そのままさつき投擲したナイフを拾い上げ、もう一度、ゾーンを抜ける。エアガンを乱射して弾幕を張る。

その弾丸の中にブラインドを仕込む。前に律がやっていた2発の弾丸が同じ軌道を行く不可視の弾丸を。

「（ブラインド……。この高速戦で咄嗟に繰り出す技量は凄まじいですが、彼の能力を考えれば、不可能ではない……。だが、これは本命ではない。彼は今、ナイフを拾った。であるなら、考えられるのは、弾幕を囿にしたナイフの投擲……！）」

俺は、ブラインドの射線とほぼ被るようにナイフを投擲し、投げ放った凶刃は、先んじて撃っていたBB弾なんか遥かに凌ぐ速度で宙を走り、殺せんせーに襲い掛かる。

流星に読まれていたのだろう。俺がナイフを投げる動作を見せた直後、殺せんせーは既に回避動作をとっていた。

真つ直ぐに飛来するナイフの先には、悲しいかな、殺せんせーは既 にいない。あるのは山を飾る木々だけだ。

しかし、忘れてはいないだろうか？俺が投げたナイフの進路には2発の弾が飛んでいることを。

俺が投げたナイフはそのブラインドの弾をそのナツクルガードで強く押す。後ろからエアガンの発射機構で生じた力よりも遥かに強大な臂力で投擲されたナイフに襲われたBB弾は冗談じみた勢いで加速した。

加速しながら、2発の弾丸はそれぞれ微妙にその進行ルートを変え、2つの射線を作った。

「にゅやあっ!!？」

殺せんせーの触手が弾け飛ぶ。

1発は木にぶち当たり、動きを止めたが、もう1発はしっかりと標的を抉る。俺の狙った通りに。

「……そうか。さっきのナイフはほぼブラインドの軌道と同じ見えた。しかし、まるつきり同じではなかった。その”ほぼ”の僅かにズレた射線で先に撃った弾丸を後ろから押し、角度を変えて弾道をコントロールしたか……!!」

流星に予想外だったのだろう。

殺せんせーの動きが僅かに硬直した。

そして、その隙を俺は見逃さなかった。

ダメ押しで、対先生コーティングが施されているエアガンも投げ付け、両手でマチェットを握り締め、集中の深度を上げる。

身体に空気がまとわりつく違和感が消える。最中で動いているようなやり辛さすら消滅した世界は、正しい意味で停止した。投げつけたエアガン、それを避けようとする殺せんせー、破壊され、体液を撒き散らす触手も、何もかもが静止した。

時間が止まった。そんな錯覚すら覚える。

実際にはそう見えるレベルで速く動けるようになった結果だと言うのが父さんの仮説だが、九分九厘、そうなのだろう。

普久間島で撃たれた時、この世界に到達した。

弾丸すら止まって見える世界。色が失われ、さっきまでのモノクロの景色ではなく、ベタ塗りすらされていない白紙に黒ペンで輪郭だけ

描いたような、無音、無色、無光の世界。

こうしてこの世界に踏み入れると、実感する。

コレが俺の到達点だ。恐らく俺は今後、どれだけ努力し、チカラを伸ばしたとしてもこれ以上の世界に足を踏み入れることはない。そんな、自分の限界を今、ひしひしと感じ取っていた。

そして、この世界は長く保てない。身体を造れば多少長くはなるだろうが、それでも使い過ぎれば、これまでの過労とかめじゃないレベルの疲労でぶっ倒れるだろう。

それに、こんな世界に入れたところで、対殺せんせー以外にはなんの役にも立たないだろう。この状態で喧嘩なんて誰かを殴ろうものなら相手を殺してしまう。

音速を遥かに超えた速度でぶん殴られてるんだ。即死だろうし、身体がバラバラに爆発四散しかねない。

さっきまでの集中の深度ですら、対人で使うべきものではない。精々が移動と回避だろうな、使うとしても。

自分の限界を確認するという目的は達成した。明確に自分の能力はどこまで使っているのかも理解した。収穫としては上々。今後、皆などと連携する上でどの程度までなら出していいのかという指標ができたのは大きい。

まあ、その今後って奴があればだが。

マチェットを振り上げながら殺せんせーに走る。

止まった世界で困惑の顔を浮かべる彼は、俺を追えていない。きつと、突如として視界から俺が消えたように見えている。

……殺った。

身体の世界が訪れる直前、辛うじて刃が届く距離まで肉薄した俺はそのままマチェットを上段から両手で振り下ろす。

「にゅやあああああつ!!?」

直後、殺せんせーが凄まじい速度でぶっ飛んだ。

……待て。ぶっ飛んだ? おかしくね? 俺、マチェットの刃の部分を確かに殺せんせーの顔目掛けて振り下ろした。

触れただけで細胞を破壊する武器が顔面に直撃した筈だ。生きて

いる訳がない。何がどうなっている？

加えて、手にはコレまで殺せんせーの触手を破壊した時のような手応えはない。代わりにベツタリと熱くドロリとした何かに触れていた。

「熱っ!!!?」

慌てて手を離すと、それはベチャつと音を立てて、地面に落ちた。手はヒリヒリと火傷したみたいに痛い。

何が起きたのかと視線を向けると、手はしっかりと火傷していて、足下には緑色のドロつとした何かが落ちている。

「……………あれ? マチエツトは……………?」

ふと気付く。さつき振り下ろした筈のマチエツトがない。何処を探しても影も形もない。

そして再度気付く。マチエツトはさつきまでしっかりと握っていた。そして、俺はさつき、急に熱がこもったそれをこの場で手を離し、地面に落としたではないか。

……………つまり。この緑のドロドロがマチエツトの成れの果て。

思わずゾツとした。

「だ、大丈夫ですかっ?! 乃咲くん!!」

直後、殺せんせーがぶっ飛んできた。

顔面が物凄く陥没しているが、そんなこと気にすることもなく、俺の手を取ると、触手から粘液を出し、火傷した部分に塗りたくり、細く細かい触手をゾーンから抜けた今となっては目で追えない速度で動かす。

治療してくれているのだろう。

触手は目にも止まらない速度で火傷部分を弄り倒し、気が付けば火傷なんて始めからなかったみたい綺麗な手になった。

「……………乃咲くん。今後、先生を殺す為であったとしても、今と同じ速度を出してはいけません。恐らく、君が極端に体調を崩した原因は今の動きです。加えて、そのスピードに対応できる武器は恐らく存在しません。私を殺せない以上、そのスピードを出すことを禁止します。良いですね?」

「……………はい。了解です」

断る理由はなかった。武器が保たなかった以上、今の深度で集中しても、殺せんせーを殺すことは出来ない。

使う機会があったとしても、それは前みたいには銃撃された時とか、普通のゾーンでは対処出来ない場面だけだろう。

「手、治してくれてありがとうございました。こんなことにも使えるんですね、殺せんせーの触手と粘液」

「ヌルフフフ。先生は万能です。例えば君たちがバラバラになっても、心臓をぶち抜かれても先生がその場にいたのなら、どんな状態からでも回復させてみせますとも！」

「頼もしい限りで……。そんな状況にならないように祈ってますよ。ないと言いつけないのが怖いですけどね」

「先生も同意見です。可能な限り、そうならないように立ち回りますので、君たちも何かあったら必ず先生を頼って下さいね？……………それはそれとして、乃咲くん、逮捕です」

「……………やつべ」

やばい。忘れてた。そういえば鬼ごっこ途中だったわ。

「それでは牢屋へどうぞ。先生はこのまま皆さんを捕まえに行きますので。それではまた後で！」

殺せんせーに勝負で負けてしまった。

だが、まあ、別の所で勝ったからいいか。

「殺せんせー。一つ情報提供しますよ。プールまで行ってみて下さい。カルマたちがいる筈ですから」

「ほう？それはありがとう……………プール？」

殺せんせーの顔がみるみる青くなる。

「律、カルマたちの状況は？」

『はい！現在、プールに潜水中です！』

「し、しまったあああああ!!!」

バヒュン!!と殺せんせーは飛び立つ。

「勝負には負けたけど、戦いには勝った」

ついさっきまで繰り広げていた、10秒にも満たない超高速戦闘に

対する、精一杯の負け惜しみである。

プールの方から殺せんせーの悲鳴が響いていた。

??

??

??

我々は生徒たちに見事に出し抜かれてしまった。

烏間先生を私と分断し、プールまで1分では戻れない場所まで誘導、別働隊はプールに潜り、私への対策を実施。

見事な作戦だった。正直、ここまで気持ちよくハメられるとは思ってもみなかったと言うのが素直な感想だ。

「あ、そうだ。圭一、そういうえば暗殺はどうだった？」

「あそこでプリン食ってるタコ見れば分かるだろ、失敗だよ、失敗。あとちよつとだったんだけどなあ……」

「あはは、それ、本当にあとちよつとだったの？」

「おうとも。紙一重よ」

友人に囲まれながら戯ける彼の言葉に嘘はない。

実際、あの瞬間、私は不意を突かれ、死ぬ所だった。乃咲くんの武器にもう少し耐熱性があれば、私は死んでいただろう。

正直、今日までの人生で一番ヒヤリとした瞬間だった。

「あ、そうだ。律、対先生マチェット作ってくんない？」

『はい？構いませんが……もう1本ですか？』

「いや、2本。やっぱナイフよりマチェットの方が使いやすい。コレから近接やる時は二刀がメインかな」

「いやいや、もともと持ってた奴はどうしたんだよ!？」

「溶けた」

「……溶けたあ!？」

前々から思っていた。彼が私に匹敵する速度で動くのはどう言う理屈なのかと。乃咲博士の言葉で彼のお母さんが受けた強化手術が要因だと言うのはわかったが、それでも納得が出来ない。

強化手術かどうかは不明だが、似たようなものを受けた人物は他にもいる。例えば堀部イトナくん。

彼の身体能力を見るに、触手を扱い切る為にさまざまな調整を受けているのだろう。以前に見せた跳躍力なんかは、常人のそれを裕に上回っているように思えた。

だが、それでも、乃咲くん程ではない。

彼の身体能力は異常だ。他にも何らかの要因と理屈があるとしたか
思えない。そして、少し不安だ。

何があっても私が守る。そう思っているし、その為の努力は惜しまないつもりではあるが、もし、柳沢が彼に目をつけたら。

あの男は触手の軍事利用の為の実験に被検体として強い肉体を持つ者を求めていた。有名人の息子であり、突然いなくなったら大騒ぎになるという1点だけを除けば、乃咲くんは彼にとって一番欲しい人材であることは間違いない。

加えて、彼はあの男の甥だと言う。

あの歪んだ男のことだ。兄である乃咲博士に良い感情はないだろうし、その息子である彼も然りだろう。

下手に身内である分、むしろ乃咲くんは柳沢の標的になりやすい可能性すらある。あの男の悪意がこの子に向いた時、私は側にいてあげることは出来るだろうか？

「圭ちゃんはプリンなんだ？」

「ああ、茅野の気持ちかわかったわ」

「お？プリン教へようこそ！プリン様はいつでもあなたを歓迎してます……なんてね」

触手、人体強化、身内の事情。子供が背負うには重いしがらみが渦巻いているように思えてならなかった。

93話 泥棒の時間

「圭一の身体能力……ですか」

「ええ。息子さんと話した時、あなたは”詳しいことはわからない”と言っていました。でも、それは裏を返せば……”大雑把なことは理解している”ということなのではないでしょうか？」

「……その通りです。確かに私は大雑把な所までは把握していません。しかし、それを息子に伝えるつもりはない。あの子には一切の害はないし、詳細な内容を伝えることで圭一が生涯、周りと違う自分について思考を割く事を私は望みません。あの子には自由であって欲しいので。コレは譲りません」

「そうですか……。ですが、私にはあの子を守る義務と責任がありません。少しだけで良いんです。圭一くんについて、教えてくださいませんか。それがあの子を守る一手になるかもしれない」

「……割と有名な話ですが、殺せんせーは、人の脳の大部分は使われていないと言う説と、人の筋肉は常にリミッターが掛けられているという話はご存知でしょうか？」

「はい。耳に挟んだことはあります」

「私はこの二つの説を肯定しています。身体に使われてない機能があるのなら、そこを司る脳だって同じように十全に動いていると言うこととはない筈だ。人の体も所詮は電気信号で動く回路に過ぎない。強い電流なら出力は上がり、弱いのなら下がる。稼働率という意味では、出力が高い方が上であるのは自明の理であり、それを脳の使用状態に置き換えれば、脳の全てを使えてないとする説も少しは納得できるでしょうか」

「……ええ。おっしゃる通りかと」

「圭一は、圭に施した手術の影響が強くなっていきます。細胞内でエネルギーの循環を作ることによって代謝能力を向上させ、身体の維持、修復、強度をより効率的に行い、強靱な肉体を作る。これこそが私の研究内容であり、愚弟が求めた成果でした」

「だから、圭くんは常人よりも強靱な肉体を持つと？」

「ええ。身体を作る物質は変わりませんので、普通に怪我もしますが、それでも骨や筋肉の耐久力は常人のそれでは比較にならない程です。銃撃や刃物で襲われない限り、ちよつとやそつとでは骨や内臓に響くダメージは負わないでしょう」

「……………」

「時に殺せんせー。人が何故、無意識に筋力にリミッターを掛けているかご存知ですか？」

「そうしなければ身体が保たないからでしょう」

「その通り。では、質問です。その本来の力に耐えられるだけの肉体があれば、そのリミッターはどうなるでしょう？」

「……………」

「ええ。あの子の身体は常人のそれよりも遥かに頑丈で、高い膂力も発揮できる。そして、その肉体が本来持つスペックだって同じ事。圭一は、その肉体の頑丈さ故に人並み以上の力を持った肉体本来の力を行使している……………」

「なるほど……………」

「加えて言うのなら、あなたとあの子が”ゾーン”と呼んでいる力。私は圭一に相対性理論を用いて原理を説明しましたが、これまで話した仮説を紐付けるなら、筋肉が本来の力を使われるようになったことでそこを制御する脳も最大限使用され、情報の処理能力が上がった結果、何もかもが止まって見える程の速度に脳が追いつき、時間が止まったかのような世界で活動出来るようになった、と言うのが真相だと睨んでいます」

「……………」

「言ったでしょう。伝えるつもりはありません。どんなに肉体が強靱で、人並外れたチカラを持っていても、あの子は私の息子だ。ある種の護身として自分の能力を自覚させる為にこの前は色々とは話しましたが、こんな”お前は普通じゃない”と突きつけるような真似をしたくはない。それに、生きるのに知らなくても特に不利益はないでしょう」

「同感です……。今、彼が持っている認識は確かに何も間違っていない。ほんの少し、足りないだけだ。今日はお時間ありがとうございました。学校での彼のことはお任せください」

「ええ。頼りにしています。息子を導いてやってください」

?? ?? ??

あの恐怖と驚きに満ちたケイドロから数日。

今日も今日とで朝練だ。体力作りは積極的に。烏間先生から、山中であればフリーランニングの練習も良いと許可を貰ったので走り込みを兼ねて山の中を跳び回る。

自分で言うのもなんだが、3年生が始まった頃に比べて身体もかなり出来上がってきたと思う。昨日、風呂に入って何気なく鏡を見たら、筋肉で薄ら体に影が出来てたりして驚いた。

今ならこの体だけでプールに蔓延るかわい子ちゃんたちを落とせるのではないだろうか？とナルシズムに浸りたくなる。

まあ、もつとも。そんなんでモテるなら今頃彼女の1人や2人くらいいても良い筈なので、甘い幻想からは目を逸らす。

あーあ。ほんと、良い加減に恋人の1人や2人、作ってみたいものである。2人は不味いだろうというツツコミがありそうだが、それくらい思ってるってことでここは一つ。

「今朝はこのくらいにしておくか」

一通り走り回って満足した。予め準備しておいたタオルと昨日ビッチ先生と前原からモテる男御用達と激推しされた制汗スプレーをばら撒く。いまいち一度の使用目安がわからないな。

「あれ、乃咲じゃん。朝練おわたなの？」

校舎に入ろうと歩いてると茅野が居た。

「……ん？スンスン………なんか良い匂いする。乃咲、スプレーなんて使うようになったの？」

「うちのモテる二代巨頭に激推しされてな。まあ、確かにこの季節で汗だくのまま授業を受け続けるのもな、と」

「へえ〜。随分とおしやれさんになったもんだ」

軽い雑談をしていると、ふと、茅野が何か思い出したみたいに顔を上げた。

「あ、そういうえば知ってる？変態の噂」

「変態……？女装してケーキバイキングに行く教師と夜の校庭を奇声上げながら走り回る変態の2人いるけどどっち？」

「ティッシュを天ぷらにして食べてる方。……って言うか、もう一つの方は私も初耳なだけど!？」

「俺も噂で聞いた事があるくらいだからな。詳しくは知らん。ただ、夜にE組のグラウンドに行くと全裸ネクタイの不審者が走り回ってるって噂だ。怖いよな」

「普通にホラーなだけど……。え、なんか校舎使うのも怖くなるじゃん、やめてよそう言うの……。って、そうじゃなくて、なんかね、街中で変な噂が出てるんだよ。多発する巨乳専門の下着ドロ!ってそんな感じの噂」

「巨乳専門ねえ……。まあ、茅野が被害に遭うことはなさそうだからひとまず安心じゃない？」

「うん……。……って!誰が貧乳かあああ!思わずホツとした自分が一番憎いんだけど!!私にだって胸くらいありますうう!A!Aはあるもん!!」

「うんうん、そうだな、成長率の話だろ?成長性Aってすごい高ランクだよな。頑張れ頑張れ」

「そうだよ!AカップのAは成長性AランクのAなんだから!」

「うんうん。矢田さんとかもう成長しなさそうだよな。成長性とカップ数は同位の関係にあるもんな。知ってる知ってる。同じ中学3年同士だけど仕方ないよな、頑張れ頑張れ」

「私はまだまだ成長期つ……。……って、あれ?ねえ、もしかしてバカにしてない?バカにしてるよね!」

「今日のパンデモニウムは何色かなあ〜」

「無視すんなコラアアアア!」

横でぎゃいぎゃい騒ぐ茅野を他所に教室に入ると、そこにはいつも

と違う空気があった。

普段なら教室に入ると誰ともなく、おはよー!と挨拶が飛んでくるのだが、今日に限ってはそんなことはなかった。

「……なんか、変な雰囲気だね。何かあった?」

そんな空気を彼女も感じ取ったのか、質問を投げかける茅野。それに反応したのは倉橋さんだった。

教室の中に出ていた人溜まり、その中心にあったものを持ってパタパタとこつちに駆け寄ってくる。

「おはよう、圭ちゃん、カエデちゃん。実はさ、大変なことになって……」。この記事なだけど」

差し出されたのは一枚の新聞。その中腹あたりにデカデカと大見出しで『下着ドロ再び出没!!』と掲示されていた。

「再びって……前もあったのか」

「乃咲、そこじゃないよ。ほら」

茅野がツツコミながら記事の一部を指差す。そこには、字面としては初めてみるが、声としては聞き慣れた特徴のある笑い声と、あまりにも見慣れた特徴の不審者の情報があった。

「深夜に響く黄色い男の『ヌルフッフ』?多発する巨乳専門の下着ドロ、犯人は黄色い頭の大男、ヌルフッフと笑い、現場には謎の粘液を残す……」。巨乳専門の下着ドロってさつき茅野が言った?」

「うん、このことかも。でも、他の特徴までは知らなかった。これ……殺せんせーの特徴そのものじゃない?」

「そうなんだよね……。だからみんな驚いてて」

倉橋さんから動揺が伝わってくる。

他のみんなも波長を見るまでもなく、明らかに動揺していて、信じたくないと思っただけでも、特徴があまりにも酷似しているから、もうそれしかないかと半ば諦めてる様子すらある。

「おはようございます……って、汚物を見る目!!」

そんなみんなの心情を知ってか知らずか、殺せんせーはいつもと変わらない様子で通勤してきた。そして、教室に入ると同時に向けられた無数の冷たい目に刺され、驚愕の声を上げていた。

状況が飲み込めてないみたいなので、新聞をそのまま殺せんせーにパスすると、数秒もしないうちに顔が青くなった。

「これ、完全に殺せんせーよね」

「正直ガツカリだよ……こんなことしてたなんて」

「ちよつ、何が何やら……!?!」

みんな新聞に書かれてる特徴を見て、犯人は殺せんせーしかないと思ってるらしい。

まあ、無理もない。ヌルフフフ、なんて特徴しかない笑い方するのはこの人しかいないし、黄色い頭と粘液つてのがみんなの疑念を確固たるものにしてしまってる様に思えた。

しかし、そんな中でも我らの頼れる悠馬委員長は立ち上がるのである。確固たる意志と先生への信頼を武器に。

「待てよ皆んな！ 決めつけてかかるなんてひどいだろ！ 殺せんせーは確かに小さい煩惱はめちやくちやあるよ。でも、精々やった事と言えば、赴任当初のビッチ先生に鼻の下伸ばしてたり、エロ本拾い読みしたり、水着生写真で買収されたり、休み時間中狂った様にグラビアに見入ってたり、『手ブラじゃ生ぬるい、私に触手ブラをさせて下さい』とか要望ハガキ出していたり……」

「バチくそ黒じゃねえか」

思わずツッコミが出た。悠馬の援護射撃をしようとしたが出てくる情報があまりにも黒いものばかりで思わず。

「くっ………自首してください、殺せんせー………」

苦い顔で全身を悔しきで震わせながら震える声で諦めるように俯きながら言い放った悠馬。

「悠馬、お前は頑張ったよ。流石に日頃の行いが悪い」

「い、磯貝さんと乃咲くんまで!!?」

思わず悠馬の肩を叩きながら励ます。

殺せんせーも流石に悠馬に切られるとショックなのか、流石に心外そうに大声を出して弁明した。

「先生は潔白です！ 失礼な!! いいでしょう、準備室まで来なさい、先生の理性の強さを証明する為、持ってるグラビアを全て処分します!!」

「……理性が強い教師というか、人間はそもそも職員室にグラビアを持ち込んだりしないってのは野暮か？」

「まあ、決意表明みたいなもんじゃない……？」

倉橋さんも流石に苦笑している。

一部を残して殺せんせーの後に着いていくと、彼は宣言通り、自分の机の一番大きな引き出しに入れていたグラビアを一心不乱に全部ゴミ袋へ突っ込んでいた。

まあ、一番下の一番深くて大きな引き出しが雑誌の海になるほどグラビアを溜め込んでいたことに関しては何も言うまい。

「ほら見なさい！机の中を全て出し……て……て……」

そんな動きの中、触手が何かを掴んだらしく、グラビアの海から釣りでもしているみたいにそれをあげる。

触手が机の中から引っ張り出したもの。それはピンク色の女性もの下着だった。それもさっきの記事に違わず、確かにそれなりに大きいものを保持する為なのか、結構大きい。

「女子の下着ってあんな感じなのか」

「圭ちゃん？」

「乃咲？」

「なんでもありません」

要らん一言だったみたいだ。倉橋さんと茅野から割と冷たい視線が飛んで来たので慌てて取り繕う。

にしても、流石にあからさまだ。確かに殺せんせーなら机に入れたまま忘れてるなんてのはありそうだが、それでも流石にこの話題、この流れで本以外の何かがあったのなら、みんなにバレないように確認するだろう。

それに、今の反応は本当に心当たりがない感じだった。

多分、殺せんせーは白だな。日頃の行いがアレなので少しばかりみんなからの当たりが強いけど。

「ちよっと皆んな……これ見てよ……」

今度は教室の方から岡野が走ってきた。

手にはクラスの出席簿？

俺たちの前まで走ってきてくると彼女は見せたいのであろうページを開くと一番近くにいた俺と倉橋さん、茅野の前に出した。

一見、何の変哲もない出席簿だが、クラスの女子の欄の横にある空白スペースには謎のアルファベットがあった。加えて、何故だか茅野の横には『永遠の0』と映画のタイトルの様な文言が。

なんだろう、このアルファベット。ぎっくりあるのはAとE。しかし、その振り分け方の法則が分からない。成績のランクみたいなものであるのなら、片岡がCで中村さんがDと言うのはおかしいと思う。ぱっと見、本当にわからない。

岡野がAで倉橋さんがBと言うのもどう言う意味だ？加えて、茅野だ。永遠の0とはどう言う意味なんだろう……？

「クラスの女子の横に書いてるアルファベット……女子全員のカップ数が調べてあるよ……!!」

「ぶっ……!!?」

思わず吹き出す。

思わずゾーンに入って思考を巡らせた上に名簿の内容がきつちり頭に焼きついてしまったじゃないか。

「……岡野よ」

「ん？なあに、乃咲」

「……………それ、俺に見せても良かったのか。倉橋さんと茅野はともかく、俺、男子なんだけど、今、自分どころかクラスの女子全員の胸の大きさ、俺に公開しちゃってますが……………」

「……………ツツ!!この変態!!!」

「理不尽ツツツ!!!」

岡野から罵倒と共に拳が飛んでくる。

理不尽だと思わないことはないが、まあ、あまり男子に知られたくない内容ではあるだろうし、甘んじて受ける。

「け、圭ちゃん？大丈夫……?」

「大丈夫だよ、び……………倉橋さん」

「ねえ、Bって言いかけた?」

そうか。倉橋さんはBなのか。

「いやいや！カップ数だとしてもなんなのよコレ!?私だけ永遠の0ってどう言う意味よ!?A！いや、び、Bはあるからっ!!」

荒ぶる茅野。俺が見てしまったからか、何故だか俺に弁明する様に必死に胸を盛り、虚偽の申告をしていた。

ひとまず落ち着かせた方がいいだろう。

「落ち着け胸も……茅野!」

「胸盛りって言いかけたよね!?なんか今日の乃咲、私に対しての切れ味鋭過ぎない?上げ底になんか恨みでもある!」

「……ごめん。胸に対しては男として素直でありたいからさ。虚乳はやっぱり許せないんだ……」

「そんな譲れない主張を掲げながらシユンとしてもダメ……って、誰が虚乳の上げ底だって!」

「上げ底は自分で白状したんだろうが」

茅野、胸の話題になると暴走しがちな。

もうクラス名簿の方は見ない様にしながら出席簿を受け取り、ページを捲る。しばらくは特におかしな部分はなかったが、最後の方にとんでもないページがあった。

「ちよっ、何だこれ……!」

不意に覗き込んで来た前原がそのページを見て絶句した。

それもそのはずだ。俺も流石に目を疑った。この出席簿の一番最後にあったのはこの街に住むFカップ以上の女子のリストだった。しかも、ご丁寧に住所まで書いてる。

「……………まじかよ」

流石の前原もドン引きしていた。

「そんな……バカな……」

「じゃあ、アリバイはあるの?殺せんせー。この新聞に載ってる事件があつた時、何してた?」

速水さんが救いの糸を垂らす。

しかし、こと殺せんせーにおいてはアリバイは成立しないだろう。マツハ20なのだから、何処何処に居た、という証言は地球の裏側にでもない限り成立させるのは難しい。

「何って、高度1万メートルから3万メートルの間を上ったり下がったりしながらシヤカシヤカポテトを振ってましたが」

「誰が証明できるだよそれ!!」

「つか、アリバイなんて意味ねえよ」

「何処にいても大概は櫛ヶ丘この街に戻って来れるしね」

同じ意見の奴が他にも居たらしい。

みんなの視線が改めて先生に刺さる。

そんな刺々しい視線を受けて耐えきれなくなったのか、殺せんせーは必死にみんなの心を掴もうと冷蔵庫の横にあつたクーラーボックスを持ち上げ、机の上に置いた。

「み、皆さん! バーベキューでもしませんか!? 先生、放課後にやろうと思つて食材とかいろいろと準備しておいたんです!」

「準備つていつ頃?」

「朝イチで仕入れて来ました!!」

俺の質問にそう返すとクーラーボックスが開かれる。

「どうです? 美味しそうで……………」

そして動きが止まった。

彼の手に握られた串には肉でも野菜でもなく、相変わらずデカイブラジャーが刺さっていた。

「…………やべえぞ、こいつ」

「信じらんない……………」

「不潔……………」

みんなの言葉が口々に殺せんせーを襲う。

流石の殺せんせーも肩身が狭そうだ。

——何と言うか、不快な光景だ。

「みんな。一旦落ち着こう。なんとなく、僕らは情報に流されすぎちやいないか? 僕はそんな気がする」

竹林が一步前に出て言う。

やっぱり、こう言う時の冷静さは竹林の持ち味だな。すげえ頼りになる。だから、その行動を追う様に俺も動く。

「ちよつと失礼」

一言断りながら殺せんせーのクーラーボックスを覗く。

そこには何と云うか、呆れるしかない光景があつた。箱の中身はもの見事に巨大ブラジャーを突き刺した串で溢れている。

一周回って笑いそうになるのを抑えて適当な串を一本拝借。手に持って観察してみる。

まあ、年若い女性のブラジャーなんて初めて見たのではつと見で違和感なんか気付けるはずがないのだが、朝イチで仕入れたにしては少しだけ妙な点がある。

「圭ちゃん……流石に触るのは……」

「倉橋さん、ちよつとこれ持つて見てよ」

「えっ……？あ、えつと………はい」

困惑しながら頷く倉橋さん。流石に抵抗があるのだろう。おずおずと受け取り、怪訝な顔をしていた。

ついでに彼女の横で巨乳に対する憎悪を剥き出しにしている茅野にも一本、串を取り出して放り投げる。

相変わらず、見た目によらない反射神経を見せた茅野はそれをキヤツチ。食い破りかねない様子でブラを見つめる。

「………なんか気付かない？」

「なんかつて言われても………」

全員困惑顔だ。

殺せんせーも、成り行きを見ていた先生方も。

「匂いがしないんだよ」

「………匂い？」

匂いという単語に女子連中の株が一気に下がった気がするが、どうでもいいので構わずに言葉を続ける。

「殺せんせーは朝イチで仕入れたって言った。大体の家庭が朝一番でやるのって洗濯だよな？下着ドロも大体は洗濯物をターゲットにするだろ？断言はできないけどさ」

「まあ、確かに」

「その上でもう一度聞くよ、倉橋さん、茅野。そのブラジャー、なんか変じゃないか？朝イチで仕入れた。仮に洗濯したモノを盗んだなら、

なんで柔軟剤とか洗剤の匂いがしないんだ？」

「……あっ」

そう、それが俺の気付いた妙な点だ。

「洗濯したてのものがこんなぎゅうぎゅうになってるならもつと洗剤とかの匂いがすると思うし、仮に使用後の下着なんだとしても、この季節で服の下に着けてるんだからそれなりに蒸れるだろ。汗臭くないどころか無臭であるわけがない。こんな敷き詰められてるなら尚更だ」

「……乃咲の言う通りかも」

女子の中から片岡が俺の言葉に同意を示してくれた。

「それにだ。殺せんせー、ちよつと机の引き出し開けても？」

「……ええ。構いません」

殺せんせーの許可を得てから引き出しを開ける。

そこにはやはりブラの海。だが、俺は以前、この引き出しの中身を見たことがあった。一番最初の合同暗殺の直前、ここに入れたまま忘れられていた殺せんせーの抜け殻の処分を買って出た時だ。あの時、この引き出しはこんな様子ではなかった。

「俺は前にこの引き出しの中を見たことがある。その時はこんな下着なんて入ってなかった。最近入れ始めたとか言う意見もあるかもだが、常習的に下着を入れてるなら、俺たちの前で無防備に引き出しとかを使うわけがないだろ。現に、先生は俺が開けるのを止めなかった。殺せんせーの性格なら不味いものが入ってたら真っ先になりふり構わず泣き叫びながら止めるはずだ」

「そう……だね」

「それに、このデカイブラ。この出席簿のリストとか見るにFカップ以上のが優先的に集められてるみたいだけどき、Fカップもある人ってそんなに多いのか？しかもこんだけの下着を盗めるくらいにさ。仮にいたとしても、普通はもつと大事になってるだろ？粘液残して、変な笑い声が聞こえるとか都市伝説案件だ」

「……………確かにな」

「みんな、一旦冷静になれ。確かに殺せんせーの日頃の行いもあるだ

ろうが、この人はこんなことしないだろ。仮にやる様な人だったとしたら下着ドロなんてちやちな事じやすまないだろ。マツハ20だぞ？やりようなんていくらでもある」

「……………だよな、俺だったら下着ドロなんかで満足せずに覗きとかに能力使うわ」

「……………ごめんなさい、殺せんせー」

「私たち、情報に流され過ぎちゃった」

「いい、いいえ。犯人の特徴が私と一致しているので仕方ありません。こちらこそ、朝からお騒がせしました。まさか私物がこれだけ細工されてるとは知りもしませんでした。不快な思いをさせてしまいましたねえ」

完全に容疑が晴れた訳ではないが、殺せんせーへのヘイトは大分マシになったようだ。

確かに殺せんせーは奇天烈な言動をすることが多いし、言い訳しようがないことをたまにやってるのも事実だ。

なにも殺せんせーへの風評被害を止めたいわけじゃない。俺だって彼の奇天烈な言動を揶揄うし、ネタにするし、こんなことやってそうだよなとか、そう言う会話もするから。

でも、事実を捏造するのは違うだろ。

殺せんせーはバカだし、エロいし、ゲスいこともする。俺たちはそれを弄りもする。だが、それは事実を捏造して殺せんせーを貶めている理由にはならない。やってないことで肩身が狭くなるのは見えて胸糞が悪くなる。

「律、被害者が住んでる場所で最寄りの監視カメラのハッキングと映像の閲覧はできるか？」

『はい、ハッキングは朝飯前ですし、映像も問題ありません。実行しますか？』

「やってくれ。映像で各現場に同じ背格好をしてる奴がいたらマークだ。そいつが真犯人である可能性がある」

『了解です♪なんか、乃咲さんらしくなってきましたね』

律にやつてもらいたい事を伝えて教室に戻る。

「乃咲……？怖い顔してる」

「圭ちゃん……？？」

振り向きざま、一番近くにいた茅野と倉橋さんに今の表情を見られたのか、心配そうに声をかけられる。

「まあ、簡単に言うとは——ライン越えだよ。犯人を潰す」

口に出したからには実行する。

俺は、放課後まで休み時間の度に情報収集に精を出した。

94話 限界の時間

放課後を知らせるベルが鳴る。

「きよ、今日の授業はここまで……………」

殺せんせーは見るからに元気がない。とぼとぼと落ち込みを隠し切れてない雰囲気のまま教室を出て行った。

まあ、無理もない。みんな殺せんせーが犯人だと決めつけることはやめたが、それでも容疑者の1人であるのは変わらない。粘液と独特な笑い方。それをセットで持つてる人物を俺たちは殺せんせー以外に知らないんだから。

「やつぱ、相当参ってるね。針のムシロとまではいかなくても一日中居心地悪そうだったし、このままだと耐え切れなくて逃げちゃうんじゃないかなあ、殺せんせー」

「うん。僕らも殺せんせーはやってないって信じたいけど」

「俺だったらこんな急にボロボロと証拠を残したりしないけどね。渚くん、見てみ、この体育倉庫にあったボール」

カルマは何処からともなく異様なバスケットボールを取り出した。硬くて重いボールに似た皮しかない、ファンシーな意匠のブラジャーがセットされている、ある意味では魔球と言える代物。

「こんなことしてたら……………俺らの中で先生として死ぬことくらいしてんだろ。あの教師バカの怪物にしてみれば、それこそ殺されるのと同じくらい避けたいことだと思うんだけどね」

「……………うん、僕もそう思う」

しみじみとした雰囲気を出すカルマと渚。

いつもなら殺せんせーがこちらで茶化す場面だと思うので、今回は不在の彼に変わってカルマを弄るとしよう。

「……………口調と裏腹に体育倉庫まで確認しに行くとは随分と熱心ですねえ。カルマくん。そんなに先生が心配でしたか？」

「ッ!!!?」

熱湯にぶち込まれたタコのように一瞬で顔を真っ赤にしたカルマか

ら照れ隠しの裏拳が飛んでくる。

まあ、簡単に避けられるので当たらないんですが。

「ち、ちげえし！逃げられたら賞金貰えないから……！」

「ツンデレ乙ー！」

更に煽るとガチの戦闘モードになったカルマから遠慮のない連撃が来たので、ここも殺せんせーに習って、最近持ち始めた制汗スプレーで手入れしながら攻撃を避ける。

「……でもさ、殺せんせーじゃないとなると誰なの？」

「……偽よ」

「ふ、不破さん？」

茅野の疑問に答えたのは我らの名探偵不破だった。

腰に手を当て、滅茶苦茶目を輝かせながら高らかに叫ぶ。

「にせ殺せんせーよ!!ヒロー物のお約束！偽者悪役に違いないわ！それに、殺せんせーの体色とか笑い方みたいな特徴を知ってる何者か。それが一番怪しい線じゃない？」

流石名探偵不破、冴えている。

「くっそ……全然当たらねえ……。はあ……。んで、乃咲クンはどう考えてるのさ？あの後、律と一緒に探偵ごっこしてたでしょ。なんか分かったことでもあったの？」

息を切らしながら、ほぼ睨む様に視線を向けてくるカルマ。1発も当たらないどころか擦りもしなかったことを悔しがってるのだろう。少し言い方にトゲがあるし、あわよくばマウント取ってやろうという気概が見える。

「まあ、ある程度犯人の目星はついてる」

「うそ?!」

「ほんと。不破さんが言ってた通り、殺せんせーのことを知ってる偽者って仮定したら容疑者なんて絞れるし」

「へえ。じゃあ、誰なの？」

「結論から言えば、犯人は複数人。多分、主犯格と協力者ってところ。それから協力者の方は俺たちに近い人物だな。殺せんせーの荷物をすり替えられるのは、この教室に匂いがあっても違和感のない人物しか

いない」

「あ、そっか……。でも、そうになると私たちの中に裏切り者……。と言うか、殺せんせーを貶める人がいるわけ？」

「俺たちE組と言うより、E組関係者つてところだな。俺たちは勿論だが、ビツチ先生や烏間先生、その他で出入りしてる防衛省の人達も容疑者になる。俺たちがやってない、烏間先生とビツチ先生がやってないことを前提で考えると、まあ、怪しいのは片手で数えられる人数だわな」

「ふーん……。じゃあ、犯人は？」

「犯人に関しては常人ではないのは確かだな。調べた限り、被害にあった女性の中にはアパートやマンションの2階以上に住んでる人がいた。そんな環境で下着ドロなんてかなりの難易度だし、加えて粘液を撒き散らすとか普通の人間がやってるなら神業だ」

「いやいや、ちよつと待てよ。その理屈だと、やっぱり殺せんせー犯人説が濃厚にならないか？」

「いや、逆。殺せんせー以外にも容疑者が出てくる。俺たちだつて会ったことあるだろ、夏休み前に2回くらい。殺せんせーが出来ることならやれそうな奴とさ」

「そこまで話して俺は視線を興味なさそうにしつつこつちに耳を傾けていた寺坂に向けた。

「なあ、寺坂？一緒に作戦立ててただろ？」

「チツ、ぎげんな。利用されたんだよ、バカだったからな」

「えっ？いやいや、なに過去形にしてんのさ、寺坂。バカなのは現在進行形じゃくん？」

「うっせえぞカルマ!!……。んで、つまり、今回の騒動の裏で糸引いてやがんのはアイツらだつて言いてえのか？」

「まあ、その線が強いよな」

「……。そうね。触手を持つてるイトナくんなら普通の人間じゃ盗みようがない2階以上のベランダから下着を盗むのも出来るかも。粘液だつて殺せんせーが出せるなら、同じ触手を持つてる彼なら出せるかも知れない……。乃咲くんやるじゃん！」

「いえいえ、フワアームズ探偵ほどでは……」

「でもさ、黄色い体色は？」

「まあ、ほんトにイトナくんに殺せんせーと同じことができたら、触手の色を変えることくらい出来るじゃない？もしくは顔とか落書きしたヘルメットとかを被せるだけでも済むだろうし」

「あとは普通にイトナ以外にも触手持ちがいるとかな。殺せんせー、イトナと来てこの2人しか触手持ってませーんは多分ないだろ。そいつの触手が黄色いとかそう言うパターンもありえる」

「なるほどね……うん、納得。乃咲くん、今日から名探偵の称号はあなたもの物よー！」

「あ、いらねっす」

「……………そう……」

みんなも一通り納得したみたいだ。

「それに、律に監視カメラをハッキングしてもらった結果、似た様な背格好の2人組が毎回映ってたらしい。市街地だから本当に偶然の線も捨て切れないが、犯人は2人で行動してる可能性が高いってところだな」

「情報はかなり集まったんだね」

「まあ、情報のエキスパートな律がいるし」

本当に律様々だ。律という情報源がないといくらゾーンに入ったところで精度の良い推理はできないだろう。

「……………んじゃあ、俺らの手で真犯人ボコってタコに貸し作ろうじゃん？さつき、『ライン越えだ、潰す』とかノリノリでキレてた奴もここにいるわけだしね？死神ファザコン？」

「そうだな、ツンデレ赤髪くん」

「あ？」

「お？」

「あーもうっ！そこで睨み合ってどうすんのさ！カルマくんはともかく、乃咲ってこんなに喧嘩っばやかかったっけ!？」

「圭ちゃん？」

「っす、なんでもないっす」

倉橋さんから妙に圧のこもった笑顔を向けられて黙る。

この子、こんなに圧のある笑顔できたのか……。

「く、倉橋つえええ……」

??

??

??

「乃咲？そのボール何に使うの？」

「いや、犯人見つけたら投げつけてやろうと思って」

少し時間が経ってから、俺たちは行動を始めた。

名探偵不破が目星を付けたアイドル滞在中の施設にフリーランニングを使って侵入、現在は見張り中だ。

なんとなく手持ち無沙汰だったので、菅谷に作ってもらったペイントボールを手で弄る。

「ふふふ……頭脳も体もそこそこ大人な名探偵参上！」

「やってることはフリーランニング使った住居侵入だけどね」

不破さんの発言に苦笑した渚が突っ込む。

メンバーは、俺、カルマ、渚、寺坂、茅野、倉橋さん、不破さんである。悠馬たちには他にも目ぼしい場所があったのでそっちに回ってもらったことにした。

E組の生徒を全員動員した対偽殺せんせー捕縛網である。

「んで不破よお。なんだって犯人は次にこの施設を狙うと？」

「ここは某芸能事務所の所有する合宿施設。そして今、ここには巨乳の子を集めたアイドルチームが新曲のダンスの練習で宿泊してるらしいんだけど、それが明日までなんだってさ。真犯人なら、こんな極上の洗濯物を逃すはず無いわ」

「……なるほど」

なるほど。不破さんのリサーチは参考になる。

極上の洗濯物とかいう絶妙に気持ち悪いワードが気になるが。

「くっ……何よ、巨乳アイドルグループって……！貧乳に価値がないみたいな組織作らなくていいじゃない……！」

茅野が矛先のおかしい怒りを抱いてるようだ。

一応、フォローしておくか。

「まあ、あれだ。巨乳が全能って訳じゃないんだからさ、自信持ってた。女は胸じゃない。いつか貧乳が好き男と巡り会えるさ。そもそも胸に貧しい何て単語を付けるのは間違ってる。男が薄い乳房の本当の魅力に気付いた時、貧乳はシンデレラバストと呼ばれる様になるだろう」

「シンデレラバスト……ツツ!!」

「カエデちゃん？感銘を受けるところじゃないよ？っていうか、圭ちゃんも何言ってるの……?」

倉橋さんからの冷たい視線が痛い。

なんなら、不破さんは少し引いてる。

「ちなみに圭ちゃんの胸の好みは？」

「ん？そうだな、夏休み中に色々話したが……やっぱり誰の胸が一番重要だろうし、サイズはあんまり気にしてないな。ここは大きすぎず、小さすぎないCくらいと言っておくか」

「むう……」

「……裏切り者め……!」

「イダダダダダダっ!!」

倉橋さんと茅野に両頬を引っ張られた。

どうしてこんな目に遭っているのだろうか？結果、当たり障りのない回答をしたと思うのだが……。

「乃咲くん、Cに満たない女性も多いんだよ？」

「悪かったから、不破さんもそんな視線を向けなくてくれ」

誠に遺憾である。

でもまあ、そんなバカ話をしている間にも時間は確実に経過していた様で、少し離れた位置にある茂みから気配が。

「あつ、あれ」

渚の指差した先に、忍者のコスプレをした殺せんせーが出現した。どうやら考えることは同じらしい。

つか、草場に隠れるならせめて迷彩服にしとけよ、なんで忍者装束なんじゃ。そんなんだから目立つねん。とツツコミ連打したいが、本

人に聞こえないのにしても意味はないか。

「ね、乃咲くん。もしかして、今回の事件。殺せんせーをこうやって誘き寄せることが目的なんじゃないかな……」

「……………あ、その線もあるのか」

横から飛んできた予想外のパンチ。

そうだ。その可能性は考えてなかったが、よくよく考えてみるとそういう可能性だってあるのか。

「なるほどな。タコの良くない噂を拡散して俺達から孤立、そして孤立したところを誘き寄せて仕留めるって訳か。犯人の候補にシロの野郎もいやがるんだろ？アイツの考えそうなこった」

「寺坂にしては頭の回転早いじゃん。うん、まじでその通り。経緯はどうあれ、孤立してる所を利用するって手口、なんか既視感あつてさ。乃咲くんの推理を聞いて、殺せんせーがここに来てピンと来たよ」

「……………そうか。てつきり俺たちからの評判を落としてメンタルをガタガタにして、弱り切った所を叩くって作戦かと思つたが……………なるほど、そつちの可能性もあるなら、一旦、殺せんせーにもこのことを伝えたほうが良さそうだな」

そう思い、スマホを取り出した瞬間。

「あ、ねえ。あつちの壁」

「……………誰か来る」

タイミングが悪いことに動きがあつた。

カルマと渚の視線の先に黄色と白い三日月の様な口をペイントしたフルフェイスのヘルメットを被つた大男がいた。

しかも、察していたことだが、その大男はただものじゃないらしく、陸上選手も真つ青な走力と身のこなしはあつという間にその巨体を洗濯物に迫り、無駄のない動きで洗濯物に手を伸ばす。

犯人が来て、行動を開始した今、殺せんせーへの伝達が間に合わないことを悟つた俺は、反射的にスマホのカメラを起動し、動画としてその一部始終を録画した。

「捕まえたああああああつ!!」

犯人の手が下着を掴んだ瞬間、殺せんせーが飛び出して犯人を押し

倒しながら確保した。

かなり怒ってるようで、その動きにはいつもの加減が感じられず、殺さず、怪我をさせない範囲で全力で押し倒したのが容易に見て取れた。ありや、相当鬱憤が溜まってるな。

「よくもナメたマネしてくれましたねえ!!私がどんな思いで今日を過ごしたと思ってるんですかあ!!!絶対に許しません、押し倒して隅から隅まで手入れしてやる!ヌルフフフ!!」

ヌルヌル、ビタンビタンと音を立てる2人。

「なんか、下着ドロより危ないことしてるみたい」

「ま、地球破壊よりはマシじゃね?」

「だな。笑い方とか報道とまんま同じだし、誰かに聞かれたらこのヌルヌル音とくぐもつた悲鳴で更に誤解されそうだけど」

音を聞くだけならマジで殺せんせーが触手プレイしてる様にしか思えないし、なんか、どう反応していいのやら。

「さあ、顔を見せなさい!偽者め!」

殺せんせーの怒りの叫びと共に犯人のヘルメットが剥がされる。スポンと案外あっさり抜けたフルフェイスのヘルメットの下にあったのは、やはり、何処かで見た覚えのある顔だった。

「……えっ!?!」

その顔を見て流石に動揺を隠しきれてない。

事前に推理した通りではある。そこにいる人物は俺たちの想定範囲内だ。でも、こうして本当に遭遇すると、すこし……いや、割と本気で裏切られた気分になる。

「あの人、確か烏間先生の部下の……!」

「……鶴田さんだ。やっぱり防衛省が絡んでいたのか」

「——乃咲くんの言う通りだ」

吐き捨てるように言うと、何処からともなく声が聞こえてくる。以前にも何度か聞いたことのある、軽薄そうな声。

次の瞬間、鶴田さんと殺せんせーのいる場所の周辺にあったシーツの干されている洗濯竿が1人でに動き出した。

掛けられていたシーツ以外の洗濯物を撒き散らしながら物干し竿

はあつという間に縦に向かって伸びてゆき、白い四角い柱が出来上がった。

「けれど、彼を責めてはいけない。防衛省に掛け合ってね、烏間先生の部下を借りたんだ。彼は上からの命令に従っただけ」

俺たちが呆気に取られる中、柱の中から這い出て来た鶴田さんが申し訳なきように、悔しそうに言う。

「すまない……。烏間さんの更に上の上司からの命令だ。やりたくはなかったが、断れなかった……」

防衛省と言っても、雇われの身である以上はサラリーマンと変わらない。上司からの命令に背けばやっていけないってことか。なんと言うか、世知辛い世の中だ。とは言え、防衛省への疑念が深まらない理由にはならないが。

「だが、そのおかげで奴を簡単に捕まえることが出来たよ。当てるより囲うが易し。君たちが南の島で使った戦術だ。子供が考えたとは思えないほどによく出来た策だ。使わせて貰ったよ」

……なんで、俺たちの戦術を知っている？やはり、このシロという男。かなり怪しい。烏間先生の部下を借りるとか、俺たちの暗殺作戦のことを知っていたり、そもそもイトナという触手使いを引き連れていたり。現状、一番謎なのはコイツだ。

「さあ、殺せんせー。最後のデスマッチを始めよう。ここで終わりにする。行っておいで、イトナ」

「決着をつけよう、兄さん。今日こそアンタを殺してたった一つの問題を解く。即ち……。最強の証明だっ!!」

シロがいる割に姿が見えないと思ったら、アイドルの宿泊施設の屋上から対先生物質で出来てるらしい外殻に覆われた触手を引っ提げてイトナが飛び降りて来た。触手に見慣れない装備を着け、格闘戦もやる気満々なのか、手には俺の対先生マチェットに似た大型ナイフが握られている。

やっぱり、裏で糸を引いていたのはコイツらか。

「し、シロッ！テメエがやっぱり黒幕だったのかよ!!」

「そういう事。街で下着ドロを積み重ねたのも、彼の周りを下着塗れ

にしたのも全部この作戦の為さ。しかし、我々では匂いで殺せんせーに警戒されてしまうからね。あの教室に出入りしていて不自然じゃない人物に協力を仰いだのさ。ねえ、鶴田さん？」

「くっ……………」

涼しげに語るシロの後ろでは激しい攻防が繰り広げられているらしい。殺せんせーの驚愕と何かが衝突し合う音が聞こえてくる。

「にゅうううっ……………!!」

「はははっ、苦しそうだね、殺せんせー。苦勞した甲斐があつたよ。こんな施設を用意して、アイドルが合宿しているなんて偽の情報を流したりね……………。ああ、そうだ。君たちも中が見えなきや不安だろ？説明してあげようか？」

「……………いらねえよ」

「……………ほう？」

シロの得意気な声がイラついた。

なんでだろう？この素顔すら知らない男のことを俺はどうにも好きになれない。容姿の美醜とかじゃない。性格的にもアレだが、何故だか、生理的にこの男を受付られないというのだろうか。ひとまず、俺は、コイツが嫌いだ。

「その布は殺せんせーの行動を阻害できてることから、恐らくは対先生物質で出来たもの。加えて殺せんせーは環境の変化に弱い。突然対先生物質のシートで囲んで作り出した動揺をイトナで突き、突破できなない袋小路の中で殺せんせーを始末する。それがアンタの作戦だろ」

「……………せいかい。キミが語った作戦に加えて、高速戦に耐えられるように混ぜ物をした対先生グローブ。イトナ的位置取りも最適だ。真上から一方的に攻撃する。これでジワリジワリと削り殺すのさ。流星にこれでも殺せないようではねえ……………」

なんだ……………？

ゾーンに入り、シロを観察していたが、俺が口を開いた瞬間、その波長が大きく乱れた。激しい波が出来ていた。

この感情はなんだ？

「なら、今回も失敗だな。アンタには殺せんせーは殺せないよ」
「……………ほう？」

「ただ。あえて挑発するように言ったが、やはり波長が大きく乱れている。俺が口を開く度に、大きく、そして激しく。」

「理由は分からない。初対面の時も気付きはしなかったが、この男は俺が喋ると何かしらの激情に駆られている。」

「ほら、シーツの中の様子、ちよつと変わったんじゃないか？」
「……………」

顎で殺せんせーとイトナが対決しているであろう四角いリングを指してやると、シロはやはり苛立たしげに動く。

「見事な作戦でした。でもね、キミの攻撃は単純過ぎます。夏休み前なら殺られていたかも知れませんが、日々成長し続けるキミたちに教えるために……………私もまた日々成長しているのです」

「なにっ……………!!?」

中で何が起きているのかは分からない。

だが、シーツを透過して俺たちまで視認できる程の光がリングの中で発せられていた。風が彼らのいる方へ吸い込まれる様に流れ、光はより強く、激しいものに変わっていく。

「……………なんだ、このパワーは……………」

呆然というシロを他所に、その光は爆発した。

ガシャアアアアアア！と聞いたこともない様な破壊音が鼓膜を叩く。殺せんせーが防御形態に移行した時程ではないが、凄まじい閃光も伴って、その場には小規模な爆発が起こった。

視界が閃光にやられたが、間も無くして回復する。

戻った視界に映るのは小さなクレーターと、グローブを失った触手と共に落下してくるイトナと、それを優しくふんわりと抱き留める殺せんせーだった。

「全身からエネルギーを集めることで鉄壁を誇る、完全防御形態でしたが、これはその応用。全身ではなく、触手の一部だけを圧縮してエネルギーを取り出し、放出しました」

「厄介なものだ。そんなことまでできる様になっていたか」

「なぜ……！何故、勝てない………ツツツツ!!?」

「日々成長する、強い生徒たちに殺されかける経験。それが私を強くします。何せ、まだまだこの子たちに教えたいことは沢山ある。こんなところで死んではいられませんからねえ」

殺せんせーは言いながら俺たちに視線を向け、流れる様に、イトナを見つめ、厳しい表情と声音でシロに言い放つ。

「そういう事ですので、シロさん。この手の奇襲は私には通じません。大人しくイトナくんを置いてこの場を去りなさい。……………」

あと、私が下着ドロではないという正しい情報を広めて下さい」

「そ、そうよ!!私の胸だって正確にはび、Bだから!」

たいらのむねもり
「平胸盛……」

「平氏の偉い人みたいなあだ名つけんな乃咲いい!!」

茅野のグルグルパンチと倉橋さんからの脇腹抓りを受けていると、シロが何か、ほくそ笑むようにイトナを見た。

「……………そろそろか」

「…………?」

ぼそつと聞こえた声に首を傾げる。

集中して聴力が高まっていたのか、それを聞き取れたのは俺だけの様で、不意に顔を顰めた俺を見て茅野と倉橋さんの動きが止まる。そして、不穏な何かを感じ取っていたのは俺だけではない様で、カルマも表情を引き締めていた。

…………その次の瞬間だった。

「い……痛い………!!脳みそが裂ける……!!」

苦悶に満ちたイトナの声が聞こえた。

シロから視線を離してイトナを見ると、声に変わらず表情も歪み、口から唾液を垂らし、歯を食いしばって何かに耐える様に頭を両手で押さえていた。

地面に這いつくばり、頭を抱えて躡く様は見えて気分の良いものではない。何が起きているのかは分からないが、自分が連れて来た癖に妙に涼しい雰囲気で、”やれやれ”と言いたげにイトナを見るシロが気持ち悪い。

「度重なる敗北に対するショックで触手が精神を蝕み始めたか。ここいらがこの子の限界なのかなあ……。これだけの私の術策を活かせない様ではねえ……………」

「……アンタ。まるで自分は悪くないとでも言いたげな言い草だな。殺せんせーの奇策に対する策がなくて負けたのはアンタの想像力不足の所為だろうが。後方腕組み指揮官面するなら任務失敗の責任を感じるくらいしたらどうなんだ」

「一端に偉そうなことを言うねえ。流石にE組の皆んなを指揮して何度も失敗した挙句、A組に尻尾を巻いて逃げた子だね。面構えが違う。……………大人の事情を知らないガキが好き勝手言うんじゃないよ」

俺の叱責を一笑に付すると、相変わらず飄々とした態度を崩さないまま、呻くイトナから背を向けた。

「イトナ。キミの触手を1ヶ月維持するには、火力発電所3基分のエネルギーが必要だ。しかし、これだけ成果を出せないでいると、流石に組織も金を出さなくなる」

……………組織。それはどう言う意味だ？

「キミに情が無いわけじゃないが、これも私の使命の為だ。次の素体を運用する為にも……何処かで見切りを付けないとね。———さよならだ、イトナ。あとは一人でやりなさい」

背を向け、歩き出すシロ。

その言葉に信頼できる要素はなく、お世辞にもイトナに対して情の類を持つている様には見えなかった。

「待ちなさい！それでも貴方は保護者ですか！」

「……教育者……っこしてるんじゃないよ、モンスター。何でもかんでも壊すことしか出来ない癖に。私は許さない。お前の存在そのものを。どんな犠牲を払ってもいい。お前が死ぬ結果こそが私の望みさ」

……やはり妙だ。コイツの波長。何故だか俺と殺せんせーに対してやたらとヘイトが高い。

「それより、大事な生徒を放っておいていいのかい？」

言い残してシロは3mはある壁をぴよんと一足で飛び越えた。

なんだ？あの身体能力は……。俺が言うのも何だが、普通じゃない。普通は3mもの壁を飛び越えるとか無理だ。

「があああああつっつっつ!!」

「つと」

飛んで来た触手を避ける。

ビタン！ビタン！と闇雲に……。いや、蹴く様に暴れる触手。イトナの様子から何となく制御が出来てないのだと悟る。

どうする？このままだとみんなが危ない。周りに危害が及ぶ前に触手を全て破壊して彼を無力化するべきか？

思わず常備しておる対先生ナイフを握りしめる。

無力化するのは簡単だ。この前のケイドロで殺せんせーと対決した感じ、イトナくらいなら問題なくやれる。

……だが。

「っ！乃咲！いまは触手を壊しちゃダメ！ただでさえ触手で頭がやられてるのに、壊して再生させたら余計に体力を使って取り返しが付かないことになっちゃうよ!!」

茅野の焦った声が聞こえてくる。

そう、その通りだ。殺せんせーの弱点はそっくりそのままイトナの弱点。触手を壊したあと、再生させるのにエネルギーを使うと言うのは把握済み。そして、触手を維持するのにも莫大なエネルギーが必要なのもさつきシロが語っていた。

いま、触手を破壊するのは、危ういバランスの橋を全力で揺らして崩落させるのに等しい暴挙。

「くっそ……っ！」

「乃咲くん！キミも前に出過ぎないで！キミだってあれに直撃したら危ないんですよ!!」

「それでも居ないよりマシでしょう!」

イトナの暴れる触手をみんなに当たらない様に叩き落とし続ける。何か、打開策はないか。

思考を巡らせる。だが、触手についてなんて流石に分からない。ここは専門家に聞くのが一番だろう。

「殺せんせー！なんか策はないんすか!!」

半ばヤケになりながら叫ぶ様に聞く。

「触手は、感情で制御するものです！強い感情によってポテンシャルも高まるもの。ですが、それは感情によって弱くもなり得ると言うことです！そして、イトナくんの言動から、彼の根底にあるのは、勝利への渴望……！その為の力への執着さえ消せれば、あるいは……!!」

力への執着。そんなこと言っただって。

「んなこと言っても、この状況じゃどうしようもないだろうが!!」

背後から寺坂の元気な声が聞こえてくる。

その叫びに全面同意だ。

「ぐっああああっっ!!」

悩んでるうちにイトナは再び絶叫し、攻撃をやめてシロと同じ様に飛び去ってしまった。

嵐の様な展開に俺たちは呆然と立ち尽くす。

下着ドロを捕まえるだけの作戦だったはずが、堀部イトナという一人の少年を巡る怒涛の急展開を迎えてしまった。

嵐は去った。ひとまずの脅威は無くなった。

でも、シロと暴走したイトナが去り、クレーターだけが残ったこの空間。この静かさは、嵐の前のその様に思えて仕方がない。彼は……これからどうなるのだろうか？

彼の残した数少ない痕跡である、対先生グローブと同じ材質らしい大型のナイフを拾い上げ、イトナの去った方を眺めて立ち尽くした。

95話 駒の時間

「イトナは奴の様な全身触手の生物とは違う。純粹な人間の体に反物質で出来た細胞、つまりは異物を植え付けているのだから、当然拒絶反応が起こるし、それを抑えるにはメンテナンスが必要になる」

白装束を身につけた男が嗤う。

本来、白装束は生前の罪などを洗い流すことで死者が次の生を迎えられるようにと着せられる死装束でもある。

その他にも、穢れない無垢の象徴でもあるのだが、この男がこの装束を身に付けている意味は、本人にしか分からない。

「私が彼のメンテを辞めた今、地獄の様な苦しみに苛まれ続けるだろう。常人ならば3日で狂い死ぬ。3日……つまりは72時間。それがお前の寿命だよ、モンスター。ひとまずはお前から殺してやるさ」
だが、その男は白いフードの下で醜く笑っていた。

?? ?? ??

「この馬鹿者がっ!!」

凄まじい怒声と共にそれに負けないくらい重々しく、そして痛々しい打撃音が朝、日課の訓練前に教室に荷物を置きに来た俺の鼓膜を叩く。一瞬、何事かと思った。

音のした方へ歩いていくと、どうやら職員室で鶴田さんが烏間先生に叱られているらしかった。

聞こえてくる内容は、シロたちに協力し、殺せんせーという存在を世間に匂わせてしまったことについてだ。

彼の様子を見るに、鶴田さんがこの件に絡んでいたことを烏間先生も知らなかったのだろう。

暗殺の為には仕方なかったと言うべきか、或いは防衛省も一枚岩ではないと納得するべきなのか、判断に迷った。でも、確実に言えるのは、彼らだって自分の生活が掛かっている人間で、自分の生活と立場

を守るには上には従うしかないってこと。

それから防衛省……少なくとも鳥間先生より上の人らのことは信頼できないってことか。鷹岡の時も、寺坂がシロに操られたときも、今回も。彼らは事前相談も、アフターケアも無さすぎる。

鷹岡の様な破綻者を俺たちに送り込み、あわや毒殺寸前まで追い込み。シロの作戦を知ってか知らずか、俺たちをプールごと爆破して殺せんせーを誘き出す為の囮にしたり、まして現場監督の鳥間先生にすら何の相談もないことだってある。

『それが地球の為だ、我慢しろ』と言われても、『はい、そうですか』なんて頷ける訳がない。せめて鳥間先生に通達が行き、事前に警告と陽動を頼まれるのなら納得できるだろうが、彼らは何の断りもなしに平然と俺たちを巻き込んでくる。

殺せんせーを雇用するにあたり、俺たち生徒に危害を加えることを禁止させたとかほざいていたが、今のところ、俺たちに降り掛かる危険の原因は大体があマツハ20のタコ型モンスターではなく、人間由来のものばかりだ。

しかも、そのどれもに何かしらの形で防衛省の関係者が絡んでいる。防衛省出身の鷹岡、シロとイトナを投入した鳥間先生の上の人、今回はつきりと関与をシロが肯定した鳥間先生の上司。

——防衛省は信頼できない。

鳥間先生という個人、鶴田さんという個人なら信頼できる。だが、今のところ防衛省という組織は確かに俺たちのサポートをしてきているが、それ以上に危険な目に合わせてくる機会の方が多いた事実だろう。

今回は俺たちから首を突っ込んだので責め立てるのはお門違いなのだろうが、今後、似た様な事があれば、色々と考えなきゃいけないだろう。防衛省の、俺たちを取り囲む大人たちを信じていいのかどうか。

「……………出来れば信じたいけど」

材料が無さすぎる。

俺は、頭に降ってわいた疑念を晴らす様に、その場を離れ、日課の

訓練に打ち込むことにした。

??

??

??

「あ、菅谷。これ昨日使わなかったから返す」

「おう」

なんだかんだで使わなかったペイントボールを菅谷に渡して教室を眺める。下着ドロの犯人という濡れ衣が無くなった殺せんせーとその機嫌を取ろうとするみんなが騒いでいた。どうやら、昨日の扱いで先生が拗ねたらしい。

いい大人が……とは思うが、あえて言うまい。昨日のあれは流石に見てて可哀想だったし、好きにさせてやろう。

「わ、悪かったってば殺せんせー！ほら、先生の好きなケーキ買ってきたから機嫌直してよ！」

「ほんとごめんって！俺らもシロに騙されて疑ったりしちまってよ、肩とかマッサージするからさー！」

「心配なく。どーせ心も体もやらしい生物ですから」

しかし、これまた面倒臭い拗ね方してるな。

少し見守っていたが、卑屈なのか、単なる揚げ足取りなのか分からない拗ね方をしていてみんなも流石に困ってる。

そろそろ、イトナについても話したいし、空気を変えるか。

「殺せんせーも一旦落ち着いてくださいよ、イトナについて話したいし。みんなも申し訳なく思ってるんですって」

「イトナくんについては私も同感ですが、それはそれとしてご存知ですか？チョウやハエなどが蛹を経由して成虫になることを完全変態と言うそうです。さしずめ、皆さんにとって先生はチョウやハエと同類ということですねえ」

「……………めんどくせえな、コイツ」

「圭ちゃん、本音、本音出てるから」

「……………よし、ここは聖書に倣うとしよう。昨日、殺せんせーを疑った者の中でこれから先、エロい妄想をしないと誓える者のみ、殺せん

せーに罵詈雑言を浴びせなさい」

「「「……………」」」

「……まあ、エロいこと考えることくらいあるよな」

「……そうだね。私たちも昨日のことは悪いと思ってる」

「殺せんせーのエロい部分も別に不快じゃないしね。そう言う親しみやすさみたいな所があるから、うちらも案外、気楽に暗殺だーとか、そう言うことをやれてるのかもしれないし」

「み、みなさん……………せ、先生の方こそ——」

殺せんせーが何か言いかけたところでカルマと目があった。

ニヤリと悪い笑みを浮かべるアイツが何を考えてるのか手に取る様に察してしまう自分はやっぱり、根本的にカルマと同じ穴の貉という奴なのかもしれないな、不本意ながら。

「では、昨日の一連の騒動の中で殺せんせーを疑わなかった者は殺せんせーを罵倒なさい」

何か言いかけた殺せんせーを遮る。

するとすかさず罵倒が飛んできた。

「バーカ」

「ターコ」

「にゅやあつっ?!?!カルマくん、乃咲くん!?ここは皆さんの心のこもった謝罪からの先生の歩み寄りでハッピーエンドで締めくくる場面でしょう!?!」

「人が嫌がることを進んでやりなさいって、横のツンデレ赤髪に懇切丁寧に教わりましたので」

「横の死神ファザコンに親切に教えました」

「この不良児コンビ!天邪鬼!ツンデレ!ファザコン!それはそれとして信じてくれてありがとうございます!」

先生のオーバーなりアクション。それによつて申し訳ないムードも徐々に変わり、所々で笑いが起き始めた頃、タイミングを見計らつて殺せんせーに本題をぶつける。

「それで、殺せんせーから見ても、イトナはどうです?」

「いい状態ではありません。触手は人間が持つには危険すぎる。シロ

さんにハシゴを外されてしまった彼がどう暴走するか……」

昨日、飛び去ったイトナの追跡を試みた俺たちだが、結局、その痕跡も見つけることすらできず、俺たち生徒はおろか、防衛省と殺せんせーですら、昨日は捕まえる事ができなかった。

「俺たちさ、アイツのこと何も知らねえんだよな。名義上はクラスメイトだけどよ、それだけだ。アイツが何で強さとか、勝ちに拘るのか分かんねえ……。でもさ、乃咲と竹林の件で思ったけど、それって、なんか……。寂しいよな」

「……杉野」

対先生弾を埋め込んだ野球ボールを握り、ぼんやりと語る杉野だが、その言葉はみんな心の何処かで思っていたことの様で、誰も否定せず、嫌な顔をすることも無く、空気は沈む。

『みなさん、これを見てください』

空気が静まり返った教室に律の透き通る声が響く。言葉の後、液晶に表示されたのは、携帯ショップが何者かに襲撃されたと言うニュース。しかし、その襲撃痕は尋常ではなかった。

「……これ、イトナだよな」

「……ええ。使い慣れた先生には分かります。この破壊は触手でなければまず出来ない。触手は感情……意思の強さで動かすものです。しかし、結局は人の体に植え付けられている以上、維持するにはエネルギーが必要。他にも理由はあるのですが、携帯ショップの電気を摂取しようとしているのかもしれない」

少し引つかかる。電気はシンプルなエネルギーだ。人間の体だって所詮は脳から送られる電気信号で動いているに過ぎない。人間の体は大きな電子回路と言える。そう言う意味で、人体に適合しやすいのもやはり電気エネルギーだ。

しかし、どうしても携帯ショップなんだろう？ 電気が欲しいのなら、その辺の電線とか、携帯ショップなんかよりも店舗数の多いコンビニでも襲えば良いだろう……？

『乃咲さん、覚えてますか？ イトナくんが転校してきた日に私に彼について調べる様に話したことを』

「乃咲クン、そんなことしてたんだ？」

カルマに流し目で見られる。別に隠す必要もないのであの時のことを語った。

「イトナを見た時、触手は人間にも移植できるのか？と気になったんだ。殺せんせーを暗殺しやすい場所に身を置く為とは言え、イトナはどこから見ても中学生。普通の環境で育った人間に触手なんて生えるはずがないし、シロなんて怪しげな人物が保護者をしてる。かなり妄想を膨らませて、もしかして、堀部イトナは触手を人体に適合させるために生み出されたデザインベイビーなんじゃ？とか思ってたんだよ」

「こ、これまたぶっ飛んだ発想だな……………」

「ああ。実際、ぶっ飛んでた。俺の想像したらSF展開はなかったよ。堀部イトナは実在する人間だった」

そこまで語って律に視線を戻す。

「それで、その後の情報がわかったのか？」

『はい。あの時、私は役場のパソコンに潜り込み、堀部イトナの戸籍を確認して、彼について調べました。その結果、彼がとある製作所の社長息子だという所まで突き止めることが出来たのですが……………彼のお父さんが経営していたその町工場は小規模ながら、世界的にスマホの部品を供給していたようですね』

「スマホの部品。そうか、もしかすると、それが携帯ショップを襲う動機ってことなのかな」

『ええ。小規模ながら優秀な成果を出していた町工場でしたが、不況の煽りには勝てず、一昨年、多額の負債を抱えて倒産。社長夫妻は息子を残して雲隠れしたとのことですよ』

「…………でもよ、それって八つ当たりじゃん」

「それでもない。町工場ってことは少人数で運営してたんだろう。それこそ従業員の一人一人が技術も知識もあるプロ。工場が潰れて、行き場をなくした技師が別の企業に就職して、技術とかが流出するってのは、歴史上、何度もあったことだ。そう考えると、今のイトナには、街で扱ってるスマホは倒産した父親の会社の技術を盗んで作られた

ものに見えてるのかもしれないな」

流石、歴史が得意なだけある。それに加えて悠馬の広い視点と相手を理解しようとする姿勢のよく現れた良い考察だ。

エネルギーが欲しい、電気が欲しい。何処からか補給したい。そんな状態のイトナが携帯シヨップを襲撃の対象に選んでいる動機。あるいは深層心理にある本能なのかもしれないな。

「不況に負けてお父さんの会社が倒産して、両親がいなくなった。それがイトナくんが勝ちや力に執着する理由なのかも」

渚の言葉に俺を含めた全員が重々しく俯く。

イトナは、ある意味で俺に似ていた。親に関する事柄が原因で身を削りながら目的の為、勝利の為にふらふらになりながら進むことを躊躇わない部分とか。きつと、あの頃の俺は、今のイトナの様に見えていたのかもしれないな。

そう思うとどうにかしてやりたくなるのか人情だ。

だが、情けないことに力に対する執着なんてものを断ち切れる意見を俺は持つてないし、説得できる自信はない。

俺が振り切れたのは悠馬を始めとしたE組のみんながきつかけになり、父さんと話し合う機会を得る事ができたからだ。

同じ条件でアイツを助けようにも、親に半ば捨てられて恨んでる可能性がある。そんな環境で触手の暴走を起こしてるイトナを合わせようものなら大惨事になりかねない。

今の俺にはイトナを救う手段がない。方法も考えつかない。

「……触手は意思の強さで動かすものと言いましたが、それは同時に強い渴望がある限り、決して宿主から離れないということでもありません。彼に力や勝利への病的な執着を捨てさせない限り、触手は強く癒着して離れません」

「…………それは難しいんじゃないのか？」

「ええ……。ですが、時間もありません。このままでは、肉体が強い負荷を受けたまま衰弱して行き、最後には触手ごと蒸発して死んでしまうことでしょう。そうなる前に彼を止めなければ」

みんなの顔が一段と暗くなる。

そりやあそうだろう。商売敵とは言え、相手は同級生で、その生い立ちも知ってしまった今、見捨てるのは忍びない。

「寝込みを襲うのは？」

「寝ているからといって執着は消えません。悪夢でかつてのトラウマを見るとかその典型。今の彼はむしろ悪夢としてトラウマが蘇り、さらに癒着してしまうかもしれません。夢なんか見ない、深層心理すら消し飛ぶ程の勢いで気絶させられれば話は別でしょうが……」

殺せんせーの顔が曇る。

一瞬、何とかする方法は頭に浮かんだ。

普久間島で使いこなせる様になった、必ず殺す為の技。あれは、意識の波長が激しく揺れれば揺れるほどに威力を増す。冷静さを失い、本能の赴くままに興奮し切ったイトナが相手なら望む結果を得られるだろう。

クラップスタナー。ロヴロさんから伝授された技。

殺す技ではなく、殺す為の技。それを、殺さず、死なさない為に使う。そう言えば聞こえは良いだろう。

だが、それは、イトナから力を無理矢理奪い取るのと同じだ。執着を捨て、自分から手放すのと、周りに奪い取られるのでは意味がまるで違う。仮にそれで無事に生きていく事ができたとしても、彼は納得するだろうか？

もしも、あの頃の俺が無理矢理勉強道具を取り上げられ、努力もなにも出来ない状況に放り込まれたら？納得できたか？そんな風に自分の頑張る為の手段を無理矢理奪われてもきつと納得しなかっただろう。少なくとも俺は。

「……殺せんせーは助けに行くの？」

「ええ。もちろんです」

「シロの性格はだいたいわかった。アイツは他人を『当たればラッキー』程度の駒としてしかみてない。そう言う奴の戦術は読みづらいから、本当なら行かないのが得策だと思うよ。シロが完全にイトナから手を引いたとは思えない」

カルマが真剣に言う。コイツもなんだかんだで殺せんせーが心配

なんだ。そこは茶化さないでおく。

「それでも行きます。先生はね、先生になる時に誓ったのです。『どんな時でも自分の生徒から触手^手を離さない』と」

けれど、殺せんせーの決意は揺るがない。

これは俺たちが何をいつても聞かないだろう。

「……しゃーねえ。俺たちも行くか」

「だね。ほつとくのも夢見が悪いし」

「あーあ、メイドオタとファザコンの次は不登校児か。俺たちもお人好しになつたもんだなあ、竹林、乃咲？」

「ふっ……。僕は君たちがしてくれたことを彼にするだけだ。僕は彼に伝えたい。巨乳が全てではない。控えめな胸にこそ、メイド服の萌えはあるのだと」

「……ああ。アイツは触手の使い方間違えてる。触手は壊す為のものじゃない。悦ばせる為のものだ。ね？殺せんせー？」

「ちよおっ!?そこで先生に振られたらまた、先生が変態扱いされるじゃないですかあ!!」

「つてか、俺らもお前らに乳と触手についてなんて一言たりとも語ってねえけどな!？」

適当なところでオチをつける。

正直、イトナを助ける方法なんて思いついてないし、なんなら本当に助けられるかどうかすら危うい。

でも、考えてばかりでうじうじしていても、良いことはないことを知ってる。だから、ひとまずは行動することにした。

出もしない答えを考え続けて何もしないのは、なにも選ばないのと同じだ。イトナに手を差し伸べもせず、殺すこともしない逃げだ。それはきつと、考えられる結末の中で一番ひどい。

これまでのイトナの行動範囲から次にアイツが現れる場所を予め目星を付けておき、昨日、イトナと殺せんせーがやりあった場所で拾った対先生大型ナイフを装備しておく。

対先生ナイフは今のイトナに対して威力がありすぎる。対して、このナイフは昨日見た限り、対先生グローブと同様に触手に触れても少

し溶かす程度だ。もしもの時の護身用に使えるだろう。

準備できることは全てやった。

何とか説得して、力への執着を断ち切る方向で俺たちの方針は概ね決定。あとは彼と直に対決するだけだ。

何とかしてイトナを助けてやりたい。

何処となく、昔の自分に重なるから尚更そう思うのかも知れない。どんな方向に転んでも、せめてアイツが満足できる結果を。

そんな思いと共に俺たちは放課後を迎えた。

96話 執着の時間

迎えた放課後。殺せんせーとみんなでイトナを待ち受ける。予め目星を付けた店。そこは先んじて烏間先生に連絡し、無人になる様の手配してもらった。

万が一にでも一般人に怪我人が出ない様にする配慮。烏間先生も今回のイトナの騒動に思うところがあるのか二つ返事で領き、店内には店員を含めた一般人がいない状況を作り、代わりにシヨップ表には警備員に扮した烏間先生の部下を配置。

イトナが現れたら、その警備員役が確保する。それが理想の流れだが……そう上手く事は運ばないだろう。

俺たちも建物の死角になる位置に潜んで息を殺す。そうして数時間経ち、日もすっかり沈んだ。辺りを照らすのが月明かりと電灯の明かりのみになった頃。やはりイトナは現れた。

弾丸の様な跳躍を見せた彼は、触手を使って店の前に構えていた2人をガラスごと吹き飛ばし、1秒足らずで店内を破壊。何かをうわごとの様に粒やながら幽鬼のように電灯すら壊れた薄暗い店内に立ち尽くしていた。

「キレイ事も遠回りもいらぬ……。負け惜しみの強さなんて反吐が出る……！勝りたい……！勝てる強さが欲しい……！」

「……………痛々しいな」

口を吐いたのはオブラートなんて使うつもりのない感想。強さと勝利への渴望。それが鎖になってイトナを絡め取ろうとしている。そんな鎖に身を削られていく彼が痛々しい。

本人は同情なんてされたくないだろうが、端的に言えば……今のイトナは可哀想だった。

少し前のみんなも同じ想いだっただろうか？止められても止まろうとしない、自分でもどうしたら良いのか分からない俺をみて、同じように複雑な気持ちを抱いていたのかな？

そうにしろ、そうでないにしろ、今のイトナを取り逃してしまった

ら、もつと被害も大きくなるし、それ以上にイトナ自身も死んでしま
うだろう。そうならない様に、彼が壊したドアや壁の代わりになる様
に、退路を塞ぐ様にしてみんなを並び立つ。

「……やつと人間らしい顔が見れましたよ、イトナくん」

「……来たのか、兄さん」

「殺せんせーと呼んでください。私はキミの担任ですからね、生徒が
苦しんでいるのであれば、手を差し伸べるのは当然です」

諭すように語りかける殺せんせー。

その後ろで、およそ俺たちの中では一番絡みが多かったであろう寺
坂も不器用でぶつきらぼうながら、声をかける。

「負けたくらいで拗ねて暴れてんじゃねーぞ、イトナ。てめえには色
んなことされたけどよ、水に流してやるからこっちこいや」

不器用でぶつきらぼう。だが、それはガキ大将気質の寺坂がさり気
なく見せる度量の大きさでもある。

でも、そんな言葉だけでは本当に追い詰められ、思考が偏った相手
には届かない。仮に届いたとしても、行動を止めさせる程の力を持た
ない。イトナは止まらないだろう。

そんな確信は現実のものとなる。

フラフラで、メンテナンス不足、そして感情までもがぐちゃぐちゃ
になつている影響か、黒く染り、シナシナに萎びた触手をひゅんひゅ
んと鞭の様にしならせながら氣力を振り絞る様にイトナは殺せん
せーを睨む。

「うるさい……。勝負だ、今度こそ……勝つてみせる……！」

勝利への執念。だがそれは、勝つ為の執念ではなく、勝つと言う行
為への執念なのだろう。だから、こんなにも痛々しい。

「もちろん勝負は望むところです。ですが、お互いに国家機密の身。
何処かの空き地でやりませんか？そして、暗殺そが終わったら、その空
き地でバーベキューでもしながら、みんなで先生の殺し方を勉強しま
しょう」

殺せんせーは変わらない。この人の根底にあるのは、どんな状況で
も俺たちを守り、教え、育てること。

その為なら自分の危険なんて惜しまないし、自分を殺そうとした相手であつても全力で手入れして、もう一度立ち上がらせる。殺せんせーは死にたくないと言つておきながら、俺たちの成長に繋がるのなら、命を惜しまない。

ここまでやって、それでもイトナを受け入れようとする殺せんせーに少し、絆されたのか、あるいは毒気を抜かれたのか、彼の触手に入つていた力が抜け、代わりにぐうぐうと腹の虫が鳴いた。

状況的に昨日の夜から何も食べてないんだろう。風呂にだつて入れてないだろうし、案外、飯でも食つて、風呂にゆつくり浸からせれば話し合いもできるかも知れない。

「そのタコしつこいよ？一度担任になったら地獄の果てまで教えにくるから」

「当然ですよ、目の前に生徒がいるのだから、教えたくなくなるのが先生の本能です」

「……………」

カルマと殺せんせーの言葉の緊張感の無さに完全に毒気を抜かれたのか、イトナはポカンとした表情を見せる。

何となく、今の俺にはイトナの気持ちがかかるような気がする。一番最初の合同暗殺の時、決着がついた後、殺せんせーに言われた『目を逸らさない』という言葉。それをもらった時、きつと俺も似た様な顔をしていたから。

駄目だな、なんか今日の俺はいつにも増して女々しい様な気がする。相手に自分を重ねて、しみじみと後方理解者の様に内心で同意して、納得している。

きつとそれ自体は悪い事じゃない。相手のことを理解出来ている、あるいは理解しようとしていることの現れなのだろうから、それ自体は決して間違つたことじゃない。

ただ、俺はこの時、気を抜いてしまった。

このままならイトナを説得できるかも、などと気を抜いてしまった。学校で、シロの奴が何かをしでかすと読んでいたのに。

——それは、突然飛来した。

気配がなかったと言うのは無理がある。ただ、気付かなかった。気を抜いてしまっていたから。

何か変だと気づいたのは、それが投げ込まれて、爆裂した直後のこと。ポフツ！と粉塵が爆発する様に飛散する。

辺り一面を白く染め上げる程の粉塵。

「ううっ……!!?」

それが対先生物質出てきた粉塵だと気付いたのは、イトナの呻き声と、殺せんせーの巨大なシルエットがグズグズと解ける様に崩れるのを見てからのこと。

「イトナっ！」

今のイトナの触手が壊れるのは不味いと聞いていたし、理解もしていた。だから少しでもダメージを抑える為に上着を脱いで、とつさに頭巾の様にイトナに被せる。

「大丈夫か！おい！」

「頭が痛い……！触手に吸われる……!!」

しかし、それでも少し遅かった。彼の触手は徐々に溶けつつある。苦しそうな呻き声をあげるイトナに困惑する。

今まで、こんな風に苦しむ人を見たことがなかったから。こんな風に死にかけてる人を見たことがなかったから。死なせたくないなら守らないと、という思考が巡ると共に自分が何をしたら良いのかが分からなくなつてパニックになりそうになる。

混乱し、パニックで濁流する思考をゾーンに入つて落ち着かせる。

こんな時、どうすればいい？俺に何ができる？

今日までに獲得してきた知識、技術、経験。それらを頭の中で検索して、最適な行動を練り上げる。

そんな時、ふと殺せんせーやシロの言葉を思い出した。『触手は意思の強さで動かすもの』、『敗北のショックで触手の暴走が始まった』と。触手を深く知る2人は言った。

触手のメンテナンスとやらが出来てない今、望みは薄いだろう。だが、何とかイトナの意思の強さを取り戻させるしかない。

力に執着してる奴にこんな対応をするのはきつと間違っているの

だろうが、それでもなにもしないよりはマシだろう。

頭の中で浅野理事長のことを思い出す。

今、俺に必要なのは彼の洗脳とも言える巧みな話術だ。それも感情に訴えかける言葉選びだけでなく、相手の心に潜り込むような、あのねつとりとイヤらしいつけ込み様な声音だ。

「……イトナ。落ち着け」

かつて普久間島で千葉と速水さんにやったクラップスタナーの応用。相手の意識が乱れている時、波長が一番落ち着く瞬間を見計らって、激しく脈討つ動脈を軽く抑えて冷静さを取り戻させる技。まずはそれを使った。

呼びかけながらイトナの首筋に触れる。

軽く動脈を押さえつけてやると、俺の思惑通りに僅かに冷静さが戻ったのか、垂れ下がった触手の色がドス黒い漆黒から、白へと変わる。その理性を取り戻した僅かな隙を見逃さない。

「繰り返し言ってくれ。『俺は強い』」

「俺は……強い……」

「『こんなことじゃへこたれない』」

「『こんなことじゃ……へこたれない……!』」

『俺は大丈夫、俺はまだやれる』」

「俺は……大丈夫……!俺は……まだやれる……!」

言葉というのは実際凄いものだ。

他人に言われるだけじゃ頭に残るだけのものでも、口に出してみるとなんだが自分にも出来そうだと思えてしまう。

例えば悩みを内心で溜め込むより、誰かに聞いてもらったほうがすつきりするの、その方が気が楽になるのは勿論のと。実際に口に出して、自分の意思を再確認できるからなんじゃないだろうか。自分の言葉を自分の耳で聞く。

人が、自分を納得させる為に思わず、無意識で考え事を口に出してしまうのもきつとそんな理屈なんじゃないかな。

例えば、苦しい時、辛い時。自分を鼓舞する言葉が口から出てしまうのは、そうやって自分に言い聞かせる為だ。

自分はまだやれる、まだ頑張れる。そうやって自分を強く思い込ませることを自己暗示という。

思うに、理事長が度々見せる、あの洗脳染みた話術は彼の巧みな言葉選びによる印象操作と理屈と感情に訴えかける人心掌握、そして実際に口に出させて自分自身を騙す自己暗示によるものなんじゃないだろうか。

「そうだ。お前は強い、確かに殺せんせーを殺すことは出来なかったかも知れない。だが、お前は失敗してもへこたれなかった。手を変え、品を変え、お前は何度も立ち向かった。そして、昨日、殺せんせーに言わせたじゃないか。『夏休み前なら殺されていた』と。それはお前が失敗を繰り返して、それでも強くなった証拠だろ。お前は弱くないかない」

「だけど……！俺は負けたつ、何度も何度も！」

「お前が失敗したのはたった3回だ。それに対して俺なんて2桁以上失敗してる。それでも失敗の度に反省して、より良い作戦を考えて、殺せんせーを追い込んだ。初めからやれる奴はいない。失敗しても懲りずに続けた奴が強くなるんだ。たった3回なんて失敗したうちに入らない」

「誠実に……努力を続けた人だけが強く……慣れる……」

「その通りだ。そして、努力を続けた人つてのがたった一度の失敗をしなかったと思うか？違うだろ。成功し続けるより、一度失敗してどん底を見た奴の方が絶対に強くなれる。どん底を知って、足掻くから良い結果を掴むんだ。お前は今、どん底にいるのかも知れない。だったら、もつと強くなれるはずだ。お前はまだ負けてない。最終的に殺せば勝ちなんだ。諦めず、懲りず、足掻き続ければ、お前は負けなにかしない。絶対にだ！」

「俺は……負けてない……う？」

イトナの目に生氣の様なものが戻る。

あともう一踏ん張りか？我ながら詐欺師の才能でもあるんじゃないだろうか？よくまあ、口八丁にスラスラと。

だが、今はその才能を行使して、イトナを引き止めないと。

もう一踏ん張り、もう少し。

そんな風に思った矢先のこと。

「やれやれ、御高説痛み入るよ」

聞き覚えのある声と共に何が発射される音が聞こえた。

それが何なのか分からなかった俺は、反射的にイトナを殺せんせーのいる方へつき飛ばし、回避を試みる。

しかし、それは一歩遅かった。気付いた時点でゾーンに入ってから動いていけば避けられただろう。イトナを突き飛ばす頃には既に回避不能な状況に陥ってしまっていた。

これは、ゾーンの弱点だった。

この力は回避にも攻撃にも使える。超スピードってのは1人で使う分には割と便利だ。しかし、あくまで1人用なのだ。便利であっても、決して万能というわけではない。

俺には殺せんせーの様な絶妙な力加減も出来なければ、触手で風圧を防げもしない。俺がゾーンに入ってから誰かを突き飛ばして庇うのは、超スピードでぶん殴られるのと同じ。下手したら庇わない方がダメージがない可能性まである。

抱き抱えて避けるのも現実的じゃない。弾丸すらほぼ止まって見える速度で無理矢理動かされたら体が保たないだろう。

誰かを助けるには、ゾーンから出ている必要がある。

この力では誰かを守ることはできない。

そんな俺の反省を他所に、俺の体は勢いよく飛んできた何かに押し倒された。

「ほんと、その口の上手さは誰に似たのかなあ。しかもあの状態でイトナを庇うなんてね。まあ、結果としては同じか」

そんな声が聞こえた直後、倒れた体は何かに絡め取られ、何が何だか分からないまま、身体がすごい勢いで引き摺られる。

「ぐっあっつっ!!?」

「圭ちゃん!!?」

「圭っ!?!」

イトナの攻撃で破れたガラスの破片が体のあちこちに刺さり、瓦礫

に体を打ち付け、僅かな段差で持ち上がる体がアスファルトの道路に打ち付けられ、ガリガリと勢いよく引き摺られる。

「追ってくるんだろう？担任の先生？」

粉塵が晴れたのか、少し進んで粉塵を抜けたのか、俺はネットに絡め取られ、車で引き摺り回されてるらしかった。

経験したことのない体験だ。普通に怖いし、体に刺さったガラス片が深く刺さり、血が流れる感覚と激痛が走る。

何とか頭を守るが、アスファルトの凹凸で腕が負傷する。ネットがあるだけマシだが、それでも痛いもんは痛いし、怪我はするし、わけのわからない状況で泣きそうになる。

ぶつちやけ、泣きそうだし、漏らしそうだしで情緒はガタガタだが、こんな奴の前でそんな無様を晒してたまるか、という反骨精神だけが今の俺を支えていた。

??

??

??

「圭ちゃん!!」

粉塵が充満する前までそこに居た。そんな記憶に任せて手を伸ばすけど届かなかった。

彼の声は私たちの足元を這う様にして移動していく。ガリガリとイヤな音を立てながら。そしてその場に響くエンジン音に私たちは圭ちゃんが攫われたと気付く。

みんなで音のする方に走ると対先生物質の煙はなくなって、代わりに遠くでトラックから垂れ下がった網の中で引き摺られる圭ちゃんの姿が見えた。守る様に腕で頭を抱えてるけど、あれじゃあ手だって長く保たない……!

「落ち着けて磯貝！無闇に追っても追いつけねえよ！」

「けど!!」

「すみません、みなさん！イトナくんを頼みます!!」

走って追いかけてようとする人達、それを宥める人達、そして、イトナくんを一旦置いて圭ちゃんを追いかける殺せんせー。

私だつて追いかけたいけど、今のままじゃ、彼らが何処に向かったのかすら分からない……。

こんな時、圭ちゃんならどう考えるかな……。？

少し考えて、思い至る。

いるじゃん、私たちのポケットの中に。

スマホを取り出して律に呼びかける。

「律！圭ちゃんの現在地を辿って！」

『了解です！』

敬礼した律が小さくなると、画面には地図が表示される。殺せんせーが追いついたのか、彼の反応はここから少し先に行った曲がり角の奥で止まっていた。

「よかった、今なら追いつけるよ！この先の角の奥！」

「よし！そう言うことなら磯貝を止める必要はねえな！むしろ俺も滅茶苦茶頭に来てるしよお！あの白野郎め、調子乗りやがって!!いくぞ、みんな！今日こそ痛い目見せてやる!!」

「「おおおおおつつつつ!!」」

「……死んでないよね？乃咲」

「そうだね。仮に死んだら人質としての価値が無くなるし、殺しはしないと思う。仮に俺らの誰かが殺されたら……それこそ殺せんせーが黙ってないだろうしね。でも、死んでもおかしくないことさだよ。乃咲くんじゃないけど、流石にライン越え」

カルマくんが怒り心頭と言った様子で宣言する。

「あいつら——ちよつとぶつ潰そうか」

みんなに簡単な指示を出すカルマくん。そんなみんなを他所に、呆然とするイトナくんに歩み寄る人物がいた。

「おう、随分と派手にやられたなあ、イトナ」

「……寺坂……」

「俺らはあのいけすかねえシロ野郎にお返しに行くけどよ、おめえはどーすんだよ。このままイジけてケツを捲るんか？」

「……………俺は弱い……。シロに与えられたチャンスを何度も逃して、失敗して、弱いと見下した奴に守られた」

「んな自己評価はどーでもいいんだよ。てめえはどーしてえんだって聞いてんだ。失敗して、見限られて、見下した奴に守られて。そのまま引き下がんのかって聞いてんだよ」

「……良い訳がない。だが……もう、俺にはビジョンが持てない。何をやってても上手くいく気がしない……ぐうっ……!？」

少し落ち着いていた様子のイトナくんがまた苦しそうに頭を抱える。その様子にみんな思わず警戒を露わにするけど、寺坂くんは別に特別構えることもなく、彼に声をかけ続けた。

「アホ。ビジョンなんて捨てちまえ。まずはがむしやらにやってみんのよ。ここには俺らより頭おつむのいい奴が沢山いやがるんだ。まずはそいつらの言葉を聞いて、どうやれば良いのかべんきよーすんだよ。そんでダメなら同じことを繰り返せば良い」

「だが……」

「意外とウジウジしててめんどくせえ奴だな。乃咲も言ってたろうが。最終的にたった1回、あのタコを殺せれば勝ちなんだ。暗殺期限までまだ半年もある。1日1回チャンスがあると考えても180回以上やれんだよ、3回程度でびーびー言ってるじゃねえ。懲りずに1日2回、3回って殺しに行けば、懲りなかった数だけチャンスが増えんだろうがよ」

「……無理だ。耐えられない。俺は次のビジョンが出来るまで俺は何をして過ごせば良い……。何度も失敗する惨めな時間の中で、俺は何をしていけば良いんだ……?」

「あん? 焦らずバカやって過ごせば良いだろうが。メイド好き、特殊性壁持ち、野球バカ、プリン狂い、エアギター、萌え箱にその他大勢。多種多様なバカが揃ってんぜ? E組うちはよ」

「……俺は……焦っていたのか……?」

「……おう、だと思っぜ」

イトナくんから力が抜けるのをみんな感じた。

「あのバカさあ、平気であんな適当なこと言うけどさ。こう言う時、バカの一言は力を抜いてくれんだよ」

珍しく茶化さなかつたカルマくん。

なんとなく、綺羅々ちゃんたち通称”寺坂組”がどうして彼と一緒にいるのか。どうして圭ちゃんがこの前のケイドロで彼をリーダー役に抜擢したのか分かった気がする。

「さて、話もまとまったみたいだし、そろそろ行こっか。イトナくんはそこで待つてなよ、あとでタコ連れて来るからさ」

そう言い残してみんなで彼らを追いかけようとした時。

「さて」

たった今、説得されたばかりの彼が制止した。

「俺もいく」

そして、出てきたのは予想外の言葉。

「止めときなつて。今、寺坂が言ったのはあくまでキミを落ち着かせる為の建前だ。アイツらのことだから対先生用の武器とか持つてるだろうし、イトナくんが行つても何の役にも立たない。最悪、そのまま触手を壊されて死ぬかもよ?」

ズバズバとキツイことをいうけど、それは、彼を止めようとする力ルマくんりの優しさなのは分かっていた。

「あの銀髪は俺を庇つて連れてかれた。借りを作りつぱなしなのは性に合わない。俺には触手があるからお前らより馬力はあるはずだ。それに……………仮に死んだとしたら、その時はその時だ」

「……………あ、そ。でもまあ、死なれると夢見が悪くなるからねえ。男子集合、上着脱いでも良い奴はコイツに貸してやって。布巻くだけでもないよりはマシでしょ」

「しゃーねえ。ほら、触手だせよ」

「んだな。腐つてもクラスメイトだし」

「頼りにしてるぜ、イトナ」

「明日から学校来いよ?あ、昇降口からな。前みたいに壁をぶち破つて登場とか勘弁しろよ?」

男子たちが口々に小言や信用などを伝えながらイトナくんの触手に脱いだ上着を巻いて簡単な防具を作る。

「……………生暖かくて気持ち悪い」

「「ぶつとばすぞテメエ!!」」

イトナくんから出た感想にすかさずツツコミを入れる男子たち。ほんと、仲が良いんだか、悪いんだか……。

「……だが、見合うだけの働きはする」

「……………おうよ、頼んだぜ」

こうして、今、誘拐された圭ちゃんを除いた3年E組の生徒が全員集合した。仲間が拐われたこと、今日まで受けてきた仕打ちに対する報復などなど。みんなの士気は充分みたい。

みんなが走り出す中、私も我先にと先頭を走った。

「……………」

少し先に転々と続く赤い道。

圭ちゃんが流しただろう、血痕を辿って。

97話 反撃の時間 2時間目

結論、2〜3滴ほどやらかした。

車のスピードで引き摺り回され、ガラスは刺さるわ、タイヤで跳ね上がった石が当たるわ、摩擦で熱いわ、体を打ちつけるわ。これに恐怖心を煽られない奴がいるなら紹介して欲しい。

「ははは、楽しいね、圭」

「てめえに親しげに名前前で呼ばれる筋合いなんかねえぞ、不審者が。そのフード取ってみろや、どーせ中身はおっさんなんだろう？そのブサイクなニキビだらけの面見せてみろって」

「……もつとスピードを上げろ」

「これ以上速度を上げたら流石にその子の命が……」

「心配ないよ、コイツは人の皮を被った化け物だ。ちよつとやそつとじゃ死にはしないさ。多分ね」

人の皮を被った化け物。

シロの口から出たフレーズには聞き覚えなんてない。流石にそんな罵倒はされたことがなかったから。しかし、心当たりなんて一切ないと言えば嘘になるだろう。

——強化人間。

それはあくまで母さんが勝手に名乗り、父さんが便宜上その呼び名を使ったに過ぎない呼称だ。しかし、俺を表現する上でこの上なく適切な表現でもあった。

こんだけ乱暴されても、傷付いてるのは身体の表面だけ。鼻が折れるどころか、身体の中身と言える部分は至って健全そのものであるのは何となく感じ取れた。

だが、疑問は残る。

俺のことを知っているのは、父さんや殺せんせーくらいなもんで、それ以外に知ってそうな奴に心当たりはない。

と、なると、この男はどうして俺のことを知っているのか？という疑問に行き着いてしまうのは当然だろう。

けれど、それは”俺のことを知ってる人物”に限定した時の話だ。これに母さんを知る人物も対象に加えると、なんとなく、その正体に影と形がチラつき始める。

- ・ 乃咲圭一が普通じゃないことを知ってる。
 - ・ その理由は母である、乃咲圭を知ってるから。
 - ・ シロは触手に対しての知識が異様に深い。
 - ・ 最初に会った時、『お父さんよろしく』と言ってた。
 - ・ 上記から、父さんと面識があると思われる。
- これらの特徴が当てはまりそうな人物が1人いる。
父さんと殺せんせー。この2人の口から挙げられた、共通の名前。もつとも警戒すべき人物。

シロの正体がああ男ならば、全てに説明が付く。
触手の特性や弱点などを詳細に知っているのは、その研究を行っていたからだ。イトナに触手を植え付け、メンテナンスが出来るのは、その作り方などを熟知しているからだ。

俺や母さんのことを知ってるのは、父さんの研究に携わっていたから。そして乃咲圭が旧姓、柳沢新一の幼馴染なら、その兄弟であるこの男も当然、面識があることだろう。

父さんの研究成果を持って行き、その理論を応用して触手を作った。もしかすると、殺せんせーが俺の叔父は触手に深く関わっていると伝えてくれたあの時にもつと考えていけば気付けたかも知れない。シロ——いや、柳沢誇太郎に。

ゾーンに入って思考に耽っていると、車が加速し出した。
ドライバー役も流石に躊躇ってるのか、その加速は本当に緩やかだ。けれどシロからの『早くしろ』という催促に負けたようで、車は1段階ほどスピードを増す。

「ぐううう……！」

「良い様だね、大人に舐めた態度を取ってるからだ」
「舐める？ふざけんな、グラマラスな姉さんならまだしも、テメエみたいな加齢臭の漂う非モテの中年親父なんて誰が好き好んで舐めるかっての。おとといきやがれってんだ」

「ほんと、心底舐め腐った態度だねえ」

「生憎と腐ったおっさんを舐め回す趣味はねえんだわ」

「その態度がいつまで続くかなあ」

「相手がアンタなら死ぬまでさ」

しかし、何なんだろう。この嫌悪感。

父さん達とコイツの間に何があったのかは知らないが、俺個人は別段、柳沢誇太郎という人物に思うところはなかった。

警戒しろ、というから警戒心を抱いていた程度で、実を言うとあまり興味がないと言うか、ほぼ眼中になかった。

だと言うのに、コイツが柳沢誇太郎だと思うとなんだか言い表すことのできない嫌悪感に襲われる。

これが虫唾が走るという感覚なのだろう。本当なら媚びを売って少しでも助かる可能性を上げるべき場面なのは知ってるが、こと、この男と対峙していると、そういうブレーキが効かない。

けれど俺の口とは裏腹にトラックはそこから少し進んだ所で停止した。そしてそれから間もおかず追いついてきた殺せんせーがトラックの前に立ち塞がる。

「そこまでです！シロさん！」

「随分と遅かったなあ。何してたんだい、殺せんせー？見なよ、乃咲くんの腕。ボロボロじゃないか。可哀想に」

「可哀想なのはテメエの頭だろうが、すつとことつこい」

何やら殺せんせーを挑発するシロの言葉に被せて更に煽る。もうほとんど本能的なものだが、少しでも強がってないと痛くて泣きそうなんだ。大目に見て欲しい。

「……さつきからこんな調子なんだ。どんな教育をしてるんだい？こんな状況なのに調子に乗って言いたい放題。やれやれ、イトナがどれだけ可愛げがあったのか考えさせられるねえ」

「子供をトラックで引き摺り回す大人が何を言いますか!!イトナくんのことともそうです！あなたには彼らが受けた教育も、彼らの可愛げについて語る資格すらありません!!」

「二丁前に人道を説いてるんじゃないよ、モンスターが」

シロを素通りして殺せんせーが脚に力を入れて跳躍する。

「乃咲くん!!」

俺の名前を呼びながら飛んでくる殺せんせー。

直ぐ横に着地すると駆け寄って来る。

体に絡み付く網を剥がそうと触手を伸ばし、そして弾けた。網に触れた瞬間、パシャッと音を立てて先生の指が弾ける。

「対先生繊維のネットか……!」

「……なるほど、イトナを捕獲するならこれ使うわな」

何気なく納得すると同時に違和感を覚える。

妙じゃないか? 殺せんせーはあの時、俺たちと一緒に対先生物質の粉塵を喰らって反応が鈍っていた。

普通、殺せんせーを殺そうとするなら、あの場面でこのネットを使うべきはイトナではなく、殺せんせーなんじゃないのか?

そして、なんでわざわざトラックの2台にランチャーまで積んでイトナの捕獲に臨んだ? 人質にするだけならあの場から動く必要はなかった。なのに、なんでわざわざ移動した?

しかもトラックの停止した理由が分からない。

殺せんせーに追いつかれた? いや、殺せんせーが来る前にトラックは止まっていた。自分から止まったのだ。

……誘拐、人質、自発的な移動の放棄。

相手の目的は殺せんせーの殺害。

彼らの情報から導き出される結論は……。

—— 殺せんせーの誘導。

咄嗟に周囲を見渡す。

よく見ると木々の上に何人もシロと似たような格好をした連中がアサルトライフルを構えていた。

流石に対先生弾発射用のエアガンだろうが、それらは一寸の狂いもなくこちらに向いていて。それだけでなく、よく見ると葉っぱの間からはきらりとガラスのような何かか反射している。

癪だが、その手腕はすごいと思った。

普通、生徒を攫ったトラックがいるなら視線はそっちを向くだろう

し、地面ではなく、木の枝の上に陣取らせることで気配を殺し、下には俺とターゲットトしかいない状況なのだから、誤射とかそういう射線を気にすることなく一方的に撃ち下ろせるポジションを取ってる。

この男、性格と倫理観が致命的に終わってるが、確かに手強い相手だ。流石に父さんの弟なだけ――。

「……バカか、俺は」

頭を振って脳裏を過ぎる一言を消す。

危ない。相手が敵、何故だか知らないが嫌悪感マックスな奴であるが、自分がされて嫌だったことを無自覚にする所だった。

俺はコイツが嫌いだ。必要なら、俺がやられて嫌だったこととか関係なく、凡ゆる手段で潰すだろう。だが、初手からこのカードを切るのは、相手を見れる人間になるという目標を自ら否定することに他ならない。

この一言は、コイツの持ち札全て見た後でも遅くない。

「殺せんせー、逃げろ！」

「にゅ!!？」

でも、そんな一瞬の無駄が俺の一手を遅らせた。

俺に集中していた殺せんせーの反応が遅れた。

声をかけたとほぼ同時。葉っぱで隠されていたライトが一斉に点灯し、俺たちを照らす。

殺せんせーの短い声。しかし、その声の切羽詰まった感じとこの状況で理解する。殺せんせーを殺そうと言うのに準備する明かりがただのスポットライトである訳がなかったのだ。

「いやはや、本当に察しの良いガキだ。流石に乃咲新一の息子なだけあるねえ。いや、それともお母さんの底知れなさを受け継いだのかな？ 何処までも忌々しい家族だよ」

言い終わると共に枝の上にスタンバっていた連中が一斉に銃撃を始めた。殺せんせーではなく、俺に向かって。

「乃咲くん!!」

殺せんせーが射線に割って入る。

「へえ、服と風圧で防いでるんだあ？ でもそこまでする必要があるかな

？その子は触手を持たない表面上はただの人間だよ。この程度の大
きさのプラスチックの塊なんて当たっても少し痛い程度じゃないか。
尻尾巻いて逃げなよ、誰かを生かすなんてお前には無理なんだから」
「痛い程度で済む？そんな訳がないでしょう……！さつきから聞こえ
る僅かな発射音とこの速度。使っているのがプラスチック弾だけで
で、私に当てるために相当改造している筈だ。こんなものを子供に向
けるなど……!!」

「吠えるねえ。でもしんどいんじゃない？前々から集めていたデー
タでわかったよ。お前は自分への攻撃には敏感だけど、周りへの攻撃に
は鈍い。自分の身しか守れない身勝手な生き物だ」

殺せんせーが守ってくれてるが、流石に分が悪い。俺がいなければ
マツハで瞬殺なんだろうが、俺がいるせいで守りに徹しなくていけな
くなってる。

しかもあの銃。確かに撃ってるのは対先生弾だが、その弾速は俺た
ちが普段使ってるものより格段に速い。

殺せんせーにも、俺にも当たることのなかった弾丸は地面にぶつか
るとバウンドすることもなく、そのまま砕けてしまう程に。

「殺せんせー、俺は良いからコイツらの殲滅を！」

「冗談ではありません!!これ以上、君に傷を一つでもつけさせてたま
るものですか!!」

「泣かせる師弟愛だねえ。でもいつまで保つかかな？」

余裕そうなシロ。

正直、この状況だ。BB弾すら避けるのは厳しいし、腕が困難だか
ら盾がわりにもできない。それでもこの状況を切り抜けられるなら、
と殺せんせーに殲滅を提案してみたが案の定、却下された。嬉しいけ
ど、俺には少しわからない。自分が死ぬかも知れないのにそうやって
意地を張り倒そうとする姿勢が。

「いつまでも保たせる必要はないよ、だって、俺らでアンタらボコせば
済む話だし。ね？みんな」

這いつくばっているといつもより気持ち低いカルマの声が聞こえ、
その直後、枝の上の射撃手が何人か情けない悲鳴を上げて何者かに雑

に蹴り落とされていた。

「せーの!!」

「「ふんっ……!!」」

蹴り落とされた連中は無惨に地面にぶつかり、怪我をすることなく、ピンと張られた何処から持ってきたのか分からない大きなシートの上に落下し、そのままゴロゴロと転がされ、ガムテープで縛られて簀巻きにされた。

「なんだ!?このガキども!!?」

音も気配もなく現れ、殺せんせーを囲む布陣の一角を壊したE組のみんな。彼らの登場に驚愕しつつも銃を向けた者が数名。

「おーい、 出番出番!」

「……分かってる」

「ふぎやあつ!!」

そんな男たちはカルマが声を掛けた予想外の人物によって強烈な打撃を受け、強かに背中を打ち付けると気を失った。

「……へえ。まさかまだ動けたとはね」

感嘆の声を漏らすシロ。

それもその筈だ。俺も驚いている。

「てつきりあのまま消滅、よくて廃人コースだと思ってたよ。負け犬の悪あがきにしては大したものじゃないか、イトナ。できれば私と組んでいる間にそのガッツを見せて欲しかったものだよ」

「……俺は……っ!負けてない……っ!!」

そこにいたのは、触手に制服のシャツを巻き付けて、心底苦しそうに頭を抑えるイトナの姿があった。

「マジかよ、まだ動けるのか」

「イトナくん……!」

俺と殺せんせーの反応は似たようなものだった。

でも仕方ないだろう。予想してなかったのだから。

「それで?キミは何をしに来たんだい?見ようによっては、今の行動はそのこのモンスターを庇ったように見えたけど」

「借りを……返しに来た。その銀髪に……」

「へえ？モンスター同士の傷の舐め合い……いや、これもある意味で兄弟の絆と言うべきなのかなあ。天然か人工的かの差異はあれど、惹かれ合う部分でもあるんだろう」

シロの言葉が終わると同時にイトナが触手を叩きつける。

が、どういう反射神経をしているのか、奴はその攻撃を余裕そうに避け、トラツクの荷台から飛び降りた。

イトナの攻撃がトラツクに設置されていた砲台を破壊したことで、そこから繋がっていた網が一気に緩くなる。

「圭ちゃんー！」

「圭ー！」

倉橋さんと悠馬が駆け寄り、網を一気に外してくれる。

「ありがとう、2人とも」

「ッ……その腕……!!」

倉橋さんの顔が歪む。悠馬の顔が苦々しいものになる。

立ち上がった俺をみて、E組のみんなは似たような反応を見せる。地面で削れ、ガラスで裂かれてボロボロになった血塗れの腕。我ながら随分と痛々しい傷が出来たもんだ。

腕が特に酷いというだけで、胴体にもそれなりにダメージがあった。シャツなんかは血の斑ら模様が出来ている。

こうして見ると重症だ。なんだろう、子供って転んで泣くより、転んで出来た怪我を見て泣き出すことがあると思うのだが、その気持ちがないとなくわかる気がする。

思うに、あれは怪我を見て驚き、転んだことを実感し、そこで痛さに気付いて泣いてるんじゃないだろうか。

「ほんと参ったもんだ。2、3滴ほどチビったぞ」

「ッ……よく、2、3滴で済んだな。俺だったら間違いなく全部出してるね。大したもんだよ、お前」

こう言う時、一番最初に乗ってくれるのは大体前原だ。

割と強がってるから、こういう風に空気を読んで合わせてくれるのは本当にありがたいと思う。

「……ふむ、どうやら失敗のようだね」

殺せんせー達の方も決着が着いたみたいだ。

まあ、みんなが射撃手を倒してくれたし、イトナのおかげで俺も自由になった以上、殺せんせーを押させられる奴が残ってるわけもなく、もうシロが残っているだけだった。

死屍累々。殺せんせーの黒く染まった触手が奴らの乗っていたトラックを完全に破壊し、道路にクレーターを作る。

それを間近で見っていたシロの仲間たちの目には俺たちなんて写ってない。恐怖と絶望。自分たちとは違う世界に住んでいて、俺たちでは感じ取れない何かを感じているみたいにこの世の終わりみたいな表情をしていた。

「去りなさい、シロさん。あなたはいつも周到な計画を立てますが、生徒達を巻き込めばそれも台無しになる。この私の命を常に狙ってる彼らがそうそう思い通りになるわけがないという当たり前のことにそろそろ気付いた方がいい」

殺せんせーにしては珍しく突き放すような言葉だった。

声のトーンはいつもと変わらないのに、その奥底にある冷え冷えするような冷徹さのような物が感じ取れる。

「モンスターに小蠅達が群がるクラスか。大層うざったいな。だが、確かに私の計画に根本的な見直しが必要なのは認めよう。このクラスにはイレギュラーが多すぎるしね」

シロが言い終わると同時に、俺たちの横を一台の車が猛スピードで通り過ぎ、シロの横で止まる。

「そんな子はくれてやるよ、辛うじて正気を保ってるようだが、どうせ長くは保たない。精々、仲良しごっこでもしてるといい」

吐き捨てるように車に乗り、逃げるように発車する。

しかし、このまま何もせず流すのは消化不良だ。

みんなが色々やって精々したのは確かだが、ここまで散々やられて俺自身は何も仕返し出来てないのは癪に触る。

「菅谷、今朝返したペイントボールまだあるか？」

「ん？あ、ああ」

問い掛けるとキョトンとしながら手渡してくれる。

受け取り、みんなより数歩前に出て、ゾーンに入り、ボールを思いっきり振りかぶって、腕を振り下ろしながら投げる。

これでも夏休みまでは杉野の野球の特訓に付き合ってたんだ。全力投球の心得くらいはある。

そこに加えて音速に迫る脅力。発進したばかりです加速の足りないクルマなんて容易に補足することができる。

俺たちから50メートル程度離れた位置にいた車のサイドミラーに俺の投げつけたペイントボールはぶつかり、そのままパシャ！と弾けて、白塗りの車をピンクの斑らで染める。

流石に予期していなかったのか、背後からの奇襲を受け、反射的に被弾した方向から逃げるようにハンドルを切ったのだろう。キュルルル!!と派手な音を立ててバランスを崩していた。

「ざまあ見ろ」

しかし、事故ることなく、ひしゃげたサイドミラーを引っ提げてそのままフラフラとインクを滴らせながら、シロたちを乗せた車は走り去って行く。

「律、街中の監視カメラであの車追えるか？右のサイドミラーがピンクに染まったセダンだ」

『お任せください！』

律からの頼もしい返事を受けて車を見送る。

「乃咲……えげつねえ肩持つてんな」

「腕と肩の筋肉を余すことなく使う投げ方ってのを実践してみたんだ。詳しいことは……そのうち話すよ」

ゾーンのことは一旦誤魔化しておく。

皆にもそのうち話したいところだ。俺の能力は殺すだけならすごい役に立てるだろうし、それに何度かみんなの前で瞬間移動みたいなこともしている。温厚なみんなもそろそろ不信感を抱いてもおかしくない。

「でもまあ、ひとまずはボスも追っ払ったことだし、一件落着かな……？」

「いや、まだイトナの触手があるだろ」

シロがいなくなつてホツとしたのか、空気が一瞬だけ緩む。

けれど俺は油断しない。だって、吉田が今言つたようにイトナの触手に関しては何にも解決していない。

「殺せんせー、今のうちにイトナを」

この展開を何度か見た。空気が緩んだ瞬間、また何か起きるのは想像に難く無い。創作物でお馴染みのトラブル呼び寄せ呪文。いわゆる、『やったか!』と同じだ。

だから、先んじて手を打とうとした。

でも、少し遅かつたらしい。

「ぐううううあああああツツツ!!」

そらそうだ。雑事ならまだしも、生徒の命が掛かっている状況で、殺せんせーの動きが俺たちの気付きより遅いわけがない。

この状況で殺せんせーが俺たちより早く行動しないのは、動かないでなく、動けないからなのだろう。

「恐らく、シロさんを追い払えた……つまり、勝つたことで彼の根本的な渴望が多少満たされ、気が抜けたのでしょう」

「緊張の糸が切れたってこと?」

「……ええ」

カルマの問い掛けに殺せんせーは頷く。

なるほど、シロに仕返しをする一心でなんとか平静を保っていたが、勝てたことで自分を保つ土台が崩れたのか。

皮肉な話だ。勝つことを求めていた奴が、勝てたが故に自分の身を滅ぼすことになってしまふなんて。

「イトナくんはどうなるの?」

「……………力づくでも、力への執着を捨てさせる、あるいは忘れさせるしかありません」

渚の質問に苦々しく答える殺せんせー。

しかし、みんな彼の言つてる内容が極限的に難しく、絶望的なことだと悟っているのか、やってやろうぜ!という声はない。

だが、諦めたくない気持ちは同じなのだろう。だれも『それは無理だろ』という否定的な言葉は出さない。

それでも、時間は刻一刻と過ぎる。イトナの命はもはや風前の灯火と言っても過言ではないだろう。時間がない。

「……ねえ、渚。鷹岡先生にやってた技使えないかな？」

「……クラップスタナー？」

茅野が渚に問い掛ける。

みんな、希望を見たみたいに渚に視線を向けた。

「……確かにアレなら、イトナくんの思考を一旦、真っ白にすることはできるかもしれないけど……」

「……ああ。あの猛攻を掻い潜っていけるのか？」

杉野がイトナに目を向ける。

頭を抑え、這い蹲り、触手をビタン！ビタン！と地面に叩きつけて跪いている。あれに下手に近づいたら、自分に襲い掛かっていると考えるまでもないことだろう。

「殺せんせーが触手を防ぎながらとか！」

「ええ。それしかないでしょう」

殺せんせーも覚悟を決めたらしい。

「乃咲くん。腕の治療はもう少し待ってそうですか？」

「問題ありません」

痛いけど、流石に目の前で泣きながら暴走する同級生をほっぽり出して優先して欲しいとか言うレベルじゃない。

それに、そんなカッコ悪い我儘言えるかっての。

「……でも、殺せんせー。本当にそんな有様でいけます？イトナの攻撃を防ぎながら近づいて、頭に根付いた触手を取り払うなんて超精密で高等な手術をさ」

「……やれる、やれないじゃありません。必ずやり遂げるのです。目の前に助けを求める生徒がいる。これに手を伸ばさない者を誰も先生とは呼んでくれませんよ」

殺せんせーの決意は硬いらしい。

「わかった。そう言うことなら渚。悪いけど見せ場貰うぞ」

「……え、乃咲……？」

手を解しながら渚を押し退けて前に出る。

ぶつちやけ、やりたいかやりたくないかで言えばやりたくない。だって、俺が今からするのは、アイツから力を取り上げる行為だ。力を求めて、信じて、抛り所に使っていた奴からそれを取り上げる。残酷すぎる行為だ。

でも、やらなきゃイトナが死ぬ。

それに、俺ならあの程度の速さの触手なら捌ける。殺せんせーに守ってもらう必要はない。

「手術には精密性が求められます。万が一もないように体力消耗は抑えて、万全に備えるべきだ。殺せんせーはイトナの手術と万が一のみんなへ飛び火した場合の対処に注力してください」

「……………わかりました」

殺せんせーが頷いた。

この中で、誰よりも俺の能力を知っているから、無理矢理自分自身を納得させたのだろう。

さっきまでのシロ達からの攻撃で負傷した箇所は既に再生しているものの、再生には多大なエネルギーを消耗すると言う。きつと、見かけ以上に殺せんせーの疲労は溜まっているはずだから、これが最善だ。たぶん、だけどな。

「の、乃咲…………」

「渚…………。帰ったら一緒にプリン食べようぜ。いい店知ってるんだ。みんなを誘って、殺せんせーの奢りで行こう」

「こんな時にフラグ立てないでよ!!」

「ま、なんとかするさ。口に出したからには実行する」

手短かに悲壮感漂う空気感を払って歩き出す。

「圭ちゃん…………。頑張っ……………」

「ありがと、行ってくる」

こんな時『ダメだよ』と止められるより、こうやって倉橋さんのように『頑張っ』と送り出してもらえるのって嬉しいな。

声と波長から凄く動揺してるし、とても怖がってるのが伝わってくるのに、気丈に振る舞える強さは好きだな。

「ぐううう…………!?!の、乃咲…………。来るなっ!」

「名前、覚えてくれたんだな？ありがとう。んでもって、悪いけど少し我慢してくれ。俺も痛えの我慢するから」

言葉が終わると同時にスタートを切る。大型ナイフを抜き放ち、跳躍するように前へと。

一步踏み込んだと同時に、触手のパーソナルスペースとでも言うべき範囲に入ったのか、一斉に黒い触手が飛んでくる。

それに血を塗りたいくりながら、腕で弾き、軌道を変え、出来た触手同士の隙間を縫うように距離を積める。

ゾーンに入っていれば、この程度は造作もない。まあ、腕が痛くて痛くて仕方ないけどな……！！

「ツツツツ!!」

イトナと目が合う。驚愕に彩られた瞳。

そんな瞳とは対照的に触手は絶えず襲ってくる。がむしやらに、本当にイトナの意味とは関係ないみたいに、まるで彼に寄生した別の生き物が勝手に判断して動いているようにも思えるそれは、俺の目には止まって見えた。

たぶん、対先生物質への潜在的な恐怖でもあるのかもしれない。距離が縮む度に触手の抵抗は激しくなり、イトナの苦痛に満ちた顔がますます歪んでいく。

「止めろ……っ！止まれエツ……!!」

口の端から涎を垂らしながら低く叫ぶイトナ。

肉薄までコンマ数秒。文字通り最後の抵抗となるだろう瞬間が訪れる。触手が今日一日の速度と威力でこの体を貫かんと迫る。命を刈り取る、容赦のない一撃だった。

なるはずだった。

「終わりだよ」

イトナの……否、触手の意識がナイフに向いているのを悟った俺は、最後のスパートをかけ、その目と鼻の先に迫り……横薙ぎに一閃すれば決着が着くという距離で、俺はナイフを宙に置くように手を離した。

まさに決着が着く。この一振りで全てが終わる。そして、それを意

識させる為に、わざわざ『終わりだよ』なんてセリフも吐いた。現状、俺が持っている中で唯一、触手を破壊できるこの武器に一際強い警戒を抱かせる為に。

そしてそれは見事にうまく行った。

「……は……？」

ポカンと呆気に取りられた顔。何が起きているのか理解できないって表情。その気持ちを俺は知ってる。ロヴロさんにやられた時、俺も似たような顔をしていただろうから。

こんな状況で武器を手放すなんてあり得ない。勝つことに拘る彼なら、勝つための唯一の手段であるナイフを手放すなんてのは絶対に意識の外にある行動のはずだ。

イトナの意識が一際強く山を作り、頭が真っ白に染るその寸前。俺は両手を彼の目の前で大きく炸裂させた。

ズパアアアアン!!!と、この前聞いた本物の銃声に迫る破裂音が夜の街中に反響する。

「かは……っ……っ……」

身体が弛緩し、黒く染まっていた触手は燃え尽きたみたいな灰色に染まり、だらんと垂れ下がって、彼ごと倒れ込んでくる。

「……………ごめんな、イトナ」

聞こえていたかはわからない。だが、それでも一言声をかけた。助けるための緊急避難。仕方のないこと。

それでも俺だったら納得できなかったと思うから。

「殺せんせー。あとのことは頼みます」

「……………もちろんですッ!!」

こうしてイトナは一命を取り留めた。

驚愕と安堵に彩られる仲間達。

そんな彼らをよそに、俺は傲慢な罪悪感を抱いていた。